

廃炉発官R5第116号  
令和5年10月31日

原子力規制委員会 殿

東京都千代田区内幸町1丁目1番3号  
東京電力ホールディングス株式会社  
代表執行役社長 小早川 智明

福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画 変更認可申請書

核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律第64条の3第2項の規定に基づき、別紙の通り、「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」の変更認可の申請をいたします。

以上

「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」について、下記の箇所を別添の通りとする。

変更箇所、変更理由及びその内容は以下の通り。

○福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画

瓦礫類等の一時保管エリアの解消作業の内、一時保管エリア G, L, N, T の解消作業に伴い、下記の通り変更を行う。

セシウム吸着装置後段フィルタ設備（ $\alpha$ 核種除去設備）設置予定エリアの確保を目的とし、サイトバンカ 2 階に設置されている除染装置処理水タンク（A）,（B）,（C）の撤去に伴い、下記の通り変更を行う。

併せて、特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る基本方針等について、これまでの解体作業等の実績も踏まえ、実施計画Ⅲ 第 3 編 6 に新規記載を行う。また、既認可の解体撤去方針等をⅢ第 3 編 6 添付へ移管を行う。

目次

- ・特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る補足説明について新規記載

I 特定原子力施設の全体工程及びリスク評価

2 リスク評価

2.3 特定原子力施設における主なリスク

2.3.4 5・6号機の使用済燃料プールの燃料

本文

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化

2.4 特定原子力施設の今後のリスク低減対策

本文

- ・変更なし

添付資料－1

- ・特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る項目を追加

II 特定原子力施設の設計、設備

2 特定原子力施設の構造及び設備, 工事の計画

2.1 原子炉压力容器・格納容器注水設備

本文

- ・添付 1 1, Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－9

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－1 1

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管（Ⅲ第 3 編 6 添付資料－1）

添付資料－1 2

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化（添付資料－1 1）



## 2.2 原子炉格納容器内窒素封入設備

本文

- ・添付 1 1, Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料-1 1

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管 (Ⅲ第 3 編 6 添付資料-2)

添付資料-1 2

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 1)

## 2.5 汚染水処理設備等

本文

- ・添付 1 1, 添付 1 3, 添付 2 3, 添付 2 7, 添付 2 8,  
Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化
- ・除染装置処理水タンク撤去に伴う記載の変更
- ・記載の適正化

添付資料-1

- ・除染装置処理水タンク撤去に伴う系統構成図の変更

添付資料-1 1

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管 (Ⅲ第 3 編 6 添付資料-3)

添付資料-1 2

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 1)

添付資料-1 3

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管 (Ⅲ第 3 編 6 添付資料-4)

添付資料-1 4

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 2)

添付資料-1 5

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 3)
- ・別紙 (6), Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管 (Ⅲ第 3 編 6 添付資料-5)

添付資料-1 6

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 4)

添付資料-1 7

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 5)

添付資料-1 8

- ・除染装置処理水タンク撤去に伴う系統構成図の変更  
及び現場実態に沿った系統構成図の適正化
- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 6)

添付資料-1 9

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 7)

添付資料-2 0

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 8)

添付資料-2 1

- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-1 9)

添付資料-2 2

- ・除染装置処理水タンク撤去に伴う系統構成図の変更  
及び現場実態に沿った系統構成図の適正化
- ・Ⅲ第 3 編 6 添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料-2 0)

添付資料－ 2 3

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 6)

添付資料－ 2 4

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 1)

添付資料－ 2 5

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 2)

添付資料－ 2 6

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 3)

添付資料－ 2 7

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 7)

添付資料－ 2 8

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 8)

添付資料－ 2 9

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 4)

添付資料－ 3 0

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 5)

添付資料－ 3 1

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 2 6)

## 2.10 放射性固体廃棄物等の管理施設

本文

- ・添付10, Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－ 1 0

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 9)

## 2.11 使用済燃料プールからの燃料取り出し設備

本文

- ・添付3－2, 添付7, 添付8, 添付10－1～4, 添付11,  
Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－ 3 － 2

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 0)

添付資料－ 3 － 3

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 3 － 2)

添付資料－ 4 － 2

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化
- ・記載の適正化

添付資料－ 7

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 1)

添付資料－ 8

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 2)

添付資料－ 9

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 7)

添付資料－ 1 0 － 1 ～ 4

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 3 ～ 1 6)

添付資料－ 1 1

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 7)

2.20 5・6号機 原子炉格納施設

本文

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

2.26 5・6号機 原子炉建屋常用換気系

本文

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

2.29 5・6号機 非常用ガス処理系

本文

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

2.30 5・6号機 中央制御室換気系

本文

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

2.33 5・6号機 放射性液体廃棄物処理系

本文

- ・変更なし

添付資料－ 8

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化
- ・別添9, Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 8)

2.34 5・6号機 計測制御設備

本文

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

2.35 サブドレン他水処理施設

本文

- ・添付14, Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－ 1 4

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 1 9)

添付資料－ 1 5

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化 (添付資料－ 1 4)

2.36 雨水処理設備等

本文

- ・添付7, Ⅲ第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料－ 7

- ・Ⅲ第3編6添付へ移管 (Ⅲ第3編6 添付資料－ 2 0)

## 2.38 RO濃縮水処理設備

本文

- ・添付1, III第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料-1

- ・III第3編6添付へ移管 (III第3編6 添付資料-21)

## 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設

本文

- ・変更なし

添付資料-3

- ・III第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料-4

- ・III第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

## III 特定原子力施設の保安

### 第3編 (保安に係る補足説明)

#### 1 運転管理に係る補足説明

##### 1.3 地震及び津波への対応

本文

- ・添付8, III第3編6添付へ移管に伴う記載の適正化

添付資料-8

- ・III第3編6添付へ移管 (III第3編6 添付資料-22)

#### 6 特定原子力施設の設備, 機器の解体撤去に係る補足説明

本文

- ・特定原子力施設の設備, 機器の解体撤去に係る補足説明について新規記載

添付資料-1 ~ 添付資料-22

- ・既認可の解体撤去方針等の各添付を本添付へ移管

- ・添付8, 除染装置処理水タンク撤去に伴う記載の追加

添付資料-23

- ・一時保管エリアの設備の解体撤去における補足説明について新規記載

以上

別添

## 目次

### はじめに

#### I 特定原子力施設の全体工程及びリスク評価

- 1 全体工程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ I -1-1
  - 1.1 1～4号機の工程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ I -1-1-1
  - 1.2 5・6号機の工程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ I -1-2-1
- 2 リスク評価
  - 2.1 リスク評価の考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ I -2-1-1
  - 2.2 特定原子力施設の敷地境界及び敷地外への影響評価・・・・・・・・ I -2-2-1
  - 2.3 特定原子力施設における主なリスク・・・・・・・・・・・・・・・・ I -2-3-1
  - 2.4 特定原子力施設の今後のリスク低減対策・・・・・・・・・・・・ I -2-4-1

#### II 特定原子力施設の設計，設備

- 1 設計，設備について考慮する事項
  - 1.1 原子炉等の監視・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-1-1
  - 1.2 残留熱の除去・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-2-1
  - 1.3 原子炉格納施設雰囲気監視等・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-3-1
  - 1.4 不活性雰囲気維持・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-4-1
  - 1.5 燃料取出し及び取り出した燃料の適切な貯蔵・管理・・・・・・・・ II -1-5-1
  - 1.6 電源の確保・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-6-1
  - 1.7 電源喪失に対する設計上の考慮・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-7-1
  - 1.8 放射性固体廃棄物の処理・保管・管理・・・・・・・・・・・・ II -1-8-1
  - 1.9 放射性液体廃棄物の処理・保管・管理・・・・・・・・・・・・ II -1-9-1
  - 1.10 放射性気体廃棄物の処理・管理・・・・・・・・・・・・・・ II -1-10-1
  - 1.11 放射性物質の放出抑制等による敷地周辺の放射線防護等・・・・ II -1-11-1
  - 1.12 作業者の被ばく線量の管理等・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-12-1
  - 1.13 緊急時対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-13-1
  - 1.14 設計上の考慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -1-14-1
- 2 特定原子力施設の構造及び設備，工事の計画
  - 2.1 原子炉圧力容器・格納容器注水設備・・・・・・・・・・・・・・ II -2-1-1
  - 2.2 原子炉格納容器内窒素封入設備・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -2-2-1
  - 2.3 使用済燃料プール設備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -2-3-1
  - 2.4 原子炉圧力容器・格納容器ホウ酸水注入設備・・・・・・・・・・ II -2-4-1
  - 2.5 汚染水処理設備等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ II -2-5-1

2.6	滞留水を貯留している（滞留している場合を含む）建屋	II-2-6-1
2.7	電気系統設備	II-2-7-1
2.8	原子炉格納容器ガス管理設備	II-2-8-1
2.9	原子炉圧力容器内・原子炉格納容器内監視計測器	II-2-9-1
2.10	放射性固体廃棄物等の管理施設	II-2-10-1
2.11	使用済燃料プールからの燃料取り出し設備	II-2-11-1
2.12	使用済燃料共用プール設備	II-2-12-1
2.13	使用済燃料乾式キャスク仮保管設備	II-2-13-1
2.14	監視室・制御室	II-2-14-1
2.15	放射線管理関係設備等	II-2-15-1
2.16	放射性液体廃棄物処理施設及び関連施設	II-2-16-1
2.17	放射性固体廃棄物等の管理施設及び関連施設（雑固体廃棄物焼却設備） .....	II-2-17-1
2.18	5・6号機に関する共通事項	II-2-18-1
2.19	5・6号機 原子炉圧力容器	II-2-19-1
2.20	5・6号機 原子炉格納施設	II-2-20-1
2.21	5・6号機 制御棒及び制御棒駆動系	II-2-21-1
2.22	5・6号機 残留熱除去系	II-2-22-1
2.23	5・6号機 非常用炉心冷却系	II-2-23-1
2.24	5・6号機 復水補給水系	II-2-24-1
2.25	5・6号機 原子炉冷却材浄化系	II-2-25-1
2.26	5・6号機 原子炉建屋常用換気系	II-2-26-1
2.27	5・6号機 燃料プール冷却浄化系	II-2-27-1
2.28	5・6号機 燃料取扱系及び燃料貯蔵設備	II-2-28-1
2.29	5・6号機 非常用ガス処理系	II-2-29-1
2.30	5・6号機 中央制御室換気系	II-2-30-1
2.31	5・6号機 構内用輸送容器	II-2-31-1
2.32	5・6号機 電源系統設備	II-2-32-1
2.33	5・6号機 放射性液体廃棄物処理系	II-2-33-1
2.34	5・6号機 計測制御設備	II-2-34-1
2.35	サブドレン他水処理施設	II-2-35-1
2.36	雨水処理設備等	II-2-36-1
2.37	モバイル型ストロンチウム除去装置等	II-2-37-1
2.38	RO濃縮水処理設備	II-2-38-1
2.39	第二モバイル型ストロンチウム除去装置等	II-2-39-1
2.40	放水路浄化設備	II-2-40-1

2.41	放射性物質分析・研究施設第1棟	II-2-41-1
2.42	大型機器除染設備	II-2-42-1
2.43	油処理装置	II-2-43-1
2.44	放射性固体廃棄物等の管理施設及び関連施設（増設雑固体廃棄物焼却設備）	II-2-44-1
2.45	大型廃棄物保管庫	II-2-45-1
2.46	減容処理設備	II-2-46-1
2.49	3号機原子炉格納容器内取水設備	II-2-49-1
2.50	A L P S 処理水希釈放出設備及び関連施設	II-2-50-1

### III 特定原子力施設の保安

第1編（1号炉，2号炉，3号炉及び4号炉に係る保安措置） III-1-1-1

第2編（5号炉及び6号炉に係る保安措置） III-2-1-1

第3編（保安に係る補足説明）

#### 1 運転管理に係る補足説明

1.1 巡視点検の考え方 III-3-1-1-1

1.2 火災への対応 III-3-1-2-1

1.3 地震及び津波への対応 III-3-1-3-1

1.4 豪雨，台風，竜巻への対応 III-3-1-4-1

1.5 5・6号機 滞留水の影響を踏まえた設備の運転管理について III-3-1-5-1

1.6 安全確保設備等の運転管理責任者について III-3-1-6-1

1.7 1～4号機の滞留水とサブドレンの運転管理について III-3-1-7-1

1.8 地下水ドレンの運転管理について III-3-1-8-1

1.9 A L P S 処理水希釈放出設備の運転管理について III-3-1-9-1

#### 2 放射性廃棄物等の管理に関する補足説明

2.1 放射性廃棄物等の管理 III-3-2-1-1-1

2.2 線量評価 III-3-2-2-1-1

#### 3 放射線管理に係る補足説明

3.1 放射線防護及び管理 III-3-3-1-1

#### 4 保全計画策定に係る補足説明

4.1 保全計画策定の考え方 III-3-4-1-1

4.2 5・6号機 滞留水の影響を踏まえた設備の保全について III-3-4-2-1

#### 5 放射性物質分析・研究施設に係る補足説明

5.1 放射性物質分析・研究施設における保安管理体制及び保安管理について  
III-3-5-1-1

6 特定原子力施設の設備，機器の解体撤去に係る補足説明 III-3-6-1-1



IV	特定核燃料物質の防護	IV-1
V	燃料デブリの取出し・廃炉	V-1
VI	実施計画の実施に関する理解促進	VI-1
VII	実施計画に係る検査の受検	VII-1

#### 2.3.4 5・6号機の使用済燃料プールの燃料

5・6号機は、震災前と同等の設備により使用済燃料プールに貯蔵された燃料を安定的に冷却している状況であり、既設設備に関しては、震災前の設計条件を維持している。

この状況下において、放射性物質の系外放出に至るリスクとしては燃料損傷が挙げられ、燃料損傷に至るシナリオとして以下が考えられる。

##### (1) 燃料取扱い時の燃料落下及び使用済燃料への重量物落下による損傷

燃料交換機によって燃料を移動している際、燃料交換機が故障して、その燃料が落下し、貯蔵中の燃料に衝突して燃料が損傷するシナリオと、原子炉建屋天井クレーンから重量物が落下し、使用済燃料プール内の使用済燃料に衝突し損傷に至るシナリオが考えられる。

このシナリオに対しては、燃料交換機・原子炉建屋天井クレーンは既設燃料取扱設備であり、燃料交換機は燃料取扱い中に動力源が喪失しても燃料を保持する機構となっていること、原子炉建屋天井クレーンはブレーキが安全側に動作する機構となっていること、吊り上げられた重量物が使用済燃料プールに貯蔵された燃料上を走行できないインターロックがあることから、こうしたリスクは小さいものと考えられる。なお、5・6号機の使用済燃料は、震災後8年以上冷却されており、原子炉停止後から放射能は減衰している。Ⅱ.2.11 添付資料-3-2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えない。

##### (2) 仮設設備（滞留水貯留設備）停止による冷却機能喪失

滞留水貯留設備の移送ポンプが長期に停止した場合、地下水の流入により建屋内の水位が上昇し、使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却の維持に必要な設備に電力を供給している所内高圧母線の被水により電源が停止することで、冷却機能喪失による燃料損傷が考えられる。

このシナリオに対しては、滞留水貯留設備の移送ポンプ停止について評価されており、その期間内に設備が復旧できるため、こうしたリスクは小さいものと考えられる。

(Ⅱ.2.33 参照)

##### (3) 自然災害による冷却機能喪失

まず、地震により使用済燃料プールが損傷し使用済燃料プールの水位が低下するシナリオが考えられる。

このシナリオに対しては、耐震安全性が確保されており、こうしたリスクは小さいものと考えられる。(Ⅱ.2.18, Ⅲ.3.1.3 参照)

次に、津波により使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却機能が喪失し、使

用済燃料プール水の温度が上昇すると共に水位が低下するシナリオが考えられる。

このシナリオに対しては、使用済燃料プールの水位が有効燃料頂部に至るまでの時間的余裕が、80日程度（5号機に比べ6号機が短い）と評価されており、仮設水中ポンプ（残留熱除去海水系）の設置\*による、冷却機能の回復までに要する時間は十分確保されていることから、こうしたリスクは小さいものと考えられる。（表-1 参照）

今後、準備が整い次第、使用済燃料プールから使用済燃料共用プールへ使用済燃料を搬出する予定である。

\*：仮設水中ポンプの設置（作業準備、仮設水中ポンプ・制御盤・ホース設置等）には、約68時間（2.8日程度）掛かる見込み。

表-1 使用済燃料プールの崩壊熱による温度上昇率と  
水位が有効燃料頂部に至るまでの時間的余裕

号機	場所	温度上昇率[°C/h]	時間的余裕 [日]
5	使用済燃料プール	0.23	82
6	使用済燃料プール	0.24	80

補足：2018年10月1日時点での崩壊熱より算出。

## 2.4 特定原子力施設の今後のリスク低減対策

現状、特定原子力施設の追加的放出等に起因する、敷地外の実効線量は低く抑えられている（2.2 参照）。また、多くの放射性物質を含有する燃料デブリや使用済燃料等において異常時に発生する事象を想定したリスク評価においても、敷地外への影響は十分低いものであると評価している（2.3 参照）。

今後、福島第一原子力発電所内に存在している様々なリスクに対し、最新の「東京電力福島第一原子力発電所 中期的リスクの低減目標マップ（以下「リスクマップ」という。）」に沿って、リスク低減対策に取り組んでいく。プラントの安定状態に向けた更なる取組、発電所全体の放射線量低減・汚染拡大防止に向けた取組、ならびに使用済燃料プールからの燃料取り出し等の各項目に対し、代表される様々なリスクが存在している。

各項目に対するリスク低減のために実施を計画している対策については、リスク低減対策の適切性確認の視点を基本とした確認を行い、期待されるリスクの低減ならびに安全性、被ばく及び環境影響等の観点から、その有効性や実施の要否、時期等を十分に検討し、最適化を図るとともに、必要に応じて本実施計画に反映する。

また、「I 2.3.7 放射性廃棄物」にて実施する、ALPS 処理水の海洋放出により、廃炉作業に係る敷地などのリソースを有効に活用していくことで、中長期ロードマップに沿った全体工程の達成及びリスクマップに沿ったリスク低減対策を実現していく。

### 2.4.1 添付資料

添付資料－1 実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（1／8）

ロードマップ関連項目		想定されるリスク	リスク低減対策		目的	対応状況	個々の対策に対する適切性
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	原子炉の冷却計画	・中長期的な温度計故障による原子炉冷温停止状態の監視不能リスク	原子炉圧力容器代替温度計の新設		原子炉圧力容器の既設温度計について、既設温度計の故障に備えて、追加温度計を設置できるように、温度監視が可能な箇所を選定し、各号機の温度監視のバックアップが保たれるようにする。	2号機：平成24年10月設置完了 1,3号機：平成31年4月に作業の成立性、温度計設置の成立性の観点から設置が困難である旨報告（毎月、温度計信頼性評価を実施）	①温度計がメンテナンスできないことにより故障し、使用可能な温度計がなくなった場合は冷却状態の監視ができなくなる。 ②温度が監視できなくなるが、直接的に放射性物質の追加放出リスクに影響はない。 ③新旧の温度計はともに建屋内に設置されているため外部事象に対するリスクは小さい。 ④既設温度計は劣化により故障する可能性が増加する。 ⑤2号機の温度計の故障が多いことから2号機を優先的に設置することが妥当である。1,2号機についても順次設置を検討していく予定である。 ⑥対策を実施することにより直接的に増加するリスクはないが、設置環境の線量が高いため被ばく量が増加する。 ⑦既設の圧力容器温度計等の計器の劣化に備え、設置時期、箇所、方法について検討を実施する。
			格納容器内監視計器設置		原子炉格納容器内の既設温度計については、故障した場合、メンテナンスや交換ができないことから、原子炉格納容器内部の冷温停止状態の直接監視のために、代替温度計を格納容器貫通部から挿入する。	1号機：平成24年10月設置完了 2号機：平成24年9月設置完了 平成25年8月追加設置完了 3号機：平成27年12月設置完了	①温度計がメンテナンスできないことにより故障し、使用可能な温度計がなくなった場合は格納容器内の冷却状態の監視ができなくなる。 ②温度が監視できなくなるが、直接的に放射性物質の追加放出リスクに影響はない。 ③新旧の温度計はともに建屋内に設置されているため外部事象に対するリスクは小さい。 ④既設温度計は劣化により故障する可能性が増加する。 ⑤3号機の原子炉建屋内は線量が高いため、1,2号機の設置を優先させることは妥当である。3号機については、設置作業ができるよう環境改善後、速やかに設置する計画を立案する。 ⑥対策を実施することにより直接的に増加するリスクはないが、設置環境の線量が高いため被ばく量が増加する。 ⑦既設の格納容器温度計等の計器の劣化に備え、設置時期、箇所、方法について検討を実施する。
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	原子炉の冷却計画	・注水機能停止リスク ・放射性物質の系外放出リスク	循環注水冷却水源の信頼性向上対策	復水貯蔵タンクへの運用変更と復水貯蔵タンク炉注水ポンプ配管のポリエチレン管化	原子炉注水設備について、水源を仮設バッファタンクから、既設の復水貯蔵タンクに変更することにより、水源保有水量の増加、水源の耐震性向上を図る。さらに配管距離の短縮、ポリエチレン管の新設配管設置により、注水機能喪失及び漏えいリスクの低減を図る。	平成25年7月復水貯蔵タンクの運用開始 平成26年2月復水貯蔵タンク炉注水ポンプ配管のポリエチレン管化対策完了	①炉注設備は既に多様性、多重性を備えており、一定の信頼性は確保されているが、期待される更なる信頼性向上が図れない。 ②炉注機能が停止した場合の放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③水源を復水貯蔵タンクに変更することにより水源の耐震性が高くなるためリスクは低減する。 ④現行設備でも適切な保全により長期間使用可能と考えており、時間的なリスクの変化は小さい。 ⑤炉注設備の信頼性を向上させることはリスク低減に寄与するため可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施することにより直接的に増加するリスクはないが、設置環境の線量が高いため被ばく量が増加する。 ⑦対策を実施できないリスクはない。
				漏えい時の敷地外放出防止対策（堰や漏えい検出設備等の設置検討）	原子炉注水設備の配管等に漏えいが発生した場合の敷地外放出防止・早期検知のために堰や漏えい検出設備を設置する。	平成25年12月設置完了	①漏えい時における放射性物質の追加放出リスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③漏えい拡大防止を目的としており、外部事象に対する設備破損リスクは変化しない。 ④漏えい拡大防止を目的としており、時間的にリスクは変化しない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。
				仮設ハウスの恒久化対策	原子炉注水設備のポンプ等を恒久化したハウス内等に配置することにより、台風、塩害、凍結等の外部事象による設備の故障防止を図る。	平成25年2月設置完了	①凍結等の外部事象リスクが低減しない。 ②炉注機能が停止した場合の放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③仮設ハウスを恒久化することで外部事象に対するリスクは低減する。 ④仮設ハウスを恒久化するものであり、時間的なリスクは変化しない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。
			建屋内循環ループ構築	水処理設備など建屋外に設置された設備を経由しない循環ループを形成し、系外への放出リスクを低減する。また、建屋内滞留水をそのまま冷却水として使用することにより、水処理設備等の処理量、あるいは原子炉格納容器からの漏えい水量に依存せずに、原子炉注水量を増加させるシステムが構築出来る。	平成28年10月運用開始 (建屋滞留水循環冷却は、燃料デブリ取り出しに合わせ検討中)	①大循環ループからの漏えいリスクが低減しない。 ②屋外に敷設されているループ長が縮小する分、漏えいリスクを低減する。 ③建屋内に設置することで、気象等に関わる外部事象に対するリスクが低減する。 ④現行設備でも適切な保全により長期間使用可能と考えており、時間的なリスクの変化は小さい。 ⑤建屋内循環ループを構築する前段階として、滞留水水质、作業環境や格納容器止水作業等との干渉も含めて取水場所等を検討する必要があるため、目標時期までに対策できるよう、実施に向けての調査・検討を行っている。 ⑥作業員の被ばくリスクに加え、建屋内が高線量となるリスクがある。 ⑦滞留水水质の傾向監視、ライン構成の最適化、除染等の環境改善等を考慮し、効果的な対策となるよう検討していく必要がある。	

I-2-4-添1-1

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（2／8）

ロードマップ関連項目	想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性	
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	原子炉の冷却計画		原子炉圧力容器・格納容器への窒素供給装置の増設	窒素供給装置は常用している2台の内1台の運転で、原子炉格納容器内の水素濃度を可燃濃度（4%）以下に維持するのに十分な性能を保持している。また運転号機が停止しても予備の装置を起動するまでの余裕時間も十分確保（100時間以上）されていることから、常用1台の運転で問題はないが、更なる信頼性向上のため、常用の窒素ガス分離装置を1台増設する。	平成25年3月設置完了	<p>①原子炉格納容器内窒素封入設備は、非常用電源を装備した窒素供給装置の設置により多重性を確保しているものの、常用機器の長期間停止を伴う点検等を行う場合には、常用機器が単一状態となる。</p> <p>②現状の設備設置状況でも機器の多重性を確保していること、運転号機が停止した場合の停止余裕時間も十分に確保（100時間以上）されていることから、今回の更なる信頼性向上対策が無くとも、水素爆発の可能性は十分に低く抑えられていると考えている。</p> <p>③高台に設置することにより、外部事象に対するリスクは低減する。</p> <p>④設備の経年的な劣化により窒素供給設備が故障するリスクが増加するが、装置の増設により、より適切な保守管理が可能となる。</p> <p>⑤窒素供給装置の信頼性を向上させることはリスク低減に寄与するため、早期に実施することが望ましく既に実施している。</p> <p>⑥対策を実施するリスクは小さい。</p> <p>⑦実施できないリスクはない。</p>
		・原子炉圧力容器・格納容器内不活性雰囲気維持機能喪失リスク	水素の滞留が確認された機器への窒素ガス封入	サブプレッションチェンバ(S/C)気相部等の高濃度の水素滞留が確認された機器について、窒素ガスの封入等により不活性状態にする。	<p>1号機：平成24年10月より対応中</p> <p>2号機：平成25年5月より対応中</p> <p>3号機：S/C内閉空間気相部の水素残留状況の調査を検討中</p>	<p>①今回確認されたサブプレッションチェンバ内の高濃度の水素は、事故初期に発生したものの残留物であると考えられ、酸素濃度が低いことや現在まで閉空間内に安定して存在してきたことを鑑みると、水素爆発が発生する緊急性は低いと考えられる。しかしながら、水素パージを行わなければ、この状況が継続する。</p> <p>②サブプレッションチェンバは格納容器の一部であること、閉空間の容積によっては水素の残留量が大きい可能性があることから、万一水素爆発が発生した際に放射性物質が放出されるリスクがあるが、本対策により低減ができる。</p> <p>③水素パージにより外部事象に対する水素爆発のリスクは低減する。</p> <p>④事故後現在まで安定した状態を維持していることや水の放射線分解の寄与は小さいと考えられること、格納容器内については窒素封入により不活性状態は維持され、格納容器ガス管理設備により水素濃度を監視していることから、時間的リスクが急激に増加することはないと考えられる。</p> <p>⑤サブプレッションチェンバ補修工事等の関連工事や現場線量環境を考慮した上で、現場調査等を慎重に行い、高濃度の水素が確認された場合には、早期に対策を実施する必要がある。</p> <p>⑥建屋内の高線量作業であるため、作業員の被ばくリスクに加え、水素濃度の挙動を確認しつつ作業を行う必要がある。</p> <p>⑦現場の状況を踏まえて安全に水素パージができるように窒素封入方法を検討する必要がある。</p>

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（3 / 8）

ロードマップ関連項目		想定されるリスク	リスク低減対策		目的	対応状況	個々の対策に対する適切性
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	滞留水処理計画	・放射性物質の系外放出リスク	汚染水処理設備等の信頼性向上	滞留水移送・淡水化装置周りの耐圧ホースのポリエチレン管化	滞留水移送・処理設備において耐圧ホースを使用している箇所をより信頼性の高いポリエチレン管等に交換することにより、滞留水、処理水の漏えいリスク、漏えい水による他の設備損傷リスク、漏えい時の作業環境悪化リスクの低減を図る。	平成 24 年 8 月対策完了	①滞留水移送ラインからの放射性物質の追加放出リスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③ポリエチレン管等へ取替を行うことにより、地震等の外部事象に対するリスクは低減する。 ④ポリエチレン管等へ取替を行うことにより、時間的な設備劣化損傷リスクは低減する。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦ポリエチレン管等の敷設が出来ない場合は、堰等により漏えいの拡大防止を図る。
				中低濃度タンク増設、及びRO濃縮水一時貯槽のリプレース	ALPS 処理水の貯留場所確保のために中低濃度タンクを増設する。	令和 2 年 12 月目標容量の中低濃度タンク設置を完了（合計 137 万 m <sup>3</sup> ）	①日々増加し続ける ALPS 処理水の保管場所が無くなり、貯留できなくなるリスクがある。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③貯蔵量を確保することが目的であり、外部事象に対するリスクは変化しない。 ④中低濃度タンクの経年劣化により漏えいリスクは増加する。 ⑤貯留場所確保のため、計画的に増設していく必要があり、既に実施している。 ⑥滞留水・処理水貯蔵量の増加により、漏えいリスクは増加する。 ⑦中低濃度タンク設置場所には限界があるため、緩和措置として、地下水流入量低減対策を確実に実施する必要がある。
				中低濃度タンクエリアへの堰等の設置	中低濃度タンクエリアに堰等を設置することにより、貯蔵タンクからの漏えいの早期発見と大規模漏えい時の系外への拡大防止	中低濃度タンク設置に合わせ順次実施。目標容量（137 万 m <sup>3</sup> ）の中低濃度タンク設置分は、漏えい拡大防止策を実施済	①漏えい時における放射性物質の追加放出リスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③漏えい拡大防止を目的としており、外部事象に対するリスクは変化しない。 ④漏えい拡大防止を目的としており、時間的にリスクは変化しない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。
			多核種除去設備の設置	本設備により、汚染水処理設備の処理済水に含まれる放射性核種（トリチウムを除く）を十分低い濃度まで除去することにより、汚染水貯蔵量の低減ならびに中低濃度タンク貯留水の放射能濃度低減による漏えい時の環境影響の低減を図る。	既設 ALPS：令和 4 年 3 月より本格運転開始 増設 ALPS：平成 29 年 10 月より本格運転開始 高性能 ALPS：令和 5 年 2 月より本格運転開始	①大量の放射性物質を含んだ汚染水を保有し、漏えいするリスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③汚染水の処理により外部事象に対する中低濃度タンク等からの大量の放射性物質を含んだ汚染水が漏えいするリスクは低減できる。 ④多核種除去設備の稼働が遅れることにより、汚染水貯留量が増加し中低濃度タンク等からの大量の放射性物質を含んだ汚染水が漏えいするリスクは増加する。 ⑤可能な限り早期に実施することが必要であり、本格運転を開始した。 ⑥二次廃棄物の長期保管ならびに漏えいリスクが発生する。 ⑦対策を実施できないリスクはないが、実施できない場合中低濃度タンクを増設し汚染水を貯留する。	
			可能なトレンチから順次、止水・回収の実施	トレンチ内の滞留水を回収し、系外への漏えい防止を図る。	可能なトレンチ等から順次、止水・回収を実施中 海水配管トレンチ内汚染水除去完了  2号機： 平成 27 年 6 月（トレンチ内滞留水移送完了） 平成 29 年 3 月（立坑充填完了） 3号機： 平成 27 年 7 月（トレンチ内滞留水移送完了） 平成 27 年 8 月（立坑充填完了） 4号機： 平成 27 年 12 月（トレンチ内滞留水移送完了、立坑充填完了） 1号機：対応中	①津波の浸入等により滞留水が敷地外へ流出するリスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③対策を実施することにより津波の浸入等による滞留水が敷地外へ流出するリスクは低減する。 ④現在でも適切な管理を行っているが、高濃度滞留水のコンクリート健全部中の拡散を評価したところ、トレンチ部は 10～13 年で外表面に達するリスクがある。 ⑤止水方法の成立性等を検討し、可能なトレンチから順次実施していくことが望ましく、また、並行して津波対策を実施予定。 ⑥対策を実施するリスクは小さいが、トレンチ内滞留水の処理が必要となる。 ⑦現場の状況を踏まえた止水方法等を検討する必要がある。	

I-2-4-添1-3

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（4 / 8）

ロードマップ関連項目	想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性	
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画		・放射性物質の系外放出リスク	建屋の津波対策（建屋開口部の閉鎖・水密化）	仮設防潮堤を超える津波が建屋開口部から浸入し、建屋地下に滞留している高濃度滞留水が系外へ漏えいしないよう建屋開口部の閉鎖・水密化等を行う。	令和4年1月建屋開口部閉止（合計127箇所）完了	①津波の浸入等により滞留水が敷地外へ流出するリスクが低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③対策を実施することにより津波の浸入等による滞留水が敷地外へ流出するリスクは低減する。 ④現在でも適切な管理を行っている上、水処理の継続により、滞留水中のインベントリは低減していく方向であるが、時間的なリスクの変化は小さい。 ⑤現場状況を勘案し、対策の必要な箇所については、可能な限り早期に実施することが望ましい。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦現場の状況を踏まえた止水方法等を検討する必要がある。
	滞留水処理計画	・滞留水の発生量の増加リスク	サブドレンの復旧	建屋周辺の地下水を汲み上げる設備（サブドレン）を復旧し、地下水位を下げることにより、建屋内への地下水流入量の低減を図る。	平成27年9月サブドレン稼働開始	①建屋への地下水流入量が減少しないため、汚染水の増加リスクは低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③地下水流入量低減を目的としており、外部事象に対するリスクは変化しない。 ④水処理の継続により、滞留水中のインベントリは低減していく方向であるものの、建屋への地下水の流入量を低減できないため、建屋内滞留水の漏えいリスクが増加する。 ⑤可能な限り早期に実施していく必要があり、復旧計画を検討中。 ⑥対策を実施するリスクは小さいが、サブドレン水の浄化が必要となる。 ⑦他の地下水流入量低減対策として、地下水バイパスを早期に稼働することで地下水流入量抑制を図る。
			地下水バイパスの設置	建屋周辺の地下水は山側から海側に向かって流れていることから、建屋山側の高台で地下水を揚水し、その流路を変更して海にバイパスすることにより、建屋周辺の地下水位を段階的に低下させ、建屋への地下水流入量の低減を図る。	平成26年5月地下水バイパス稼働開始	①建屋への地下水流入量が減少しないため、汚染水の増加リスクは低減しない。 ②漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③地下水流入量低減を目的としており、外部事象に対するリスクは変化しない。 ④水処理の継続により、滞留水中のインベントリは低減していく方向であるものの、建屋への地下水の流入量を低減できないため、建屋内滞留水の漏えいリスクが増加する。 ⑤干渉する作業などはないことから、可能な限り早期に実施することが望ましい。 ⑥揚水井稼働により建屋の周辺地下水位が下がりすぎ、建屋の汚染水が流出するリスクやバイパスの揚水井に汚染した地下水を引き込み、海へ放出されるリスクへの対応が必要である。 ⑦揚水井を稼働しても建屋への地下水流入が想定どおり減少しない場合も考慮し、水処理・貯留場所の確保を行う必要がある。

I-2-4-添1-4



実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（5／8）

ロードマップ関連項目	想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性	
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	電気系統設備の信頼性向上	・単一故障による電源停止リスク	タービン建屋内所内高圧母線設置及び重要負荷の供給元変更	1系統で供給していた重要負荷に対し、タービン建屋2階に設置する2系統の所内高圧母線から供給できるようにすることで信頼性を向上させる。	平成25年3月タービン建屋内所内高圧母線設置完了 平成25年7月重要負荷の供給元変更完了	①1系統で電源供給している重要負荷については、電源喪失時は一部小型発電機にて機能維持ができるが、機能喪失に繋がるリスクは低減しない。 ②重要度の高い原子炉注水設備の更なる信頼性向上に寄与するとともに、使用済燃料プール設備の一部の動的機器について、電源を2系統から供給できるようになるため、燃料の損傷による放射性物質の追加放出リスクを低減できる。 ③タービン建屋2階に設置されている所内高圧母線から供給できることにより、津波に対する電源喪失リスクは低減する。 ④長期的には、電気設備の経年的な劣化故障による重要負荷の電源喪失のリスクは増加する。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない
		・津波浸水による電源喪失リスク	共用プール建屋の防水性向上	所内共通ディーゼル発電機A、Bが設置されている共用プール建屋に対して津波対策として防水性を向上させる。	平成25年9月対策完了	①共用プール建屋内への津波の浸入による所内共通ディーゼル発電機の電源供給機能喪失のリスクは低減しない。 ②共用プール建屋内への津波の浸入を防止することで、所内共通ディーゼル発電機の電源供給機能が維持できるため燃料の損傷による放射性物質の追加放出リスクは低減する。 ③津波による所内共通ディーゼル発電機の電源供給機能喪失のリスクを低減できる。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、実施に向け検討を進めている。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦現場の状況を踏まえた方法を検討する必要がある。
		・電源喪失時の復旧遅延リスク	小型発電機・電源盤・ケーブル等の資材の確保	津波・地震による全交流電源喪失を伴う異常時に備えて、重要設備の復旧作業に必要な屋外照明等の資材を確保する。	平成25年3月対策完了	①津波や地震により全交流電源喪失を伴う異常が発生した場合に、屋外照明等が無いことにより重要な設備の緊急復旧作業が遅延するリスクがある。 ②放射性物質の追加放出リスクはないが、全交流電源喪失等の異常が発生した場合に、照明が無いことにより重要な設備の緊急復旧作業が遅延するリスクがある。 ③復旧資材の確保に対して外部事象に対するリスクはない。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない
			所内高圧母線M/C（非常用D/G M/Cを含む）の免震重要棟からの遠方監視・操作装置の新設	免震重要棟からの遠方監視・操作を可能とし、異常の早期検知を図る。	平成25年1月対策完了	①電源喪失時に異常の検知等が遅れることで復旧作業が遅延するリスクがある。 ②対策を実施することで原子炉注水設備等の重要負荷の電源供給機能の長期機能喪失を防止することができるため、燃料の損傷等による放射性物質の追加放出リスクは低減する。 ③対策を実施することで外部事象に対する電源供給機能の長期喪失リスクは低減する。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に完了している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（6／8）

ロードマップ関連項目		想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性	
発電所全体の放射線量低減・汚染拡大防止に向けた計画 I-2-4-添1-6	海洋汚染拡大	・放射性物質が地下水に流出した際の海洋への放出リスク	遮水壁の設置	建屋内の汚染水が地下水に流出した場合、汚染された地下水が地下の透水層を経由して海洋に流出することを防止する	平成 27 年 10 月設置完了	①汚染水が地下水に流出した場合の汚染水が海洋等へ流出するリスクが低減しない。 ②汚染水が地下水に流出した場合、放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③敷地内の汚染水保管設備が破損した場合、遮水壁が汚染水流出の歯止めとなるため、外部事象に対するリスクは低減できる。 ④汚染水流出の歯止めが目的であり、リスクの時間的な変化はない。 ⑤干渉する作業などはないことから、早期に設置することが望ましく、既に実施している。 ⑥地下水ドレンでくみ上げた水により構内の保管水量が増加する。 ⑦対策を実施できないリスクはない。	
	防止計画	・港湾内の放射性物質の海洋への拡散リスク	港湾内海底土の浚渫・被覆等	港湾内の環境改善のために海底の汚染土の除去と大型船舶の航路・泊地を確保することを目的に、港湾内海底土の浚渫・被覆等を実施する。 浚渫した土は航路・泊地エリア外に一時的に集積させることとし、集積した土については再拡散防止のため、被覆等を実施する。	平成 28 年 12 月対策完了	①港湾内の海底土が波浪等により再拡散し、港湾外に放出するリスクが低減しない。 ②波浪等により海底土が再拡散した場合、放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③対策を実施することで外部事象により海底土が再拡散するリスクは低減する。 ④海底土の拡散防止が目的であり、リスクの時間的な変化はない。 ⑤港湾内の船舶航行及び海上作業の輻輳状況を把握した上で、実施時期を検討する。 ⑥海底土が再拡散しない施工方法を選択することによりリスクは小さくなる。 ⑦対策を実施できないリスクはない。	
	放射線廃棄物管理及び敷地境界の放射線量低減に向けた計画	ガレキ等	・敷地内被ばくリスク	瓦礫類の覆土式一時保管施設の増設 または一時保管エリア A の追加遮へい	施設内に保管されている発災以降発生した瓦礫や汚染水等による敷地境界線量 1mSv/年未満を達成するため、瓦礫等の保管施設の増設等を実施する。また、これらの作業により、敷地内全体の雰囲気線量も低減され、作業環境の改善にもなる。	平成 27 年 6 月設置完了	①「措置を講ずべき事項」に要求されており、対策を実施しない場合、平成 25 年 3 月末時点での敷地境界線量 1mSv/年未満の目標達成が困難となる。 ②敷地境界線量の目標達成が目的であり、放射性物質の追加放出リスクは小さい。 ③対策を実施することにより、竜巻等による瓦礫等の飛散するリスクは低減する。 ④敷地境界線量の目標達成が目的であり、時間的なリスクの変化はない。 ⑤平成 24 年度内に達成することを目標としており、作業としては既に実施している。 ⑥対策を実施することで、作業員等への被ばくが発生する。その為、線量管理等を適切に実施することが必要。 ⑦対策を実施できない場合、施設内に保管されている発災以降発生した瓦礫や汚染水等による平成 25 年 3 月末時点での敷地境界線量 1mSv/年未満が達成できなくなる。なお、代替策は時間的な制約から困難である。また、保管施設設置場所は限界があるため、放射性廃棄物の減容等を確実に実施する必要がある。
				覆土式の伐採木一時保管槽の設置		平成 24 年 12 月設置完了	
		水処理二次 廃棄物	・敷地内被ばくリスク ・放射性物質の系外放出リスク	使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設、第四施設）の設置		第三施設：平成 26 年 2 月設置完了 第四施設：平成 25 年 6 月設置完了	
				吸着塔保管施設の遮へい設置ならびに吸着塔の移動		遮へい設置：平成 25 年 3 月設置完了 移動：平成 26 年 3 月移動完了	
	気体廃棄物	・放射性物質の系外放出リスク	2号機ブローアウトパネルの閉止	2号機原子炉建屋ブローアウトパネルを閉止することで、原子炉建屋から大気への放射性物質の放出を抑制する。	平成 25 年 3 月閉止完了	①対策を実施しない場合、原子炉建屋から放射性物質が放出する状態が継続する。 ②原子炉の状態に変化がなければ、追加放出リスクに変化はない。 ③対策を実施することにより暴風等の外部事象に対するリスクは低減する。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤早期に実施する必要があるが、ブローアウトパネルを閉止することで、原子炉建屋内の作業環境悪化が懸念されることから、空調設備設置完了後に実施する。 ⑥対策を実施することで原子炉建屋内の作業環境悪化が懸念されるため、これらを改善するための空調設備の設置が必要。 ⑦現場の状況を踏まえた方法等を検討する必要がある。	
			3, 4号機使用済燃料取出用カバーの設置、フィルタ付換気設備の設置・運転	使用済燃料プールから燃料を取り出すにあたって、作業時の放射性物質の舞い上がりによる大気への放射性物質放出を抑制するため、カバー並びに換気設備の設置を行う。	3号機：平成 30 年 2 月燃料取り出し用カバー設置完了 4号機：平成 25 年 11 月燃料取り出し用カバー設置完了 3号機：平成 30 年 6 月換気空調設備設置完了 4号機：平成 25 年 10 月換気空調設備設置完了	①対策を実施しない場合、使用済燃料取出し作業に伴う舞い上がりにより、放射性物質が放出するリスクが低減しない。 ②使用済燃料取出し作業に伴う舞い上がりによる放射性物質の追加放出リスクは大きい。 ③カバーの設置により、風雨により作業性が悪化するリスクを低減できる。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤早期に実施していく必要があり、既に工事を実施している。 ⑥対策を実施することで、作業員等への被ばくが発生する。その為、線量管理等を適切に実施することが必要。 ⑦現場の状況を踏まえた方法等を検討する必要がある、現場の状況により使用済燃料の取り出し作業が遅れるリスクがある。	
	敷地内除染計画	・敷地内被ばくリスク	敷地内の除染計画の策定・実施	敷地内の雰囲気線量を低減させることにより、作業被ばくを低減させるとともに、ノーマスクエリア等を拡大し、作業員の作業負担軽減を図る。	平成 30 年 5 月以降除染や舗装等の対策により構内全体の 96%のエリアで一般作業服と防塵マスク等の軽装備で作業が可能	①対策を実施しない場合、敷地内の雰囲気線量が低減しない。 ②被ばく抑制が目的であり、放射性物質の追加放出リスクは小さい。 ③外部事象に対するリスクは小さい。 ④時間的なリスクの変化はない。 ⑤対象範囲が広範囲であること、一部雰囲気線量が非常に高い所もあることから、段階を踏んで、計画的に実施していくことが必要。現在、その認識の基、比較的に効果が見込めるエリアを選定し、作業を実施している。 ⑥対策を実施することで、作業員等の被ばくが増加する。その為、線量管理等を適切に実施することが必要。 ⑦現場の線量に応じた除染方法を検討する必要がある。	

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（7／8）

ロードマップ関連項目		想定されるリスク	リスク低減対策		目的	対応状況	個々の対策に対する適切性	
I-2-4-添1-7 使用済燃料プールからの燃料取出計画	1～6号機 使用済燃料 プール	・冷却機能喪失リスク	1～4号機使用済燃料プール循環冷却設備の信頼性向上対策	予備品の確保	SFP冷却については、震災後設置した冷却設備等により継続してプールの冷却・浄化等を実施している。昨年に設置した設備の故障等により、冷却機能が一時停止する事象が発生したため、これらの再発を防止するため予備品の確保並びに電源の多重化を行う。	平成25年4月対策完了	①電源停止等により冷却機能が一時的に喪失するリスクが低減しない。 ②冷却機能が長期間喪失した場合の使用済燃料からの放射性物質の追加放りリスクは大きい。 ③外部事象に対するリスクは継続する。 ④長期的には、電気設備の経年的な劣化故障による重要負荷の電源喪失のリスクは増加する。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。	
				所内電源（M/C）多重化		1,2号機：平成25年3月対策完了 3,4号機：平成25年6月対策完了		
	共用プール	・貯蔵容量の不足リスク	共用プールから仮保管設備への燃料移動	共用プールには保管容量6840本に対して、既に6377本保管している。今後、使用済燃料プールから使用済燃料を受け入れるため、十分に冷却が進んだ使用済燃料を乾式キャスクに移し、共用プールの燃料受入容量を確保する。	共用プール M/C 設置	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	平成25年6月以降順次実施	①対策を実施しない場合、使用済燃料プールからの燃料移送が困難となり、使用済燃料プールでの冷却機能喪失時におけるリスク等が低減されない。 ②冷却機能が長期間喪失した場合の使用済燃料からの放射性物質の追加放りリスクは大きい。 ③乾式キャスクに移し、高台の仮保管施設に移動することにより津波に対するリスクが低減する。 ④対策を実施しない場合、使用済燃料プールからの燃料移送が困難となり、使用済燃料プールでの冷却機能喪失時におけるリスク等が低減されない。 ⑤使用済燃料取り出しのために空き容量確保のため、計画的に実施する必要がある。 ⑥キャスク移送時の燃料落下防止対策等を講じる。 ⑦従前より実績のある取扱作業であるが、共用プール内の燃料払い出し作業と受け入れ作業の輻輳による遅延が発生しないよう工程管理を検討する必要がある。
共用プール	・被災したキャスクの腐食等のリスク	キャスク保管建屋から共用プールへのキャスク移動	キャスク保管建屋には、震災前から保管している乾式燃料キャスクがあり、震災の影響により海水等を被っており、腐食等の影響が懸念される。また、パトロール時の線量、温度測定で異常の無いことを確認しているものの、常用の監視系は使用できない状況である。その為、これらキャスクを共用プールに移送し、キャスク本体の健全性を確認する。	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	平成25年9月設置完了	①電源停止等により冷却機能が一時的に喪失するリスクが低減しない。 ②冷却機能が長期間喪失した場合の使用済燃料からの放射性物質の追加放りリスクは大きい。 ③外部事象に対するリスクは継続する。 ④長期的には、電気設備の経年的な劣化故障による重要負荷の電源喪失のリスクは増加する。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。	
								キャスク保管建屋から共用プールへのキャスク移動
共用プール	・冷却機能喪失リスク	共用プール M/C 設置	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	共用プールの電源設備について、M/C（A）（B）を復旧することで、信頼性を向上させ、冷却機能維持に努める。	平成25年9月設置完了	①電源停止等により冷却機能が一時的に喪失するリスクが低減しない。 ②冷却機能が長期間喪失した場合の使用済燃料からの放射性物質の追加放りリスクは大きい。 ③外部事象に対するリスクは継続する。 ④長期的には、電気設備の経年的な劣化故障による重要負荷の電源喪失のリスクは増加する。 ⑤可能な限り早期に実施することが望ましく、既に実施している。 ⑥対策を実施するリスクは小さい。 ⑦対策を実施できないリスクはない。	
								共用プール M/C 設置

実施を計画しているリスク低減対策ならびに適切性（8／8）

ロードマップ関連項目		想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性
原子炉施設の解体・放射性廃棄物処理・処分にに向けた計画	放射性廃棄物処理・処分にに向けた計画	・廃棄物保管容量の不足リスク	雑固体廃棄物焼却設備の設置	敷地内で発生した放射性固体廃棄物等を焼却、減容するため焼却設備を設置する。	平成 28 年 3 月運用開始	①対策を実施しない場合、保管する放射性固体廃棄物等が増加するとともに、保管・管理に係る業務が継続する。 ②放射性固体廃棄物等が増加するが、放射性物質の追加放出リスクは小さい。 ③保管物が火災等の外部事象によって、飛散する可能性がある。 ④対策を実施しなかった場合、放射性固体廃棄物等の保管リスクは時間的に増加する。 ⑤対策には建屋の建設から必要であり、長期にわたって時間を必要とする。現在既に設計に入っており、H26 年度下期供用開始に向け、作業を進めている。 ⑥放射性固体廃棄物等を焼却することから、大気へ放射性物質を放出する可能性がある。その為、適切な処理設備を設置するとともに、放出管理も併せて実施し、敷地外への影響がないことを確認する。 ⑦対策を実施できない場合は継続的に保管エリアを確保する必要がある。
その他	火災対策	・発電所周辺・所内火災の延焼リスク	防火帯の形成・維持 発電所内火災対策の策定・実施	発電所周辺大規模火災から発電所重要設備の防護のため、防火帯を形成するとともに、発電所内火災から重要設備の防護・延焼防止のため対策を策定・実施する。	防火帯の形成は実施済 今後も継続的に維持を行う 火災対策について、今後も継続的に実施する	①発電所敷地内外で大規模火災が発生した場合に、設備の機能喪失ならびに放射性物質の舞い上がりが発生する可能性がある。 ②大規模火災によって放射性物質の追加放出リスクがある。 ③対策を実施することで大規模火災等の外部事象に対し、リスクを低減することができる。 ④リスクは時間的に変化しない。 ⑤計画的に実施していく必要がある。 ⑥防火帯の形成のために新たな森林の伐採が必要となり、保管エリアの確保・伐採木の自然発火に対する対策が必要となる。 ⑦現場の状況に応じた対策（カメラによる監視・火報の設置・巡視等）を検討・実施し、火災の早期検知に努めるとともに迅速な初期消火を行える体制を構築する必要がある。
	敷地の確保に向けた計画	・特定原子力施設の全体工程達成及びリスクマップに沿ったリスク低減のための施設建設用の敷地の不足リスク	ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設の設置	特定原子力施設の全体工程達成及びリスクマップに沿ったリスク低減のため、今後新たな施設（燃料デブリ保管施設等）を建設する必要がある。施設建設用の敷地を確保するため、ALPS 処理水等の貯蔵量を低減し中低濃度タンクを解体できるよう、汚染水発生量以上の量の ALPS 処理水を海洋へ放出できる設計及び運用とした ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設を設置する。	令和 5 年 4 月中頃使用前 検査完了予定	①対策を実施しない場合、廃炉作業に必要な施設の設置のための施設が確保出来ず、全体工程の達成及びリスクマップに沿ったリスク低減が実施されない。 ②海洋放出前の ALPS 処理水等の貯蔵が継続するが、溶接タンクでの保管や中低濃度タンクエリアへの堰の設置により、放射性物質の追加放出リスクは海洋放出前とほとんど変わらない。 ③対策を実施することにより、外部事象により、中低濃度タンクに貯留している汚染水、ALPS 処理水の系外漏えいが発生するリスクを低減することができる。 ④ALPS 処理水等の貯蔵量が増加し、中低濃度タンクの保守管理が継続することにより、廃炉作業に必要な施設建設用の敷地の確保に加えて、燃料デブリの取り出し等といった相対的に高いリスクの低減に活用出来るリソースの確保等にも影響を与える。 ⑤「東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における多核種除去設備等処理水の処分に関する基本方針」に沿った時期となっている。 ⑥ALPS 処理水を海洋放出することから、告示濃度限度比 1 以上のトリチウムを放出することとなる。測定・確認用設備での濃度確認、100 倍以上の希釈、希釈後のトリチウム放出量 1,500Bq/L 未満、年間トリチウム放出量 22 兆 Bq/年未満とする設計・運用により、環境への影響を抑制する。また、溶接タンクの解体・撤去方法の確立や発生する固体廃棄物の保管管理が必要となる。 ⑦長期にわたって ALPS 処理水の安定的な海洋放出が必要とされることから、その供用期間中に想定される機器の故障等を考慮した設計及び運用とする。
			特定原子力施設の全体工程達成及びリスクマップに沿ったリスク低減のための施設建設に向けた、実施計画に必要な機能を有しない設備・機器（震災前から設置されている設備・機器を含む）の解体撤去（以降、解体撤去）	解体撤去は、福島第一原子力発電所全体のリスク低減対策を行うにあたり、今後の廃炉作業に必要な施設や設備の設置エリアの確保や廃炉作業に係る作業干渉の未然防止の為、安全確保を最優先に且つ遅滞なく実施する。	継続的に実施する	①対策を実施しない場合、今後の廃炉作業に必要な施設や設備の設置エリアが確保出来ず、全体工程達成及びリスクマップに沿ったリスク低減が実施されない。 ②対策を実施することにより、追加放出リスクを低減することができる。 ③対策を実施することにより、外部事象に対するリスクを低減することができる。 ④対策を実施することにより、廃炉作業に係る作業干渉の未然防止に繋がり、作業干渉による一時的な作業中断や工程遅延が発生するリスクを低減することができる。 ⑤既に実施している。 ⑥稼働中の周辺設備に影響を与えないことを図面および現場調査にて確認を行ったうえで実施する。 ⑦現場の状況を踏まえた方法等を検討する必要がある。

I-2-4-添1-8

## 2 特定原子力施設の構造及び設備，工事の計画

### 2.1 原子炉圧力容器・格納容器注水設備

#### 2.1.1 基本設計

##### 2.1.1.1 設置の目的

原子炉圧力容器・格納容器注水設備（以下，原子炉注水系という）は，建屋に滞留した汚染水から油分，塩分，放射能を除去した水（以下，処理水という）及びろ過水を水源とし，電動機駆動の注水ポンプにて原子炉への注水を行い，燃料の崩壊熱を除去することを目的とする。

##### 2.1.1.2 要求される機能

- (1) 原子炉圧力容器・格納容器内での崩壊熱を適切に除去できること。
- (2) 原子炉圧力容器底部温度を概ね 100℃未満に維持できる機能を有すること。
- (3) 原子炉注水系は多重性または多様性及び独立性をそなえること。
- (4) 異常時にも適切に対応できる機能を有すること。
- (5) 常設の原子炉注水系が冷却機能を喪失した際は代替冷却機能を有すること。

##### 2.1.1.3 設計方針

###### 2.1.1.3.1 新設設備の設計方針

- (1) 構造強度及び機能の維持
  - a. 原子炉注水系は，燃料の崩壊熱を除去し冷温停止状態に必要な冷却水を注入できる機能を有し，原子炉圧力容器底部温度を概ね 100℃未満に維持できる設計とする。
  - b. 原子炉注水系は，系統の多重性及び独立性を備えた設計とする。また，定期的に機能確認が行える設計とする。
  - c. 原子炉注水系は，異なる送電系統で 2 回線以上の外部電源から受電するとともに，外部電源喪失の場合でも，所内の独立した電源設備から受電できる設計とする。
  - d. 原子炉注水系は，材料の選定，製作及び検査について，適切と認められる規格および基準によるものとする。
  - e. 原子炉注水系は，漏えいを防止できる設計とする。
  - f. 原子炉注水系の設備に異常が生じた場合に検出できるようにする。
- (2) 注水状態の監視
  - a. 原子炉注水系は，注水流量を監視し記録できる設計とする。

(3) 漏えい監視

- a. 原子炉注水系は、設備に漏えいがあった場合に検出できるようにする。
- b. 原子炉注水系は、漏えい箇所を隔離できるとともに注水を継続できる設計とする。

(4) 異常時への対応機能

- a. 原子炉注水系は、外部電源が利用できない場合にも冷却機能を継続できる設計とする。
- b. 原子炉注水系は、母線によって供給される全ての電源が喪失した場合においても、注水冷却をすみやかに再開可能とする電源を備えたものとする。
- c. 原子炉注水系は、地震、津波等の発生を考慮しても冷却機能を確保できる設計とする。

(5) 火災防護

- a. 早期検知に努めるとともに、消火設備を設けることで、初期消火を行い、火災により、安全性を損なうことのないようにする。

2.1.1.3.2 既設設備の設計方針

(1) 耐震性

原子炉注水系の既設設備は、基準地震動  $S_s$  による地震力に対してその安全機能を確保できることを確認する。確保できない場合は、多様性を考慮した設計とする。

(2) 系統流量

原子炉等を適切に冷却するのに必要な冷却水の流量を確保できることを確認する。

2.1.1.4 供用期間中に確認する項目

- (1) 崩壊熱相当注水量以上で原子炉へ注水できること。
- (2) 原子炉圧力容器底部温度が  $100^{\circ}\text{C}$  未満であること。

2.1.1.5 主要な機器

(1) 設備概要（添付資料－1 参照）

原子炉注水系は、処理水及びろ過水を水源とし、電動機駆動の注水ポンプにて建屋内の既設配管（1号機は給水系、炉心スプレイ系、2、3号機は給水系、炉心スプレイ系及び消火系）を介して原子炉への注水を行い、燃料の崩壊熱を除去する。

水源には、ろ過水タンク、処理水バッファタンク、純水タンク、復水貯蔵タンク（以下、CSTという）を備え、ポンプは常用高台炉注水ポンプ、非常用高台炉注水ポンプ、純水タンク脇炉注水ポンプ、タービン建屋内炉注水ポンプ、CST炉注水ポンプにより構成する。また、原子炉への注水ラインは、処理水バッファタンクから常用高台炉注水ポンプまたは非常用高台炉注水ポンプを介する注水ライン、処理水バッファタンクからタービン建

屋内炉注水ポンプを介する注水ライン，純水タンクから純水タンク脇炉注水ポンプを介する注水ライン，各号機のC S TからC S T炉注水ポンプまたはタービン建屋内炉注水ポンプを介するライン等で構成する。

系統の構成にあたっては，それぞれの設備で多重化を図り，機器の故障等による機能喪失を防止するよう構成する。

## (2) 注水ポンプ

原子炉注水系の常用系は，事務本館海側駐車場に設置された常用高台炉注水ポンプ3台（1～3号共用），タービン建屋内に設置されたタービン建屋内炉注水ポンプ6台及びC S T炉注水ポンプ6台で構成する。

また予備としては電源喪失時の注水を確保するため，事務本館海側駐車場に設置され所内電源系統から独立した専用のディーゼル発電機（以下，D/Gという）から受電する非常用高台炉注水ポンプの3台（1～3号共用），純水タンク脇に設置され所内電源及び専用のD/Gの双方からの受電が可能な純水タンク脇炉注水ポンプ3台（1～3号共用）の計6台で構成している。各ポンプの操作盤は各ポンプ近傍に設置されており，手動で起動・停止を行う。注水ポンプは，燃料の崩壊熱相当注水量を十分確保できる仕様とする（崩壊熱相当注水量の計算例を添付資料－3に示す）。

## (3) タンク

原子炉注水系の水源は，建屋に滞留した汚染水を水処理した処理水とろ過水の2種類がある。処理水を水源としているタンクは，処理水バッファタンク及びC S Tがあり，ろ過水を水源としているタンクはろ過水タンク，純水タンクがあり，水源に対し多様性を有している。

また，処理水バッファタンクは水源として処理水を主としているが，処理装置の不具合等により，処理水の供給がとぎれた場合に備え，ろ過水タンクから水の供給が可能である。なお，ろ過水タンクへのろ過水の供給量は，崩壊熱相当注水量に対して十分な供給能力がある。

これらタンクは1～3号機共用として運用するが，複数のタンクがあり，またタンクから原子炉までの注水ラインはそれぞれ独立しているため，十分な多様性及び独立性を有している。

## (4) 原子炉注水ライン

常用，非常用高台炉注水ポンプ，タービン建屋内炉注水ポンプ，純水タンク脇炉注水ポンプ及びC S T炉注水ポンプは，ポンプ吐出ラインをそれぞれ独立したラインで構成する他，常用，非常用高台炉注水ポンプは水源からポンプまでのラインも，処理水バッファタンクとろ過水タンクからの独立した系統構成とすることで，多様性を向上させ，系の漏え

い等に伴う系統を隔離しての補修作業や系統単独での作動確認が実施できる。

これらの系を構成するラインは、ポンプ定格流量にて注水した場合においても、有意な圧力損失及び流体振動等が発生しないよう考慮する。また、耐圧ホース及びフレキシブルチューブの敷設にあたっては、許容された半径を満足する様に配置するとともに、ホース類の敷設にあたっては、温度上昇による強度への影響を考慮し、道路脇の芝生上に敷設するなど可能な限りアスファルトを避けて敷設する。

#### (5) 電源

常用高台炉注水ポンプ、タービン建屋内炉注水ポンプ及びC S T炉注水ポンプの電源は、異なる送電系統で2回線の外部電源から受電できる構成とする。

外部電源喪失の場合でも、所内共通ディーゼル発電機から電源を供給することで常用高台炉注水ポンプ、タービン建屋内炉注水ポンプ及びC S T炉注水ポンプのいずれかの運転が可能な構成とする。

また、非常用高台炉注水ポンプ及び純水タンク脇炉注水ポンプはそれぞれ専用のD/Gを有し、外部電源の供給の有無に関わらず運転が可能な構成とする。

#### (6) その他

複数の設備に損傷が生じた場合であっても、原子炉注水を維持するため、原子炉注水専用の消防車を3台配備する。水源については、上記のタンクその他、原水地下タンクを利用できる他、これらの水源が使用できない場合も、海水を水源とした消防車による注水が可能である。

原子炉注水系の腐食防止対策としては、注水する処理水の水質管理を行うと共に、窒素バブリングによる脱酸素等を実施する（添付資料-4参照）。

また、原子炉注水系の凍結防止対策としては、保温材の取り付け、水抜き、ハウス設置を実施する。

原子炉注水系の監視としては、現場、免震重要棟集中監視室等で原子炉の冷却状態及び注水状態を監視し、これらの変動により有意な漏えい検出も可能と考えている。

また、タンク、または配管等からの微小漏えいによる系外への放射性物質漏えいに関しては特に監視設備は設けていないが、漏えいリスクが低いPE管への設備変更、土嚢による系外放出防止対策を実施すると共に、巡視点検を行うことにより監視している。

接触等による流量変動防止対策として、原子炉注水量調整弁近傍に注意喚起の表示、接触しやすい流量調整弁には接触防止カバーを取付ける。

### 2.1.1.6 自然災害対策等

#### (1) 津波

原子炉注水系は、機器の故障等による機能喪失を防止するよう構成しているが、津波等



により万が一、複数設備の機能が同時に喪失した場合は、水源の損傷状況や現場状況に応じて、新たな消防車の配備や注水ラインの再敷設等を行い、原子炉注水を再開する。

## (2) 火災

原子炉注水系の非常用高台炉注水ポンプ及び純水タンク脇炉注水ポンプのD/G用燃料タンク内に危険物が存在するため、初期消火の対応ができるよう、近傍に消火器を設置する。

### 2.1.1.7 構造強度及び耐震性（添付資料－2参照）

#### (1) 構造強度

原子炉注水系は、技術基準上非常用炉心冷却設備に相当するクラス2機器と位置付けられる。この適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（以下、設計・建設規格という）」で規定されるものであるが、設計・建設規格は、鋼材を基本とした要求事項を規定したものであり、耐圧ホース等の非金属材についての基準がない。従って、鋼材を使用している設備については、設計・建設規格のクラス2機器相当での評価を行い、非金属材料については、当該設備に加わる機械的荷重により損傷に至らないことをもって評価をおこなう。この際、当該の設備が JIS や独自の製品規格等を有している場合や、試験等を実施した場合はその結果などを活用し、評価を行う。また、溶接部については、耐圧試験、系統機能試験等を行い、有意な変形や漏えい等のないことをもって評価を行なう。

また、構造強度に関連して経年劣化の影響を評価する観点から、原子力発電所での使用実績がない材料の設備を使用する場合は、他産業での使用実績等を活用しつつ、必要に応じて試験等をおこなうことで、経年劣化の影響についての評価を行う。なお、試験等の実施が困難な場合にあっては、巡視点検等による状態監視をおこなうことで、健全性を確保する。

#### (2) 耐震性

原子炉注水系は、耐震設計審査指針上のSクラス相当の設備と位置づけられるが、新設設備については、短期間での設計、調達及び設置を行う必要があることから、耐震Sクラスの要求事項を完全に満足するものとはなっていないものの、今後も継続的に発生すると思われる地震に対して耐震性を確保する観点から、耐震Bクラス設備に適用される静的地震力に対して耐震性が確保されることを確認する。

また、既設設備については、基準地震動  $S_s$  による地震力に対してその安全機能を確保できることを確認する。確保できない場合は、多様性を考慮した設計とする。耐震性に関する評価にあたっては、「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」に準拠することを基本とするが、必要に応じて試験結果等を用いた現実的な評価を行う。支持部材がない等の理由によって、耐震性に関する評価ができない設備を設置する場合においては、フレキシビリ

ティを有する材料を使用するなどし、可能な限り耐震性を確保する。

#### 2.1.1.8 機器の故障への対応

##### 2.1.1.8.1 機器の単一故障

###### (1) ポンプ故障

常用系ポンプが故障した場合は、待機号機の起動もしくは非常用高台炉注水ポンプの起動を行うことで炉注水を再開する（注水再開の所要時間：30分程度）。

###### (2) 電源喪失

常用系ポンプの電源が、外部電源喪失や全母線電源喪失により喪失した場合は、電源切替には数時間を要することから、非常用高台炉注水ポンプによる原子炉注水（系統構成及び非常用高台炉注水ポンプの起動）及び予め待機している消防車による原子炉注水（系統構成及び消防車の起動）を並行して実施する（注水再開の所要時間：30分程度）。

###### (3) 水源喪失

常用系ポンプは、主としてバッファタンクを水源としているが、タンク等が損傷し、保有水が漏えいする等、タンク機能が喪失した場合は、水源をろ過水タンクに切替える（注水再開の所要時間：30分程度）。

なお、万が一バッファタンクに加え、ろ過水タンクの機能も喪失した場合（複数設備の機能喪失に該当）は、純水タンクへのろ過水の供給が無くなるため、原水地下タンクを水源とし、予め待機している消防車による注水を行う（注水再開の所要時間：60分程度）。

###### (4) 原子炉注水ラインの損傷

常用系ポンプからの注水ラインが損傷した場合は、純水タンク脇炉注水ポンプによる原子炉注水（系統構成及び純水タンク脇ポンプの起動）を行う（注水再開の所要時間：30分程度）。

##### 2.1.1.8.2 原子炉注水系の複数の設備が同時に機能喪失した場合

原子炉注水系は、機器の故障等による機能喪失を防止するよう構成しているが、地震、津波等により万が一、複数の設備の機能が同時に喪失した場合は、水源の損傷状況や現場状況に応じて、新たな消防車の配備や注水ラインの再敷設等を行い、原子炉注水を再開する。消防車は、事務本館海側駐車場、ろ過水タンク脇、厚生棟横にバックアップとして設置されている消防車を使用できる他、事務本館山側駐車場に配備されている消防車を使用できる。注水再開までの時間は、現場状況等により変動するも

の、ホース敷設距離等を踏まえた作業時間を勘案すると、作業開始から3時間程度と想定しており、想定以上とならないよう定期的に訓練を実施している。

現行の崩壊熱においては、仮に注水停止が3時間を超える長時間にわたる場合を想定しても、1プラント当たり10m<sup>3</sup>/hの注水流量で冷却可能であると評価されており、現行の設備で冷却を行うことが十分可能である。流量を高めた注水を再開する場合には、蒸気が急速に凝縮する可能性があることから、窒素封入が行われていることを確認するとともに、温度や圧力等のパラメータを監視しつつ注水流量の調整を行う。

#### 2.1.1.8.3 異常時の評価

原子炉注水系が異常事象により機能喪失し、原子炉注水が停止した場合について、評価を実施した（添付資料－5参照）。

敷地境界での年間の実効線量の評価結果は、過渡相当事象（注水停止1時間）で約 $9.3 \times 10^{-7}$  mSv、事故相当事象（注水停止7時間）で約 $4.3 \times 10^{-6}$  mSvであり、周辺の公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。

想定を大きく超える、シビアアクシデント相当事象（注水停止12時間）における敷地境界での年間の実効線量は約 $2.1 \times 10^{-5}$  mSvであり、3プラント分の放射性物質の放出を考慮した場合では約 $6.3 \times 10^{-5}$  mSvである。また、特定原子力施設から5km、10km地点での年間の実効線量は、3プラント分の放射性物質の放出を考慮した場合でそれぞれ約 $1.1 \times 10^{-5}$  mSv、約 $3.6 \times 10^{-6}$  mSvであり、周辺の公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。

#### 2.1.1.8.4 原子炉注水系の確率論的リスク評価

原子炉注水系に対して影響が大きい事象を選定し、その後の事象進展の確率を、設備構成や故障率を基に推定し、原子炉圧力容器内及び格納容器内の燃料（以下、炉心という）が再損傷に至る頻度を評価した（添付資料－6参照）。

評価の結果、炉心が再損傷する頻度（点推定値）の内の事象（ハザード発生箇所が発電所内）の合計値は、約 $3.2 \times 10^{-7}$ /年、外部電源喪失（地震）は、約 $6.1 \times 10^{-9}$ /年、大津波事象は、約 $5.8 \times 10^{-5}$ /年となっている。評価結果の合計値は約 $5.9 \times 10^{-5}$ /年であり、寄与割合は、大津波事象が約99%となった。

## 2.1.2 基本仕様

### 2.1.2.1 主要仕様

#### (1) 常用高台炉注水ポンプ（完成品）（外部電源）

台数	3
型式	多段渦巻ポンプ
容量	20m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	113m

#### (2) 非常用高台炉注水ポンプ（完成品）（専用D/G電源）

台数	3
型式	多段渦巻ポンプ
容量	20m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	113m

#### (3) 純水タンク脇炉注水ポンプ（完成品）（外部電源及び専用D/G電源）

台数	3
型式	多段渦巻ポンプ
容量	37 m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	93m

#### (4) タービン建屋内炉注水ポンプ（完成品）（外部電源）

##### 1号機

台数	2
型式	多段渦巻ポンプ
容量	12 m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	70m

##### 2, 3号機

台数	2号機 2 3号機 2
型式	多段渦巻ポンプ
容量	10m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	70m

(5) C S T 炉注水ポンプ (完成品) (外部電源)

台 数	1 号機 2 2 号機 2 3 号機 2
型 式	単段渦巻ポンプ
容 量	20m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	70m

(6) 非常用高台炉注水ポンプ用 D/G (完成品)

台 数	1
容 量	125kVA 以上
力 率	約 0.8 (遅れ)
電 圧	約 200V
周 波 数	50Hz
燃料タンク容量, 消費量	約 250l (参考値), 約 26.1l/h (参考値)

(7) 純水タンク脇炉注水ポンプ用 D/G (完成品)

台 数	1
容 量	125kVA 以上
力 率	約 0.8 (遅れ)
電 圧	約 200V
周 波 数	50Hz
燃料タンク容量, 消費量	約 250l (参考値), 約 26.1l/h (参考値)

(8) 処理水バッファタンク

基 数	1
容 量	700m <sup>3</sup>

(9) 復水貯蔵タンク (C S T)

基 数	1 号機 1 2 号機 1 3 号機 1
容 量	1 号機 1893Kl 2 / 3 号機 2448.5Kl

(10) ろ過水タンク

基 数	1
容 量	8000 m <sup>3</sup>

(11) 純水タンク

基 数	2
容 量	2000 m <sup>3</sup> (1基あたり)

(12) 原水地下タンク

基 数	1
容 量	970m <sup>3</sup>

(13) 消防車

基 数	3
規格放水圧力	0.7MPa 以上
放水性能	60m <sup>3</sup> /h 以上
高压放水圧力	1.0MPa 以上
放水性能	36m <sup>3</sup> /h 以上
燃料タンク容量、消費量	約 631 (参考値), 約 371/h (参考値)

表 2. 1 - 1 主要配管仕様

名称	仕様	
【1～3号機高台炉注水ライン】 ポンプユニット (鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch20S 65A/Sch20S 80A/Sch20S SUS304TP 1.4MPa 50℃
(フレキシブルチューブ)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当 SUS316L 1.4MPa 50℃
【1～3号機高台炉注水ライン】 注水ライン (鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch40 80A/Sch40 150A/Sch40 SUS304TP 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch40 STPT370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch80 STPT370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	300A/Sch40 STPT410 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch40 65A/Sch40 80A/Sch40 STPG370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch80 STPG370 0.98MPa 50℃
(フレキシブルチューブ)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 SUS316L 0.98MPa 50℃

名称	仕様	
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当 / 200A 相当 / 300A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
(消防ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力	65A 相当 ポリエステル 1.0MPa 以上
【1～3号機純水タンク脇炉注水ライン】 ポンプユニット (鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A / Sch20S 65A / Sch20S 80A / Sch40 SUS304TP 1.4MPa 50℃
【1～3号機純水タンク脇炉注水ライン】 注水ライン (鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A / Sch20 200A / Sch20 SGP 0.98MPa 50℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度 許容曲げ半径	75A 相当 ポリ塩化ビニル 0.98MPa 50℃ 750mm
(消防ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力	65A 相当 ポリエステル 1.0MPa 以上
【1～3号機タービン建屋内炉注水ライン】 ポンプユニット (鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A / Sch40 STPT370 1.4MPa 50℃
(鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A / Sch80 STPT370 1.4MPa 50℃
(鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A / Sch80 SUS304TP 1.4MPa 50℃
【1～3号機タービン建屋内炉注水ライン】 注水ライン (鋼管)	呼び径 / 厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A / Sch40 80A / Sch40 100A / Sch40 150A / Sch40 STPT370 0.98MPa 50℃



名称	仕様	
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch160 STPT370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch40 150A／Sch40 300A／Sch40 STPG370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch80 STPG370 0.98MPa 50℃
(鋼管)	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch80 65A／Sch40 STPT410 0.96MPa 66℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当/150A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
【1～3号機C S T原子炉注水ライン】 ポンプユニット (鋼管)	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	25A／Sch80 50A／Sch80 STPT410 0.96MPa 66℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch40 STPT410 0.96MPa 66℃
【1～3号機C S T原子炉注水ライン】 注水ライン (鋼管)	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch80 50A／Sch40 65A／Sch40 80A／Sch40 100A／Sch40 150A／Sch40 STPT410 0.96MPa 66℃
(ポリエチレン管)	呼び径  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 75A 相当 100A 相当 150A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃

### 2.1.3 添付資料

- 添付資料－1 原子炉压力容器・格納容器注水設備系統概略図
- 添付資料－2 構造強度及び耐震性について
- 添付資料－3 崩壊熱相当の注水量について
- 添付資料－4 炉注入する処理水の水質目標値について
- 添付資料－5 原子炉注水停止時評価の説明資料
- 添付資料－6 原子炉注水系に関する確率論的リスク評価
- 添付資料－7 原子炉注水系に係る確認事項
- 添付資料－8 処理水バッファタンクの基本仕様
- 添付資料－9 処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の具体的な安全確保策
- 添付資料－10 処理水バッファタンクの基礎及び堰に関する説明書
- 添付資料－11 原子炉压力容器・格納容器注水設備の配置

## 処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の具体的な安全確保策

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の準拠規格及び基準、漏えい発生防止対策、自然災害対策、環境条件対策等について具体的な安全確保策を以下の通り定め、実施する。

### 1. 準拠規格及び基準

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、設計、材料の選定、製作及び検査について、原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

### 2. 構造強度及び耐震性（添付資料－ 2 参照）

#### （1）構造強度

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則（平成 25 年 6 月 28 日原子力規制委員会規則第 6 号）」上、非常用炉心冷却設備に相当するクラス 2 機器と位置付けられ、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（以下、JSME 規格という。）」、日本工業規格（JIS 規格）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、または、これらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。また、JSME 規格で規定される材料の JIS 規格の年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。さらに、JSME 規格に記載のない非金属材料（ポリエチレン管）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器については、日本水道協会規格（JWWA 規格）や配水用ポリエチレンパイプシステム協会規格（PTC 規格）、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

#### （2）耐震性

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の S クラス相当の設備と位置付けられ、「JEAC4601-2008 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準じた構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準については、実態にあわせたものを採用する。

ポリエチレン管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

### 3. 放射性物質の漏えい防止に対する考慮

#### （1）漏えい発生防止

- a. 処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、設置環境や内部流体の性状に応じた適切な材料を使用する。また、処理水バッファタンクは、水位の検

出器を設け、タンク水位を免震重要棟集中監視室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

- b. 処理水バッファタンクは、十分な肉厚を有する鋼材を基本とする。また、処理水バッファタンク接続配管は、耐腐食性を有するポリエチレン管もしくは十分な肉厚を有する炭素鋼の鋼管を基本とする。
- c. 鋼管もしくはポリエチレン管の継手部は、溶接構造もしくは融着構造を基本とする。また、堰が設置されない配管や弁の継手部がフランジ構造となる場合には、継手部に漏えい拡大防止カバーを設置し、シール材又は発泡剤の充填を実施する。
- d. 使用開始までに漏えい確認等を実施し、施工不良による大規模な漏えいの発生を防止する。

## (2) 漏えい検知・漏えい拡大防止

- a. 処理水バッファタンクは、漏えい拡大防止として堰を設ける。堰の容量は、処理水バッファタンクからの想定漏えい量を全量受けきれれるものとする（添付資料－10参照）。
- b. 処理水バッファタンク接続配管の継手部のうち、フランジ構造となる場合には、漏えい拡大防止カバーで覆った上で中に吸水シートを入れ、漏えい水の拡大防止に努める。
- c. ポリエチレン管とポリエチレン管の接合部は漏えい発生を防止するため融着構造とすることを基本とし、取合いがフランジ接続となる箇所については養生を行い、漏えい拡大防止を図る。
- d. 処理水バッファタンク接続配管から漏えいが確認された場合は、ポンプ停止及び隔離弁の閉止操作を行い、系統の隔離及び土嚢の設置等により漏えいの拡大防止を図る。
- e. 処理水バッファタンクは、水位の検出計を設け、受入時の溢水を防止すると共に水位状況を監視し、漏えい検知に努める。また、巡視点検により漏えいの有無を確認する。処理水バッファタンク接続配管の継手部のうち、フランジ構造部は、ガスケットの経年劣化により微小漏えいの発生が懸念されることから、漏えい検知のため、架空化により視認性を向上させ、巡視点検により漏えいの有無を確認する。

## (3) 放射線遮へいに対する考慮

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の表面線量当量率の表示により注意喚起することで、放射線従事者の被ばく低減を図る。

## (4) 敷地境界における実効線量

処理水バッファタンクが敷地境界における実効線量に対して与える影響は、最も近い

敷地境界評価地点 No. 71 において約  $1.0 \times 10^{-7}$  mSv/y 未満であり、線量評価上有意な値ではない。

#### 4. 自然災害対策

##### (1) 津波

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、アウターライズが到達しないと考えられる高さ以上の場所に設置する（設置位置は添付資料-11参照）。

アウターライズ津波を上回る津波が発生した場合は、水源の損傷状況や現場状況に応じて、消防車の配備や注水ラインの再敷設等を行い、原子炉注水を再開する。

##### (2) 台風・竜巻

台風・竜巻により処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の損傷が予見される場合は、ポンプ停止及び隔離弁の閉止操作を行い、内包水の漏えい防止及び漏えい水の拡大防止を図る。

##### (3) 豪雨

処理水バッファタンクは、タンク頂部マンホール、管台の上向きの開口部について、容易に雨水が侵入しない構造とする。また、タンクのベント配管については、開口部が下向きになるように設置することで、雨水の侵入を防止する。

##### (4) 火災

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、火災発生を防止するため、実用上可能な限り、不燃性又は難燃性材料を使用する。

#### 5. 環境条件対策

##### (1) 腐食

処理水バッファタンクは、十分な肉厚を有する鋼材を用いる。処理水バッファタンク接続配管は、耐腐食性を有するポリエチレン管もしくは十分な肉厚を有する炭素鋼の鋼管を用いる。処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は予備の設備であり、定例試験時を除き内包水は静止しているため、腐食の速度は遅く、腐食の影響は少ないと考えられる。

##### (2) 凍結

処理水バッファタンク接続配管は、凍結による破損が懸念されるため、保温材を取り付けて凍結防止を図る。

### (3) 生物汚染

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管の内包水は、処理装置を経由した処理水またはろ過水であるため、有意な生物腐食の懸念はない。

### (4) 紫外線防止

処理水バッファタンク接続配管は、紫外線による劣化を防止するため、紫外線防止効果のある保温材を取り付ける。

### (5) 耐放射線性

処理水バッファタンク接続配管のうち、ポリエチレン管については、放射線影響が考えられるが、内包水である処理水は、照射線量率が十分低いため、放射線の影響は軽微と考えられる。なお、ポリエチレン管の照射線量率を 1Gy/h と仮定した場合、ポリエチレンは、集積線量が  $2 \times 10^5$  Gy に達すると、引張強度は低下せず、破断時の伸びが減少する傾向を示すが、これに到達する時間は  $2 \times 10^5$  時間 (22.8 年) と評価されるため、数年の使用では影響をうけることはないと考えられる。

## 6. 検査可能性に対する設計上の考慮

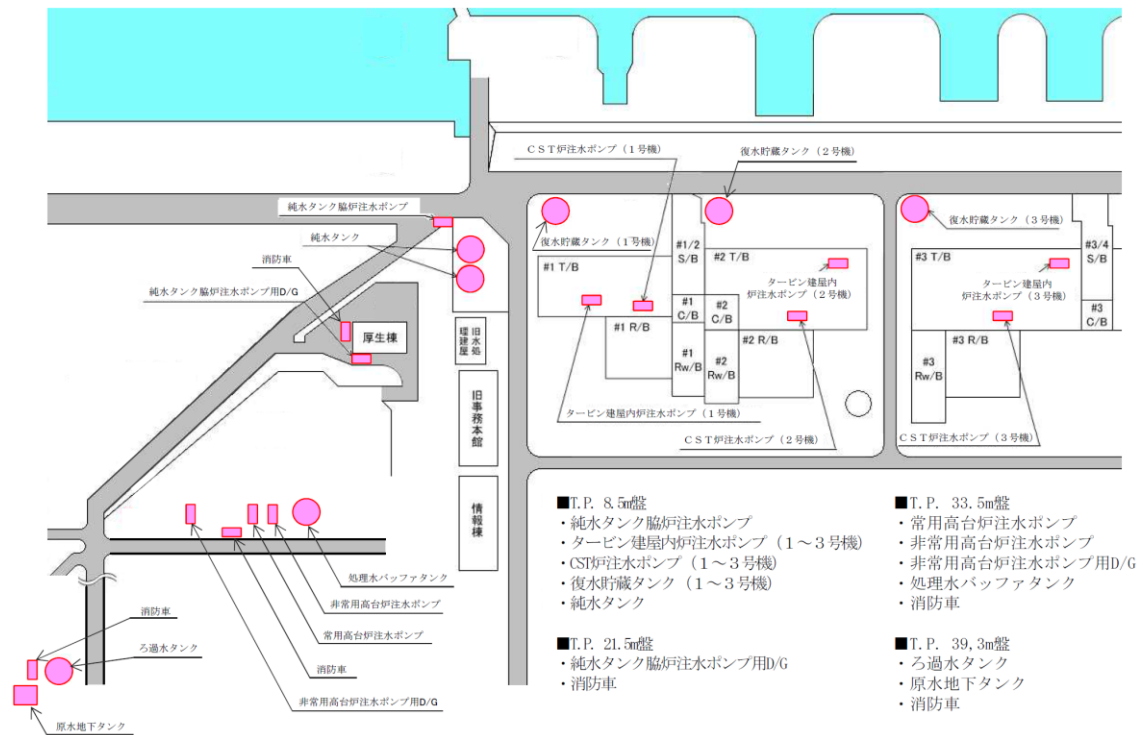
処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、適切な方法で検査ができるよう、漏えい検査・通水検査等が可能な設計とする。

## 7. 設備保全に対する考慮

処理水バッファタンク及び処理水バッファタンク接続配管は、機器の重要度に応じた有効な保全を計画し、実施が可能な設計とする。

原子炉压力容器・格納容器注水設備の配置

原子炉压力容器・格納容器注水設備の配置を図－ 1 に示す。



図－ 1 原子炉压力容器・格納容器注水設備配置図

処理水バッファタンク接続配管の範囲を図-2に示す。処理水バッファタンク接続配管はT. P. 33. 5m 盤に設置する。

T. P. 33. 5m 盤の処理水バッファタンク周辺

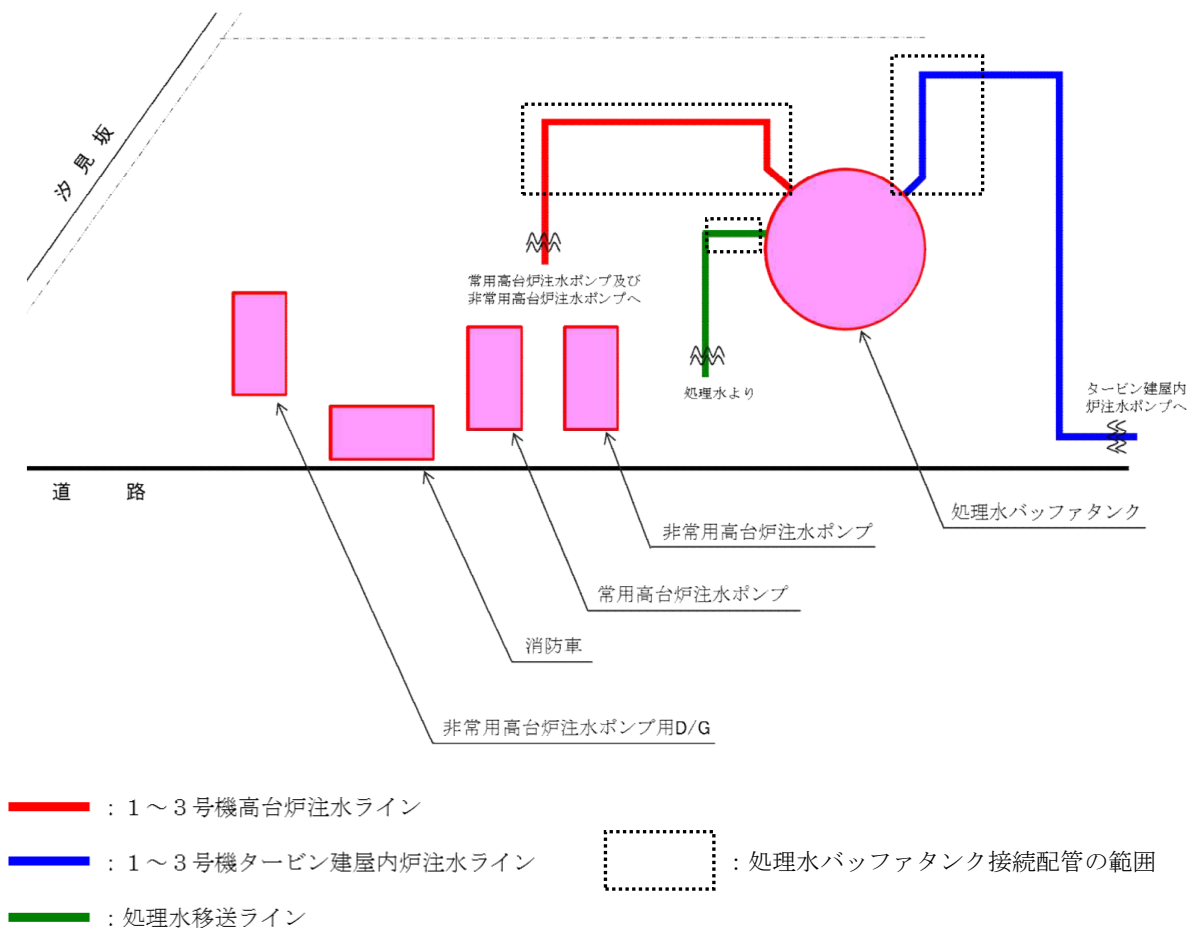


図-2 処理水バッファタンク接続配管の範囲



## 2.2 原子炉格納容器内窒素封入設備

### 2.2.1 基本設計

#### 2.2.1.1 設置の目的

原子炉格納容器内窒素封入設備は、水素爆発を予防するために、原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内に窒素を封入することで不活性雰囲気を維持することを目的とする。

#### 2.2.1.2 要求される機能

- (1) 原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内の雰囲気の水素の可燃限界以下に維持できる機能を有すること。
- (2) 動的機器は多重性または多様性及び独立性を備えること。
- (3) 異常時にも適切に対応できる機能を有すること。

#### 2.2.1.3 設計方針

原子炉格納容器内窒素封入設備は、原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内における水の放射線分解による水素と酸素の発生量に対して、水素可燃限界に至らないよう（水素濃度：4%以下）窒素を封入できる設計とする。

そのため、次の設計方針に基づいて設計する。

##### (1) 窒素封入機能

原子炉格納容器内窒素封入設備は、原子炉圧力容器内雰囲気及び原子炉格納容器内雰囲気を可燃限界以下にするために必要な窒素濃度、窒素封入流量、窒素封入圧力を確保する設計とする。

##### (2) 逆流防止機能

原子炉格納容器内窒素封入設備は、窒素封入ラインから原子炉圧力容器内ガスや原子炉格納容器内ガスが逆流し、屋外に放出されない設計とする。

##### (3) 構造強度

原子炉格納容器内窒素封入設備は、材料の選定、製作及び検査について、適切と認められる規格及び基準によるものとする。

##### (4) 多重性・多様性

原子炉格納容器内窒素封入設備のうち動的機器は多重性を備えた設計とし、定期的に機能確認が行える設計とする。また、原子炉格納容器内への窒素封入ラインは多様性を備えた設計とする。

(5) 異常時への対応機能

外部電源喪失の場合でも，所内の独立した電源設備から受電できる設計とする。

さらに，津波等により設備に破壊や損傷が生じた場合であっても，窒素封入が速やかに再開できる設計とする。

(6) 火災防護

火災の早期検知に努めるとともに，消火設備を設けることで初期消火を行い，火災により安全性を損なうことのないようにする。

(7) 検査可能性に対する設計上の考慮

原子炉格納容器内窒素封入設備は，原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内雰囲気を可燃限界以下にできることを確認するための検査が可能な設計とする。

2.2.1.4 供用期間中に確認する項目

- (1) 原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内の雰囲気の水素可燃限界以下に保つために必要な封入量以上（添付資料－4）で窒素を封入できること。
- (2) 原子炉格納容器内の水素濃度が可燃限界以下であること。

2.2.1.5 主要な機器

2.2.1.5.1 系統構成

原子炉格納容器内窒素封入設備は窒素ガス分離装置3台を高台に設置し，ヘッダを介して1～3号機へ窒素を封入しており，窒素ガス分離装置の単一故障によって窒素封入が長期間停止することを防止する。また，窒素ガス分離装置の定期的な機能確認を単独で行えるようにするとともに，系統を隔離しての補修作業が可能となるようにする。更に，高台に非常用窒素ガス分離装置及び専用のディーゼル発電機（以下，D/Gという）を設置する。主要設備構成を以下に記載する。（添付資料－1）

(1) 窒素ガス分離装置

原子炉格納容器内窒素封入設備は，3台の窒素ガス分離装置をヘッダを介して連結し，1～3号機の原子炉圧力容器及び原子炉格納容器へ窒素を封入できるように構成される。なお，2台の窒素ガス分離装置については所内電源系統の他に独立した専用のD/Gからの受電が可能である。

また予備としては所内電源系統から独立した専用のD/Gから受電する非常用窒素ガス分離装置を配置する。

## (2) 窒素封入ライン

原子炉格納容器内窒素封入設備は、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器の両方へ窒素を封入できるラインを設置する。(添付資料-3, 7)

なお、窒素封入ラインは、ガスが逆流するのを防止するため、既設配管との取り合い部に近い位置に逆止弁を設置するとともに、ラインからの漏えいにより全体の圧力が低下し窒素の封入に支障が出ないように、適宜コック弁を設け、漏えい部を適宜隔離できる構造とする。また、原子炉格納容器への窒素の封入は、原子炉圧力容器へ封入した窒素が原子炉格納容器に流入することによっても封入されることから、多様性が確保される。

## (3) 電源

常用の窒素ガス分離装置は、複数系統の所内高圧母線から受電できる構成とする。外部電源喪失の場合でも、非常用所内電源から電源を供給することで常用の窒素ガス分離装置のいずれか1台の運転が可能な構成とする。

また、窒素ガス分離装置A、B及び非常用窒素ガス分離装置には専用のD/Gを有しており、全交流電源喪失の場合でも窒素の封入が可能となる設備とする。

## (4) 監視装置

原子炉格納容器内窒素封入設備は、窒素濃度、窒素封入流量、窒素封入圧力等のパラメータを監視し、原子炉圧力容器内及び原子炉格納容器内へ窒素が適切に封入されていることを確認できる構造とする。

これらのパラメータのうち、窒素濃度、窒素封入流量及び窒素封入圧力については免震重要棟にて遠隔監視が可能な設備とする。

### 2.2.1.6 自然災害対策等

#### (1) 津波

原子炉格納容器内窒素封入設備については、仮設防潮堤により、アウターライズ津波による浸水を防止する。また、仮設防潮堤を越える津波等により、原子炉格納容器内窒素封入設備に破壊や損傷が生じることを想定し、高台(T.P. 33.5m盤)に窒素ガス分離装置を設置し、ホースや取り付け治具についても予備品を準備し、速やかに窒素の封入が再開できるようにする。

#### (2) 火災防護

原子炉格納容器内窒素封入設備には潤滑油やD/G用燃料等の危険物が存在するため、可能な限り可燃物を排除するとともに、ホースには可能な限り難燃性の保護カバーを取り付ける。

また、危険物を内包する機器の近傍には初期消火の対応ができるよう近傍に消火器を設置するとともに、補給用潤滑油については施錠管理された危険物倉庫にて保管を行う。

窒素封入設備は巡視点検ならびに窒素封入設備の運転データの監視を行っているため、火災発生について確認可能である。

### (3) 豪雨

窒素ガス分離装置は設計上、側溝が整備されているエリアに設置し、またコンテナ内や屋根カバー内に設置することから、豪雨に耐えうる構造としている。

屋外の窒素封入ラインは、全て屋外仕様品を用いており、豪雨による機器への影響は受けない設計としている。屋内の窒素封入ラインは、各号機原子炉建屋内及びタービン建屋内に設置しているため、豪雨による設備損傷の恐れはない。

万一の損傷を考慮し、高台に窒素ガス分離装置を設置し、ホースや取り付け治具についても予備品を準備し、速やかに窒素の封入が再開できるようにする。

### (4) 強風(台風・竜巻)

窒素ガス分離装置は、コンテナや屋根カバーにより強風(台風)に耐えうる構造としている。

また、屋外の窒素封入ラインが強風により破壊や損傷が生じた場合は予備のホースや取り付け治具を使用し、速やかに窒素の封入が再開できるようにする。屋内の窒素封入ラインについては各号機原子炉建屋内及びタービン建屋内に設置しているため、強風による設備損傷の恐れはない。

万一の強風での損傷を考慮し、窒素ガス分離装置を複数台設置し、運転切り替えを行うことで速やかに窒素封入が再開できるようにする。

## 2.2.1.7 構造強度及び耐震性

### (1) 構造強度

窒素封入設備は、重要度分類指針上の不活性ガス系設備に相当するクラス3機器と位置付けられる。この適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格(以下、設計・建設規格という)」で規定されるものであるが、設計・建設規格は、鋼材を基本とした要求事項を設定したものであり、耐圧ホース等の非金属材料についての基準がない。従って、鋼材を使用している主要設備については、設計・建設規格のクラス3機器相当での評価を行い、非金属材料については、当該設備に加わる機械的荷重により損傷に至らないことをもって評価を行う。この際、当該の設備が JIS や独自の製品規格等を有している場合や、試験等を実施した場合はその結果などを活用し、評価を行う。また、溶接部については、耐圧試験、系統機能試験等を行い、有意な変形や漏えい等のないことをもって評価を行なう。(添付資料-2)

## (2) 耐震性

原子炉格納容器内窒素封入設備は耐震設計審査指針上の耐震Cクラス相当の設備と位置づけられることから、原則として一般構造物と同等の耐震性を有する設計とする。

具体的には、「建築設備耐震設計・施工指針（2005年版）」を参考とし、静的震度（1.2Ci）に基づく主要機器の転倒評価を行い、窒素ガス分離装置について静的震度（1.2Ci）に対する評価で問題ないことを確認する。なお、窒素ガス分離装置A、B及び非常用窒素ガス分離装置については、耐震Sクラス相当の静的震度（3.6Ci）に対する評価も行い、転倒しないことを確認する。

その他にも主要な設備への固縛の実施や、フレキシビリティを有する材料を使用するなどし、耐震性を確保する。また、フレキシビリティのない設備の取り付け部等については、地震後の設備点検にて異常のないことの確認を行う。（添付資料-2）

### 2.2.1.8 機器の故障への対応

#### 2.2.1.8.1 機器の単一故障

##### (1) 窒素ガス分離装置故障

現在使用している窒素ガス分離装置が故障した場合は、現場にて待機状態となっている窒素ガス分離装置の起動を行い、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器への窒素封入を再開する。

（所要時間（目安）：2時間程度）※

##### (2) 電源喪失

窒素封入設備の電源は多重化されており、片側の電源が喪失した場合、予備機側に切り替えることで、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器への窒素封入を再開する。

（所要時間（目安）：2時間程度）※

変圧器や所内母線の故障など電源切替に長時間を要する場合は、専用のD/Gを持つ窒素ガス分離装置A、B又は非常用窒素ガス分離装置を起動することで、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器への窒素封入を再開する。

（所要時間（目安）：3時間程度）※

##### (3) 窒素封入ラインの損傷

窒素封入ホースが破損した場合は、予備品のホースと交換する。

（所要時間（目安）：8時間程度）※

※：所要時間（目安）とは復旧作業の着手から完了までの時間（目安）である。

#### 2.2.1.8.2 複数の設備が同時に機能喪失した場合

地震、津波等により万が一、窒素封入設備の複数の系統や機器の機能が同時に喪失した

場合には、当該設備の停止、隔離、巡視点検を行い、窒素ガス分離装置 A、B 又は非常用窒素ガス分離装置と専用の D/G、予備のホース及び取り付け治具を用いて速やかに原子炉圧力容器及び原子炉格納容器への窒素封入を再開する。

原子炉圧力容器及び原子炉格納容器への窒素の封入が停止してから、これらの容器内の雰囲気の水素の可燃限界に至るまでは最短でも 100 時間程度（添付資料－5）であることから、原子炉圧力容器及び原子炉格納容器の水素爆発を防止することは可能であると考えている。

#### 2.2.1.8.3 水素の滞留が確認された機器への窒素封入

高濃度の水素滞留が確認された機器については、不活性状態にするため窒素の封入を行う。（添付資料－6）

### 2.2.2 基本仕様

#### (1) 窒素ガス分離装置 A（外部電源及び専用 D/G 電源）（完成品）

台数	1
容量	90m <sup>3</sup> /h(Normal) 以上
窒素純度	99.0%以上
電気容量	93.8kVA

#### (2) 窒素ガス分離装置 B（外部電源及び専用 D/G 電源）（完成品）

台数	1
容量	90m <sup>3</sup> /h(Normal) 以上
窒素純度	99.0%以上
電気容量	93.8kVA

#### (3) 窒素ガス分離装置 A 及び B 用 専用 D/G（完成品）

台数	1
容量	125kVA 以上
力率	約 0.8（遅れ）
電圧	約 400V
周波数	50Hz
タンク容量	250 l 以上

（発電機 75%負荷時における消費量 24.2 l/h（参考値））

(4) 窒素ガス分離装置C (外部電源) (完成品)

台数	1
容量	120m <sup>3</sup> /h (Normal)
窒素純度	99.0%以上
電気容量	111kVA

(5) 非常用窒素ガス分離装置 (専用D/G電源) (完成品)

台数	1
容量	500m <sup>3</sup> /h (Normal)
窒素純度	99.0%以上

(6) 非常用窒素ガス分離装置用 専用D/G (完成品)

台数	2
容量	15kVA 以上
力率	約 0.8 (遅れ)
電圧	約 200V
周波数	50Hz
タンク容量	50 l 以上

(発電機 75%負荷時における消費量 3.8 l/h (参考値))

表 2.2-1 主要配管仕様

名称	仕様	
【窒素封入ライン】 (ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力	50A 相当 合成ゴム 1.0MPa
(ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力	25A 相当 合成ゴム 1.0MPa
(ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力	25A 相当 軟質塩化ビニール 1.0MPa
(鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力	25A/Sch. 80 STPT410 1.0MPa
(鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力	25A/Sch. 40 SUS304TP 1.0MPa

### 2.2.3 添付資料

- 添付資料－1 系統概略図
- 添付資料－2 構造強度及び耐震性について
- 添付資料－3 窒素封入ラインの構成
- 添付資料－4 水素発生量の評価について
- 添付資料－5 窒素封入停止時の時間余裕について
- 添付資料－6 サプレッションチェンバ内の不活性化について
- 添付資料－7 1号機ジェットポンプ計装ラックを用いた窒素封入設備について
- 添付資料－8 原子炉圧力容器封入ラインの二重化及び窒素ガス分離装置A，Bの取替等について
- 添付資料－9 窒素ガス分離装置用専用D／Gについて
- 添付資料－10 原子炉格納容器内窒素封入設備に係わる確認事項について
- 添付資料－11 2号機原子炉圧力容器窒素封入ライン追設について



## 2号機原子炉压力容器窒素封入ライン追設について

## 1. 工事概要

原子炉格納容器内窒素封入設備の内，2号機原子炉压力容器窒素封入点については，単一構成であることから，原子炉建屋内に隔離弁ユニット及び流路を形成する窒素封入ラインを2箇所追設（以下，「追設封入ライン」という。）し，設備の信頼性向上を図る。

また，万一の隔離弁ユニットや封入ラインの損傷による供給停止に備え，各流量調整ユニットから隔離弁ユニット間に予備ホースを設置し，ホースの接続切替による速やかな原子炉压力容器内窒素封入の再開を可能とする。

## 2. 基本設計及び基本仕様

追設封入ラインの基本設計及び基本仕様については，「2.2.1 基本設計」及び「2.2.2 基本仕様」に基づく。

## 3. 構造強度及び耐震性

追設封入ラインの構造強度及び耐震性については，「2.2.1.7 構造強度及び耐震性」に基づく。

## 3.1 隔離弁ユニット

## (1) 構造強度

追設封入ラインの隔離弁ユニットを構成する鋼管については，設計・建設規格に基づき，系統最高使用圧力に対して十分な厚さを有していることを確認しており，使用条件に対して十分な構造強度を有していると判断する（表－1 参照）。

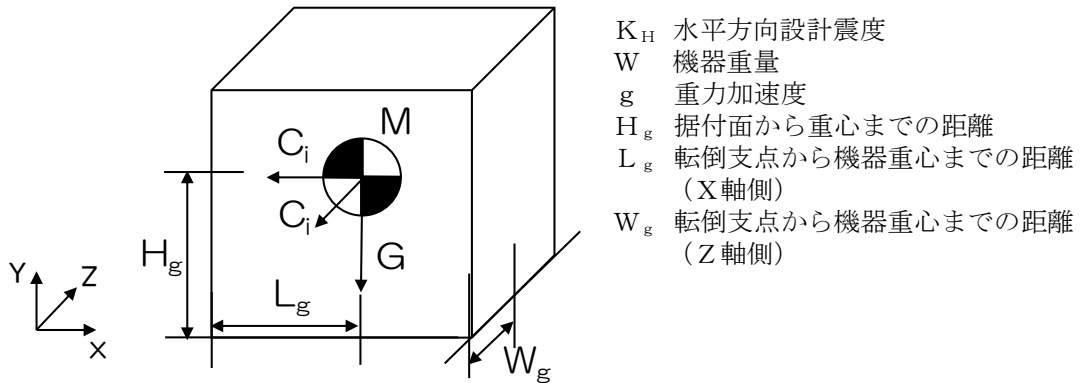
表－1 配管強度確認結果

型式	公称肉厚 [mm]	設計・建設規格上の必要最小厚さ[mm]
円型	3.4	0.14

## (2) 耐震性

隔離弁ユニットについては，建築設備耐震設計・施工指針（2005年版）を参考とし，静的地震力を用いて，耐震設計審査指針上の耐震Cクラス相当の地震力（ $1.2C_i = 0.24$ ）にて設備が転倒しないことの評価を行う。

・設備の転倒評価



地震によるモーメント :  $M_1 = W \times g \times K_H \times H_g$

自重によるモーメント (X軸側) :  $M_2 = W \times g \times L_g$

自重によるモーメント (Z軸側) :  $M_3 = W \times g \times W_g$

表-2に転倒評価の結果を示す。当該機器は地震力に対して転倒せず、必要な耐震性を有していることを確認した。

表-2 隔離弁ユニット 転倒評価結果  
(耐震Cクラス相当の静的震度)

設備名称	地震による モーメント $M_1$ [N・m]	自重による モーメント (X軸側) $M_2$ [N・m]	自重による モーメント (Z軸側) $M_3$ [N・m]	評価
隔離弁ユニットB	47.67	1001.52	472.61	転倒しない

(3) 環境条件対策

a. 内部の劣化

隔離弁ユニットの封入流体は高純度窒素 (99%以上) の為、酸化による劣化は発生せず、封入流体による内部の劣化はない。

b. 紫外線対策

隔離弁ユニットは鋼材を使用するため、紫外線による影響は考えられない。

### 3.2 ホース

#### (1) 構造強度

ホースは設計・建設規格に記載がない材料であるが、一般高圧ガス保安規則に基づき最高使用圧力の1.25倍以上にて耐圧試験を実施して有意な変形が無いこと、及び最高使用圧力以上にて漏えいがないことを確認することにより、必要な構造強度を有していると評価する。

#### (2) 耐震性

ホースは、フレキシビリティを有しており、地震変位による有意な応力は発生しない。

#### (3) 環境条件対策

##### a. 内部の劣化

ホースの封入流体は高純度窒素（99%以上）の為、酸化による劣化は発生せず、封入流体による内部からの劣化はない。

##### b. 紫外線対策

ホースは紫外線防止効果のある保護カバー内に設置することにより紫外線劣化を防止する。

##### c. 人的損傷及び外的要因による損傷への対策

ホースは硬質ポリエチレン製の保護カバー内に設置することにより人的損傷及び外的要因による損傷を防止する。

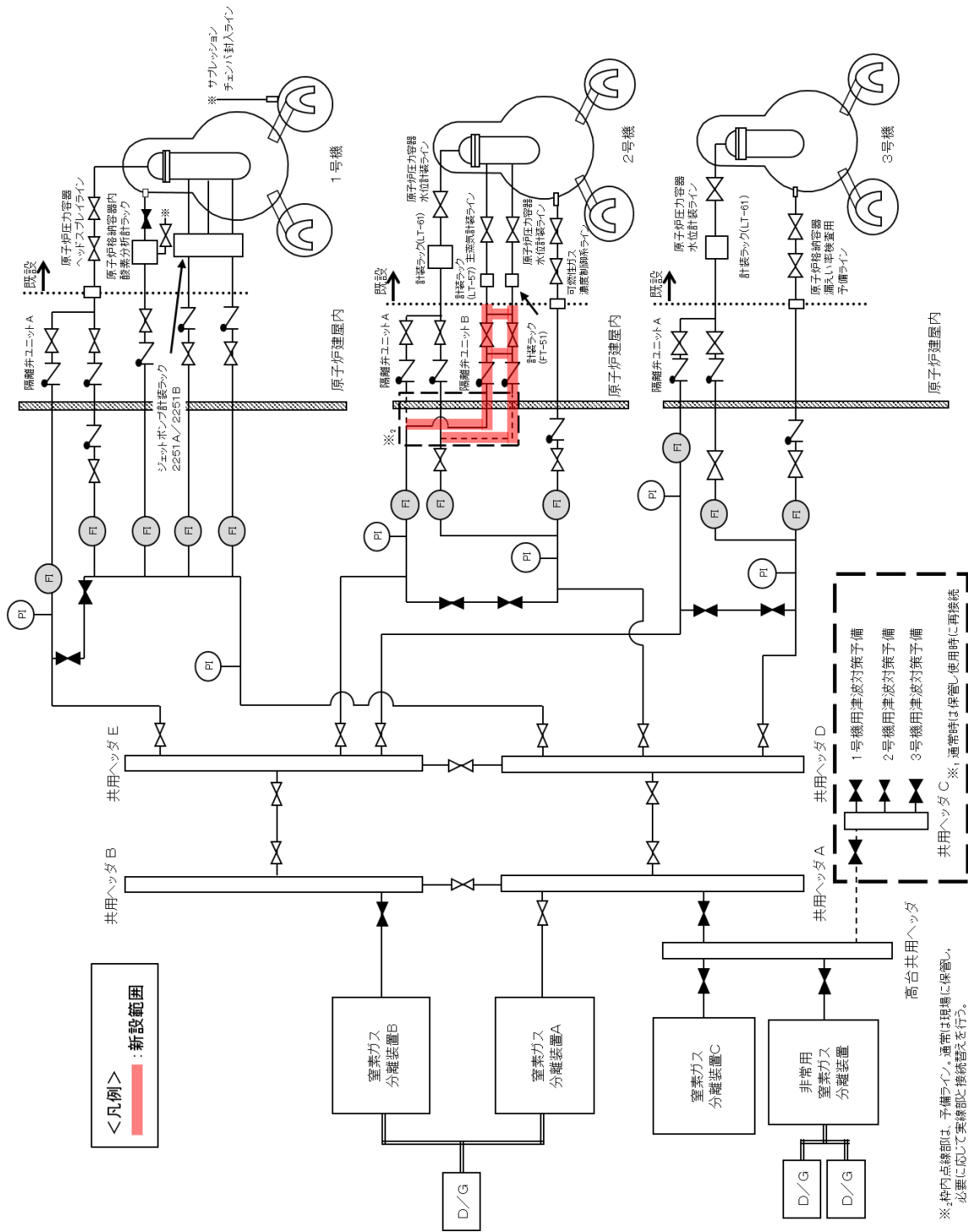
### 4. 本工事における考慮事項

#### (1) 被ばく低減対策

事前に作業環境に応じた合理的な作業計画を立て、放射線業務従事者の被ばく線量をできる限り低減する。特に、原子炉建屋内での作業については、設置する物品は建屋外にて組立や作業工程の細分化を実施し、搬入や設置時間を短縮することで被ばく低減を図る。

#### (2) 瓦礫類発生量

- a. 2号機原子炉圧力容器封入ライン追設に伴い、約3m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生見込みである。
- b. 瓦礫類は、撤去・廃棄時に表面線量率を測定し、1mSv/h以下の表面線量率のものについては、所定の瓦礫類一時保管エリアへ搬入する。なお、表面線量率が1mSv/hを超えた瓦礫類については、固体廃棄物貯蔵庫第8、9棟に保管するものとする。



図一 1 新設範囲図

## 2.5 汚染水処理設備等

### 2.5.1 基本設計

#### 2.5.1.1 設置の目的

タービン建屋等には，東北地方太平洋沖地震による津波，炉心冷却水の流入，雨水の浸入，地下水の浸透等により海水成分を含んだ高レベルの放射性汚染水が滞留している（以下，「滞留水」という）。

このため，汚染水処理設備等では，滞留水を安全な箇所に移送すること，滞留水に含まれる主要な放射性物質を除去し環境中に移行し難い性状とすること，除去した放射性物質を一時的に貯蔵すること，滞留水の発生量を抑制するため塩分を除去し原子炉への注水に再利用する循環冷却を構築することを目的とする。

#### 2.5.1.2 要求される機能

- (1) 発生する高レベル放射性汚染水量（地下水及び雨水の流入による増量分を含む）を上回る処理能力を有すること
- (2) 高レベル放射性汚染水中の放射性物質等の濃度及び量を適切な値に低減する能力を有すること
- (3) 汚染水処理設備が停止した場合に備え，複数系統及び十分な貯留設備を有すること
- (4) 汚染水処理設備等は漏えいを防止できること
- (5) 万一，高レベル放射性汚染水の漏えいがあった場合，高レベル放射性汚染水の散逸を抑制する機能を有すること
- (6) 高レベル放射性汚染水を処理する過程で発生する気体状の放射性物質及び可燃性ガスの検出，管理及び処理が適切に行える機能を有すること

#### 2.5.1.3 設計方針

##### 2.5.1.3.1 汚染水処理設備，貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管，移送ポンプ等）の設計方針

- (1) 処理能力
  - a. 汚染水処理設備及び関連設備（移送配管，移送ポンプ等）は，原子炉への注水，雨水の浸入，地下水の浸透等により1号～4号機のタービン建屋等に発生する滞留水に対して十分対処できる処理容量とする。
  - b. 汚染水処理設備の除染能力及び塩素除去能力は，処理済水の発電所内再使用を可能とするのに十分な性能を有するものとする。
- (2) 汚染水処理設備等の長期停止に対する考慮
  - a. 主要核種の除去を行う処理装置（セシウム吸着装置，第二セシウム吸着装置，第三セシウム吸着装置及び除染装置）は，単独もしくは組み合わせでの運転が可能な設計と

する。また、セシウム吸着装置及び除染装置と第二セシウム吸着装置は、それぞれ異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とし、第三セシウム吸着装置は、二つの異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とする。

- b. 汚染水処理設備及び関連設備（移送ポンプ等）の動的機器は、その故障により滞留水の移送・処理が長期間停止することがないように原則として多重化する。
- c. 汚染水処理設備が長期間停止した場合を想定し、滞留水がタービン建屋等から系外に漏れ出ないように、タービン建屋等の水位を管理するとともに、貯留用のタンクを設ける。
- d. 汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備（移送ポンプ等）は、所内高圧母線から受電できる設計とする。
- e. 汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備（移送ポンプ等）は、外部電源喪失の場合においても、非常用所内電源から必要に応じて受電できる設計とする。

### (3) 規格・基準等

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）の機器等は、設計、材料の選定、製作及び検査について、原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

### (4) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）は、液体状の放射性物質の漏えいの防止及び所外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器等を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えいの早期検出を可能にするとともに、漏えいを停止するのに適切な措置をとれるようにする。また、汚染水処理設備、貯留設備においては漏えい水の拡大を抑制するための堰等を設ける。
- c. タンク水位、漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室（シールド中操）に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。なお、シールド中央制御室（シールド中操）の機能移転後に設置する設備のタンク水位、漏えい検知等の警報は、免震重要棟集中監視室に発報・表示し、同様の措置を実施する。

### (5) 放射線遮へいに対する考慮

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）は、放射線業務従事者等の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

(6) 崩壊熱除去に対する考慮

汚染水処理設備は、放射性物質の崩壊熱による温度上昇を考慮し、必要に応じて崩壊熱を除去できる設計とする。

(7) 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

汚染水処理設備は、水の放射線分解により発生する可燃性ガスを適切に排出できる設計とする。

(8) 気体廃棄物の放出に対する考慮

汚染水処理設備は、放出する可燃性ガス等の気体に放射性物質が含まれる可能性がある場合には、排気設備にフィルタ等を設け捕獲する設計とする。

(9) 健全性に対する考慮

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備は、機器の重要度に応じた有効な保全ができるものとする。

2.5.1.3.2 使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設の設計方針

(1) 貯蔵能力

使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設は、汚染水処理設備、多核種除去設備、高性能多核種除去設備、モバイル式処理装置、増設多核種除去設備、サブドレン他浄化装置、高性能多核種除去設備検証試験装置、モバイル型ストロンチウム除去装置、RO濃縮水処理設備、第二モバイル型ストロンチウム除去装置、放水路浄化装置、5・6号機仮設設備（滞留水貯留設備）浄化ユニットで発生する放射性廃棄物を貯蔵できる容量とする。また、必要に応じて増設する。

(2) 多重性等

廃スラッジ貯蔵施設の動的機器は、故障により設備が長期間停止することがないように、原則として多重化する。

(3) 規格・基準等

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設の機器等は、設計、材料の選定、製作及び検査について、原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

(4) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

廃スラッジ貯蔵施設の機器等は、液体状の放射性物質の漏えいの防止及び所外への管理

されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器等を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えいの早期検出を可能にするとともに、漏えい液体の除去・回収を行えるようにする。
- c. タンク水位、漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室（シールド中操）に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

なお、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置、高性能多核種除去設備、モバイル式処理装置、サブドレン他浄化装置、高性能多核種除去設備検証試験装置、RO濃縮水処理設備、第二モバイル型ストロンチウム除去装置、放水路浄化装置の使用済みの吸着塔、モバイル型ストロンチウム除去装置の使用済みのフィルタ及び吸着塔、多核種除去設備及び増設多核種除去設備の使用済みの吸着材を収容した高性能容器及び多核種除去設備にて発生する処理カラム、5・6号機仮設設備（滞留水貯留設備）浄化ユニットの使用済セシウム／ストロンチウム同時吸着塔は、内部の水を抜いた状態で貯蔵するため、漏えいの可能性はない。

#### (5) 放射線遮へいに対する考慮

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設は、放射線業務従事者の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

#### (6) 崩壊熱除去に対する考慮

- a. 吸着塔、フィルタ、高性能容器及び処理カラムは、崩壊熱を大気に逃す設計とする。
- b. 廃スラッジ貯蔵施設は、放射性物質の崩壊熱による温度上昇を考慮し、必要に応じて熱を除去できる設計とする。

#### (7) 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

吸着塔、フィルタ、高性能容器、処理カラム及び廃スラッジ貯蔵施設は、水の放射線分解により発生する可燃性ガスの滞留を防止でき、必要に応じて適切に排出できる設計とする。

#### (8) 気体廃棄物の放出に対する考慮

廃スラッジ貯蔵施設は、放出する可燃性ガス等の気体に放射性物質を含む可能性がある場合は、排気設備にフィルタ等を設け捕獲収集する設計とする。また、気体廃棄物の放出を監視するためのモニタ等を設ける。



#### (9) 健全性に対する考慮

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設は、機器の重要度に応じた有効な保全ができるものとする。

#### 2.5.1.4 供用期間中に確認する項目

- (1) 汚染水処理設備は、滞留水の放射性物質の濃度を原子炉注水に再利用可能な濃度まで低減できる能力を有すること。
- (2) 汚染水処理設備は、滞留水の塩化物イオン濃度を原子炉注水に再利用可能な濃度まで低減できる能力を有すること。

#### 2.5.1.5 主要な機器

##### 2.5.1.5.1 汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）

汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）は、滞留水移送装置、油分分離装置、処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置）、淡水化装置（逆浸透膜装置、蒸発濃縮装置）、中低濃度タンク、地下貯水槽等で構成する。

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設及び関連施設（移送配管、移送ポンプ等）は、使用済セシウム吸着塔仮保管施設、使用済セシウム吸着塔一時保管施設、造粒固化体貯槽(D)、廃スラッジ一時保管施設等で構成する。

1号～4号機のタービン建屋等の滞留水は、滞留水移送装置によりプロセス主建屋、雑固体廃棄物減容処理建屋（以下、「高温焼却炉建屋」という。）へ移送した後、プロセス主建屋等の地下階を介して、必要に応じて油分を除去し、処理装置へ移送、またはプロセス主建屋等の地下階を介さずにセシウム吸着装置・第二セシウム吸着装置へ直接移送し、主要核種を除去した後、淡水化装置により塩分を除去する。また、各装置間には処理済水、廃水を保管するための中低濃度タンク、地下貯水槽を設置する。

二次廃棄物となる使用済みの吸着材を収容したセシウム吸着装置吸着塔、第二セシウム吸着装置吸着塔、第三セシウム吸着装置吸着塔、モバイル式処理装置吸着塔、モバイル型ストロンチウム除去装置の使用済フィルタ・吸着塔、第二モバイル型ストロンチウム除去装置、放水路浄化装置吸着塔は使用済セシウム吸着塔仮保管施設、もしくは使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵し、高性能多核種除去設備、高性能多核種除去設備検証試験装置、サブドレン他浄化装置、RO濃縮水処理設備で発生する吸着塔、多核種除去設備、増設多核種除去設備にて発生する二次廃棄物を収容する高性能容器及び多核種除去設備にて発生する処理カラム、5・6号機仮設設備（滞留水貯留設備）浄化ユニットで発生する使用済セシウム／ストロンチウム同時吸着塔は使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵する。なお、セシウム吸着装置吸着塔、第二セシウム吸着装置吸着塔、第三セシウム吸着装置吸着塔、多核種除去設備にて発生する処理カラム、高性能多核種除去設備、サブドレ

ン他浄化装置，RO 濃縮水処理設備で発生する吸着塔は大型廃棄物保管庫にも一時的に貯蔵する。また，二次廃棄物の廃スラッジは造粒固化体貯槽(D)，廃スラッジ一時保管施設で一時的に貯蔵する。

汚染水処理設備，貯留設備及び関連設備の主要な機器は，免震重要棟集中監視室またはシールド中央制御室（シールド中操）から遠隔操作及び運転状況の監視を行う。

#### (1) 滞留水移送装置

滞留水移送装置は，タービン建屋等にある滞留水を汚染水処理設備のあるプロセス主建屋，高温焼却炉建屋へ移送することを目的に，移送ポンプ，移送ライン等で構成する。

移送ポンプは，1号機タービン建屋に6台，1号機原子炉建屋に2台，1号機廃棄物処理建屋に2台，2号機タービン建屋に6台，2号機原子炉建屋に2台，2号機廃棄物処理建屋に6台，3号機のタービン建屋に9台，3号機原子炉建屋に4台，3号機廃棄物処理建屋に6台，4号機タービン建屋に7台，4号機原子炉建屋に6台，4号機廃棄物処理建屋に6台設置し，原子炉への注水，雨水の浸入，地下水の浸透等により1号～4号機のタービン建屋等に発生する滞留水に対して十分対処可能な設備容量を確保する。滞留水の移送は，移送元のタービン建屋等の水位や移送先となるプロセス主建屋，高温焼却炉建屋の水位の状況に応じて，ポンプの起動台数，移送元，移送先を適宜選定して実施する。

移送ラインは，設備故障及び損傷を考慮し複数の移送ラインを準備する。また，使用環境を考慮した材料を選定し，必要に応じて遮へい，保温材等を設置するとともに，屋外敷設箇所は移送ラインの線量当量率等を監視し漏えいの有無を確認する。

#### (2) 油分分離装置

油分分離装置は，油分がセシウム吸着装置の吸着性能を低下させるため，その上流側に設置し，滞留水に含まれる油分を自然浮上分離により除去する。油分分離装置は，プロセス主建屋内に3台設置する。

#### (3) 処理装置（セシウム吸着装置，第二セシウム吸着装置，第三セシウム吸着装置，除染装置）

セシウム吸着装置，第二セシウム吸着装置及び第三セシウム吸着装置は，吸着塔内部に充填された吸着材のイオン交換作用により，滞留水に含まれるセシウム等の核種を除去する。除染装置は，滞留水にセシウム等の核種を吸着する薬品を注入し凝集・沈殿させ，上澄液とスラッジに分離することで，滞留水に含まれるセシウム等の核種を除去する。また，各装置は装置の処理能力を確認するための試料を採取できる設備とする。

処理装置は，複数の装置により多様性を確保するとともに，各装置の組み合わせもしくは単独により運転が可能な系統構成とする。

a. セシウム吸着装置

セシウム吸着装置は、焼却工作建屋内に4系列配置しており、多段の吸着塔により滞留水に含まれる放射性のセシウム、ストロンチウムを除去する。

セシウム吸着装置は、4系列でセシウムを除去するセシウム吸着運転（以下、「Cs吸着運転」という）または4系列を2系列化しセシウム及びストロンチウムを除去するセシウム／ストロンチウム同時吸着運転（以下、「Cs/Sr同時吸着運転」という）を行う。

吸着塔は、二重の円筒形容器で、内側は内部に吸着材を充填したステンレス製の容器、外側は炭素鋼製の遮へい容器からなる構造とする。

使用済みの吸着塔は一月あたり6本程度発生し、使用済セシウム吸着塔仮保管施設にて内部の水抜きを行い、使用済セシウム吸着塔仮保管施設及び使用済セシウム吸着塔一時保管施設あるいは大型廃棄物保管庫にて貯蔵する。

b. 第二セシウム吸着装置

第二セシウム吸着装置は、高温焼却炉建屋内に2系列配置し、各系列で多段の吸着塔によりセシウム、ストロンチウム等の核種を除去する。

第二セシウム吸着装置は、セシウム吸着塔によりセシウムを除去するセシウム吸着運転（以下、「Cs吸着運転」という）、または同時吸着塔によりセシウム及びストロンチウムを除去するセシウム／ストロンチウム同時吸着運転（以下、「Cs/Sr同時吸着運転」という）を行う。

吸着塔は、ステンレス製の容器にゼオライト等の吸着材を充填し、周囲は鉛等で遮へいする構造とする。

使用済みの吸着塔は、Cs吸着運転においては一月あたり4本程度発生し、Cs/Sr同時吸着運転においては一月あたり4本程度発生する。

使用済み吸着塔は、本装置において内部の水抜きを行い、使用済セシウム吸着塔仮保管施設及び使用済セシウム吸着塔一時保管施設あるいは大型廃棄物保管庫にて貯蔵する。

c. 第三セシウム吸着装置

第三セシウム吸着装置は、サイトバンカ建屋内に1系列配置し、多段の吸着塔によりセシウム、ストロンチウム等の核種を除去する。

第三セシウム吸着装置は、セシウム及びストロンチウム同時吸着塔によりセシウム及びストロンチウムを除去するCs/Sr同時吸着運転を行う。

吸着塔は、ステンレス製の容器にゼオライト等の吸着材を充填し、周囲は鉛等で遮へいする構造とする。

使用済みの吸着塔は、一カ月あたり1本程度発生する。使用済み吸着塔は、本装置

において内部の水抜きを行い、使用済セシウム吸着塔一時保管施設あるいは大型廃棄物保管庫にて貯蔵する。

#### d. 除染装置

除染装置は、プロセス主建屋に1系列設置し、滞留水に含まれる懸濁物質や浮遊物質を除去する加圧浮上分離装置、薬液注入装置から吸着剤を注入し放射性物質の吸着を促す反応槽、薬液注入装置から凝集剤を注入し放射性物質を凝集・沈殿させ上澄液とスラッジに分離する凝集沈殿装置、懸濁物質の流出を防止するディスクフィルター、吸着材を注入する薬品注入装置で構成する。反応槽及び凝集沈殿装置は、1組の装置を2段設置することにより放射能除去性能を高める設計とするが、1段のみでも運転可能な設計とする。スラッジは造粒固化体貯槽(D)に排出する。

#### (4) 淡水化装置（逆浸透膜装置、蒸発濃縮装置）

淡水化装置は、滞留水を原子炉注水に再使用するため、滞留水に含まれる塩分を除去することを目的に、逆浸透膜装置、蒸発濃縮装置で構成する。

逆浸透膜装置は、4号機タービン建屋2階及び蛇腹ハウス内に設置する3系列3台で構成し、水を通しイオンや塩類などの不純物は透過しない逆浸透膜の性質を利用して滞留水に含まれる塩分を除去し、処理済水と塩分が濃縮された廃水に分離する。運転系列は、耐震性を向上させた4号機タービン建屋2階に設置する逆浸透膜装置（以下、「建屋内RO」という。）を原則として使用する。また、蛇腹ハウス内に設置している逆浸透膜装置は、逆浸透膜を通さずに滞留水を濃縮廃水側へ送水する機能も有する。蒸発濃縮装置は3系列8台で構成し、逆浸透膜装置により塩分が濃縮された廃水を蒸気により蒸発濃縮（蒸留）する設備であるが、平成28年1月現在運用を停止している。また、各装置は装置の処理能力を確認するための試料を採取できる設備とする。

なお、建屋内RO及びこれに付帯する機器を建屋内RO循環設備という。

淡水化装置は、複数の装置及び系統により多重性及び多様性を確保する。

#### (5) 廃止（高濃度滞留水受タンク）

#### (6) 中低濃度タンク

中低濃度タンクは、処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置）により主要核種が除去された水等を貯留する目的で主に屋外に設置する。

中低濃度タンクは、貯留する水の性状により分類し、処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置）により主要核種を除去された水等を貯留するサブプレッション・プール水サージタンク及び廃液RO供給タンク、逆浸透膜装置

の廃水を貯留するRO後濃縮塩水受タンク※<sup>1</sup>、蒸発濃縮装置の廃水を貯留する濃縮廃液貯槽、逆浸透膜装置の処理済水を貯留するRO後淡水受タンク※<sup>2</sup>、多核種除去設備、増設多核種除去設備及び高性能多核種除去設備の処理済水を貯留する多核種処理水タンク※<sup>3</sup>及びRO濃縮水処理設備の処理済水、サブドレン他水処理施設で汲み上げた地下水を貯留するSr処理水タンク※<sup>4</sup>で構成する。

サプレッション・プール水サージタンクは、液体廃棄物処理系の設備として既に設置されていた設備を使用し、工事計画認可申請書（57資庁第2974号 昭和57年4月20日認可）において確認を実施している。RO後淡水受タンクの貯留水は、処理済水として原子炉への注水に再利用する。

なお、各タンクは定期的に必要量を確認し※<sup>5</sup>、必要に応じて増設する。

※<sup>1</sup>：RO濃縮水貯槽，地下貯水槽（RO後濃縮塩水用分）にて構成。

※<sup>2</sup>：RO処理水貯槽，蒸発濃縮処理水貯槽にて構成。

※<sup>3</sup>：多核種処理水貯槽で構成。

※<sup>4</sup>：Sr処理水貯槽で構成。

※<sup>5</sup>：「福島第一原子力発電所における高濃度の放射性物質を含むたまり水の貯蔵及び処理の状況について」にて確認を実施。

#### (7) 地下貯水槽

地下貯水槽は、発電所構内の敷地を有効活用する観点で地面を掘削して地中に設置する。また、止水のための3重シート（2重の遮水シート及びベントナイトシート）、その内部に地面からの荷重を受けるためのプラスチック製枠材を配置した構造とする。

地下貯水槽には、逆浸透膜装置の廃水等を貯留する。

なお、地下貯水槽からの漏えいが認められたことから、別のタンクへの貯留水の移送が完了次第、使用しないこととする。

#### (8) ろ過水タンク

ろ過水タンクは、既に屋外に設置されていたもので、放射性物質を含まない水を貯留するタンクであるが、地下貯水槽に貯留した逆浸透膜装置の廃水の貯留用として一時的に使用する。ろ過水タンクは、放射性流体を貯留するための設備ではないため、逆浸透膜装置の廃水を貯留する場合の適合性評価を行う。また、ろ過水タンク周囲に設置した線量計で雰囲気線量を確認する等により漏えいの有無を確認する。なお、貯留期間は貯留開始後1年以内を目途とし、ろ過水タンクに貯留した逆浸透膜装置の廃水を別のタンクに移送する。

#### (9) 電源設備

電源は、所内高圧母線から受電でき、非常用所内電源とも接続できる構成とする。セシウム吸着装置及び除染装置と第二セシウム吸着装置は、それぞれ異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とし、第三セシウム吸着装置は、二つの異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とすることにより、所内高圧母線の点検等による電源停止においても、何れかの

処理装置により、滞留水の処理が可能な設計とする。また、汚染水処理設備等は、外部電源喪失の場合は、タービン建屋等の水位の状況や汚染水処理設備以外の設備負荷を考慮しながら復旧する。

#### (10) 廃止（モバイル式処理設備）

#### (11) 滞留水浄化設備

1～4号機の建屋滞留水の放射性物質濃度を低減する目的で、1～4号機の滞留水を浄化する設備（以下、滞留水浄化設備）を設置する。滞留水浄化設備は、建屋内 RO 循環設備で敷設した配管から各建屋へ分岐する配管で構成する。

#### 2.5.1.5.2 使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設

使用済セシウム吸着塔保管施設は、使用済セシウム吸着塔仮保管施設、使用済セシウム吸着塔一時保管施設で構成する。廃スラッジ貯蔵施設は造粒固化体貯槽(D)、廃スラッジ一時保管施設で構成する。

廃スラッジ貯蔵施設の主要な機器は、免震重要棟集中監視室またはシールド中央制御室（シールド中操）から遠隔操作及び運転状況の監視を行う。

#### (1) 使用済セシウム吸着塔保管施設

##### a. 使用済セシウム吸着塔仮保管施設

使用済セシウム吸着塔仮保管施設は、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、モバイル式処理装置、第二モバイル型ストロンチウム除去装置及び放水路浄化装置で発生する吸着塔並びにモバイル型ストロンチウム除去装置で発生するフィルタ及び吸着塔を使用済セシウム吸着塔一時保管施設へ移送するまでの間貯蔵するために設けた施設であり、吸着塔を取り扱うための門型クレーン、セシウム吸着装置吸着塔等のろ過水による洗浄・水抜きを実施する装置、遮へい機能を有するコンクリート製ボックスカルバート等にて構成する。

##### b. 使用済セシウム吸着塔一時保管施設

使用済セシウム吸着塔一時保管施設は、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置、モバイル式処理装置、高性能多核種除去設備、サブドレン他浄化装置、高性能多核種除去設備検証試験装置、RO濃縮水処理設備及び第二モバイル型ストロンチウム除去装置、放水路浄化装置で発生する吸着塔、モバイル型ストロンチウム除去装置で発生するフィルタ及び吸着塔、多核種除去設備、増設多核種除去設備にて発生する二次廃棄物を収容する高性能容器及び多核種除去設備にて発生する処理カラム、5・6号機仮設設備（滞留水貯留設備）浄化ユニットで発生する使用済

セシウム／ストロンチウム同時吸着塔の処理施設等が設置されるまでの間一時的に貯蔵を行う施設であり、吸着塔、フィルタ、高性能容器及び処理カラムを取り扱うための門型クレーン、遮へい機能を有するコンクリート製ボックスカルバート等により構成する。

なお、使用済セシウム吸着塔一時保管施設は必要に応じて増設する。

## (2) 廃スラッジ貯蔵施設

### a. 造粒固化体貯槽(D)

造粒固化体貯槽(D)は、除染装置の凝集沈殿装置で発生したスラッジを廃スラッジ一時保管施設へ移送するまでの間、貯蔵する設備であり、固体廃棄物処理系の設備として既にプロセス主建屋に設置していた設備を改造して使用する。なお、造粒固化体貯槽(D)はプロセス主建屋と一体構造であるため、「2.6 滞留水を貯留している(滞留している場合を含む)建屋」において確認している。

### b. 廃スラッジ一時保管施設

廃スラッジ一時保管施設は、廃スラッジを処理施設等へ移送するまでの間一時貯蔵する設備として設置する。廃スラッジ一時保管施設は、スラッジ貯槽、セル及びオフガス処理系等を収容するスラッジ棟、圧縮空気系の機器等を収容する設備棟で構成する。

廃スラッジ一時保管施設の動的機器は、故障により設備が長期間停止することがないよう、原則として多重化する。

また、廃スラッジ一時保管施設の電源は、所内高圧母線から受電でき、非常用所内電源とも接続できる構成とする。また、外部電源喪失の場合は、タービン建屋等の水位の状況や汚染水処理設備以外の設備負荷を考慮しながら復旧する。

## 2.5.1.6 自然災害対策等

### (1) 津波

滞留水移送装置、処理装置等一部の設備を除き、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 28m 以上の場所に設置する。

滞留水移送装置、処理装置等、東北地方太平洋沖地震津波が到達したエリアに設置する設備については、アウターライズ津波による浸水を防止するため仮設防潮堤内に設置する。また、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は滞留水移送装置、処理装置を停止し、処理装置については隔離弁を閉めることにより滞留水の流出を防止する。

## (2) 台風（強風）

汚染水処理設備等のうち、処理装置及び建屋内 RO は台風（強風）による設備損傷の可能性が低い鉄筋コンクリート造の建屋内に設置する。淡水化装置（建屋内 RO 除く）は、蛇腹ハウスやテントハウス内に設置しているため、台風（強風）によりハウスの一部が破損する可能性はあるが、ハウス破損に伴い、淡水化装置に損傷を与える可能性がある場合は、淡水化装置の停止等の操作を行い、装置損傷による汚染水の漏えい防止を図る。

## (3) 火災

初期消火の対応ができるよう、近傍に消火器を設置する。

### 2.5.1.7 構造強度及び耐震性

#### 2.5.1.7.1 汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）

##### (1) 構造強度

##### a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手した機器等

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備を構成する機器は、「発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。クラス 3 機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）で規定される。

しかしながら、震災以降緊急対応的にこれまで設置してきた機器等は、必ずしも JSME 規格に従って設計・製作・検査をされたものではなく、日本産業規格（JIS）や日本水道協会規格等の国内外の民間規格、製品の試験データ等を踏まえ、福島第一原子力発電所構内の作業環境、機器等の設置環境や時間的裕度を勘案した中で設計・製作・検査を行ってきている。

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備を構成する機器は、高濃度の汚染水を内包するため、バウンダリ機能の健全性を確認する観点から、設計された肉厚が十分であることを確認している。また、溶接部については、耐圧・漏えい試験等を行い、有意な変形や漏えい等のないことを確認している。

機器等の経年劣化に対しては、適切な保全を実施することで健全性を維持していく。

##### b. 今後（平成 25 年 8 月 14 日以降）設計する機器等

汚染水処理設備、貯留設備及び関連設備を構成する機器は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。クラス 3 機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」等（以下、「JSME 規格」という。）で規定される。

汚染水処理設備等は、地下水等の流入により増加する汚染水の対応が必要であり、短期間での機器の設置が求められる。また、汚染水漏えい等のトラブルにより緊急的な対応が必要



となることもある。

従って、今後設計する機器等については、JSME 規格に限定するものではなく、日本産業規格 (JIS) 等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、或いは American Society of Mechanical Engineers (ASME 規格)、日本産業規格 (JIS)、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。溶接 (溶接施工法および溶接士) は JSME 規格、American Society of Mechanical Engineers (ASME 規格)、日本産業規格 (JIS)、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、または同等の溶接とする。また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格 (JIS) 年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

さらに、今後も JSME 規格に記載のない非金属材料 (耐圧ホース、ポリエチレン管等) については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器等については、日本産業規格 (JIS) や日本水道協会規格、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

## (2) 耐震性

汚染水処理設備等を構成する機器は、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響 (公衆への被ばく影響) や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にし、適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とする。要求される地震力に対して耐震性を確保できない場合は、その影響について評価を行う。支持部材がない等の理由によって、耐震性に関する評価ができない設備を設置する場合においては、可撓性を有する材料を使用するなどし、耐震性を確保する。

なお、検討用地震動および同津波に対する評価が必要な設備として抽出された機器等については、今後対策を講じる。

また、各機器は必要な耐震性を確保するために、原則として以下の方針に基づき設計する。

- ・ 倒れ難い構造 (機器等の重心を低くする、基礎幅や支柱幅を大きくとる)
- ・ 動き難い構造、外れ難い構造 (機器をアンカ、溶接等で固定する)
- ・ 座屈が起こり難い構造
- ・ 変位による破壊を防止する構造 (定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定、配管等に可撓性のある材料を使用)

### 2.5.1.7.2 使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設

#### (1) 構造強度

a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に (平成 25 年 8 月 14 日より前に) 設計に着手した機器等

使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設を構成する機器は、震災以降緊急対応的に設置してきたもので、「発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令」にお

いて、廃棄物処理設備に相当するクラス3機器に準ずるものと位置付けられる。クラス3機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME規格」という。）で規定される。

しかしながら震災以降緊急対応的にこれまで設置してきた機器等は、必ずしもJSME規格に従って設計・製作・検査をされたものではなく、日本産業規格（JIS）等規格適合品または製品の試験データ等を踏まえ、福島第一原子力発電所構内の作業環境、機器等の設置環境や緊急時対応の時間的裕度を勘案した中で設計・製作・検査を行ってきた。

廃スラッジ貯蔵施設を構成する機器は、高濃度の汚染水を内包するため、バウンダリ機能の健全性を確認する観点から、設計された肉厚が十分であることを確認している。また、溶接部については、耐圧・漏えい試験等を行い、有意な変形や漏えい等のないことを確認している。

なお、使用済セシウム吸着塔保管施設を構成するコンクリート製ボックスカルバートは遮へい物として吸着塔等の周囲に配置するものであり、JSME規格で定める機器には該当しない。

#### b. 今後（平成25年8月14日以降）設計する機器等

使用済セシウム吸着塔一時保管施設は必要に応じて増設することとしており、地下水等の流入により増加する汚染水の処理に伴う二次廃棄物への対応上、短期間での施設の設置が必要である。このため今後設計する機器等については、日本産業規格（JIS）等規格に適合した工業用品の採用、或いはJIS等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

#### (2) 耐震性

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設を構成する機器は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置づけられる。

使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設の耐震性に関する評価にあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」に準拠することを基本とするが、必要に応じて現実的な評価を行う。また、配管に関しては、変位による破壊を防止するため、定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定や、可撓性のある材料を使用する。

なお、検討用地震動および同津波に対する評価が必要な設備として抽出された機器等については、今後対策を講じる。

#### 2.5.1.8 機器の故障への対応

##### 2.5.1.8.1 汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連施設（移送配管、移送ポンプ等）

#### (1) 機器の単一故障

##### a. 動的機器の単一故障

汚染水処理設備は、機器の単一故障により滞留水の処理機能が喪失するのを防止するため動的機器や外部電源を多重化しているが、汚染水処理設備の動的機器が故障した場合は、待機設備へ切替を行い、滞留水の処理を再開する。

(2) 主要機器の複数同時故障

a. 処理装置の除染能力が目標性能以下

汚染水処理設備は、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置による処理装置全体で多重化が確立されており、各装置の組み合わせもしくは単独による運転が可能である。そのため、一つの処理装置が故障しても性能回復は短時間でできるが、万一、所定の除染能力が得られず下流側の逆浸透膜装置の受け入れ条件（ $10^3\text{Bq}/\text{cm}^3$  オーダ）を満足しない場合は、以下の対応を行う。

逆浸透膜装置後淡水受タンクでの希釈効果等を踏まえながら、必要に応じて処理装置出口の処理済水を再度セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置に水を戻す「再循環処理」を実施する（手動操作）。なお、再循環処理を実施する場合、稼働率が 50%以下となるため、タービン建屋等からの滞留水の移送量を調整し、プロセス主建屋、高温焼却炉建屋の水位上昇を監視する。

b. 滞留水の処理機能喪失

汚染水処理設備は、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置のそれぞれで単独運転が可能である。

また、セシウム吸着装置及び除染装置と第二セシウム吸着装置は、それぞれ異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とし、第三セシウム吸着装置は、二つの異なる系統の所内高圧母線から受電する構成としている。

さらに、セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置は、建屋により分離して設置している。以上のことから、共通要因によりすべての処理装置が機能喪失する可能性は十分低いと想定するが、全装置が長期間停止する場合は、以下の対応を行う。

- (a) 処理装置が長期間停止する場合、炉注水量を調整し、滞留水の発生量を抑制する。
- (b) セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置または第三セシウム吸着装置の吸着塔の予備品を用意し、短期間（1 ヶ月程度）で新たな処理が可能ないように準備する。
- (c) タービン建屋等の水位が所外放出レベル近くに達した場合、滞留水をタービン建屋の復水器に移送することで、放射性物質の所外放出を防止する。
- (d) 滞留水の系外への漏えいを防止するために、集中廃棄物処理建屋のサイトбанка建屋、焼却工作室建屋等への移送準備を行い、滞留水受け入れ容量を確保する。

### (3) その他の事象

#### a. 降水量が多い場合の対応

降水量が多い場合には、滞留水の移送量、処理量を増加させる等の措置をとる。また、大量の降雨が予想される場合には、事前に滞留水をプロセス主建屋等へ移送し、タービン建屋等の水位を低下させる措置をとる。

さらに、タービン建屋の水位が上昇すれば、炉注水量の低下措置等の対応を図る。

### (4) 異常時の評価

#### a. 滞留水の処理機能喪失時の評価

処理装置が長期に機能喪失した場合でも、タービン建屋等の水位は T.P. 1, 200mm 程度で管理しているため所外放出レベルの T.P. 2, 564mm に達するまでの貯留容量として約 30,000m<sup>3</sup> を確保している。さらにタービン建屋の復水器等へ滞留水を移送することにより、これまでの運転実績から、原子炉への注水量を約 400m<sup>3</sup>/日、地下水の浸透、雨水の浸入により追加発生する滞留水量を約 400m<sup>3</sup>/日と想定した場合においても、1ヶ月分（約 24,000m<sup>3</sup>）以上の貯留が可能である。

本資料に記載の標高は、震災後の地盤沈下量（-709mm）と O.P. から T.P. への読替値（-727mm）を用いて、下式に基づき換算している。

<換算式> T.P. = 旧 O.P. -1, 436mm

#### b. 降水量が多い場合の評価

月降水量の最大値は、気象庁の観測データにおいて福島県浪江町で 634mm（2006 年 10 月）、富岡町で 615mm（1998 年 8 月）である。また、タービン建屋等の水位は、降水量に対し 85%の水位上昇を示したことがあるため 1ヶ月あたりタービン建屋の水位を 540mm（634mm×0.85%）上昇させる可能性がある。

その他、建屋水位を上昇させるものとして、①地下水流入と②原子炉への注水があり、各々約 400m<sup>3</sup>/日が想定される。1号～4号機の滞留水が存在している建屋面積の合計は約 23,000m<sup>2</sup> となるため、降雨、地下水流入、及び原子炉への注水により 1ヶ月に発生する滞留水量の合計は 36,420m<sup>3</sup> となる。そのため、各建屋の水位を維持するためには、約 1,220m<sup>3</sup>/日の滞留水移送・処理が必要となる。一方、移送装置は移送ポンプが 1台あたり 20m<sup>3</sup>/h の運転実績があるため 1,920m<sup>3</sup>/日の滞留水移送が可能であり、処理装置も実績として 1,680m<sup>3</sup>/日で処理を実施したことがある。

したがって、月降水量 1,000mm 以上の場合でも、現状の移送装置、処理装置の能力でタービン建屋等の水位を維持することが可能である。

## 2.5.1.8.2 使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設

### (1) 機器の単一故障

#### a. 動的機器の単一故障

廃スラッジ一時保管施設は、機器の単一故障により安全機能が喪失するのを防止するため、動的機器を多重化しているが、動的機器が故障した場合は、待機設備へ切替を行い、安全機能を回復する。

#### b. 外部電源喪失時

使用済セシウム吸着塔仮保管施設、使用済セシウム吸着塔一時保管施設は、使用済みのセシウム吸着塔等を静的に保管する施設であり、外部電源喪失した場合でも、安全機能に影響を及ぼすことはない。

造粒固化体貯槽(D)は排気用の仮設電源を設けており、外部電源喪失により貯槽内気相部の排気が不可能となった場合は、必要に応じ電源切替を操作することで可燃性ガスを放出する。

廃スラッジ一時保管施設は、外部電源喪失により貯槽内気相部の排気が不可能となるが、以下を考慮しており、短時間のうちに安全機能の回復が可能である。

- ・ 電源車の接続口を設置
- ・ 仮設送風機（エンジン付きコンプレッサ）の接続が可能なように取合口を設置
- ・ 窒素ポンベによる掃気が可能なようにポンベを設置
- ・ 手動弁を操作することで、可燃性ガスを放出（ベント）できるラインを設置

## 2.5.2 基本仕様

### 2.5.2.1 主要仕様

#### 2.5.2.1.1 汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管，移送ポンプ等）

##### (1) 1号機タービン建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m
(追設)台数	4
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

##### (2) 2号機タービン建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m
(追設)台数	2
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

##### (3) 3号機タービン建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	3
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m
(追設)台数	2
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

##### (4) 4号機タービン建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	3
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m
(追設)台数	2
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

(5) サイトバンカ排水ポンプ (完成品)

台数	1
容量	12 m <sup>3</sup> /h
揚程	30 m

(6) プロセス主建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2 (高濃度滞留水受タンク移送ポンプと共用)
容量	50 m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	38.5~63m

(7) 高温焼却炉建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	50m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	38.5m

(8) 油分分離装置処理水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	50m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	65m

(9) 第二セシウム吸着装置ブースターポンプ (完成品)

台数	2
容量	50m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	108m

(10) セシウム吸着処理水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	50m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	41m

(11) S P T 廃液拔出ポンプ (完成品)

台数	2
容量	50m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	30m

(12) S P T 受入水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	75m

(13) 廃液R O供給ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	70m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	30m

(14) R O処理水供給ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	75m

(15) R O処理水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	75m

(16) R O濃縮水供給ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	75m

(17) R O濃縮水移送ポンプ (完成品)

台 数	12
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	50~75m

(18) 濃縮水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	40m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	50m



(19) 高濃度滞留水受タンク移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	30m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	65m

(20) 油分分離装置処理水タンク (完成品) ※1

合計容量 (公称)	37.5 m <sup>3</sup>
基 数	3 基
容量 (単基)	12.5 m <sup>3</sup> /基

(21) セシウム吸着処理水タンク (完成品) ※1

合計容量 (公称)	37.5 m <sup>3</sup>
基 数	3 基
容量 (単基)	12.5 m <sup>3</sup> /基

(22) サプレッションプール水サージタンク (既設品)

基 数	2 基
容 量	3,500 m <sup>3</sup> /基

(23) S P T 受入水タンク (完成品) ※1

基 数	1 基
容 量	85 m <sup>3</sup>

(24) 廃液R O供給タンク (完成品) ※1

合計容量 (公称)	1,200m <sup>3</sup>
基 数	34 基
容量 (単基)	35~110 m <sup>3</sup> /基

(25) R O処理水受タンク (完成品) ※1

基 数	1 基
容 量	85 m <sup>3</sup>

※1 公称容量であり、運用上の容量は公称容量とは異なる。

(26) RO処理水貯槽 ※<sup>1</sup>

合計容量 (公称)	7,000m <sup>3</sup>
基数	7基
容量 (単基)	1,000 m <sup>3</sup> 以上/基 <sup>※2</sup>
材 料	SS400
板厚 (側板)	15mm

(27) RO濃縮水受タンク (完成品) ※<sup>1</sup>

基数	1基
容 量	85 m <sup>3</sup>

(28) RO濃縮水貯槽 ※<sup>1</sup>

合計容量 (公称)	187,000 m <sup>3</sup> (必要に応じて増設)
基数	190基 (必要に応じて増設)
容量 (単基)	700 m <sup>3</sup> 以上, 1,000 m <sup>3</sup> 以上/基 <sup>※2</sup>
材 料	SS400
板厚 (側板)	16mm (700m <sup>3</sup> ), 12mm (1,000m <sup>3</sup> ), 15mm (1,000m <sup>3</sup> )

(29) 蒸発濃縮処理水貯槽 ※<sup>1</sup>

合計容量 (公称)	5,000m <sup>3</sup>
基数	5基
容量 (単基)	1,000m <sup>3</sup> 以上/基 <sup>※2</sup>
材 料	SS400
板厚 (側板)	15mm

(30) 濃縮水タンク (完成品) ※<sup>1</sup>

合計容量 (公称)	150m <sup>3</sup>
基数	5基
容量 (単基)	40m <sup>3</sup> /基

(31) 濃縮廃液貯槽 (完成品) ※<sup>1</sup>

合計容量 (公称)	300m <sup>3</sup>
基数	3基
容量 (単基)	100m <sup>3</sup> /基

※<sup>1</sup> 公称容量であり、運用上の容量は公称容量とは異なる。

※<sup>2</sup> 運用上の容量は、水位計 100%までの容量とする。

(32) 多核種処理水貯槽 ※1,3,4

合計容量 (公称)	1,153,489 m <sup>3</sup> (必要に応じて増設)
基 数	820 基 (必要に応じて増設)
容量 (単基)	700m <sup>3</sup> , 1,000m <sup>3</sup> , 1,060m <sup>3</sup> , 1,140m <sup>3</sup> , 1,160m <sup>3</sup> , 1,200m <sup>3</sup> , 1,220 m <sup>3</sup> , 1,235m <sup>3</sup> , 1,330m <sup>3</sup> , 1,356m <sup>3</sup> , 2,400m <sup>3</sup> , 2,900m <sup>3</sup> /基※2
材 料	SS400, SM400A, SM400B, SM400C, SM490A, SM490C
板厚 (側板)	12mm (700m <sup>3</sup> , 1,000m <sup>3</sup> , 1,160m <sup>3</sup> , 1,200m <sup>3</sup> , 1,220m <sup>3</sup> , 1,235m <sup>3</sup> , 1,330m <sup>3</sup> , 1,356m <sup>3</sup> ), 18.8mm (2,400m <sup>3</sup> ), 15mm (1,000 m <sup>3</sup> , 1,060m <sup>3</sup> , 1,140m <sup>3</sup> , 1,330m <sup>3</sup> , 2,900m <sup>3</sup> ), 16mm (700m <sup>3</sup> )

(33) 地下貯水槽 ※1

合計容量 (公称)	56,000 m <sup>3</sup>
基 数	6 基
容 量	4,000~14,000m <sup>3</sup>
材 料	ポリエチレン, ベントナイト
厚 さ	1.5mm (ポリエチレン), 6.4mm (ベントナイト)

(34) ろ過水タンク (既設品)

基 数	1 基
容 量	8,000 m <sup>3</sup>

(35) 油分分離装置 (完成品)

台 数	3
容 量	1,200 m <sup>3</sup> /日 (1 台で 100%容量)
性 能	出口にて浮遊油 100ppm 以下 (目標値)

※1 公称容量であり、運用上の容量は公称容量とは異なる。

※2 運用上の容量は、水位計 100%までの容量とする。

※3 今後増設するタンク (J 6,K 1 北,K 2,K 1 南,H 1, J 7, J 4 (1,160m<sup>3</sup>), H 1 東, J 8, K 3, J 9, K 4, H 2, H 4 北, H 4 南, G 1 南, H 5, H 6 (I), B, B 南, H 3, H 6 (II), G 6, G 1, G 4 南, G 4 北, G 5 エリア) は、公称容量を運用水位上限とする。

※4 K 4 エリアタンクの一部を「II 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設」の測定・確認用タンクと兼用する。

(36) セシウム吸着装置

系列数	4 系列 (Cs 吸着運転) 2 系列 (Cs/Sr 同時吸着運転)
処理量 (定格)	1,200 m <sup>3</sup> /日 (4 系列 : Cs 吸着運転) 600 m <sup>3</sup> /日 (2 系列 : Cs/Sr 同時吸着運転)
除染係数 (設計目標値)	・ Cs 吸着運転 放射性セシウム : 10 <sup>3</sup> ~10 <sup>5</sup> 程度 ・ Cs/Sr 同時吸着運転 放射性セシウム : 10 <sup>3</sup> ~10 <sup>5</sup> 程度 放射性ストロンチウム : 10~10 <sup>3</sup> 程度

(37) 第二セシウム吸着装置

系列数	2
処理量	1,200 m <sup>3</sup> /日
除染係数 (設計目標値)	10 <sup>4</sup> ~10 <sup>6</sup> 程度

(38) 第三セシウム吸着装置

系列数	1
処理量	600 m <sup>3</sup> /日
除染係数 (設計目標値)	10 <sup>3</sup> ~10 <sup>5</sup> 程度

(39) 第三セシウム吸着装置ブースターポンプ (完成品)

台数	2
容量	25m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚程	110m

(40) 除染装置 (凝集沈殿法)

系列数	1
処理量	1,200 m <sup>3</sup> /日
除染係数 (設計目標値)	10 <sup>3</sup> 程度

(41) 淡水化装置（逆浸透膜装置）（完成品）

(RO-3)	処 理 量	1,200 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 40%
(RO-TA)	処 理 量	800 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 50%
(RO-TB)	処 理 量	800 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 50%

(42) 淡水化装置（蒸発濃縮装置）（完成品）

(蒸発濃縮-1A)	処 理 量	12.7 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 30%
(蒸発濃縮-1B)	処 理 量	27 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 30%
(蒸発濃縮-1C)	処 理 量	52 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 30%
(蒸発濃縮-2A/2B)	処 理 量	80 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 30%
(蒸発濃縮-3A/3B/3C)	処 理 量	250 m <sup>3</sup> /日
	淡水化率	約 70%

(43) Sr 処理水貯槽<sup>※1, 3</sup>

合計容量（公称）	55,596 m <sup>3</sup>	（必要に応じて増設）
基 数	50 基	（必要に応じて増設）
容量（単基）	1,057m <sup>3</sup> 以上, 1,160m <sup>3</sup> 以上, 1,200m <sup>3</sup> 以上/基 <sup>※2</sup>	
材 料	SS400, SM400A, SM400C	
板厚（側板）	15mm (1,057m <sup>3</sup> ) , 12mm (1,160m <sup>3</sup> ) , 12mm (1,200m <sup>3</sup> )	

※1 公称容量であり、運用上の容量は公称容量とは異なる。

※2 運用上の容量は、水位計 100%までの容量とする。

※3 今後増設するタンク（J 6,K 1北,K 2,K 1南,H 1,J 7,J 4 (1,160m<sup>3</sup>) ,H 1東,J 8,K 3,J 9,K 4,H 2, H 4北,H 4南,G 1南,H 5,H 6 (I) ,B,B南,H 3,H 6 (II) ,G 6, G 1, G 4南, G 4北, G 5エリア）は、公称容量を運用水位上限とする。

(44) 濃縮廃液貯槽

合計容量 (公称)	10,000 m <sup>3</sup>
基数	10 基
容量 (単基)	1,000m <sup>3</sup> 以上/基 <sup>※2</sup>
材 料	SS400
板厚 (側板)	15mm (1,000m <sup>3</sup> )

(45) 1号機原子炉建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	18m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	46m

(46) 2号機原子炉建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	18m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	46m

(47) 2号機廃棄物処理建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	18m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	46m

(48) 3号機原子炉建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	4
容 量	18m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	46m

(49) 3号機廃棄物処理建屋滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	18m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	46m

※2 運用上の容量は、水位計 100%までの容量とする。

(50) 4号機原子炉建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

(51) 4号機廃棄物処理建屋滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	18m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	46m

(52) S P T 廃液移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	35m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	75m

(53) S P T 廃液昇圧ポンプ（完成品）

台数	2
容量	35m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m

(54) ろ過処理水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	35m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	30m

(55) ろ過処理水昇圧ポンプ（完成品）

台数	2
容量	35m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	300m

(56) C S T 移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	20m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	70m

(57) ろ過処理水受タンク

基 数	2 基
容 量	10 m <sup>3</sup> /基
材 料	強化プラスチック (FRP)
厚 さ	胴板 9.0mm

(58) 淡水化処理水受タンク

基 数	2 基
容 量	10 m <sup>3</sup> /基
材 料	SM400C
厚 さ	胴板 9.0mm

(59) ろ過器

基 数	2 基
容 量	35 m <sup>3</sup> /h/基
材 料	SM400A (ゴムライニング)
厚 さ	胴板 9.0mm

(60) 第二セシウム吸着装置第二ブースターポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	103m

(61) セシウム吸着装置ブースターポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	50m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	103m

(62) 1号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) 滞留水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	12m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	55m



(63) 2号機タービン建屋床ドレンサンプ滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(64) 2号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) 滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(65) 2号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) 滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(66) 3号機タービン建屋床ドレンサンプ滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(67) 3号機タービン建屋サービスエリアストームドレンサンプ滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(68) 3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) 滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(69) 3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) 滞留水移送ポンプ (完成品)

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h (1台あたり)
揚程	55m

(70) 4号機タービン建屋床ドレンサンプ滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	55m

(71) 4号機原子炉建屋床ドレンサンプ（A）滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	55m

(72) 4号機原子炉建屋床ドレンサンプ（B）滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	55m

(73) 4号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ（A）滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	55m

(74) 4号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ（B）滞留水移送ポンプ（完成品）

台数	2
容量	12m <sup>3</sup> /h（1台あたり）
揚程	55m

(75) 建屋内 RO 濃縮水受タンク

基数	1基
容量	30 m <sup>3</sup> /基
材料	ポリエチレン（PE）
厚さ	胴板 16.0mm

(76) 増設 RO 濃縮水受タンク（RO 濃縮水処理設備\*から用途変更）

基数	1基
容量	30 m <sup>3</sup> /基
材料	SUS316L
厚さ	胴板 9.0mm

※II-2.38 RO 濃縮水処理設備 2.38.2.2 機器仕様（1）容器

(77) 建屋内 RO 濃縮水移送ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	15m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	76m

(78) 増設 RO 濃縮水供給ポンプ (完成品)

台 数	2
容 量	15m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)
揚 程	76m

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (1 / 2 7)

名 称	仕 様	
1号機タービン建屋から 1号機廃棄物処理建屋まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
1号機原子炉建屋から 1号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
1号機タービン建屋から 1号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
1号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) から1号機タービン建屋ストレ ーナユニット分岐部まで (耐圧ホース) (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (2 / 27)

名 称	仕 様	
1号機集合ヘッダー (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT410 0.96MPa 40℃
1号機集合ヘッダー出口から 2号機タービン建屋取り合いまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
2号機原子炉建屋から 2号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機タービン建屋から 2号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機タービン建屋床ドレンサンプから 2号機タービン建屋ポンプ出口弁スキッド分岐部まで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (3 / 27)

名 称	仕 様	
2号機タービン建屋床ドレンサンプから 2号機タービン建屋ポンプ出口弁スキッド分岐部まで (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機廃棄物処理建屋から 2号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) から2号機廃棄物処理建屋ポンプ 出口弁スキッド分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (4/27)

名 称	仕 様	
2号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) から2号機廃棄物処理建屋ポンプ 出口弁スキッド分岐部まで (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) から2号機廃棄物処理建屋床ドレ ンサンプ (A) まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
2号機集合ヘッダー (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
2号機集合ヘッダー出口から 2号機タービン建屋取り合いまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
2号機タービン建屋から 3号機タービン建屋まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
2号機タービン建屋から 4号機弁ユニットまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
3号機原子炉建屋から 3号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (5/27)

名 称	仕 様	
3号機原子炉建屋から 3号機集合ヘッダー入口まで (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機原子炉建屋トラス室から3号機 原子炉建屋ポンプ出口弁スキッド分岐部 まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機タービン建屋から 3号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機タービン建屋床ドレンサンプから 3号機タービン建屋ポンプ出口弁スキッド 分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃



表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (6/27)

名 称	仕 様	
3号機タービン建屋床ドレンサンプから 3号機タービン建屋ポンプ出口弁スキッド分岐部まで (鋼管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機タービン建屋サービスエリアストームドレンサンプから3号機タービン建屋床ドレンサンプまで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
3号機廃棄物処理建屋から 3号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリ塩化ビニル 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) から3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (7 / 27)

名 称	仕 様	
3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) から3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) まで (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
3号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) から3号機廃棄物処理建屋ポンプ 出口弁スキッド分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機集合ヘッダー (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPG370 0.96MPa 40℃
3号機集合ヘッダー出口から 3号機タービン建屋取り合いまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
3号機タービン建屋から 4号機弁ユニットまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
3号機タービン建屋から 4号機タービン建屋まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
4号機原子炉建屋から 4号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (8/27)

名 称	仕 様	
4号機原子炉建屋から 4号機集合ヘッダー入口まで (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当, 80A相当, 100A相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機原子炉建屋床ドレンサンプ (A) から4号機原子炉建屋床ドレンサンプ (B)まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当 EPDM合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当, 80A相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機原子炉建屋床ドレンサンプ (B) から4号機原子炉建屋ストレーナユニッ ト分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当 EPDM合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当, 100A相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機タービン建屋から 4号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当 EPDM合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A相当, 100A相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (9/27)

名 称	仕 様	
4号機タービン建屋から 4号機集合ヘッダー入口まで (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機タービン建屋床ドレンサンプから 4号機タービン建屋ストレナユニット分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機廃棄物処理建屋から 4号機集合ヘッダー入口まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) から4号機廃棄物処理建屋ストレ ーナユニット分岐部まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)  (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (10/27)

名 称	仕 様	
4号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (B) から4号機廃棄物処理建屋床ドレンサンプ (A) まで (耐圧ホース)  (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 合成ゴム 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 STPT410 0.96MPa 40℃
(鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT410 0.96MPa 40℃
4号機集合ヘッダー (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.96MPa 40℃
4号機集合ヘッダー出口から 4号機タービン建屋取り合いまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
4号機タービン建屋取り合いから 4号機弁ユニットまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
4号機弁ユニットから プロセス主建屋切替弁スキッド入口, 高温焼却炉建屋弁ユニット入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
サイトバンカ建屋から プロセス主建屋まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
プロセス主建屋3階取り合いから 油分離装置入口ヘッダーまで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	

表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (11/27)

名 称	仕 様	
油分分離装置入口ヘッダーから 油分分離装置処理水タンクまで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
油分分離装置処理水タンクから セシウム吸着装置入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
油分分離装置処理水タンクから 第二セシウム吸着装置入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
セシウム吸着装置入口から セシウム吸着装置出口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A/Sch. 40 SUS316L 0.97MPa 66℃
セシウム吸着装置出口から セシウム吸着処理水タンクまで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
セシウム吸着処理水タンクから 除染装置入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
除染装置入口から 除染装置出口まで (鋼管)	呼び径 /厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A, 100A, 150A, 200A /Sch. 20S SUS316L 0.3MPa 50℃
除染装置出口から サイトバンカ建屋取り合い(除染装置 側)まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
セシウム吸着処理水タンクから SPT建屋取り合いまで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃

表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (12/27)

名 称	仕 様	
SPT建屋取り合いから SPT (B) まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
高温焼却炉建屋1階ハッチから 高温焼却炉建屋1階取り合いまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
高温焼却炉建屋1階取り合いから 第二セシウム吸着装置入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
第二セシウム吸着装置入口から 第二セシウム吸着装置出口まで (鋼管)	呼び径 /厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A, 100A, 150A/ Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃
第二セシウム吸着装置入口から 第二セシウム吸着装置出口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質  最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A/Sch. 40 SUS316L ASME SA312 S31603 ASME SA790 S32205 ASME SA790 S32750 1.37MPa 66℃
第二セシウム吸着装置入口から 第二セシウム吸着装置出口まで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 合成ゴム (EPDM) 1.37MPa 66℃
第二セシウム吸着装置出口から SPT (B) まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A/Sch. 80 STPG370, STPT370 1.37MPa 66℃

表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (13/27)

名 称	仕 様	
SPT (B) から 淡水化装置 (RO) まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
淡水化装置 (RO) から RO 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯 槽まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
RO 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯 槽から 処理水バッファタンク及びCSTまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃



表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (14 / 27)

名 称	仕 様	
淡水化装置 (RO) から RO濃縮水貯槽まで (ポリエチレン管)	呼び径  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 65A 相当, 80A 相当, 100A 相当 150A 相当 ポリエチレン 1.0MPa, 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 150A/Sch. 40 STPT410, STPT370, SUS316L 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A SGP 1.0MPa 40℃
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 10 80A/Sch. 10 50A/Sch. 10 SUS304 0.98MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (15 / 27)

名 称	仕 様	
中低濃度タンクから RO濃縮水移送ポンプ配管分岐部 まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa, 0.98MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT370 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 20 SUS304 1.0MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40, 80A/Sch. 40, 50A/Sch. 80 STPT410+ライニング 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 10, 80A/Sch. 10, 50A/Sch. 10 SUS304 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 10, 65A/Sch. 10, 40A/Sch. 10 SUS316L 0.98MPa 40℃
蒸発濃縮装置から 濃縮水タンクまで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98MPa 74℃

表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (16/27)

名 称	仕 様	
濃縮水タンクから 濃縮廃液貯槽まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
水中ポンプ出口 (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリ塩化ビニル 0.98MPa 50℃
プロセス主建屋内取り合いから プロセス主建屋出口取り合いまで (戻り系統含む) (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 100A/Sch80 STPG370 0.5MPa 66℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 ( 1 7 / 2 7 )

名 称	仕 様	
セシウム吸着装置南側取り合いから セシウム吸着装置入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 80 STPG370 1. 37MPa 66℃
高温焼却炉建屋 1 階東側取り合いから 高温焼却炉建屋 1 階ハッチまで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 80 STPG370 1. 37MPa 66℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1. 0MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (18 / 27)

名 称	仕 様	
SPT 廃液移送ポンプ出口からろ過処理水受タンク入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 80 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃
ろ過処理水受タンク出口から建屋内 RO 入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 80 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 STPT410 4.5MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 150A／Sch. 40 STPT410 静水頭 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 100A／Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当 ポリエチレン 静水頭 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 ( 1 9 / 2 7 )

名 称	仕 様	
建屋内 RO 出口から淡水化処理水受タンク入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 80 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 SUS316LTP 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
淡水化処理水受タンク出口から CST 移送ライン操作弁ユニット入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 SUS316LTP 静水頭, 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A, 50A／Sch. 80 SUS316LTP 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 静水頭, 0.98MPa 40℃
建屋内 RO 出口から建屋内 RO 濃縮水受タンク入口まで及びろ過処理水受タンク入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A, 80A／Sch. 40 STPT410 4.5MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃

表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (20/27)

名 称	仕 様	
建屋内 R0 入口から建屋内 R0 出口まで	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A/Sch. 80 STPT410 4.5MPa 40℃
	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A, 80A, 100A/Sch. 40 STPT410 4.5MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A 相当 合成ゴム 4.5MPa 40℃
	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	25A, 50A/Sch. 80 STPT410 0.98MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	25A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃
4号機弁ユニット入口分岐から 4号機弁ユニット出口合流まで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPG370 1.0MPa 40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット入口から 高温焼却炉建屋弁ユニット出口まで	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 80 STPG370 1.0MPa 40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋北側取り合いまで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃

表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (21/27)

名 称	仕 様	
高温焼却炉建屋1階取り合いから 高温焼却炉建屋弁ユニット出口まで	呼び径	100A相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋1階東側取り合いまで	呼び径	100A相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 80, 100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋1階ハッチまで	呼び径	100A相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 第二セシウム吸着装置入口まで	呼び径	100A相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 80, 100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
プロセス主建屋1階西側取り合いから プロセス主建屋地下階まで	呼び径/厚さ	100A/Sch. 80
	材質	STPG370, STPT370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃

※ 現場施工状況により、配管仕様の一部を使用しない場合もある。



表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (22/27)

名 称	仕 様	
プロセス主建屋切替弁スキッド入口からプロセス主建屋切替弁スキッド出口まで (鋼管)	呼び径/厚さ	150A/Sch80, 100A/Sch80, 50A/Sch80
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	STPG370 1.0 MPa 40 °C
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当 ポリエチレン 1.0 MPa 40 °C
プロセス主建屋切替弁スキッド出口からプロセス主建屋まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0 MPa 40 °C
プロセス主建屋切替弁スキッド出口から第三セシウム吸着装置入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0 MPa 40 °C

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 ( 2 3 / 2 7 )

名 称	仕 様	
第三セシウム吸着装置入口から第三セシウム吸着装置出口まで (鋼管)	呼び径/厚さ	100A/Sch40, 80A/Sch40, 65A/Sch40, 50A/Sch40, 40A/Sch40
	材質	SUS316L ASME SA790 S32205 ASME SA790 S32750
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37 MPa 40 °C
(ポリエチレン管)	呼び径	100A 相当
(耐圧ホース)	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37 MPa 40 °C
	呼び径	65A 相当
第三セシウム吸着装置出口から S P T (B) まで (ポリエチレン管)	材質	合成ゴム (NBR, EPDM)
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37 MPa 40 °C
	呼び径	100A 相当
第三セシウム吸着装置出口から S P T (B) まで (ポリエチレン管)	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	1.0 MPa 40 °C
	呼び径	100A 相当
プロセス主建屋 1 階西側分岐からプロセス主建屋切替弁スキッドまで (鋼管)	呼び径/厚さ	100A/Sch80
	材質	STPG370
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 66°C
(ポリエチレン管)	呼び径	100A 相当
(ポリエチレン管)	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	1.0 MPa 40°C
	呼び径	100A 相当

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 ( 2 4 / 2 7 )

名 称	仕 様	
高温焼却炉建屋切替弁スキッドから S P T 建屋 1 階中央南側分岐まで (鋼管)  (ポリエチレン管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch80 STPG370 1.37MPa 66℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0 MPa 40℃
S P T 建屋 1 階中央南側分岐からプロ セス主建屋切替弁スキッドまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0 MPa 40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 ( 2 5 / 2 7 )

名称	仕様		
建屋内 RO 出口側ライン 分岐から 1 号機原子炉建屋 まで	呼び径	100A 相当	
	材質	ポリエチレン	
	最高使用圧力	0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	
	呼び径 / 厚さ	50A / Sch. 40	
	材質	SUS316LTP	
	最高使用圧力	0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	
	呼び径 / 厚さ	50A / Sch. 80, 80A / Sch. 40,	
	100A / Sch. 40		
	材質	STPT410	
	最高使用圧力	0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	
	建屋内 RO 出口側ライン 分岐から 2 号機タービン 建屋まで	呼び径	100A 相当
		材質	ポリエチレン
最高使用圧力		0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	
	呼び径 / 厚さ	50A / Sch. 40	
	材質	SUS316LTP	
	最高使用圧力	0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	
	呼び径 / 厚さ	50A / Sch. 80, 80A / Sch. 40,	
	100A / Sch. 40		
	材質	STPT410	
	最高使用圧力	0.98MPa	
	最高使用温度	40℃	

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (26 / 27)

名称	仕様	
建屋内 RO 入口側 タイライン分岐から 3・4号機タービン建屋 まで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	0.98MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 40, 100A/Sch. 40, 150A/Sch. 40
	材質	STPT410
	最高使用圧力	0.98MPa
	最高使用温度	40℃

表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様 (27 / 27)

名称	仕様	
SPT 廃液移送ポンプ出口分岐から建屋内 RO 濃縮水受タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
建屋内 RO 濃縮水受タンク出口から 8.5m 盤 SPT 受入水移送ポンプ出口ライン合 流まで (ポリエチレン管) (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40℃
33.5m 盤 SPT 受入水移送ポンプ出口分岐 から増設 RO 濃縮水受タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
増設 RO 濃縮水受タンク出口から 33.5m 盤 RO 濃縮水供給ポンプ出口ライン合流 まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃

表 2. 5 - 2 放射線監視装置仕様

項目	仕様		
名称	放射線モニタ	エリア放射線モニタ	
基数	5 基	2 基	3 基
種類	半導体検出器	半導体検出器	半導体検出器
取付箇所	滞留水移送ライン 屋外敷設箇所	第三セシウム吸着装置 設置エリア	ろ過水タンク周辺
計測範囲	0.01mSv/h~100mSv/h	0.001mSv/h~10mSv/h	0.001mSv/h~99.99mSv/h

2.5.2.1.2 使用済セシウム吸着塔保管施設及び廃スラッジ貯蔵施設

(1) 使用済セシウム吸着塔仮保管施設

吸着塔保管体数

308 体 (セシウム吸着装置吸着塔, モバイル式処理装置吸着塔,  
モバイル型ストロンチウム除去装置フィルタ・吸着塔,  
第二モバイル型ストロンチウム除去装置吸着塔,  
放水路浄化装置吸着塔)

9 体 (第二セシウム吸着装置吸着塔)

(2) 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 (第一施設)

吸着塔保管体数

544 体 (セシウム吸着装置吸着塔, モバイル式処理装置吸着塔,  
サブドレン他浄化装置吸着塔,  
高性能多核種除去設備検証試験装置吸着塔,  
モバイル型ストロンチウム除去装置フィルタ・吸着塔,  
第二モバイル型ストロンチウム除去装置吸着塔,  
放水路浄化装置吸着塔, 浄化ユニット吸着塔)

230 体 (第二セシウム吸着装置吸着塔, 第三セシウム吸着装置吸着塔,  
多核種除去設備処理カラム, 高性能多核種除去設備吸着塔, RO  
濃縮水処理設備吸着塔, サブドレン他浄化装置吸着塔)

(3) 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 (第二施設)

吸着塔保管体数

736 体 (セシウム吸着装置吸着塔, 多核種除去設備高性能容器,  
増設多核種除去設備高性能容器)

(4) 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 (第三施設)

吸着塔保管体数

3,648 体 (多核種除去設備高性能容器, 増設多核種除去設備高性能容器)

(5) 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 (第四施設)

吸着塔保管体数

680 体 (セシウム吸着装置吸着塔, モバイル式処理装置吸着塔,  
サブドレン他浄化装置吸着塔,

高性能多核種除去設備検証試験装置吸着塔

モバイル型ストロンチウム除去装置フィルタ・吸着塔,

第二モバイル型ストロンチウム除去装置吸着塔,

放水路浄化装置吸着塔, 浄化ユニット吸着塔)

345 体 (第二セシウム吸着装置吸着塔, 第三セシウム吸着装置吸着塔,  
多核種除去設備処理カラム, 高性能多核種除去設備吸着塔,  
RO 濃縮水処理設備吸着塔, サブドレン他浄化装置吸着塔)

(6) 造粒固化体貯槽(D) (既設品)

スラッジ保管容量

700m<sup>3</sup>

(7) 廃スラッジ一時保管施設

スラッジ保管容量

720m<sup>3</sup> (予備機含む)

スラッジ貯層基数

8 基

スラッジ貯層容量

90m<sup>3</sup>/基

表 2. 5-3 廃スラッジ貯蔵施設の主要配管仕様

名 称	仕 様	
除染装置から 造粒固化体貯槽 (D) (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A / Sch20S SUS316L 0.3MPa 50℃
造粒固化体貯槽 (D) から プロセス主建屋壁面取合まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A, 80A / Sch20S SUS316L 0.98MPa 50℃
プロセス主建屋壁面取合から 廃スラッジ一時保管施設取合まで (二重管ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 EPDM 0.72MPa 82.2℃
廃スラッジ一時保管施設取合から スラッジ貯槽まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 50A / Sch40 SUS316L 0.98MPa 50℃
廃スラッジ一時保管施設内 上澄み移送ライン (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	125A, 100A, 80A /Sch40 SUS329J4L 0.98MPa 50℃
廃スラッジ一時保管施設内 スラッジ移送ライン (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A, 80A, 50A / Sch40 SUS316L 0.98MPa 50℃



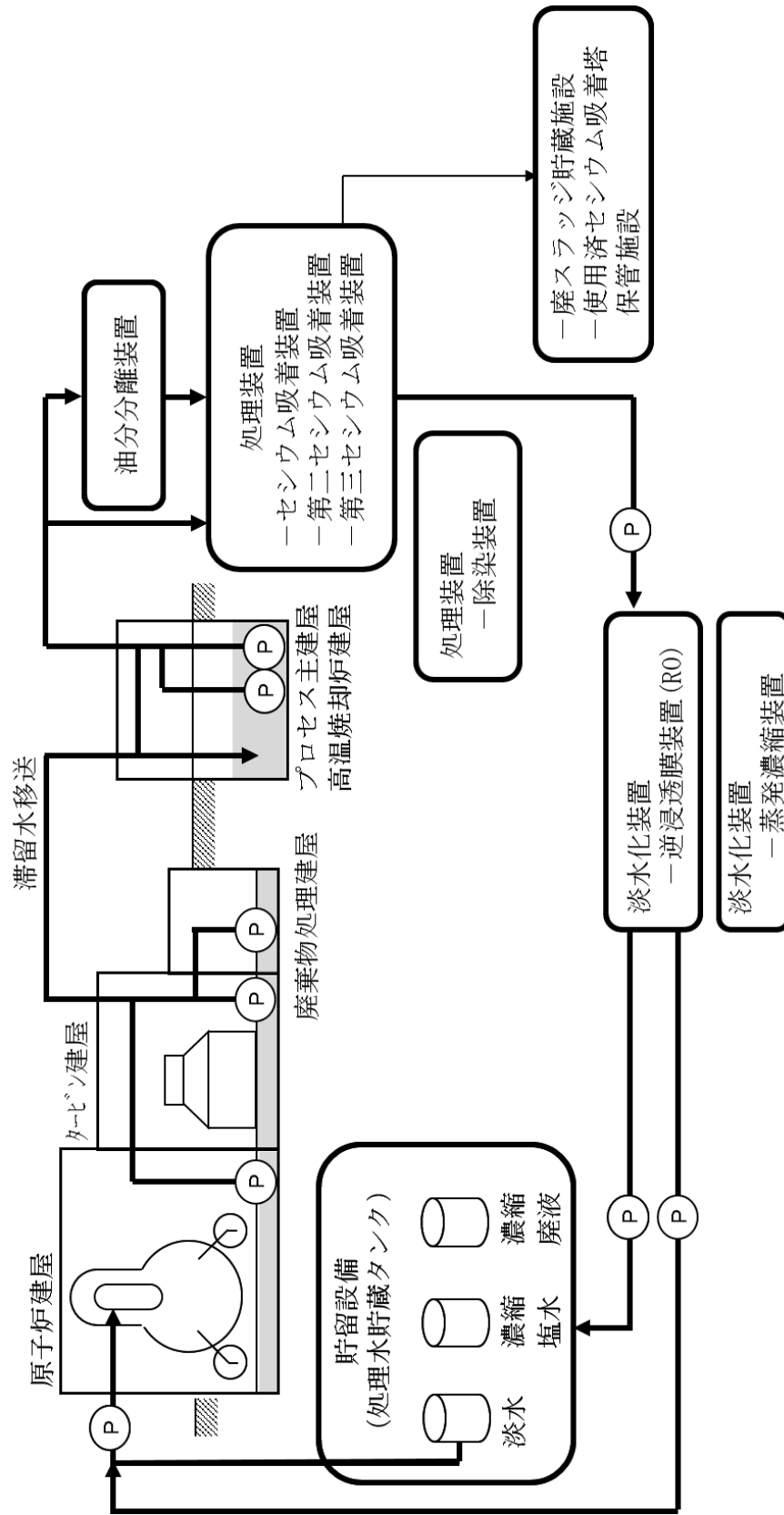
### 2.5.3 添付資料

- 添付資料－1 系統概要
- 添付資料－2 主要設備概要図
- 添付資料－3 汚染水処理設備等に関する構造強度及び耐震性等の評価結果
- 添付資料－4 廃スラッジ一時保管施設の耐震性に関する検討結果
- 添付資料－5 汚染水処理設備等の具体的な安全確保策について
- 添付資料－6 セシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置の吸着塔の温度評価
- 添付資料－7 廃スラッジ一時保管施設の崩壊熱評価
- 添付資料－8 廃スラッジ一時保管施設の遮へい設計
- 添付資料－9 汚染水処理設備等の工事計画及び工程について
- 添付資料－10 No.1 ろ過水タンクへの逆浸透膜装置廃水の貯留について
- 添付資料－11 中低濃度タンクの設計・確認の方針について
- 添付資料－12 使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）
- 添付資料－13 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の設計・確認の方針について
- 添付資料－14 滞留水移送装置の設計・確認方法について
- 添付資料－15 セシウム吸着装置におけるストロンチウムの除去について
- 添付資料－16 セシウム吸着装置により高温焼却炉建屋の滞留水を浄化するために使用する配管について
- 添付資料－17 第二セシウム吸着装置における Cs 及び Sr の除去について
- 添付資料－18 廃止（RO 濃縮塩水を移送する配管の追設について）
- 添付資料－19 滞留水移送装置による水位調整が不可能なエリアの対応について
- 添付資料－20 プロセス主建屋，高温焼却炉建屋の地下階を介さずに滞留水を処理装置へ移送する設備について
- 添付資料－21 使用済セシウム吸着塔一時保管施設の架台とボックスカルバートについて
- 添付資料－22 SPT 建屋の構造強度及び耐震性について
- 添付資料－23 濃縮廃液貯槽（完成品）の安全確保策について
- 添付資料－24 滞留水浄化設備の設計・確認方法について
- 添付資料－25 第三セシウム吸着装置について
- 添付資料－26 主要配管の確認事項について

系統概要

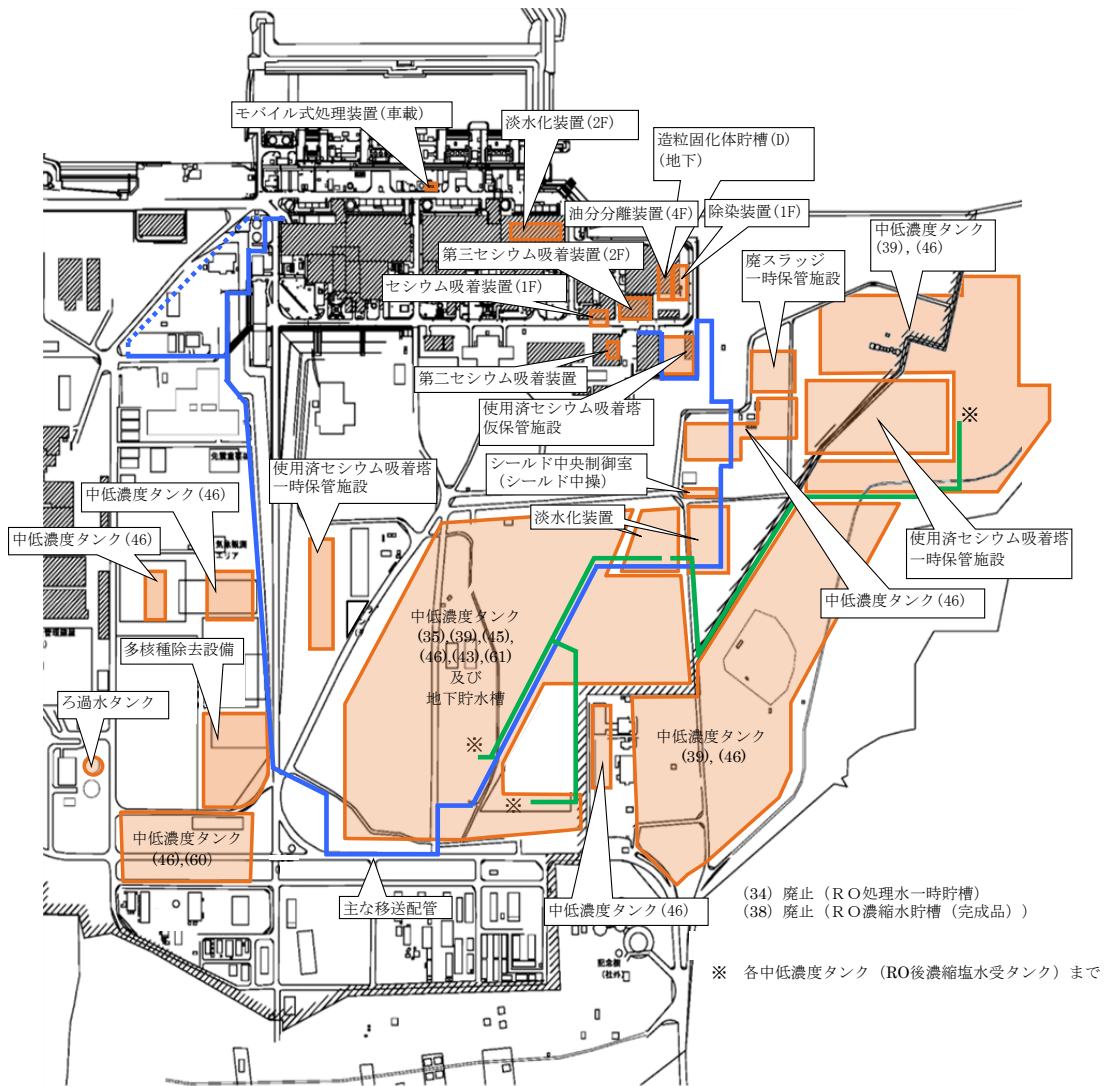
表 1 設備の構成

汚染水処理設備		汚染水処理設備等		
	貯留設備	関連設備	使用済セシウム吸着塔保管施設	廃スラッジ貯蔵施設
<b>処理装置</b> ・セシウム吸着装置 ・第二セシウム吸着装置 ・第三セシウム吸着装置 ・除染装置  <b>淡水化装置</b> ・逆浸透膜装置 ・蒸発濃縮装置	<b>中低濃度タンク</b> ・サブプレッション・プール水サージタンク ・廃液 RO 供給タンク ・RO 後濃縮塩水受タンク ・濃縮廃液貯槽 ・RO 後淡水受タンク ・多核種処理水タンク ・Sr処理水タンク  <b>地下貯水槽</b>  <b>ろ過水タンク</b>	<b>油分分離装置</b>  <b>モバイル式処理設備</b>  <b>電源設備</b>  <b>滞留水移送装置</b> ・移送ポンプ ・移送配管	<b>使用済セシウム吸着塔仮保管施設</b> <b>使用済セシウム吸着塔一時保管施設</b>	<b>造粒固化体貯槽(D)</b> <b>廃スラッジ一時保管施設</b>



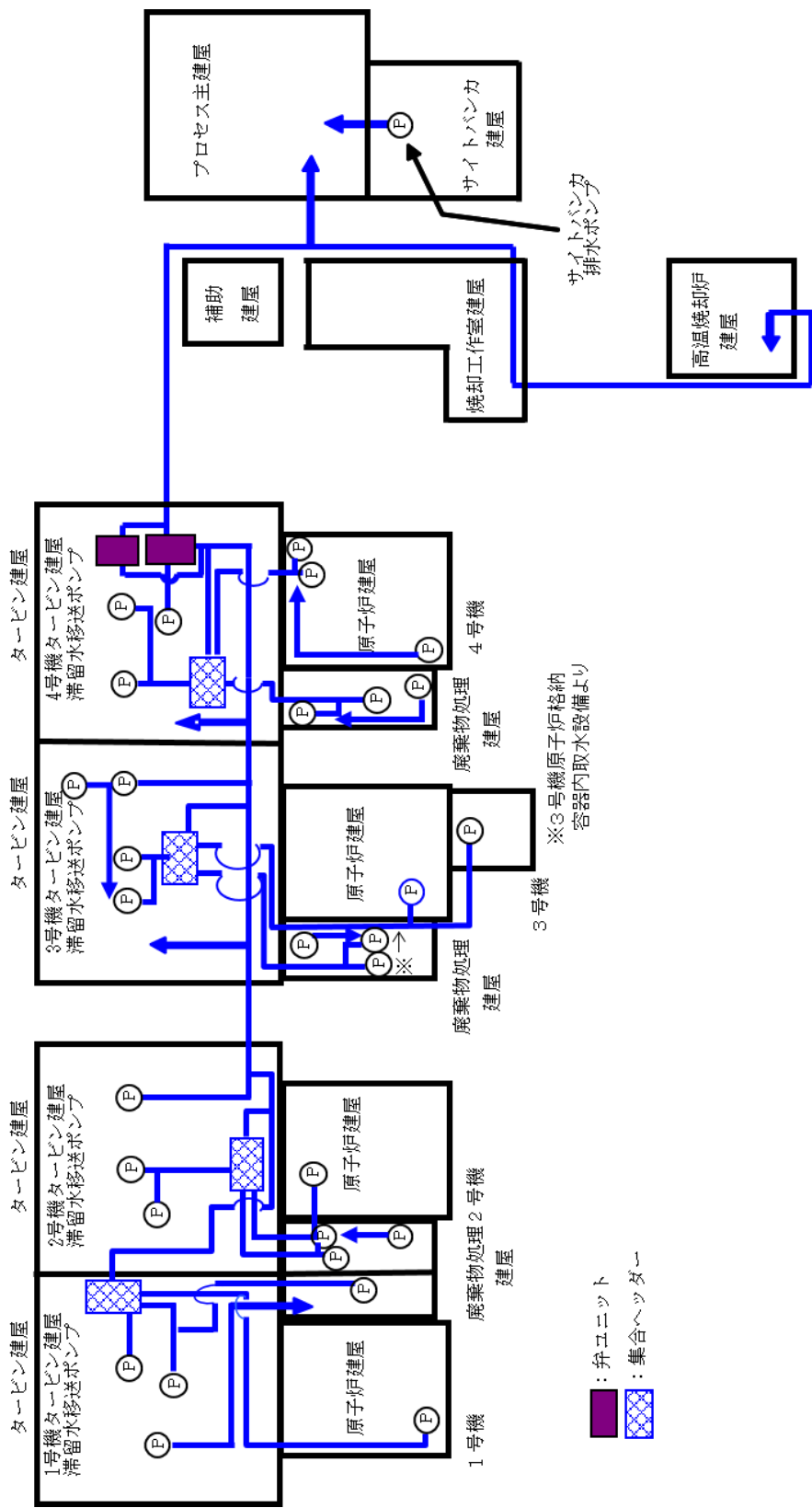
(a) 系統概要

図-1 汚染水処理設備等の全体概要図 (1 / 2)

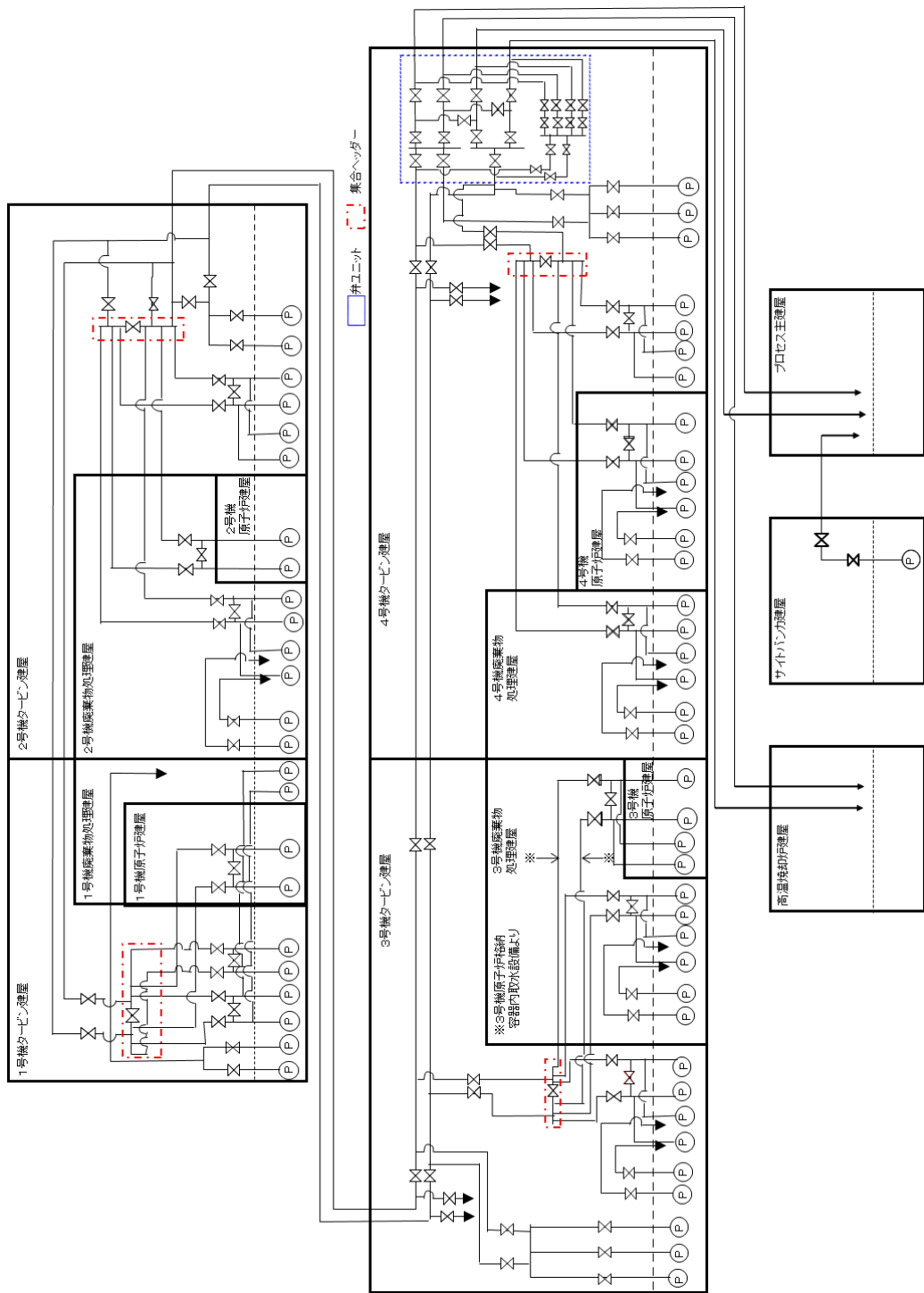


(b) 配置概要

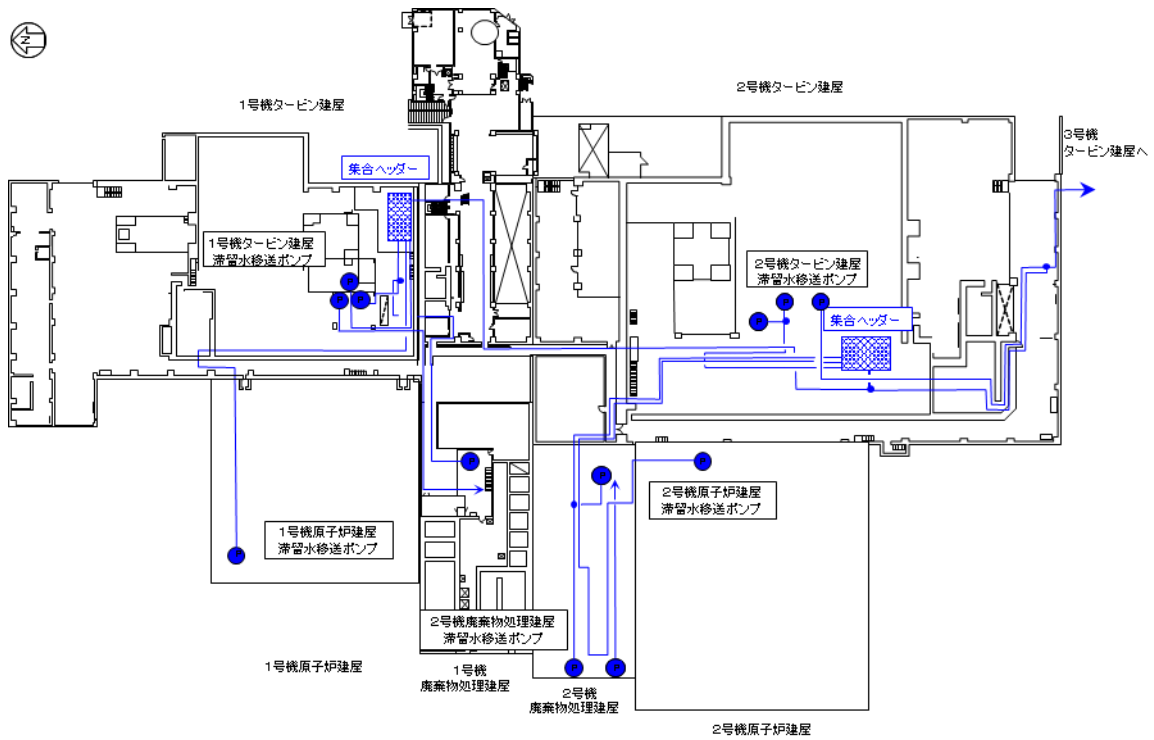
図-1 汚染水処理設備等の全体概要図 (2 / 2)



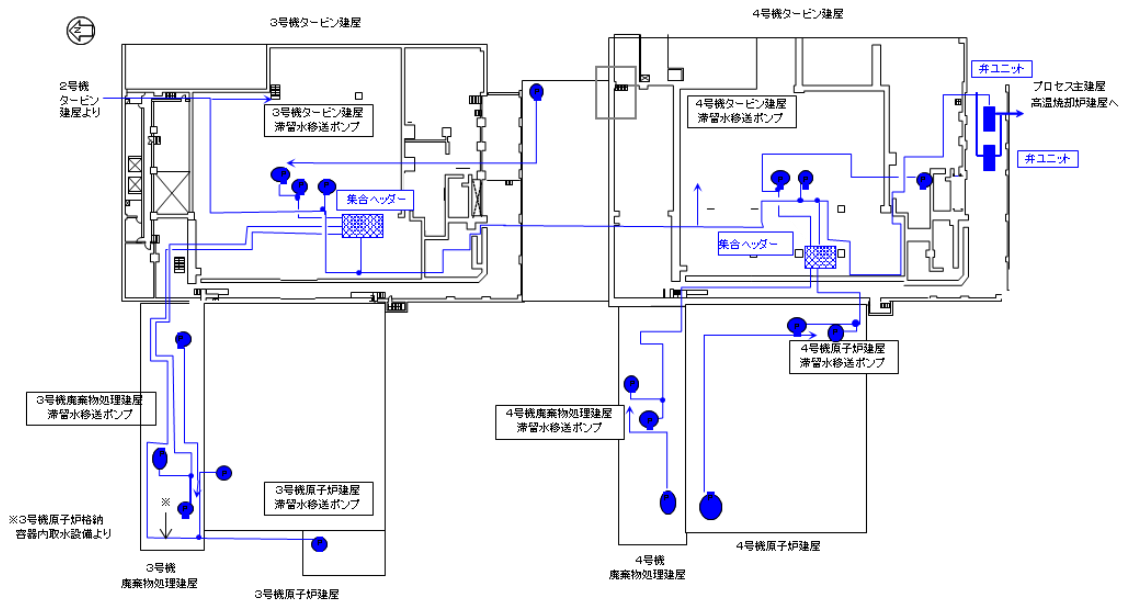
(a) 移送装置全体系統図  
 図-2 滞留水移送装置の系統構成図 (1 / 3)



(a) 移送装置全体系統図  
 図一 2 滞留水移送装置の系統構成図 (2 / 3)



1, 2号機滞留水移送系統 (各建屋1階)

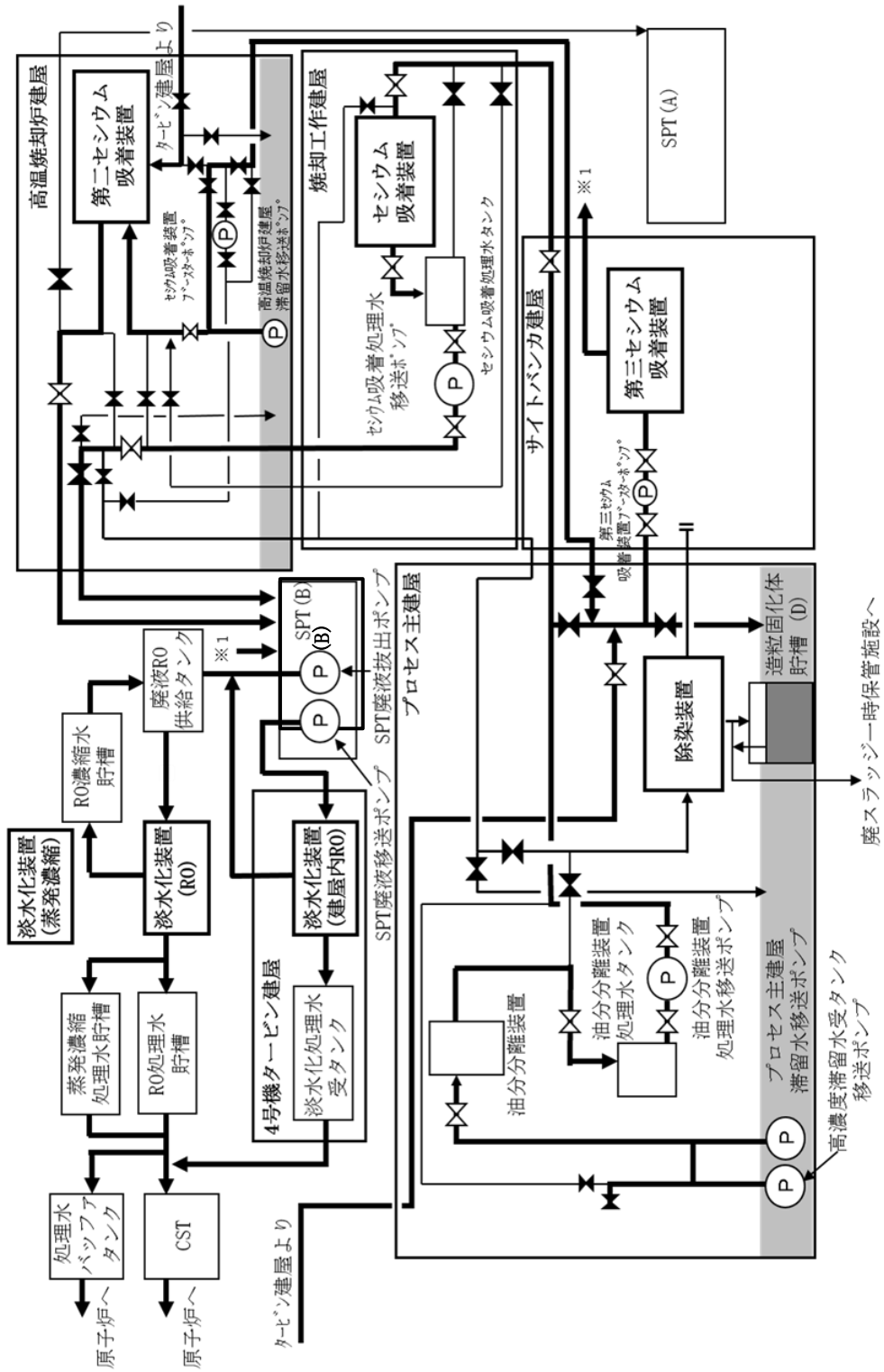


3, 4号機滞留水移送系統 (各建屋1階)

※ポンプ・配管は多重化しているものの、本図では単一のものとして示す

(b) 移送装置 配管ルート図

図-2 滞留水移送装置の系統構成図 (3 / 3)



図一3 処理装置（セシウム吸着装置，第二セシウム吸着装置，第三セシウム吸着装置，除染装置）の系統構成図



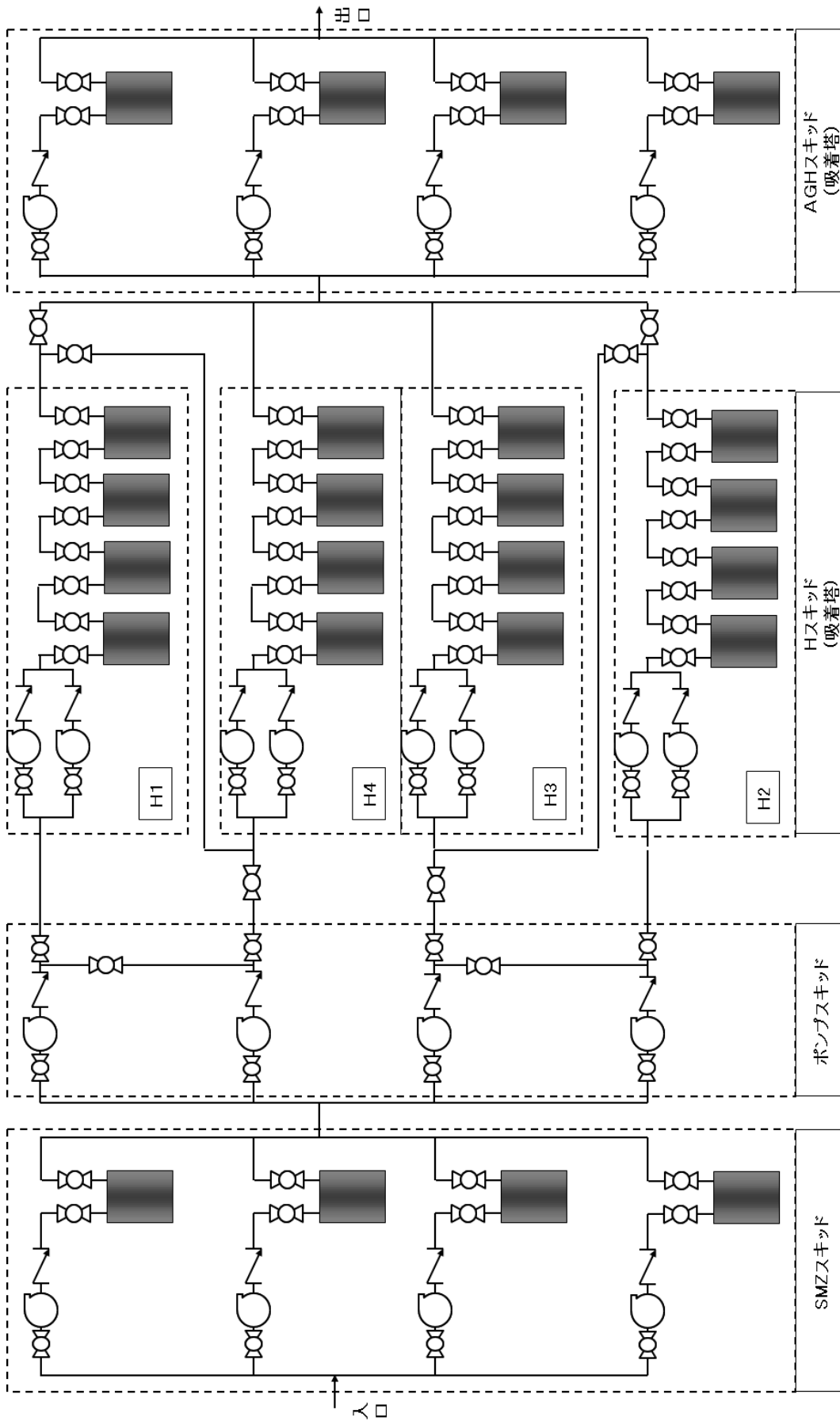


図-4 セシウム吸着装置の系統構成図

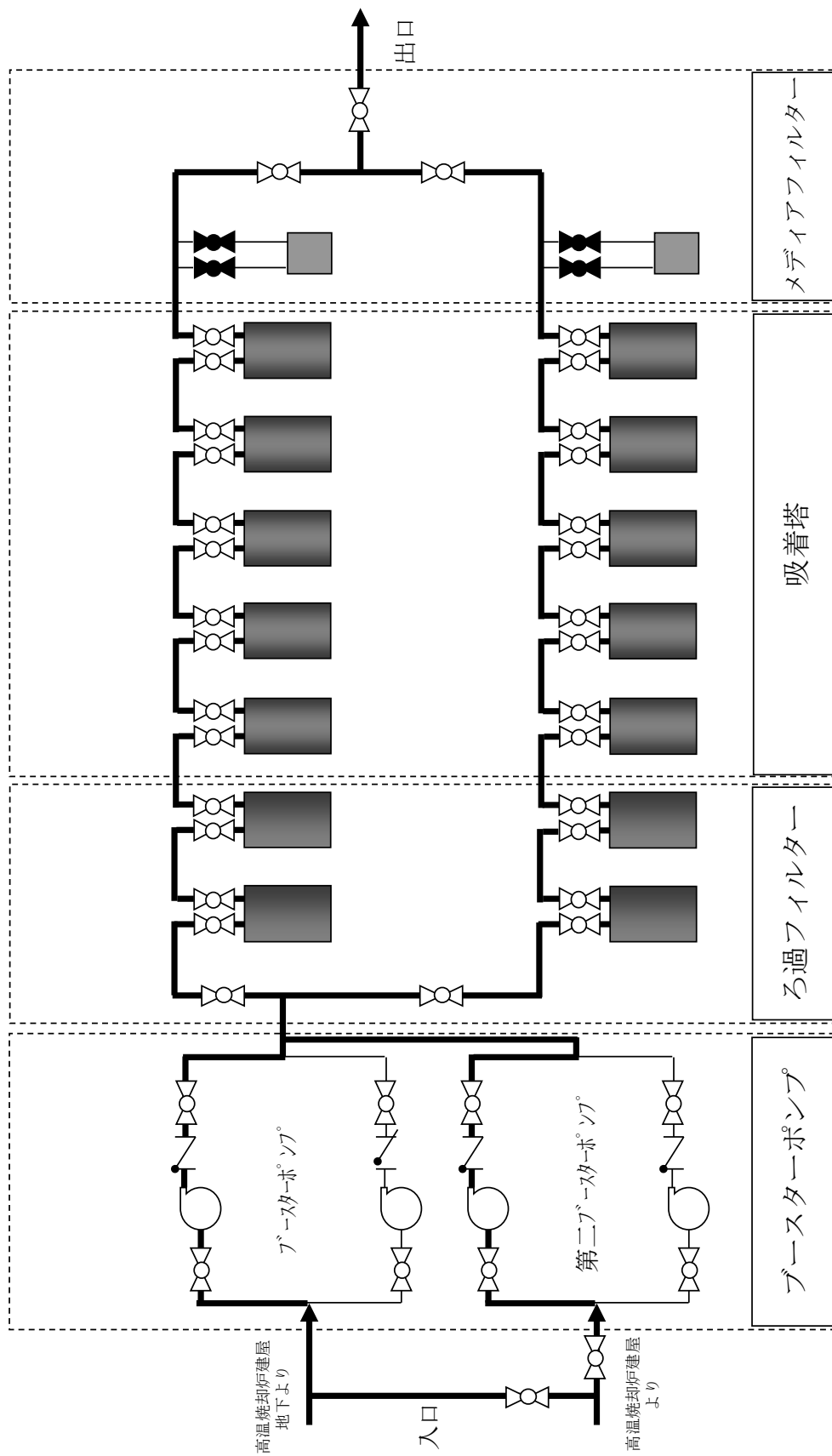


図-5 第二セシウム吸着装置の系統構成図

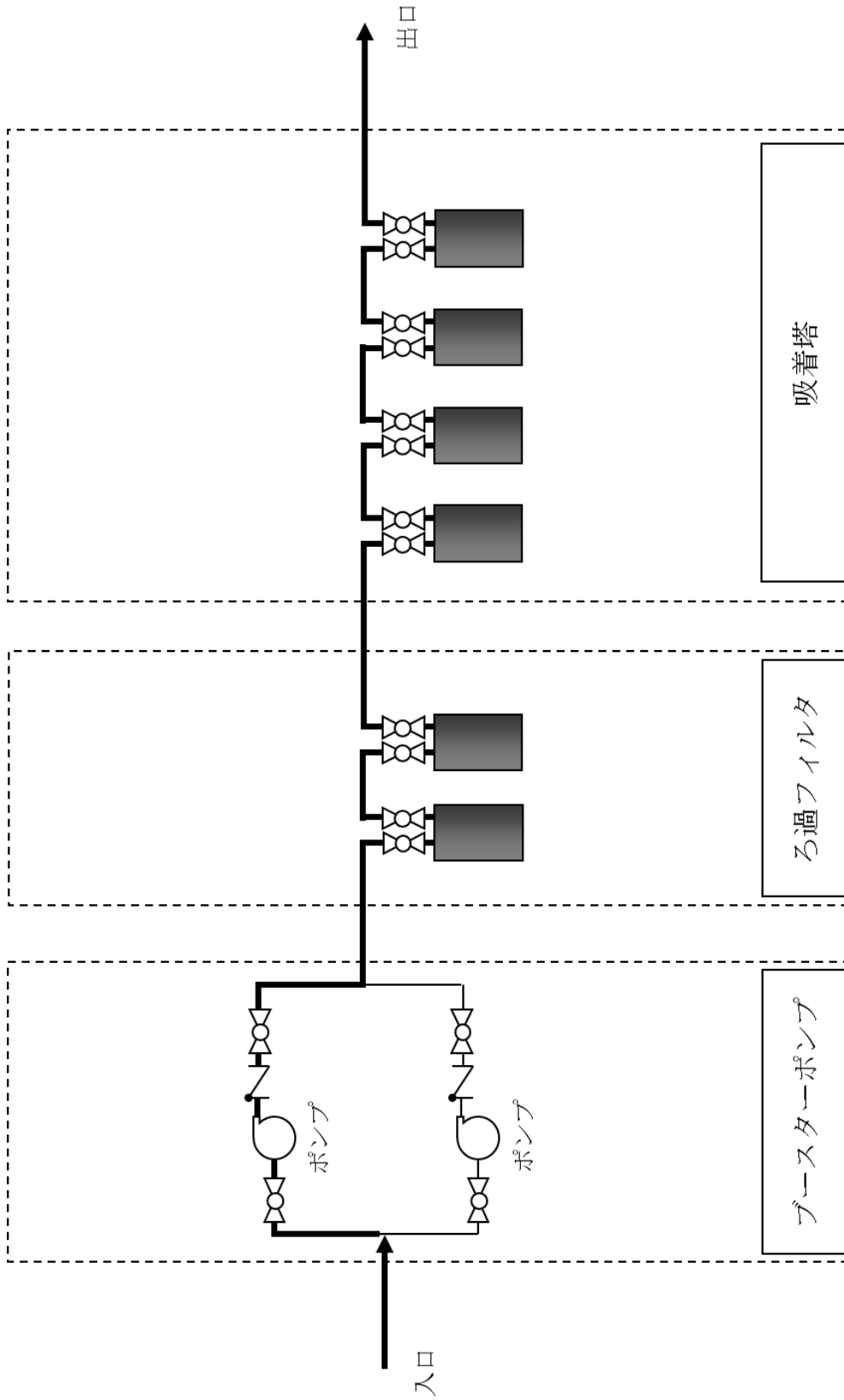
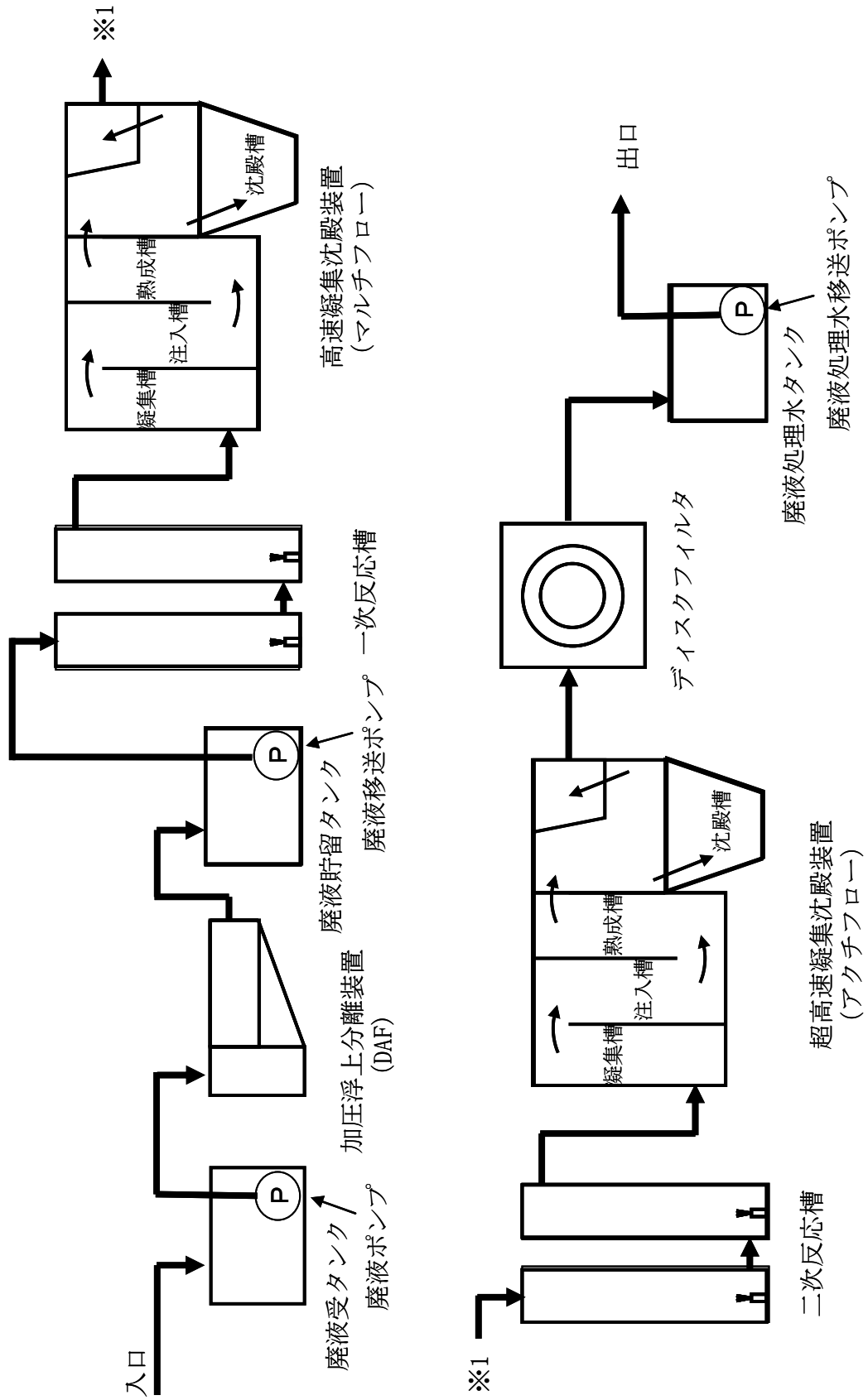


図-6 第三セシウム吸着装置の系統構成図



図一 7 除染装置の系統構成図



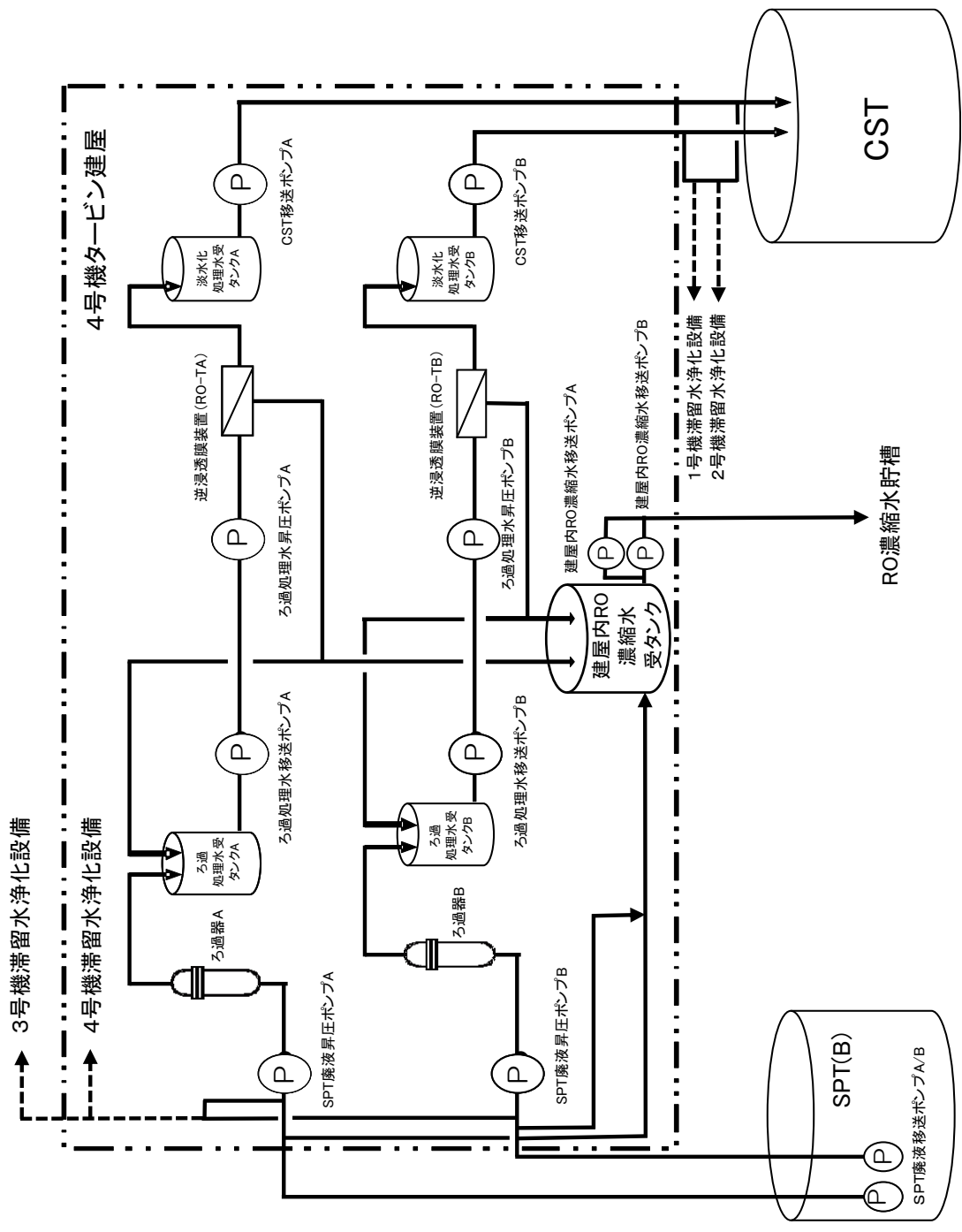


図-8 淡水化装置（逆浸透膜装置）及び滞留水浄化設備の系統構成図（2/2）  
 （滞留水浄化設備の範囲について点線で示す。）

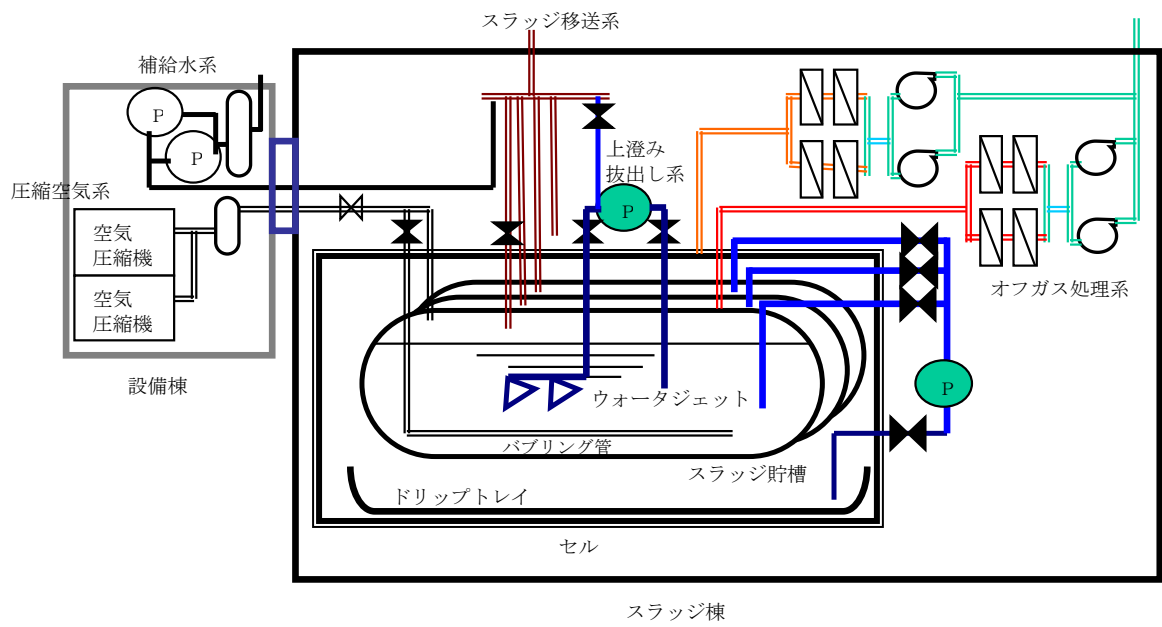


図-9 廃スラッジ一時保管施設概要図

## 中低濃度タンクの設計・確認の方針について

中低濃度タンクのうち、実施計画の初回認可日（平成 25 年 8 月 14 日）以降に実施する検査の対象となる円筒型タンクの設計・確認の方針について、以下の通り定める。

## 1. 中低濃度タンク（円筒型）の設計方針

## 1.1 規格・規準

## a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンク

震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンク（G3, J1 エリア）に関しては、設計、材料の選定、製作及び検査について、日本産業規格等の適用、施工記録、実績等により信頼性を確保する。

## ◆タンクの構造設計に関する規格（JSME 規格以外）

- ・「JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造」
- ・「日本鋼構造協会 JSS-I 溶接開先標準」
- ・「日本建築学会 鋼構造設計規準」
- ・「日本建築学会 容器構造設計指針」
- ・「日本水道鋼管協会 鋼製配水池設計指針」
- ・「高圧ガス保安法 特定設備検査規則および同強度計算書式」

## ◆溶接に関する規格

- ・「JIS B 8285 圧力容器の溶接施工方法の確認試験」
- ・「JIS Z 3801 手溶接技術検定における試験方法及び判定基準」
- ・「JIS Z 3841 半自動溶接技術検定における試験方法及び判定基準」
- ・「日本鋼構造協会 JSS-I 溶接開先標準」

## b. 今後（平成 25 年 8 月 14 日以降）設計するタンク

平成 25 年 8 月 14 日以降に設計するものに関しては、JSME 規格に限定するものではなく、日本産業規格（JIS）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、或いは American Society of Mechanical Engineers（ASME 規格）、日本産業規格（JIS）、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

## ◆タンクの構造設計に関する規格（JSME 規格以外）

- ・「JIS G 3193 熱間圧延鋼板及び鋼帯の形状、寸法、質量及びその許容差」
- ・「JIS G 3454 圧力配管用炭素鋼鋼管」
- ・「JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造」



## 1.2 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

中低濃度タンクは、液体状の放射性物質の漏えいの防止及び所外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、中低濃度タンクには設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器を設ける。
- b. タンクからの漏えいを早期検知するためにタンク設置エリアに設置するカメラにて監視するとともに、巡視点検にて漏えいの有無を確認し、液体状の放射性物質が漏えいした場合においても、漏えいを停止するのに適切な措置をとれるようにする。また、中低濃度タンクは漏えい水の拡大を抑制するための堰を設ける。基礎外周堰の堰内容量は、タンク 20 基当たり 1 基分の貯留容量（20 基以上の場合は 20 基あたり 1 基分の割合の容量、20 基に満たない場合でも 1 基分）を確保できる容量に、大雨時の作業等を考慮した余裕高さ（堰高さで 20cm 程度）分の容量との合計とする。
- c. タンク水位は、免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室（シールド中操）に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

## 1.3 環境条件対策

タンク増設に合わせて敷設する移送配管については、以下の対策を行う。

### (1) 凍結

滞留水を移送している過程では、水が流れているため凍結の恐れはない。

滞留水の移送を停止した場合、屋外に敷設されているポリエチレン管等は、凍結による破損が懸念されるため、保温材等を取り付けて凍結防止を図る。なお、保温材は、高い気密性と断熱性を有する硬質ポリウレタン等を使用し、凍結しない十分な厚さ（100A に対して 21.4mm 以上）を確保する。

保温材厚さの設定の際には、「建設設備の凍結防止（空気調和・衛生工学会）」に基づき、震災以降に凍結事象が発生した外気温 $-8^{\circ}\text{C}$ 、内部流体の初期温度 $5^{\circ}\text{C}$ 、保温材厚さ 21.4mm の条件において、内部流体が 25%※凍結するまでに十分な時間（50 時間程度）があることを確認した。なお、震災以降の実測データから、外気温 $-8^{\circ}\text{C}$ が半日程度継続することはない。

※「JIS A 9501 保温保冷工事施工標準」において管内水の凍結割合を 25%以上と推奨

### (2) 紫外線

屋外に敷設されているポリエチレン管等は、紫外線による劣化を防止するため、紫外線防止効果のあるカーボンブラックを添加した保温材を取り付ける、もしくは、カーボンブラックを添加していない保温材を使用する場合は、カーボンブラックを添加した被覆材または紫外線による劣化のし難い材料である鋼板を取り付ける。

## 1.4 設計上の使用条件

中低濃度タンク（円筒型）のうち、RO 濃縮水貯槽及び濃縮廃液貯槽には、RO 濃縮水、濃縮廃液等の処理装置による処理済水（37kBq/cm<sup>3</sup>以上）を貯留する。タンクの運用状況に応じて RO 濃縮水貯槽に多核種除去設備、増設多核種除去設備、高性能多核種除去設備及び RO 濃縮水処理設備による処理済水、サブドレン他水処理施設で汲み上げた地下水（37kBq/cm<sup>3</sup>未満）を貯留する。

Sr 処理水貯槽には、RO 濃縮水処理設備による処理済水、サブドレン他水処理施設で汲み上げた地下水（37kBq/cm<sup>3</sup>未満）を貯留する。タンクの運用状況に応じて Sr 処理水貯槽に多核種除去設備、増設多核種除去設備、高性能多核種除去設備による処理済水（37kBq/cm<sup>3</sup>未満）を貯留する。

一方、多核種処理水貯槽には、多核種除去設備、増設多核種除去設備及び高性能多核種除去設備による処理済水（37kBq/cm<sup>3</sup>未満）を貯留する。G4 北、G5 エリアに設置する多核種処理水貯槽については、トリチウム以外の放射性物質を告示濃度限度比総和 1 未満となるまで浄化処理した水を貯留する。

RO 処理水貯槽、蒸発濃縮処理水貯槽には、逆浸透膜装置の処理済水（37kBq/cm<sup>3</sup>未満）を貯留する。

## 2. 中低濃度タンク（円筒型）の構造強度及び耐震性評価

### 2.1 中低濃度タンクの構造強度評価

#### a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンク（G3、J1 エリア）

中低濃度タンクは、「発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。クラス 3 機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）で規定される。

しかしながら、震災以降緊急対応的にこれまで設置してきた中低濃度タンクは、必ずしも JSME 規格に従って設計・製作・検査をされたものではなく、日本産業規格（JIS）等の国内外の民間規格、製品の試験データ等を踏まえ、福島第一原子力発電所構内の作業環境、機器等の設置環境や時間的裕度を勘案した中で安全確保を最優先に設計・製作・検査を行ってきている。

中低濃度タンクは、高濃度の汚染水を内包するため、バウンダリ機能の健全性を確認する観点から、設計された肉厚が十分であることを確認している。また、溶接部については、耐圧・漏えい試験等を行い、有意な変形や漏えい等のないことを確認している。設計及び評価の概要を以下に示す。

◆溶接型タンク（G3, J1 エリア）

G3 エリア, J1 エリアタンクともに、「鋼製石油貯槽の構造（全溶接製）（JIS B 8501）」を参考に設計したものである。線量や重装備による厳しい現場作業環境、汚染水対策として短期間の設置工程の必要性を踏まえ、現場溶接作業を極力減らすための設計の工夫を行っているため、溶接部の設計において、全ての部位が規格に適合した設計となっているわけではないが、当該部位については、別途構造計算等を実施し、構造強度の健全性について確認を行っている。

b. 今後（平成 25 年 8 月 14 日以降）設計するタンク

中低濃度タンクは、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。クラス 3 機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）で規定される。

従って、今後設計する中低濃度タンクについては、JSME 規格に限定するものではなく、日本産業規格（JIS）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、或いは American Society of Mechanical Engineers（ASME 規格）、日本産業規格（JIS）、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。溶接（溶接施工法および溶接士）は JSME 規格、日本産業規格（JIS）、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、または同等の溶接とする。また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格（JIS）年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

さらに、今後も JSME 規格に記載のない非金属材料（耐圧ホース、ポリエチレン管等）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器等については、日本産業規格（JIS）や日本水道協会規格、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

## 2.2 中低濃度タンクの耐震性評価

中低濃度タンクは、原則、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆への被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とする。

ただし、2020年7月8日以前に認可された中低濃度タンクについては、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」を参考にして耐震クラス分類を行い、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」（以下、「耐震設計技術規程」という。）等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とすることから、この限りでない。

また、評価手法、評価基準については、実態にあわせたものを採用する。なお、要求される地震力に対して耐震性を確保できない場合は、その影響について評価を行う。支持部材がない等の理由によって、耐震性に関する評価ができない設備を設置する場合においては、可撓性を有する材料を使用するなどし、耐震性を確保する。

また、中低濃度タンクは必要な耐震性を確保するために、原則として以下の方針に基づき設計とする。

- ・ 倒れ難い構造（基礎幅を大きくとる）
- ・ 変位による破壊を防止する構造（配管等に可撓性の有る材料を使用）

## 3. 中低濃度タンク（円筒型）の確認方針

### 3.1 構造強度及び機能・性能に関する事項

中低濃度タンクの構造強度及び機能・性能に関する確認事項を別紙－1に示す。

### 3.2 溶接部に関する事項

溶接部の確認が必要な中低濃度タンクの溶接部に関する確認事項は、「JSME S NB1 発電用原子力設備規格 溶接規格」に準拠して実施することを基本とするが、確認内容、判定基準については実態にあわせたものを適用する。溶接部に関する確認事項を別紙－3に示す。なお、溶接施工法については、認証機関による適合性証明に限らず、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものについても適用可能とする。また、溶接士については、JSME規格、American Society of Mechanical Engineers（ASME規格）、日本産業規格（JIS）、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、またはこれらと同等の溶接とする。

### 3.3 特記事項

実施計画の初回認可日以降に実施する検査において、緊急対応的に設置又は既に（平成25年8月14日より前に）設計に着手した中低濃度タンク {エリア名（対象タンク基数／エリアタンク総基数）：G3 エリア（46基／70基）・J1 エリア（100基／100基）} は、汚染水

の構外への流出を回避するために、いったん汚染水を貯留することを最優先とし、汚染水を貯留しながら、中低濃度タンクに係わる確認項目を確認するために、東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則第20条第1項に規定する使用前検査及び第28条第1項に規定する溶接検査に準じた検査を受検する。確認事項の概要を以下に示す。

◆溶接型タンク（G3 エリア）

G3 エリアの溶接型タンクについては、工場および現場にて溶接作業を実施している。工場および現場の溶接は、工場製作要領書・タンク現地溶接施工要領書にしたがって、第三者によって認められた溶接施工法により、JISの有資格者が実施している。開先検査記録や溶接作業記録等の作成は省略しているものの、非破壊検査については、現場溶接部は全数、工場溶接部はサンプリングにより実施するとともに、外観検査についてはタンク設置後で測定可能な範囲において、脚長等が設計寸法以上であることを確認している。最終的には、当社監理員立会のもと、24時間の耐圧・漏洩試験（水張り試験）により、有意な変形や漏洩等がないことを確認している。

◆溶接型タンク（J1 エリア）

J1 エリアの溶接型タンクについては、工場および現場にて溶接作業を実施している。これらは、試験検査要領書に基づいて、JISの有資格者が溶接を行うとともに、材料検査、開先検査、溶接作業検査、非破壊検査、耐圧漏えい検査、外観検査を実施・記録を行い、当該工事の請負業者が同記録の確認を行っている。また、当社においては、工場および現場において、これら検査の立会および記録確認を実施している。

#### 4. 基礎外周堰完成及び個別水位計設置までの安全確保事項

中低濃度タンクは、基礎外周堰、並びに各タンクへの水位計が設置され、機能・性能に関する確認がされる前から使用を開始するため、使用期間中は漏えいの発生防止、漏えい検知・拡大防止の観点から、以下の事項について遵守する。

- ・ 汚染水の受払いの際は、受払用タンクに水位計を設置し、受入時の溢水を防止すると共に、貯留状況を監視する。
- ・ 汚染水の受入れが完了したタンクは、タンクの連結弁を閉じ、大量漏えいを防止する。
- ・ タンクの連結弁を閉じた後、各タンクの水位が確認できなくなるが、個別水位計が設置されるまでの期間は、溶接型タンクについて、巡視点検でタンクからの漏えいの有無を確認することにより、各タンクの水位が保持されていることを間接的に確認する。
- ・ RO 濃縮水貯槽及び Sr 処理水貯槽は、基礎外周堰が設置された状態で使用する。
- ・ 多核種処理水貯槽は、基礎外周堰が設置された状態で使用するのが原則であるが、建屋滞留水処理完了（循環注水を行っている 1～3 号機原子炉建屋以外の滞留水処理完了）までは、J2, J3, J4, J5, J6, J7, J8, J9, H1, H1 東, H2, K3, K4, H4 北, H4 南, G1 南, H5, H6(I), B, B 南, H3, H6(II), G6, G1, G4 南エリアのタンクに仮堰運用（高さ 25cm 程度の鉄板もしくはコンクリートによる堰）を適用し、基礎外周堰が完成する前にタンクの使用を開始する。仮堰運用期間を可能な限り短くするため、仮堰運用を適用するエリアのすべてのタンクが設置されてから 3 ヶ月以内（天候等による影響を除く）を目途に基礎外周堰を完成させる。なお、建屋滞留水処理完了以降の仮堰運用については、地下水流入量等の状況を鑑み検討する。

#### 5. 汚染水受入れ時の漏えい対策について

新規タンクへ汚染水を受け入れる際には、漏えいの発生防止、漏えい検知・拡大防止の観点から、以下の対策を行う。

- ・ 新規タンクへ汚染水を受け入れる際には、隔離対象タンクの連結弁が“閉”であることを確認した後に、受入れを開始する。
- ・ 新規タンクへ汚染水の受入れを開始する際には、水位計の指示値を連続して確認し、水位が安定的に上昇していることを確認すると共に、目視にてタンク、連結弁、フランジ部からの漏えいの有無を確認する。設備に異常が無ければ、その後は水位計の指示値を連続して確認し、巡視点検でタンクからの漏えいの有無を確認する。
- ・ 仮にタンクに不具合が発生した場合は、状況把握に努めると共に漏えい拡大の防止を図り、漏えい水受けの設置や連絡弁の「閉」確認を行う等の応急措置を実施する。

## 6. 別紙

- (1) 中低濃度タンク（円筒型）の基本仕様
- (2) 中低濃度タンク（円筒型）の構造強度及び耐震性評価に関する説明書
- (3) 中低濃度タンク（円筒型）に係る確認事項
- (4) (廃止)フランジタンクの止水構造に関する説明書
- (5) タンク基礎に関する説明書
- (6) 中低濃度タンク（円筒型）の基礎外周堰の堰内容量に関する説明書
- (7) 中低濃度タンク（円筒型）からの直接線ならびにスカイシャイン線による  
実効線量
- (8) タンクエリア図
- (9) タンク概略図
- (10) 中低濃度タンクのうち耐震Cクラスと位置づけられるタンクについて

## 中低濃度タンク（円筒型）の基本仕様

## 1. 設備仕様

a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンク（G3, J1 エリア）

## (1) RO 濃縮水貯槽

廃止（G4 エリア（フランジタンク））

## G3 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	10,537
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	9.5
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPY400EQ, STPG370

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	ポリ塩化ビニル	FC200
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃



J1 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	10,812
管台厚さ	100A	mm	4.5
	200A	mm	5.8
	600A	mm	9.5
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPY400EQ, SGP

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	ポリ塩化ビニル	FC200
最高使用圧力	0.98MPa	0.98MPa, 1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

(2) 廃止（多核種処理水貯槽）

b. 今後（平成 25 年 8 月 14 日以降）設計するタンク

(1) RO 濃縮水貯槽

G7 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	700
主要寸法	内 径	mm	8,100
	胴板厚さ	mm	16
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,730
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	500A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm（100A）
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

## D エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm（100A）
材 質	STPT410
最高使用圧力	大気圧
最高使用温度	50℃

(2) 濃縮廃液貯槽, RO 処理水貯槽, 蒸発濃縮処理水貯槽

D エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50°C	50°C

	入口配管 (鋼管)
厚 さ	8.6mm (100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	大気圧
最高使用温度	50°C

(3) 多核種処理水貯槽

J5 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,235
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	13,000
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	0.98MPa	1.4MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

J2, J3 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	2,400
主要寸法	内 径	mm	16,200
	胴板厚さ	mm	18.8
	底板厚さ	mm	12
	アニュラ厚さ	mm	16
	高 さ	mm	13,200
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	12.0
材料	胴板	—	SM400C
	底板	—	SS400
	アニュラ板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	60°C	50°C

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40°C

J4 エリア (2,900m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	2,900
主要寸法	内 径	mm	16,920
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,900
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM490C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	0.98MPa	1.4MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

J6 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,200
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	9.5
材料	胴板・底板	—	SM400A, SS400
	管台	—	STPG370, STPY400 STPY400EQ

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃



H1 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,220
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ※	mm	11,622
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPT410, SM400C

※底板厚さを含む

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

J7 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,200
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	9.5
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, STPY400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

J4 エリア (1,160m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,160
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	13,000
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	0.98MPa	1.4MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

H1 東エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,220
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ※	mm	11,622
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPT410, SM400C

※底板厚さを含む

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

J8 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	700
主要寸法	内 径	mm	9,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, STPT410, SM400A

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	6.0mm(100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

K3 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	700
主要寸法	内 径	mm	8,100
	胴板厚さ	mm	16
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,730
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm(100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

J9 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	700
主要寸法	内 径	mm	9,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, STPT410, SM400A

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	6.0mm(100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

K4 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm（100A）
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃



H2 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	2,400
主要寸法	内 径	mm	16,200
	胴板厚さ	mm	18.8
	底板厚さ	mm	12
	アニュラ厚さ	mm	16
	高 さ	mm	13,200
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	12.0
材料	胴板	—	SM400C
	底板	—	SS400
	アニュラ板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	60°C	50°C

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40°C

H4 北エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,200
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	11,700
管台厚さ	100A	mm	6
	200A	mm	8.2
	760mm (内径)	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, SM400A

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

H4 南エリア (1,060m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,060
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管 (鋼管)
厚 さ	8.6mm (100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

H4 南エリア (1,140m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,140
主要寸法	内 径	mm	10,440
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	22
	高 さ	mm	14,127
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SM400B
	管台	—	STPT410, SM400B

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

G1 南エリア (1,160m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,160
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	13,000
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	0.98MPa	1.4MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

G1 南エリア (1,330m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,330
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	22
	高 さ	mm	14,878
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SM400B
	管台	—	STPT410, SM400B

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
厚 さ	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

H5, H6(I)エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,200
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, STPT410, SM400A

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（綱管）
厚 さ	6.0mm(100A)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

B, B 南エリア (1, 330m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1, 330
主要寸法	内 径	mm	11, 000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	14, 900
管台厚さ	100A	mm	8. 6
	200A	mm	12. 7
	600A	mm	16. 0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1. 0MPa	1. 0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1. 0MPa
最高使用温度	40℃



B エリア (700m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	700
主要寸法	内 径	mm	8,100
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	14,730
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (ポリエチレン管)
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

H3, H6(Ⅱ)エリア(1,356m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,356
主要寸法	内 径	mm	12,500
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,112
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, SM400A, STPT410

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (鋼管)
呼 び 径	100A (6.0mm)
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

## G6 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,330
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	14,715
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	650A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SM490A
	管台	—	STPG370, SM490B

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	0.98MPa
最高使用温度	40℃

G1, G4 南, G4 北, G5 エリア (1,356m<sup>3</sup>)

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,356
主要寸法	内 径	mm	12,500
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,112
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, SM400A, STPT410

	連結管 (耐圧ホース (完成品))	連結弁 (完成品)
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	40℃	40℃

	入口配管 (鋼管)
呼 び 径	100A Sch40
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

(4) Sr 処理水貯槽

K1 北エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,200
主要寸法	内 径	mm	12,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	12,012
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	600A	mm	9.5
材料	胴板・底板	—	SM400A
	管台	—	STPG370, STPY400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

K2 エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,057
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm（100A）
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃

K1 南エリア

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,160
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12
	底板厚さ	mm	12
	高 さ	mm	13,000
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	0.98MPa	1.4MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（ポリエチレン管）
呼 び 径	100A 相当
材 質	ポリエチレン
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	40℃

以上

## 中低濃度タンク（円筒型）の構造強度及び耐震性評価に関する説明書

## 1. 構造強度評価

震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンクについては、材料証明書がなく、設計・建設規格におけるクラス 3 機器の要求を満足するものではないが、主要仕様から必要肉厚評価、胴の穴の補強評価をし、十分な強度を有していることを確認した。

平成 25 年 8 月 14 日以降に設計するタンクについては、設計・建設規格に基づき、主要仕様から必要肉厚評価、胴の穴の補強評価をし、十分な強度を有していることを確認した。

J2, J3 エリアのタンクについては、日本産業規格（JIS B 8501）を適用し構造強度評価を行った。構造強度評価のうち、「円筒型タンクの胴の厚さ評価」については、日本産業規格（JIS B 8501）内に裏当て金を使用した評価の規定がないことから、設計・建設規格（JSME 規格）により構造強度評価を行い十分な強度を有していることを確認した。その他の構造強度評価については、日本産業規格（JIS B 8501）の要求仕様を満足する設計とするが、同規格内に各評価対象部位の必要最小値を算出する方法の規定がないことから、設計・建設規格により算出した値を参考値として記載する。

(1) 震災以降緊急対応的に設置又は既に（平成 25 年 8 月 14 日より前に）設計に着手したタンク（G3, J1 エリア）

## a. 円筒型タンクの胴の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、板厚評価を実施した。評価の結果、水頭圧に耐えられることを確認した（表－ 1－ 1）。

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

t : 管台の計算上必要な厚さ  
 Di : 管台の内径  
 H : 水頭  
 ρ : 液体の比重  
 S : 最高使用温度における  
       材料の許容引張応力  
 η : 長手継手の効率

ただし、t の値は炭素鋼、低合金鋼の場合は t = 3[mm] 以上、その他の金属の場合は t = 1.5[mm] 以上とする。また、内径の区分に応じた必要厚さを考慮する。



表-1-1 円筒型タンクの胴の板厚評価結果

機器名称		評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽 多核種処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量 (溶接)	タンク板厚	9.6	12.0
			9.8	12.0

b. 円筒型タンクの底板の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、底板の厚さについて評価を実施した。評価の結果、必要板厚を確保していることを確認した（表-1-2）。

表-1-2 円筒型タンクの底板の板厚評価結果

機器名称		評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽 多核種処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量 (溶接)	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0

※1 地面、基礎等に直接接触するものについては、3mm（設計・建設規格）

c. 円筒型タンクの管台の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、管台の板厚評価を実施した。評価の結果、水頭圧に耐えられることを確認した（表-1-3）。

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

t : 管台の計算上必要な厚さ  
 Di : 管台の内径  
 H : 水頭  
 ρ : 液体の比重  
 S : 最高使用温度における  
       材料の許容引張応力  
 η : 長手継手の効率

ただし、管台の外径の区分に応じた必要厚さを考慮する。

表-1-3 円筒型タンクの管台の板厚評価結果

機器名称		管台口径	評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽 多核種処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量 (溶接)	100A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	9.5
		100A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	4.5
		200A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	5.8
		600A	管台板厚	3.5 <sup>**</sup>	9.5

※管台の外径：82mm 以上のものについては 3.5mm

d. 円筒型タンクの胴の穴の補強評価

設計・建設規格に準拠し、胴の穴の補強について評価を実施した。評価の結果、補強に有効な面積が補強に必要な面積より大きいため、補強は十分であることを確認した（表-1-4）。

$$A_0 = A_1 + A_2 + A_3 + A_4$$

$$A_1 = (\eta t_s - Ft_{sr})(X - d)$$

$$-2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)(\eta t_s - Ft_{sr})t_n$$

$$X = X_1 + X_2$$

$$X_1 = X_2 = \left(\text{Max}\left(d, \frac{d}{2} + t_s + t_n\right)\right)$$

$$A_2 = 2((t_{n1} - t_{nr})Y_1 + t_{n2}Y_2)S_n / S_s$$

$$t_{nr} = \frac{PDi}{2S - 1.2P}$$

$$Y_1 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n1})$$

$$Y_2 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n2}, h)$$

$$A_3 = L_1L_1 + L_2L_2$$

$$A_4 = (W - Wi) \times Te$$

$$W = \text{Min}(X, De)$$

$$Ar = dt_{sr}F + 2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)t_{sr}Ft_n$$

- A<sub>0</sub> : 補強に有効な総面積
- A<sub>1</sub> : 胴, 鏡板又は平板部分の補強に有効な面積
- A<sub>2</sub> : 管台部分の補強に有効な面積
- A<sub>3</sub> : すみ肉溶接部の補強に有効な面積
- A<sub>4</sub> : 強め材の補強に有効な面積
- η : PVC-3161.2 に規定する効率
- t<sub>s</sub> : 胴の最小厚さ
- t<sub>sr</sub> : 継ぎ目のない胴の計算上必要な厚さ (PVC-3122 (1)において η = 1 としたもの)
- t<sub>n</sub> : 管台最小厚さ
- t<sub>n1</sub> : 胴板より外側の管台最小厚さ
- t<sub>n2</sub> : 胴板より内側の管台最小厚さ
- t<sub>nr</sub> : 管台の計算上必要な厚さ
- P : 最高使用圧力 (水頭) = 9.80665 × 10<sup>3</sup> H ρ
- S<sub>s</sub> : 胴板材料の最高使用温度における許容引張応力
- S<sub>n</sub> : 管台材料の最高使用温度における許容引張応力
- Di : 管台の内径
- X : 胴面に沿った補強に有効な範囲
- X<sub>1</sub> : 補強に有効な範囲
- X<sub>2</sub> : 補強に有効な範囲
- Y<sub>1</sub> : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より外側)
- Y<sub>2</sub> : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より内側)
- h : 管台突出し高さ (胴より内側)
- L<sub>1</sub> : 溶接の脚長
- L<sub>2</sub> : 溶接の脚長
- L<sub>3</sub> : 溶接の脚長
- A<sub>r</sub> : 補強が必要な面積
- d : 胴の断面に現れる穴の径
- F : 係数 (図 PVC-3161.2-1 から求めた値)
- Te : 強め材厚さ
- W : 強め材の有効範囲
- Wi : 開先を含めた管台直径
- De : 強め材外径

表-1-4 円筒型タンクの穴の補強評価結果

機器名称		管台口径	評価部位	Ar [mm <sup>2</sup> ]	Ao [mm <sup>2</sup> ]
RO 濃縮水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量 (溶接)	100A	管台	610	1274
		200A	管台	1194	2321
		600A	管台	3657	4376
		100A	管台	685	821
		200A	管台	1321	1444
		600A	管台	3752	4256

(2) 平成 25 年 8 月 14 日以降に設計するタンク

a. 円筒型タンクの胴の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、板厚評価を実施した。評価の結果、水頭圧に耐えられることを確認した（表-2-1）。

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

t : 管台の計算上必要な厚さ

Di : 管台の内径

H : 水頭

$\rho$  : 液体の比重

S : 最高使用温度における  
材料の許容引張応力

$\eta$  : 長手継手の効率

ただし、t の値は炭素鋼、低合金鋼の場合は  $t=3[\text{mm}]$  以上、その他の金属の場合は  $t=1.5[\text{mm}]$  以上とする。また、内径の区分に応じた必要厚さを考慮する。

表-2-1 円筒型タンクの胴の板厚評価結果

機器名称		評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	8.4	16.0
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.2	15.0
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	8.2	12.0
		タンク板厚	8.4	16.0
		タンク板厚	8.4	12.0
	1000m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.2	15.0
	1060m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.2	15.0
	1140m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.4	15.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	11.7	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.9	12.0
			9.0	12.0
	1220m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	9.8	12.0
	1235m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	11.7	12.0
	1330m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	11.5	15.0
			10.8	12.0
	1356m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	11.5	12.0
	2400m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	16.2	18.8
	2900m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	14.5	15.0
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.2	15.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	11.7	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	10.9	12.0

b. 円筒型タンクの底板の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、底板の厚さについて評価を実施した。評価の結果、必要板厚を確保していることを確認した（表-2-2）。

表-2-2 円筒型タンクの底板の板厚評価結果

機器名称		評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
		タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
	1000m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
	1060m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
	1140m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	22.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1220m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1235m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1330m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	22.0
		タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1356m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	2400m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	2900m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	25.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (底板)	3.0 <sup>※1</sup>	12.0

※1 地面、基礎等に直接接触するものについては、3mm（設計・建設規格）

c. 円筒型タンクの管台の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、管台の板厚評価を実施した。評価の結果、水頭圧に耐えられることを確認した（表-2-3）。

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

t : 管台の計算上必要な厚さ

Di : 管台の内径

H : 水頭

$\rho$  : 液体の比重

S : 最高使用温度における  
材料の許容引張応力

$\eta$  : 長手継手の効率

ただし、管台の外径の区分に応じた必要厚さを考慮する。



表-2-3 円筒型タンクの管台の板厚評価結果(1/2)

機器名称		管台口径	評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
		100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1060m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1140m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		650A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	9.5
3.5 <sup>*</sup>				12.0	
760mm (内径)	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0		

表-2-3 円筒型タンクの管台の板厚評価結果(2/2)

機器名称		管台口径	評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
多核種処理水貯槽	1220m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	1235m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		650A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	1330m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
		650A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1356m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	2900m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
650A		管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0	
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	16.0
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		650A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	12.0
	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	6.0
		200A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	8.2
		600A	管台板厚	3.5 <sup>*</sup>	9.5

※管台の外径：82mm 以上のものについては 3.5mm

d. 円筒型タンクの胴の穴の補強評価

設計・建設規格に準拠し、胴の穴の補強について評価を実施した。評価の結果、補強に有効な面積が補強に必要な面積より大きいため、補強は十分であることを確認した（表-2-4）。

$$A_0 = A_1 + A_2 + A_3 + A_4$$

$$A_1 = (\eta t_s - Ft_{sr})(X - d) - 2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)(\eta t_s - Ft_{sr})t_n$$

$$X = X_1 + X_2$$

$$X_1 = X_2 = \left(\text{Max}\left(d, \frac{d}{2} + t_s + t_n\right)\right)$$

$$A_2 = 2((t_{n1} - t_{nr})Y_1 + t_{n2}Y_2)S_n / S_s$$

$$t_{nr} = \frac{PDi}{2S - 1.2P}$$

$$Y_1 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n1})$$

$$Y_2 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n2}, h)$$

$$A_3 = L_1L_1 + L_2L_2$$

$$A_4 = (W - Wi) \times Te$$

$$W = \text{Min}(X, De)$$

$$Ar = dt_{sr}F + 2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)t_{sr}Ft_n$$

$A_0$  : 補強に有効な総面積  
 $A_1$  : 胴, 鏡板又は平板部分の補強に有効な面積  
 $A_2$  : 管台部分の補強に有効な面積  
 $A_3$  : すみ肉溶接部の補強に有効な面積  
 $A_4$  : 強め材の補強に有効な面積  
 $\eta$  : PVC-3161.2 に規定する効率  
 $t_s$  : 胴の最小厚さ  
 $t_{sr}$  : 継ぎ目のない胴の計算上必要な厚さ (PVC-3122(1)において  $\eta = 1$  としたもの)  
 $t_n$  : 管台最小厚さ  
 $t_{n1}$  : 胴板より外側の管台最小厚さ  
 $t_{n2}$  : 胴板より内側の管台最小厚さ  
 $t_{nr}$  : 管台の計算上必要な厚さ  
 $P$  : 最高使用圧力 (水頭) =  $9.80665 \times 10^3 H \rho$   
 $S_s$  : 胴板材料の最高使用温度における許容引張応力  
 $S_n$  : 管台材料の最高使用温度における許容引張応力  
 $Di$  : 管台の内径  
 $X$  : 胴面に沿った補強に有効な範囲  
 $X_1$  : 補強に有効な範囲  
 $X_2$  : 補強に有効な範囲  
 $Y_1$  : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より外側)  
 $Y_2$  : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より内側)  
 $h$  : 管台突出し高さ (胴より内側)  
 $L_1$  : 溶接の脚長  
 $L_2$  : 溶接の脚長  
 $L_3$  : 溶接の脚長  
 $Ar$  : 補強が必要な面積  
 $d$  : 胴の断面に現れる穴の径  
 $F$  : 係数 (図 PVC-3161.2-1 から求めた値)  
 $Te$  : 強め材厚さ  
 $W$  : 強め材の有効範囲  
 $Wi$  : 開先を含めた管台直径  
 $De$  : 強め材外径

表-2-4 円筒型タンクの穴の補強評価結果(1/2)

機器名称		管台口径	評価部位	Ar [mm <sup>2</sup> ]	A <sub>0</sub> [mm <sup>2</sup> ]
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	569	2751
		200A	管台	1118	5394
		500A	管台	2787	9826
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	694	2529
		200A	管台	1365	4890
		600A	管台	4129	9435
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	626	2775
			管台	569	2751
			管台	575	2511
		200A	管台	1168	4924
			管台	1210	5198
			管台	1127	4584
		600A	管台	3247	12707
			管台	3382	10822
			管台	3378	9627
	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	694	2529
		200A	管台	1365	4890
		600A	管台	4129	9435
	1060m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	694	2529
		200A	管台	1365	4890
		600A	管台	4129	9435
	1140m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	703	1951
		200A	管台	1382	3729
		600A	管台	4181	7058
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	724	1616
		200A	管台	1411	3195
		650A	管台	4466	10840
	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	828	2545
				650	2060
		200A	管台	1551	4530
				1267	4133
		600A	管台	4321	11400
				4324	11664
	760mm (内径)	管台	4788	14670	

表-2-4 円筒型タンクの穴の補強評価結果(2/2)

機器名称		管台口径	評価部位	Ar [mm <sup>2</sup> ]	A <sub>0</sub> [mm <sup>2</sup> ]
多核種処理水貯槽	1220m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	724	1677
		200A	管台	1401	3240
		600A	管台	4031	5029
	1235m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	724	1616
		200A	管台	1411	3195
		650A	管台	4466	10840
	1330m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	780	1873
			管台	790	2644
			管台	720	1651
		200A	管台	1534	3577
			管台	1548	4955
			管台	1396	3252
		600A	管台	4640	6598
			管台	4641	10448
		650A	管台	4413	11133
	1356m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	871	2502
		200A	管台	1631	4437
		600A	管台	4545	11441
	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	1031	3547
		200A	管台	2020	6631
		600A	管台	6139	17461
2900m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	1521	1854	
	200A	管台	2950	3713	
	650A	管台	9289	12857	
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	694	2529
		200A	管台	1365	4890
		600A	管台	4129	9435
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	724	1616
		200A	管台	1411	3195
		650A	管台	4466	10840
	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	828	2545
		200A	管台	1551	4530
		600A	管台	4321	11400

e. 強め材の取付け強さ

設計・建設規格に準拠し、強め材の取付け強さについて評価を実施した。評価の結果、溶接部の強度が十分であることを確認した（表-2-5）。

$$F_1 = \frac{\pi}{2} d_o L_1 S \eta_1$$

$$F_2 = \frac{\pi}{2} d t_n S_n \eta_3$$

$$F_3 = \frac{\pi}{2} d'_o t_s S \eta_2$$

$$F_4 = \frac{\pi}{2} d_o L_2 S \eta_1$$

$$F_5 = \frac{\pi}{2} W_o L_3 S \eta_1$$

$$F_6 = \frac{\pi}{2} d'_o t_s S \eta_2$$

$$W = d'_o t_{sr} S - (t_s - F t_{sr})(X - d'_o) S$$

$$W_1 = F_1 + F_2$$

$$W_2 = F_1 + F_6 + F_4$$

$$W_3 = F_5 + F_2$$

$$W_4 = F_5 + F_3$$

$$W_5 = F_1 + F_3$$

$$W_6 = F_5 + F_6 + F_4$$

$F_1$  : 断面（管台外側のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_2$  : 断面（管台内側の管台壁）におけるせん断強さ

$F_3$  : 断面（突合せ溶接部）におけるせん断強さ

$F_4$  : 断面（管台内側のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_5$  : 断面（強め材のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_6$  : 断面（突合せ溶接部）におけるせん断強さ

$d_o$  : 管台外径

$d$  : 管台内径

$d'_o$  : 胴の穴の径

$W_o$  : 強め材の外径

$S$  : 胴板材料の最高使用温度における許容引張応力

$S_n$  : 管台材料の最高使用温度における許容引張応力

$L_1$  : すみ肉溶接部の脚長（管台取付部（胴より外側））

$L_2$  : すみ肉溶接部の脚長（管台取付部（胴より内側））

$L_3$  : 溶接部の脚長（強め材）

$\eta_1$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$\eta_2$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$\eta_3$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$W$  : 溶接部の負うべき荷重

$t_{sr}$  : 継目のない胴の計算上必要な厚さ  
(PVC-3122(1)において  $\eta = 1$  としたもの)

$F$  : 管台の取付角度より求まる係数  
(図 PVC-3161. 2-1 から求めた値)

$X$  : 補強に有効な範囲

$W_1$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_2$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_3$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_4$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_5$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_6$  : 予想される破断箇所の強さ

表-2-5 円筒型タンクの強め材の取付け強さ (1/3)

機器名称		管台 口径	溶接部の負 うべき荷重	予想される破断箇所の強さ					
			W [N]	W <sub>1</sub> [N]	W <sub>2</sub> [N]	W <sub>3</sub> [N]	W <sub>4</sub> [N]	W <sub>5</sub> [N]	W <sub>6</sub> [N]
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	1864.1	166151	349750	314371	441231	293011	467970
		200A	-25256.1*	—	—	—	—	—	—
		500A	-137004*	—	—	—	—	—	—
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理 水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	33964.16	166151	337182	324487	437680	279344	495518
200A		39660.64	407243	638076	554885	661549	513907	785718	
600A		22336.96	1412596	1798294	1471384	1477146	1418358	1857082	
多核種処理水 貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	100A	61639	115577	272545	239591	299186	175172	396559
			1864.1	166150	349748	324487	441347	293010	508085
			32107.58	159722	299475	211841	293097	240978	351594
		200A	115699	250813	515761	422299	501432	329946	687247
			4663.9	454128	755632	564998	696546	585676	866502
			39114.82	435468	613611	508042	561357	488783	686185
		600A	324148	904190	1453572	1398685	1421230	926735	1948068
			-180590.4*	—	—	—	—	—	—
			35356.48	1544737	1729347	1633960	1437975	1348752	1818570
	1000m <sup>3</sup> 容量	100A	33964.16	166151	337182	324487	437680	279344	495518
		200A	39660.64	407243	638076	554885	661549	513907	785718
		600A	22336.96	1412596	1798294	1471384	1477146	1418358	1857082
	1060m <sup>3</sup> 容量	100A	33964.16	166151	337182	324487	437680	279344	495518
		200A	39660.64	407243	638076	554885	661549	513907	785718
		600A	22336.96	1412596	1798294	1471384	1477146	1418358	1857082
	1140m <sup>3</sup> 容量	100A	56681.96	149067	299476	307403	396676	238340	457812
		200A	89746.84	361062	566725	508704	586899	439257	714367
		600A	193413.76	1222064	1597205	1280852	1272759	1213971	1655993
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	37367.82	154937	278514	119886	199587	234638	243463
		200A	63939.66	342042	570661	300675	402159	443526	529294
		650A	167003.76	1412331	2016618	1600574	1641873	1453630	2204861

※溶接部の負うべき荷重が負であるため、溶接部の取付け強さの確認は不要である。

表-2-5 円筒型タンクの強め材の取付け強さ (2/3)

機器名称		管台 口径	溶接部の負 うべき荷重	予想される破断箇所の強さ					
			W [N]	W <sub>1</sub> [N]	W <sub>2</sub> [N]	W <sub>3</sub> [N]	W <sub>4</sub> [N]	W <sub>5</sub> [N]	W <sub>6</sub> [N]
多核種処理水 貯槽	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	82175	115577	272545	239591	299186	175172	396559
			24978	112320	249923	172957	265888	205251	310560
		200A	154246	250813	515761	422299	501432	329946	687247
			36114	308283	566725	375720	498382	430945	634162
		600A	432145	801839	1453572	1296335	1421230	926735	1948068
			130882.4	904189	1453570	1398685	1421229	926733	1948066
	760mm (内径)	79200	1512639	2224097	2092065	2129011	1549585	2803523	
	1220m <sup>3</sup> 容量	100A	55708	102524	227151	211627	208210	239071	—
		200A	93155	276035	523632	416928	422218	489306	—
		600A	235930	1053369	1607899	1495884	1367515	1490789	—
	1235m <sup>3</sup> 容量	100A	37367.82	154937	278514	119886	199587	234638	243463
		200A	63939.66	342042	570661	300675	402159	443526	529294
		650A	167003.76	1412331	2016618	1600574	1641873	1453630	2204861
	1330m <sup>3</sup> 容量	100A	72095.91	149067	299476	307403	396676	238340	457812
			54189.7	159722	337179	211841	334760	282641	389298
			49298.40	137365	307402	151959	263968	249374	321996
		200A	120050.88	361062	566725	508704	586899	439257	714367
			76526.3	451097	700590	536945	665569	579721	786438
			84993.00	393683	697071	396642	531885	528926	700030
		600A	285103.70	1222064	1597205	1280852	1272759	1213971	1655993
			127803.2	1676880	2062577	1771247	1780308	1685941	2156944
	650A	210133.20	1807123	2304356	2214742	2019501	1611882	2711975	
	1356m <sup>3</sup> 容量	100A	33261.80	115576	272544	239590	299185	175171	396558
		200A	62433.80	250811	515759	422298	501431	329944	687246
		600A	174917.60	904189	1453570	1398685	1421229	926733	1948066
	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	87207.86	159722	384937	393927	582021	347816	619142
		200A	122940.94	451097	790967	733483	969901	687515	1073353
		600A	205800.96	1301251	2185144	2158562	2683236	1825925	3042455
2900m <sup>3</sup> 容量	100A	55660	106517	343620	151710	331515	286322	388813	
	200A	94803	263580	727160	428196	724848	560232	891776	
	650A	243134	1372633	2454917	2137497	2706349	1941485	3219781	



表-2-5 円筒型タンクの強め材の取付け強さ (3/3)

機器名称		管台 口径	溶接部の 負うべき 荷重	予想される破断箇所の強さ					
			W [N]	W <sub>1</sub> [N]	W <sub>2</sub> [N]	W <sub>3</sub> [N]	W <sub>4</sub> [N]	W <sub>5</sub> [N]	W <sub>6</sub> [N]
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	100A	33964.16	166151	337182	324487	437680	279344	495518
		200A	39660.64	407243	638076	554885	661549	513907	785718
		600A	22336.96	1412596	1798294	1471384	1477146	1418358	1857082
	1160m <sup>3</sup> 容量	100A	37367.82	154937	278514	119886	199587	234638	243463
		200A	63939.66	342042	570661	300675	402159	443526	529294
		650A	167003.76	1412331	2016618	1600574	1641873	1453630	2204861
	1200m <sup>3</sup> 容量	100A	82175	115577	272545	239591	299186	175172	396559
		200A	154246	250813	515761	422299	501432	329946	687247
		600A	432145	801839	1453572	1296335	1421230	926735	1948068

(3) 平成 25 年 8 月 14 日以降に設計するタンクのうち J2・J3 エリアのタンク

a. 円筒型タンクの胴の厚さ評価

設計・建設規格に準拠し、板厚評価を実施した。評価の結果、水頭圧に耐えられることを確認した（表-3-1）。

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

ただし、t の値は炭素鋼，低合金鋼の場合は  $t=3[\text{mm}]$  以上，その他の金属の場合は  $t=1.5[\text{mm}]$  以上とする。また，内径の区分に応じた必要厚さを考慮する。

表-3-1 円筒型タンクの胴の板厚評価結果

機器名称		評価部位	必要肉厚 [mm]	実厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚	14.3	18.8

b. 円筒型タンクの底板の厚さ評価【日本産業規格】

JIS8501 鋼製石油貯槽の構造（2013）5.4.2 底板の大きさ a) , b) に基づき最小呼び厚さとして選定した。（表-3-2）

アニュラ板：側板最下段の厚さ（18.8mm） $15 < t_s \leq 20$  の場合，アニュラ板の最小厚さは 12mm とする。

底板：底板に使用する板の厚さは，6mm 未満となってはならない。

表-3-2 円筒型タンクの底板の板厚評価結果

機器名称		評価部位	最小呼び厚さ [mm]	実厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	タンク板厚 (アニュラ板)	12.0	16.0
		タンク板厚 (底板)	6.0	12.0

c-1. 円筒型タンクの管台の厚さの評価【日本産業規格】

JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造（2013）5.10.3 側ノズル 表 13 に基づき，ノズルの呼び径からネックの最小呼び径厚さを選定した。（表-3-3）

表-3-3 円筒型タンクの管台の板厚評価結果

機器名称		管台口径	評価部位	ネックの最小呼び径厚さ [mm]	実厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	8.6	8.6
		200A	管台板厚	12.7	12.7

c-2. 円筒型タンクのマンホール管台の厚さ, 補強評価【日本産業規格】

JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造 (2013) 5.10.3 側ノズル 表 11, よりに基づき, 測板よりネック部最小厚さを選定した。(表-3-4)

表-3-4 円筒型タンクの管台の板厚評価結果 (マンホール)

機器名称		管台口径	評価部位	ネック部最小厚さ [mm]	実厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	600A	管台板厚	12.0	12.0

c-3. 円筒型タンクの管台の厚さ評価 (参考)

参考として, 設計・建設規格に準拠し, 管台の板厚評価を実施した。評価の結果, 水頭圧に耐えられることを確認した (表-3-5)。

$$t = \frac{D_i H \rho}{0.204 S \eta}$$

t : 管台の計算上必要な厚さ  
 D<sub>i</sub> : 管台の内径  
 H : 水頭  
 ρ : 液体の比重  
 S : 最高使用温度における  
       材料の許容引張応力  
 η : 長手継手の効率

ただし, 管台の外径の区分に応じた必要厚さを考慮する。

表-3-5 円筒型タンクの管台の板厚評価結果

機器名称		管台口径	評価部位	必要肉厚 [mm]	実厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台板厚	3.5 <sup>※</sup>	8.6
		200A	管台板厚	3.5 <sup>※</sup>	12.7
		600A	管台板厚	3.5 <sup>※</sup>	12.0

※管台の外径: 82mm 以上のものについては 3.5mm

d-1. 円筒型タンクの管台の側ノズルの評価【日本産業規格】

JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造 (2013) 5.10.3 側ノズル 表 13 に基づき、ノズルの呼び径から強め材を選定した。(表-3-6)

尚, 強め材の形状の選定として, 5.10.3 側ノズル 図 12 2) 丸型を採用する

表-3-6 円筒型タンクの穴の補強評価結果 (強め材)

機器名称		管台口径	評価部位	強め材材料	強め材の幅 [mm]	強め材の穴 の直径 [mm]	強め材板厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	SM400C	305	118	18.8
		200A	管台	SM400C	480	220	18.8

d-2. 円筒型タンクのマンホール管台の厚さ, 補強評価【日本産業規格】

JIS B 8501 鋼製石油貯槽の構造 (2013) 5.10.3 側ノズル 表 11, よりに基づき強め材を選定した。(表-3-7)

表-3-7 円筒型タンクの穴の補強評価結果 (強め材)

機器名称		管台口径	評価部位	強め材材料	強め材の幅 [mm]	強め材の穴 の直径 [mm]	強め材板厚 [mm]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	600A	管台	SM400C	1370	613	18.8

d-3. 円筒型タンクの胴の穴の補強評価（参考）

参考として、設計・建設規格に準拠し、胴の穴の補強について評価を実施した。評価の結果、補強に有効な面積が補強に必要な面積より大きいため、補強は十分であることを確認した（表-3-8）。

$$A_0 = A_1 + A_2 + A_3 + A_4$$

$$A_1 = (\eta t_s - Ft_{sr})(X - d) - 2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)(\eta t_s - Ft_{sr})t_n$$

$$X = X_1 + X_2$$

$$X_1 = X_2 = \left(\text{Max}\left(d, \frac{d}{2} + t_s + t_n\right)\right)$$

$$A_2 = 2((t_{n1} - t_{nr})Y_1 + t_{n2}Y_2)S_n / S_s$$

$$t_{nr} = \frac{PDi}{2S - 1.2P}$$

$$Y_1 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n1} + Te)$$

$$Y_2 = \text{Min}(2.5t_s, 2.5t_{n2}, h)$$

$$A_3 = L_1L_1 + L_2L_2 + L_3L_3$$

$$A_4 = (W - Wi) \times Te$$

$$W = \text{Min}(X, De)$$

$$Ar = dt_{sr}F + 2\left(1 - \frac{S_n}{S_s}\right)t_{sr}Ft_n$$

- $A_0$  : 補強に有効な総面積
- $A_1$  : 胴、鏡板又は平板部分の補強に有効な面積
- $A_2$  : 管台部分の補強に有効な面積
- $A_3$  : すみ肉溶接部の補強に有効な面積
- $A_4$  : 強め材の補強に有効な面積
- $\eta$  : PVC-3161.2 に規定する効率
- $t_s$  : 胴の最小厚さ
- $t_{sr}$  : 継ぎ目のない胴の計算上必要な厚さ (PVC-3122(1)において  $\eta = 1$  としたもの)
- $t_n$  : 管台最小厚さ
- $t_{n1}$  : 胴板より外側の管台最小厚さ
- $t_{n2}$  : 胴板より内側の管台最小厚さ
- $t_{nr}$  : 管台の計算上必要な厚さ
- $P$  : 最高使用圧力(水頭)= $9.80665 \times 10^3 H \rho$
- $S_s$  : 胴板材料の最高使用温度における許容引張応力
- $S_n$  : 管台材料の最高使用温度における許容引張応力
- $Di$  : 管台の内径
- $X$  : 胴面に沿った補強に有効な範囲
- $X_1$  : 補強に有効な範囲
- $X_2$  : 補強に有効な範囲
- $Y_1$  : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より外側)
- $Y_2$  : 胴面に垂直な補強の有効な範囲 (胴より内側)
- $h$  : 管台突出し高さ (胴より内側)
- $L_1$  : 溶接の脚長
- $L_2$  : 溶接の脚長
- $L_3$  : 溶接の脚長
- $A_r$  : 補強が必要な面積
- $d$  : 胴の断面に現れる穴の径
- $F$  : 係数 (図 PVC-3161.2-1 から求めた値)
- $Te$  : 強め材厚さ
- $W$  : 強め材の有効範囲
- $Wi$  : 開先を含めた管台直径
- $De$  : 強め材外径

d-4. 強め材の取付け強さ（参考）

参考として、設計・建設規格に準拠し、強め材の取り付け強さについて評価を実施した。評価の結果、溶接部の強度が十分であることを確認した（表-3-9）。

$$F_1 = \frac{\pi}{2} d_o L_1 S \eta_1$$

$$F_2 = \frac{\pi}{2} d t_n S_n \eta_3$$

$$F_3 = \frac{\pi}{2} d'_o t_s S \eta_2$$

$$F_4 = \frac{\pi}{2} d_o L_2 S \eta_1$$

$$F_5 = \frac{\pi}{2} W_o L_3 S \eta_1$$

$$F_6 = \frac{\pi}{2} d_o t_s S \eta_2$$

$$W = d'_o t_{sr} S - (t_s - F t_{sr})(X - d'_o) S$$

$$W_1 = F_1 + F_2$$

$$W_2 = F_1 + F_6 + F_4$$

$$W_3 = F_5 + F_2$$

$$W_4 = F_5 + F_3$$

$$W_5 = F_1 + F_3$$

$$W_6 = F_5 + F_6 + F_4$$

$F_1$  : 断面（管台外側のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_2$  : 断面（管台内側の管台壁）におけるせん断強さ

$F_3$  : 断面（突合せ溶接部）におけるせん断強さ

$F_4$  : 断面（管台内側のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_5$  : 断面（強め材のすみ肉溶接部）におけるせん断強さ

$F_6$  : 断面（突合せ溶接部）におけるせん断強さ

$d_o$  : 管台外径

$d$  : 管台内径

$d_o'$  : 胴の穴の径

$W_o$  : 強め材の外径

$S$  : 胴板材料の最高使用温度における許容引張応力

$S_n$  : 管台材料の最高使用温度における許容引張応力

$L_1$  : すみ肉溶接部の脚長（管台取付部（胴より外側））

$L_2$  : すみ肉溶接部の脚長（管台取付部（胴より内側））

$L_3$  : 溶接部の脚長（強め材）

$\eta_1$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$\eta_2$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$\eta_3$  : 強め材の取付け強さ（表 PVC-3169-1 の値）

$W$  : 溶接部の負うべき荷重

$t_{sr}$  : 継目のない胴の計算上必要な厚さ  
(PVC-3122(1)において  $\eta = 1$  としたもの)

$F$  : 管台の取付角度より求まる係数  
(図 PVC-3161. 2-1 から求めた値)

$X$  : 補強に有効な範囲

$W_1$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_2$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_3$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_4$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_5$  : 予想される破断箇所の強さ

$W_6$  : 予想される破断箇所の強さ

表-3-8 円筒型タンクの穴の補強評価結果

機器名称		管台口径	評価部位	Ar [mm <sup>2</sup> ]	A <sub>0</sub> [mm <sup>2</sup> ]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	管台	911	3665
		200A	管台	1785	6864
		600A	管台	5423	18198

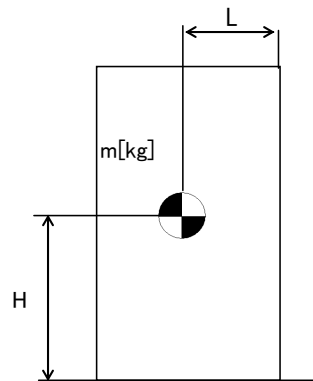
表-3-9 円筒型タンクの強め材の取付け強さ

機器名称		管台口径	溶接部の負うべき荷重 W [N]	予想される破断箇所の強さ					
				W <sub>1</sub> [N]	W <sub>2</sub> [N]	W <sub>3</sub> [N]	W <sub>4</sub> [N]	W <sub>5</sub> [N]	W <sub>6</sub> [N]
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量	100A	63457.2	159724	384940	393929	582023	347818	619145
		200A	76246.8	451099	790970	733485	969903	687517	1073356
		600A	62563.2	1301253	2185147	2158564	2683238	1825927	3042458

## 2. 耐震性評価

### a. 転倒評価

地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した（表-4）。



- m : 機器質量
- g : 重力加速度
- H : 据付面からの重心までの距離
- L : 転倒支点から機器重心までの距離
- C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント :  $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント :  $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

表-4 タンク・槽類の転倒評価結果

機器名称		評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
RO 濃縮水貯槽 多核種処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量 (溶接)	本体	転倒	0.36	2.4×10 <sup>4</sup>	7.4×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	2.5×10 <sup>4</sup>	7.7×10 <sup>4</sup>	kN・m
RO 濃縮水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	2.2×10 <sup>4</sup>	3.5×10 <sup>4</sup>	kN・m
RO 濃縮水貯槽 濃縮廃液貯槽 RO 処理水貯槽 蒸発濃縮処理水貯槽	1000m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.2×10 <sup>4</sup>	6.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	1.8×10 <sup>4</sup>	3.5×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	2.0×10 <sup>4</sup>	3.4×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	2.2×10 <sup>4</sup>	3.2×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1000m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.2×10 <sup>4</sup>	6.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1060m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.2×10 <sup>4</sup>	6.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1140m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.3×10 <sup>4</sup>	6.6×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1160m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.1×10 <sup>4</sup>	7.1×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1200m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.1×10 <sup>4</sup>	8.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	2.4×10 <sup>4</sup>	7.5×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1220m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	2.7×10 <sup>4</sup>	7.8×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1235m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.1×10 <sup>4</sup>	7.1×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1330m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	4.0×10 <sup>4</sup>	8.1×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	4.0×10 <sup>4</sup>	8.0×10 <sup>4</sup>	kN・m
		本体	転倒	0.36	3.9×10 <sup>4</sup>	8.0×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1356m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.4×10 <sup>4</sup>	9.6×10 <sup>4</sup>	kN・m
	2400m <sup>3</sup> 容量 (J2, J3)	本体	転倒	0.36	6.8×10 <sup>4</sup>	23.2×10 <sup>4</sup>	kN・m
	2400m <sup>3</sup> 容量 (H2)	本体	転倒	0.36	6.9×10 <sup>4</sup>	23.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
2900m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	7.1×10 <sup>4</sup>	2.5×10 <sup>5</sup>	kN・m	
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.2×10 <sup>4</sup>	6.3×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1160m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.1×10 <sup>4</sup>	7.1×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1200m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.36	3.1×10 <sup>4</sup>	8.3×10 <sup>4</sup>	kN・m



b. 応力評価及び座屈評価

汚染水処理設備等を構成する機器のうち中低濃度タンク（円筒型）については、以下の通り貯留機能維持について評価する。

『JEAC4601-2008 原子力発電所耐震設計技術規程』に基づき、タンク胴板の応力評価及び座屈評価により、発生する応力が許容値を超えないことを確認する。

1. 評価

1.1. 胴の応力評価

イ. 組合せ応力が胴の最高使用温度における許容応力  $S_a$  以下であること。

応力の種類	許容応力 $S_a$
一次一般膜応力	設計降伏点 $S_y$ と設計引張強さ $S_u$ の0.6倍のいずれか小さい方の値。

一次応力の評価は算出応力が一次一般膜応力と同じ値であるので省略する。

応力計算において、静的地震力を用いる場合は、絶対値和を用いる。

(1) 静水頭及び鉛直方向地震による応力

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i}{2 \cdot t}$$

$$\sigma_{\phi 2} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i \cdot C_v}{2 \cdot t}$$

$$\sigma_{x 1} = 0$$

(2) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

胴がベースプレートと接合する点には、胴自身の質量による圧縮応力と鉛直方向地震による軸方向応力が生じる。

$$\sigma_{x 2} = \frac{m_e \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t}$$

$$\sigma_{x 3} = \frac{m_e \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t}$$

(3) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により胴はベースプレート接合部で最大となる曲げモーメントを受ける。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

$$\sigma_{x 4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \lambda_g}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t}$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t}$$

(4) 組合せ応力

(1)～(3)によって求めた胴の応力は以下のように組み合わせる。

a. 一次一般膜応力

(a) 組合せ引張応力

$$\sigma_{\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 2}$$

$$\sigma_{ot} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xt})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\}$$

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} - \sigma_{x2} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4}$$

(b) 組合せ圧縮応力

$\sigma_{xc}$ が正の値（圧縮側）のとき、次の組合せ圧縮応力を求める。

$$\sigma_{\phi} = -\sigma_{\phi 1} - \sigma_{\phi 2}$$

$$\sigma_{oc} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xc})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\}$$

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4}$$

したがって、胴の組合せ一次一般膜応力の最大値は、

$$\sigma_o = \text{Max} \left\{ \text{組合せ引張応力} (\sigma_{ot}), \text{組合せ圧縮応力} (\sigma_{oc}) \right\} \text{ と}$$

する。一次応力は一次一般膜応力と同じになるので省略する。

表-5 円筒型タンク応力評価結果

機器名称	部材	材料	水平方向 設計震度	応力	算出応力 [MPa]	許容応力 [MPa]	
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	一次一般膜	54	237
		胴板	SS400	0.36	一次一般膜	43	236
		胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	61	235
	1000m <sup>3</sup> 容量	胴板	SS400	0.36	一次一般膜	58	236
	1060m <sup>3</sup> 容量	胴板	SS400	0.36	一次一般膜	58	236
	1140m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400B	0.36	一次一般膜	57	236
	1160m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	70	231
	1200m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	一次一般膜	62	240
	1220m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	64	240
	1330m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400B	0.36	一次一般膜	80	236
		胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	65	235
		胴板	SM490A	0.36	一次一般膜	79	279
	1356m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	一次一般膜	73	236
	2400m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	65	235

ロ. 圧縮膜応力（圧縮応力と曲げによる圧縮側応力の組合せ）は次式を満足すること。  
（座屈の評価）

$$\frac{\eta \cdot (\sigma_{x2} + \sigma_{x3})}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{x4}}{f_b} \leq 1$$

ここで、 $f_c$ は次による。

$$\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{6800 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_1 \left( \frac{8000 \cdot g}{F} \right) \right\} \cdot \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right]$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_c = \phi_1 \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \right)$$

ただし、 $\phi_1(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_1(x) = 0.6 \cdot \frac{E}{x} \cdot \left[ 1 - 0.901 \cdot \left\{ 1 - \exp \left( -\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x} \right) \right\} \right]$$

また、 $f_b$ は次による。

$$\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{9600 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{8400 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_2 \left( \frac{9600 \cdot g}{F} \right) \right\} \cdot \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right]$$

$$\frac{9600 \cdot g}{F} \leq \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_b = \phi_2 \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \right)$$

ただし、 $\phi_2(x)$  は次の関数とする。

$$\phi_2(x) = 0.6 \cdot \frac{E}{x} \cdot \left[ 1 - 0.731 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right]$$

$\eta$  は安全率で次による。

$$\frac{D_{i+2} \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_{i+2} \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 + \frac{0.5 \cdot F}{6800 \cdot g} \cdot \left( \frac{D_{i+2} \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_{i+2} \cdot t}{2 \cdot t} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1.5$$

表-6 円筒型タンク座屈評価

機器名称	部材	材料	水平方向 設計震度	座屈評価結果	
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	0.24 < 1
		胴板	SS400	0.36	0.17 < 1
		胴板	SM400C	0.36	0.29 < 1
	1000m <sup>3</sup> 容量	胴板	SS400	0.36	0.24 < 1
	1060m <sup>3</sup> 容量	胴板	SS400	0.36	0.24 < 1
	1140m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400B	0.36	0.20 < 1
	1160m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	0.36 < 1
	1200m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	0.28 < 1
	1220m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	0.31 < 1
	1330m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400B	0.36	0.48 < 1
		胴板	SM400C	0.36	0.27 < 1
		胴板	SM490A	0.36	0.43 < 1
	1356m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400A	0.36	0.37 < 1
	2400m <sup>3</sup> 容量	胴板	SM400C	0.36	0.23 < 1

## 記号の説明

記号	記号の説明	単位
$C_H$	水平方向設計震度	—
$C_v$	鉛直方向設計震度	—
$D_i$	胴の内径	mm
$E$	胴の縦弾性係数	MPa
$F$	設計・建設規格 SSB-3121.1又はSSB-3131に定める値	MPa
$f_b$	曲げモーメントに対する許容座屈応力	MPa
$f_c$	軸圧縮荷重に対する許容座屈応力	MPa
$g$	重力加速度 (=9.80665)	m/s <sup>2</sup>
$H$	水頭	mm
$\lambda_g$	基礎から容器重心までの距離	mm
$m_o$	容器の運転時質量	kg
$m_e$	容器の空質量	kg
$S$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表5に定める値	MPa
$S_a$	胴の許容応力	MPa
$S_u$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9に定める値	MPa
$S_y$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8に定める値	MPa
$t$	胴板の厚さ	mm
$\eta$	座屈応力に対する安全率	—
$\pi$	円周率	—
$\rho'$	液体の密度 (=比重 $\times 10^{-6}$ )	kg/mm <sup>3</sup>
$\sigma_o$	胴の一次一般膜応力の最大値	MPa
$\sigma_{oc}$	胴の組合せ圧縮応力	MPa
$\sigma_{ot}$	胴の組合せ引張応力	MPa
$\sigma_{x1}, \sigma_{\phi 1}$	静水頭により胴に生じる軸方向及び周方向応力	MPa
$\sigma_{x2}$	胴の空質量による軸方向圧縮応力	MPa
$\sigma_{x3}$	胴の鉛直方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{x4}$	胴の水平方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{xc}$	胴の軸方向応力の和 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{xt}$	胴の軸方向応力の和 (引張側)	MPa
$\sigma_{\phi}$	胴の周方向応力の和	MPa
$\sigma_{\phi 2}$	静水頭に鉛直方向地震が加わり胴に生じる周方向応力	MPa
$\tau$	地震により胴に生じるせん断応力	MPa
$\phi_1(x)$	圧縮荷重に対する許容座屈応力の関数	MPa
$\phi_2(x)$	曲げモーメントに対する許容座屈応力の関数	MPa

以上

## 中低濃度タンク（円筒型）に係る確認事項

表-1-1 構造強度及び機能・性能に関する確認事項（中低濃度タンク）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。 連結管・連結弁については、納品記録、製品仕様にて確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。 連結管及び連結弁は製品仕様（最高使用圧力）がタンクの水頭圧以上であること。
	寸法確認	主要寸法（板厚，内径，高さ）を確認する。	実施計画の記載とおりであること。
	外観確認	タンク本体（塗装状態含む），連結管・連結弁の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	組立状態及び据付状態を確認する。	組立状態及び据付状態に異常がないこと。
		タンク基礎の不陸について確認する。	異常な不陸がないこと。
	耐圧・漏えい確認	①：G3・J1 エリア 運用水位以上で，一定時間（24 時間）以上保持した後，試験圧力に耐え，かつ，漏えいのないことを確認する。	各部からの有意な漏えいおよび水位の低下がないこと。
		②：①・③以外のタンク 設計・建設規格に基づき耐圧・漏えい試験を行う。	
③：J2・J3 エリア 日本産業規格に基づき耐圧・漏えい試験を行う。			
地盤支持力確認	支持力試験にてタンク基礎の地盤支持力を確認する。	必要な支持力を有していること。	
機能 ・性能	監視確認	水位計について，免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室にタンク水位が表示できることを確認する。	免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室にタンク水位が表示できること。
	寸法確認	基礎外周堰の高さ，もしくは堰内容量を確認する。（別紙-6 表-1 に記載のエリアは基礎外周堰の高さ、別紙-6 表-2 に記載のエリアは堰内容量を確認する。）	必要容量に相当する高さ，もしくは堰内容量があること。（別紙-6 表-1 に記載のエリアは基礎外周堰の高さ、別紙-6 表-2 に記載のエリアは堰内容量を確認する。）
	外観確認	基礎外周堰の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	貯留機能	漏えいなく貯留できることを確認する。	タンク及び附属設備（連結管，連結弁，マンホール，ドレン弁）に漏えいがないこと。

表-1-2 構造強度及び機能・性能に関する確認事項  
(タンク入口配管 (鋼管))

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画の記載とおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画の記載とおりであること。
	外観確認	各部の外観について、立会いまたは記録により確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器が図面のとおり据付ていることを立会いまたは記録により確認する。	図面のとおり施工・据付ていること。
	耐圧・漏えい確認 注1	①：最高使用圧力の1.5倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。	最高使用圧力の1.5倍に耐え、かつ構造物の変形等がないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。
	②：運転圧力で耐圧部からの漏えいのないことを立会いまたは記録により確認する。※1	耐圧部から漏えいがないこと。	
機能・性能	通水確認	通水ができることを立会いまたは記録により確認する。	通水ができること。

※1：運転圧力による耐圧部の漏えい検査が実施できない配管フランジ部については、トルク確認等の代替検査を実施する。

注1：耐圧漏えい確認は、①②のいずれかとする。

表-1-3 構造強度及び機能・性能に関する確認事項  
(主要配管及びタンク入口配管 (ポリエチレン管))

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	材料確認	実施計画に記載した材料について、製品検査成績書により確認する。	実施計画の記載とおりにあること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法(外径相当)について、製品検査成績書により確認する。	実施計画の記載とおりにあること。
	外観確認	各部の外観について、立会いまたは記録により確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器が図面のおりに据付ていることを立会いまたは記録により確認する。	図面のおりに施工・据付ていること。
	耐圧・漏えい確認 注1		①: 最高使用圧力以上で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。
②: 気圧により、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録で確認する。			耐圧部から漏えいがないこと。
③: 運転圧力で耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録で確認する。			
機能・性能	通水確認	通水ができることを立会いまたは記録により確認する。	通水ができること。

注1: 耐圧漏えい確認は、①②③のいずれかとする。



廃止（表-2-1 溶接部に関する確認事項）  
（中低濃度タンク（G4エリア））

表-2-2 溶接部に関する確認事項  
(中低濃度タンク (G3エリア))

確認項目	確認内容	判定
材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。 炭素含有量が0.35%を超えていないこと。
開先確認	開先に関連する記録、使用された切断機械の仕様、要領書等により、開先加工の管理が行われていることを確認する。	開先加工の管理が行われていること。
溶接作業確認	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものであることを確認する。	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものであること。
	溶接設備が溶接施工法に適したものであることを確認する。	溶接設備が溶接施工法に適したものであること。
	溶接士が、JISの有資格者であって、同資格が有効期間内であることを確認する。	溶接士がJISの有資格者であること。 同資格が有効期間内であること。
非破壊確認	機能に影響を及ぼす有意な欠陥がないことを確認する。または、同じ工場で作られた同型タンクの記録やサンプリングした代表溶接線の記録において、機能に影響を及ぼす有意な欠陥がないことを確認する。	機能に影響を及ぼす有意な欠陥がないこと。
耐圧確認	運用水位以上で、一定時間（溶接型タンク：24時間）以上保持した後、試験圧力に耐え、かつ、漏えいのないことを確認する。	耐圧試験に耐え、かつ、漏えいがないこと。
外観確認	溶接部の寸法が、強度上必要な設計寸法以上であることを確認する。 または、同じ工場で作られた同型タンクの記録やサンプリングした代表溶接線の記録において、寸法が、強度上必要な設計寸法以上であることを確認する	溶接部の寸法が、強度上必要な設計寸法以上であること。

表－２－３ 溶接部に関する確認事項  
(中低濃度タンク (J 1 エリア))

確認項目	確認内容	判定
材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。 炭素含有量が 0.35% を超えていないこと。
開先確認	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物の有無を確認する。	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物がないこと。
	開先形状、寸法について確認する。	開先形状、寸法が設計・建設規格、または日本産業規格に適合していること。 適合していない形状・寸法については、強度計算により必要な強度を有していること。
溶接作業確認※	溶接施工法が、溶接規格第 2 部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものであることを確認する。	溶接施工法が、溶接規格第 2 部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものであること。
	溶接設備が溶接施工法に適したものであることを確認する。	溶接設備が溶接施工法に適したものであること。
	溶接士が、JIS の有資格者であって、同資格が有効期間内であることを確認する。	溶接士が JIS の有資格者であること。 同資格が有効期間内であること。
	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法によって、溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていることを確認する。	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法で行われていること。 溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていること。
非破壊確認	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合することを確認する。	溶接部の非破壊検査結果が溶接規格等に適合していること。
耐圧確認	運用水位以上で、一定時間（溶接型タンク：24 時間）以上保持した後、試験圧力に耐え、かつ、漏えいのないことを確認する。	耐圧試験に耐え、かつ、漏えいがないこと。
外観確認	溶接部の形状、寸法、及び状態について確認する。	溶接部の形状及び寸法が、設計・建設規格、又は日本産業規格に適合していること。 適合していない溶接部については、強度計算により必要な強度を有していること。 溶接部に有害なものがないこと。

※自動溶接機を用いる溶接士については、「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則の解釈」別記-5 日本機械学会「溶接規格」等の適用に当たっての記載のうち、“3. 溶接規格「第 3 部 溶接士技能認証標準」(3) 溶接士技能認証標準と同等と認められるもの”及び“3. 溶接規格「第 3 部 溶接士技能認証標準」(4) 溶接士技能認証標準に適合する溶接士技能の有効期間”を満足することを確認する。

表-2-4 溶接部に関する確認事項  
(中低濃度タンク (G7エリア))

確認項目	確認内容	判定
材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。 炭素含有量が0.35%を超えていないこと。
開先確認	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物の有無を確認する。	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物がないこと。
	開先形状、寸法について確認する。	開先形状、寸法が溶接規格に適合していること。
溶接作業確認	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものまたは電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認されたものであることを確認する。	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものまたは電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認されたものであること。
	溶接設備が溶接施工法に適したものであることを確認する。	溶接設備が溶接施工法に適したものであること。
	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であることを確認する。 ・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者、 ・溶接技能認証標準と同等と認められるJISの適合性証明書交付受領者 ・溶接技能認証標準と同等の施工会社社内技能認証標準に基づく有資格者	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であること。 ・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者 ・溶接技能認証標準と同等と認められるJISの適合性証明書交付受領者 ・溶接技能認証標準と同等の施工会社社内技能認証標準に基づく有資格者
	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法によって、溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていることを確認する。	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法で行われていること。 溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていること。
非破壊確認	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合することを確認する。	溶接部の非破壊検査結果が溶接規格等に適合していること。
耐圧確認	溶接規格に基づき耐圧試験を行う。 また、耐圧確認時に漏えい確認が困難な箇所については、代替試験にて確認する。	耐圧試験に耐え、かつ、漏えいがないこと。 代替試験については、溶接規格に適合していること。
外観確認	溶接部の形状、寸法、及び状態について確認する。	溶接部の形状及び寸法が、溶接規格に適合していること。 溶接部に有害なものがないこと。

表-2-5 溶接部に関する確認事項  
(中低濃度タンク (Dエリア))

確認項目	確認内容	判定
材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。 炭素含有量が0.35%を超えていないこと。
開先確認	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物の有無を確認する。	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物がないこと。
	開先形状、寸法について確認する。	開先形状、寸法が溶接規格に適合していること。
溶接作業確認	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものまたは電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認されたものであることを確認する。	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したものまたは電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認されたものであること。
	溶接設備が溶接施工法に適したものであることを確認する。	溶接設備が溶接施工法に適したものであること。
	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であることを確認する。 ・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者、 ・溶接技能認証標準と同等と認められるJISの適合性証明書交付受領者	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であることを確認する。 ・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者 ・溶接技能認証標準と同等と認められるJISの適合性証明書交付受領者
	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法によって、溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていることを確認する。	溶接が、あらかじめ決められた溶接施工法で行われていること。 溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていること。
非破壊確認	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合することを確認する。	溶接部の非破壊検査結果が溶接規格等に適合していること。
耐圧確認	溶接規格に基づき耐圧試験を行う。 また、耐圧確認時に漏えい確認が困難な箇所については、代替試験にて確認する。	耐圧試験に耐え、かつ、漏えいがないこと。 代替試験については、溶接規格に適合していること。
外観確認	溶接部の形状、寸法、及び状態について確認する。	溶接部の形状及び寸法が、溶接規格に適合していること。 溶接部に有害なものがないこと。

以上

廃止（フランジタンクの止水構造に関する説明書）

フランジタンク撤去に伴い本内容を削除

## タンク基礎に関する説明書

## 1. タンク基礎の支持力

## (1) 評価方法

タンクの鉛直荷重と極限支持力を比較して評価を行う。支持力の算定式は「社団法人日本道路協会（2002）：道路橋示方書・同解説Ⅳ下部構造編」に基づき次式を用いる。計算した結果、①タンクの鉛直荷重<②タンク基礎底面地盤の極限支持力であり、安全性を有していることを確認する。

$$\textcircled{1} \text{タンクの鉛直荷重} : W = m \times g$$

$$\textcircled{2} \text{タンク基礎底面地盤の極限支持力} : Q_u = A_e \left( \alpha k c N_c S_c + k q N_q S_q + \frac{1}{2} \gamma_1 \beta B_e N_r S_r \right)$$

$m$  : 機器質量

$g$  : 重力加速度

$A_e$  : 有効載荷面積

$\alpha, \beta$  : 基礎の形状係数

$k$  : 根入れ効果に対する割増し係数

$c$  : 地盤の粘着力

$N_c, N_q, N_r$  : 荷重の傾斜を考慮した支持力係数

$S_c, S_q, S_r$  : 支持力係数の寸法効果に関する補正係数

$q$  : 上載荷重 ( $q = \gamma_2 D_f$ )

$\gamma_1, \gamma_2$  : 支持地盤及び根入れ地盤の単位重量 ( $\gamma_1, \gamma_2 = 15.9 \text{ kN/m}^3$ )

$D_f$  : 基礎の有効根入れ深さ

$B_e$  : 荷重の偏心を考慮した基礎の有効載荷幅 ( $B_e = B - 2e_B$ )

$B$  : 基礎幅

$e_B$  : 荷重の偏心量

## (2) 管理

地盤改良後、簡易支持力測定器（キャスポル）※により地盤の強度を測定し、上記式により必要な極限支持力を有していることを確認する。

※ランマー（重鎮）を一定の高さから地盤に自由落下させたときに生ずる衝撃加速度の最大値と地盤強度特性値と相関させる衝撃加速度法を基本原理とした簡易な測定器。

## 2. タンク基礎の不陸

### (1) 評価方法

タンクの設置高さが、設計高さに対して許容値以内\*であることを確認する。

※ 設計高さ±30mm（社内基準値）

### (2) 管理

タンク基礎高さ（レベル）を測量し、当該高さが設計高さに対して±30mm以内であることを確認する。

以上



## 中低濃度タンク（円筒型）の基礎外周堰の堰内容量に関する説明書

中低濃度タンクから漏えいが生じた際に漏えい水の拡大を抑制するための基礎外周堰の堰内容量は、タンク 20 基当たり 1 基分の貯留容量（20 基以上の場合は 20 基あたり 1 基分の割合の容量、20 基に満たない場合でも 1 基分）を確保できる容量に、大雨時の作業等を考慮した余裕高さ（堰高さで 20cm 程度）分の容量との合計とする。各タンク設置エリアの基礎外周堰の高さもしくは、堰内容量を表-1、2 に示す。

表-1 各タンク設置エリアの基礎外周堰の高さ

設置場所	タンク 設置 基数	想定漏えい		基礎外周 堰内面積 (m <sup>2</sup> )	タンク 専有面積 (m <sup>2</sup> )	貯留可能 面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰 の高さ (m)
		基数	容量 (m <sup>3</sup> )				
			①	②	③	④ <sup>*1</sup>	⑤ <sup>*2</sup>
J5	35	1.75	2,162	5,319	3,305	2,014	1.274 以上
J3	22	1.1	2,640	7,455	4,349	3,106	1.050 以上
J6	38	1.9	2,280	6,751	4,206	2,545	1.096 以上
K1 北	12	1	1,200	2,499	1,250	1,249	1.161 以上
K1 南	10	1	1,160	1,800	860	941	1.433 以上
H1	63	3.15	3,843	11,723	6,820	4,903	0.984 以上

※1 ④=②-③

※2 ⑤=①/④+0.2（余裕分 20cm）

表-2 各タンク設置エリアの基礎外周堰の堰内容量 (1/2)

設置場所	タンク設置基数	想定漏えい		基礎外周堰の堰内容量 (m <sup>3</sup> )	(計画値)			
		基数	容量 (m <sup>3</sup> )		基礎外周堰内面積 (m <sup>2</sup> )	タンク専有面積 (m <sup>2</sup> )	貯留可能面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰の高さ (m)
J1(I)	28	1.4	1,400	1,823 以上	5,158	3,051	2,107	0.865 以上
J1(II)	35	1.75	1,750	2,281 以上	6,494	3,842	2,652	0.860 以上
J1(III)	37	1.85	1,850	2,411 以上	6,875	4,068	2,807	0.859 以上
J2 <sup>*4</sup>	42	2.1	5,040	6,208 以上	6,883	4,556	2,327	1.121 以上 <sup>*4</sup>
					6,139	3,728	2,411	0.771 以上 <sup>*4</sup>
					1,073	-	1,073	1.621 以上 <sup>*4</sup>
J4	35	1.75	5,075	6,208 以上	12,660	6,991	5,669	1.095 以上
J7	42	2.1	2,520	3,146 以上	7,671	4,547	3,124	1.007 以上
H1 東	24	1.2	1,464	1,857 以上	4,562	2,606	1,956	0.949 以上
J8	9	1	700	818 以上	1,100	512	588	1.391 以上
K3	12	1	700	836 以上	1,248	572	676	1.236 以上
J9	12	1	700	826 以上	1,332	704	628	1.315 以上
K4	35 <sup>*8</sup>	1.75	1,750	2,190 以上	5,145	2,944	2,201	0.995 以上
H2	44	2.2	5,280	6,548 以上	15,035	8,697	6,338	1.033 以上
H4 北	35	1.75	2,100	2,656 以上	6,630	3,861	2,769	0.959 以上
H4 南	51	2.55	2,910	3,567 以上	7,413	4,128	3,285	1.086 以上
G1 南	23	1.15	1,530	1,868 以上	3,815	2,129	1,686	1.108 以上
H5	32	1.6	1,920	2,510 以上	6,471	3,521	2,950	0.851 以上
H6(I)	12 <sup>*6</sup>	1	1,200	1,473 以上	2,564	1,200	1,364	1.080 以上
B	37	1.85	2,470	2,875 以上	4,287	2,262	2,025	1.420 以上
B 南	7	1	1,330	1,485 以上	1,349	574	775	1.917 以上
H3 <sup>*4</sup>	10	1	1,356	1,633 以上	2,126	1,109	1,017	1.050 以上 <sup>*4</sup>
					365	-	365	1.550 以上 <sup>*4</sup>
H6(II)	24	1.2	1,630	2,034 以上	4,855	2,834	2,021	1.007 以上
G3 北	6	1	1,100	1,322 以上	1,677	569	1,108	1.193 以上 <sup>*4</sup>
								1.393 以上 <sup>*4</sup>
G3 西	40 <sup>*5</sup>	2.5	2,600	3,453 以上	8,072	4,320	3,752	0.878 以上
G7	10				1,019	520	499	0.315 以上
G6	38	1.90	2,530	3,024 以上	6,002	3,536	2,466	1.226 以上
K2	28	1.40	1,480	1,948 以上	4,462	2,133	2,329	0.836 以上
D	41 <sup>*7</sup>	2.05	2,140	2,679 以上	5,781	3,097	2,684	0.998 以上
G1	66	3.30	4,480	5,408 以上	12,407	7,769	4,638	1.166 以上
G4 南	26	1.3	1,770	2,168 以上	5,064	3,083	1,981	1.094 以上

表-2 各タンク設置エリアの基礎外周堰の堰内容量 (2/2)

設置場所	タンク設置基数	想定漏えい		基礎外周堰の堰内容量 (m <sup>3</sup> )	(計画値)			
		基数	容量 (m <sup>3</sup> )		基礎外周堰内面積 (m <sup>2</sup> )	タンク専有面積 (m <sup>2</sup> )	貯留可能面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰の高さ (m)
G4 北 <sup>※4</sup>	6	1	1,356	1,566 以上	1,203 457	617 -	586 457	1.376 以上 <sup>※4</sup> 1.661 以上 <sup>※4</sup>
G5	17	1	1,356	1,610 以上	3,236	1,973	1,263	1.274 以上

※1 ②=⑤×⑥

J2, H3, G4 北は場所により基礎外周堰の高さが異なるため、堰内容量は合計値を記載。

G3 西・G7 は基礎外周堰を共有しているため、想定漏えい容量および基礎外周堰の堰内容量は合計値を記載。

※2 ⑤=③-④

※3 ⑥=①/⑤+0.2 (余裕分 20cm)

J2, H3 の基礎外周堰の高さは、想定漏えい容量を貯留可能な堰高さを求め、各々に余裕分 20cm を加えた値を記載。

※4 J2, H3, G3 北, G4 北は場所により基礎標高が異なるため、計画値は各々の値を記載。

※5 40 基中 1 基は雨水回収タンク

※6 12 基中 1 基は雨水回収タンク

※7 41 基中 12 基は R0 後淡水受タンク (R0 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽)

※8 35 基中 30 基は「II 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設」の測定・確認用タンクと兼用する。

中低濃度タンク（円筒型）からの直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

## 1. 評価条件

### 1. 1 多核種処理水貯槽

多核種処理水は、RO 濃縮水に対して放射能濃度が低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さいと考えられるが、各エリアの多核種処理水貯槽に貯留する多核種処理水による敷地境界での線量評価を実施する。評価条件については、多核種処理水の分析結果（平成 25 年 7 月）をタンク内保有水の放射能濃度として設定し、評価対象タンク群を等価面積の大型円柱形状、又は評価対象タンク群を囲うような多角形としてモデル化する。なお、本評価条件では、大型円柱形状の場合は線量評価点に最も近いタンクに当該タンク群の線源を集合させてモデル化を行うことにより、評価上の距離が実際よりも短くなること、多角形でモデル化した場合はタンク設置面積より大きくモデル化することから、保守的な評価結果となる。

### 1. 2 Sr 処理水貯槽

評価条件については、RO 濃縮水処理設備の処理済水の想定放射能濃度として設定し、評価対象タンク群を囲うような多角形としてモデル化する。なお、本評価条件では、多角形でモデル化した場合はタンク設置面積より大きくモデル化することから、保守的な評価結果となる。

### 1. 3 RO 濃縮水貯槽、濃縮廃液貯槽、RO 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽

評価条件については、RO 濃縮水及び濃縮廃液の分析結果をタンク内保有水の放射能濃度として設定し、評価対象タンク 1 基ずつの形状をモデル化する。

D エリアについては、RO 濃縮水貯槽 ( $1.6 \times 10^4$  Bq/cm<sup>3</sup>) 及び濃縮廃液貯槽 ( $2.8 \times 10^5$  Bq/cm<sup>3</sup>) に貯留する高濃度の液体による敷地境界線量への影響が支配的であり、RO 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽に貯留する液体の放射能濃度は、 $1.0 \times 10^{-2}$  Bq/cm<sup>3</sup> と低い為、考慮しない事とする。

## 2. 評価結果

### 2. 1 多核種処理水貯槽

#### 2. 1. 1 J2 エリア

最寄りの線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 2 J3 エリア

最寄りの線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点にお

ける直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 3 J4 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 16) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $1.8 \times 10^{-3}$  mSv/y であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 4 J6 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 16) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 5 H1 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 38) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 6 J7 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 17) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $1.1 \times 10^{-3}$  mSv/y であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 7 H1 東エリア

最寄りの線量評価点 (No. 37) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 8 J8 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 17) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001 mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 9 K3 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 70) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、

0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 10 J9 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 17) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 11 K4 エリア※

最寄りの線量評価点 (No. 70) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

※K4 エリアタンクの一部を「II 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設」の測定・確認用タンクと兼用する。

#### 2. 1. 12 H2 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 17) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 13 H4 北エリア

最寄りの線量評価点 (No. 14) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 14 H4 南エリア

最寄りの線量評価点 (No. 14) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、0.0001mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 15 G1南エリア

最寄りの線量評価点 (No. 5) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4}$ mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 16 H5エリア

最寄りの線量評価点 (No. 14) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 17 H6(I)エリア

最寄りの線量評価点 (No. 14) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 18 Bエリア

最寄りの線量評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 19 B南エリア

最寄りの線量評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 20 H3エリア

最寄りの線量評価点 (No. 17) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 21 H6(II)エリア

最寄りの線量評価点 (No. 14) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 22 G6エリア

最寄りの線量評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-3} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、

敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 23 G1 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 24 G4 南エリア

最寄りの線量評価点 (No. 5) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 25 G4 北エリア

最寄りの線量評価点 (No. 5) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 1. 26 G5 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 5) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-3} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。また、敷地境界線上の最大線量評価点における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、最寄りの線量評価点より低く、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

### 2. 2 Sr 処理水貯槽

#### 2. 2. 1 K1 北エリア

最寄りの線量評価点 (No. 66) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $0.11 \text{mSv/y}$  であり、敷地境界線量は  $1 \text{mSv/y}$  を超過しない。また、敷地境界線上の最大線量評価点 (No. 7) (2014年12月現在) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 2. 2 K2 エリア

最寄りの線量評価点 (No. 66) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $0.36 \text{mSv/y}$  であり、敷地境界線量は  $1 \text{mSv/y}$  を超過しない。また、敷地境界線上の最大線量評価点 (No. 7) (2014年12月現在) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4} \text{mSv/y}$  未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。

#### 2. 2. 3 K1 南エリア

最寄りの線量評価点 (No. 66) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $0.029 \text{mSv/y}$  であり、敷地境界線量は  $1 \text{mSv/y}$  を超過しない。また、敷地境界線上の最大線量

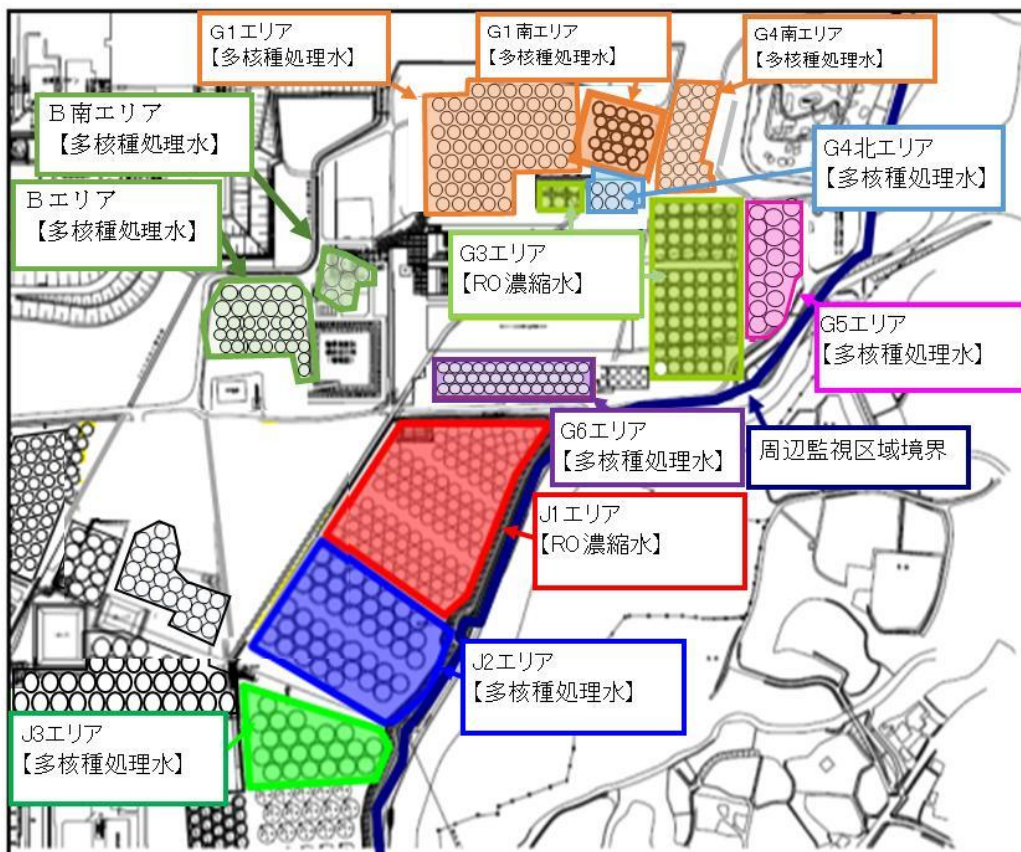


評価点 (No. 7) (2015 年 3 月現在) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.0 \times 10^{-4}$  mSv/y 未満であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。参考として、線量評価点 (No. 30), (No. 38) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約  $9.7 \times 10^{-4}$  mSv/y, 約  $2.0 \times 10^{-3}$  mSv/y である。

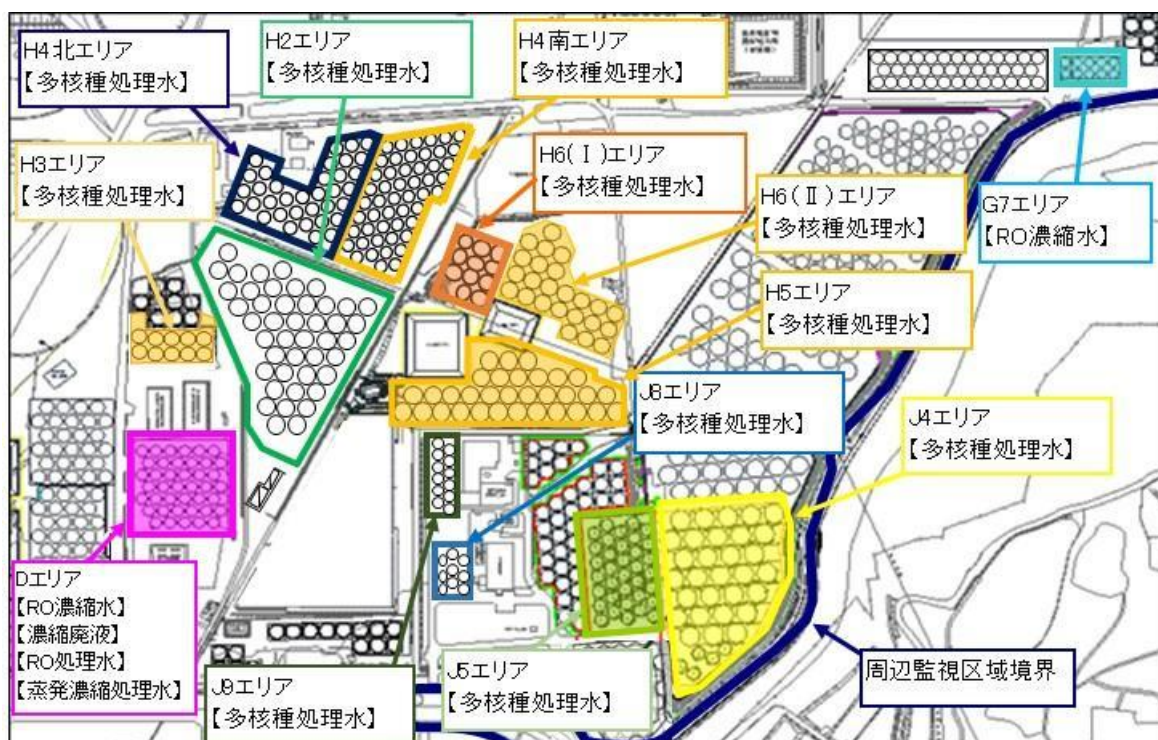
## 2. 3 R0 濃縮水貯槽, 濃縮廃液貯槽, R0 処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽

### 2. 3. 1 D エリア

最寄りの線量評価点 (No. 30) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、約 0.061mSv/y であり、敷地境界線量は 1mSv/y を超過しない。また、敷地境界線上の最大線量評価点 (No. 71) (2019 年 8 月現在) における直接線・スカイシャイン線の評価結果は、 $1.5 \times 10^{-3}$  mSv/y であり、敷地境界線量に及ぼす影響は小さい。



タンクエリア全体図

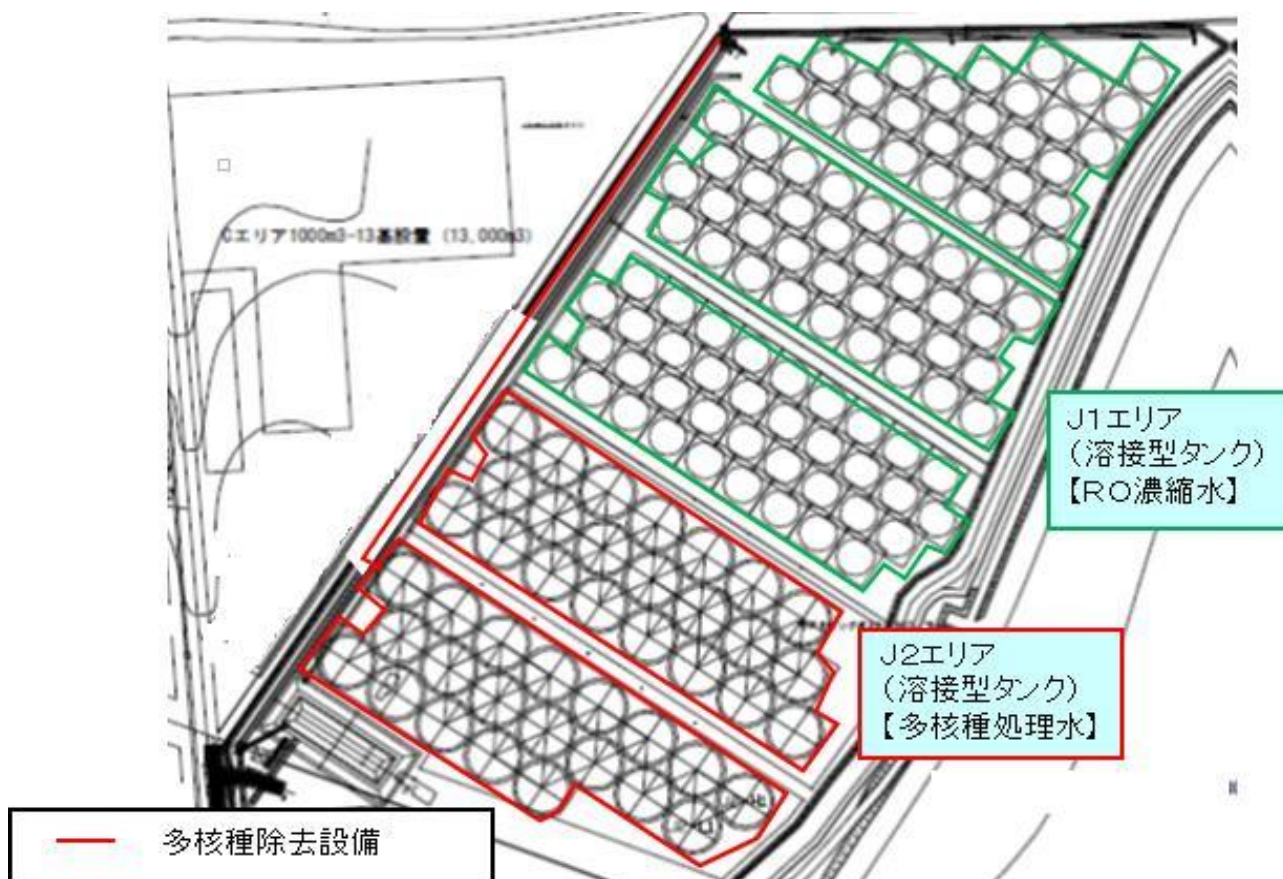


タンクエリア全体図

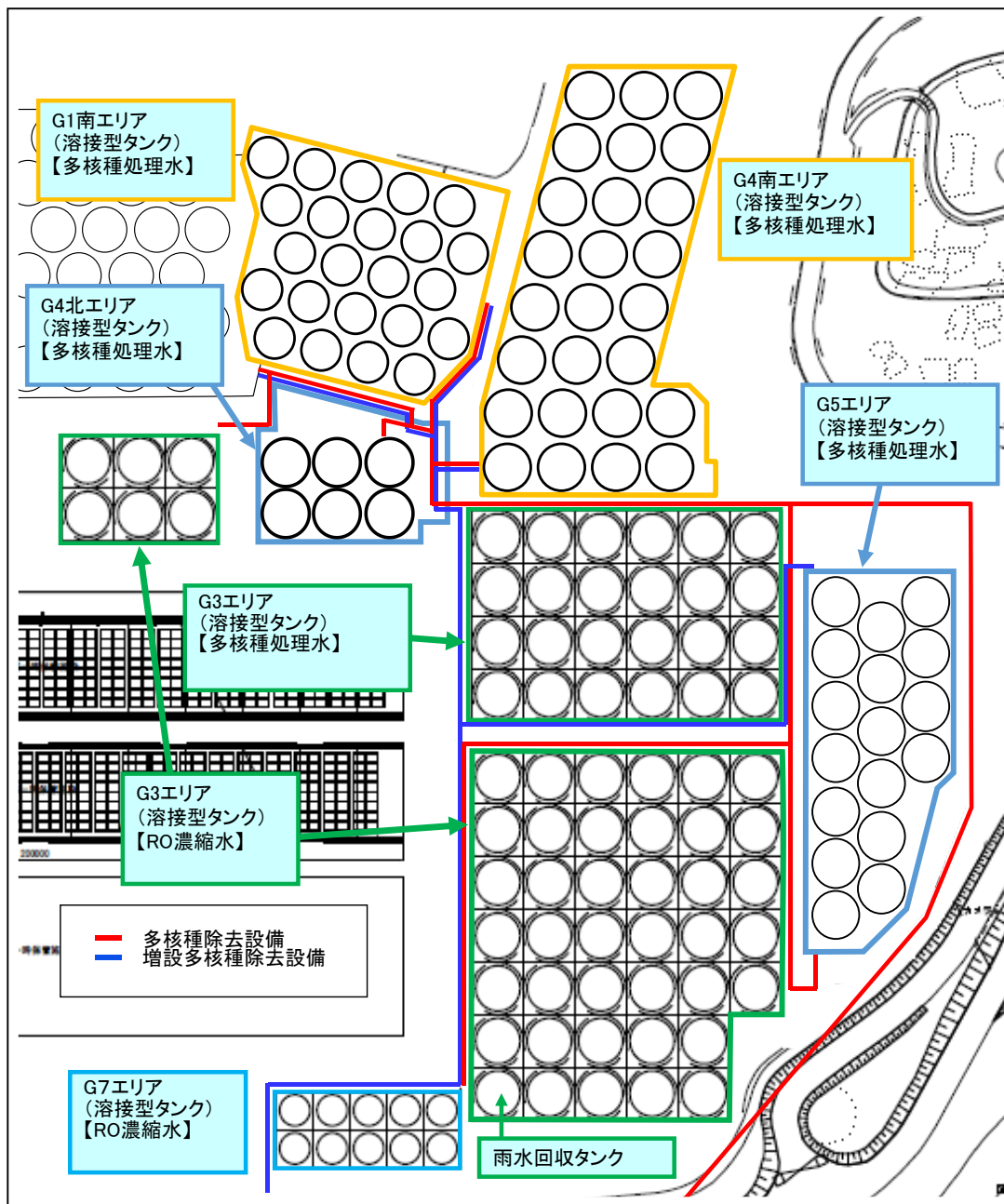




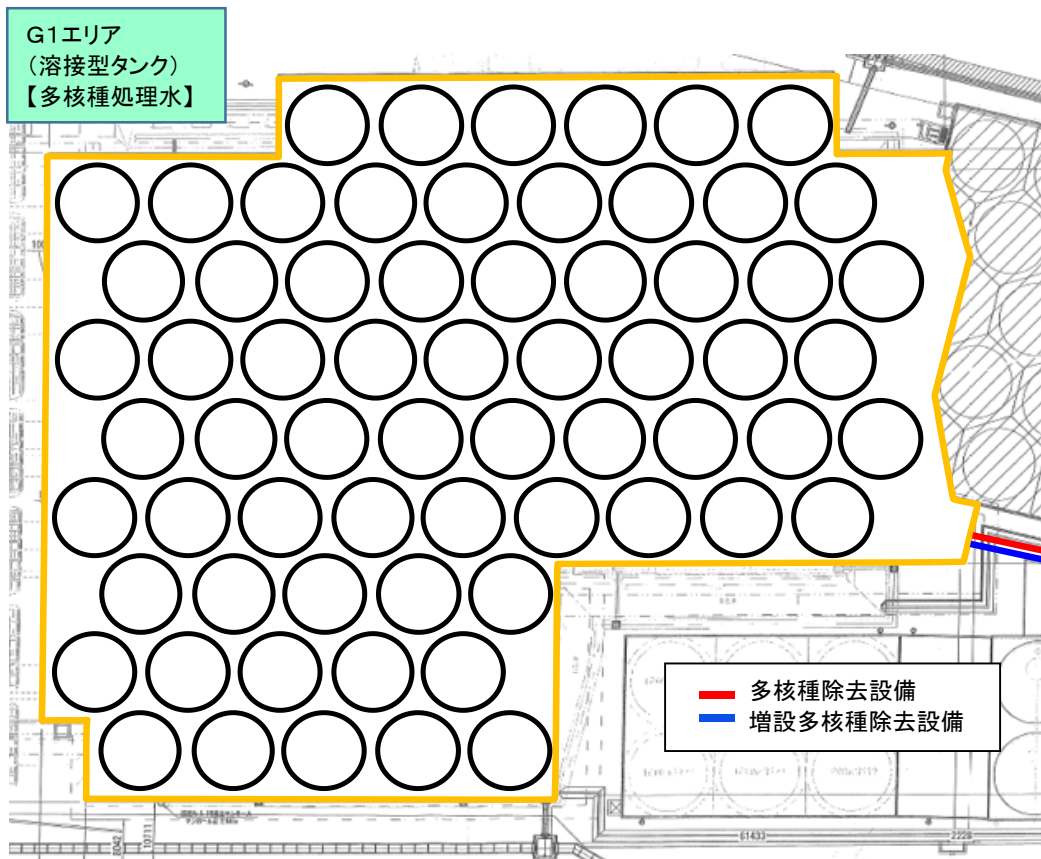
タンクエリア全体図



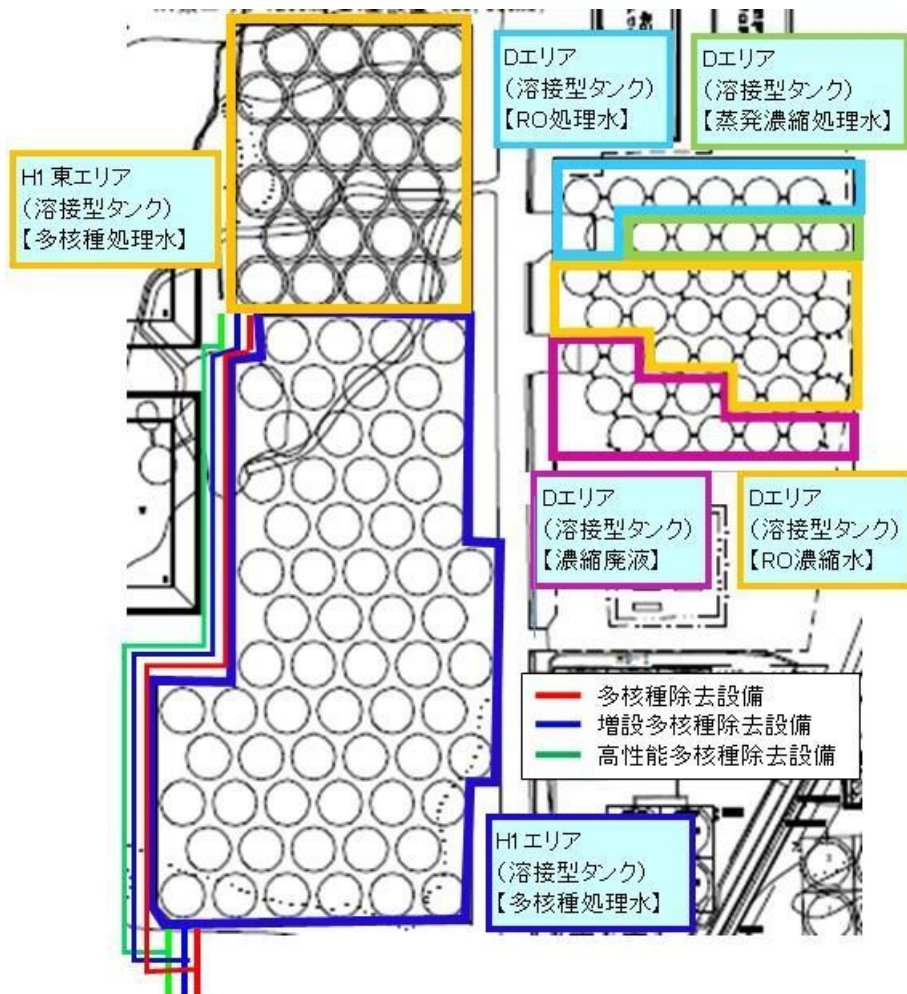
タンクエリア詳細図



タンクエリア詳細図

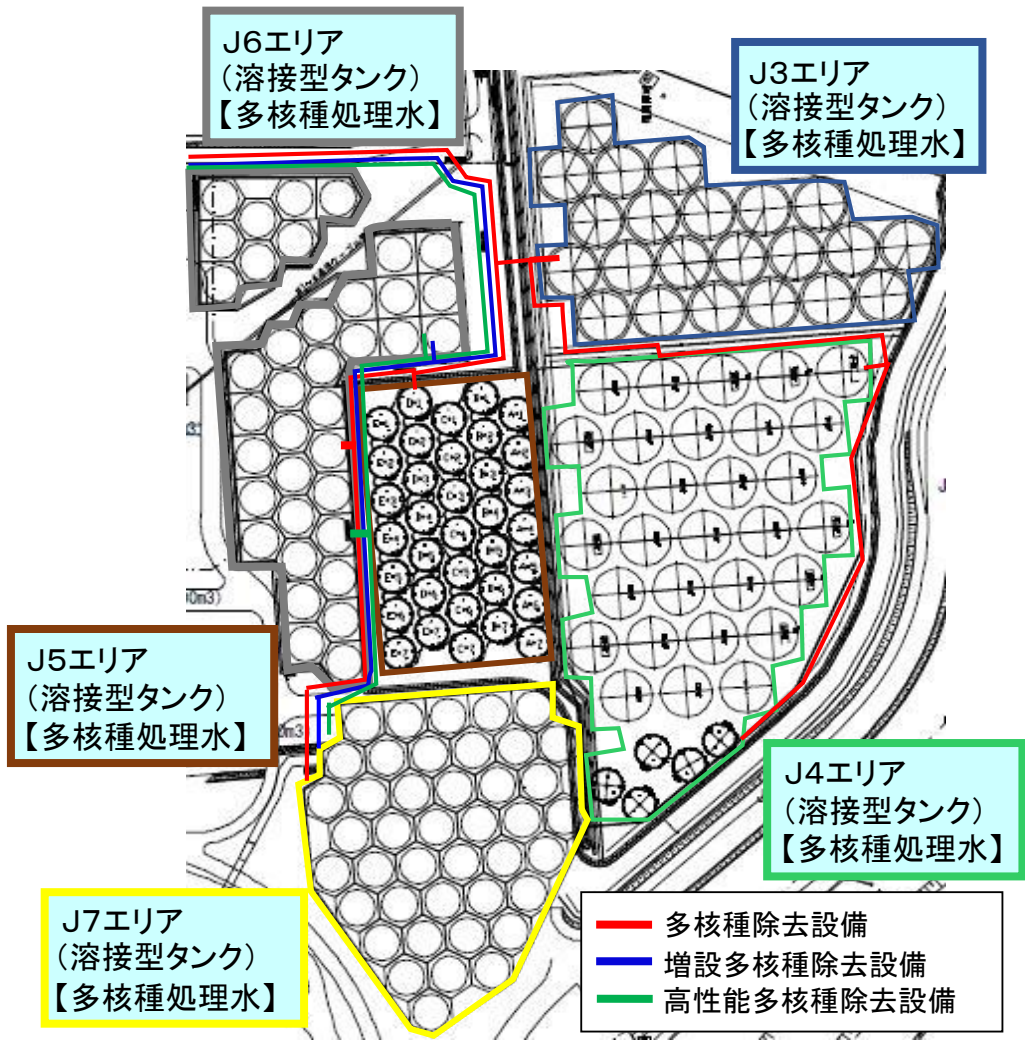


タンクエリア詳細図

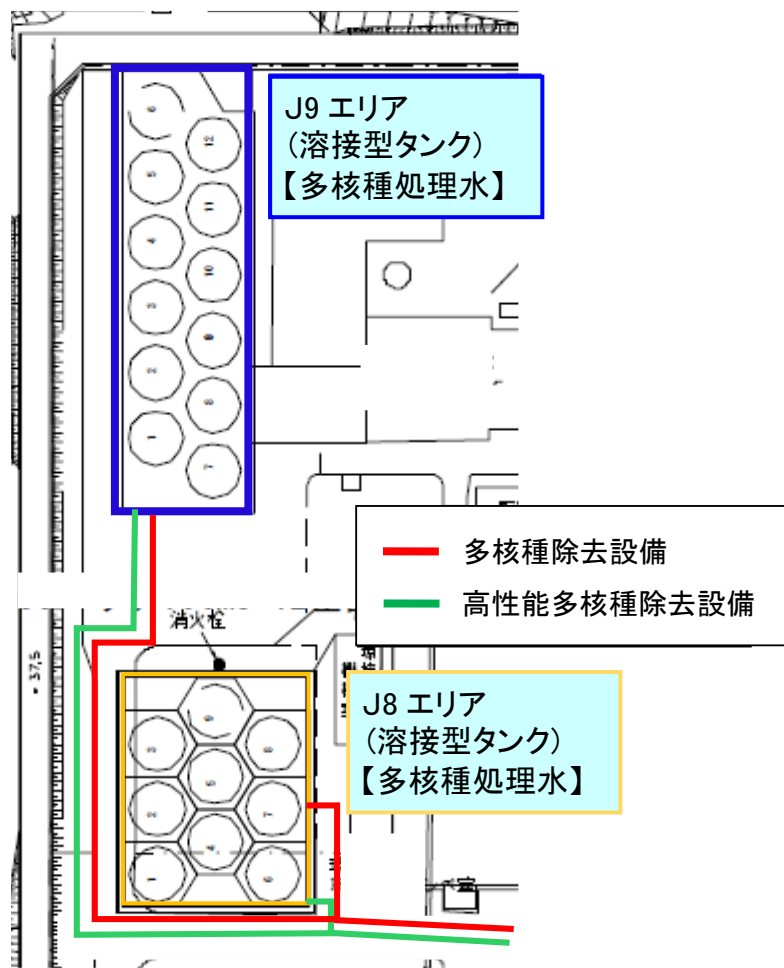


タンクエリア詳細図



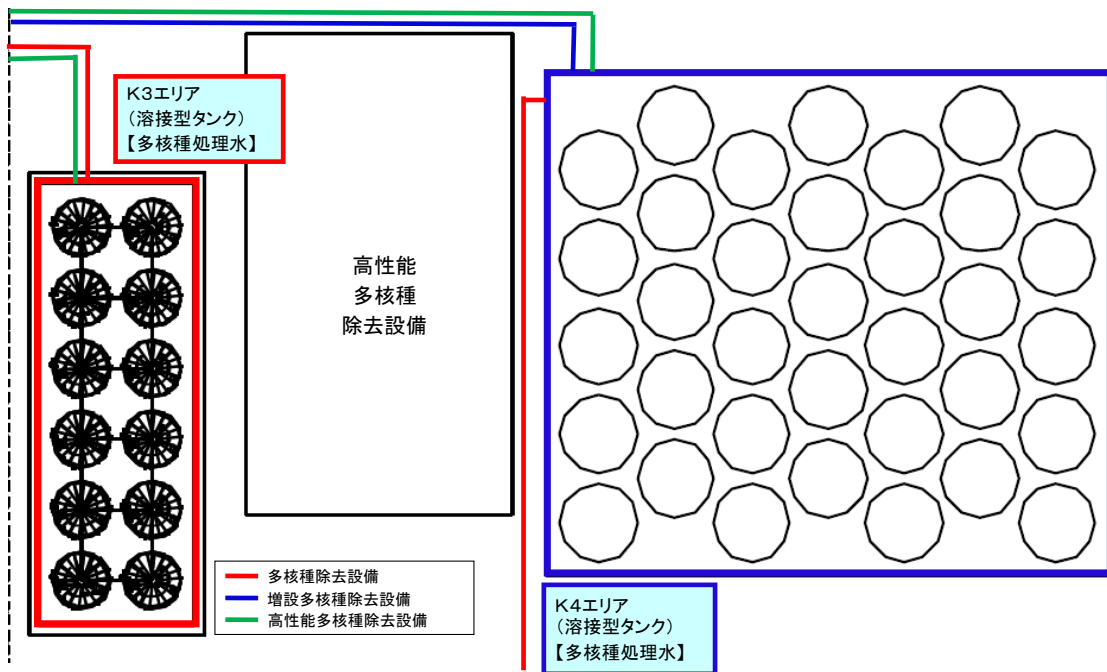
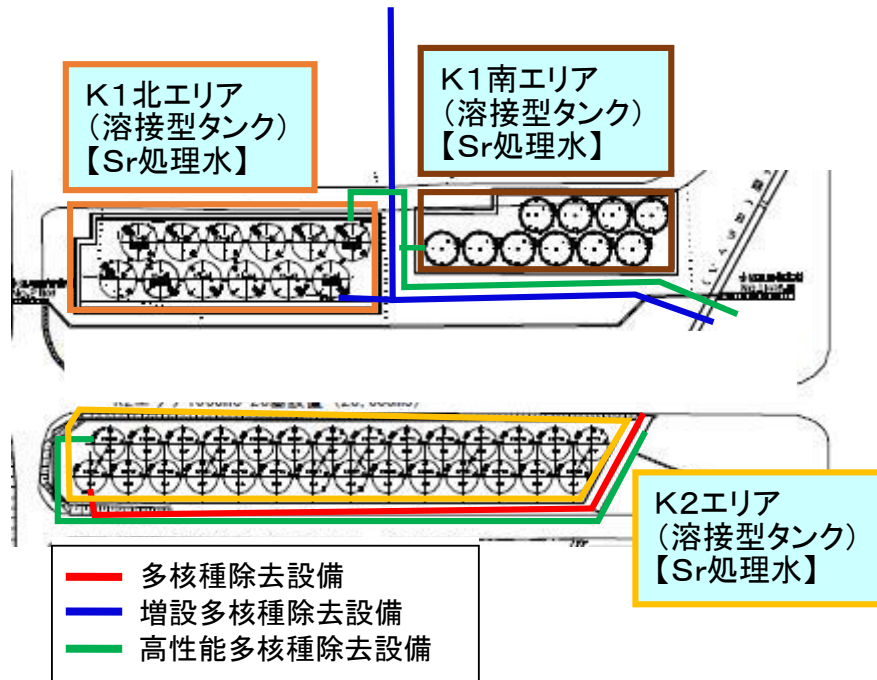


タンクエリア詳細図

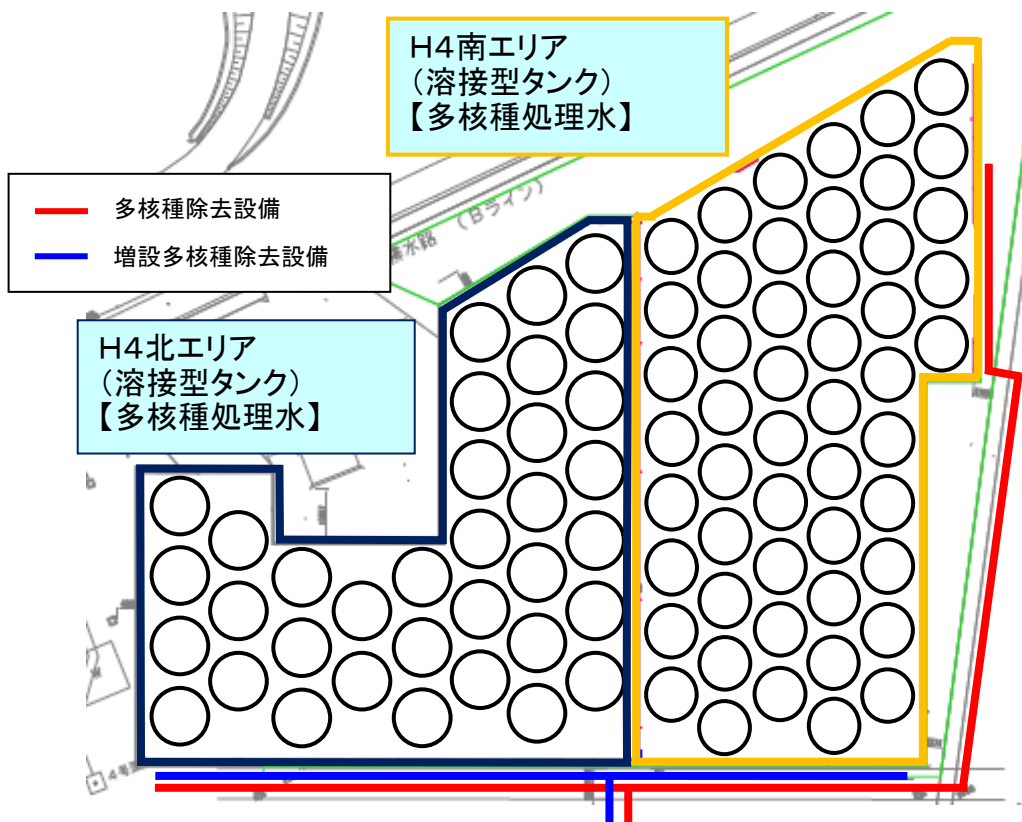
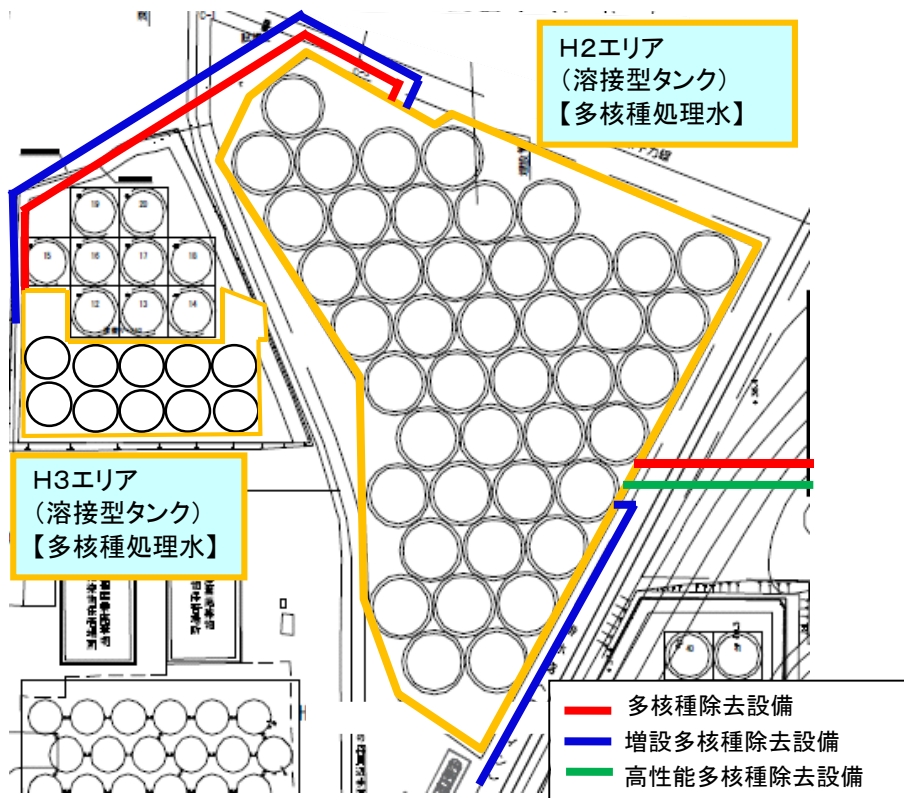


タンクエリア詳細図

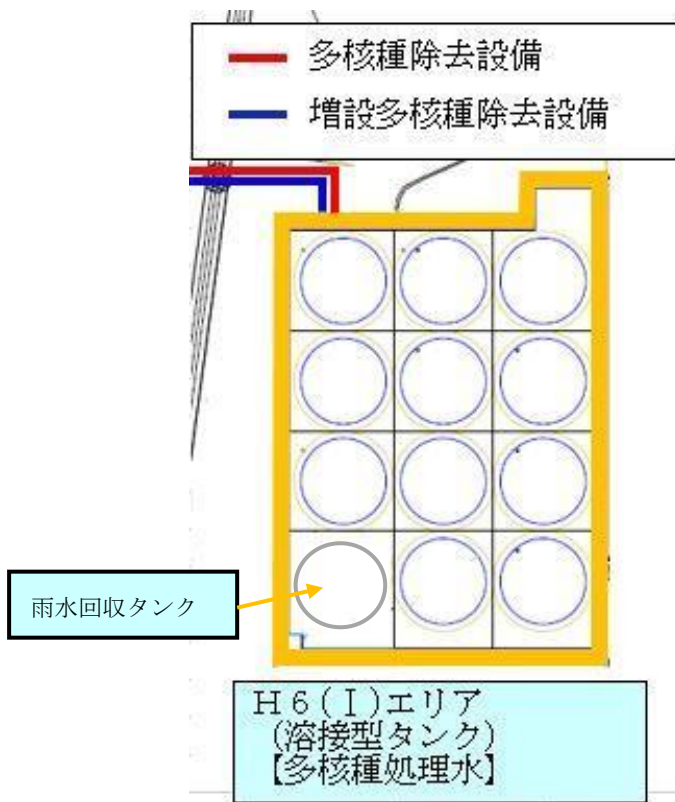
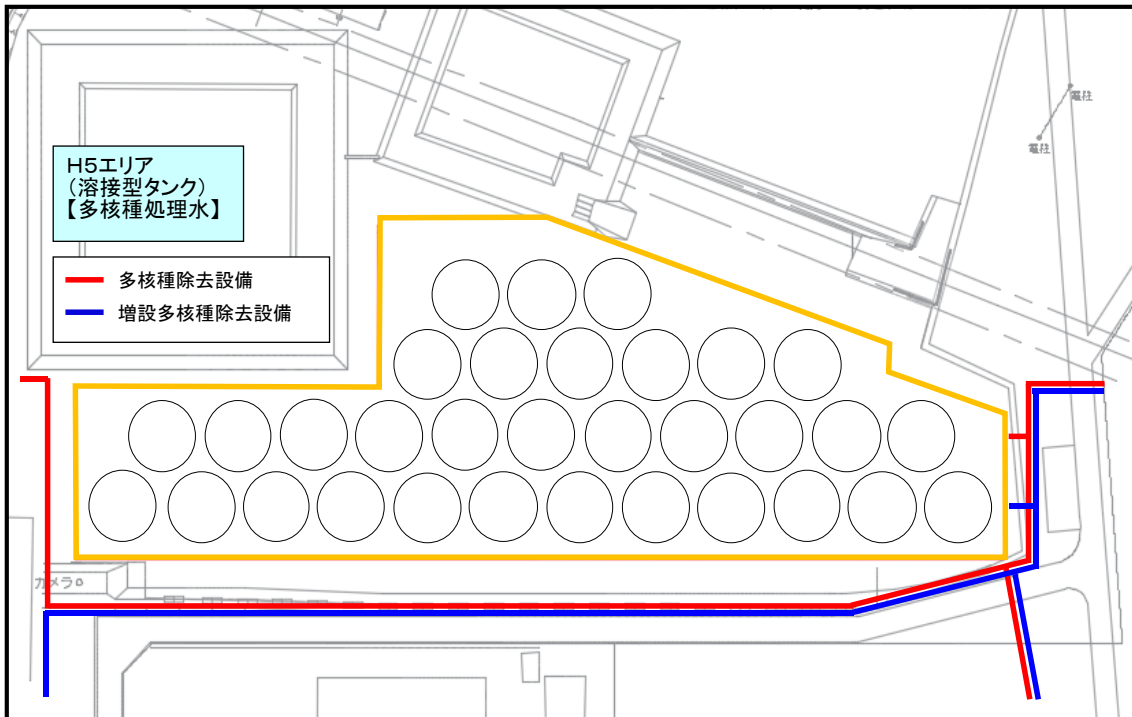




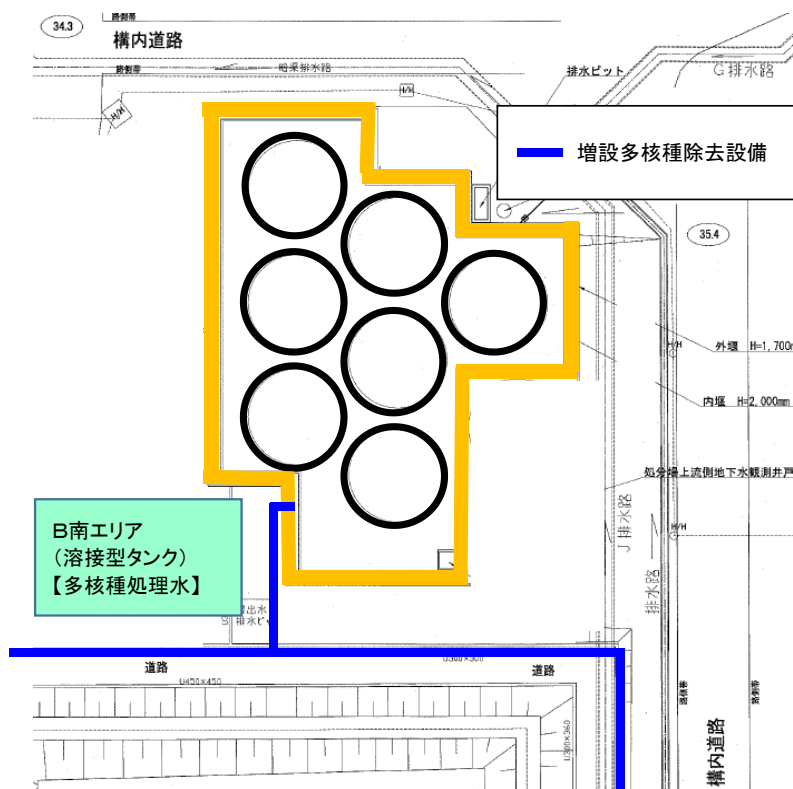
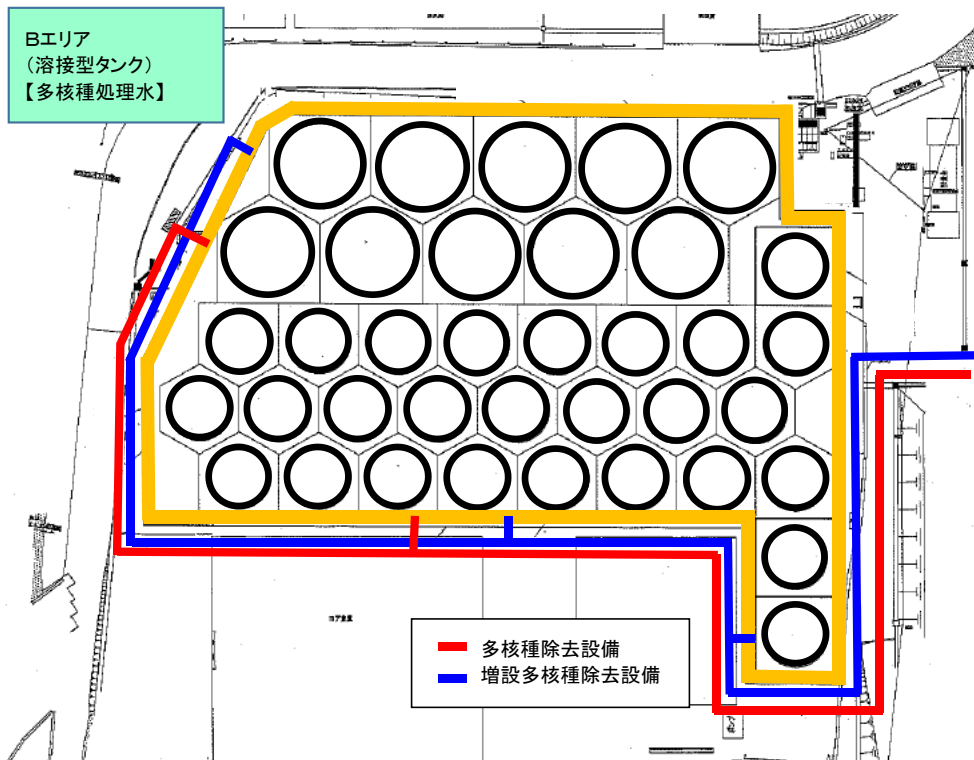
タンクエリア詳細図



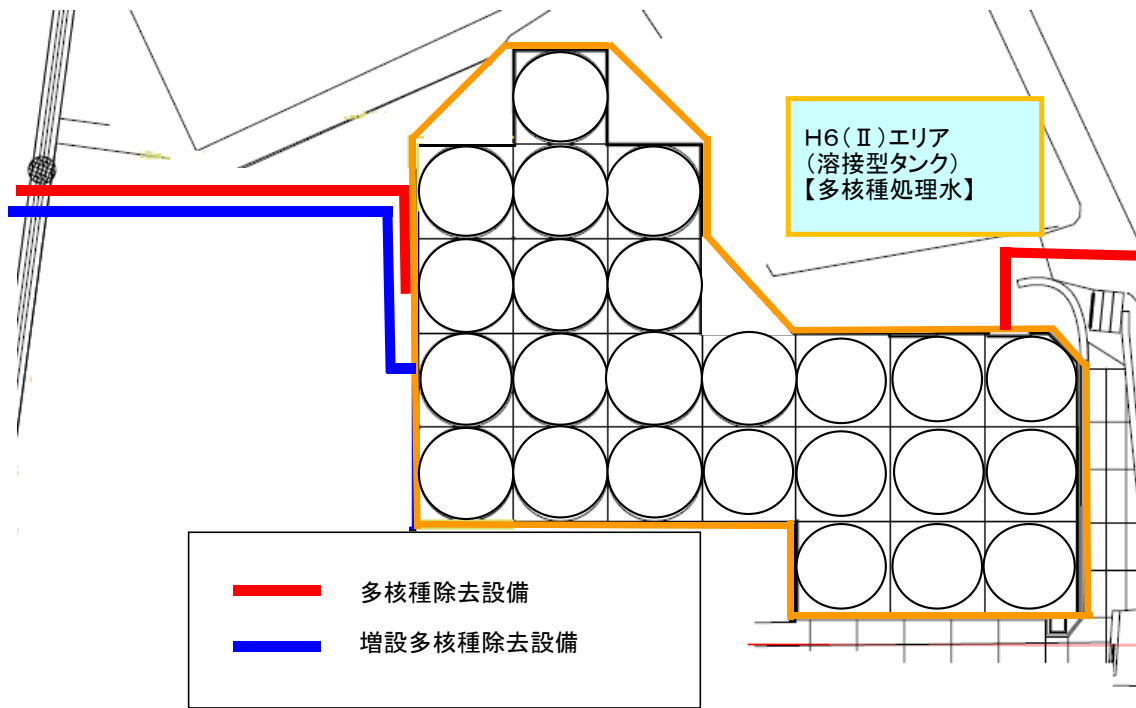
タンクエリア詳細図



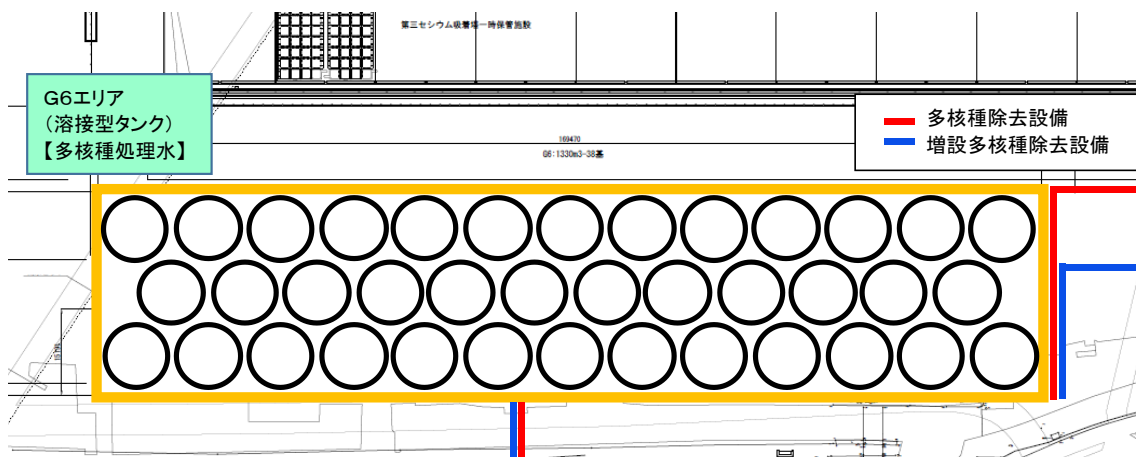
タンクエリア詳細図



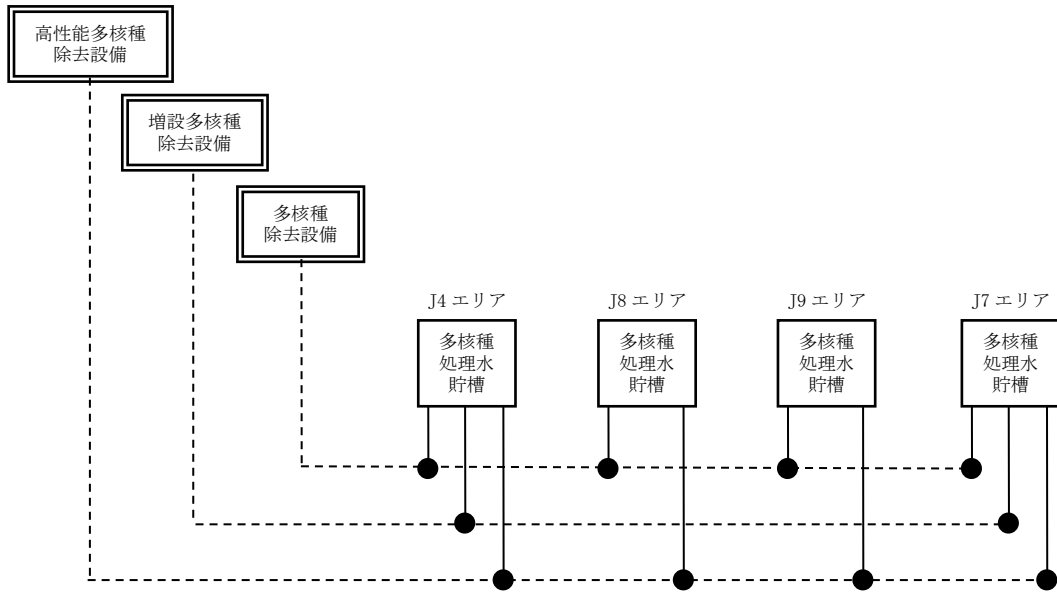
タンクエリア詳細図



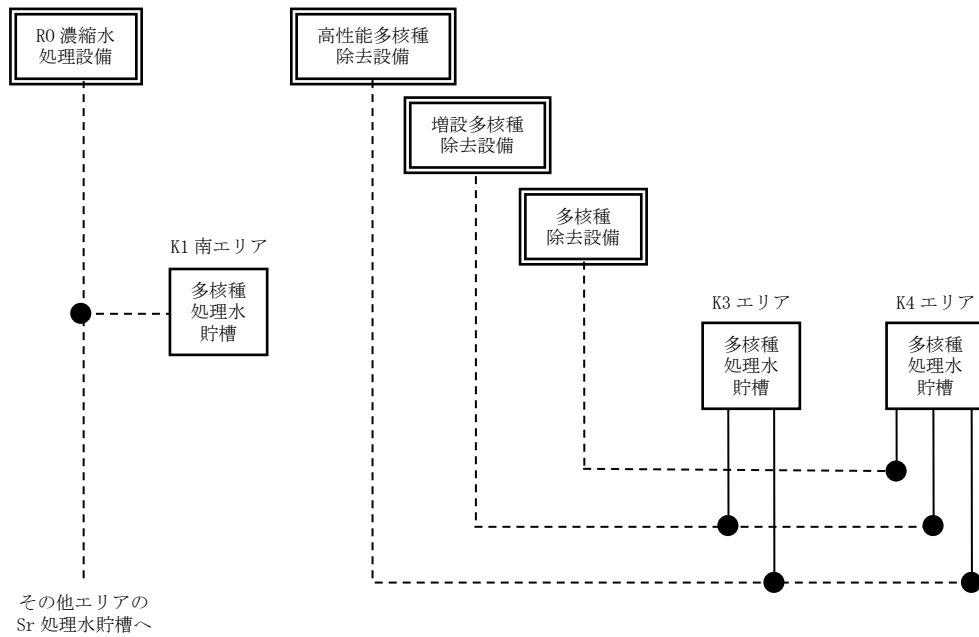
タンクエリア詳細図



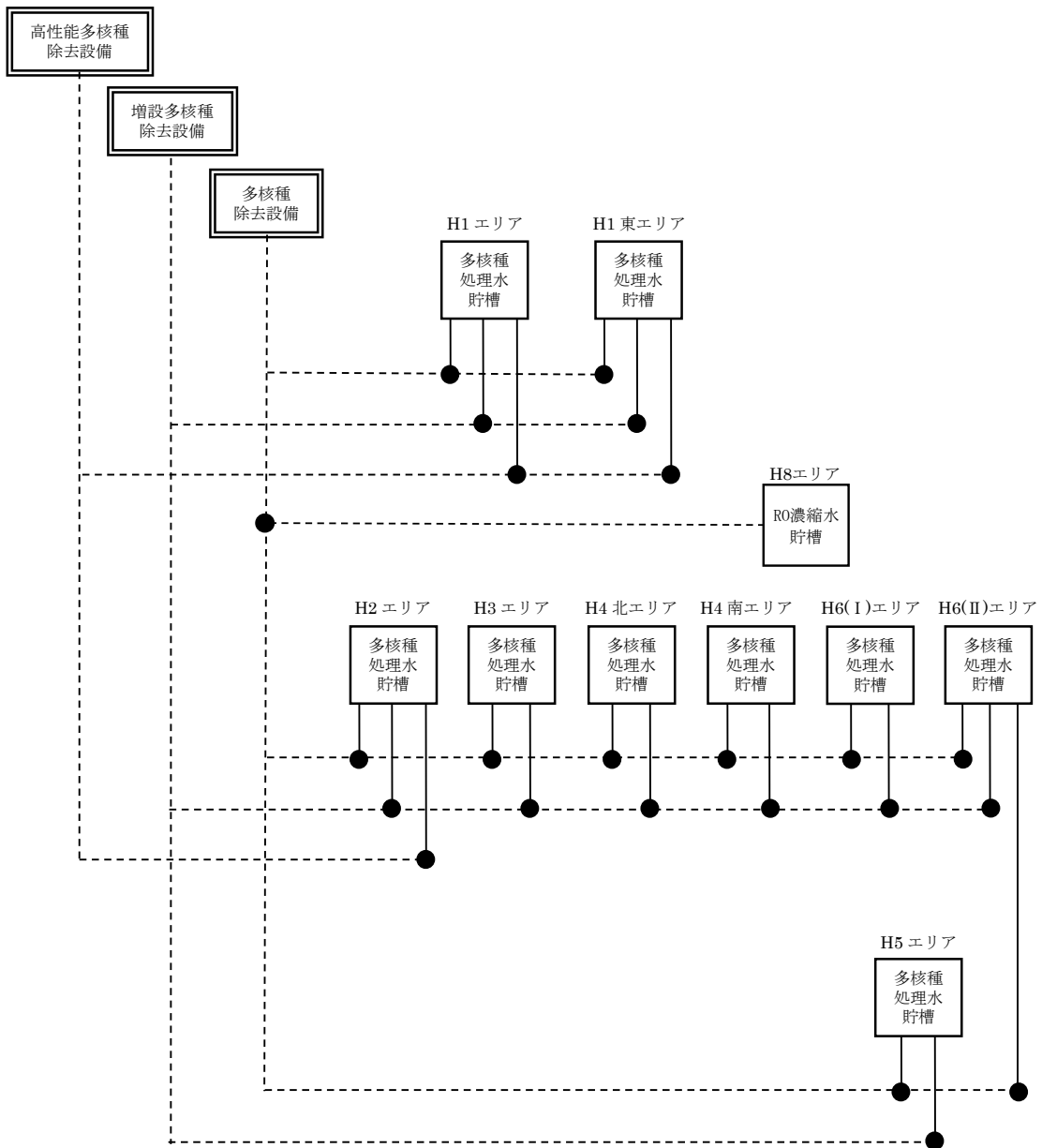
タンクエリア詳細図



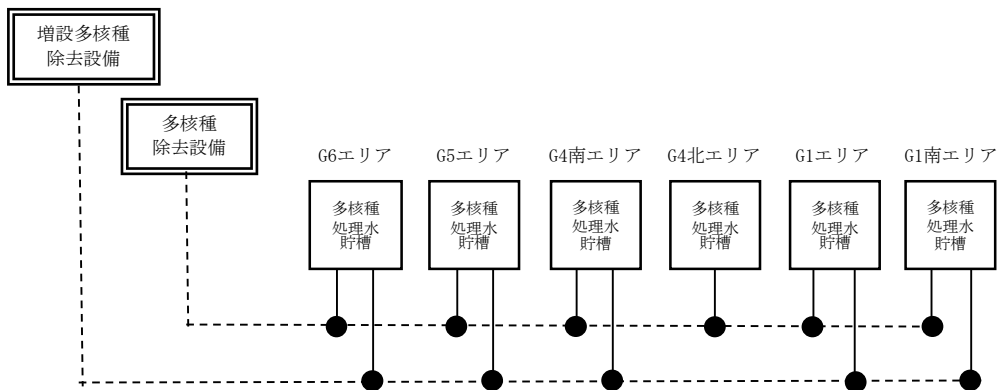
移送配管系統図 (J4, J7, J8, J9)



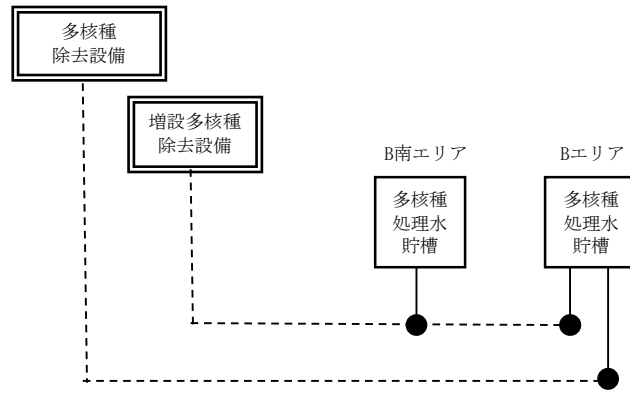
移送配管系統図 (K1 南, K3, K4)



移送配管系統図 (H1, H1 東, H2, H4 北, H4 南, H5, H6 ( I ), H3, H6 ( II ), H8)



移送配管系統図 (G1 南, G6, G1, G4 南, G4 北, G5)



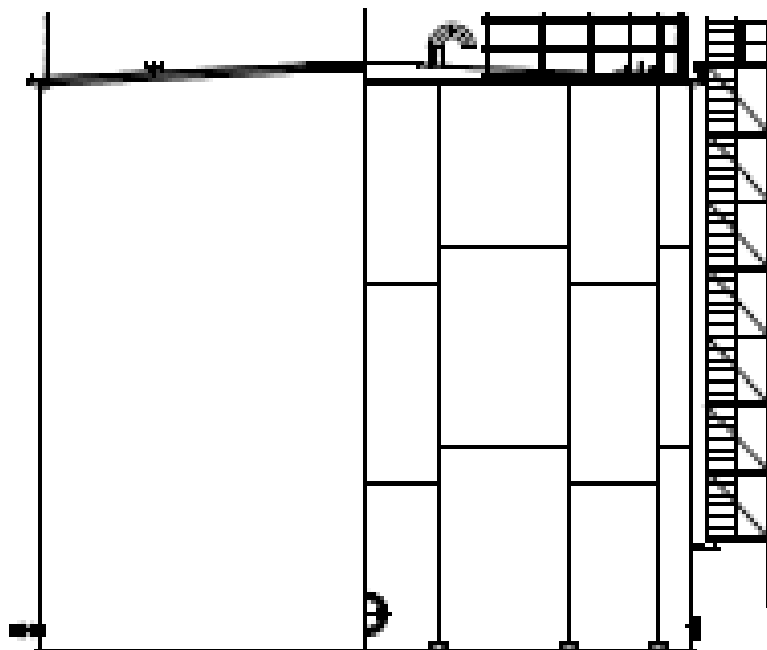
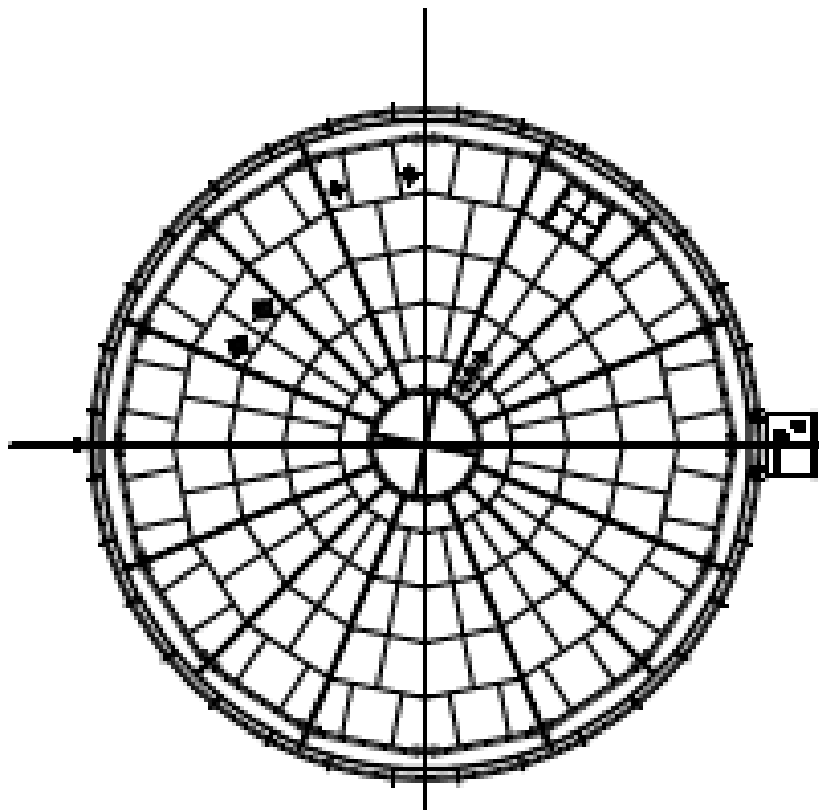
移送配管系統図 (B, B 南)



(別添) RO 濃縮水貯槽, 多核種処理水貯槽, Sr 処理水貯槽及び濃縮廃液貯槽のエリア別の基数について

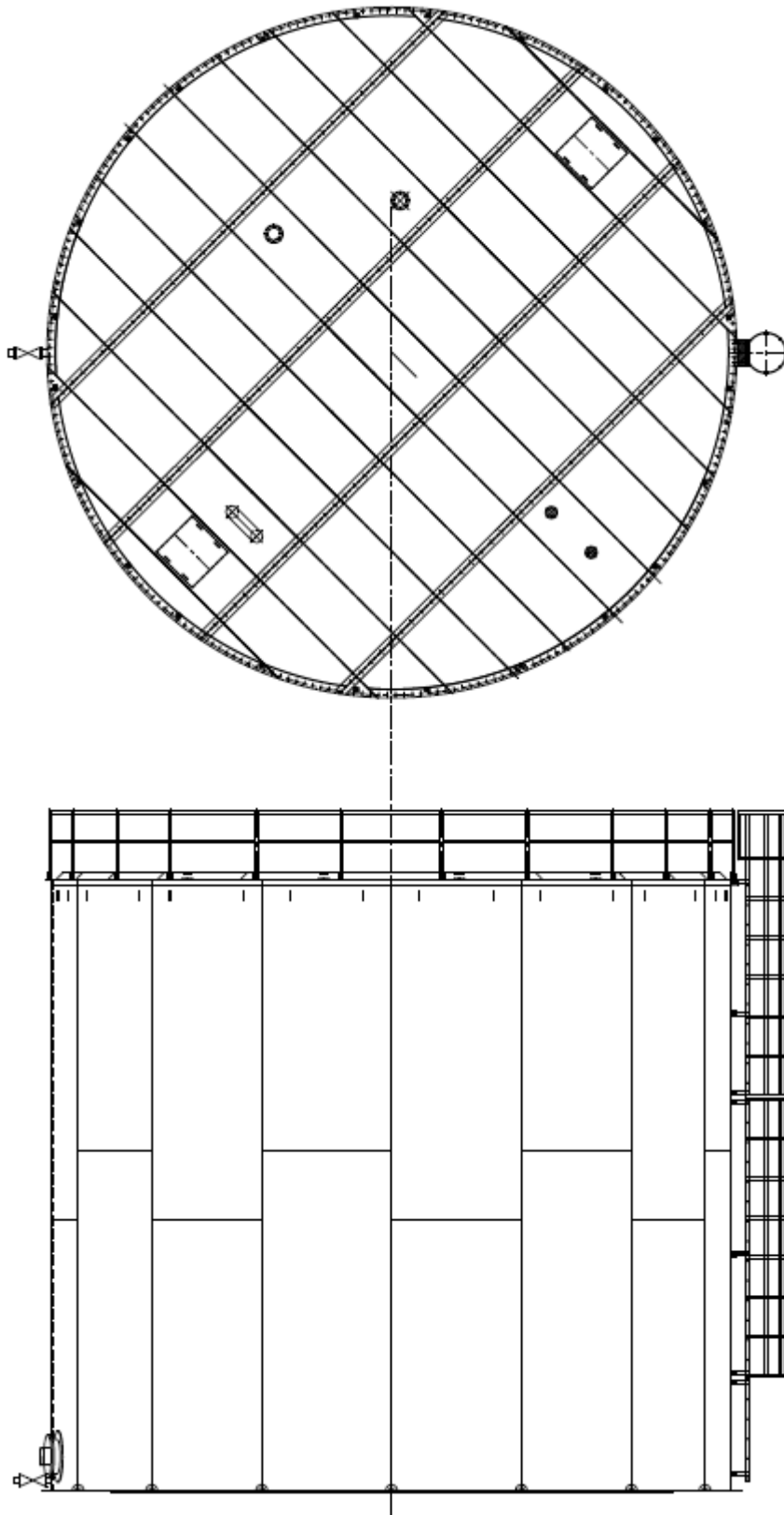
エリア	タンク公称容量[m <sup>3</sup> ]	(39) RO 濃縮水貯槽	(46) 多核種処理水貯槽	(60) Sr 処理水貯槽	(61) 濃縮廃液貯槽
G3 東	1,000	0	24		
G3 北	1,000	6	0		
G3 西	1,000	39	0		
J1	1,000	100	0		
その他	1,000	16	0		
G7	700	10	0		
J5	1,235		35		
D	1,000	19	0		10
J2	2,400		42		
J3	2,400		22		
J4	2,900		30		
	1,160		5		
J6	1,200		38		
K1 北	1,200			12	
K2	1,057			28	
K1 南	1,160			10	
H1	1,220		63		
J7	1,200		42		
H1 東	1,220		24		
J8	700		9		
K3	700		12		
J9	700		12		
K4	1,000		35 <sup>※</sup>		
H2	2,400		44		
H4 北	1,200		35		
H4 南	1,060		13		
	1,140		38		
G1 南	1,160		8		
	1,330		15		
H5	1,200		32		
H6 ( I )	1,200		11		
B	1,330		10		
	700		27		
B 南	1,330		7		
H3	1,356		10		
H6 ( II )	1,356		24		
G6	1,330		38		
G1	1,356		66		
G4 南	1,356		26		
G4 北	1,356		6		
G5	1,356		17		
計		190	820	50	10

※K4 エリアタンクの 30 基を「Ⅱ 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設」の測定・確認用タンクと兼用する。

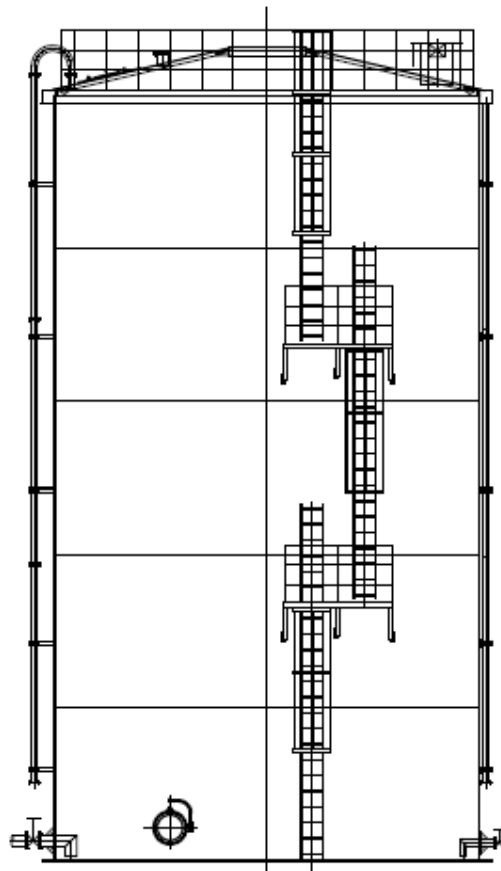
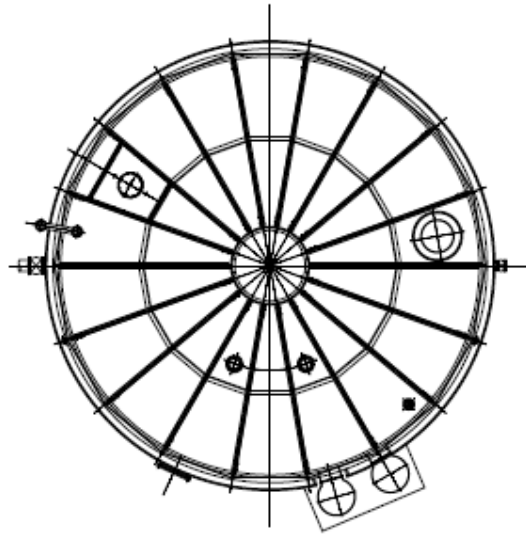


溶接型タンク概略図 (G3)

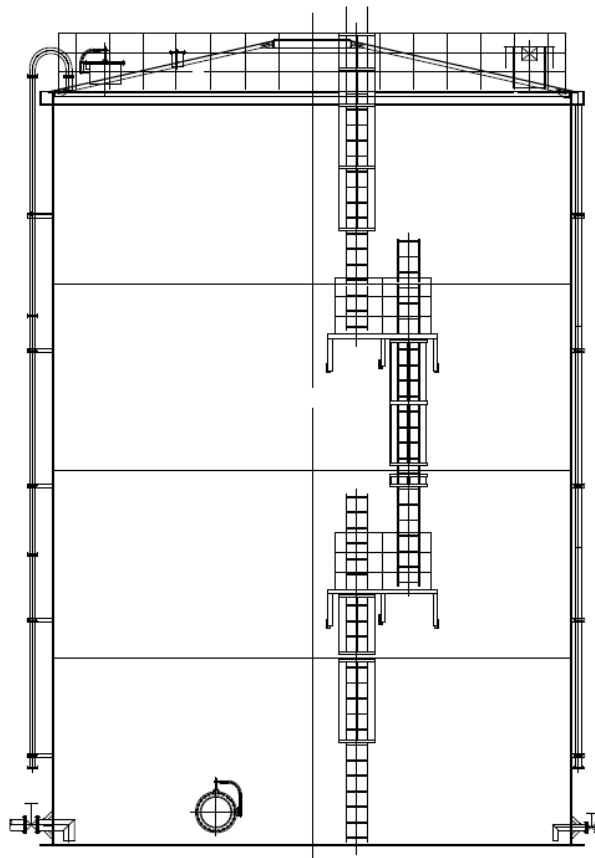
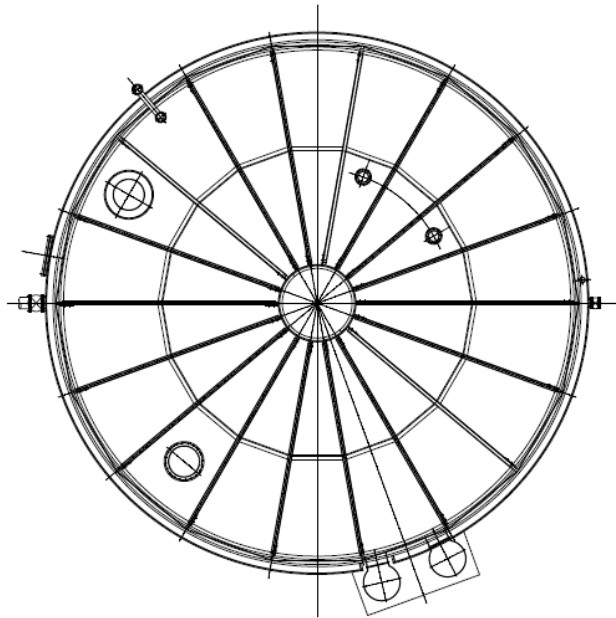
廃止（フランジタンク概略図（G4, G5））



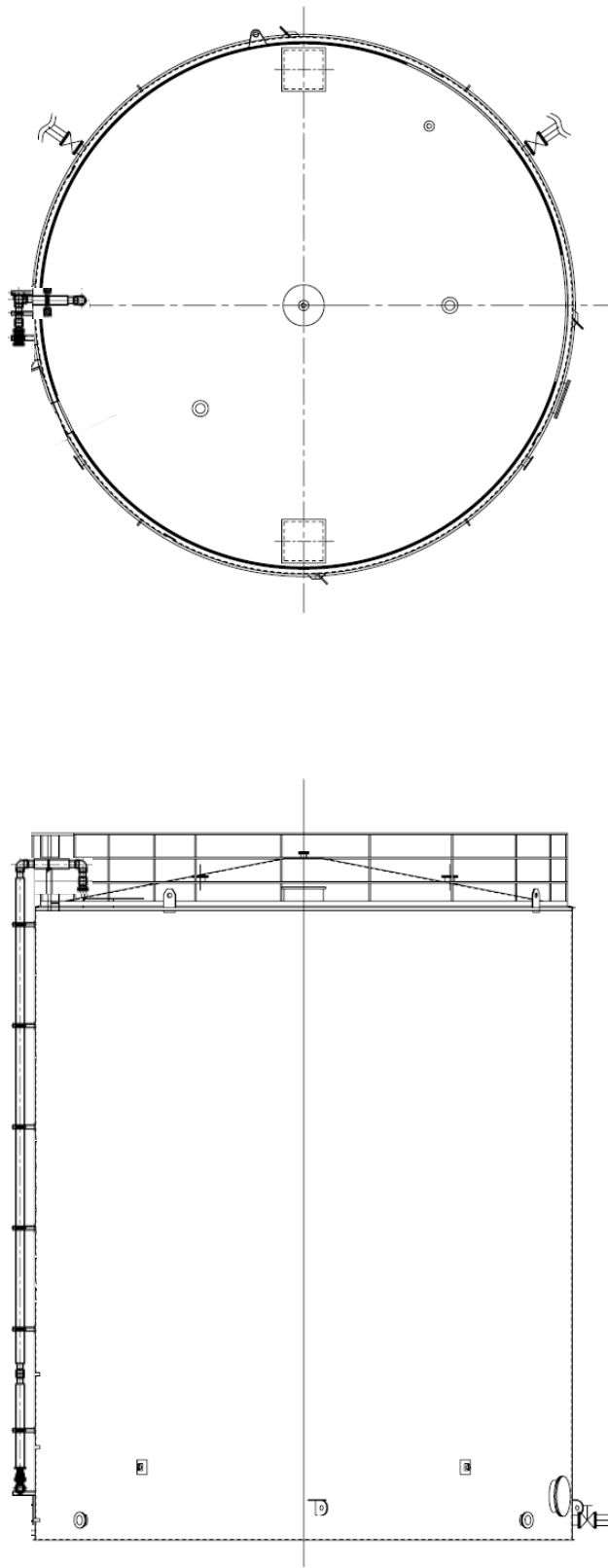
溶接型タンク概略図 (J1)



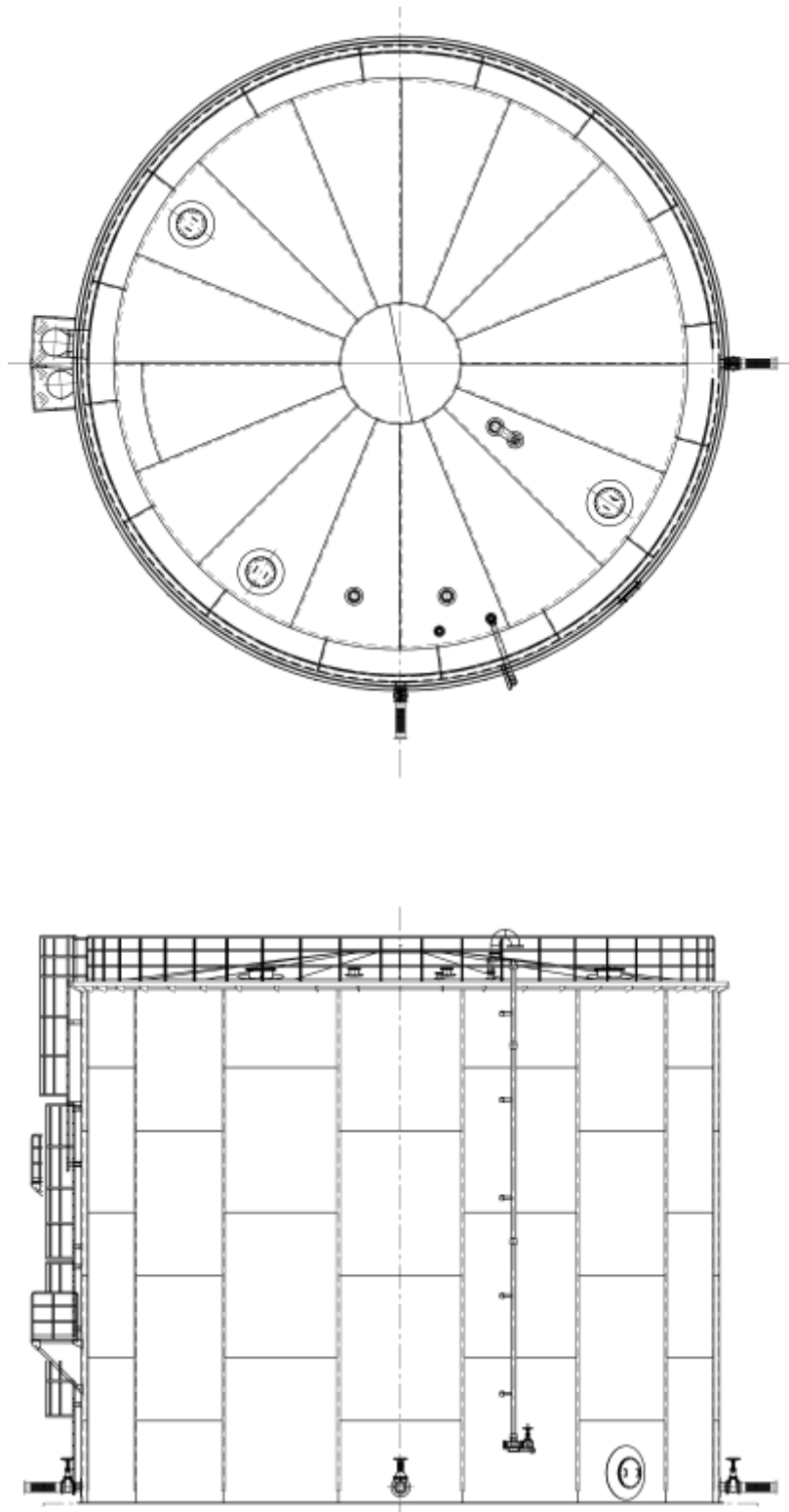
溶接型タンク概略図 (G7)



溶接型タンク概略図 (D, K2, K4, H4 南(1,060m<sup>3</sup>))

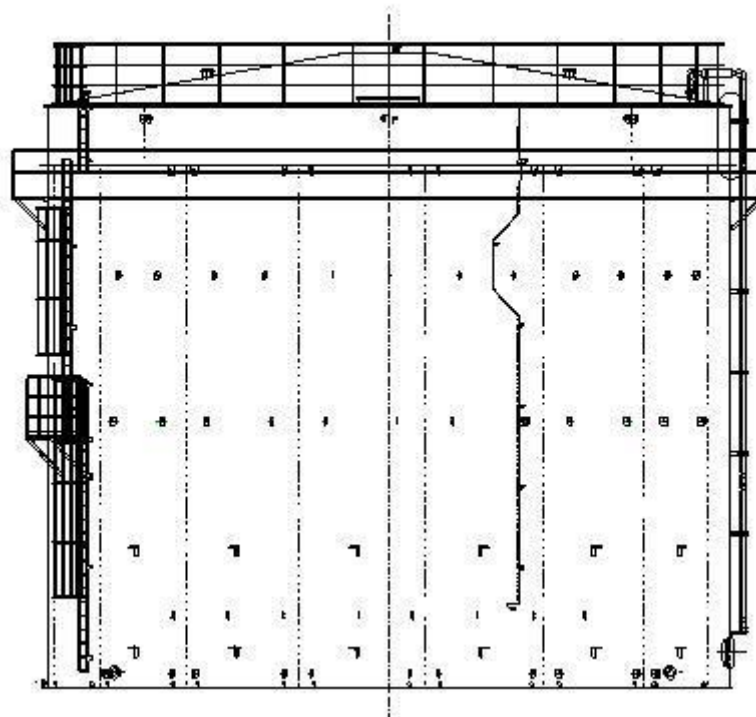
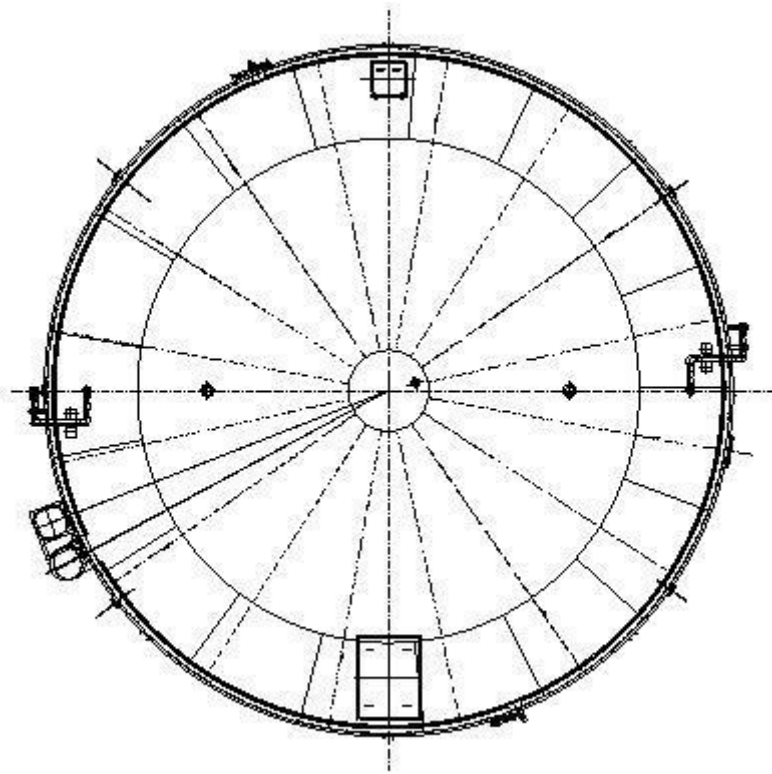


溶接型タンク概略図 (J5, K1 南, J4(1, 160m<sup>3</sup>), G1 南(1, 160m<sup>3</sup>))

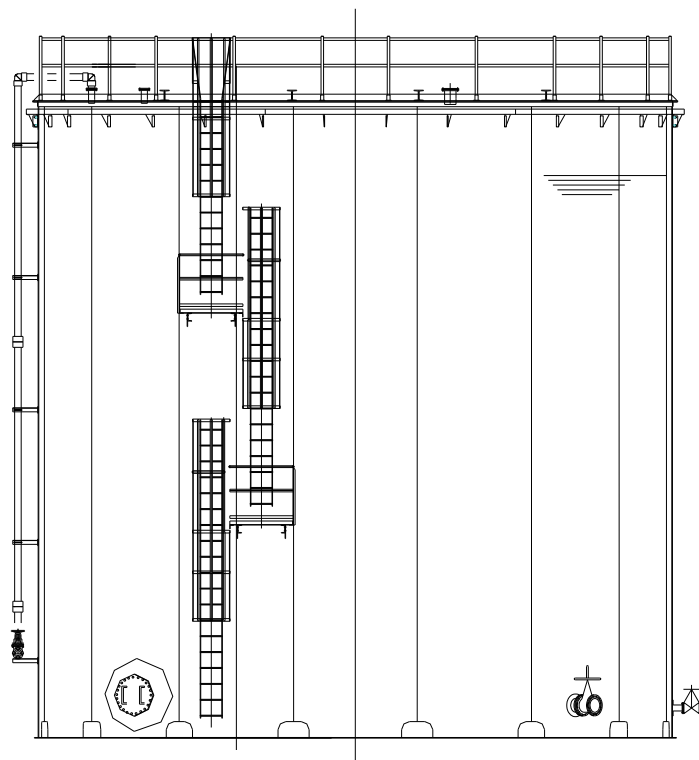
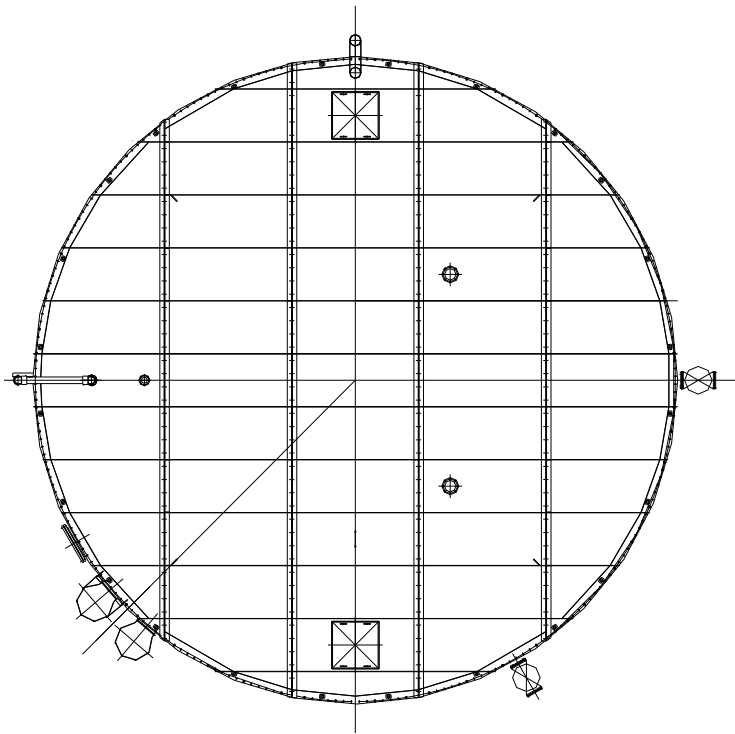


溶接型タンク概略図 (J2, J3)

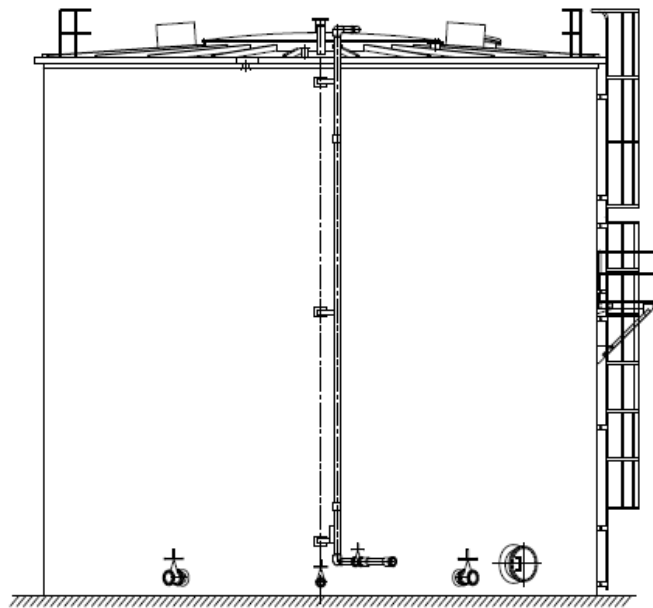
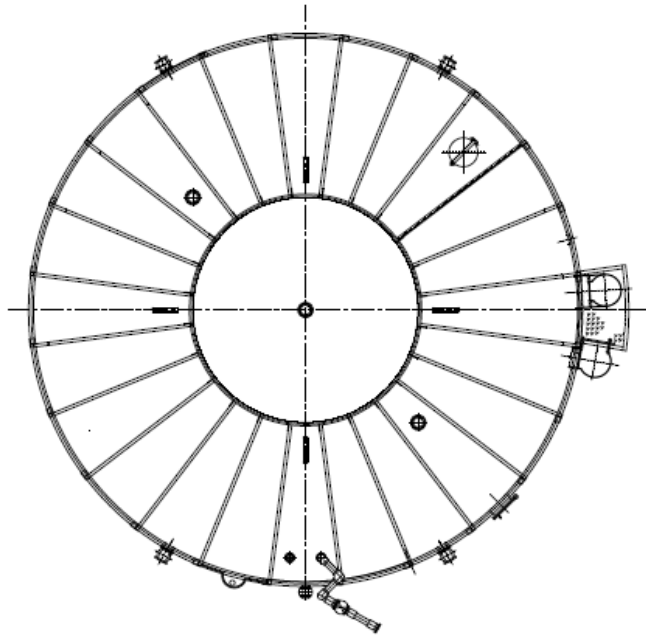




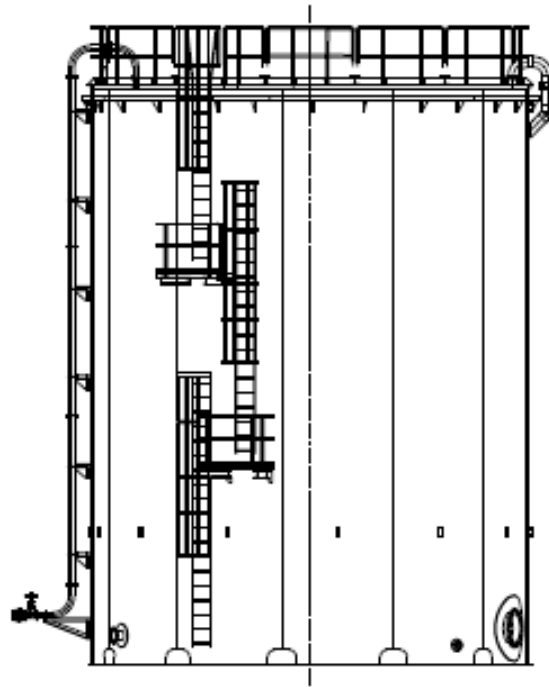
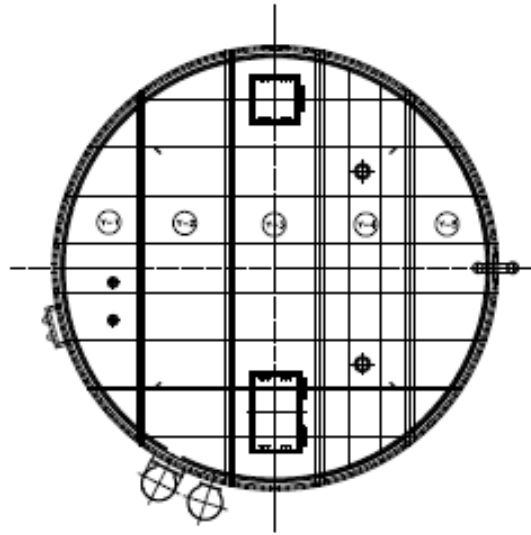
溶接型タンク概略図 (J4(2,900m<sup>3</sup>))



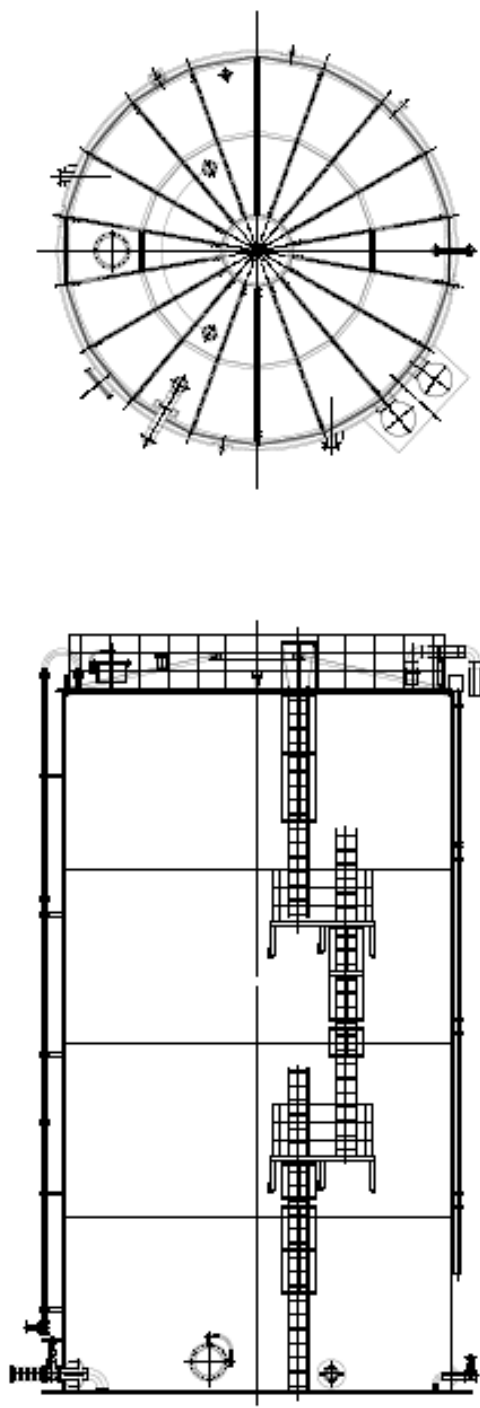
溶接型タンク概略図 (J6, K1 北, J7, H5, H6(I))



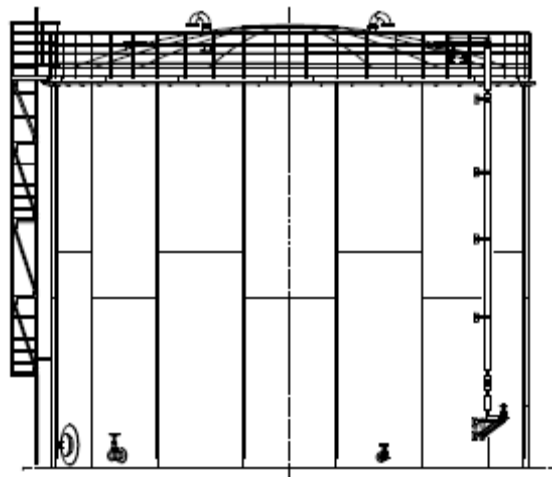
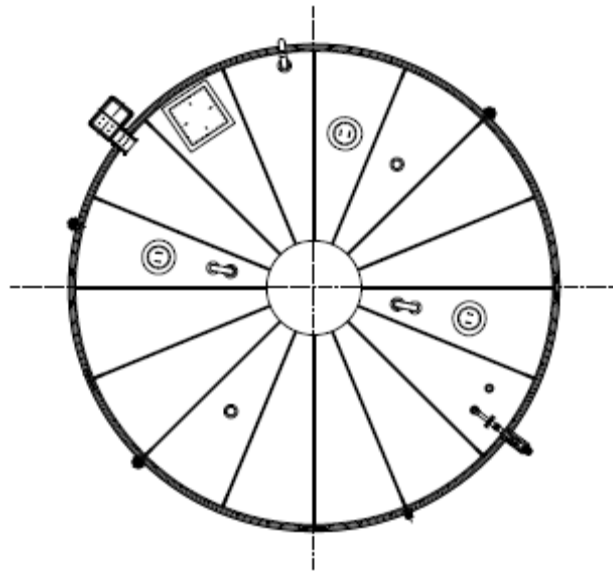
溶接型タンク概略図 (H1, H1 東)



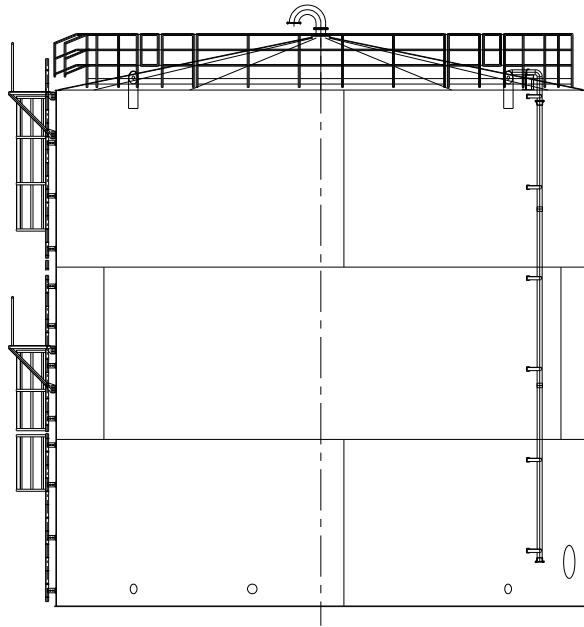
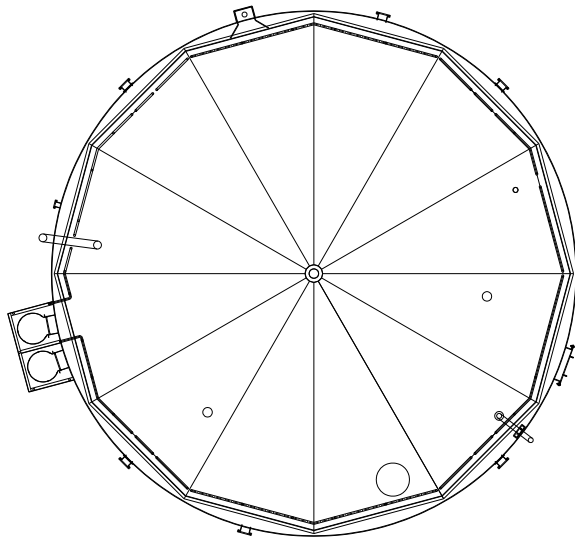
溶接型タンク概略図 (J8, J9)



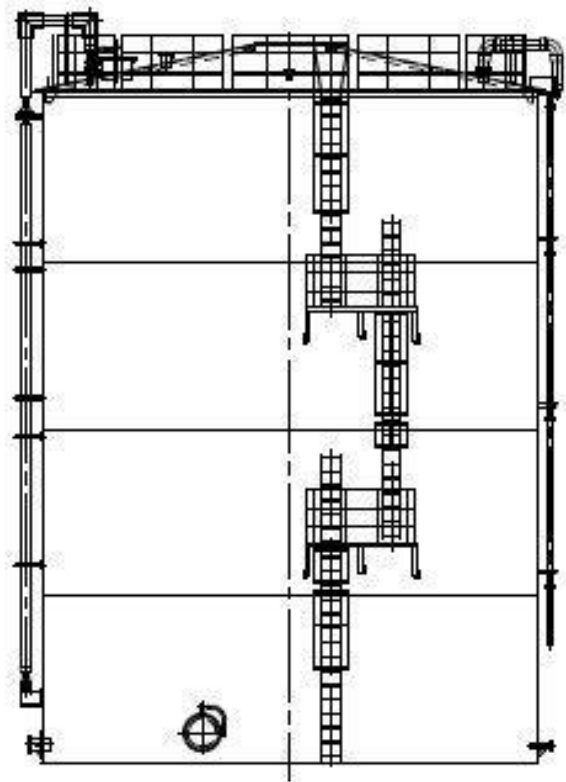
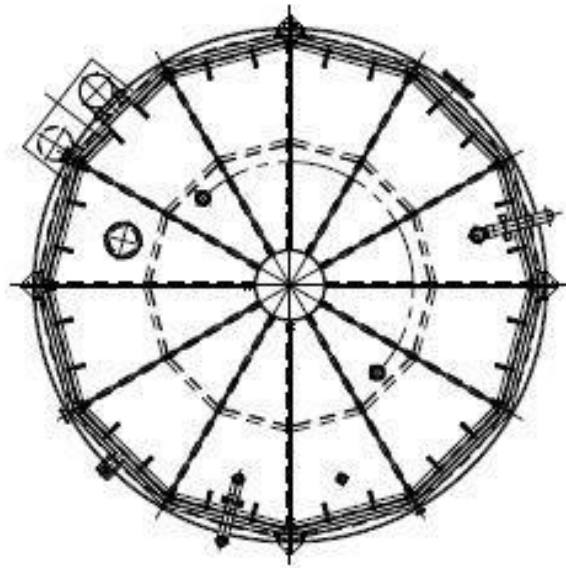
溶接型タンク概略図 (K3)



溶接型タンク概略図 (H2)

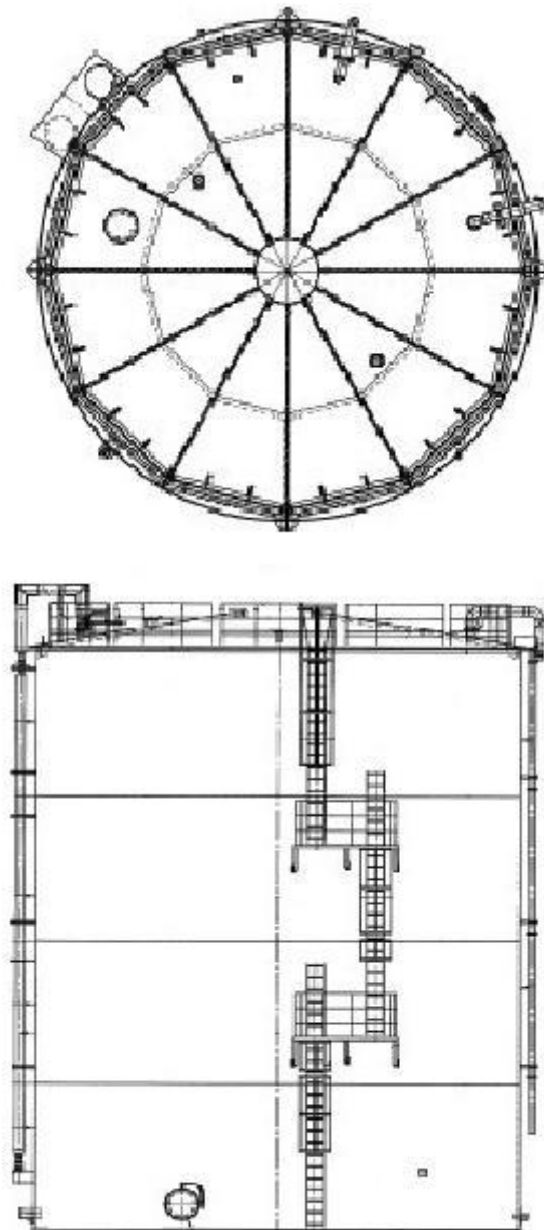


溶接型タンク概略図 (H4 北)

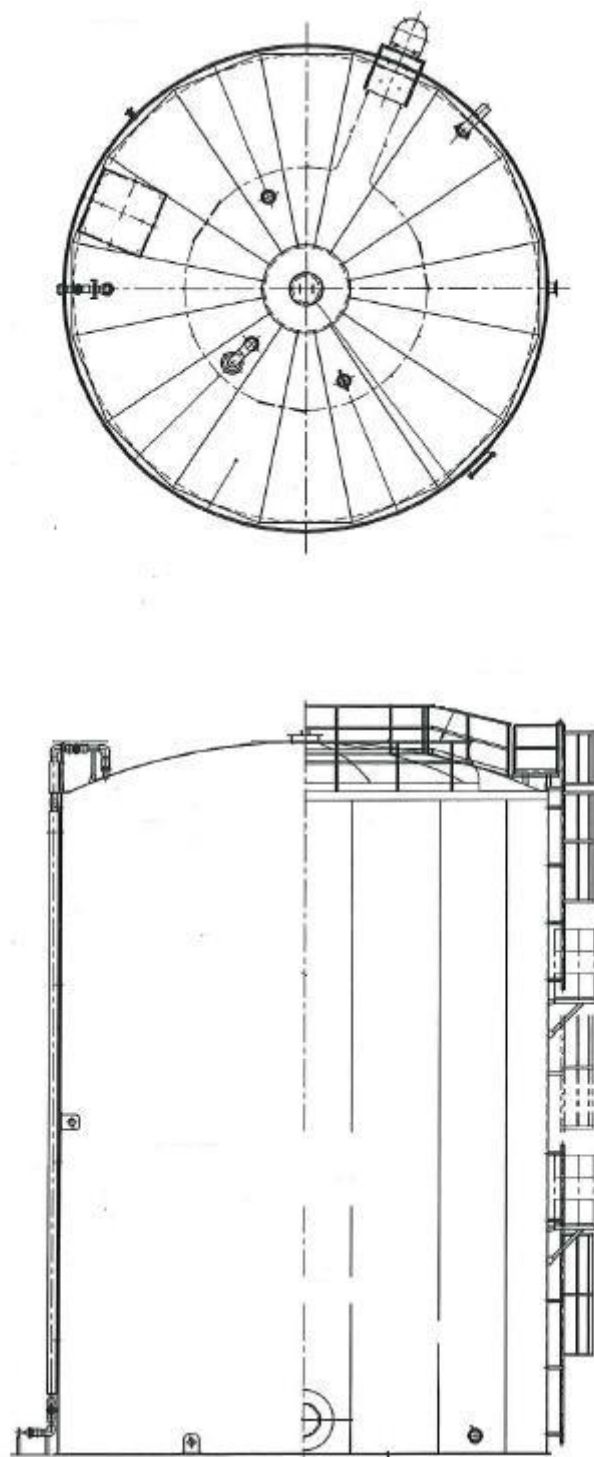


溶接型タンク概略図 (H4 南(1, 140m<sup>3</sup>))

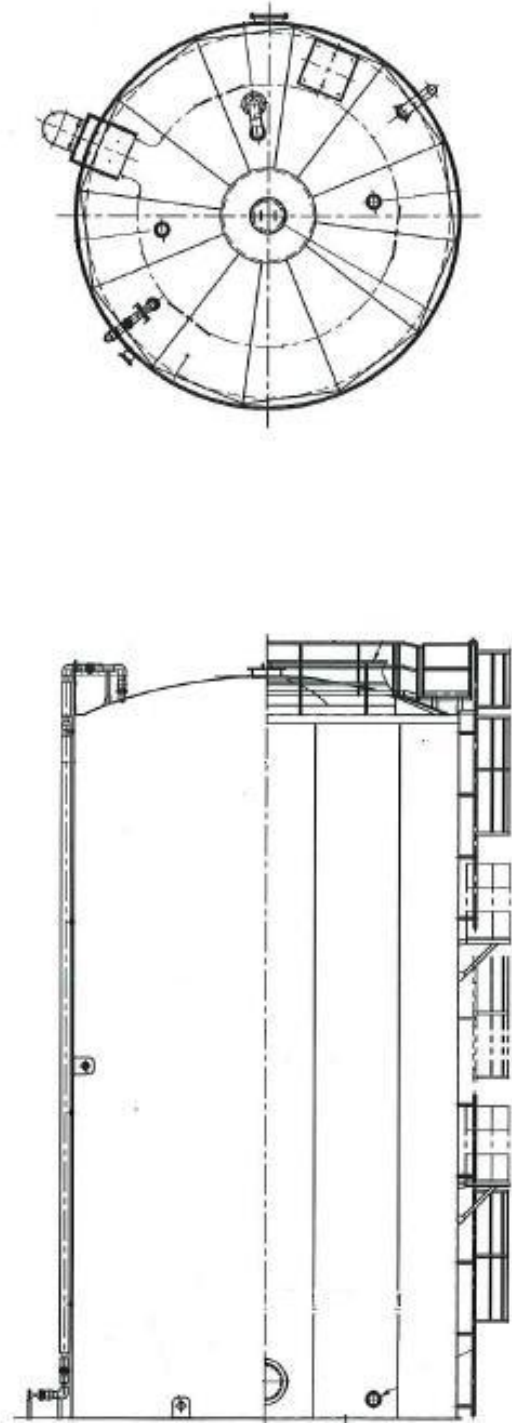




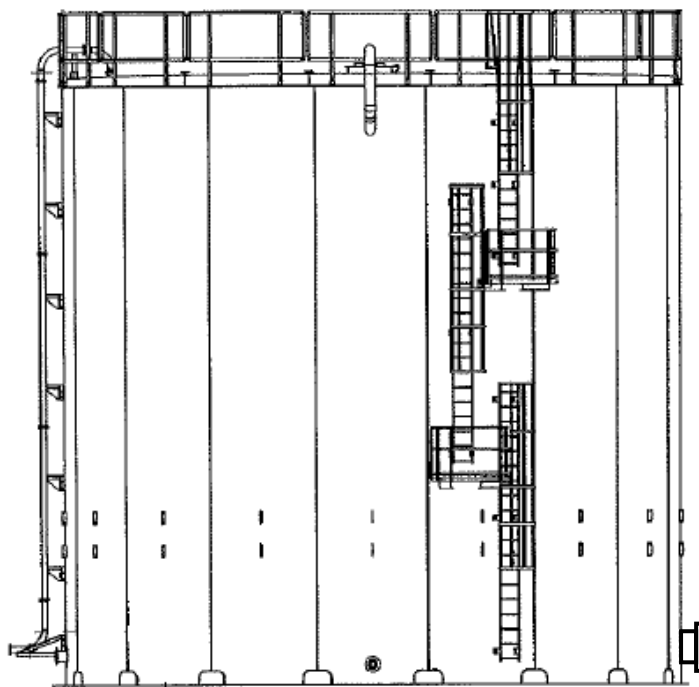
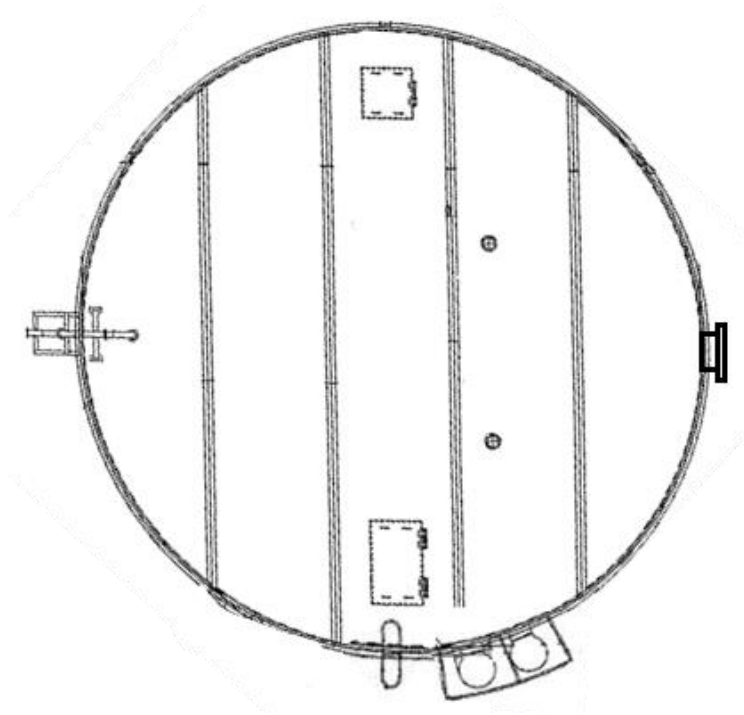
溶接型タンク概略図 (G1 南 (1,330m<sup>3</sup>))



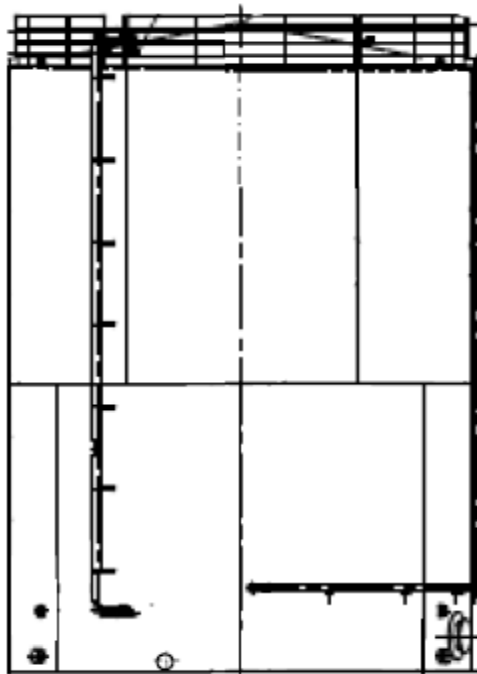
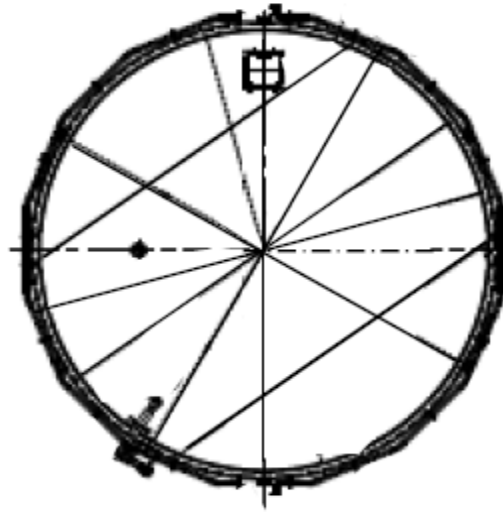
溶接型タンク概略図 (B, B 南(1,330m<sup>3</sup>))



溶接型タンク概略図 (B(700m<sup>3</sup>))



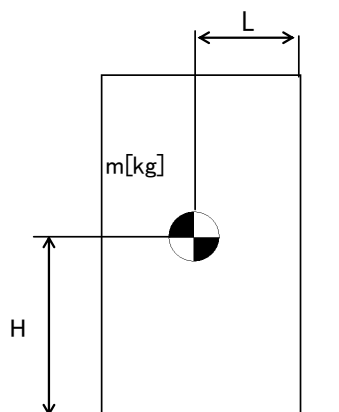
溶接型タンク概略図 (H3, H6(Ⅱ), G1, G4 南, G4 北, G5)



溶接型タンク概略図 (G6)

中低濃度タンクに対する静的地震力 3.6Ci を適用した場合の転倒評価

J2・J3・J4・J6・K1 北・K2・K1 南・H1・J7・H1 東・J8・K3・J9・K4・H2・H4 北・H4 南・G1 南・H5・H6(I)・H3・H6(II)エリアの中低濃度タンクについて、参考として静的地震力 3.6Ci を適用した場合の転倒評価を行う。地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。



- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面からの重心までの距離
- $L$  : 転倒支点から機器重心までの距離
- $C_H$  : 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント :  $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント :  $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

中低濃度タンクの転倒評価結果(1/2)

機器名称	評価 部位	評価 項目	水平 震度	算出値	許容値	単位	
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$3.44 \times 10^4$	$3.57 \times 10^4$	kN・m
		本体	転倒	0.72	$3.470 \times 10^{4*1}$	$3.477 \times 10^4$	kN・m
	1000m <sup>3</sup> 容量 <sup>*2</sup>	本体	転倒	0.72	$5.5 \times 10^4$	$5.8 \times 10^4$	kN・m
	1060m <sup>3</sup> 容量 <sup>*2</sup>	本体	転倒	0.72	$5.7 \times 10^4$	$5.9 \times 10^4$	kN・m
	1140m <sup>3</sup> 容量 <sup>*2</sup>	本体	転倒	0.72	$6.1 \times 10^4$	$6.3 \times 10^4$	kN・m
	1160m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$6.2 \times 10^4$	$7.1 \times 10^4$	kN・m
	1200m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$6.1 \times 10^4$	$8.3 \times 10^4$	kN・m
				0.72	$4.9 \times 10^4$	$7.5 \times 10^4$	kN・m
	1220m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$5.4 \times 10^4$	$7.8 \times 10^4$	kN・m
	1330m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$7.99 \times 10^4$	$8.18 \times 10^4$	kN・m
1356m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	$6.8 \times 10^4$	$9.6 \times 10^4$	kN・m	

※1 : スロッシングによる液面振動を加味した算出値

※2 : 公称容量での評価

中低濃度タンクの転倒評価結果(2/2)

機器名称		評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
多核種処理水貯槽	2400m <sup>3</sup> 容量 (J2, J3)	本体	転倒	0.72	1.36×10 <sup>5</sup>	2.32×10 <sup>5</sup>	kN・m
	2400m <sup>3</sup> 容量 (H2)	本体	転倒	0.72	1.38×10 <sup>5</sup>	2.32×10 <sup>5</sup>	kN・m
	2900m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	1.5×10 <sup>5</sup>	2.5×10 <sup>5</sup>	kN・m
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量※	本体	転倒	0.72	5.5×10 <sup>4</sup>	5.8×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1160m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	6.2×10 <sup>4</sup>	7.1×10 <sup>4</sup>	kN・m
	1200m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	0.72	6.1×10 <sup>4</sup>	8.3×10 <sup>4</sup>	kN・m

※：公称容量での評価

以上

## 中低濃度タンクに対する波及的影響評価について

中低濃度タンクのうち、高性能多核種除去設備上屋に隣接する立地となる K3, K4 エリア、R0 濃縮水移送配管に隣接する立地となる H4 南, H5, H6(I)エリア、蒸発濃縮装置に隣接する立地となる H6(II)エリアについて、波及的影響の有無について評価を実施した。タンク設置エリアにおける基準地震動 Ss-1, 2, 3 のうち、水平方向及び鉛直方向の応答加速度の組み合わせが最も厳しい時刻における転倒評価を行った結果、タンクが転倒せず、波及的影響がないことを確認した。

転倒評価の内容は下記の通り。

- ・タンク設置エリアの地表面における基準地震動：Ss-1, 2, 3 で、水平方向及び鉛直方向の応答加速度の組み合わせが最も厳しい時刻における転倒モーメントをスロッシングによる液面振動を加味して算出する。
- ・タンク設置エリアの地表面における基準地震動：Ss-1, 2, 3 で、水平方向及び鉛直方向の応答加速度の組み合わせが最も厳しい時刻における安定モーメントを算出する。
- ・各基準地震動において、転倒モーメントと安定モーメントを比較し、転倒モーメントが安定モーメントより小さいことを確認する。

$$M = Ch \times g \times W0 \times h0 + 1.2 \times W1 \times g \times \theta h \times h1$$

$$Mc = m0 \times (1 - Cv)^{\ast} \times g \times r \quad \ast : (1 - Cv) \leq 1$$

M：転倒モーメント (kN・m)

Mc：安定モーメント (kN・m)

W0：スロッシングによる衝撃力を加味した全等価質量 (t)

W1：スロッシングによる振動力を加味した内包水の等価質量 (t)

h0：W0 の作用点高さ (m)

h1：W1 の作用点高さ (m)

$\theta h$ ：液体表面の自由振動角度 (rad)

m0：総重量 (t)

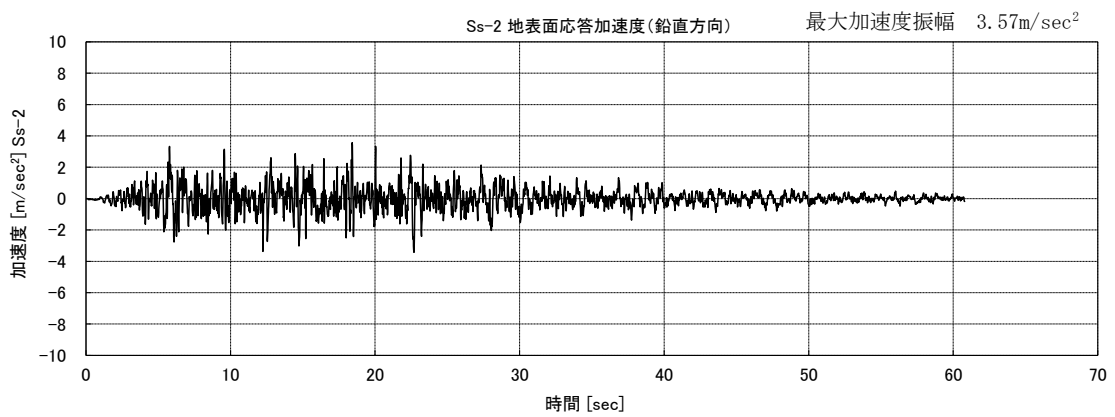
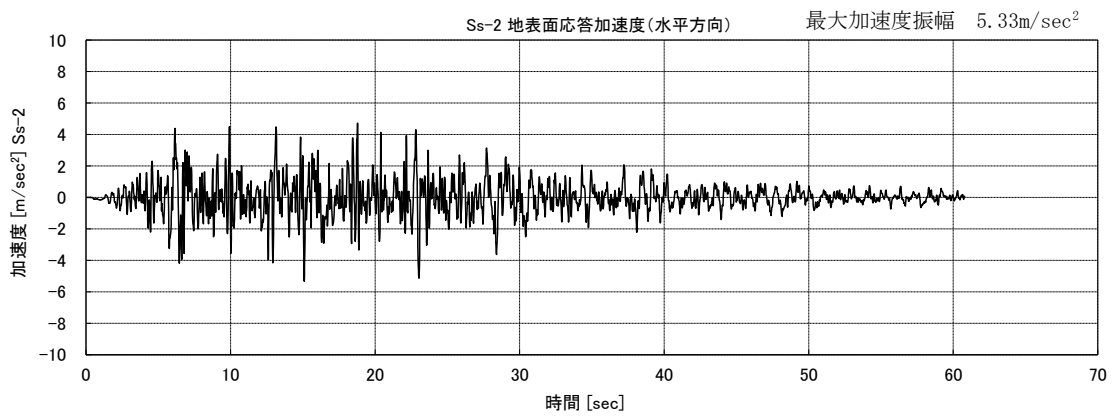
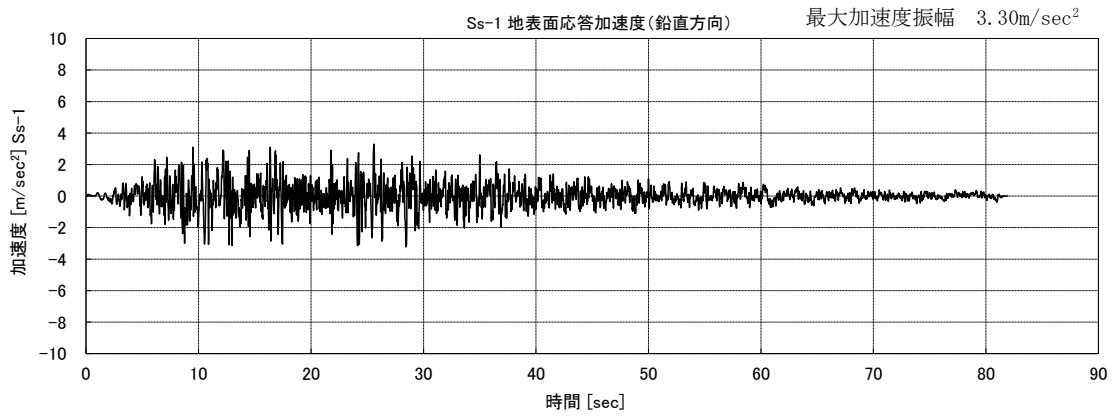
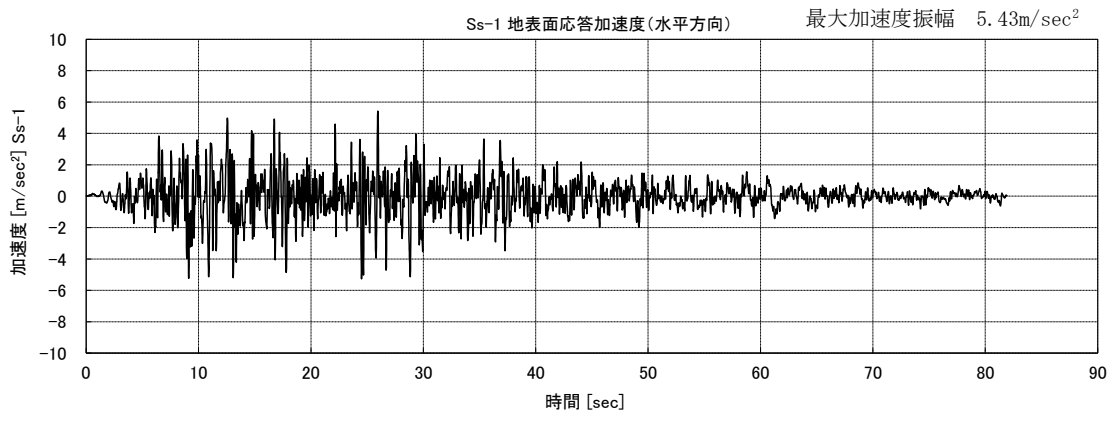
r：底板半径 (m)

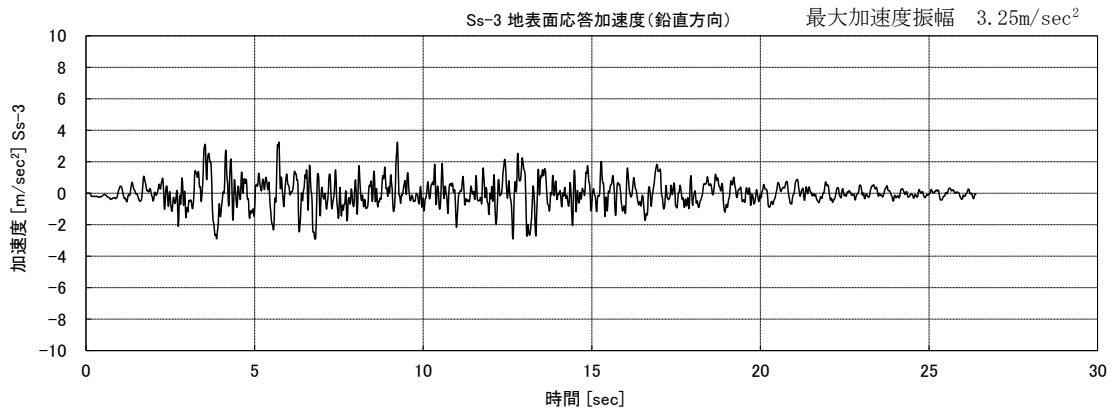
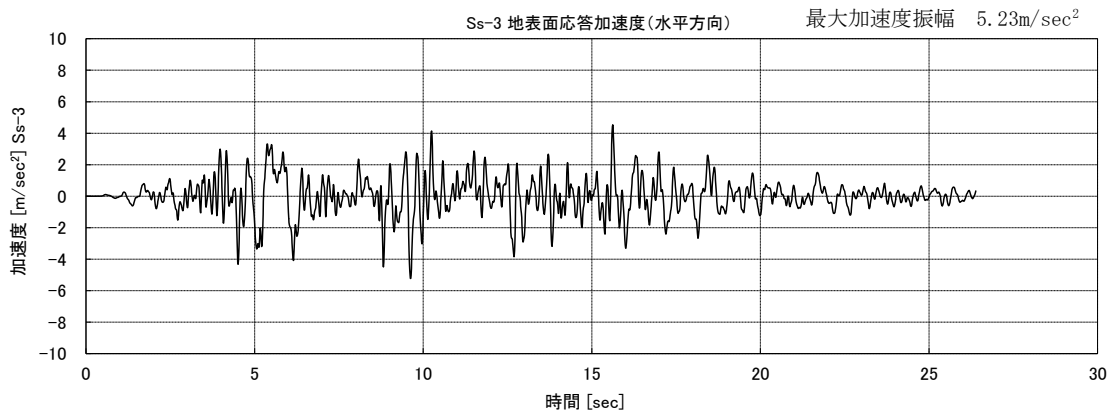
Ch：水平方向震度

Cv：鉛直方向震度

g：重力加速度 (m/s<sup>2</sup>)







中低濃度タンクの波及的影響評価結果

機器名称	評価 部位	評価 項目	基準 地震動	算出値		単位	
				転倒 モーメント	安定 モーメント		
多核種 処理水 貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$2.5 \times 10^4$	$2.9 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.7 \times 10^4$	$3.1 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$2.3 \times 10^4$	$3.0 \times 10^4$	kN・m
	1000m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$3.1 \times 10^4$	$4.6 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.5 \times 10^4$	$4.1 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$3.4 \times 10^4$	$5.6 \times 10^4$	kN・m
	1060m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$2.9 \times 10^4$	$4.3 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.4 \times 10^4$	$3.9 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$3.2 \times 10^4$	$5.3 \times 10^4$	kN・m
	1140m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$3.0 \times 10^4$	$4.5 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.5 \times 10^4$	$4.1 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$3.4 \times 10^4$	$5.6 \times 10^4$	kN・m
	1200m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$2.4 \times 10^4$	$5.4 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.0 \times 10^4$	$4.9 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$1.7 \times 10^4$	$5.5 \times 10^4$	kN・m
	1356m <sup>3</sup> 容量	本体	転倒	Ss-1	$3.1 \times 10^4$	$6.9 \times 10^4$	kN・m
				Ss-2	$2.6 \times 10^4$	$6.3 \times 10^4$	kN・m
				Ss-3	$2.1 \times 10^4$	$7.1 \times 10^4$	kN・m

以上

## 中低濃度タンクに対するスロッシング評価

J6・K1 北・K2・K1 南・H1・J7・J4(1, 160m<sup>3</sup>)・H1 東・J8・K3・J9・K4・H2・H4 北・H4 南・G1 南・H5・H6(I)・B・B 南・H3・H6(II), G6 エリアの円筒型の中低濃度タンクについて地震発生時のタンク内包水のスロッシング評価を実施した。速度ポテンシャル理論に基づきスロッシング波高の評価を行った結果、スロッシング時のタンク内の液位がタンク天板に到達しないことを確認した。

スロッシング評価の流れは下記の通り。

- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、スロッシング固有周期（水面の一次固有周期）を算出する。
- ・ タンク設置エリアの地表面における基準地震動：Ss-1, 2, 3 に対する速度応答スペクトルから、スロッシング固有周期に応じた速度応答値を求める。
- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、速度応答値からスロッシング波高を算出する。
- ・ スロッシング波高がタンク高さを超えないことを確認する。

$$T_s = 2\pi \sqrt{\frac{D}{3.68g} \coth\left(\frac{3.68H}{D}\right)}$$

$$\eta = 0.837 \left(\frac{D}{2g}\right) \left(\frac{2\pi}{T_s}\right) S_v$$

D : タンク内径 [m]

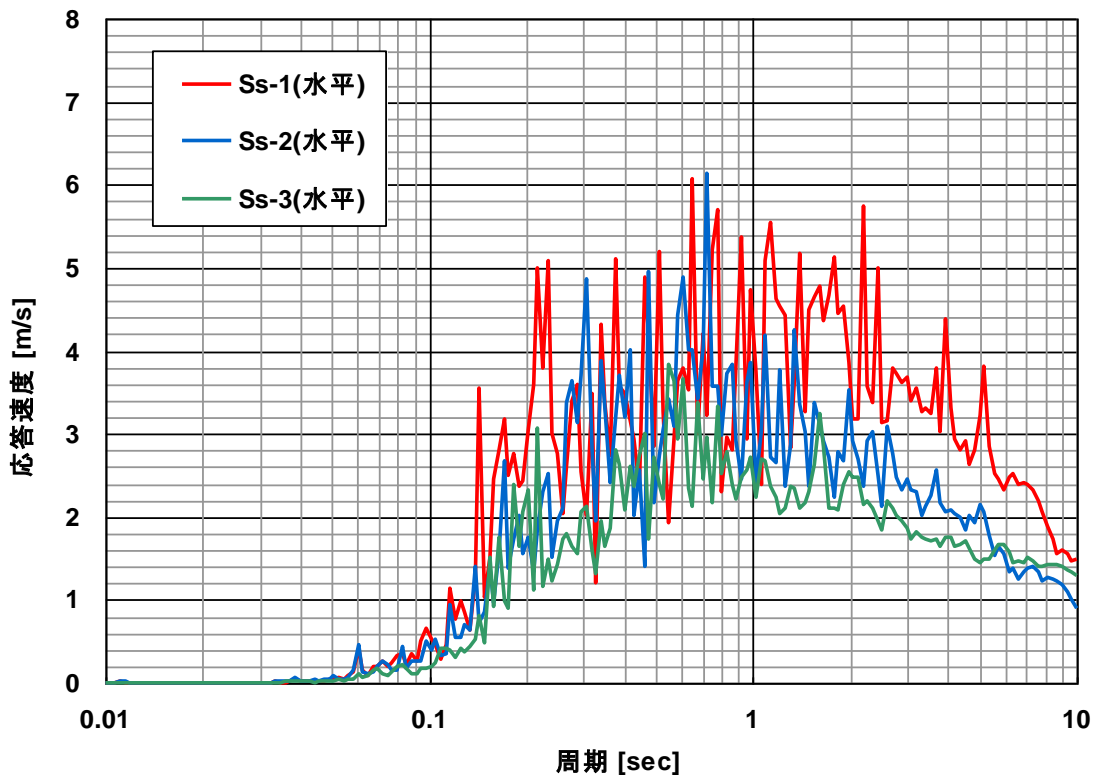
H : タンク液位 [m]

g : 重力加速度 [m/s<sup>2</sup>]

T<sub>s</sub> : スロッシング固有周期 [s]

S<sub>v</sub> : 速度応答値 [m/s]

η : スロッシング波高 [m]



速度応答スペクトル（水平方向・減衰なし）

中低濃度タンクのスロッシング評価結果

機器名称		スロッシング波高 [mm]	スロッシング時液位 [mm]	タンク高さ [mm]
多核種処理水貯槽	700m <sup>3</sup> 容量	667	11,677	12,012
		670	14,400	14,730
	1000m <sup>3</sup> 容量	662	14,127	14,565
	1060m <sup>3</sup> 容量	662	14,274	14,565
	1140m <sup>3</sup> 容量	682	14,068	14,127
	1160m <sup>3</sup> 容量	702	12,908	13,000
	1200m <sup>3</sup> 容量	799	11,410	12,012
		799	11,499	11,700
	1220m <sup>3</sup> 容量	799	11,586	11,610
	1330m <sup>3</sup> 容量	701	14,696	14,878
		701	14,696	14,900
		701	14,696	14,715
	1356m <sup>3</sup> 容量	817	11,867	12,112
2400m <sup>3</sup> 容量	753	12,403	13,200	
Sr 処理水貯槽	1057m <sup>3</sup> 容量	662	14,127	14,565
	1160m <sup>3</sup> 容量	702	12,908	13,000
	1200m <sup>3</sup> 容量	799	11,410	12,012

以上

## 中低濃度タンクのうち耐震Cクラスと位置づけられるタンクについて

G4 北, G5 エリアに設置するタンクについては, トリチウム以外の放射性物質を告示濃度限度比総和 1 未満となるまで浄化処理した水を貯留することを踏まえ, 設備等の機能喪失による公衆への放射線影響の程度, 及び機動的対応等の影響を緩和する措置により, 耐震 C クラスと位置づけられる。

### 1. 貯留水の混水の可能性について

G4 北, G5 エリアのタンクにトリチウム以外の放射性物質の告示濃度限度比総和 1 以上の水が混水することを防止するために, 以下, 設計, 運用上の対策を行う。

- ・当該タンクに接続する移送配管は, 多核種除去設備等の移送配管のみであり, 配管構成上, Sr 処理水等が混水する可能性は無い。
- ・多核種除去設備等の移送配管を使用し, 至近に移送を行った G1 エリアタンクの放射能濃度は, トリチウム以外の放射性物質<sup>※1</sup>の告示濃度限度比総和が 1 未満であることを確認している。
- ・当該タンクは K4 エリアタンクの水抜きを行う際の移送先としても使用を予定しており, K4 エリアタンクの水質は, トリチウム以外の放射性物質<sup>※1</sup>の告示濃度限度比総和が 1 未満であることを確認している。
- ・K4 エリアタンクから G4 北, G5 エリアタンクへ移送を行う際は, 多核種除去設備等のサンプルタンク経由での仮設移送とし, 使用する機器は汚染のない新品とする。

※1 : Cs-134, Cs-137, Sr-90, Co-60, Sb-125, Ru-106, I-129 の 7 核種

### 2. 機能喪失による公衆への放射線影響の程度について

G4 北, G5 エリアについて, 機能喪失による公衆への放射線影響の程度の線量評価を実施する。評価条件については, 別紙-7 に記載の評価条件に準じ, 多核種処理水の分析結果(平成 25 年 7 月)をタンク内保有水の放射能濃度として設定する。

#### 2.1. 漏えい水の直接線・スカイシャイン線による被ばく評価

地震によるタンクの滑動等により連結管等が損傷し, G4 北, G5 エリアそれぞれのタンクの貯留水全てがタンク外に漏えい。タンク群と体積・高さが同じとなる 1 つの大型円柱形状で存在し続けると仮定した場合の, 最寄りの線量評価点 (No. 5) における直接線・スカイシャイン線による被ばく量は  $1 \mu\text{Sv/y}$  未満であり, 公衆への放射線影響は殆ど無い。

#### 2.2. 漏えい水の気中移行による被ばく評価

地震によるタンクの滑動等により連結管等が損傷し, G4 北, G5 エリアそれぞれの基礎外周堰の貯留可能面積全域に漏えい水が広がり, トリチウムを含む漏えい水から蒸発した水蒸気が拡散。漏えい水の回収に 2 週間を要したと仮定した場合の, 最寄りの線量評価点

(No. 5) に居住する住民が呼吸により摂取したトリチウムによる内部被ばく量は  $50 \mu\text{Sv}$  という C クラスの基準に対して十分に低く, 公衆への放射線影響は殆ど無い。

### 3. 機動的対応等の影響を緩和する措置について

G4 北, G5 エリアに設置するタンクは, 可撓性のある連結管にてタンク間を連結し, タンクへ移送を行う際には連結弁を開とし, タンクの満水後には連結弁を閉とする運用を行う。地震による機能喪失を考慮し, 以下, 機動的対応等の影響を緩和する措置を行う。

- ・震度 5 弱以上の地震発生時, 連結管を開として運用しているタンクについて優先的に現場確認を行い, 漏えいが確認された場合は速やかに連結弁を閉とする。
- ・作業により連結弁を開とする場合は, 可能な限り短い作業時間となる様に検討を行う。
- ・地震により耐震 C クラスのタンク等が損傷し, 貯留水が敷地外へ著しく漏えいすることを防止するために基礎外周堰を設置する。当該堰については耐震 B クラスとし, B クラスの構築物に要求される水平方向設計震度に対して, 必要な強度を確保する。
- ・貯留水が漏えいし, 基礎外周堰内に溜った場合には, 仮設ポンプ, 高圧吸引車等にて漏えい水の回収を行う。回収した漏えい水は, 健全なタンク, 建屋に排水を行う。

### 4. タンクの構造健全性評価について

耐震 C クラスとしての構造健全性評価については, 別紙-2 の耐震 B クラスの評価をもって包括されている。

以上

## 使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）

### 1. はじめに

多核種除去設備及び増設多核種除去設備の沈殿処理生成物及び使用済みの吸着材を収容した高性能容器(以下、HIC という)は放射線を発するため適切に遮へいして保管する必要がある。使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）（以下、第三施設あるいは本施設という）は高性能容器（タイプ2）を保管するために設置するものである。

将来、HIC に収容する沈殿処理生成物をより安定した状態に処理できる設備について稼働時期の目途が得られた際には、設備稼働後も継続して保管が見込まれる HIC に対して数量やインベントリ等の評価を行い、評価結果を踏まえ適切な耐震性を確保した保管方法（補強策含む）を検討し、必要な措置を行う。

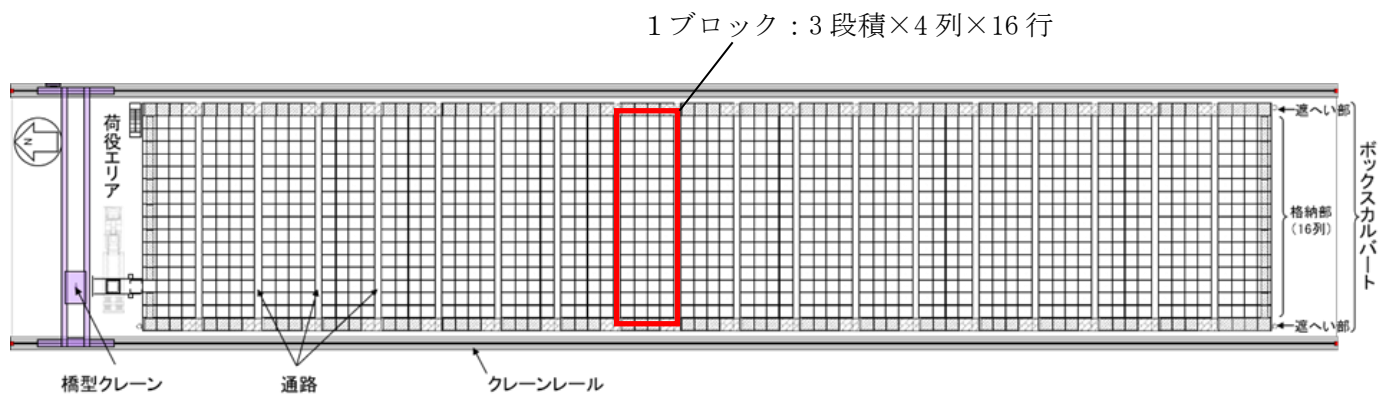
### 2. 基本設計

#### 2.1 設計概要

本施設は HIC を取扱うための橋形クレーン、遮へい機能を有する蓋付きコンクリート製ボックスカルバート等により構成し、本施設における HIC の貯蔵体数は 3648 基（3 段積×4 列×16 行×19 ブロック）とする(図 1)。

なお、万一の HIC 落下破損による漏えい時に HIC を移設して漏えい物の回収等を行えるよう、十分な移設スペースを第二施設及び第三施設に確保する。

また、設置エリアを図 2 に示す。



第三施設 (平面図)



第三施設 (北面)



第三施設 (南面)

図1 第三施設概要



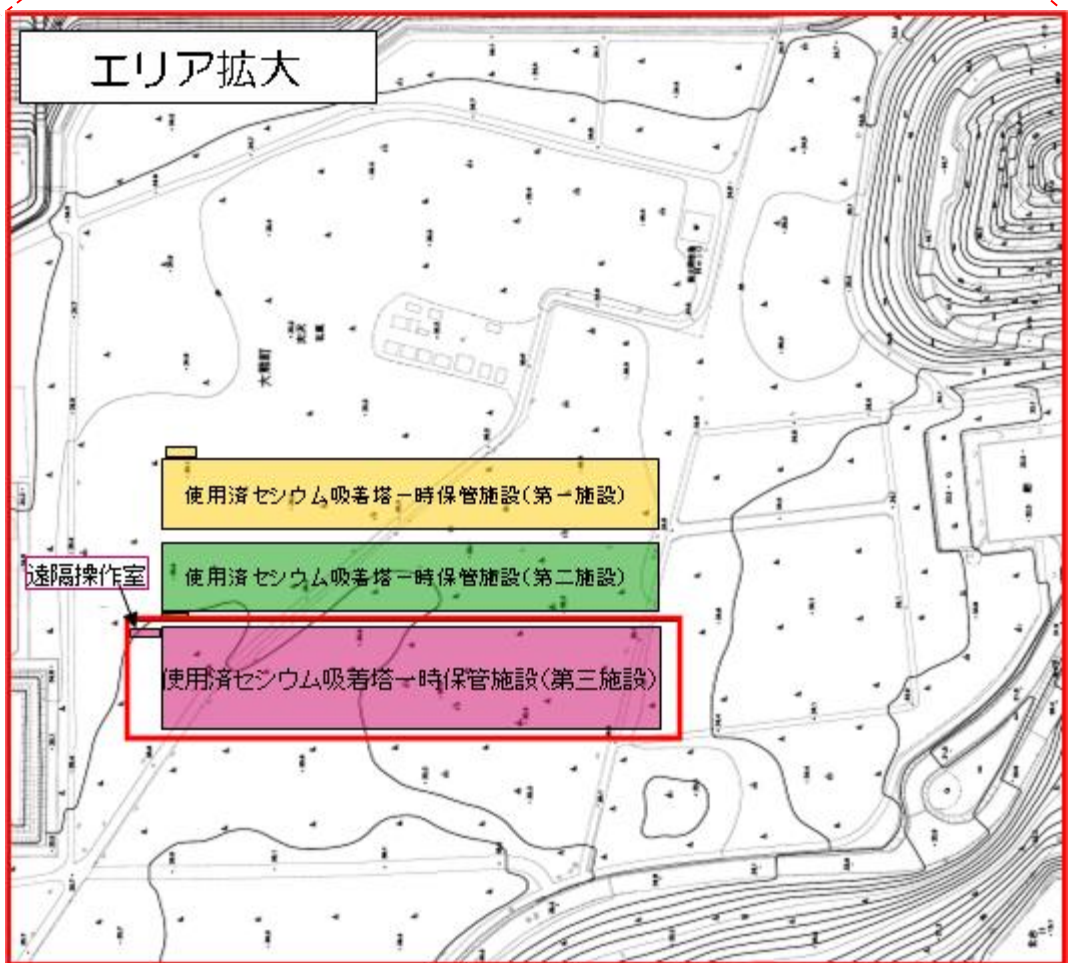
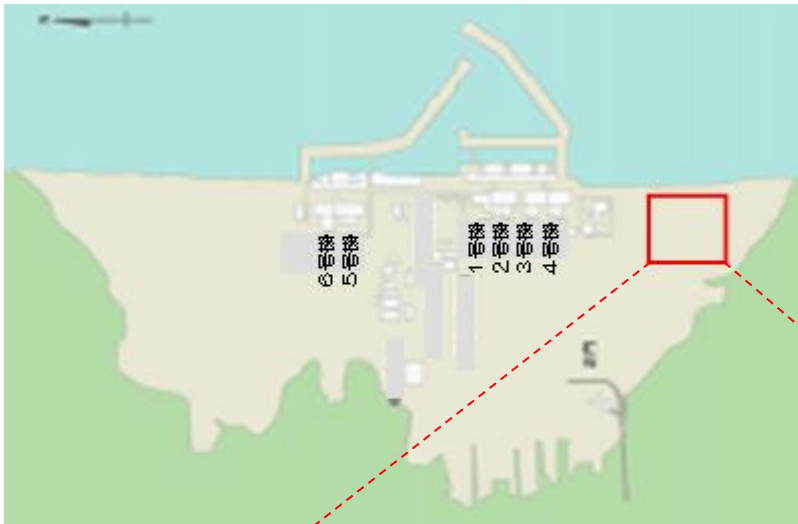


図2 設置エリア

## 2.2 設計方針

本施設は、以下の考慮を設計に反映している。

### (1) 放射性物質の漏えい及び管理されない放出の防止

本施設に格納する HIC はそれ自体、放射性物質が漏えいしない構造となっているものの、万一の漏えい発生時においても管理されない放出を防止できるよう、ボックスカルバートに漏えい拡大防止機能を持たせた設計とする。

### (2) 放射線遮へいに対する考慮

本施設は、敷地境界線量への影響を軽減するほか、放射線業務従事者等の線量を低減する観点からも、放射線を適切に遮へいする設計とする。

### (3) 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

本施設は、HIC 内の水の放射線分解により発生する可燃性ガスを適切に排出できる設計とする。

### (4) 放射線防護に係わる被ばく防止措置

作業における被ばく低減ができるよう、HIC の格納に際しては視認性の高いカメラを用いた遠隔クレーン操作による荷役が可能な構成とする。

### (5) 運転員操作に対する設計上の考慮

本施設は、作業員の誤操作を防止するための適切な措置を講じた設計とする。橋形クレーンについては HIC 取扱作業範囲を逸脱しないようにリミットスイッチを取り付ける。

### (6) 検査可能性に対する設計上の考慮

本施設は、機器の重要度に応じた有効な保全ができるものとし、橋形クレーンについては、リミット停止機能および法令に基づく点検を実施する。HIC の移動、格納作業に用いる橋形クレーンは定期的な検査が可能なものとする。

## 2.2.1 移送中の落下を想定した HIC の健全性確認

本施設内で HIC を取扱うにあたり、HIC の落下防止策、万一を想定した HIC 落下時の衝撃緩和策および落下試験による落下時の健全性確認等を実施している。

### (1) 落下試験

HIC の健全性を確認する落下試験(試験条件と結果の詳細はⅡ-2-16-1 に記す)は、本施設に格納する HIC の移送経路(図 3)を網羅するよう計画・実施している。落下試験の結果、本施設で想定する全ての HIC 取扱い条件において落下を想定しても、HIC の健全性が保たれることを確認した。

また、万一の HIC 落下破損による漏えい時の対応として、HIC からの漏えい物の回収作業に必要な吸引車やボックスカルバート内にアクセスするための昇降設備等を配備し、吸引車の操作等に必要な要員を確保するとともに、手順書に基づいた漏えい物回収訓練及び吸引車の点検を定期的に行う。また、HIC 及び漏えい物の回収等においては、作業スペースを確保するために、破損した HIC だけでなく、周囲に格納されている HIC の移設も必要になる場合が想定されることから、十分な移設スペースを第二施設及び第三施設に確保する。移設スペースの基数は、パーティション設置による漏えい拡大防止や漏えい検出器による早期検知、回収作業の方法等を踏まえて手順書に明記する。

### (2) 本施設内における HIC 落下時の損傷防止策

橋形クレーンの巻上げリミットを HIC 落下試験高さ(9.5m)以下に設定する。また、HIC 吊上時に吊上げシャフトを使用し、吊上げシャフト内空と HIC 直径の隙間を小さくすることで、HIC の横倒れ・斜め落下を防止する。さらに、ボックスカルバート内空と HIC 直径の隙間についても小さくすることで、ボックスカルバート内での HIC の横倒れ・斜め落下を防止する。

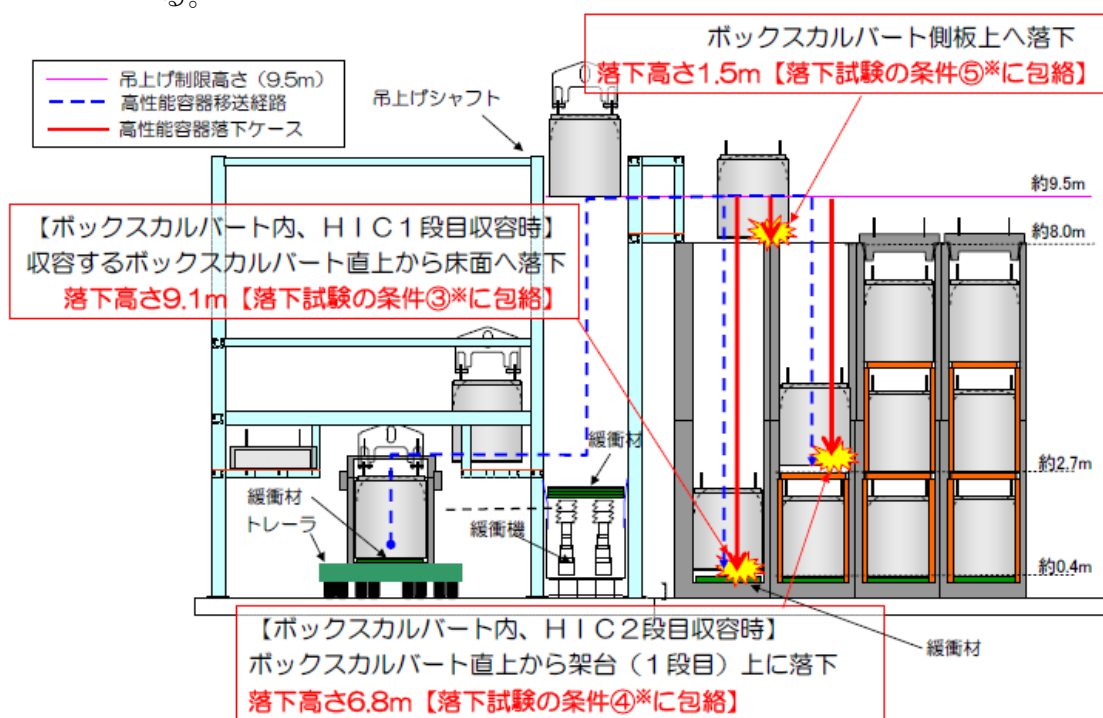
万一の落下時の衝撃を軽減するために、ボックスカルバート内底部、吊上げシャフト緩衝機上面、輸送用容器底部に緩衝材を設置する。なお、強風または地震により荷振れが生じた場合を想定しても、吊上げシャフト内およびボックスカルバート内におけるクリアランスは小さく、HIC が破損することはない。

### (3) 本施設外への HIC 落下防止策

本施設外への HIC 落下転落を防止するため、HIC を取扱う作業範囲上のボックスカルバート群外周部に転落防止架台(図 4)を設置している。また、HIC を格納する際、橋形クレーンの横行・走行リミットは HIC が転落防止架台へ接触する前に動作させるものとし、HIC 格納作業前に横行・走行リミットが動作することを確認する。なお、強風または地震に伴う荷振れにより、万一の接触を考慮した場合においても、落下試験を上回る水平荷重が HIC に加わることは考え難く、HIC の健全性に影響を及ぼすことはない。(クレーン構造規格で規定される風荷

重(風速 16m/s)が HIC に連続作用した場合を想定しても、HIC の荷振れは約 18cm 程度に収まることになる。万一接触する場合、転落防止架台の傾斜部材と HIC 補強体の底板外周部が接触点となる。補強体の底板は、高さ 3.1m から角棒への落下試験(約 7.8m/s)においても HIC を保護できるものであることを確認しており、HIC の荷振れにより HIC の健全性に影響を及ぼすことはない。

また、HIC 取扱に関しては、手順書に基づき、専任監視員を配置し、クレーンの過巻上げ、横行・走行の逸脱、積重ね用架台設置忘れ等が生じぬよう監視する。



※ 落下試験条件及び結果の詳細は、Ⅱ-2-16-1 添付資料 5 別添-4 参照

図3 第三施設における HIC 移送中の落下を想定した HIC の健全性確認

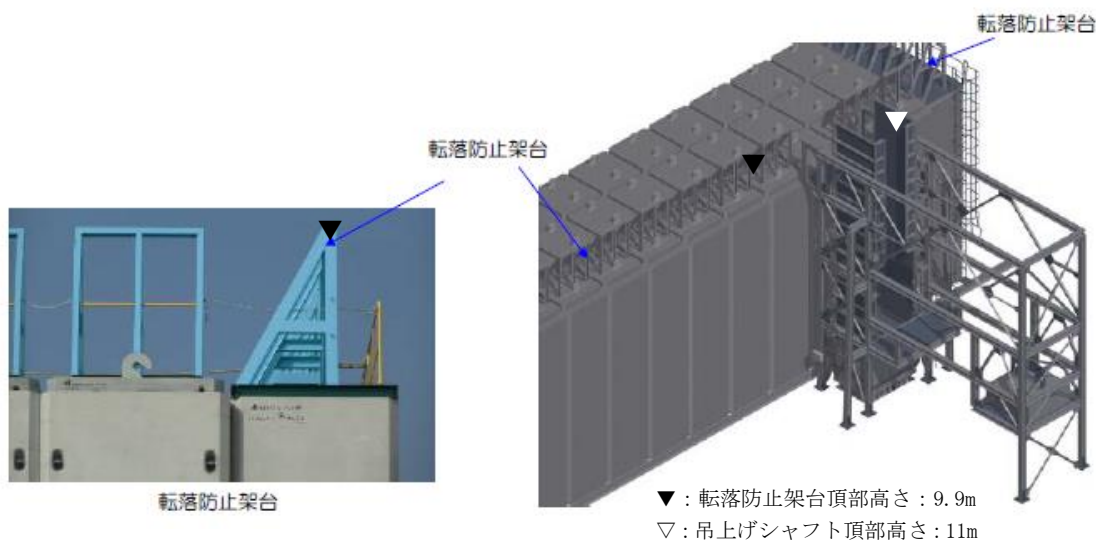


図4 転落防止架台

## 2.2.2 漏えい発生防止，拡大防止，検知機能

HIC の耐紫外線性については、「2.16.1 添付資料－5」で示す通り，使用前の製造から工場出荷までの紫外線照射時間管理および紫外線が当たらないボックスカルバート内で HIC を貯蔵することを踏まえると，有意な劣化はないと判断できる。

格納中 HIC の  $\beta$  線による放射線劣化に対しては，HIC を構成するポリエチレンの電子線照射及び材料試験を行い，HIC 表面の積算吸収線量が 2000kGy (※) までに対して健全性を確認できている。今後，更なる積算吸収線量における健全性について評価を実施する。

※ 内包する放射能濃度が最も高い HIC の想定吸着量で評価すると貯蔵期間として約 10 年相当

漏えい拡大防止として，ボックスカルバートは壁と底板を一体とした RC 構造であり，HIC，HIC の全容量を受けきる HIC 補強体に次ぐ，第三の漏えいバリアとなっている。

万一，漏えいが発生した場合に浸漬する可能性のある下部材内面には防水塗装を施し，ボックスカルバート間の目地についても，防水施工を実施している(図 5)。

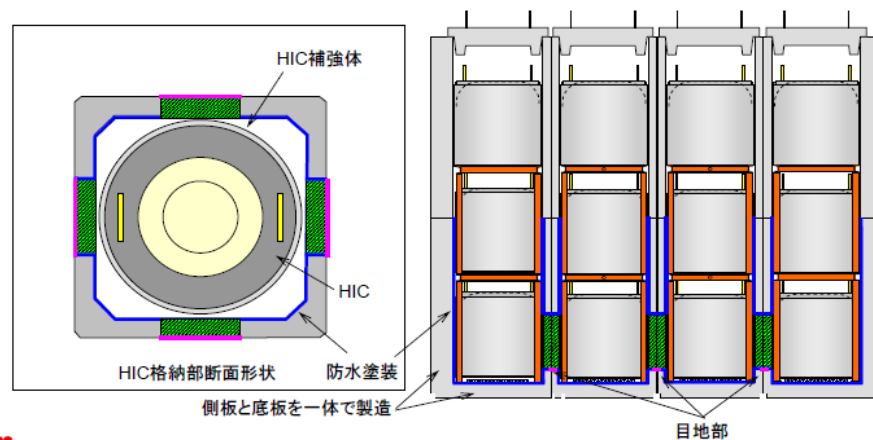


図 5 ボックスカルバート概要図

吸気孔の設置高さは，ボックスカルバート内で HIC 1 基が全量漏えいした場合に，漏えい物が当該ボックスカルバート内のみで保持されたとしても，液面が吸気孔の内面下端より低くとどまり，吸気孔が流出路とならないよう配置している。漏えい発生時には，漏えい物は通気口を通して隣接するボックスカルバートに流れ，液面はより低くとどまる。漏えい拡大防止のための防水施工による水密化単位である 4 列× 8 行のボックスカルバートは，9 基の HIC の同時漏えいに耐えうることになる。仮に一ヶ所のボックスカルバートで 3 段積み HIC 全てが漏えいした場合でも，漏えい物は通気口を通じて隣接するボックスカル

バート内へ流れ出ることから、吸気孔を通してボックスカルバート外へ漏れ出ることはない（図 6 (a), (b)）。

また、HIC 補強体とボックスカルバート内壁が接する可能性のある位置と吸気孔の配置位置は水平方向に離してある。（図 6 (c)） 中段、上段の HIC が漏えいし、かつ、漏えい物が HIC 補強体から溢れ出してボックスカルバートの内壁を伝い落ちた場合においても、内壁には漏えい物が真下に流れるように撥水性のある塗装を施すことから、吸気孔を通じてボックスカルバート外へ漏れ出ることはない。

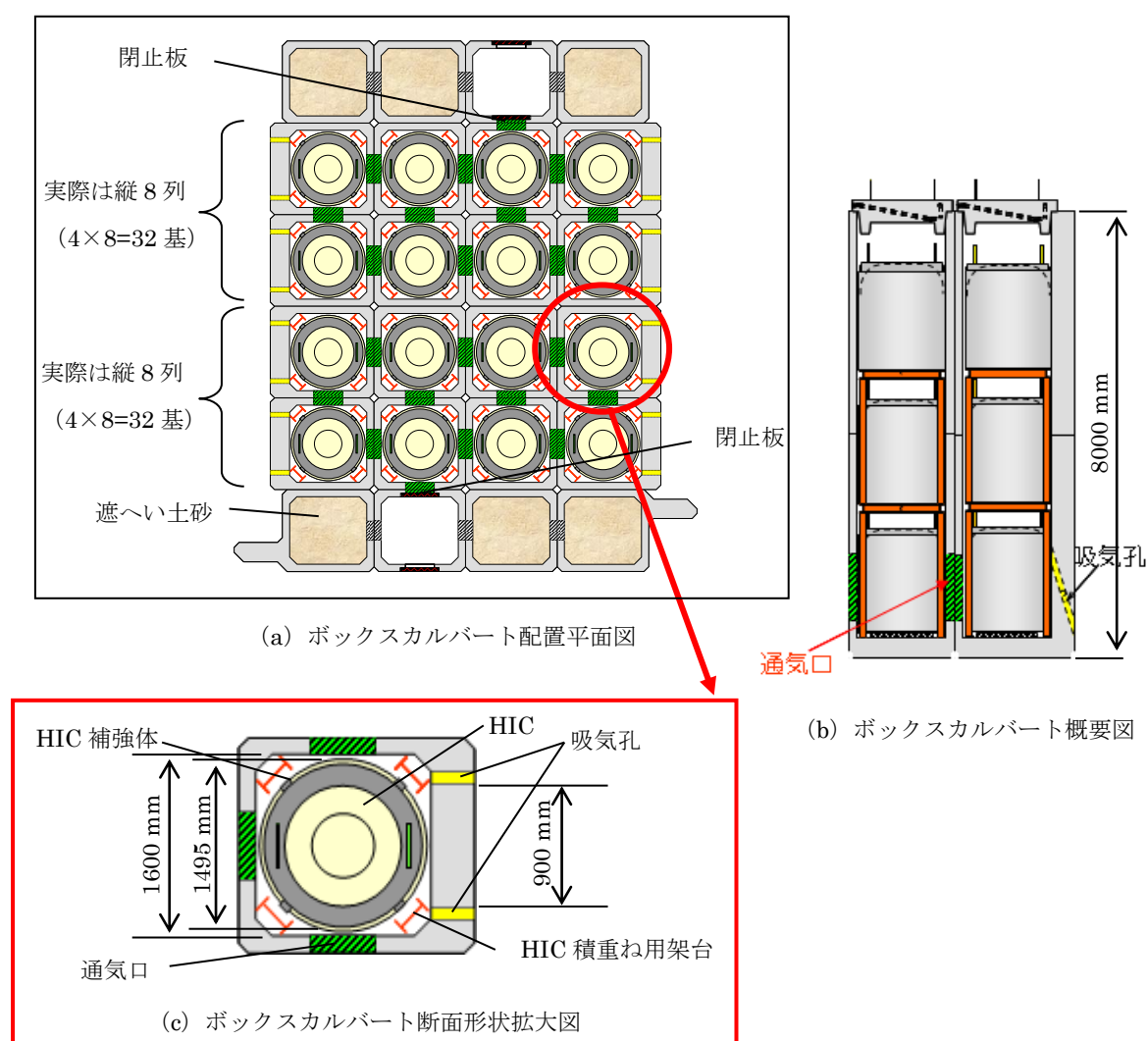


図 6 ボックスカルバートおよび HIC 概要図



格納中の HIC からの漏えい検出については、HIC1 基の全量漏えいにおいて漏えいを検出できるよう、漏えい検出装置を設置する（図 7）。漏えいを検出した場合には、免震重要棟集中監視室等に警報を発生し、適切な対応を図る。

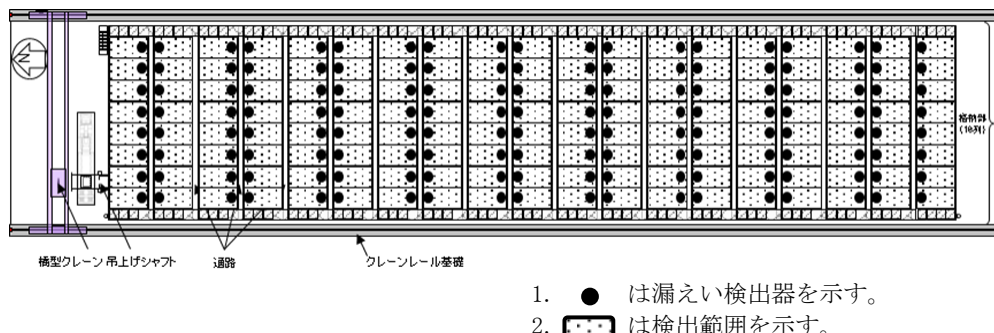


図 7 漏えい検出器設置図

なお、保管中の HIC については念のため、液体を内容物としている HIC のうち、高線量で発生数が多いスラリー（鉄共沈処理）入り HIC 及び低線量ながら発生数が多いスラリー（炭酸塩沈殿処理）入り HIC から劣化が進みやすいと想定される線量の高いものを複数ずつ選定し、これらを対象に、第二施設における調査\*と同様に、定期的に漏えい有無を確認する。

※ 第二施設に保管中の HIC（平成 25 年 4 月に保管開始）については、これまで平成 25 年 5 月、6 月、9 月、12 月、平成 26 年 6 月に調査を行い、いずれも漏えいがないことを確認している。

吊上げシャフト内での万一の HIC の漏えいに対しても、吊上げシャフト内に設置された緩衝機カバーが受けパンの役割を果たす設計としている。HIC からの漏えい物はカバー内に導かれ HIC 内の全量を受けきれの容量を保有する。（図 8）

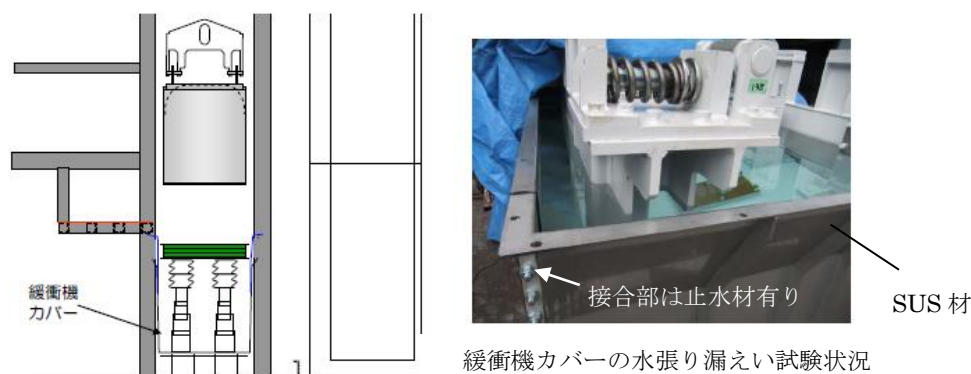
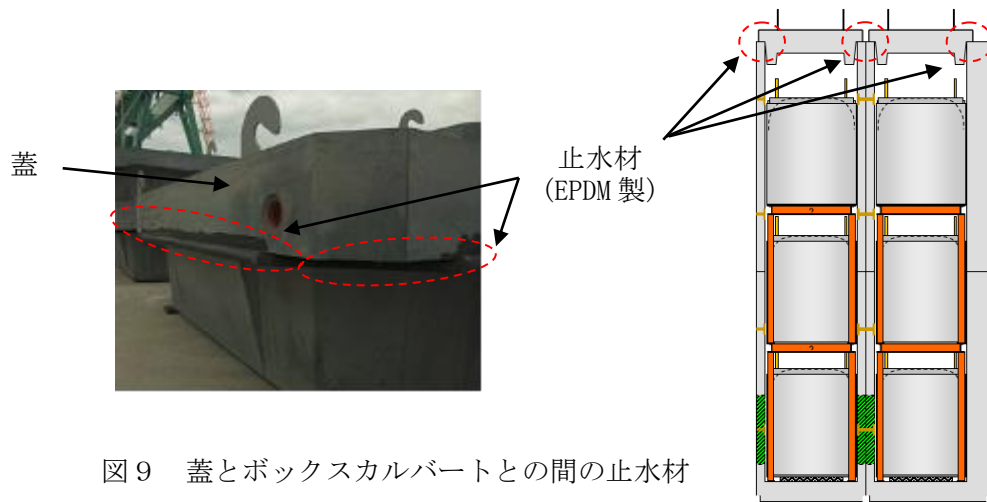


図 8 吊上げシャフト内緩衝機カバー概要

なお、蓋とボックスカルバートとの間には止水材を設置しており、雨水等が浸入しない構造としている（図 9）。そのため、万一本ボックスカルバート内で HIC からの漏えいが発生した場合においても、ボックスカルバート外の雨水とは隔離されており、蓋が屋根の役割を果たす。





### 2.2.3 遮へい機能

作業時の被ばく及び敷地境界線量への影響を軽減した設計とする(図10)。

#### (1) 作業被ばく低減

HICは遠隔クレーン操作で格納する。また作業者が通りうる通路側はボックスカルバートの壁厚を150mmから400mmに増して線量を軽減しており、HIC格納後の通路部線量は最大 $10\mu\text{Sv/h}$ 程度と評価している。

#### (2) 敷地境界線量への影響軽減

上方に厚い蓋を設け、高線量HICを下段・中段の内部に配置し、高線量HICから上方や通路側へ放出される放射線を上段及び通路に面する位置に配する低線量HICで遮へいする。

また、施設東西端のボックスカルバート内に遮へい土砂を充填する。\*

\*ボックスカルバート内へのアクセスのため、一部は空運用とする。

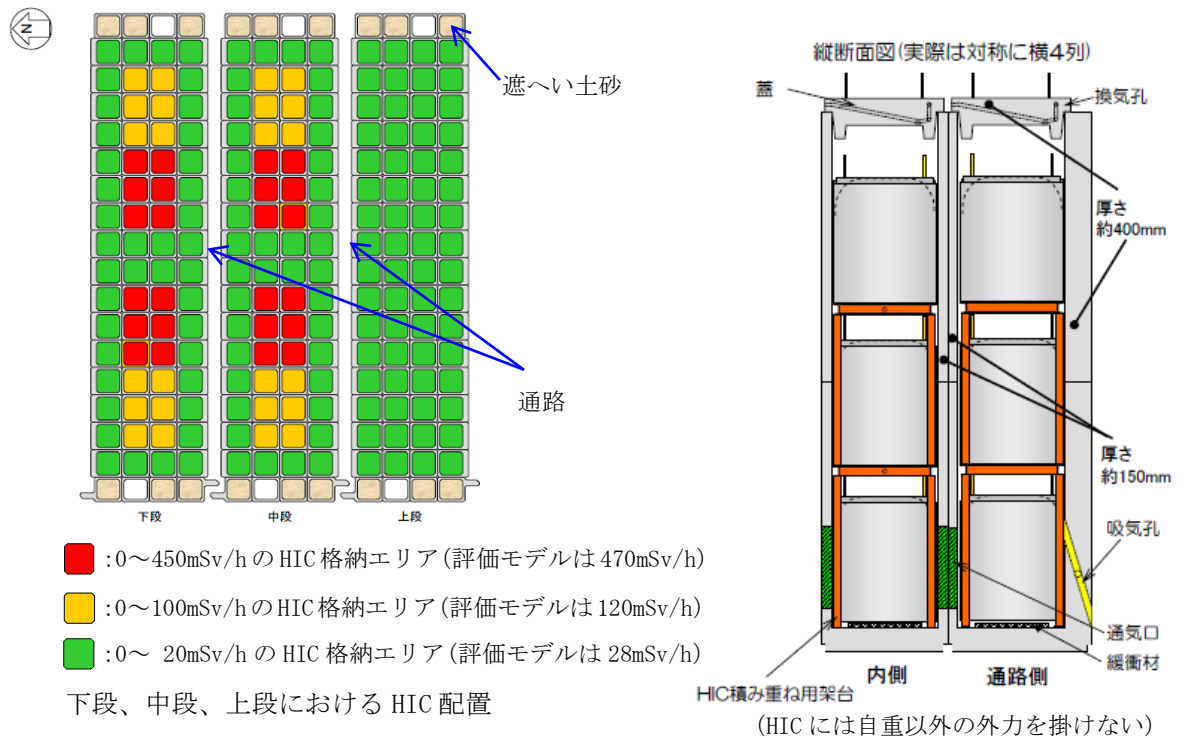


図10 ボックスカルバート概要図

敷地境界線量評価に際しては、高線量HICとして「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.2.2 敷地内各施設からの直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量」表2.2.2-1におけるスラリー(鉄共沈処理)入りHIC456体及び吸着材3入りHIC456体を、低線量HICとして同じくスラリー(炭酸塩沈殿処理)入りHIC2736体をモデル化(図10は1ブロック分のみの配置を示す)している。

2.16.1 添付4別添2に示されたHICの線量評価の上限値にもとづき、スラリー

(炭酸塩沈殿処理) より HIC 容器表面線量が小さい吸着材 1, 4 及び 5 は低線量 HIC と, 吸着材 3 より線量が低くスラリー (炭酸塩沈殿処理) より線量が高い吸着材 2 及び吸着材 6 は吸着材 3 とみなして高線量 HIC として扱っている。

スラリー (炭酸塩沈殿処理) 及びスラリー (鉄共沈処理) の側面表面線量はそれぞれ 28mSv/h, 120mSv/h と評価されており, 保管施設への格納時の各 HIC の側面表面線量実測値がこれ以下のもの (保守的に境界値をそれぞれ 20mSv/h, 100mSv/h とする) は, その測定値に応じてより低線量の HIC とみなして配置することが可能である。また高線量 HIC を配置する場所に低線量 HIC を配置することは可能とする。

以上, 図 10 に示した配置を元に, 「Ⅲ特定原子力施設の保安 第 3 編 2.2.2 敷地内各施設からの直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量」に記載の方法にて評価した結果, 第三施設の最寄りの評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線の評価結果 (表 1) は年間約 0.0202mSv となる。

表 1 第三施設から敷地境界への線量影響

評価点	評価地点までの距離 (m)	年間線量 (mSv/年)
No. 7	約 180	約 0.0202

## 2.2.4 HIC 格納時における崩壊熱除去機能，水素滞留防止機能

ボックスカルバートは，下部に吸気孔および通気口，蓋に換気孔を設け，崩壊熱及び水素を，HIC 内容物の発熱によるチムニー効果と水素の浮力による上昇流により，自然換気できる設計としている(図 1 1)。HIC を格納する際の配置は，HIC 格納時における温度評価「II 2.16 放射性液体廃棄物処理施設及び関連施設」の評価体系に記載する発熱量を超えない配置とする。

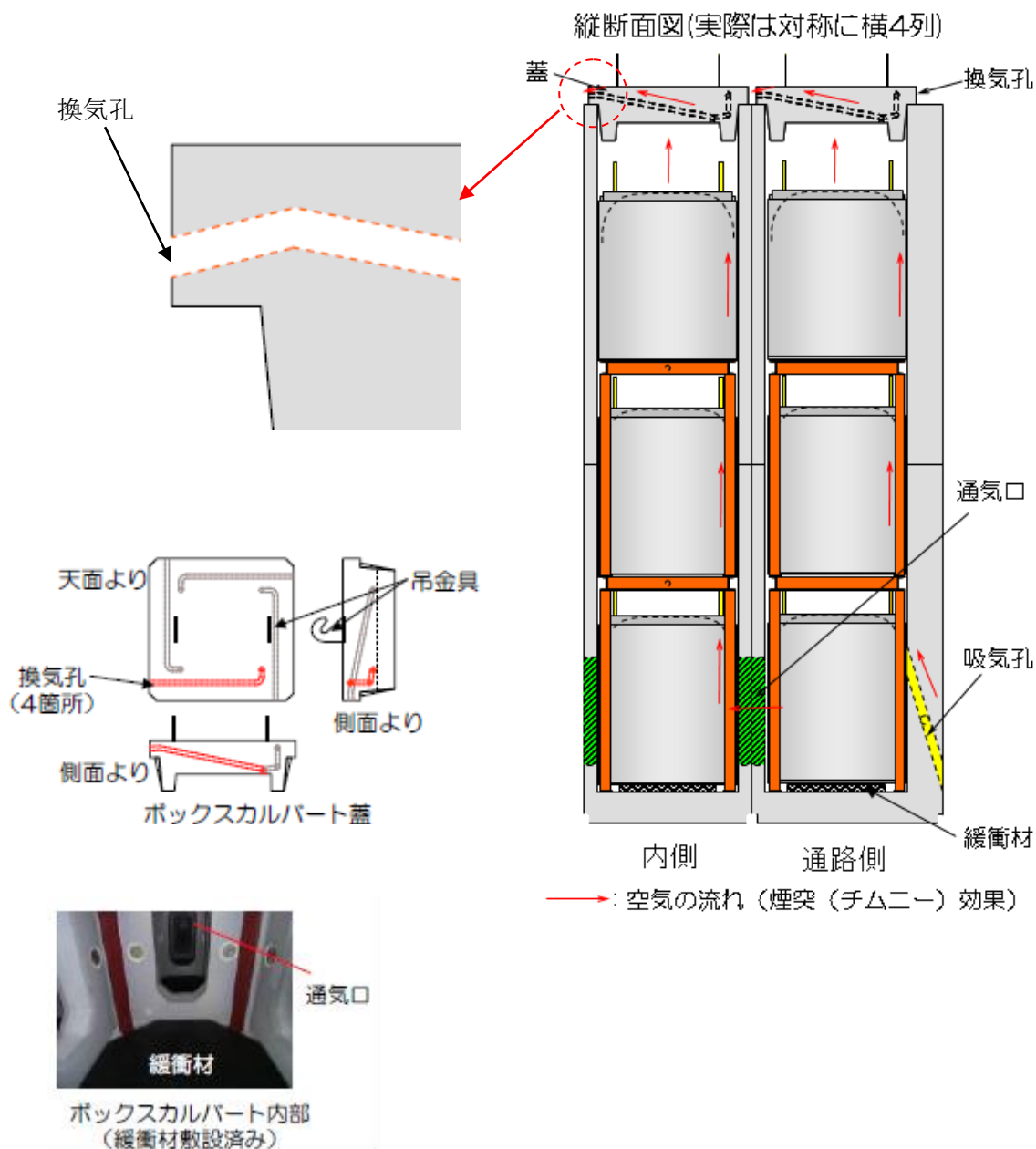


図 1 1 ボックスカルバート内の空気の流れ

## 2.2.5 耐震性

本施設を構成するボックスカルバートは、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の B クラス相当の設備と位置づけられる。耐震性に関する評価にあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」に準拠することを基本とするが、必要に応じて現実的な評価を行う。なお参考評価として、耐震 S クラス相当の水平震度 (0.60) においても健全性が維持されることを確認した。ボックスカルバートは、図 1 2 に示すように 4 列×9 行を単位として相互に連結して転倒し難い構造としている。またボックスカルバートの内空と格納する HIC 直径との隙間は小さいので、ボックスカルバート内の HIC が転倒することはない。

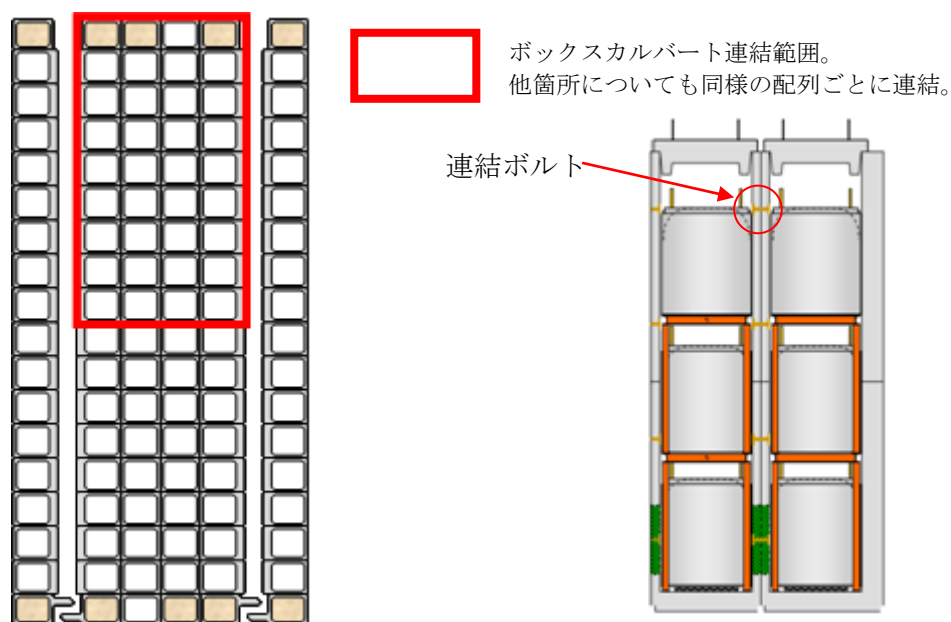


図 1 2 耐震性評価モデル範囲

### (1) 連結ボルトの強度評価

ボックスカルバートは、連結ボルトで相互に連結して転倒し難い構造としている。連結ボルトのうち、最も負荷条件の厳しいものについて引抜力を評価した結果、ボルトの許容引張力 (許容値) 以下となることを確認した (表 2)。

表 2 連結ボルトの引抜力評価結果

名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ボックスカルバート 連結ボルト	引抜力	0.36	11	184	kN
		0.60	49		

## (2) 転倒評価

4列×9行のボックスカルバート群及びその中に格納可能な HIC96基<sup>\*</sup>に対して、地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さくなることから、転倒しないことを確認した(表3)。

<sup>\*</sup>遮へい土砂を充填するボックスカルバート4箇所を除いた32箇所への格納量

## (3) 滑動評価

ボックスカルバートに対して、地震時の水平荷重によるすべり力と接地面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、水平震度0.36では地震時の水平荷重によるすべり力が接地面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した(表3)。水平震度0.60では、地震時の水平荷重によるすべり力が設置面の摩擦力より大きくなり、滑動すると評価されることから、別途すべり量の評価を実施した。

表3 耐震評価結果

機器名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第三施設 (HIC96基とボックスカルバート36基)	転倒	0.36	$2.8 \times 10^4$	$7.4 \times 10^4$	kN・m
		0.60	$4.6 \times 10^4$		
	滑動	0.36	0.36	0.40	—
		0.60	0.60		

## (4) すべり量評価

すべり量は、ボックスカルバート群の設置床に対する累積変位量として、地震応答加速度時刻歴をもとに算出した。評価の結果すべり量が隣り合うボックスカルバートの距離(許容値)を下回ることを確認した(表4)。

表4 すべり量評価結果

機器名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ボックスカルバート	すべり量	0.60	57.5	400	mm

(5) 吊上げシャフトの耐震性評価

吊上げシャフトについては、HICの吊下げ、保管をすることはしないものの、HICをボックスカルバート内に収納する際に通過させることから、耐震評価（Bクラス相当）を実施した。評価の結果、吊上げシャフト架台のアンカーボルトのうち、最も負荷条件が厳しいボルトについても許容値を下回ることを確認した。

また、吊上げシャフト内の緩衝機カバーについても、地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを比較した結果、地震による転倒モーメントは、自重による安定モーメントより小さくなることから転倒しないことを確認した。なお、参考評価として耐震Sクラス相当の水平震度（0.6）に対して健全性が確認されることを確認した（表5、表6）。

表5 吊上げシャフト架台アンカーボルトの評価結果

名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
吊上げシャフト架台 アンカーボルト	引抜力	0.36	3,182	31,790	N
		0.60	9,888		

表6 吊上げシャフト内緩衝機カバーの評価結果

名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
吊上げシャフト内 緩衝機カバー	転倒	0.36	36	71	kN・m
		0.60	60		

(6) クレーンの耐震評価

第三施設クレーンに対し、地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、地震による転倒モーメントは、自重による安定モーメントより小さくなることから、転倒しないことを確認した。なお、参考評価として、耐震Sクラス相当の水平震度（0.6）に対して健全性が確認されることを確認した（表7）。

表7 第三施設クレーンの評価結果

名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第三施設クレーン	転倒	0.36	$7.05 \times 10^5$	$1.85 \times 10^6$	kg・m
		0.60	$1.17 \times 10^6$		

## 2.2.6 基礎

第三施設の基礎は、地盤改良による安定した地盤上に設置されており、十分な支持力\*を有する地盤上に設置している（極限支持力>鉛直荷重）。

また、許容支持力（安全率：2）も鉛直荷重を上回ることを確認した。

極限支持力（地震時）：212,500（kN）

許容支持力（地震時）：106,250（kN）

鉛直荷重：80,500（kN）

※：支持力の算定式は「社団法人 日本道路協会 道路橋示方書・同解説IV下部構造編」に準拠

## 2.2.7 耐震Sクラスの評価について

本施設を構成するボックスカルバートについて、耐震Sクラスにおいても健全性が維持されることを確認した。

### (1) 連結ボルトの強度評価

ボックスカルバートは、連結ボルトで相互に連結して転倒し難い構造としてある。連結ボルトのうち、最も負荷条件の厳しいものについて引抜力を評価した結果、ボルトの許容引張力（許容値）以下となることを確認した（表8）。

表8 連結ボルトの引抜力評価結果

名称	評価項目	水平震度	鉛直震度	算出値	許容値	単位
ボックスカルバート 連結ボルト	引抜力	0.60	0.30	56	184	kN

### (2) 転倒評価

4列×9行のボックスカルバート群及びその中に格納可能なHIC9.6基\*に対して、地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さくなることから、転倒しないことを確認した（表9）。

※遮へい土砂を充填するボックスカルバート4箇所を除いた32箇所への格納量

表 9 耐震評価結果

名称	評価項目	水平震度	鉛直震度	算出値	許容値	単位
第三施設 (HIC96 基とボックスカルバート 36 基)	転倒	0.60	0.30	$4.6 \times 10^4$	$5.2 \times 10^4$	kN・m

(3) すべり量評価

すべり量は、ボックスカルバート群の設置床に対する累積変位量として、地震応答加速度時刻歴をもとに算出した。評価の結果すべり量が隣り合うボックスカルバートの距離(許容値)を下回ることを確認した(表 10)。

表 10 すべり量評価結果

機器名称	評価項目	算出値	許容値	単位
ボックスカルバート	すべり量	101	400	mm

(4) 基礎

第三施設の基礎は、地盤改良による安定した地盤上に設置されており、十分な支持力<sup>\*</sup>を有する地盤上に設置している(極限支持力>鉛直荷重)。

極限支持力(地震時) : 167,358 (kN)

鉛直荷重 : 104,571 (kN)

※ : 支持力の算定式は「社団法人 日本道路協会 道路橋示方書・同解説IV下部構造編」に準拠

(5) 吊上げシャフトの耐震性評価

吊上げシャフトについては、HIC の吊下げ、保管をすることはしないものの、HIC をボックスカルバート内に収納する際に通過させることから、参考までに耐震評価を実施した。評価の結果、吊上げシャフト架台・吊上げシャフト内緩衝機カバーのアンカーボルトについて許容値を下回ることを確認した(表 11)。なお、吊上げシャフト架台アンカーボルトについては、2.2.5(5)の水平震度(0.6)の算出時に保守的に鉛直震度を考慮しているため値は変わらない。



表 1 1 吊上げシャフト架台とシャフト内緩衝機アンカーボルトの評価結果

名称	評価項目	水平震度	鉛直震度	算出値	許容値	単位
吊上げシャフト架台 アンカーボルト	引抜力	0.60	0.30	9,888	31,790	N
吊上げシャフト内 緩衝機カバー アンカーボルト	引抜力	0.60	0.30	2,141	31,790	N

(6) クレーンの耐震性評価

第三施設クレーンに対し、参考までに地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、地震による転倒モーメントは、自重による安定モーメントより小さくなることから、転倒しないことを確認した（表 1 2）。

表 1 2 第三施設クレーンの評価結果

名称	評価項目	水平震度	鉛直震度	算出値	許容値	単位
第三施設クレーン	転倒	0.60	0.30	$1.17 \times 10^6$	$1.29 \times 10^6$	kg・m

(1)～(6)の評価結果より、ボックスカルバートの健全性を確保できることから、ボックスカルバートに格納された HIC が破損することはなく、漏えいする事象は起こらない。

2.3 自然災害対策等

(1) 津波

使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）は津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33.5m 以上の場所に設置する。

(2) 豪雨・台風・竜巻等

豪雨の場合においては、止水材を施したボックスカルバートの蓋により、雨がボックスカルバート内に入り込まない設計としている。また、ボックスカルバートおよび蓋等は重量物であり、台風・竜巻等の強風によって容易に動くことはない。

なお、豪雨・台風・竜巻等のような格納作業の安全性が損なわれるおそれのある荒天に対して、作業中止基準を設ける。

(3)積雪

ボックスカルバートは RC 構造であり、福島県建築基準法施行細則に基づく積雪荷重に対する強度は十分高い。

(4)落雷

クレーンにて HIC 格納時、万一、落雷が発生し電源停止となっても、HIC を吊った状態で停止し、HIC が落下することはない。

(5)火災

本施設は鉄筋コンクリートあるいは鋼製構造物からなり、また HIC には鋼製補強体を付しており、火災が発生する可能性は低いですが、初期消火の対応ができるよう、近傍に消火器を設置する。

使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）に係る確認事項

使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第三施設）に係る主要な確認事項を表 1 3 及び表 1 4 に示す。

表 1 3 確認事項（主要構造物）

確認事項	検査項目	確認内容	判定基準
構造検査	材料検査	主要構造物（蓋・ボックスカルバート）における主要材料を品質記録にて確認する。	蓋：比重 3.2 以上 ボックスカルバート： 比重 2.3 以上
	寸法検査	主要構造物（蓋，ボックスカルバート）における主要厚さ寸法を品質記録にて確認する。	蓋：約 400mm 壁：約 400mm／約 150mm
	外観検査	各部の外観（確認可能な範囲）を確認する。	有意な欠陥がないこと
	据付検査	主要構造物が実施計画書に記載のとおり据付けされていることを品質記録または目視にて確認する。 ・連結ボルト ・緩衝材 ・遮へい土砂 ・換気孔 ・吸気孔 ・通気口	実施計画のとおり据付されていること
	地盤支持力確認	支持力試験にて，基礎の地盤支持力を確認する。	必要な支持力を有していること。
機能検査	橋形クレーン機能検査	橋形クレーンが実施計画書記載のとおり機能することを確認する。	横行・走行：転落防止架台に HIC が接触する前に横行・走行リミットが動作し，クレーンが停止すること。 巻上げ：HIC 底部－ボックスカルバート設置床の高さが 9.5m 以下となるよう制限できること。

表 1 4 確認事項（漏えい検出装置及び自動警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	検出器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
機能	漏えい警報確認	漏えい信号により，警報が発生することを確認する。	漏えいの信号により，警報が発生すること。

以上

## ボックスカルバート内等での HIC 破損による漏えいへの対処

### 1. はじめに

第三施設において、万一の取扱い異常等により、ボックスカルバート内等で HIC からの漏えいを生じた、あるいはその疑いのある場合、当該事象に対処する方法の考え方を以下に示す。起点事象としては HIC を格納作業中に落下させてしまった場合が想定される。

### 2. 想定する状況

ケース 1：あるボックスカルバート内で HIC が損壊して内容物である沈殿処理生成物（スラリー）が漏えいしている。漏えい量が多く、ボックスカルバート下部材の通気口を通して隣接ボックスカルバート内へ漏えい物が流入しているところがある。なおボックスカルバートは防水されており外部に漏えい物が漏れることはない。

ケース 2：吊上げシャフト内で緩衝機上へ HIC が落下し底部が損壊して漏えいしている。漏えい量が多く、緩衝機カバー内に漏えい物が流れ落ちている。なお同カバーは水密であり外部に漏えい物が漏れることはない。

### 3. 対応方針

#### ケース 1 の場合

- (1) 内部の状況を遠隔観察で把握する。
- (2) 観察事実をもとに対応方針を検討し、作業員の被ばくを抑制しつつ、汚染拡大を防止して実施可能な作業計画をたてる。
- (3) ボックスカルバート内の漏えい物を回収し、除染する。

#### ケース 2 の場合

- (1) 接近して観察可能であるが、線量が高い場合はカバー外周に遮へいを設けて状況を把握する。
- (2) 観察事実をもとに対応方針を検討し、作業員の被ばくを抑制しつつ、汚染拡大を防止して実施可能な作業計画をたてる。
- (3) 緩衝機カバー内（水密）の漏えい物を回収し、機構部を洗浄、除染し復旧する。

なお損壊した HIC に対する処置は(2)の計画と並行して検討するものとして、本資料内では取り扱わない。

### 4. 対応ステップ（括弧内は留意項目）

ケース 1 を例に示す。

- (1) 事案が発生したボックスカルバート内をクレーンのカメラで観察する。（作業休止時

等においてはボックスカルバートのふたを閉止する。また降水時は作業しない。必要に応じて内部の放射線測定を行う(以下同じ。)

- (2) 漏えい物に浸っていない HIC (中段、上段など) や積重ね用架台を吊出し、HIC は他のボックスカルバート内に格納し、積重ね用架台はトレーラエリア等に仮置きする。(格納/仮置き前にスミア法等で汚染のないことを確認する。) 漏えい物に脚が浸っている積重ね用架台は、ボックスカルバート上に吊上げた時点で汚染ふき取りのうえ当該部を養生し除染作業のできる構内エリアに移送する。
- (3) 再度クレーンカメラあるいは吊下げ式カメラ(要照明。以下同じ)で内部を観察し、通気口の底部付近まで漏えい物の液面があるかを把握する。
- (4) 前項観察結果をもとに、周囲のボックスカルバートへの漏えい物の越流状況を評価し、周囲の HIC、積重ね用架台の取出し方針を決定する。(事案発生位置の全方位で越流がない場合でも、当該位置での状況を観察できるよう最低一箇所は全内容物を取り出すこととする。)
- (5) 前項での決定に基づき取出しを行う。(留意事項は(2)と同じ。)
- (6) 内容物を取出したボックスカルバートにクレーンカメラあるいは吊下げ式カメラを投入し、事案発生部の HIC の状況を詳細に観察する。可能であればクレーンで HIC を最小限吊上げて底部状況等を把握する。
- (7) 以上で得られた情報をもとに、それ以降の漏えい物回収・除染、当該 HIC の回収、汚染拡大防止策、作業被ばく軽減策等を含む作業計画を立て、関係者間で合意を得る。
- (8) 状況に応じ、東西遮へい部のアクセス開放あるいは無汚染カルバートへの昇降設備設置等、人のアクセスを確立する。(放射線量に応じた離隔、作業時間短縮性などを考慮する)
- (9) 漏えい物の回収装置を準備する。漏えい物の量、アクセス性に応じて既設の吸引装置や吸引車の活用など、設計は変わる。
- (10) (以下は周辺部からアクセスしてゆくことを想定した例である。) アクセス経路に沿って照明を設ける。また、途中で靴、手袋等を交換できるチェンジングプレースを設け、漏えい物に接する作業に伴う汚染拡大の防止を図る。
- (11) 漏えい物の越流範囲の最遠部のボックスカルバートに対して、隣の無汚染のボックスカルバートから漏えい物回収を行う。概ね回収できたら緩衝ゴムの上の残留物を軽くふき取り、表面をシート養生する。引き続きこのシート養生部を足場として次のボックスカルバートの漏えい物回収を進めてゆく。
- (12) 事案が発生したボックスカルバートには HIC が残っているほか、線量も最も高いと想定される。このため当該箇所については上部からのアクセスを優先する。高揚程の小型水中ポンプを隅角に投入する等して漏えい物のある程度回収することが望ましい。HIC からの漏えいが止まったと判断できるまで、当該カルバートでの漏えい物回収を継続する。

- (13) HIC からの漏えいが止まったら当該 HIC を吊上げ回収する。事前にボックスカルバート上部を養生する。(風雨のない日を選んで作業する。)
- (14) ボックスカルバート上で HIC を養生し、吊上げシャフト経由でトレーラ上の遮へい容器に回収する。(遮へい容器には事前に養生を施す。)
- (15) 事案発生ボックスカルバート内の漏えい物を回収する。
- (16) 関係するボックスカルバート内の緩衝ゴムは汚染しているため撤去する。
- (17) ボックスカルバート内をふき取り、清水で拭い、除染する。スミア法で汚染の有無を確認する。必要があれば塗装を削り落とし、再塗装する。
- (18) 新品の緩衝ゴムを敷設する。
- (19) 復旧状態を検査する。
- (20) 供用を再開する。

ケース 2 の場合、吊上げシャフトはアクセス性は良いものの遮へいが無いため追加遮へいを設けること、外気にさらされることから乾燥・ダスト化せぬよう若干量の清水を定期的に散布する等の配慮が必要となる。損壊した HIC は漏出停止が確認できた時点で養生のうえ、最寄りのトレーラエリアで輸送用遮へい容器内(事前養生する)に回収する。緩衝機カバーは 3m<sup>3</sup>の水張り・漏えい試験済みであり、吊上げシャフト内での漏えい物は重力でカバー内に流下、貯留される構造となっている。3m<sup>3</sup>貯留時の液面より高い位置にある、緩衝機メンテナンス口の閉止板を開けることで、カバー内の漏えい物は容易に回収可能である。また漏えい物回収後に緩衝機等を清水で洗浄してからカバーを分解することで、緩衝機のメンテナンス、復旧ができる。カバーはパッキンを交換のうえ組立て、再度水張り・漏えい試験を行って供用に復する。

## 5.おわりに

以上のように、第三施設においてはボックスカルバートや吊上げシャフトの緩衝機カバーが堰の機能を有していることから、漏えいが発見された場合でも十分な調査をもとに計画的な作業を進める時間的余裕があると考えられ、汚染拡大防止(環境への流出防止)と作業被ばく軽減を両立した漏えい水回収、除染が可能になると考えられる。

以上

## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の設計・確認の方針について

## 1. 基本設計

## 1.1 設置の目的

2.5.1.5.1 に示す汚染水処理設備等の設備構成のうち、建屋内 RO 循環設備は塩分を除去する逆浸透膜装置及びこれに付帯する設備を 4 号機タービン建屋 2 階に設置し、屋外に敷設している汚染水等の移送配管縮小による放射性物質の漏えいリスク低減や原子炉注水用の処理済水供給の信頼性向上を目的に設置する。

また、追設する関連機器は建屋内 RO にて生成された濃縮塩水を、RO 濃縮水貯槽まで淡水化装置 (RO-3) をバイパスして移送できることを目的とし設置する。

## 1.2 要求される機能

- (1) 建屋内 RO 循環設備は、サブプレッション・プール水サージタンク (以下、「SPT」という。) に供給される汚染水の塩分を除去し、原子炉注水系の水源である復水貯蔵タンク (以下、「CST」という。) に処理済水を移送できること。
- (2) 建屋内 RO で生成される濃縮塩水は、建屋内 RO 濃縮水受タンクに移送できること。
- (3) 追設する関連機器は建屋内 RO にて生成された濃縮塩水を建屋内 RO 濃縮水受タンクから RO-3 バイパスラインを介して、増設 RO 濃縮水受タンクに移送できること。

## 1.3 設計方針

## (1) 処理能力

- a. 建屋内 RO 循環設備は、燃料の崩壊熱を除去するために必要な原子炉注水量を考慮した設計とする。
- b. 建屋内 RO は、原子炉注水に使用可能な塩化物イオン濃度まで低減可能な処理容量とする。
- c. 追設する関連機器の処理能力については「2.5.1.3.1 汚染水処理設備、貯留設備 (タンク等) 及び関連設備 (移送配管, 移送ポンプ等) の設計方針」のうち「(1) 処理能力」に示すとおり。

## (2) 長期停止に対する考慮

- a. 建屋内 RO 循環設備は、故障により設備が長期間停止することがないように 2 系列設置する。
- b. 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の電源は、異なる 2 系統の所内低圧母線から受電可能な設計とする。



### (3)規格・規準

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は、設計、材料の選定、製作及び検査について、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格 (JSME 規格)、日本産業規格 (JIS 規格)、American Society of Mechanical Engineers (ASME 規格) 等<sup>\*1</sup>の適用、実績等により信頼性を確保する。

#### ※1 「金属材料に関する規格」

- ・ JIS G 3456 高温配管用炭素鋼鋼管
- ・ JIS G 3459 配管用ステンレス鋼鋼管

#### 「非金属材料に関する規格」

- ・ JIS K 6331 送水用ゴムホース (ウォーターホース)
- ・ JIS K 6349 液圧用の鋼線又は繊維補強ゴムホース
- ・ JIS K 7011 構造用ガラス繊維強化プラスチック
- ・ JIS K 7012 ガラス繊維強化プラスチック製耐食貯槽
- ・ JWWA K144 水道配水用ポリエチレン管
- ・ ポリエチレンタンク協議会技術委員会 ポリエチレン製堅型耐食円筒型貯槽規格

#### 「溶接に関する規格」

- ・ JSME S NB1 発電用原子力設備規格 溶接規格
- ・ JIS B 8285 圧力容器の溶接施工方法の確認試験
- ・ 日本鋼構造協会 JSS-I 溶接開先標準
- ・ JIS Z 3040 溶接施工方法の確認試験方法
- ・ JIS Z 3801 手溶接技術検定における試験方法及び判定基準
- ・ JIS Z 3841 半自動溶接技術検定における試験方法及び判定基準

### (4)放射性物質の漏えい発生防止及び漏えい拡大防止

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は、液体状の放射性物質の漏えい対策として、次の各項を考慮した設計とする。

- 漏えいの発生を防止するため、建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器、インターロック回路を設ける。
- 液体状の放射性物質が漏えいした場合に備え、機器周囲に堰等を設置することで漏えいの拡大を防止する。また、4号タービン建屋2階に設置する堰内等に漏えい検知器を設置し、早期検知を図る。
- タンク水位、漏えい検知等の警報は、免震重要棟に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

d. 追設する関連機器のうち，屋外に設置する堰内等へ堰内水位計の設置および巡視点検により，漏えいの早期検知を図る。

(5)放射線遮へいに対する考慮

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，放射線業務従事者等の線量を低減する観点から，放射線を適切に遮へいする設計とする。

(6)誤操作の防止に対する考慮

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，運転員の誤操作，誤判断を防止するために，特に重要な操作については，ダブルアクションを要する等の設計とする。

(7)検査可能性に対する設計上の考慮

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，漏えい検査・通水検査等の設備の機能を確認するための検査が適切に実施できる設計とする。

(8)放射線防護に係わる被ばく防止措置

- a. 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，作業における被ばく低減を図るため，必要に応じて機器周囲を遮へいする。
- b. 建屋内 R0 循環設備は，ろ過器の交換時における被ばく低減を図るため，逆洗可能な設計とする。

(9)設備保全に対する考慮

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，機器の重要度に応じた有効な保全を計画し，実施が可能な設計とする。

(10)監視・操作に対する考慮

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器は，免震重要棟において計器の監視，警報発報及び遠隔操作が可能な設計とする。

#### 1.4 主要な機器

建屋内 RO 循環設備は、SPT 廃液移送ポンプ、SPT 廃液昇圧ポンプ、ろ過器、ろ過処理水受タンク、ろ過処理水移送ポンプ、ろ過処理水昇圧ポンプ、建屋内 RO、淡水化处理水受タンク、CST 移送ポンプ及び配管等の付帯設備で構成する。

SPT の貯留水は、SPT 廃液移送ポンプにより、4 号機タービン建屋に移送し、SPT 廃液昇圧ポンプ及びろ過器を通して、ろ過処理水受タンクに一時貯留する。ろ過処理水受タンクの水は、ろ過処理水移送ポンプ及びろ過処理水昇圧ポンプにより、建屋内 RO を通して塩分を除去し、淡水化处理水受タンクを介して CST 移送ポンプにより CST に移送する。

また、追設する関連機器は建屋内 RO 濃縮水移送ポンプ、増設 RO 濃縮水供給ポンプ、建屋内 RO 濃縮水受タンク、増設 RO 濃縮水受タンク及び配管等で構成する。

建屋内 RO で生成される濃縮塩水は、建屋内 RO 濃縮水受タンクに移送し、建屋内 RO 濃縮水受タンク以降は、RO-3 バイパスラインから増設 RO 濃縮水受タンクを介して RO 濃縮水貯槽に移送される。

なお、運転系列は建屋内 RO を原則として使用することとし、蛇腹ハウス内に設置している淡水化装置 (RO) に係る設備の内、耐震 S クラスに準拠した地震に対して系外漏えいが発生しないことを確認していない機器<sup>\*</sup>については、堰内に可撓性のあるライニングを施工し、地震時の系外漏えいリスクを低減した上で、建屋内 RO 循環設備の計画外停止により、原子炉注水系保有水が不足する恐れがある場合に使用する。

※逆浸透膜装置 (RO-3)、廃液 RO 供給タンク、廃液 RO 供給ポンプ、SPT 受入水タンク、SPT 受入水移送ポンプ、RO 濃縮水受タンク、RO 濃縮水供給ポンプ

#### 1.5 自然災害対策等

##### (1) 津波

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器は、仮設防潮堤により、アウターライズ津波による浸水を防止する。また、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は、システムを停止し、隔離弁を閉止することで、汚染水の流出を防止する。なお、津波による配管損傷があった場合でも、システムを停止することで、汚染水の漏えいは限定的なものとなる。

##### (2) 風雨 (豪雨・台風・竜巻)

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のうち建屋内 RO 濃縮水移送ポンプ、建屋内 RO 濃縮水受タンクは、4 号機タービン建屋内に設置するため、風雨により設備の安全性が損なわれる可能性は低い。

追設する関連機器のうち屋外に設置する増設 RO 濃縮水供給ポンプ、増設 RO 濃縮水受タンクについては風雨により損傷を与える可能性がある場合、汚染水移送停止等の操作を行い、機器の損傷による汚染水漏えい防止を図る。

### (3)火災

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器は、火災発生防止及び火災影響軽減のため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用するとともに設備周辺から可能な限り可燃物を排除する。また、初期消火の対応ができるよう、設備近傍に消火器を設置する。なお、火災発生は、監視カメラ等により確認可能な設計とする。

## 2. 構造強度及び耐震性

### 2.1 構造強度

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器は、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格）、日本産業規格（JIS 規格）、American Society of Mechanical Engineers（ASME 規格）、日本水道協会規格（JWWA 規格）、ポリエチレン製縦型耐食円筒型貯槽規格（ポリエチレンタンク協議会技術委員会）に準拠する。

また、耐圧ホースについては、製造者仕様範囲内の圧力および温度で運用することで、構造強度を有すると評価する。

### 2.2 耐震性

建屋内 RO 循環設備を構成する主要機器および追設する機器のうち、移送ポンプ類、タンク類、配管類（鋼管）については、耐震性評価の基本方針に基づき評価を実施する。

また、耐圧ホース、ポリエチレン管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

#### 別紙

- (1) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の範囲
- (2) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の基本仕様
- (3) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の構造強度及び耐震性
- (4) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器に係る確認事項
- (5) 建屋内 R0 循環設備の関連設備における耐震性

#### 参考資料

- (1) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の具体的な安全確保策
- (2) 建屋内 R0 循環設備に係る放射性固体廃棄物発生量に関する評価
- (3) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の配置
- (4) 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器のスロッシング評価
- (5) 建屋内 R0 循環設備の関連設備におけるスロッシング評価

以上

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の範囲

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の範囲を図-1 に示す。

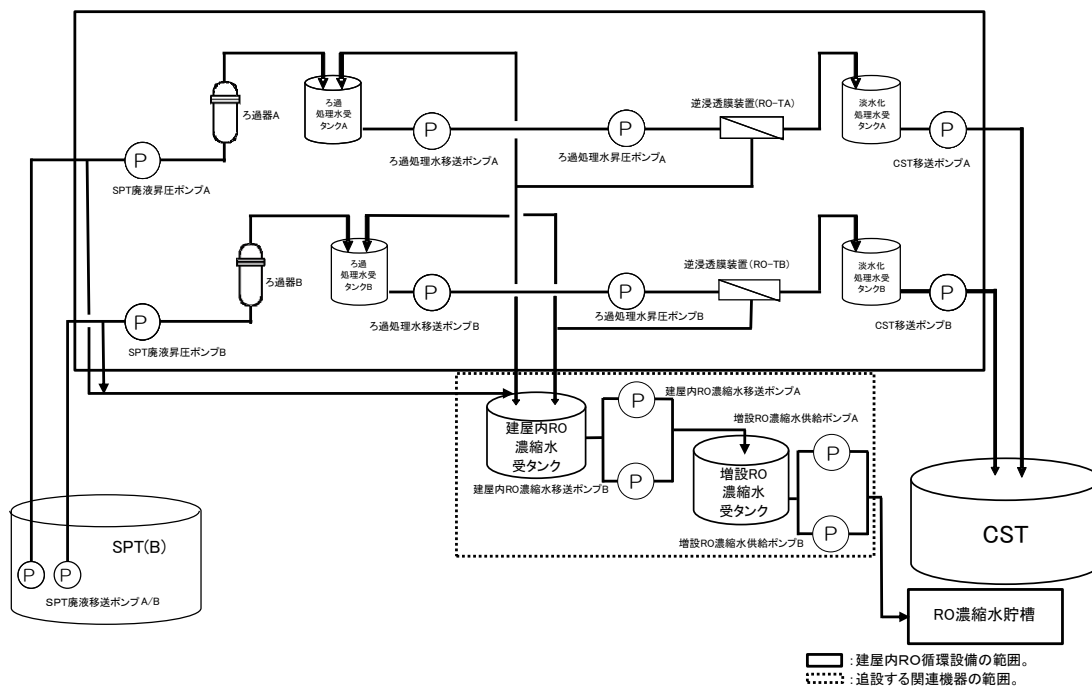


図-1 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の範囲図

## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の基本仕様

## （1）ろ過器

名 称		ろ過器	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	35	
最高使用圧力	MPa	0.98	
最高使用温度	℃	40	
主要 寸法	上部胴内径	mm	750
	上部胴板厚さ	mm	9.0
	下部胴内径	mm	750
	下部胴板厚さ	mm	9.0
	上部胴フランジ厚さ	mm	43.0
	下部胴フランジ厚さ	mm	43.0
	鏡板厚さ	mm	9.0
	高 さ	mm	2251
管台 寸法	原水入口	mm	外径 89.1×厚さ 5.5
	ろ過処理水出口	mm	外径 89.1×厚さ 5.5
材 料	胴 板	—	SM400A（ゴムライニング）
	鏡 板	—	SM400A（ゴムライニング）
	胴フランジ	—	SF490A
	管 台	—	STPT410
個 数	—	2	

## (2) ろ過処理水受タンク

名 称		ろ過処理水受タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	10	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要 寸法	胴内径	mm	2400
	胴板厚さ	mm	9.0
	高 さ	mm	3500
管 台 寸 法	ろ過処理水入口外径	mm	92
	ろ過処理水出口外径	mm	162
	濃縮水戻り入口外径	mm	92
材 料	—	強化プラスチック (FRP)	
個 数	—	2	

## (3) 建屋内 RO

名 称		逆浸透膜装置ユニット	
種 類	—	逆浸透膜型	
容 量	m <sup>3</sup> /h	35	
最高使用圧力	MPa	4.5	
最高使用温度	℃	40	
主要 寸法	た て	mm	2500
	横	mm	8600
	高 さ	mm	2500
材 料	ハウジング	—	強化プラスチック (FRP)
個 数	—	2	



(4) 淡水化処理水受タンク

名 称		淡水化処理水受タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	10	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要 寸法	胴内径	mm	2500
	胴板厚さ	mm	9.0
	底板厚さ	mm	12.0
	高 さ	mm	3800
管台 寸法	RO 処理水入口	mm	外径 89.1×厚さ 5.5
	RO 処理水出口	mm	外径 89.1×厚さ 5.5
材 料	胴 板	—	SM400C
	底 板	—	SM400C
	管 台	—	STPT410
個 数		—	2

(5) SPT 受入水タンク接続管台

名 称		SPT 受入水タンク接続管台	
最高使用圧力	MPa	大気圧	
最高使用温度	℃	66	
管台 寸法	濃縮塩水受入	mm	外径 89.1×厚さ 5.5
材料	濃縮塩水受入	—	STPT410

(6) 建屋内 RO 濃縮水受タンク

名 称		建屋内 RO 濃縮水受タンク	
種 類	—	たて置円筒形 (補強枠付属)	
容 量	m <sup>3</sup> /個	30	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴外径	mm	2860
	胴板厚さ	mm	16.0
	直胴部高さ	mm	5250
	補強枠厚さ	mm	7.0
材 料	胴 板	—	ポリエチレン
	管 台	—	ポリエチレン
	補強枠	—	SUS304
個 数	—	1	

建屋内 RO 濃縮水受タンクは、保有水のバウンダリ機能をタンク本体で、耐震性をタンク補強枠により担保する。タンク補強枠は製作上生じる最低限の隙間部を除き、側面の全周を覆う設計とする。

(7) 増設 RO 濃縮水受タンク

名 称		増設 RO 濃縮水受タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	30	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴内径	mm	3000
	胴板厚さ	mm	9.0
	底板厚さ	mm	12.0
	高 さ	mm	5006
管台寸法	RO 濃縮水入口	mm	外径 114.3×厚さ 6.0
	RO 濃縮水出口	mm	外径 114.3×厚さ 6.0
	予備	mm	外径 114.3×厚さ 6.0
	予備	mm	外径 165.2×厚さ 7.1
材 料	胴 板	—	SUS316L
	底 板	—	SUS316L
	管 台	—	SUS316L
個 数	—	1	

以上

## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の構造強度及び耐震性

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器を構成する設備について、構造強度評価の基本方針及び耐震性評価の基本方針に基づき構造強度及び耐震性の評価を行う。

### 1. 基本方針

#### 1.1 構造強度評価の基本方針

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のうち、鋼材を使用しているタンク及び鋼管については、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格）のクラス 3 機器に準じた評価を行う。

建屋内 RO、ろ過処理水受タンクは、強化プラスチック材の容器のため、American Society of Mechanical Engineers（ASME 規格）又は日本産業規格（JIS 規格）に準拠したものを製造者仕様範囲内の圧力及び温度で運用することにより構造強度を有すると評価する。

建屋内 RO 濃縮水受タンクは、ポリエチレン材の容器のため、ポリエチレン製堅型耐食円筒型貯槽規格（ポリエチレンタンク協議会技術委員会）に準じた評価を行う。

ポリエチレン管は、日本水道協会規格（JWWA 規格）に適合したものを適用範囲内で使用することで、構造強度を有すると評価する。また、耐圧ホースについては、製造者仕様範囲内の圧力及び温度で運用することで構造強度を有すると評価する。

#### 1.2 耐震性評価の基本方針

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のうち放射性物質を内包するものは、発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針の B クラス相当の設備と位置づけられる。耐震性評価にあたっては、JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程、ポリエチレン製堅型耐食円筒型貯槽規格（ポリエチレンタンク協議会技術委員会）等に準拠することを基本とする。

また、各機器は必要な耐震性を確保するために、原則として以下の方針に基づき設計する。

- ・ 倒れ難い構造（機器等の重心を低くする、基礎幅や支柱幅を大きくとる）
- ・ 動き難い構造、外れ難い構造（機器をアンカ、溶接等で固定する）
- ・ 座屈が起り難い構造
- ・ 変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法等による配管サポート間隔の設定、配管等に可撓性のある材料を使用）

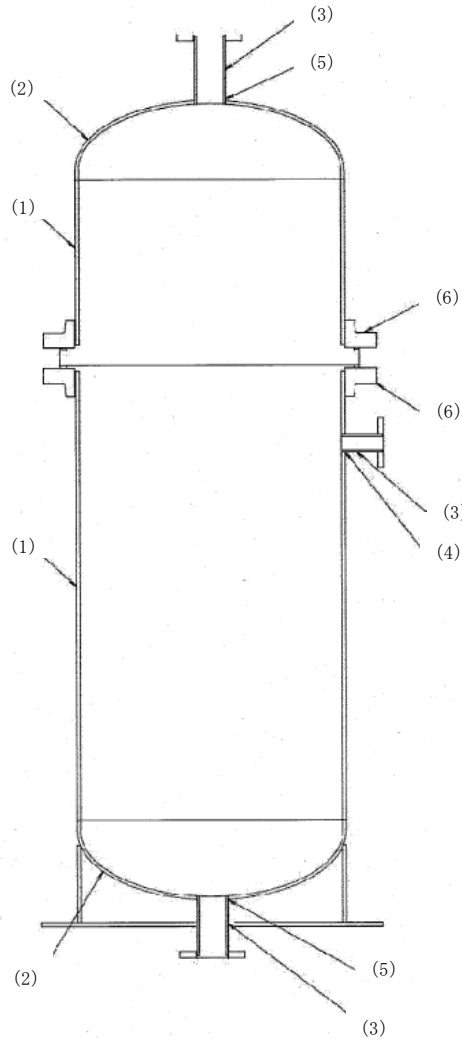
鋼管については、定ピッチスパン法で評価されるサポート間隔とする。なお、耐圧ホース、ポリエチレン管は、可撓性により耐震性を確保する。

## 2. 強度評価

### 2.1 ろ過器

#### 2.1.1 評価箇所

強度評価箇所を図-1に示す。



2.1.3の番号に対応する。

#### 2.1.2 評価方法 (JSME規格, JIS規格)

##### (1) 胴板の評価 (JSME規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3120)

胴板の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

##### a. 胴板の規格上必要な最小厚さ： $t_1$

炭素鋼鋼板又は低合金鋼鋼板で作られたもの場合は3mm, その他の材料で作られたもの場合は1.5mmとする。

b. 胴板の計算上必要な厚さ：  $t_2$

$$t_2 = \frac{P \cdot D_i}{2S \cdot \eta - 1.2P}$$

$t_2$ ：胴板の計算上必要な厚さ (mm)

P：最高使用圧力 (MPa)

$D_i$ ：胴の内径 (mm)

S：許容引張応力 (MPa)

$\eta$ ：継手効率 (-)

(2) 鏡板の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3220 及び PVC-3225)

半だ円形鏡板の必要な厚さは、以下の計算式により計算した値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 鏡板の計算上必要な厚さ：  $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D \cdot K}{2S \cdot \eta - 0.2P}$$

$t_1$ ：鏡板の計算上必要な厚さ (mm)

P：最高使用圧力 (MPa)

D：鏡板の内面における長径 (mm)

K：半だ円形鏡板の形状による係数 (-)

S：許容引張応力 (MPa)

$\eta$ ：継手効率 (-)

ここで、Kは次の計算式により計算した値とする。

$$K = \frac{1}{6} \cdot \left( 2 + \left( \frac{D}{2h} \right)^2 \right)$$

D：鏡板の内面における長径 (mm)

h：鏡板の内面における短径の 1/2 (mm)

b. 鏡板フランジ部の計算上必要な厚さ：  $t_2$

$$t_2 = \frac{P \cdot D_i}{2S \cdot \eta - 1.2P}$$

$t_2$ ：鏡板フランジ部の計算上必要な厚さ (mm)

P：最高使用圧力 (MPa)

$D_i$ ：胴の内径 (mm)

S：許容引張応力 (MPa)

$\eta$ ：継手効率 (-)

(3) 管台の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3610)

管台の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 管台の計算上必要な厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_0}{2S \cdot \eta + 0.8P}$$

$t_1$ ：管台の計算上必要な厚さ

$P$ ：最高使用圧力 (MPa)

$D_0$ ：管台の外径 (mm)

$S$ ：許容引張応力 (MPa)

$\eta$ ：継手効率 (-)

b. 管台の規格上必要な最小厚さ： $t_2$

管台の外径に応じて JSME 規格 表 PVC-3610-1 より求めた管台の厚さとする。

(4) 胴板の補強を要しない穴の最大径の評価  
(JSME 規格 PVD-3110, PVD-3120)

胴板の補強を要しない穴の最大径は、以下の計算式により計算した値のうち、いずれかとする。

- a. 穴の径が 61mm 以下で、胴の内径の 1/4 以下の穴径。

$$d_{r1} = \frac{D - 2 \cdot t_s}{4}$$

$d_{r1}$ : 補強を要しない穴の最大径 (mm)

D : 胴の外径 (mm)

$t_s$  : 胴板の最小厚さ (mm)

- b. a に掲げるものを除き、穴の径が 200mm 以下で、かつ、JSME 規格 図 PVD-3122-1 及び図 PVD-3122-2 により求めた値以下の穴径。

$$d_{r2} = 8.05 \cdot \sqrt[3]{D \cdot t_s \cdot (1-K)}$$

$d_{r2}$ : 補強を要しない穴の最大径 (mm)

D : 胴の外径 (mm)

$t_s$  : 胴板の最小厚さ (mm)

K : 胴板の形状による係数 (-)

ここで、K は胴板の場合、次の計算式により計算した値で、 $K > 0.99$  のときは、 $K = 0.99$  とする。

$$K = \frac{P \cdot D}{1.82 S \cdot \eta \cdot t_s}$$

P : 最高使用圧力 (MPa)

D : 胴の外径 (mm)

S : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

$t_s$  : 胴板の最小厚さ (mm)

(5) 鏡板の補強を要しない穴の最大径の評価 (JSME 規格 PVD-3110, PVD-3210)

鏡板の補強を要しない穴の最大径は、以下の計算式により計算した値のうち、いずれかとする。

a. 穴の径が 61mm 以下で、鏡板の内径の 1/4 以下の穴径。

$$d_{r1} = \frac{D - 2 \cdot t_c}{4}$$

$d_{r1}$ : 補強を要しない穴の最大径 (mm)

D : 鏡板の外径 (mm)

$t_c$  : 鏡板の最小厚さ (mm)

b. a に掲げるものを除き、穴の径が 200mm 以下で、かつ、JSME 規格 図 PVD-3122-1 及び図 PVD-3122-2 により求めた値以下の穴径。

$$d_{r2} = 8.05 \cdot \sqrt[3]{D \cdot t_c \cdot (1-K)}$$

$d_{r2}$ : 補強を要しない穴の最大径 (mm)

D : 鏡板の外径 (mm)

$t_c$  : 鏡板の最小厚さ (mm)

K : 鏡板の形状による係数 (-)

ここで、K は鏡板の場合、次の計算式により計算した値で、 $K > 0.99$  のときは、 $K = 0.99$  とする。

$$K = \frac{P \cdot D}{1.82 S \cdot \eta \cdot t_c}$$

P : 最高使用圧力 (MPa)

D : 鏡板の外径 (mm)

S : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

$t_c$  : 鏡板の最小厚さ (mm)



(6) ろ過器胴フランジの評価 (JSME 規格 PVD-3010, PVC-3710, JIS 規格 JIS B 8265)

ろ過器胴フランジ強度は、以下 a ~ f の計算式により計算した値とする。

a. ボルトの総有効断面積： $A_b > A_m$  であること。

① ガasket座の有効幅：b (mm)

$$b = b_0 \quad b_0 = \frac{N}{2}$$

b : ガasket座の有効幅 (mm)

N : ガasket接触面の幅 (mm)

② ガasket反力円の直径：G (mm)

$$G = G_s - N$$

G : ガasket反力円の直径 (mm)

$G_s$  : ガasket接触面の外径 (mm)

③ 使用状態の必要な最小ボルト荷重： $W_{m1}$  (N)

$$W_{m1} = H + H_p$$

$W_{m1}$  : 使用状態の必要な最小ボルト荷重 (N)

$\pi$  : 円周率 (-)

b : ガasket座の有効幅 (mm)

G : ガasket反力円の直径 (mm)

$$H = \frac{\pi}{4} \cdot G^2 \cdot P$$

m : ガasket係数 (-)

P : 最高使用圧力 (MPa)

$$H_p = 2 \cdot \pi \cdot b \cdot G \cdot m \cdot P$$

H : フランジに加わる全荷重 (N)

$H_p$  : ガasketまたは継手接触面に加わる  
圧縮力 (N)

④ ガasket締付時の必要なボルト荷重： $W_{m2}$  (N)

$$W_{m2} = \pi \cdot b \cdot G \cdot y$$

$W_{m2}$  : ガasket締付時の必要なボルト荷重 (N)

$\pi$  : 円周率 (-)

b : ガasket座の有効幅 (mm)

G : ガasket反力円の直径 (mm)

y : ガasketの最小締付け圧力 (MPa)

⑤必要なボルトの総有効断面積： $A_m$  (mm<sup>2</sup>)

$$A_m = \text{Max} (A_{m1}, A_{m2})$$

$$A_{m1} = \frac{W_{m1}}{\sigma_b}$$

$$A_{m2} = \frac{W_{m2}}{\sigma_a}$$

$A_m$ ：必要なボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $W_{m1}$ ：使用状態の必要な最小ボルト荷重 (N)  
 $W_{m2}$ ：ガスケット締付時の必要なボルト荷重 (N)  
 $\sigma_b$ ：最高使用温度におけるボルト材料の許容引張応力 (MPa)  
 $\sigma_a$ ：常温におけるボルト材料の許容引張応力 (MPa)  
 $A_{m1}$ ：使用状態のボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $A_{m2}$ ：ガスケット締付時のボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)

⑥実際に使用するボルトの総有効断面積： $A_b$  (mm<sup>2</sup>)

$$A_b = \frac{\pi}{4} \cdot d_b^2 \cdot n$$

$A_b$ ：実際に使用するボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $\pi$ ：円周率 (-)  
 $d_b$ ：ボルトネジ部の谷径と軸部の径の最小部の小さい方の径 (mm)  
 $n$ ：ボルトの本数 (本)

b. フランジハブの軸方向応力

使用状態のフランジハブの軸方向応力： $\sigma_H \leq 1.5 \sigma_f$ ,  $\sigma_H \leq 1.5 \sigma_n$  であること。

ガスケット締付時のフランジハブの軸方向応力： $\sigma_H \leq 1.5 \sigma_{fa}$ ,  $\sigma_H \leq 1.5 \sigma_{na}$  であること。

①使用状態のボルト荷重： $W_0$  (N)

$$W_0 = W_{m1}$$

$W_0$ ：使用状態のボルト荷重 (N)  
 $W_{m1}$ ：使用状態の最小ボルト荷重 (N)

②ガスケット締付時のボルト荷重： $W_g$  (N)

$$W_g = \frac{(A_m + A_b) \cdot \sigma_a}{2}$$

$W_g$ ：ガスケット締付時のボルト荷重 (N)  
 $A_m$ ：ボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $A_b$ ：実際に使用するボルトの総有効断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $\sigma_a$ ：常温におけるボルト材料の許容引張応力 (MPa)

③フランジ内径面に加わる全荷重： $H_D$  (N)

$$H_D = \frac{\pi}{4} \cdot B^2 \cdot P$$

$H_D$ ：フランジ内径面に加わる全荷重 (N)

$\pi$ ：円周率 (-)

$B$ ：フランジの内径 (mm)

$P$ ：最高使用圧力 (MPa)

④ガスケット荷重： $H_G$  (N)

$$H_G = W_0 - H$$

$H_G$ ：ガスケット荷重 (N)

$W_0$ ：使用状態のボルト荷重 (N)

$H$ ：フランジに加わる全荷重 (N)

⑤フランジに加わる全荷重とフランジ内径面に加わる荷重との差： $H_T$  (N)

$$H_T = H - H_D$$

$H_T$ ：フランジに加わる全荷重とフランジ内径面に加わる荷重との差 (N)

$H$ ：フランジに加わる全荷重 (N)

$H_D$ ：フランジ内径面に加わる全荷重 (N)

⑥ボルト穴の中心円から $H_D$ 作用点までの半径方向の距離： $h_D$  (mm)

( $H_D$ ：フランジ内径面に加わる全荷重 (N))

$$h_D = \frac{C - B}{2}$$

$h_D$ ：ボルト穴の中心円から $H_D$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

$C$ ：ボルト穴の中心円の直径 (mm)

$B$ ：フランジの内径 (mm)

⑦ボルト穴の中心円から $H_G$ 作用点までの半径方向の距離： $h_G$  (mm)

( $H_G$ ：ガスケット荷重 (N))

$$h_G = \frac{C - G}{2}$$

$h_G$ ：ボルト穴の中心円から $H_G$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

$C$ ：ボルト穴の中心円の直径 (mm)

$G$ ：ガスケット反力円の直径 (mm)

⑧ボルト穴の中心円から $H_T$ 作用点までの半径方向の距離： $h_T$  (mm)

( $H_T$ ：フランジに加わる全荷重とフランジの内径面に加わる荷重との差 (N))

$$h_T = \frac{h_D + h_G}{2}$$

$h_T$ ：ボルト穴の中心円から $H_T$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

$h_D$ ：ボルト穴の中心円から $H_D$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

$h_G$ ：ボルト穴の中心円から $H_G$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

⑨フランジ内径面に加わる荷重によるモーメント： $M_D$  (N・mm)

$$M_D = H_D \cdot h_D$$

$M_D$ ：フランジ内径面に加わる荷重によるモーメント (N・mm)

$H_D$ ：フランジ内径面に加わる全荷重 (N)

$h_D$ ：ボルト穴の中心円から $H_D$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

⑩ガスケット荷重によるモーメント： $M_G$  (N・mm)

$$M_G = H_G \cdot h_G$$

$M_G$ ：ガスケット荷重によるモーメント (N・mm)

$H_G$ ：ガスケット荷重 (N)

$h_G$ ：ボルト穴の中心円から $H_G$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

⑪フランジに加わる全荷重とフランジ内径面に加わる荷重との差によるモーメント： $M_T$  (N・mm)

$$M_T = H_T \cdot h_T$$

$M_T$ ：フランジに加わる全荷重とフランジ内径面に加わる荷重との差によるモーメント (N・mm)

$H_T$ ：フランジに加わる全荷重とフランジの内径面に加わる荷重との差 (N)

$h_T$ ：ボルト穴の中心円から $H_T$ 作用点までの半径方向の距離 (mm)

⑫使用状態のフランジに作用するモーメント： $M_0$  (N・mm)

$$M_0 = M_D + M_G + M_T$$

$M_0$ ：使用状態のフランジに作用するモーメント (N・mm)

$M_D$ ：フランジ内径面に加わる荷重によるモーメント (N・mm)

$M_G$ ：ガスケット荷重によるモーメント (N・mm)

$M_T$ ：フランジに加わる全荷重とフランジ内径面に加わる荷重との差によるモーメント (N・mm)

⑬ガスケット締付時のフランジに作用するモーメント： $M_g$  (N・mm)

$$M_g = W_g \cdot \left( \frac{C - G}{2} \right)$$

$M_g$ ：ガスケット締付時のフランジに作用するモーメント (N・mm)

$W_g$ ：ガスケット締付時のボルト荷重 (N)

$C$ ：ボルト穴の中心円の直径 (mm)

$G$ ：ガスケット反力円の直径 (mm)

⑭使用状態のフランジハブの軸方向応力： $\sigma_H$  (MPa)

最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_f$  (MPa)

最高使用温度における管台または胴材料の許容引張応力： $\sigma_n$  (MPa)

$$\sigma_H = \frac{f \cdot M_0}{L \cdot g_1^2 \cdot B}$$

$\sigma_H$ ：使用状態のフランジハブの軸方向応力 (MPa)

$f$ ：ハブ応力修正係数 (-)

$M_0$ ：使用状態のフランジに作用するモーメント (N・mm)

$L$ ：係数 (-)

$g_1$ ：フランジ背面のハブの厚さ (mm)

$B$ ：フランジの内径 (mm)

$$\sigma_H \leq 1.5 \sigma_f$$

$$\sigma_H \leq 1.5 \sigma_n$$

⑮ガスケット締付時のフランジハブの軸方向応力： $\sigma_H$  (MPa)

常温におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_{fa}$  (MPa)

常温における管台または胴材料の許容引張応力： $\sigma_{na}$  (MPa)

$$\sigma_H = \frac{f \cdot M_g}{L \cdot g_1^2 \cdot B}$$

$\sigma_H$ ：ガスケット締付時のフランジハブの軸方向応力 (MPa)

$f$ ：ハブ応力修正係数 (-)

$M_g$ ：ガスケット締付時のフランジに作用する  
モーメント (N・mm)

$L$ ：係数 (-)

$g_1$ ：フランジ背面のハブの厚さ (mm)

$B$ ：フランジの内径 (mm)

$$\sigma_H \leq 1.5 \sigma_{fa}$$

$$\sigma_H \leq 1.5 \sigma_{na}$$

c. フランジの半径方向応力

使用状態のフランジの半径方向応力： $\sigma_R \leq \sigma_f$ であること。

ガスケット締付時のフランジの半径方向応力： $\sigma_R \leq \sigma_{fa}$ であること。

①～⑬は、前項 b と同じ。

⑭使用状態のフランジの半径方向応力： $\sigma_R$  (MPa)

最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_f$  (MPa)

$$\sigma_R = \frac{(1.33 \cdot t \cdot e + 1) \cdot M_0}{L \cdot t^2 \cdot B}$$

$$\sigma_R \leq \sigma_f$$

$\sigma_R$ ：使用状態のフランジの半径方向応力 (MPa)

t：フランジの厚さ (mm)

e：係数 (mm<sup>-1</sup>)

M<sub>0</sub>：使用状態のフランジに作用するモーメント (N・mm)

L：係数 (-)

B：フランジの内径 (mm)

⑮ガスケット締付時のフランジの半径方向応力： $\sigma_R$  (MPa)

常温におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_{fa}$  (MPa)

$$\sigma_R = \frac{(1.33 \cdot t \cdot e + 1) \cdot M_g}{L \cdot t^2 \cdot B}$$

$$\sigma_R \leq \sigma_{fa}$$

$\sigma_R$ ：ガスケット締付時のフランジの半径方向応力 (MPa)

t：フランジの厚さ (mm)

e：係数 (mm<sup>-1</sup>)

M<sub>g</sub>：ガスケット締付時のフランジに作用する  
モーメント (N・mm)

L：係数 (-)

B：フランジの内径 (mm)

d. フランジの周方向応力

使用状態のフランジの周方向応力： $\sigma_T \leq \sigma_f$ であること。

ガスケット締付時のフランジの周方向応力： $\sigma_T \leq \sigma_{fa}$ であること。

①～⑬は、前項 b と同じ。

⑭使用状態のフランジの周方向応力： $\sigma_T$  (MPa)

最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_f$  (MPa)

$$\sigma_T = \frac{Y \cdot M_0}{t^2 \cdot B} - Z \cdot \sigma_R$$

$\sigma_T$ ：使用状態のフランジの周方向応力 (MPa)  
Y：係数 (-)  
 $M_0$ ：使用状態のフランジに作用するモーメント (N・mm)  
t：フランジの厚さ (mm)  
B：フランジの内径 (mm)  
Z：係数 (-)  
 $\sigma_R$ ：使用状態のフランジの半径方向応力 (MPa)

$$\sigma_T \leq \sigma_f$$

⑮ガスケット締付時のフランジの周方向応力： $\sigma_T$  (MPa)

常温におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_{fa}$  (MPa)

$$\sigma_T = \frac{Y \cdot M_g}{t^2 \cdot B} - Z \cdot \sigma_R$$

$\sigma_T$ ：ガスケット締付時のフランジの周方向応力 (MPa)  
Y：係数 (-)  
 $M_g$ ：ガスケット締付時のフランジに作用するモーメント (N・mm)  
t：フランジの厚さ (mm)  
B：フランジの内径 (mm)  
Z：係数 (-)  
 $\sigma_R$ ：ガスケット締付時のフランジの半径方向応力 (MPa)

$$\sigma_T \leq \sigma_{fa}$$

e. フランジハブの軸方向とフランジの半径方向応力の平均

平均値 $\leq \sigma_f$ , 平均値 $\leq \sigma_{fa}$ であること。

①使用状態のフランジハブの軸方向とフランジの半径方向応力の平均：(MPa)

最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_f$  (MPa)

$$\frac{\sigma_H + \sigma_R}{2} \leq \sigma_f$$

$\sigma_f$ ：最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力 (MPa)  
 $\sigma_H$ ：使用状態のフランジハブの軸方向応力 (MPa)  
 $\sigma_R$ ：使用状態のフランジの半径方向応力 (MPa)

②ガスケット締付時のフランジハブの軸方向とフランジの半径方向応力の平均：  
(MPa)

常温におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_{fa}$  (MPa)

$$\frac{\sigma_H + \sigma_R}{2} \leq \sigma_{fa}$$

$\sigma_{fa}$ ：常温におけるフランジ材料の許容引張応力 (MPa)  
 $\sigma_H$ ：ガスケット締付時のフランジハブの軸方向応力 (MPa)  
 $\sigma_R$ ：ガスケット締付時のフランジの半径方向応力 (MPa)

f. フランジハブの軸方向とフランジの周方向応力の平均

平均値 $\leq \sigma_f$ , 平均値 $\leq \sigma_{fa}$ であること。

①使用状態のフランジハブの軸方向とフランジの周方向応力の平均：(MPa)

最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_f$  (MPa)

$$\frac{\sigma_H + \sigma_T}{2} \leq \sigma_f$$

$\sigma_f$ ：最高使用温度におけるフランジ材料の許容引張応力 (MPa)  
 $\sigma_H$ ：使用状態のフランジハブの軸方向応力 (MPa)  
 $\sigma_T$ ：使用状態のフランジの周方向応力 (MPa)

②ガスケット締付時のフランジハブの軸方向とフランジの周方向応力の平均：  
(MPa)

常温におけるフランジ材料の許容引張応力： $\sigma_{fa}$  (MPa)

$$\frac{\sigma_H + \sigma_T}{2} \leq \sigma_{fa}$$

$\sigma_{fa}$ ：常温におけるフランジ材料の許容引張応力 (MPa)  
 $\sigma_H$ ：ガスケット締付時のフランジハブの軸方向応力 (MPa)  
 $\sigma_T$ ：ガスケット締付時のフランジの周方向応力 (MPa)



### 2.1.3 評価結果

評価結果を表-1～4に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有すると評価した。

表-1 ろ過器 評価結果 (板厚)

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)	
ろ過器	(1) 胴板の厚さ	5.30	5.30 以上	
	(2) 鏡板の厚さ	3.70	3.70 以上	
	(3) 管台の厚さ	原水入口	3.00	3.00 以上
		ろ過処理水出口	3.00	3.00 以上
逆洗ベント・空気入口		2.20	2.20 以上	

表-2 ろ過器 評価結果 (補強要否)

機器名称	評価項目	補強を要しない穴の最大径 (mm)	穴の径 (mm)
ろ過器	(4) 胴板	99.22	99.22 以下
	(5) 鏡板	83.65	83.65 以下

表-3 ろ過器 評価結果 (ボルトの総有効断面積)

機器名称	評価項目	必要なボルトの総有効断面積 (mm <sup>2</sup> )	実際に使用するボルトの総有効断面積 (mm <sup>2</sup> )
ろ過器	(6) a. ボルトの総有効断面積	2992	2992 以上

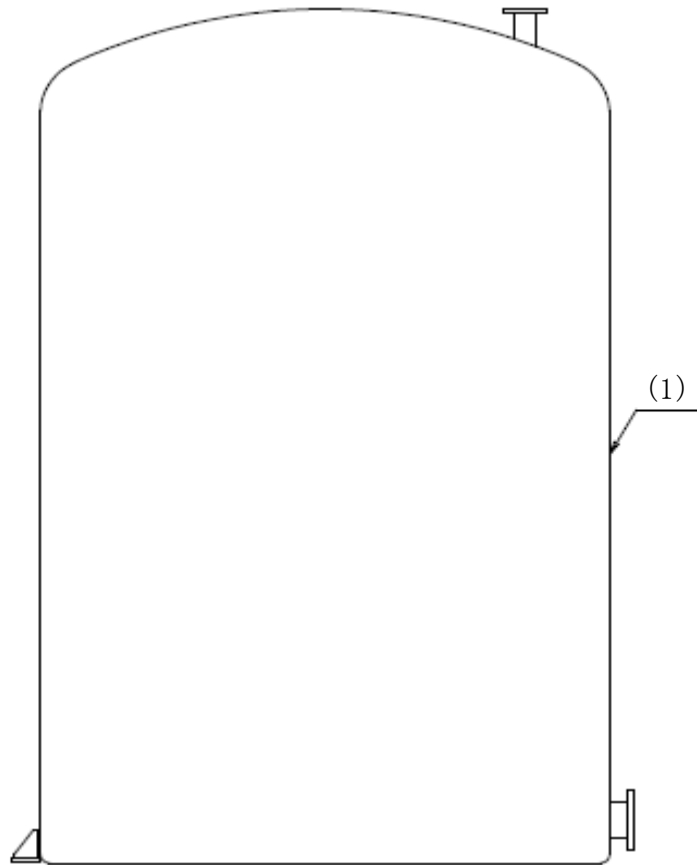
表-4 ろ過器 評価結果 (胴フランジ応力)

機器名称	評価項目	計算上の 胴フランジに加 わる応力 (MPa)	フランジの材料 等の許容引張 応力 (MPa)
ろ過器	(6) b. 使用状態のフランジハブの軸方向応力	28	28 以上
	(6) b. ガasket縮付時のフランジハブの軸 方向応力	37	37 以上
	(6) c. 使用状態のフランジの半径方向応力	30	30 以上
	(6) c. ガasket縮付時のフランジの半径方 向応力	40	40 以上
	(6) d. 使用状態のフランジの周方向応力	76	76 以上
	(6) d. ガasket縮付時のフランジの周方向 応力	102	102 以上
	(6) e. 使用状態のフランジハブの軸方向応力 とフランジの半径方向応力の平均	29	29 以上
	(6) e. ガasket縮付時のフランジハブの軸 方向応力とフランジの半径方向応力の平均	39	39 以上
	(6) f. 使用状態のフランジハブの軸方向応力 とフランジの周方向応力の平均	52	52 以上
	(6) f. ガasket縮付時のフランジハブの軸 方向応力とフランジの周方向応力の平均	70	70 以上

## 2.2 ろ過処理水受タンク

### 2.2.1 評価箇所

強度評価箇所を図-2に示す。



図中の番号は、2.2.2、2.2.3の番号に対応する。

図-2 ろ過処理水受タンク概要図

### 2.2.2 評価方法（JIS規格 JIS K 7012）

#### (1) 材料（FRP）の評価

FRPの強度は、JIS規格 JIS K 7012に規定され、JSME規格 PVD-3010及びPVD-3110、PVC-3920の評価手法により、評価する。

#### a. 構造

ろ過処理水受タンクの構造は、たて置き円筒形とする。

b. 強度評価

胴板の必要な厚さは、以下の計算式により計算した値とする。

胴板の計算上必要な厚さ：  $t_1$

$$t_1 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

$D_i$  : 胴の内径 (m)

$H$  : 水頭 (m)

$\rho$  : 液体の比重。ただし、1未満の場合は、1とする。

$S$  : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

2.2.3 評価結果

評価結果を表-5に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有すると評価した。

表-5 ろ過処理水受タンク 評価結果 (板厚)

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
ろ過処理水受タンク	(1)胴板の厚さ	2.30	2.30 以上

## 2.3 建屋内 R0

### 2.3.1 評価方法

建屋内 R0 は、ASME 規格に準拠したものを製造者仕様範囲内の圧力及び温度で運用することにより構造強度を有すると評価する。

### 2.3.2 評価結果

評価結果を表－6 に示す。製造者仕様範囲内の圧力及び温度を満足しており、十分な構造強度を有すると評価した。

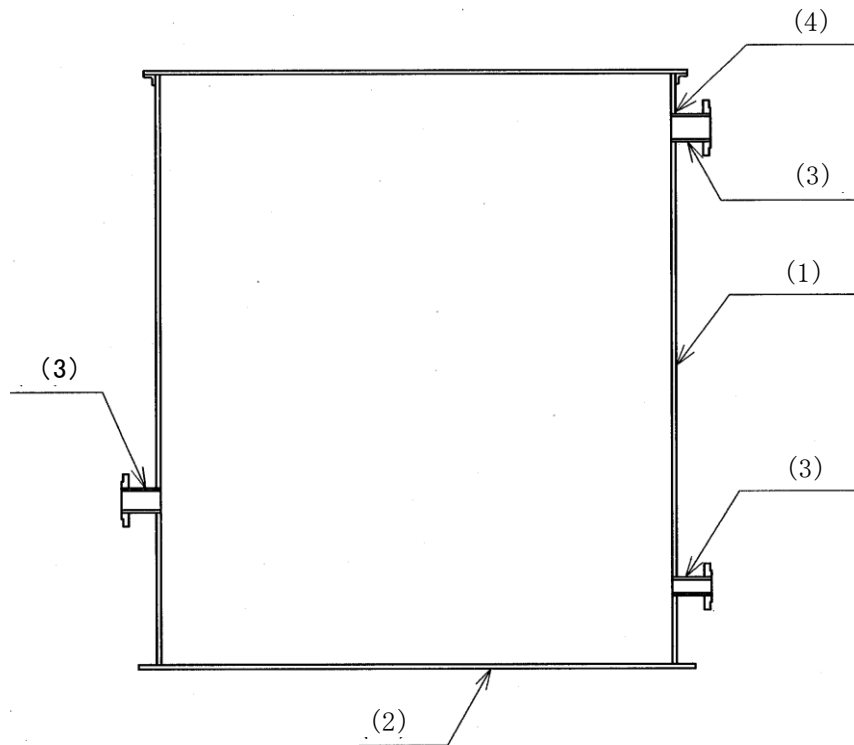
表－6 建屋内 R0 評価結果（製造者仕様範囲内の圧力及び温度）

機器名称	製造者仕様 最高使用圧力 (MPa)	製造者仕様 最高使用温度 (°C)	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)
建屋内 R0	6.9	49	4.5 以下	40 以下

## 2.4 淡水化処理水受タンク

### 2.4.1 評価箇所

強度評価箇所を図-3に示す。



図中の番号は、2.4.2、2.4.3の番号に対応する。

図-3 淡水化処理水受タンク概要図

### 2.4.2 評価方法 (JSME 規格)

#### (1) 開放タンクの胴板の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3920)

胴板の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい値とする。

##### a. 胴板の規格上必要な最小厚さ： $t_1$

炭素鋼鋼板又は低合金鋼鋼板で作られたもの場合は3mm、その他の材料で作られたもの場合は1.5mmとする。

##### b. 胴板の計算上必要な厚さ： $t_2$

$D_i$  : 胴の内径 (m)

$H$  : 水頭 (m)

$\rho$  : 液体の比重。ただし、1未満の場合は、1とする。

$S$  : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

$$t_2 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

c. 胴の内径に応じた必要厚さ：  $t_3$

胴の内径の区分に応じ JSME 規格 表 PVC-3920-1 より求めた胴の厚さとする。

(2) 開放タンクの底板の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3960(1), 3970(1))

a. 底板の形：平板

b. 底板の厚さ

地面、基礎等に直接接触する底板の厚さは、3mm 以上であること。

(3) 開放タンクの管台の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3980)

管台の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい値とする。

a. 管台の計算上必要な厚さ：  $t_1$

$$t_1 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

$D_i$  : 管台の内径 (m)  
 $H$  : 水頭 (m)  
 $\rho$  : 液体の比重。ただし、1 未満の場合は、1 とする。  
 $S$  : 許容引張応力 (MPa)  
 $\eta$  : 継手効率 (-)

b. 管台の規格上必要な最小厚さ：  $t_2$

管台の外径に応じて JSME 規格 表 PVC-3980-1 より求めた管台の厚さとする。

(4) 開放タンクの胴板の穴の補強評価

(JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3950, PVD-3512)

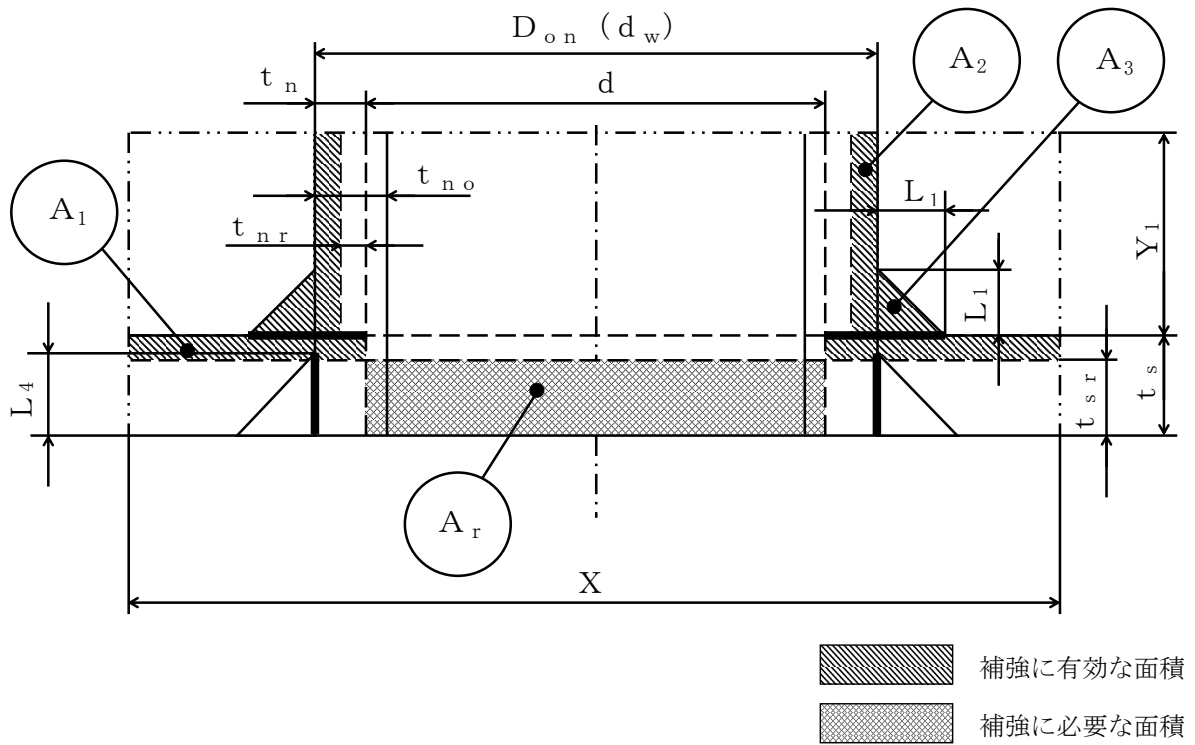
a. 穴の径 (円形の穴については直径、だ円形の穴については、長径をいう) が 85mm を超える場合は、穴を補強すること。

b. 補強に有効な範囲内にある補強に有効な面積が、補強に必要な面積より大きくなるようにすること。(図-4 参照)

c. 大きい穴の補強を要しない最大径

内径が 1500mm 以下の胴に設ける穴の径が胴の内径の 2 分の 1 (500mm を超える場合は、500mm) 以下および内径が 1500mm を超える胴に設ける穴の径が胴の内径の 3 分の 1 (1000mm を超える場合は、1000mm) 以下の場合は、大きい穴の補強計算は必要ない。

d. 溶接部の強度として、予想される破断箇所の強さが、溶接部の負うべき荷重以上であること。(図-4 参照)



- |                             |  |
|-----------------------------|--|
| $d$ : 穴の径 (mm)              | $X, Y_1$ : 補強の有効範囲 (mm)                                    |
| $d_w$ : 管台が取り付く穴の径 (mm)     | $L_1, L_4$ : 溶接の脚長 (mm)                                    |
| $D_{on}$ : 管台の外径 (mm)       | $A_r$ : 補強に必要な面積 ( $\text{mm}^2$ )                         |
| $t_s$ : 胴板の最小厚さ (mm)        | $A_0$ : 補強に有効な面積 ( $= A_1 + A_2 + A_3$ ) ( $\text{mm}^2$ ) |
| $t_{sr}$ : 胴板の計算上必要な厚さ (mm) |  |
| $t_n$ : 管台の最小厚さ (mm)        |  |
| $t_{nr}$ : 管台の計算上必要な厚さ (mm) |  |
| $t_{no}$ : 管台の呼び厚さ (mm)     |  |

図-4 補強計算概要図



### 2.4.3 評価結果

評価結果を表-7～8に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有すると評価した。

表-7 淡水化処理水受タンク 評価結果（板厚）

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)	
淡水化処理 水受タンク	(1) 胴板の厚さ	3.00	3.00 以上	
	(2) 底板の厚さ	3.00	3.00 以上	
	(3) 管台	オーバーフロー	3.50	3.50 以上
		R0 処理水出口	3.50	3.50 以上
	ドレン	2.40	2.40 以上	

表-8 淡水化処理水受タンク 評価結果（胴板の穴の補強）

機器名称	評価項目	評価結果		
淡水化処理 水受タンク	(4) 胴板 (R0 処理水出口)	穴の補強の有無 (mm)	穴の径 (mm)	
		85mm を超える	85mm 以下 <sup>※1</sup>	
	(4) 胴板 (ドレン)	穴の補強の有無 (mm)	穴の径 (mm)	
		85mm を超える	85mm を超える	
	(4) 胴板 (オーバーフロー)	補強に必要な面積 (mm <sup>2</sup> )	補強に有効な総面積 (mm <sup>2</sup> )	
		48.98	48.98 以上	
		大きな穴の補強を要しない最大径 (mm)	穴の径 (mm)	
		834	834 以下	
		溶接部の負うべき荷重 (N)	予想される破断箇所 <strong>の強さ (N)</strong>	
	-5.930×10 <sup>4</sup>	- <sup>※2</sup>		

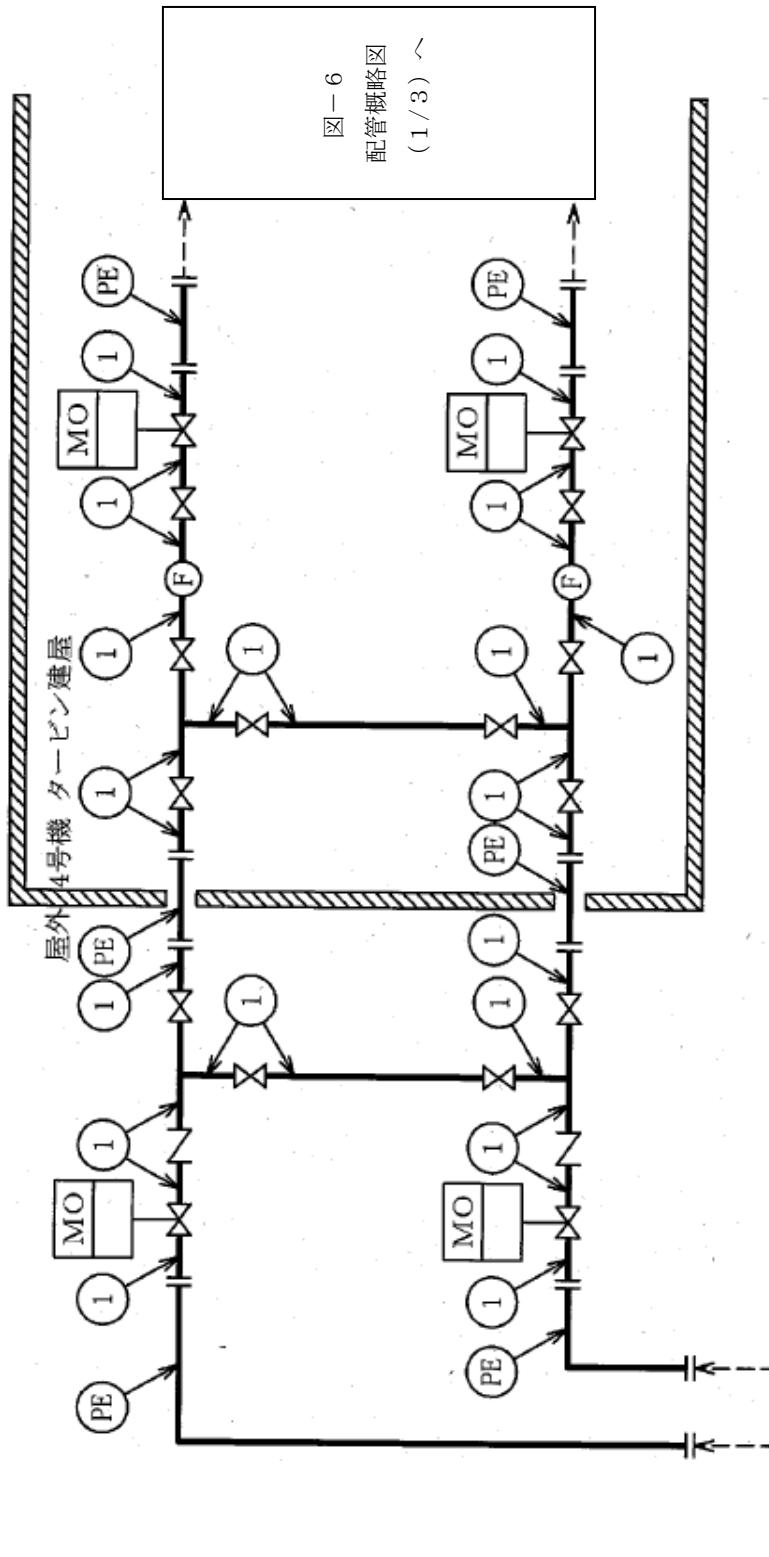
※1 穴の径が 85mm 以下であり、補強は不要。

※2 溶接部の負うべき荷重が負であり、溶接部の強度計算は不要。

2.5 主配管

2.5.1 評価箇所

強度評価箇所を図-5, 6に示す。



SPT 廃液移送ポンプA/Bから

記号凡例

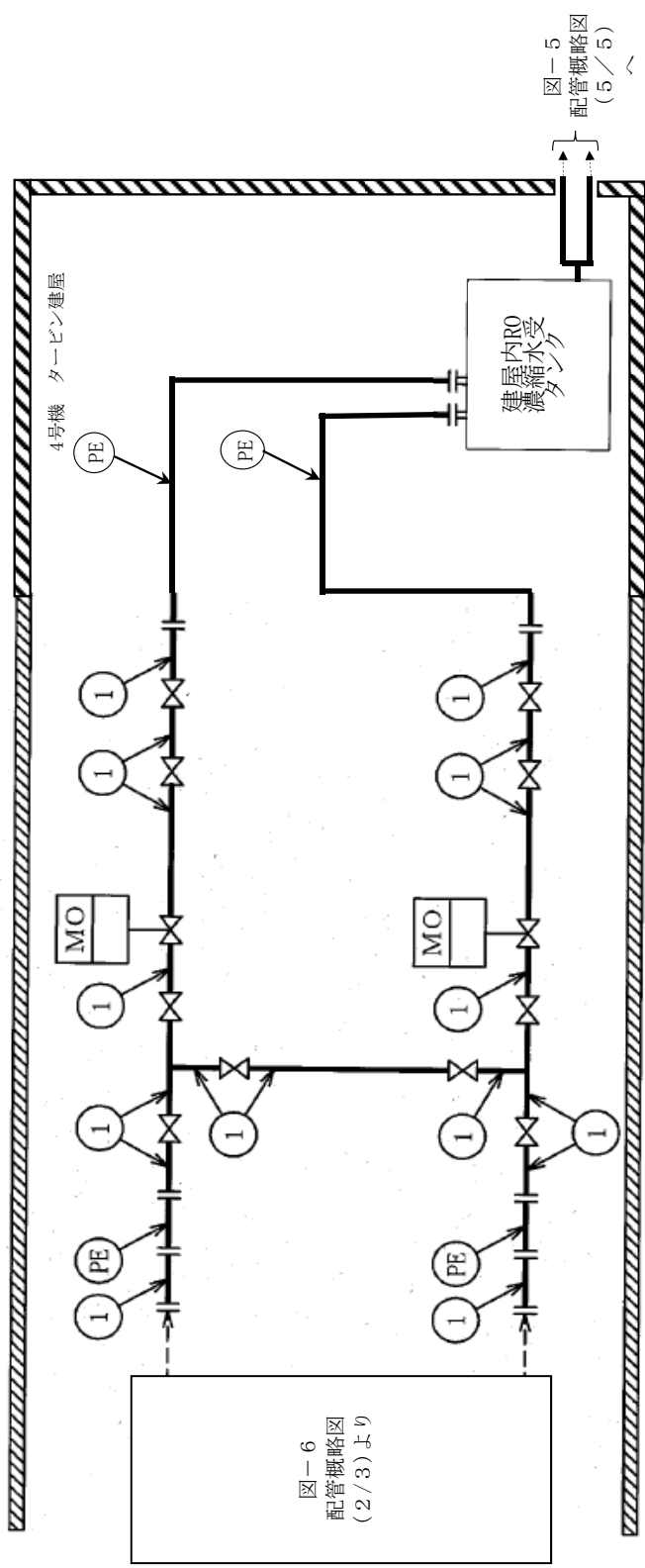
PE : ポリエチレン管

F : 流量計

MO : MO 弁

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図-5 配管概略図 (屋内R0附属配管を除く主配管) (1/5)



記号凡例

PE : ポリエチレン管

MO : MO 弁

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図-5 配管概略図 (建屋内RO付属配管を除く主配管) (2/5)

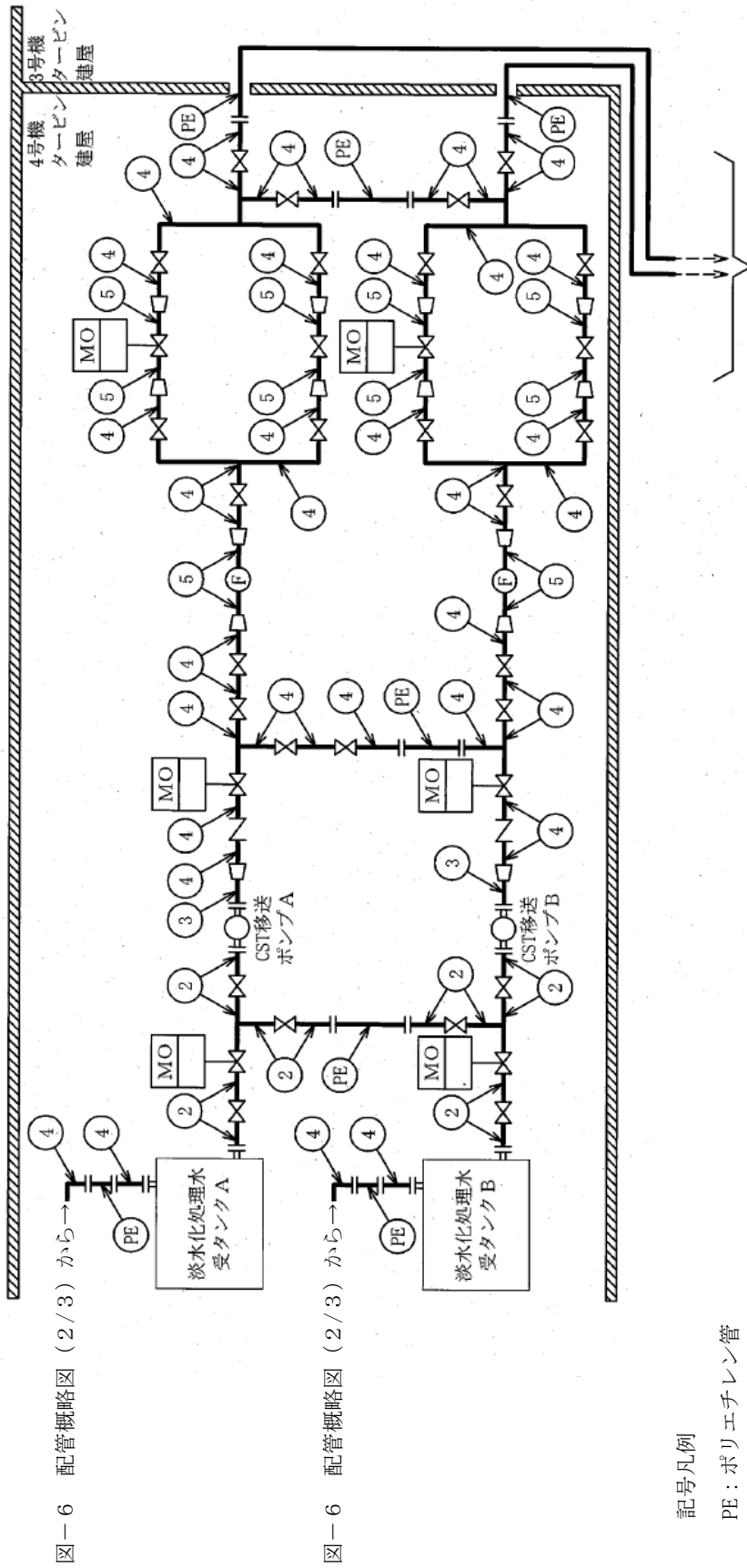


図-5 配管概略図 (4/5) ~

図-6 配管概略図 (2/3) から

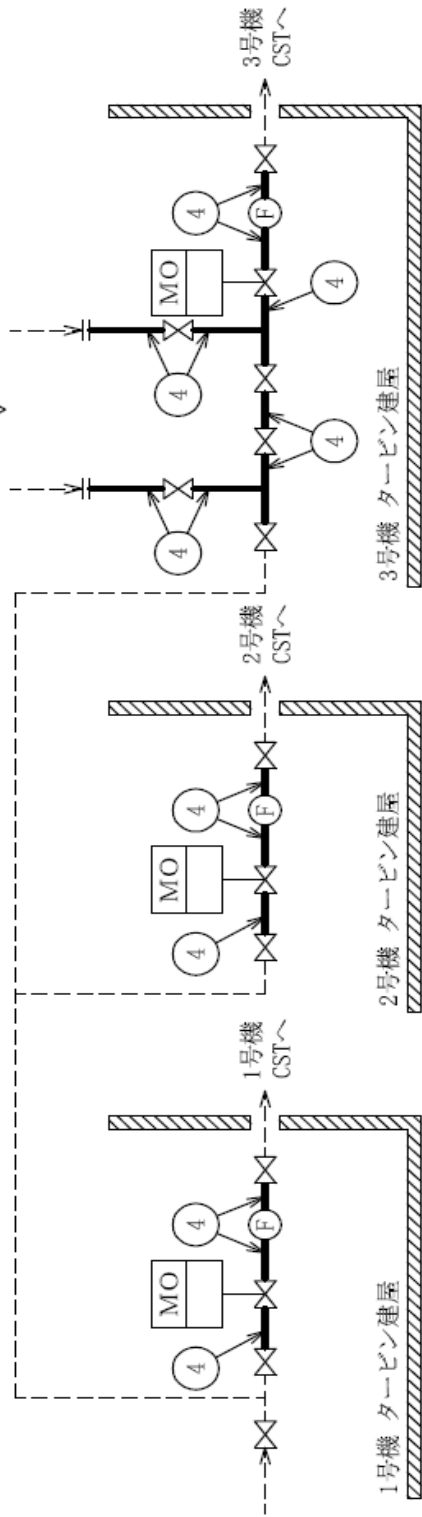
図-6 配管概略図 (2/3) から

記号凡例  
 PE : ポリエチレン管  
 F : 流量計  
 MO : MO 弁

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図-5 配管概略図 (建屋内 R0 附属配管を除く主配管) (3/5)

図-5 配管概略図 (3/5) より



記号凡例

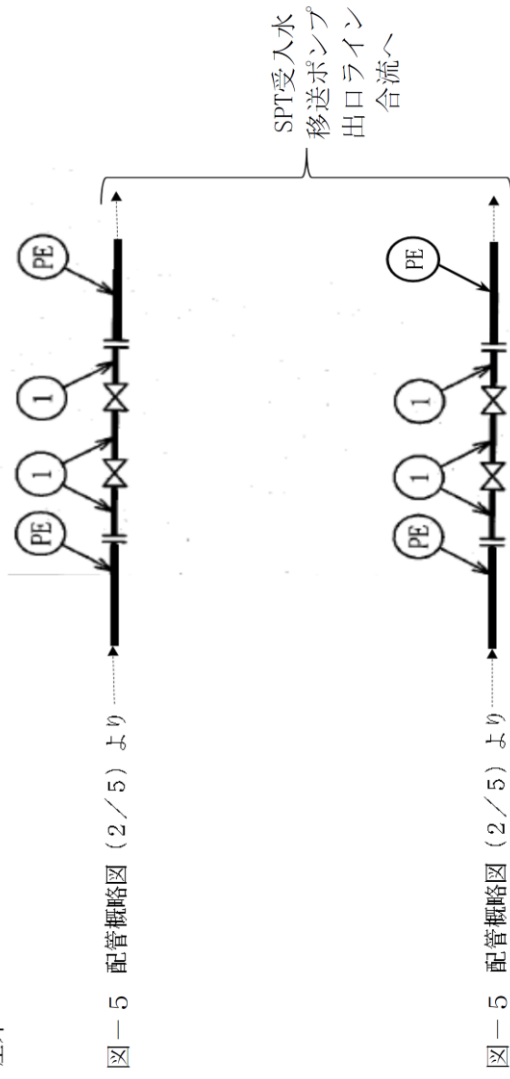
F : 流量計

MO : MO 弁

図中の番号は, 2.5.3 の番号に対応する。

図-5 配管概略図 (建屋内 RO 附属配管を除く主配管) (4/5)

屋外



記号凡例

PE : ポリエチレン管

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図-5 配管概略図 (建屋内RO付属配管を除く主配管) (5/5)

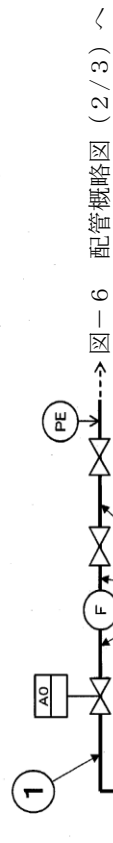


図-5 配管概略図 (1/5) より → 配管概略図 (2/3) へ

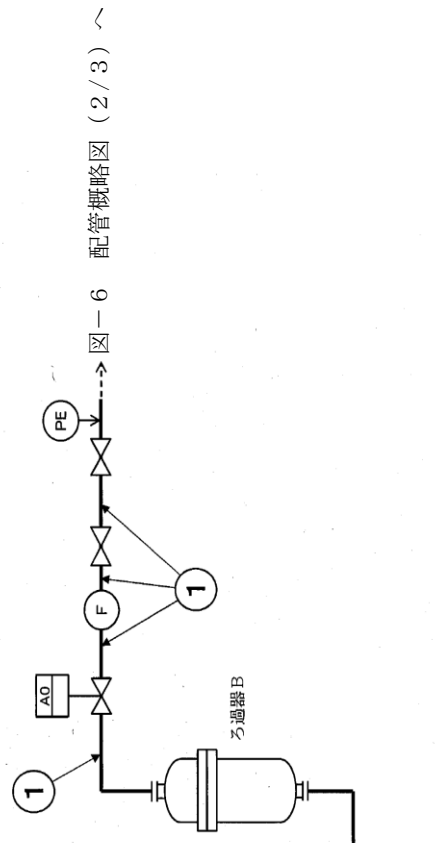


図-5 配管概略図 (1/5) より → 配管概略図 (2/3) へ

- 記号凡例  
 PE : ポリエチレン管  
 F : 流量計  
 AO : AO 弁

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図-6 配管概略図 (建屋内R0附属主配管) (1/3)

図-6 配管概略図 (1/3) より

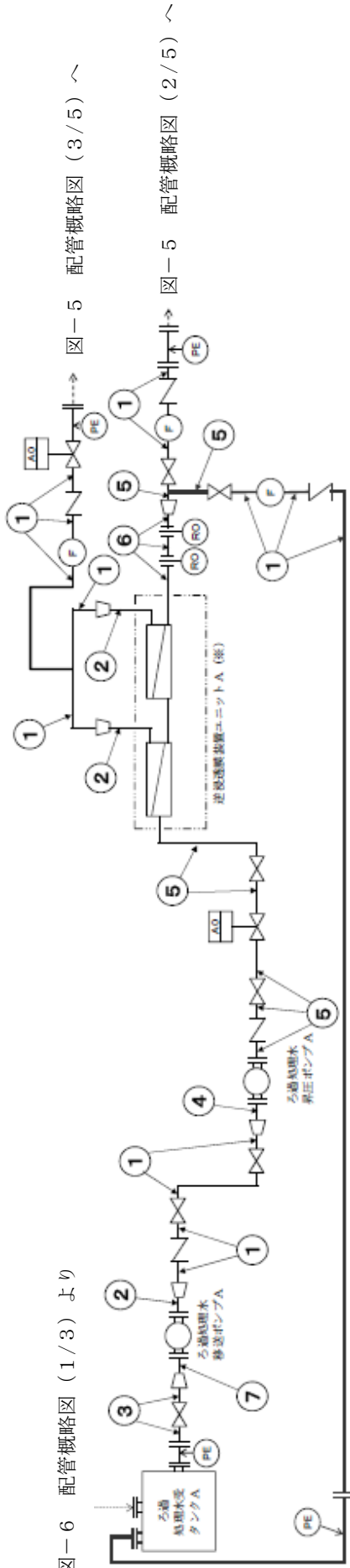


図-5 配管概略図 (3/5) へ

図-5 配管概略図 (2/5) へ

図-6 配管概略図 (1/3) より

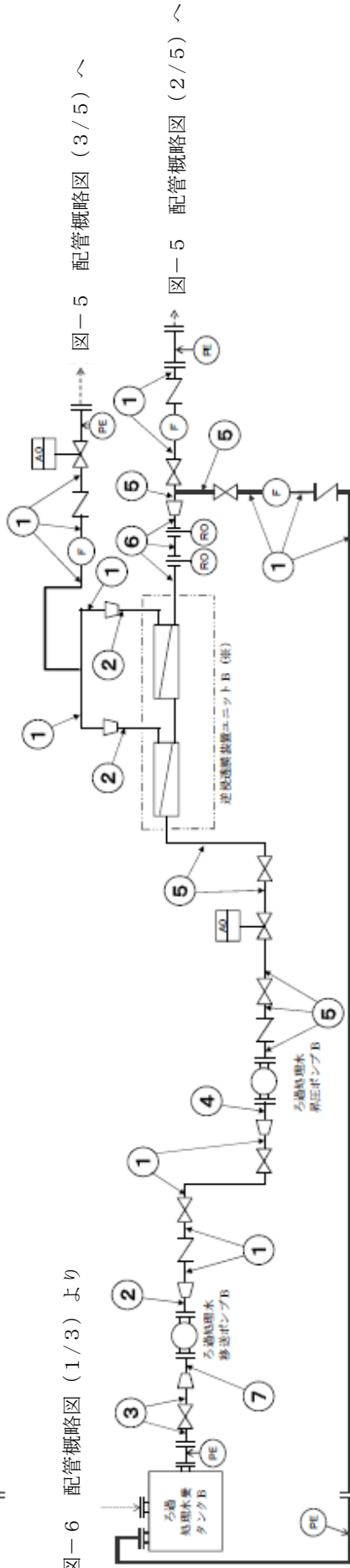


図-5 配管概略図 (3/5) へ

図-5 配管概略図 (2/5) へ

記号凡例

PE : ポリエチレン管

F : 流量計

AO : AO弁

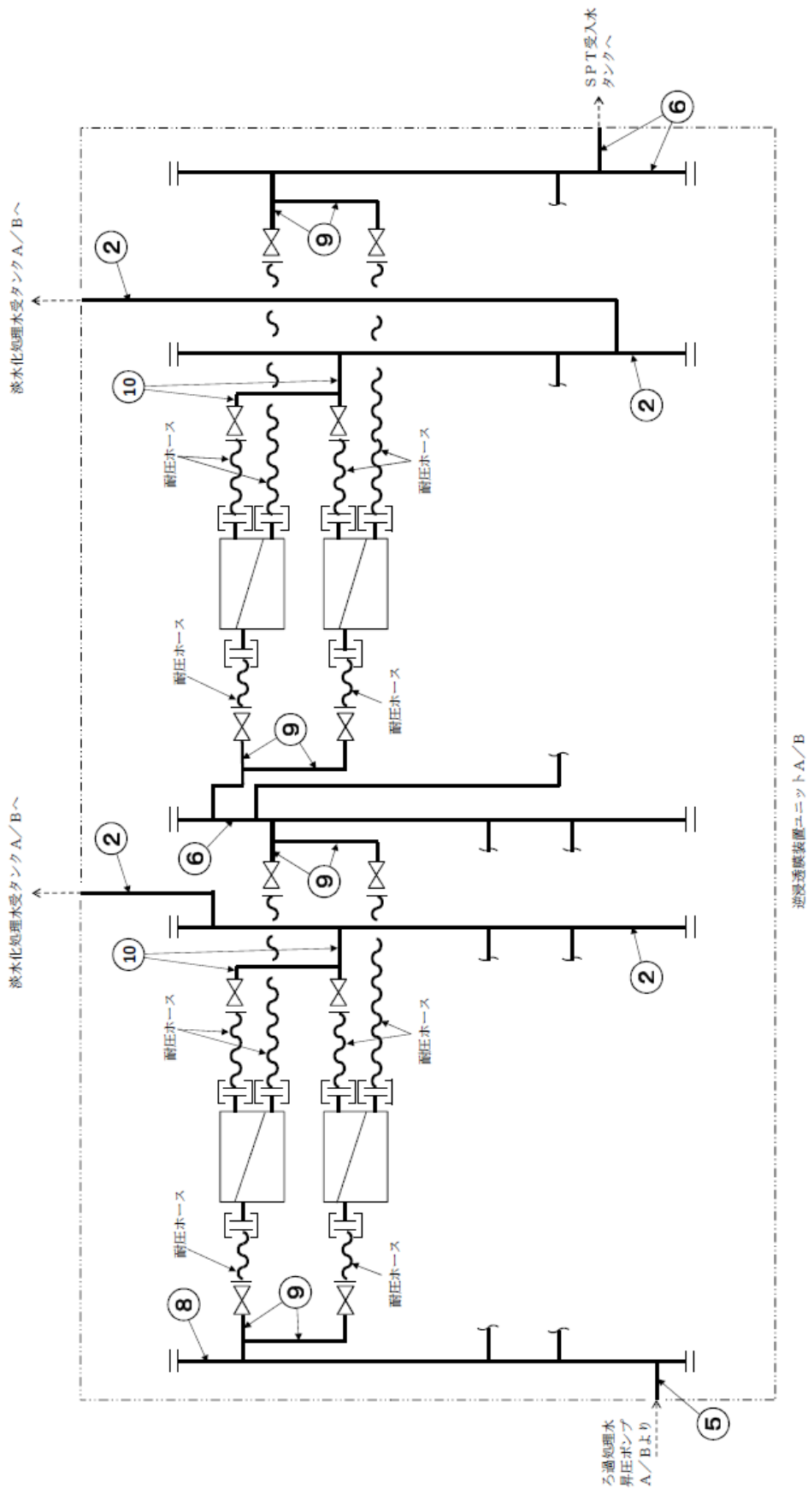
RO : オリフィス

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

※ 図-6 配管概略図 (3/3) 参照

図-6 配管概略図 (屋内RO附属主配管) (2/3)





記号凡例

☐: 逆浸透膜装置

⊕: 継手部

図中の番号は、2.5.3の番号に対応する。

図一6 配管概略図（建屋内R0附属主配管）（3/3）

## 2.5.2 評価方法（JSME 規格 PPD-3411）

### (1) 管の厚さの評価

管の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 管の計算上必要な最小必要厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_0}{2S \cdot \eta + 0.8P}$$

$P$  : 最高使用圧力 (MPa)  
 $D_0$  : 管の外径 (mm)  
 $S$  : 許容引張応力 (MPa)  
 $\eta$  : 継手効率 (-)

b. 炭素鋼鋼管の規格上必要な最小必要厚さ： $t_2$

PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた管の厚さとする。

### 2.5.3 評価結果

評価結果を表－9，10に示す。必要厚さ等を満足しており，十分な構造強度を有していると評価している。

表－9 配管の評価結果（管の厚さ）（建屋内 RO 附属配管を除く主配管）

No.	外径 (mm)	材料	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
①	89.10	STPT410	0.98	40	3.00	4.81
②	89.10	SUS316LTP	静水頭	40	0.40	4.81
③	48.60	SUS316LTP	0.98	40	0.22	4.46
④	89.10	SUS316LTP	0.98	40	0.40	4.81
⑤	60.50	SUS316LTP	0.98	40	0.27	4.81

表－10 配管の評価結果（管の厚さ）（建屋内 RO 附属主配管）

No.	外径 (mm)	材料	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
①	89.10	STPT410	0.98	40	3.00	4.81
②	60.50	STPT410	0.98	40	2.40	4.81
③	165.20	STPT410	静水頭	40	3.80	6.21
④	114.30	STPT410	0.98	40	3.40	5.25
⑤	89.10	STPT410	4.50	40	3.00	4.81
⑥	76.30	STPT410	4.50	40	2.70	4.55
⑦	89.10	STPT410	静水頭	40	3.00	4.81
⑧	114.30	STPT410	4.50	40	3.40	5.25
⑨	48.60	STPT410	4.50	40	2.20	4.46
⑩	34.00	STPT410	0.98	40	1.70	3.93

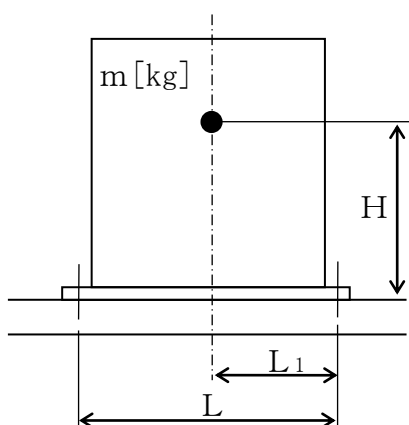
### 3. 耐震性評価

#### 3.1 基礎ボルト※の強度評価

原子力発電所耐震設計技術指針の評価方法に準拠し、主要機器の基礎ボルトについて強度評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されることを確認した(表-11)。

※機器が架台に据え付けられる構造の場合は取付ボルトと称する。

##### a. タンク



$m$  : 機器質量

$g$  : 重力加速度 ( $9.80665 \text{ m/s}^2$ )

$H$  : 据付面からの重心までの距離

$L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離

$L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離

$n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数

$n$  : 基礎ボルトの本数

$A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.36)

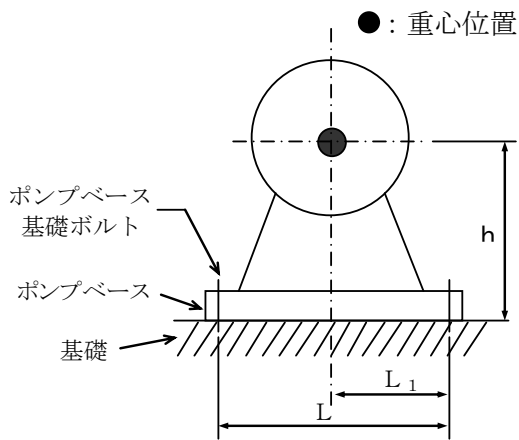
$C_V$  : 鉛直方向設計震度 (0)

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m \times g \times C_H \times H - m \times g \times (1 - C_V) \times L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times C_H}{n \times A_b}$$

b. ポンプ



$m$  : 機器の運転時質量

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$h$  : 据付面から重心までの距離

$M_P$  : ポンプ回転により働くモーメント (0)

※基礎ボルトに  $M_P$  は作用しない

$L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離

$L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離 ( $L/2$ )

$n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数

$n$  : 基礎ボルトの本数

$A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.36)

$C_V$  : 鉛直方向設計震度 (0)

$C_P$  : ポンプ振動による震度

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m g (C_H + C_P) h + M_P - m g (1 - C_V - C_P) L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f A_b}$$

$$\text{基礎ボルトに作用するせん断力} : Q_b = m g (C_H + C_P)$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{Q_b}{n A_b}$$

表-11 基礎ボルト（取付ボルト）の強度評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ろ過器スキッド	基礎ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	30	135	MPa
ろ過処理水受タンク (本体)	取付ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	40	135	MPa
ろ過処理水受タンク スキッド	基礎ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	21	135	MPa
建屋内 RO ユニット	基礎ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	51	135	MPa
SPT 廃液昇圧ポンプ	取付ボルト	引張	0.36	1	176	MPa
		せん断	0.36	3	135	MPa
ろ過処理水移送ポンプ	取付ボルト	引張	0.36	1	176	MPa
		せん断	0.36	3	135	MPa
ろ過処理水昇圧ポンプ	取付ボルト	引張	0.36	3	176	MPa
		せん断	0.36	5	135	MPa
CST 移送ポンプ	基礎ボルト	引張	0.36	1	183	MPa
		せん断	0.36	3	141	MPa
建屋内 RO 濃縮水移送 ポンプ	基礎ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	3	161	MPa
増設 RO 濃縮水供給 ポンプ	基礎ボルト	引張	0.36	< 0	—	MPa
		せん断	0.36	3	161	MPa

### 3.2 ろ過器の耐震性評価

本評価は、「付録1 スカート支持たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類Bクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。評価の結果、ろ過器の胴板、スカート及び取付ボルトの強度が確保されることを確認した（表-12）。

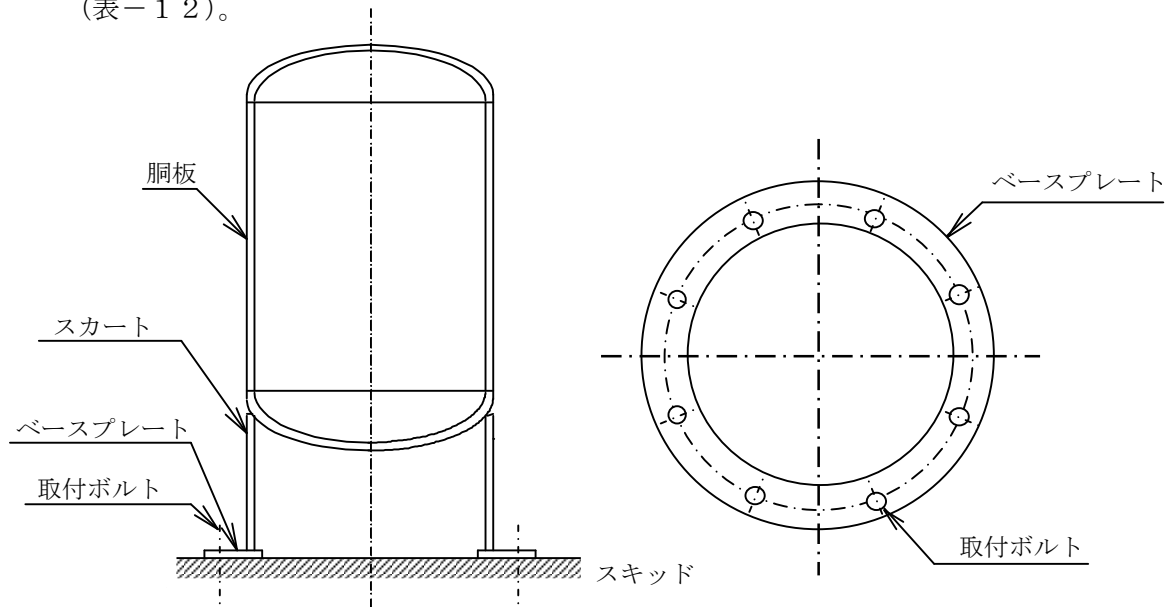


図-7 概要図

表-12 ろ過器の耐震性評価結果（1/2）

方向	固有周期[s]
水平方向	0.015
鉛直方向	0.005

表-12 ろ過器の耐震性評価結果（2/2）

部材	材料	水平震度	応力種別	算出応力[MPa]	許容応力[MPa]
胴板	SM400A	0.36	組合せ	43	240
スカート	SM400A	0.36	組合せ	5	245
			座屈	$\frac{\eta \cdot \sigma_{s1}}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{s2}}{f_b} \leq 1$ $0.016 \leq 1$	
取付ボルト	SS400	0.36	引張	11	176
			せん断	13	135

### 3.3 淡水化処理水受タンクの耐震性評価

本評価は、「付録2 平底たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類B，Cクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。評価の結果、淡水化処理水受タンクの胴板及び基礎ボルトの強度が確保されることを確認した（表-13）。

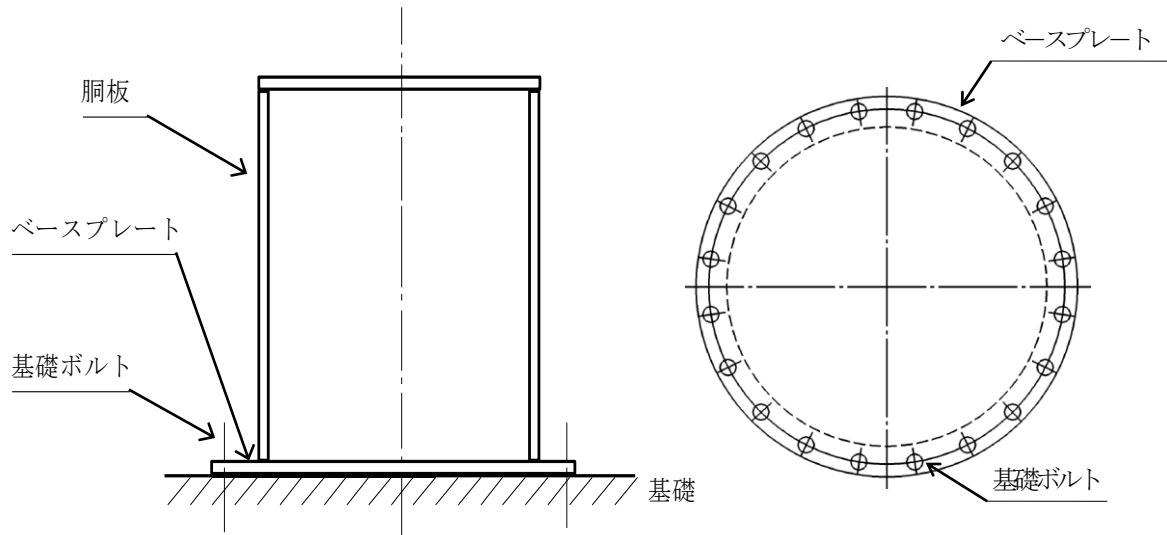


図-8 概要図

表-13 淡水化処理水受タンクの耐震性評価結果（1/2）

方向	固有周期[s]
水平方向	0.024
鉛直方向	0.005

表-13 淡水化処理水受タンクの耐震性評価結果（2/2）

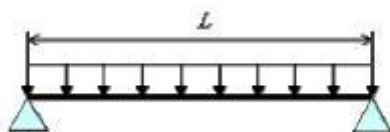
部材	材料	水平震度	応力種別	算出応力[MPa]	許容応力[MPa]
胴板	SM400C	0.36	一次一般膜	6	240
			座屈	$\frac{\eta \cdot \sigma_{x2}}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{x4}}{f_b} \leq 1$ $0.02 \leq 1$	
基礎ボルト	SS400	0.36	引張	< 0	—
			せん断	9	135

### 3.4 主配管の耐震性評価

#### a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角 2 方向拘束サポートにて支持される両端単純支持のはりモデル（図－1）とする。

次に、当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表－1，2に示す。表－1，2より管軸方向については、サポート設置フロアの水平震度 0.36 が鉄と鉄の静止摩擦係数 0.52 より小さいことから、地震により管軸方向は動かないものと仮定する。



図－1 等分布荷重 両端単純支持はりモデル

表－1 配管系における各種条件（建屋内 R0 附属配管を除く主配管）

配管分類	主配管（鋼管）			
配管クラス	クラス 3 相当			
耐震クラス	B クラス相当			
設計温度 [°C]	40			
配管材質	SUS316LTP			STPT410
配管口径	40A	50A	80A	80A
Sch	80	80	40	40
設計圧力 [MPa]	0.98	0.98	静水頭	0.98
配管支持間隔 [m]	4.9	5.4	6.4	6.5



表-2 配管系における各種条件 (建屋内 R0 附属主配管)

配管分類	主配管 (鋼管)									
配管クラス	クラス 3 相当									
耐震クラス	B クラス相当									
設計温度 [°C]	40									
配管材質	STPT410									
配管口径	25A	40A	50A	65A	80A			100A		150A
Sch	80	80	80	40	40			40		40
設計圧力 [MPa]	0.98	4.5	0.98	4.5	静水頭	0.98	4.5	0.98	4.5	静水頭
配管支持間隔 [m]	3.7	4.6	5.2	5.7	6.2			6.9		8.2

b. 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力を評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z}$$

$S_w$	: 自重による応力	[MPa]
$L$	: 支持間隔	[mm]
$M$	: 曲げモーメント	[N・mm]
$Z$	: 断面係数	[mm <sup>3</sup> ]
$w$	: 等分布荷重	[N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w$$

$S_s$	: 地震による応力	[MPa]
$\alpha$	: 想定震度値	[-]

また、評価基準値として JEAC4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス 3 配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + \alpha \cdot S_w = S_p + (1 + \alpha) \cdot S_w \leq 1.0 S_y$$

$S$	: 内圧, 自重, 地震による発生応力	[MPa]
$S_p$	: 内圧による応力	[MPa]
$S_y$	: 設計降伏点	[MPa]

c. 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $S_w$  が 30 [MPa]以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-3, 4に示す。表-3, 4より、自重による応力  $S_w$  を 30 [MPa]以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-3 応力評価結果 (建屋内 RO 附属配管を除く主配管)

配管分類	主配管 (鋼管)			
配管材質	SUS316LTP			STPT410
配管口径	40A	50A	80A	
Sch	80	80	40	
設計圧力 [MPa]	0.98	0.98	静水頭	0.98
内圧, 自重, 地震による発生応力 $S$ [MPa]	128	129	131	
供用状態 $C_s$ における一次許容応力 [MPa]	175			245

表-4 応力評価結果 (建屋内 RO 附属主配管)

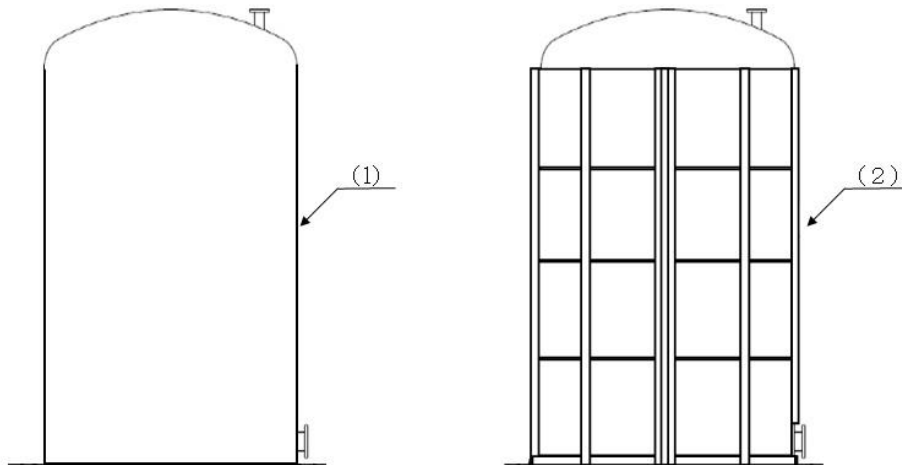
配管分類	主配管 (鋼管)									
配管材質	STPT410									
配管口径	25A	40A	50A	65A	80A			100A		150A
Sch	80	80	80	40	40			40		40
設計圧力 [MPa]	0.98	4.5	0.98	4.5	静水頭	0.98	4.5	0.98	4.5	静水頭
内圧, 自重, 地震による発生応力 $S$ [MPa]	44	58	46	70	42	48	73	50	80	42
供用状態 $C_s$ における一次許容応力 [MPa]	245									

#### 4. 追設するタンクの構造強度および耐震性評価

##### 4.1 建屋内 R0 濃縮水受タンク構造強度評価

###### 4.1.1 評価箇所

強度評価箇所を図-1 に示す。



図中の番号は，4.1.3 の番号に対応する。

図-1 建屋内 R0 濃縮水受タンク概要図

##### 4.1.2 評価方法（ポリエチレン製堅型耐食円筒型貯槽規格）

###### (1) 胴板の評価

胴板の厚さは，内圧液により胴板の周方向に発生する応力，自重により胴板の軸方向に発生する応力が許容応力より小さいこととする。

###### a. 胴板の周方向に発生する応力

$$\sigma_{\theta} = \frac{P \cdot d}{2t}$$

$$P = g \cdot \rho \cdot H_L \cdot 10^{-9}$$

$\sigma_{\theta}$  : 胴板の周方向の応力 (MPa)

d : 貯槽の外径 (mm)

t : 胴板の厚さ (mm)

P : 最大水位時での水頭圧 (MPa)

g : 重力の加速度 ( $m/s^2$ )

$\rho$  : 内容液密度 ( $kg/m^3$ )

$H_L$  : 最大水位 (mm)

b. 胴板の軸方向に発生する応力

$$\sigma_y = \frac{m_t \cdot g}{\pi \cdot d \cdot t}$$

$$f = \frac{\sigma_{X,cr}}{F}$$

$$\sigma_{X,cr} = \frac{2 \cdot C \cdot E_p \cdot t}{\{3(1 - \nu^2)\}^{1/2} \cdot d}$$

$\sigma_y$  : 胴板の軸方向に発生する応力 (MPa)  
 $m_t$  : タンク本体の質量 (kg)  
 $\sigma_{X,cr}$  : 材料の圧縮座屈応力 (MPa)  
 $f$  : 許容応力 (MPa)  
 $F$  : 安全率 (-) (長期荷重評価は 3)  
 $C$  : 座屈係数 (-)  $C = 1 - 0.901 \cdot (1 - \exp(-1/16 \cdot (d/2t)^{0.5}))$   
 $E_p$  : ポリエチレン縦弾性係数 (MPa)  
 $\nu$  : ポアソン比 (-)

(2) 補強枠の評価

補強枠の厚さは、内圧及びタンク本体の膨張により補強枠の周方向に発生する応力が許容応力より小さいこととする。

a. 補強枠の周方向に発生する応力

$$\sigma_\theta = \frac{P \cdot d}{2t_s} + \alpha \cdot \Delta T \cdot E_p \cdot \frac{t}{t_s}$$

$\sigma_\theta$  : 補強枠の周方向の応力 (MPa)  
 $\Delta T$  : 温度の最大変化 (°C)  
 $E_p$  : ポリエチレン縦弾性係数 (MPa)  
 $\alpha$  : ポリエチレン熱膨張係数 (1/°C)  
 $t_s$  : 補強枠厚さ (mm)  
 $P$  : 最大水位での水頭圧 (MPa)

4.1.3 評価結果

評価結果を表-1に示す。強度評価の結果、胴板及び補強枠の応力は許容応力未満であり、十分な構造強度を有すると評価した。

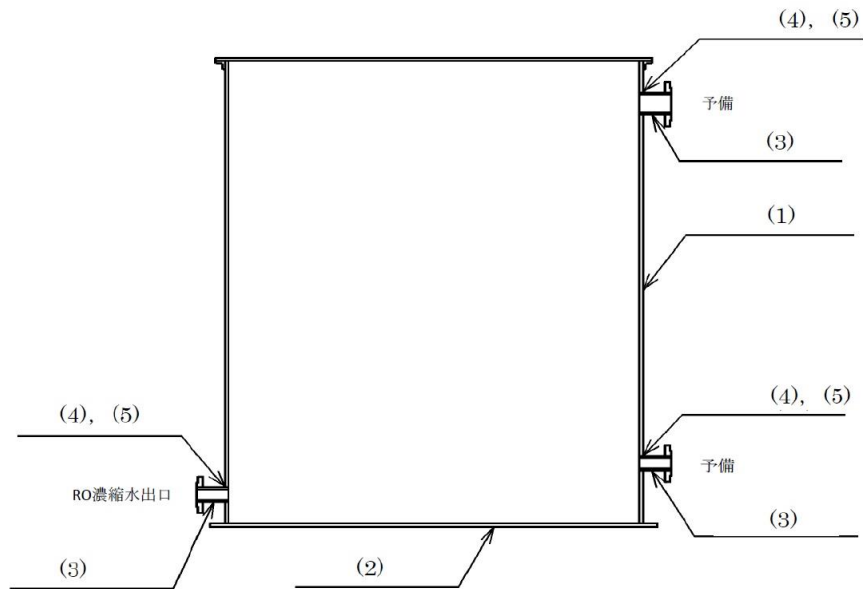
表-1 建屋内 RO 濃縮水受タンク 評価結果(板厚)

機器名称	評価項目		応力 (MPa)	許容応力 (MPa)
建屋内 RO 濃縮水受タンク	(1) 胴板	周方向	4.7	5.0
		軸方向	0.43	0.70
	(2) 補強枠	周方向	20	137

## 4.2 増設 RO 濃縮水受タンク構造強度評価

### 4.2.1 評価箇所

強度評価箇所を図-2に示す。



図中の番号は、4.2.3の番号に対応する。

図-2 増設 RO 濃縮水受タンク概要図

### 4.2.2 評価方法 (JSME 規格)

#### (1) 開放タンクの胴板の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3920)

胴板の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい値とする。

##### a. 胴板の規格上必要な最小厚さ： $t_1$

炭素鋼鋼板又は低合金鋼鋼板で作られたもの場合は 3mm、その他の材料で作られたもの場合は 1.5mm とする。

##### b. 胴板の計算上必要な厚さ： $t_2$

$$t_2 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

$D_i$  : 胴の内径 (m)

$H$  : 水頭 (m)

$\rho$  : 液体の比重。ただし、1未満の場合は、1とする。

$S$  : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

##### c. 胴の内径に応じた必要厚さ： $t_3$

胴の内径の区分に応じ JSME 規格 表 PVC-3920-1 より求めた胴の厚さとする。

- (2) 開放タンクの底板の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3960(1), 3970(1))
- a. 底板の形：平板
  - b. 底板の厚さ：3mm 以上 (地面，基礎等に直接接触する底板)

- (3) 開放タンクの管台の評価 (JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3980)

管台の必要な厚さは，次に掲げる値のうち，いずれか大きい値とする。

- a. 管台の計算上必要な厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

$D_i$  : 管台の内径 (m)  
 $H$  : 水頭 (m)  
 $\rho$  : 液体の比重。ただし，1 未満の場合は，1 とする。  
 $S$  : 許容引張応力 (MPa)  
 $\eta$  : 継手効率 (-)

- b. 管台の規格上必要な最小厚さ： $t_2$

管台の外径に応じて JSME 規格 表 PVC-3980-1 より求めた管台の厚さとする。

- (4) 開放タンクの胴板の穴の補強評価

(JSME 規格 PVD-3010 及び PVD-3110, PVC-3950, PVD-3512)

- a. 穴の径 (円形の穴については直径，だ円形の穴については長径をいう) が 85mm を超える場合は，穴を補強すること。
- b. 補強に有効な範囲内にある補強に有効な面積が，補強に必要な面積より大きくなるようにすること。
- c. 大きい穴の補強を要しない最大径  
 内径が 1500mm 以下の胴に設ける穴の径が胴の内径の 2 分の 1 (500mm を超える場合は，500mm) 以下および内径が 1500mm を超える胴に設ける穴の径が胴の内径の 3 分の 1 (1000mm を超える場合は，1000mm) 以下の場合は，大きい穴の補強計算は必要ない。
- d. 溶接部の強度として，予想される破断箇所の強さが，溶接部の負うべき荷重以上であること。

#### 4.2.3 評価結果

評価結果を表-2～3に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有すると評価した。

表-2 増設 RO 濃縮水受タンク 評価結果 (板厚)

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)	
増設 RO 濃縮水受タンク	(1) 胴板の厚さ	1.50	1.50 以上	
	(2) 底板の厚さ	3.00	3.00 以上	
	(3) 管台厚さ	排水出口	3.50	3.50 以上
		予備	3.50	3.50 以上
		予備	3.50	3.50 以上

表-3 増設 RO 濃縮水受タンク 評価結果 (胴板の穴の補強)

機器名称	評価項目	評価結果	
		穴の補強の有無 (mm)	穴の径 (mm)
増設 RO 濃縮水受タンク	(4) 胴板 (RO 濃縮水出口)	85mm を超える	85mm を超える
		補強に必要な面積 (mm <sup>2</sup> )	補強に有効な総面積 (mm <sup>2</sup> )
		$6.961 \times 10^1$	$6.961 \times 10^1$ 以上
		大きな穴の補強を要しない最大径 (mm)	穴の径 (mm)
		1000	1000 以下
		溶接部の負うべき荷重 (N)	予想される破断箇所 <strong>の強さ (N)</strong>
		$-6.080 \times 10^4$	—※1
		(5) 胴板 (予備)	穴の補強の有無 (mm)
	85mm を超える		85mm を超える
	補強に必要な面積 (mm <sup>2</sup> )		補強に有効な総面積 (mm <sup>2</sup> )
	$1.019 \times 10^2$		$1.019 \times 10^2$ 以上
	大きな穴の補強を要しない最大径 (mm)		穴の径 (mm)
	1000		1000 以下
	溶接部の負うべき荷重 (N)	予想される破断箇所 <strong>の強さ (N)</strong>	
$-8.921 \times 10^4$	—※1		

※1 溶接部の負うべき荷重が負であり、溶接部の強度計算は不要。

#### 4.3 建屋内 RO 濃縮水受タンク耐震性評価

本評価は、「ポリエチレン製堅型耐食円筒型貯槽規格」[ポリエチレンタンク協議会技術委員会]に基づいて評価を実施する。

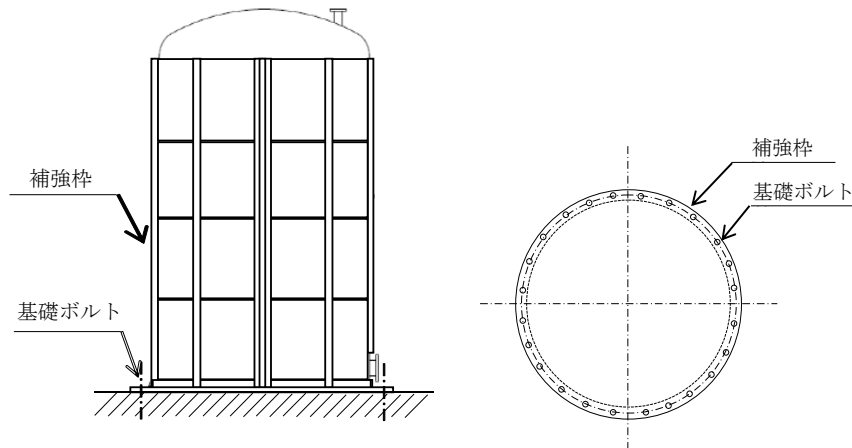


図-3 概要図

##### (1) 胴板に発生する応力

地震による転倒モーメントにより胴板に発生する応力が許容応力より小さいことを確認する。

$$\sigma_x = \frac{4 \cdot M}{\pi \cdot d^2 \cdot t}$$

$$M = K_H \cdot \alpha_t \cdot m_{total} \cdot g \cdot H$$

$\sigma_x$  : 転倒モーメントにより胴板に発生する応力 (MPa)

M : 地震による転倒モーメント (N\*mm)

d : タンクの外径 (mm)

t : 胴板の厚さ (mm)

$K_H$  : 水平震度 (-)

$\alpha_t$  : タンクの有効重量比 (-)  $\alpha_t = 1 - 0.218 \cdot d / H_L$  ( $H_L / d > 0.75$  の場合)

$m_{total}$  : タンク全体の質量 (kg)

g : 重力加速度 ( $m/s^2$ )

H : 水平地震荷重の作用点高さ (mm)

$H_L$  : 最大水位 (mm)



(2) 補強枠に発生する応力

地震による転倒モーメントにより補強枠に発生する応力が許容応力より小さいことを確認する。

$$\sigma_{xs} = \frac{4 \cdot M}{\pi \cdot d^2 \cdot t_s}$$

$\sigma_{xs}$  : 転倒モーメントにより補強枠に発生する応力 (MPa)  
 $t_s$  : 補強枠の厚さ (mm)

$$M = K_H \cdot \alpha_t \cdot m_{total} \cdot g \cdot H$$

(3) 基礎ボルトに発生する応力

地震により基礎ボルトに発生する引張応力が、許容引張応力または、許容引張応力×1.4－せん断応力×1.6の何れか小さい値より小さいことを確認する。また、地震により基礎ボルトに発生するせん断応力が許容せん断応力より小さいことを確認する。

$$\sigma_b = \frac{1}{A_b \cdot n} \left( \frac{4 \cdot M}{L_b} - m_{total} \cdot g \right)$$

$\sigma_b$  : 基礎ボルトに発生する引張応力 (MPa)  
 $\tau_b$  : 基礎ボルトに発生するせん断応力 (MPa)

$$\tau_b = \frac{K_H \cdot m_{total} \cdot g}{A_b \cdot n}$$

$L_b$  : 基礎ボルトのピッチ円直径 (mm)  
 $n$  : 基礎ボルトの本数 (-)

$$M = K_H \cdot \alpha_t \cdot m_{total} \cdot g \cdot H$$

$A_b$  : 基礎ボルト断面積 (mm<sup>2</sup>)

(4) 評価結果

評価の結果、建屋内 R0 濃縮水受タンクの胴板、補強枠、基礎ボルトは強度が確保されることを確認した (表-4)。

表-4 建屋内 R0 濃縮水受タンクの耐震性評価結果

部材	材料	水平震度	応力種別	算出応力 [MPa]	許容応力 [MPa]
胴板	ポリエチレン	0.36	—	2.9	7.5
補強枠	SUS304		—	7	205
基礎ボルト	SS400		引張	2	176
			せん断	8	101

#### 4.4 増設 R0 濃縮水受タンクの耐震性評価

本評価は、「付録2 平底たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類B，Cクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。評価の結果，増設 R0 濃縮水受タンクの胴板及び基礎ボルトの強度が確保されることを確認した（表-5）。

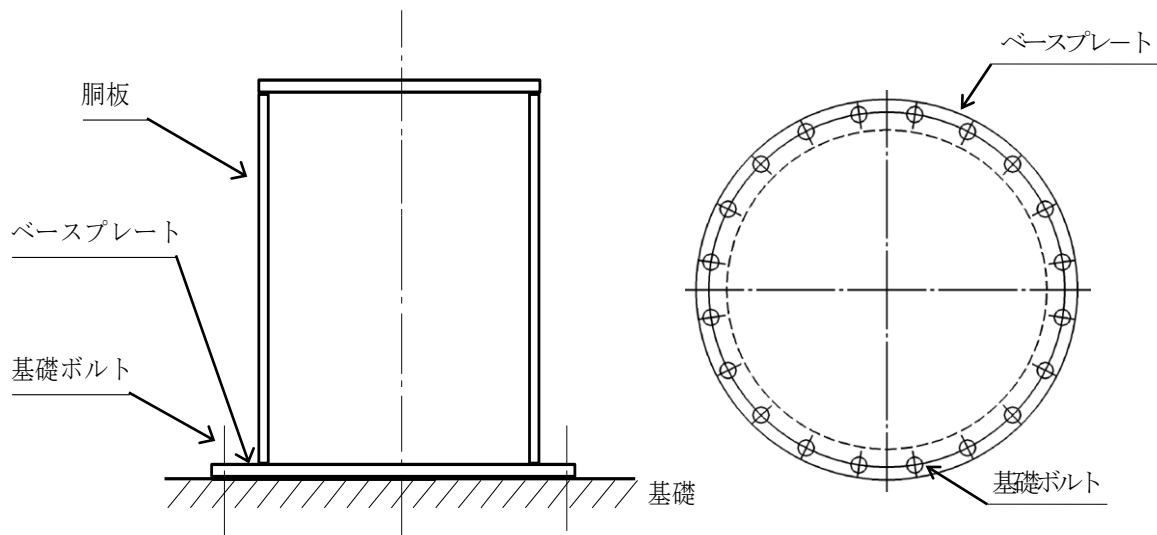


図-4 概要図

表-5 増設 R0 濃縮水受タンクの耐震性評価結果（1 / 2）

方向	固有周期[s]
水平方向	0.036
鉛直方向	0.006

表-5 増設 R0 濃縮水受タンクの耐震性評価結果（2 / 2）

部材	材料	水平震度	応力種別	算出応力[MPa]	許容応力[MPa]
胴板	SUS316L	0.36	一次一般膜	10	175
			座屈	$\frac{\eta \cdot \sigma_{x2}}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{x4}}{f_b} \leq 1$ $0.05 \leq 1$	
基礎ボルト	SS400	0.36	引張	1	176
			せん断	16	135

以上

付録1 スカート支持たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類  
Bクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針

## 1. 一般事項

本基本方針は、スカート支持たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類Bクラス）の耐震性についての計算方法を示す。

### 1.1 適用基準

本基本方針における計算方法は、原子力発電所耐震設計技術指針 JEAG4601-1987（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和62年8月）に準拠する。

### 1.2 計算条件

- (1) 容器及び内容物の質量は重心に集中するものとする。
- (2) 地震力は容器に対して水平方向に作用するものとする。なお、鉛直方向に共振のおそれのあるものについては、動的な鉛直方向の地震力も考慮する。
- (3) 容器はスカートで支持され、スカートは下端のベースプレートを円周上等ピッチの多数の基礎ボルトで基礎に固定された固定端とする。ここで、基礎については剛となるように設計する。
- (4) 胴とスカートをはりと考え、変形モードは曲げ及びせん断変形を考慮する。
- (5) 容器頂部に水平方向変位を拘束する構造物を設ける場合は、その部分をピン支持とする。
- (6) スカート部材において、マンホール等の開口部があつて補強をしていない場合は、欠損の影響を考慮する。

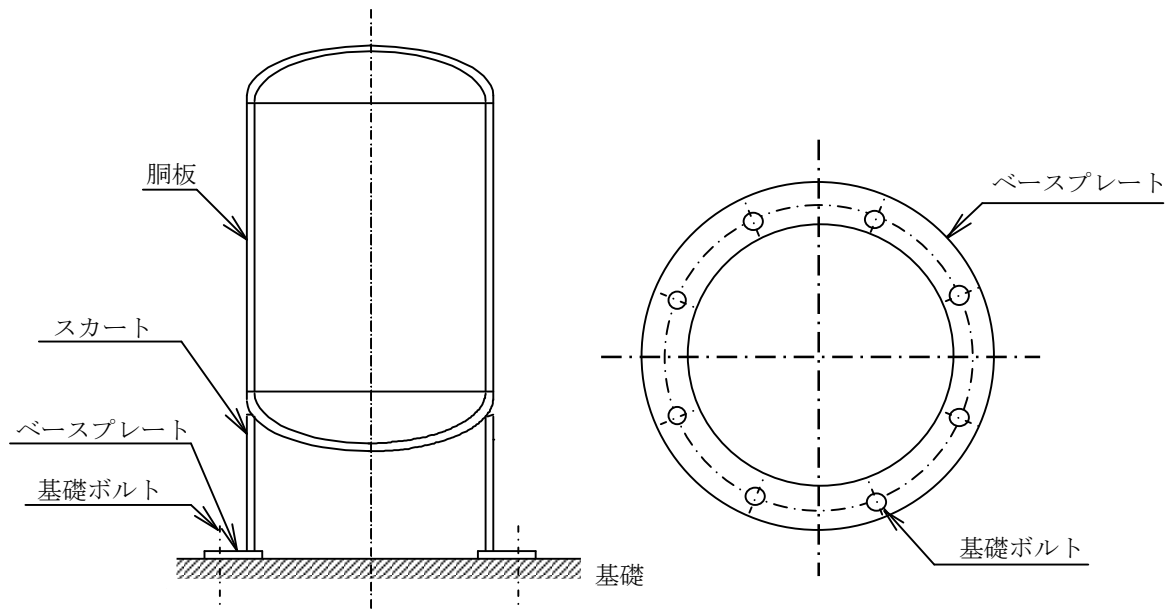


図1-1 スカート支持たて置円筒形容器の概要図

1.3 記号の説明

記号	記号の説明	単位
A	胴の軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>b</sub>	基礎ボルトの軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>e</sub>	胴の有効せん断断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>s</sub>	スカートの軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>s e</sub>	スカートの有効せん断断面積	mm <sup>2</sup>
C <sub>c</sub>	基礎ボルト計算における係数	—
C <sub>H</sub>	水平方向設計震度	—
C <sub>t</sub>	基礎ボルト計算における係数	—
C <sub>v</sub>	鉛直方向設計震度	—
D <sub>b i</sub>	ベースプレートの内径	mm
D <sub>b o</sub>	ベースプレートの外径	mm
D <sub>c</sub>	基礎ボルトのピッチ円直径	mm
D <sub>i</sub>	胴の内径	mm
D <sub>j</sub>	スカートに設けられた各開口部の穴径 (j=1, 2, 3…j <sub>1</sub> )	mm
D <sub>s</sub>	スカートの内径	mm
E	胴の縦弾性係数	MPa
E <sub>s</sub>	スカートの縦弾性係数	MPa
e	基礎ボルト計算における係数	—
F	設計・建設規格 SSB-3121.1又はSSB-3131に定める値	MPa
F <sub>c</sub>	基礎に作用する圧縮力	N
F <sub>t</sub>	基礎ボルトに作用する引張力	N
f <sub>b</sub>	曲げモーメントに対する許容座屈応力	MPa
f <sub>c</sub>	軸圧縮荷重に対する許容座屈応力	MPa
f <sub>s b</sub>	せん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力	MPa
f <sub>t</sub>	スカートの許容引張応力	MPa
f <sub>t o</sub>	引張力のみを受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
f <sub>t s</sub>	引張力とせん断力を同時に受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
G	胴のせん断弾性係数	MPa
G <sub>s</sub>	スカートのせん断弾性係数	MPa
g	重力加速度 (=9.80665)	m/s <sup>2</sup>
H	水頭	mm
I	胴の断面二次モーメント	mm <sup>4</sup>
I <sub>s</sub>	スカートの断面二次モーメント	mm <sup>4</sup>
j <sub>1</sub>	スカートに設けられた開口部の穴の個数	—

記 号	記 号 の 説 明	単 位
$K_H$	水平方向のばね定数	N/m
$K_v$	鉛直方向のばね定数	N/m
$k$	基礎ボルト計算における中立軸の荷重係数	—
$\lambda$	胴のスカート接合点から重心までの距離	mm
$\lambda_1, \lambda_2$	基礎ボルト計算における中立軸から荷重作用点までの距離	mm
$\lambda_r$	容器の重心から上端支持部までの距離	mm
$\lambda_s$	スカートの長さ	mm
$M_s$	スカートに作用する転倒モーメント	N・mm
$M_{s1}$	スカートの上端部に作用する転倒モーメント	N・mm
$M_{s2}$	スカートの下端部に作用する転倒モーメント	N・mm
$m_0$	容器の運転時質量	kg
$m_e$	容器のスカート接合部から上部の空質量	kg
$n$	基礎ボルトの本数	—
$P_r$	最高使用圧力	MPa
$Q$	重心に作用する任意の水平力	N
$Q'$	$Q$ により上端の支持部に作用する反力	N
$S$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表5に定める値	MPa
$S_a$	胴の許容応力	MPa
$S_u$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9に定める値	MPa
$S_y$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8に定める値	MPa
$s$	基礎ボルトと基礎の縦弾性係数比	—
$T_H$	水平方向固有周期	s
$T_v$	鉛直方向固有周期	s
$t$	胴板の厚さ	mm
$t_1$	基礎ボルト面積相当板幅	mm
$t_2$	圧縮側基礎相当幅	mm
$t_s$	スカートの厚さ	mm
$Y$	スカート開口部の水平断面における最大円周長さ	mm
$z$	基礎ボルト計算における係数	—
$\alpha$	基礎ボルト計算における中立軸を定める角度	rad
$\delta$	荷重 $Q$ による容器の上端での変位量	mm
$\delta'$	荷重 $Q'$ による容器の上端での変位量	mm
$\delta_0$	荷重 $Q, Q'$ による容器の重心での変位量	mm
$\eta$	座屈応力に対する安全率	—
$\pi$	円周率	—

記号	記号の説明	単位
$\rho'$	液体の密度 (=比重 $\times 10^{-6}$ )	kg/mm <sup>3</sup>
$\sigma_0$	胴の一次一般膜応力の最大値	MPa
$\sigma_{0c}$	胴の組合せ圧縮応力	MPa
$\sigma_{0t}$	胴の組合せ引張応力	MPa
$\sigma_b$	基礎ボルトに生じる引張応力	MPa
$\sigma_c$	基礎に生じる圧縮応力	MPa
$\sigma_s$	スカートの組合せ応力	MPa
$\sigma_{s1}$	スカートの運転時質量による軸方向応力	MPa
$\sigma_{s2}$	スカートの曲げモーメントによる軸方向応力	MPa
$\sigma_{s3}$	スカートの鉛直方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{x1}, \sigma_{\phi 1}$	静水頭又は内圧により胴に生じる軸方向及び周方向応力	MPa
$\sigma_{x2}$	胴の運転時質量による軸方向引張応力	MPa
$\sigma_{x3}$	胴の空質量による軸方向圧縮応力	MPa
$\sigma_{x4}$	地震により胴に生じる軸方向応力	MPa
$\sigma_{x5}$	胴の鉛直方向地震による軸方向引張応力	MPa
$\sigma_{x6}$	胴の鉛直方向地震による軸方向圧縮応力	MPa
$\sigma_{xc}$	胴の軸方向応力の和 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{xt}$	胴の軸方向応力の和 (引張側)	MPa
$\sigma_{\phi}$	胴の周方向応力の和	MPa
$\sigma_{\phi 2}$	静水頭に鉛直方向地震が加わり胴に生じる周方向応力	MPa
$\tau$	地震により胴に生じるせん断応力	MPa
$\tau_b$	基礎ボルトに生じるせん断応力	MPa
$\tau_s$	地震によりスカートに生じるせん断応力	MPa
$\Phi_1(x)$	圧縮荷重に対する許容座屈応力の関数	MPa
$\phi_2(x)$	曲げモーメントに対する許容座屈応力の関数	MPa

注：「設計・建設規格」とは、発電用原子力設備規格（設計・建設規格 JSME S NC1-2005（2007年追補版含む。））（日本機械学会 2007年9月）（以下「設計・建設規格」という。）をいう。



#### 1.4 計算精度と数値の丸め方

精度は6桁以上を確保する。

表示する数値の丸め方は表1-1に示すとおりとする。

表1-1 表示する数値の丸め方

数 値 の 種 類	単 位	処 理 桁	処 理 方 法	表 示 桁
固有周期	s	小数点以下第4位	四捨五入	小数点以下第3位
震度	—	小数点以下第3位	切上げ	小数点以下第2位
最高使用圧力	MPa	—	—	小数点以下第2位
温度	℃	—	—	整数位
比重	—	小数点以下第3位	四捨五入	小数点以下第2位
質量	kg	—	—	整数位
長 さ	下記以外の長さ	mm	—	整数位 <sup>*1</sup>
	胴板の厚さ	mm	—	小数点以下第1位
	スカート厚さ	mm	—	小数点以下第1位
面積	mm <sup>2</sup>	有効数字5桁目	四捨五入	有効数字4桁 <sup>*3</sup>
モーメント	N・mm	有効数字5桁目	四捨五入	有効数字4桁 <sup>*3</sup>
算出応力	MPa	小数点以下第1位	切上げ	整数位
許容応力 <sup>*2</sup>	MPa	小数点以下第1位	切捨て	整数位

注記 \*1：設計上定める値が小数点以下第1位の場合は、小数点以下第1位表示とする。

\*2：設計・建設規格 付録材料図表に記載された温度の中間における引張強さ及び降伏点は、比例法により補間した値の小数点以下第1位を切り捨て、整数位までの値とする。

\*3：絶対値が1000以上のときは、べき数表示とする。

2. 計算方法

2.1 固有周期の計算方法

(1) 計算モデル

本容器は、1.2 項より図 2-1 に示す下端固定の 1 質点系振動モデルあるいは下端固定上端支持の 1 質点系振動モデルとして考える。

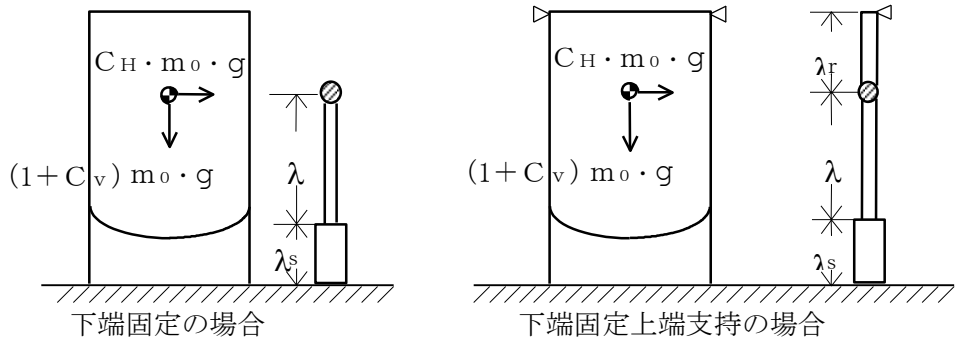


図2-1 固有周期の計算モデル

(2) 水平方向固有周期

a. 下端固定の場合

曲げ及びせん断変形によるばね定数  $K_H$  は次式で求める。

$$K_H = 1000 \left\{ \frac{\lambda^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{1}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot (3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot \lambda \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3) + \frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \right\} \dots \dots \dots (2.1.1)$$

ここで、スカートの開口部 (図 2-2 参照) による影響を考慮し、胴及びスカートの断面性能は次のように求める。

胴の断面性能は

$$I = \frac{\pi}{8} \cdot (D_i + t)^3 \cdot t \dots \dots \dots (2.1.2)$$

$$A_e = \frac{2}{3} \cdot \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \dots \dots \dots (2.1.3)$$

スカートの断面性能は

$$I_s = \frac{\pi}{8} \cdot (D_s + t_s)^3 \cdot t_s - \frac{1}{4} \cdot (D_s + t_s)^2 \cdot t_s \cdot Y \dots \dots \dots (2.1.4)$$

スカート開口部の水平断面における最大円周長さは、(図 2-2 及び図 2-3 参照)

$$Y = \sum_{j=1}^{j1} (D_s + t_s) \cdot \sin^{-1} \left( \frac{D_j}{D_s + t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (2.1.5)$$

$$A_{se} = \frac{2}{3} \cdot \{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s \quad \dots\dots\dots (2.1.6)$$

したがって、固有周期は次式で求める。

$$T_H = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_H}} \quad \dots\dots\dots (2.1.7)$$

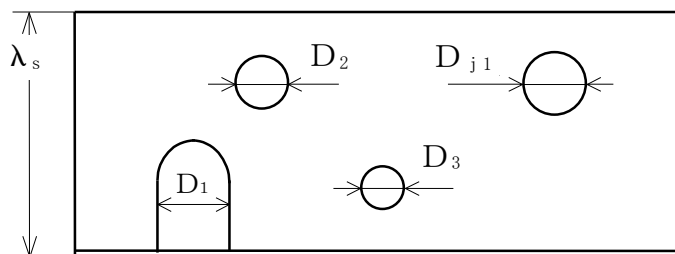


図2-2 スカート開口部の形状

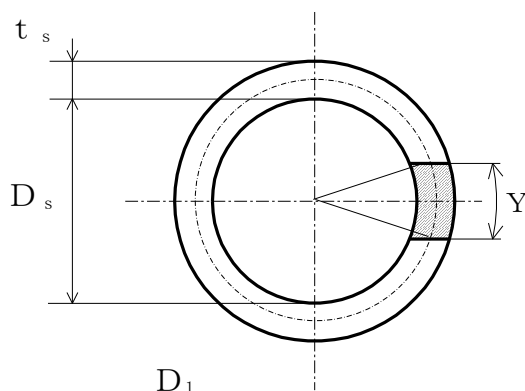


図2-3 スカート開口部の水平断面における最大円周長さ

b. 下端固定上端支持の場合

重心の位置に水平方向の荷重Qが作用したときに上端の支持部に生じる反力Q' は、図 2-4 に示すように荷重Q及び反力Q' による上端の変位量δとδ' が等しいとして求める。

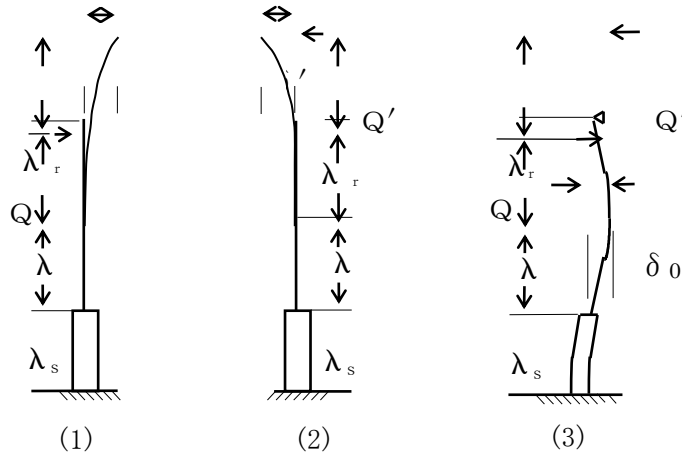


図 2-4 下端固定上端支持の場合の変形モデル

図 2-4 の (1) の場合

$$\delta = \frac{Q \cdot \lambda^2}{6 \cdot E \cdot I} \cdot (2 \cdot \lambda + 3 \cdot \lambda_r) + \frac{Q}{6 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot \{2 \cdot \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda_r + 6 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r)\} + \frac{Q \cdot \lambda}{G \cdot A_e} + \frac{Q \cdot \lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \dots \dots \dots (2.1.8)$$

図 2-4 の (2) の場合

$$\delta' = \frac{Q' \cdot (\lambda + \lambda_r)^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{Q'}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot \{3 \cdot (\lambda + \lambda_r)^2 + \lambda_s + 3 \cdot (\lambda + \lambda_r) \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3\} + \frac{Q' \cdot (\lambda + \lambda_r)}{G \cdot A_e} + \frac{Q' \cdot \lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \dots \dots \dots (2.1.9)$$

(2.1.8) 式と (2.1.9) 式を等しく置くことにより、

$$Q' = Q \cdot \left\{ \frac{\lambda^2 \cdot (2 \cdot \lambda + 3 \cdot \lambda_r)}{6 \cdot E \cdot I} + \frac{2 \cdot \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda_r + 6 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r)}{6 \cdot E_s \cdot I_s} + \frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \right\} \cdot \left\{ \frac{(\lambda + \lambda_r)^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{3 \cdot (\lambda + \lambda_r)^2 + \lambda_s + 3 \cdot (\lambda + \lambda_r) \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3}{3 \cdot E_s \cdot I_s} + \frac{\lambda + \lambda_r}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \right\} \dots \dots \dots (2.1.10)$$

したがって、図 2-4 の(3)に示す重心位置での変位量  $\delta_0$  は図 2-4 の(1)及び(2)の重心位置での変位量の重ね合せから求めることができ、ばね定数  $K_H$  は次式で求める。

$$K_H = \frac{Q}{\delta_0} = 1000 \left\{ \frac{\lambda^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot \lambda \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3}{3 \cdot E_s \cdot I_s} + \left(1 - \frac{Q'}{Q}\right) \cdot \left(\frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}}\right) - \frac{Q'}{Q} \cdot \left(\frac{2 \cdot \lambda^3 + 3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_r}{6 \cdot E \cdot I} + \frac{3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda + \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s \cdot \lambda^2 + 3 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot \lambda_r}{3 \cdot E_s \cdot I_s} + \frac{3}{2} \lambda_s^2 + \lambda_r\right) \right\} \quad (2.1.11)$$

固有周期は (2.1.7) 式により求める。

### (3) 鉛直方向固有周期

軸方向変形によるばね定数  $K_v$  は、次式で求める。

$$K_v = 1000 \left/ \left( \frac{\lambda}{E \cdot A} + \frac{\lambda_s}{E_s \cdot A_s} \right) \right. \quad (2.1.12)$$

$$A = \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \quad (2.1.13)$$

$$A_s = \{\pi \cdot (D_s + t_s) - Y\} \cdot t_s \quad (2.1.14)$$

したがって、固有周期  $T_v$  は次式で求める。

$$T_v = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_v}} \quad (2.1.15)$$

## 2.2 応力の計算方法

応力計算において、静的地震力を用いる場合は絶対値和を用い、動的地震力を用いる場合は、SRSS法を用いることができる。

### 2.2.1 胴の応力

#### (1) 静水頭又は内圧による応力

静水頭による場合（鉛直方向地震時を含む。）

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.1)$$

$$\sigma_{\phi 2} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i \cdot C_v}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.2)$$

$$\sigma_{x1} = 0 \quad \dots\dots\dots (2.2.1.3)$$

内圧による場合

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{P_r \cdot (D_i + 1.2 \cdot t)}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.4)$$

$$\sigma_{\phi 2} = 0 \quad \dots\dots\dots (2.2.1.5)$$

$$\sigma_{x1} = \frac{P_r \cdot (D_i + 1.2 \cdot t)}{4 \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.6)$$

#### (2) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

胴がスカートと接合する点を境界として、上部には胴自身の質量による圧縮応力が、下部には下部の胴自身の質量と内容物の質量による引張応力が生じる。

下部の胴について

$$\sigma_{x2} = \frac{(m_0 - m_e) \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.7)$$

$$\sigma_{x5} = \frac{(m_0 - m_e) \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.8)$$

上部の胴について

$$\sigma_{x3} = \frac{m_e \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.9)$$

$$\sigma_{x6} = \frac{m_e \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.10)$$

(3) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により胴はスカート接合部で最大となる曲げモーメントを受ける。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

a. 下端固定の場合

$$\sigma_{x4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \lambda}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.11)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.12)$$

b. 下端固定上端支持の場合

$$\sigma_{x4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left| \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda \cdot \lambda_r) \right|}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.13)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left( 1 - \frac{Q'}{Q} \right)}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.14)$$

(4) 組合せ応力

(1)～(3)によって求めた胴の応力は以下のように組み合わせる。

a. 一次一般膜応力

(a) 組合せ引張応力

$$\sigma_\phi = \sigma_{\phi1} + \sigma_{\phi2} \dots\dots\dots (2.2.1.15)$$

$$\sigma_{0t} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xt})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.16)$$

ここで、

【絶対値和】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sigma_{x4} + \sigma_{x5} \dots\dots\dots (2.2.1.17)$$

【SRSS法】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sqrt{\sigma_{x4}^2 + \sigma_{x5}^2} \dots\dots\dots (2.2.1.18)$$

(b) 組合せ圧縮応力

$$\sigma_\phi = -\sigma_{\phi1} - \sigma_{\phi2} \dots\dots\dots (2.2.1.19)$$

$\sigma_{xc}$ が正の値（圧縮側）のとき、次の組合せ圧縮応力を求める。

$$\sigma_{0c} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xc})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.20)$$

ここで、

【絶対値和】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4} + \sigma_{x6} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.21)$$

【S R S S法】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x3} + \sqrt{\sigma_{x4}^2 + \sigma_{x6}^2} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.22)$$

したがって、胴の組合せ一次一般膜応力の最大値は、絶対値和、S R S S法それぞれに対して、

$$\sigma_0 = \text{Max} \{ \text{組合せ引張応力} (\sigma_{0t}), \text{組合せ圧縮応力} (\sigma_{0c}) \} \quad \dots\dots\dots (2.2.1.23)$$

とする。

一次応力は一次一般膜応力と同じになるので省略する。

2.2.2 スカートの応力

(1) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

スカート底部に生じる運転時質量及び鉛直方向地震による圧縮応力は次式で求める。

$$\sigma_{s1} = \frac{m_0 \cdot g}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.1)$$

$$\sigma_{s3} = \frac{m_0 \cdot g \cdot C_v}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.2)$$

(2) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力によりスカートには曲げモーメントが作用する。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

a. 下端固定の場合

$$\sigma_{s2} = \frac{M_s}{(D_s + t_s) \cdot t_s \cdot \left\{ \frac{\pi}{4} \cdot (D_s + t_s) - \frac{Y}{2} \right\}} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.3)$$

$$\tau_s = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.4)$$

ここで、

$$M_s = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot (\lambda_s + \lambda) \quad \dots\dots\dots (2.2.2.5)$$



b. 下端固定上端支持の場合

軸方向応力は (2.2.2.3) 式で表されるが、曲げモーメント  $M_s$  は次の  $M_{s1}$  又は  $M_{s2}$  のいずれか大きい方の値とする。

$$M_{s1} = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left| \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda + \lambda_r) \right| \dots\dots\dots (2.2.2.6)$$

$$M_{s2} = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left| \lambda_s + \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r) \right| \dots\dots\dots (2.2.2.7)$$

$$\tau_s = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot (1 - \frac{Q'}{Q})}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \dots\dots\dots (2.2.2.8)$$

(3) 組合せ応力

組合せ応力は次式で求める。

【絶対値和】

$$\sigma_s = \sqrt{(\sigma_{s1} + \sigma_{s2} + \sigma_{s3})^2 + 3 \cdot \tau_s^2} \dots\dots\dots (2.2.2.9)$$

【SRSS法】

$$\sigma_s = \sqrt{(\sigma_{s1} + \sqrt{\sigma_{s2}^2 + \sigma_{s3}^2})^2 + 3 \cdot \tau_s^2} \dots\dots\dots (2.2.2.10)$$

2.2.3 基礎ボルトの応力

(1) 引張応力

基礎に作用する転倒モーメント $M_s$ は下端固定の場合、(2.2.2.5)式を、下端固定上端支持の場合は(2.2.2.6)式又は(2.2.2.7)式を用いる。

転倒モーメントが作用した場合に生じる基礎ボルトの引張荷重と基礎部の圧縮荷重については、荷重と変位量の釣合い条件を考慮することにより求める。(図2-5参照)

以下にその手順を示す。

a.  $\sigma_b$ 及び $\sigma_c$ を仮定して基礎ボルトの応力計算における中立軸の荷重係数 $k$ を求める。

$$k = \frac{1}{1 + \frac{\sigma_b}{s \cdot \sigma_c}} \dots\dots\dots (2.2.3.1)$$

b. 基礎ボルトの応力計算における中立軸を定める角度 $\alpha$ を求める。

$$\alpha = \cos^{-1} (1 - 2 \cdot k) \dots\dots\dots (2.2.3.2)$$

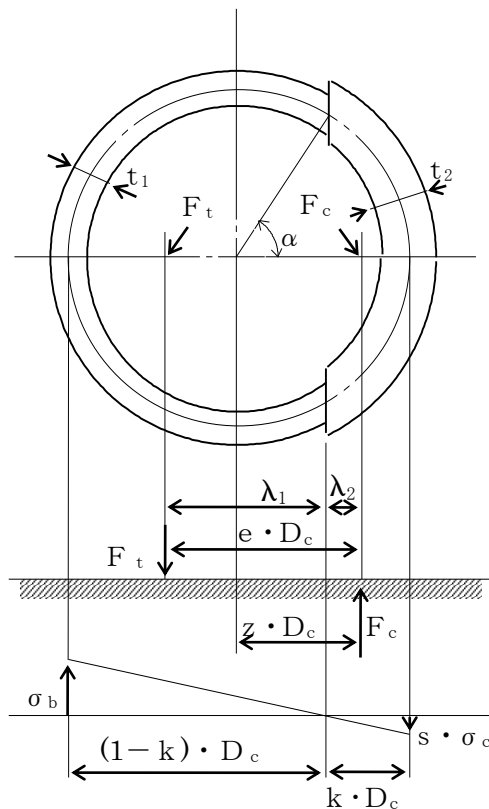


図2-5 基礎の荷重説明図

c. 各定数  $e$ ,  $z$ ,  $C_t$  及び  $C_c$  を求める。

$$e = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \frac{(\pi - \alpha) \cdot \cos^2 \alpha + \frac{1}{2} \cdot (\pi - \alpha) + \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha}{(\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha} + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right\} \dots\dots\dots (2.2.3.3)$$

$$z = \frac{1}{2} \cdot \left( \cos \alpha + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right) \dots\dots\dots (2.2.3.4)$$

$$C_t = \frac{2 \cdot \{ (\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha \}}{1 + \cos \alpha} \dots\dots\dots (2.2.3.5)$$

$$C_c = \frac{2 \cdot (\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha)}{1 - \cos \alpha} \dots\dots\dots (2.2.3.6)$$

d. 各定数を用いて  $F_t$  及び  $F_c$  を求める。

【絶対値和】

$$F_t = \frac{M_s - (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c}{e \cdot D_c} \dots\dots\dots (2.2.3.7)$$

$$F_c = F_t + (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.3.8)$$

【SRSS法】

$$F_t = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} - \frac{z}{e} \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.3.9)$$

$$F_c = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot (z - e) \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} + \left(1 - \frac{z}{e}\right) \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.3.10)$$

基礎ボルトに引張力が作用しないのは、 $\alpha$  が  $\pi$  に等しくなったときであり、(2.2.3.3) 式及び (2.2.3.4) 式において  $\alpha$  を  $\pi$  に近づけた場合の値  $e = 0.75$  及び  $z = 0.25$  を (2.2.3.7) 式又は (2.2.3.9) 式に代入し、得られる  $F_t$  の値によって引張力の有無を次のように判定する。

$F_t \leq 0$  ならば引張力は作用しない。

$F_t > 0$  ならば引張力が作用しているので次の計算を行う。

e.  $\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  を求める。

$$\sigma_b = \frac{2 \cdot F_t}{t_1 \cdot D_c \cdot C_t} \dots\dots\dots (2.2.3.11)$$

$$\sigma_c = \frac{2 \cdot F_c}{(t_2 + s \cdot t_1) \cdot D_c \cdot C_c} \dots\dots\dots (2.2.3.12)$$

ここで,

$$t_1 = \frac{n \cdot A_b}{\pi \cdot D_c} \dots\dots\dots (2.2.3.13)$$

$$t_2 = \frac{1}{2} \cdot (D_{bo} - D_{bi}) - t_1 \dots\dots\dots (2.2.3.14)$$

$\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  が a 項にて仮定した値と十分に近似していることを確認する。この場合の  $\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  を基礎ボルトと基礎に生じる応力とする。

(2) せん断応力

a. 下端固定の場合

$$\tau_b = \frac{C_H \cdot m_0 \cdot g}{n \cdot A_b} \dots\dots\dots (2.2.3.15)$$

b. 下端固定上端支持の場合

$$\tau_b = \frac{C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot (1 - \frac{Q'}{Q})}{n \cdot A_b} \dots\dots\dots (2.2.3.16)$$

3. 評価方法

3.1 応力の評価

3.1.1 胴の応力評価

2.2.1 項で求めた組合せ応力が胴の最高使用温度における許容応力  $S_a$  以下であること。

応力の種類	許容応力 $S_a$
一次一般膜応力	設計降伏点 $S_y$ と設計引張強さ $S_u$ の 0.6 倍のいずれか小さい方の値。ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金にあつては許容引張応力 $S$ の 1.2 倍の方が大きい場合は、この大きい方の値とする。

一次応力の評価は算出応力が一次一般膜応力と同じ値であるので省略する。

3.1.2 スカートの応力評価

(1) 2.2.2 項で求めたスカートの組合せ応力が許容引張応力  $f_t$  以下であること。

$$f_t = \frac{F}{1.5} \cdot 1.5 \quad \dots\dots\dots (3.1.2.1)$$

(2) 圧縮膜応力（圧縮応力と曲げによる圧縮側応力の組合せ）は次式を満足すること。（座屈の評価）

$$\frac{\eta \cdot (\sigma_{s1} + \sigma_{s3})}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{s2}}{f_b} \leq 1 \quad \dots\dots\dots (3.1.2.2)$$

ここで、 $f_c$  は次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \quad \dots\dots\dots (3.1.2.3)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{6800 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_1 \left( \frac{8000 \cdot g}{F} \right) \right\} \cdot \left( \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right] \quad \dots\dots\dots (3.1.2.4)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_c = \phi_1 \left( \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (3.1.2.5)$$

ただし、 $\phi_1(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_1(x) = 0.6 \cdot \frac{E_s}{x} \cdot \left[ 1 - 0.901 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right] \quad \dots\dots (3.1.2.6)$$

また、 $f_b$ は次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \quad \dots\dots\dots (3.1.2.7)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{9600 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{8400 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_2 \left( \frac{9600 \cdot g}{F} \right) \right\} \cdot \left( \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right] \quad \dots\dots\dots (3.2.2.8)$$

$$\frac{9600 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_b = \phi_2 \left( \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (3.1.2.9)$$

ただし、 $\phi_2(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_2(x) = 0.6 \cdot \frac{E_s}{x} \cdot \left[ 1 - 0.731 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right] \quad \dots\dots (3.1.2.10)$$

$\eta$ は安全率で次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 \quad \dots\dots\dots (3.1.2.11)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 + \frac{0.5 \cdot F}{6800 \cdot g} \cdot \left( \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \quad \dots\dots\dots (3.1.2.12)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1.5 \quad \dots\dots\dots (3.1.2.13)$$

3.1.3 基礎ボルトの応力評価

2.2.3項で求めた基礎ボルトの引張応力  $\sigma_b$  は次式より求めた許容引張応力  $f_{ts}$  以下であること。

せん断応力  $\tau_b$  はせん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力  $f_{sb}$  以下であること。

$$f_{ts} = 1.4 \cdot f_{to} - 1.6 \cdot \tau_b \quad \dots\dots\dots (3.1.3.1)$$

かつ、

$$f_{ts} \leq f_{to} \quad \dots\dots\dots (3.1.3.2)$$

ただし、 $f_{to}$  及び  $f_{sb}$  は下表による。

	許容引張応力 $f_{to}$	許容せん断応力 $f_{sb}$
計 算 式	$\frac{F}{2} \cdot 1.5$	$\frac{F}{1.5 \cdot \sqrt{3}} \cdot 1.5$

付録 2 平底たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類 B, Cクラス）  
の耐震性についての計算書作成の基本方針



## 1. 一般事項

本基本方針は、平底たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類B，Cクラス）の耐震性についての計算方法を示す。

### 1.1 適用基準

本基本方針における計算方法は、原子力発電所耐震設計技術指針 JEAG4601-1987（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和62年8月）に準拠する。

### 1.2 計算条件

- (1) 容器及び内容物の質量は重心に集中するものとする。
- (2) 地震力は容器に対して水平方向に作用するものとする。
- (3) 容器は胴下端のベースプレートを円周上等ピッチの多数の基礎ボルトで基礎に固定された固定端とする。ここで、基礎については剛となるように設計する。
- (4) 胴をはりと考え、変形モードは曲げ及びせん断変形を考慮する。

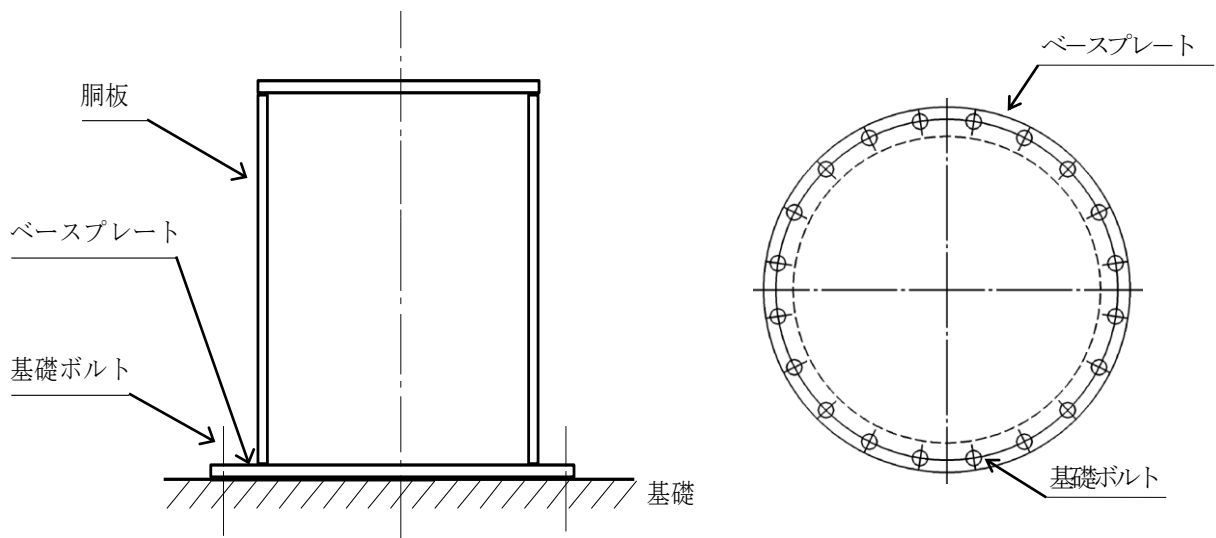


図1-1 平底たて置円筒形容器の概要図

### 1.3 記号の説明

記号	記号の説明	単位
A	胴の軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>b</sub>	基礎ボルトの軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>e</sub>	胴の有効せん断断面積	mm <sup>2</sup>
C <sub>c</sub>	基礎ボルト計算における係数	—
C <sub>H</sub>	水平方向設計震度	—
C <sub>t</sub>	基礎ボルト計算における係数	—
C <sub>v</sub>	鉛直方向設計震度	—
D <sub>b i</sub>	ベースプレートの内径	mm
D <sub>b o</sub>	ベースプレートの外径	mm
D <sub>c</sub>	基礎ボルトのピッチ円直径	mm
D <sub>i</sub>	胴の内径	mm
E	胴の縦弾性係数	MPa
e	基礎ボルト計算における係数	—
F	設計・建設規格 SSB-3121.1又はSSB-3131に定める値	MPa
F <sub>c</sub>	基礎に作用する圧縮力	N
F <sub>t</sub>	基礎ボルトに作用する引張力	N
f <sub>b</sub>	曲げモーメントに対する許容座屈応力	MPa
f <sub>c</sub>	軸圧縮荷重に対する許容座屈応力	MPa
f <sub>s b</sub>	せん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力	MPa
f <sub>t o</sub>	引張力のみを受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
f <sub>t s</sub>	引張力とせん断力を同時に受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
G	胴のせん断弾性係数	MPa
g	重力加速度 (=9.80665)	m/s <sup>2</sup>
H	水頭	mm
I	胴の断面二次モーメント	mm <sup>4</sup>
K <sub>H</sub>	水平方向ばね定数	N/m
K <sub>V</sub>	鉛直方向ばね定数	N/m
k	基礎ボルト計算における中立軸の荷重係数	—
λ <sub>1</sub> , λ <sub>2</sub>	基礎ボルト計算における中立軸から荷重作用点までの距離 (図2-2に示す距離)	mm
λ <sub>g</sub>	基礎から容器重心までの距離	mm
M <sub>s</sub>	胴に作用する転倒モーメント	N・mm
m <sub>0</sub>	容器の運転時質量	kg
m <sub>e</sub>	容器の空質量	kg
n	基礎ボルトの本数	—
S	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表5に定める値	MPa
S <sub>a</sub>	胴の許容応力	MPa
S <sub>u</sub>	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9に定める値	MPa

記号	記号の説明	単位
$S_y$	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8に定める値	MPa
$s$	基礎ボルトと基礎の縦弾性係数比	—
$T_H$	水平方向固有周期	s
$T_V$	鉛直方向固有周期	s
$t$	胴板の厚さ	mm
$t_1$	基礎ボルト面積相当板幅	mm
$t_2$	圧縮側基礎相当幅	mm
$z$	基礎ボルト計算における係数	—
$\alpha$	基礎ボルト計算における中立軸を定める角度	rad
$\eta$	座屈応力に対する安全率	—
$\pi$	円周率	—
$\rho'$	液体の比重 (= 比重 $\times 10^{-6}$ )	kg/mm <sup>3</sup>
$\sigma_0$	胴の一次一般膜応力の最大値	MPa
$\sigma_{0c}$	胴の組合せ圧縮応力	MPa
$\sigma_{0t}$	胴の組合せ引張応力	MPa
$\sigma_b$	基礎ボルトに生じる引張応力	MPa
$\sigma_c$	基礎に生じる圧縮応力	MPa
$\sigma_{x1}, \sigma_{\phi 1}$	静水頭により胴に生じる軸方向及び周方向応力	MPa
$\sigma_{x2}$	胴の空質量による軸方向圧縮応力	MPa
$\sigma_{x3}$	胴の鉛直方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{x4}$	胴の水平方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{xc}$	胴の軸方向応力の和 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{xt}$	胴の軸方向応力の和 (引張側)	MPa
$\sigma_{\phi}$	胴の周方向応力の和	MPa
$\sigma_{\phi 2}$	静水頭に鉛直方向地震が加わり胴に生じる周方向応力	MPa
$\tau$	地震により胴に生じるせん断応力	MPa
$\tau_b$	基礎ボルトに生じるせん断応力	MPa
$\phi_1(x)$	圧縮荷重に対する許容座屈応力の関数	MPa
$\phi_2(x)$	曲げモーメントに対する許容座屈応力の関数	MPa

注：「設計・建設規格」とは、発電用原子力設備規格（設計・建設規格 JSME S NC1-2005（2007年追補版含む。））（日本機械学会 2007年9月）（以下「設計・建設規格」という。）をいう。

#### 1.4 計算精度と数値の丸め方

精度は6桁以上を確保する。

表示する数値の丸め方は表1-1に示すとおりとする。

表1-1 表示する数値の丸め方

数 値 の 種 類		単 位	処 理 桁	処 理 方 法	表 示 桁
固有周期		s	小数点以下第4位	四捨五入	小数点以下第3位
震度		—	小数点以下第3位	切上げ	小数点以下第2位
温度		℃	—	—	整数位
比重		—	小数点以下第3位	四捨五入	小数点以下第2位
質量		kg	—	—	整数位
長 さ	下記以外の長さ	mm	—	—	整数位 <sup>*1</sup>
	胴板の厚さ	mm	—	—	小数点以下第1位
面積		mm <sup>2</sup>	有効数字5桁目	四捨五入	有効数字4桁 <sup>*3</sup>
モーメント		N・mm	有効数字5桁目	四捨五入	有効数字4桁 <sup>*3</sup>
算出応力		MPa	小数点以下第1位	切上げ	整数位
許容応力 <sup>*2</sup>		MPa	小数点以下第1位	切捨て	整数位

注記 \*1：設計上定める値が小数点以下第1位の場合は、小数点以下第1位表示とする。

\*2：設計・建設規格 付録材料図表に記載された温度の中間における引張強さ及び降伏点は、比例法により補間した値の小数点以下第1位を切り捨て、整数位までの値とする。

\*3：絶対値が1000以上のときは、べき数表示とする。

## 2. 計算方法

### 2.1 固有周期の計算方法

#### (1) 計算モデル

本容器は、1.2 項より図 2-1 に示すような下端固定の 1 質点系振動モデルとして考える。

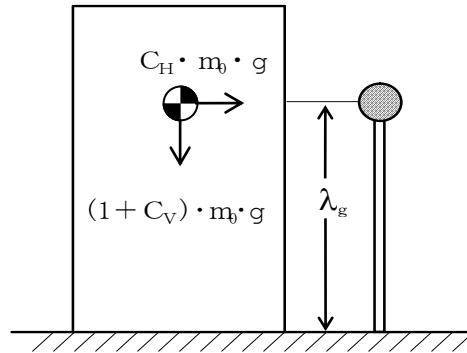


図 2-1 固有周期の計算モデル

#### (2) 水平方向固有周期

曲げ及びせん断変形によるばね定数  $K_H$  は次式で求める。

$$K_H = \frac{1000}{\frac{\lambda_g^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{\lambda_g}{G \cdot A_e}} \quad \dots \quad (2.1.1)$$

ここで、胴の断面性能は次のように求める。

$$I = \frac{\pi}{8} \cdot (D_i + t)^3 \cdot t \quad \dots \quad (2.1.2)$$

$$A_e = \frac{2}{3} \cdot \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \quad \dots \quad (2.1.3)$$

したがって、固有周期  $T_H$  は次式で求める。

$$T_H = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_H}} \quad \dots \quad (2.1.4)$$

#### (3) 鉛直方向固有周期

軸方向変形によるばね定数  $K_V$  は次式で求める。

$$K_V = \frac{1000}{\frac{\lambda_g}{A \cdot E}} \quad \dots \quad (2.1.5)$$

ここで、胴の断面性能は次のように求める。

$$A = \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \quad \dots \quad (2.1.6)$$

したがって、固有周期  $T_V$  は次式で求める。

$$T_V = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_e}{K_V}} \quad \dots \quad (2.1.7)$$

## 2.2 応力の計算方法

応力計算において、静的地震力を用いる場合は絶対値和を用い、動的地震力を用いる場合はSRS法を用いることができる。

### 2.2.1 胴の応力

#### (1) 静水頭及び鉛直方向地震による応力

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i}{2 \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.1)$$

$$\sigma_{\phi 2} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i \cdot C_v}{2 \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.2)$$

$$\sigma_{x1} = 0 \dots\dots\dots (2.2.1.3)$$

#### (2) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

胴がベースプレートと接合する点には胴自身の質量による圧縮応力と鉛直方向地震による軸方向応力が生じる。

$$\sigma_{x2} = \frac{m_e \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.4)$$

$$\sigma_{x3} = \frac{m_e \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.5)$$

#### (3) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により胴はベースプレート接合部で最大となる曲げモーメントを受ける。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

$$\sigma_{x4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \lambda_g}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.6)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots (2.2.1.7)$$

#### (4) 組合せ応力

(1)～(3)によって求めた胴の応力は以下のように組み合わせる。

##### a. 一次一般膜応力

##### (a) 組合せ引張応力

$$\sigma_{\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 2} \dots\dots\dots (2.2.1.8)$$

$$\sigma_{0t} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xt})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.9)$$

ここで、

【絶対値和】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} - \sigma_{x2} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4} \dots\dots\dots (2.2.1.10)$$

【SRS法】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} - \sigma_{x2} + \sqrt{\sigma_{x3}^2 + \sigma_{x4}^2} \dots\dots\dots (2.2.1.11)$$

(b) 組合せ圧縮応力

$$\sigma_{\phi} = -\sigma_{\phi 1} - \sigma_{\phi 2} \dots\dots\dots (2.2.1.12)$$

$\sigma_{x c}$  が正の値 (圧縮側) のとき, 次の組合せ圧縮応力を求める。

$$\sigma_{0c} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{x c} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{x c})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.13)$$

ここで,

**【絶対値和】**

$$\sigma_{x c} = -\sigma_{x 1} + \sigma_{x 2} + \sigma_{x 3} + \sigma_{x 4} \dots\dots\dots (2.2.1.14)$$

**【S R S S法】**

$$\sigma_{x c} = -\sigma_{x 1} + \sigma_{x 2} + \sqrt{\sigma_{x 3}^2 + \sigma_{x 4}^2} \dots\dots\dots (2.2.1.15)$$

したがって, 胴の組合せ一次一般膜応力の最大値は, 絶対値和, S R S S法それぞれに対して,

$$\sigma_0 = \text{Max} \{ \text{組合せ引張応力} (\sigma_{0t}), \text{組合せ圧縮応力} (\sigma_{0c}) \} \dots\dots\dots (2.2.1.16)$$

とする。

一次応力は一次一般膜応力と同じになるので省略する。

## 2.2.2 基礎ボルトの応力

### (1) 引張応力

転倒モーメントが作用した場合に生じる基礎ボルトの引張荷重と基礎部の圧縮荷重については、荷重と変位量の釣合い条件を考慮することにより求める。(図 2-2 参照)

以下にその手順を示す。

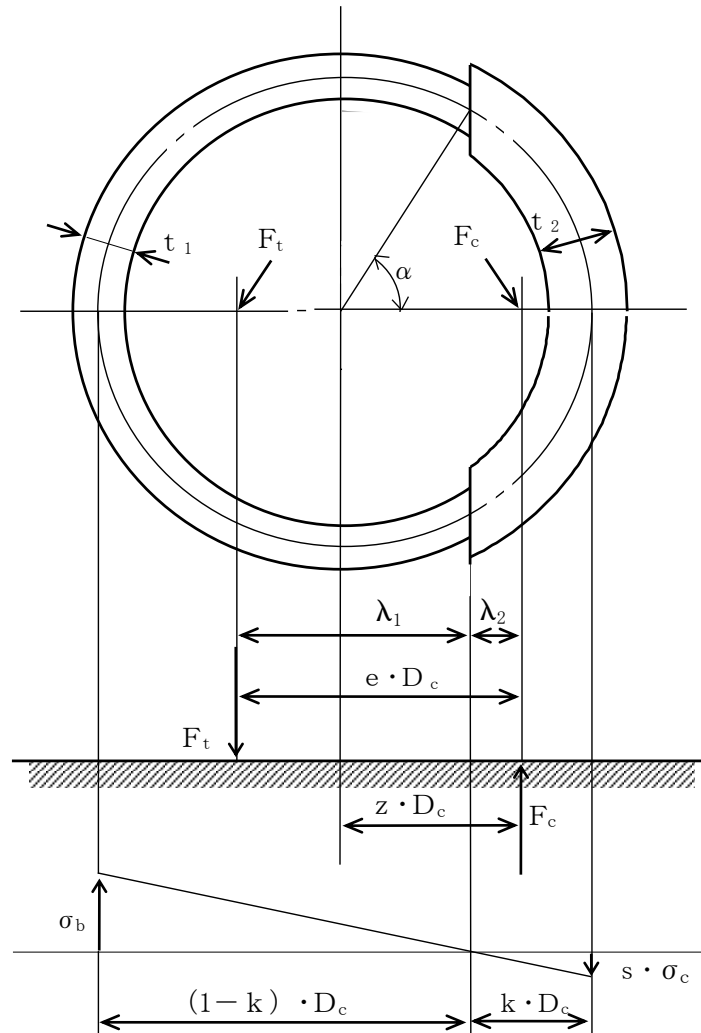


図 2-2 基礎の荷重説明図

a.  $\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  を仮定して基礎ボルトの応力計算における中立軸の荷重係数  $k$  を求める。

$$k = \frac{1}{1 + \frac{\sigma_b}{s \cdot \sigma_c}} \dots\dots\dots (2.2.2.1)$$



b. 基礎ボルトの応力計算における中立軸を定める角度  $\alpha$  を求める。

$$\alpha = \cos^{-1} (1 - 2 \cdot k) \quad \dots\dots\dots (2.2.2.2)$$

c. 各定数  $e$ ,  $z$ ,  $C_t$  及び  $C_c$  を求める。

$$e = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \frac{(\pi - \alpha) \cdot \cos^2 \alpha + \frac{1}{2} \cdot (\pi - \alpha) + \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha}{(\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha} + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right\} \dots\dots\dots (2.2.2.3)$$

$$z = \frac{1}{2} \cdot \left( \cos \alpha + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right) \dots\dots\dots (2.2.2.4)$$

$$C_t = \frac{2 \cdot \{ (\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha \}}{1 + \cos \alpha} \dots\dots\dots (2.2.2.5)$$

$$C_c = \frac{2 \cdot (\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha)}{1 - \cos \alpha} \dots\dots\dots (2.2.2.6)$$

d. 各定数を用いて  $F_t$  及び  $F_c$  を求める。

【絶対値和】

$$F_t = \frac{M_s - (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c}{e \cdot D_c} \dots\dots\dots (2.2.2.7)$$

$$F_c = F_t + (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.2.8)$$

【SRS法】

$$F_t = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} - \frac{z}{e} \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.2.9)$$

$$F_c = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot (z - e) \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} + \left( 1 - \frac{z}{e} \right) \cdot m_0 \cdot g \dots\dots\dots (2.2.2.10)$$

ここで,

$$M_s = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \lambda_g \dots\dots\dots (2.2.2.11)$$

基礎ボルトに引張力が作用しないのは、 $\alpha$  が  $\pi$  に等しくなったときであり、(2.2.2.3) 式及び (2.2.2.4) 式において  $\alpha$  を  $\pi$  に近づけた場合の値  $e = 0.75$  及び  $z = 0.25$  を (2.2.2.7) 式又は (2.2.2.9) 式に代入し、得られる  $F_t$  の値によって引張力の有無を次のように判定する。

$F_t \leq 0$  ならば引張力は作用しない。

$F_t > 0$  ならば引張力が作用しているので次の計算を行う。

e.  $\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  を求める。

$$\sigma_b = \frac{2 \cdot F_t}{t_1 \cdot D_c \cdot C_t} \dots\dots\dots (2.2.2.12)$$

$$\sigma_c = \frac{2 \cdot F_c}{(t_2 + s \cdot t_1) \cdot D_c \cdot C_c} \dots\dots\dots (2.2.2.13)$$

ここで,

$$t_1 = \frac{n \cdot A_b}{\pi \cdot D_c} \dots\dots\dots (2.2.2.14)$$

$$t_2 = \frac{1}{2} \cdot (D_{b_o} - D_{b_i}) - t_1 \dots\dots\dots (2.2.2.15)$$

$\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  が a 項にて仮定した値と十分に近似していることを確認する。この場合の  $\sigma_b$  及び  $\sigma_c$  を基礎ボルトと基礎に生じる応力とする。

(2) せん断応力

$$\tau_b = \frac{C_H \cdot m_0 \cdot g}{n \cdot A_b} \dots\dots\dots (2.2.2.16)$$

### 3. 評価方法

#### 3.1 応力の評価

##### 3.1.1 胴の応力評価

(1) 2.2.1項で求めた組合せ応力が胴の最高使用温度における許容応力  $S_a$  以下であること。

応力の種類	設計応力 $S_a$
一次一般膜応力	設計降伏点 $S_y$ と設計引張強さ $S_u$ の0.6倍のいずれか小さい方の値。ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金にあっては許容引張応力 $S$ の1.2倍の方が大きい場合は、この大きい方の値とする。

一次応力の評価は算出応力が一次一般膜応力と同じ値であるので省略する。

(2) 圧縮膜応力（圧縮応力と曲げによる圧縮側応力の組合せ）は次式を満足すること。（座屈の評価）

$$\frac{\eta \cdot (\sigma_{x2} + \sigma_{x3})}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{x4}}{f_b} \leq 1 \quad \dots\dots\dots (3.1.1.1)$$

ここで、 $f_c$  は次による。

$$\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \quad \dots\dots\dots (3.1.1.2)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{6800 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_1 \left( \frac{8000 \cdot g}{F} \right) \right\} \cdot \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right]$$

$$\dots\dots\dots (3.1.1.3)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_c = \phi_1\left(\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t}\right) \dots\dots\dots (3.1.1.4)$$

ただし、 $\phi_1(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_1(x) = 0.6 \cdot \frac{E}{x} \cdot \left[ 1 - 0.901 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right]$$

\dots\dots\dots (3.1.1.5)

また、 $f_b$ は次による。

$$\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \dots\dots\dots (3.1.1.6)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{9600 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \cdot \left[ 1 - \frac{1}{8400 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_2\left(\frac{9600 \cdot g}{F}\right) \right\} \cdot \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right]$$

\dots\dots\dots (3.1.1.7)

$$\frac{9600 \cdot g}{F} \leq \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_b = \phi_2\left(\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t}\right) \dots\dots\dots (3.1.1.8)$$

ただし、 $\phi_2(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_2(x) = 0.6 \cdot \frac{E}{x} \cdot \left[ 1 - 0.731 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right]$$

\dots\dots\dots (3.1.1.9)

$\eta$ は安全率で次による。

$$\frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 \dots\dots\dots (3.1.1.10)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 + \frac{0.5 \cdot F}{6800 \cdot g} \cdot \left( \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \dots\dots\dots (3.1.1.11)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_i + 2 \cdot t}{2 \cdot t} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1.5 \dots\dots\dots (3.1.1.12)$$

3.1.2 基礎ボルトの応力評価

2.2.2 項で求めた基礎ボルトの引張応力  $\sigma_b$  は次式より求めた許容引張応力  $f_{ts}$  以下であること。

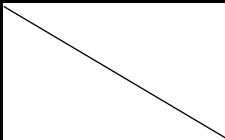
せん断応力  $\tau_b$  はせん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力  $f_{sb}$  以下であること。

$$f_{ts} = 1.4 \cdot f_{to} - 1.6 \cdot \tau_b \quad \dots\dots\dots (3.1.2.1)$$

かつ,

$$f_{ts} \leq f_{to} \quad \dots\dots\dots (3.1.2.2)$$

ただし,  $f_{to}$  及び  $f_{sb}$  は下表による。

	許容引張応力 $f_{to}$	許容せん断応力 $f_{sb}$
計 算 式	$\frac{F}{2} \cdot 1.5$	$\frac{F}{1.5 \cdot \sqrt{3}} \cdot 1.5$

## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器に係る確認事項

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の構造強度・耐震性及び機能・性能等に関する確認事項を表-1～15 に示す。

表-1 確認事項（ろ過処理水受タンク、淡水化处理水受タンク）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。
機能	警報確認	液位「高高」側 <sup>※1</sup> の信号により警報が発生することを確認する。	液位「高高」側 <sup>※1</sup> の信号により警報が発生すること。

※1 タンクにより信号名称は異なる。

表-2 確認事項（ろ過器，建屋内 R0）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。
性能	運転性能確認	定格容量を通水する。	定格容量を通水できること。 処理前後の差圧に異常がないこと。 建屋内 R0 処理後の導電率が 40mS/m 以下であること。

表-3 確認事項 (SPT 廃液移送ポンプ, SPT 廃液昇圧ポンプ, ろ過処理水移送ポンプ, ろ過処理水昇圧ポンプ, CST 移送ポンプ)

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	漏えい確認※ <sup>1</sup>	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	耐圧部から著しい漏えいがないこと。
性能	運転性能確認	ポンプの運転確認を行う。	実施計画に記載した容量を満足すること。 また, 異音, 発煙, 異常振動等がないこと。 ※ <sup>1</sup>

※<sup>1</sup> SPT 廃液移送ポンプについては, SPT 内部の水中に設置されており, 漏えい確認及び運転性能確認における異音, 発煙, 異常振動等の確認が困難であり, 対象外とする。

表-4 確認事項 (建屋内 RO 循環設備主配管 (鋼管))

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径, 厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後, 確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後, 耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え, かつ構造物の変形等がないこと。 また, 耐圧部から漏えいがないこと。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし, 必要に応じて記録を確認する。



表-5 確認事項（建屋内 R0 循環設備主配管（耐圧ホース，ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径，厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	現場状況を考慮し製造者指定方法・圧力による漏えい有無を確認する。※1	耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

表-6 確認事項（漏えい検知器，警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
機能	漏えい警報確認	漏えい信号により，警報が作動することを確認する。	警報が作動すること。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

表-7 確認事項（4号機タービン建屋内堰等）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
漏えい防止	寸法確認	主要寸法の記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
漏えい防止	据付確認	堰その他の設備の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。

表-8 確認事項（SPT 受入水タンク接続管台）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径, 厚さについて記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後, 確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後, 耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え, かつ構造物の変形等がないこと。 また, 耐圧部から漏えいがないこと。

表-9 確認事項（容器、管の溶接検査）（1 / 2）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査	材料検査	①ろ過器 ②SPT 廃液移送ポンプから淡水化処理水受タンクまでの外径 61mm 以上の鋼管 ③建屋内 RO 出口からろ過処理水受タンク入口までの外径 61mm 以上の鋼管 ④SPT 受入水タンク接続管台	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することであること。
	開先検査	①ろ過器 ②SPT 廃液移送ポンプから淡水化処理水受タンクまでの外径 61mm 以上の鋼管 ③建屋内 RO 出口からろ過処理水受タンク入口までの外径 61mm 以上の鋼管 ④SPT 受入水タンク接続管台	開先形状等が溶接規格等に適合することを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合することであること。
	溶接作業検査	①ろ過器 ②SPT 廃液移送ポンプから淡水化処理水受タンクまでの外径 61mm 以上の鋼管 ③建屋内 RO 出口からろ過処理水受タンク入口までの外径 61mm 以上の鋼管 ④SPT 受入水タンク接続管台	あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。

表-9 確認事項（容器、管の溶接検査）（2/2）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査	非破壊試験	①ろ過器 ②SPT 廃液移送ポンプから淡水化处理水受タンクまでの外径 61mm 以上の鋼管 ③建屋内 RO 出口からろ過処理水受タンク入口までの外径 61mm 以上の鋼管 ④SPT 受入水タンク接続管台	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	機械試験	①ろ過器	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い、当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであることを確認する。	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い、当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであること。
	耐圧・漏えい検査 外観検査	①ろ過器 ②SPT 廃液移送ポンプから淡水化处理水受タンクまでの外径 61mm 以上の鋼管 ③建屋内 RO 出口からろ過処理水受タンク入口までの外径 61mm 以上の鋼管 ④SPT 受入水タンク接続管台	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていることを確認する。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無及び外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

表-10 確認事項（建屋内 RO 濃縮水受タンク，増設 RO 濃縮水受タンク）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	材料確認 ※1	使用材料を記録により確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認 ※1	主要寸法（板厚，内径または外径，高さ）を記録により確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認	タンク本体の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	組立状態及び据付状態を確認する。	組立状態及び据付状態に異常がないこと。
		タンク基礎の不陸について確認する。	不陸がないこと。
	耐圧・漏えい確認※1	タンク運用水位以上に水を張り，耐圧部からの漏えいが無い事を確認する。	各部からの漏えいおよび水位の低下がないこと。
	地盤支持力確認	支持力試験にてタンク基礎の地盤支持力を確認する。※2	必要な支持力を有していること。
機能・性能	監視確認	水位計について，免震重要棟集中監視室にタンク水位が表示できることを確認する。	免震重要棟集中監視室にタンク水位が表示できること。
	寸法確認	堰内容量を確認する。	必要容量に相当する堰内容量があること。
	外観確認	基礎外周堰の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。

※1：増設 RO 濃縮水受タンクは用途変更して使用するため過去の記録を確認とする

※2：増設 RO 濃縮水受タンクを対象とする

表-11 確認事項（建屋内 RO 濃縮水移送ポンプ，増設 RO 濃縮水供給ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	ポンプの外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	組立状態及び据付状態を確認する。	組立状態及び据付状態に異常がないこと。
		ポンプ基礎の不陸について確認する。	異常な不陸がないこと。
	漏えい確認	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	耐圧部から著しい漏えいがないこと。
性能	運転性能確認	ポンプの運転確認を行う。	実施計画に記載した容量を満足すること。 また，異音，異臭，異常振動等がないこと。

表-12 確認事項（建屋内 R0 濃縮水移送ポンプから増設 R0 濃縮水受タンク間の既設鋼管部分）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認 ※1	使用材料を記録により確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認 ※1	外径，厚さについて記録により確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	配管の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管が図面のとおり据付ていることを立会いまたは記録により確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1	最高使用圧力の 1.5 倍で一定時間保持後，同圧力に耐えていること，また，耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。	最高使用圧力の 1.5 倍に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。また，耐圧部から漏えいがないこと。
機能・性能	通水確認	通水ができることを立会いまたは記録により確認する。	通水ができること。

※1：当該鋼管は用途変更して使用するため過去の記録を確認とする

表-13 確認事項（追設する関連機器として設置するポリエチレン管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した材料について、製品検査成績書により確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法（外径相当）について、製品検査成績書により確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認	各部の外観について、立会いまたは記録により確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器が図面のとおり据付ていることを立会いまたは記録により確認する。	図面のとおり施工・据付ていること。
	耐圧・漏えい確認	最高使用圧力以上で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。	最高使用圧力に耐え、かつ構造物の変形等がないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。
機能・性能	通水確認	通水ができることを立会いまたは記録により確認する。	通水ができること。



表-14 確認事項（建屋内 RO 濃縮水移送ポンプから増設 RO 濃縮水受タンク間の  
既設鋼管部分の溶接検査）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査 ※1	材料検査	建屋内 RO 出口から 8.5m 盤 SPT 受入水移送 ポンプ出口ライン合流	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査		開先形状等が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査		あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	非破壊試験		溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	耐圧・漏えい検査		最高使用圧力の 1.5 倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。	最高使用圧力の 1.5 倍で一定時間保持後、同圧力に耐えている事。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいがないこと。
	外観検査		耐圧・漏えい検査後外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないことを確認する。	外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1：当該鋼管は用途変更して使用するため過去の記録を確認とする

表-15 確認事項（増設 R0 濃縮水受タンクの溶接検査）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査 ※1	材料検査	①増設 R0 濃縮水受タンク	使用する材料が、溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものとする。	使用する材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査		開先形状等が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査		あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	非破壊試験		溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	耐圧・漏えい検査		検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていることを確認する。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいがないこと。
	外観検査		耐圧・漏えい検査後外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないことを確認する。	外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1：当該機器は用途変更して使用するため過去の記録を確認とする

以上

## 建屋内 RO 循環設備の関連設備における耐震性

汚染水処理設備等のうち建屋内 RO 循環設備の関連設備について、耐震性の評価を行う。なお、汚染水処理設備等のうち建屋内 RO 循環設備の関連設備とは、サプレッションプール水サージタンク (B) および建屋内 RO で生成される濃縮塩水の移送ルート上の設備のうち SPT 受入水タンクから RO 濃縮水供給ポンプまでの設備とし、具体的には以下に示す。

追設する関連機器の耐震性については「添付 13 別紙 (3) 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の構造強度及び耐震性」に記載する。

### 建屋内 RO 循環設備の関連設備

- ・ サプレッションプール水サージタンク (B) （以下、SPT(B)）
- ・ SPT 受入水移送ポンプ
- ・ 廃液 RO 供給ポンプ
- ・ RO 濃縮水供給ポンプ
- ・ SPT 受入水タンク
- ・ 廃液 RO 供給タンク (35m<sup>3</sup>, 40m<sup>3</sup>, 42m<sup>3</sup>, 110m<sup>3</sup>)
- ・ RO 濃縮水受タンク
- ・ 淡水化装置 (逆浸透膜装置) (RO-3)
- ・ 主要配管 (SPT 受入水タンクから RO 濃縮水供給ポンプまで)

### 1. 耐震性評価の基本方針

建屋内 RO 循環設備の関連設備における耐震性評価の基本方針は、添付資料-3「汚染水処理設備等に関する構造強度及び耐震性等の評価結果」のうち 1.1.2. 「耐震性評価の基本方針」に示すとおり。

### 2. 耐震性評価

建屋内 RO 循環設備の関連設備における耐震性評価の確認結果を以下に示す。なお、SPT(B)は、工事計画認可申請書 (57 資庁第 2974 号 昭和 57 年 4 月 20 日認可) において確認を実施している。

#### 2.1 転倒評価

建屋内 RO 循環設備の関連設備のうち以下の設備について、添付資料-3「汚染水処理設備等に関する構造強度及び耐震性等の評価結果」に示すとおり転倒評価を行い、転倒しないことを確認した。

- ・ SPT 受入水移送ポンプ

- ・ 廃液 RO 供給ポンプ
- ・ RO 濃縮水供給ポンプ
- ・ SPT 受入水タンク
- ・ 廃液 RO 供給タンク (35m<sup>3</sup>, 40m<sup>3</sup>, 42m<sup>3</sup>, 110m<sup>3</sup>)
- ・ RO 濃縮水受タンク
- ・ 淡水化装置 (逆浸透膜装置) (RO-3)

## 2.2 角形タンクの応力評価

建屋内 RO 循環設備の関連設備のうち以下の角型タンクについては、汚染水処理設備等において設置している縦置円筒型タンクに比べてタンク容積に対する高さの比が小さく横長の形状であるため、地震によって角型タンクに生じる応力が少なく変形が生じにくい構造であることを確認した。

- ・ SPT 受入水タンク
- ・ 廃液 RO 供給タンク (35m<sup>3</sup>, 40m<sup>3</sup>, 42m<sup>3</sup>, 110m<sup>3</sup>)
- ・ RO 濃縮水受タンク

## 2.3 各設備の設置場所における地盤支持力

各設備の設置場所における地盤については、表-1 に示すとおり地盤支持力の評価を行い、地震時において、各設備の鉛直荷重に対して十分な支持力を有していることを確認した。

地盤支持力の許容値は、「社団法人 日本道路協会 道路橋仕方書・同解説IV下部構造編」に準拠し、下記の算定式に基づく極限支持力から安全率 2 を除して算定する。

(極限支持力の算定式)

$$Q_u = A_u \left( \alpha k c N_c S_c + k q N_q S_q + \frac{1}{2} \gamma_1 \beta B_e N_r S_r \right)$$

- $Q_u$  : 極限支持力
- $A_e$  : 有効載荷面積
- $\alpha, \beta$  : 基礎の形状係数
- $k$  : 根入れ効果に対する割増し係数
- $c$  : 地盤の粘着力
- $N_c, N_q, N_r$  : 荷重の傾斜を考慮した支持力係数
- $S_c, S_q, S_r$  : 支持力係数の寸法効果に関する補正係数
- $q$  : 上載荷重 ( $q = \gamma_2 D_f$ )
- $\gamma_1, \gamma_2$  : 支持地盤及び根入れ地盤の単位重量
- $D_f$  : 基礎の有効根入れ深さ
- $B_e$  : 荷重の偏心を考慮した基礎の有効載荷幅 ( $B_e = B - 2e_B$ )
- $B$  : 基礎幅
- $e_B$  : 荷重の偏心量

(各設備の鉛直荷重)

$$W = m \times g$$

- $W$  : 鉛直荷重  
 $m$  : 機器等の質量  
 $g$  : 重力加速度

表-1 各設備の設置場所における地盤支持力の評価結果

評価対象機器※ <sup>1</sup>	水平震度	鉛直荷重 [kN]	許容支持力 [kN]
淡水化装置（逆浸透膜装置）（RO-3）	0.3	648	1,885
SPT 受入水タンク※ <sup>2</sup>	0.3	1,305	1,548
廃液 RO 供給タンク（40m <sup>3</sup> ）※ <sup>3</sup>	0.3	596	2,045

- ※1 同一エリアにて最も裕度の低い機器を記載  
 ※2 同一エリアに設置している SPT 受入移送水ポンプは本評価結果に内包される  
 ※3 同一エリアに設置している廃液 RO 供給タンク（35m<sup>3</sup>，42m<sup>3</sup>，110m<sup>3</sup>），廃液 RO 供給ポンプ，RO 濃縮水受タンク，RO 濃縮水供給ポンプは，本評価結果に内包される

#### 2.4 主要配管の耐震性評価

建屋内 RO 循環設備の関連設備の主要配管のうち，ポリエチレン管については，可撓性により耐震性を確保している。

また，淡水化装置（逆浸透膜装置）内の配管・弁モジュールについては，添付資料-3「汚染水処理設備等に関する構造強度及び耐震性等の評価結果」に示すとおり転倒評価を行い，転倒しないことを確認した。

以上

## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の具体的な安全確保策

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の漏えい発生防止対策，放射線遮へい対策，環境条件対策等について具体的な安全確保策を以下の通り定め，実施する。

### 1. 放射性物質の漏えい防止等に対する考慮

#### (1) 漏えい発生防止

- a. 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の移送配管は，耐食性を有するポリエチレン管及びライニングを施した鋼管等を使用する。ただし，建屋内 RO の逆浸透膜を連結する配管は，耐圧ホースとする。耐圧ホースの接続部は，サポート等により配管を固定することで，取合部が外れることがないようにする。
- b. タンク内に設置した水中ポンプとの取合配管は可撓性を有する耐圧ホースとする。
- c. 建屋内 RO 循環設備で屋外敷設箇所のうち重機による作業や車両の通行がある箇所について，道路跨ぎ部の配管は地中に設置したトラフ内に敷設することで，車両の通過時に損傷しないようにする。地上部の配管はトラフ内に敷設することで，外部と接触しないようにする。

#### (2) 漏えい検知・漏えい拡大防止

- a. 漏えい検知のため，機器（建屋内 RO/タンク/ポンプ/弁ユニット等）を囲う堰内及びトラフ内に漏えい検知器を設置する。
- b. 漏えい拡大防止のため，SPT 廃液昇圧ポンプ，ろ過器，ろ過処理水受タンク，ろ過処理水移送ポンプ，ろ過処理水昇圧ポンプ，建屋内 RO，淡水化处理水受タンク，CST 移送ポンプ，建屋内 RO 濃縮水受タンク，建屋内 RO 濃縮水移送ポンプ，増設 RO 濃縮水受タンク，増設 RO 濃縮水供給ポンプ及び配管等の付帯設備を囲うように防水塗装を施した堰を設置する。
- c. 漏えい検知による警報を免震重要棟に発報・表示し，運転員が速やかに必要な措置をとれるようにする。
- d. 堰は，機器等に内包する処理水を受けられる容量を確保していることから，漏えいが発生した場合でも堰内に収まり，堰外へ漏えいすることはない（表-1，3）。  
屋外に設置する増設 RO 濃縮水受タンクの基礎および堰についての説明は e 項に記載する。

表-1 建屋内RO循環設備の漏えい拡大防止 堰仕様 (設計値)

対象設備	縦幅 (m)	横幅 (m)	高さ (m)	容積 (m <sup>3</sup> )	保有水量 (m <sup>3</sup> )
SPT廃液昇圧ポンプ ろ過器 ろ過処理水受タンク ろ過処理水移送ポンプ ろ過処理水昇圧ポンプ 建屋内RO 淡水化処理水受タンク CST移送ポンプ及び配管等 の付帯設備	約 3.8～ 約 6.6 m	約 48 m	約 0.4 m	約 95 m <sup>3</sup>	約 85 m <sup>3</sup>

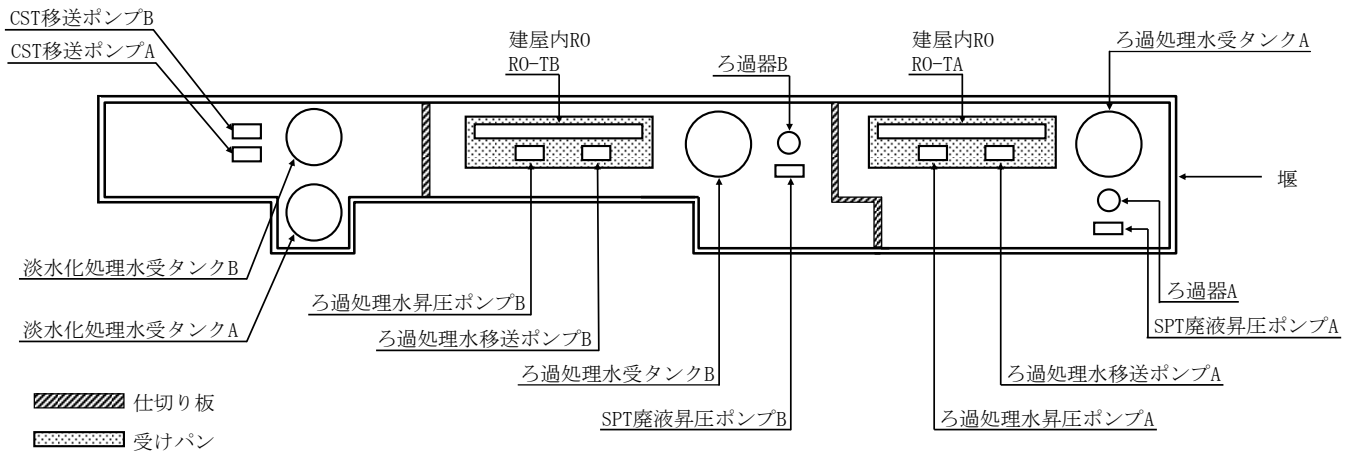


図-1 建屋内RO循環設備の漏えい拡大防止 堰配置図

表-2 建屋内 R0 循環設備の漏えい拡大防止評価

対象設備	保有水量 ( $m^3$ )	堰寸法 <sup>※1</sup> (m)		堰面積 ( $m^2$ )	必要な堰の高さ (m)	漏えい拡大防止 堰の高さ (m)	評価
		a	b				
S P T 廃液昇圧ポンプ ろ過器 ろ過処理水受タンク ろ過処理水移送ポンプ ろ過処理水昇圧ポンプ 建屋内 R0 淡水化処理水受タンク C S T 移送ポンプ及び配管等 の付帯設備	約 85	①	約 3.8	約 240	0.36 以上	約 0.40	漏えい拡大防止堰の高さは、保有水量を貯留するために必要な堰の高さを満足しており、漏えいを防止できる。
		②	約 13.9				
		③	約 2.6				
		④	約 12.4				
		⑤	約 17.7				
		⑥	約 3.8				
		⑦	約 4.2				
		⑧	約 2.6				
		⑨	約 5.7				
		⑩	約 16.3				
		⑪	約 2.8				
		⑫	約 4.0				

注記 ※1：堰内のり寸法<sup>⑩</sup>

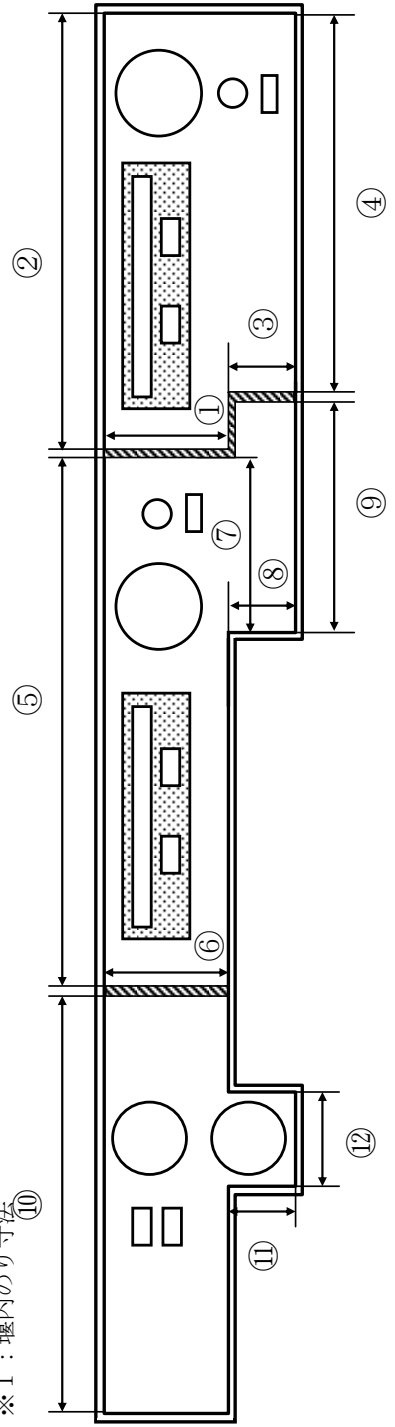




表-3 建屋内 RO 濃縮水受タンク堰高さ及び堰内容量

対象設備	想定漏えい量		基礎外周堰 の堰内容量 (m <sup>3</sup> )	(計画値)	
	運用水量 (m <sup>3</sup> )	使用不可水量 (m <sup>3</sup> )		基礎外周堰 の堰内面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰 の高さ (m)
建屋内 RO 濃縮水 受タンク	①	②	③ <sup>※1</sup>	④	⑤ <sup>※2</sup>
	30	0	30.1	68.3	0.44 以上

※1 ③ = ④ × ⑤

※2 ⑤ = (①+②) / ④

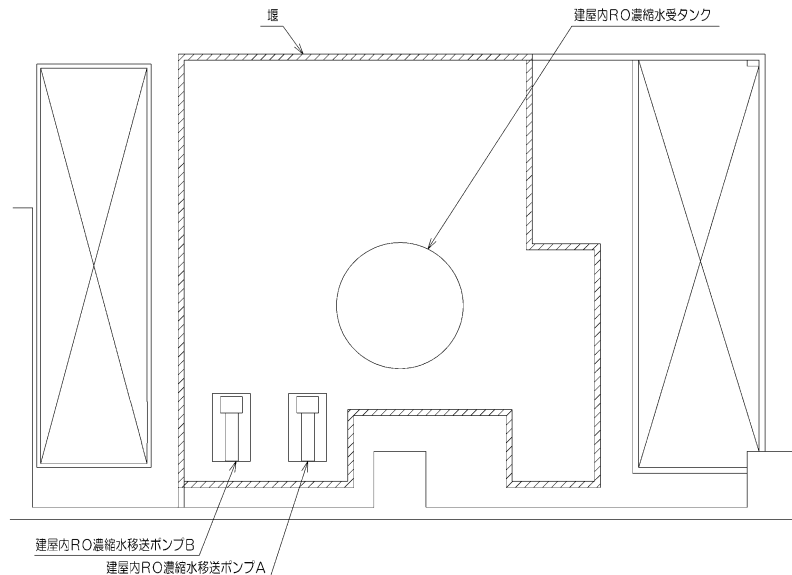


図-2 建屋内 RO 濃縮水受タンクの漏えい拡大防止 堰配置図

e. 増設 RO 濃縮水受タンクの基礎及び堰に関する説明書

(a) タンク基礎の支持力

i. 評価方法

タンクの鉛直荷重と極限支持力を比較して評価を行う。支持力の算定式は「社団法人日本道路協会（2002）：道路橋示方書・同解説IV下部構造編」に基づき次式を用いる。計算した結果、①タンクの鉛直荷重<②タンク基礎底面地盤の極限支持力であり、安全性を有していることを確認する。

①タンクの鉛直荷重： $W = m \times g$

②タンク基礎底面地盤の極限支持力： $Q_u = A_e \left( \alpha k c N_c S_c + k q N_q S_q + \frac{1}{2} \gamma_1 \beta B_e N_r S_r \right)$

$m$  : 機器質量

$g$  : 重力加速度

$A_e$  : 有効載荷面積

$\alpha, \beta$  : 基礎の形状係数

$k$  : 根入れ効果に対する割増し係数

$c$  : 地盤の粘着力

$N_c, N_q, N_r$  : 荷重の傾斜を考慮した支持力係数

$S_c, S_q, S_r$  : 支持力係数の寸法効果に関する補正係数

$q$  : 上載荷重 ( $q = \gamma_2 D_f$ )

$\gamma_1, \gamma_2$  : 支持地盤及び根入れ地盤の単位重量 ( $\gamma_1, \gamma_2 = 15.9 \text{ kN/m}^3$ )

$D_f$  : 基礎の有効根入れ深さ

$B_e$  : 荷重の偏心を考慮した基礎の有効載荷幅 ( $B_e = B - 2e_B$ )

$B$  : 基礎幅

$e_B$  : 荷重の偏心量

## ii. 管理

地盤改良後、簡易支持力測定器（キャスポル）※により地盤の強度を測定し、上記式により必要な極限支持力を有していることを確認する。

※ランマー（重鎮）を一定の高さから地盤に自由落下させたときに生ずる衝撃加速度の最大値と地盤強度特性値と相関させる衝撃加速度法を基本原理とした簡易な測定器。

## (b) タンク基礎の不陸

### i. 評価方法

タンクの設置高さが、設計高さに対して許容値以内※であることを確認する。

※ 設計高さ±30mm（社内基準値）

### ii. 管理

タンク基礎高さ（レベル）を測量し、当該高さが設計高さに対して±30mm以内であることを確認する。

## (c) 増設 R0 濃縮水受タンクの堰内容量

増設 R0 濃縮水受タンクから漏えいが生じた際に、漏えい水の拡大を抑制するための増設 R0 濃縮水受タンクの堰内容量は、機器等に内包する処理水を受けられる容量に、大雨時の作業等を考慮した余裕高さ（堰高さで 20 cm）分の容量との合計とする。増設 R0 濃縮水受タンクの堰高さ及び堰内容量を表-4 に示す。

表-4 増設 RO 濃縮水受タンク堰高さ及び堰内容量

対象設備	想定漏えい量		基礎外周堰 の堰内容量 (m <sup>3</sup> )	(計画値)	
	運用水量 (m <sup>3</sup> )	使用不可水量 (m <sup>3</sup> )		基礎外周堰 の堰内面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰 の高さ (m)
増設 RO 濃縮水 受タンク	①	②	③ <sup>*1</sup>	④	⑤ <sup>*2</sup>
	30	0	43.7	65.2	0.67 以上

※1 ③ = ④ × ⑤

※2 ⑤ = (①+②) / ④ + 0.2 (余裕分 20cm)

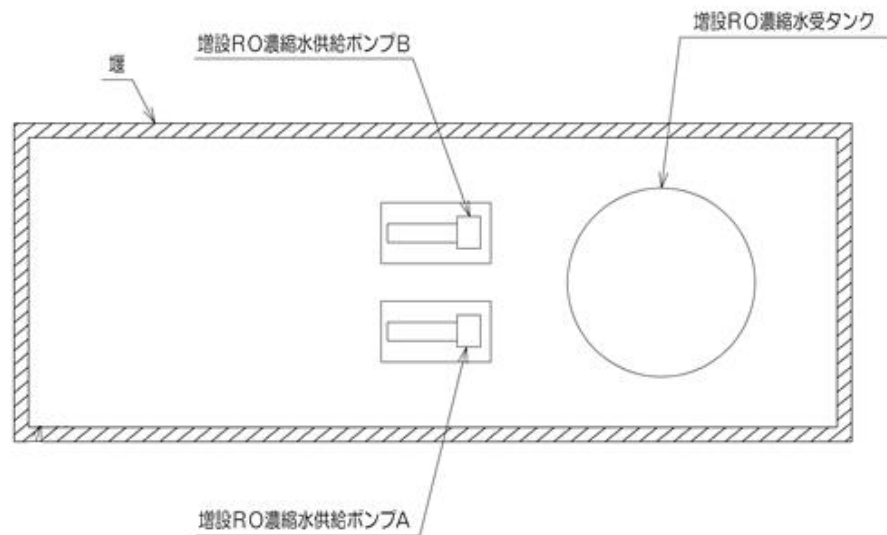


図-3 増設 RO 濃縮水受タンクの漏えい拡大防止 堰配置図

(3)放射線遮へいに対する考慮

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の機器表面線量は、1mSv/h 以下となるよう適切な遮へいを設ける。

(4)水素対策

当該設備は、放射性物質の吸着処理を行うものではなく、長期的な保管も想定される使用済みの RO 膜等はベント孔を設けた保管容器に収容するため、内部に可燃性ガスが滞留することはない。なお、通水時に発生する水素は、系統水とともに排出される。

## (5) 崩壊熱除去

当該設備は、放射性物質の吸着処理を行うものではないため、保管後のRO膜等の健全性に影響を与えるものではない。

## (6) 敷地境界における実効線量

a. 建屋内 RO 循環設備が敷地境界における実効線量に対して与える影響は、最も近い敷地境界評価地点 No.7 において約 0.0001mSv/年未満\*であり、線量評価上有意な値ではない。

※ろ過器及び RO 装置の表面線量を運用上の最大値 (1mSv/h) とし、本設備に最も近い評価済みの放射性廃棄物一時保管エリア N と表面線量率、表面積、距離、コンクリート遮蔽有無を比較することにより、敷地境界で最大となる評価点への影響を確認した結果。

b. 追設する関連機器のうち屋外に設置する増設 RO 濃縮水受タンクが敷地境界における実効線量に対して与える影響は、最も近い敷地境界評価地点 No. 14 において  $1.01 \times 10^{-4}$ mSv/年である。

## 2. 環境条件対策

### (1) 腐食

耐腐食性を有するステンレス、ライニング炭素鋼、ポリエチレン管等を使用する。

### (2) 熱による劣化

系統水の温度は、常温であるため熱による劣化の懸念はない (最高使用温度 40℃)。

### (3) 凍結

水を内包する配管等は、電気ヒータまたは保温材を設置する。

### (4) 生物汚染

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器は、滞留水を直接移送するのではなく、処理装置等を経由した SPT の貯留水を移送していることから、有意な微生物腐食等は発生しないと考えられる。

### (5) 耐放射線性

放射性影響が考えられるポリエチレン管について、内包する流体の照射線量率が十分低いため、放射線照射の影響は軽微と考えられる。

### (6) 紫外線

屋外敷設箇所のポリエチレン管は、トラフ内に設置または耐紫外線性を有する保温材等で覆う処置を講ずることで、紫外線による劣化を防止する。

(7)長期停止中の措置

当該設備を長期停止する場合は、必要に応じてフラッシングするとともに、内部の水抜きを実施し、腐食及び凍結を防止する。

以上

## 建屋内 RO 循環設備に係る放射性固体廃棄物発生量に関する評価

建屋内 RO 循環設備は、ろ過器、逆浸透膜装置を有していることから、放射性固体廃棄物が発生する。そのため、建屋内 RO 循環設備の運用に伴い発生する放射性固体廃棄物発生量について、以下の計算条件にて評価を行った。

### 1. 計算条件

- ・建屋内 RO は、定格処理量（800m<sup>3</sup>/日）とする。
- ・SPT 貯留水の放射能濃度は、平成 25 年 11 月時点の測定値とする。
- ・廃棄物保管容器の表面線量率は、10mSv/h 未満にする。

### 2. 評価結果

#### （１）ろ過フィルタ

ろ過フィルタは、フィルタ差圧又は放射性物質の蓄積に伴う放射線量に応じて取替を実施する。いずれも処理済水の水質によるものの、廃棄物保管容器の表面線量率及びろ過フィルタの交換に伴う作業員の被ばく線量を十分抑制できる交換頻度は、約 1 年程度であることから、年間の廃棄物発生量は約 2m<sup>3</sup> の保管容器 1 個程度となる。

#### （２）RO 膜

RO 膜は、RO 膜差圧、放射性物質の蓄積に伴う放射線量又は装置下流の導電率に応じて取替を実施する。いずれも処理済水の水質によるものの、廃棄物保管容器の表面線量率及び RO 膜の交換に伴う作業員の被ばく線量を十分抑制できる交換頻度は、約半年程度であることから、年間の廃棄物発生量は約 2m<sup>3</sup> の保管容器 4 個程度となる。

### 3. 保管計画

建屋内 RO 循環設備で発生する固体廃棄物については、容器に収納した上で発電所内の屋外一時保管エリアにて保管する。

以上

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の配置

建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の配置を図-1 に示す。

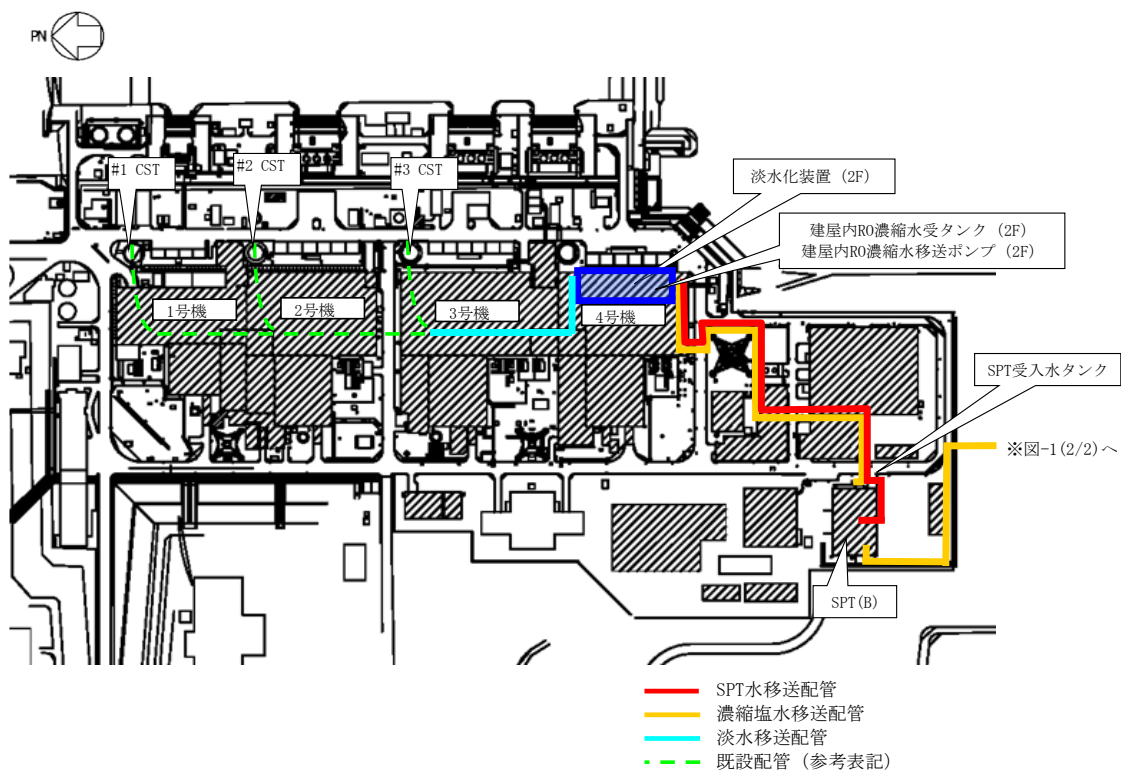


図-1 建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器の配置概略図 (1 / 2)

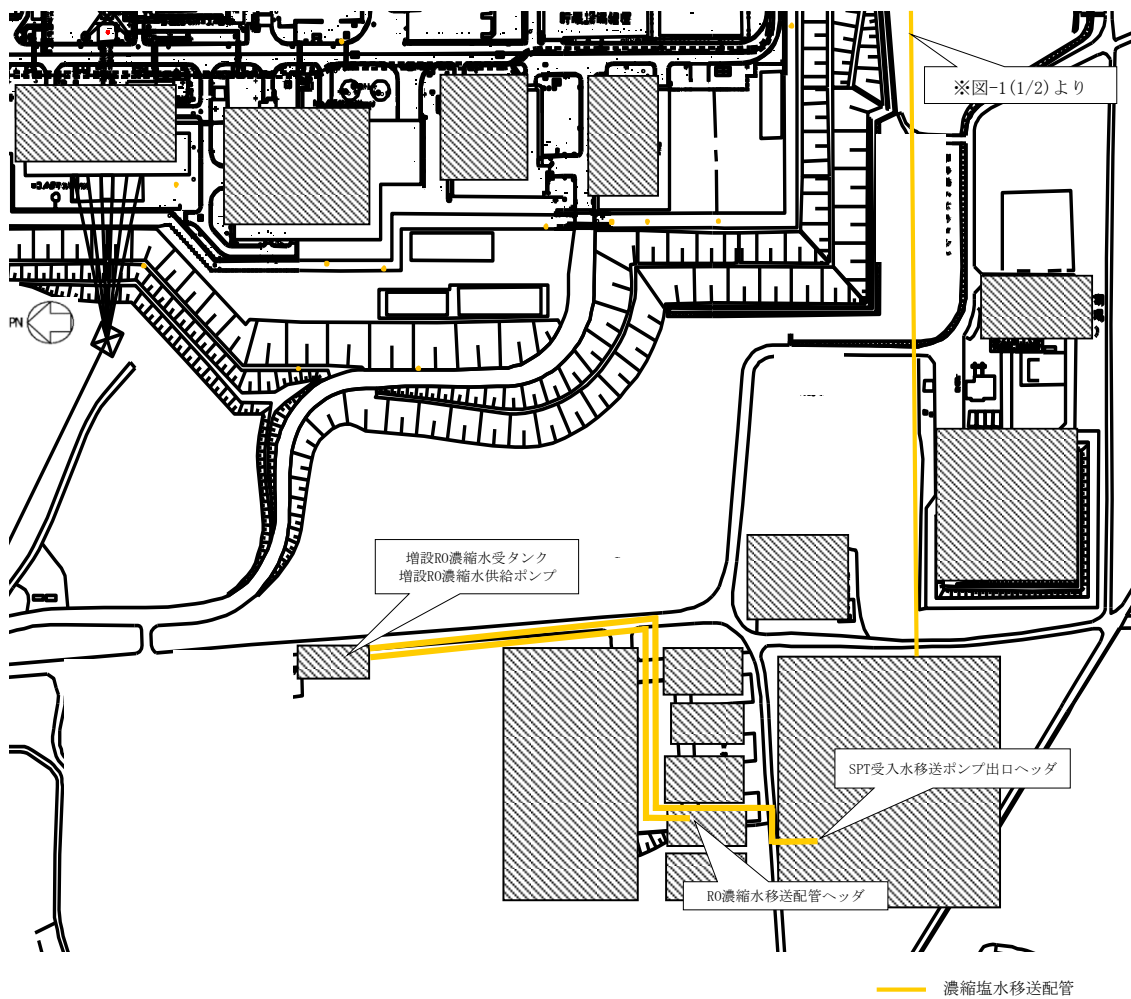


図-1 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器の配置概略図 (2 / 2)



## 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のスロッシング評価

建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のうちタンクについて、地震発生時のタンク内包水のスロッシング評価を実施した。速度ポテンシャル理論に基づきスロッシング波高の評価を行った結果、スロッシング時のタンク内の液位がタンク天板に到達しないことを確認した。

スロッシング評価の流れは下記の通り。

- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、スロッシング固有周期（水面の一次固有周期）を算出する。
- ・ タンク設置エリアの4号機タービン建屋2階における弾性設計用地震動：Sd-1, 2, 3 に対する速度応答スペクトルから、スロッシング固有周期に応じた速度応答値を求める。増設 RO 濃縮水受タンクは T.P. 33.5m 盤における基準地震動：Ss-1, 2, 3 に対する速度応答スペクトル（参考資料（５）に記載）から、スロッシング固有周期に応じた速度応答値を求める。
- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、速度応答値からスロッシング波高を算出する。
- ・ 運用上の上限液位に対してスロッシング波高を考慮してもタンク高さを超えないことを確認する。

$$T_s = 2\pi \sqrt{\frac{D}{3.68g} \coth\left(\frac{3.68H}{D}\right)}$$

$$\eta = 0.837 \left(\frac{D}{2g}\right) \left(\frac{2\pi}{T_s}\right) S_v$$

D : タンク内径 [m]

H : タンク液位 [m]

g : 重力加速度 [m/s<sup>2</sup>]

T<sub>s</sub> : スロッシング固有周期 [s]

S<sub>v</sub> : 速度応答値 [m/s]

η : スロッシング波高 [m]

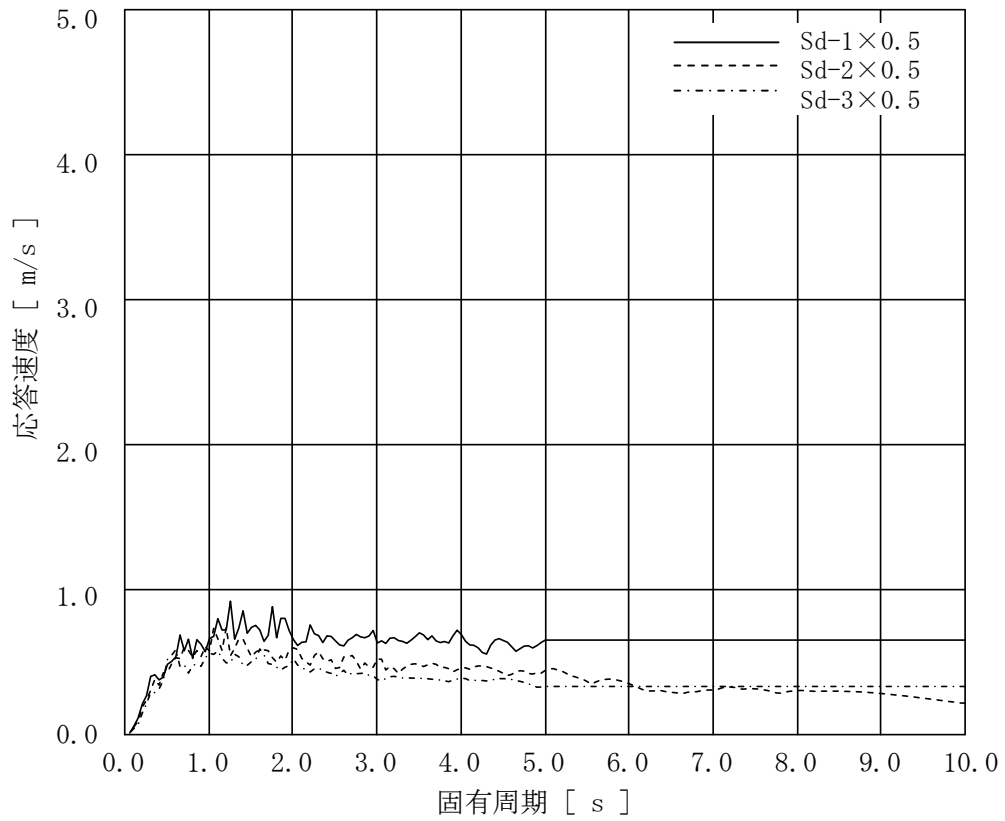


図-1 速度応答スペクトル (NS方向・減衰0.5%)

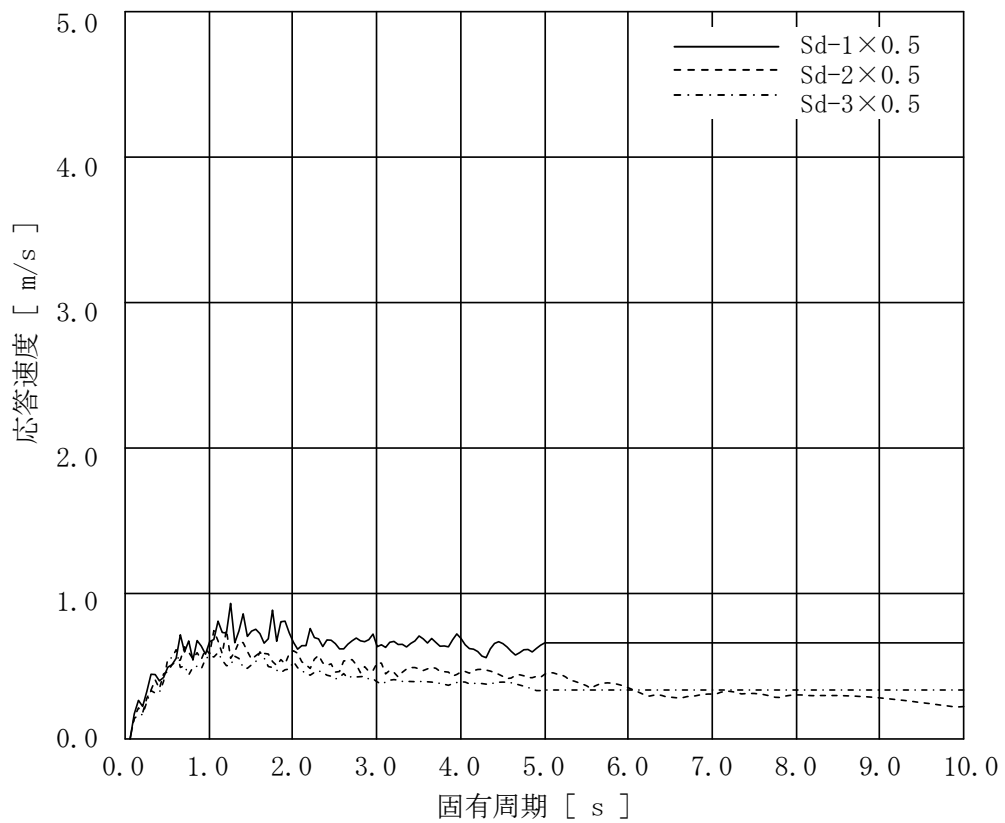


図-2 速度応答スペクトル (EW方向・減衰0.5%)

表-1 建屋内 RO 循環設備および追設する関連機器のうちタンクのスロッシング評価結果

機器名称		スロッシング 波高 [mm]	スロッシング時 液位 [mm]	タンク高さ [mm]
ろ過処理水受タンク	10m <sup>3</sup> 容量	354	3,045	3,500
淡水化処理水受タンク	10m <sup>3</sup> 容量	361	3,485	3,800
建屋内 RO 濃縮水受タンク	30m <sup>3</sup> 容量	386	5,216	5,250
増設 RO 濃縮水受タンク	30m <sup>3</sup> 容量	533	4,933	4,982

以上

## 建屋内 R0 循環設備の関連設備におけるスロッシング評価

建屋内 R0 循環設備の関連設備のうちタンクについて、地震発生時のタンク内包水のスロッシング評価を実施した。速度ポテンシャル理論に基づきスロッシング波高の評価を行った結果、スロッシング時のタンク内の液位がタンク天板に到達しないことを確認した。スロッシング評価の流れは下記の通り。

なお、追設する関連機器のスロッシング評価については「添付 13 参考資料（4）建屋内 R0 循環設備および追設する関連機器のスロッシング評価」に記載する。

- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、スロッシング固有周期（水面の一次固有周期）を算出する。
- ・ タンク設置エリアの T.P. 8.5m 盤、T.P. 33.5m 盤および S P T 建屋における基準地震動：Ss-1, 2, 3 に対する速度応答スペクトルから、スロッシング固有周期に応じた速度応答値を求める。
- ・ 速度ポテンシャル理論に基づき、速度応答値からスロッシング波高を算出する。
- ・ 運用上の上限液位に対してスロッシング波高を考慮してもタンク高さを超えないことを確認する。

（円型タンク）

$$T_s = 2\pi \sqrt{\frac{D}{3.68g} \coth\left(\frac{3.68H}{D}\right)}$$

$$\eta = 0.837 \left(\frac{D}{2g}\right) \left(\frac{2\pi}{T_s}\right) S_v$$

D : タンク内径 [m]

H : タンク液位 [m]

g : 重力加速度 [m/s<sup>2</sup>]

T<sub>s</sub> : スロッシング固有周期 [s]

S<sub>v</sub> : 速度応答値 [m/s]

η : スロッシング波高 [m]

(角型タンク)

$$T_s = 2\pi \sqrt{\frac{L}{3.14g} \coth\left(\frac{3.14H}{L}\right)}$$

$$\eta = 0.811 \left(\frac{L}{2g}\right) \left(\frac{2\pi}{T_s}\right) S_v$$

- L : タンク幅 [m]  
H : タンク液位 [m]  
g : 重力加速度 [m/s<sup>2</sup>]  
T<sub>s</sub> : スロッシング固有周期 [s]  
S<sub>v</sub> : 速度応答値 [m/s]  
η : スロッシング波高 [m]

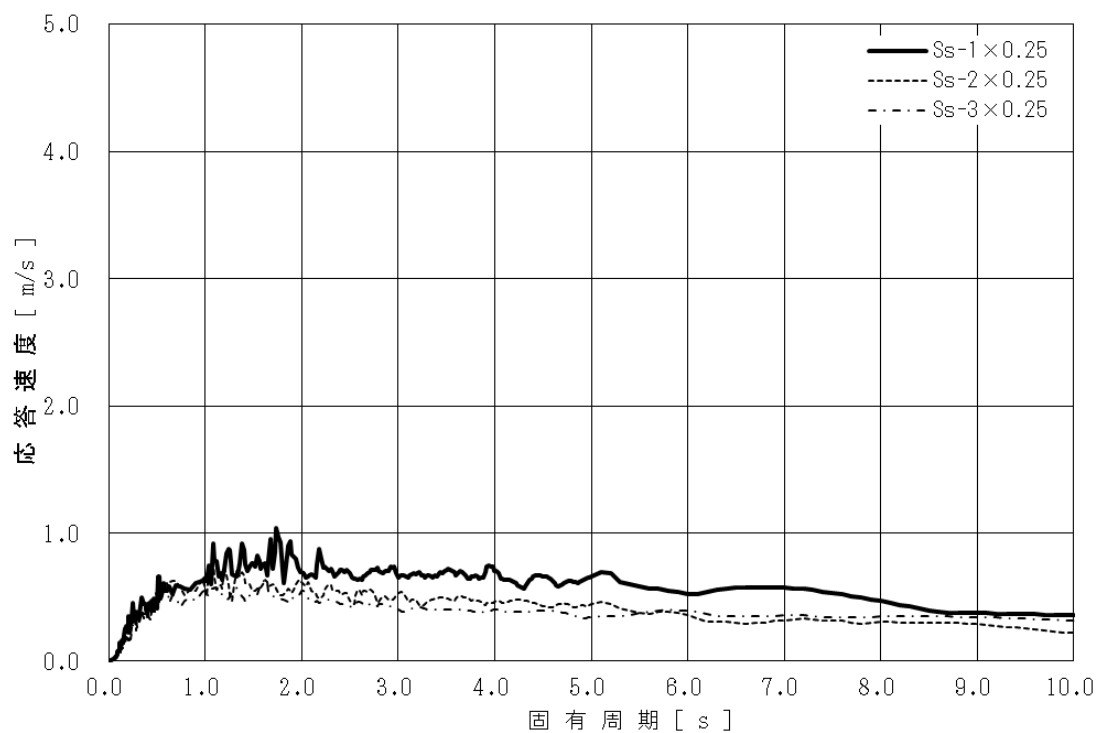


図-1 T.P. 8.5m 盤 速度応答スペクトル (水平方向・減衰 0.5%)

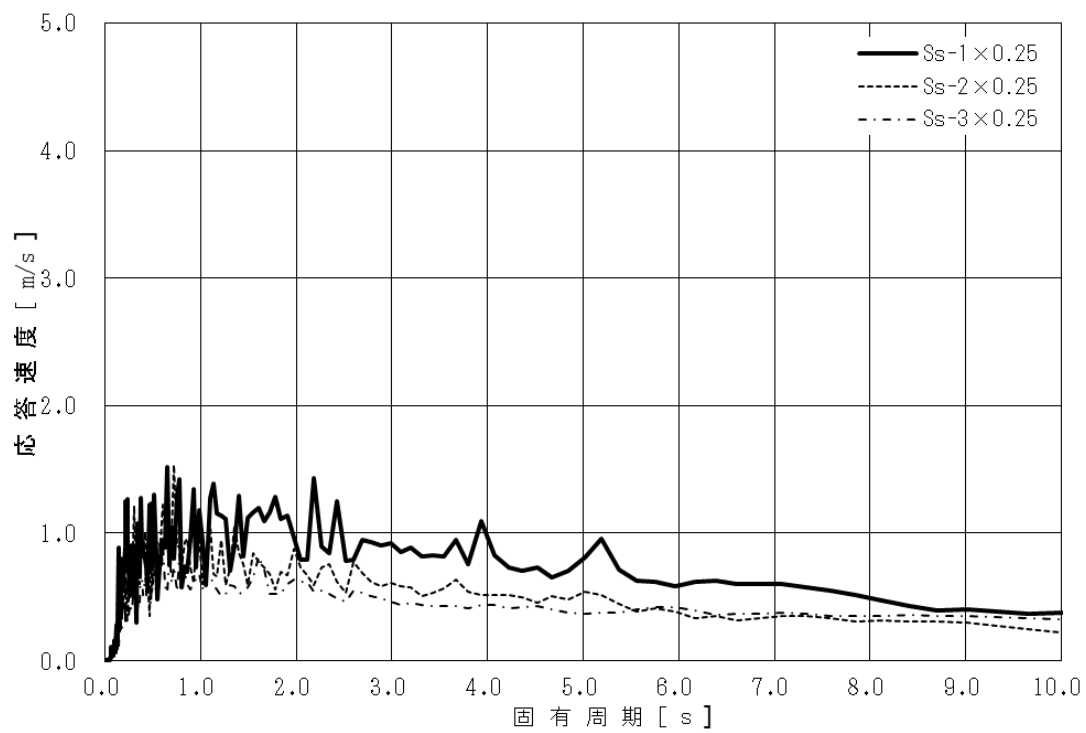


図-2 T.P. 33.5m盤 速度応答スペクトル (水平方向・減衰なし)

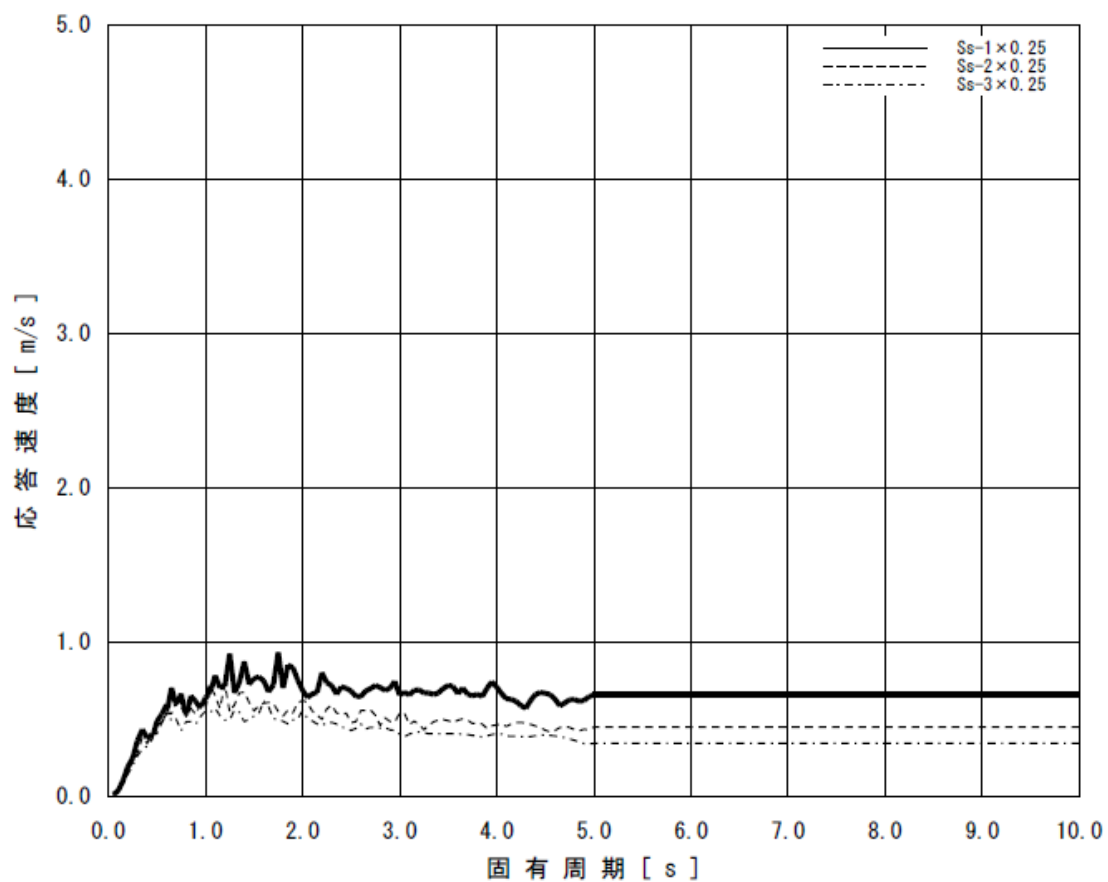


図-3 SPT建屋 速度応答スペクトル (NS方向・減衰0.5%)

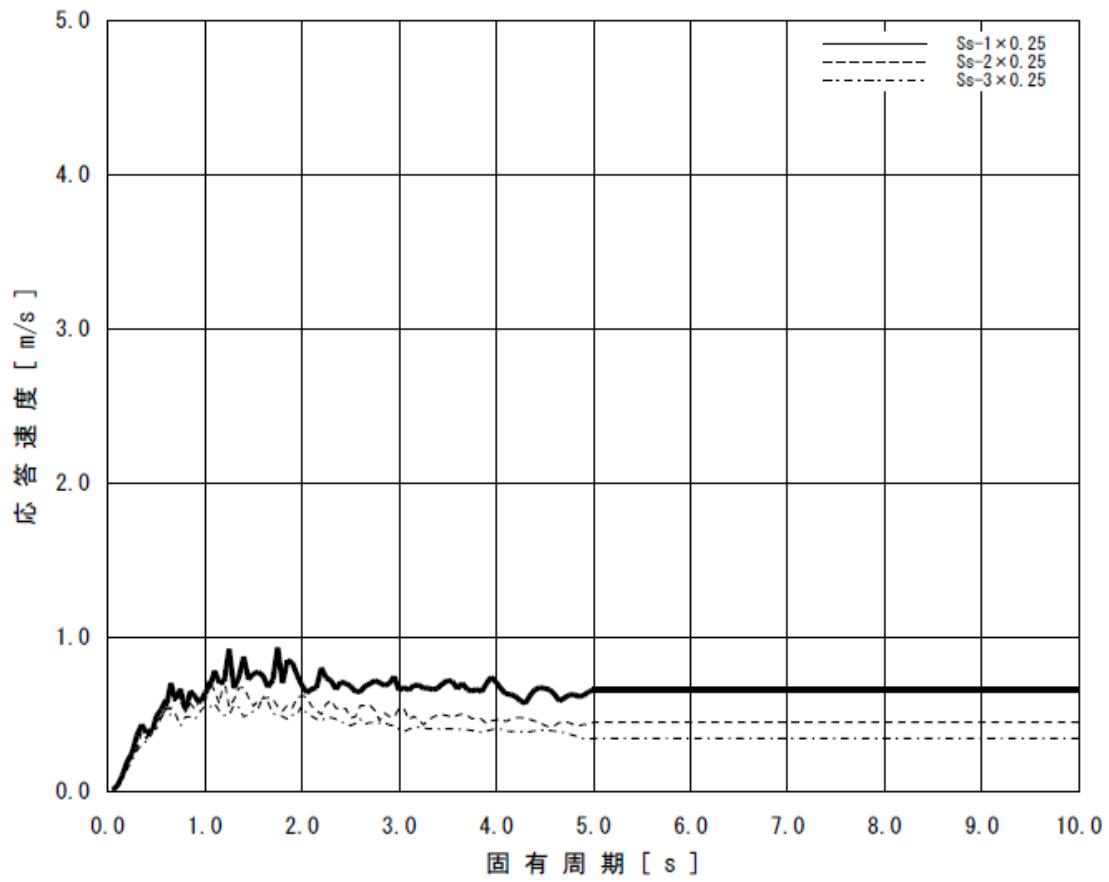


図-4 SPT建屋 速度応答スペクトル (EW方向・減衰0.5%)

表-1 建屋内RO循環設備の関連設備におけるタンクのスロッシング評価結果

機器名称			スロッシング 波高 [mm]	スロッシング時 液位 [mm]	タンク高さ [mm]
SPT (B)	SPT 建屋	円型	742	10,095	11,000
SPT受入水タンク	T.P. 8.5m 盤	角型	344	2,495	2,560
RO濃縮水受タンク	T.P. 33.5m 盤	角型	384	2,535	2,560
廃液RO供給タンク (35m <sup>3</sup> )	T.P. 33.5m 盤	角型	405	1,957	2,244
廃液RO供給タンク (42m <sup>3</sup> )	T.P. 33.5m 盤	角型	443	1,995	2,244
廃液RO供給タンク (40m <sup>3</sup> )	T.P. 33.5m 盤	角型	374	1,926	2,351
廃液RO供給タンク (110m <sup>3</sup> )	T.P. 33.5m 盤	角型	314	1,866	2,560

以上

## 滞留水移送装置の設計・確認の方針について

### 1. 設計方針

#### 1.1 設置の目的

滞留水移送装置は、2.5.1.5.1に示す汚染水処理設備等の設備構成のうち、移送ポンプ及びこれに付帯する設備を原子炉建屋，タービン建屋，廃棄物処理建屋に新たに設置することにより，建屋水位の制御性及び信頼性を向上させることで，滞留水の建屋外への流出を防止することを目的に設置する。

#### 1.2 要求される機能

- (1) 原子炉建屋，タービン建屋，廃棄物処理建屋の滞留水を，プロセス主建屋等へ移送できること。また，上記建屋の水位を制御できること。
- (2) 原子炉建屋，タービン建屋，廃棄物処理建屋の水位を適切に監視できること。

#### 1.3 設計方針

##### (1) 設備容量

原子炉の注水，雨水及び地下水の浸入等により各建屋に発生する滞留水に対して，十分対処可能な設備容量とする。

##### (2) 長期停止に対する考慮

滞留水移送装置のうちポンプ，配管，制御用水位計は，故障により設備が長期間停止することがないように，建屋ごとに2系列設置する。また，電源は，異なる2系統の所内高圧母線から受電可能な設計とする。

##### (3) 規格・規準

滞留水移送装置にて設置するポンプ，配管は，設計，材料の選定，製作及び検査について，発電用原子力設備規格設計・建設規格(JSME)，日本産業規格等<sup>※1</sup>を適用することにより信頼性を確保する。

※1 「JIS Z 3801 手溶接技術検定における試験方法及び判定基準」，「JIS Z 3841 半自動溶接技術検定における試験方法及び判定基準」，「JIS Z 3040 溶接施工方法の確認試験方法」，「JWWA K 144 水道配水用ポリエチレン管」，「JIS G 3456 高温配管用炭素鋼鋼管」，「JIS G 3454 圧力配管用炭素鋼鋼管」，「JIS A 8604 工事用水中ポンプ」



#### (4)放射性物質の漏えい防止

滞留水移送装置は、液体状の放射性物質の漏えいを防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、滞留水移送装置には設置環境や内部流体の性状等の状況に応じた適切な材料を使用する。また、ポリエチレン管とポリエチレン管の接続部は、融着構造とすること基本とする。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合に備え、屋外の移送配管はトラフ内に設置するか二重管構造とし、屋内の移送配管のうち鋼管の接続部の周囲には堰等を設置することで漏えいの拡大を防止する。また、トラフ及び堰等の内部に漏えい検知器を設置し、漏えいの早期検出が可能な設計とする。
- c. 漏えい検知の警報は、免震重要棟に表示し、異常を確実に運転員に伝え、警報発生時にはポンプ停止措置がとれるようにする。なお、現場確認の上、誤報と確認された場合は運転を再開する。
- d. ポンプ立ち上がり部（ポンプ吐出からポリエチレン管接続部）以外で耐圧ホースを使用する場合には、二重管構造として漏えいの拡大防止を図る。

#### (5)放射線遮へいに対する考慮

滞留水移送装置は、放射線業務従事者が接近する必要がある箇所の空間線量率が数mSv/h以下となるよう、鋼材または鉛カーテン等により放射線を適切に遮へいする設計とする。

#### (6)誤操作の防止に対する考慮

滞留水移送装置は、運転員の誤操作、誤判断を防止するために、ポンプの手動操作等の重要な操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。

#### (7)移送ポンプ誤動作に対する考慮

滞留水移送装置は、故障により誤動作を引き起こさない構成としているが、仮に移送ポンプの誤動作が発生した場合でも、次の各項を考慮することで早期検知が可能な設計とする。

- a. ポンプ起動水位になってもポンプが起動せず、更に水位が上昇した場合、警報が発報することで、検知可能な設計とする。
- b. ポンプ停止水位になってもポンプが停止せず、更に水位が低下した場合、警報が発報することで、検知可能な設計とする。

(8) 検査可能性に対する設計上の考慮

滞留水移送装置は、適切な方法で検査ができるよう、漏えい検査・通水検査等の検査が可能な設計とする。

(9) 設備保全に対する考慮

滞留水移送装置は、機器の重要度に応じた適切な保全が実施可能な設計とする。

(10) 監視・操作に対する考慮

滞留水移送装置は、免震重要棟において計器の監視、警報発報及び遠隔操作が可能な設計とする。

(11) 凍結に対する考慮

滞留水を移送している過程では、配管に水が流れているため凍結の恐れはない。滞留水の移送を停止した場合、屋外に敷設されているポリエチレン管等は、凍結による破損が懸念されるため、保温材等を取り付けて凍結防止を図る。なお、保温材は、高い気密性と断熱性を有する硬質ポリウレタン等を使用し、凍結しない十分な厚さを確保する。

保温材厚さの設定の際には、JIS A 9501 に基づき、震災以降に凍結事象が発生した外気温 $-8^{\circ}\text{C}$ 、内部流体の初期温度 $5^{\circ}\text{C}$ 、配管口径 75A 相当に対して保温材厚さ 13mm の条件において、内部流体が 25%※凍結するまでに十分な時間（12 時間程度）があることを確認した。なお、震災以降の実測データから、外気温 $-8^{\circ}\text{C}$ が半日程度継続することはない。

※「JIS A 9501 保温保冷工事施工標準」において管内水の凍結割合を 25%以下と推奨

(12) 紫外線に対する考慮

屋外に敷設されているポリエチレン管は、紫外線による劣化を防止するため、紫外線防止効果のあるカーボンブラックを添加した保温材又は被覆材を取り付ける。

(13) 腐食に対する考慮

耐圧ホースの材料であるポリ塩化ビニル及び EPDM 合成ゴム、及びポリエチレン管については耐腐食性に優れていることを確認している。炭素鋼については、長期に渡る健全性維持のため、ポリエチレンによる内面ライニングを施した配管を使用する。

(14) 生物汚染

滞留水移送装置の移送ポンプの取水口には、メッシュを設けており、大きな藻等がポンプ内に浸入して機器を損傷させるようなことはない。

また、滞留水を移送している上では有意な微生物腐食等は発生しないと考えられる。ただし、異常な速度で腐食が進み漏えいが生じた場合において、微生物腐食が原因であると判明すれば、生物汚染を考慮した対策を講じる

#### (15)耐放射線性

滞留水移送装置に使用する耐圧ホースの材質はポリ塩化ビニル及びEPDM合成ゴムである。ポリ塩化ビニルの放射線照射による影響は、 $10^5\sim 10^6\text{Gy}$ の集積線量において、破断時の伸びの減少等が確認されている。過去の測定において、2号機タービン建屋の滞留水表面上の線量当量率が $1\text{Sv/h}$ であったことから、耐圧ホースの照射線量率を $1\text{Gy/h}$ と仮定すると、集積線量が $10^5\text{Gy}$ に到達する時間は $10^5$ 時間(11.4年)と評価される。EPDM合成ゴムの放射線照射による影響は、 $10^5\text{Gy}$ まで照射されても有意な材料特性の変化は確認されていない。耐圧ホースの照射線量率を $1\text{Gy/h}$ と仮定すると、集積線量が $10^5\text{Gy}$ に到達する時間は $10^5$ 時間(11.4年)と評価される。このため、耐圧ホースは数年程度の使用では放射線照射の影響により大きく劣化することはないと考えられる。

ポリエチレンは、集積線量が $2\times 10^5\text{Gy}$ に達すると、引張強度は低下しないが、破断時の伸びが減少する傾向を示す。ポリエチレン管の照射線量率を $1\text{Gy/h}$ と仮定すると、 $2\times 10^5\text{Gy}$ に到達する時間は $2\times 10^5$ 時間(22.8年)と評価される。そのため、ポリエチレン管は数年程度の使用では放射線照射の影響を受けることはないと考えられる。

### 1.4 主要な機器

滞留水移送装置は、主に移送ポンプ、移送配管、水位計で構成する。

なお、水位計については以下の考えに基づき設置する。

- ・制御用水位計：設置エリアの水位の確認を行う他、移送ポンプの制御を行う。
- ・監視用水位計：設置エリアの水位の確認を行い、局所的な水の滞留を監視する。

各建屋の滞留水は、移送ポンプにより、プロセス主建屋等に移送することにより水位調整を行う。なお、移送については、移送元の各建屋の水位及び移送先の各建屋の水位を考慮し実施する。

### 1.5 自然災害対策等

#### (1)津波

滞留水移送装置は、仮設防潮堤内に設置し、アウトターライズ津波による浸水を防止する。また、アウトターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は、移送ポンプを停止し、汚染水の流出を防止する。なお、津波による配管損傷があった場合でも、移送ポンプを停止することで、汚染水の漏えいは限定的なものとなる。

## (2) 強風（台風・竜巻）

滞留水移送装置は、基本的に建屋内に設置し、屋外に配管を設置する場合はトラフをアンカにより固定するため、強風により損傷の可能性は低い。

## (3) 豪雨

滞留水移送装置の屋外配管は、トラフ内に設置するか二重管構造とし、雨水の浸入を防止する構造とする。雨水が浸入した場合は、漏えい検知の警報が発報し、運転員が適切な措置をとれるようにする。

## (4) 火災

滞留水移送装置は、火災発生防止および火災の影響軽減のため、実用上可能な限り不燃性または難燃性材料を使用するとともに設備周辺からは可能な限り可燃性を排除する。また、初期消火の対応が出来るよう、設備近傍に消火器を設置する。なお、火災発生は、火災報知器による検知可能な設計とする。

## 2. 滞留水移送装置の構造強度及び耐震性評価

### 2.1 構造強度

滞留水移送装置の移送配管のうち鋼管およびポリエチレン管は「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（JSME 規格）、日本産業規格（JIS 規格）、日本水道協会規格（JWWA 規格）等に準拠する。耐圧ホースについては、製造者仕様範囲内の圧力および温度で運用することで構造強度を有すると評価する。

### 2.2 耐震性

滞留水移送装置を構成する主要機器のうち、配管類（鋼管）の耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠して構造強度評価を行う。また、耐圧ホース、ポリエチレン管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

## 別紙

- (1) 滞留水移送装置の構造強度及び耐震性について
- (2) 滞留水移送装置に係る確認事項について

以上

滞留水移送装置の構造強度及び耐震性について

滞留水移送装置を構成する設備について、構造強度評価の基本方針及び耐震性評価の基本方針に基づき構造強度及び耐震性の評価を行う。

1. 基本方針

1.1 構造強度の基本方針

滞留水移送装置のうち、鋼材を使用している鋼管については、「JSME S NC-1 発電用原子炉設備規格 設計・建設規格」のクラス3機器に準拠して評価を行う。

ポリエチレン管は、日本水道協会規格等に準拠したものを適用範囲内で使用することで、構造強度を有すると評価する。また、耐圧ホースについては、製造者仕様範囲内の圧力および温度で運用することで構造強度を有すると評価する。

1.2 耐震性評価の基本方針

滞留水移送装置を構成する主要機器のうち放射性物質を内包するものは、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置付けられる。鋼管については、定ピッチスパン法で評価されるサポート間隔とする。

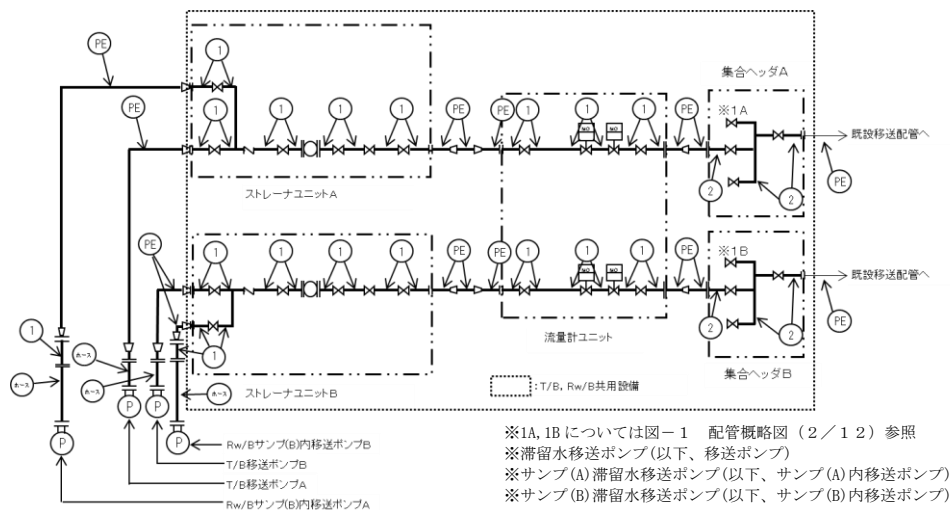
なお、耐圧ホース、ポリエチレン管は、可撓性により耐震性を確保する。

2. 評価結果

2.1 構造強度評価

2.1.1 主配管（鋼管）

強度評価箇所を図－1に示す。



図－1 配管概略図（1 / 1 2）

（1号機 T/B）

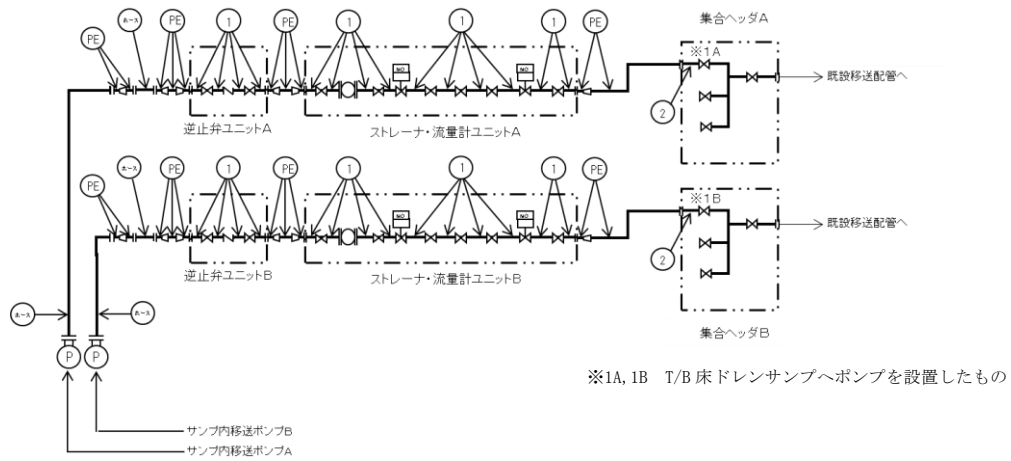


図-1 配管概略図 (2 / 1 2)

(1号機 T/B)

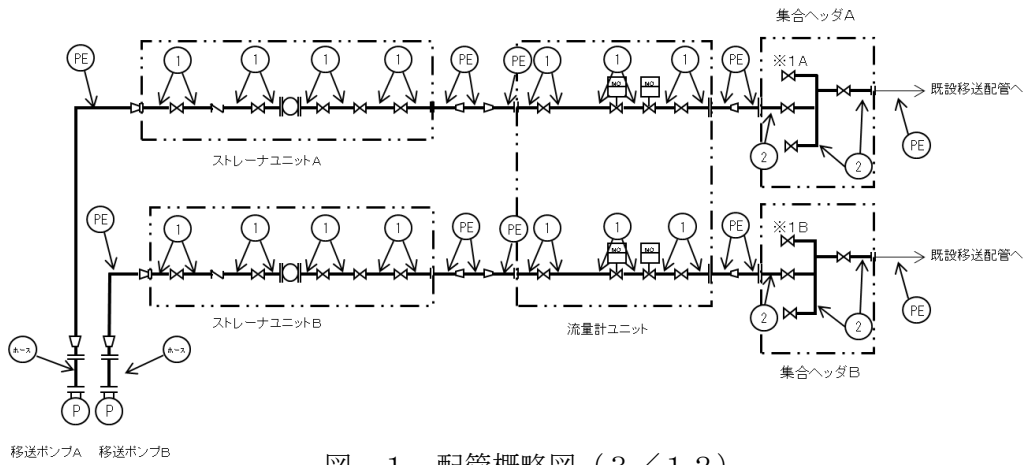


図-1 配管概略図 (3 / 1 2)

(1号機 R/B)

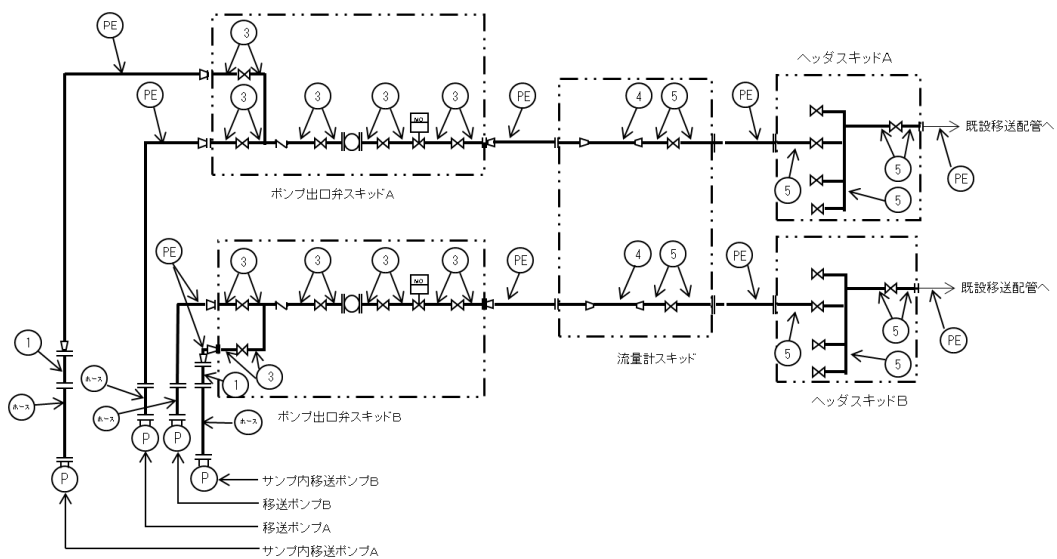


図-1 配管概略図 (4 / 1 2)

(2号機 T/B)

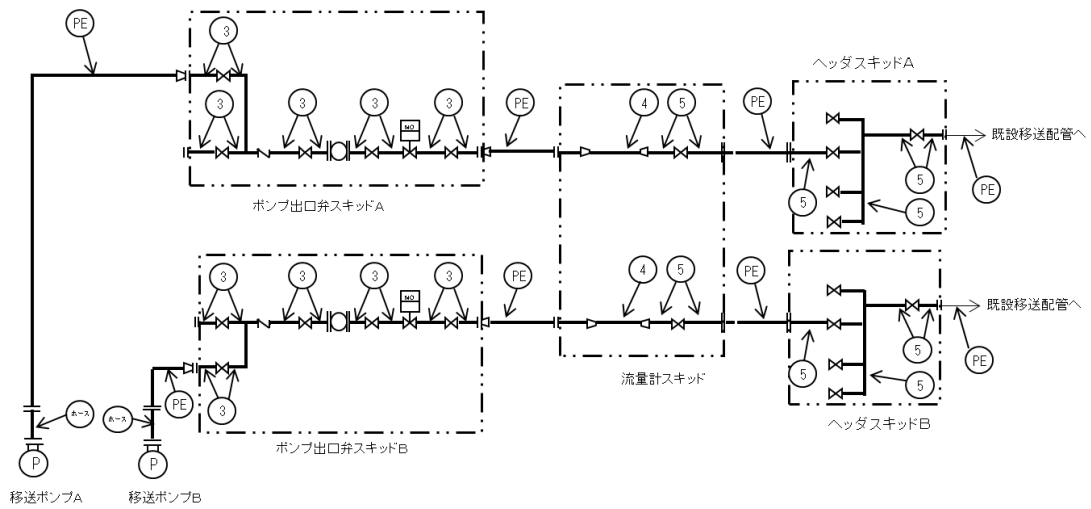
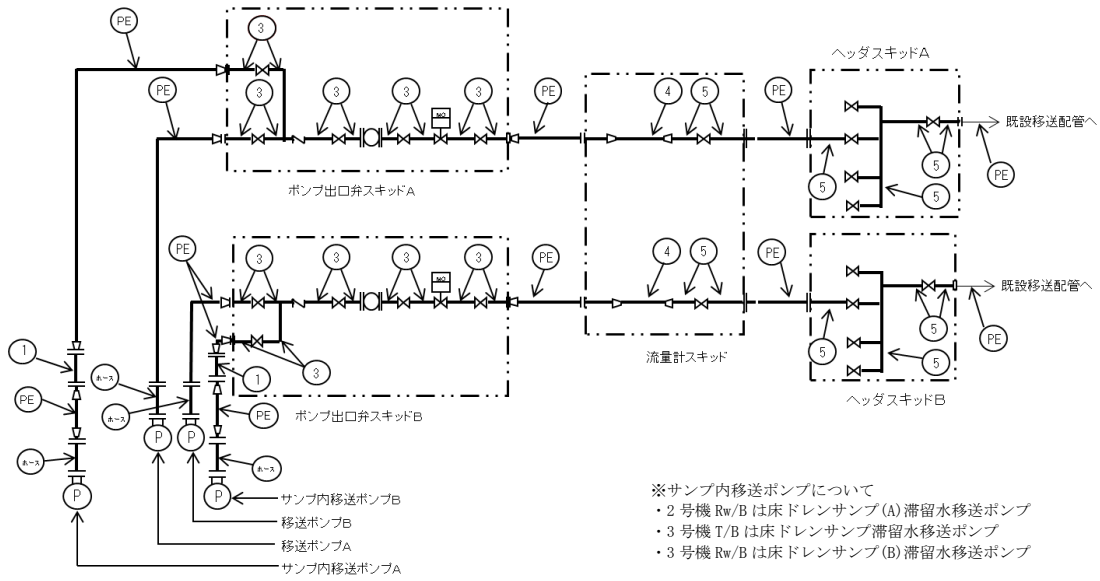


図-1 配管概略図 (5 / 1 2)  
(2号機 R/B)



※サンプル内移送ポンプについて  
 ・2号機 Rw/B は床ドレンサンプル(A) 滞留水移送ポンプ  
 ・3号機 T/B は床ドレンサンプル滞留水移送ポンプ  
 ・3号機 Rw/B は床ドレンサンプル(B) 滞留水移送ポンプ

図-1 配管概略図 (6 / 1 2)  
(2号機 Rw/B 3号機 T/B, Rw/B)

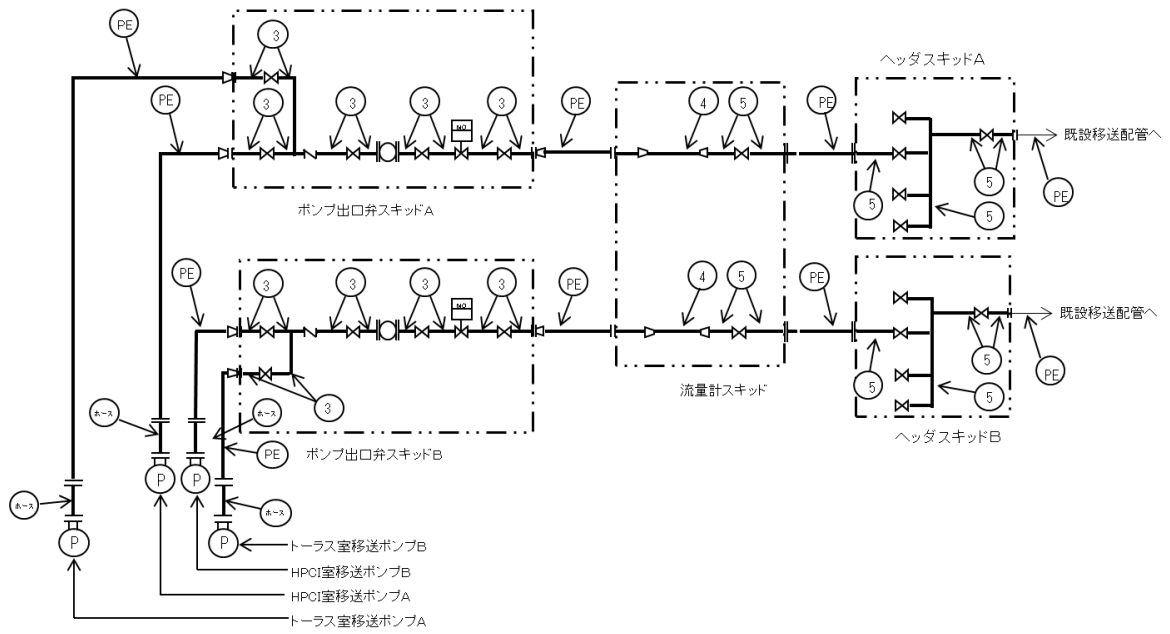


図-1 配管概略図 (7 / 12)  
(3号機 R/B)

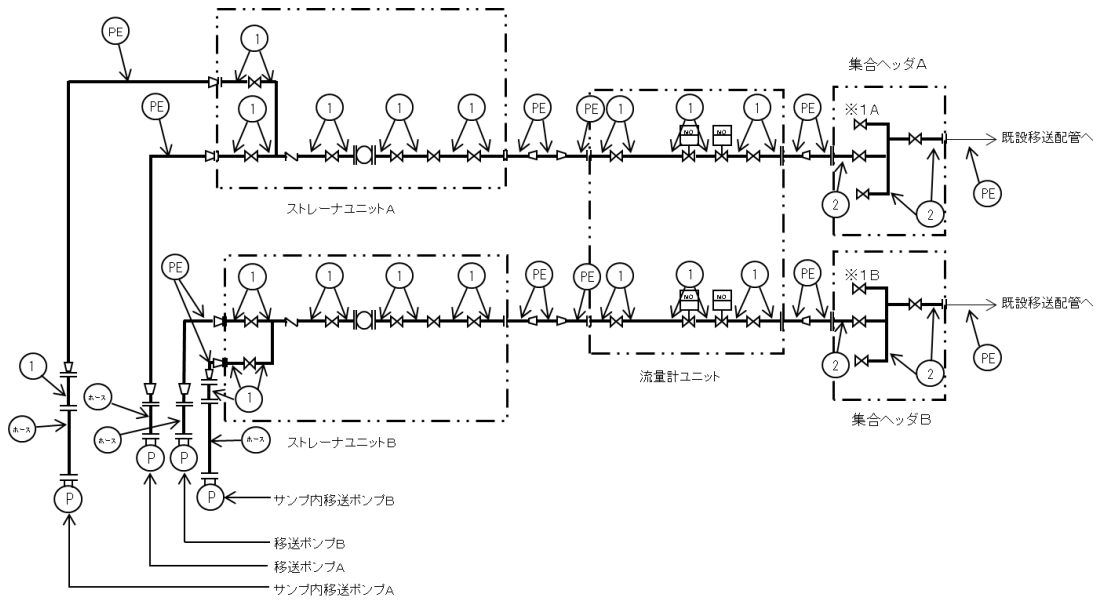


図-1 配管概略図 (8 / 12)  
(4号機 T/B)



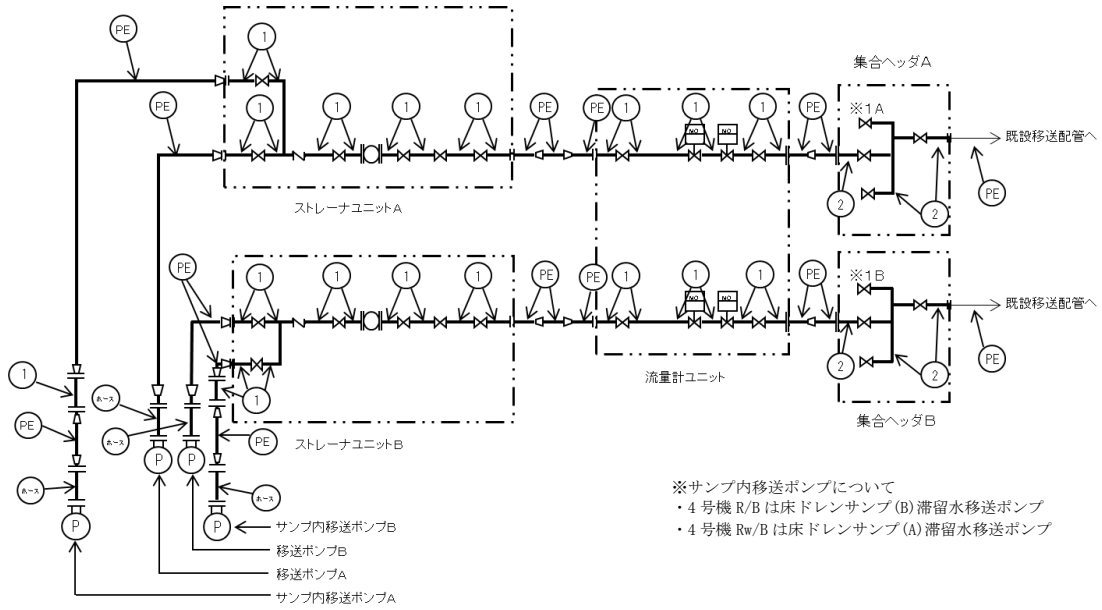


図-1 配管概略図 ( 9 / 1 2 )  
 ( 4 号機 R/B, Rw/B )

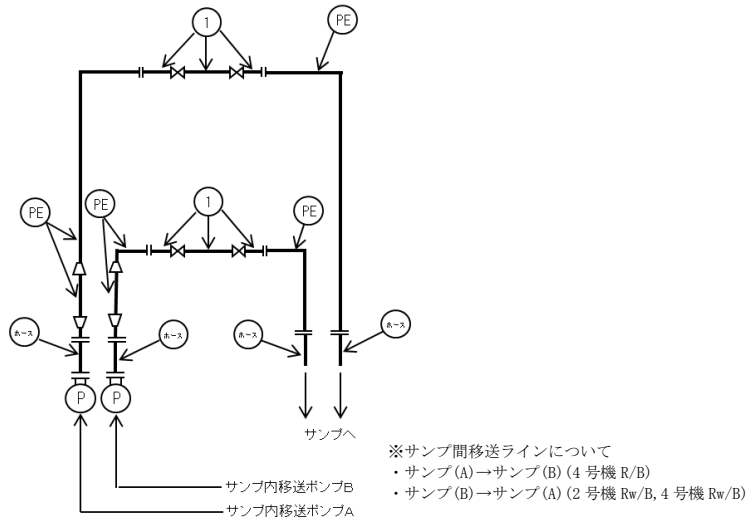


図-1 配管概略図 ( 1 0 / 1 2 )  
 ( サンプル間移送ライン( 2 号機 Rw/B 4 号機 R/B, Rw/B ) )

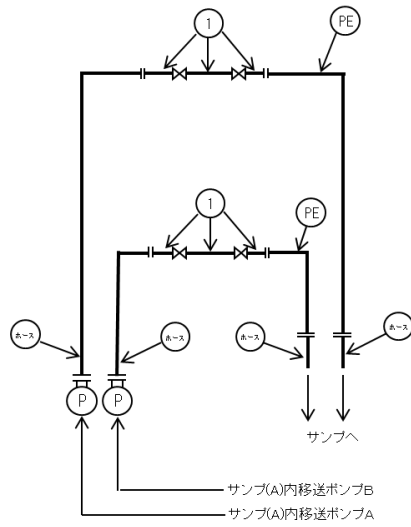


図-1 配管概略図 ( 1 1 / 1 2 )  
 ( サンズ間移送ライン(3号機 Rw/B) )

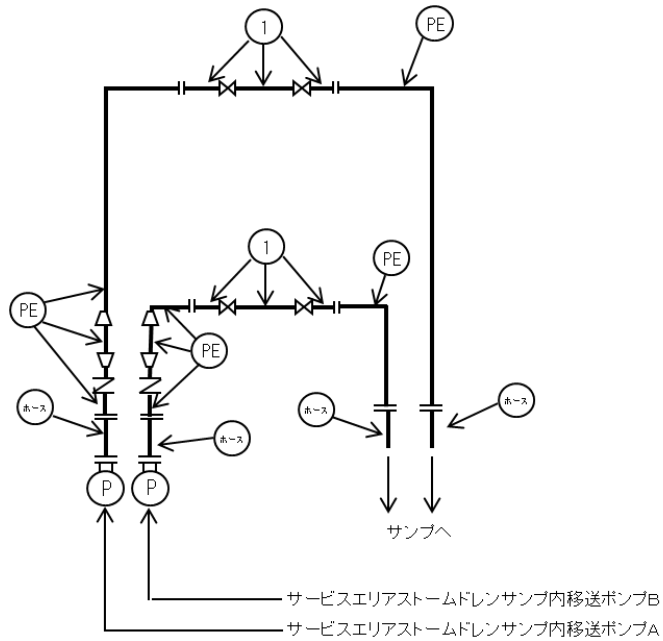


図-1 配管概略図 ( 1 2 / 1 2 )  
 ( サンズ間移送ライン(3号機 T/B) )

## 2.1.2 評価方法

### (1) 管の厚さの評価

管の必要な厚さは、次に掲げる値のいずれか大きい方の値とする。

#### a. 内面に圧力を受ける管

$$t = \frac{P \cdot D_o}{2 \cdot S \cdot \eta + 0.8 \cdot P}$$

t : 必要厚さ (mm)

P : 最高使用圧力 (MPa)

D<sub>o</sub> : 管の外径 (mm)

S : 許容引張応力 (MPa)

η : 継手効率

#### b. 炭素鋼鋼管の設計・建設規格上必要な最小必要厚さ : t<sub>r</sub>

設計・建設規格 PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた値

## 2.1.3 評価結果

評価結果を表-1に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-1 配管の評価結果 (管厚)

No.	外径 (mm)	材料	最高使用 圧力 (MPa)	最高使用 温度 (°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
①	60.50	STPT410	0.96	40	2.40	4.81
②	114.30	STPT410	0.96	40	3.40	5.25
③	60.50	STPG370	0.96	40	2.40	3.40
④	89.10	STPG370	0.96	40	3.00	4.81
⑤	114.30	STPG370	0.96	40	3.40	5.25

## 2.2 耐震性評価

### 2.2.1 移送ポンプ

移送ポンプは、水中ポンプのため地震により有意な応力は発生しない。

### 2.2.2 主配管 (鋼管)

配管支持の位置を決定するにあたっては、定ピッチスパン法により適正な支持間隔を確保する。定められた間隔で支持することにより、地震応力が過大とならないようにする。

a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角 2 方向拘束サポートにて支持される両端単純支持の梁モデル（図-2）とする。

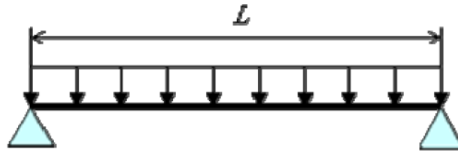


図-2 等分布荷重 両端単純支持はりモデル

次に当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表-2に示す。

表-2 配管系における各種条件

配管分類	主配管（鋼管）				
配管クラス	クラス 3 相当				
耐震クラス	B クラス相当 (水平震度 0.36)				
設計温度 [°C]	40				
配管材質	STPT410		STPG370		
配管口径	50A	100A	50A	80A	100A
Sch	80	40	40		
設計圧力 [MPa]	0.96				
配管支持間隔 [m]	4.5	5.9	4.0	4.9	5.6

b. 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z} \quad (1.1)$$

ここで  $S_w$  : 自重による応力 [MPa]  
 $L$  : 支持間隔 [mm]  
 $M$  : 曲げモーメント [N・mm]  
 $Z$  : 断面係数 [mm<sup>3</sup>]  
 $w$  : 等分布荷重 [N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w \quad (1.2)$$

$S_s$  : 地震による応力 [MPa]  
 $\alpha$  : 想定震度値 [-]

また、評価基準値として JEAC4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス 3 配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + \alpha \cdot S_w = S_p + (1 + \alpha) \cdot S_w \leq 1.0S_y \quad (1.3)$$

ここで、 $S$  : 内圧，自重，地震による発生応力 [MPa]  
 $S_p$  : 内圧による応力 [MPa]  
 $S_y$  : 設計降伏点 [MPa]

c. 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $S_w$  が 20 [MPa] 以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-3に示す。表-3より、自重による応力  $S_w$  を 20 [MPa] 以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-3 応力評価結果

配管分類	主配管（鋼管）				
配管材質	STPT410		STPG370		
配管口径	50A	100A	50A	80A	100A
Sch	80	40	40		
設計圧力 [MPa]	0.96				
内圧, 自重, 地震による発 生応力 S [MPa]	34	38	35	35	37
供用状態 $C_s$ に おける一次応 力許容値 [MPa]	1.0 $S_y$ =245	1.0 $S_y$ =245	1.0 $S_y$ =215	1.0 $S_y$ =215	1.0 $S_y$ =215

\*参考として、Sクラス相当（水平震度 0.72）の評価を行った場合でも、 $S=41, 45, 42, 42, 44$  [MPa] となり、一次許容応力を下回る。

以上

## 滞留水移送装置に係る確認事項について

滞留水移送装置の構造強度及び機能・性能に関する確認事項を表－１～７に示す。

表－１ 確認事項（移送ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	漏えい確認※ <sup>2</sup>	—	—

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 建屋滞留水移送ポンプについては，建屋地下の滞留水中に設置されており，漏えい確認が困難である。従って，性能確認での通水確認の判定基準を満足することをもって，漏えい確認の代替とする。

表-2 確認事項（主配管（鋼管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径, 厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 <sup>※1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 <sup>※1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 <sup>※1</sup>	最高使用圧力の1.5倍の水圧で保持した後, 同圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後, 耐圧部分からの漏えいの有無も確認する。	最高使用圧力の1.5倍の水圧に耐え, かつ構造物の変形等がないこと。 また, 耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし, 必要に応じて記録を確認する。

表-3 確認事項（主配管（ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 <sup>※1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	最高使用圧力以上の水圧に耐え, 漏えいがないことを確認する。	耐圧検査：検査圧力に耐え, かつ, 異常のないこと。 漏えい検査：耐圧部からの漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし, 必要に応じて記録を確認する。



表-4 確認事項（主配管（耐圧ホース））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 <sup>※1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 <sup>※1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 <sup>※1</sup>	最高使用圧力の1.5倍の水圧で保持した後、同圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無も確認する。	最高使用圧力の1.5倍の水圧に耐え、かつ異常のないこと。 また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

表-5 確認事項（滞留水移送装置（各追設設備（移送配管、移送ポンプ）））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
性能	通水・流量確認	①追設した各ポンプからプロセス主建屋までのラインを構成し、ポンプを起動し通水できること。	12m <sup>3</sup> /h以上の容量を通水できること。 移送先（プロセス主建屋）において通水ができていないこと。 サンプル間においても通水ができていないこと。
		②追設した各ポンプからプロセス主建屋までのラインを構成し、ポンプを起動し通水できることをポンプ性能検査記録、配管内部確認記録等により、確認する。 <sup>※1</sup>	

※1 ②は検査のため汚染水を増加させる可能性がある場合に適用する。

表－6 確認事項（漏えい検出装置及び自動警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置を確認する。	実施計画のとおりであること。
機能	漏えい警報確認※ <sup>1</sup>	「漏えい」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生することを確認する。	「漏えい」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生すること。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 漏えい検知器により信号名称は異なる。

表－7 確認事項（水位計）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※ <sup>1</sup>	装置の据付位置を確認する。	実施計画のとおりであること。
機能	監視機能確認	「水位高高」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生することを確認する。	「水位高高」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生すること。
		「水位差小」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生することを確認する。	「水位差小」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生すること。
性能	性能校正確認※ <sup>1</sup>	校正器を用いて模擬入力を与え、水位計指示値が正しいことを確認する。	模擬入力に対する水位計指示値が、許容範囲内であること。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 水位計により信号名称は異なる。

以上

## セシウム吸着装置におけるストロンチウムの除去について

## 1. はじめに

セシウム吸着装置にストロンチウム吸着塔（以下、「Sr 吸着塔」という）を装荷し、汚染水に含まれる放射性のストロンチウムを除去することで、汚染水のリスク低減を図る。

Sr 吸着塔は、「2.37 モバイル型ストロンチウム除去装置等」のストロンチウム吸着塔と同一仕様とし、セシウム吸着装置の吸着塔スキッド間を接続する配管（以下、Cs/Sr 同時吸着用配管）を新たに設置して、従来のセシウム吸着塔（以下、「Cs 吸着塔」という）、Sr 吸着塔の2段階で放射性のセシウム、ストロンチウムを除去する。

## 2. 基本設計

## 2.1 設計方針

## (1) 処理能力

Sr 吸着塔は、汚染水に含まれるストロンチウムの濃度を低減する能力を有するものとする。

## (2) 構造

Sr 吸着塔は、吸着材をステンレス鋼製の容器に充填し、外側に炭素鋼遮へい容器を設けた構造とする。

## (3) 規格・基準等

Sr 吸着塔及び Cs/Sr 同時吸着用配管は、設計、材料の選定、製作及び検査について原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

## (4) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

- a. Sr 吸着塔及び Cs/Sr 同時吸着用配管は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び所外への管理されない放出を防止するため、設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用する。
- b. Cs/Sr 同時吸着用配管のフランジ部にパン等を設置し、漏えい水を既設のパイプチェース内に導き、漏えい検知器により漏えいを検知できる設計とする。

## (5) 放射線遮へいに対する考慮

Sr 吸着塔は、放射線作業従事者の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

## (6) 崩壊熱除去に対する考慮

Sr 吸着塔は、放射性物質の崩壊熱による温度上昇を考慮し、崩壊熱を除去できる設計とする。

## (7) 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

Sr 吸着塔は、水の放射性分解により発生する可燃性ガスを排出できる設計とする。

### 3. 主要な機器

セシウム吸着装置の4系列のうち2系列にSr吸着塔を装荷し、Cs/Sr同時吸着用配管により、汚染水に含まれる放射性のセシウム、ストロンチウムを除去する。

Sr吸着塔は、「2.37 モバイル型ストロンチウム除去装置等」のストロンチウム吸着塔と同一仕様とし、4塔中3塔に通水することによりSr濃度を低減する。(図-1, 図-2 参照)

#### 3.1 Sr吸着塔の性能

Cs吸着塔及びSr吸着塔を用いてセシウム/ストロンチウムを吸着する運転(以下、「Cs/Sr同時吸着運転」という)の際のストロンチウムに対する除染係数は、セシウム吸着装置出口において $10\sim 10^3$ を設計目標とする。

なお、ストロンチウムの処理はリスク低減の観点から実施するものであり、セシウム吸着装置出口の放射能濃度が低減されていることを確認する。

#### 3.2 使用済吸着塔の発生量予測

- a. 使用済みのSr吸着塔は、取替時に淡水置換及び水抜きを行い、使用済セシウム吸着塔保管施設(Ⅱ2.5.2.1.2を参照)のコンクリート製ボックスカルバート内に貯蔵する。
- b. Cs/Sr同時吸着運転を継続して運転した場合における使用済吸着塔の発生頻度は、Cs吸着塔が4日に2塔、Sr吸着塔が4日に2塔と想定している。Cs吸着塔を用いてセシウムを吸着する運転(以下、「Cs吸着運転」という)における使用済吸着塔の発生頻度が4日に4塔のため、従来の発生頻度から変更はなく、貯蔵に支障をきたすことはない。
- c. 現状の汚染水処理はセシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置で処理を行っており、Cs吸着運転時とCs/Sr同時吸着運転時のセシウム吸着装置の稼働率に変更はなく、Cs/Sr同時吸着運転時においても吸着塔の発生量6塔/月程度となる。

#### 3.3 具体的な安全確保策

セシウム吸着装置は、高濃度の放射性物質を扱うため、漏えい防止対策、放射線遮へい、崩壊熱除去、可燃性ガス滞留防止、環境条件等について具体的に安全確保策を以下の通り定め、実施する。

##### (1) 漏えい発生防止等

- a. Sr吸着塔及びCs/Sr同時吸着用配管は、腐食による漏えい発生を防止するため、耐腐食性を有するステンレス材の使用を基本とする。
- b. セシウム吸着装置は、スキッド毎にパンを設けており、スキッド内部等の漏えい検知器により、漏えい発見時は免震重要棟集中監視室及びシールド中央制御室(シールド中操)に警報を発し、運転員が停止操作時の必要な措置を講ずる。また、巡視

点検等で漏えいが無いことを確認している。

- c. Cs/Sr 同時吸着用配管のフランジ部にパン等を設置し、漏えい水をパイプチェースに既設の漏えい検知器まで導くことで、漏えいを検知する。(図-3 参照)
- d. セシウム吸着装置は、焼却工作建屋内に設置しており、万一漏えいが発生しても、系外へ流出することはない。

(2) 放射線遮へい・被ばく低減に対する考慮

- a. Sr 吸着塔は、Cs 吸着塔と同様に炭素鋼製の遮へい容器により遮へいし、スキッド表面の線量当量率を 4mSv/h 以下とする。
- b. 使用済みのセシウム吸着装置の吸着塔は炭素鋼製の遮へい容器及びコンクリート製ボックスカルバートにより、放射線を遮へいする。
- c. 滞留水もしくは高濃度の廃水を行う処理装置の配管は、直接、放射線業務従事者が近づく可能性のある箇所を対象に空間線量当量率が数 mSv/h 以下となるように遮へいを設置する。
- d. Cs/Sr 同時吸着用配管付近に設置してある弁を操作する際に、表面線量が高線量である場合は、フラッシングをする等して、配管表面線量を下げる対策を実施する。

(3) 崩壊熱除去

Sr 吸着塔に吸着した放射性物質の崩壊熱は、処理水を通水することにより除熱する。

また、使用済みの Sr 吸着塔保管時における吸着塔内部の温度は、主要核種である Sr の吸着量を  $1.7 \times 10^{14}$  Bq/塔と設定した場合、約 143°C (ボックスカルバート内) となり、吸着材の耐熱温度である 200°C に対して十分余裕がある。(別添-1 参照)

(4) 可燃性ガスの滞留防止

- a. 水の放射線分解により発生する可能性のある可燃性ガスは、通水時は処理水とともに排出される。通水停止時は可燃性ガスが滞留する可能性があるため、ベント管に設置してあるベント弁を手動で開操作して通気により排出する。
- b. 使用済みの Sr 吸着塔は、可燃性ガスの発生を抑制するため、使用済セシウム吸着塔仮保管施設において内部の水抜きを実施する。
- c. 使用済みの Sr 吸着塔は、ベント管を空けた状態で貯蔵することにより、可燃性ガスを大気に放出する設計とする。

貯蔵時における Sr 吸着塔の可燃性ガス濃度を評価した結果、約 1.1% であり可燃限界に達することはない。(別添-2 を参照)

(5) 環境条件等

a. 腐食

Sr 吸着塔及び Cs/Sr 同時吸着用配管は、耐腐食性を有するステンレス材を用いており、腐食により汚染水が漏えいする懸念はない。

b. 熱による劣化

汚染水の温度は、ほぼ常温のため、金属材料の劣化の懸念はない。

c. 凍結

汚染水を処理している過程では、水が流れているため凍結の恐れはない。汚染水の処理を停止した場合でも、吸着塔及びCs/Sr同時吸着用配管は焼却工作建屋内に設置されており、焼却工作建屋内は過去の実績から氷点下になることはないため、凍結の懸念はない。

また、使用済みの吸着塔は、水抜きを行い貯蔵する。

d. 生物汚染

長期保管中、Sr吸着塔は水抜きされた状態で保管されることから、生物汚染に対する配慮は必要ない。

e. 耐放射線性

Sr吸着塔は、ステンレス材を用いており、放射線による劣化はない。

f. 紫外線

Sr吸着塔は、ステンレス材を用いており、紫外線による劣化はない。

4. 構造強度及び耐震性

4.1 構造強度

Sr吸着塔は、Cs吸着塔と同一の評価条件であり、同等の構造強度を確保する。

Sr吸着塔は、「ASME Boiler and Pressure Vessel Code」に準拠する。また、Sr吸着塔の板厚は、「JSME 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」に準拠することを確認する。

Cs/Sr同時吸着用配管は、セシウム吸着装置の配管と同一の運転条件であり、「JSME 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」のクラス3配管に準拠する。

4.2 耐震性

Sr吸着塔は、Cs吸着塔と同一の評価条件であり、同等の耐震性を確保する。

Cs/Sr同時吸着用配管は、変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定）とする。（別添-3参照）

5. その他

5.1 Cs/Sr同時吸着運転時における建屋滞留水の状況

建屋滞留水水位はT.P. 1, 564mm前後を維持するように計画しており、セシウム吸着装置のCs/Sr同時吸着運転（定格流量600m<sup>3</sup>/日）を継続した場合、滞留水の増加量約400m<sup>3</sup>/日（平成26年10月までの実績）、炉注量約320m<sup>3</sup>/日から想定すると、T.P. 2, 064mmに到達するまでに約3ヶ月の裕度がある。また、処理装置については、セシウム吸着装置以外に、第二セシウム吸着装置、除染装置があり、これら処理装置の稼働により、建屋滞留水の処理については十分な処理量を有している。なお、セシウム吸着装置がCs/Sr同時吸着運転時において、セシウム吸着装置をCs吸着運転を必要とする場合に3日以内に切替を行うことにより、第二セシウム吸着装置、除染装置の運

転が可能と判断されない状態となっても処理に影響を及ぼさない。

添付資料 1 5に記載の標高は、震災後の地盤沈下量 (-709mm) と O.P. から T.P. への読替値 (-727mm) を用いて、下式に基づき換算している。

<換算式>T.P.=旧 O.P. -1, 436mm

## 5.2 運転時の留意事項

Cs/Sr 同時吸着運転と Cs 吸着運転の切替えに際しては、手動弁の操作を伴うことから、以下の誤操作防止対策を講じるとともに、切替え操作後の運転に際しては、通水時の AGH スキッド入口配管表面線量等の測定を実施する。

- a. 切替え操作対象の弁には銘板を設置するとともに、特別な表示を行うことで確実な識別を行う。
- b. 切替え操作にあたっては、手順書を用いて確実な操作を行うとともに、状態の確認を行うことで確実な操作を行う。なお、操作対象弁の施錠等の管理を実施することで、作業許可のない操作を防止する。

## 5.3 火災対策

火災発生を防止するため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用する。また、初期消火のために、近傍に消火器を設置する。なお、火災発生は、巡視点検、監視カメラにより確認できる。Sr 吸着塔は遮へい付きスキッド内にあり燃焼・延焼し難く、また Cs/Sr 同時吸着用配管はステンレス鋼製であり、燃焼しない。

さらに避難時における誘導用のために誘導表示を設置する。

## 6. Sr 吸着塔の確認の方針について

### 6.1 構造強度及び機能・性能に関する事項

Cs/Sr 同時吸着用配管、Sr 吸着塔の構造強度及び機能・性能に関する確認事項を表-1 に示す。Sr 吸着塔は、海外からの輸入品につき記録又は立会により確認する。

### 6.2 溶接部に関する事項

溶接部に関する確認事項を表-2 に示す。当設備は、海外からの輸入品につき、記録又は立会により確認する。

## 7. Sr 吸着塔の主要仕様

### 7.1 系統仕様

#### (1) ストロンチウム吸着塔

塔数	(最大) 4塔/系
使用条件	最高使用圧力：0.97MPa 最高使用温度：66℃
除染係数(設計目標)	放射性ストロンチウムに対して $10\sim 10^3$

### 7.2 機器仕様

#### (1) ストロンチウム吸着塔

構造	縦置き円筒形
外径	Φ914.4mm
上蓋	ASME SA240 TYPE 316/316L (厚さ50.8mm)
胴板	ASME SA240 TYPE 316/316L (厚さ9.5mm)
下板	ASME SA240 TYPE 316/316L (厚さ50.8mm)

#### (2) ストロンチウム吸着塔付属配管

呼び径	50A相当
材質	EPDM合成ゴム

#### (3) セシウム/ストロンチウム同時吸着用配管

呼び径/厚さ	50A/Sch40
材質	SUS316L

(配管仕様の詳細については、表 2. 5 - 1 汚染水処理設備等の主要配管仕様  
セシウム吸着装置入口からセシウム吸着装置出口まで(鋼管)を参照)



表-1 確認事項（構造強度及び機能・性能）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度・耐震性	材料確認	主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観・据付確認	各部の外観を確認する。 また、据付状態について確認する。 ※1	有意な欠陥がないこと。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後、漏えいの有無を確認する。 ※1	確認圧力に耐え、かつ構造物の有意な変形等がないこと。 また、耐圧部から著しい漏えいがないこと。
機能・性能	機能確認	通常運転状態にて流量の確認を行う。	流量が出ること・各部から漏えいがないこと。
	性能確認	通常運転状態にて系統出口水の放射濃度を記録確認する。※2	系統出口水の放射能が入口放射濃度より低減されていること。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※2：ストロンチウム吸着塔通水時に確認する。

表-2 確認事項（海外製品溶接検査）（ストロンチウム吸着塔）

確認事項	確認項目	確認内容 ※1	判定基準
溶接検査	材料確認	溶接に使用する材料が、ASME 規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することを記録で確認する。	使用する材料が、ASME 規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査	開先形状等が ASME 規格等に適合するものであることを記録で確認する。	開先形状等が ASME 規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査	ASME 規格等に定められた溶接施工法により溶接されていること及び溶接士の資格を有しているものにより溶接が行われていることを記録で確認する。	ASME 規格等で確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	耐圧・漏えい検査	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないことを記録で確認する。	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないこと。
	外観検査	各部の外観を確認する。 ※2	外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1：「表-2 確認事項（海外製品溶接検査）（ストロンチウム吸着塔）」の確認範囲は、「東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則」の第26条第4号に規定する範囲とする。なお、適用する規格等で使用が認められている材料の溶接部に関わる確認は、適用する規格等の条件に適合していることについて行う。

※2：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

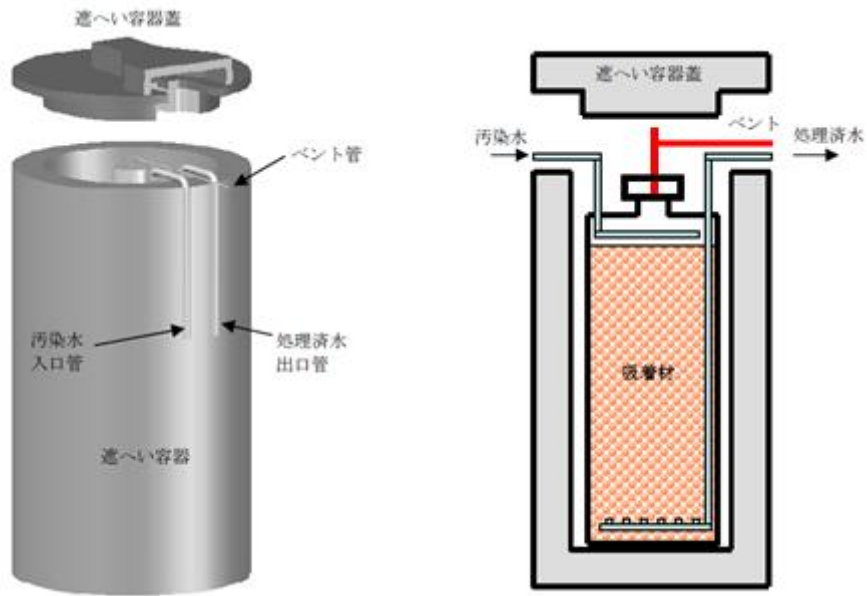


図-1 セシウム吸着装置のストロンチウム吸着塔外形及び概要図

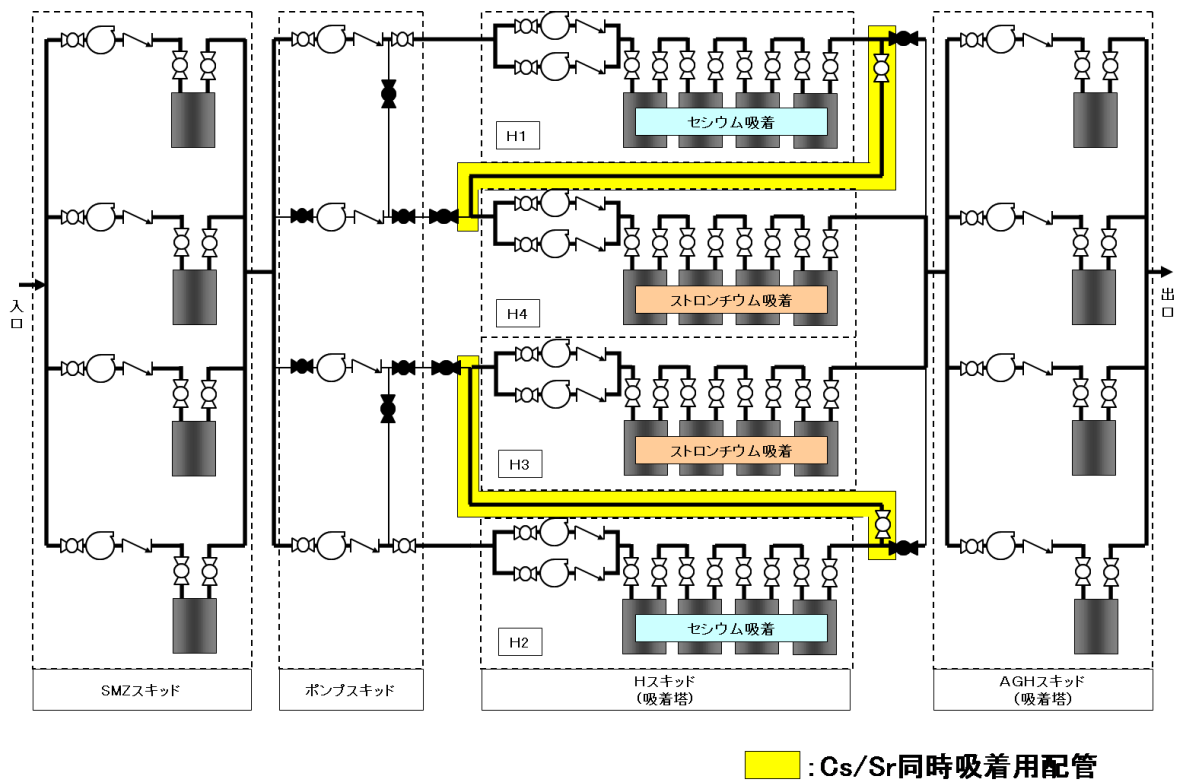


図-2 Cs/Sr 同時吸着運転時のセシウム吸着装置の系統概要

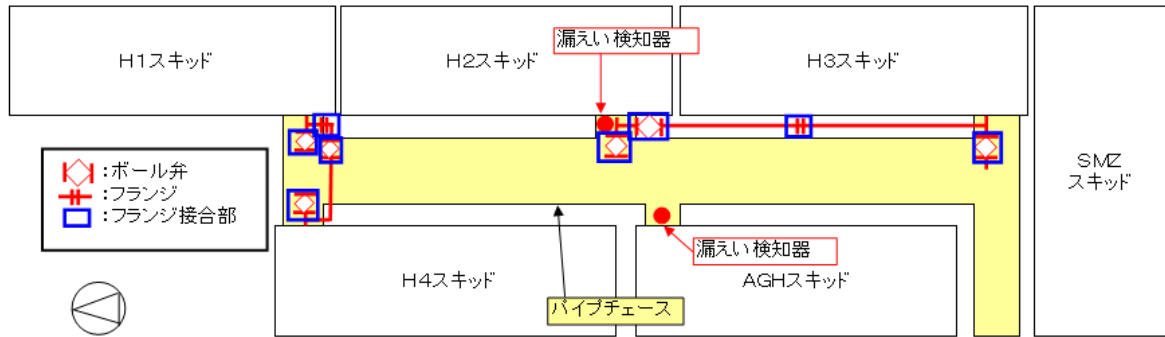


図-3 Cs/Sr 同時吸着用配管の漏えい検知概要

## 使用済みストロンチウム吸着塔の温度評価について

### 1. 概要

使用済みのストロンチウム吸着塔を対象に、コンクリート製ボックスカルバート内に抜水状態で貯蔵される場合の温度評価を行った。吸着塔に吸着した放射性物質による発熱を入熱条件とし、1次元の定常温度評価を行い、太陽光からの入熱によるボックスカルバート上蓋の温度上昇を考慮した場合の吸着塔の温度が許容温度以下となることを確認した。

### 2. 吸着塔の温度評価

#### 2.1. 評価方法

○評価手法：1次元定常温度評価（評価体系については図－1を参照、考慮した伝熱機構および使用した熱伝導率等は表－1を参照）

○温度条件：

- ・外気温度：40℃（福島県の過去最高気温 39.1℃（1942年8月15日）を切上げ）
- ・太陽光による温度上昇：13℃

○入熱条件：

- ・吸着塔2体をボックスカルバートに設置
- ・吸着塔発熱量：31.6W/体。

○放熱条件：

- ・ボックスカルバートの側面のうち1面からの放熱を考慮し、他のボックスカルバートに面する3面からの放熱は考慮しない。
- ・上蓋および床からの放熱は考慮しない。
- ・通気孔からの放熱は考慮しない。
- ・熱輻射による放熱は安全側に考慮しない。

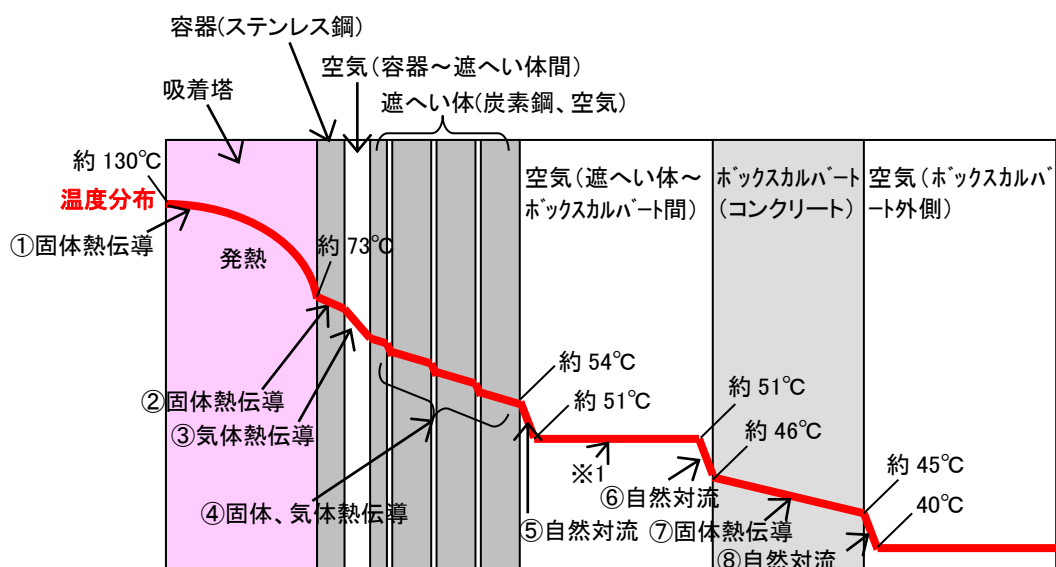


図-1 評価体系の概念図（1次元定常温度評価モデル）および温度分布（吸着塔）

※1：自然対流により混合され温度勾配はないものと仮定する。

表-1 考慮した伝熱機構および温度評価に用いた熱伝導率等（吸着塔）

番号	伝熱箇所	伝熱機構	伝熱距離	熱伝導率等
①	吸着塔	固体熱伝導	約 448mm	熱伝導率 0.024[W/(m・K)] (安全側に空気の熱伝導率と仮定)
②	容器（ステンレス鋼）	固体熱伝導	約 10mm	熱伝導率 16[W/(m・K)]
③	空気（容器～遮へい体間）	気体熱伝導	約 51mm	熱伝導率 0.024[W/(m・K)]
④	遮へい体（炭素鋼、空気）	固体、気体熱伝導	内面から 炭素鋼約 25mm 空気約 13mm 炭素鋼約 51mm 空気約 13mm 炭素鋼約 51mm 空気約 13mm 炭素鋼約 51mm	熱伝導率 炭素鋼 43[W/(m・K)] 空気 0.024[W/(m・K)] (保守的にエアギャップを考慮)
⑤	遮へい体から空気（遮へい体～ボックスカルバート間）	自然対流	—※1	熱伝達率 約 1.5[W/(m <sup>2</sup> ・K)]
⑥	空気（遮へい体～ボックスカルバート間）からボックスカルバート	自然対流	—※1	熱伝達率 約 1.5[W/(m <sup>2</sup> ・K)] (同時に入れる吸着塔の発熱分の熱流束も考慮)
⑦	ボックスカルバート（コンクリート）	固体熱伝導	約 203mm	熱伝導率 1.3[W/(m・K)] (同時に入れる吸着塔の発熱分の熱流束も考慮)
⑧	ボックスカルバートから空気（ボックスカルバート外側）	自然対流	—※1	熱伝達率 約 1.5[W/(m <sup>2</sup> ・K)] (同時に入れる吸着塔の発熱分の熱流束も考慮)

※ 1：自然対流による伝熱のため距離に依存しない。

## 2.2. 評価結果

評価の結果、コンクリートカルバート内に乾燥状態で貯蔵される場合、吸着材からの発熱により吸着塔の温度は約 130℃となった。また、太陽光からの入熱による温度上昇を考慮すると、約 143℃となり、吸着材の耐熱温度 200℃より低いことから安全上の問題はないと判断する。

## 使用済みストロンチウム吸着塔の水素濃度評価について

## 1. 概要

使用済みストロンチウム吸着塔を対象に、コンクリート製カルバート内に貯蔵される場合に発生する水素濃度の評価を行った。水素濃度は約 1.1% となり、水素可燃領域の 4% を下回ったことから安全上の問題はないとする。

## 2. 吸着塔の水素濃度評価

## 2.1. 評価方法

○評価手法：

- ・Sr 吸着塔において、吸着される放射能濃度が最大となる条件での水素発生量を計算する。
- ・給気区間と排気区間の水素濃度差による気体密度差により生じる差圧および流動抵抗から評価式に基づき煙突効果（自然対流）により流入する空気量を計算する。
- ・流入空気量と水素発生量の割合から水素濃度を計算する。

○水素発生条件：

- ・水素分子の発生量：約 0.1[L/h]

$$H = E \times G \times \frac{1}{A} \times \frac{1}{e}$$

$H$ ：水素発生量[mol/s]

$E$ ：崩壊熱 31.6[W]

$G$ ：水素分子発生量 0.0045[個/eV]

$A$ ：アボガドロ数  $6.02 \times 10^{23}$ [個/mol]

$e$ ：エネルギーの単位換算係数  $1.60 \times 10^{-19}$ [J/eV]

○温度条件：

- ・吸気側と排気側の温度差による自然対流については保守的に考慮しない

○煙突高さ：入口管リングヘッドからベント管上部までの高さ約 40cm

○流動抵抗：

- ・ベント管の上部までの流動抵抗をハーゲン・ポアズイユの式より導出（ベント管の流動抵抗が支配的であるため、その他の流動抵抗は無視する。）

○流入空気量：

- ・吸気側配管と排気側配管の水素濃度差及び流動抵抗により導出。

○水素濃度

- ・流入空気量と水素の発生量の割合から導出。



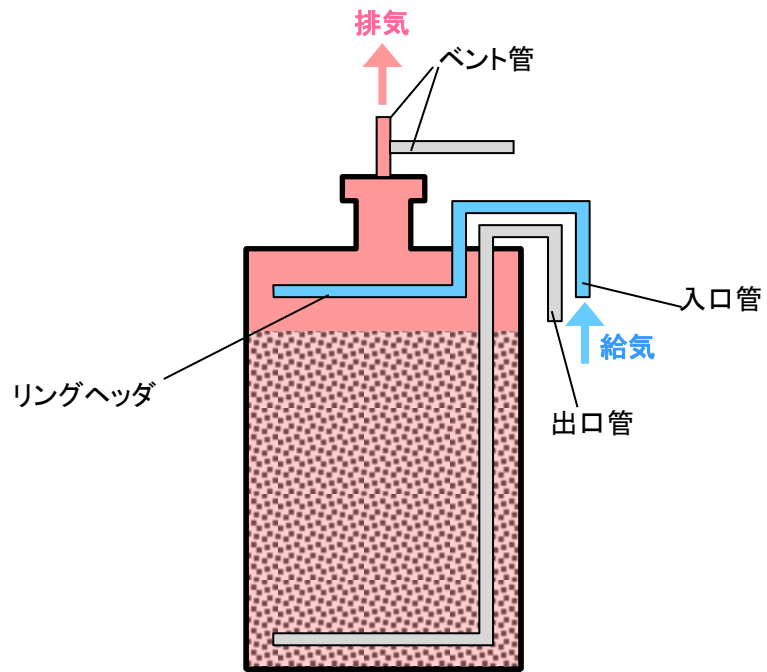


図1 評価体系の概念図

## 2.2. 評価結果

評価の結果、吸着塔内の水素濃度は1.1%となり、水素可燃領域の4%を下回ったことから安全上の問題はないと判断する。

## セシウム吸着装置のCs/Sr同時吸着用配管における耐震性の評価について

## 1. 概要

配管支持の位置を決定するにあたっては、定ピッチスパン法により適正な支持間隔を確保する。定められた間隔で支持することにより、配管系の固有周期を設定し、地震応力が過大とならないようにする。また集中質量部、曲り部、分岐部に発生する応力は、直管部における値を上回らないものとする。

## 2. 配管の耐震評価

## (1) 設計用地震動

項目	耐震 クラス	適用する地震動等		設計用地震力
		水 平	鉛 直	
機器・配管系	B	静的震度 ( $1.8 \cdot C_i * 1$ )	—	設計用地震力は、 静的地震力とする。

注記 \*1:  $C_i$  は、標準せん断力係数を 0.2 とし、建物・構築物の振動特性、地盤の種類等を考慮して求められる値とする。

## (2) 荷重の組合せと許容限界

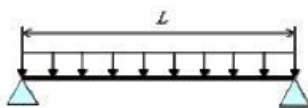
荷重の組合せと許容限界は、原子力発電所耐震設計技術指針（重要度分類・許容応力編 JEAG4601・補-1984, JEAG4601-1987 及び JEAG4601-1991 追補版）（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和 59 年 9 月, 昭和 62 年 8 月及び平成 3 年 6 月）（以下「JEAG4601」という。）及び発電用原子力設備規格（設計・建設規格 JSME S NC1-2005（2007 年追補版含む））（日本機械学会 2005 年 9 月, 2007 年 9 月）（以下「設計・建設規格」という。）に準拠する。

## (3) 耐震性評価

## a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角 2 方向拘束サポートにて支持される両端単純支持のはりモデル（図-1）とする。

図-1 等分布荷重 両端単純支持はりモデル



次に、当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表－1に示す。

表－1 配管系における各種条件

配管分類	主配管（鋼管）
配管クラス	クラス3相当
耐震クラス	Bクラス相当
設計温度 [°C]	66
配管材質	SUS316L
配管口径	50A
Sch	40
設計圧力 [MPa]	0.97
配管支持間隔 [m]	2.8

b. 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z} \quad (1.1)$$

ここで  $S_w$  : 自重による応力 [MPa]  
 $L$  : 支持間隔 [mm]  
 $M$  : 曲げモーメント [N・mm]  
 $Z$  : 断面係数 [mm<sup>3</sup>]  
 $w$  : 等分布荷重 [N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w \quad (1.2)$$

$S_s$  : 地震による応力 [MPa]  
 $\alpha$  : 想定震度値 [-]

また、評価基準値として JEAG4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス3配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + \alpha \cdot S_w = S_p + (1 + \alpha) \cdot S_w \leq 1.0S_y \quad (1.3)$$

ここで、 $S$  : 内圧，自重，地震による発生応力 [MPa]  
 $S_p$  : 内圧による応力 [MPa]  
 $S_y$  : 設計降伏点 [MPa]

c. 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $S_w$  が 10 [MPa]以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-2に示す。表-2より、自重による応力  $S_w$  を 10 [MPa]以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-2 応力評価結果

配管分類	主配管（鋼管）
配管材質	SUS316L
配管口径	50A
Sch	40
設計圧力 [MPa]	0.97
内圧，自重，地震による発生応力 S [MPa]	19*
供用状態 Cs における 一次許容応力 [MPa]	159

\*2.5 添付資料-3 1.2.3(2)d. 「表-3 セシウム吸着装置耐震評価結果」において、水平方向の静的震度 0.36 と 0.57 の耐震評価を実施している。静的震度 0.57 の場合は発生応力を評価すると  $S=21$  [MPa]となり、一次許容応力を下回る。

以上

セシウム吸着装置により高温焼却炉建屋の滞留水を浄化するために使用する配管について

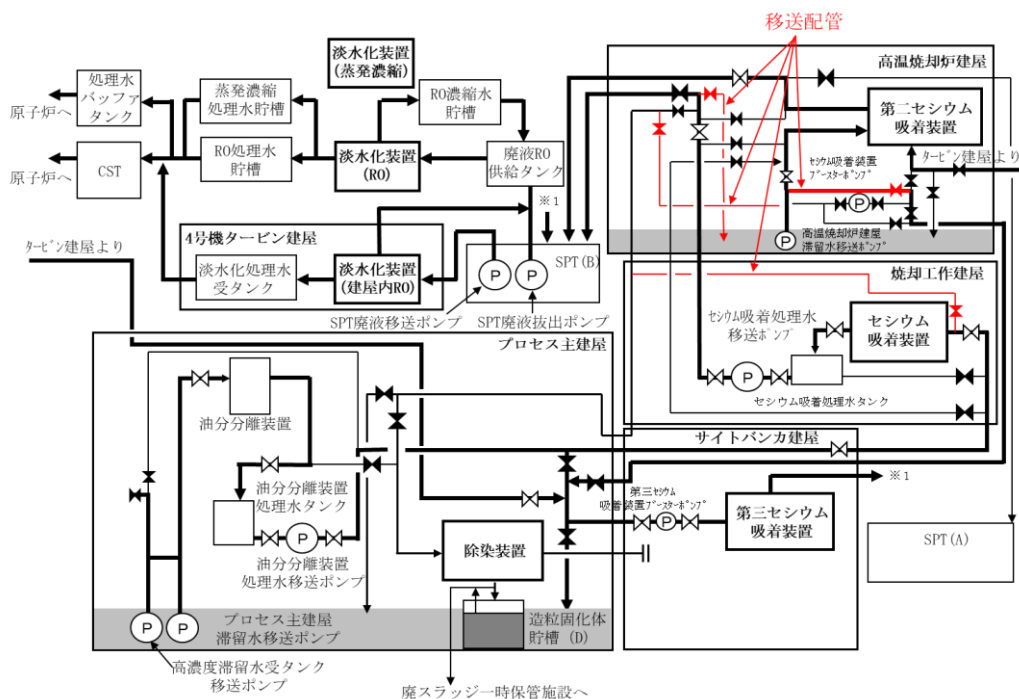
1. はじめに

高温焼却炉建屋に貯留している汚染水（以下、「滞留水」と言う。）をセシウム吸着装置へ移送する配管及び処理済水を高温焼却炉建屋へ移送する配管を設け、（以下、「移送配管」と言う。）、高温焼却炉建屋の滞留水をセシウム吸着装置により循環浄化する。

2. 基本設計

2.1 設置の目的

震災当時、タービン建屋等から高濃度の汚染水が流出するのを防止するため、汚染水を高温焼却炉建屋、プロセス主建屋の地下階へ移送した。その後、処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、除染装置）を設置し、処理装置前の水源として活用している。一方、平成 24 年以降、タービン建屋滞留水水位の低下、原子炉注水量の減少等により、セシウム吸着装置は、第二セシウム吸着装置の待機として維持している期間が長くなっている。そこで高濃度汚染水の漏えい時のリスクを低減するため、高温焼却炉建屋滞留水をセシウム吸着装置で循環浄化するための移送配管を設置する。既設処理装置の系統構成図に対する移送配管の設置範囲を図－1 に示す。



図－1 処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置、除染装置）の系統構成図に対する移送配管の設置範囲

## 2.2 設計方針

### (1)仕様

移送配管は、汚染水処理設備等の主要配管と同等の仕様とする。仕様詳細は 2.5.2 基本仕様の「表 2.5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様」（以下抜粋）を参照。

表 2.5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様

名 称	仕 様	
高温焼却炉建屋 1 階取り合いから 高温焼却炉建屋弁ユニット出口まで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 80 STPG370 1.37MPa 66℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋 1 階東側取り合いまで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 80, 100A／Sch. 80 STPG370 1.37MPa 66℃
セシウム吸着装置南側取り合いから セシウム吸着装置入口まで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 80 STPG370 1.37MPa 66℃
高温焼却炉建屋 1 階東側取り合いから 高温焼却炉建屋 1 階ハッチまで	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 80 STPG370 1.37MPa 66℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃

### (2)規格・基準等

移送配管は、設計、材料の選定、製作及び検査について原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

### (3)放射性物質の漏えい及び管理されない放出の防止

移送配管は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び所外への管理されない放出を防止するため、設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用する。

#### (4)放射線遮へいに対する考慮

移送配管は、放射線作業従事者の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

### 3. 構造強度及び耐震性

#### 3.1 構造強度

移送配管は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス3 機器に準ずるものと位置付けられ、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）、日本工業規格（JIS）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、日本工業規格（JIS）、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

溶接（溶接施工法および溶接士）は JSME 規格、日本工業規格（JIS）、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、または同等の溶接とする。また JSME 規格で規定される材料の日本工業規格（JIS）年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

さらに、JSME 規格に記載のない非金属材料（ポリエチレン管等）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器等については、日本工業規格（JIS）や日本水道協会規格、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

移送配管の構造強度は、汚染水処理設備等の主要配管と同等になる為、構造強度評価に変更はない。（詳細は添付資料-3「表 16 配管構造強度評価結果」参照。）

#### 3.2 耐震性

移送配管は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置づけられ、変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定、配管等に可撓性のある材料を使用）を用いる。（鋼管の耐震性については別添 1 参照。）

#### 4. 移送配管の具体的な安全確保策

移送配管は、高レベルの放射性物質を通すため、漏えい防止対策、放射線遮へい、環境条件等について具体的に安全確保策を以下の通り定め、実施する。

##### 4.1 放射性物質の漏えい防止等に対する考慮

###### (1) 漏えい検知・漏えい拡大防止

漏えいした場合、ポリエチレン管設置範囲は重要電源に水が行かないよう建屋内に堰を設けている。また早期発見のため漏えい検知器を設置している。鋼管のフランジ部は養生、受け等を実施し、漏えい水を既存の漏えい検知器が設置されている場所まで導く。(図-2 参照。)

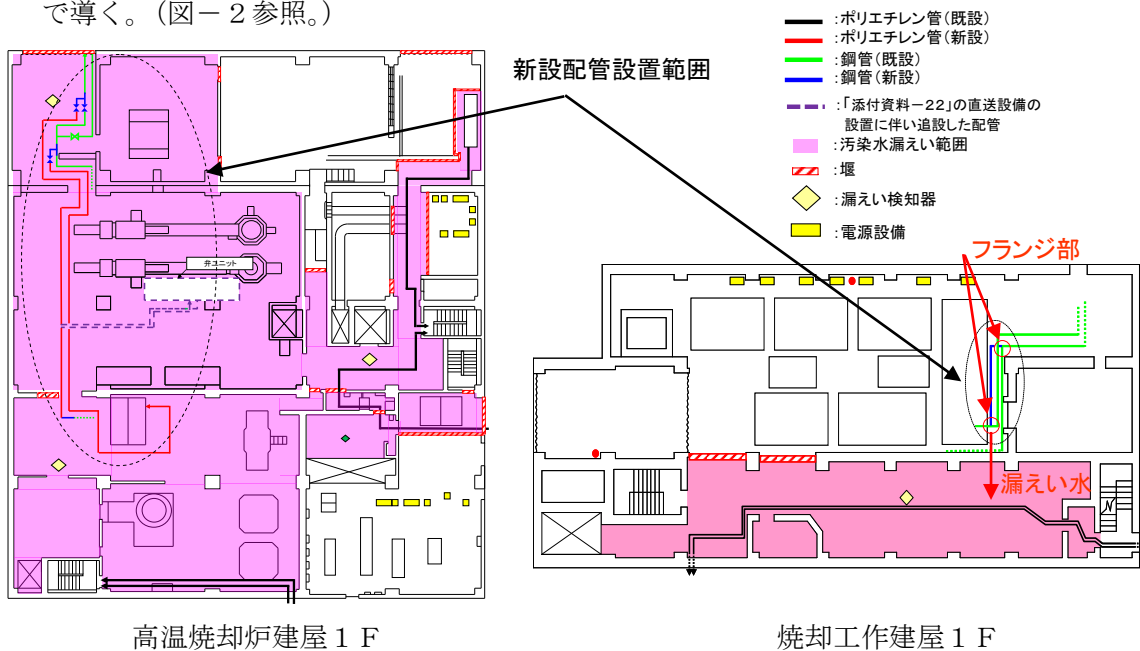


図-2 漏えい検知・漏えい拡大防止について

###### (2) 放射線遮へい・被ばく低減に対する考慮

放射線業務従事者が接近する必要がある箇所は、空間線量当量率が数mSv/h 以下となるように鉛毛マット等による遮へいを設置する。

##### 4.2 環境条件対策

###### (1) 腐食

水による炭素鋼の腐食速度は、「材料環境学入門」(腐食防食協会編, 丸善株式会社)より、0.1mm/年程度と評価される。炭素鋼を使用している移送配管は必要肉厚に対して十分な肉厚があり腐食代を有していることを確認している。

なお、移送配管は、建屋内に設置しており、腐食により万一漏えいが生じたとしても所外に放出されるようなことはない。



## (2)耐放射線性

ポリエチレンは、集積線量が  $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に達すると、引張強度は低下しないが、破断時の伸びが減少する傾向を示すが、ポリエチレン管の照射線量率を  $1 \text{Gy/h}$  と仮定すると、 $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に到達する時間は  $2 \times 10^5$  時間 (22.8 年) と評価される。そのため、ポリエチレン管は数年程度の使用では放射線照射の影響を受けることはないと考えられる。

## (3)凍結、紫外線対策

移送配管は建屋内に設置するため凍結や紫外線の影響を受けることはないと考えられる。

## 4.3 その他

### (1)使用済み吸着塔の発生量予測

高温焼却炉建屋の地下滞留水量は約  $3000 \text{m}^3$  であり、セシウム濃度を 1/100 程度に浄化するため使用するセシウム吸着装置の吸着塔は20本程度(ボックスカルバート約10基程度)である。セシウム吸着装置の使用済み吸着塔は、使用済みセシウム吸着塔一時保管施設(第一施設、第四施設)のコンクリート製ボックスカルバート内に貯蔵するが、使用済み吸着塔空き容量はボックスカルバート350基程度(平成26年9月時点)であり、他設備からの廃棄物発生量(高性能多核種除去設備検証試験装置:吸着塔100基/年程度(ボックスカルバート約17基/年相当)、モバイル型ストロンチウム除去装置:ボックスカルバート11基/月程度、サブドレン他水処理施設:吸着塔5本/年程度(ボックスカルバート約3基/年相当))を考慮しても保管容量には十分余裕があるため、貯蔵には支障をきたさない。

### (2)誤操作の防止に対する考慮

運転員の誤操作を防止するため、運転操作手順書を整備し、弁銘板の取付けと注意を喚起する表示を行う。

## 5. 配管の確認の方針について

### 5.1 構造強度及び機能・性能に関する事項

移送配管の構造強度及び機能・性能に関する確認事項を表-1-1 および表-1-2 に示す。

### 5.2 溶接部に関する事項

溶接部に関する確認事項を表-2 に示す。

表-1-1 構造強度・耐震性及び機能の確認事項（鋼管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度・耐震性	材料確認	主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観・据付確認	各部の外観を確認する。また、据付状態について確認する。※1	有意な欠陥がないこと。 また実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後、圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないことを確認する。※1	確認圧力で保持した後、圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないこと。
機能	機能確認	水が移送できることを確認する。	水が移送できること。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する

表-1-2 構造強度及び機能の確認事項（ポリエチレン管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	材料確認	主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	主要寸法について記録を確認する。	寸法が製造者寸法許容範囲内であること。
	外観・据付確認	各部の外観を確認する。また、据付状態について確認する。※1	有意な欠陥がないこと。 また実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	現場状況を考慮し製造者指定方法・圧力による漏えい有無を確認する。 ※1	耐圧部から漏えいがないこと。
機能	機能確認	水が移送できることを確認する。	水が移送できること。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する

表一2 確認事項（溶接検査）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
溶接検査	材料確認	溶接に使用する材料が、規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものとする。	使用する材料が、規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査	開先形状等が規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査	あらかじめ確認された溶接施工または実績のある溶接施工法または管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。 あらかじめ確認された溶接士による溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工または実績のある溶接施工法または管理されたプロセスを有する溶接施工法であること。 あらかじめ確認された溶接士による溶接が行われていること。
	非破壊試験	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	耐圧・漏えい検査	規定圧力で保持した後、その圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないことを確認する。※1※2	規定圧力で保持した後、その圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないこと。
	外観検査	各部の外観を確認する。 ※1	外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※2：溶接規格等に規定された圧力による耐圧検査が困難な箇所については、代替となる非破壊試験を行う。

以上

セシウム吸着装置により高温焼却炉建屋の滞留水を浄化するために使用する配管  
の耐震性に関する計算書

配管支持の位置を決定するにあたっては、定ピッチスパン法により適正な支持間隔を確保する。定められた間隔で支持することにより、配管系の固有周期を設定し、地震応力が過大とならないようにする。また集中質量部、曲り部、分岐部に発生する応力及び固有周期は、直管部における値を上回らないものとする。

(1) 設計用地震動

項目	耐震 クラス	適用する地震動等		設計用地震力
		水平	鉛直	
機器・配管系	B	静的震度 ( $1.8 \cdot C_i * 1$ )	—	設計用地震力は、 静的地震力とする。

注記 \*1:  $C_i$  は、標準せん断力係数を 0.2 とし、建物・構築物の振動特性、地盤の種類等を考慮して求められる値とする。

(2) 荷重の組合せと許容限界

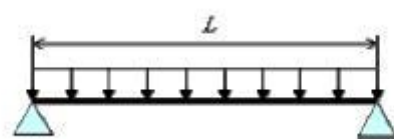
荷重の組合せと許容限界は、原子力発電所耐震設計技術指針（重要度分類・許容応力編 JEAG4601・補－1984, JEAG4601－1987 及び JEAG4601－1991 追補版）（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和 59 年 9 月, 昭和 62 年 8 月及び平成 3 年 6 月）（以下「JEAG4601」という。）及び発電用原子力設備規格（設計・建設規格 JSME S NC1－2005（2007 年追補版含む））（日本機械学会 2005 年 9 月, 2007 年 9 月）（以下「設計・建設規格」という。）に準拠する。

(3) 耐震性評価

a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角 2 方向拘束サポートにて支持される両端単純支持のはりモデル（図－1）とする。

図－1 等分布荷重 両端単純支持はりモデル



次に、当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表－1に示す。

表－1 配管系における各種条件

配管分類	主配管（鋼管）
配管クラス	クラス3相当
耐震クラス	Bクラス相当
設計温度 [°C]	66
配管材質	STPG370
配管口径	100A
Sch	80
設計圧力 [MPa]	1.37
配管支持間隔 [m]	7.5

b. 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z} \quad (1.1)$$

ここで  $S_w$  : 自重による応力 [MPa]  
 $L$  : 支持間隔 [mm]  
 $M$  : 曲げモーメント [N・mm]  
 $Z$  : 断面係数 [mm<sup>3</sup>]  
 $w$  : 等分布荷重 [N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w \quad (1.2)$$

$S_s$  : 地震による応力 [MPa]  
 $\alpha$  : 想定震度値 [-]

また、評価基準値として JEAG4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス3配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + \alpha \cdot S_w = S_p + (1 + \alpha) \cdot S_w \leq 1.0S_y \quad (1.3)$$

ここで、 $S$  : 内圧，自重，地震による発生応力 [MPa]  
 $S_p$  : 内圧による応力 [MPa]  
 $S_y$  : 設計降伏点 [MPa]

c. 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $S_w$  が 30 [MPa] 以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-2に示す。表-2より、自重による応力  $S_w$  を 30 [MPa] 以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-2 応力評価結果

配管分類	主配管 (鋼管)
配管材質	STPG370
配管口径	100A
Sch	80
設計圧力 [MPa]	1.37
内圧, 自重, 地震による発生応力 S [MPa]	50*
供用状態 $C_s$ における 一次許容応力 [MPa]	189

\*添付資料-3「表-3 セシウム吸着装置耐震評価結果」において、水平方向の静的震度 0.36 と 0.57 の耐震評価を実施している。静的震度 0.57 の場合は発生応力を評価すると  $S=56$  [MPa] となり、一次許容応力を下回る。

以上

## 第二セシウム吸着装置における Cs 及び Sr の除去について

### 1. はじめに

止水扉等により耐水性を向上している高温焼却炉建屋に設置されている第二セシウム吸着装置に Cs 及び Sr を除去する吸着塔（以下、「同時吸着塔」という）を装荷することで、滞留水の移送・貯留時におけるリスクの低減を図る。

### 2. 基本設計

#### 2.1 設計方針

##### (1) 処理能力

同時吸着塔は、滞留水に含まれる Cs 濃度を適切な値に低減する能力を有すること。また、Sr については、滞留水に含まれる濃度を低減する能力を有すること。

##### (2) 構造

同時吸着塔は、吸着材をステンレス製の容器に充填し、周囲は鉛等による遮へい材で覆う構造とする。

##### (3) 規格・規準等

同時吸着塔は、設計、材料の選定、製作及び検査について、原則として適切と認められる規格及び規準によるものとする。

##### (4) 放射性物質の漏えい及び管理されない放出の防止

同時吸着塔は、液体状の放射性物質の漏えいの防止のため、設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用する。

##### (5) 放射線遮へいに対する考慮

同時吸着塔は、放射線業務従事者等の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

##### (6) 崩壊熱除去に対する考慮

同時吸着塔は、放射性物質の崩壊熱による温度上昇を考慮し、必要に応じて崩壊熱を除去出来る設計とする。

##### (7) 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

同時吸着塔は、水の放射線分解により発生する可燃性ガスを適切に排出出来る設計とする。

## 2.2 装置概要

同時吸着塔は、ステンレス製の容器（吸着材容器）に吸着材を充填し、周囲は鉛等で遮へいする構造とする。

また、同時吸着塔には、吸着材容器が従来と同じ円筒形の構造（TYPE-A）のもの、中空円筒形の構造（TYPE-B1・B2・B3）のものがある。TYPE-Aは、吸着材容器の外側の遮へい容器（二重筒構造）の中に鉛球等を充填する遮へい構造、TYPE-B1は吸着材容器の外側を鉛板等で覆う遮へい構造、TYPE-B2・B3は吸着材容器の外側を、鉛を铸込んだ遮へいブロック等で覆う遮蔽構造とする。（図-1参照）

一部の同時吸着塔は、高性能多核種除去設備で発生した使用済Cs/Sr同時吸着塔（吸着材含む）、サブドレン他浄化設備で発生した使用済Cs/Sr同時吸着材を再利用して使用する。

なお、TYPE-B1・B2・B3を総称する場合は、TYPE-Bと記載する。

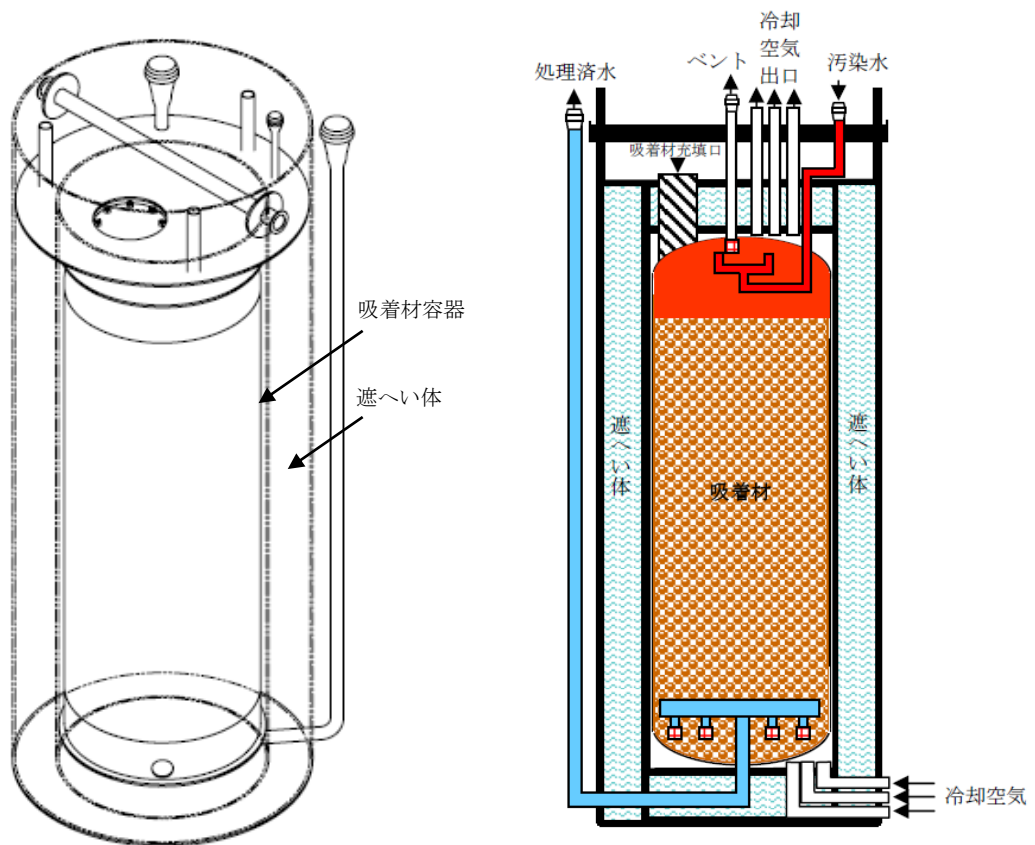
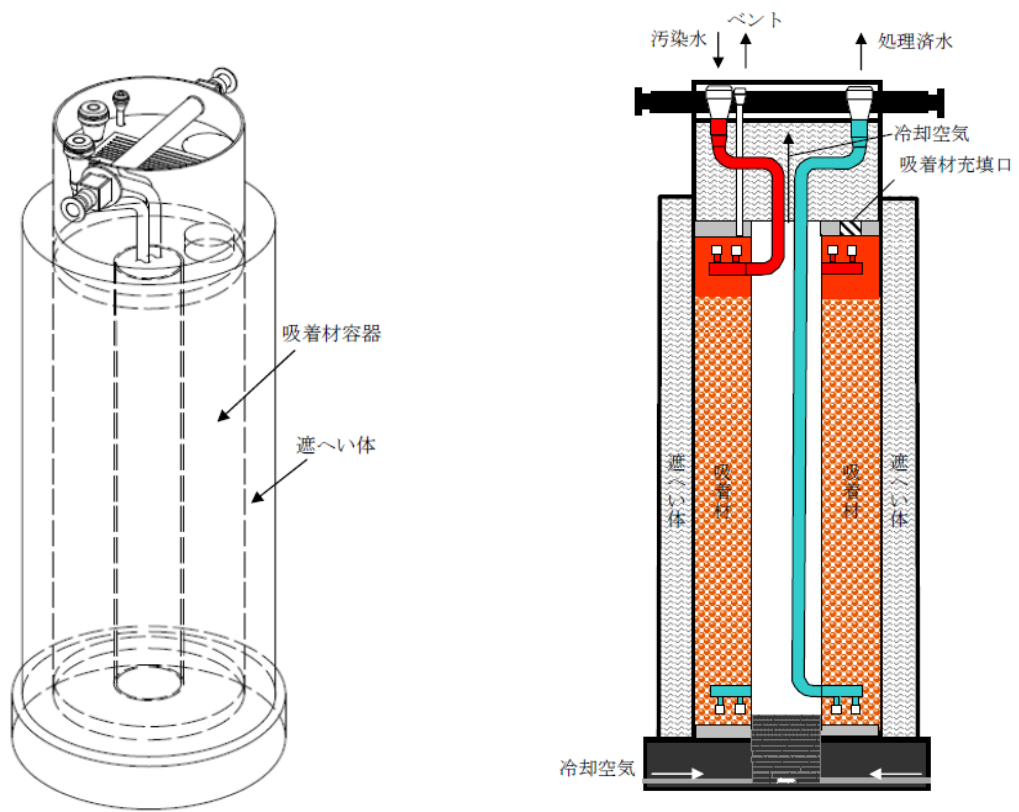
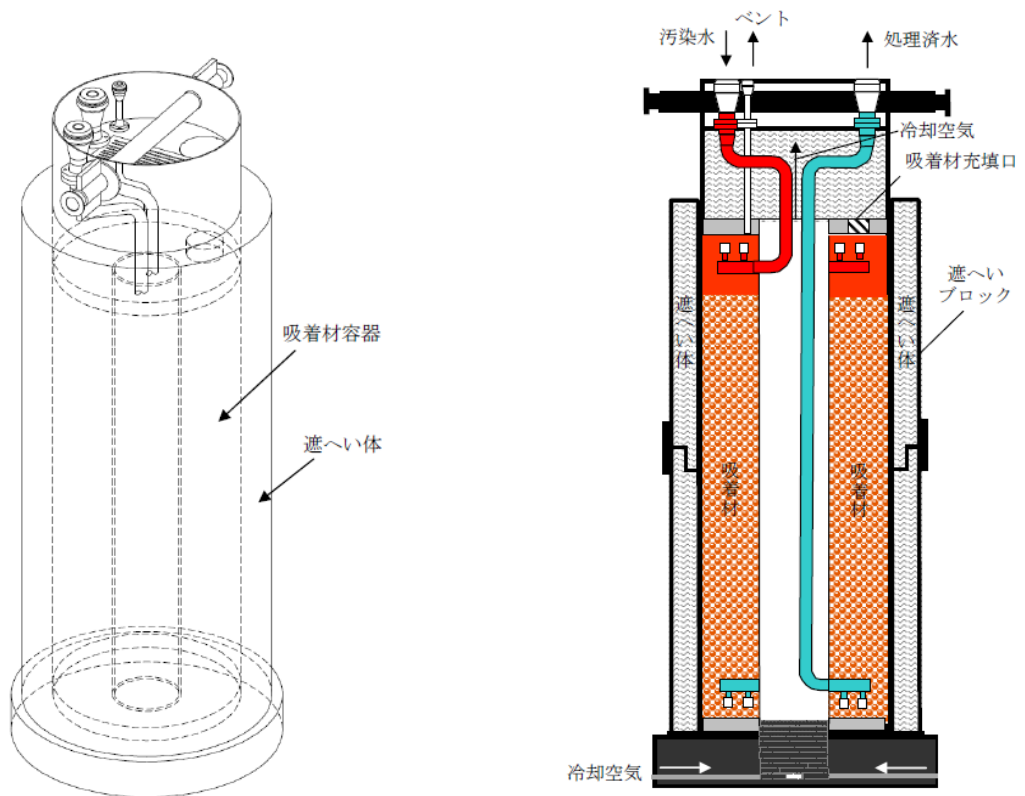


図-1 (1/3) 同時吸着塔外形図及び概念図 (TYPE-A)





TYPE-B1



TYPE-B2

図-1 (2/3) 同時吸着塔外形図及び概念図 (TYPE-B1・B2)

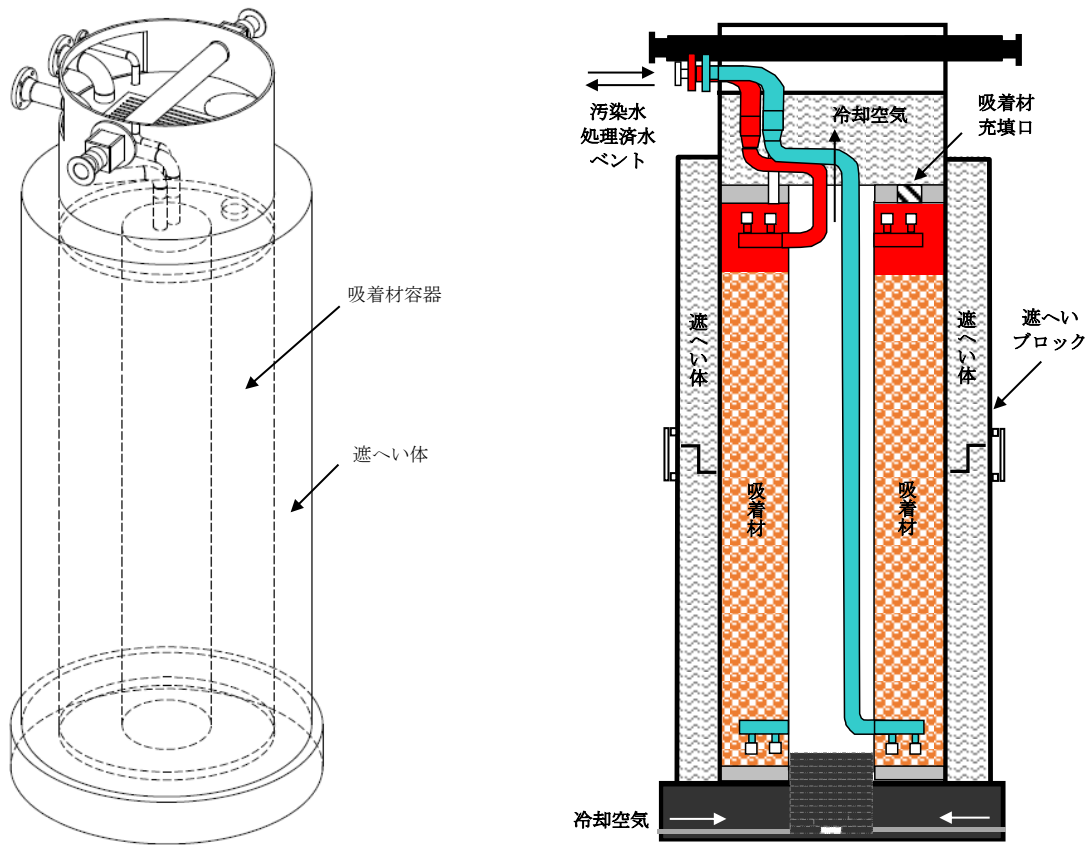


図-1 (3/3) 同時吸着塔外形図及び概念図 (TYPE-B3)

### 2.3 同時吸着塔の性能

同時吸着塔による処理運転時の除染係数は、Cs については従来と同様、適切な値に低減することが要求される。一方、Sr の除去については、特に除染係数は設定せず、系統の出口放射能濃度が低減されていることを目標とする。

同時吸着塔の適用にあたっては、同時吸着塔の性能の低下等に備え、1 系列あたり、滞留水を同時吸着塔 2 塔（以下、「初期装荷の 2 塔」という。）及び Cs 吸着塔 2 塔に通過し、Cs 除去能力を維持した状態で、同時吸着塔の性能を確認<sup>\*</sup>する。

また、同時吸着塔は、性能確認により、第二セシウム吸着装置の安定運転に支障がないことを確認した上で、塔数を増加させる。

※同時吸着塔の性能確認は、初期装荷の 2 塔の取替まで行う。

性能確認の方法は、最前段の同時吸着塔の入口／出口の試料を採取し、Cs 濃度を分析することで実施する。

初期装荷時に、最前段に装荷する同時吸着塔の性能確認の頻度は週 3 回程度とする。

また、初期装荷時に、後段に装荷した同時吸着塔の性能確認の頻度は、上記の性能確認の結果を踏まえ見直す予定。

なお、現状の滞留水の水質の場合、Cs 吸着塔は 2 塔で Cs 除去性能を満足する。

### 2.4 使用済吸着塔の貯蔵

同時吸着塔は、交換時、ろ過水による水置換・水抜きを行い、使用済セシウム吸着塔一時保管施設にて貯蔵する。

第二セシウム吸着装置からの使用済吸着塔の発生量は、年間 48 基程度と想定される。なお、使用済吸着塔保管容量が逼迫する場合には、第二セシウム吸着装置の稼働を優先し他設備の稼働を制限する。

### 3. 構造強度及び耐震性

#### 3.1 基本方針

##### 3.1.1 同時吸着塔 構造強度評価の基本方針

同時吸着塔は、「発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。クラス 3 機器の適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」等（以下、「JSME 規格」という。）で規定されるが、第二セシウム吸着装置は、国内外の製造メーカーが技術的妥当性を有する規格や製造実績等を参考に設計・製作しており、これまで順調に処理を継続している。

従って、同時吸着塔は JSME 規格に限定するものではなく、American Society of Mechanical Engineers（以下、「ASME 規格」という。）BPVC Sec. VIII、日本産業規格（JIS）、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。また、日本産業規格（JIS）、国内外の民間規格に適合した工業用品を採用する。

溶接（溶接施工法および溶接士）は JSME 規格、ASME 規格、日本産業規格（JIS）、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、または同等の溶接とする。また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格（JIS）年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

##### 3.1.2 同時吸着塔 耐震性評価の基本方針

同時吸着塔は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の B クラス相当の設備と位置づけられる。耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」（以下、「耐震設計技術規程」という。）等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態にあわせたものを採用する。B クラス施設に要求される水平震度に対して耐震性を確保できない場合は、その影響について評価を行う。

なお、同時吸着塔については、参考として S クラス相当の評価を行う。

##### 3.1.3 使用済セシウム吸着塔保管施設 構造強度の基本方針

『2.5 汚染水処理設備等 添付資料－3 2.1.1 構造強度評価の基本方針』に同じ。

##### 3.1.4 使用済セシウム吸着塔保管施設 耐震評価の基本方針

『2.5 汚染水処理設備等 添付資料－3 2.1.2 耐震性評価の基本方針』に同じ。

### 3.2 評価結果

#### (1) 構造強度評価（同時吸着塔）

吸着材容器について、設計・建設規格に準拠し、板厚評価を実施した。評価の結果、内圧または外圧に耐えられることを確認した（表－1）。

<内面に圧力を受ける円筒形の胴の場合>

$$t = \frac{PD_i}{2S\eta - 1.2P}$$

t : 胴の計算上必要な厚さ

Di : 胴の内径

P : 最高使用圧力

S : 最高使用温度における  
材料の許容引張応力

η : 長手継手の効率

<外面に圧力を受ける円筒形の胴の場合>

$$t = \frac{3PD_o}{4B}$$

t : 胴の計算上必要な厚さ

Do : 胴の外径

P : 最高使用圧力

B : 設計・建設規格 付録材料図表 Part7 図1 から図20  
までにより求めた値

ただし、tの値は炭素鋼、低合金鋼の場合はt=3[mm]以上、その他の金属の場合はt=1.5[mm]以上とする。

表－1 同時吸着塔 構造強度結果

機器名称	TYPE	評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
第二セシウム吸着装置 同時吸着塔	TYPE-A	板厚	9.6	12
	TYPE-B1・B2	板厚(外筒胴)	8.1	12.7
	TYPE-B1・B2	板厚(内筒胴)	7.3	12.7
第二セシウム吸着装置 同時吸着塔(S32205)	TYPE-B3	板厚(外筒胴)	5.0	12.7
	TYPE-B3	板厚(内筒胴)	7.2	12.7
第二セシウム吸着装置 同時吸着塔(S32750)	TYPE-B3	板厚(外筒胴)	4.1	12.7
	TYPE-B3	板厚(内筒胴)	7.2	12.7

(2) 構造強度評価（配管（鋼製））

設計・建設規格に基づき板厚評価を実施した。評価の結果、最高使用圧力に耐えられることを確認した（表－２）。

$$t = \frac{PD_0}{2S\eta + 0.8P}$$

t : 管の計算上必要な厚さ

D<sub>0</sub> : 管の外径

P : 最高使用圧力[MPa]

S : 最高使用温度における

材料の許容引張応力[MPa]

η : 長手継手の効率

表－２ 同時吸着塔 配管構造強度評価結果

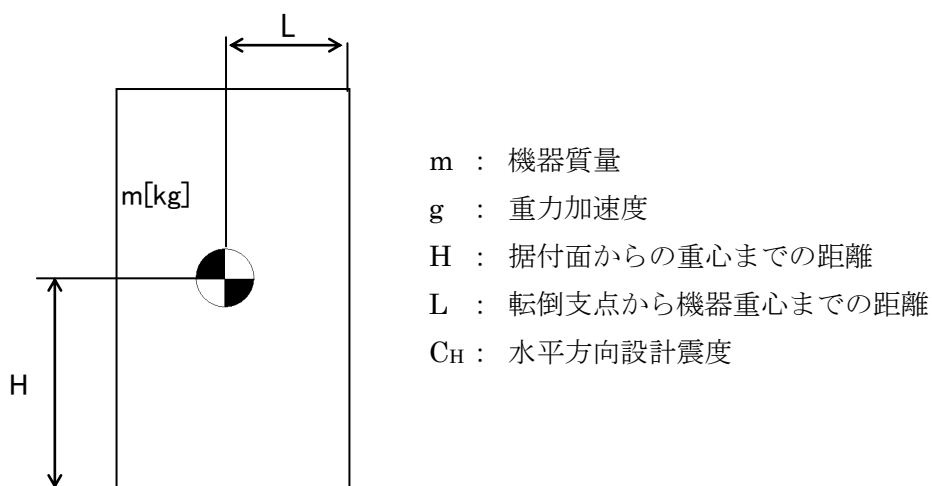
評価機器	口径	Sch.	材質	最高使用 圧力[MPa]	最高使用 温度[°C]	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
配管①	50A	40	SUS316L	1.37	66	0.39	3.9
配管②	80A	40	SUS316L	1.37	66	0.57	5.5
配管③	50A	40	ASME SA790 S32205	1.37	66	0.22	3.91
配管④	80A	40	ASME SA790 S32205	1.37	66	0.33	5.49
配管⑤	50A	40	ASME SA790 S32750	1.37	66	0.19	3.91
配管⑥	80A	40	ASME SA790 S32750	1.37	66	0.27	5.49
配管⑦	50A	40	ASME SA312 S31603	1.37	66	0.40	3.91

(3)耐震性評価（第二セシウム吸着装置）

同時吸着塔（第二セシウム吸着装置）の耐震性評価は，機器質量及び据付面からの重心までの距離が大きいTYPE-Bにより評価する。

a. 転倒評価

地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し，それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果，地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから，転倒しないことを確認した（表-3）。

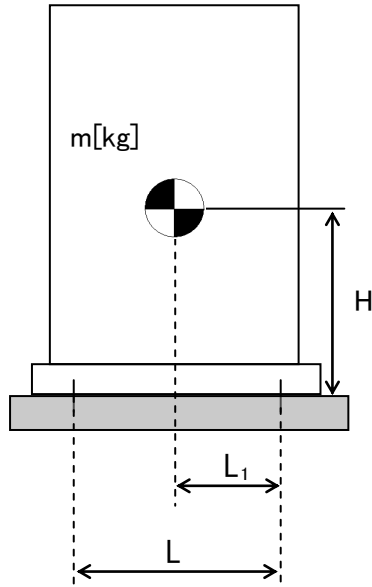


地震による転倒モーメント： $M_1[N \cdot m]=m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント： $M_2[N \cdot m]=m \times g \times L$

b. 基礎ボルトの強度評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠して評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されることを確認した（表-3）。



- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面からの重心までの距離
- $L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離
- $L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離
- $n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数
- $n$  : 基礎ボルトの本数
- $A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積
- $C_H$  : 水平方向設計震度
- $C_V$  : 鉛直方向設計震度

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m \times g \times C_H \times H - m \times g \times (1 - C_V) \times L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times C_H}{n \times A_b}$$

表-3 第二セシウム吸着装置 同時吸着塔耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第二セシウム吸着装置 同時吸着塔	本体	転倒	0.36	170	195	kN・m
			0.41	193		
	基礎ボルト	せん断	0.36	41	133	MPa
			0.55	62		
		引張	0.36	<0	—	MPa
			0.55	56	143	



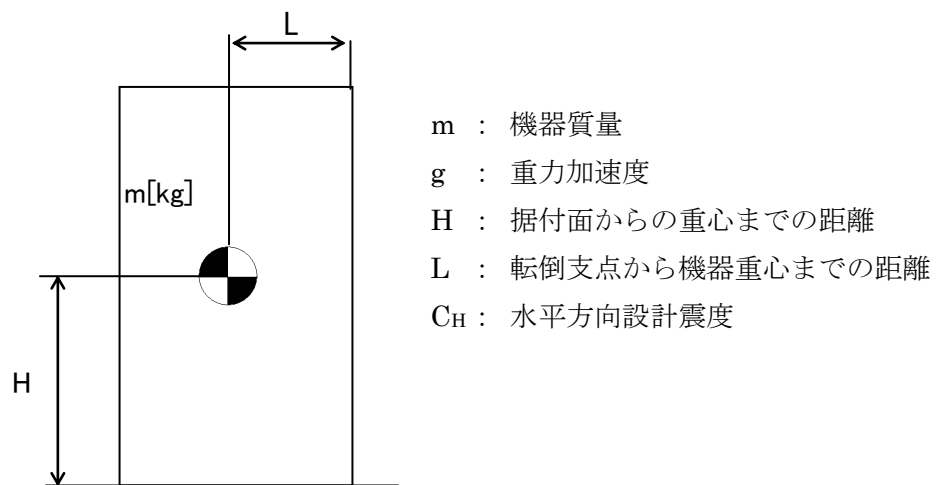
(4) 耐震性評価（使用済セシウム吸着塔一時保管施設）

同時吸着塔（使用済セシウム吸着塔一時保管施設）の耐震性評価は、機器質量及び据付面からの重心までの距離が大きい TYPE-B により評価する。

a. 転倒評価

地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を行った。なお、同時吸着塔 10 塔と同時吸着塔を格納する架台 2 台（一組）で評価を実施した。

評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さくなることから、転倒しないことを確認した（表-4）。



地震による転倒モーメント： $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント： $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

b. 滑動評価

同時吸着塔を格納する架台は、基礎ボルトにて固定していることから基礎ボルトに作用するせん断荷重と許容せん断荷重を比較することより滑動評価を実施した。基礎ボルトの許容せん断荷重は「日本建築学会：各種合成構造設計指針・同解説，鉄骨鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」に基づき次式を用いた。評価の結果，基礎ボルトの破断による滑動が生じないことを確認した（表－4）。

$$q = mg(C_H - \alpha) \div n$$

$$q_a = 0.75 \cdot \phi_{S3} \left( 0.5 \cdot s_c a \cdot \sqrt{F_c \cdot E_c} \right)$$

- q : アンカーボルト一本に作用するせん断荷重
- q<sub>a</sub> : アンカーボルト一本当たりの許容せん断荷重
- C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度
- m : 機器重量
- g : 重力加速度
- α : 機器と床版の摩擦係数
- n : 機器あたりのアンカーボルト本数
- φ<sub>S3</sub> : 短期荷重に対する低減係数
- s<sub>c</sub>a : アンカーボルトの定着部の断面積
- F<sub>c</sub> : コンクリート設計基準強度
- E<sub>c</sub> : コンクリートのヤング率

表－4 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 同時吸着塔耐震評価結果

機器名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
同時吸着塔＋架台	転倒	0.36	2.0×10 <sup>3</sup>	4.3×10 <sup>3</sup>	kN・m
		0.60	3.3×10 <sup>3</sup>		
	滑動 (ボルトせん断)	0.36	<0	—	kN
		0.60	10	77	

#### 4. 同時吸着塔の具体的な安全確保策

同時吸着塔は、高濃度の放射性物質を扱うため、漏えい防止対策、放射線遮へい、崩壊熱除去、可燃性ガス滞留防止、環境条件等について具体的に安全確保策を以下の通り定め、実施する。

##### 4.1 放射性物質漏えい防止等に対する考慮

###### (1) 漏えい発生防止等

- a. 同時吸着塔の吸着材容器は、腐食による漏えい発生を防止するために、耐腐食性を有するステンレス材の使用を基本とする。

###### (2) 漏えい検知・漏えい拡大防止

『2.5 汚染水処理設備等 添付資料－5 1.1. (2) 漏えい検知・漏えい拡大防止』に同じ。

###### (3) 放射線遮へい・被ばく低減に対する考慮

- a. 同時吸着塔は、放射線業務従事者の被ばく低減のため、現行の設備と同様に、吸着塔表面の線量当量率が 4mSv/h 以下となるように遮へいする。
- b. 同時吸着塔は、吸着塔交換等の際、放射線業務従事者が近づく可能性があることから、吸着塔表面の線量当量率等の表示により注意喚起することで、放射線業務従事者の被ばく低減を図る。

###### (4) 崩壊熱除去

- a. 同時吸着塔に吸着した放射性物質の崩壊熱は、処理水を通水することにより除熱する。また、通水がない状態でも崩壊熱による温度上昇は1時間当たり2℃未満である。

なお、吸着塔内部の温度は、最も高温となる水を抜いた状態であっても、吸着材及び構造材料に影響しない範囲で収束する。

#### (5) 可燃性ガスの滞留防止

- a. 水の放射線分解により発生する可能性のある可燃性ガスは、通水時は処理水とともに排出される。通水停止後は、吸着塔上部に設けたオートベント弁・ベント管を介して可燃性ガスを屋外に排出する。

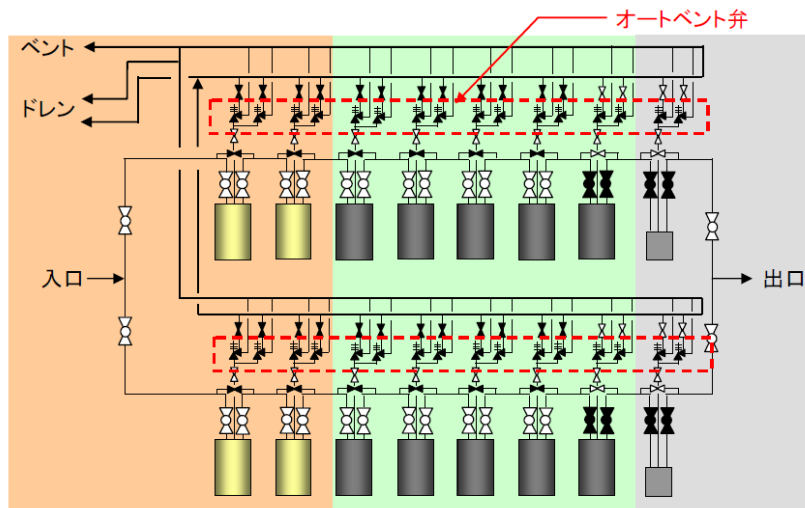


図2 系統概略図 (オートベント弁の設置箇所)

#### 4.2 環境条件対策

##### (1) 腐食

同時吸着塔は、耐腐食性を有するステンレス材を用いており、腐食により滞留水が漏えいする懸念はない。

##### (2) 熱による劣化

滞留水の温度は、ほぼ常温のため、金属材料の劣化の懸念はない。

##### (3) 凍結

滞留水を処理している過程では、水が流れているため凍結の恐れはない。滞留水の処理を停止した場合でも、同時吸着塔は屋内に設置されていることから、凍結の懸念はない。

##### (4) 使用済吸着塔長期保管時の考慮

同時吸着塔は耐腐食性を有する材料選定<sup>\*</sup>、漏えい防止措置(水抜き状態での保管)、安全評価(崩壊熱・可燃性ガス・遮へいに係わる解析評価)等により、長期保管を考慮した設計としている。また、以下の環境条件については、長期保管に影響しないことを確認している。

※同時吸着塔は、耐腐食性を有する材料(ステンレス材)であるが、腐食により損傷が発生する可能性を低減する観点で、吸着塔内部の滞留水をろ過水で置換し、水抜きした状態で貯蔵する。なお、新たな知見が確認された場合には、点検等の必要性について検討する。

a. 熱による劣化

同時吸着塔はステンレス材を用いており、温度評価の結果を踏まえると、熱による影響は考えにくい。

b. 凍結

長期保管中、同時吸着塔は水抜きされた状態で保管されることから、凍結に対する配慮は必要ない。

c. 生物汚染

長期保管中、同時吸着塔は水抜きされた状態で保管されることから、生物汚染に対する配慮は必要ない。

d. 耐放射線性

同時吸着塔は、ステンレス材を用いており、樹脂系のような放射線による劣化は考えにくい。

e. 紫外線

同時吸着塔はステンレス材を用いており、樹脂系のような紫外線劣化は考えにくい。

f. 可燃性ガスの滞留防止

使用済吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、内部の水抜きを実施する。また、バントを開けた状態で保管することにより、可燃性ガスを大気に放出する。

#### 4.3 火災対策

同時吸着塔は、火災発生を防止するため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用する。また、初期消火のために、近傍に消火器を設置し、避難口の表示を設置する。なお、火災発生は、巡視点検、監視カメラにより確認できる。

## 5. 温度評価

### 5.1 評価概要

滞留水の処理に伴い使用済吸着塔が発生する。これらは、水抜き後に使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵するが、高濃度の放射性物質を内包していることから崩壊熱による温度上昇を評価し、同時吸着塔の機能への影響について確認を行う。

なお、同時吸着塔の温度評価では、保守的に、吸着材容器内部の温度上昇に伴い生じる、外気と吸着材容器内部の空気の置換を考慮しない。

### 5.2 評価方法

使用済セシウム吸着塔一時保管施設で保管する際の同時吸着塔内部の最高温度について評価を行う。

同時吸着塔は使用済セシウム吸着塔一時保管施設では図-3、4に示すように鉛遮へい体を含む容器として保管される。

#### <TYPE-A>

遮へい容器上下には配管があり、内部空気温度が上昇して対流が発生することで外気が入口配管から流入し、吸着材容器側面で上昇流となり、出口配管から流出する。これにより吸着材容器外表面及び遮へい容器内表面は空気の自然通風で除熱される。また、遮へい容器外表面は空気の自然対流で除熱される。

同時吸着塔の温度は、セシウム吸着（約  $2.1 \times 10^{15}$  Bq/塔）、ストロンチウム吸着（約  $1.2 \times 10^{15}$  Bq/塔）による発熱量、外気温度を  $40^\circ\text{C}$  と仮定し、STAR-CD Ver4.08 を用いて三次元解析により求めた。

#### <TYPE-B1・B2>

TYPE-B1・B2 は、熱伝導率が小さく、吸着塔内の温度が高くなる TYPE-B1 により評価する。遮へい容器の上下に開口部を設けてあり、遮へい容器下部の中心部はラビリンス構造となっている。内部の空気温度が上昇して対流が発生すると、外気は下部開口部からラビリンス部を経て吸着材容器中空部で上昇流となり、遮へい容器上部の開口部から流出する。これにより、吸着材容器は空気の自然通風により除熱される。また、遮へい容器外表面は空気の自然対流で除熱される。

吸着塔の温度は、セシウム吸着（約  $3.8 \times 10^{15}$  Bq/塔）、ストロンチウム吸着（約  $2.2 \times 10^{15}$  Bq/塔）による発熱量、外気温度を  $40^\circ\text{C}$  と仮定し、STAR-CCM+Ver. 7.06 を用いて三次元解析により求めた。

#### <TYPE-B3>

TYPE-B3 は、TYPE-B1・B2 と同様の構造である。吸着塔の温度は、セシウム吸着（約  $3.8 \times 10^{15}$  Bq/塔）、ストロンチウム吸着（約  $2.5 \times 10^{15}$  Bq/塔）による発熱量、外気温度を  $40^\circ\text{C}$  と仮定し、STAR-CCM+Ver. 12.04 を用いて三次元解析により求めた。

### 5.3 評価結果

評価の結果、大気への放熱が定常になる際の同時吸着塔中心部温度は、TYPE-A において約 470℃、TYPE-B1・B2 において約 340℃、TYPE-B3 において約 320℃、鉛の最高温度は、TYPE-B1・B2 において約 210℃、TYPE-B3 において約 140℃と評価された。同時吸着塔内での発熱は吸着材の健全性（吸着材は 600℃程度まで安定）や鉛の遮へい性能に影響を与えるものではないことを確認した。TYPE-A の評価結果を図－5、TYPE-B の評価結果を図－6 に示す。

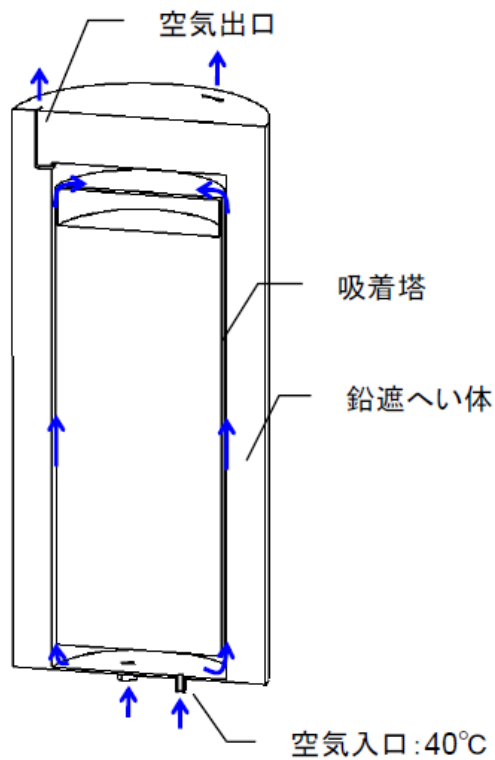


図-3 (TYPE-A) 同時吸着塔  
解析モデル (概念図)

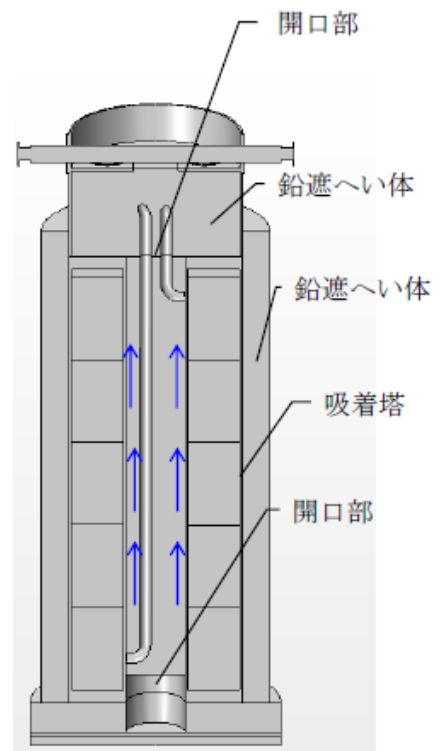


図-4 (TYPE-B) 同時吸着塔  
解析モデル (概念図)

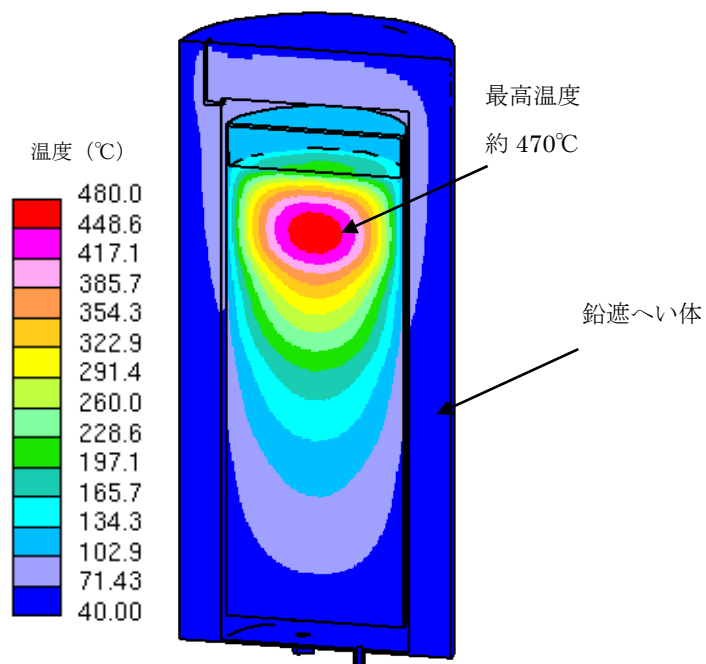


図-5 (TYPE-A) 三次元解析による  
同時吸着塔の温度分布



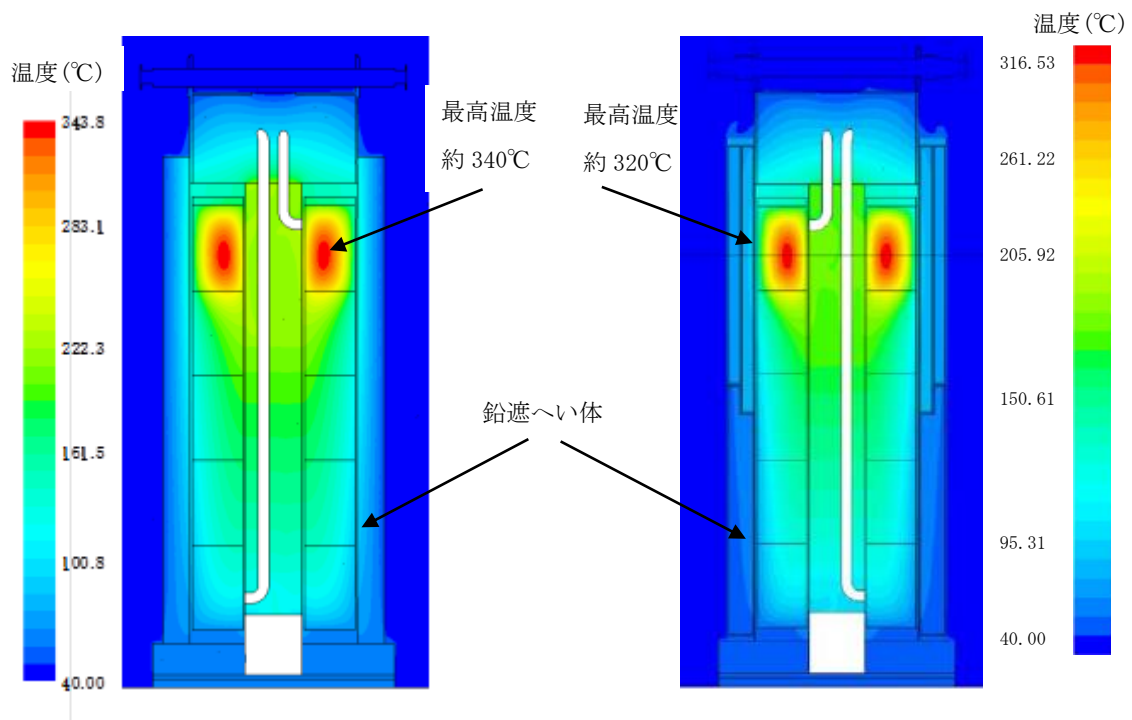


図-6 (左: TYPE-B1・B2, 右: TYPE-B3) 三次元解析による同時吸着塔の温度分布

## 6. 水素評価

### 6.1 評価概要

使用済吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、内部の水抜き後に使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵するが、高濃度の放射性物質を内包しており、内部に残留する湿分等の放射線分解により、可燃性ガスが発生する恐れがあることから、使用済吸着塔内部の可燃性ガスの濃度を評価し、その濃度が4%未満であることを確認する。なお、同時吸着塔の水素評価では、吸着材領域が水で満たされているとし、保守的に吸着塔内部の温度上昇は考慮しない。

### 6.2 評価方法

吸着塔内の吸着材充填領域から発生した可燃性ガスは、吸着塔上部の空間部に排出され、空気との混合気体となる。吸着塔は、保管時にベント管と取水側のノズルを開放し、上部空間の混合気体は空気との密度差により上昇しベント管から排出される。また、排出された混合気体の体積に応じて、取水側ノズルから空気が流入する（図7参照）。このときの混合気体の排出と空気の流入量を算出し、吸着塔内の水素濃度を評価した。

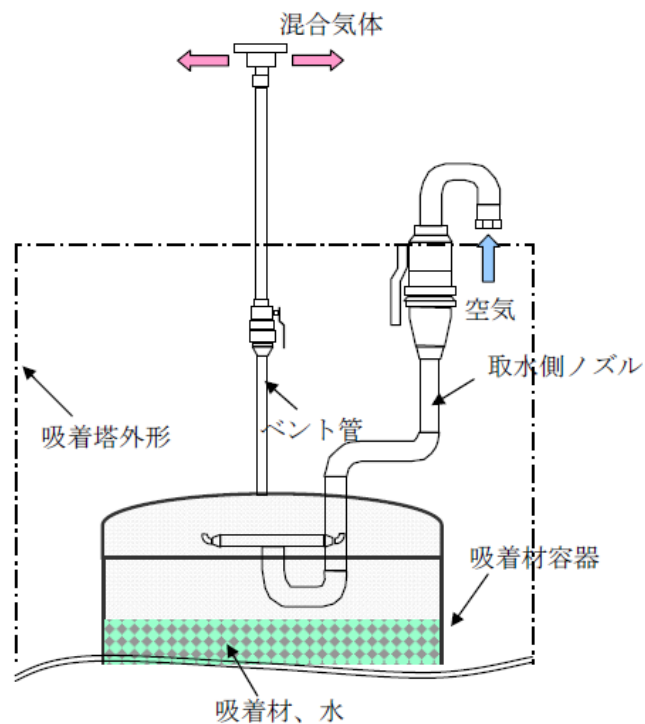


図7 使用済吸着塔 保管時の概略図 (TYPE-A の例)

### 6.3 水素発生量

水素は、吸着した核種の崩壊エネルギーが容器内に残留する水に吸収され発生する。水素発生速度H(mol/s)は次式により求めた。

$$H = G \times E \div A$$

H：水素発生速度

G：水が100eVのエネルギーを吸収した際に発生する水素分子の個数，0.45

E：水が吸収するエネルギー：(TYPE-A) 約 $1.69 \times 10^{19}$  (100eV/s)

(TYPE-B1・B2) 約 $5.14 \times 10^{19}$  (100eV/s)

(TYPE-B3) 約 $7.13 \times 10^{19}$  (100eV/s)

A：アボガドロ数 ( $6.02 \times 10^{23}$ 個/mol)

### 6.4 評価結果

評価の結果，吸着塔の自然換気が定常となる際の可燃性ガスの濃度は，TYPE-A において約3.0%，TYPE-B1・B2において約3.1%，TYPE-B3において約3.6%と評価された。

なお，吸着塔内部の温度上昇を考慮した場合 ( $\Delta T=15^\circ\text{C}$ )，吸着塔内部の可燃性ガスの濃度は，TYPE-A において約1.5%，TYPE-B1・B2において約1.7%，TYPE-B3において約2.5%と評価された。

7. 同時吸着塔の確認の方針について

7.1 構造強度及び機能・性能に関する事項

同時吸着塔の構造強度及び機能・性能に関する確認事項を表－5に示す。

7.2 溶接部に関する事項

溶接部に関する確認事項を表－6に示す。

なお、海外からの輸入品に関する確認記録には、工程管理表等が含まれる。

7.3 主配管（鋼管）に関する事項

主配管（鋼管）に関する確認項目を表－7に示す。

7.4 主配管（耐圧ホース）に関する事項

主配管（耐圧ホース）に関する確認項目を表－8に示す。

表－5 構造強度及び機能・性能に関する確認事項

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	使用材料を確認する。	実施計画の通りであること（※1）
	寸法確認	主要寸法（板厚，内径（または外径））を確認する。	実施計画の通りであること（※1）
	外観確認 据付確認	吸着塔の外観に有意な欠陥がないことを確認する。 吸着塔の据付状態を確認する。	有意な欠陥がないこと。 吸着塔の据付状態に異常のないこと。
	耐圧・ 漏えい 確認	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていること，各部からの漏えいのないことを確認する。	確認圧力に耐え，かつ構造物の変形がないこと。また，各部から漏えいのないこと。
機能・ 性能 (※2)	機能確認	通常運転状態にて漏えい試験を行う。	各部から漏えいのないこと。
	性能確認	通常運転状態にて系統出口水の放射能濃度を確認する。	系統出口水の放射能が低減されていること。

(※1) 別紙-1 参照

(※2) 外観の確認等により代替する場合がある。

表－6 溶接部に関する確認事項

確認項目	確認内容 (※1)	判定
材料確認	使用材料を確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。(※2)
		溶接に使用する材料が、ASME Sec. VIII等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
開先確認	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物の有無を確認する。	開先面に溶接に悪影響を及ぼす欠陥、付着物が無いこと。
	開先形状が JSME 規格・ASME 規格等に適合していることを確認する。	開先形状が JSME 規格・ASME 規格等に適合していること。
溶接作業確認	溶接施工法が、確認試験等により、適合性が確認されたものであることを確認する。	溶接施工法が、溶接規格第2部に定める溶接施工法認証標準に基づく確認試験を実施し合格したもの、または電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認されたもの、または溶接施工法認証標準と同等の施工会社社内認証標準に基づく確認試験を実施し合格したもの、または ASME 規格に基づき認定されたものであること。
	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であることを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者</li> <li>・溶接技能認証標準と同等と認められる JIS の適合性証明書交付受領者</li> <li>・溶接技能認証標準と同等の施工会社社内技能認証標準に基づく有資格者</li> <li>・電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認された有資格者</li> <li>・ASME 規格に基づき認定された有資格者</li> </ul>	溶接士は、実機作業が可能となる次のいずれかの資格を有し、同資格が有効期限内であることを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・溶接規格第3部に定める溶接士技能認証標準に基づく有資格者</li> <li>・溶接技能認証標準と同等と認められる JIS の適合性証明書交付受領者</li> <li>・溶接技能認証標準と同等の施工会社社内技能認証標準に基づく有資格者</li> <li>・電気事業法に基づき実施された検査において適合性が確認された有資格者</li> <li>・ASME 規格に基づき認定された有資格者</li> </ul>
	溶接が、適合性を有する溶接施工法によって、溶接士の保有する資格の作業範囲内で行われていることを確認する。	溶接が、適合性を有する溶接施工法で行われていること。 溶接士が保有する資格の作業範囲内で行われていること。
非破壊確認 (※4)	溶接部について非破壊検査を行い、その結果が JSME 規格または ASME 規格等に適合していることを確認する。	溶接部の非破壊検査結果が JSME 規格または ASME 規格等に適合していること。
機械確認 (※4)	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い、当該試験片の機械的性質が JSME 規格等に適合していることを確認する。(※3)	溶接部を代表する試験片の機械試験結果が、JSME 規格等に適合していること。
耐圧確認	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていること、各部からの漏えいがないことを確認する。 また、耐圧確認が困難な箇所については、代替試験にて確認する。	耐圧試験に耐え、かつ、漏えいがないこと。 代替試験については、JSME 規格または ASME 規格等に適合していること。
外観確認	溶接部の外観に異常がないことを確認する。	溶接部の外観に異常がないこと。

(※1) 海外からの輸入品に関する確認範囲は、「東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則」の第26条第4号に規定する範囲とする。

なお、適用する規格等で使用が認められている材料の溶接部に関わる確認は、適用する規格等の条件に適合していることについて行う。

(※2) 別紙-1 参照

(※3) 実機と同じ溶接条件、同仕様の材料で製作した試験片により確認する場合がある。

(※4) 適用する規格等に要求がない場合は確認を省略する。

表－7 確認事項（主配管（鋼管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径，厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1 ※2	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

※2 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表－8 確認事項（主配管（耐圧ホース））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

## 同時吸着塔の主要仕様

1. 塔数 (最大) 5塔/系
2. 使用条件 最高使用圧力: 1.37MPa  
最高使用温度: 66°C
3. 性能 Cs: 系統の出口放射能濃度が  $10^2$  オーダー-Bq/cc 以下であること  
Sr: 放射能濃度が低減されていること

## 4. 主要仕様

## (1) TYPE-A

項目		仕様
構造		円筒形
材料	胴板	SUS316L
	遮へい材	Pb
	付属配管 (鋼管)	SUS316L
寸法	外径	Φ914.4mm
	胴板 (厚さ)	12mm
	付属配管 (鋼管)	50A/Sch. 40
	(呼び径/厚さ)	80A/Sch. 40 (相当材を含む)

## (2) TYPE-B1

項目		仕様
構造		中空円筒形
材料	胴板	ASME SA240 TYPE 316L ASME SA312 TYPE 316L
	遮へい材	Pb
	付属配管 (鋼管)	ASME SA312 TYPE 316L ASTM A312 TYPE 316L
寸法	外径 (外筒胴)	Φ965.2mm
	内径 (内筒胴)	Φ330.2mm
	胴板 (厚さ)	12.7mm
	付属配管 (鋼管)	50A/Sch. 40S
(呼び径/厚さ)	80A/Sch. 40S	



## (2)TYPE-B2

項 目		仕 様
構造		中空円筒形
材料	胴板	ASME SA240 TYPE 316L ASME SA312 TYPE 316L ASME SA240 UNS S31803 ASME SA790 UNS S31803 ASME SA240 UNS S32205 ASME SA790 UNS S32205
	遮へい材	Pb
	付属配管 (鋼管)	ASME SA312 TYPE 316L ASTM A312 TYPE 316L ASME SA790 UNS S32205 ASTM A790 UNS S32205 ASME SA790 UNS S31803 ASTM A790 UNS S31803
寸法	外径 (外筒胴)	Φ965.2mm
	内径 (内筒胴)	Φ330.2mm
	胴板 (厚さ)	12.7mm
	付属配管 (鋼管) (呼び径/厚さ)	50A/Sch. 40S 80A/Sch. 40S

## (3) TYPE-B3

項 目		仕 様
構 造		中空円筒形
材 料	胴板	ASME SA240 S32205
		ASME SA240 S32750
		ASME SA790 S32205
		ASME SA790 S32750
	遮へい材	Pb
	付属配管(鋼管)	ASME SA790 S32205
		ASME SA790 S32750
寸 法	外径(外筒胴)	$\phi$ 965.2mm
	内径(内筒胴)	$\phi$ 330.2mm
	胴板(厚さ)	12.7mm
	付属配管(鋼管) (呼び径/厚さ)	50A/Sch. 40 80A/Sch. 40

以上

廃止（RO 濃縮塩水を移送する配管の追設について）

フランジタンク撤去に伴い本内容を削除

以上

## 滞留水移送装置による水位調整が不可能なエリアの対応について

### 1. 基本的対応方針について

滞留水移送装置は、1～4号機の各建屋に1箇所の排水位置を計画しているが、建屋排水系等の連通によって、建屋のほとんどのエリアで水位調整が行えるものと考えられる。しかしながら、今後の建屋水位低下や連通部の位置関係から、局所的に水位調整が出来なくなるエリアが発生することも想定される。このような状態変化に伴って、エリア水抜きが困難と評価した場合は、Ⅲ.3.1.7の運用に基づき個別に対応を行う。

プロセス主建屋，高温焼却炉建屋の地下階を介さずに  
滞留水を処理装置へ移送する設備について

1. 基本設計

1.1 設置の目的

プロセス主建屋，高温焼却炉建屋の地下階を介さずに滞留水を処理装置へ移送する設備（以下，「直送設備」という。）は，滞留水移送装置から送られる滞留水をプロセス主建屋地下階，高温焼却炉建屋地下階を介さずにセシウム吸着装置，第二セシウム吸着装置へ移送すること，滞留水をプロセス主建屋地下階，高温焼却炉建屋地下階へ移送することを目的とする。

1.2 設計方針

(1) 規格・基準

設計，材料の選定，製作及び検査について，JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格），日本工業規格（JIS 規格）等<sup>※1</sup>を適用することにより信頼性を確保する。

※1

「金属材料に関する規格」

- ・ JIS G 3454 圧力配管用炭素鋼鋼管（主配管）
- ・ 欧州規格（ポンプ）

「非金属材料に関する規格」

- ・ JWWA K144 水道配水用ポリエチレン管（主配管）
- ・ ISO 規格（主配管）

「溶接に関する規格」

- ・ JSME S NB1 発電用原子力設備規格 溶接規格等

(2) 長期停止に対する考慮

直送設備のうち移送ポンプについては多重化，配管については各移送先へ移送する配管を独立させることで，単一故障時に切替え作業等によって，速やかな移送再開が可能なよう設計する。また，電源喪失時においても，弁の手動操作により，プロセス主建屋地下階，高温焼却炉建屋地下階への移送，セシウム吸着装置への移送再開が可能な設計とする。

(3) 誤操作の防止に対する考慮

直送設備は，運転員の誤操作を防止するため，運転操作手順書を整備し，弁銘板の取付けを行う。運転員の誤操作，誤判断を防止するために，特に重要な操作については，ダブ

ルアクションを要する等の設計とする。

(4)設備保全に対する考慮

直送設備は、機器の重要度に応じた有効な保全を計画し、実施が可能な設計とする。

(5)検査可能性に対する設計上の考慮

直送設備は、適切な方法で検査ができるよう、漏えい検査・通水検査等が可能な設計とする。

(6)監視・操作に対する考慮

直送設備は、シールド中央制御室もしくは免震重要棟集中監視室において計器の監視、警報発報及び遠隔操作が可能な設計とする。

### 1.3 主要な設備

直送設備の主要設備は、ポンプと配管から構成される。ポンプと配管の仕様詳細は 2.5.2 基本仕様（以下抜粋）を参照。

#### ①第二セシウム吸着装置第二ブースターポンプ（完成品）

台数 2  
 容量 50m<sup>3</sup>/h（1 台あたり）  
 揚程 103m

#### ②セシウム吸着装置ブースターポンプ（完成品）

台数 2  
 容量 50m<sup>3</sup>/h（1 台あたり）  
 揚程 103m

#### ③配管

主要配管仕様（1 / 2）

名称	仕様	
4号機弁ユニットから プロセス主建屋、高温焼却炉建屋弁ユ ニット入口まで (ポリエチレン管)	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
4号機弁ユニット入口分岐から 4号機弁ユニット出口合流まで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径	100A/Sch. 40
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット入口から 高温焼却炉建屋弁ユニット出口まで	呼び径／厚さ	100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋北側取り合いまで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃

主要配管仕様 (2 / 2)

名称	仕様	
高温焼却炉建屋1階取り合いから 高温焼却炉建屋弁ユニット出口まで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋1階東側取り合いまで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 80, 100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 高温焼却炉建屋1階ハッチまで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
高温焼却炉建屋弁ユニット出口から 第二セシウム吸着装置入口まで	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 80, 100A/Sch. 80
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃
プロセス主建屋1階西側取り合いから プロセス主建屋地下階	呼び径/厚さ	100A/Sch. 80
	材質	STPG370, STPT370
	最高使用圧力	1.37MPa
	最高使用温度	66℃



## 2. 構造強度及び耐震性

### 2.1 構造強度

直送設備は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス3 機器に準ずるものと位置付けられ、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）、日本工業規格（JIS）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、日本工業規格（JIS）またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

溶接（溶接施工法および溶接士）は JSME 規格、日本工業規格（JIS）、および発電用火力設備に関する技術基準を定める省令にて認証された溶接、または同等の溶接とする。また JSME 規格で規定される材料の日本工業規格（JIS）年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。さらに、JSME 規格に記載のない非金属材料（ポリエチレン管等）については、日本工業規格（JIS）や日本水道協会規格（JWWA）、ISO 規格を用いて設計を行う。

### 2.2 耐震性

直送設備を構成する主要機器のうち、ポンプ類、配管類（鋼管）は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の B クラス相当の設備と位置づけられ、耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠する。

配管類は変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定、配管等に可撓性のある材料を使用）を用いる。（詳細は別紙1 参照。）

### 3. 直送設備の具体的な安全確保策

直送設備は高レベルの放射性物質を通すため、漏えい防止対策、放射線遮へい、自然災害対策、環境条件等について具体的に安全確保策を以下の通り定め、実施する。

#### 3.1 放射性物質の漏えい防止等に対する考慮

##### (1) 漏えい発生防止

漏えいの発生を防止するため、直送設備は設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用する。

##### (2) 漏えい検知・漏えい拡大防止

(a) 屋内に設置する機器（弁ユニット、ブースターポンプ）の周囲には受けパンを設置し、その中に漏えい検知器を設置する。

(b) 屋内に設置する配管のうちポリエチレン管や鋼管のフランジ部の設置範囲に堰を設けている。また早期発見のため漏えい検知器を設置している。

(c) 漏えい検知の警報は、シールド中央制御室及び免震重要棟集中監視室に表示し、運転員が適切な措置をとれるようにする。

#### 3.2 放射線遮へい等に対する考慮

##### (1) 放射線遮へいに対する考慮

放射線業務従事者等の線量を低減する観点から、直送設備の配管については、直接、放射線業務従事者が近づく可能性のある箇所を対象に、鉛マット等にて遮へいを行い、空間線量当量率（遮へいを含む配管表面から 1m の位置）の目標値を 1mSv/h 以下とする。

#### 3.3 自然災害対策

##### (1) 津波

直送設備については、仮設防潮堤によりアウターライズ津波による浸水を防止する。また、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は、システムを停止し、隔離弁を閉止することで、汚染水の流出を防止する。なお、津波による配管損傷があった場合でも、システムを停止することで、汚染水の漏えいは限定的なものとなる。

##### (2) 強風

直送設備は強風による直接的な損傷の可能性が低い鉄筋コンクリート造の建屋内に設置する。

##### (3) 豪雨

直送設備は、鉄筋コンクリート造の建屋内に設置するため、豪雨により設備の安全性が損なわれる可能性は低い。

#### (4) 火災

直送設備については、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用し、設備周辺からは可能な限り可燃物を排除し、各建屋は施錠管理を行うことで不用意な立入を制限すること及び設備点検することで火災の発生を予防している。巡視点検を行うことで火災の検知を行い、設備近傍に消火器を設置することで初期消火に対応ができるようにする。

### 3.4 環境条件対策

#### (1) 腐食

主配管は耐腐食性を有するポリエチレン管、内面がポリエチレンライニングされた炭素鋼管もしくは、十分な肉厚を有する炭素鋼の鋼管を用いる。ポンプは既設と同様に耐腐食性を有するステンレス製のものを用いる。

#### (2) 熱による劣化

系統水の温度は、常温であるため熱による劣化の懸念はない。

#### (3) 凍結に対する考慮

滞留水を移送している過程では、水が流れているため凍結の恐れはない。滞留水の移送を停止した場合でも、直送設備は、4号機タービン建屋、高温焼却炉建屋内に設置されており、過去の実績から氷点下になることはないため、凍結の懸念はない。

#### (4) 紫外線に対する考慮

直送設備は建屋内に設置するため紫外線の影響を受けることはない。

#### (5) 耐放射線性

ポリエチレンは、集積線量が  $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に達すると、引張強度は低下しないが、破断時の伸びが減少する傾向を示すが、ポリエチレン管の照射線量率を  $1 \text{Gy/h}$  と仮定すると、 $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に到達する時間は  $2 \times 10^5$  時間 (22.8 年) と評価される。そのため、ポリエチレン管は数年程度の使用では放射線照射の影響を受けることはないと考えられる。

### 3.5. その他

#### (1) プロセス主建屋と高温焼却炉建屋のリスク低減

直送設備により、プロセス主建屋と高温焼却炉建屋を滞留水の貯留箇所から外すことが可能となる（プロセス主建屋と高温焼却炉建屋の滞留水処理の第一段階）が、現在の計画では、地下水他流入量の多い1～4号機の滞留水処理を早期に進める観点から、当該建屋の滞留水処理は2018年度下期以降に開始する予定。

そのため、滞留水処理開始までのリスク低減として以下を実施する。

- ・ 1～4号機の滞留水の放射能濃度に応じた移送による希釈運転
- ・ 高温焼却炉建屋地下階の循環浄化

(添付資料18「セシウム吸着装置により高温焼却炉建屋の滞留水を浄化するために使用する配管について」の4.3項(1)「使用済み吸着塔の発生量予測」を参照。)

なお、プロセス主建屋については、滞留水処理を進めてリスク低減を行うことを基本とするため、循環浄化が実施出来るよう準備を進めるが、建屋滞留水の水位低下の進捗状況に応じて循環浄化の実施要否を判断する。なお、プロセス主建屋を循環浄化する際には、高温焼却炉建屋のリスク低減の結果や一時保管施設の状況を踏まえ、実施計画を別途定める。

#### 4. 直送設備に係る確認事項

直送設備の構造強度・耐震性及び機能・性能等に関する確認事項を表－1～6に示す。

表－1 確認事項（ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	漏えい 確認※1	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無について確認する。	耐圧部から漏えいがないこと。
性能	運転性能 確認※1	ポンプの運転性能の確認を行う。	実施計画に記載した容量を満足すること。また異音，発煙，異常振動等がないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

表－2 確認事項（鋼管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径，厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・ 漏えい 確認 ※1 ※2	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

※2 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表－3 確認事項（ポリエチレン管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	材料確認	実施計画に記載した材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1 ※2	現場状況を考慮し製造者指定方法・圧力による漏えい有無を確認する。	耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※2 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表－4 確認事項（漏えい検知器）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	装置の据付位置を確認する。	実施計画のとおりであること。
機能	漏えい警報確認 ※1	漏えい信号により、警報が作動することを確認する。	警報が作動すること。

※1 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

表－5 確認事項（管・ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
機能	通水確認	直送設備に通水する。	直送設備でセシウム吸着装置等へ水を移送できること。

表－6 確認事項（管の溶接検査）

確認項目	確認内容	判定
材料確認	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することであること。
開先確認	開先形状等が溶接規格等に適合することであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合することであること。
溶接作業確認	あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
非破壊確認	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合することであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合することであること。
耐圧・漏えい確認 外観確認 ※1	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無及び外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

以上

## 直送設備の構造強度及び耐震性

直送設備を構成する設備について、構造強度評価の基本方針及び耐震性評価の基本方針に基づき構造強度及び耐震性の評価を行う。

### 1. 基本方針

#### 1.1 構造強度評価の基本方針

直送設備のうち、鋼材を使用している鋼管については、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格）のクラス 3 機器に準じた評価を行う。

ポリエチレン管は、ISO 規格、JWWA 規格に適合したものを適用範囲内で使用することで、構造強度を有すると評価する。

#### 1.2 耐震性評価の基本方針

直送設備のうち放射性物質を内包するものは、発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針の B クラス相当の設備と位置づけられる。耐震性評価にあたっては、JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程等に準拠することを基本とする。

鋼管については、定ピッチスパン法で評価されるサポート間隔とする。なお、ポリエチレン管は、可撓性により耐震性を確保する。



## 2. 強度評価

### 2.1 配管

#### 2.1.1 評価箇所

強度評価箇所を図-1に示す。

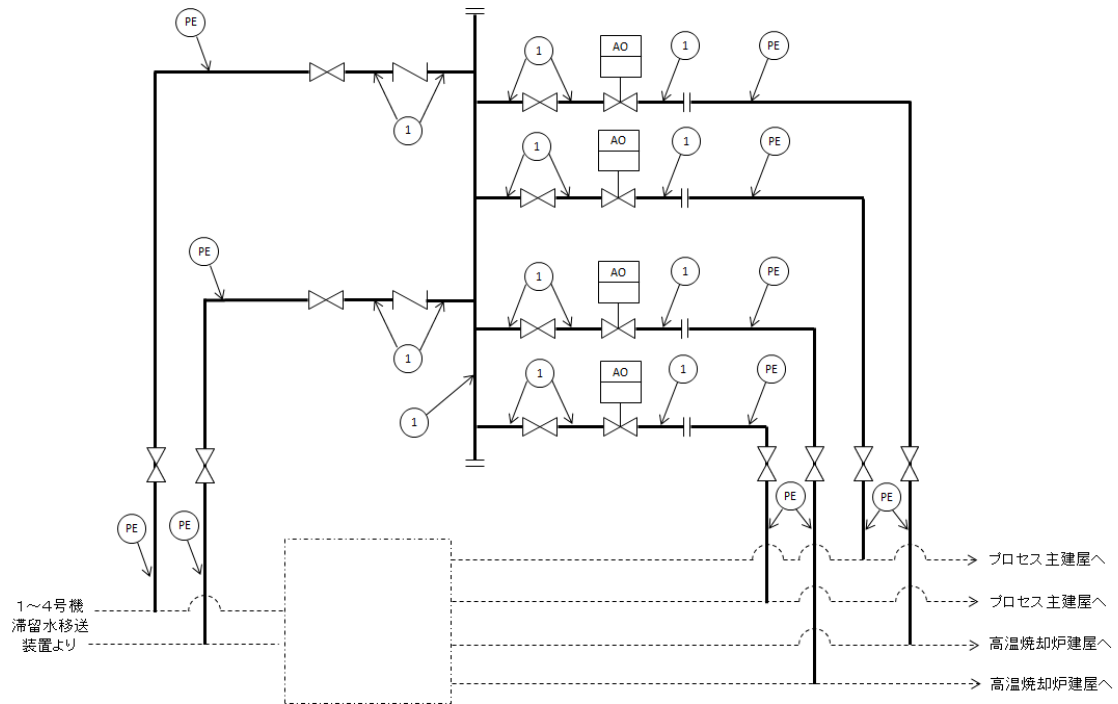


図-1 (1/5) 4号機タービン建屋 弁ユニット周り概略配管図

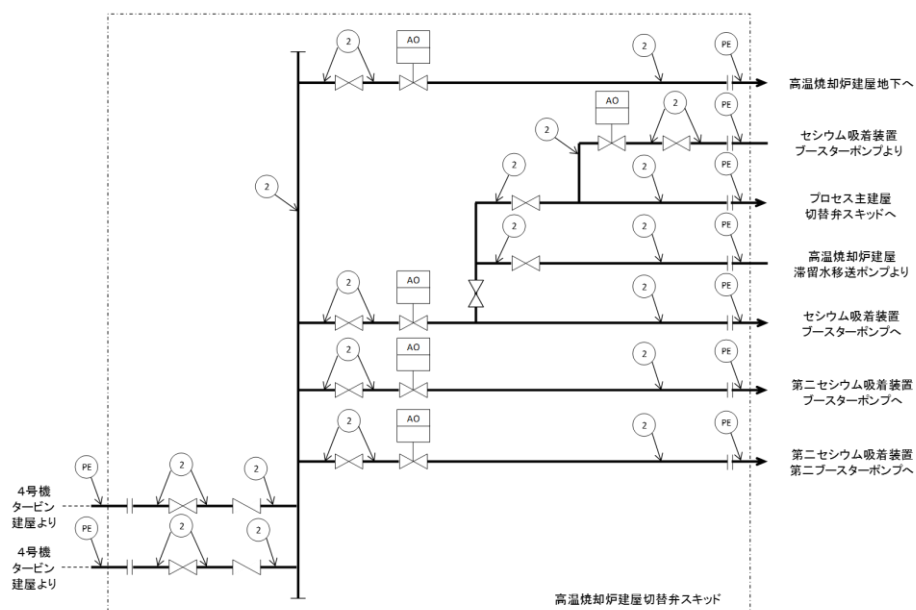


図-1 (2/5) 高温焼却炉建屋 弁ユニット周り概略配管図

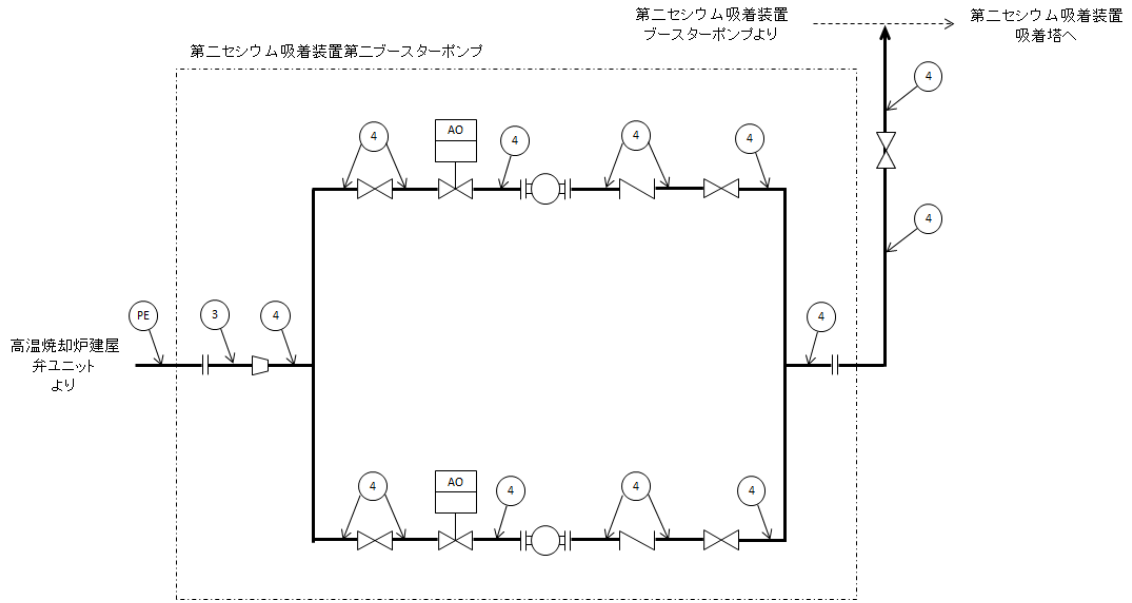


図-1 (3/5) 高温焼却炉建屋 第二セシウム吸着装置第二ブースターポンプ周り概略配管図

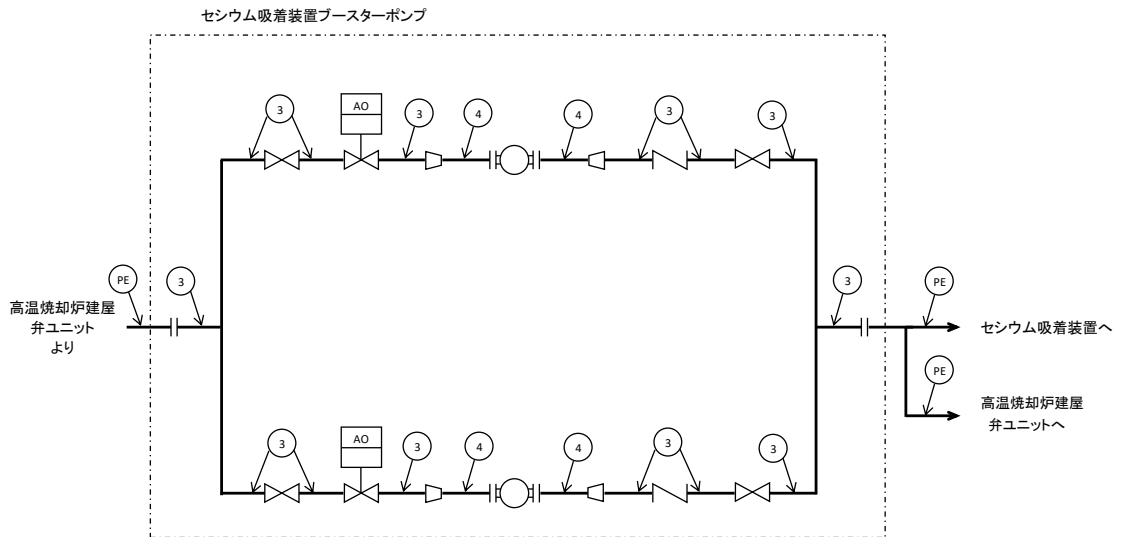


図-1 (4/5) 高温焼却炉建屋 セシウム吸着装置ブースターポンプ周り概略配管図

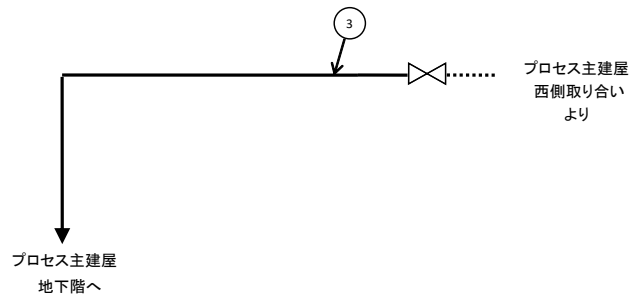


図-1 (5/5) プロセス主建屋 西側取り合いからプロセス建屋地下の概略配管図

2.1.2 評価方法（JSME 規格 PPD-3411）

(1) 管の厚さの評価

管の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 管の計算上必要な最小必要厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_0}{2S \cdot \eta + 0.8P}$$

P：最高使用圧力（MPa）

$D_0$ ：管の外径（mm）

S：許容引張応力（MPa）

$\eta$ ：継手効率（-）

b. 炭素鋼鋼管の規格上必要な最小必要厚さ： $t_2$

PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた管の厚さとする。

2.1.3 評価結果

評価結果を表-1に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-1 配管の評価結果（管の厚さ）

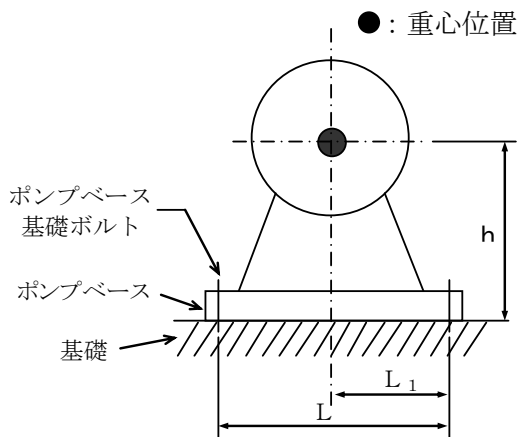
No.	口径	Sch	材料	最高使用 圧力 (MPa)	最高使用 温度 (°C)	必要肉厚 (mm)	肉厚 (mm)
配管①	100A	40	STPG370	1.0	40	0.62	6.0
配管②	100A	80	STPG370	1.0	40	0.62	8.6
配管③	100A	80	STPG370	1.37	66	0.84	8.6
配管④	80A	80	STPG370	1.37	66	0.66	7.6

### 3. 耐震性評価

#### 3.1 基礎ボルト※の強度評価

原子力発電所耐震設計技術指針の評価方法に準拠し、主要機器の基礎ボルトについて強度評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されることを確認した（表－2）。※機器が架台に据え付けられる構造の場合は取付ボルトと称する。

##### a. ポンプ



$m$  : 機器の運転時質量

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$h$  : 据付面から重心までの距離

$M_P$  : ポンプ回転により働くモーメント (0)

※基礎ボルトに  $M_P$  は作用しない

$L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離

$L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離 ( $L/2$ )

$n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数

$n$  : 基礎ボルトの本数

$A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.36)

$C_V$  : 鉛直方向設計震度 (0)

$C_P$  : ポンプ振動による震度

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m g (C_H + C_P) h + M_P - m g (1 - C_V - C_P) L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f A_b}$$

$$\text{基礎ボルトに作用するせん断力} : Q_b = m g (C_H + C_P)$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{Q_b}{n A_b}$$

表-2 基礎ボルトの強度評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第二セシウム吸着装置 第二ブースタポンプ	本体	転倒	0.36	$6.0 \times 10^3$	$4.5 \times 10^4$	N・m
			0.72	$1.2 \times 10^4$	$4.5 \times 10^4$	
	基礎ボルト	せん断	0.36	$6.5 \times 10^0$	$3.8 \times 10^1$	MPa
			0.72	$1.3 \times 10^1$	$3.8 \times 10^1$	
		引張	0.36	< 0	-	MPa
			0.72	< 0	-	

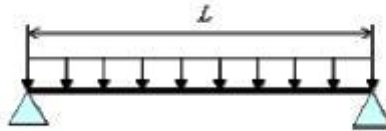
機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
セシウム吸着装置 ブースタポンプ	本体	転倒	0.36	$7.6 \times 10^3$	$5.8 \times 10^4$	N・m
			0.72	$1.5 \times 10^4$	$5.8 \times 10^4$	
	基礎ボルト	せん断	0.36	$7.6 \times 10^0$	$3.8 \times 10^1$	MPa
			0.72	$1.6 \times 10^1$	$3.8 \times 10^1$	
		引張	0.36	< 0	-	MPa
			0.72	< 0	-	

### 3.2 主配管の耐震性評価

#### a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角 2 方向拘束サポートにて支持される両端単純支持のはりモデル（図－2）とする。

次に、当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表－3に示す。



図－2 等分布荷重 両端単純支持はりモデル

表－3 配管系における各種条件

配管分類	主配管（鋼管）			
配管クラス	クラス3相当			
耐震クラス	Bクラス相当			
No	①	②	③	④
配管口径	100A	100A	100A	80A
Sch	40	80	80	80
配管材質	STPG370	STPG370	STPG370	STPG370
設計圧力 [MPa]	1.0	1.0	1.37	1.37
設計温度 [°C]	40	40	66	66
配管支持間隔 [m]	7.0	7.5	7.5	6.5

#### b. 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力を評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z}$$

$S_w$	: 自重による応力	[MPa]
$L$	: 支持間隔	[mm]
$M$	: 曲げモーメント	[N・mm]
$Z$	: 断面係数	[mm <sup>3</sup> ]
$w$	: 等分布荷重	[N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w$$

$S_s$	: 地震による応力	[MPa]
-------	-----------	-------

$\alpha$  : 想定震度値 [-]

また、評価基準値として JEAC4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス 3 配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = Sp + Sw + Ss = Sp + Sw + \alpha \cdot Sw = Sp + (1 + \alpha) \cdot Sw \leq 1.0Sy$$

$S$  : 内圧, 自重, 地震による発生応力 [MPa]

$Sp$  : 内圧による応力 [MPa]

$Sy$  : 設計降伏点 [MPa]

c. 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $Sw$  が 30 [MPa]以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-4に示す。表-4より、自重による応力  $Sw$  を 30 [MPa]以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-4 応力評価結果 (主配管 (鋼管))

配管分類	主配管 (鋼管)			
	①	②	③	④
配管 No				
配管口径	100A	100A	100A	80A
Sch	40	80	80	80
配管材質	STPG370	STPG370	STPG370	STPG370
設計圧力 [MPa]	1.0	1.0	1.37	1.37
設計温度 [°C]	40	40	66	66
内圧, 自重, 地震による発生応力 $S$ [MPa] (水平地震動 0.36)	47.6	46.8	49.2	46.0
(水平地震動 0.72)	57.7	57.4	59.8	56.1
供用状態 $C_s$ における 一次許容応力 [MPa]	215	215	189	189

以上



直送設備の範囲

図-1～3に直送設備の範囲（赤色）を示す。

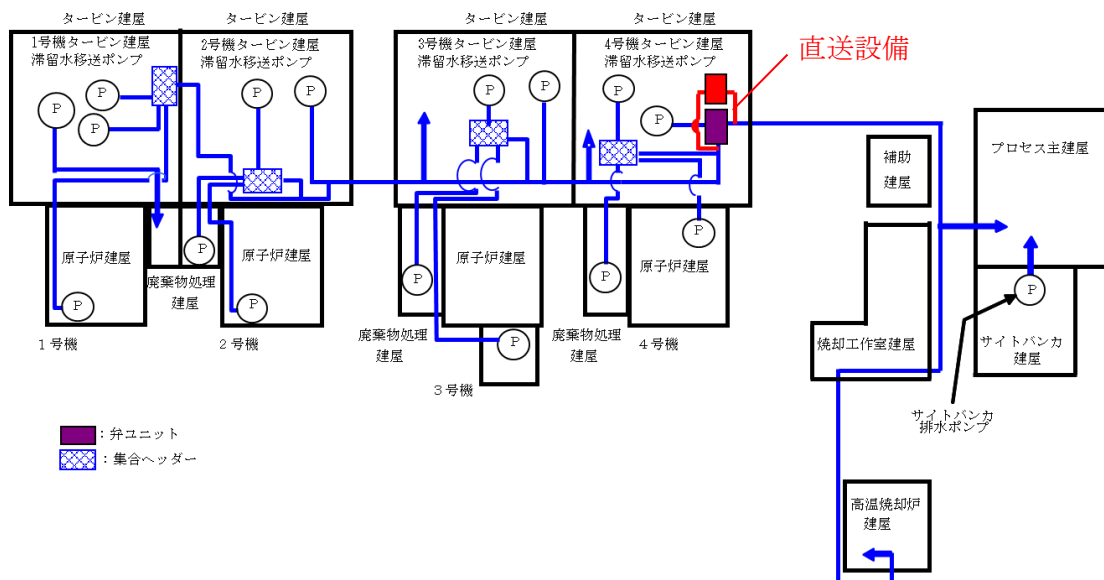


図-1 直送設備の範囲図（移送装置全体系統図）

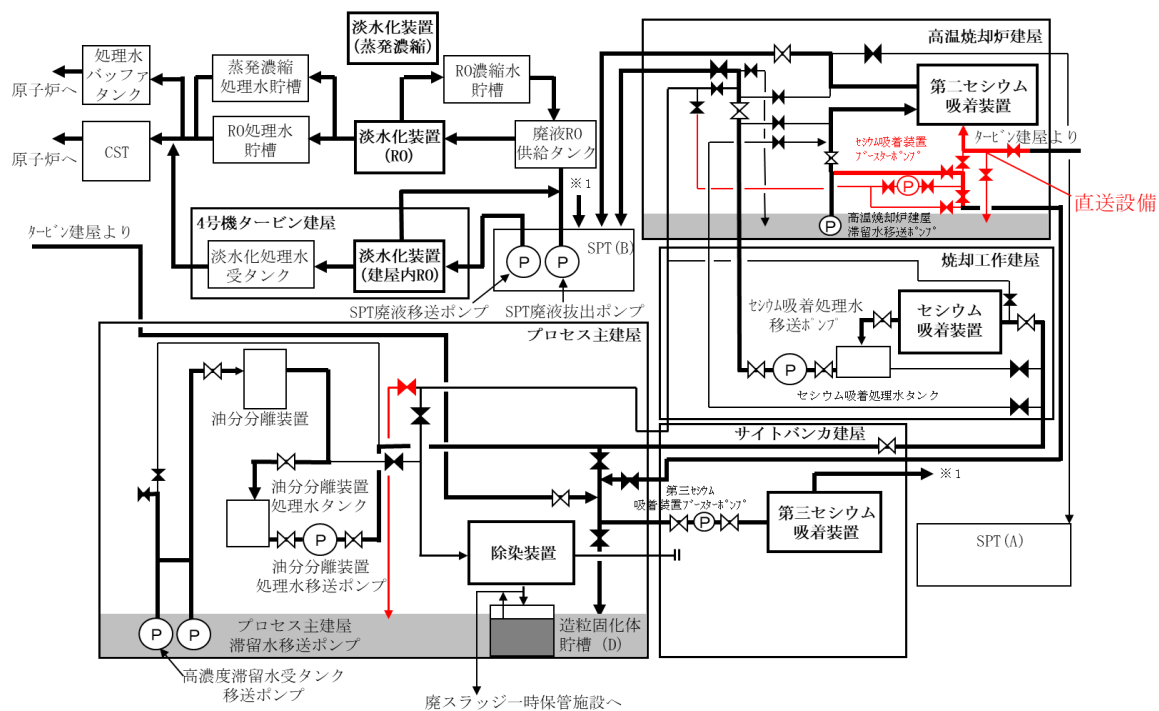


図-2 直送設備の範囲図（処理装置の系統構成図）

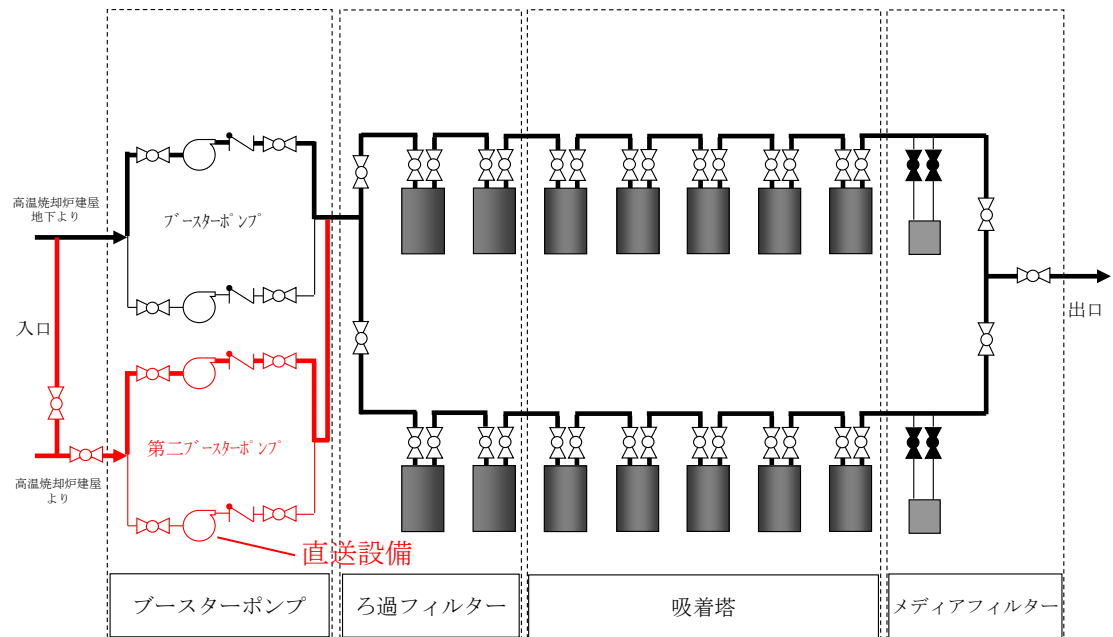


図-3 直送設備の範囲図 (第二セシウム吸着装置の系統構成図)

使用済セシウム吸着塔一時保管施設の架台とボックスカルバートについて

1. 自然災害対策等

(1) 津波

本施設は、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 28m 以上の場所に設置する。

(2) 台風・竜巻等

ボックスカルバートおよび架台は重量物であり、台風・竜巻等の強風によって容易に動くことはない。

(3) 積雪

ボックスカルバートは RC 構造であり、架台は鋼製構造物であるので、福島県建築基準法施行細則に基づく積雪荷重に対する強度は十分高い。

(4) 落雷

落雷が発生しても、ボックスカルバートおよび架台は、使用済みのセシウム吸着塔等を静的に保管する施設であり、安全機能に影響を及ぼすことはない。

(5) 火災

ボックスカルバートおよび架台は鉄筋コンクリートあるいは鋼製構造物からなり、火災が発生する可能性は低いですが、初期消火の対応ができるよう、近傍に消火器を設置する。

2. 架台とボックスカルバートに係る確認事項について

H25. 8. 14 以降に設計された使用済セシウム吸着塔一時保管施設の架台とボックスカルバートに係る主要な確認事項を表 1， 2 に示す。

表1 架台の確認事項

確認事項	検査項目	確認内容	判定基準
構造検査	材料検査	主要材料（上部・下部はり）を品質記録にて確認する。	機器重量（吸着塔）に耐える部材が使用されていること。 BCR295/SS400
	寸法検査	吸着塔の保管スペースを品質記録にて確認する。	保管に際して、支障をきたさないスペースが確保されていること。 約1535mm×約1600mm 約1518mm (H25.8.13以前に設計された架台)
	据付検査	実施計画書記載のとおり据付されていることを確認する。	実施計画のとおり据付されていること。
	外観検査	各部の外観（確認可能な範囲）を確認する。	有意な欠陥がないこと。
性能検査	容量検査	実施計画書記載のとよりの吸着塔保管容量を確認する。	実施計画書記載のとよりの吸着塔保管容量があること。

表2 ボックスカルバートの確認事項

確認事項	検査項目	確認内容	判定基準
構造検査	材料検査	主要構造物（蓋・ボックスカルバート・コンクリート遮蔽版）における主要材料を品質記録にて確認する。	比重：2.3以上
	寸法検査	主要構造物（蓋・ボックスカルバート・コンクリート遮蔽版）における主要厚さ寸法を品質記録にて確認する。	蓋：約400mm ボックスカルバート：約203mm コンクリート遮蔽版：約200mm
	据付検査	実施計画書記載のとおり据付されていることを確認する。	実施計画のとおり据付されていること。
	外観検査	各部の外観（確認可能な範囲）を確認する。	有意な欠陥がないこと。
性能検査	容量検査	実施計画書記載のとよりの吸着塔保管容量を確認する。	実施計画書記載のとよりの吸着塔保管容量があること。

以上

## SPT 建屋の構造強度及び耐震性について

### 1 はじめに

サプレッション・プール水サージタンクが設置されている建屋（SPT 建屋）について、基準地震動  $S_s$  に対し、地下外壁が崩壊しないことを確認する。なお、判定は地下階の耐震壁が終局限界に至らないことを確認する。

## 2 解析評価方針

SPT 建屋の耐震安全性評価は、基準地震動  $S_s$  を用いた地震応答解析によることを基本とし、建物・構築物や地盤の応答性状を適切に表現できるモデルを設定した上で行う。

解析モデルは、地下階から地上階に設置された機器を含む建屋全域を NS, EW 方向とも多軸質点系モデルとする。

地下耐震壁の評価は、地震応答解析により得られた該当部位の最大せん断ひずみが、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) を超えないことを確認することとする。

SPT 建屋の地震応答解析の評価手順例を、図 2-1 に示す。

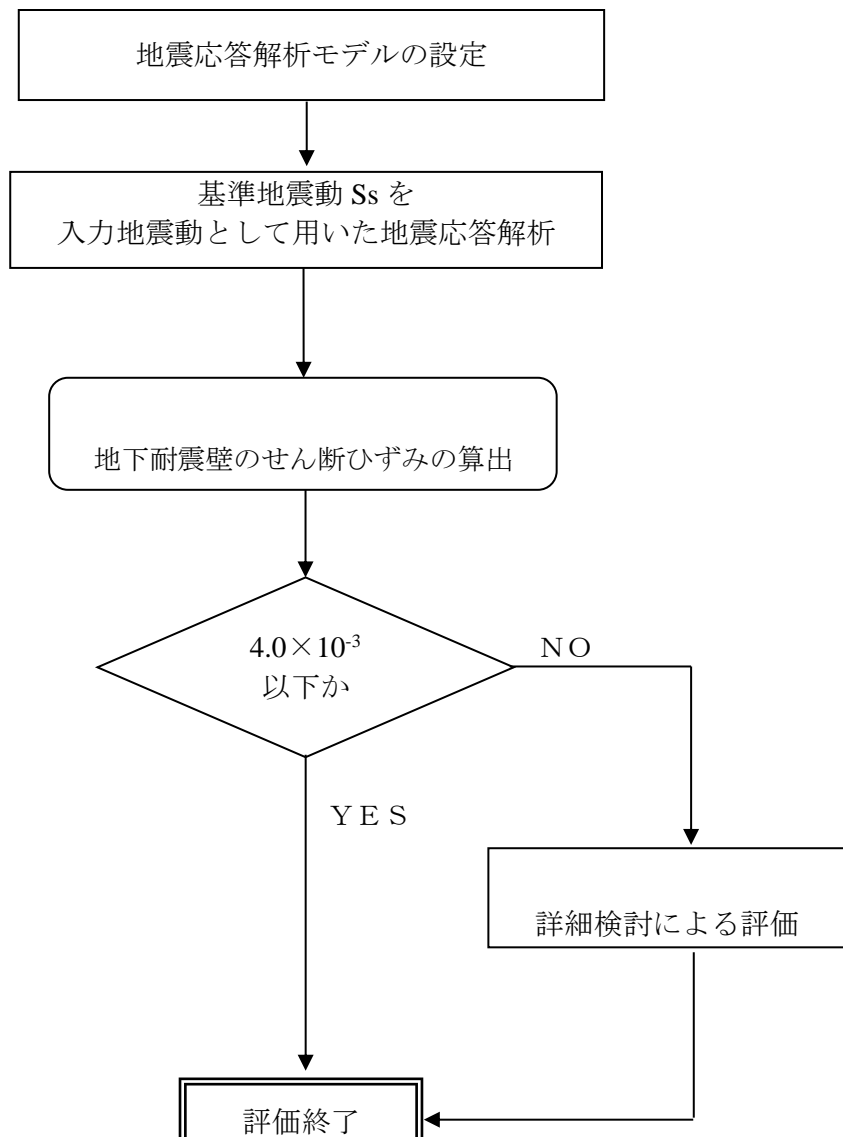


図 2-1 SPT 建屋の地震応答解析の評価手順例

### 3 解析に用いる入力地震動

SPT 建屋への入力地震動は、「福島第一原子力発電所 『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」(原管発官19第603号 平成20年3月31日付け)にて作成した解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  を用いることとする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図3-1に示す。このSPT建屋の解析モデルに入力する地震動は、次元波動論に基づき、解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  に対する建屋基礎底面レベルの地盤応答として評価する。また、建屋基礎底面レベルにおけるせん断力を入力地震動に付加することにより、地盤の切欠き効果を考慮する。

このうち、解放基盤表面位置における基準地震動  $S_s$  の加速度波形について、図3-2に示す。

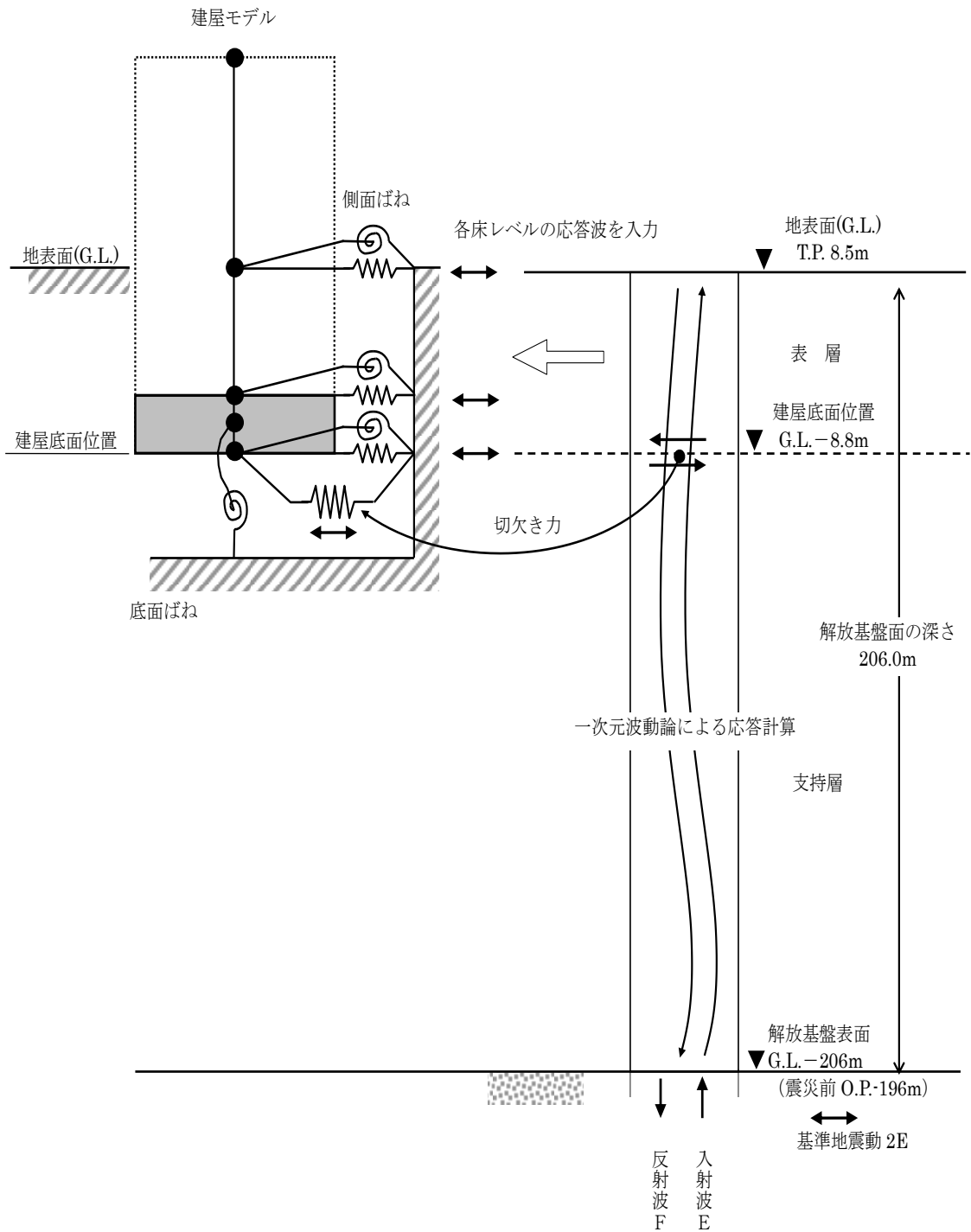
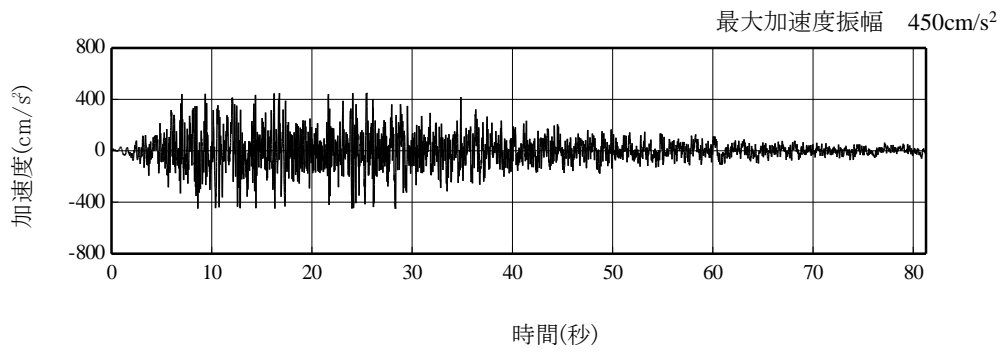


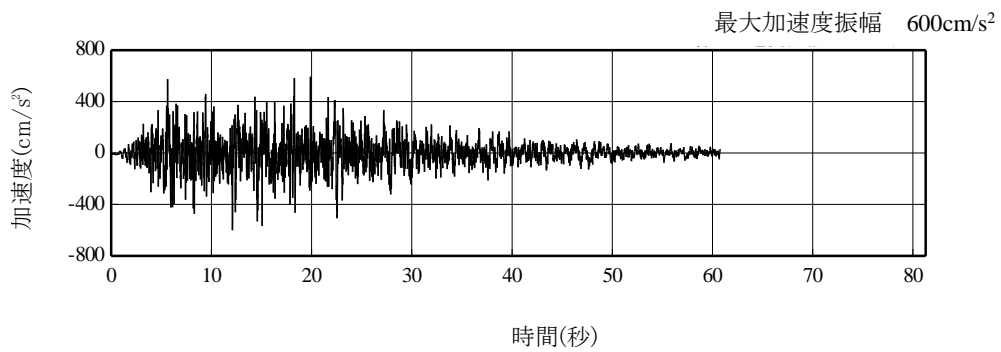
図 3-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

添付資料 22 に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P. から T.P. への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式> T.P. =旧 O.P. -1, 436mm

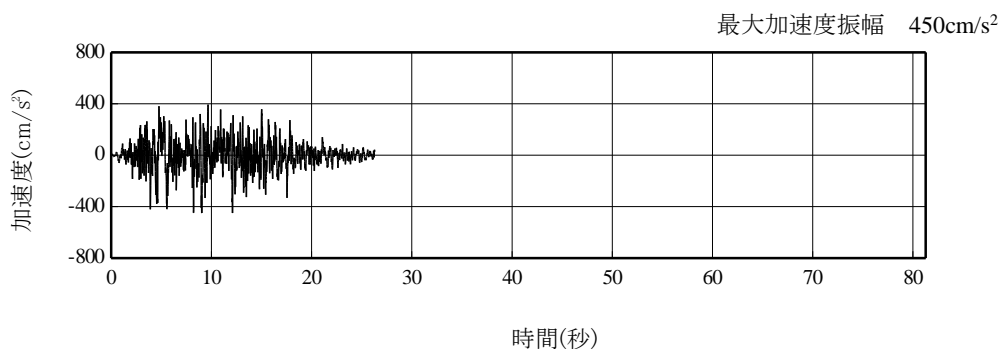




(Ss-1H)



(Ss-2H)



(Ss-3H)

図 3-2 解放基盤表面位置における地震動の加速度時刻歴波形 (水平方向)

#### 4 地震応答解析モデル

基準地震動  $S_s$  に対する SPT 建屋の地震応答解析は、「3 解析に用いる入力地震動」で算定した入力地震動を用いた動的解析による。

地震応答解析モデルは、図 4-1 及び図 4-2 に示すように、建屋を曲げ変形とせん断変形をする質点系とし、地盤を等価ばねで評価した建屋—地盤連成系モデルとする。建屋—地盤連成系としての効果は地盤ばね及び入力地震動によって評価される。解析に用いるコンクリートの物性値を表 4-1 に、建屋解析モデルの諸元を表 4-2 に示す。

地盤定数は、水平成層地盤と仮定し、地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定めた。解析に用いた地盤定数を表 4-3 に示す。

解析モデルにおいて、基礎底面地盤ばねについては、「JEAG 4601-1991」に示された手法を参考にして、成層補正を行ったのち、振動アドミッタンス理論に基づいて、スウェイ及びロッキングばね定数を近似的に評価する。また、埋込部分の建屋側面地盤ばねについては、建屋側面位置の地盤定数を用いて、水平及び回転ばねを「JEAG 4601-1991」により NOVAK ばねに基づいて近似法により評価する。

地盤ばねは振動数に依存した複素剛性として得られるが、図 4-3 に示すようにばね定数 ( $K_c$ ) として実部の静的な値を、また、減衰係数 ( $C_c$ ) として建屋—地盤連成系の 1 次固有振動数に対応する虚部の値と原点を結ぶ直線の傾きを採用することにより近似する。

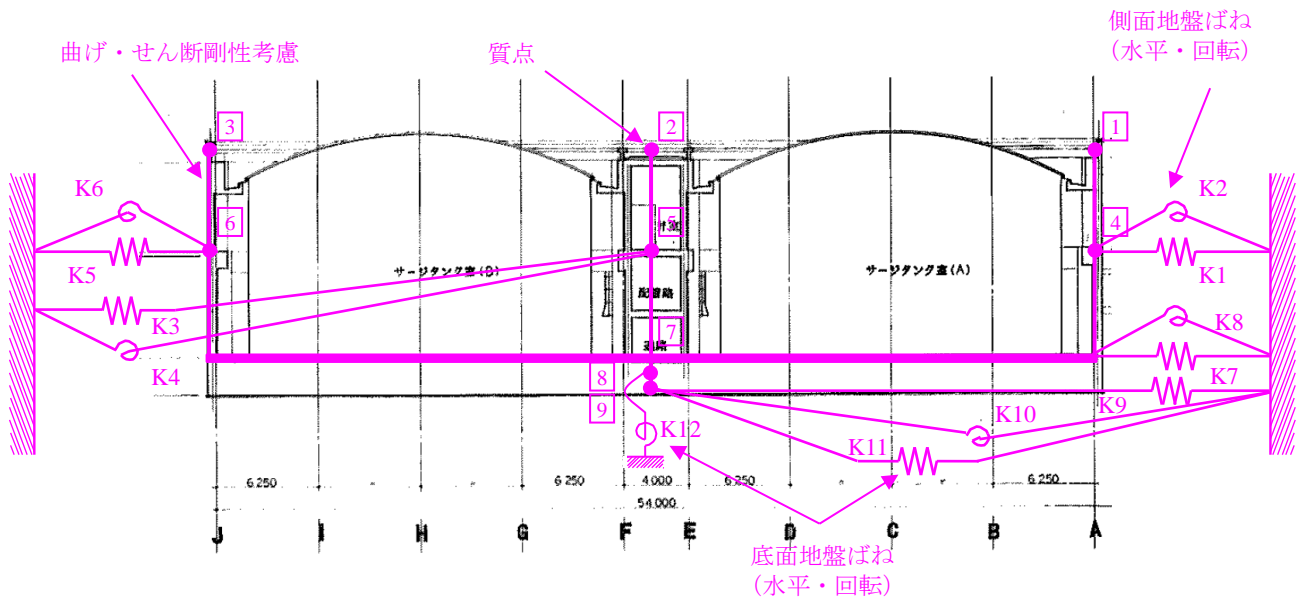


図 4-1 SPT 建屋 地震応答解析モデル (NS 方向)

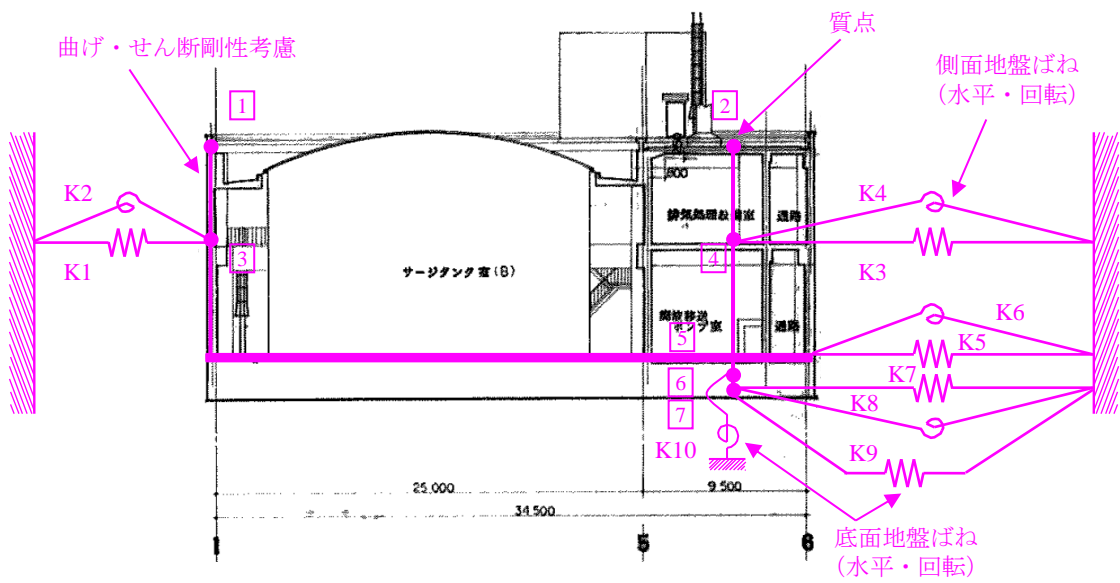


図 4-2 SPT 建屋 地震応答解析モデル (EW 方向)

表 4-1 地震応答解析に用いる物性値

コンクリート	強度 F <sub>c</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	せん断弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 ν	単位体積重量*1 γ (kN/m <sup>3</sup> )
	22.1	2.06×10 <sup>4</sup>	0.88×10 <sup>4</sup>	0.2	24
鉄筋	SD345相当 (SD35)				

\*1：鉄筋コンクリートの値を示す。

表4-2(1) 建屋解析モデルの諸元(NS方向)

軸	質点番号	重量 W(kN)	回転慣性重量 $\times 10^6$ (kNm <sup>2</sup> )	要素番号	せん断 断面積 As (m <sup>2</sup> )	断面2次 モーメント I (m <sup>4</sup> )
A通り	①	6228	/			
	④	9268		1	10.4	954.6
				4	21.3	3641.7
EF通り	②	12455	/			
	⑤	20104		2	30.2	4704.9
				5	31.1	6999.0
J通り	③	5884	/			
	⑥	9954		3	12.9	2235.7
				6	21.3	3934.2
基礎	⑧	199272	111.3			

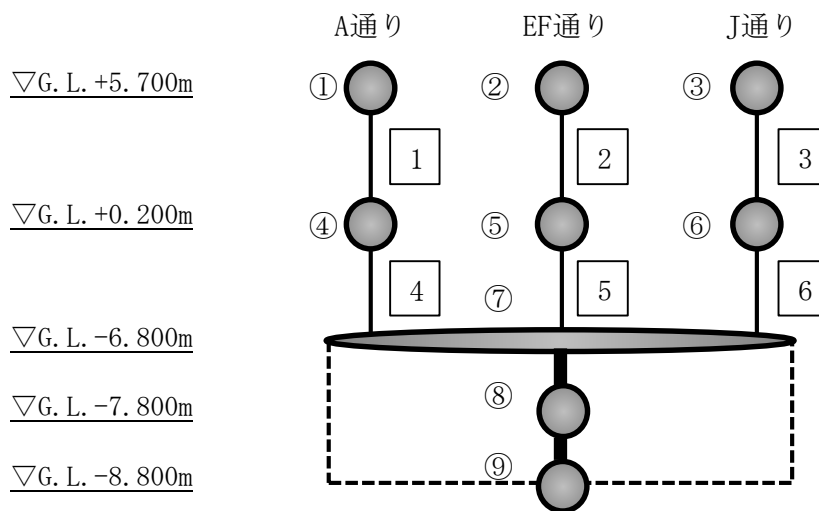


表4-2(2) 建屋解析モデルの諸元(EW方向)

軸	質点番号	重量 W(kN)	回転慣性重量 $\times 10^6$ (kNm <sup>2</sup> )	要素番号	せん断 断面積 As (m <sup>2</sup> )	断面2次 モーメント I (m <sup>4</sup> )
1通り	①	7601	/			
	③	11818		1	21.9	8526.9
				3	32.7	12757.9
5通り	②	16966	/			
	④	27508		2	36.4	4073.8
				4	53.8	14792.6
基礎	⑥	199272	266.1			

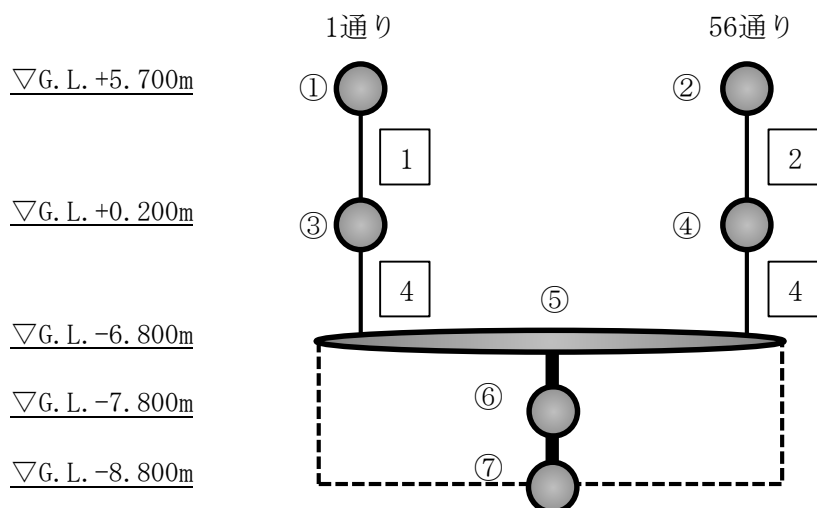


表 4-3 (1) 地盤定数 (Ss-1)

G.L. (m)	地質	S波速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下率 G/G <sub>0</sub>	せん断弾性 係数 G (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下後 S波速度 Vs (m/s)	剛性低下後 P波速度 Vp (m/s)	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0											
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	262,000	0.85	223,000	351	1550	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	341,000	0.78	266,000	398	1530	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	436,000		340,000	442	1540	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	563,000		439,000	495	1580	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	653,000		509,000	530	1640	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	924,000	1.00	924,000	700	1890	—	—

表 4-3 (2) 地盤定数 (Ss-2)

G.L. (m)	地質	S波速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下率 G/G <sub>0</sub>	せん断弾性 係数 G (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下後 S波速度 Vs (m/s)	剛性低下後 P波速度 Vp (m/s)	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0											
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	262,000	0.85	223,000	351	1550	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	341,000	0.81	276,000	405	1560	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	436,000		353,000	450	1570	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	563,000		456,000	504	1610	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	653,000		529,000	540	1670	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	924,000	1.00	924,000	700	1890	—	—

表 4-3 (3) 地盤定数 (Ss-3)

G.L. (m)	地質	S波速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下率 G/G <sub>0</sub>	せん断弾性 係数 G (kN/m <sup>2</sup> )	剛性低下後 S波速度 Vs (m/s)	剛性低下後 P波速度 Vp (m/s)	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0											
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	262,000	0.86	225,000	352	1560	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	341,000	0.78	266,000	398	1530	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	436,000		340,000	442	1540	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	563,000		439,000	495	1580	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	653,000		509,000	530	1640	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	924,000	1.00	924,000	700	1890	—	—

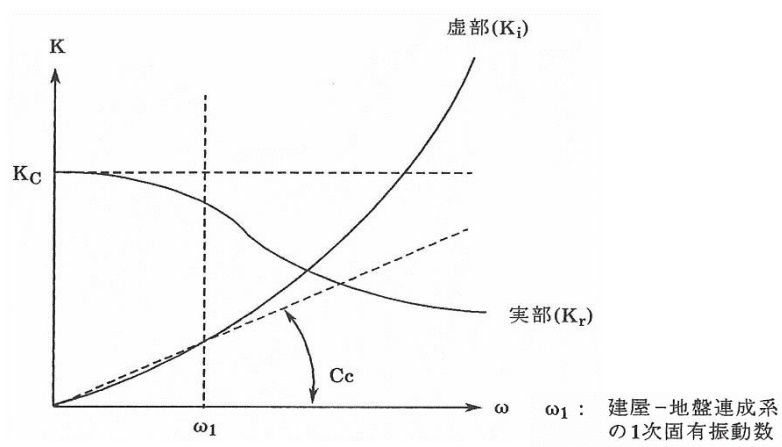


図 4-3 地盤ばねの近似



## 5 地震応答解析結果

地震応答解析により求められたNS方向，EW方向の最大応答加速度を，図5-1及び図5-2に示す。

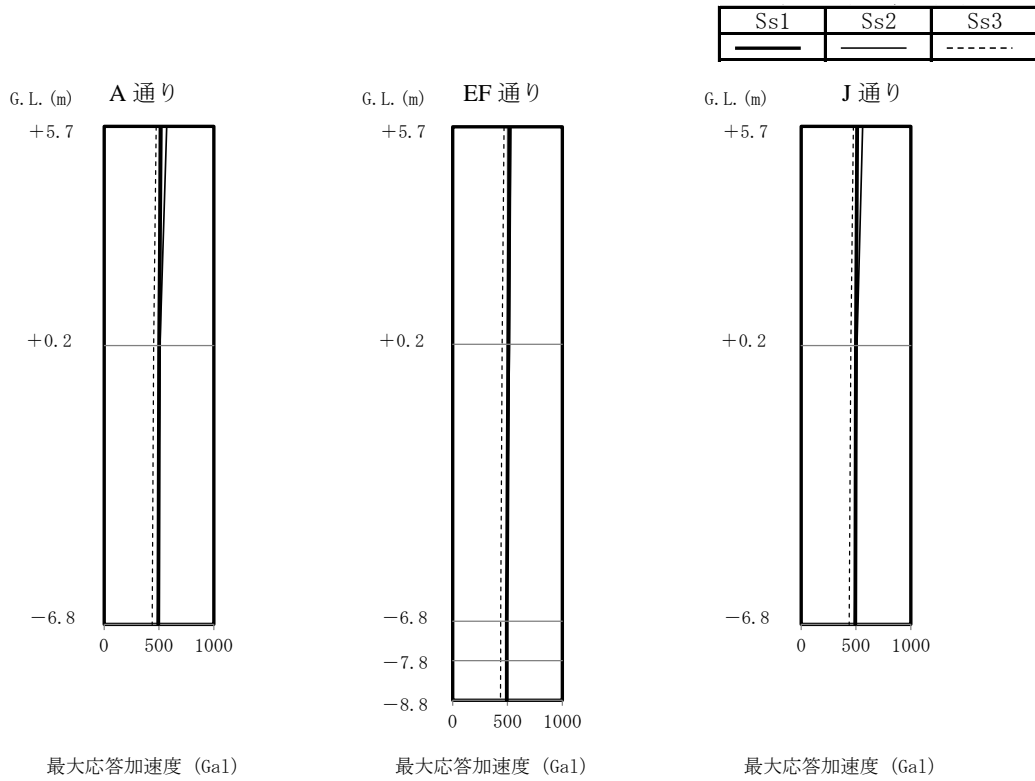


図5-1 最大応答加速度 (NS方向)

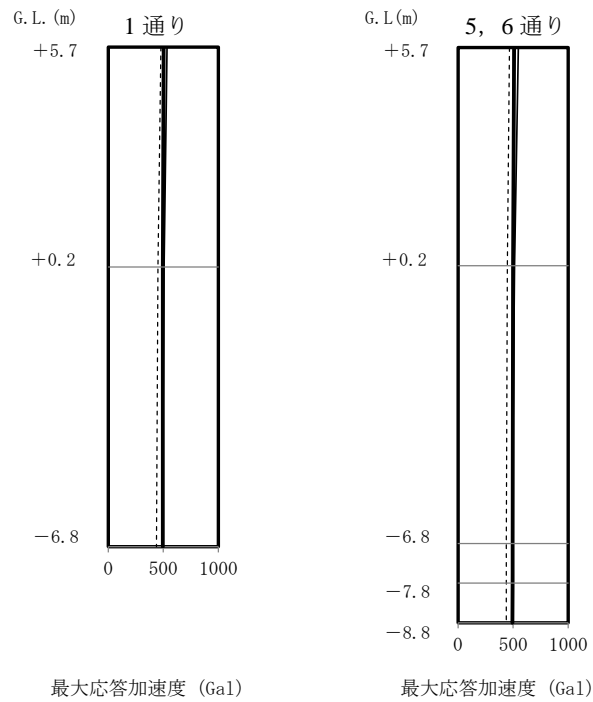


図5-2 最大応答加速度 (EW方向)

## 6 耐震安全性評価結果

地震応答解析により得られた地下耐震壁のせん断ひずみ一覧を、表 6-1 及び表 6-2 に示す。せん断ひずみは、最大で  $0.09 \times 10^{-3}$  であり、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) に対して十分余裕がある。また、地震応答解析結果に基づく接地圧は最大  $195.2 \text{ kN/m}^2$  であり、地盤の支持力試験の最大荷重  $9806 \text{ kN/m}^2$  ( $100 \text{ kgf/cm}^2$ ) ※1 に対して十分な余裕がある。

以上のことから、SPT 建屋地下階の耐震安全性は確保されているものと評価した。

※1：運用補助共用施設の支持力試験の最大値の平均値

表 6-1 耐震壁のせん断ひずみ一覧 (NS 方向)

(単位： $\times 10^{-3}$ )

軸	階	Ss-1H	Ss-2H	Ss-3H	評価基準
A 通り	地下階	0.06	0.06	0.06	4.0 以下
EF 通り	地下階	0.09	0.08	0.08	
J 通り	地下階	0.06	0.06	0.06	

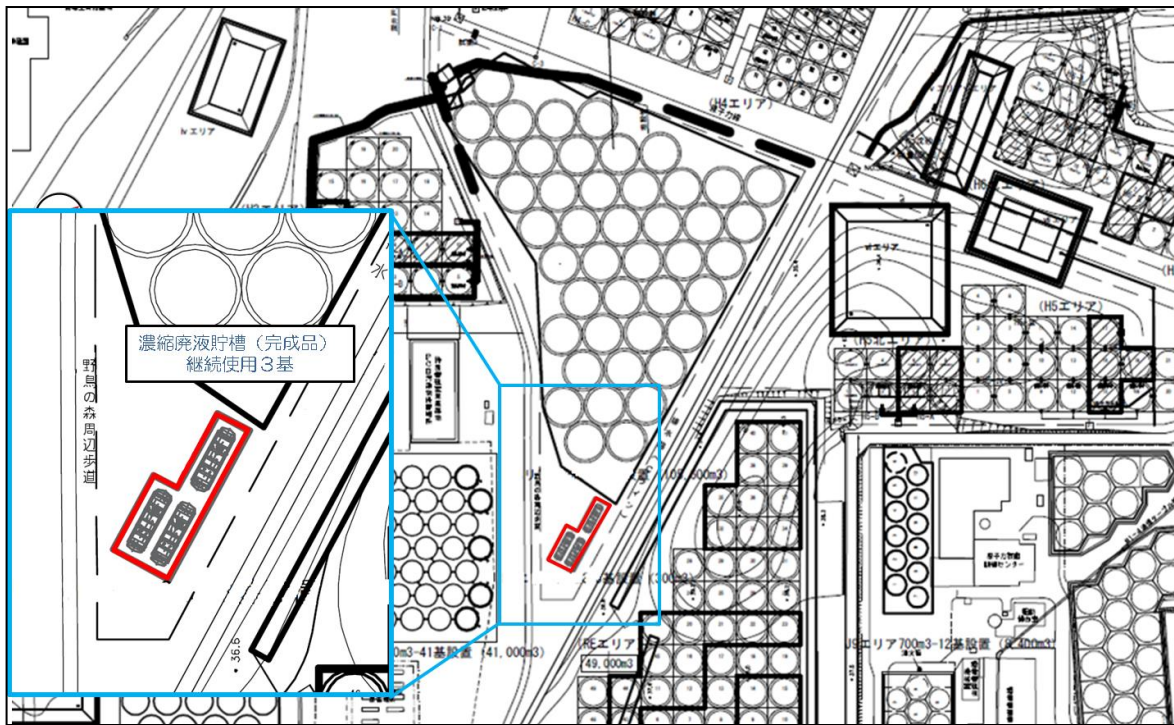
表 6-2 耐震壁のせん断ひずみ一覧 (EW 方向)

(単位： $\times 10^{-3}$ )

軸	階	Ss-1H	Ss-2H	Ss-3H	評価基準
1 通り	地下階	0.06	0.05	0.05	4.0 以下
56 通り	地下階	0.07	0.07	0.06	

## 濃縮廃液貯槽（完成品）の安全確保策について

中低濃度タンクのうち、濃縮廃液貯槽（完成品）は、蒸発濃縮装置から発生した濃縮廃液を貯留する鋼製横置きタンクであるが、高レベルの放射性物質を扱うため設備の信頼性向上及び敷地境界線量の低減を目的とした安全確保策を以下の通り実施する。濃縮廃液貯槽（完成品）の設置場所を図－１に示す。



図－１ 濃縮廃液貯槽（完成品）設置場所

1. 具体的な安全確保策について

1.1. 濃縮廃液貯槽（完成品）

濃縮廃液貯槽（完成品）は、新たに設置するコンクリート基礎上に設置する。

1.2. 放射線遮へい・被ばく低減に対する考慮

濃縮廃液貯槽（完成品）は、堰の周囲にコンクリート製の遮へい（遮蔽壁）を設置し放射線を適切に遮へいする。また、タンク表面の線量当量率の表示により注意喚起することで、放射線業務従事者の被ばく低減を図る。

1.3. 放射性物質漏えい防止等に対する考慮

(1) 濃縮廃液貯留時の考慮

a. 漏えいの発生を防止するため、濃縮廃液貯槽（完成品）には設置環境や内部流体

- の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器を設ける。
- b. タンクからの漏えいを早期検知するために、巡視点検にて漏えいの有無を確認する。また、漏えいの拡大を防止するために、タンク設置エリアに鉄筋コンクリートの基礎及び堰を設置する。堰の容量は、タンク1基分の貯留容量を確保出来る容量に、大雨時の作業等を考慮した余裕高さ（20cm）分の容量を加えた合計容量とする。
  - c. タンク水位は、免震重要棟集中監視室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

## (2) 濃縮廃液（炭酸塩スラリー）移送時の考慮

- a. 移送時はフランジ部、ホース結合部の抜け防止、吸水材及び養生シートによる養生を実施する。移送には二重にした耐圧ホースを使用し、ポンプ及びフランジ部は水受け内に設置する。移送中は万が一の漏えいに備えポンプ操作部に作業員が常駐し、移送時の異常事態に備える。
- b. 移送時は雰囲気線量を確認しながら作業を行い、線量の高い場所では鉛マットによる被ばく低減対策を実施する。また、作業時間を限定し、交代することにより更なる被ばく低減を図る。

## 1.4 環境条件対策

### (1) 腐食

海水による炭素鋼の腐食速度は、「材料環境学入門」（腐食防食協会編、丸善株式会社）より、0.1mm/年程度と評価される。一方、炭素鋼を使用している濃縮廃液貯槽（完成品）は、必要肉厚に対して十分な肉厚があり腐食代を有していることを確認している。また、タンクの内面はFRPによる防錆処理を実施している。

### (2) 熱による劣化

濃縮廃液貯槽（完成品）に貯留する濃縮廃液の温度は、ほぼ常温のため、金属材料の劣化の懸念はない。

## 1.5 自然災害対策等

### (1) 津波

濃縮廃液貯槽（完成品）は、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33m に設置するため、津波の影響は受けない。

### (2) 台風（強風）

建築基準法施行令及び建設省告示に基づいて評価した濃縮廃液貯槽（完成品）の遮蔽壁及び濃縮廃液貯槽（完成品）に加わる風荷重が、「発電用原子炉施設に関する耐震設計

審査指針」における耐震Sクラスの地震荷重に比べて小さいため、遮蔽壁及び濃縮廃液貯槽（完成品）は、台風（強風）により転倒しない。

## 2. 構造強度及び耐震性評価

### 2.1. 構造強度評価

継続使用する濃縮廃液貯槽（完成品）については、主たる内包物がスラリー状の炭酸塩となることを考慮し、設計・建設規格に準拠した板厚評価を実施した。評価の結果、内圧に耐えられることを確認した。（表－1）

#### a. 円筒型タンクの胴の厚さ評価

$$t = \frac{DiH\rho}{0.204S\eta}$$

t : 胴の計算上必要な厚さ  
 Di : 胴の内径  
 H : 水頭  
 ρ : 液体の比重  
 S : 最高使用温度における材料の許容引張応力  
 η : 長手継手の効率

ただし、tの値は炭素鋼、低合金鋼の場合はt=3[mm]以上、その他の金属の場合はt=1.5[mm]以上とする。また、内径の区分に応じた必要厚さを考慮する。

表－1 濃縮廃液貯槽（完成品）板厚評価結果

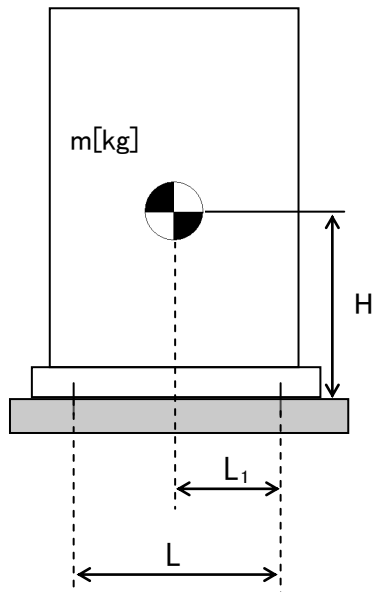
機器名称	評価部位	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
濃縮廃液貯槽（完成品）	板厚	3	9

## 2.2. 耐震性評価

### (1) 濃縮廃液貯槽（完成品）について

#### a. 基礎ボルトの強度評価

継続使用する濃縮廃液貯槽（完成品）は発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針のBクラス相当の施設と位置づけられるため、耐震Bクラス相当と考えて、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」の強度評価方法に準拠して評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されることを確認した。（表－2）



- $m$  : 機器質量 (178,186kg)
- $g$  : 重力加速度 (9.80665m/s<sup>2</sup>)
- $H$  : 据付面からの重心までの距離 (2,335.4mm)
- $L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離 (3,580mm)
- $L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離 (1,790mm)
- $n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数 (8本)
- $n$  : 基礎ボルトの本数 (16本)
- $A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積 (1,017.8mm<sup>2</sup>)
- $C_H$  : 水平方向設計震度 (0.36)
- $C_V$  : 鉛直方向設計震度 (0)

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m \times g \times C_H \times H - m \times g \times (1 - C_V) \times L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times C_H}{n \times A_b}$$

また、許容応力は、以下の式で設定した。

$$\text{基礎ボルトの許容せん断応力} : f_{sb} = 1.5 \frac{F}{1.5\sqrt{3}}$$

$$\text{基礎ボルトの許容引張応力} : f_{ts} = \min(1.4f_{to} - 1.6\tau_b, f_{to})$$

表－2 濃縮廃液貯槽（完成品）の基礎ボルトの強度評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
濃縮廃液貯槽 (完成品)	基礎ボルト	引張	0.36	<0	-	MPa
		せん断	0.36	39	135	MPa

b. 転倒評価及び滑動評価

濃縮廃液貯槽（完成品）は設置基礎に基礎ボルトで固定されていることから基礎ボルトに作用する地震時の引張応力及びせん断応力と許容引張応力及び許容せん断応力を比較することにより転倒評価及び滑動評価を実施した。評価の結果転倒及び滑動しないことを確認した。

(2) 基礎及び地盤について

基礎については、水平方向設計震度（ $K_h=0.3$ ）にて構造物に発生する断面力に基づき応力度評価を実施し、許容値内であることを確認した。

濃縮廃液貯槽（完成品）の設置場所における地盤については、地盤支持力の評価を行い、地震時における濃縮廃液貯槽（完成品）の鉛直荷重に対して十分な支持力を有していることを確認する。

地盤支持力の許容値は、「社団法人 日本道路協会 道路橋示方書・同解説IV下部構造編」に準拠し、極限支持力の算定式に基づく極限支持力から安全率 2 を除して算定する。

(極限支持力の算定式)

$$Q_u = A_e \left( \alpha k c N_c S_c + k q N_q S_q + \frac{1}{2} \gamma_1 \beta B_e N_r S_r \right)$$

- $Q_u$  : 極限支持力  
 $A_e$  : 有効載荷面積  
 $\alpha, \beta$  : 基礎の形状係数  
 $k$  : 根入れ効果に対する割増し係数  
 $c$  : 地盤の粘着力  
 $N_c, N_q, N_r$  : 荷重の傾斜を考慮した支持力係数  
 $S_c, S_q, S_r$  : 支持力係数の寸法効果に関する補正係数  
 $q$  : 上載荷重 ( $q = \gamma_2 D_f$ )  
 $\gamma_1, \gamma_2$  : 支持地盤及び根入れ地盤の単位重量  
 $D_f$  : 基礎の有効根入れ深さ  
 $B_e$  : 荷重の偏心を考慮した基礎の有効載荷幅 ( $B_e = B - 2e_B$ )  
 $B$  : 基礎幅  
 $e_B$  : 荷重の偏心量

(各設備の鉛直荷重)

$$W = m \times g$$

- $W$  : 鉛直荷重  
 $m$  : 機器等の質量  
 $g$  : 重力加速度

(3) 遮蔽壁について

遮蔽壁については、水平方向設計震度 ( $K_h=0.3$ ) にて構造物 (遮蔽板, 支柱材等) に発生する断面力に基づき応力度評価を実施し、許容値内であることを確認した。

3. 濃縮廃液貯槽 (完成品) 及び基礎の S クラス相当に対する耐震性評価

濃縮廃液貯槽 (完成品) 及び基礎は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の B クラス相当の設備と位置づけられるが、当該貯槽は高濃度の放射性物質を内包しているため、参考として S クラス相当の評価を行い、健全性が維持されることを確認した。

(1) 濃縮廃液貯槽 (完成品) について

a. 基礎ボルトの強度評価

「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」の強度評価方法に準拠して評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されることを確認した。(表-3)

表-3 濃縮廃液貯槽 (完成品) の基礎ボルトの強度評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	鉛直震度	算出値	許容値	単位
濃縮廃液貯槽 (完成品)	基礎ボルト	引張	0.72	0.36	33	123	MPa
		せん断	0.72	0.36	78	135	MPa

b. 転倒評価及び滑動評価

濃縮廃液貯槽 (完成品) は設置基礎に基礎ボルトで固定されていることから基礎ボルトに作用する地震時の引張応力及びせん断応力と許容引張応力及び許容せん断応力を比較することにより転倒評価及び滑動評価を実施した。評価の結果転倒及び滑動しないことを確認した。

(2) 基礎及び地盤について

基礎については、タンク設置エリアにおける基準地震動  $S_s-1, 2, 3$  のうち、水平方向及び鉛直方向の応答加速度の組み合わせによる設計震度 (水平震度:  $K_h=0.6$ , 鉛直震度:  $K_v=0.16$ ) にて構造物に発生する断面力に基づき応力度評価を実施し、許容値内であることを確認した。

濃縮廃液貯槽 (完成品) の設置場所における地盤については、地盤支持力の評価を行い、地震時における濃縮廃液貯槽 (完成品) の鉛直荷重に対して十分な支持力を有していることを確認する。

(3) 遮蔽壁について

遮蔽壁については、設置エリアにおける基準地震動  $S_s-1, 2, 3$  のうち、水平方向及び鉛直方向の応答加速度の組み合わせによる設計震度 (水平震度:  $K_h=0.6$ , 鉛直震度:  $K_v=0.16$ ) にて構造物 (遮蔽板, 支柱材等) に発生する断面力に基づき応力度評価を実施し、許容値



内であることを確認した。

4. 濃縮廃液貯槽（完成品）の基礎外周堰の堰内容量について

濃縮廃液貯槽（完成品）から漏えいが生じた際に漏えい水の拡大を抑制するための基礎外周堰の堰内容量は、貯槽 1 基分の全容量が漏えいした場合でも貯留できる容量に、大雨時の作業等を考慮した余裕高さ（堰高さで 20cm 程度）分の容量との合計とする。基礎外周堰の堰内容量を表－4 に示す。

表－4 濃縮廃液貯槽の基礎外周堰の堰内容量

設置場所	タンク 設置 基数	想定漏えい		基礎外周堰 の堰内容量 (m <sup>3</sup> )	(計画値)			
		基数	容量 (m <sup>3</sup> )		基礎外周 堰内面積 (m <sup>2</sup> )	タンク 専有面積 (m <sup>2</sup> )	貯留可能 面積 (m <sup>2</sup> )	基礎外周堰 の高さ (m)
濃縮廃液貯槽 (完成品)	3	1	100	165.14 以上	320	2.47	317.53	0.52

※1 ②=⑤×⑥

※2 ⑤=③－④

※3 ⑥≥①／⑤+0.2（余裕分 20cm）

5. 濃縮廃液貯槽（完成品）からの直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

継続使用する濃縮廃液貯槽（完成品）については、高濃度の放射性物質を内包していることから、設置場所における敷地境界線量を評価する。継続使用する濃縮廃液貯槽（完成品）を 3 基とし、安全確保策を施した後の設置状態をモデル化して評価した結果、設置場所からの最寄りの敷地境界線量評価地点 (No. 17) 及び 2016 年 11 月現在で実効線量が最大となる敷地境界線量評価地点 (No. 7) における評価結果は以下の通りであり、影響のないことを確認した。

表－5 敷地境界線量評価結果

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 17	約 6.1×10 <sup>-2</sup>
No. 7	約 1.2×10 <sup>-3</sup>

6. 構造強度及び機能・性能に関する確認事項

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	地盤支持力確認	支持力試験にてタンク基礎の地盤支持力を確認する。	必要な支持力を有していること。
	材料検査	遮蔽壁におけるコンクリート材料を品質記録にて確認する。	比重：2.1 以上
機能・性能	監視確認	水位計について、免震重要棟集中監視室にタンク水位が表示できることを確認する。	免震重要棟集中監視室にタンク水位が表示できること。
	寸法確認	基礎外周堰内の容量を確認する。	必要容量があること。
		遮蔽壁の高さおよびコンクリート板の厚さを確認する。	高さ：4.0m 以上 厚さ：0.15m 以上
	外観確認	基礎外周堰の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	遮蔽壁の組立状態及び据付状態を確認する。	組立状態及び据付状態に異常がないこと。
		濃縮廃液貯槽（完成品）の据付状態を確認する。	据付状態に異常がないこと。
		基礎の不陸について確認する。	異常な不陸がないこと。

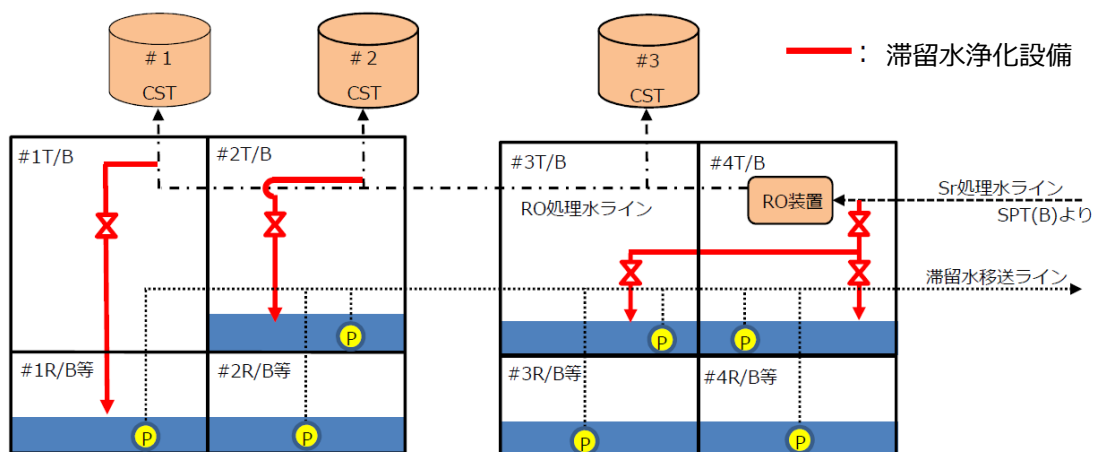
以上

滞留水浄化設備の設計・確認方法について

1. 基本設計

1.1. 設置の目的

1～4号機の滞留水を循環浄化する設備（以下、「滞留水浄化設備」という。）は、地下水他流入量の低下に伴い、第二セシウム吸着装置等の処理量も低下してくるから、処理装置の余剰水を活用して、1～4号機の滞留水を循環浄化し、滞留水のリスク低減することを目的とする。



図－ 1 滞留水浄化設備の設置範囲

1.2. 要求される機能

- (1) 汚染水処理設備にて処理された水を建屋内 RO 循環設備の配管から分岐した配管より、1～4号機建屋に注水できること。

### 1.3. 設計方針

#### (1) 規格・基準

滞留水浄化設備は、設計、材料の選定、製作及び検査について、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格 (JSME 規格)、日本工業規格 (JIS 規格) 等※1 を適用することにより信頼性を確保する。

#### ※1

「金属材料に関する規格」

- ・ JIS G 3456 高温配管用炭素鋼鋼管 (主配管)
- ・ JIS G 3459 配管用ステンレス鋼鋼管 (主配管)

「非金属材料に関する規格」

- ・ JWWA K144 水道配水用ポリエチレン管 (主配管)

#### (2) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

滞留水浄化設備は、液体状の放射性物質の漏えいを防止及び敷地外の管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、滞留水浄化設備には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用する。また、ポリエチレン管とポリエチレン管の接続部は、融着構造とする。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合に備え、屋内の移送配管のうち鋼管の接続部の周囲には堰等を設置することで漏えいの拡大を防止する。また、堰の内部に漏えい検知器を設置し、漏えいの早期検出が可能な設計とする。
- c. 漏えい検知の警報については、免震重要棟集中監視室に表示し、異常を確実に運転員に伝え、警報発生時には遠隔隔離弁にて全閉操作が行えるようにする。なお、現場確認の上、誤報と確認された場合は注水を再開する。

#### (3) 放射線遮へいに対する考慮

放射線業務従事者等の線量を低減する観点から、滞留水浄化設備の配管については、配管の表面線量率が 1mSv/h 以下となるよう適切な遮へいを設ける。

#### (4) 誤操作の防止に対する考慮

滞留水浄化設備は、運転員の誤操作を防止するため、運転操作手順書を整備し、弁銘板の取付けを行う。運転員の誤操作、誤判断を防止するために、特に重要な操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。

(5) 検査可能性に対する設計上の考慮

滞留水浄化設備は、適切な方法で検査ができるよう、漏えい検査・通水検査等が可能な設計とする。

(6) 設備保全に対する考慮

滞留水浄化設備は、機器の重要度に応じた有効な保全を計画し、実施が可能な設計とする。

(7) 監視・操作に対する考慮

滞留水浄化設備は、免震重要棟集中監視室において警報発報及び弁の遠隔操作が可能な設計とする。

1.4. 主要な設備

滞留水浄化設備の主要設備は、建屋内 R0 循環設備で敷設した配管から、各建屋へ分岐する配管（ポリエチレン管・鋼管）で構成される。

2. 構造強度及び耐震性

2.1. 構造強度

滞留水浄化設備は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられ、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」(以下、「JSME 規格」という。), 日本工業規格 (JIS) 等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、日本工業規格 (JIS) またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。なお、JSME 規格で規定される材料の日本工業規格 (JIS) 年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

また、JSME 規格に記載のない非金属材料（ポリエチレン管等）については、日本工業規格 (JIS) や日本水道協会規格 (JWWA)、ISO 規格を用いて設計を行う。

2.2. 耐震性

滞留水浄化設備を構成する主要機器のうち、配管類（鋼管）は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」の B クラス相当の設備と位置づけられ、耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠する。

配管類は変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定、配管に可撓性のある材料を使用）を用いる。（詳細は別紙 1 参照。）

### 3. 滞留水浄化設備の具体的な安全確保策

滞留水浄化設備の自然災害対策，環境条件等について具体的に安全確保策を以下の通り定め，実施する。

#### 3.1. 自然災害対策

##### (1) 津波

滞留水浄化設備については，仮設防潮堤によりアウターライズ津波による浸水を防止する。また，アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え，大津波警報が出た際は，システムを停止し，隔離弁を閉止することで，汚染水の流出を防止する。なお，津波による配管損傷があった場合でも，システムを停止することで，汚染水の漏えいは限定的なものとなる。

##### (2) 強風

滞留水浄化設備は強風による直接的な損傷の可能性が低い鉄筋コンクリート造の建屋内に設置する。

##### (3) 豪雨

滞留水浄化設備は，鉄筋コンクリート造の建屋内に設置するため，豪雨により設備の安全性が損なわれる可能性は低い。

##### (4) 火災

滞留水浄化設備は，火災発生防止および火災の影響軽減のため，実用上可能な限り不燃性または難燃性材料を使用するとともに設備周辺からは可能な限り可燃性を排除する。また，初期消火の対応が出来るよう，設備近傍に消火器を設置する。

#### 3.2. 環境条件対策

##### (1) 腐食

主配管は耐腐食性を有するポリエチレン管，ステンレス鋼鋼管，内面がポリエチレンライニングされた炭素鋼鋼管を用いる。

##### (2) 熱による劣化

システム水の温度は，常温であるため熱による劣化の懸念はない。

(3)凍結に対する考慮

汚染水処理設備にて処理された水を移送している過程では、水が流れているため凍結の恐れはない。汚染水処理設備にて処理された水の移送を停止した場合でも、滞留水浄化設備は、1～4号機タービン建屋、1号機原子炉建屋内に設置する計画で、過去の実績から氷点下になることはないため、凍結の懸念はない。

(4)紫外線に対する考慮

滞留水浄化設備は建屋内に設置するため紫外線の影響を受けることはない。

(5)耐放射線性

ポリエチレンは、集積線量が  $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に達すると、引張強度は低下しないが、破断時の伸びが減少する傾向を示すが、ポリエチレン管の照射線量率を  $1 \text{Gy/h}$  と仮定すると、 $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に到達する時間は  $2 \times 10^5$  時間 (22.8 年) と評価される。そのため、ポリエチレン管は数年程度の使用では放射線照射の影響を受けることはないと考えられる。

4. 滞留水浄化設備に係わる確認事項

滞留水浄化設備の構造強度・耐震性及び機能・性能等に関する確認事項を表-1～5に示す。

表-1 確認事項 (鋼管)

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	主要寸法について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※ <sup>1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり据付されていること。
	耐圧・漏えい確認※ <sup>1</sup> ※ <sup>2</sup>	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	確認圧力に耐え、かつ構造物の変形がないこと。 耐圧部から漏えいがないこと。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 鋼管とポリエチレン管のフランジ接続箇所については、間隙もしくは締付けトルクの確認にて耐圧・漏えい確認の代替とする。

表－2 確認事項（ポリエチレン管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	材料確認	主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	主要寸法について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※ <sup>1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認※ <sup>1</sup> ※ <sup>2</sup>	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	確認圧力に耐え、かつ構造物の変形がないこと。 耐圧部から漏えいがないこと。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 鋼管とポリエチレン管のフランジ接続箇所については、間隙もしくは締付けトルクの確認にて耐圧・漏えい確認の代替とする。

表－3 確認事項（漏えい検出装置及び自動警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観確認※ <sup>1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置を確認する。	実施計画のとおりであること。
機能	漏えい警報確認	「漏えい」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生することを確認する。	「漏えい」※ <sup>2</sup> の信号により、警報が発生すること。

※<sup>1</sup> 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

※<sup>2</sup> 漏えい検知器により信号名称は異なる。

表－4 確認事項（滞留水浄化設備）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能	通水確認	通水されていることを確認する。	通水されていること。

以 上



## 滞留水浄化設備の構造強度及び耐震性

滞留水浄化設備を構成する設備について、構造強度評価の基本方針及び耐震性評価の基本方針に基づき構造強度及び耐震性の評価を行う。

### 1. 基本方針

#### 1.1. 構造強度評価の基本方針

滞留水浄化設備のうち、鋼材を使用している鋼管については、JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格）のクラス 3 機器に準じた評価を行う。

ポリエチレン管は、日本水道協会規格（JWWA 規格）に適合したものを適用範囲内で使用することで、構造強度を有すると評価する。

#### 1.2. 耐震性評価の基本方針

滞留水浄化設備のうち放射性物質を内包するものは、発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針の B クラス相当の設備と位置づけられる。耐震性評価にあたっては、JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程等に準拠することを基本とする。

また、各機器は必要な耐震性を確保するために、原則として以下の方針に基づき設計する。

- ・変位による破壊を防止する構造（定ピッチスパン法による配管サポート間隔の設定）
- なお、ポリエチレン管は、可撓性により耐震性を確保する。

### 2. 構造強度評価及び耐震性評価

#### 2.1. 主配管の構造強度評価

##### 2.1.1 評価箇所

強度評価箇所を図－ 1 に示す。

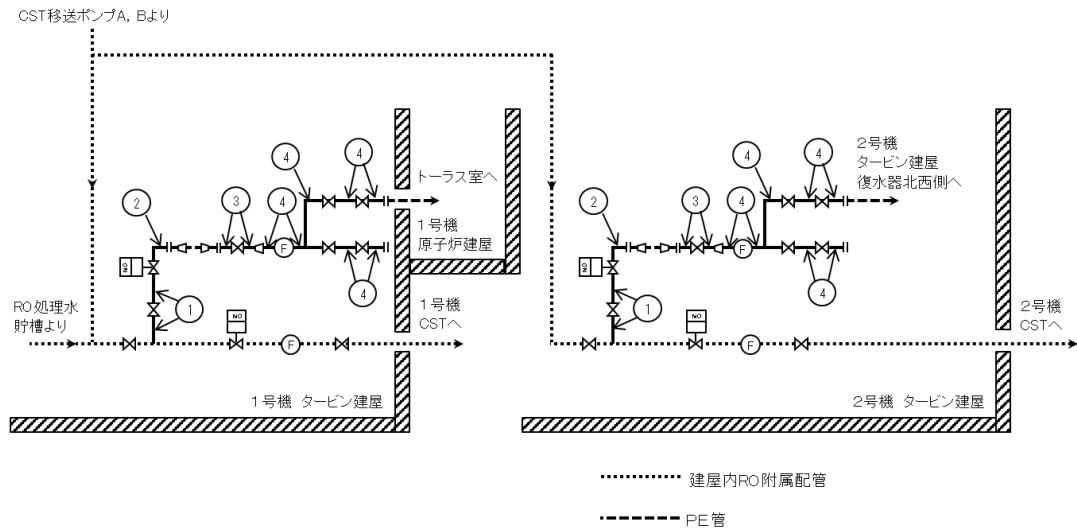


図-1 強度評価箇所 (1 / 2)

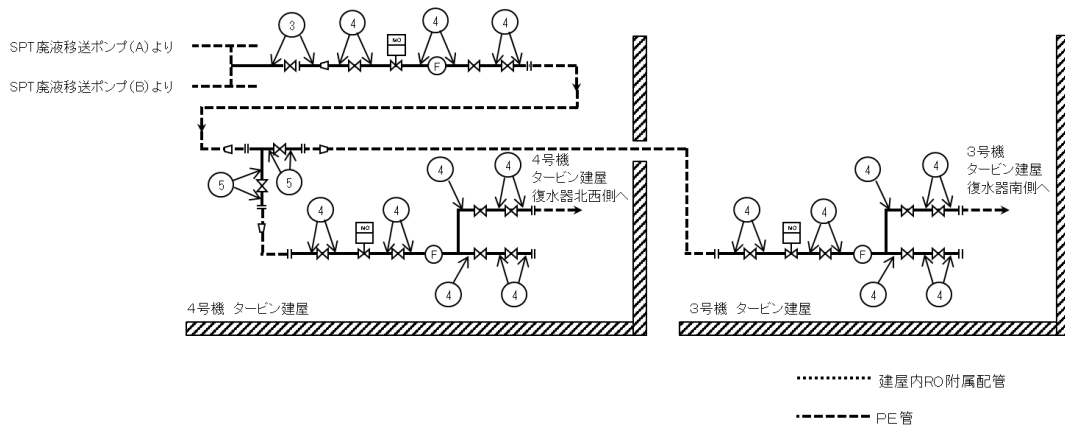


図-1 強度評価箇所 (2 / 2)

## 2.1.2 評価方法 (JSME 規格 PPD-3411)

### (1) 管の厚さの評価

管の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 管の計算上必要な最小必要厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_o}{2S \cdot \eta + 0.8P}$$

P：最高使用圧力 (MPa)

$D_o$ ：管の外径 (mm)

S：許容引張応力 (MPa)

$\eta$ ：継手効率 (-)

b. 炭素鋼鋼管の規格上必要な最小必要厚さ： $t_2$

PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた管の厚さとする。

### 2.1.3 評価結果

評価結果を表-1に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-1 配管の評価結果（管の厚さ）（滞留水浄化設備附属主配管）

No.	外径 (mm)	材料	最高使用 圧力(MPa)	最高使用 温度(°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
①	60.50	SUS316LTP	0.98	40	0.27	3.40
②	60.50	STPT410	0.98	40	2.40	4.81
③	89.10	STPT410	0.98	40	3.00	4.81
④	114.30	STPT410	0.98	40	3.40	5.25
⑤	165.20	STPT410	0.98	40	3.80	6.21

## 2.2. 主配管の耐震性評価

### 2.2.1 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直角2方向拘束サポートにて支持される両端単純支持のはりモデル（図-2）とする。

次に、当該設備における主配管（鋼管）について、各種条件を表-2に示す。

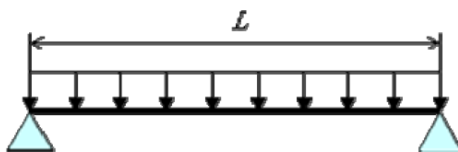


図-2 等分布荷重 両端単純支持はりモデル

表-2 配管系における各種条件（滞留水浄化設備附属主配管）

配管分類	主配管（鋼管）				
配管クラス	クラス3相当				
耐震クラス	Bクラス相当（水平地震動 0.36）				
設計温度[°C]	40				
配管材質	SUS316LTP	STPT410			
配管口径	50A	50A	80A	100A	150A
Sch	40	80	40		
設計圧力[MPa]	0.98				
配管支持間隔[m]	2.5	2.5	3.1	3.4	4.1

### 2.2.2 評価方法

水平方向震度による管軸直角方向の配管応力を評価する。  
自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z}$$

$S_w$ : 自重による応力	[MPa]
$L$ : 支持間隔	[mm]
$M$ : 曲げモーメント	[N・mm]
$Z$ : 断面係数	[mm <sup>3</sup> ]
$w$ : 等分布荷重	[N/mm]

管軸直角方向の地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = \alpha \cdot S_w$$

$S_s$ : 地震による応力	[MPa]
$\alpha$ : 想定震度値	[-]

また、評価基準値として JEAC4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス3配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + \alpha \cdot S_w = S_p + (1 + \alpha) \cdot S_w \leq 1.0 S_y$$

$S$ : 内圧, 自重, 地震による発生応力	[MPa]
$S_p$ : 内圧による応力	[MPa]
$S_y$ : 設計降伏点	[MPa]

### 2.2.3 評価結果

両端単純支持はりモデルで、自重による応力  $S_w$  が 30 [MPa] 以下となる配管サポート配置を仮定し、各応力を計算した結果を表-3に示す。表-3より、自重による応力  $S_w$  を 30 [MPa] 以下となるようサポート配置を決定することで、配管は十分な強度を有するものと評価する。

表-3 応力評価結果（滞留水浄化設備附属主配管）

配管分類	主配管（鋼管）				
配管材質	SUS316LTP	STPT410			
配管口径	50A	50A	80A	100A	150A
Sch	40	80	40		
設計圧力 [MPa]	0.98				
内圧，自重，地震による発生応力 S [MPa]	17	14	18	19	21
供用状態 $C_s$ における一次許容応力 [MPa]	175	245	245	245	245

以上

## 第三セシウム吸着装置について

## 1. 基本設計

## 1.1 設置の目的

第三セシウム吸着装置は、処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、除染装置）の信頼性向上及び滞留水浄化の加速を目的として設置するものである。第三セシウム吸着装置は、1号～4号機タービン建屋等、高温焼却炉建屋及びプロセス主建屋に貯留している汚染水（以下、「滞留水」という。）に含まれる主要な放射性物質を除去する。なお、第三セシウム吸着装置の機能・性能に関する設計は、第二セシウム吸着装置と同等である。

## 1.2 要求される機能

滞留水中の放射性物質等の濃度及び量を適切な値に低減する能力を有すること。

## 1.3 設計方針

## (1) 処理能力

処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置）全体で、原子炉への注水、雨水の浸入、地下水の浸透等により1号～4号機タービン建屋等に発生する滞留水に対して十分対処できる処理容量とする。

## (2) 長期停止に対する考慮

- a. 主要核種の除去を行う処理装置（セシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、第三セシウム吸着装置及び除染装置）は、単独もしくは組み合わせでの運転が可能な設計とする。また、セシウム吸着装置及び除染装置と第二セシウム吸着装置は、それぞれ異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とし、第三セシウム吸着装置は、二つの異なる系統の所内高圧母線から受電する構成とする。
- b. 第三セシウム吸着装置の動的機器は、その故障により滞留水の処理が長期間停止することがないように原則として多重化する。

## (3) 規格・規準等

第三セシウム吸着装置は、設計、材料の選定、製作及び検査において、原則として適切と認められる規格および基準によるものとする。

## (4) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

第三セシウム吸着装置は、液体状の放射性物質の漏えいの防止及び系外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器等を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えいの早期検出を可能にするとともに、漏えいを停止するのに適切な措置をとれるようにする。また、漏えい水の拡大を抑制するための堰等を設ける。
- c. タンク水位、漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

#### (5)放射線遮へいに対する考慮

第三セシウム吸着装置は、放射線業務従事者等の線量を低減する観点から、放射線を適切に遮へいする設計とする。

#### (6)崩壊熱除去に対する考慮

第三セシウム吸着装置は、放射性物質の崩壊熱による温度上昇を考慮し、必要に応じて崩壊熱を除去できる設計とする。

#### (7)可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

第三セシウム吸着装置は、水の放射線分解により発生する可燃性ガスを適切に排出できる設計とする。

#### (8)健全性に対する考慮

第三セシウム吸着装置は、機器の重要度に応じた有効な保全ができるものとする。

### 1.4 供用期間中に確認する項目

- a. 第三セシウム吸着装置は、滞留水の放射性物質の濃度を原子炉注水に再利用可能な濃度まで低減できる能力を有すること。

### 1.5 主要な機器

第三セシウム吸着装置は 1 系列構成とし、第三セシウム吸着装置ブースターポンプ、吸着塔及び配管等で構成する。

滞留水移送装置により移送された 1 号～4 号機タービン建屋等、高温焼却炉建屋及びプロセス主建屋の滞留水は、第三セシウム吸着装置により放射性のセシウム、ストロンチウムを除去する。

吸着塔は A 型・B 型の 2 種類があり、吸着塔 B 型では、高性能多核種除去設備で発生

した使用済 Cs/Sr 同時吸着塔（吸着材含む）、サブドレン他浄化設備で発生した使用済 Cs/Sr 同時吸着材を再利用して使用できる。

二次廃棄物となる使用済みの吸着材を収容した第三セシウム吸着装置吸着塔は、使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵する。

第三セシウム吸着装置の主要な機器は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により遠隔操作及び運転状況の監視を行う。

## 1.6 自然災害対策等

### (1) 津波

第三セシウム吸着装置は、アウターライズ津波による浸水を防止するため仮設防潮堤内に設置する。また、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は、システムを停止し、隔離弁を閉めることにより滞留水の流出を防止する。

### (2) 風雨（豪雨・台風・竜巻）

第三セシウム吸着装置は、風雨による設備損傷の可能性が低い鉄筋コンクリート造のサイトバンカ建屋内に設置する。

竜巻の発生の可能性が予見される場合には、汚染水処理設備の停止・隔離弁の閉止操作を行い、汚染水の拡大防止を図る。

### (3) 火災

第三セシウム吸着装置は、火災発生防止及び火災影響軽減のため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用するとともに設備周辺から可能な限り可燃物を排除する。また、初期消火の対応ができるよう、設備近傍に消火器を設置する。なお、火災発生は監視カメラ等により確認可能な設計とする。

## 1.7 構造強度及び耐震性

### 1.7.1 構造強度

第三セシウム吸着装置は、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス 3 機器に準ずるものと位置付けられる。

第三セシウム吸着装置（震災当初に設置した既存設備を除く）については、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格(JSME 規格)」(以下、「JSME 規格」という。), American Society of Mechanical Engineers (以下、「ASME 規格」という。), 日本産業規格 (JIS) 等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、日本産業規格 (JIS), またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格 (JIS) 年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。



さらに、JSME 規格に記載のない非金属材料（耐圧ホース、ポリエチレン管等）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器等については、日本産業規格（JIS）や日本水道協会規格（JWWA 規格）、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

### 1.7.2 耐震性

第三セシウム吸着装置は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置づけられる。耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態にあわせたものを採用する。なお、第三セシウム吸着装置は、参考としてSクラス相当の評価を行う。

耐圧ホース、ポリエチレン管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

## 2. 基本仕様

### 2.1 主要仕様

#### (1) 第三セシウム吸着装置

系列数	1
処理量	600 m <sup>3</sup> /日
性能	Cs：系統の出口放射能濃度が 10 <sup>2</sup> オーダーBq/cc 以下であること Sr：放射能濃度が低減されていること

#### (2) ろ過フィルタ

名 称		仕 様	
種 類	—	円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	25	
最 高 使 用 圧 力	MPa	1.37	
最 高 使 用 温 度	℃	66	
主 要 寸 法	胴 外 径	mm	914.4
	胴 板 厚 さ	mm	12
	上 部 ・ 下 部 鏡 板 厚 さ	mm	14
	高 さ	mm	2,673
材 料	胴 板	—	SUS316L
	鏡 板	—	SUS316L
	遮 へ い 材	—	Pb
個 数	個	2	

## (3) 吸着塔 A 型

名 称		仕 様	
種 類	—	円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	25	
最高使用圧力	MPa	1.37	
最高使用温度	℃	66	
主要寸法	胴 外 径	mm	914.4
	胴 板 厚 さ	mm	12
	上部・下部鏡板厚さ	mm	14
	高 さ	mm	2,673
材 料	胴 板	—	SUS316L
	鏡 板	—	SUS316L
	遮 へ い 材	—	Pb
個 数	個	4	

## (4) 吸着塔 B 型

名 称		仕 様	
種 類	—	中空円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	25	
最高使用圧力	MPa	1.37	
最高使用温度	℃	66	
主要寸法	外胴内径	mm	939.8
	外胴板厚さ	mm	12.7
	内胴内径	mm	330.2
	内胴板厚さ	mm	12.7
	上部平板厚さ	mm	76.2
	下部平板厚さ	mm	76.2
	高 さ	mm	3632
材 料	外胴板	—	二相ステンレス (S32205) 二相ステンレス (S32750)
	内胴板	—	
	上部平板	—	
	下部平板	—	
	遮へい材	—	Pb
個 数	個	4	

別紙

- (1) 第三セシウム吸着装置の構造強度に関する計算書
- (2) 第三セシウム吸着装置の耐震性に関する計算書
- (3) サイトバンカ建屋の構造強度及び耐震性に関する検討結果
- (4) 第三セシウム吸着装置の具体的な安全確保策
- (5) 第三セシウム吸着装置に係る確認事項

以上

## 第三セシウム吸着装置の構造強度に関する計算書

## 1. 構造強度評価の方針

第三セシウム吸着装置を構成する主要な機器及び主配管（鋼管）は、強度評価においては、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）のクラス 3 機器またはクラス 3 配管に準じた評価を行う。

なお、吸着塔 B 型の許容応力値については、輸入品であるため、ASME 規格「Boiler and Pressure Vessels Code」Section II ; Material Specifications を準じて評価を行う。

## 2. ろ過フィルタ・吸着塔

## 2.1 評価方法

## (1) 胴の厚さの評価

## a. 内面に圧力を受ける円筒形の胴の場合

円筒形の胴に必要な厚さは次に掲げる値のうちいずれか大きい値とする。

(a) 規格上必要な最小厚さ： $t_1$ 

炭素鋼鋼板又は低合金鋼鋼板で作られたもの場合は 3mm，その他の材料で作られたもの場合は 1.5mm とする。

(b) 内面に圧力を受ける胴の必要厚さ： $t_2$ 

$$t_2 = \frac{P \cdot D_i}{2S \cdot \eta - 1.2P}$$

$t_2$ ：胴板の計算上必要な厚さ（mm）

P：最高使用圧力（MPa）

$D_i$ ：胴の内径（mm）

S：許容引張応力（MPa）

$\eta$ ：継手効率（-）

## b. 外面に圧力を受ける円筒形の胴の場合

円筒形の胴に必要な厚さは次に掲げる値のうちいずれか大きい値とする。

(a) 規格上必要な最小厚さ： $t_1$ 

炭素鋼鋼板又は低合金鋼鋼板で作られたもの場合は 3mm，その他の材料で作られたもの場合は 1.5mm とする。

(b) 外面に圧力を受ける胴の必要厚さ： $t_2$

$$t = \frac{3PD_o}{4B}$$

t : 胴の計算上必要な厚さ

Do : 胴の外径

P : 最高使用圧力

B : 設計・建設規格 付録材料図表 Part7

図 1 から図 20 までにより求めた値。

## (2) 鏡板の厚さの評価

### a. さら形鏡板

さら形鏡板に必要な厚さは、次に掲げる値のうちいずれか大きい値とする。

(a) フランジ部の計算上必要な厚さ :  $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_i}{2S \cdot \eta - 1.2P}$$

$t_1$  : フランジ部の計算上必要な厚さ (mm)

P : 最高使用圧力 (MPa)

$D_i$  : 胴の内径 (mm)

S : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

(b) 鏡板の計算上必要な厚さ :  $t_2$

$$t_2 = \frac{P \cdot R \cdot W}{2S \cdot \eta - 0.2P}$$

$t_2$  : 鏡板の計算上必要な厚さ (mm)

P : 最高使用圧力 (MPa)

R : 鏡板の中央部における内面の半径 (mm)

W : さら形鏡板の形状による係数 (-)

S : 許容引張応力 (MPa)

r : さら形鏡板のすみの丸みの内半径 (mm)

$\eta$  : 継手効率 (-)

ここで、Wは次の計算式により計算した値とする。

$$W = \frac{1}{4} \left( 3 + \sqrt{\frac{R}{r}} \right)$$

R : 鏡板の中央部における内面の半径 (mm)

r : さら形鏡板のすみの丸みの内半径 (mm)

b. 平板

平板の厚さは、次に掲げる値のうちいずれかによるものとする。

(a) 平板に穴を設ける場合であって、穴の径が平板の径の2分の1以下であり、穴の補強計算をおこなうもの。

$$t = d \cdot \sqrt{\frac{K \cdot P}{S}}$$

t : 必要厚さ (mm)

d : 平板の径 (mm)

K : 取付方法による係数 (-)

P : 最高使用圧力(MPa)

S : 許容引張応力 (MPa)

(b) 平板に穴を設ける場合であって、穴の径が平板の径の2分の1以下であり、(a)項以外のもの。

$$t = d \cdot \sqrt{\frac{2 \cdot K \cdot P}{S}}$$

t : 必要厚さ (mm)

d : 平板の径 (mm)

K : 取付方法による係数 (-)

P : 最高使用圧力(MPa)

S : 許容引張応力 (MPa)

2.2 評価結果

ろ過フィルタ・吸着塔の円筒形容器について設計・建設規格に準拠し、板厚評価を実施した。評価の結果、内圧に耐えられることを確認した(表-1)。

表-1 ろ過フィルタ・吸着塔の評価結果(板厚)

機器名称	評価項目	必要肉厚[mm]	実厚[mm]
第三セシウム吸着装置 ろ過フィルタ・吸着塔A型	胴板の厚さ	9.54	12.00
	上部鏡板の厚さ	8.68	14.00
	下部鏡板の厚さ	8.68	14.00
第三セシウム吸着装置 吸着塔B型(S32205)	胴板(外筒胴)の厚さ	5.0	12.7
	胴板(内筒胴)の厚さ	7.2	12.7
	上部平板の厚さ	65.35	76.2
	下部平板の厚さ	65.35	76.2
第三セシウム吸着装置 吸着塔B型(S32750)	胴板(外筒胴)の厚さ	4.1	12.7
	胴板(内筒胴)の厚さ	7.2	12.7
	上部平板の厚さ	59.32	76.2
	下部平板の厚さ	59.32	76.2

### 3. 主配管

強度評価箇所を図-1に示す。

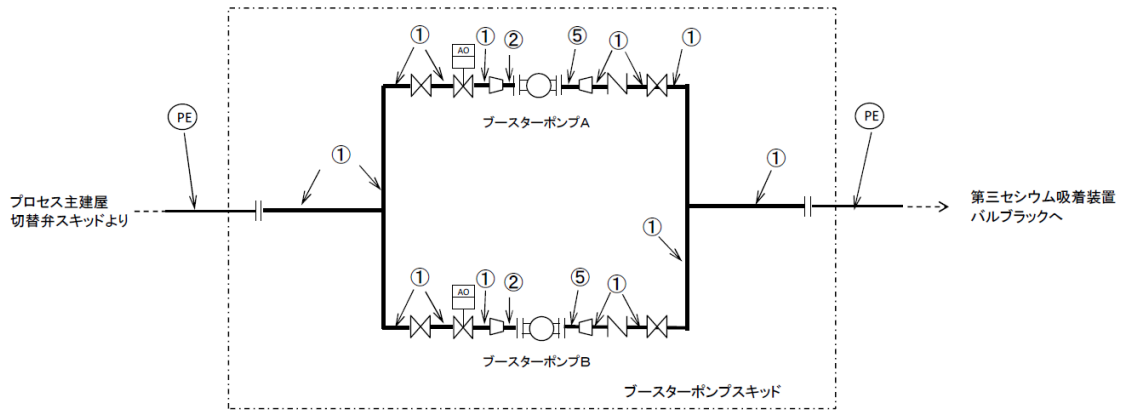
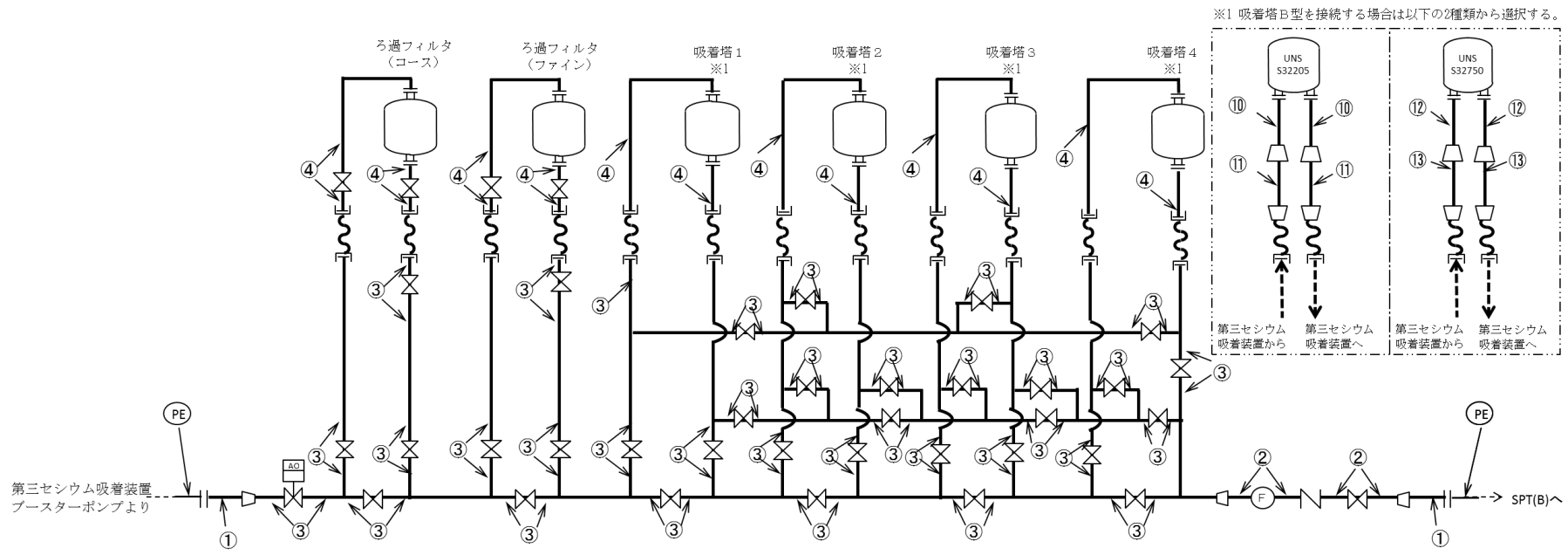


図-1 配管概略図 (1 / 5)



※1 吸着塔B型を接続する場合は以下の2種類から選択する。

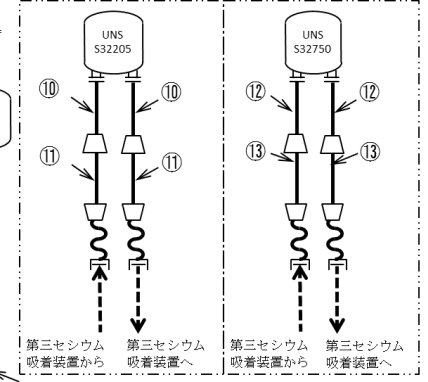


図-1 配管概略図(2/5)



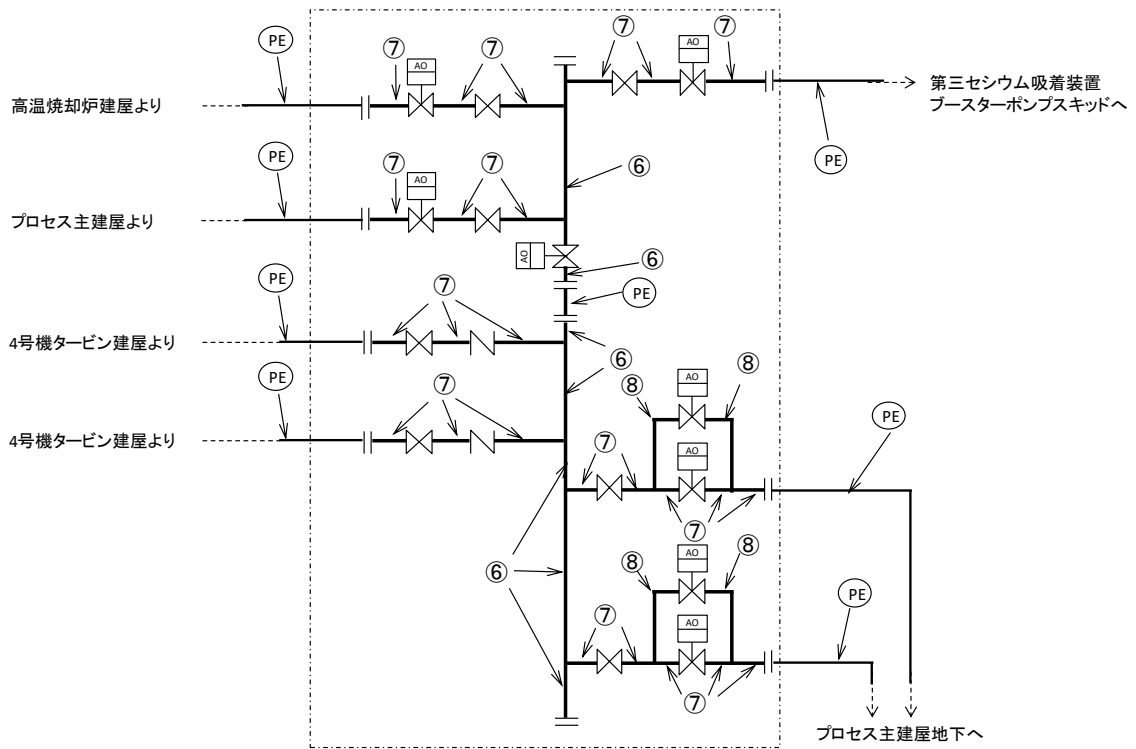


図-1 配管概略図(3/5)

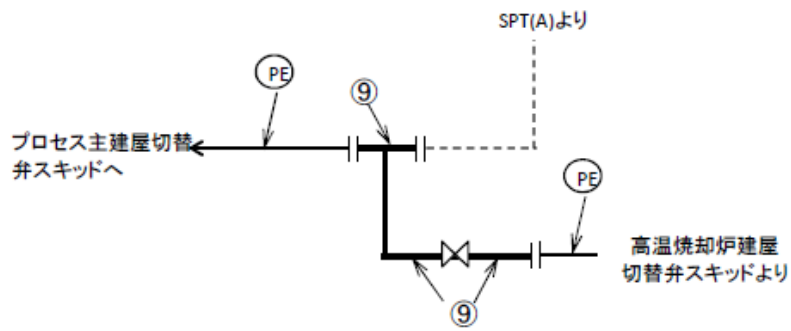


図-1 配管概略図(4/5)

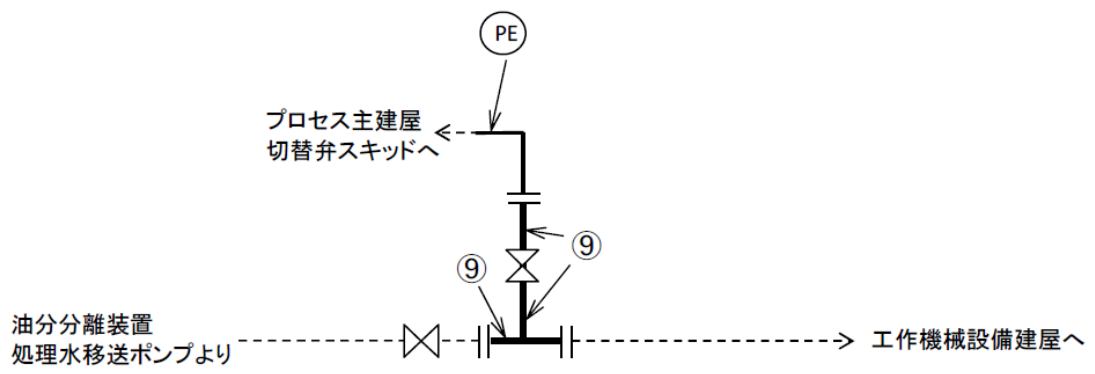


図-1 配管概略図 (5 / 5)

### 3.1 評価方法

#### (1) 管の厚さの評価

管の必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 管の計算上必要な最小必要厚さ： $t_1$

$$t_1 = \frac{P \cdot D_0}{2S \cdot \eta + 0.8P}$$

P : 最高使用圧力 (MPa)

$D_0$  : 管の外径 (mm)

S : 許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手効率 (-)

b. 炭素鋼鋼管の規格上必要な最小必要厚さ： $t_2$

PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた管の厚さとする。

### 3.2 評価結果

評価結果を表-3に示す。必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表－3 主配管の評価結果（管厚）

No.	口径	Sch	材料	最高使用 圧力(MPa)	最高使用 温度(°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
配管①	100	40	SUS316L	1.37	40	0.71	5.25
配管②	80	40	SUS316L	1.37	40	0.55	4.81
配管③	65	40	SUS316L	1.37	40	0.47	4.55
配管④	50	40	SUS316L	1.37	40	0.38	3.40
配管⑤	40	40	SUS316L	1.37	40	0.30	3.20
配管⑥	150	80	STPG370	1.0	40	3.80	9.62
配管⑦	100	80	STPG370	1.0	40	3.40	7.52
配管⑧	50	80	STPG370	1.0	40	2.40	4.81
配管⑨	100	80	STPG370	1.37	66	3.40	7.52
配管⑩	50	40	ASME SA790 S32205	1.37	40	0.22	3.42
配管⑪	80	40	ASME SA790 S32205	1.37	40	0.33	4.80
配管⑫	50	40	ASME SA790 S32750	1.37	40	0.18	3.42
配管⑬	80	40	ASME SA790 S32750	1.37	40	0.27	4.80

以上

## 第三セシウム吸着装置の耐震性に関する計算書

## 1. 耐震設計の基本方針

第三セシウム吸着装置は、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置づけられる。耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態にあわせたものを採用する。なお、第三セシウム吸着装置は、参考としてSクラス相当の評価を行う。

## 2. ろ過フィルタ・吸着塔の耐震性評価

ろ過フィルタ・吸着塔A型の評価は、「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料-3 付録1 スカート支持たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類Bクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。吸着塔B型の評価は、付録1「吸着塔B型の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。評価の結果、胴板、スカート及び取付ボルト、取付部の強度が確保されることを確認した（表-1, 2, 3）。

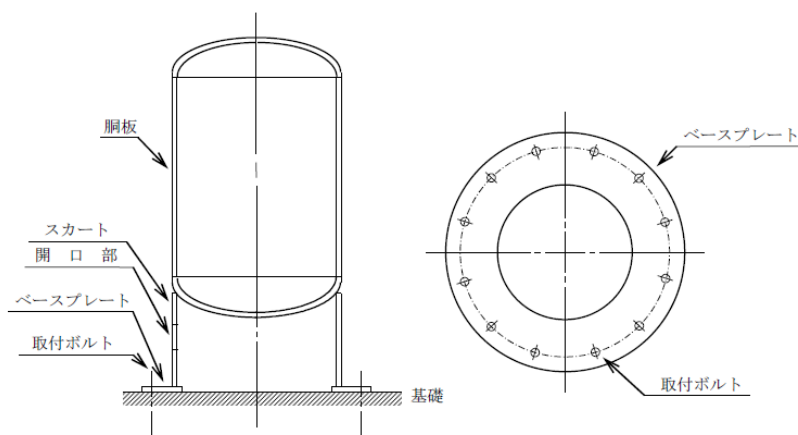


図-1 ろ過フィルタ・吸着塔A型概要図

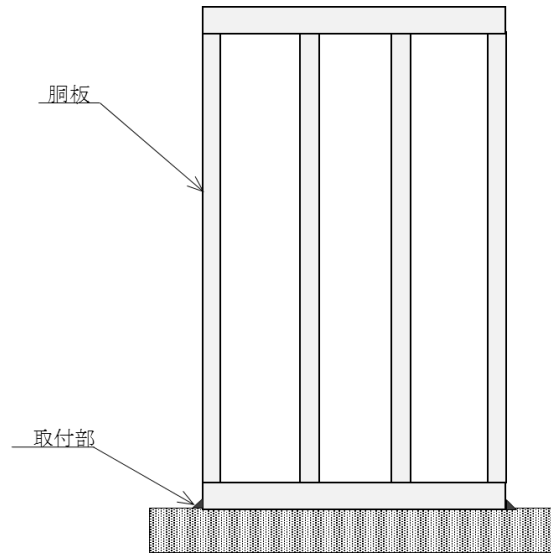


図-2 吸着塔B型概要図

表-1 ろ過フィルタの耐震性評価結果 (1/2)

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SUS316L	0.36	一次一般膜	$\sigma_0 = 52$	$S_a = 159$
			膜+曲げ	$\sigma_0 = 52$	$S_a = 159$
スカート	SUS304	0.36	組合せ	$\sigma_s = 4$	$F_t = 205$
			圧縮と曲げの組合せ (座屈の評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$ 0.02	
取付ボルト	SUS316L	0.36	引張	$\sigma_b = 7$	$F_{ts} = 131$
			せん断	$\tau_b = 5$	$F_{sb} = 101$

表-1 ろ過フィルタの耐震性評価結果 (2/2)

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SUS316L	0.8	一次一般膜	$\sigma_0 = 52$	$S_a = 159$
			膜+曲げ	$\sigma_0 = 52$	$S_a = 159$
スカート	SUS304	0.8	組合せ	$\sigma_s = 7$	$F_t = 205$
			圧縮と曲げの組合せ (座屈の評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$ 0.04	
取付ボルト	SUS316L	0.8	引張	$\sigma_b = 35$	$F_{ts} = 131$
			せん断	$\tau_b = 11$	$F_{sb} = 101$

表－2 吸着塔A型の耐震性評価結果（1／2）

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SUS316L	0.36	一次一般膜	$\sigma_o = 52$	$S_a = 159$
			膜＋曲げ	$\sigma_o = 52$	$S_a = 159$
スカート	SUS304	0.36	組合せ	$\sigma_s = 4$	$F_t = 205$
			圧縮と曲げの組合せ (座屈の評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$ 0.02	
取付ボルト	SUS316L	0.36	引張	$\sigma_b = 8$	$F_{ts} = 131$
			せん断	$\tau_b = 6$	$F_{sb} = 101$

表－2 吸着塔A型の耐震性評価結果（2／2）

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SUS316L	0.8	一次一般膜	$\sigma_o = 52$	$S_a = 159$
			膜＋曲げ	$\sigma_o = 52$	$S_a = 159$
スカート	SUS304	0.8	組合せ	$\sigma_s = 8$	$F_t = 205$
			圧縮と曲げの組合せ (座屈の評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$ 0.04	
取付ボルト	SUS316L	0.8	引張	$\sigma_b = 39$	$F_{ts} = 131$
			せん断	$\tau_b = 12$	$F_{sb} = 101$

表－3 吸着塔B型の耐震性評価結果

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容値
胴板	ASME SA240 S32205	0.36	一次一般膜	$\sigma_o = 52$	$S_a = 393$
取付部	ASME SA36 相当	0.36	組合せ	$\sigma_b = 16$	$f_t = 108$
胴板	ASME SA240 S32750	0.36	一次一般膜	$\sigma_o = 52$	$S_a = 477$
取付部	ASME SA36 相当	0.36	組合せ	$\sigma_b = 16$	$f_t = 108$

### 3. ポンプの耐震性評価

ポンプの評価は、「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料-3 付録2 横軸ポンプ及びスキッド（耐震設計上の重要度分類Bクラス）の耐震性についての計算書作成の基本方針」に基づいて評価を実施した。評価の結果、ポンプ取付ボルトの強度が確保されることを確認した（表-4）。

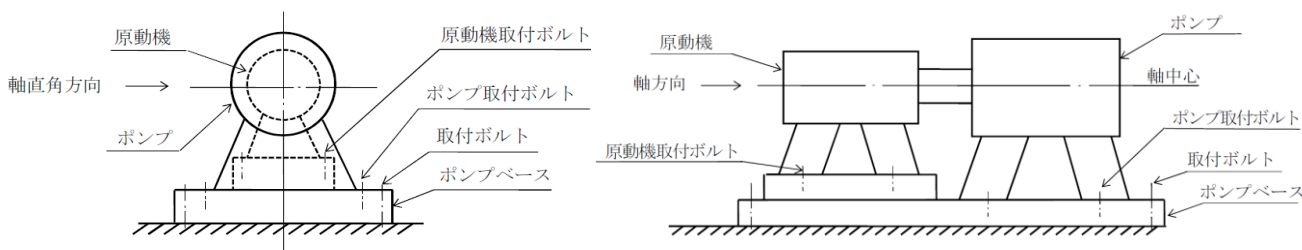


図-3 ポンプ概要図

表-4 ポンプの耐震性評価結果（1/2）

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
取付ボルト	SS400	0.36	引張	$\sigma_{b1} = 2$	$f_{ts1} = 176$
			せん断	$\tau_{b1} = 4$	$f_{sb1} = 135$
ポンプ 取付ボルト	SUS316	0.36	引張	$\sigma_{b2} = 9$	$f_{ts2} = 153$
			せん断	$\tau_{b2} = 2$	$f_{sb2} = 118$
原動機 取付ボルト	SS400	0.36	引張	$\sigma_{b4} = 2$	$f_{ts4} = 183$
			せん断	$\tau_{b4} = 4$	$f_{sb4} = 141$

表-4 ポンプの耐震性評価結果（2/2）

単位：MPa

部材	材料	水平震度	応力	算出応力	許容応力
取付ボルト	SS400	0.8	引張	$\sigma_{b1} = 6$	$f_{ts1} = 176$
			せん断	$\tau_{b1} = 6$	$f_{sb1} = 135$
ポンプ 取付ボルト	SUS316	0.8	引張	$\sigma_{b2} = 9$	$f_{ts2} = 153$
			せん断	$\tau_{b2} = 3$	$f_{sb2} = 118$
原動機 取付ボルト	SS400	0.8	引張	$\sigma_{b4} = 5$	$f_{ts4} = 183$
			せん断	$\tau_{b4} = 6$	$f_{sb4} = 141$



4. 主配管の耐震性評価

a. 評価条件

評価条件として配管は、配管軸直 2 方向拘束サポートにて支持される 3 点支持はりモデル(図-4)とする。

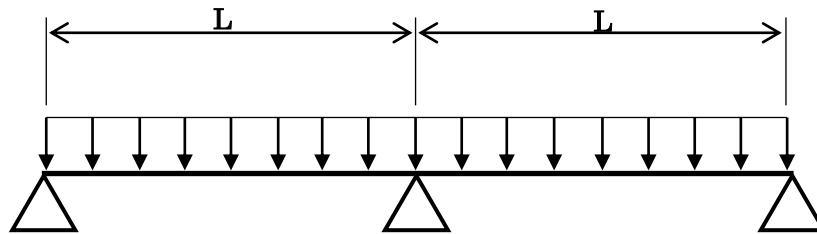


図-4 等分布荷重 3点支持はりモデル

次に、当該設備における配管（鋼管）について、各種条件を表-5に示す。

表-5 配管系における各種条件（1 / 2）

配管分類	主配管（鋼管）								
配管クラス	クラス3相当								
耐震クラス	Bクラス相当								
最高使用圧力 [MPa]	1.37			1.0			1.37		
最高使用温度 [°C]	40								66
配管材質	SUS316L					STPG370			
配管口径 [A]	100	80	65	50	40	150	100	50	100
Sch	40					80			
配管支持間隔※ [m]	3.3	2.9	2.7	2.4	2.2	3.8	3.2	2.5	3.2

※評価は保守的に 4.0mとする

表-5 配管系における各種条件（2 / 2）

配管分類	主配管（鋼管）			
配管クラス	クラス3相当			
耐震クラス	Bクラス相当			
最高使用圧力 [MPa]	1.37			
最高使用温度 [°C]	40			
配管材質	ASME SA790 S32205		ASME SA790 S32750	
配管口径 [A]	50	80	50	80
Sch	40			
配管支持間隔※ [m]	2.3	2.9	2.3	2.9

※評価は保守的に 4.0mとする

## b. 評価方法

水平方向震度による配管応力を評価する。

自重による応力  $S_w$  は、下記の式で示される。

$$S_w = \frac{M}{Z} = \frac{w \cdot L^2}{8Z} \quad (\text{b.1})$$

ここで $S_w$ : 自重による応力	[MPa]
$L$ : 支持間隔	[mm]
$M$ : 曲げモーメント	[N・mm]
$Z$ : 断面係数	[mm <sup>3</sup> ]
$w$ : 等分布荷重	[N/mm]

地震による応力  $S_s$  は、自重による応力  $S_w$  の震度倍で下記の式で示される。

$$S_s = C_h \cdot S_w \quad (\text{b.2})$$

$S_s$ : 地震による応力	[MPa]
$C_h$ : 水平震度	

また、評価基準として JEAG4601-2008 に記載の供用応力状態  $C_s$  におけるクラス 3 配管の一次応力制限を用いると、地震評価としては下記の式で示される。

$$S = S_p + S_w + S_s = S_p + S_w + C_h \cdot S_w \leq 1.0 S_y \quad (\text{b.3})$$

ここで $S$ : 内圧、自重、地震による発生応力	[MPa]
$S_p$ : 内圧による応力	[MPa]
$S_y$ : 設計降伏点	[MPa]

## c. 評価結果

3点支持はりモデルで各応力計算をした結果を表-6に示す。

表-6より、いずれの場合においても許容値に対して十分な裕度があることが確認できた。

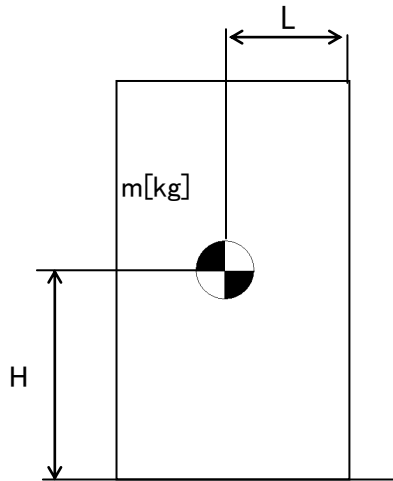
表-6 応力評価結果

No.	口径	Sch	材料	最高使用圧 力 [MPa]	内圧, 自重, 地震に よる発生応力 S[MPa]	供用状態 Cs における 一次応力許容値 [MPa]
配管①	100	40	SUS316L	1.37	28	175
配管②	80	40	SUS316L	1.37	30	175
配管③	65	40	SUS316L	1.37	32	175
配管④	50	40	SUS316L	1.37	37	175
配管⑤	40	40	SUS316L	1.37	42	175
配管⑥	150	80	STPG370	1.0	18	215
配管⑦	100	80	STPG370	1.0	20	215
配管⑧	50	80	STPG370	1.0	31	215
配管⑨	100	80	STPG370	1.37	23	189
配管⑩	50	40	ASME SA790 S32205	1.37	40	448
配管⑪	80	40	ASME SA790 S32205	1.37	29	448
配管⑫	50	40	ASME SA790 S32750	1.37	40	552
配管⑬	80	40	ASME SA790 S32750	1.37	29	552

5. 吸着塔の耐震性評価（使用済セシウム吸着塔一時保管施設）

a. 転倒評価

地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した（表-7, 8）。



- m : 機器質量
- g : 重力加速度
- H : 据付面からの重心までの距離
- L : 転倒支点から機器重心までの距離
- $C_H$  : 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント： $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント： $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

b. 滑動評価

吸着塔を格納する架台は、基礎ボルトにて固定していることから基礎ボルトに作用するせん断荷重と許容せん断荷重を比較することより滑動評価を実施した。基礎ボルトの許容せん断荷重は「日本建築学会：各種合成構造設計指針・同解説，鉄骨鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」に基づき次式を用いた。評価の結果，基礎ボルトの破断による滑動が生じないことを確認した（表－7，8）。

$$q = mg(C_H - \alpha) \div n$$

$$q_a = 0.75 \cdot \phi_{S3} \left( 0.5 \cdot s_c a \cdot \sqrt{F_c \cdot E_c} \right)$$

- q : アンカーボルト一本に作用するせん断荷重
- q<sub>a</sub> : アンカーボルト一本当たりの許容せん断荷重
- C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度
- m : 機器重量
- g : 重力加速度
- α : 機器と床版の摩擦係数
- n : 機器あたりのアンカーボルト本数
- φ<sub>S3</sub> : 短期荷重に対する低減係数
- s<sub>c</sub>a : アンカーボルトの定着部の断面積
- F<sub>c</sub> : コンクリート設計基準強度
- E<sub>c</sub> : コンクリートのヤング率

表－7 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 吸着塔A型耐震評価結果

機器名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第三セシウム 吸着装置※ (吸着塔5塔 ×2列及び架台)	転倒	0.36	2.0×10 <sup>3</sup>	4.3×10 <sup>3</sup>	kN・m
		0.60	3.3×10 <sup>3</sup>		
	滑動 (ボルトせん断)	0.36	<0	—	kN
		0.60	9	77	

※：ろ過フィルタ・吸着塔A型のうち，機器重量，重心高さが評価上最も厳しい吸着塔A型にて評価を実施

表－8 使用済セシウム吸着塔一時保管施設 吸着塔B型耐震評価結果

機器名称	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
第三セシウム 吸着装置 (吸着塔5塔 ×2列及び架台)	転倒	0.36	$2.0 \times 10^3$	$4.3 \times 10^3$	kN・m
		0.60	$3.3 \times 10^3$		
	滑動 (ボルトせん断)	0.36	<0	—	kN
		0.60	10	77	

6. 付録

付録1 吸着塔B型の耐震性についての計算書作成の基本方針

以上

## 付録 1 吸着塔 B 型の耐震性についての計算書作成の基本方針

## 1 一般事項

本基本方針は、吸着塔 B 型についての耐震性（耐震設計上の重要度分類 B クラス相当）の計算方法を示す。

## 1.1 適用基準

本基本方針における計算方法は、原子力発電所耐震設計技術指針 JEAG4601-1987（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和 62 年 8 月）に準拠する。

## 1.2 計算条件

- (1) 容器及び内容物の質量は重心に集中するものとする。
- (2) 地震力は容器に対して水平方向から作用するものとする。
- (3) 容器本体は下部プレートに溶接されている。下部プレートに容器本体と、遮へい体が容器本体とは独立して固定されている。
- (4) 固有周期モデルは、遮へい体を除いた容器本体が下部プレートに固定された梁と考え、変形モードは曲げ及びせん断変形を考慮する。

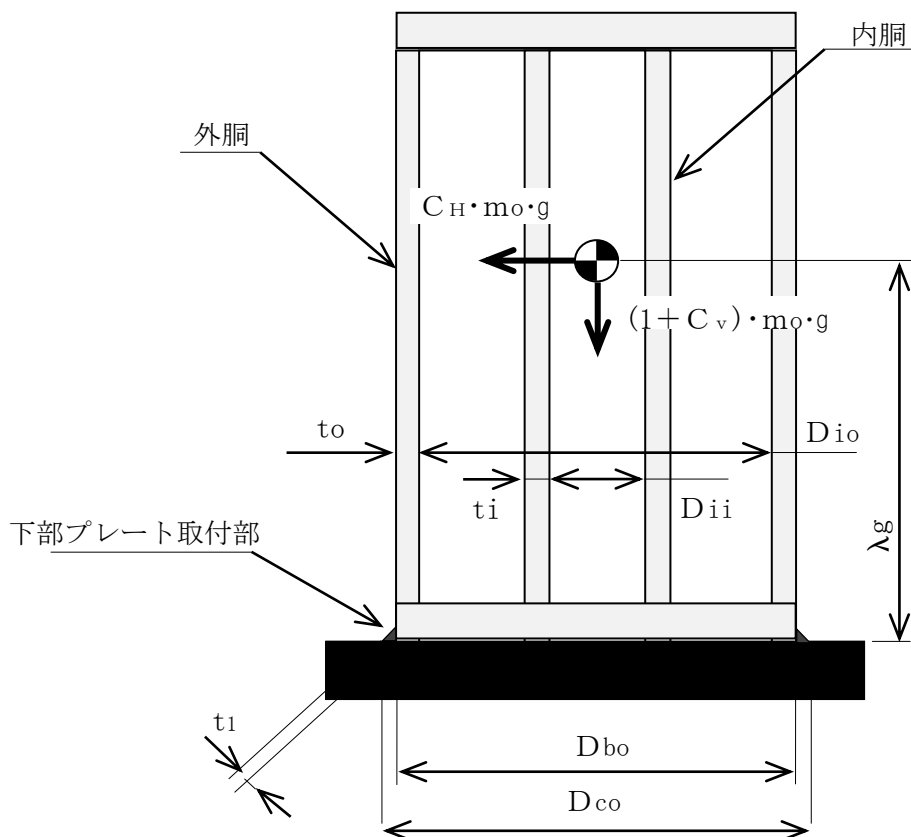


図1-1 概要図

### 1.3 記号の説明

記号	記号の説明	単位
A	胴の軸断面積	mm <sup>2</sup>
A <sub>e</sub>	胴の有効せん断断面積	mm <sup>2</sup>
C <sub>H</sub>	水平方向設計震度	—
C <sub>v</sub>	鉛直方向設計震度	—
D <sub>bo</sub>	容器固定部のベース外径（容器と下部プレート溶接部の内径）	mm
D <sub>co</sub>	容器と下部プレート溶接部の外径	mm
D <sub>io</sub>	外胴の内径	mm
D <sub>ii</sub>	内胴の内径	mm
E	外胴及び内胴の縦弾性係数	MPa
F	設計・建設規格 SSB-3121.1又はSSB-3131に定める値	MPa
F*	設計・建設規格 SSB-3121.3又はSSB-3133に定める値	MPa
f <sub>t</sub>	下部プレートとの溶接部の許容引張応力	MPa
G	胴のせん断弾性係数	MPa
g	重力加速度（=9.80665）	m/s <sup>2</sup>
I	胴の断面二次モーメント	mm <sup>4</sup>
K <sub>H</sub>	水平方向ばね定数	N/m
K <sub>v</sub>	鉛直方向ばね定数	N/m
λ <sub>g</sub>	下部プレートから容器重心までの距離	mm
M <sub>s</sub>	容器に作用する転倒モーメント	N・mm
m <sub>o</sub>	容器の運転時質量	kg
m <sub>e</sub>	容器の空質量	kg
S	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表5に定める値。又は、ASME BPVC Section II Part D Table 1Aによる。	MPa
S <sub>a</sub>	胴の許容応力	MPa
S <sub>u</sub>	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9に定める値。又は、ASME BPVC Section II Part D Table Uによる。	MPa
S <sub>y</sub>	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8に定める値。又は、ASME BPVC Section II Part D Table Y-1による。	MPa
s	下部プレート溶接部の縦弾性係数比	—
T <sub>H</sub>	水平方向固有周期	s
T <sub>v</sub>	鉛直方向固有周期	s
t <sub>o</sub>	外胴の厚さ	mm
t <sub>i</sub>	内胴の厚さ	mm
t <sub>l</sub>	下部プレート溶接部ののど厚	mm
π	円周率	—
P <sub>r</sub>	内圧（最高使用圧力）	MPa



記号	記号の説明	単位
$\sigma_0$	胴の一次一般膜応力の最大値	MPa
$\sigma_{0c}$	胴の組合せ圧縮応力	MPa
$\sigma_{0t}$	胴の組合せ引張応力	MPa
$\sigma_2$	地震動のみによる胴の一次応力と二次応力の和の変動値の最大値	MPa
$\sigma_{2\phi}$	地震動のみによる胴の周方向一次応力と二次応力の和	MPa
$\sigma_{2c}$	地震動のみによる胴の一次応力と二次応力の和の変動値 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{2t}$	地震動のみによる胴の一次応力と二次応力の和の変動値 (引張側)	MPa
$\sigma_{2xc}$	地震動のみによる胴の軸方向一次応力と二次応力の和 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{2xt}$	地震動のみによる胴の軸方向一次応力と二次応力の和 (引張側)	MPa
$\sigma_b$	容器底部の組合せ応力	MPa
$\sigma_{b1}$	運転時質量により容器底部に生じる圧縮応力	MPa
$\sigma_{b2}$	水平方向地震により容器底部に生じる引張応力	MPa
$\sigma_{b3}$	鉛直方向地震により容器底部に生じる圧縮応力	MPa
$\sigma_{x1}, \sigma_{\phi 1}$	内圧により胴に生じる軸方向及び周方向応力	MPa
$\sigma_{x2}$	胴の空質量による軸方向圧縮応力	MPa
$\sigma_{x3}$	胴の鉛直方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{x4}$	胴の水平方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{xc}$	胴の軸方向応力の和 (圧縮側)	MPa
$\sigma_{xt}$	胴の軸方向応力の和 (引張側)	MPa
$\sigma_{\phi}$	胴の周方向応力の和	MPa
$\sigma_{\phi 2}$	静水頭に鉛直方向地震が加わり胴に生じる周方向応力	MPa
$\tau$	地震により胴に生じるせん断応力	MPa
$\tau_b$	地震により容器底部に生じるせん断応力	MPa

注：「設計・建設規格」とは、発電用原子力設備規格（設計・建設規格 J S M E S N C 1 - 2005 (2007年追補版含む。)) (日本機械学会 2007年9月) (以下「設計・建設規格」という。)をいう。

## 2 計算方法

### 2.1 固有周期の計算方法

#### (1) 計算モデル

本容器は，1.2項より図2-1に示すような下端固定の1質点系振動モデルとして考える。

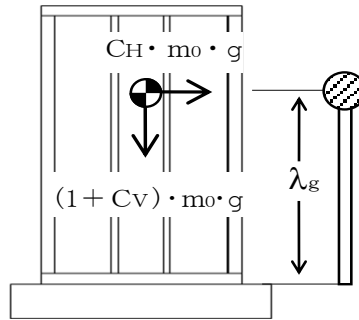


図2-1 固有周期の計算モデル

#### (2) 水平方向固有周期

曲げ及びせん断変形によるばね定数 $K_H$ は次式で求める。

$$K_H = \frac{1000}{\frac{\lambda_g^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{\lambda_g}{G \cdot A_e}} \quad \dots\dots\dots (2.1.1)$$

ここで，胴の断面性能は次のように求める。

$$I = \frac{\pi}{8} \cdot (D_{i0} + t_o)^3 \cdot t_o + \frac{\pi}{8} \cdot (D_{ii} + t_i)^3 \cdot t_i \quad \dots\dots\dots (2.1.2)$$

$$A_e = \frac{2}{3} \cdot \pi \cdot (D_{i0} + t_o) \cdot t_o + \frac{2}{3} \cdot \pi \cdot (D_{ii} + t_i) \cdot t_i \quad \dots\dots\dots (2.1.3)$$

したがって，固有周期 $T_H$ は次式で求める。

$$T_H = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_H}} \quad \dots\dots\dots (2.1.4)$$

#### (3) 鉛直方向固有周期

軸方向変形によるばね定数 $K_V$ は次式で求める。

$$K_v = \frac{1000}{\frac{\lambda_g}{A \cdot E}} \dots\dots\dots (2.1.5)$$

ここで、胴の断面性能は次のように求める。

$$A = \pi \cdot (D_{i_o} + t_o) \cdot t_o + \pi \cdot (D_{i_i} + t_i) \cdot t_i \dots\dots\dots (2.1.6)$$

したがって、固有周期  $T_v$  は次式で求める。

$$T_v = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_e}{K_v}} \dots\dots\dots (2.1.7)$$

## 2.2 応力の計算方法

応力計算において、静的地震力を用いる場合は、絶対値和を用い、動的地震力を用いる場合は、SRS法を用いることができる。

### 2.2.1 外胴の応力

#### (1) 内圧による応力

$$\sigma_{\phi_1} = \frac{P_r \cdot (D_{i_o} + 1.2 \cdot t_o)}{2 \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.1)$$

$$\sigma_{\phi_2} = 0 \dots\dots\dots (2.2.1.2)$$

$$\sigma_{x_1} = \frac{P_r \cdot (D_{i_o} + 1.2 \cdot t_o)}{4 \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.3)$$

#### (2) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

胴がベースプレートと接合する点には、胴自身の質量による圧縮応力と鉛直方向地震による軸方向応力が生じる。

$$\sigma_{x_2} = \frac{m_e \cdot g}{\pi \cdot (D_{i_o} + t_o) \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.4)$$

$$\sigma_{x_3} = \frac{m_e \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_{i_o} + t_o) \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.5)$$

#### (3) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により胴はベースプレート接合部で最大となる曲げモーメントを受ける。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

$$\sigma_{x_4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \lambda_g}{\pi \cdot (D_{i_o} + t_o)^2 \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.6)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g}{\pi \cdot (D_{i_o} + t_o) \cdot t_o} \dots\dots\dots (2.2.1.7)$$

(4) 組合せ応力

(1)～(3)によって求めた胴の応力は以下のように組み合わせる。

a. 一次一般膜応力

(a) 組合せ引張応力

$$\sigma_{\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 2} \dots\dots\dots (2.2.1.8)$$

$$\sigma_{ot} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xt})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.9)$$

ここで,

【絶対値和】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} - \sigma_{x2} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4} \dots\dots\dots (2.2.1.10)$$

【SRSS法】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} - \sigma_{x2} + \sqrt{\sigma_{x3}^2 + \sigma_{x4}^2} \dots\dots\dots (2.2.1.11)$$

(b) 組合せ圧縮応力

$\sigma_{xc}$ が正の値(圧縮側)のとき, 次の組合せ圧縮応力を求める。

$$\sigma_{\phi} = -\sigma_{\phi 1} - \sigma_{\phi 2} \dots\dots\dots (2.2.1.12)$$

$$\sigma_{oc} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xc})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.13)$$

ここで,

【絶対値和】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4} \dots\dots\dots (2.2.1.14)$$

【SRSS法】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sqrt{\sigma_{x3}^2 + \sigma_{x4}^2} \dots\dots\dots (2.2.1.15)$$

したがって, 胴の組合せ一次一般膜応力の最大値は, 絶対値和, SRSS法それぞれに対して,

$$\sigma_o = \text{Max} \left\{ \text{組合せ引張応力} (\sigma_{ot}), \text{組合せ圧縮応力} (\sigma_{oc}) \right\} \dots\dots\dots (2.2.1.16)$$

とする。

一次応力は一次一般膜応力と同じになるので省略する。

## 2.2.2 下部プレートとの溶接部の応力

### (1) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

容器底部に生じる運転時質量及び鉛直方向地震による圧縮応力は次式で求める。

$$\sigma_{b1} = \frac{m_0 \cdot g}{\{\pi \cdot (D_{b0} + t_1)\} \cdot t_1} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.1)$$

$$\sigma_{b3} = \frac{m_0 \cdot g \cdot C_v}{\{\pi \cdot (D_{b0} + t_1)\} \cdot t_1} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.2)$$

### (2) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により容器底部に作用する曲げモーメントにより生じる軸方向応力及び水平方向地震力によるせん断応力は次のように求める。

$$\sigma_{b2} = \frac{M_s}{(D_{b0} + t_1) \cdot t_1 \cdot \left\{ \frac{\pi}{4} \cdot (D_{b0} + t_1) \right\}} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.3)$$

$$\tau_b = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g}{\{\pi \cdot (D_{b0} + t_1)\} \cdot t_1} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.4)$$

ここで、容器に作用する転倒モーメント $M_s$ は、

$$M_s = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \lambda g \quad \dots\dots\dots (2.2.2.5)$$

### (3) 組合せ応力

組合せ応力は次式で求める。

【絶対値和】

$$\sigma_b = \sqrt{(\sigma_{b1} + \sigma_{b2} + \sigma_{b3})^2 + 3 \cdot \tau_b^2} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.6)$$

【SRSS法】

$$\sigma_b = \sqrt{(\sigma_{b1} + \sqrt{\sigma_{b2}^2 + \sigma_{b3}^2})^2 + 3 \cdot \tau_b^2} \quad \dots\dots\dots (2.2.2.7)$$

### 3 評価方法

#### 3.1 固有周期の評価

2.1項で求めた固有周期から、水平方向及び鉛直方向の設計震度を求める。

#### 3.2 応力の評価

##### 3.2.1 胴の応力評価

2.2.1項で求めた組合せ応力が胴の最高使用温度における許容応力  $S_a$  以下であること。

応力の種類	許 容 応 力 $S_a$	
		耐震クラスの重要度分類Bクラスの場合、弾性設計用地震動 $S_d$ 又は静的震度による荷重との組合せの場合
一次一般膜応力	設計降伏点 $S_y$ と設計引張強さ $S_u$ の0.6倍のいずれか小さい方の値。ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金にあつては許容引張応力 $S$ の1.2倍の方が大きい場合は、この大きい方の値とする。	設計引張強さ $S_u$ の0.6倍

一次応力の評価は算出応力が一次一般膜応力と同じ値であるので省略する。

##### 3.2.2 下部プレートとの溶接部の応力評価

2.2.2項で求めた溶接部の引張応力  $\sigma_b$  は次式より求めた許容引張応力  $f_t$  以下であること。

ただし、 $f_t$  は下表による。

	耐震クラスの重要度分類Bクラスの場合、弾性設計用地震動 $S_d$ 又は静的震度による荷重との組合せの場合	基準地震動 $S_s$ による荷重との組合せの場合
許容引張応力 $f_t$	$\frac{F}{1.5} \cdot 1.5$	$\frac{F^*}{1.5} \cdot 1.5$

なお、 $F$  は溶接部であるため、 $\eta = 0.45$ 倍とする。

## サイトバンカ建屋の構造強度及び耐震性に関する検討結果

## 1. 評価方針

サイトバンカ建屋は、耐震Bクラスである第三セシウム吸着装置の間接支持構造物であるため、耐震Bクラス相当として評価する。

サイトバンカ建屋は、建設時に耐震Bクラスとして設計されている。第三セシウム吸着装置はサイトバンカ建屋2階の一部への配置となるため、当該設備支持躯体である2階床スラブ及び床スラブを支持する大梁について、建設時の応力に今回増設機器設置に伴う応力を加えて断面検討を行う。

第三セシウム吸着装置は、平面が52.0m(NS方向)×33.0m(EW方向)、地上高さ23.8m、地下8.704mの鉄筋コンクリート造のサイトバンカ建屋の2階床に支持されている。サイトバンカ建屋の2階平面図を図1-1に示す。

なお、評価は、「鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説(日本建築学会)」に準拠する。

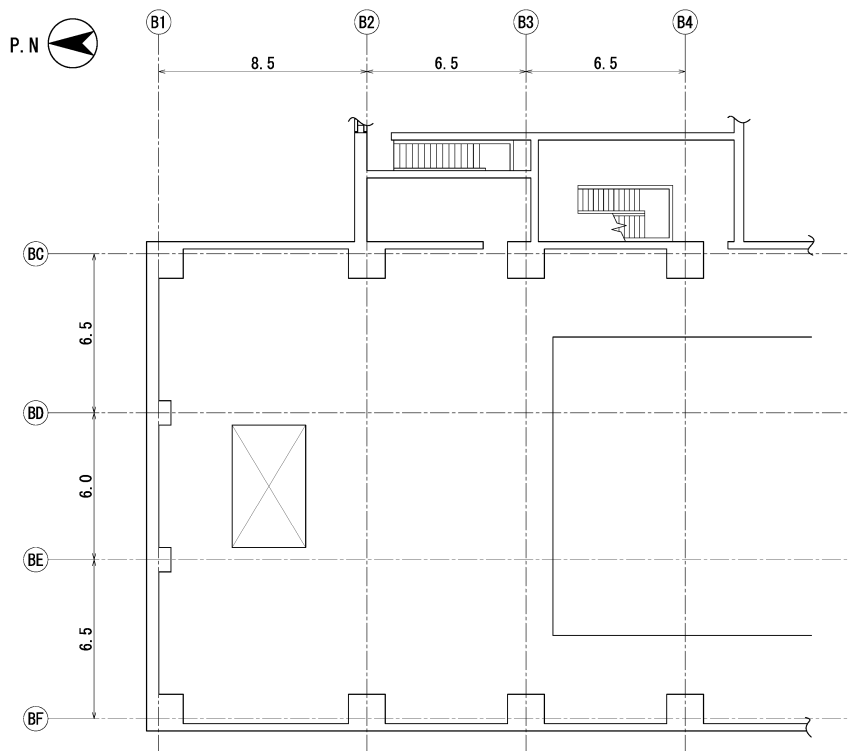


図1-1 2階平面図（単位：m）

## 2. 評価条件

### 2.1 使用材料及び材料の許容応力度

サイトバンカ建屋に用いられている材料のうち、コンクリートは普通コンクリートで、コンクリートの設計基準強度  $F_c$  は  $22.1\text{N/mm}^2$  ( $225\text{kg/cm}^2$ ) である。鉄筋はSD35である。各使用材料の許容応力度を建設時の工学系単位からSI単位に換算して表2-1及び表2-2に示す。

表2-1 コンクリートの許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

	長期		短期	
	圧縮	せん断	圧縮	せん断
$F_c=22.1$	7.35	0.71	14.7	1.06

表2-2 鉄筋の許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

		長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD35	D29 以上	196	196	343	294
	D29 未満	215	196	343	294

### 2.2 荷重

評価にあたっては、長期荷重として、鉛直荷重を考慮する。また、短期荷重として、地震時に作用する荷重を考慮する。

#### (1) 鉛直荷重

鉛直荷重は、固定荷重、配管荷重、積載荷重及び機器荷重とする。

機器荷重以外の荷重については、建設時のものを考慮する。

機器荷重は、増設する第三セシウム吸着装置等の荷重を考慮する。

#### (2) 地震荷重

地震荷重は、建設時に考慮した設計地震力を増設機器荷重で割り増した荷重を考慮する。



### 3. 評価結果

#### 3.1 床スラブの評価結果

第三セシウム吸着装置を支持する BE-BF/B1-B2 間の床スラブの応力解析は、短辺方向 (EW 方向) に単位幅 (1.0m) をもつ一方方向版として計算を行う。検定比が最大となる部位を表 3-1 に示し、床スラブ配筋図を図 3-1 に示す。

これより、床スラブの作用応力は、許容応力以下であることを確認した。

表 3-1 床スラブの作用応力と許容応力

検討箇所	断面 (単位: mm)	応力	作用応力	許容応力	検定比
2 階 BE-BF 間 B1-B2 間	t=500 配筋 2-D25@200 縦横共	曲げ モーメント	206.9 kN・m	215.2 kN・m	0.97
		せん断力	257.4 kN	279.9 kN	0.92

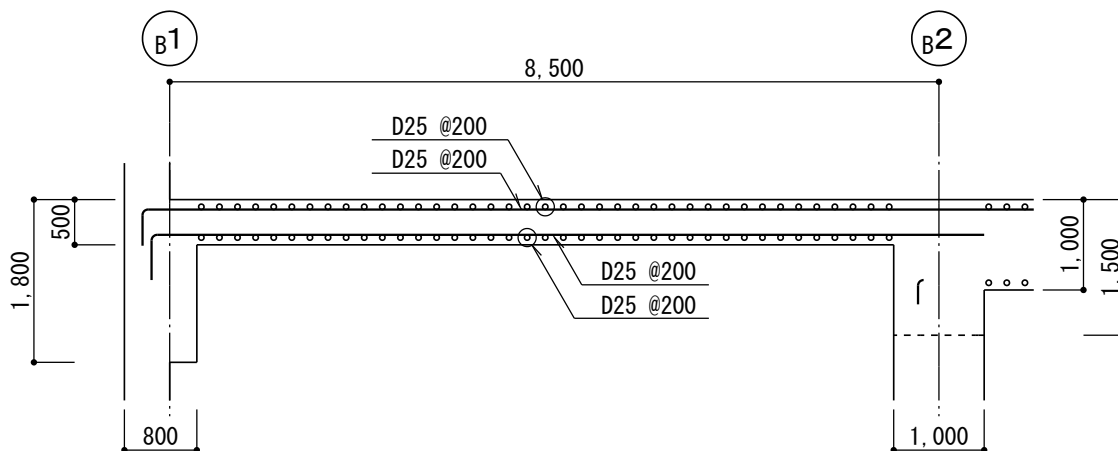


図 3-1 床スラブ配筋図 (単位: mm)

### 3.2 大梁の評価結果

床スラブを支持する BE 通り B1-B2 間の大梁の応力は、既往のフレーム応力解析による応力に第三セシウム吸着装置による追加荷重を考慮した応力を加えたものとする。検定比が最大となる部位を表 3-2 に示し、大梁配筋図を図 3-2 に示す。

これより、大梁の作用応力は、許容応力以下であることを確認した。

表 3-2 大梁の作用応力と許容応力

検討箇所	断面 (単位：mm)	荷重 ケース	応力	作用応力	許容応力	検定比
2 階 BE 通り B1-B2 間	B×D 1000×1500 主筋上端 6-D38 主筋下端 6-D38 あばら筋 3-D16@200	長期	曲げ モーメント	1463 kN・m	1636 kN・m	0.90
			せん断力	1094 kN	1734 kN	0.63
	B×D 1000×1500 主筋上端 6-D38 主筋下端 6-D38 あばら筋 3-D16@200	短期 (地震)	曲げ モーメント	1614 kN・m	2864 kN・m	0.57
			せん断力	1165 kN	2602 kN	0.45

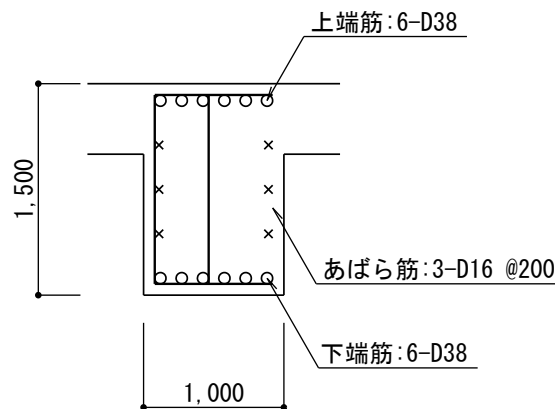


図 3-2 大梁配筋図 (単位：mm)

#### 4. 付録

##### 付録ー1 サイトバンカ建屋に関する参考評価

サイトバンカ建屋に関する参考評価

1. はじめに

第三セシウム吸着装置が設置される建屋（サイトバンカ建屋）について、基準地震動  $S_s$  に対し、1階外壁及び地下外壁が崩壊しないことを確認する。なお、判定は1階及び地下階の耐震壁が終局限界に至らないことを確認する。

## 2. 解析評価方針

サイトバンカ建屋の耐震安全性評価は、基準地震動  $S_s$  を用いた地震応答解析によることを基本とし、建物・構築物や地盤の応答性状を適切に表現できるモデルを設定した上で行う。

解析モデルは、地上2階に設置された機器を含む建屋全域をNS、EW方向とも、1軸質点系モデルとする。

1階及び地下階の耐震壁の評価は、地震応答解析により得られた該当部位の最大せん断ひずみが、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) を超えないことを確認することとする。

サイトバンカ建屋の地震応答解析の評価手順を図2-1に示す。

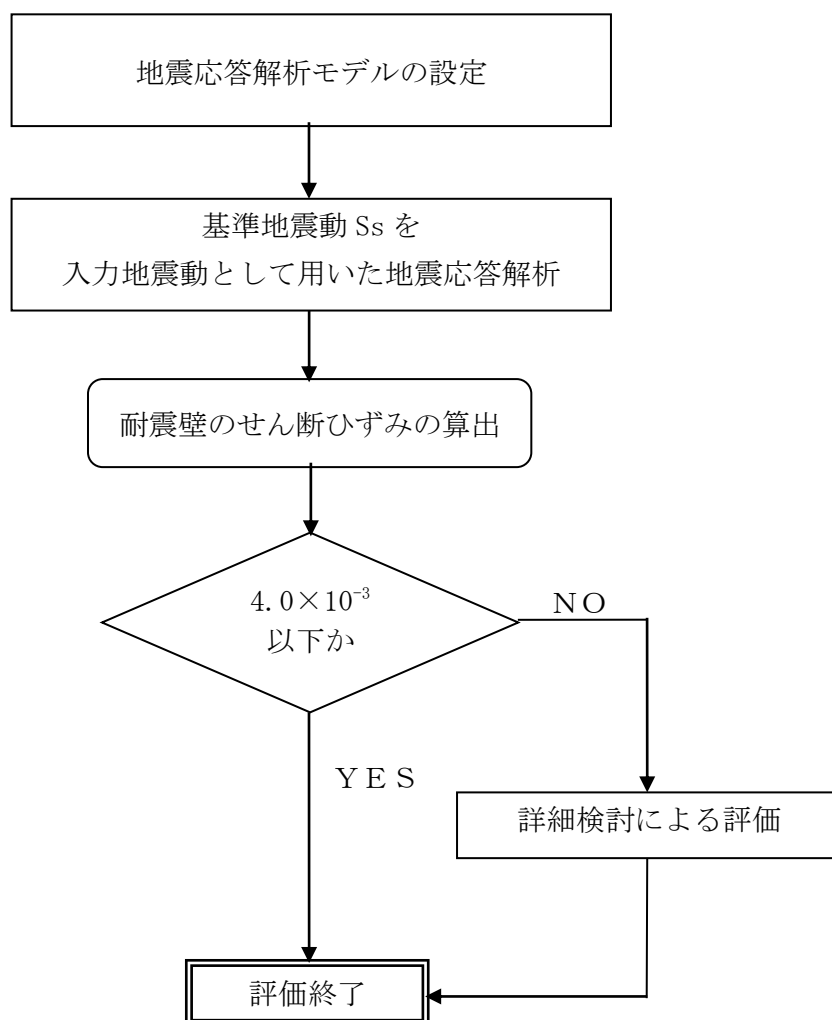


図2-1 サイトバンカ建屋の地震応答解析の評価手順

### 3. 解析に用いる入力地震動

サイトバンカ建屋への入力地震動は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（原管発官19第603号 平成20年3月31日付け）」にて作成した解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  を用いることとする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図3-1に示す。このサイトバンカ建屋の解析モデルに入力する地震動は、一次元波動論に基づき、解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  に対する建屋基礎底面レベルの地盤応答として評価する。また、建屋基礎底面レベルにおけるせん断力を入力地震動に付加することにより、地盤の切欠き効果を考慮する。

このうち、解放基盤表面位置における基準地震動  $S_s$  の加速度波形について、図3-2に示す。

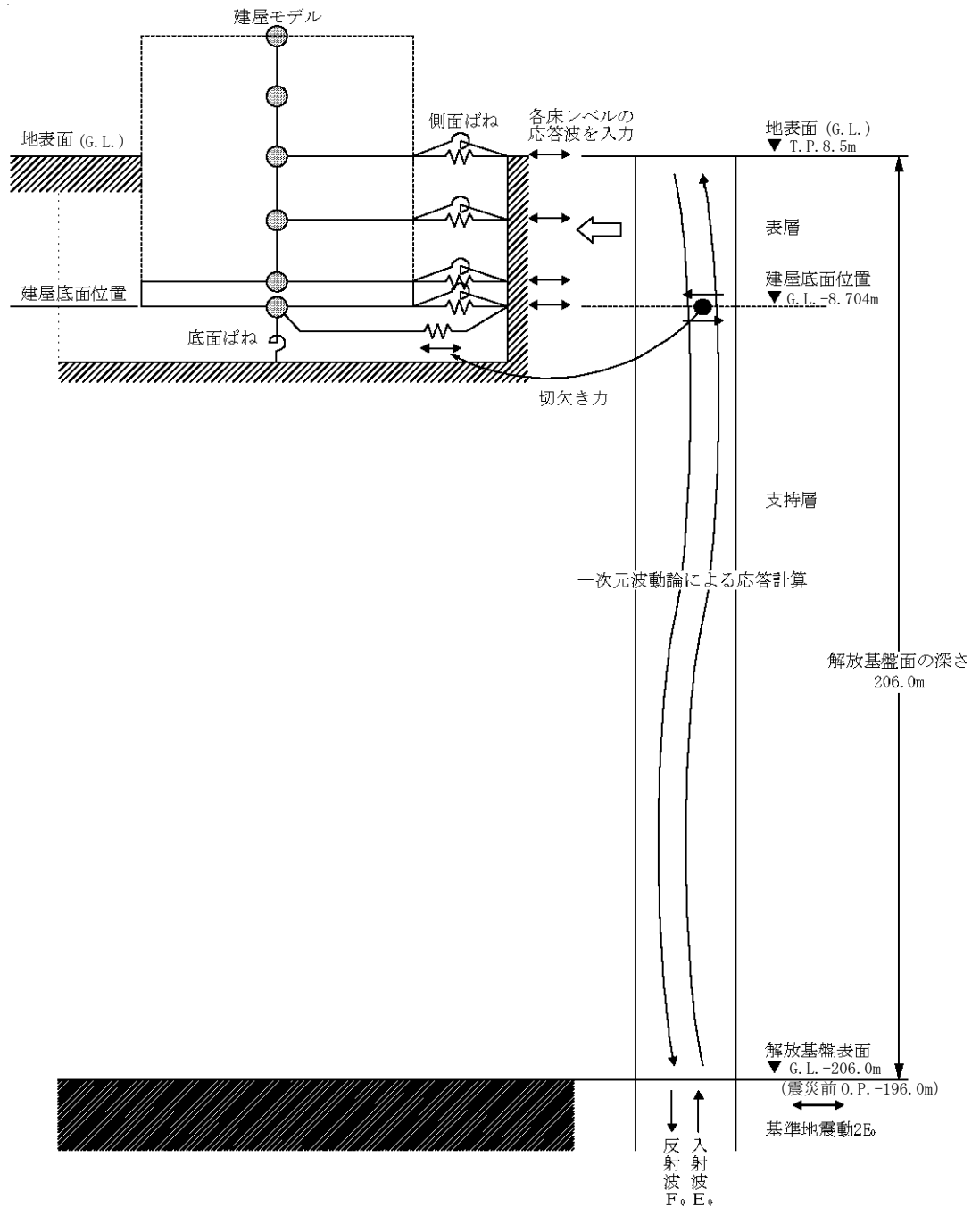


図 3-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

添付資料 25 別紙(3)に記載の標高は、震災前の地盤沈下量 (-709mm) と O.P. から T.P. への読替値 (-727m) を用いて、下式に基づき換算している。

<換算式>  $T.P. = \text{旧 O.P.} - 1,436\text{mm}$

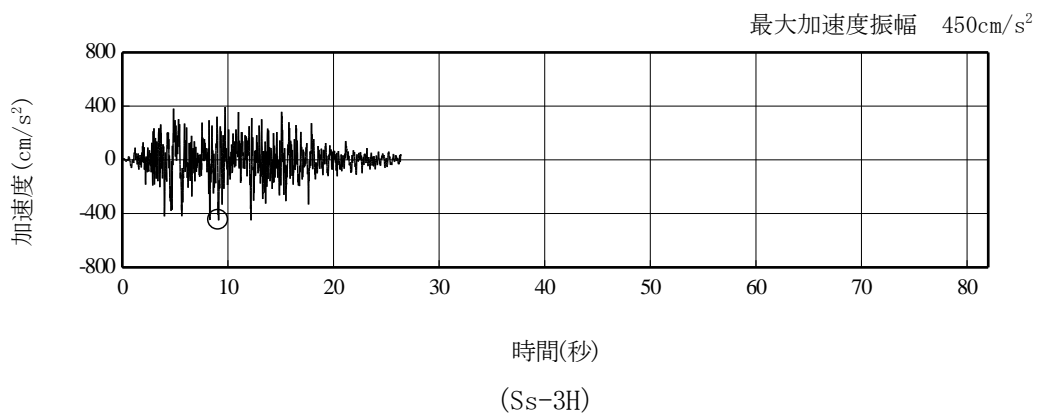
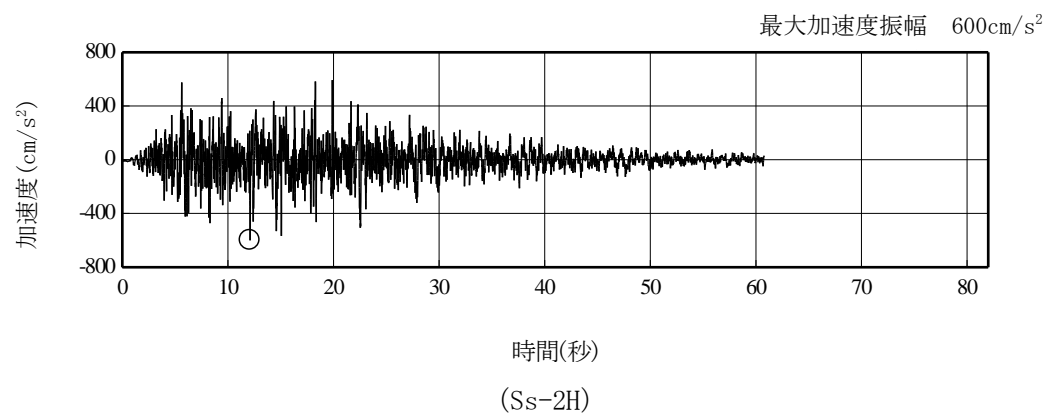
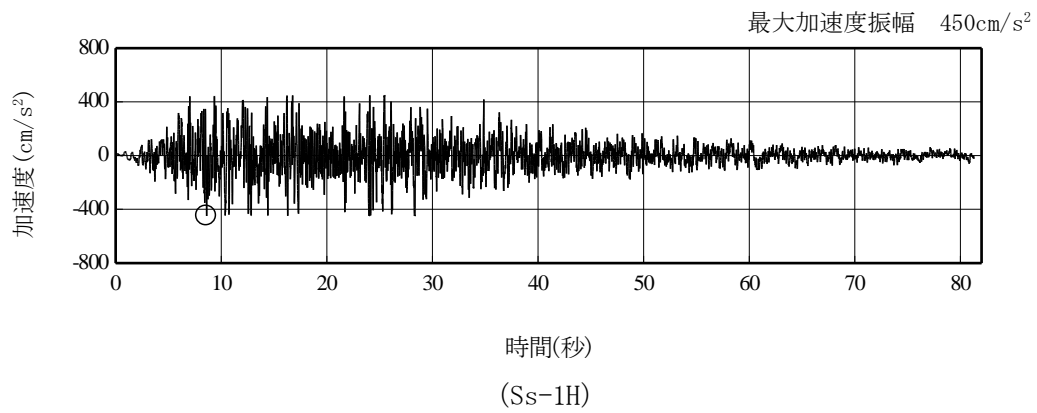


図 3 - 2 解放基盤表面位置における地震動の加速度時刻歴波形 (水平方向)



#### 4. 地震応答解析モデル

基準地震動  $S_s$  に対するサイトバンカ建屋の地震応答解析は、「3. 解析に用いる入力地震動」で算定した入力地震動を用いた動的解析による。

地震応答解析モデルは、図4-1及び図4-2に示すように、建屋を曲げ変形とせん断変形をする質点系とし、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。建屋-地盤連成系としての効果は地盤ばね及び入力地震動によって評価される。解析に用いるコンクリートの物性値を表4-1に、建屋解析モデルの諸元を表4-2に示す。

地盤定数は、水平成層地盤と仮定し、地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定めた。解析に用いた地盤定数を表4-3に示す。

解析モデルにおいて、基礎底面地盤ばねについては、「JEAG4601-1991」に示された手法を参考にして、成層補正を行ったのち、振動アドミッタンス理論に基づいて、スウェイ及びロッキングばね定数を近似的に評価する。また、埋込部分の建屋側面地盤ばねについては、建屋側面位置の地盤定数を用いて、水平及び回転ばねを「JEAG4601-1991」によりNOVAKばねに基づいて近似法により評価する。

地盤ばねは振動数に依存した複素剛性として得られるが、図4-3に示すようにばね定数 ( $K_c$ ) として実部の静的な値を、また、減衰係数 ( $C_c$ ) として建屋-地盤連成系の1次固有振動数に対応する虚部の値と原点を結ぶ直線の傾きを採用することにより近似する。

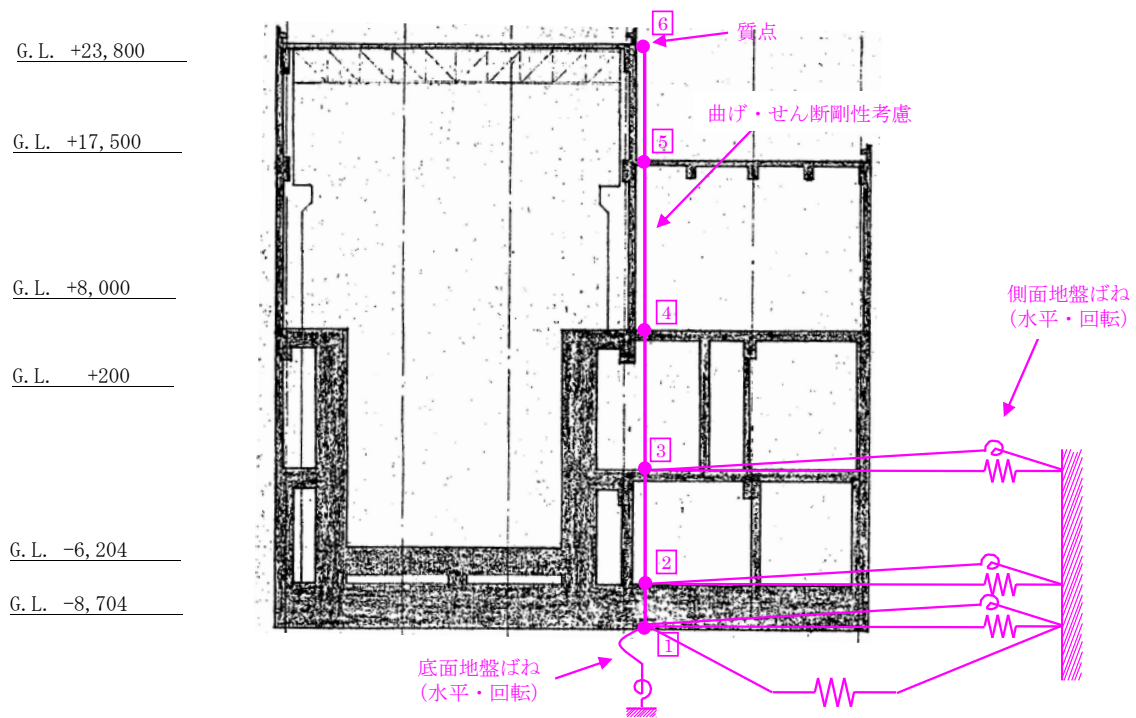


図4-1 サイトバンカ建屋 地震応答解析モデル (NS 方向)

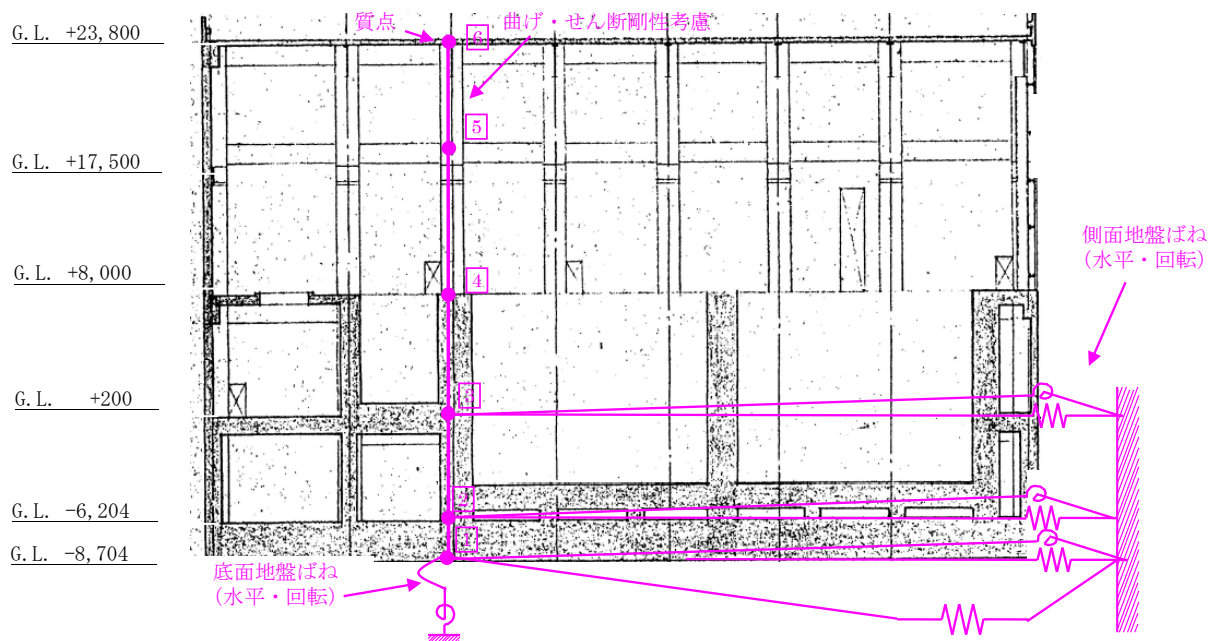


図4-2 サイトバンカ建屋 地震応答解析モデル (EW 方向)

表 4 - 1 地震応答解析に用いる物性値

コンクリート	強度 Fc (N/mm <sup>2</sup> )	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	せん断弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 ν	単位体積重量*1 γ (kN/m <sup>3</sup> )
	22.1	2.06×10 <sup>4</sup>	0.88×10 <sup>4</sup>	0.2	24
鉄筋	SD345 相当 (SD35)				

\*1：鉄筋コンクリートの値を示す。

表4-2 (1) 建屋解析モデルの諸元  
(NS 方向)

質点番号	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{kN} \cdot \text{m}^2)$	せん断断面積 $A_S (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
6	15,020	33.85		
			31.2	8,991
5	27,120	55.78		
			46.6	12,058
4	96,700	199.35		
			180.9	27,046
3	123,920	255.89		
			249.8	44,152
2	105,040	216.65		
			1605.5	330,135
1	52,430	107.90		
合計	420,230			

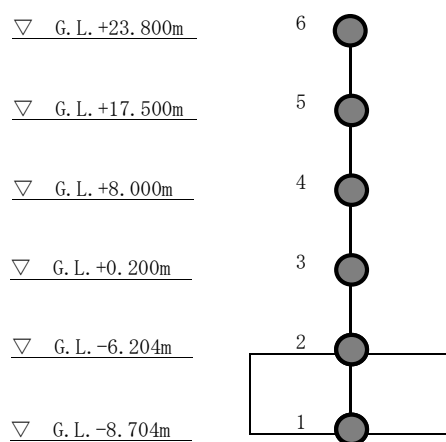


表 4-2 (2) 建屋解析モデルの諸元  
(EW 方向)

質点番号	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{kN} \cdot \text{m}^2)$	せん断断面積 $A_S (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
6	15,020	5.02		
			10.0	423
5	27,120	24.06		
			20.5	604
4	96,700	86.26		
			168.6	6,787
3	123,920	110.95		
			203.1	13,936
2	105,040	93.79		
			1605.5	142,360
1	52,430	46.58		
合計	420,230			

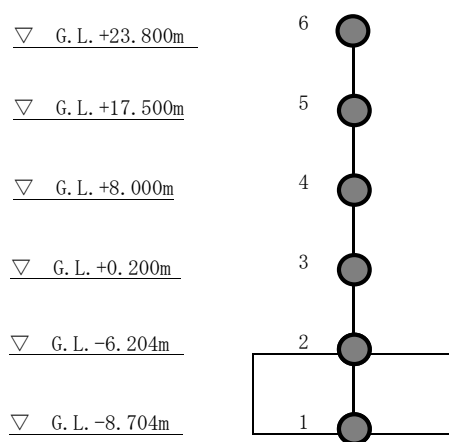


表 4-3 (1) 地盤定数 (Ss-1)

G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0										
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

表 4-3 (2) 地盤定数 (Ss-2)

G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0										
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.76	3.41	0.81	8.08	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.53	4.36	0.81	10.27	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.56	5.63	0.81	13.19	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.29	6.53	0.81	15.26	3	88.0
		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

表 4-3 (3) 地盤定数 (Ss-3)

G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0.0										
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	2.25	2.62	0.86	6.63	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

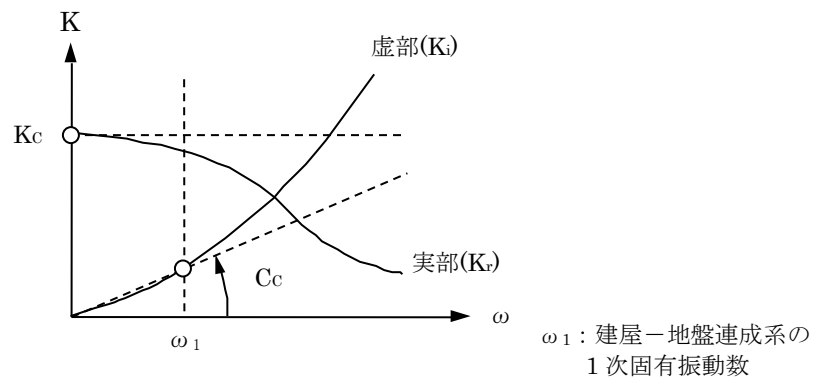


図4-3 地盤ばねの近似



5. 地震応答解析結果

地震応答解析により求められた NS 方向, EW 方向の最大応答加速度を, 図 5 - 1 及び図 5 - 2 に示す。

Ss-1	Ss-2	Ss-3
—————	-----	- - - - -

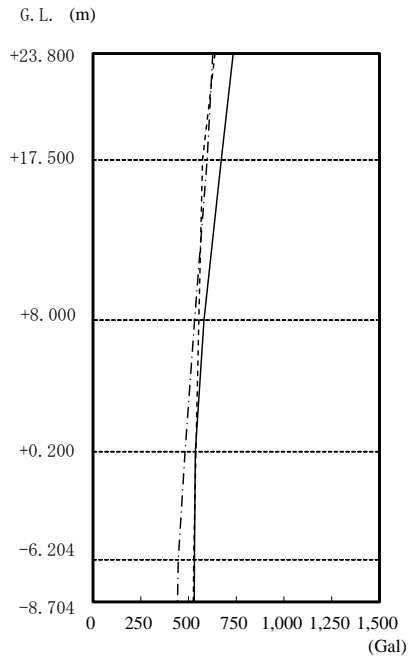


図 5 - 1 最大応答加速度  
(Ss-1~3, NS 方向)

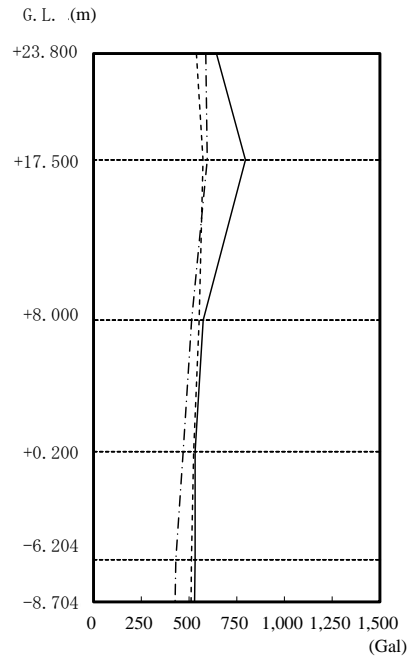


図 5 - 2 最大応答加速度  
(Ss-1~3, EW 方向)

## 6. 耐震安全性評価結果

基準地震動  $S_s$  に対するサイトバンカ建屋の耐震壁のせん断ひずみ一覧を表 6-1 及び表 6-2 に示す。

耐震壁のせん断ひずみは、最大で  $0.08 \times 10^{-3}$  ( $S_s-1$ , EW 方向, B1F) であり、耐震壁の評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) に対して十分な余裕がある。

よって、サイトバンカ建屋 1 階及び地下階の耐震安全性は確保されているものと評価した。

表 6-1 耐震壁のせん断ひずみ一覧 (NS 方向)

(単位:  $\times 10^{-3}$ )

階	せん断ひずみ			許容値
	$S_s-1$	$S_s-2$	$S_s-3$	
1F	0.06	0.05	0.05	4.0 以下
B1F	0.07	0.07	0.06	

表 6-2 耐震壁のせん断ひずみ一覧 (EW 方向)

(単位:  $\times 10^{-3}$ )

階	せん断ひずみ			許容値
	$S_s-1$	$S_s-2$	$S_s-3$	
1F	0.06	0.05	0.05	4.0 以下
B1F	0.08	0.07	0.06	

### 第三セシウム吸着装置の具体的な安全確保策

第三セシウム吸着装置の漏えい発生防止対策，放射線遮へい対策，崩壊熱除去，可燃性ガス滞留防止，環境条件対策等について具体的な安全確保策を以下の通り定め，実施する。

#### 1. 放射性物質の漏えい防止等に対する考慮

##### (1)漏えい発生防止

- a. 第三セシウム吸着装置吸着塔の機器については，腐食による漏えい発生を防止するために，耐腐食性を有するSUS316L材，二相ステンレス材の使用を基本とし，移送配管はSUS316L材，二相ステンレス材または耐腐食性を有するポリエチレン管を使用する。
- b. ポンプの軸封部は，漏えいの発生し難いメカニカルシール構造とする。

##### (2)漏えい検知・漏えい拡大防止

- a. 第三セシウム吸着装置は，機器（弁ユニット・吸着塔架台，ブースターポンプ）の周囲に漏えい受けパン及び漏えい検知器を設け，漏えいを早期に検知する。
- b. 漏えいを検知した場合は，免震重要棟集中監視室に警報を発報・表示し，運転員が停止操作等の必要な措置を講ずる。また，巡視点検等で漏えいがないことを確認する。
- c. 第三セシウム吸着装置は，装置の設置エリアを覆う全体架台上に堰（堰内には漏えい検知器）が設置されているため，機器等の内包水が流出した場合においても全量が堰内にとどまり，堰外へ漏えいすることはない（表－1）。仮に漏えいが発生した場合でも系外に放出することを防止するため，第三セシウム吸着装置は建屋内に設置する。
- d. 第三セシウム吸着装置の設置に伴い新規に敷設する移送配管について，以下の対応を行う。
  - ・屋内に設置する配管のうち，ポリエチレン管と鋼管または鋼管と鋼管の取合いでフランジ接続となる箇所については，漏えい受けパンまたは堰と漏えい検知器により漏えいの早期検知を図る。
  - ・屋外配管（ポリエチレン配管）については，原則として耐紫外線性を有するコルゲート管等で覆う二重構造とし，漏えいの拡大防止を図る。配管から漏えいした系統水は，コルゲート管等を通じて建屋内に導かれ，建屋内の漏えい受けパンまたは堰内に設置された漏えい検知器で漏えいを検知する。

表－1 漏えい拡大防止評価

対象設備	保有水量	貯留可能な堰面積※	必要な堰高さ	漏えい拡大防止堰高さ	評価
	a	b	c=a/b	d	
ブースターポンプ バルブ ろ過フィルタ 吸着塔 移送配管	11.2 (m <sup>3</sup> )	101 (m <sup>2</sup> )	111 (mm) 以上	120 (mm) 以上	漏えい拡大防止堰の高さは、保有水量を貯留するために必要な高さを満足しており、漏えいの拡大を防止できる。

※：堰内のり寸法

2. 放射線遮へいに対する考慮

- a. 第三セシウム吸着装置吸着塔は、放射線業務従事者の被ばく低減のため、吸着塔表面の線量当量率が 2mSv/h 以下となるように遮へいする。
- b. 第三セシウム吸着装置吸着塔は、吸着塔交換等の際、放射線業務従事者が近づく可能性があることから、吸着塔表面の線量当量率等の表示により注意喚起することで、放射線業務従事者の被ばく低減を図る。
- c. 第三セシウム吸着装置のポンプ及び配管等については、放射線業務従事者の過度の被ばく防止を図るために、鉛板マットによる遮へいを設ける。

3. 崩壊熱除去に対する考慮

- a. 処理対象水に含まれる放射性物質の崩壊熱は、通水時は処理水とともに熱除去される。
- b. 吸着塔内部の温度は、最も高温となる水を抜いた状態であっても、吸着材及び構造材料に影響しない範囲で収束する。(別添－1)

4. 可燃性ガスの滞留防止に対する考慮

- a. 水の放射線分解により発生する可能性のある可燃性ガスは、通水時は処理水とともに排出される。通水停止後は、吸着塔上部に設けたオートベント弁・ベント管を介して可燃性ガスを屋外に排出する。(別添－2)
- b. 第三セシウム吸着装置にて発生する使用済みの吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、内部の水抜きを実施する。
- c. 使用済み吸着塔一時保管施設においては、ベントを開けた状態で保管することにより、可燃性ガスを大気に放出する。

## 5. 環境条件対策

### (1) 腐食

耐腐食性を有するステンレス材，ポリエチレン管等を使用する。

### (2) 熱による劣化

吸着塔中心温度が高くなる吸着塔において，最大温度はA型にて約 120℃（容器外周部），B型にて約 210℃（容器内周部）であり，金属材料に有意な特性変化は生じない。

### (3) 凍結

滞留水を移送している過程では，水が流れているため凍結の恐れはない。滞留水の移送を停止した場合，屋外に敷設する移送配管等は，凍結による破損が懸念されることから保温材を設置する。

### (4) 生物汚染

使用済みセシウム吸着塔一時保管施設で保管する吸着塔は，内部の水を抜いた状態で保管するため，生物汚染に対する配慮は必要ない。

### (5) 紫外線

屋外敷設箇所のポリエチレン管は，耐紫外線性を有する保温材等で覆う処置を講ずることで，紫外線による劣化を防止する。

### (6) 耐放射線性

ポリエチレンは，集積線量が  $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に達すると，引張強度は低下しないが，破断時の伸びが減少する傾向を示すが，ポリエチレン管の照射線量率を  $1 \text{Gy/h}$  と仮定すると， $2 \times 10^5 \text{Gy}$  に到達する時間は  $2 \times 10^5$  時間（22.8 年）と評価される。そのため，ポリエチレン管は数年程度の使用では放射線照射の影響を受けることはないと考えられる。

### (7) 長期停止中の措置

第三セシウム吸着装置を長期停止する場合は，必要に応じてフラッシングするとともに，内部の水抜きを実施し，腐食及び凍結を防止する。

## 6. 放射性固体廃棄物の発生量

第三セシウム吸着装置から発生する吸着塔の年間の数は，ろ過フィルタが約 4 体，吸着塔が約 12 体と想定される。使用済み吸着塔は，使用済みセシウム吸着塔一時保管施設のうち，保管容量が 230 体の第一施設または保管容量が 345 体の第四施設において保管する。なお，必要に応じて使用済みセシウム吸着塔一時保管施設を増設する。

以上

## 第三セシウム吸着装置 温度評価

## 1. 評価概要

滞留水の処理に伴い使用済吸着塔が発生する。これらは、水抜き後に使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵するが、高濃度の放射性物質を内包していることから崩壊熱による温度上昇を評価し、同時吸着塔の機能への影響について確認を行う。

## 2. 評価方法

## &lt;吸着塔A型&gt;

使用済セシウム吸着塔一時保管施設で保管する際の吸着塔内部の最高温度について評価を行う。吸着塔は使用済セシウム吸着塔一時保管施設では図－1に示すように鉛遮へい体を含む容器として保管される。

遮へい容器上下には空気出入口があり、内部空気温度が上昇して浮力が発生することで外気が入口から流入し、吸着塔側面で上昇流となり、出口から流出する。これにより吸着塔外表面及び遮へい容器内表面は空気の自然通風で除熱される。また、遮へい容器外表面は空気の自然対流で除熱される。

吸着塔の温度は、セシウム吸着（約  $2.1 \times 10^{15}$  Bq/塔）、ストロンチウム吸着（約  $1.05 \times 10^{15}$  Bq/塔）による発熱量、外気温度を  $40^\circ\text{C}$  と仮定し、STAR-CD Ver4.08 を用いて三次元解析により求めた。

## &lt;吸着塔B型&gt;

使用済セシウム吸着塔一時保管施設で保管する際の吸着塔内部の最高温度について評価を行う。吸着塔は使用済セシウム吸着塔一時保管施設では図－3に示すように鉛遮へい体を含む容器として保管される。

遮へい容器の上下に開口部を設けてあり、遮へい容器下部の中心部はラビリンス構造となっている。内部の空気温度が上昇して対流が発生すると、外気は下部開口部からラビリンス部を経て吸着材容器中空部で上昇流となり、遮へい容器上部の開口部から流出する。これにより、吸着材容器は空気の自然通風により除熱される。また、遮へい容器外表面は空気の自然対流で除熱される。

吸着塔の温度は、セシウム吸着（約  $3.8 \times 10^{15}$  Bq/塔）、ストロンチウム吸着（約  $2.5 \times 10^{15}$  Bq/塔）による発熱量、外気温度を  $40^\circ\text{C}$  と仮定し、STAR-CCM+Ver. 12.04 を用いて三次元解析により求めた。

### 3. 評価結果

評価の結果、大気への放熱が定常になる際の吸着塔中心部温度はA型において約510℃、B型において約320℃、鉛の最高温度はA型において約70℃、B型において約140℃と評価された。吸着塔内での発熱は吸着材の健全性（吸着材はA型において約1,000℃、B型において約600℃程度まで安定）や鉛の遮へい性能に影響を与えるものではないことを確認した。吸着塔A型の評価結果を図-2に、吸着塔B型の評価結果を図-4に示す。

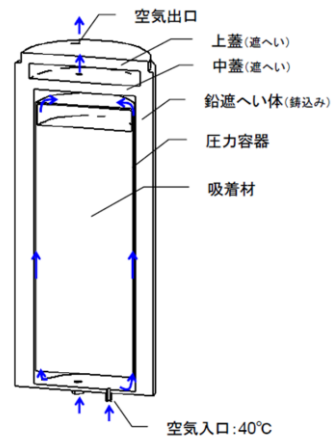


図1 吸着塔A型解析モデル（概念図）

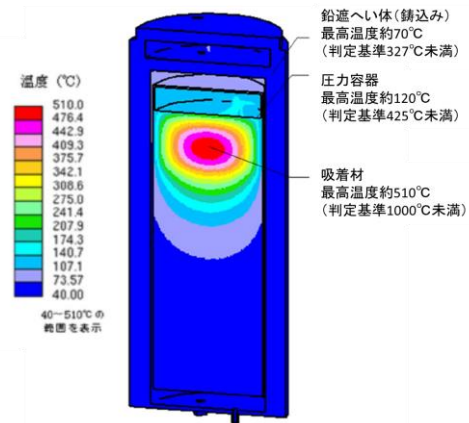


図2 吸着塔A型の温度分布

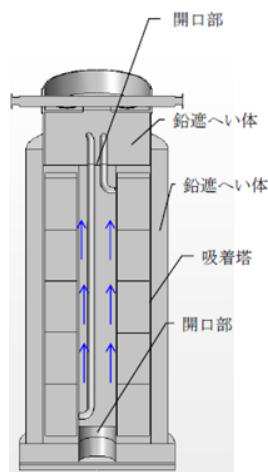


図3 吸着塔B型解析モデル（概念図）

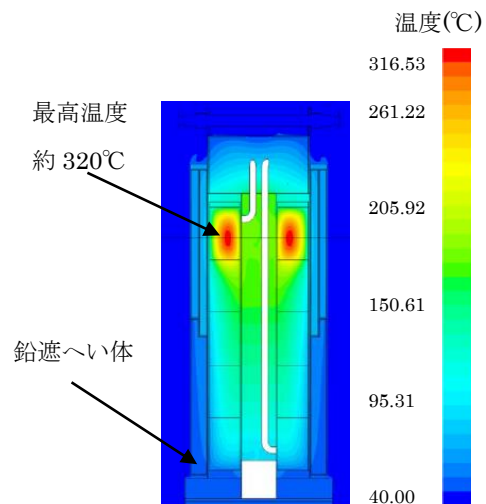


図4 吸着塔B型の温度分布

以上

## 第三セシウム吸着装置 水素評価

## 1. 評価概要

使用済吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、内部の水抜き後に使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵するが、高濃度の放射性物質を内包しており、内部に残留する湿分等の放射線分解により、可燃性ガスが発生する恐れがあることから、使用済吸着塔内部の可燃性ガスの濃度を評価し、その濃度が4%未満であることを確認する。

なお、本評価では保守的に、吸着塔内部の温度上昇は考慮しないものとし、吸着材領域は水で満たされているものとした（実際は、使用済み吸着塔は水抜き後に保管される）。

## 2. 評価方法

吸着塔内の吸着材充填領域から発生した可燃性ガスは、吸着塔上部の空間部に排出され、空気との混合気体となる。吸着塔は、保管時にベント管と取水側のノズルを開放し、上部空間の混合気体は空気との密度差により上昇しベント管から排出される。また、排出された混合気体の体積に応じて、取水側ノズルから空気が流入する（図1参照）。このときの混合気体の排出と空気の流入量を算出し、吸着塔内の水素濃度を評価した（水素濃度は水素発生量と流入空気量により評価を実施し、吸着塔の自然換気が定常となる際の可燃性ガス濃度を評価）。

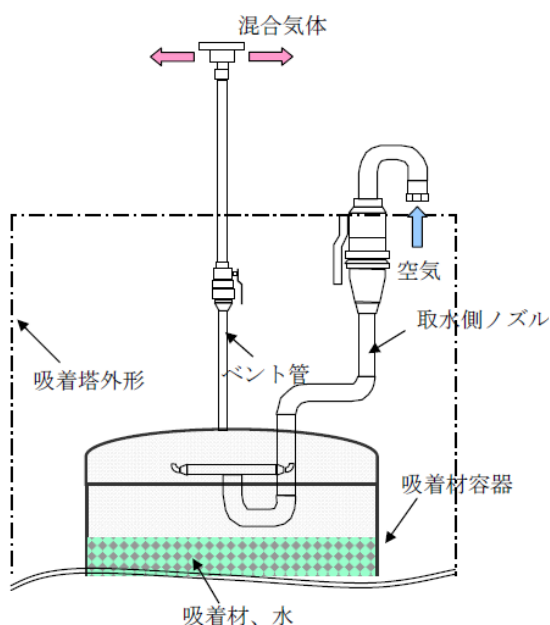


図1 使用済み吸着塔 保管時の概念図



### 3. 水素発生量

水素は、吸着した核種の崩壊エネルギーが容器内に残留する水に吸収され発生する。水素発生速度 $H$ (mol/s)は次式により求めた。

$$H = G \times E \div A$$

H : 水素発生速度

G : 水が100eVのエネルギーを吸収した際に発生する水素分子の個数, 0.45

E : 水が吸収するエネルギー : (A型) 約 $1.35 \times 10^{15}$  (MeV/s)

(B型) 約 $7.13 \times 10^{15}$  (MeV/s)

A : アボガドロ数 ( $6.02 \times 10^{23}$ 個/mol)

### 4. 評価結果

評価の結果, 吸着塔の自然換気が定常となる際の可燃性ガスの濃度はA型において約2.6%, B型において約3.6%と評価された。なお, 吸着塔内部の温度上昇を考慮した場合 ( $\Delta T=15^\circ\text{C}$ ), 吸着塔内部の可燃性ガスの濃度はA型において約1.3%, B型において約2.5%と評価された。

以上

## 第三セシウム吸着装置に係る確認事項

第三セシウム吸着装置の構造強度・耐震性及び機能・性能等に関する確認事項を表－１～１２に示す。

表－１ 確認事項（ろ過フィルタ，吸着塔A型）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。

表－２ 確認事項（第三セシウム吸着装置ブースターポンプA，B）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	漏えい確認	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	耐圧部から著しい漏えいがないこと。
性能	運転性能確認 ※1	ポンプの運転確認を行う。	実施計画に記載した容量を満足すること。 また，異音，発煙，異常振動等がないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

表－3 確認事項（主配管（鋼管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径，厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1 ※2	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

※2 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表－4 確認事項（主配管（ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1 ※2	現場状況を考慮し製造者指定方法・圧力による漏えい有無を確認する。	耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

※2 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表－５ 確認事項（主配管（耐圧ホース））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 ※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 ※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※1	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていることを確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	圧力に耐え、かつ構造物の変形等がないこと。 また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1 現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて記録を確認する。

表－６ 確認事項（漏えい検出装置及び警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置、据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
機能	漏えい警報確認	漏えい信号により、警報が作動することを確認する。	警報が作動すること。

表－7 確認事項（エリア放射線モニタ）

確認事項	確認項目		確認内容	判定
監視	構造確認	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
		据付確認	装置の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	機能確認	警報確認	設定値どおりに警報及び表示灯が作動することを確認する。	許容範囲以内で警報及び表示灯が作動すること。
	性能確認	線源校正確認	標準線源を用いて線量当量率を測定し，各検出器の校正が正しいことを確認する。	基準線量当量率に対する正味線量当量が，許容範囲以内であること。
		校正確認	モニタ内のテスト信号発生部により，各校正点の基準入力を与え，その時の指示値が正しいことを確認する。	各指示値が許容範囲以内であること。

表－8 確認事項（第三セシウム吸着装置全体堰）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
漏えい防止	寸法確認	主要寸法の記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	堰の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。

表－ 9 確認事項（第三セシウム吸着装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
性能	運転性能確認	実施計画に記載の容量が通水可能であることを確認する。	実施計画に記載した容量を通水することが可能であり，設備からの異音，発煙，異常振動等がないこと。
	性能確認	実施計画に記載の容量を通水した状態で，系統出口水の放射能濃度を確認する。	系統出口水の放射性物質濃度（Cs-134, Cs-137）が $10^2$ Bq/cc オーダー以下 <sup>※1</sup> を満足すること。Sr-90 については，放射性物質濃度が低減されていること。

※1 処理装置下流の逆浸透膜装置の受入条件

表－ 10 確認事項(吸着塔B型)

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。※1	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。※1	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後，確認圧力に耐えていることについて記録を確認する。 耐圧確認終了後，漏えいの有無も確認する。	確認圧力に耐え，かつ構造物の変形等がないこと。 また，耐圧部から著しい漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

表－１１ 確認事項（ろ過フィルタ、吸着塔A型、鋼管の溶接検査）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査	材料検査	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	材料が溶接規格等に適合するものであり、溶接施工法の母材の区分に適合することであること。
	開先検査	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	開先形状等が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	非破壊試験	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い、その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	機械試験	①吸着塔 ②ろ過フィルタ	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い、当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであることを確認する。	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い、当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであること。
	耐圧・漏えい検査※1	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていることを確認する。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	検査圧力で保持した後、検査圧力に耐えていること。耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいがないこと。
	外観検査※2	①吸着塔 ②ろ過フィルタ ③鋼管	耐圧・漏えい検査後外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないことを確認する。	外観上、傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

※2 耐圧検査後の確認が困難な箇所については先行外観検査を実施する。

表－１２ 確認事項（海外製品溶接検査（吸着塔B型，取合配管））

確認事項	確認項目	実施計画 記載事項 ※１	確認内容	判定基準
溶接検査	材料検査	①吸着塔 ②取合配管	溶接に使用する材料が，ASME Sec. VIII 等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合することを記録で確認する。	溶接に使用する材料が，ASME Sec. VIII等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査	①吸着塔 ②取合配管	開先形状等が ASME Sec. VIII 等に適合するものであることを記録で確認する。	開先形状等が ASME Sec. VIII等に適合するものであること。
	溶接作業 検査	①吸着塔 ②取合配管	ASME Sec. IX等に定められた溶接施工法により溶接されていること及び溶接士の資格を有しているものにより溶接が行われていることを記録で確認する。	ASME Sec. IX等で定められた溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	非破壊検査	①吸着塔 ②取合配管	溶接部について非破壊検査（目視検査）を行い，その結果が ASME B31.1 に適合するものであることを記録で確認する。	溶接部について非破壊検査（目視検査）を行い，その結果が ASME B31.1 に適合するものであること。
	耐圧・ 漏えい検査	①吸着塔 ②取合配管	検査圧力で保持した後，検査圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないことを確認する。	検査圧力で保持した後，検査圧力に耐えていること及び耐圧部分から漏えいがないこと。
	外観検査	①吸着塔 ②取合配管	各部の外観を確認する。※ 2	外観上，傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※１：「表－１２ 確認事項（海外製品溶接検査）」の確認範囲は，「東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則」の第26条第4号に規定する範囲とする。なお，適用する規格で使用が認められている材料の溶接部に関わる確認は，適用する規格の条件に適合していることについて行う。

※２：現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて記録を確認する。

以上



## 主要配管の確認事項について

「2.5.2 基本仕様 表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様（7/21） RO処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽から処理水バッファタンク及びCSTまで（ポリエチレン管）」の構造強度・耐震性及び機能・性能に関する確認事項を表-1に示す。

表-1 確認事項（主配管（ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度・耐震性	材料確認	主な材料について確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	主要寸法について確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていることについて確認する。 耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	確認圧力に耐え、かつ構造物の変形がないこと。 耐圧部から漏えいがないこと。
機能	通水確認	通水されていることを確認する。	通水されていること。

## 2.10 放射性固体廃棄物等の管理施設

### 2.10.1 基本設計

#### 2.10.1.1 設置の目的

放射性固体廃棄物や事故後に発生した瓦礫等の放射性固体廃棄物等の管理施設は、作業員の被ばく低減、公衆被ばくの低減及び安定化作業の安全確保のために、放射性固体廃棄物等を適切に管理することを目的として設置する。

#### 2.10.1.2 要求される機能

放射性固体廃棄物等の処理・貯蔵にあたっては、その廃棄物の性状に応じて、適切に処理し、十分な保管容量を確保し、遮蔽等の適切な管理を行うことにより、敷地周辺の線量を達成できる限り低減すること。

#### 2.10.1.3 設計方針等

##### 2.10.1.3.1 放射性固体廃棄物等の管理施設

###### (1) 貯蔵及び保管

放射性固体廃棄物は、固体廃棄物貯蔵庫、サイトバンカ、使用済燃料プール、使用済燃料共用プール、使用済樹脂貯蔵タンク、造粒固化体貯槽等に貯蔵、または保管する。

発電所敷地内において、発災以降に発生した瓦礫や放射性物質に汚染した資機材、除染を目的に回収する土壌等の瓦礫類は、固体廃棄物貯蔵庫、屋外等に一時保管エリアを設定し、一時保管する。

伐採木は、屋外の一時保管エリアに一時保管する。

使用済保護衣等は、固体廃棄物貯蔵庫、屋外の一時保管エリアに一時保管する。

###### (2) 被ばく低減

放射性固体廃棄物の管理施設は、作業員及び公衆の被ばくを達成できる限り低減できるように、必要に応じて十分な遮蔽を行う設計とする。

瓦礫等の管理施設については、保管物の線量に応じた適切な遮蔽や設置場所を考慮することにより、被ばく低減を図る設計とする。

###### (3) 飛散等の防止

放射性固体廃棄物の管理施設は、処理過程における放射性物質の散逸等を防止する設計とする。

瓦礫等の管理施設については、発電所敷地内の空間線量率を踏まえ、周囲への汚染拡大の影響の恐れのある場合には、容器、固体廃棄物貯蔵庫、覆土式一時保管施設に収納、またはシートによる養生等を実施する。

###### (4) 貯蔵能力

放射性固体廃棄物や発災以降に発生した瓦礫等を適切に管理するため、今後の発生量に応じて保管場所を計画的に追設し、保管容量を十分に確保する（Ⅲ. 3. 2. 1 参照）。

(5) 津波への対応

固体廃棄物貯蔵庫、瓦礫等一時保管エリア（1カ所除く）は、アウターライズ津波が到達しないと考えられる標高に設置する。また、敷地北側の標高の低い1カ所（T.P.+約11m）の一時保管エリアについてもアウターライズ津波が遡上しない位置に設置する。

サイトバンカ、使用済燃料プール、使用済燃料共用プール、使用済樹脂貯蔵タンク、造粒固化体貯槽等の貯蔵設備についても仮設防潮堤によりアウターライズ津波が遡上しない位置に設置する（Ⅲ. 3. 1. 3 参照）。

(6) 外部人為事象への対応

外部人為事象に対する設計上の考慮については、発電所全体の外部人為事象への対応に従う（Ⅱ. 1. 14 参照）。

(7) 火災への対応

火災に対する設計上の考慮については、発電所全体の火災への対応に従う（Ⅱ. 1. 14 及びⅢ. 3. 1. 2 参照）。

2. 10. 1. 3. 2 固体廃棄物貯蔵庫

固体廃棄物貯蔵庫は、固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）、固体廃棄物貯蔵庫第9棟及び固体廃棄物貯蔵庫第10棟で構成され、特定原子力施設に対する規制基準を満たすため、以下の設計及び対策を行う。

ただし、固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）の設計等については、原則、発災前に許可及び認可を受けた原子炉設置許可申請書及び工事計画認可申請書に従うものとする。

(1) 放射性固体廃棄物等の貯蔵

放射性固体廃棄物等の貯蔵に当たっては、廃棄物の性状に応じ、十分な保管容量を確保し、遮蔽等の適切な管理を行う固体廃棄物貯蔵庫を設置することにより、敷地周辺の線量を達成できる限り低減する設計とする。

(2) 放射性気体廃棄物の処理・管理

固体廃棄物貯蔵庫は、同施設で発生が想定される放射性気体廃棄物の処理に当たって、廃棄物の性状に応じ、当該廃棄物の放出量を抑制し、適切に処理・管理を行うことにより、敷地周辺の線量を達成できる限り低減する設計及び運用とする。

(3) 放射性物質の放出抑制等による敷地周辺の放射線防護等

固体廃棄物貯蔵庫は、同施設から大気中へ放出される放射性物質の適切な抑制対策を実施することにより、敷地周辺の線量を達成できる限り低減する設計とする。特に同施設内に保管される発災以降に発生した瓦礫類による敷地境界における実効線量が、その他の施設等の寄与分を含めて1mSv/年未満となるような設計とする。

(4) 作業者の被ばく線量の管理等

固体廃棄物貯蔵庫は、現存被ばく状況での放射線業務従事者の作業性等を考慮して、遮へい、貯蔵容器の配置、換気、除染等の所要の放射線防護上の措置に加え、作業時における放射線被ばく管理措置を講じることにより、放射線業務従事者が立ち入る場所の線量及び作業に伴う被ばく線量を達成できる限り低減する設計及び運用とする。

(5) 緊急時対策

固体廃棄物貯蔵庫には、事故時において必要な安全避難通路等の他、事故時に施設内に居るすべての人に対する指示が出来る適切な警報系及び通信連絡設備を整備する設計とする。

(6) 設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、その安全上の重要度を踏まえ、以下に掲げる事項を適切に考慮した設計とする。

① 準拠規格及び基準

固体廃棄物貯蔵庫の設計、材料の選定、製作及び検査については、日本産業規格（JIS）等の適切と認められる規格及び基準によるものとする。

② 自然現象に対する設計上の考慮

a. 地震に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、2021年9月8日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方（2022年11月16日一部改訂）を踏まえ、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。

ただし、2021年9月8日以前に認可された固体廃棄物貯蔵庫については、この限りでない。

b. 地震以外に想定される自然現象（津波、豪雨、台風、竜巻等）に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、地震以外の想定される自然現象（津波、豪雨、台風、竜巻等）によって施設の安全性が損なわれないよう設計する。

③ 外部人為事象に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、想定される外部人為事象によって、施設の安全性を損なうことのない設計とする。また、第三者の不法な接近等に対し、これを防御するため、適切な措置を講じた設計とする。

④ 火災に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、火災の発生を防止し、火災の検知及び消火を行い、並びに火災の影響を軽減するための対策を適切に組み合わせることにより、火災により施設の安全性を損なうことのない設計とする。

⑤ 環境条件に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、経年事象を含む想定されるすべての環境条件に適合できる設計とする。

⑥ 運転員操作に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、運転員の誤操作を防止するための適切な措置を講じた設計とする。

⑦ 信頼性に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、その安全上の重要度等を考慮して、十分に高い信頼性を確保し、かつ、維持し得る設計とする。

⑧ 検査可能性に対する設計上の考慮

固体廃棄物貯蔵庫は、その健全性及び能力を確認するために、適切な方法によりその機能を検査できる設計とする。

#### 2.10.1.4 主要な設備

##### (1) 固体廃棄物貯蔵庫

###### a. 固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）

固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）は、原子炉設置許可申請書、工事計画認可申請書に基づく設備であり、1～6号機で発生したドラム缶に収納された放射性固体廃棄物、ドラム缶以外の容器に収納された放射性固体廃棄物、開口部閉止措置を実施した大型廃棄物であるドラム缶等の他、使用済保護衣等や原子炉設置許可申請書、工事計画認可申請書にて許可されていない瓦礫類を一時保管する。

瓦礫類は、材質により可能な限り分別し、容器に収納して一時保管エリアとしての固体廃棄物貯蔵庫内に一時保管する。また、容器に収納できない大型瓦礫類は、飛散抑制対策を講じて一時保管する。

固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）は、第1棟～第8棟の8つの棟からなり、第6棟～第8棟については、地上1階、地下2階で構成している。固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）に一時保管する瓦礫類のうち、目安線量として表面30mSv/hを超える高線量の瓦礫類は地下階に保管する。地下階に高線量の瓦礫類を保管した場合には、コンクリート製の1階の床及び天井や壁による遮蔽効果により固体廃棄物貯蔵庫（第

1 棟～第 8 棟) 表面またはエリア境界の線量は十分低減されるが、この場合には、固体廃棄物貯蔵庫(第 1 棟～第 8 棟) 表面またはエリア境界において法令で定められた管理区域の設定基準線量(1.3mSv/3 ヶ月(2.6 $\mu$ Sv/h) 以下) を満足するよう運用管理を実施する。ただし、バックグラウンド線量の影響を除く。なお、最大線量と想定している表面線量率 10Sv/h の瓦礫類を地下 2 階一面に収納したと仮定した場合でも、固体廃棄物貯蔵庫(第 1 棟～第 8 棟) の建屋表面線量率は約  $4 \times 10^{-7} \mu$ Sv/h となり、法令で定められた管理区域の設定基準線量を満足することを評価し、確認している。

震災後の固体廃棄物貯蔵庫(第 1 棟～第 8 棟) の建物調査の結果、第 1 棟については屋根や壁、柱の一部、第 2 棟については柱の一部に破損があり、第 3 棟と第 4 棟については、床の一部に亀裂がみられたが、工事計画認可申請書記載の機能を満足するよう復旧して使用する。なお、第 5 棟～第 8 棟については、大きな損傷はみられていない。

また、固体廃棄物貯蔵庫(第 1 棟～第 8 棟) のうち、第 4 棟～第 8 棟については遮蔽機能、第 5 棟～第 8 棟については耐震性を以下の工事計画認可申請書により確認している。

- 第 1 棟 建設時第 1 7 回工事計画認可申請書(45 公第 3715 号 昭和 45 年 5 月 11 日認可)
- 第 2 棟 建設時第 1 9 回工事計画認可申請書(47 公第 577 号 昭和 47 年 2 月 28 日認可)
- 第 3 棟 建設時第 1 5 回工事計画認可申請書(48 資庁第 1626 号 昭和 48 年 10 月 22 日認可)
- 第 4 棟 建設時第 1 4 回工事計画認可申請書(50 資庁第 12545 号 昭和 51 年 1 月 31 日認可)  
建設時第 2 1 回工事計画軽微変更届出書(総官第 860 号 昭和 51 年 11 月 4 日届出)  
建設時第 2 5 回工事計画軽微変更届出書(総官第 1293 号 昭和 52 年 2 月 7 日届出)
- 第 5 棟 工事計画認可申請書(平成 11・09・06 資第 11 号 平成 11 年 10 月 6 日認可)  
建設時第 1 4 回工事計画認可申請書(51 資庁第 11247 号 昭和 51 年 10 月 22 日認可)  
建設時第 2 1 回工事計画軽微変更届出書(総官第 1341 号 昭和 52 年 2 月 15 日届出)
- 第 6 棟 建設時第 1 4 回工事計画認可申請書(52 資庁第 2942 号 昭和 52 年 4 月 12 日認可)
- 第 7 棟 工事計画認可申請書(55 資庁第 9548 号 昭和 55 年 8 月 28 日認可)  
工事計画軽微変更届出書(総文発官 56 第 430 号 昭和 56 年 6 月 26 日届出)
- 第 8 棟 工事計画認可申請書(56 資庁第 14021 号 昭和 56 年 11 月 30 日認可)

b. 固体廃棄物貯蔵庫第9棟

固体廃棄物貯蔵庫第9棟は、固体廃棄物貯蔵庫第8棟の西側に位置する鉄筋コンクリート造で、平面が約125m（東西方向）×約48m（南北方向）、地上高さが約9mの建物及び平面が約27m（東西方向）×約33m（南北方向）、地上高さが約15mの建物から成り、共に地上2階、地下2階である。

1～6号機で発生したドラム缶に収納された放射性固体廃棄物、ドラム缶以外の容器に収納された放射性固体廃棄物、開口部閉止措置を実施した大型廃棄物であるドラム缶等及び雑固体廃棄物焼却設備より発生する焼却灰を保管する。

瓦礫類は、材質により可能な限り分別し、容器に収納して一時保管する。また、容器に収納できない大型瓦礫類は、飛散抑制対策を講じて一時保管する。

放射性固体廃棄物等からの放射線に対し、放射線業務従事者等を保護するため、また、敷地周辺の線量を達成できる限り低減するため、コンクリート製の壁及び天井により遮蔽を行う。

c. 固体廃棄物貯蔵庫第10棟

固体廃棄物貯蔵庫第10棟は、A棟、B棟及びC棟の3棟で構成され、各棟は廃炉作業で発生する瓦礫類を収納した貯蔵容器を保管する建屋と換気空調設備及び電気設備等を設置する別棟で構成される。建屋は、大型廃棄物保管庫の西側に位置する鉄骨造で、A棟及びB棟の建屋として、平面が約50m（東西方向）×約90m（南北方向）、地上高さが約20mの建物が2棟、またC棟の建屋として、平面が約50m（東西方向）×約180m（南北方向）、地上高さが約20mの建物が1棟から成り、共に地上1階である。

固体廃棄物貯蔵庫第10棟に搬入する瓦礫類については、専用の貯蔵容器に収納し、当該容器に対して適切な固縛措置等を行った状態で建屋内に保管する。

瓦礫類を収納した貯蔵容器からの放射線に対し、放射線業務従事者等を保護するため、また、敷地周辺の線量を合理的に達成可能な限り低減するため、建屋内に設置するコンクリート製の遮蔽壁及び貯蔵容器上部に設置する遮蔽蓋により遮蔽を行うとともに、収納する瓦礫類の線量に応じて、貯蔵容器を適切に配置する。

保管する貯蔵容器の表面線量について、一時的運用(1mSv/h)と、耐震クラスを満足する将来的運用(20 $\mu$ Sv/h)を設定し、一時的運用の期間は、A棟の単独運用の開始を目的とした使用前検査が終了した時点から9年以内とする。

換気空調設備は、送風機、排風機、排気フィルタユニット等で構成され、送風機より建屋内に供給された空気は、建屋内で発生する粒子状の放射性物質を排気フィルタユニットで除去した後、排風機により大気へ放出する。

(2) サイトバンカ

サイトバンカは、原子炉設置許可申請書、工事計画認可申請書に基づく設備であり、

1～6号機で発生した原子炉内で照射された使用済制御棒，チャンネルボックス等を保管する。ただし，サイトバンカに保管する前段階において，原子炉内で照射された使用済制御棒，チャンネルボックス等は使用済燃料プールに貯蔵するか，原子炉内で照射されたチャンネルボックス等は運用補助共用施設内の使用済燃料共用プールに貯蔵する。

また，構造強度及び耐震性については，以下の工事計画認可申請書等により確認している。

工事計画認可申請書（53資庁第7311号 昭和53年8月18日認可）

工事計画軽微変更届出書（総文発官53第994号 昭和53年11月4日届出）

(3) 使用済樹脂，フィルタスラッジ，濃縮廃液（造粒固化体（ペレット））の貯蔵設備

使用済樹脂，フィルタスラッジ，濃縮廃液（造粒固化体（ペレット））の貯蔵設備は，原子炉設置許可申請書，工事計画認可申請書に基づく設備であり，1～5号機廃棄物処理建屋（廃棄物地下貯蔵設備建屋を含む），6号機原子炉建屋付属棟，廃棄物集中処理建屋，運用補助共用施設内にある使用済樹脂貯蔵タンク，地下使用済樹脂貯蔵タンク，機器ドレン廃樹脂タンク，廃スラッジ貯蔵タンク，地下廃スラッジ貯蔵タンク，沈降分離タンク，造粒固化体貯槽等である。

現状において1～4号機廃棄物処理建屋及び廃棄物集中処理建屋設置分については，水没や汚染水処理設備の設置等により高線量となっており貯蔵設備へアクセスできないが，仮に放射性廃液等が漏えいしたとしても滞留水に対する措置により系外へ漏えいする可能性は十分低く抑えられている（I.2.3.7，II.2.6参照）。

なお，点検が可能な液体廃棄物処理系または5，6号機のタンク等について，定期的に外観点検または肉厚測定等を行い，漏えいのないことを確認することにより，当該貯蔵設備の状態を間接的に把握する。

今後，滞留水の処理状況が進み，環境が改善されれば確認を実施していく。

6号機原子炉建屋付属棟の地下を除いた5号機廃棄物処理建屋，6号機原子炉建屋付属棟及び運用補助共用施設の貯蔵設備については，大きな損傷がないこと並びに工事計画認可申請書等により構造強度，耐震性及び建屋内壁による遮蔽機能を確認している。

6号機原子炉建屋付属棟の地下は，滞留水により没水しアクセスできないことから，貯蔵設備に対する滞留水の影響について確認しており（II.2.33 添付資料-3参照），今後，滞留水の処理状況が進み，環境が改善されれば確認を実施していく。

主要な設備・機器について以下に示す。

a. 5号機

(a) 廃棄物地下貯蔵設備使用済樹脂貯蔵タンク

工事計画認可申請書（57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可）

(b) 廃棄物地下貯蔵設備廃スラッジ貯蔵タンク

工事計画認可申請書（57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可）

(c) 液体・固体廃棄物処理系浄化系スラッジ放出混合ポンプ



- 建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）  
建設時第23回工事計画変更認可申請書（52資庁第519号 昭和52年3月1日認可）
- (d) 液体・固体廃棄物処理系浄化系スラッジブースタポンプ  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）  
建設時第23回工事計画変更認可申請書（52資庁第519号 昭和52年3月1日認可）
- (e) 液体・固体廃棄物処理系床ドレン系廃スラッジサージポンプ  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）  
建設時第23回工事計画変更認可申請書（52資庁第519号 昭和52年3月1日認可）  
建設時第28回工事計画軽微変更届出書（総官第303号 昭和52年5月30日届出）
- (f) 液体・固体廃棄物処理系使用済樹脂貯蔵タンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）
- (g) 液体・固体廃棄物処理系濃縮廃液貯蔵タンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第8回工事計画軽微変更届出書（総官第534号 昭和49年7月29日届出）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）  
建設時第23回工事計画変更認可申請書（52資庁第519号 昭和52年3月1日認可）
- (h) 液体・固体廃棄物処理系機器ドレン系廃スラッジサージタンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第4回工事計画軽微変更届出書（総官第1375号 昭和49年1月30日届出）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）
- (i) 液体・固体廃棄物処理系床ドレン系廃スラッジサージタンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第4回工事計画軽微変更届出書（総官第1375号 昭和49年1月30日届出）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）
- (j) 液体・固体廃棄物処理系原子炉冷却材浄化系廃樹脂貯蔵タンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第4回工事計画軽微変更届出書（総官第1375号 昭和49年1月30日届出）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）
- (k) 液体・固体廃棄物処理系廃スラッジ貯蔵タンク  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）  
建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）
- (l) 液体・固体廃棄物処理系フェイズセパレータ  
建設時第3回工事計画認可申請書（47公第11378号 昭和48年2月19日認可）

建設時第4回工事計画軽微変更届出書（総官第1375号 昭和49年1月30日届出）

建設時第9回工事計画変更認可申請書（49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可）

(m) 廃棄物地下貯蔵設備建屋

工事計画認可申請書（57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可）

(n) 廃棄物処理建屋内壁

建設時第30回工事計画軽微変更届出書（総官第961号 昭和52年10月8日届出）

b. 6号機

(a) 液体固体廃棄物処理系原子炉浄化系フィルタスラッジ貯蔵タンク

建設時第4回工事計画認可申請書（49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可）

(b) 液体固体廃棄物処理系機器ドレンフィルタスラッジ貯蔵タンク

建設時第4回工事計画認可申請書（49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可）

(c) 液体固体廃棄物処理系使用済樹脂貯蔵タンク

建設時第4回工事計画認可申請書（49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可）

(d) 液体固体廃棄物処理系濃縮廃液貯蔵タンク

建設時第4回工事計画認可申請書（49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可）

建設時第7回工事計画変更認可申請書（51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可）

(e) 廃棄物処理建屋内壁

建設時第16回工事計画認可申請書（53資庁第5742号 昭和53年6月27日認可）

(4) 覆土式一時保管施設

一時保管エリアの中に設置する覆土式一時保管施設には、瓦礫類を一時保管することができる。

覆土式一時保管施設は、線量低減対策として覆土による遮蔽機能を有する一時保管施設である。

覆土式一時保管施設は、地面を掘り下げ、底部にベントナイトシート、遮水シート、保護土を設置し、瓦礫類を収納して上から保護シート、緩衝材、遮水シート、土で覆う構造である。遮水シートにより雨水等の浸入を防止し、飛散、地下水汚染を防止する。また、保管施設内に溜まった水をくみ上げる設備を設ける。

なお、覆土式一時保管施設に用いる遮水シートは、覆土の変形並びに地盤変状に追従できるよう、引張伸び率が大きいものを使用する。

覆土による遮蔽機能が万が一損傷した場合には、損傷の程度に応じて、遮蔽の追加、施設の修復や瓦礫類の取り出しを行う。

(5) 伐採木一時保管槽

一時保管エリアの中に設置する伐採木一時保管槽には、伐採木を一時保管することができる。

伐採木一時保管槽は、防火対策や線量低減対策として覆土をする一時保管槽である。火災に対しては、双葉地方広域市町村圏組合火災予防条例を考慮している。

伐採木一時保管槽は、擁壁または築堤等にて保管槽を設置し、収納効率を上げるために伐採木（枝葉根）を減容し保管槽に収納して、保護シート、土、遮水シートで覆う構造である。また、伐採木（枝葉根）は、保管中の腐食による沈下を考慮する。

なお、伐採木一時保管槽に用いる遮水シートは、覆土の変形に追従できるよう、引張伸び率が大きいものを使用する。

覆土による遮蔽機能が万が一損傷した場合には、損傷の程度に応じて、遮蔽の追加、保管槽の修復や伐採木の取り出しを行う。

## 2.10.2 基本仕様

### 2.10.2.1 主要仕様

#### (1) 固体廃棄物貯蔵庫（第1棟～第8棟）

棟数：8

容量：約 284,500 本（ドラム缶相当）

#### (2) サイトバンカ

基数：1

容量：約 4,300m<sup>3</sup>

#### (3) 覆土式一時保管施設

大きさ：約 80m×約 20m

高さ：約 5m（最大）

設置個数：4

保管容量：約 4000m<sup>3</sup>/箇所

上部：覆土（厚さ 1m 以上）、遮水シート、緩衝材、保護シート

底部、法面部：保護土、遮水シート、ベントナイトシート

#### (4) 伐採木一時保管槽

大きさ：1 槽あたり、200m<sup>2</sup> 以内

高さ：約 3m

保管容量：1 槽あたり、約 600m<sup>3</sup> 以内

上部：遮水シート、覆土（厚さ 0.5m 以上）、保護シート

槽間の隔離距離：2m 以上

#### (5) 固体廃棄物貯蔵庫第9棟

大きさ：約 125m（東西方向）×約 48m（南北方向）、地上高さ約 9m

約 27m (東西方向) × 約 33m (南北方向), 地上高さ約 15m

棟数 : 1

容量 : 約 61, 200m<sup>3</sup> (ドラム缶約 110, 000 本相当)

(6) 固体廃棄物貯蔵庫第 10 棟

i. 貯蔵エリア

大きさ : 約 50m (東西方向) × 約 90m (南北方向), 地上高さ約 20m, 2 棟

約 50m (東西方向) × 約 180m (南北方向), 地上高さ約 20m, 1 棟

棟数 : 3

容量 : 約 146, 000m<sup>3</sup> (貯蔵容器 (約 14m<sup>3</sup>) 約 6264 基相当\*)

※全て 20 フィートハーフハイトコンテナで保管した場合。

10 フィートハーフハイトコンテナは 20 フィートハーフハイトコンテナに対して  
2 倍の数量を保管可能。

ii. 換気空調設備

a-1. 10-A / 10-B

(a) 送風機

容 量	21, 000m <sup>3</sup> /h/基
基 数	2

(b) 排気フィルタユニット

容 量	42, 000m <sup>3</sup> /h/基
基 数	1

(c) 排風機

容 量	21, 000m <sup>3</sup> /h/基
基 数	2

※ 10-A 棟単独運用時においては, 以下の主要仕様とする。

a-2. 10-A

(a) 送風機

容 量	21, 000m <sup>3</sup> /h/基
基 数	2 (うち予備 1 基)

(b) 排気フィルタユニット

容 量	21, 000m <sup>3</sup> /h/基
基 数	1

(c) 排風機  
容 量 21,000m<sup>3</sup>/h/基  
基 数 2 (うち予備1基)

b. 10-C

(a) 送風機  
容 量 21,000m<sup>3</sup>/h/基  
基 数 2

(b) 排気フィルタユニット  
容 量 42,000m<sup>3</sup>/h/基  
基 数 1

(c) 排風機  
容 量 21,000m<sup>3</sup>/h/基  
基 数 2

補助遮蔽：

種類			主要寸法 (mm)	冷却 方法	材料	
補助遮蔽	固体廃棄物貯蔵庫第9棟	貯蔵室	天井 (地下2階)	300	自然 冷却	普通コンクリート (密度 2.1g/cm <sup>3</sup> 以上)
			北壁 (地下1階)	650		
			西壁 (地下1階)	650		
			南壁 (地下1階)	600		
			天井 (地下1階)	300		
			北壁 (1階)	650		
			西壁 (1階)	650		
			南壁 (1階)	500		
			天井 (1階)	300		
			北壁 (2階)	400		
			西壁 (2階)	400		
			南壁 (2階)	200		

種類		主要寸法 (mm)	冷却 方法	材料	
補助遮蔽	固体廃棄物貯蔵庫第9棟	天井 (地下2階)	600	自然 冷却	普通コンクリート (密度 2.1g/cm <sup>3</sup> 以上)
		北壁 (地下1階)	600		
		北壁 (1階)	600		
		西壁 (1階)	300		
		南壁 (1階)	300		
		北壁 (2階)	300		
		西壁 (2階)	300		
		南壁 (2階)	300		
		北壁 (屋上階)	300		
		西壁 (屋上階)	300		
		南壁 (屋上階)	300		
		天井 (屋上階)	300		

種類			主要寸法 (mm)	冷却 方法	材料	
補助遮蔽	固体廃棄物貯蔵庫第10棟	10-A 貯蔵庫	遮蔽蓋 (1階)	500	自然 冷却	普通コンクリート (密度 2.15g/cm <sup>3</sup> 以上)
			西壁 (1階)	300		
			南壁 (1階)	300		
		10-B 貯蔵庫	遮蔽蓋 (1階)	500		
			西壁 (1階)	300		
			南壁 (1階)	300		
		10-C 貯蔵庫	遮蔽蓋 (1階)	500		
			西壁 (1階)	300		
			南壁 (1階)	300		



### 2.10.3 添付資料

- 添付資料－1 覆土式一時保管施設の主要仕様
- 添付資料－2 覆土式一時保管施設の仕様と安全管理
- 添付資料－3 伐採木一時保管槽の主要仕様
- 添付資料－4 伐採木一時保管槽の仕様と安全管理
- 添付資料－5 放射性固体廃棄物等の管理施設設置工程
- 添付資料－6 放射性固体廃棄物等の管理施設に係る確認項目
- 添付資料－7 固体廃棄物貯蔵庫の全体概要図，平面図及び系統構成図
- 添付資料－8 固体廃棄物貯蔵庫の具体的な安全確保策等
- 添付資料－9 固体廃棄物貯蔵庫に係る確認事項

## 2.11 使用済燃料プールからの燃料取り出し設備

### 2.11.1 基本設計

#### 2.11.1.1 設置の目的

使用済燃料プールからの燃料取り出しは、燃料取り出し用カバー（構台及び換気設備含む）の設置による作業環境の整備、燃料等を取り扱う燃料取扱設備の設置を行い、燃料を使用済燃料プール内の使用済燃料貯蔵ラックから取り出し原子炉建屋から搬出することを目的とする。

使用済燃料プールからの燃料取り出し設備（以下、「燃料取り出し設備」という。）は、燃料取扱設備、構内用輸送容器、燃料取り出し用カバーで構成される。燃料取扱設備は、燃料取扱機、クレーンで構成され、燃料取り出し用カバーにより支持される。なお、燃料の原子炉建屋外への搬出には、構内用輸送容器を使用する。

また、クレーンはオペレーティングフロア上での資機材運搬や揚重等にも使用する。

#### 2.11.1.2 要求される機能

##### (1) 燃料取扱設備

燃料取扱設備は、二重のワイヤなどにより落下防止を図る他、駆動源喪失時にも燃料集合体を落下させない設計とする。

また、遮蔽、臨界防止を考慮した設計とする。

##### (2) 構内用輸送容器

構内用輸送容器は、除熱、密封、遮蔽、臨界防止を考慮した設計とする。また、破損燃料集合体を収納して輸送する容器については、燃料集合体の破損形態に応じて輸送中に放射性物質の飛散・拡散を防止できる設計とする。

##### (3) 燃料取り出し用カバー

燃料取り出し用カバーは、燃料取扱設備の支持、作業環境の整備及び放射性物質の飛散・拡散防止ができる設計とする。

#### 2.11.1.3 設計方針

燃料取り出し設備は、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について（平成24年11月7日原子力規制委員会決定。以下、「措置を講ずべき事項」という。）」等の規制基準を満たす設計とする。

その上で、燃料取り出し設備の設計において特に留意すべき点は、以下のとおり。

##### (1) 燃料取扱設備

###### a. 落下防止

(a) 使用済燃料貯蔵ラック上には、重量物を吊ったクレーンを通過できないようにインターロックを設け、貯蔵燃料への重量物の落下を防止できる設計とする。

(b) 燃料取扱機の燃料把握機は、二重のワイヤや種々のインターロックを設け、また、

クレーンの主要要素は、二重化を施すことなどにより、燃料移送操作中の燃料集合体等の落下を防止できる設計とする。

b. 遮蔽

燃料取扱設備は、使用済燃料プールから構内用輸送容器への燃料集合体の収容操作を、燃料の遮蔽に必要な水深を確保した状態で、水中で行うことができる設計とするか、放射線防護のための適切な遮蔽を設けて行う設計とする。

c. 臨界防止

燃料取扱設備は、燃料集合体を一体ずつ取り扱う構造とすることにより、燃料の臨界を防止する設計とする。

d. 放射線モニタリング

燃料取扱エリアの放射線モニタリングのため、放射線モニタを設け放射線レベルを測定し、これを免震重要棟集中監視室に表示すると共に、過度の放射線レベルを検出した場合には警報を発し、放射線業務従事者に伝える設計とする。

e. 単一故障

(a) 燃料取扱機の燃料把握機は、二重のワイヤや燃料集合体を確実につかんでいない場合には吊上げができない等のインターロックを設け、圧縮空気等の駆動源が喪失した場合にも、フックから燃料集合体が外れない設計とする。

(b) 燃料取扱機の安全運転に係わるインターロックは電源喪失、ケーブル断線で安全側になる設計とする。

(c) クレーンの主要要素は、二重化を施すことなどにより、移送操作中の構内用輸送容器等の落下を防止できる設計とする。

f. 試験検査

燃料取扱設備のうち安全機能を有する機器は、適切な定期的試験及び検査を行うことができる設計とする。

また、破損燃料を取り扱う場合、燃料取扱設備は、破損形態に応じた適切な取扱手法により、移送中の放射性物質の飛散・拡散を防止できる設計とする。

(2) 構内用輸送容器

a. 除熱

使用済燃料の健全性及び構内用輸送容器構成部材の健全性が維持できるように、使用済燃料の崩壊熱を適切に除去できる設計とする。

b. 密封

周辺公衆及び放射線業務従事者に対し、放射線被ばく上の影響を及ぼすことのないよう、使用済燃料が内包する放射性物質を適切に閉じ込める設計とする。

c. 遮蔽

内部に燃料を入れた場合に放射線障害を防止するため、使用済燃料の放射線を適切に遮蔽する設計とする。

d. 臨界防止

想定されるいかなる場合にも、燃料が臨界に達することを防止できる設計とする。

また、破損燃料集合体を収納して輸送する容器は燃料集合体の破損形態に応じて輸送中に放射性物質の飛散・拡散を防止できる設計とする。

(3) 燃料取り出し用カバー

a. 燃料取り出し作業環境の整備

燃料取り出し用カバーは、燃料取り出し作業に支障が生じることのないよう、風雨を遮る設計とする。

また、必要に応じ燃料取り出し用カバー内にローカル空調機を設置し、カバー内の作業環境の改善を図るものとする。

b. 放射性物質の飛散・拡散防止

燃料取り出し用カバーは、原子炉建屋から大気への開放部分を低減するとともに、換気設備を設け、排気はフィルタユニットを通じて大気へ放出することにより、カバー内の放射性物質の大気への放出を抑制し、敷地周辺の線量への影響を達成できる限り低減できる設計とする。

(4) 大型カバー（燃料取り出し用カバー）

大型カバーは、その必要な安全機能について、十分に高い信頼性を確保し、かつ、維持し得る設計とする。

大型カバーは、その健全性及び能力を確認するため、適切な方法により、その必要な安全機能を検査ができる設計とする。

2.11.1.4 供用期間中に確認する項目

(1) 燃料取扱設備

燃料取扱設備は、動力源がなくなった場合においても吊り荷を保持し続けること。

(2) 構内用輸送容器

構内用輸送容器は、除熱、密封、遮蔽、臨界防止の安全機能が維持されていること。

(3) 燃料取り出し用カバー

対象外とする。

#### 2.11.1.5 主要な機器

##### (1) 燃料取扱設備

燃料取扱設備は、燃料取扱機、クレーンで構成する。なお、2号機の燃料取扱設備には、これらに加えてジブクレーンを備える。

##### a. 燃料取扱機

燃料取扱機は、使用済燃料プール及びキャスクピット上を水平に移動するブリッジ並びにその上を移動するトロリで構成する。なお、2号機の燃料取扱機は、低床ジブクレーンとし、原子炉建屋オペレーティングフロア、燃料取り出し用カバー間を水平に移動する走行台車とその上に設置する旋回体で構成する。

##### b. クレーン

クレーンは、オペレーティングフロア上部を水平に移動するガーダ及びその上を移動するトロリで構成する。なお、2号機のクレーンは、低床ジブクレーンとし、原子炉建屋オペレーティングフロア、燃料取り出し用カバー間を水平に移動する走行台車とその上に設置する旋回体で構成する。

##### (2) 構内用輸送容器

構内用輸送容器は、容器本体、蓋、バスケット等で構成する。

##### (3) 燃料取り出し用カバー

燃料取り出し用カバーは、2号機を除き使用済燃料プールを覆う構造としており、必要により、燃料取扱機支持用架構及びクレーン支持用架構を有する。

なお、2号機については、燃料取扱機支持用架構及びクレーン支持用架構を有する燃料取り出し用構台を新設し、既存の原子炉建屋に新たに設ける開口部から、燃料取扱設備を出し入れする構造とする。

また、燃料取り出し用カバーは換気設備及びフィルタユニットを有する。

1号機の燃料取り出し用カバーは、大型カバーとその内部に設ける内部カバーで構成する。

なお、換気設備の運転状態やフィルタユニット出入口で監視する放射性物質濃度等の監視状態は現場制御盤及び免震重要棟集中監視室に表示され、異常時は警報を発するなどの管理を行う。

#### 2.11.1.6 自然災害対策等

##### (1) 津波

燃料取扱設備は、東北地方太平洋沖地震津波相当の津波が到達しないと考えられる原子炉建屋オペレーティングフロア上（地上からの高さ約30m）に設置する。

燃料取り出し用カバーは鉄骨構造と鋼製の外装材により構成されているが、閉空間になっておらず、津波襲来時には、水は燃料取り出し用カバーの裏側に回り込み、津波による影響を受けない。

## (2) 豪雨, 台風, 竜巻, 落雷

燃料取り出し用カバーは, 建築基準法及び関係法令に基づいた風圧力に対し耐えられるよう設計する。

燃料取扱設備は, 建築基準法及び関係法令に基づいた風圧力に対し耐えられるよう設計している燃料取り出し用カバー内に設置する。

燃料取り出し用カバーは外装材で覆うことにより風雨を遮る設計とする。燃料取扱設備は, 風雨を遮る設計である燃料取り出し用カバー内に設置する。

燃料取扱設備および燃料取り出し用構台は建築基準法及び関連法令に従い必要に応じて避雷設備を設ける。

## (3) 外部人為事象

外部人為事象に対する設計上の考慮については, II. 1. 14 参照。

## (4) 火災

燃料取り出し用カバー及び燃料取り出し用カバー内外の主要構成部材は不燃性のものを使用し, 電源盤については不燃性又は難燃性, ケーブルについては難燃性のものを可能な限り使用し, 火災が発生することを防止する。火災の発生が考えられる箇所について, 火災の早期検知に努めるとともに, 消火器を設置することで初期消火活動を可能にし, 火災による影響を軽減する。

## (5) 環境条件

燃料取扱設備については, 燃料取り出し用カバーに換気設備を設け, 排気はフィルタユニットを通じて大気へ放出することとしている。

燃料取り出し用カバーの外部にさらされている鉄骨部及び機器等は, 劣化防止を目的に, 塗装を施す。

## (6) 被ばく低減対策

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し, 作業時間等を管理することで, 作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

また, 放射線業務従事者の被ばく線量低減策として, 大組した構造物をクレーンにてオペレーティングフロアへ吊り込むことにより, オペレーティングフロア上での有人作業の削減を図る。

### 2. 11. 1. 7 運用

#### (1) 燃料集合体の健全性確認

使用済燃料プールに貯蔵されている燃料集合体について, 移送前に燃料集合体の機械的健全性を確認する。

#### (2) 破損燃料の取り扱い

燃料集合体の機械的健全性確認において, 破損が確認された燃料集合体を移送する

場合には、破損形態に応じた適切な取扱手法及び収納方法により、放射性物質の飛散・拡散を防止する。

## 2.11.1.8 構造強度及び耐震性

### (1) 構造強度

#### a. 燃料取扱設備

燃料取扱設備は、設計、材料の選定、製作及び検査について、適切と認められる規格及び基準による。

燃料取扱設備は、地震荷重等の適切な組合せを考慮しても強度上耐え得る設計とする。

#### b. 構内用輸送容器

構内用輸送容器は取扱中における衝撃、熱等に耐え、かつ、容易に破損しない設計とする。

構内用輸送容器は、設計、材料の選定、製作及び検査について適切と認められる規格及び基準によるものとする。

#### c. 燃料取り出し用カバー

燃料取り出し用カバーは、設計、材料の選定、製作及び検査について、適切と認められる規格及び基準を原則とするが、特殊な環境下での設置となるため、必要に応じ解析や試験等を用いた評価により確認する。

燃料取り出し用カバーは、燃料取扱設備を支持するために必要な構造強度を有する設計とする。

### (2) 耐震性

#### a. 燃料取扱設備

##### (a) 燃料取扱機

燃料取扱機は、2021年9月8日及び2022年11月16日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆への被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とする。

ただし、2021年9月8日以前に認可された設備については、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」を参考にして耐震クラスを分類している。

##### (b) クレーン

クレーンは、2021年9月8日及び2022年11月16日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆への被ばく影響）や廃炉活動への影響等

を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とする。

ただし、2021年9月8日以前に認可された設備については、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」を参考にして耐震クラスを分類している。

b. 燃料取り出し用カバー

燃料取り出し用カバーは、2021年9月8日及び2022年11月16日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆への被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とする。

ただし、2021年9月8日以前に認可された設備については、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」を参考にして耐震クラスを分類している。



## 2.11.2 基本仕様

### 2.11.2.1 主要仕様

#### (1) 燃料取扱設備

(2号機, 3号機及び4号機を除く)

##### a. 燃料取扱機

個数 1式

##### b. クレーン

個数 1式

(4号機)

##### a. 燃料取扱機

型式 燃料把握機付移床式

基数 1基

定格荷重 燃料把握機 : 450kg

補助ホイスト : 450kg

##### b. クレーン

型式 天井走行式

基数 1基

定格荷重 主巻 : 100t

補巻 : 5t

ホイスト : 10t

##### c. エリア放射線モニタ

検出器の種類 半導体検出器

計測範囲  $10^{-3}$ ~10mSv/h

個数 2個

取付箇所 4号機 原子炉建屋5FL (燃料取り出し用カバーオペフロ階)

(3号機)

a. 燃料取扱機

型式	燃料把握機付移床式		
基数	1基		
定格荷重	燃料把握機	:	1t
	西側補助ホイスト	:	4.9t
	東側補助ホイスト	:	4.9t
	テンシルトラス	:	1.5t

b. クレーン

型式	床上走行式		
基数	1基		
定格荷重	主巻	:	50t
	補巻	:	5t

c. エリア放射線モニタ

検出器の種類	半導体検出器		
計測範囲	$10^{-2} \sim 10^2 \text{mSv/h}$		
個数	2個		
取付箇所	3号機 燃料取り出し用カバー 燃料取り出し作業フロア		

(2号機)

a. 燃料取扱機

型式	低床ジブクレーン		
基数	1基		
定格荷重	: 1t		

b. クレーン

型式	低床ジブクレーン		
基数	1基		
定格荷重	: 47t		

c. ジブクレーン

型式	低床ジブクレーン		
基数	1基		
定格荷重	: 3.9t		

d. エリア放射線モニタ

検出器の種類	半導体検出器
計測範囲	$10^{-2} \sim 10^2 \text{mSv/h}$
個数	2 個
取付箇所	2 号機 燃料取り出し用構台作業エリア

(2) 構内用輸送容器

(3号機及び4号機を除く)

基数	1 式
----	-----

(4号機)

型式	NFT-22B 型
収納体数	22 体
基数	2 基

型式	NFT-12B 型
収納体数	12 体
基数	2 基

(3号機)

種類	密封式円筒形
収納体数	7 体
基数	2 基

種類	密封式円筒形
収納体数	2 体
基数	1 基

(3) 燃料取り出し用カバー（構台及び換気設備含む）

（4号機）

a. 燃料取り出し用カバー

種類	鉄骨造
寸法	約 69m（南北）×約 31m（東西）×約 53m（地上高） （作業環境整備区画） 約 55m（南北）×約 31m（東西）×約 23m（オペレーティングフロア上部高さ）
個数	1 個

b. 送風機（給気フィルタユニット）

種類	遠心式
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
台数	3 台

c. プレフィルタ（給気フィルタユニット）

種類	中性能フィルタ（袋型）
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
台数	3 台

d. 高性能粒子フィルタ（給気フィルタユニット）

種類	高性能粒子フィルタ
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
効率	97%（粒径 0.3 μm）以上
台数	3 台

e. 排風機（排気フィルタユニット）

種類	遠心式
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
台数	3 台

f. プレフィルタ（排気フィルタユニット）

種類	中性能フィルタ（袋型）
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
台数	3 台

g. 高性能粒子フィルタ（排気フィルタユニット）

種類	高性能粒子フィルタ
容量	25,000m <sup>3</sup> /h
効率	97%（粒径 0.3 μm）以上
台数	3 台

h. 放射性物質濃度測定器（排気フィルタユニット出入口）

(a) 排気フィルタユニット入口

検出器の種類	シンチレーション検出器
計測範囲	10 <sup>0</sup> ~10 <sup>4</sup> s <sup>-1</sup>
台数	1 台

(b) 排気フィルタユニット出口

排気フィルタユニット出口については、Ⅱ.15 放射線管理関係設備等参照

i. ダクト

(a) カバー内ダクト

種類	長方形はげ折りダクト／鋼板ダクト
材質	溶融亜鉛めっき鋼板（SGCC 又は SGHC）／SS400

(b) 屋外ダクト

種類	長方形はげ折りダクト／鋼板ダクト
材質	溶融亜鉛めっき鋼板 （SGCC 又は SGHC，ガルバニウム付着）／SS400

(c) 柱架構ダクト

種類	柱架構
材質	鋼材

（3号機）

a. 燃料取り出し用カバー

種類	鉄骨造
寸法	約 19m（南北）×約 57m（東西）×約 54m（地上高） （作業環境整備区画） 約 19m（南北）×約 57m（東西）×約 24m（オペレーテ ィングフロア上部高さ）
個数	1 個

b. 排風機

種類	遠心式
容量	30,000m <sup>3</sup> /h
台数	2台

c. プレフィルタ（排気フィルタユニット）

種類	中性能フィルタ
容量	10,000m <sup>3</sup> /h
台数	4台

d. 高性能粒子フィルタ（排気フィルタユニット）

種類	高性能粒子フィルタ
容量	10,000m <sup>3</sup> /h
効率	97%（粒径 0.3 μm）以上
台数	4台

e. 放射性物質濃度測定器（排気フィルタユニット出入口）

(a) 排気フィルタユニット入口

検出器の種類	シンチレーション検出器
計測範囲	10 <sup>-1</sup> ～10 <sup>5</sup> s <sup>-1</sup>
台数	1台

(b) 排気フィルタユニット出口

排気フィルタユニット出口については、Ⅱ2.15 放射線管理関係設備等参照

f. ダクト

種類	はぜ折りダクト／鋼板ダクト
材質	ガルバリウム鋼板／SS400

(2号機)

a. 燃料取り出し用構台

種類	鉄骨造
寸法	約 33m（南北）×約 27m（東西）×約 45m（地上高） （作業環境整備区画） 約 33m（南北）×約 27m（東西）×約 17m（オペレーティングフロア上部高さ）
個数	1個

b. 排風機

種類	遠心式
容量	30,000m <sup>3</sup> /h
台数	2台

c. プレフィルタ（排気フィルタユニット）

種類	中性能フィルタ
容量	10,000m <sup>3</sup> /h
台数	4台

d. 高性能粒子フィルタ（排気フィルタユニット）

種類	高性能粒子フィルタ
容量	10,000m <sup>3</sup> /h
効率	97%（粒径 0.3 μm）以上
台数	4台

e. 放射性物質濃度測定器（排気フィルタユニット出入口）

(a) 排気フィルタユニット入口

検出器の種類	シンチレーション検出器
計測範囲	10 <sup>-1</sup> ～10 <sup>5</sup> s <sup>-1</sup>
台数	4台

(b) 排気フィルタユニット出口

排気フィルタユニット出口については、Ⅱ2.15 放射線管理関係設備等参照

f. ダクト

種類	はぜ折りダクト／鋼板ダクト
材質	ガルバリウム鋼板／SS400

(1号機)

a. 大型カバー

種類	鉄骨造
寸法	約 66m（南北）×約 56m（東西）×約 68m（地上高） （作業環境整備区画）

約 66m（南北）×約 56m（東西）×約 40m（オペレーティングフロア上部高さ）

個数 1 個

b. 排風機

種類	遠心式
容量	30,000m <sup>3</sup> /h
台数	2台（うち1台予備）

c. プレフィルタ（排気フィルタユニット）

種類	中性能フィルタ
容量	30,000m <sup>3</sup> /h
台数	2台（うち1台予備）

d. 高性能粒子フィルタ（排気フィルタユニット）

種類	高性能粒子フィルタ
容量	30,000m <sup>3</sup> /h
効率	97%（粒径0.3μm）以上
台数	2台（うち1台予備）

e. 放射性物質濃度測定器（排気フィルタユニット出入口）

(a) 排気フィルタユニット入口

検出器の種類	シンチレーション検出器
計測範囲	10 <sup>0</sup> ~10 <sup>4</sup> s <sup>-1</sup>
台数	2台

(b) 排気フィルタユニット出口

排気フィルタユニット出口については、Ⅱ2.15 放射線管理関係設備等参照

f. ダクト

種類	はぜ折りダクト／鋼板ダクト
材質	ガルバリウム鋼板／SS400



### 2.11.3 添付資料

#### 添付資料－1 燃料取扱設備の設計等に関する説明書

添付資料－1－1 燃料の落下防止，臨界防止に関する説明書※<sup>1</sup>

添付資料－1－2 放射線モニタリングに関する説明書※<sup>1</sup>

添付資料－1－3 燃料の健全性確認及び取り扱いに関する説明書※<sup>2</sup>

#### 添付資料－2 構内用輸送容器の設計等に関する説明書

添付資料－2－1 構内用輸送容器に係る安全機能及び構造強度に関する説明書※<sup>2</sup>

添付資料－2－2 破損燃料用輸送容器に係る安全機能及び構造強度に関する説明書※<sup>2</sup>

添付資料－2－3 構内輸送時の措置に関する説明書※<sup>2</sup>

#### 添付資料－3 燃料取り出し用カバーの設計等に関する説明書

添付資料－3－1 放射性物質の飛散・拡散を防止するための機能に関する説明書

添付資料－3－2 移送操作中の燃料集合体の落下※<sup>1</sup>

#### 添付資料－4 構造強度及び耐震性に関する説明書

添付資料－4－1 燃料取扱設備の構造強度及び耐震性に関する説明書※<sup>1</sup>

添付資料－4－2 燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する説明書

添付資料－4－3 燃料取り出し用カバー換気設備の構造強度及び耐震性に関する説明書

#### 添付資料－5 使用済燃料プールからの燃料取り出し工程表※<sup>1</sup>

#### 添付資料－6 福島第一原子力発電所第1号機原子炉建屋カバーに関する説明書

#### 添付資料－7 福島第一原子力発電所第2号機原子炉建屋西側外壁の開口設置について

※<sup>1</sup>（2号機，3号機及び4号機を除く）及び※<sup>2</sup>（3号機及び4号機を除く）の説明書については，別途申請する。

## 移送操作中の燃料集合体の落下

### 1. 原因

福島第一 2～4 号機使用済燃料プール内における燃料の移送操作中に、何らかの原因で燃料集合体が落下して破損し、放射性物質が環境に放出される。

### 2. 事故防止対策

燃料集合体の落下を防止するため、次のような設計及び運転管理上の対策を講じる。

- (1) 燃料取扱機は、燃料集合体の総重量を十分上回る重量に耐えることのできる強度に設計する。
- (2) 燃料把握機のワイヤを二重化する。
- (3) 燃料把握機は、圧縮空気等の駆動源が喪失した場合、燃料集合体が外れないフェイル・セーフ設計とする。
- (4) 燃料把握機が燃料集合体を確実につかんでいない場合には、吊上げができないようなインターロックを設ける。
- (5) 運転要領を十分整備し、よく訓練された監督者の直接指揮下で燃料取扱作業を行う運転管理体制をとる。
- (6) 使用済燃料プールに貯蔵されている燃料集合体について、移送前に燃料集合体の機械的健全性を確認する。
- (7) 燃料集合体の機械的健全性確認において、破損が確認された燃料集合体を移送する場合には、破損形態に応じた適切な取扱手法及び収納方法により、放射性物質の飛散・拡散を防止する。

### 3. 第 4 号機核分裂生成物の放出量及び線量の評価

#### 3.1. 核分裂生成物の放出量

##### (1) 破損燃料棒の評価

本事故時に破損する燃料棒の本数は、次の仮定に基づいて評価する。

- a. 燃料取り出し作業に際し、使用済燃料貯蔵ラックの上部で取扱中の燃料集合体 1 体が使用済燃料貯蔵ラックに落下するものと仮定する。
- b. 落下による燃料集合体の破損体数は、炉心での落下を想定した設置許可申請書の評価と同様の 2.3 体とする。

なお、炉心での落下高さ 10m に対し、使用済燃料プールでの落下高さは使用済燃料貯蔵ラックへの落下及び構内用輸送容器への落下共に 1m 以下であり、装荷・貯蔵されている燃料集合体の配置密度も炉心と比較して使用済燃料プール及び構内用輸

送容器の方が低いため、使用済燃料プールでの落下を想定した場合の破損体数が、炉心での落下を想定した場合の破損体数を上回ることはない。

## (2) 評価条件

事故時の核分裂生成物の移行と放出量の評価は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 燃料ギャップ内の核分裂生成物の量は、原子炉が定格出力の約 105%（熱出力 2,483MW）で十分長時間（2,000 日）運転された取替炉心のサイクル末期の最大出力燃料集合体について行う。
- b. 燃料取り出し作業は、原子炉停止後 365 日冷却された後に行われるものとし、原子炉停止後の放射能の減衰は考えるものとする。  
 なお、第 4 号機の発電停止は 2010 年 11 月 30 日であり、使用済燃料プールからの燃料取り出しはステップ 2 終了から 2 年以内の 2013 年 11 月頃の開始を目標としている。この場合の冷却日数は約 1100 日となる。
- c. 破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の全量が水中に放出されるものとする。破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の存在量については、半減期の長い核種の放出が支配的であることを考えて、破損した燃料棒内の全蓄積量に対して希ガス及びよう素それぞれ 30%とする。
- d. 放出された希ガスは、全量が水中から燃料取り出し用カバーの空气中へ移行するものとする。
- e. 燃料取り出し作業開始時には、燃料及び冷却材温度は低下しているため、放出されたよう素のうち 1%は有機状とし、すべて燃料取り出し用カバー内に移行するものとする。
- f. 水中へ放出された無機よう素の水中での除染係数は 500 とする。

## (3) 評価結果

上記の評価条件に基づいて計算した核分裂生成物の大気中への放出量は表 3.1 の通りである。

表 3.1 核分裂生成物の大気中への放出量

核分裂生成物	放出量
希ガス(γ線実効エネルギー 0.5MeV 換算値) 大気放出量	約 $5.0 \times 10^{11}$ Bq
よう素(I-131 等価量(小児実効))大気放出量	約 $3.3 \times 10^6$ Bq
よう素(I-131 等価量(成人実効))大気放出量	約 $1.3 \times 10^7$ Bq

## 3.2. 線量当量の評価

### (1) 評価の前提

大気中へ放出される核分裂生成物は、地上放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 敷地境界外の地表空气中濃度は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。

なお、相対濃度 ( $\chi/Q$ ) は設置許可申請書記載の主蒸気管破断 (地上放出) の値  $3.4 \times 10^{-5} \text{s/m}^3$  を適用する。

- b. 敷地境界外の希ガスによる  $\gamma$  線空気吸収線量は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。

なお、相対線量 ( $D/Q$ ) は設置許可申請書記載の主蒸気管破断 (地上放出) の値  $3.4 \times 10^{-19} \text{Gy/Bq}$  を適用する。

## (2) 評価方法

敷地境界外における実効線量は、次に述べる内部被ばくによる実効線量及び外部被ばく ( $\gamma$  線及び  $\beta$  線) による実効線量の和として計算する。

よう素の内部被ばくによる実効線量  $H_I$  (Sv) は、(3.2-1)式で計算する。

$$H_I = R \cdot H_\infty \cdot \chi / Q \cdot Q_I \cdots \cdots \cdots (3.2-1)$$

ここで、

R : 呼吸率 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )

「発電用軽水型原子炉施設の安全評価に関する審査指針」の活動中の呼吸率 (小児 :  $0.31 \text{m}^3/\text{h}$ , 成人 :  $1.2 \text{m}^3/\text{h}$ ) を秒当りに換算して用いる。

$H_\infty$  : よう素 (I-131) を 1Bq 吸入した場合の実効線量

(I-131, 小児 :  $1.6 \times 10^{-7} \text{Sv/Bq}$ , 成人 :  $2.0 \times 10^{-8} \text{Sv/Bq}$ )

$\chi / Q$  : 相対濃度 ( $\text{s}/\text{m}^3$ )

$Q_I$  : 事故期間中のよう素の大気放出量 (Bq) (I-131 等価量)

希ガスの  $\gamma$  線外部被ばくによる実効線量  $H_\gamma$  (Sv) は、(3.2-2)式で計算する。

$$H_\gamma = K \cdot D / Q \cdot Q_\gamma \cdots \cdots \cdots (3.2-2)$$

ここで、

K : 空気吸収線量から実効線量への換算係数 ( $K = 1 \text{Sv/Gy}$ )

$D / Q$  : 相対線量 ( $\text{Gy}/\text{Bq}$ )

$Q_\gamma$  : 事故期間中の希ガスの大気放出量 (Bq)

( $\gamma$  線実効エネルギー  $0.5 \text{MeV}$  換算値)

希ガスの  $\beta$  線外部被ばくによる実効線量  $H_\beta$  (Sv) は、(3.2-3)式で計算する。

$$H_\beta = 6.2 \times 10^{-14} \cdot \chi / Q \cdot Q_\beta \cdot E_\beta \cdot W_{TS} \cdots \cdots \cdots (3.2-3)$$

ここで、

$\chi / Q$  : 相対濃度 ( $\text{s}/\text{m}^3$ )

$Q_\beta$  : 事故期間中の希ガスの大気放出量 (Bq)

$E_{\beta}$  :  $\beta$ 線のエネルギー (MeV) (0.251MeV Kr-85 実効エネルギー)  
 $W_{TS}$  : 皮膚の組織荷重係数は ICRP Publication. 60 の値を用いる。  
 (0.01)

### (3) 評価結果

上記の評価前提及び方法に基づき敷地境界外の実効線量を評価した結果は表 3.2 の通りである。

表 3.2 燃料集合体の落下時の実効線量

実効線量 (小児)	実効線量 (成人)
約 $7.8 \times 10^{-4}$ mSv	約 $7.8 \times 10^{-4}$ mSv

上記の値から判断して、本事象による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。

今回評価した実効線量は設置許可申請書での評価 ( $6.8 \times 10^{-2}$ mSv) と比較して 2 桁以上減少しているが、その原因は、設置許可申請書の評価で排気筒放出であったものが、今回地上放出として評価することによる実効線量の上昇要因があるものの、冷却が進んだことによる希ガス及びヨウ素の減少効果がそれ以上に大きいことである。

### 3.3. 判断基準への適合性の検討

3.1, 3.2 に示した通り、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。

#### 4. 第3号機核分裂生成物の放出量及び線量の評価

##### 4.1. 核分裂生成物の放出量

###### (1) 破損燃料棒の評価

本事故時に破損する燃料棒の本数は、次の仮定に基づいて評価する。

- a. 燃料取り出し作業に際し、使用済燃料貯蔵ラックの上部で取扱中の燃料集合体1体が使用済燃料貯蔵ラックに落下するものと仮定する。
- b. 落下による燃料集合体の破損体数は、炉心での落下を想定した設置許可申請書の評価と同様の2.3体とする。

なお、炉心での落下高さ10mに対し、使用済燃料プールでの落下高さは使用済燃料貯蔵ラックへの落下及び構内用輸送容器への落下共に1m以下であり、装荷・貯蔵されている燃料集合体の配置密度も炉心と比較して使用済燃料プール及び構内用輸送容器の方が低いため、使用済燃料プールでの落下を想定した場合の破損体数が、炉心での落下を想定した場合の破損体数を上回ることはない。

###### (2) 評価条件

事故時の核分裂生成物の移行と放出量の評価は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 燃料ギャップ内の核分裂生成物の量は、原子炉が定格出力の約105%（熱出力2,483MW）で十分長時間（2,000日）運転された取替炉心のサイクル末期の最大出力燃料集合体について行う。
- b. 燃料取り出し作業は、原子炉停止後365日冷却された後に行われるものとし、原子炉停止後の放射能の減衰は考えるものとする。

なお、第3号機の使用済燃料プールに貯蔵中の使用済燃料は2010年6月18日に発電停止したものであり、使用済燃料プールからの燃料取り出しはステップ2終了から3年程度後の2014年末の開始を目標としている。この間の冷却日数は約1600日となる。

- c. 破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の全量が水中に放出されるものとする。破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の存在量については、半減期の長い核種の放出が支配的であることを考えて、破損した燃料棒内の全蓄積量に対して希ガス及びよう素それぞれ30%とする。
- d. 放出された希ガスは、全量が水中から燃料取り出し用カバーの空气中へ移行するものとする。
- e. 燃料取り出し作業開始時には、燃料及び冷却材温度は低下しているため、放出されたよう素のうち1%は有機状とし、すべて燃料取り出し用カバー内に移行するものとする。
- f. 水中へ放出された無機よう素の水中での除染係数は500とする。

###### (3) 評価結果

上記の評価条件に基づいて計算した核分裂生成物の大気中への放出量は表4.1の通

りである。

表 4.1 核分裂生成物の大気中への放出量

核分裂生成物	放出量
希ガス(γ線実効エネルギー 0.5MeV 換算値) 大気放出量	約 $5.0 \times 10^{11}$ Bq
よう素(I-131 等価量(小児実効))大気放出量	約 $3.3 \times 10^6$ Bq
よう素(I-131 等価量(成人実効))大気放出量	約 $1.3 \times 10^7$ Bq

#### 4.2. 線量当量の評価

##### (1) 評価の前提

大気中へ放出される核分裂生成物は、地上放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 敷地境界外の地表空気中濃度は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。

なお、相対濃度 ( $\chi/Q$ ) は設置許可申請書記載の主蒸気管破断(地上放出)の値  $2.6 \times 10^{-5}$  s/m<sup>3</sup> を適用する。

- b. 敷地境界外の希ガスによるγ線空気吸収線量は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。

なお、相対線量 (D/Q) は設置許可申請書記載の主蒸気管破断(地上放出)の値  $3.0 \times 10^{-19}$  Gy/Bq を適用する。

##### (2) 評価方法

敷地境界外における実効線量は、次に述べる内部被ばくによる実効線量及び外部被ばく(γ線及びβ線)による実効線量の和として計算する。

よう素の内部被ばくによる実効線量  $H_I$  (Sv) は、(4.2-1)式で計算する。

$$H_I = R \cdot H_{\infty} \cdot \chi / Q \cdot Q_I \dots \dots \dots (4.2-1)$$

ここで、

- R : 呼吸率 (m<sup>3</sup>/s)  
「発電用軽水型原子炉施設の安全評価に関する審査指針」の活動中の呼吸率(小児: 0.31m<sup>3</sup>/h, 成人: 1.2m<sup>3</sup>/h)を秒当りに換算して用いる。
- $H_{\infty}$  : よう素(I-131)を1Bq吸入した場合の小児の実効線量  
(I-131, 小児:  $1.6 \times 10^{-7}$  Sv/Bq, 成人:  $2.0 \times 10^{-8}$  Sv/Bq)
- $\chi / Q$  : 相対濃度 (s/m<sup>3</sup>)
- $Q_I$  : 事故期間中のよう素の大気放出量 (Bq) (I-131 等価量)

希ガスの $\gamma$ 線外部被ばくによる実効線量 $H_\gamma$  (Sv) は、(4.2-2)式で計算する。

$$H_\gamma = K \cdot D / Q \cdot Q_\gamma \dots\dots\dots (4.2-2)$$

ここで、

- K : 空気吸収線量から実効線量への換算係数 (K=1Sv/Gy)
- D/Q : 相対線量 (Gy/Bq)
- Q $_\gamma$  : 事故期間中の希ガスの大気放出量 (Bq)  
( $\gamma$ 線実効エネルギー0.5MeV換算値)

希ガスの $\beta$ 線外部被ばくによる実効線量 $H_\beta$  (Sv) は、(4.2-3)式で計算する。

$$H_\beta = 6.2 \times 10^{-14} \cdot \chi / Q \cdot Q_\beta \cdot E_\beta \cdot W_{TS} \dots\dots\dots (4.2-3)$$

ここで、

- $\chi / Q$  : 相対濃度 (s/m<sup>3</sup>)
- Q $_\beta$  : 事故期間中の希ガスの大気放出量 (Bq)
- E $_\beta$  :  $\beta$ 線のエネルギー (MeV) (0.251MeV Kr-85実効エネルギー)
- W $_{TS}$  : 皮膚の組織荷重係数はICRP Publication. 60の値を用いる。  
(0.01)

### (3) 評価結果

上記の評価前提及び方法に基づき敷地境界外の実効線量を評価した結果は表4.2の通りである。

表4.2 燃料集合体の落下時の実効線量

実効線量 (小児)	実効線量 (成人)
約 $6.2 \times 10^{-4}$ mSv	約 $6.2 \times 10^{-4}$ mSv

上記の値から判断して、本事象による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。

今回評価した実効線量は設置許可申請書での評価 ( $6.8 \times 10^{-2}$ mSv) と比較して2桁以上減少しているが、その原因は、設置許可申請書の評価で排気筒放出であったものが、今回地上放出として評価することによる実効線量の上昇要因があるものの、冷却が進んだことによる希ガス及びヨウ素の減少効果がそれ以上に大きいことである。

### 4.3. 判断基準への適合性の検討

4.1, 4.2 に示した通り、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。



## 5. 第2号機核分裂生成物の放出量及び線量の評価

### 5.1. 核分裂生成物の放出量

#### (1) 破損燃料棒の評価

本事故時に破損する燃料棒の本数は、次の仮定に基づいて評価する。

- a. 燃料取り出し作業に際し、使用済燃料貯蔵ラックの上部で取扱中の燃料集合体1体が使用済燃料貯蔵ラックに落下するものと仮定する。
- b. 落下による燃料集合体の破損体数は、炉心での落下を想定した設置許可申請書の評価と同様の2.3体とする。

なお、炉心での落下高さ10mに対し、使用済燃料プールでの落下高さは使用済燃料貯蔵ラックへの落下及び構内用輸送容器への落下共に2m以下であり、装荷・貯蔵されている燃料集合体の配置密度も炉心と比較して使用済燃料プール及び構内用輸送容器の方が低いため、使用済燃料プールでの落下を想定した場合の破損体数が、炉心での落下を想定した場合の破損体数を上回ることはない。

#### (2) 評価条件

事故時の核分裂生成物の移行と放出量の評価は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 燃料ギャップ内の核分裂生成物の量は、原子炉熱出力2483MW(定格出力の約105%)で2000日運転を行った9×9燃料集合体について行う。
- b. 燃料集合体の冷却期間は365日とする。
- c. 破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の全量が水中に放出されるものとする。破損した燃料棒のギャップ内核分裂生成物の存在量については、半減期の長い核種の放出が支配的であることを考えて、破損した燃料棒内の全蓄積量に対して希ガス(Kr-85)及びよう素(I-129)それぞれ30%とする。
- d. 放出された希ガスは、全量が水中から原子炉建屋および燃料取り出し用構台の大気中へ移行するものとする。
- e. 燃料取り出し作業開始時には、燃料及び冷却材温度は低下しているので、放出されたよう素のうち1%は有機状とし、すべて原子炉建屋および燃料取り出し用構台内へ移行するものとする。
- f. 水中へ放出された無機よう素の水中での除染係数は500とする。

#### (3) 評価結果

上記の評価条件に基づいて計算した核分裂生成物の大気中への放出量は表5.1の通りである。

表5.1 核分裂生成物の大気中への放出量

核分裂生成物	放出量
希ガス(γ線実効エネルギー0.5MeV換算値)大気放出量	約 $5.0 \times 10^{11}$ Bq
よう素(I-131等価量(小児実効))大気放出量	約 $3.4 \times 10^6$ Bq
よう素(I-131等価量(成人実効))大気放出量	約 $1.3 \times 10^7$ Bq

## 5.2. 線量当量の評価

### (1) 評価の前提

大気中へ放出される核分裂生成物は、地上放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。

- a. 敷地境界外の地表空气中濃度は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。なお、相対濃度 ( $\chi/Q$ ) は保守的な評価となる設置許可申請書記載の2号機の主蒸気管破断(地上放出)の値  $2.0 \times 10^{-5} \text{s/m}^3$  を適用する。
- b. 敷地境界外の希ガスによる  $\gamma$  線空気吸収線量は、設置許可申請書添付書類六の「5.5 安全解析に使用する気象条件」に記述される相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。なお、相対線量 ( $D/Q$ ) は保守的な評価となる設置許可申請書記載の2号機の主蒸気管破断(地上放出)の値  $2.4 \times 10^{-19} \text{Gy/Bq}$  を適用する。

### (2) 評価方法

設置許可申請書添付書類十の「3.4.3 燃料集合体の落下」ならびに「4.1.1 原子炉冷却材喪失」と同様の方法で評価する。

敷地境界外における実効線量は、次に述べる内部被ばくによる実効線量及び外部被ばくによる実効線量の和として計算する。

よう素の内部被ばくによる実効線量  $H_I$  (Sv) は、(5.2-1)式で計算する。

$$H_I = R \cdot H_\infty \cdot \chi / Q \cdot Q_I \cdots \cdots \cdots (5.2-1)$$

ここで、

- R : 呼吸率 ( $\text{m}^3/\text{s}$ )  
「発電用軽水型原子炉施設の安全評価に関する審査指針」の活動中の呼吸率を秒当たりに換算して用いる。  
(小児 :  $0.31 \text{m}^3/\text{h}$ , 成人 :  $1.2 \text{m}^3/\text{h}$ )
- $H_\infty$  : よう素 (I-131) を 1Bq 吸入した場合の実効線量  
(小児 :  $1.6 \times 10^{-7} \text{Sv/Bq}$ , 成人 :  $2.0 \times 10^{-8} \text{Sv/Bq}$ )
- $\chi / Q$  : 相対濃度 ( $\text{s}/\text{m}^3$ )
- $Q_I$  : よう素の大気放出量 (Bq) (I-131 等価量)

希ガスの  $\gamma$  線外部被ばくによる実効線量  $H_\gamma$  (Sv) は、(5.2-2)式で計算する。

$$H_\gamma = K \cdot D / Q \cdot Q_\gamma \cdots \cdots \cdots (5.2-2)$$

ここで、

- K : 空気吸収線量から実効線量への換算係数 ( $1 \text{Sv}/\text{Gy}$ )
- $D / Q$  : 相対線量 ( $\text{Gy}/\text{Bq}$ )
- $Q_\gamma$  : 希ガスの大気放出量 (Bq) ( $\gamma$  線実効エネルギー  $0.5 \text{MeV}$  換算値)

また、希ガスの  $\beta$  線外部被ばくによる実効線量  $H_\beta$  (Sv) は、(5.2-3)式で計算する。

$$H_\beta = 6.2 \times 10^{-14} \cdot \chi / Q \cdot Q_\beta \cdot E_\beta \cdot W_{TS} \cdots \cdots \cdots (5.2-3)$$

ここで、

- $x/Q$  : 相対濃度 (s/m<sup>3</sup>)  
 $Q_{\beta}$  : 希ガスの大気放出量 (Bq)  
 $E_{\beta}$  :  $\beta$ 線実効エネルギー「被ばく計算に用いる放射線エネルギー等について」を用いる。(0.251MeV Kr-85 実効エネルギー)  
 $W_{TS}$  : 皮膚の組織荷重係数は ICRP Publ. 60 の値を用いる。(0.01)

### (3) 評価結果

上記の評価前提及び方法に基づき敷地境界外の実効線量を評価した結果は表 5.2 の通りである。

表 5.2 燃料集合体の落下時の実効線量

実効線量 (小児)	実効線量 (成人)
約 $4.8 \times 10^{-4}$ mSv	約 $4.8 \times 10^{-4}$ mSv

上記の値から判断して、本事象による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。

今回評価した実効線量は設置許可申請書での評価 ( $6.4 \times 10^{-2}$  mSv) と比較して 2 桁以上減少しているが、その原因は、設置許可申請書の評価で排気筒放出であったものが、今回地上放出として評価することによる実効線量の上昇要因があるものの、冷却が進んだことによる希ガス及びよう素の減少効果がそれ以上に大きいことである。

### 5.3. 判断基準への適合性の検討

5.1, 5.2 に示した通り、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。

## 燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する説明書

## 1. 本説明書の記載範囲

本説明書は、1号機、2号機、3号機及び4号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について記載するものである。

## 2. 4号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について

## 2.1 概要

## 2.1.1 一般事項

4号機燃料取り出し用カバーは、使用済燃料プールを覆う構造としており、クレーン支持用架構と燃料取扱機支持用架構を有し、それぞれについて構造強度と耐震性について検討を行う。なお、耐震設計上の重要度分類は、燃料取扱設備の間接支持構造物としてBクラス相当とする。

燃料取り出し用カバーの構造強度は一次設計に対応した許容応力度設計を実施し、耐震性は基準地震動  $S_s$  に対する地震応答解析を実施し、燃料取り出し用カバーの損傷が原子炉建屋、使用済燃料プール及び使用済燃料ラックに波及的影響を及ぼさないことを確認する。ここで、波及的影響の確認は、架構が崩壊機構に至らないことを確認する。図2.1.1-1に燃料取り出し用カバーのイメージを示す。

なお、一部損壊した原子炉建屋に接合される燃料取扱機支持用架構の施工前において、本説明書で想定しているように、原子炉建屋の接合部が施工に十分な状態かどうか確認した点検結果を別途報告するとともに、不具合が見つかった場合には、適切に補修等を実施する。

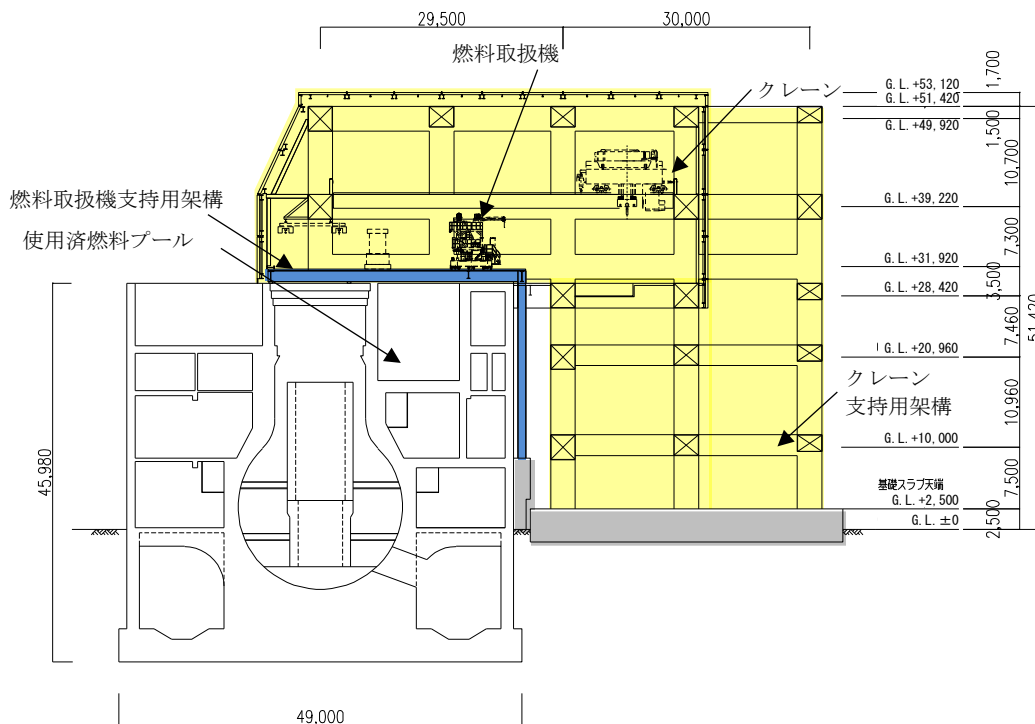


図 2.1.1-1 燃料取り出し用カバーのイメージ

燃料取り出し用カバーの検討は原則として下記の法規及び基規準類に準拠して行う。

- (1) 建築基準法・同施行令及び関連告示
- (2) 原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2005 制定）
- (3) 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2010 改定）
- (4) 鋼構造設計規準（日本建築学会，2005 改定）
- (5) 建築基礎構造設計指針（日本建築学会，2001 改定）
- (6) 2007 年版 建築物の構造関係技術基準解説書(国土交通省住宅局建築指導課・国土交通省  
国土技術政策総合研究所・独立行政法人建築研究所・日本建築行政会議，2007 刊行)
- (7) 鋼構造塑性設計指針（日本建築学会，1975 発行）
- (8) 建築工事標準仕様書・同解説 JASS14 カーテンウォール工事（日本建築学会，1996 改定）
- (9) 各種合成構造設計指針・同解説（日本建築学会，2010 改定）

また，原子力施設の設計において参照される下記の指針及び規程を参考にして検討を行う。

- (1) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1987)（日本電気協会 電気技術基準調査委員会，  
昭和 62 年 8 月 改訂）
- (2) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1991 追補版)（日本電気協会 電気技術基準調査  
委員会，平成 3 年 6 月 発刊）
- (3) 原子力発電所耐震設計技術規程(JEAC 4601-2008)（日本電気協会 原子力規格委員会，平成  
20 年 12 月 改定）
- (4) 乾式キャスクを用いる使用済燃料中間貯蔵建屋の基礎構造の設計に関する技術規程（JEAC  
4616-2009）（日本電気協会 原子力規格委員会，平成 21 年 12 月 制定）

添付資料 - 4 - 2 では，G. L.  $\pm 0\text{mm} = \text{T. P. } 8, 564(\text{※})$ とする。  
(※)震災後の地盤沈下量(-709mm)と，O. P. から T. P. への  
読替値(-727mm)を用いて，下式に基づき換算している。  
< 換算式 >  $\text{T. P.} = \text{旧 O. P.} - 1, 436\text{mm}$

### 2.1.2 クレーン支持用架構

クレーン支持用架構はキャスク搬出入用の天井クレーンを支持する架構で、南北方向に 30.00m、東西方向に 25.50m、地盤面からの高さが 51.42m の柱部分と、北方向に 29.50m 跳ね出した片持ち梁部分からなる逆 L 字型の架構である。構造形式はラーメン構造で、構造種別は鉄骨造である。柱、大梁には、箱型断面部材を用いる。

基礎形式は基礎スラブによる直接基礎とし、地震時の基礎の転倒防止対策として地盤アンカーを用い、基礎スラブを支持する地盤は地盤改良により強固な支持地盤を形成する。改良地盤は既存の原子炉建屋と同様に泥岩に着底している。

クレーン支持用架構の概要を図 2.1.2-1 に、基礎スラブ及び改良地盤の概要を図 2.1.2-2 に示す。

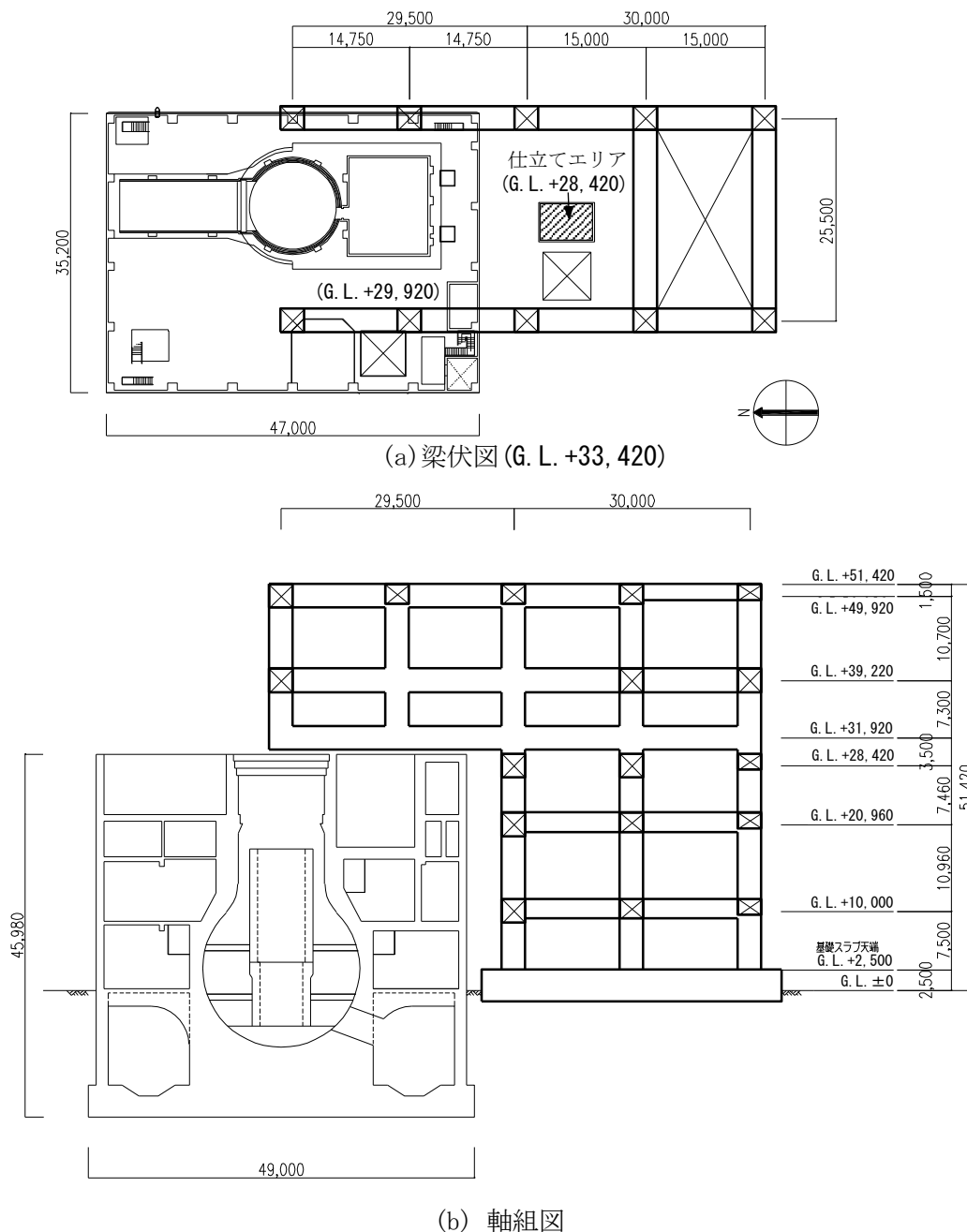
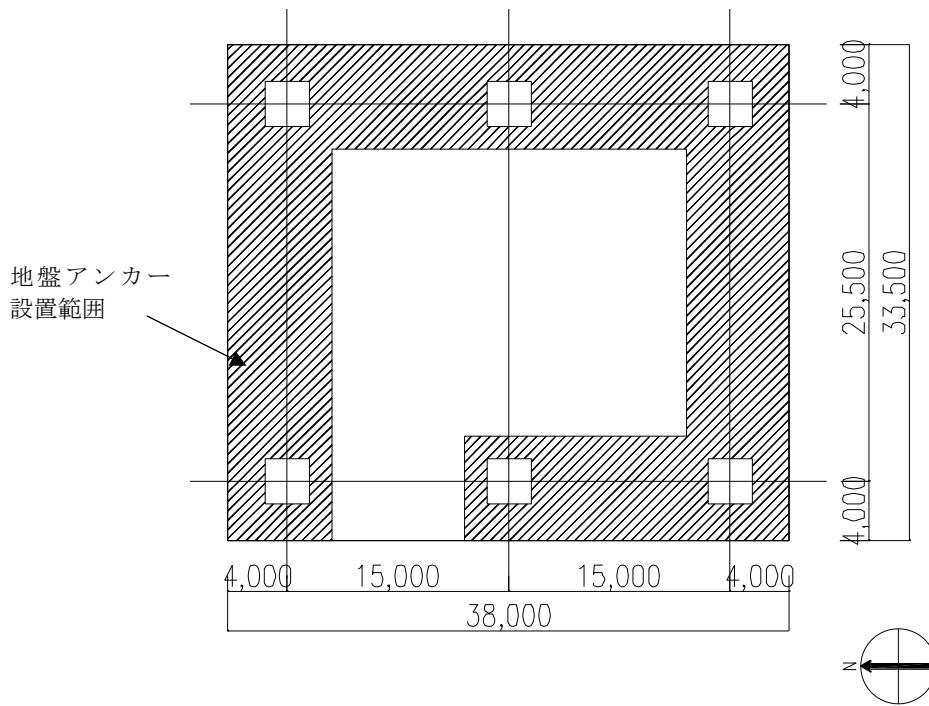
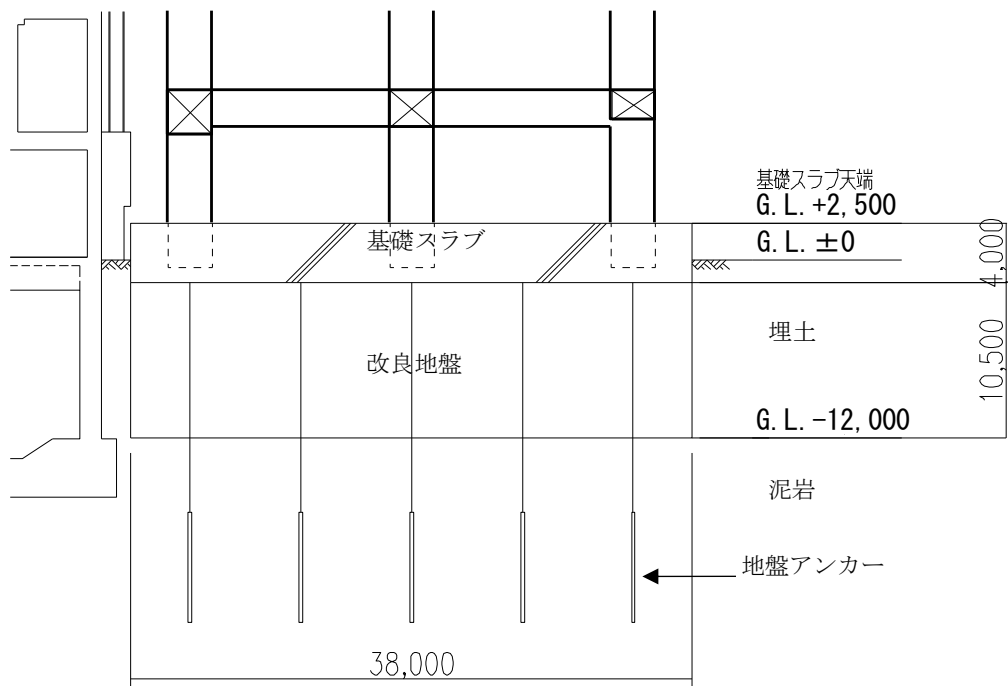


図 2.1.2-1 クレーン支持用架構の概要 (単位 : mm)



(a) 基礎伏図



(b) 基礎断面図

図 2. 1. 2-2 基礎スラブ及び改良地盤の概要 (単位 : mm)

### 2.1.3 燃料取扱機支持用架構

燃料取扱機支持用架構は燃料取扱機を支持する架構で、南北方向に 30.50m、東西方向に 13.36m、地盤面からの高さが 30.77m の柱及び梁からなる逆 L 字型の架構である。構造形式はラーメン構造で、構造種別は鉄骨造である。

支持形式は、原子炉建屋シェル壁上端及び 1 階から 2 階の南側外壁に支持する構造である。燃料取扱機支持用架構の概要を図 2.1.3-1(1)及び図 2.1.3-1(2)に示す。

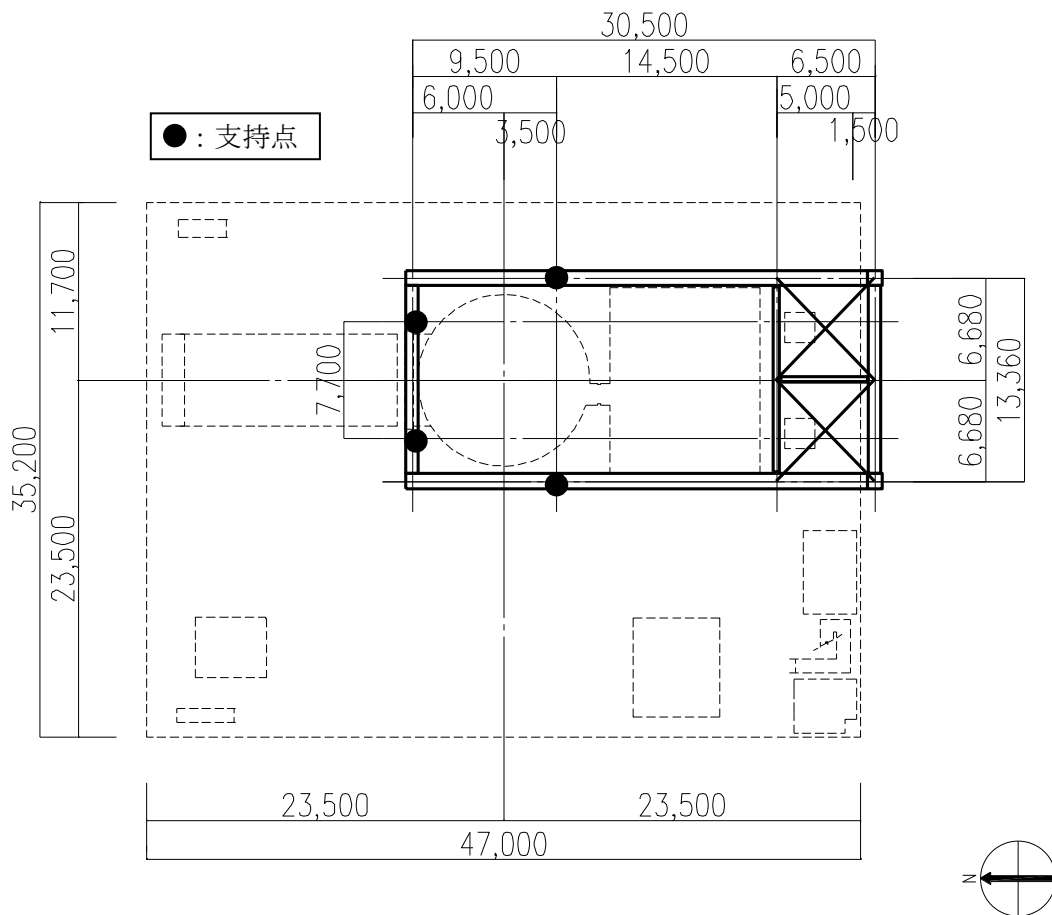
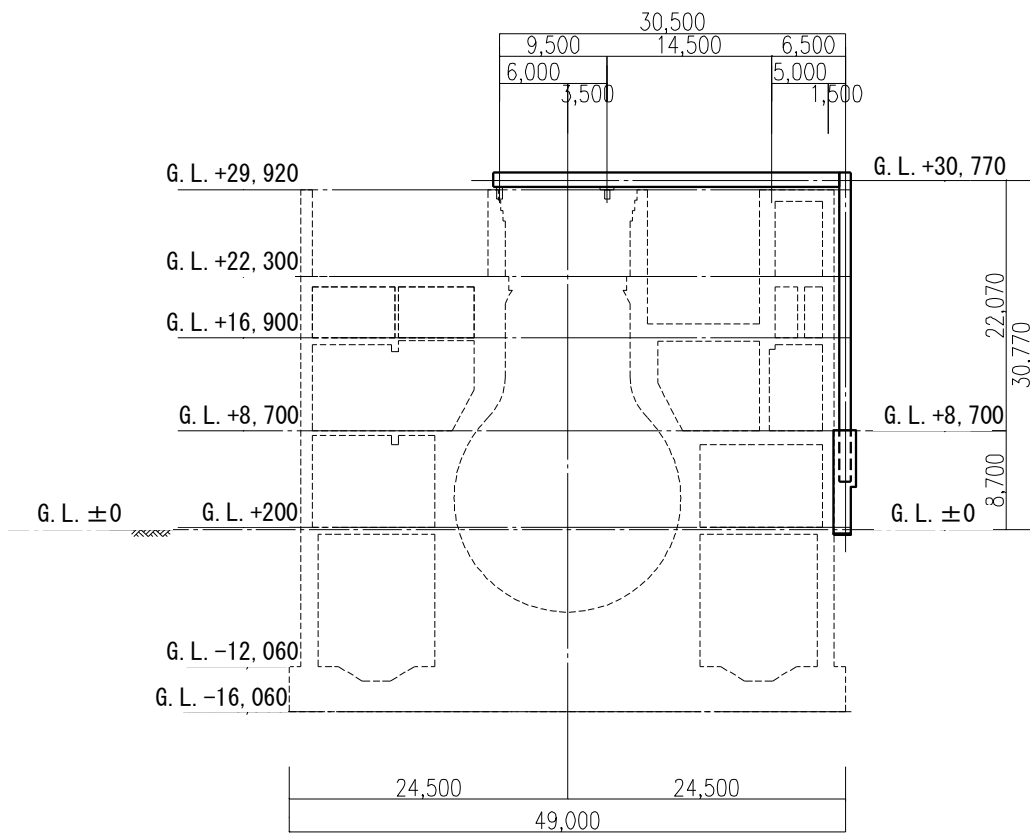
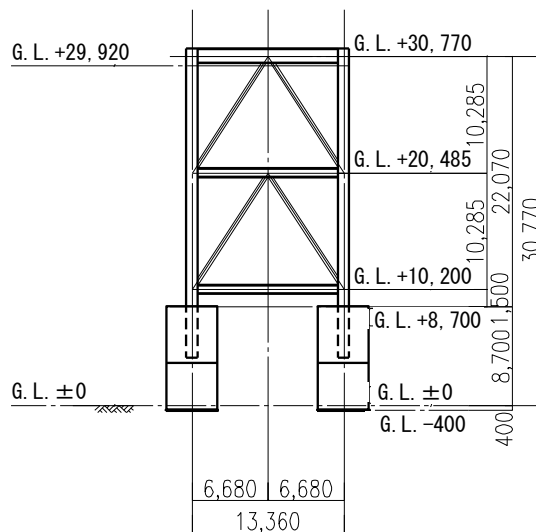


図 2.1.3-1(1) 燃料取扱機支持用架構の概要(梁伏図 (G. L. +31, 420) ) (単位 : mm)





(a) 断面図



(b) 立面図

図 2.1.3-1(2) 燃料取扱機支持用架構の概要 (単位: mm)

## 2.2 クレーン支持用架構の構造強度及び耐震性について

クレーン支持用架構の構造強度及び耐震性の検討フローを図 2.2-1 に示す。

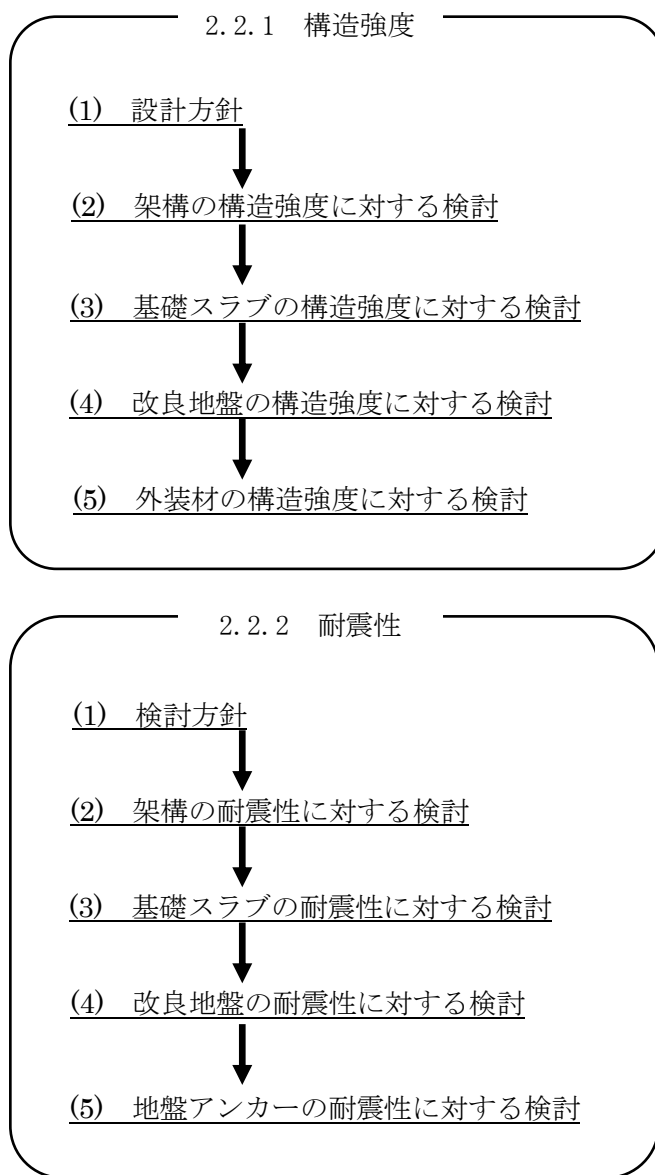


図 2.2-1 クレーン支持用架構の検討フロー

## 2.2.1 構造強度

### (1) 設計方針

構造強度の検討は、クレーン支持用架構、基礎スラブ、改良地盤及び外装材について許容応力度設計を実施する。

#### 1) 使用材料及び許容応力度

使用材料の物性値及び許容応力度を表 2.2.1-1(1)及び表 2.2.1-1(2)に示す。

表 2.2.1-1(1) クレーン支持用架構の物性値及び許容応力度

#### 材料定数

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )
架 構	鉄骨	2.05×10 <sup>5</sup>	0.3	77.0
基礎スラブ	コンクリート	2.44×10 <sup>4</sup>	0.2	24.0

#### コンクリートの許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

設計基準強度=30	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
	10.0	—	0.790	20.0	—	1.185

#### 鉄筋の許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD345	D29 未満	215	195	345	345
	D29 以上	195			
SD390	D29 未満	215	195	390	390
	D29 以上	195			

#### 構造用鋼材の許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

板厚	材料	基準強度 F	許容応力度
T ≤ 40mm	SS400, SN400B	235	「鋼構造設計規準」 に従い、左記 F の値 より求める
T > 40mm	SN400B	215	
T ≤ 40mm	SM490A, SN490B	325	
T ≤ 40mm	SM520B	355	

表 2. 2. 1-1(2) 改良地盤, 支持地盤の物性値及び許容応力度

改良地盤の許容応力度

(単位 : kN/m<sup>2</sup>)

設計基準強度=2300* <sup>1</sup>	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
改良地盤	766	—	153	1533	—	306
断面欠損を考慮* <sup>2</sup>	750	—	114	1502	—	229

\*1 : 施工結果を反映した

\*2 : 「JEAC4616-2009」に準拠し, 断面欠損を鉛直方向に 2%, せん断方向に 25%考慮した

支持地盤の許容支持力度

(単位 : kN/m<sup>2</sup>)

種別	長期* <sup>1</sup>	短期* <sup>1</sup>
泥岩 (岩盤)	1960	3920

\*1 : 「福島第一原子力発電所第 4 号機工事計画認可申請書」による

## 2) 荷重及び荷重組合せ

設計で考慮する荷重を以下に示す。

### ・鉛直荷重 (VL)

クレーン支持用架構に作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重、積載荷重及び地盤アンカーの効果を考慮した荷重とする。

### ・クレーン荷重 (CL)

天井クレーンによる荷重を表 2.2.1-2 に示す。

表 2.2.1-2 クレーン荷重一覧表

クレーン自重	1666 kN
トロリ自重	1010 kN
吊荷	980 kN

### ・積雪荷重 (SL)

積雪荷重は建築基準法施行令及び福島県建築基準法施行規則細則に準拠し以下の条件とする。

積雪量：30cm，単位荷重：20N/m<sup>2</sup>/cm

### ・風圧力 (WL)

風圧力は建築基準法施行令第 87 条および建設省告示第 1454 号に基づき、基準風速を 30m/s，地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 2.2.1-3 に示す。

表 2.2.1-3 速度圧の算定結果

建物高さ* H (m)	平均風速の 鉛直分布係数 Er	ガスト 影響係数 Gf	建物高さ と粗度 区分による係数 E	基準風速 Vo (m/s)	速度圧 q (N/m <sup>2</sup> )
52.73	1.28	2.00	3.28	30	1769

\*： 建物高さは、軒高さ (52.34m) と最高高さ (53.12m) の  
平均値とした

・地震荷重 (K)

水平地震力は G.L. ±0m を基準面として、下式により算定し、算定結果を表 2. 2. 1-4 に示す。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_0$$

ここで、

$Q_i$  : 水平地震力 (kN)

$n$  : 施設の重要度に応じた係数 ( $n=1.5$ )

建築基準法で定める地震力の 1.5 倍を考慮する。

$C_i$  : 地震層せん断力係数

$W_i$  : 当該部分が支える重量 (kN)

$Z$  : 地震地域係数 ( $Z=1.0$ )

$R_t$  : 振動特性係数 ( $R_t=1.0$ )

$A_i$  : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、クレーン支持用架構の固有値を用いたモーダル法 (二乗和平方根法) により求める。

$C_0$  : 標準せん断力係数 ( $C_0=0.2$ )

表 2. 2. 1-4 水平地震力の算定結果

階	G.L. (m)	各階重量 (kN)	$W_i$ (kN)	$A_i$		$n \cdot C_i$		$Q_i$ (kN)	
				NS 方向	EW 方向	NS 方向	EW 方向	NS 方向	EW 方向
R	+51.42	10569	—	—	—	—	—	—	—
6	+40.72~+51.42	13780	10569	1.443	1.477	0.433	0.443	4576	4683
5	+33.42~+40.72	5195	24349	1.302	1.328	0.391	0.398	9514	9702
4	+29.92~+33.46	9019	29544	1.254	1.272	0.376	0.382	11118	11271
3	+22.46~+29.92	5782	38563	1.183	1.187	0.355	0.356	13685	13730
2	+11.50~+22.46	6390	44345	1.113	1.114	0.334	0.334	14807	14818
1	+2.50~+11.50	—	50735	1.000	1.000	0.300	0.300	15221	15221

・荷重組合せ

設計で考慮するクレーンの位置を図 2.2.1-1 に、荷重組合せを表 2.2.1-5 に示す。

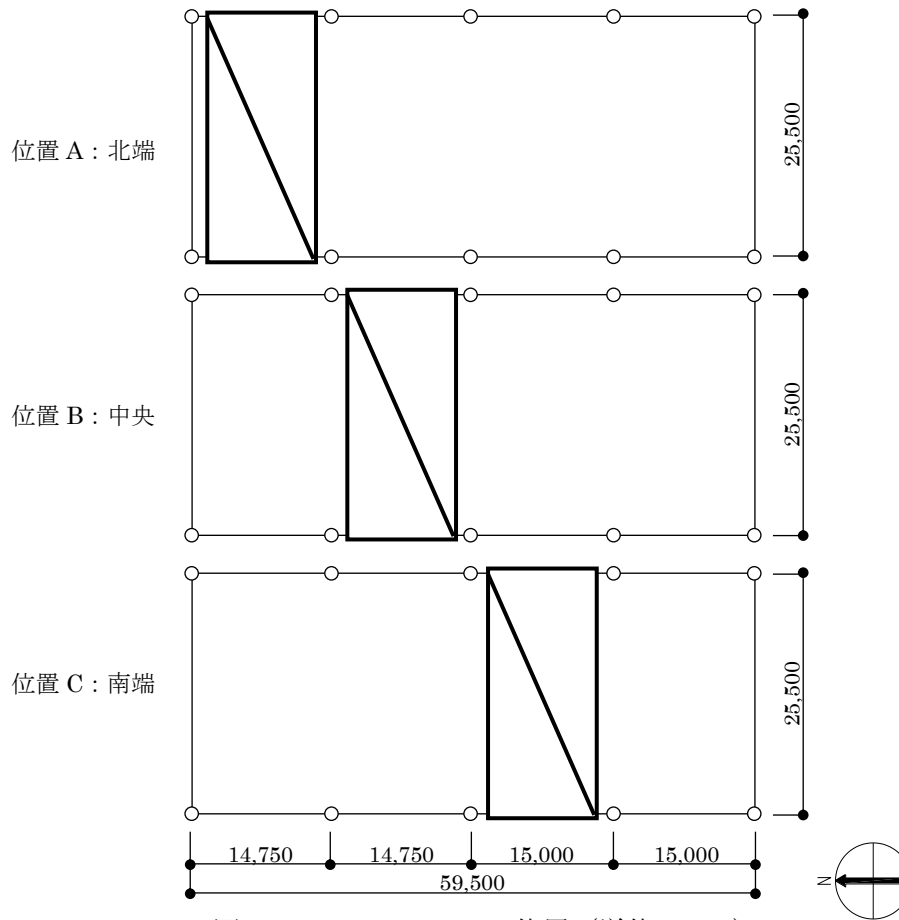


図 2.2.1-1 クレーンの位置 (単位 : mm)

表 2.2.1-5 クレーン支持用架構の荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL+CL <sup>*1</sup>	長期
積雪時 <sup>*3</sup>	S	VL+CL <sup>*1</sup> +SL	短期
暴風時 <sup>*3</sup>	W	VL+CL <sup>*1</sup> +WL	
地震時	E1	VL+CL <sup>*1</sup> +K(+NS) <sup>*2</sup>	
	E2	VL+CL <sup>*1</sup> +K(-NS) <sup>*2</sup>	
	E3	VL+CL <sup>*1</sup> +K(+EW) <sup>*2</sup>	
	E4	VL+CL <sup>*1</sup> +K(-EW) <sup>*2</sup>	

\*1 : 吊荷重量は、常時、積雪時及び暴風時はクレーン位置、地震時は仕立てエリアにて考慮する。

\*2 : 地震荷重は NS 方向及び EW 方向を考慮する。

\*3 : 短期事象では地震時が支配的であることから、積雪時及び暴風時の検討は省略する。ただし、外装材の検討は暴風時が支配的であることから暴風時に対し検討を行う。

なお、地震時と暴風時のクレーン支持用架構の層せん断力について、風荷重の受圧面積が最大になる EW 方向で比較した結果を図 2. 2. 1-2 に示す。図 2. 2. 1-2 より、地震時の層せん断力は暴風時の層せん断力を包絡しており、支配的な荷重である。

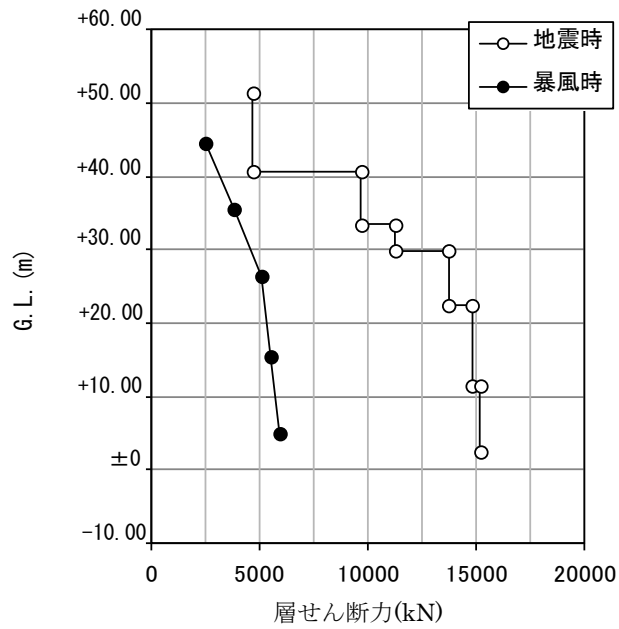


図 2. 2. 1-2 地震時と暴風時の層せん断力の比較



(2) 架構の構造強度に対する検討

1) 解析モデル

クレーン支持用架構の解析モデルは、基礎スラブ厚中央 (G.L.+0.5m) より上部を立体架構モデルとし、柱及び梁の部材端部の条件は剛接、柱脚部は基礎下でピン支持とする。解析モデル、部材寸法及び応力検討箇所を図 2.2.1-3 に示す。ここに、使用する材質は SM490A とする。

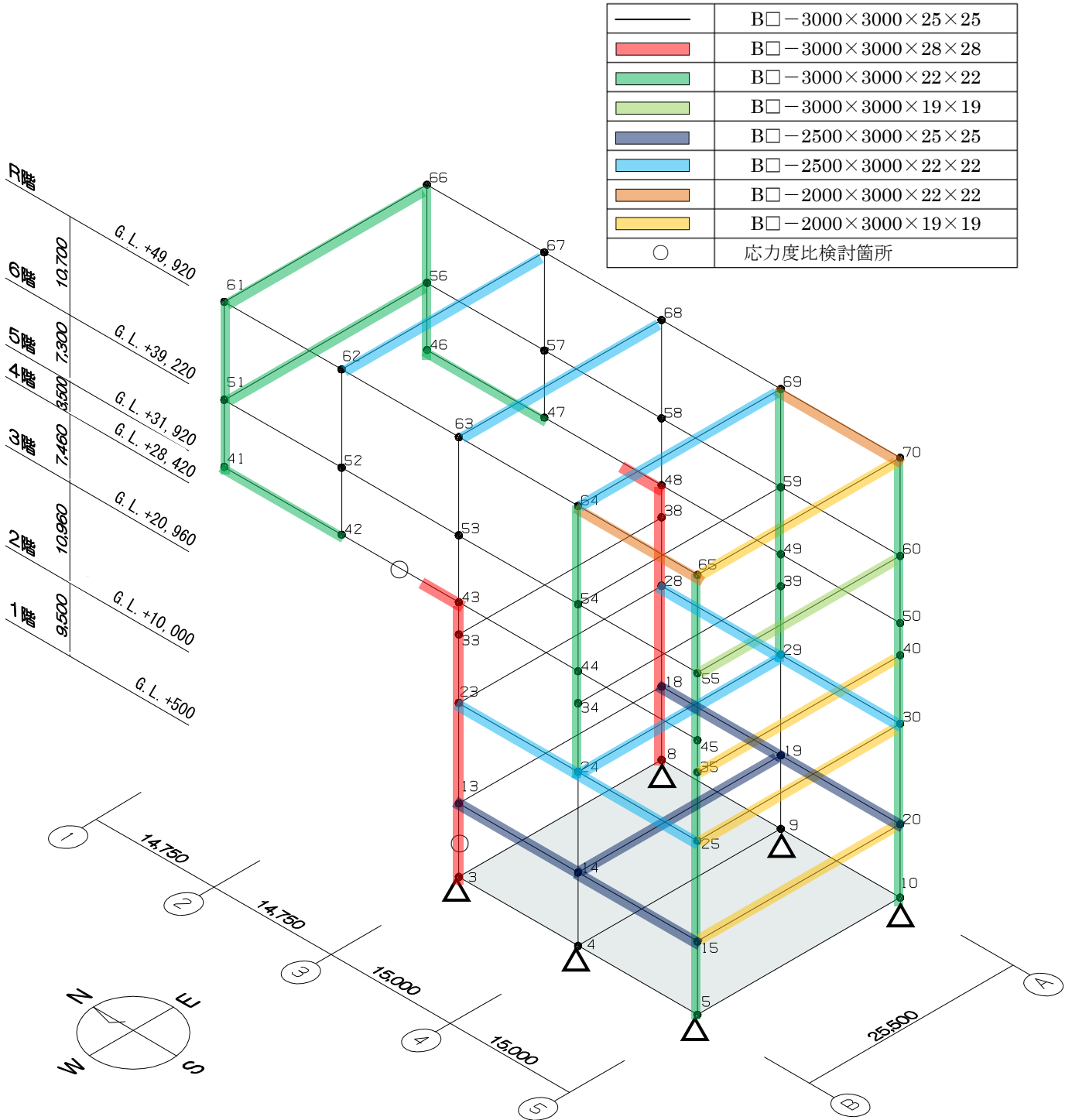


図 2.2.1-3 解析モデル図 (単位: mm)

## 2) 断面検討

応力解析結果を用い、断面検討は二方向の曲げを図 2.2.1-4 に示すように考慮する。

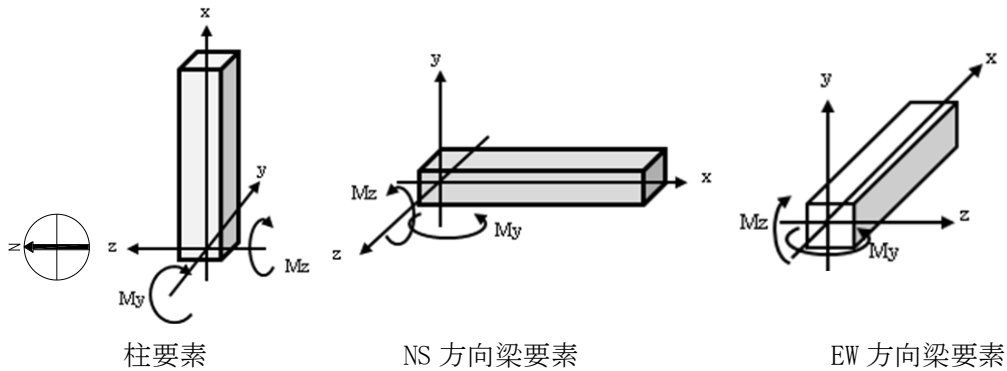


図 2.2.1-4 曲げモーメントの方向

応力度比の検討は「鋼構造設計規準」に従い、軸力及び曲げモーメントに対する検討は下式にて行う。

・ 軸圧縮の場合 
$$\frac{\sigma_c}{f_c} + \frac{\sigma_{bz} + \sigma_{by}}{f_b} \leq 1$$

・ 軸引張の場合 
$$\frac{\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by}}{f_t} \leq 1$$

ここで、

$\sigma_c$  : 軸応力度 (=N/A)

N : 軸力, A : 断面積

$\sigma_{bz}$  : 部材 z 軸方向曲げ応力度 (=Mz/Zz)

Mz, Zz : 部材 z 軸回りモーメント及び断面係数

$\sigma_{by}$  : 部材 y 軸方向曲げ応力度 (=My/Zy)

My, Zy : 部材 y 軸回りモーメント及び断面係数

f<sub>c</sub> : 許容圧縮応力度

f<sub>b</sub> : 許容曲げ応力度

f<sub>t</sub> : 許容引張応力度

また、せん断力に対する検討は下式にて行う。

$$\frac{\sqrt{(\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by})^2 + 3\tau_z^2}}{f_t} \leq 1 \quad \text{かつ} \quad \frac{\sqrt{(\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by})^2 + 3\tau_y^2}}{f_t} \leq 1$$

ここで、

$\tau_z$  : 部材 z 軸方向せん断応力度 (=Qz/Awz)

Qz, Awz : 部材 z 軸方向せん断力及びせん断断面積

$\tau_y$  : 部材 y 軸方向せん断応力度 (=Qy/Awy)

Qy, Awy : 部材 y 軸方向せん断力及びせん断断面積

表 2.2.1-6 及び表 2.2.1-7 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。  
 断面検討の結果、全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 2.2.1-6 断面検討結果（常時）

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	荷重ケース (位置)*1	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
柱	1階 3-B	B□-3000×3000 ×28×28	C (A)	曲げ Mz	37.3	216.7	0.52	OK
				曲げ My	8.4			
				圧縮 N	65.1			
				せん断 Qz	0.8			
				せん断 Qy	8.9			
梁	5階 2-3/B	B□-3000×3000 ×28×28	C (A)	曲げ Mz	93.0	216.7	0.55	OK
				曲げ My	0.4			
				圧縮 N	19.2			
				せん断 Qz	0.4			
				せん断 Qy	20.1			

\*1：クレーンの位置を示す

表 2.2.1-7 断面検討結果（地震時）

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	荷重ケース (位置)*1	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
柱	1階 3-B	B□-3000×3000 ×28×28	E3 (A)	曲げ Mz	160.6	325.0	0.86	OK
				曲げ My	31.9			
				圧縮 N	79.5			
				せん断 Qz	7.9			
				せん断 Qy	37.1			
梁	5階 2-3/B	B□-3000×3000 ×28×28	E3 (A)	曲げ Mz	93.1	325.0	0.55	OK
				曲げ My	58.9			
				圧縮 N	20.0			
				せん断 Qz	8.3			
				せん断 Qy	20.5			

\*1：クレーンの位置を示す

### (3) 基礎スラブの構造強度に対する検討

#### 1) 解析モデル

基礎スラブの応力解析は、弾性地盤上に支持された版として有限要素法を用いて行い、解析モデルは図 2.2.1-5 に示すように四辺形の均質等方な板要素により構成し、支持地盤は等価な弾性ばねとしてモデル化する。

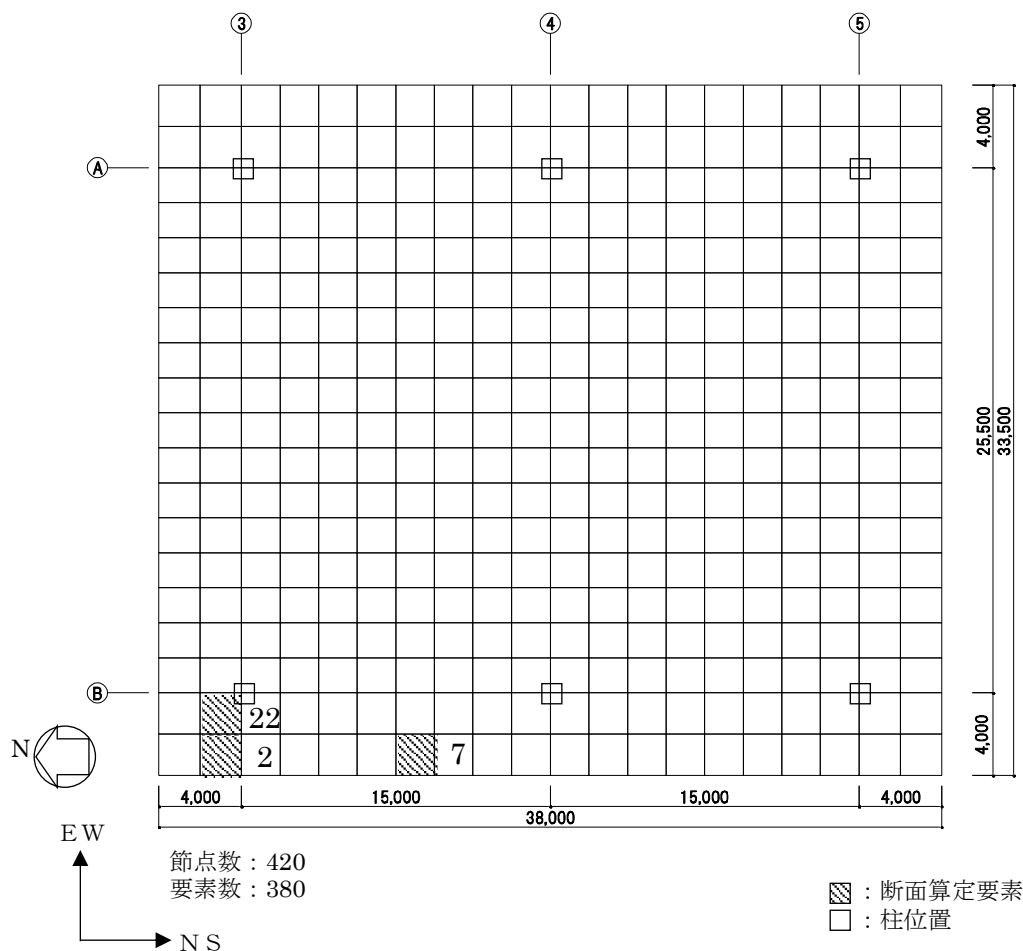


図 2.2.1-5 解析モデル図 (単位: mm)

#### 2) 断面検討

組合せた応力より、各要素の必要鉄筋比を「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」より求め、設計配筋が必要鉄筋比を上回ること及び面外せん断力が許容せん断力以下であることを確認する。必要鉄筋比が最大となる要素と設計面外せん断力と許容せん断力との比が最大になる要素の断面検討結果を表 2.2.1-8 に示し、必要鉄筋比が最大となる要素を含む EW 方向の配筋図を図 2.2.1-6 に示す。

断面検討の結果、設計配筋は必要鉄筋比を上回り、また面外せん断力は許容せん断力以下であることを確認した。

表 2.2.1-8 基礎スラブの断面算定表

要素 番号	方向	荷重 ケース (位置) <sup>*1</sup>	設計応力		N/(b・D) <sup>*2</sup> (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	M/(b・D <sup>2</sup> ) (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	P <sub>t</sub> (%)	a <sub>t</sub> (mm <sup>2</sup> /m)	設計配筋 上段：上端筋 [断面積 mm <sup>2</sup> /m] (pt:%) 下段：下端筋 [断面積 mm <sup>2</sup> /m] (pt:%)	荷重 ケース (位置) <sup>*1</sup>	設計面外 せん断力 Q (kN/m)	許容 せん断力 f <sub>s</sub> ・b・j (kN/m)	判定
			N <sup>*2</sup> (kN/m)	M (kN・m/m)									
2	NS	C(A)	-53	2397	-1.4	15.0	0.09	3600	D38@200+D38@400 [8550] (0.21)	C(C)	126	2627	OK
		E3(A)	-264	2643	-6.6	16.6	0.06	2400	D38@200+D38@400 [8550] (0.21)	E1(C)	215	3940	OK
	EW	C(A)	16	1589	0.4	10.0	0.06	2400	3-D38@200 [17100] (0.43) 2-D38@200 [11400]	C(A)	1583	2627	OK
		E3(A)	110	2111	2.8	13.2	0.03	1200	(0.29)	E3(A)	1925	3940	OK
7	NS	C(A)	47	3678	1.2	23.0	0.13	5200	D38@200+D38@400 [8550] (0.21)	C(C)	245	2627	OK
		E2(A)	29	3932	0.8	24.6	0.07	2800	1-D38@200 [5700] (0.14)	E2(C)	396	3940	OK
	EW	C(C)	-2	40	-0.1	0.3	0.00	0	1-D38@200 [5700] (0.14)	C(B)	135	2627	OK
		E4(A)	-26	112	-0.7	0.7	0.00	0	1-D38@200 [5700] (0.14)	E2(A)	154	3940	OK
22	NS	C(A)	13	2582	0.4	16.2	0.09	3600	D38@200+D38@400 [8550] (0.21)	C(C)	104	2627	OK
		E2(A)	239	4038	6.0	25.3	0.06	2400	D38@200+D38@400 [8550] (0.21)	E1(C)	541	3940	OK
	EW	C(A)	77	2818	2.0	17.7	0.10	4000	3-D38@200 [17100] (0.43) 2-D38@200 [11400]	C(C)	575	2627	OK
		E3(A)	470	4754	11.8	29.8	0.07	2800	(0.29)	E4(A)	1227	3940	OK

\*1： クレーンの位置を示す

\*2： 圧縮を正とする

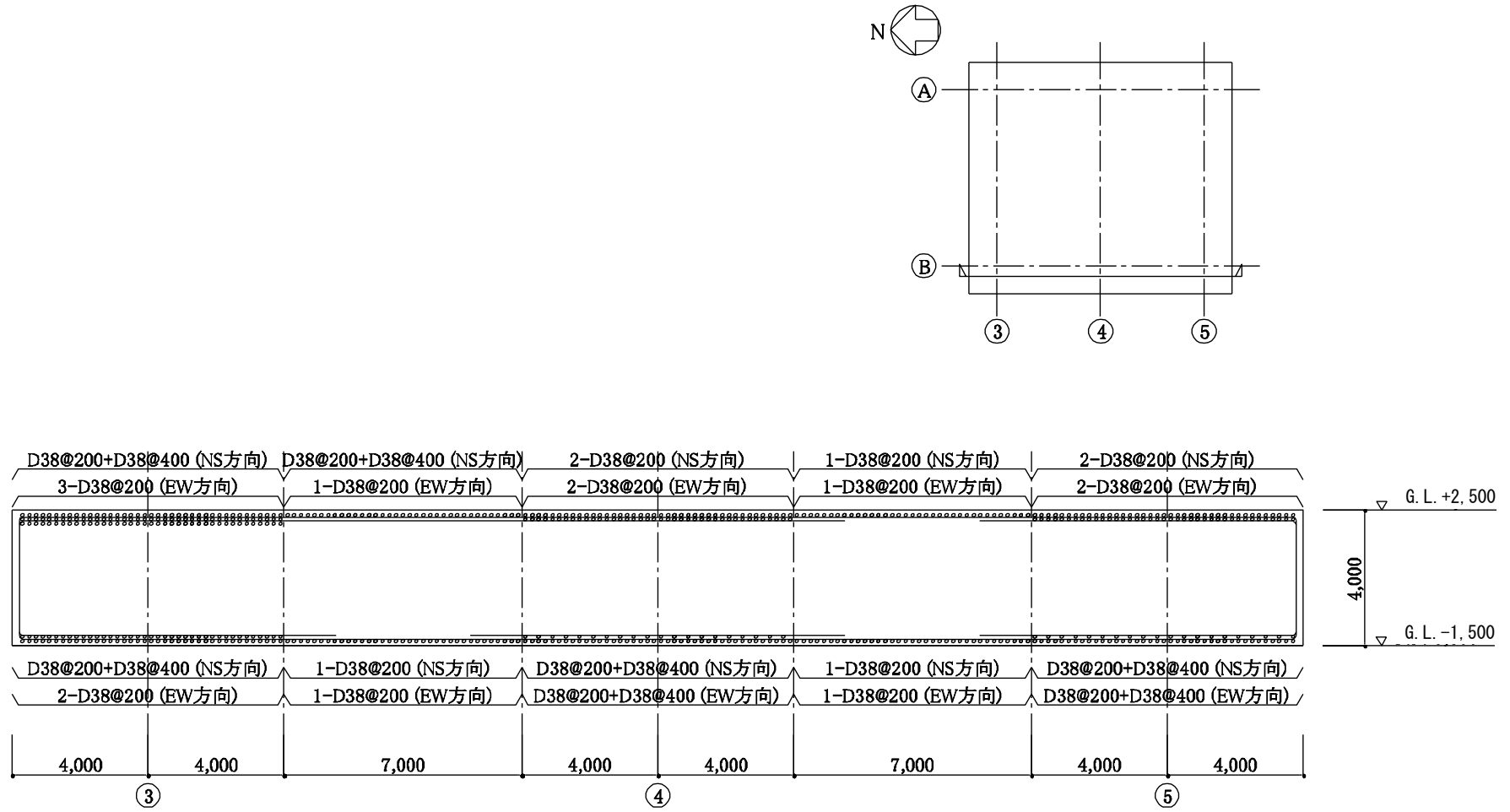


図 2.2.1-6 基礎スラブの配筋図 (B 通り) (単位 : mm)

#### (4) 改良地盤の構造強度に対する検討

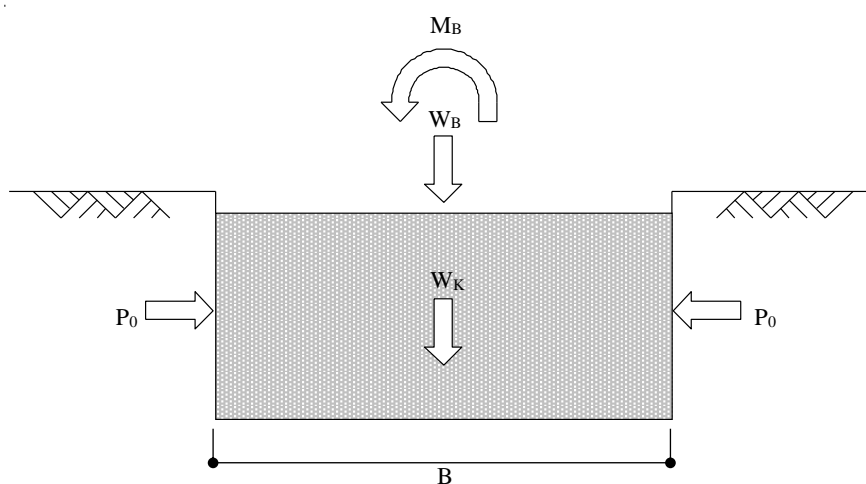
##### 1) 設計方針

クレーン支持用架構を支持する改良地盤は、基礎スラブ直下の地盤を南北方向に 38.0m、東西方向に 33.5m、改良厚さ 10.5m とし、G.L. -12.0m の泥岩に支持する。検討は「JEAC4616-2009」に準拠し、常時及び地震時の改良地盤に生じる最大応力が許容応力度以下であることを確認する。さらに、改良地盤直下の支持地盤の支持力に対して、常時及び地震時の改良地盤に生じる最大接地圧が許容支持力度以下であることを確認する。

##### 2) 常時に対する検討

###### ・改良地盤の検討

常時において、改良地盤底面に生じる最大接地圧が改良地盤の長期許容圧縮応力度以下であることを確認する。図 2.2.1-7 に作用荷重を示す。



$W_B$  : 架構荷重 + 基礎スラブ荷重 + 地盤アンカー荷重

$W_K$  : 改良地盤の自重

$M_B$  : 架構の偏心による転倒モーメント

$P_0$  : 長期設計用土圧

$B$  : 改良幅

図 2.2.1-7 作用荷重 (常時)

改良地盤の荷重負担範囲は、面積  $A=1273\text{m}^2$ 、断面係数  $Z=8062\text{m}^3$  となり、改良地盤底面に生じる最大接地圧は下式にて求める。

鉛直力の合計	$\Sigma W=W_B+W_K=607373\text{kN}$
転倒モーメントの合計	$\Sigma M=M_B=666480\text{kNm}$
改良地盤の最大接地圧	$q_r = \Sigma W/A + \Sigma M/Z = 560\text{kN/m}^2$

改良地盤に生じる最大接地圧 ( $q_r$ ) は、改良地盤の長期許容圧縮応力度 ( $Lf_{sc}$ ) 以下であることを確認した。

$$q_r = 560\text{kN/m}^2 \leq Lf_{sc} = 750\text{kN/m}^2$$

・支持力の検討

改良地盤底面に生じる最大接地圧 ( $q_r$ ) が、改良地盤直下の支持地盤の長期許容支持力度 ( $Lq_a$ ) 以下であることを確認した。

改良地盤の最大接地圧	$q_r = 560\text{kN/m}^2$
支持地盤の長期許容支持力度	$Lq_a = 1960\text{ kN/m}^2$

$$q_r = 560\text{kN/m}^2 \leq Lq_a = 1960\text{ kN/m}^2$$

・沈下の検討

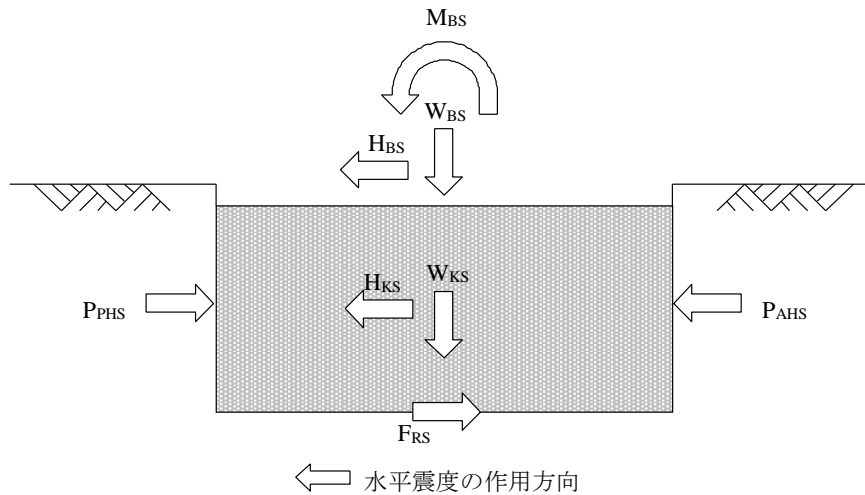
支持地盤は泥岩（岩盤）であるため、沈下の検討は不要である。



### 3) 地震時に対する検討

#### ・改良地盤の検討

地震時において、改良地盤底面の最大接地圧及びせん断応力が、改良地盤の短期許容応力度以下であることを確認する。図 2. 2. 1-8 に作用荷重を示す。



$W_{BS}$  : 架構荷重 + 基礎スラブ荷重 + 地盤アンカー荷重

$W_{KS}$  : 改良地盤の自重

$H_{BS}$  : 架構による水平力 + 基礎スラブによる水平力

$M_{BS}$  : 架構と基礎スラブによる改良地盤底面における転倒モーメント

$H_{KS}$  : 改良地盤の慣性力 (地中震度 0.15)

$P_{AHS}$  : 地震時主働土圧による水平力

$P_{PHS}$  : 地震時受働土圧による水平力

$F_{RS}$  : 支持地盤のせん断抵抗力

図 2. 2. 1-8 作用荷重 (地震時)

改良地盤の荷重負担範囲は、面積  $A=1273\text{m}^2$ 、断面係数  $Z=8062\text{m}^3$  となり、改良地盤底面の最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) 及び最大せん断応力 ( $\tau_{\max}$ ) は下式にて求める。

$$\begin{aligned} \text{鉛直力の合計} & \quad \Sigma W=W_{BS}+W_{KS}=607373\text{kN} \\ \text{水平力の合計} & \quad \Sigma H=H_{BS}+H_{KS}+P_{AHS}+P_{PHS}=94687\text{kN} \\ \text{転倒モーメントの合計} & \quad \Sigma M=M_{BS}+M_{KS}+M_{AHS}+M_{PHS}=1944139\text{kNm} \end{aligned}$$

ここに、

$$\begin{aligned} M_{KS} & : \text{改良地盤の転倒モーメント} \\ M_{AHS} & : \text{地震時主働土圧による転倒モーメント} \\ M_{PHS} & : \text{地震時受働土圧による転倒モーメント} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{改良地盤底面の最大接地圧} & \quad q_{1S} = \Sigma W/A + \Sigma M/Z = 719\text{kN/m}^2 \\ \text{改良地盤底面の最大せん断応力} & \quad \tau_{\max} = 1.2 \times \Sigma H/A = 90\text{kN/m}^2 \end{aligned}$$

改良地盤底面の最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) 及び最大せん断応力 ( $\tau_{\max}$ ) は短期許容応力度 ( $sf_{sc}$  及び  $sf_{ss}$ ) 以下であることを確認した。

$$\begin{aligned} q_{1S} = 719\text{kN/m}^2 & \leq sf_{sc} = 1502\text{ kN/m}^2 \\ \tau_{\max} = 90\text{kN/m}^2 & \leq sf_{ss} = 229\text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

・支持力の検討

改良地盤底面に生じる最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) が、改良地盤直下の支持地盤の短期許容支持力度 ( $sq_a$ ) 以下であることを確認した。

$$\begin{aligned} \text{改良地盤の最大接地圧} & \quad q_{1S} = 719\text{kN/m}^2 \\ \text{支持地盤の短期許容支持力度} & \quad sq_a = 3920\text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

$$q_{1S} = 719\text{kN/m}^2 \leq sq_a = 3920\text{ kN/m}^2$$

(5) 外装材の構造強度に対する検討

1) 設計方針

クレーン支持用架構の屋根面及び側面を覆う外装材は、鋼板パネルを用いる。設計荷重は暴風時の影響が支配的であることから積雪時及び地震時の検討は省略し、暴風時の応力が短期許容応力度以下になることを確認する。なお、許容応力度は製造メーカーの推奨値を、屋根面のたわみは「鋼板製屋根構法標準 (SSR2007)」(社団法人日本金属屋根協会, 2007), 壁面のたわみは「建築工事標準仕様書・同解説 JASS14 カーテンウォール工事」に準じて設定した。

2) 設計用荷重

設計用風圧力は、建築基準法施行令第 82 条の 4 および建設省告示第 1458 号に基づき、基準風速 30m/s, 地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 2.2.1-9 に、ピーク風力係数を表 2.2.1-10 に、風力係数の算定箇所を図 2.2.1-9 に示す。

表 2.2.1-9 速度圧の算定結果

建物高さ*	平均風速の鉛直分布係数	基準風速	平均速度圧
H (m)	Er	Vo (m/s)	$\bar{q}$ (N/m <sup>2</sup> )
52.73	1.28	30	885

\*: 建物高さは、軒高さ (52.34m) と最高高さ (53.12m) の平均値とした

表 2.2.1-10 ピーク風力係数

建物高さ* H (m)	屋根面			壁面	
	一般部	周縁部	隅角部	一般部	隅角部
52.73	-2.5	-3.2	-4.3	-2.11	-2.62

\*: 建物高さは、軒高さ (52.34m) と最高高さ (53.12m) の平均値とした

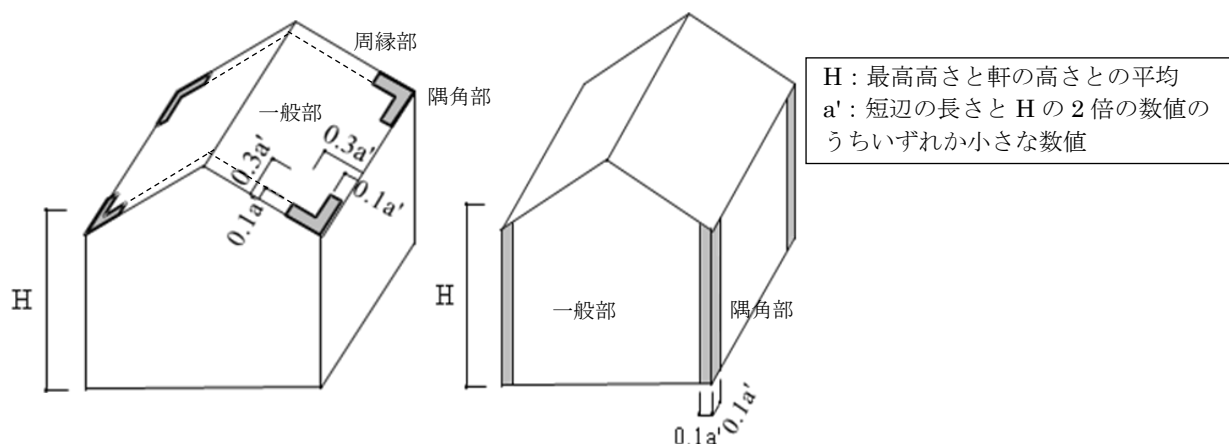


図 2.2.1-9 風力係数の算定箇所のイメージ

3) 外装材の強度検討

検討は応力が厳しくなる図 2. 2. 1-9 に示す隅角部について行う。ここでは、鋼板パネルの自重は考慮しないものとする。

a. 屋根材

鋼板パネルは下地材の間隔が 1.8m で連続支持されているものとし、暴風時の応力度とたわみに対して検討を行う。屋根材の材料諸元を表 2. 2. 1-11 に示す。

表 2. 2. 1-11 屋根材の材料諸元

表面材						芯材		
ヤング 係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	せん断 弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	せん断 断面積 As (mm <sup>2</sup> )	形状係数	許容 応力度 f <sub>b</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	断面係数 Z (mm <sup>3</sup> )	せん断 弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	断面積 A (mm <sup>2</sup> )	形状係数
2.06×10 <sup>5</sup>	7.92×10 <sup>4</sup>	210.7	0.022	59.8	26.3×10 <sup>3</sup>	3.92	4.40×10 <sup>4</sup>	1.2

・応力度に対する検討

$$M = w \times L^2 / 8 = (0.885 \times 4.3) \times 1.8^2 / 8 = 1.542 \text{ kNm}$$

$$\sigma_b = M / Z = 1.542 \times 10^6 / 26.3 \times 10^3 = 58.7 \text{ N/mm}^2$$

$$\frac{\sigma_b}{f_b} = \frac{58.7}{59.8} = 0.982 \leq 1.0 \quad \dots \text{OK}$$

・たわみの検討

たわみ量は曲げ変形成分 (δ<sub>M</sub>) とせん断変形成分 (δ<sub>Q</sub>) の和で評価し、屋根材の短期許容変形 (1/300) \*以下であることを確認する。

\*:「鋼板製屋根構法標準 (SSR2007)」(社団法人日本金属屋根協会, 2007) による

$$\delta = \delta_M + \delta_Q = 0.220 + 0.302 = 0.522 \text{ cm}$$

$$\frac{\delta}{L} = \frac{0.522}{180} = \frac{1}{344} \leq \frac{1}{300} \quad \dots \text{OK}$$

検討の結果、作用応力は屋根材の短期許容応力度以下であり、たわみは屋根材の短期許容変形以下であることを確認した。

b. 壁材

鋼板パネルは下地材の間隔が 1.2m で連続支持されているものとし、暴風時の応力とたわみに対して検討を行う。壁材の材料諸元を表 2. 2. 1-12 に示す。

表 2. 2. 1-12 壁材の材料諸元

表面材				芯材		
ヤング 係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	せん断 弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	許容 応力度 f <sub>b</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	断面係数 Z (mm <sup>3</sup> )	せん断 弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	断面積 A (mm <sup>2</sup> )	形状係数
2.06×10 <sup>5</sup>	7.92×10 <sup>4</sup>	58.8	17.0×10 <sup>3</sup>	4.90	35000	1.2

・応力度に対する検討

$$M = w \times L^2 / 8 = (0.885 \times 2.62) \times 1.2^2 / 8 = 0.418 \text{ kNm}$$

$$\sigma_b = M / Z = 0.418 \times 10^6 / 17.0 \times 10^3 = 24.6 \text{ N/mm}^2$$

$$\frac{\sigma_b}{f_b} = \frac{24.6}{58.8} = 0.419 \leq 1.0 \quad \dots \text{OK}$$

・たわみの検討

たわみ量は曲げ変形成分 (δ<sub>M</sub>) とせん断変形成分 (δ<sub>Q</sub>) の和で評価し、壁材の短期許容変形 (1/300) \*以下であることを確認する。

\*:「建築工事標準仕様書・同解説 JASS14 カーテンウォール工事」による

$$\delta = \delta_M + \delta_Q = 0.075 + 0.293 = 0.368 \text{ cm}$$

$$\frac{\delta}{L} = \frac{0.368}{120} = \frac{1}{326} \leq \frac{1}{300} \quad \dots \text{OK}$$

検討の結果、作用応力は壁材の短期許容応力度以下であり、たわみは壁材の短期許容変形以下であることを確認した。

## 2.2.2 耐震性

### (1) 検討方針

耐震性の検討は、クレーン支持用架構、基礎スラブ、改良地盤及び地盤アンカーについて行い、基準地震動  $S_s$  に対して、クレーン支持用架構、基礎スラブ、改良地盤及び周辺地盤の応答性状を適切に表現できる地震応答解析モデルを設定して実施する。

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 1) 解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」(平成 20 年 3 月 31 日 東京電力株式会社)にて作成した解放基盤表面で定義される基準地震動  $S_s$  とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 2.2.2-1 に示す。モデルに入力する地震動は一次元波動論に基づき、解放基盤表面で定義される基準地震動  $S_s$  に対する地盤の応答として評価する。解放基盤表面位置における基準地震動  $S_s-1$ ,  $S_s-2$  及び  $S_s-3$  の加速度時刻歴波形を図 2.2.2-2(1) 及び図 2.2.2-2(2) に示す。

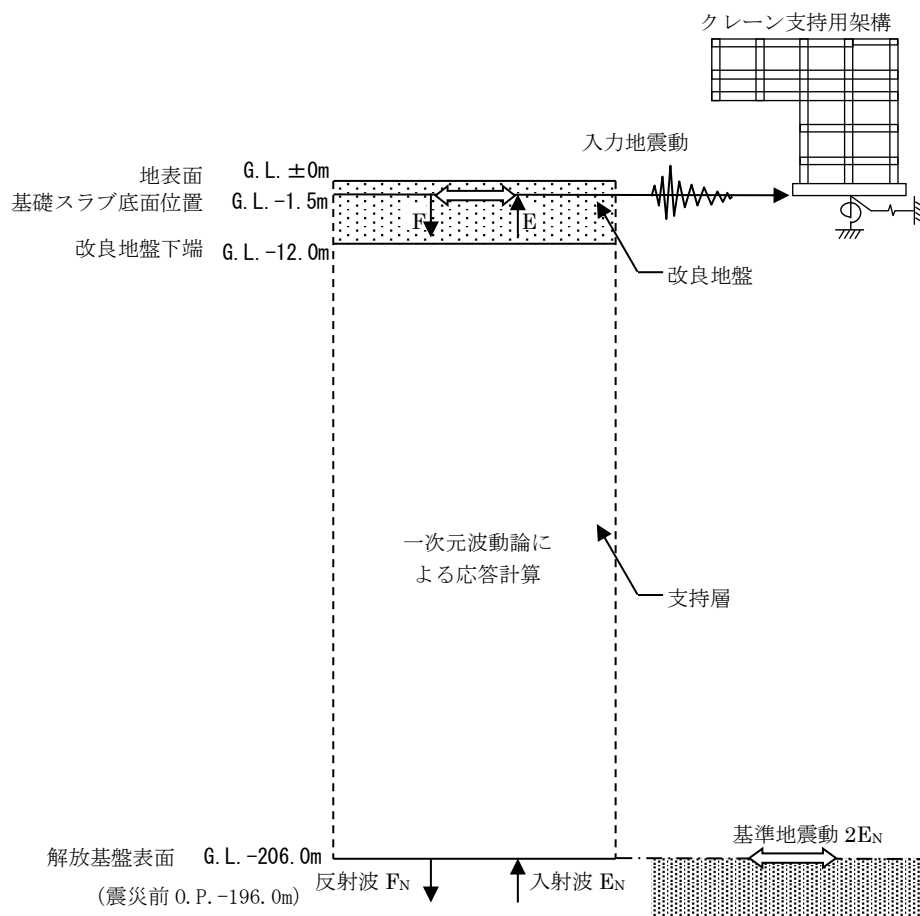
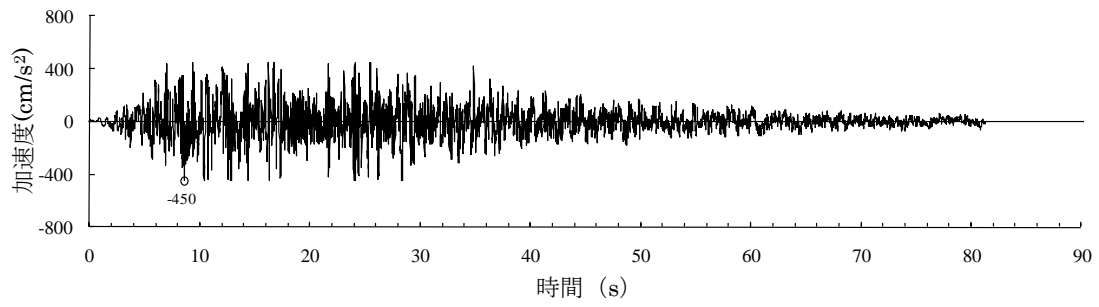
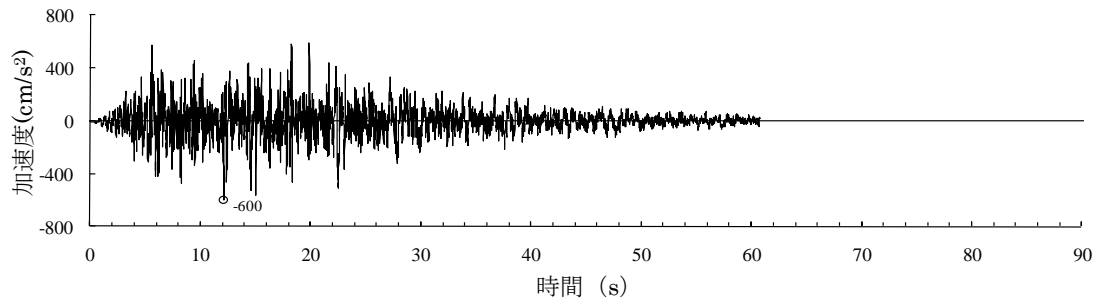


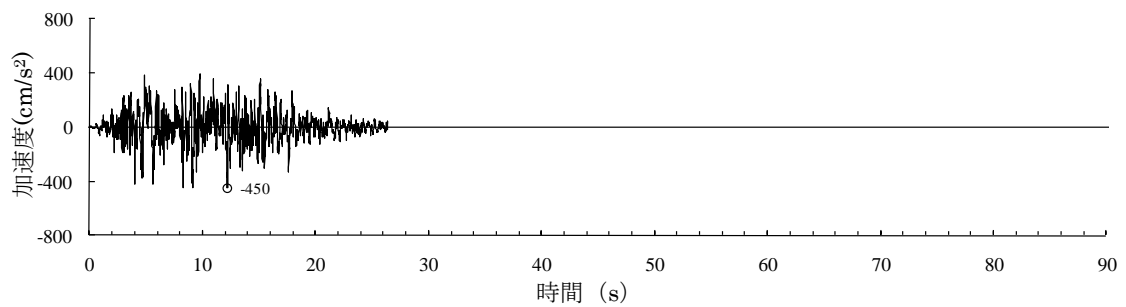
図 2.2.2-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図



(Ss-1H)



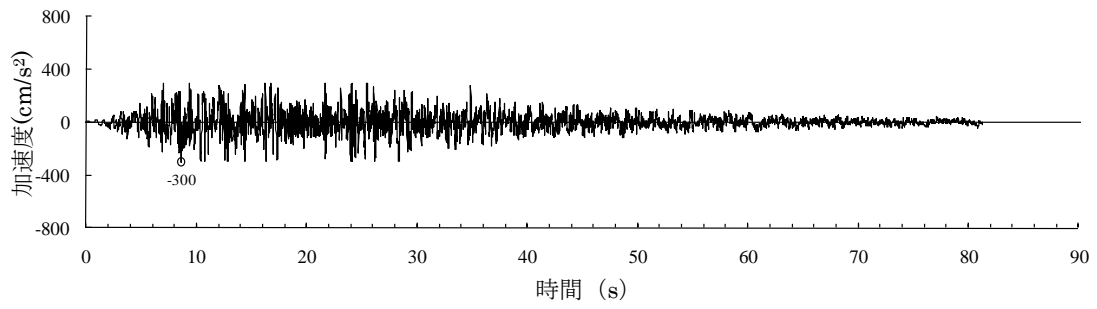
(Ss-2H)



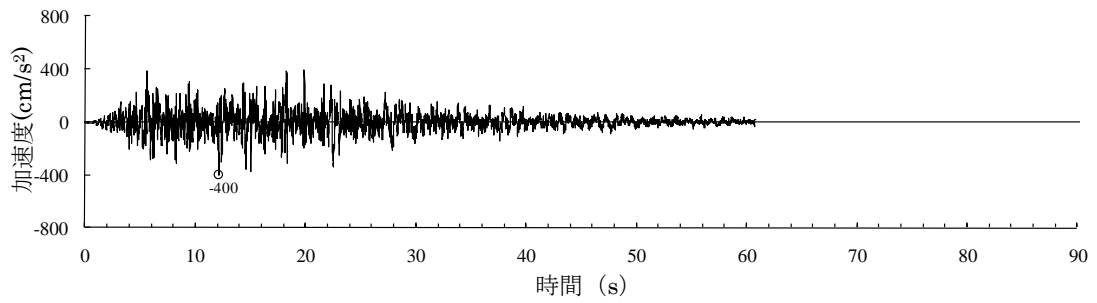
(Ss-3H)

○印は最大値を示す

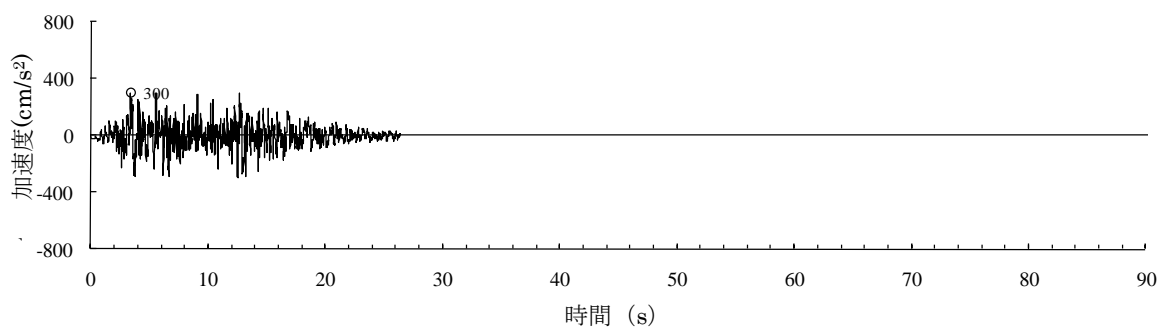
図 2. 2. 2-2(1) 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(水平方向)



(Ss-1V)



(Ss-2V)



(Ss-3V)

○印は最大値を示す

図 2.2.2-2(2) 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(鉛直方向)



## 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルは、図 2.2.2-3 に示す柱及び梁を立体的にモデル化した立体架構モデルとし、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。

地震応答解析に用いる物性値を表 2.2.2-1 に、層間変形角が最大となるクレーンを北端に設置した場合の地震応答解析モデルの質点重量を表 2.2.2-2 に、クレーン支持用架構の復元力特性の設定を図 2.2.2-4 に示す。復元力特性の設定は「鋼構造塑性設計指針」に準じた。

地震応答解析に用いる地盤定数は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」(平成 20 年 3 月 31 日 東京電力株式会社)を参考に、水平成層地盤と仮定し地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定めた。改良地盤の諸元を表 2.2.2-3 に、地盤のひずみ依存性を図 2.2.2-5 に、地盤定数の設定結果を表 2.2.2-4 に示す。基礎底面の地盤ばねについては、「JEAG 4601-1991」に示されている手法を参考にして、地盤を成層補正し振動アドミタンス理論により評価した。

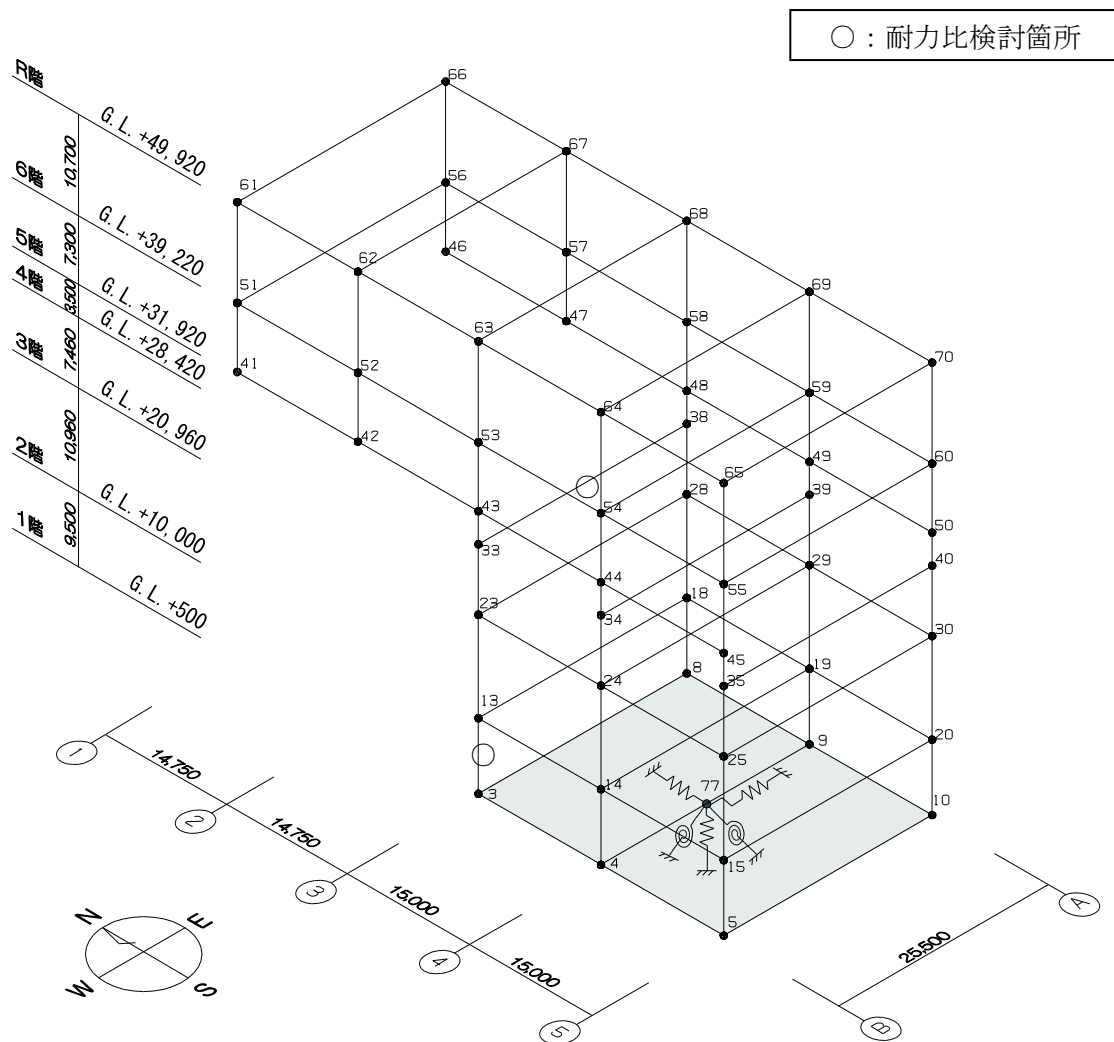


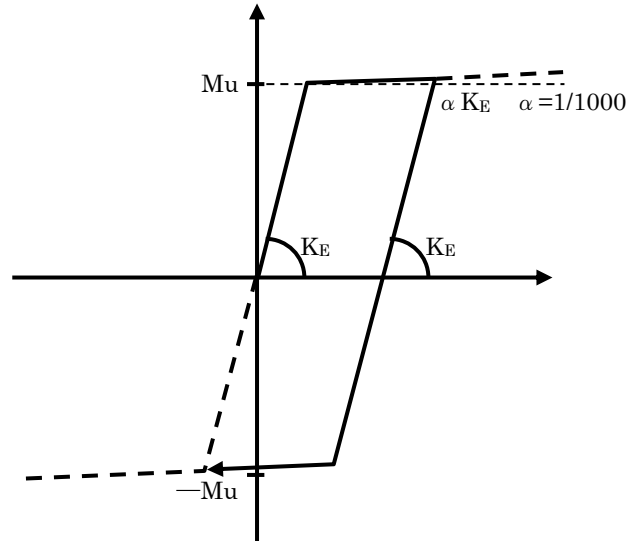
図 2.2.2-3 クレーン支持用架構の地震応答解析モデル (単位: mm)

表 2.2.2-1 地震応答解析に用いる物性値

部位	材料	ヤング係数 E(N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	減衰定数 h (%)	備考
クレーン支 持用架構	鉄骨	2.05×10 <sup>5</sup>	0.3	77.0	2	SM490A
基礎スラブ	コンクリート	2.44×10 <sup>4</sup>	0.2	24.0	5	設計基準強度 30(N/mm <sup>2</sup> )

表 2.2.2-2 地震応答解析モデルにおける質点重量

階	節点番号	重量(kN)	階	節点番号	重量(kN)	
R	61	1129	4	33	2235	
	62	1221		34	2135	
	63	1225		35	374	
	64	1200		38	2176	
	65	502		39	1726	
	66	1132		40	374	
	6	67	1225	3	23	897
		68	1229		24	1647
		69	1202		25	635
		70	503		28	819
5		51	2152	2	29	1178
		52	1894		30	607
		53	1094	1	13	1044
		54	1567		14	1722
		55	718		15	700
		56	1629		18	920
	57	1538	19		1315	
	58	1094	20		689	
	5	59	1375	合計	3	26894
		60	718		4	41540
41		393	5		21558	
42		600	8		26896	
43		657	9		41034	
44		598	10		21268	
45		321	77		0	
46		377				
47		605				
48		700				
49	622					
50	321					



ここに,

Mu : 全塑性モーメント

$$M_{uy} = \left\{ A_{fy}(b-t_1)\sigma_y + \frac{1}{4}A_{wy}(b-2t_1)\sigma_y \right\} \quad M_{uz} = \left\{ A_{fz}(d-t_2)\sigma_y + \frac{1}{4}A_{wz}(d-2t_2)\sigma_y \right\}$$

$$A_{fy} = d \cdot t_1$$

$$A_{fz} = b \cdot t_2$$

$$A_{wy} = 2 \cdot (b - 2 \cdot t_1) \cdot t_2$$

$$A_{wz} = 2 \cdot (d - 2 \cdot t_2) \cdot t_1$$

$$A = b \cdot d - (b - 2 \cdot t_1) \cdot (d - 2 \cdot t_2) \quad \sigma_y : \text{降伏強度}$$

なお, せん断耐力は下式とする。

Qu : せん断耐力

$$Q_{uy} = \frac{1}{\sqrt{3}} A_{wz} \cdot \sigma_y \quad Q_{uz} = \frac{1}{\sqrt{3}} A_{wy} \cdot \sigma_y$$

$$A_{fy} = d \cdot t_1$$

$$A_{fz} = b \cdot t_2$$

$$A_{wy} = 2 \cdot (b - 2 \cdot t_1) \cdot t_2$$

$$A_{wz} = 2 \cdot (d - 2 \cdot t_2) \cdot t_1$$

$$A = b \cdot d - (b - 2 \cdot t_1) \cdot (d - 2 \cdot t_2) \quad \sigma_y : \text{降伏強度}$$

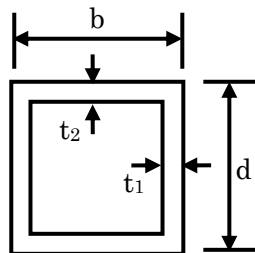


図 2.2.2-4 クレーン支持用架構の復元力特性の設定

表 2. 2. 2-3 改良地盤の諸元

せん断波速度* Vs (m/s)	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン比* $\nu$	初期せん断弾性係数 Go ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )
800	17.7	0.31	11.52

\* : 『柏崎刈羽原子力発電所 1 号機 建物・構築物の耐震安全性評価について (指摘事項に関する回答)』 (平成 22 年 2 月 19 日 東京電力株式会社), 総合資源エネルギー調査会原子力安全・保安部会耐震・構造設計小委員会構造 WG (第 46 回) 会合資料

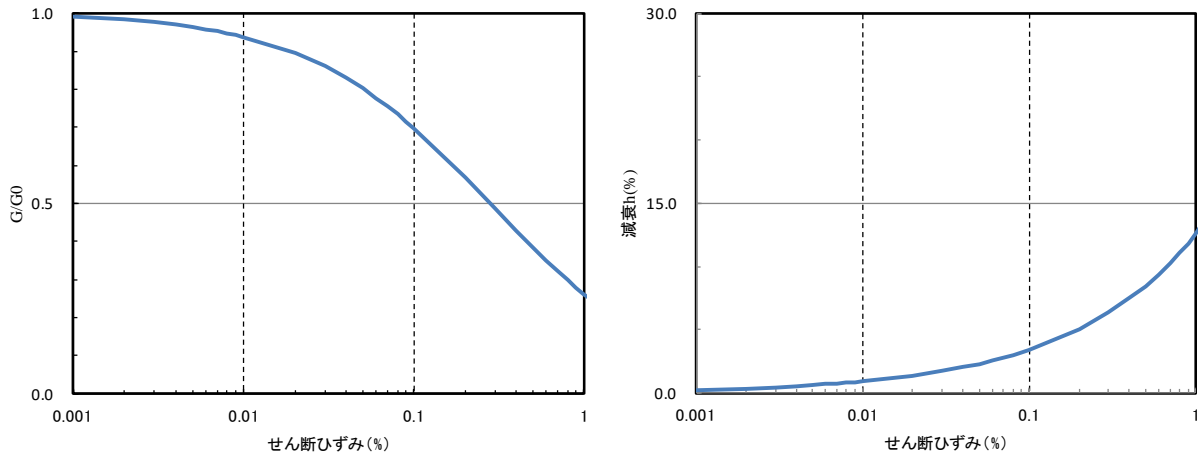


図 2. 2. 2-5 地盤のひずみ依存性 (泥岩)\*

\* : 『福島第一原子力発電所 3 号機「新耐震指針に照らした耐震安全性評価 (中間報告)」に関する補足説明資料 (コメント回答資料) -建物・構築物-』 (平成 22 年 6 月 29 日 東京電力株式会社), 総合資源エネルギー調査会原子力安全・保安部会耐震・構造設計小委員会構造 WG (第 26 回) A サブグループ会合資料

表 2. 2. 2-4 地盤定数の設定結果

(a) Ss-1

G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	改良地盤	800	17.7	0.310	11.43	11.52	0.99	29.94	2	12.0
-12.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.97	3.41	0.87	8.70	3	8.0
-20.0		500	17.1	0.455	3.59	4.36	0.82	10.44	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.60	5.63	0.82	13.31	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.29	6.53	0.81	15.25	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

(b) Ss-2

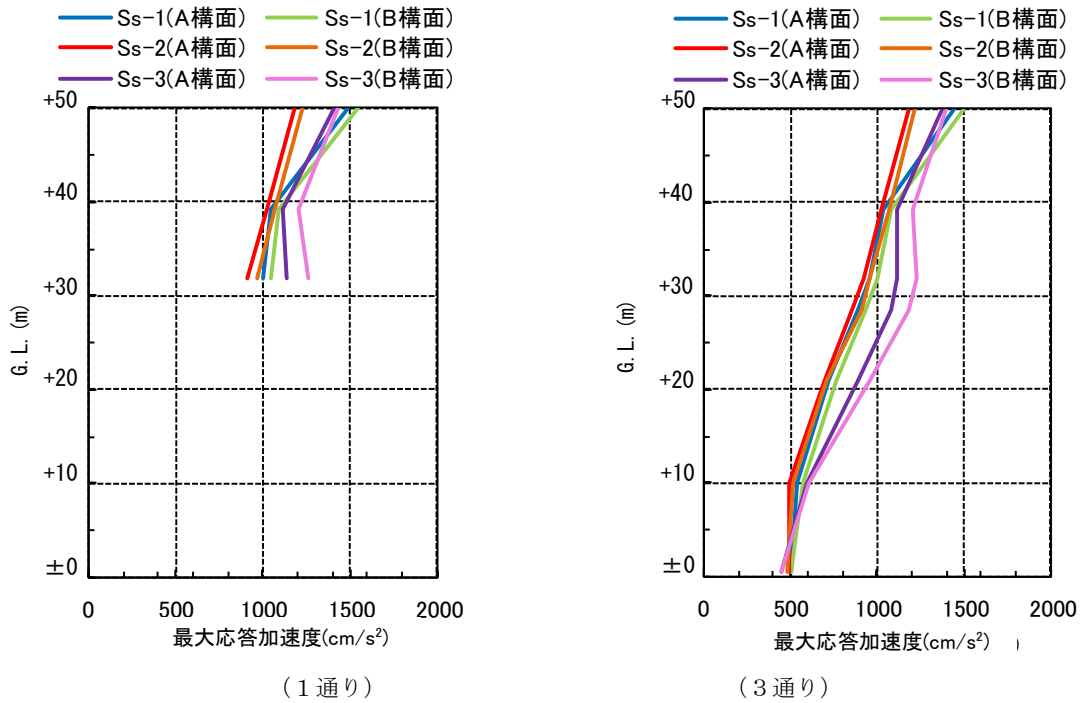
G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	改良地盤	800	17.7	0.310	11.43	11.52	0.99	29.94	2	12.0
-12.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.98	3.41	0.87	8.72	3	8.0
-20.0		500	17.1	0.455	3.59	4.36	0.82	10.45	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.62	5.63	0.82	13.36	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.50	6.53	0.84	15.85	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

(c) Ss-3

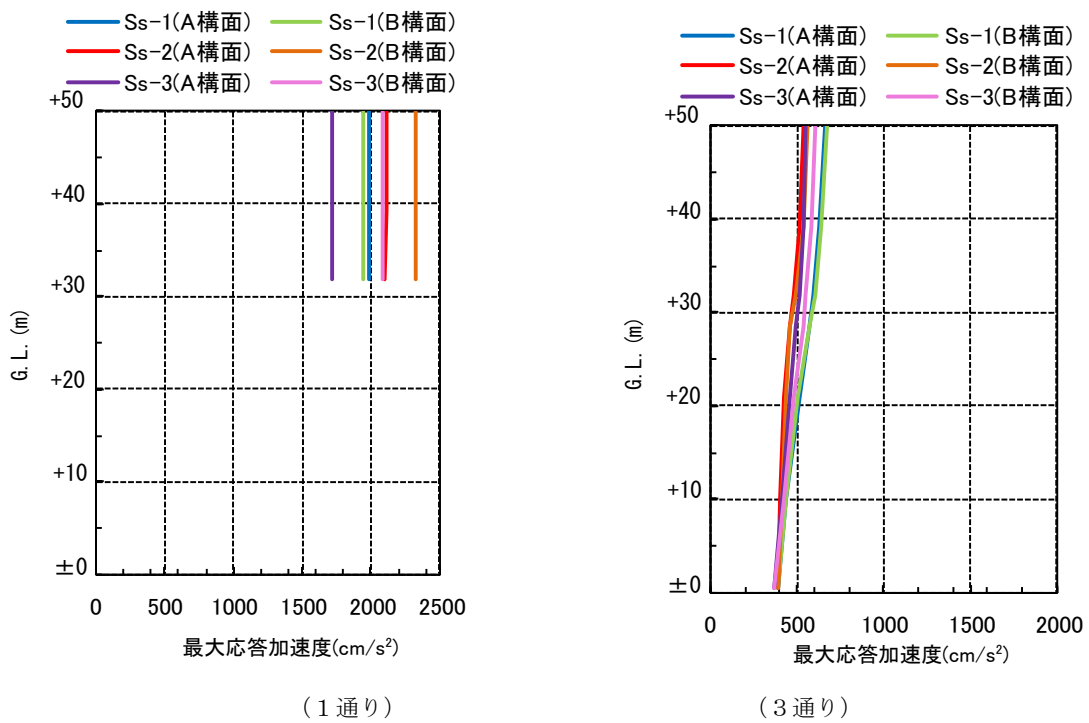
G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	改良地盤	800	17.7	0.310	11.44	11.52	0.99	29.98	2	12.0
-12.0	泥岩	450	16.5	0.464	3.00	3.41	0.88	8.79	3	8.0
-20.0		500	17.1	0.455	3.53	4.36	0.81	10.27	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.52	5.63	0.80	13.07	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	4.97	6.53	0.76	14.34	3	88.0
-206.0	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

### 3) 地震応答解析結果

地震応答解析は水平方向と鉛直方向を同時入力した。最大応答加速度を図 2. 2. 2-6 及び図 2. 2. 2-7 に示す。

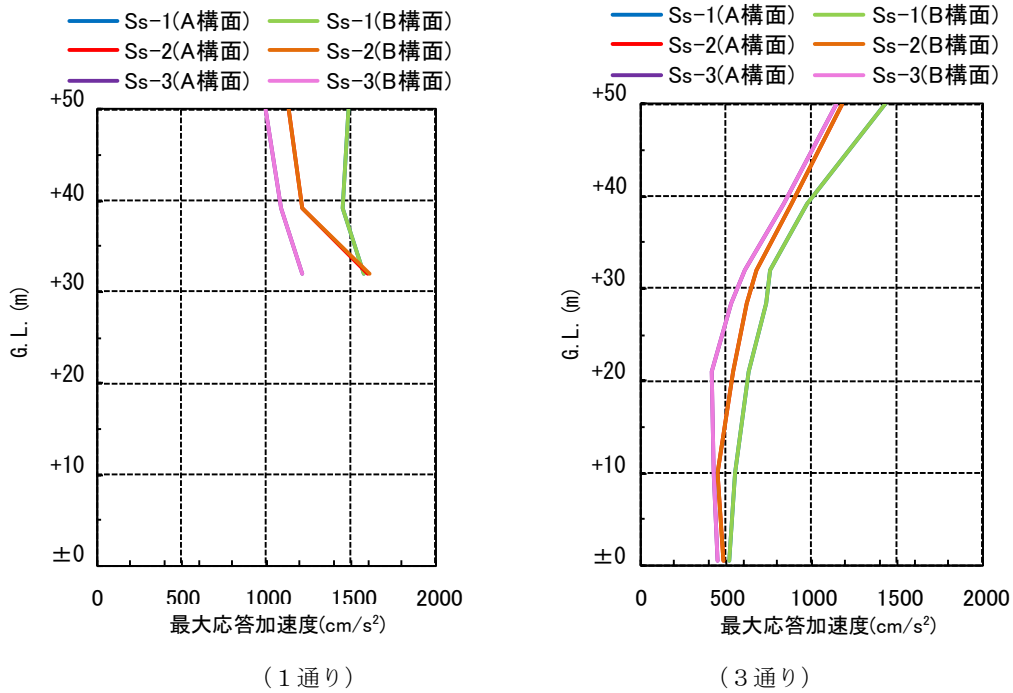


(a) 最大応答加速度 (水平(NS)成分)

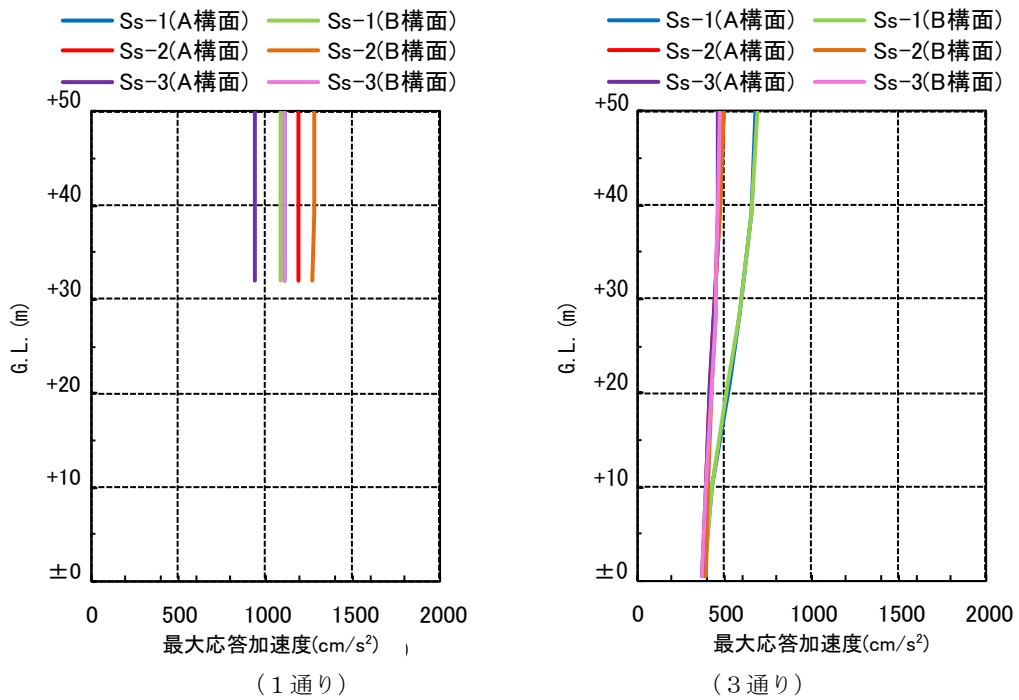


(b) 最大応答加速度 (鉛直成分)

図 2. 2. 2-6 最大応答加速度 (NS 方向入力時)



(a) 最大応答加速度 (水平(EW)成分)



(b) 最大応答加速度 (鉛直成分)

図 2. 2. 2-7 最大応答加速度 (EW 方向入力時)

#### 4) 波及的影響の評価

地震応答解析結果が、JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会，2002 年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は 1/75 以下，層の塑性率は 4 以下，部材の塑性率は 5 以下」\*1 及びせん断力はせん断耐力以下）を満足することを確認する。

なお，解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター，平成 19 年 7 月 20 日）に示されるクライテリア（層間変形角は 1/100 以下，層の塑性率は 2 以下，部材の塑性率は 4 以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し，安全性を確認する。

\*1：北村春幸，宮内洋二，浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」，日本建築学会構造系論文集，第 604 号，2006 年 6 月

#### ・ 層間変形角の検討

層間変形の評価はクレーン支持用架構の剛心位置で評価し，表 2.2.2-5 に検討結果を示す。

検討の結果，層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 2.2.2-5 層間変形角の検討結果

検討箇所	最大応答値						クライテリア	判定
	NS 方向入力時			EW 方向入力時				
	Ss-1	Ss-2	Ss-3	Ss-1	Ss-2	Ss-3		
6 階	1/256	1/278	1/229	1/298	1/356	1/352	1/75	OK
5 階	1/240	1/266	1/220	1/239	1/295	1/288	1/75	OK
4 階	1/228	1/249	1/225	1/207	1/243	1/252	1/75	OK
3 階	1/194	1/205	1/199	1/196	1/233	1/237	1/75	OK
2 階	1/206	1/211	1/194	1/187	1/224	1/229	1/75	OK
1 階	1/357	1/359	1/317	1/329	1/397	1/409	1/75	OK



・塑性率の検討

部材の塑性率は、最大応答曲げモーメント時の曲率を全塑性モーメントに至る時の曲率で除した値で表される。最大曲げモーメントが全塑性モーメント以下の場合は弾性であり塑性率は1以下となる。最大応答値を全塑性モーメントまたはせん断耐力で除した値を耐力比と定義し、表 2.2.2-6 に検討結果を示す。

表 2.2.2-6 より曲げモーメント及びせん断力については、全てのケースで耐力比が1を下回ることから塑性率は1以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

表 2.2.2-6 耐力比の検討結果

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	地震波	入力方向	耐力比		判定		
柱	1階 3-B	B□-3000×3000 ×28×28	Ss-1	EW	$M_z/M_{uz}$	0.85	OK		
					Ss-3	NS		$M_y/M_{uy}$	0.86
					Ss-3	NS		$Q_z/Q_{uz}$	0.27
					Ss-1	EW		$Q_y/Q_{uy}$	0.37
梁	4階 3/A-B	B□-3000×3000 ×25×25	Ss-1	EW	$M_z/M_{uz}$	0.80	OK		
					$M_y/M_{uy}$	0.01			
					$Q_z/Q_{uz}$	0.00			
					$Q_y/Q_{uy}$	0.32			

$M_z$  : 部材 z 軸回りの曲げモーメントの最大値

$M_y$  : 部材 y 軸回りの曲げモーメントの最大値

$Q_z$  : 部材 z 方向のせん断力の最大値

$Q_y$  : 部材 y 方向のせん断力の最大値

$M_{uz}$  : 部材 z 軸回りの全塑性モーメント

$M_{uy}$  : 部材 y 軸回りの全塑性モーメント

$Q_{uz}$  : 部材 z 軸方向のせん断耐力

$Q_{uy}$  : 部材 y 軸方向のせん断耐力

(3) 基礎スラブの耐震性に対する検討

1) 解析モデル

基礎スラブの応力解析は、弾性地盤上に支持された版として有限要素法を用いて行う。解析モデルは、図 2.2.2-8 に示すように四辺形の均質等方な板要素により構成し、支持地盤は等価な弾性ばねとしてモデル化する。

検討は組合せ係数法にて行い、荷重組合せケースを表 2.2.2-7 に示す。

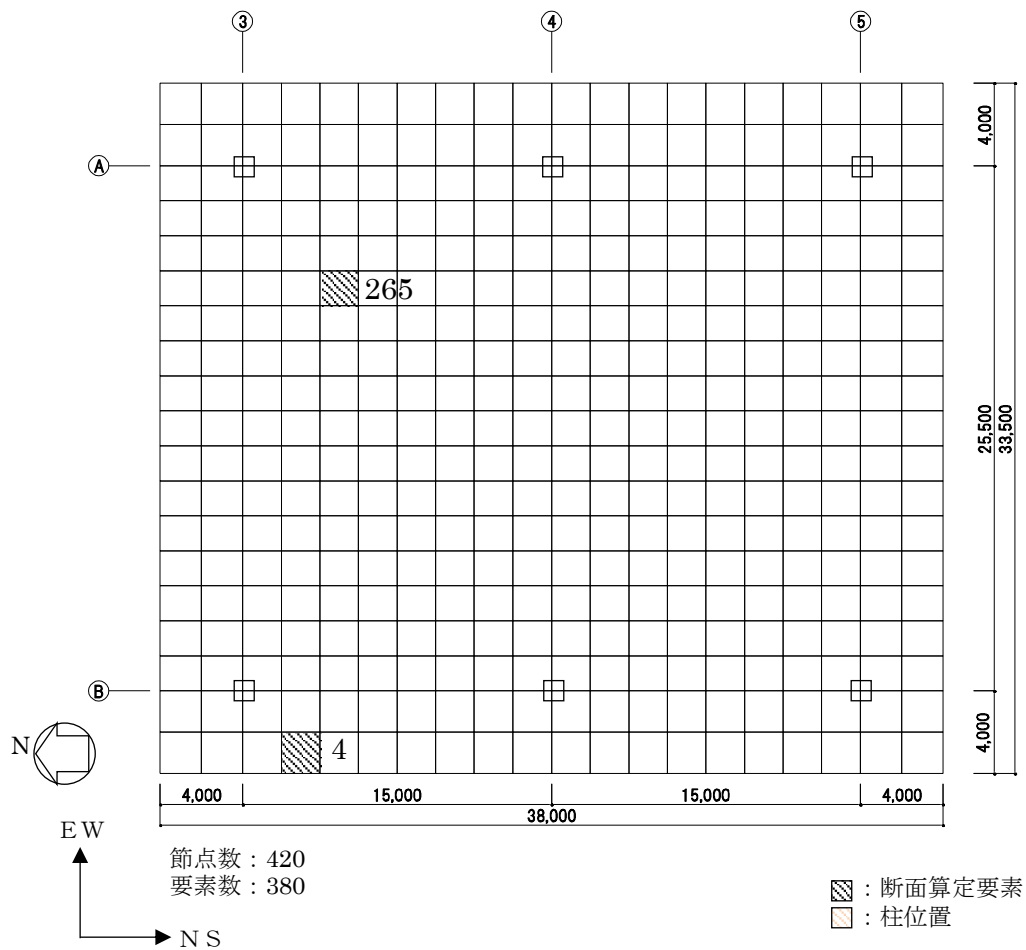


図 2.2.2-8 解析モデル図 (単位：mm)

表 2.2.2-7 荷重組合せケース一覧表

荷重ケース	地震力の作用方向					
	鉛直方向		水平方向			
	上向き	下向き	N→S	S→N	E→W	W→E
Dn		○	○			
Ds		○		○		
De		○			○	
Dw		○				○
Un	○		○			
Us	○			○		
Ue	○				○	
Uw	○					○

## 2) 断面検討

各要素に対して、検討用応力が部材の終局耐力を下回ることを確認する。曲げ終局強度及びせん断終局強度の算定は、「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」による柱の終局強度算定式に準拠する。なお、鉄筋の引張強度は、平成 12 年建設省告示第 2464 号に定められた基準強度の 1.1 倍を用いる。検討用曲げモーメントを曲げ終局強度で除した値が最大となる箇所及び検討用せん断力をせん断終局強度で除した値が最大となる箇所の基礎スラブの断面検討結果を表 2.2.2-8 に示す。

断面検討の結果、検討用曲げモーメントは曲げ終局強度を下回り、検討用せん断力はせん断終局強度を下回ることを確認した。

表 2.2.2-8 基礎スラブの断面検討結果

要素 番号	方向	荷重 ケース	検討用応力			設計配筋 上段：上端筋 [断面積 mm <sup>2</sup> /m] (pt:%) 下段：下端筋 [断面積 mm <sup>2</sup> /m] (pt:%)	部材の終局強度		M/M <sub>u</sub>	Q/Q <sub>u</sub>	判定
			N*1 (kN/m)	M (kN・m/m)	Q (kN/m)		M <sub>u</sub> (kN・m/m)	Q <sub>u</sub> (kN/m)			
4	NS	D e	129	1317	3958	D 38@200+D 38@400 [8550] (0.21) D 38@200+D 38@400 [8550] (0.21)	11995	6778	0.11	0.59	OK
	EW	D e	61	1415	1507	3-D 38@200 [17100] (0.43) 2-D 38@200 [11400] (0.29)	15772	7294	0.09	0.21	OK
265	NS	D s	24	3316	52	1-D 38@200 [5700] (0.14) 1-D 38@200 [5700] (0.14)	7873	2215	0.43	0.03	OK
	EW	D w	-349	4927	76	1-D 38@200 [5700] (0.14) 1-D 38@200 [5700] (0.14)	7267	2184	0.68	0.04	OK

\*1：圧縮を正とする

#### (4) 改良地盤の耐震性に対する検討

##### 1) 検討方針

検討は「JEAC 4616-2009」に準拠し、基準地震動  $S_s$  により発生する荷重に対して許容限界を満足することを確認する。改良地盤の許容限界は、改良地盤の設計圧縮強度、せん断抵抗に対する安全率に基づき設定する。支持地盤の許容限界は、支持地盤の極限支持力に対する安全率に基づき設定する。

##### 2) 地震応答解析モデル

応力算定用の地震応答解析モデルを図 2.2.2-9 に示す。改良地盤及び支持地盤の物性は表 2.2.2-4 を用いた。

周辺地盤の物性は、一次元波動論であらかじめ実施した等価線形解析結果をもとに改良地盤及び周辺地盤のひずみレベルに応じた等価なせん断剛性、減衰を設定した。

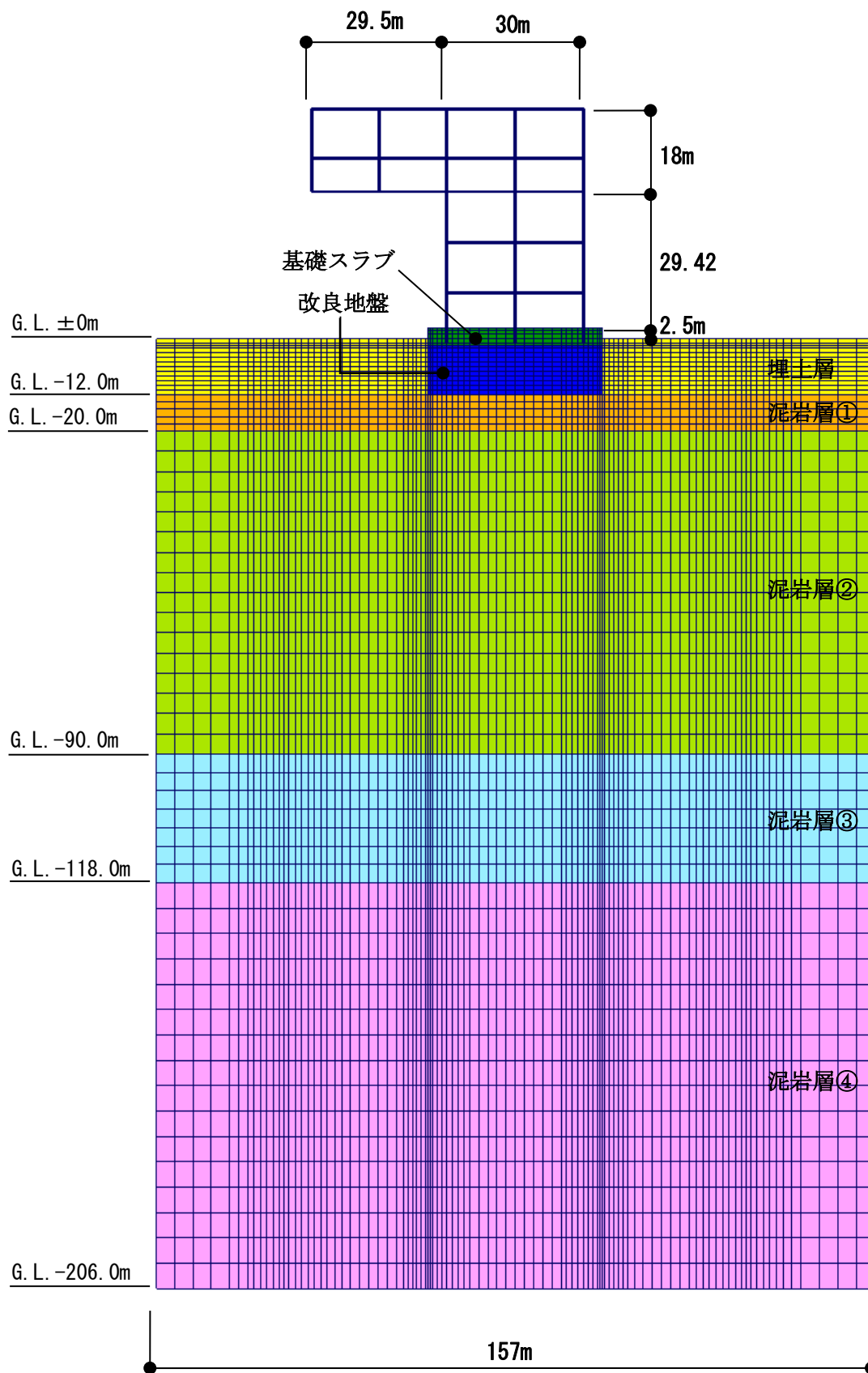


図 2.2.2-9 応力算定用地震応答解析モデル

3) 波及的影響の評価

改良地盤の評価は、「JEAC 4616-2009」に準じ、改良地盤に発生する最大応力が許容値に対して1.5以上の安全率を有していることを確認する。

・改良地盤に生じる鉛直応力に対する検討

改良地盤に作用する鉛直応力に対し改良地盤の圧縮強度の安全率が1.5以上であることを下式により確認する。

$$\frac{ssfsc}{\sigma_{y\max}} \geq 1.5$$

ここで、

ssfsc : 改良地盤の圧縮強度

$\sigma_{y\max}$  : 有限要素解析による各要素の鉛直応力の最大値

改良地盤の圧縮強度(ssfsc)は、「JEAC 4616-2009」により改良地盤の圧縮強度の平均値である設計圧縮強度 4498kN/m<sup>2</sup> (断面欠損 2%を考慮する) を改良地盤の圧縮強度として検討を行う。

安全率の検討結果を表 2.2.2-9 に示す。検討結果より改良地盤の圧縮強度は改良地盤の基礎スラブ直下における最大鉛直応力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。

表 2.2.2-9 改良地盤の鉛直応力に対する検討結果  
(改良地盤底部)

地震波	最大鉛直応力 $\sigma_{y\max}$ (kN/m <sup>2</sup> )	圧縮強度 ssfsc(kN/m <sup>2</sup> )	安全率	クライテリア	判定
Ss-1	1809	4498	2.48	1.50	OK
Ss-2	1453	4498	3.09	1.50	OK
Ss-3	1821	4498	2.47	1.50	OK

・改良地盤に作用するせん断力に対する検討

検討は、改良地盤の基礎スラブ直下及び改良地盤下端のせん断力について行う。改良地盤上端及び下端にせん断面を想定し、各時刻 (t) における改良地盤に作用する水平方向せん断力  $F_H(t)$  と改良地盤の水平抵抗力  $F_R(t)$  を評価し、そのせん断に対する安全率  $F_S(t)$  が 1.5 以上であることを下式により確認する。

$$F_S(t) = \frac{F_R(t)}{F_H(t)} \geq 1.5$$

$$F_R(t) = \sum_i F_{R_i}(t) = \sum_i \tau_{Ri}(t) \cdot l_i$$

$$F_H(t) = \sum_i F_{H_i}(t) = \sum_i \tau_{Si}(t) \cdot l_i$$

- ここで、
- $F_S(t)$  : せん断に対する安全率
  - $F_R(t)$  : せん断面上の地盤の水平抵抗力 (kN)
  - $F_H(t)$  : せん断面上の地盤のせん断力 (kN)
  - $\tau_{Ri}(t)$  : せん断面の解析モデル要素 i のせん断抵抗力 (kN/m<sup>2</sup>)  
 $\tau_{Ri}(t)$  は上載圧による強度増加は無視して設定し、せん断強度  $ssf_{ss}$  を用いる。なお、せん断破壊及び鉛直方向応力が引張状態になった地盤要素は評価しない
  - $\tau_{Si}(t)$  : せん断面の解析モデル要素 i に作用するせん断応力 (kN/m<sup>2</sup>)
  - $l_i$  : 解析モデル要素 i を横切るせん断面の長さ(要素 i の長さ) (m)
  - $ssf_{ss}$  : 改良地盤のせん断強度 (kN/m<sup>2</sup>)

改良地盤のせん断強度 ( $ssf_{ss}$ ) は下式より設定する。

$$ssf_{ss} = \frac{1}{5} ssf_{sc}$$

- ここで、  $ssf_{ss}$  : 688kN/m<sup>2</sup> (断面欠損 25%を考慮する)



安全率の検討結果を表 2.2.2-10 及び表 2.2.2-11 に示す。

検討結果より改良地盤の水平抵抗力は、改良地盤の基礎スラブ直下及び改良地盤下端の最大せん断力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。なお、解析は二次元でモデル化しているため、単位長さ当りのせん断力及び水平抵抗力で検討する。

表 2.2.2-10 改良地盤のせん断力に対する検討  
(基礎スラブ下端)

地震波	最大せん断力 F <sub>H</sub> (kN/m)	水平抵抗力 F <sub>R</sub> (kN/m)	安全率 F <sub>s</sub>	クォイテリア	判定
Ss-1	3635	21156	5.82	1.50	OK
Ss-2	3052	22188	7.26	1.50	OK
Ss-3	3548	20640	5.81	1.50	OK

表 2.2.2-11 改良地盤のせん断力に対する検討  
(改良地盤底部)

地震波	最大せん断力 F <sub>H</sub> (kN/m)	水平抵抗力 F <sub>R</sub> (kN/m)	安全率 F <sub>s</sub>	クォイテリア	判定
Ss-1	7741	24080	3.11	1.50	OK
Ss-2	7481	24424	3.26	1.50	OK
Ss-3	6494	24080	3.70	1.50	OK

#### 4) 支持力の検討

支持力の評価は、改良地盤底部における最大鉛直応力が支持地盤の極限支持力度に対して 1.5 以上の安全率を有していることを確認する。

$$\frac{R_u}{V} \geq 1.5$$

ここで、  
R<sub>u</sub> : 極限鉛直支持力度  
V : 地震応答解析から得られる最大鉛直応力

検討の結果、支持地盤の極限支持力度 (6860kN/m<sup>2</sup>) \*は改良地盤底部における最大鉛直応力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。

\*:「福島第一原子力発電所 原子炉設置変更許可申請書 (4号炉増設)」による

$$6860\text{kN/m}^2 / 1821\text{kN/m}^2 = 3.76 \geq 1.50 \dots \text{OK}$$

(5) 地盤アンカーの耐震性に対する検討

1) 検討方針

地盤アンカーは、図 2.2.2-10 に示すように基礎スラブ上端を緊張端とし、泥岩層 G.L. -17.0m 以深を定着長部としている。地盤アンカーの検討は基準地震動  $S_s$  時に自由長部に発生する応力が規格降伏耐力以下及び定着長部の設計定着長が必要定着長以上であることを確認する。検討は、旧建築基準法第 38 条の規定に基づく認定工法「STK 永久アンカー工法」（建設省阪住指発第 353 号，平成 8 年 10 月 16 日）における設計マニュアルに基づき実施する。

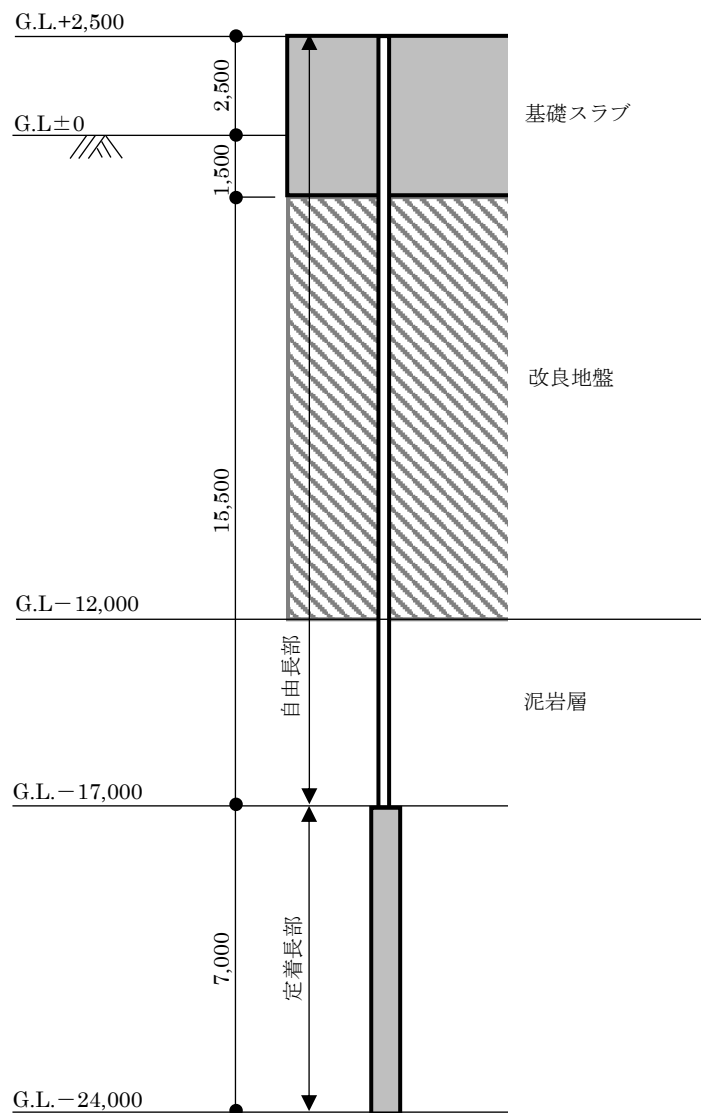


図 2.2.2-10 地盤アンカー設置計画 (単位：mm)

2) 地盤アンカーの検討

・自由長部の検討

地盤アンカーに発生する応力と規格降伏耐力を比較した結果を表 2.2.2-12 に示す。地盤アンカーは STK-200 (SWPR19 4-φ 21.8)を用いる。

検討の結果、耐力比が 1 以下になることを確認した。

表 2.2.2-12 自由長部の検討結果

発生応力 $T_{max}$ (kN/本)	規格降伏耐力 $T_{ys}$ (kN/本)	耐力比 $T_{max}/T_{ys}$	判定
1590	1981	0.81	OK

・定着長部の検討

定着長部の検討は、地盤アンカーの規格降伏耐力と地盤の極限摩擦抵抗力から求める必要定着長が、設計定着長を下回ることを確認する。結果を表 2.2.2-13 に示す。

検討の結果、検定比が 1 以下になることを確認した。

$$L_a = \frac{T_{ys} \times F}{\tau_u \times \pi \times D_d}$$

ここで、

$L_a$  : 必要定着長 (cm)

$T_{ys}$  : 地盤アンカーの規格降伏耐力 (1981kN)

$F$  : 安全率 (=1.0)

$\tau_u$  : 地盤の極限摩擦抵抗力 (N/cm<sup>2</sup>) (137N/cm<sup>2</sup>) \*

\*: 旧建築基準法第 38 条の規定に基づく認定工法「STK 永久アンカー工法」(建設省阪住指発第 353 号, 平成 8 年 10 月 16 日), 設計マニュアルより N 値 50 以上の泥岩の値

$D_d$  : 地盤アンカー体の設計径 (17cm)

表 2.2.2-13 定着長の検討結果

必要定着長 $L_a$ (cm)	設計定着長 $L_d$ (cm)	検定比 $L_a/L_d$	判定
271	700	0.39	OK

## 2.3 燃料取扱機支持用架構の構造強度及び耐震性について

燃料取扱機支持用架構の構造強度及び耐震性の検討フローを図 2.3-1 に示す。

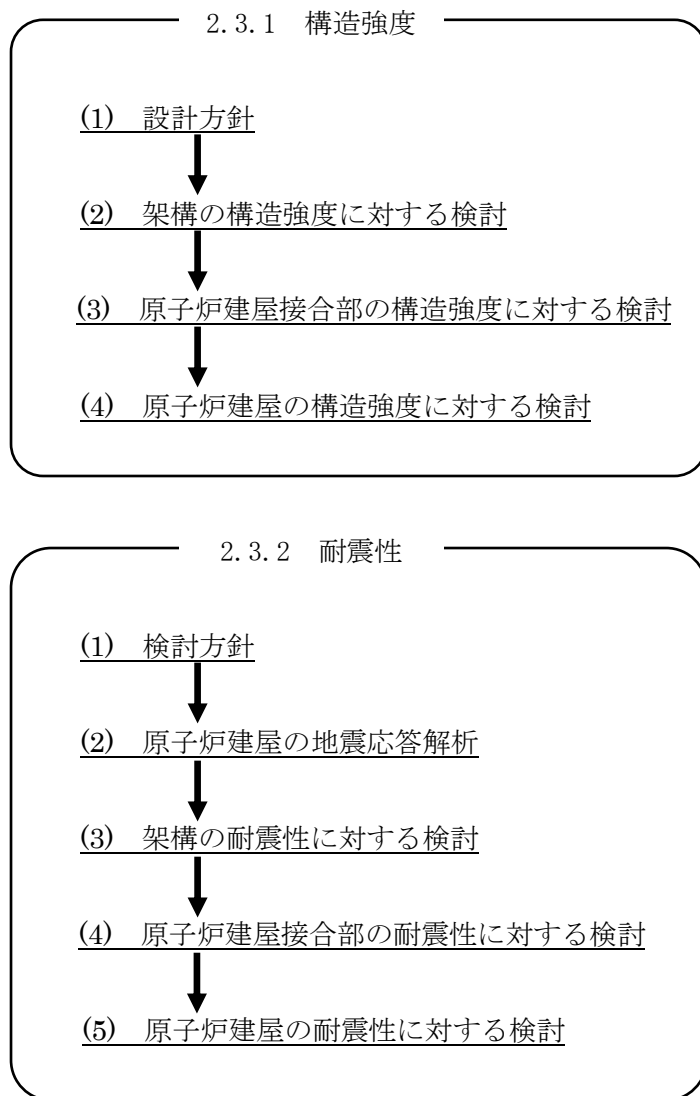


図 2.3-1 燃料取扱機支持用架構の検討フロー

## 2.3.1 構造強度

### (1) 設計方針

構造強度の検討は、燃料取扱機支持用架構、原子炉建屋接合部及び架構反力が作用する原子炉建屋について許容応力度設計を実施する。

#### 1) 使用材料及び許容応力度

燃料取扱機支持用架構の物性値及び許容応力度を表 2.3.1-1 に示す。

表 2.3.1-1 燃料取扱機支持用架構の物性値及び許容応力度

材料定数				
部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 ν	単位体積重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )
架 構	鉄骨	2.05×10 <sup>5</sup>	0.3	77.0
基礎構造	コンクリート	2.44×10 <sup>4</sup>	0.2	24.0

コンクリートの許容応力度 (単位: N/mm <sup>2</sup> )						
設計基準強度= 30	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
	10.0	—	0.790	20.0	—	1.185

鉄筋の許容応力度 (単位: N/mm <sup>2</sup> )					
記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD345	D29 未満	215	195	345	345
	D29 以上	195			

構造用鋼材の許容応力度 (単位: N/mm <sup>2</sup> )			
板厚	材料	基準強度 F	許容応力度
T ≤ 40 mm	SS400	235	「鋼構造設計規準」に従い、左記 F の値より求める
T ≤ 40 mm	SM490A	325	
T > 40 mm	TMCP325B*, TMCP325C*	325	
—	BCP325	325	
—	BCR295	295	
—	SNR490B	325	

\* : 国土交通大臣指定書 (国住指第 326-2, 平成 14 年 5 月 7 日) による

2) 荷重及び荷重組合せ

設計で考慮する荷重を以下に示す。

・鉛直荷重 (VL)

燃料取扱機支持用架構に作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重及び積載荷重とする。

・クレーン荷重 (CL)

吊荷荷重を含む燃料取扱機による荷重を表 2.3.1-2 に示す。

表 2.3.1-2 クレーン荷重一覧表

燃料取扱機	735 kN
作業台車	196 kN

・地震荷重 (K)

燃料取扱機支持用架構に作用させる地震荷重は、G.L.-12.06m（原子炉建屋基礎スラブ上端レベル）を基準面とした原子炉建屋の地震層せん断力係数の算定結果より設定する。原子炉建屋の地震層せん断力係数は下式より算定し、算定結果を表 2.3.1-4 に示す。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_o$$

ここで、

$Q_i$  : 水平地震力 (kN)

$n$  : 施設の重要度に応じた係数 ( $n=1.5$ )

建築基準法で定める地震力の 1.5 倍を考慮する。

$C_i$  : 地震層せん断力係数

$W_i$  : 当該部分が支える重量 (kN)

ここに、燃料取扱機支持用架構の設計で考慮する原子炉建屋の全体重量は、瓦礫撤去の効果と燃料取扱機支持用架構を新規に設置する影響を考慮した。原子炉建屋の全体重量を表 2.3.1-3 に示す。

表 2.3.1-3 原子炉建屋の全体重量(kN)

原子炉建屋全体重量*1	1078100
瓦礫撤去による軽減重量	-39810
燃料取扱機支持用架構の付加重量	+6490
燃料取扱機支持用架構設計用原子炉建屋全体重量	1044780

\*1 「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書(その1)」(平成23年5月28日 東京電力株式会社)にて用いた原子炉建屋重量(1069320kN)に使用済燃料プール底部の支持構造物の設置工事による重量(8780kN)を加算したもの

Z : 地震地域係数 (Z=1.0)

Rt : 振動特性係数 (Rt=0.8)

Ai : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、燃料取扱機支持用架構の固有値を用いたモーダル法 (二乗和平方根法) により求める。

C0 : 標準せん断力係数 (C0=0.2)

表 2.3.1-4 原子炉建屋の地震層せん断力係数の算定結果

階	G.L. (m)	各階重量 (kN)	Wi (kN)	Ai		n・Ci	
				NS 方向	EW 方向	NS 方向	EW 方向
5	+29.92	77700	—	—	—	—	—
4	+29.92~+22.30	88770	77700	2.070	2.218	0.497	0.533
3	+22.30~+16.90	122210	166470	1.787	1.831	0.429	0.440
2	+16.90~+8.70	127700	288680	1.520	1.549	0.365	0.372
1	+8.70~+0.20	208960	416380	1.309	1.315	0.314	0.316
B1	+0.20~-12.06	—	625340	1.000	1.000	0.240	0.240

燃料取扱機支持用架構に作用させる水平震度は、原子炉建屋 4 階の NS 方向地震層せん断力係数 ( $n \cdot Ci=0.497$ ) 及び EW 方向地震層せん断力係数 ( $n \cdot Ci=0.533$ ) より、水平震度を  $Ki=n \cdot Ci$  として水平地震力を設定する。表 2.3.1-5 に燃料取扱機支持用架構に作用させる水平地震力の算定結果を示す。

表 2.3.1-5 水平地震力の算定結果

G.L. (m)	各階重量 (kN)	NS 方向		EW 方向	
		水平震度 Ki	水平地震力 Pi (kN)	水平震度 Ki	水平地震力 Pi (kN)
+30.77	2487	0.497	1236	0.533	1326
+20.485	298	0.497	148	0.533	159
+10.20	188	0.497	93	0.533	100

ここに、燃料取扱機支持用架構は鉄骨造で剛性が小さく、原子炉建屋は壁式鉄筋コンクリート造で剛性が非常に高いことから、燃料取扱機支持用架構の変形量に対して原子炉建屋の変形量は非常に小さく、地震時の原子炉建屋の変形が燃料取扱機支持用架構に及ぼす影響は考慮しないものとした。

・荷重組合せ

設計で考慮する燃料取扱機の位置を図 2.3.1-1 に、荷重組合せを表 2.3.1-6 に示す。なお、燃料取扱機支持用架構はクレーン支持用架構に覆われているため、積雪時及び暴風時は考慮しないものとした。

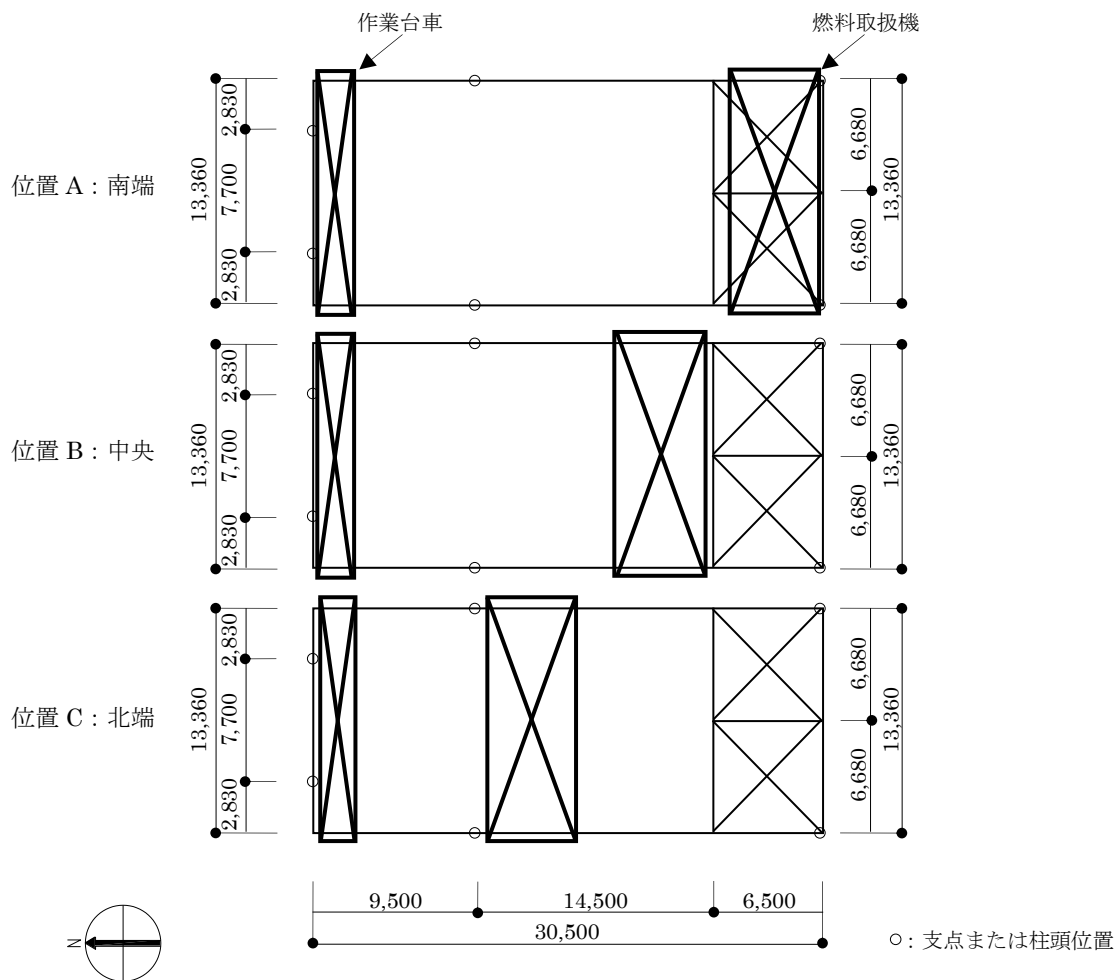


図 2.3.1-1 燃料取扱機の位置 (単位 : mm)

表 2.3.1-6 燃料取扱機支持用架構の荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL+CL	長期
地震時	E1	VL+CL+K(+NS)*1	短期
	E2	VL+CL+K(-NS)*1	
	E3	VL+CL+K(+EW)*1	
	E4	VL+CL+K(-EW)*1	

\*1 : 地震荷重は NS 方向及び EW 方向を考慮する



(2) 架構の構造強度に対する検討

1) 解析モデル

燃料取扱機支持用架構の解析モデルは、G.L.+8.70m より上部を立体架構モデルとし、柱及び梁端部の境界条件は剛接、原子炉建屋シェル壁上端はピン及び原子炉建屋南側外壁の柱脚部は固定とする。解析モデル、部材寸法及び応力検討箇所を図 2.3.1-2 に示す。

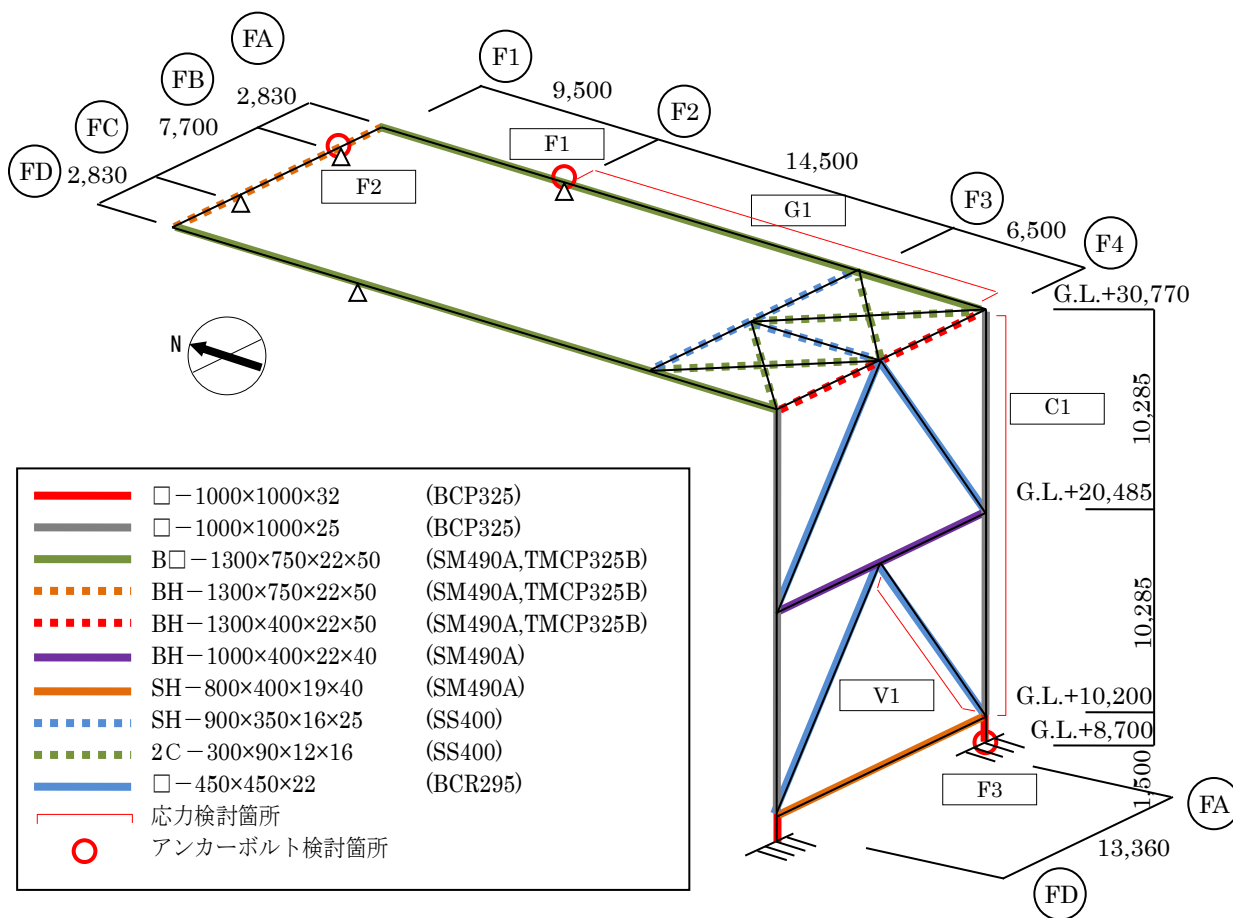


図 2.3.1-2 解析モデル図 (単位: mm)

## 2) 断面検討

応力解析結果を用い、断面検討は二方向の曲げを図 2.3.1-3 に示すように考慮する。

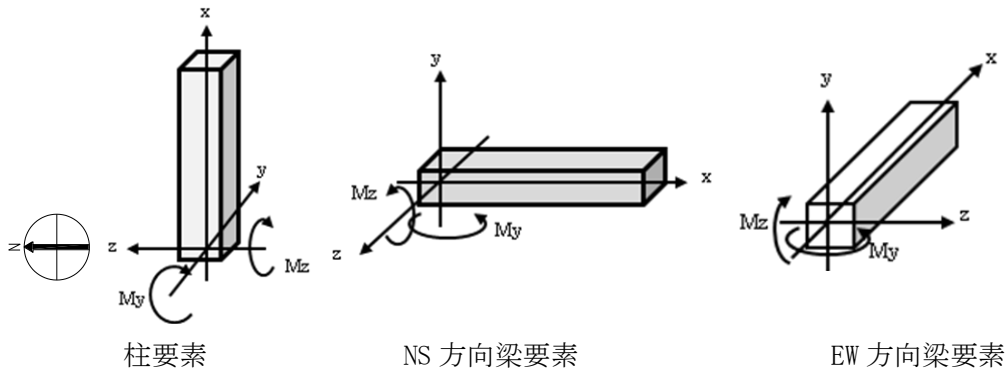


図 2.3.1-3 曲げモーメントの方向

応力度比の検討は「鋼構造設計規準」に従い、軸力及び曲げモーメントに対する検討は下式にて行う。

・ 軸圧縮の場合 
$$\frac{\sigma_c}{f_c} + \frac{\sigma_{bz} + \sigma_{by}}{f_b} \leq 1$$

・ 軸引張の場合 
$$\frac{\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by}}{f_t} \leq 1$$

ここで、

$\sigma_c$  : 軸応力度 (=N/A)

N : 軸力, A : 断面積

$\sigma_{bz}$  : 部材 z 軸方向曲げ応力度 (=Mz/Zz)

Mz, Zz : 部材 z 軸回りモーメント及び断面係数

$\sigma_{by}$  : 部材 y 軸方向曲げ応力度 (=My/Zy)

My, Zy : 部材 y 軸回りモーメント及び断面係数

fc : 許容圧縮応力度

fb : 許容曲げ応力度

ft : 許容引張応力度

また、せん断力に対する検討は、下式にて行う。

$$\frac{\sqrt{(\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by})^2 + 3\tau_z^2}}{f_t} \leq 1 \quad \text{かつ} \quad \frac{\sqrt{(\sigma_c + \sigma_{bz} + \sigma_{by})^2 + 3\tau_y^2}}{f_t} \leq 1$$

ここで、

$\tau_z$  : 部材 z 軸方向せん断応力度 (=Qz/Awz)

Qz, Awz : 部材 z 軸方向せん断力及びせん断断面積

$\tau_y$  : 部材 y 軸方向せん断応力度 (=Qy/Awy)

Qy, Awy : 部材 y 軸方向せん断力及びせん断断面積

表 2.3.1-7 及び表 2.3.1-8 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。  
 断面検討の結果、全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 2.3.1-7 断面検討結果（常時）

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	荷重ケース (位置)*1	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
柱	C1	□-1000×1000 ×25×25	C (B)	曲げ Mz	0.3	216.7	0.13	OK
				曲げ My	20.0			
				圧縮 N	4.2			
				せん断 Qz	0.9			
				せん断 Qy	0.0			
梁	G1	B□-1300×750 ×22×50	C (B)	曲げ Mz	36.6	216.7	0.18	OK
				曲げ My	1.2			
				圧縮 N	0.4			
				せん断 Qz	0.2			
				せん断 Qy	0.5			
ブレース	V1	□-450×450 ×22	C (B)	曲げ Mz	0.0	196.7	0.02	OK
				曲げ My	1.5			
				圧縮 N	1.5			
				せん断 Qz	0.1			
				せん断 Qy	0.0			

\*1：燃料取扱機の位置を示す

表 2.3.1-8 断面検討結果（地震時）

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	荷重ケース (位置)*1	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
柱	C1	□-1000×1000 ×25×25	E2 (B)	曲げ Mz	0.2	325.0	0.10	OK
				曲げ My	25.1			
				圧縮 N	4.3			
				せん断 Qz	1.7			
				せん断 Qy	0.0			
梁	G1	B□-1300×750 ×22×50	E3 (C)	曲げ Mz	34.2	325.0	0.21	OK
				曲げ My	28.5			
				圧縮 N	1.2			
				せん断 Qz	3.4			
				せん断 Qy	10.2			
ブレース	V1	□-450×450 ×22	E3 (A)	曲げ Mz	2.8	295.0	0.13	OK
				曲げ My	0.0			
				圧縮 N	23.9			
				せん断 Qz	0.0			
				せん断 Qy	0.2			

\*1：燃料取扱機の位置を示す

(3) 原子炉建屋接合部の構造強度に対する検討

1) 許容耐力の算定

燃料取扱機支持用架構の原子炉建屋上の支点は接着系アンカーボルトを用いて一体化が図られる。接着系アンカーボルトの許容耐力は「各種合成構造設計指針・同解説」に従い、原子炉建屋の設計基準強度 (22.1N/mm<sup>2</sup>) を用いて下式によって求め、計算結果を表 2.3.1-9 に示す。

$$p_a = \min(p_{a1}, p_{a3})$$

$$q_a = \min(q_{a1}, q_{a2}, q_{a3})$$

ここで、

- $p_a$  : 接着系アンカーボルトの許容引張力
- $p_{a1}$  : アンカーボルトの降伏により決まる許容引張力
- $p_{a3}$  : 付着力により決まる許容引張力
- $q_a$  : 接着系アンカーボルトの許容せん断力
- $q_{a1}$  : アンカーボルトのせん断強度により決まる許容せん断力
- $q_{a2}$  : 躯体の支圧強度により決まる許容せん断力
- $q_{a3}$  : 躯体のコーン破壊により決まる許容せん断力

表 2.3.1-9 接着系アンカーボルトの許容耐力

箇所			シェル壁上端 (F1, F2)	南側外壁 (F3)
高さ	m		G.L.+29.92	G.L.-0.40~G.L.+8.70
鋼材種類			M27	D25
			SNR490B	SD345
埋め込み長さ	mm		700	450
アンカーボルトの間隔	mm		300	400
長期	許容引張力( $p_{aL}$ )	kN/本	58	51
	許容せん断力( $q_{aL}$ )	kN/本	53	58
短期	許容引張力( $p_{aS}$ )	kN/本	116	102
	許容せん断力( $q_{aS}$ )	kN/本	104	116

2) シェル壁上端位置の検討

燃料取扱機支持用架構とシェル壁との接合部の概要を図 2.3.1-4 に、作用応力と許容耐力を比較した結果を表 2.3.1-10 に示す。

検討の結果、全ての応力度比が 1 以下になることを確認した。

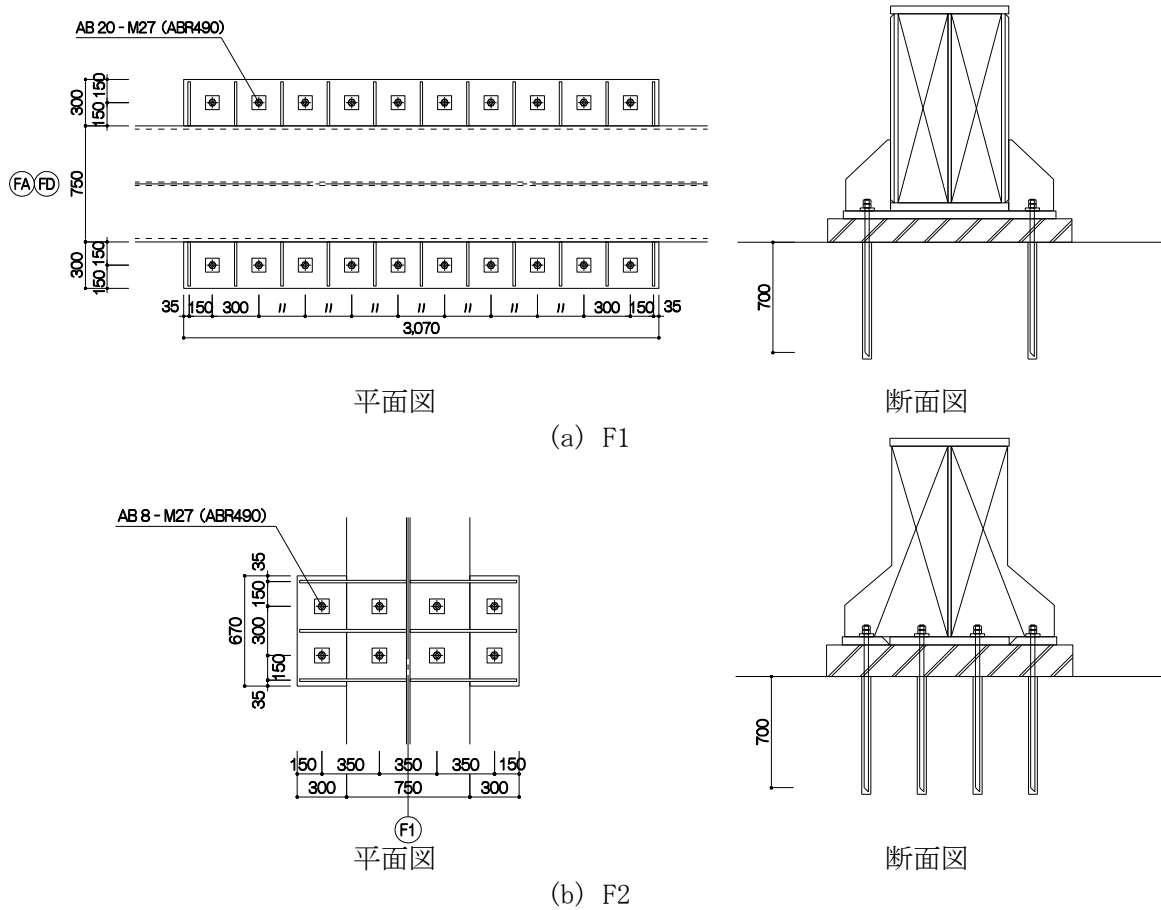


図 2.3.1-4 シェル壁上端位置の接合部概要（単位：mm）

表 2.3.1-10 シェル壁上端位置の検討結果

検討箇所 (アンカー本数) <sup>*1</sup>	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力		許容耐力		応力度比	判定
		引抜力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容引張力 p <sub>a</sub> (kN)	許容せん断力 q <sub>a</sub> (kN)		
F1 (20)	C (B)	0	41	1160	1060	0.04	OK
	E2 (B)	0	669	2320	2080	0.33	OK
F2 (8)	C (A)	0	10	464	424	0.03	OK
	E3 (A)	0	94	928	832	0.12	OK

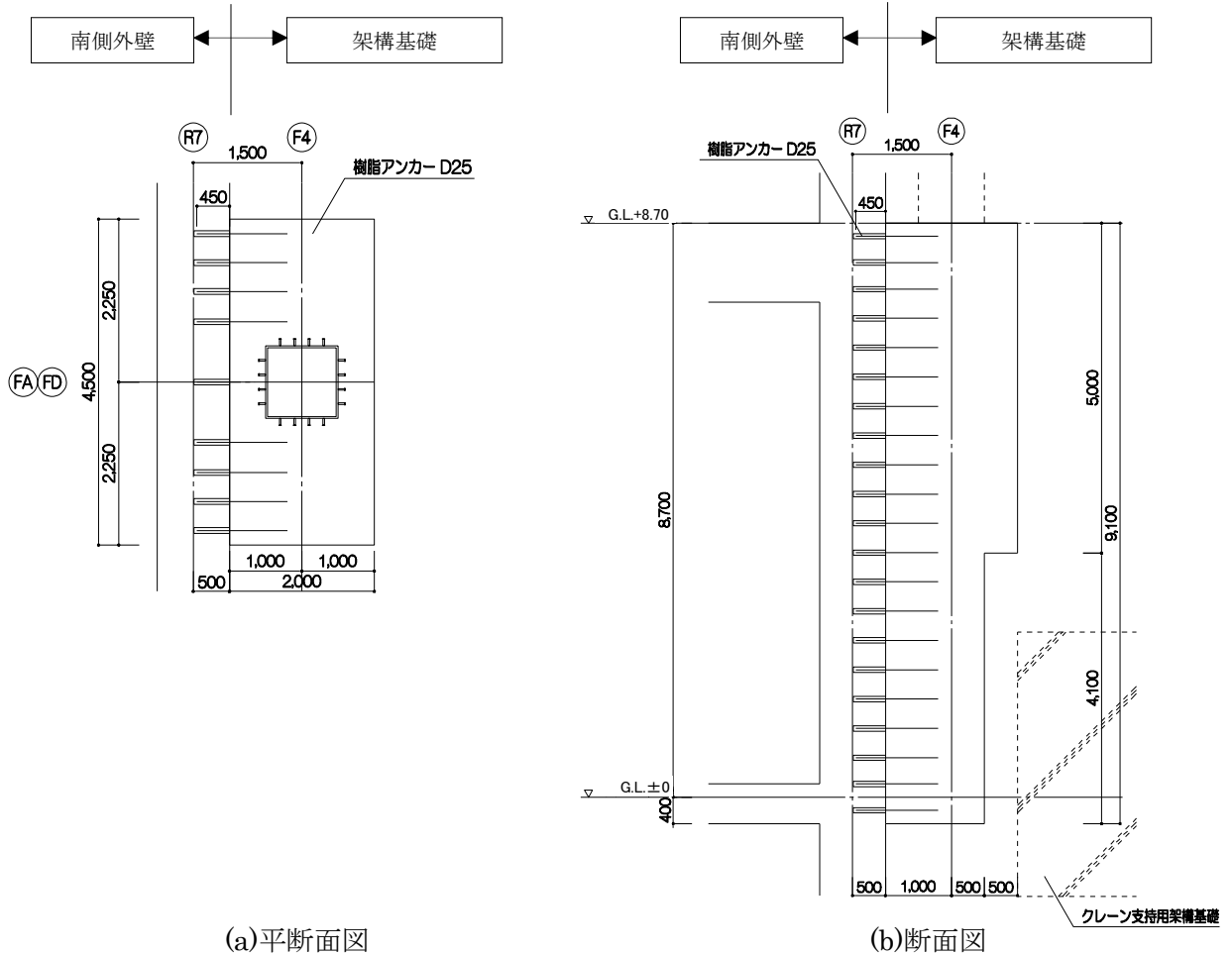
\*1：設計で考慮するアンカーボルトの本数

\*2：燃料取扱機の位置を示す

3) 南側外壁位置の検討

燃料取扱機支持用架構と南側外壁との接合部の概要を図 2.3.1-5 に、作用応力と許容耐力を比較した結果を表 2.3.1-11 に示す。

検討の結果、全ての応力度比が 1 以下になることを確認した。



(a) 平断面図

(b) 断面図

図 2.3.1-5 南側外壁位置の接合部概要 (単位: mm)

表 2.3.1-11 南側外壁位置の検討結果

検討箇所 方向 (アンカー本数)*1	荷重ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		応力度比	判定
		引抜力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容引張力 p <sub>a</sub> (kN)	許容せん断力 q <sub>a</sub> (kN)		
F3 NS 方向 (引張 24) (せん断 99)	C (A)	552	2622	1224	5742	0.46	OK
	E1 (A)	951	2613	2448	11484	0.39	OK
F3 EW 方向 (引張 15) (せん断 99)	C (A)	24	2622	765	5742	0.46	OK
	E3 (A)	412	4049	1530	11484	0.36	OK

\*1: 設計で考慮するアンカーボルトの本数。アンカーボルトは引張に抵抗するものとせん断に抵抗するものをそれぞれ設定した

\*2: 燃料取扱機の位置を示す

(4) 原子炉建屋の構造強度に対する検討

1) 検討方針

原子炉建屋の構造強度の検討では、当該躯体建設時の設計用応力\*1に架構反力により生じる応力を重ね合わせた応力が、許容応力度以下になることを確認する。ここで、燃料取扱機支持用架構の重量が原子炉建屋に比較して十分に小さいことから、検討は地震時についてのみ実施する。検討対象部位は、架構反力を受けるシェル壁と南側外壁とする。なお、シェル壁については G.L.+8.70m より上部を検討対象とする。検討対象部位を図 2.3.1-6 に示す。

\*1：原子炉建屋全体重量は、瓦礫撤去の効果（-39810kN）及び燃料取扱機支持用架構の新設（+6490kN）を考慮すると軽減傾向にあり、地震時応力は低減されるが、安全側の評価として建設時の設計用応力を用いる

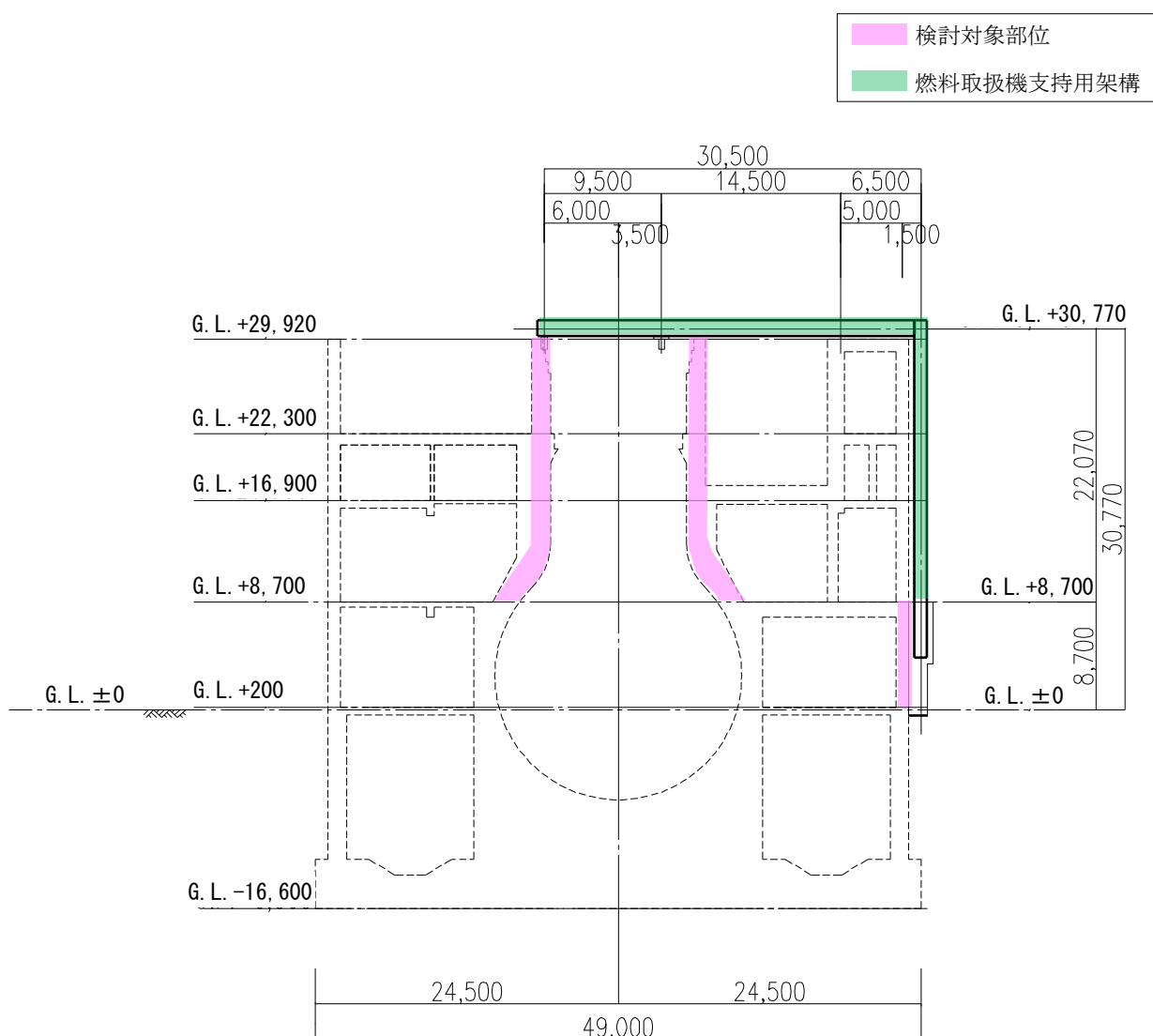


図 2.3.1-6 既存躯体の検討対象部位（単位：mm）

## 2) 断面検討

軸力及び曲げモーメントに対する断面検討とせん断に対する断面検討は、「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」に従い、設計基準強度(22.1N/mm<sup>2</sup>)を用いて行う。

シェル壁の軸力及び曲げモーメントに対する検討結果を表 2.3.1-12 に、せん断力に対する断面検討結果を表 2.3.1-13 に示す。南側外壁の面内方向に対する断面検討結果を表 2.3.1-14 に、面外方向に対する断面検討結果を表 2.3.1-15 に示す。

検討の結果、全ての応力度比が1以下になることを確認した。また、燃料取扱機支持用架構の反力により生じる応力は、建設時の設計用応力の10%以下であることを確認した。

表 2.3.1-12 シェル壁の断面検討結果(1)  
(軸力及び曲げモーメントに対する検討)

G.L. (m)	コア壁厚 t (m)	配筋 タテ筋 a <sub>t</sub> (cm <sup>2</sup> /m) P <sub>g</sub> (%)	鉄筋の 最大引張応力度 σ <sub>t</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	コンクリートの 最大圧縮応力度 σ <sub>c</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比 σ <sub>t</sub> /f <sub>t</sub>	判定
+29.92～ +22.30	1.50	a <sub>t</sub> =87.7 P <sub>g</sub> =1.16	58.1	2.0	0.17	OK
+22.30～ +16.90	1.85	a <sub>t</sub> =87.7 P <sub>g</sub> =0.94	80.1	3.4	0.24	OK
+16.90～ +8.70	2.08	a <sub>t</sub> =171.0 P <sub>g</sub> =1.64	64.3	3.7	0.19	OK

表 2.3.1-13 シェル壁の断面検討結果(2)  
(せん断に対する検討)

G.L. (m)	コア壁厚 t (m)	配筋 上段:タテ筋 下段:ヨコ筋 a <sub>t</sub> (cm <sup>2</sup> /m) P <sub>g</sub> (%)	鉄筋の 最大引張応力度 σ <sub>t</sub> (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比 σ <sub>t</sub> /f <sub>t</sub>	判定
+29.92～ +22.30	1.50	a <sub>t</sub> =87.7 P <sub>g</sub> =1.16	86.3	0.26	OK
		a <sub>t</sub> =76.0 P <sub>g</sub> =1.01	99.1	0.29	OK
+22.30～ +16.90	1.85	a <sub>t</sub> =87.7 P <sub>g</sub> =0.94	117.1	0.34	OK
		a <sub>t</sub> =76.0 P <sub>g</sub> =0.82	134.2	0.39	OK
+16.90～ +8.70	2.08	a <sub>t</sub> =171.0 P <sub>g</sub> =1.64	125.0	0.37	OK
		a <sub>t</sub> =171.0 P <sub>g</sub> =1.64	125.0	0.37	OK



表 2.3.1-14 南側外壁の断面検討結果(1)

(面内方向)

G.L. (m)	壁厚 t (m)	配筋 上段:タテ筋 下段:ヨコ筋 P <sub>g</sub> (%)	せん断		曲げモーメント		応力度比 $\sigma_t/f_t$	判定
			鉄筋の 最大引張応力度 $\sigma_t$ (N/mm <sup>2</sup> )		鉄筋の 最大引張応力度 $\sigma_t$ (N/mm <sup>2</sup> )	コンクリートの 最大圧縮応力度 $\sigma_c$ (N/mm <sup>2</sup> )		
+8.70 ~ +0.20	1.00	2-D32@200 P <sub>g</sub> =0.79	278.5		0.0	2.0	0.81	OK
		2-D32@200 P <sub>g</sub> =0.79						

表 2.3.1-15 南側外壁の断面検討結果(2)

(面外方向)

G.L. (m)	壁厚 t (m)	配筋 タテ筋 P <sub>g</sub> (%)	せん断			曲げモーメント			
			コンクリートの最大 せん断応力度 $\tau_s$ (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比 $\tau_s/f_s$	判定	鉄筋の最大 引張応力度 $\sigma_t$ (N/mm <sup>2</sup> )	コンクリートの最大 圧縮応力度 $\sigma_c$ (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比 $\sigma_t/f_t$	判定
+8.70 ~ +0.20	1.00	2-D32@200 P <sub>g</sub> =0.79	0.1	0.10	OK	110.8	2.1	0.33	OK

## 2.3.2 耐震性

### (1) 検討方針

耐震性の検討は、燃料取扱機支持用架構、原子炉建屋接合部及び原子炉建屋の健全性について行い、基準地震動  $S_s$  に対して燃料取扱機支持用架構及び原子炉建屋の応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。

### (2) 原子炉建屋の地震応答解析

#### 1) 解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（平成 20 年 3 月 31 日 東京電力株式会社）にて作成した解放基盤表面に定義される基準地震動  $S_s$ （図 2.2.2-2(1)及び図 2.2.2-2(2)参照）とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 2.3.2-1 に示す。モデルに入力する地震動は一次元波動論に基づき、解放基盤表面に定義される基準地震動  $S_s$  に対する地盤の応答として評価する。

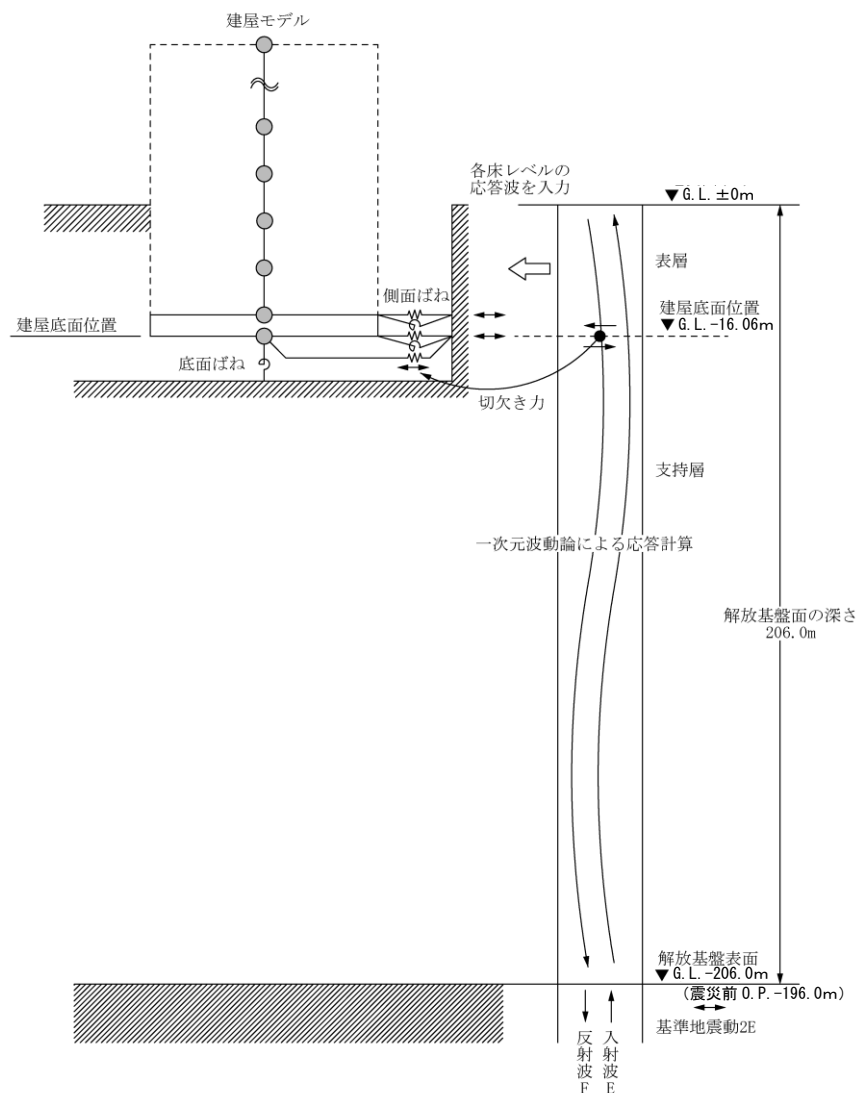


図 2.3.2-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

## 2) 地震応答解析モデル

原子炉建屋の地震応答解析モデルは、図 2.3.2-2 に示すように質点系でモデル化し、地盤を等価なばねで評価した建屋—地盤連成系モデルとする。

地震応答解析モデルの諸元は、「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書（その1）」（平成 23 年 5 月 28 日 東京電力株式会社）に示される内容に、使用済燃料プール底部の支持構造物の設置工事、瓦礫撤去及び新規に設置する燃料取扱機支持用架構の重量を考慮した。解析諸元を表 2.3.2-1(1)及び表 2.3.2-1(2)に示す。

地盤定数は、水平成層地盤と仮定し地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定めた。地盤定数の設定結果を表 2.3.2-2 に示す。基礎底面の地盤ばねについては、「JEAG 4601-1991」に示されている手法を参考にして、地盤を成層補正し振動アドミタンス理論によりスウェイ及びロッキングばねを評価した。

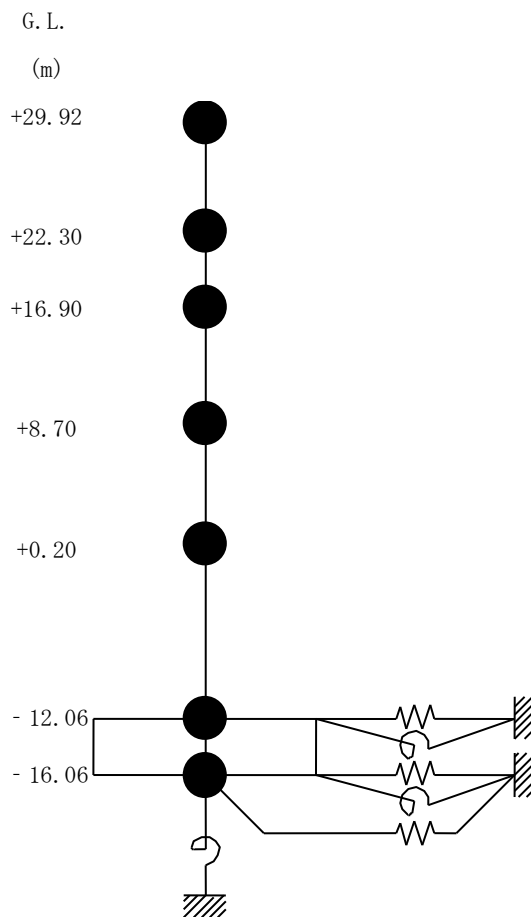


図 2.3.2-2 原子炉建屋の地震応答解析モデル

表 2. 3. 2-1(1) 原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a) 水平 (NS) 方向

G.L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 I <sub>G</sub> (×10 <sup>5</sup> kN・m <sup>2</sup> )	せん断断面積 A <sub>s</sub> (m <sup>2</sup> )	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
+29.92	77700	141.73	150.8	13068
+22.30	88770	163.44		
+16.90	122210	224.92	103.4	15942
+8.70	127700	244.14	223.4	45026
+0.20	208960	391.33	175.4	46774
-12.06	287050	574.38	460.4	114194
-16.06	132390	264.88	2812.6	562754
合計	1044780		ヤング係数 E <sub>c</sub> 2.57×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) せん断弾性係数 G 1.07×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) ポアソン比 ν 0.20 減衰 h 5%	

(b) 水平 (EW) 方向

G.L.(m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 I <sub>G</sub> (×10 <sup>5</sup> kN・m <sup>2</sup> )	せん断断面積 A <sub>s</sub> (m <sup>2</sup> )	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
+29.92	77700	78.78	90.4	6491
+22.30	88770	91.66		
+16.90	122210	224.92	105.8	6388
+8.70	127700	232.88	167.5	32815
+0.20	208960	570.57	166.4	46303
-12.06	287050	828.96	424.5	136323
-16.06	132390	346.27	2812.6	772237
合計	1044780		ヤング係数 E <sub>c</sub> 2.57×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) せん断弾性係数 G 1.07×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) ポアソン比 ν 0.20 減衰 h 5%	

表 2. 3. 2-1(2) 原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元  
(鉛直方向)

G.L. (m)	質点重量 W (kN)	軸断面積 A <sub>N</sub> (m <sup>2</sup> )	軸ばね剛性 K <sub>A</sub> (×10 <sup>8</sup> kN/m <sup>2</sup> )
+29.92	77700	222.6	7.41
+22.30	88770		
+16.90	122210	218.1	10.58
+8.70	127700	380.4	11.92
+0.20	208960	340.6	10.30
-12.06	287050	654.7	13.72
-16.06	132390	2812.6	180.71
合計	1044780	ヤング係数 E <sub>c</sub> 2.57×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) せん断弾性係数 G 1.07×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> ) ポアソン比 ν 0.20 減衰 h 5%	

表 2.3.2-2 地盤定数の設定結果

(a) Ss-1

G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(b) Ss-2

G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.76	3.41	0.81	8.08	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.53	4.36	0.81	10.27	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.56	5.63	0.81	13.19	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.29	6.53	0.81	15.26	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(c) Ss-3

G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
±0	砂岩	380	17.8	0.473	2.25	2.62	0.86	6.63	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

3) 地震応答解析結果

地震応答解析は水平方向と鉛直方向を別々に入力した。最大応答加速度分布を図 2. 3. 2-3 に示す。

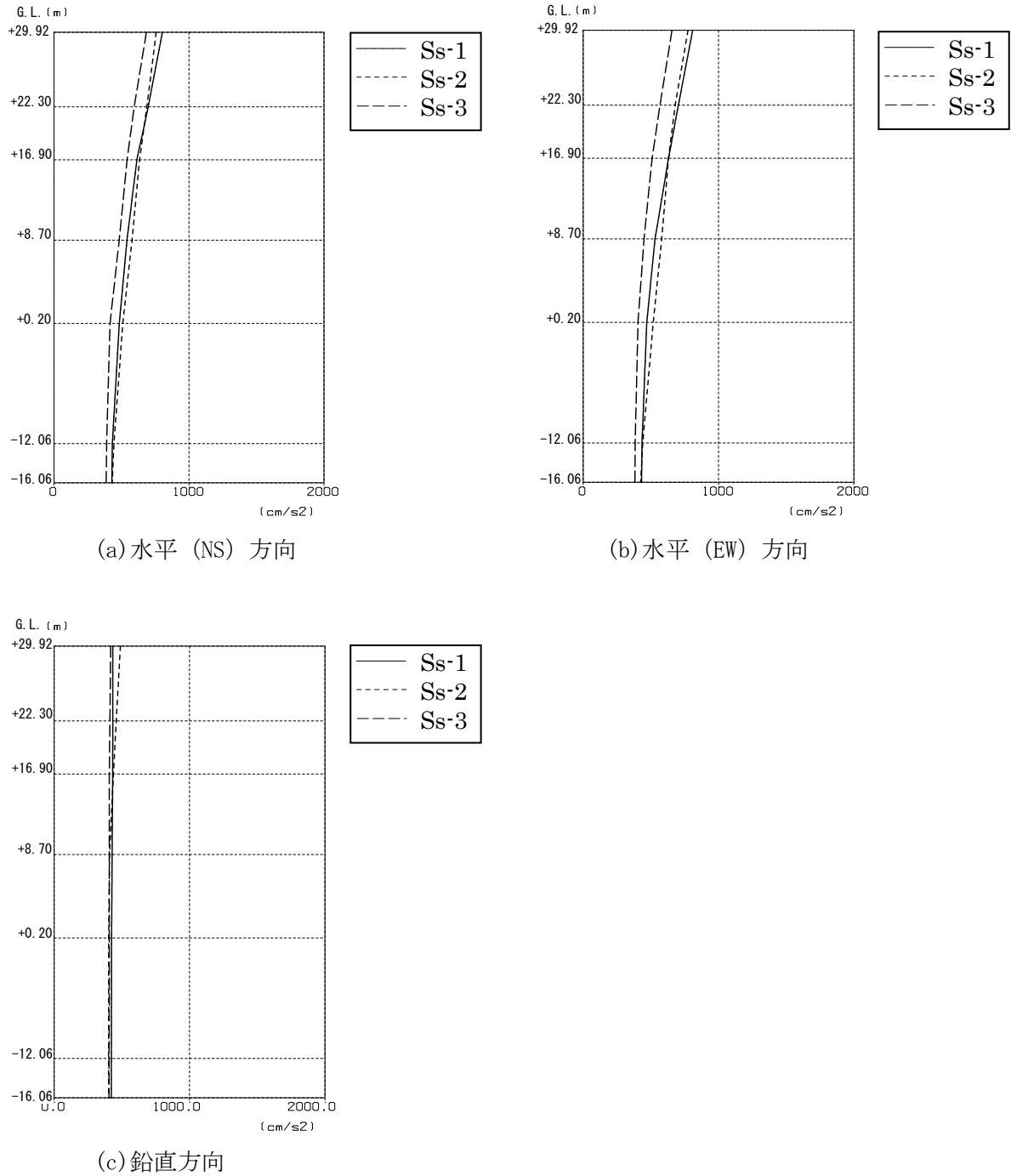


図 2. 3. 2-3 原子炉建屋の最大応答加速度分布

(3) 架構の耐震性に対する検討

1) 解析に用いる入力地震動

燃料取扱機支持用架構への入力地震動は、基準地震動  $S_s$  を入力したときの原子炉建屋 G.L. +29.92m と G.L. +8.70m の時刻歴応答変位を用い、水平方向と鉛直方向の同時入力とする。

2) 地震応答解析モデル

地震応答解析に用いる入力地震動の概念と燃料取扱機支持用架構の解析モデルを図 2.3.2-4 に、層間変形角が最大となる燃料取扱機を南端に設置した場合の地震応答解析モデルにおける質点重量を表 2.3.2-3 に示す。

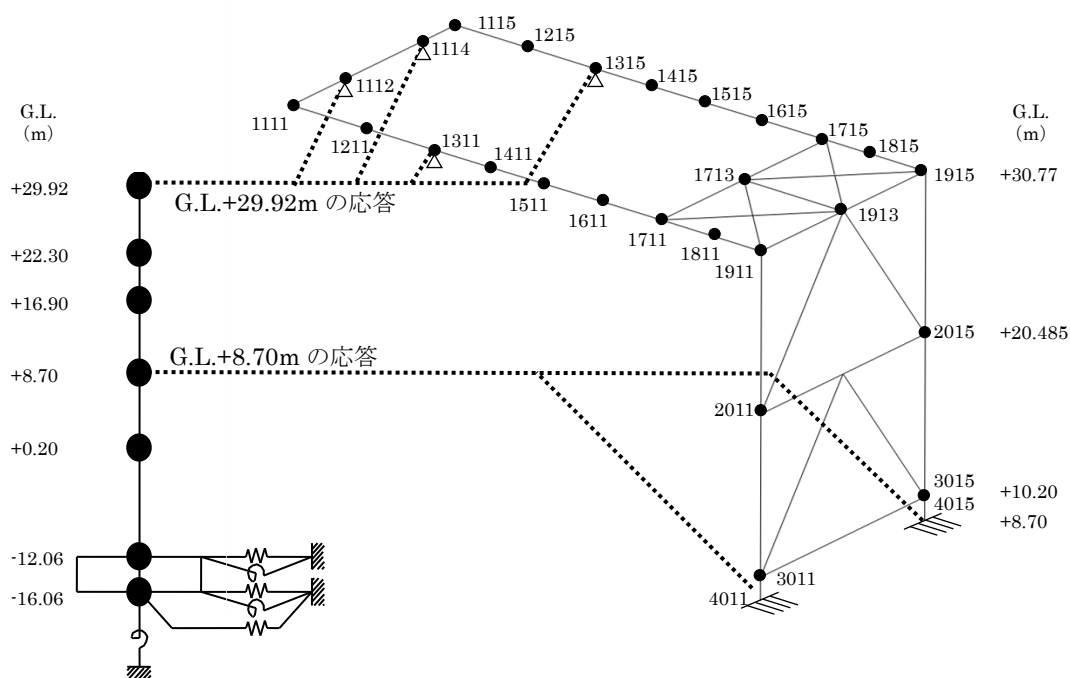


図 2.3.2-4 燃料取扱機支持用架構の地震応答解析モデル



表 2.3.2-3 燃料取扱機支持用架構の地震応答解析モデルにおける質点重量

G.L.(m)	節点番号	質点重量 (kN)	
+30.77	1111	57	
	1211	89	
	1311	79	
	1411	68	
	1511	68	
	1611	68	
	1711	78	
	1811	62	
	1911	97	
	1115	57	
	1215	89	
	1315	79	
	1415	68	
	1515	68	
	1615	68	
	1715	78	
	1815	62	
	1915	97	
	+20.485	1112	46
		1114	46
1713		37	
1913		94	
9001		49	
9002		49	
9003		49	
9004		49	
9501		184	
9502		184	
9601		184	
9602		184	
+10.20	2011	149	
	2015	149	
+10.20	3011	94	
	3015	94	
合 計		2973	

### 3) 波及的影響の評価

地震応答解析結果が、JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会，2002 年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は 1/75 以下，層の塑性率は 4 以下，部材の塑性率は 5 以下」\*1 及びせん断力はせん断耐力以下）を満足することを確認する。

なお，解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター，平成 19 年 7 月 20 日）に示されるクライテリア（層間変形角は 1/100 以下，層の塑性率は 2 以下，部材の塑性率は 4 以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し，安全性を確認する。

\*1：北村春幸，宮内洋二，浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」，日本建築学会構造系論文集，第 604 号，2006 年 6 月

#### ・層間変形角の検討

燃料取扱機支持用架構の層間変形角を表 2.3.2-4 に示す。

検討の結果，層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 2.3.2-4 層間変形角の検討結果

G.L. (m)	最大応答値						クライテリア	判定
	NS 方向入力時			EW 方向入力時				
	Ss-1	Ss-2	Ss-3	Ss-1	Ss-2	Ss-3	1/75	OK
+20.485~+30.77	1/10285	1/10285	1/34283	1/1686	1/2057	1/2706		
+8.70~+20.485	1/1061	1/1309	1/1419	1/1733	1/2104	1/2805		

・塑性率の検討

部材の塑性率は、最大応答曲げモーメント時の曲率を全塑性モーメントに至る時の曲率で除した値で表される。最大曲げモーメントが全塑性モーメント以下の場合は弾性であり塑性率は1以下となる。最大応答値を全塑性モーメントまたはせん断耐力で除した値を耐力比と定義し、表 2.3.2-5 に検討結果を示す。

表 2.3.2-5 より曲げモーメント及びせん断力については、全てのケースで耐力比が1を下回ることから塑性率は1以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

表 2.3.2-5 耐力比の検討結果

部位	検討箇所	部材形状 (mm)	地震波	入力方向	耐力比		判定
柱	C1	□-1000×1000 ×25×25	Ss-1	NS	Mz/Muz	0.01	OK
					My/Muy	0.10	
					Qz/Quz	0.03	
					Qy/Quy	0.01	
梁	G1	B□-1300×750 ×22×50	Ss-1	EW	Mz/Muz	0.12	OK
					My/Muy	0.06	
					Qz/Quz	0.02	
					Qy/Quy	0.09	
ブレース	V1	□-450×450 ×22	Ss-1	EW	Mz/Muz	0.02	OK
					My/Muy	0.02	
					Qz/Quz	0.01	
					Qy/Quy	0.01	

$M_z$  : 部材 z 軸回りの曲げモーメントの最大値

$M_y$  : 部材 y 軸回りの曲げモーメントの最大値

$Q_z$  : 部材 z 方向のせん断力の最大値

$Q_y$  : 部材 y 方向のせん断力の最大値

$M_{uz}$  : 部材 z 軸回りの全塑性モーメント

$M_{uy}$  : 部材 y 軸回りの全塑性モーメント

$Q_{uz}$  : 部材 z 軸方向のせん断耐力

$Q_{uy}$  : 部材 y 軸方向のせん断耐力

(4) 原子炉建屋接合部の耐震性に対する検討

接着系アンカーボルトの耐震性の検討は、短期許容引張力及び短期許容せん断力を許容耐力とし、応力度比が1以下になることを確認する。

1) シェル壁上端位置の検討

作用応力と許容耐力を比較した結果を表 2.3.2-6 に示す。

検討の結果、全ての応力度比が1以下になることを確認した。

表 2.3.2-6 シェル壁上端位置の検討結果

検討箇所 (アンカー本数)*1	地震波	入力 方向	作用応力		許容耐力		応力度比	判定
			引抜力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	短期 許容引張力 pa (kN)	短期 許容せん断力 qa (kN)		
F1 (20)	Ss-1	NS	0	1105	2320	2080	0.54	OK
F2 (8)	Ss-1	EW	104	168	928	832	0.21	OK

\*1：設計で考慮するアンカーボルトの本数

2) 南側外壁位置の検討

作用応力と許容耐力を比較した結果を表 2.3.2-7 に示す。

検討の結果、全ての応力度比が1以下になることを確認した。

表 2.3.2-7 南側外壁位置の検討結果

検討箇所 方向 (アンカー本数)*1	地震波	入力 方向	作用応力		許容耐力		応力度比	判定
			引抜力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	短期 許容引張力 pa (kN)	短期 許容せん断力 qa (kN)		
F3 NS 方向 (引張 24) (せん断 99)	Ss-1	NS	1568	3214	2448	11484	0.65	OK
F3 EW 方向 (引張 15) (せん断 99)	Ss-1	EW	863	5793	1530	11484	0.57	OK

\*1：設計で考慮するアンカーボルトの本数。アンカーボルトは引張に抵抗するものとせん断に抵抗するものをそれぞれ設定した

## (5) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

### 1) 検討方針

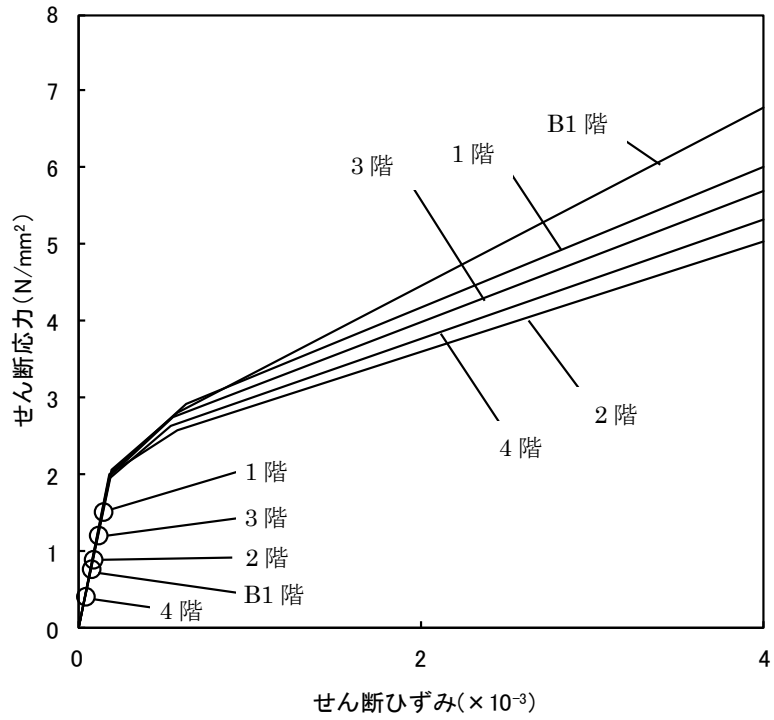
燃料取扱機支持用架構の設置に伴う原子炉建屋の耐震性の評価は、耐震安全上重要な設備への波及的影響防止の観点から、地震応答解析により得られる耐震壁のせん断ひずみが鉄筋コンクリート造耐震壁の終局限界に対応した評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。

ここで、耐震壁のせん断ひずみは、「(2)原子炉建屋の地震応答解析」で実施した地震応答解析結果の値とする。

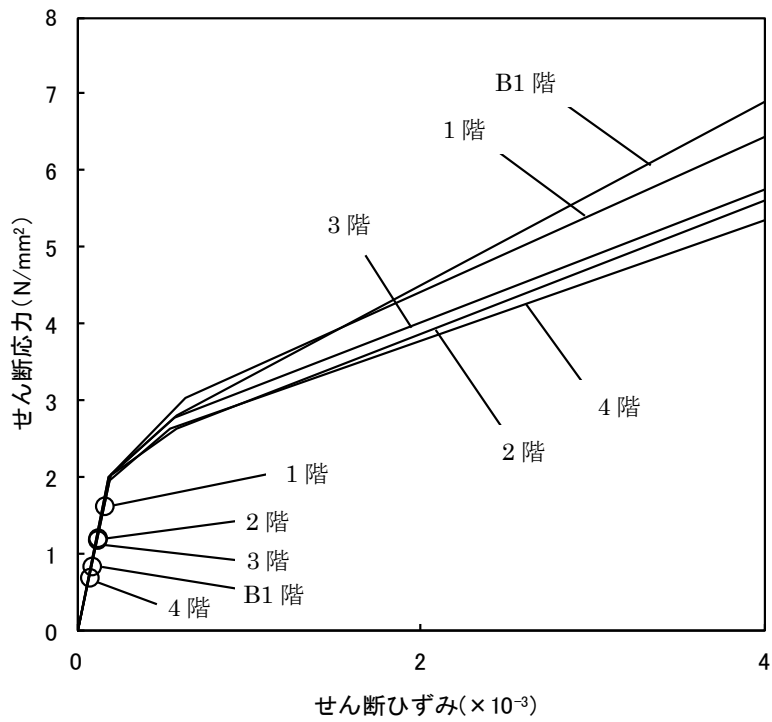
### 2) 検討結果

基準地震動  $S_s$  に対する最大応答値を、「JEAG 4601-1991」に基づき設定した耐震壁のせん断スケルトン曲線上にプロットした結果を、図 2.3.2-5 から図 2.3.2-7 に示す。

検討の結果、地震応答解析により得られる最大応答値は、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) に対して十分に余裕があることを確認した。



(a)NS 方向



(b)EW 方向

図 2.3.2-5 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-1)

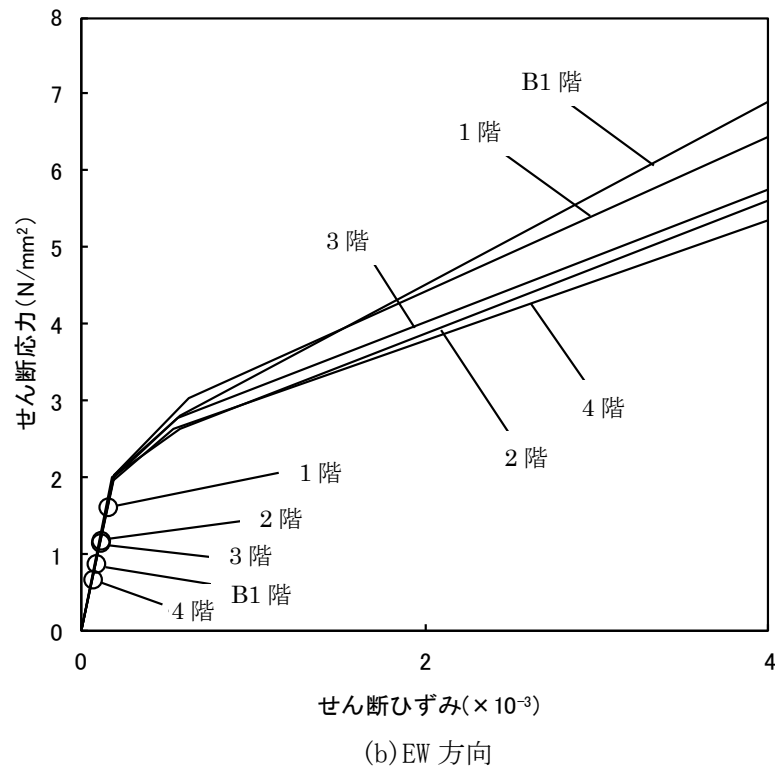
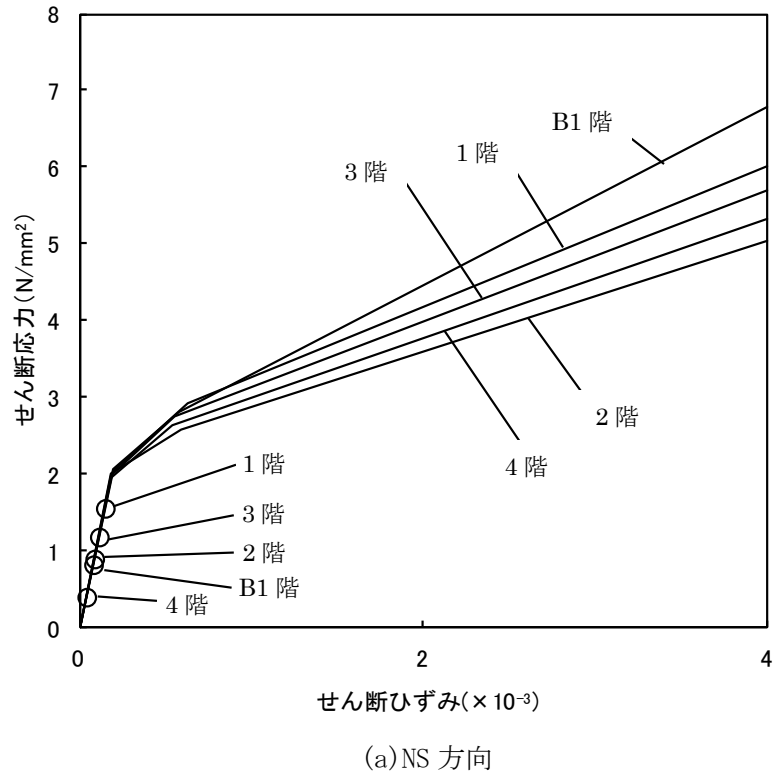
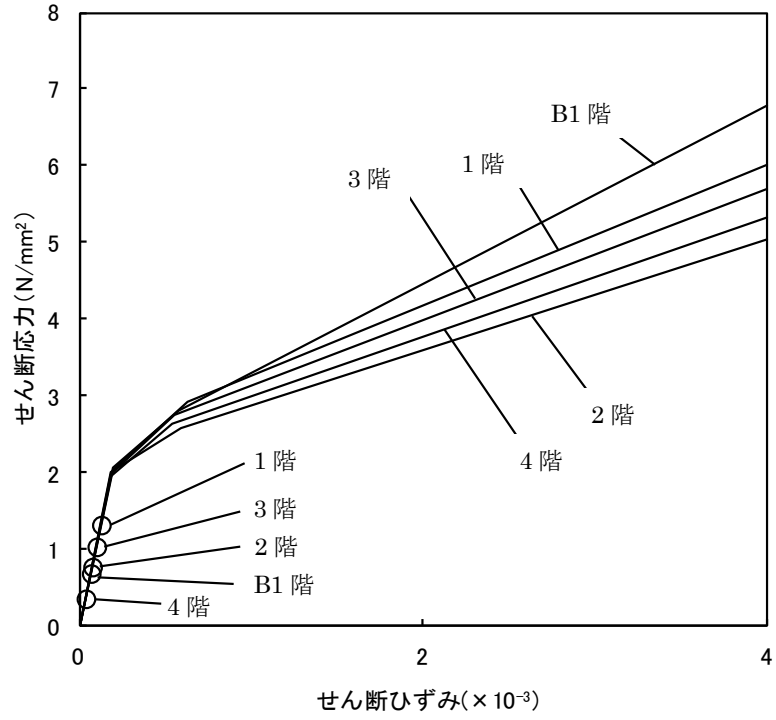
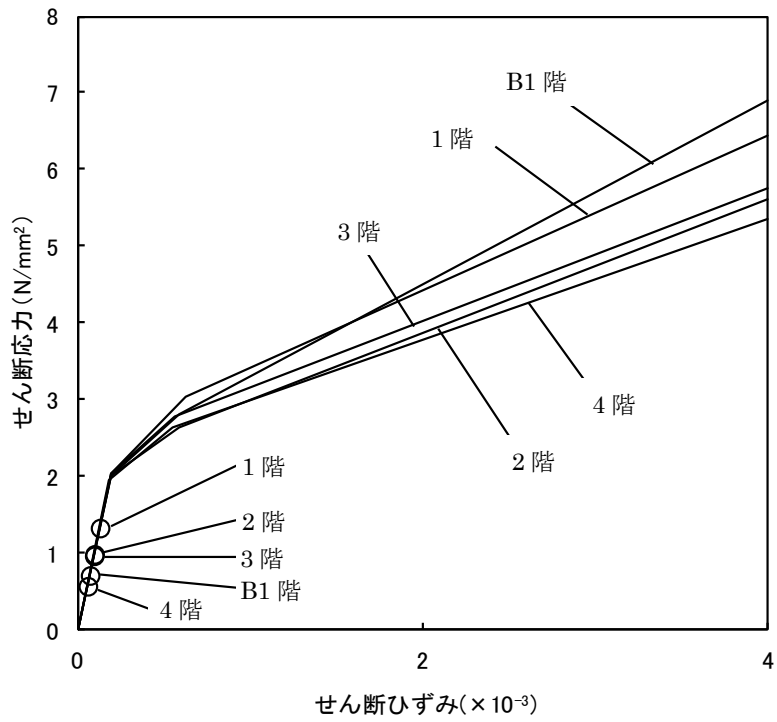


図 2.3.2-6 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-2)



(a)NS 方向



(b)EW 方向

図 2.3.2-7 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-3)



### 3. 3号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について

#### 3.1 概要

##### 3.1.1 一般事項

3号機燃料取り出し用カバーは、使用済燃料プールを覆う構造としており、燃料取扱設備（燃料取扱機及びクレーン）を支持するドーム状の屋根を有した門型架構であり、構造強度と耐震性について検討を行う。なお、耐震設計上の重要度分類は、燃料取扱設備の間接支持構造物としてBクラス相当とする。

架構の構造強度は一次設計に対応した許容応力度設計を実施し、耐震性は基準地震動  $S_s$  に対する地震応答解析を実施し、架構の損傷が原子炉建屋、使用済燃料プール及び使用済燃料ラックに波及的影響を及ぼさないことを確認する。ここで、波及的影響の確認は、架構が崩壊機構に至らないことを確認する。図 3.1.1-1 に燃料取り出し用カバーのイメージを示す。

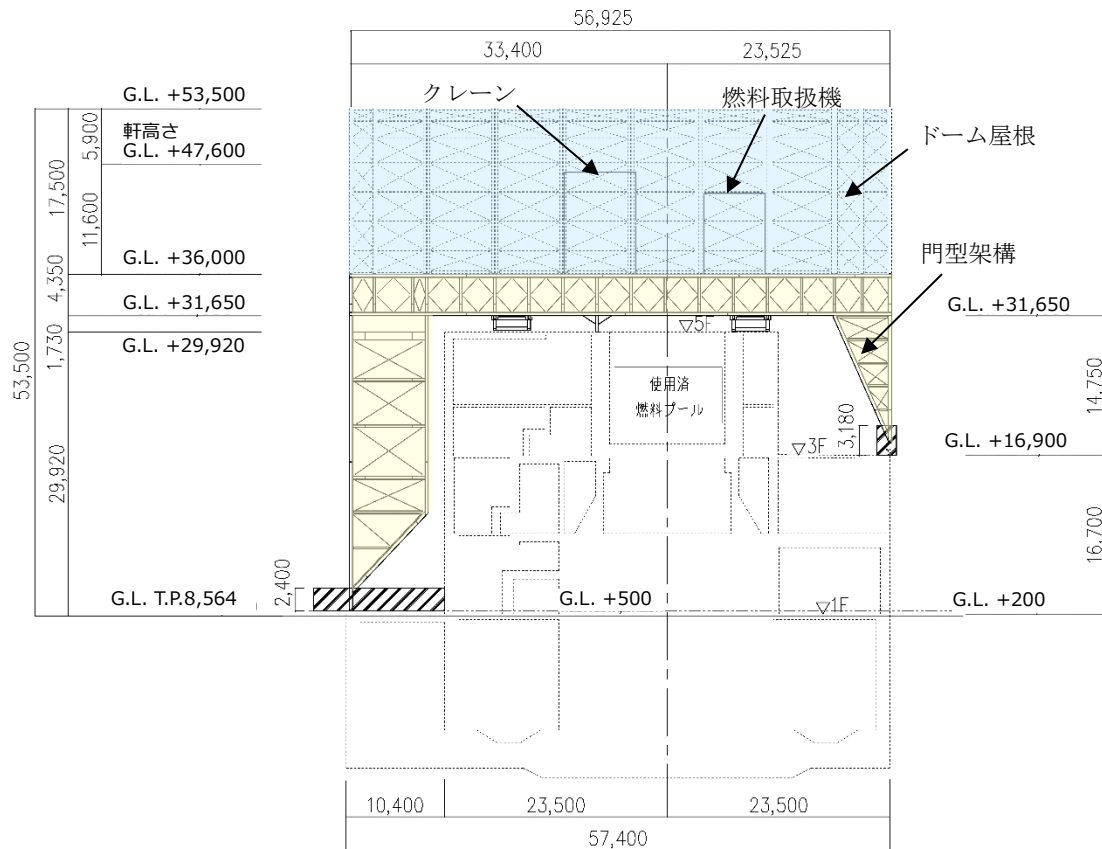


図 3.1.1-1 燃料取り出し用カバーのイメージ（単位：mm）

本章に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。

<換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

燃料取り出し用カバーの検討は原則として下記の法規及び基規準類に準拠して行う。

- (1) 建築基準法・同施行令及び関連告示
- (2) 原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2005 制定）
- (3) 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2010 改定）
- (4) 鋼構造設計規準（日本建築学会，2005 改定）
- (5) 2007 年版 建築物の構造関係技術基準解説書(国土交通省住宅局建築指導課・国土交通省  
国土技術政策総合研究所・独立行政法人建築研究所・日本建築行政会議，2007 刊行)
- (6) 鋼構造塑性設計指針（日本建築学会，2010 改定）
- (7) 現場打ち同等型プレキャスト鉄筋コンクリート構造設計指針(案)・同解説(2002)  
（日本建築学会，2002 制定）
- (8) プレストレストコンクリート設計施工規準・同解説（日本建築学会，1998 改定）

また，原子力施設の設計において参照される下記の指針及び規程を参考にして検討を行う。

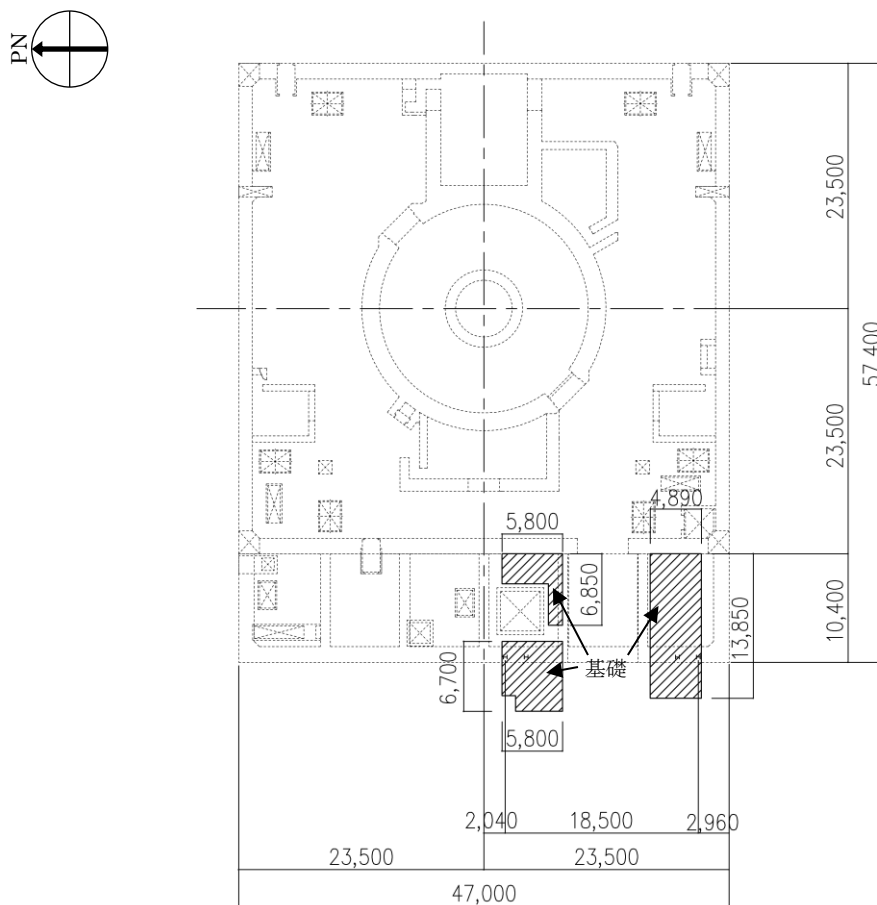
- (1) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1987)（日本電気協会 電気技術基準調査委員会，  
昭和 62 年 8 月 改訂）
- (2) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1991 追補版)（日本電気協会 電気技術基準調査  
委員会，平成 3 年 6 月 発刊）
- (3) 原子力発電所耐震設計技術規程(JEAC 4601-2008)（日本電気協会 原子力規格委員会，平成  
20 年 12 月 改定）

### 3.1.2 構造概要

燃料取り出し用カバーは燃料取扱設備を支持する架構で、南北方向に18.50m、東西方向に56.925m、地盤面からの高さが53.50mのドーム状屋根を設けた門型の架構である。構造形式はトラス構造で、構造種別は鉄骨造である。

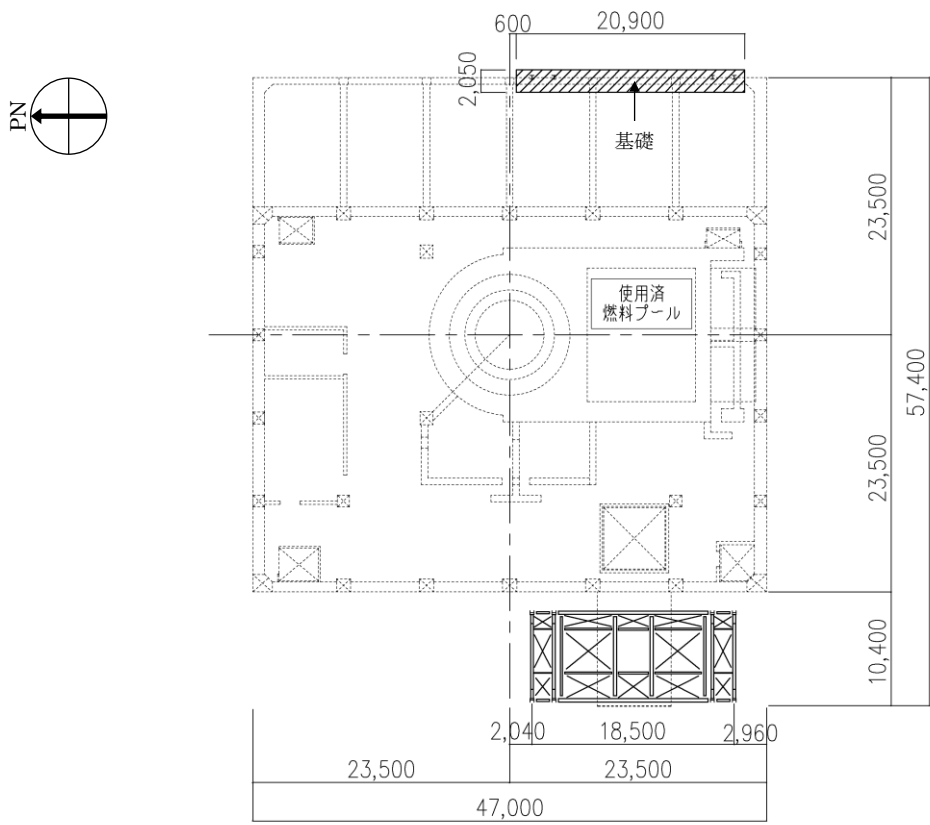
燃料取り出し用カバーは、原子炉建屋の1階、3階及び5階に支持される構造である。なお、5階の原子炉建屋躯体支持点においては、水平振れ止め装置（ストップ）及び鉛直方向の制震装置（オイルダンパ）を用いる。

燃料取り出し用カバーの概要を図3.1.2-1～図3.1.2-5に示す。



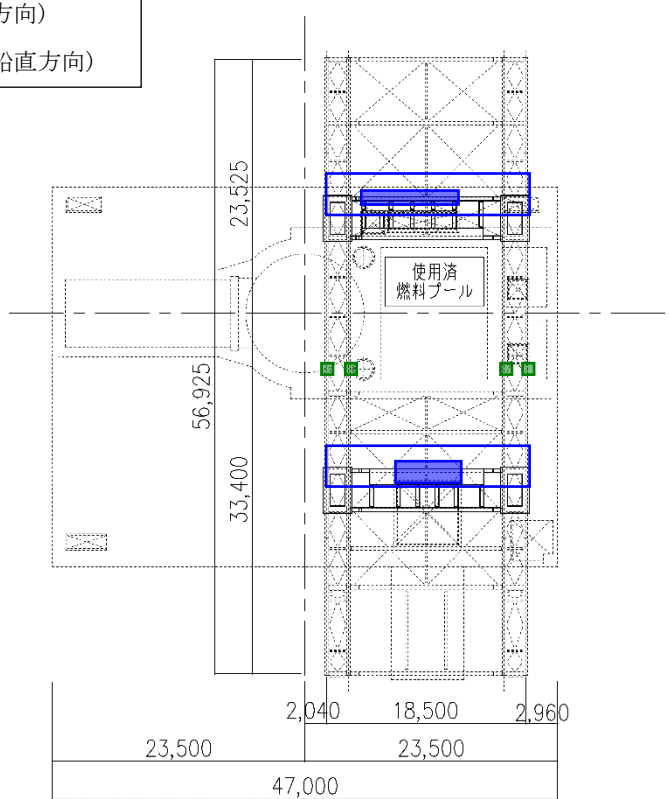
(a) 基礎伏図 (G. L. +500 原子炉建屋 1階レベル+300mm)

図 3.1.2-1 燃料取り出し用カバーの概要 (単位：mm)



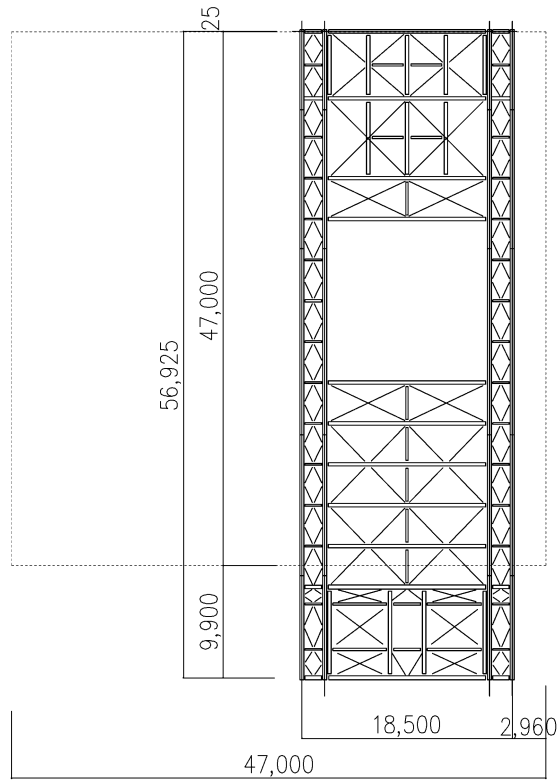
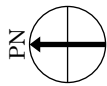
(a) 基礎伏図 (G. L. +16,900 原子炉建屋 3 階)

- ストッパ(水平方向)
- オイルダンパ(鉛直方向)

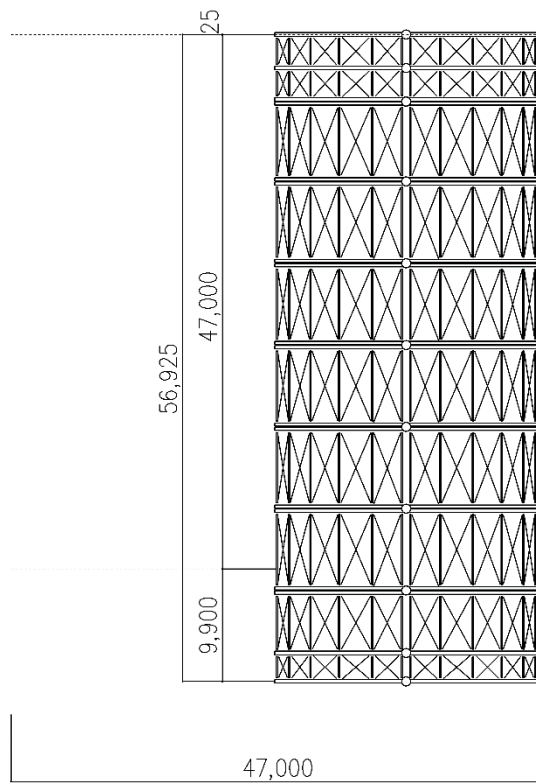


(b) 梁伏図 (G. L. +29,920 原子炉建屋 5 階)

図 3.1.2-2 燃料取り出し用カバーの概要 (単位: mm)

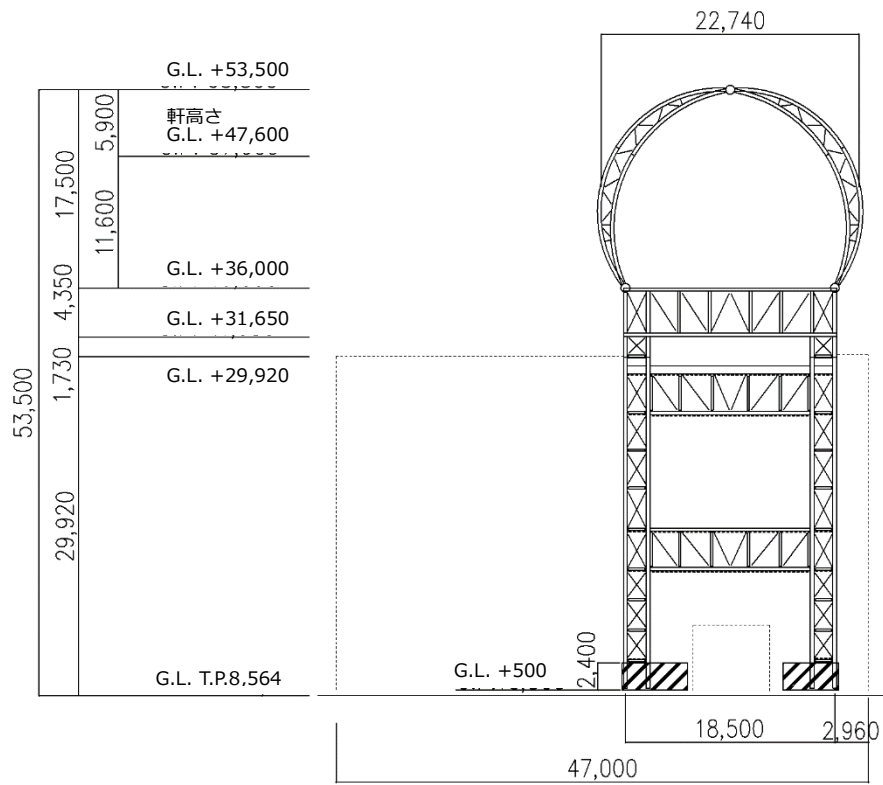


(a) 架構ガーダー部平面図 (G. L. +36, 000)

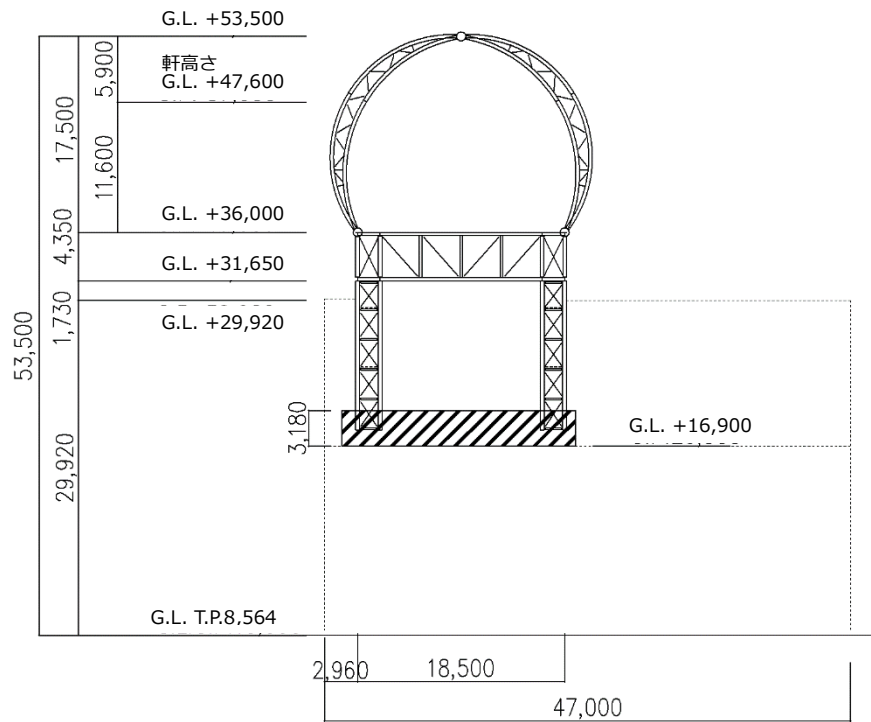


(b) 屋根伏図

図 3. 1. 2-3 燃料取り出し用カバーの概要 (単位 : mm)

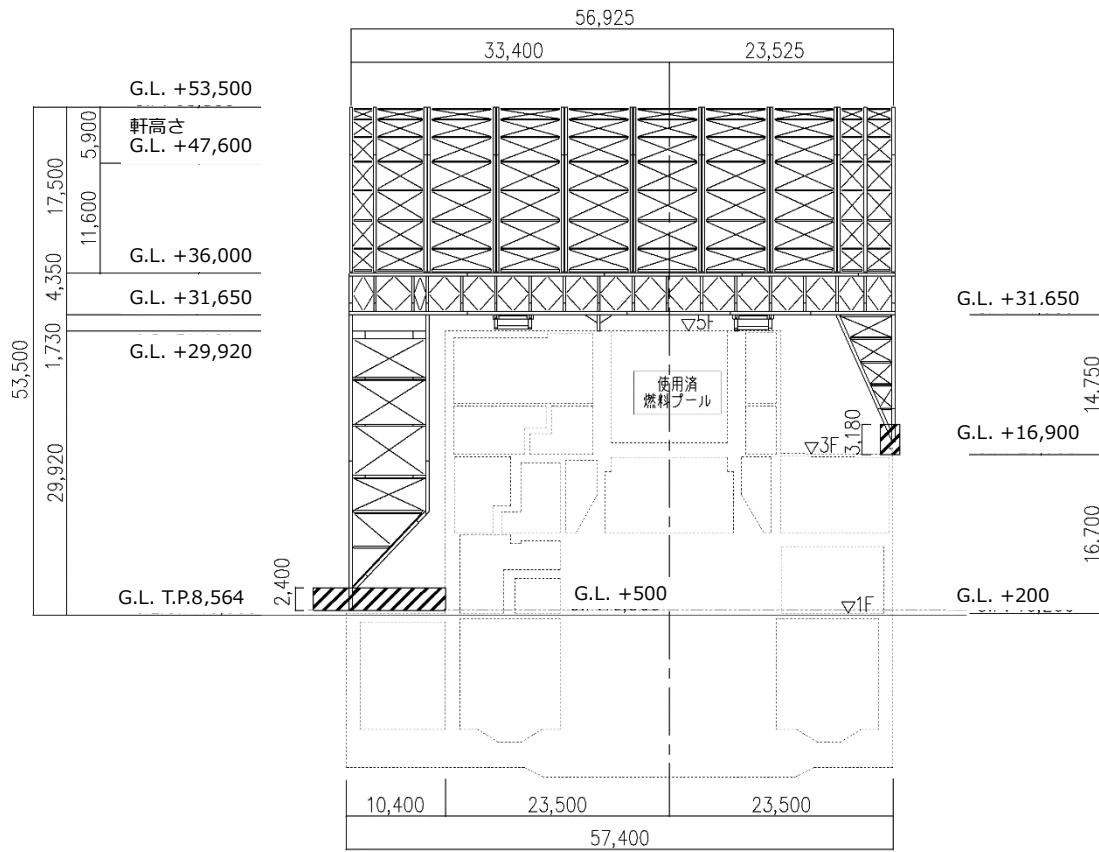


(a) 西軸組図



(b) 東軸組図

図 3.1.2-4 燃料取り出し用カバーの概要 (単位: mm)



(a) 南軸組図

図 3. 1. 2-5 燃料取り出し用カバーの概要 (単位 : mm)

### 3.1.3 検討フロー

燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性の検討フローを図 3.1.3-1 に示す。

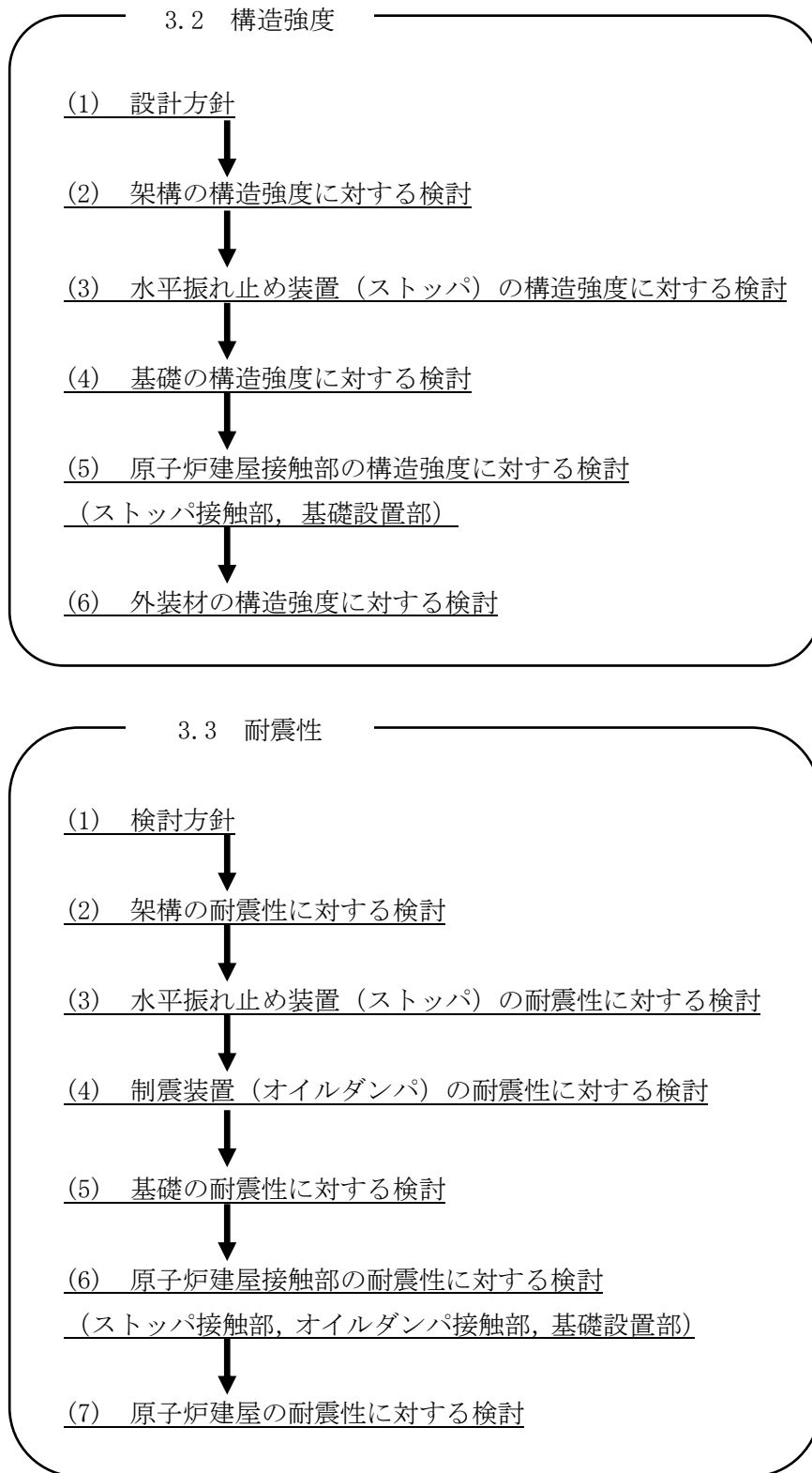


図 3.1.3-1 燃料取り出し用カバーの検討フロー



### 3.2 構造強度

#### (1) 設計方針

構造強度の検討は、門型架構及びドーム屋根、水平振れ止め装置（ストッパ）、基礎及び外装材について許容応力度設計を実施する。

#### 1) 使用材料及び許容応力度

使用材料の物性値及び許容応力度を表 3.2-1 に示す。

表 3.2-1 使用材料の物性値及び許容応力度

材料定数				
部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 ν	単位体積重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )
架 構	鉄骨	2.05×10 <sup>5</sup>	0.3	77.0
基 礎	コンクリート	2.27×10 <sup>4</sup>	0.2	24.0

コンクリートの許容応力度 (単位：N/mm<sup>2</sup>)

設計基準強度=24	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
	8.0	—	0.73	16.0	—	1.095

鉄筋の許容応力度 (単位：N/mm<sup>2</sup>)

記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD345	D29 未満	215	195	345	345
	D29 以上	195			

構造用鋼材の許容応力度 (単位：N/mm<sup>2</sup>)

板厚	材料	基準強度 F	許容応力度
T ≤ 40mm	SS400, SN400B	235	「鋼構造設計規準」 に従い、左記 F の値 より求める
T > 40mm	SN400B	215	
T ≤ 40mm	SM490A, SN490B, STK490	325	
—	STKT590	440*	

\* : 「JIS G 3474-2008」による

## 2) 荷重及び荷重組合せ

設計で考慮する荷重を以下に示す。

### ・鉛直荷重 (VL)

燃料取り出し用カバーに作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重及び積載荷重とする。

### ・燃料取扱設備荷重 (CL)

燃料取扱設備による荷重を表 3.2-2 に示す。

表 3.2-2 燃料取扱設備荷重一覧表

燃料取扱機	788 kN
クレーン	755 kN
吊荷	461 kN

### ・積雪荷重 (SL)

積雪荷重は建築基準法施行令及び福島県建築基準法施行規則細則に準拠し以下の条件とする。

積雪量：30cm, 単位荷重：20N/m<sup>2</sup>/cm

### ・風圧力 (WL)

風圧力は建築基準法施行令第 87 条および建設省告示第 1454 号に基づき、基準風速を 30m/s, 地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 3.2-3 に示す。

表 3.2-3 速度圧の算定結果

建物高さ* H (m)	平均風速の 鉛直分布係数 Er	ガスト 影響係数 Gf	建物高さ と粗度 区分による係数 E	基準風速 Vo (m/s)	速度圧 q (N/m <sup>2</sup> )
50.55	1.27	2.00	3.23	30	1750

\* : 建物高さは、軒高さ (47.60m) と最高高さ (53.50m) の  
平均値とした

・地震荷重 (K)

燃料取り出し用カバーに作用させる地震荷重は、G.L. -12.06m（原子炉建屋基礎スラブ上端レベル）を基準面とした原子炉建屋の水平地震力の算定結果より設定する。原子炉建屋の水平地震力は下式より算定し、算定結果を表 3.2-5 及び表 3.2-6 に示す。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_0$$

ここで、

$Q_i$  : 水平地震力 (kN)

$n$  : 施設の重要度に応じた係数 ( $n=1.5$ )

建築基準法で定める地震力の 1.5 倍を考慮する。

$C_i$  : 地震層せん断力係数

$W_i$  : 当該部分が支える重量 (kN)

ここに、燃料取り出し用カバーの設計で考慮する原子炉建屋の全体重量は、瓦礫撤去の効果と遮へい体及び燃料取り出し用カバーを新規に設置する影響を考慮した。原子炉建屋の全体重量を表 3.2-4 に示す。

表 3.2-4 原子炉建屋の全体重量(kN)

原子炉建屋全体重量*	1092200
瓦礫撤去による軽減重量	-24640
遮へい体設置による付加重量	+18000
燃料取り出し用カバー等の付加重量	+44750
燃料取り出し用カバー設計用原子炉建屋全体重量	1130310

\* 「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書（その2）」（東京電力株式会社，平成 23 年 7 月 13 日）において用いた各階重量の総計

$Z$  : 地震地域係数 ( $Z=1.0$ )

$R_t$  : 振動特性係数 ( $R_t=0.8$ )

$A_i$  : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、原子炉建屋の固有値を用いたモーダル解析法（二乗和平方根法）により求める。

$C_0$  : 標準せん断力係数 ( $C_0=0.2$ )

$i$  層の水平震度  $k_i$  は、下式によって算定する。

$$P_i = Q_i - Q_{i-1}$$

$$k_i = P_i / w_i$$

ここで、

$P_i$  : 当該階とその直下階の水平地震力の差 (kN)

$w_i$  : 各階重量 (kN)

表 3.2-5 原子炉建屋の水平震度の算定結果 (NS 方向)

階	標高 G. L. (m)	各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
5	+29.92	87590	—	—	—	—	43010	0.492
4	+29.92~+22.30	119490	87590	2.046	0.491	43010	42720	0.358
3	+22.30~+16.90	111340	207080	1.728	0.414	85730	31770	0.286
2	+16.90~+8.70	130160	318420	1.537	0.369	117500	26050	0.201
1	+8.70~+0.20	253710	448580	1.331	0.320	143550	25000	0.099
B1	+0.20~-12.06	—	702290	1.000	0.240	168550	—	—

表 3.2-6 原子炉建屋の水平震度の算定結果 (EW 方向)

階	標高 G. L. (m)	各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
5	+29.92	87590	—	—	—	—	48610	0.555
4	+29.92~+22.30	119490	87590	2.311	0.555	48610	39610	0.332
3	+22.30~+16.90	111340	207080	1.775	0.426	88220	30230	0.272
2	+16.90~+8.70	130160	318420	1.552	0.372	118450	24200	0.186
1	+8.70~+0.20	253710	448580	1.323	0.318	142650	25900	0.103
B1	+0.20~-12.06	—	702290	1.000	0.240	168550	—	—

架構に作用させる水平震度は、原子炉建屋 1 階、3 階及び 5 階の水平震度を用いるものとし、水平地震力を設定する。ドーム屋根部分の水平震度は、建設省告示第 1389 号に基づく 1.0 に 1.5 を乗じて用いる。表 3.2-7 に燃料取り出し用カバーに作用させる水平地震力の算定結果を示す。

表 3.2-7 水平地震力の算定結果

標高 G. L. (m)	各階重量 wi (kN)	NS 方向		EW 方向	
		水平震度 ki	水平地震力 Pi (kN)	水平震度 ki	水平地震力 Pi (kN)
+53.50	3200	1.500	4800	1.500	4800
+36.00	11400	0.492	5609	0.555	6327
+16.90	200	0.286	57	0.272	54
+0.20	1200	0.099	119	0.103	124

・荷重組合せ

設計で考慮する燃料取扱機及びクレーンの位置を図 3.2-1 に、荷重組合せを表 3.2-8 に示す。

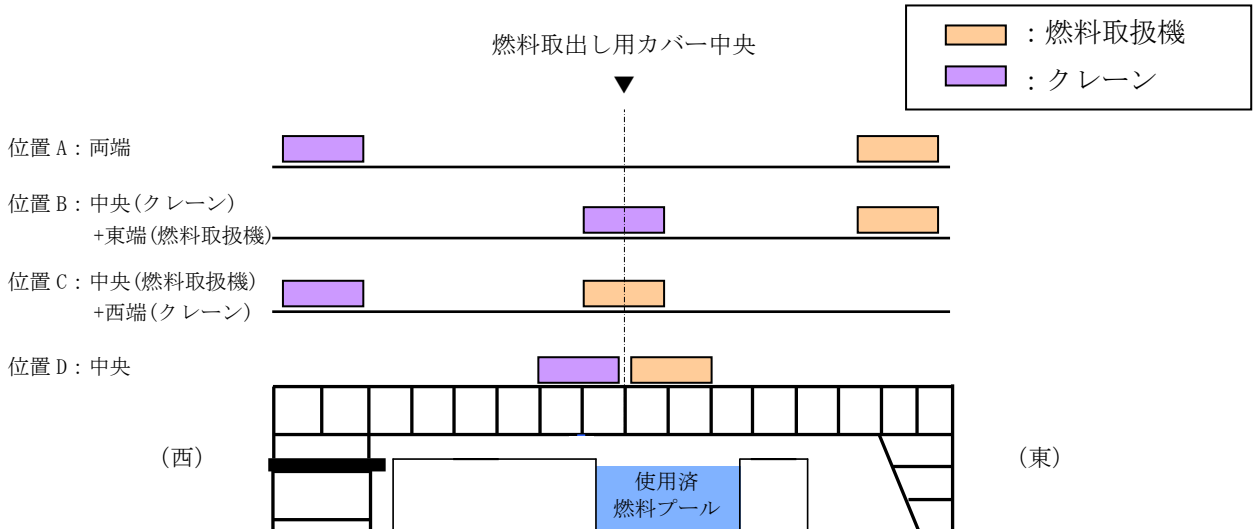


図 3.2-1 燃料取扱設備の位置

表 3.2-8 燃料取り出し用カバーの荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL+CL <sup>*1</sup>	長期
積雪時 <sup>*3</sup>	S	VL+CL <sup>*1</sup> +SL	短期
暴風時 <sup>*3</sup>	W	VL+CL <sup>*1</sup> +WL	
地震時	E1	VL+CL <sup>*1</sup> +K(+NS) <sup>*2</sup>	
	E2	VL+CL <sup>*1</sup> +K(-NS) <sup>*2</sup>	
	E3	VL+CL <sup>*1</sup> +K(+EW) <sup>*2</sup>	
	E4	VL+CL <sup>*1</sup> +K(-EW) <sup>*2</sup>	

\*1：吊荷荷重は、常時、積雪時及び暴風時は図 3.2-1 に示すクレーンの位置、地震時は使用済燃料プール直上の架構にて考慮する。

\*2：地震荷重は NS 方向及び EW 方向を考慮する。

\*3：短期事象では地震時が支配的であることから、積雪時及び暴風時の検討は省略する。ただし、外装材の検討は暴風時が支配的であることから暴風時に対し検討を行う。

なお，地震時と暴風時の架構の層せん断力について，風荷重の受圧面積が最大になる NS 方向で比較した結果を図 3.2-2 に示す。図 3.2-2 より，地震時の層せん断力は暴風時の層せん断力を包絡しており，支配的な荷重である。

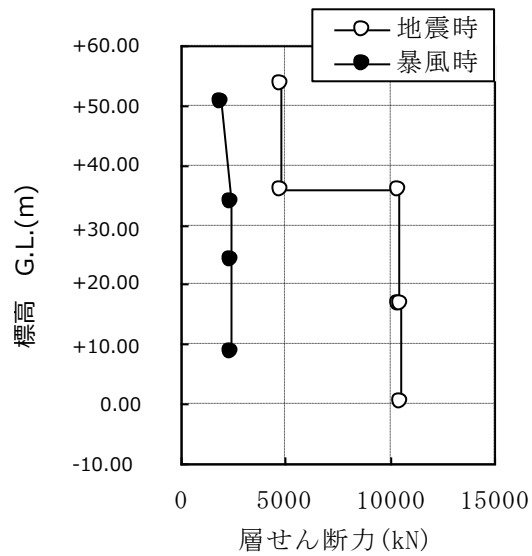


図 3.2-2 地震時と暴風時の層せん断力の比較

## (2) 架構の構造強度に対する検討

### 1) 解析モデル

架構の解析モデルは、門型架構及びドーム屋根を構成する主要な鉄骨部材からなる立体架構モデルとする。図 3.2-3 に架構の立体解析モデルを示す。解析モデルの柱脚部はピン支持、ストップ取り付け部は水平方向のみピン支持とする。

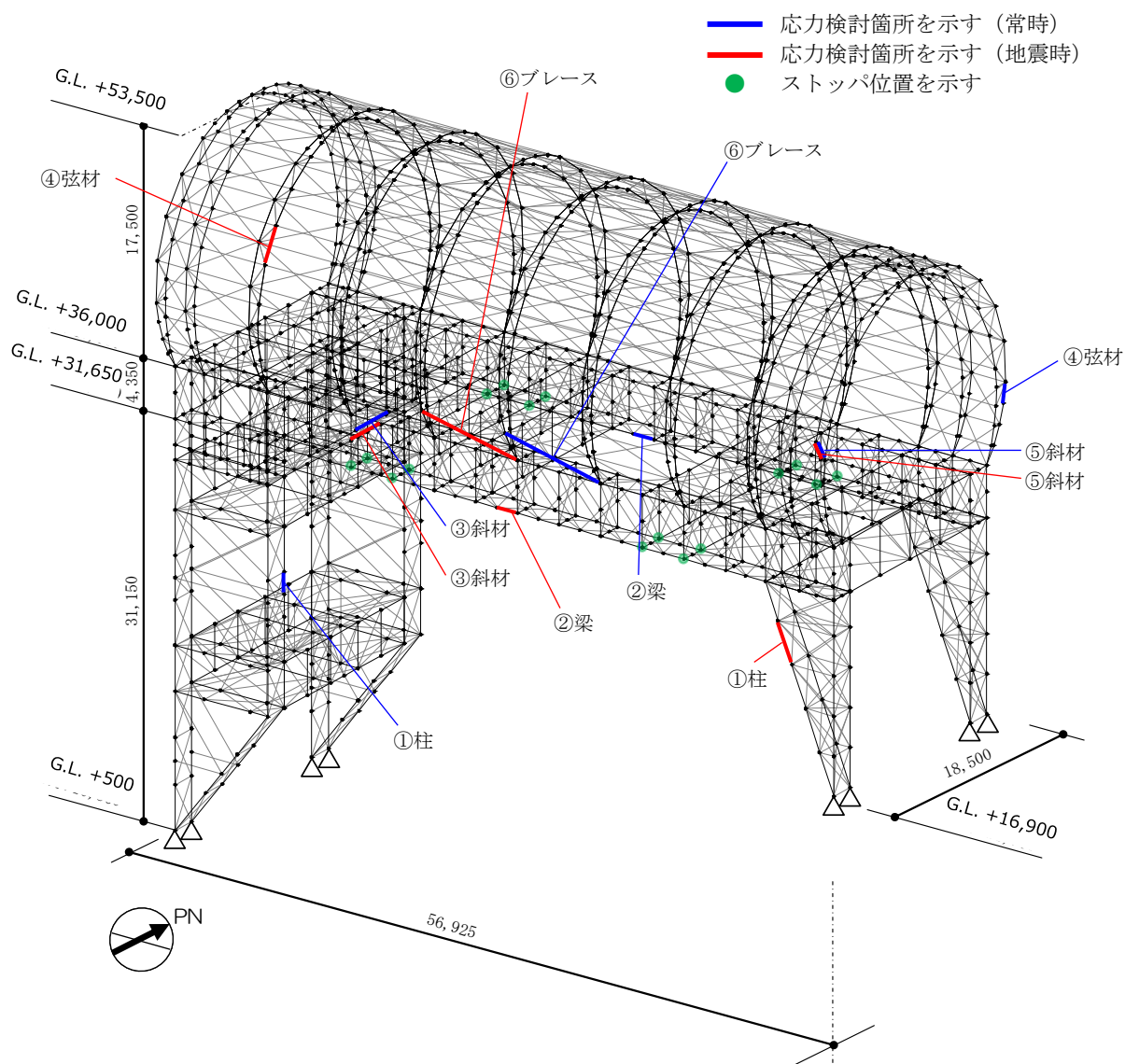


図 3.2-3 解析モデル図 (単位 : mm)

## 2) 断面検討

応力度比の検討は「鋼構造設計規準」に従い、軸力に対して下式にて検討を行う。

$$\cdot \text{軸圧縮の場合} \quad \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

$$\cdot \text{軸引張の場合} \quad \frac{\sigma_t}{f_t} \leq 1$$

ここで,  $\sigma_c, \sigma_t$ : 圧縮応力度 (N/A) 及び引張応力度 (T/A) (N/mm<sup>2</sup>)

N: 圧縮力(N), T: 引張力(N), A: 断面積(mm<sup>2</sup>)

$f_c$ : 許容圧縮応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_t$ : 許容引張応力度(N/mm<sup>2</sup>)

表 3.2-9 及び表 3.2-10 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。  
断面検討の結果, 全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 3.2-9 断面検討結果 (常時)

部 位*1		部材形状 (mm) <使用材料>	荷重ケース (位置) *2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
門型 架構	①	柱 H-350×350 ×12×19 <SM490>	C (D)	圧縮 77.4	164	0.48	0. K.
	②	梁 H-350×350 ×12×19 <SM490>	C (D)	引張 91.4	216	0.43	0. K.
	③	斜材 2[s-150×75 ×6.5×10 <SM490>	C (D)	圧縮 103.0	120	0.86	0. K.
ドーム 屋根	④	弦材 φ-318.5×6.9 <STKT590>	C (B)	引張 33.5	293	0.12	0. K.
	⑤	斜材 φ-139.8×4.5 <STK490>	C (B)	圧縮 43.4	203	0.22	0. K.
	⑥	ブレース φ-114.3×4.5 <STK490>	C (D)	圧縮 19.4	92	0.22	0. K.

\*1: ①～⑥の符号は図 3.2-3 の応力検討箇所を示す

\*2: 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す



表 3.2-10 断面検討結果（地震時）

部 位 <sup>*1</sup>		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定	
門型 架構	①	柱	H-350×350 ×12×19 〈SM490〉	E1 (D)	圧縮	138.9	289	0.49	O. K.
	②	梁	H-350×350 ×12×19 〈SM490〉	E1 (D)	引張	108.3	324	0.34	O. K.
	③	斜材	2[s-150×75 ×6.5×10 〈SM490〉	E1 (D)	圧縮	164.5	180	0.92	O. K.
ドーム 屋根	④	弦材	φ-267.4×6.6 〈STKT590〉	E1 (D)	圧縮	155.2	396	0.40	O. K.
	⑤	斜材	φ-139.8×4.5 〈STK490〉	E3 (A)	圧縮	165.8	304	0.55	O. K.
	⑥	ブレース	φ-114.3×4.5 〈STK490〉	E3 (D)	圧縮	80.6	138	0.59	O. K.

\*1：①～⑥の符号は図 3.2-3 の応力検討箇所を示す

\*2：図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

### (3) 水平振れ止め装置（ストップ）の構造強度に対する検討

原子炉建屋の5階床上面2か所に鋼製のストップを設置し、架構に発生する水平力を、ストップを介して原子炉建屋に支持させる。原子炉建屋へは、5階床の床開口部に突出させた強固なシアキにより水平力を伝達させる。図3.2-4にストップ概要図を示す。

ストップについては、架構と原子炉建屋を結んだバネ材に発生する水平力の最大値が、床開口に差し込むシアキの短期許容せん断力以下であることを確認する。

なお、原子炉建屋と水平振れ止め装置（ストップ）の接触部については、不具合が見つかった場合には適切に補修等を実施する。

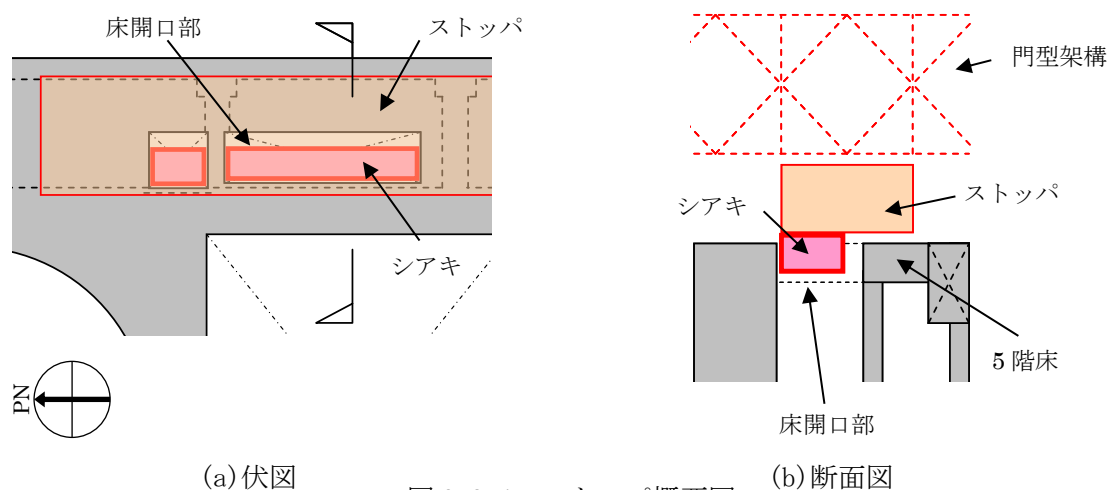


図 3.2-4 ストップ概要図

シアキの許容せん断力は下式より算定し、表3.2-11に応力比が最大となる部位の断面検討結果を示す。

断面検討の結果、全てのストップに対する応力比が1以下になることを確認した。

$$Q_a = A \cdot f_s$$

ここに、

$Q_a$  : 短期許容せん断力 (kN)

$A$  : シアキの断面積 (mm<sup>2</sup>)

$f_s$  : 短期許容せん断応力度 (N/mm<sup>2</sup>) (SM490A)

表 3.2-11 ストップ（シアキ）の断面検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	ストップ反力 Q (kN)	短期許容せん断力 Qa (kN)	応力比 Q/Qa	判定
東側ストップ	E4 (A)	2560	8620	0.30	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

### (4) 基礎の構造強度に対する検討

架構の基礎は独立フーチング基礎とし、西側柱脚部は原子炉建屋の地下1階壁の直上に設置し、

東側柱脚部は原子炉建屋2階壁の直上に設置して基礎反力が原子炉建屋を介して地盤に伝わるようにする。ここでは、基礎の浮き上がりに対しては基礎反力（圧縮力を正）の最小値が0以上であることを確認し、基礎のすべりに対しては基礎反力の水平力が許容摩擦力以下であることを確認する。

なお、基礎底面の摩擦係数は「現場打ち同等型プレキャスト鉄筋コンクリート構造設計指針(案)・同解説(2002)」に準じて、特に先打ちコンクリート表面に処理をしない場合の後打ちコンクリートとの境界面で設定する0.6(普通コンクリートの場合)とする。

表 3.2-12 に基礎反力が最小となる部位の基礎浮き上がりの検討結果を示す。

基礎浮き上がりの検討の結果、全ての基礎の最小圧縮力が0以上であることを確認した。

表 3.2-12 基礎浮き上がりの検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	最小圧縮力 N (kN)	判定
東側柱脚 (北側)	E1 (C)	1990	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

許容摩擦力は下式より算定し、表 3.2-13 に応力比が最大となる部位の検討結果を示す。

基礎すべりの検討の結果、全ての基礎に対する応力比が1以下になることを確認した。

$$V_a = \mu(N + R)$$

ここに、

V<sub>a</sub> : 許容摩擦力 (kN)

μ : 摩擦係数 (μ=0.6)

N : 基礎重量 (kN)

R : 基礎上端の架構の鉛直反力 (kN)

表 3.2-13 基礎すべりの検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	水平力 Q (kN)	許容摩擦力 V <sub>a</sub> (kN)	応力比 Q/V <sub>a</sub>	判定
東側柱脚	C (D)	2410	5270	0.46	O. K.
	E4 (D)	2430	4580	0.54	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

(5) 原子炉建屋接触部の構造強度に対する検討

1) ストップ接触部

ストップ接触部の構造強度の検討では、ストップ水平反力が、既存躯体の短期許容支圧力以下になることを確認する。なお、許容支圧応力度は、原子炉建屋の設計基準強度(22.1N/mm<sup>2</sup>)を用いて「プレレストレストコンクリート設計施工規準・同解説」に基づき算出する。

短期許容支圧力  $N_a$  は下式より算定し、表 3.2-14 に応力比が最大となる部位の検討結果を示す。検討の結果、全てのストップ接触部に対する応力比が 1 以下になることを確認した。

$$N_a = f_n \cdot A_l$$

$$f_n = f_{na} \sqrt{\frac{A_c}{A_l}} \quad \text{ただし,} \quad \sqrt{\frac{A_c}{A_l}} \leq 2.0$$

ここに、

$f_n$  : 短期許容支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

$f_{na}$  :  $F_{ci}/1.25$  または  $0.6F_c$  のうち小さいほうの値 (N/mm<sup>2</sup>)

$F_{ci}$  : コンクリート強度、特に定めのない場合には  $20\text{N/mm}^2$  ( $F_c=22.1\text{N/mm}^2$ )

$A_c$  : 支圧端から離れて応力が一様分布となったところのコンクリートの支承面積 (mm<sup>2</sup>)

$A_l$  : 局部圧縮を受ける支圧面積 (mm<sup>2</sup>)

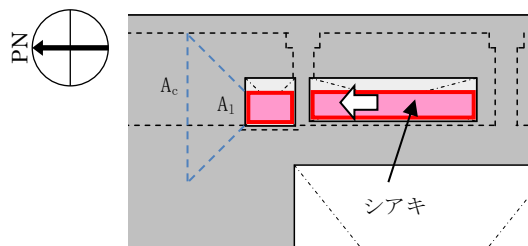


表 3.2-14 ストップ接触部の検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	ストップ水平反力 N (kN)	短期許容支圧力 $N_a$ (kN)	応力比 N/ $N_a$	判定
東側ストップ	E2 (B)	3980	10300	0.39	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

2) 基礎設置部

架構の西側脚部は原子炉建屋 1 階レベル (G.L. +0.2m) で支持し、東側脚部は原子炉建屋 3 階レベル (G.L. +16.9m) で支持している。基礎設置部については、柱脚の鉛直反力により生じる直下壁の軸力が壁の許容軸力以下であることを確認する。

許容軸力  $N_a$  は下式より算定し、表 3.2-15 に応力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、全ての基礎設置部に対する応力比が 1 以下になることを確認した。

$${}_L N_a = {}_L f_c \cdot A_1 \quad , \quad {}_S N_a = {}_S f_c \cdot A_1$$

ここに、

${}_L f_c$  : 長期許容圧縮応力度 (N/mm<sup>2</sup>) ( ${}_L f_c = 22.1 \times 1/3 = 7.4$ )

${}_S f_c$  : 短期許容圧縮応力度 (N/mm<sup>2</sup>) ( ${}_S f_c = 22.1 \times 2/3 = 14.7$ )

$A_1$  : 柱脚部支配面積 (mm<sup>2</sup>)

表 3. 2-15 壁の圧縮力の検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	軸力 N (kN)	許容軸力 Na (kN)	応力比 N/Na	判定
東側柱脚 (南側)	C (B)	4280	12900	0. 34	O. K.
	E1 (B)	6540	25900	0. 26	O. K.

\* : 図 3. 2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

(6) 外装材の構造強度に対する検討

1) 検討箇所

架構の屋根面及び側面を覆う外装材は、折板を用いる。強度検討は、壁材、屋根材それぞれに風圧力により生じる応力度が短期許容応力度以下であることを確認する。なお、短期事象においては、暴風時の影響が支配的であることから、積雪時及び地震時の検討は省略する。検討箇所を図 3.2-5 に示す。

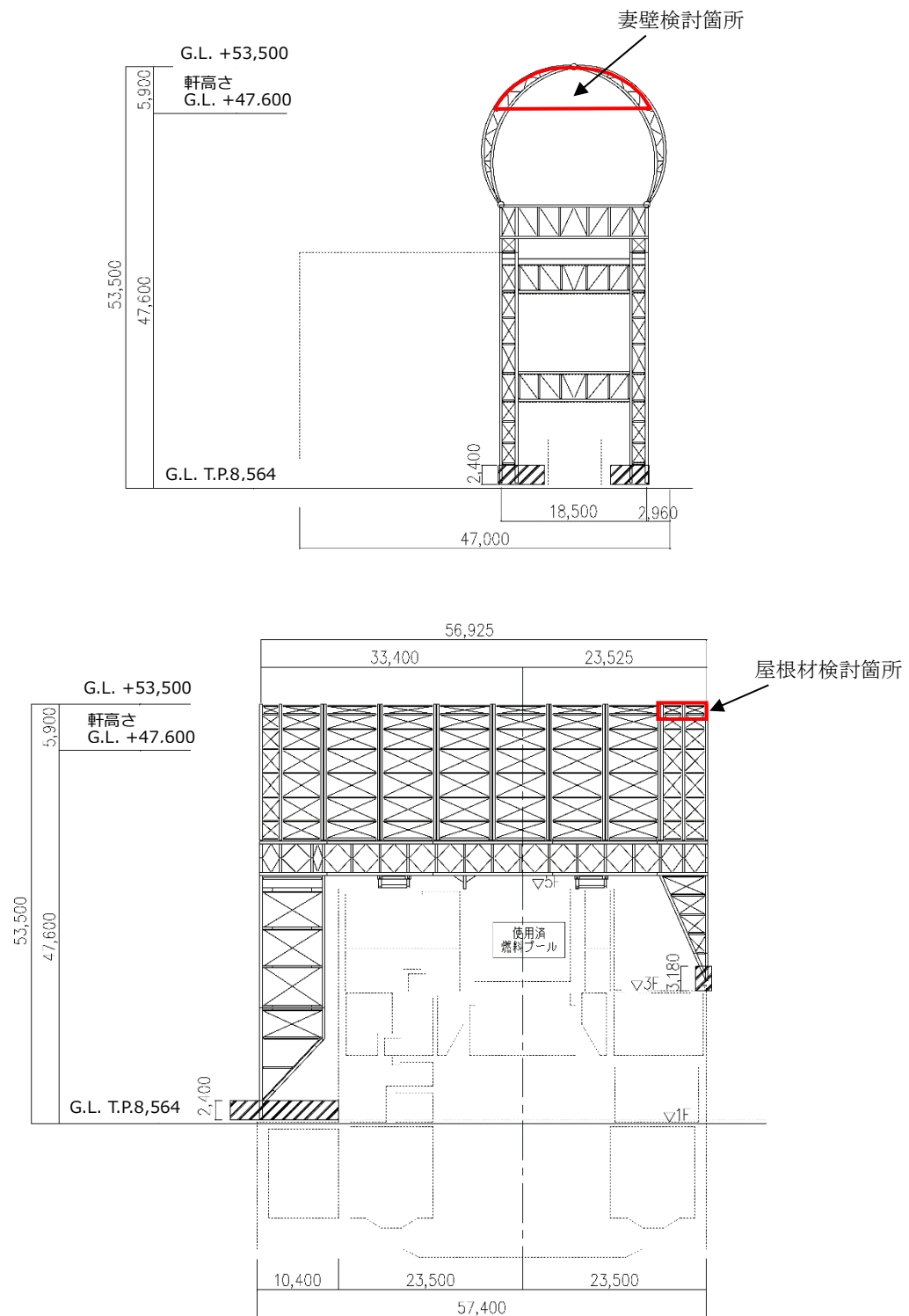


図 3.2-5 外装材検討箇所 (単位: mm)

2) 設計用荷重の算定

設計用風圧力は、建築基準法施行令第 82 条の 4 および建設省告示第 1458 号に基づき、基準風速 30m/s、地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 3.2-16 に、ピーク風力係数を表 3.2-17 に、風力係数の算定箇所を図 3.2-6 に示す。

表 3.2-16 速度圧の算定結果

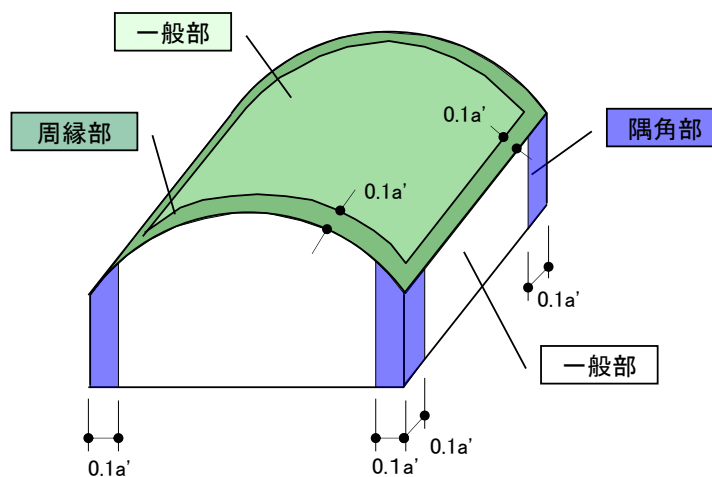
建物高さ*	平均風速の高さ方向の分布を表す係数	基準風速	平均速度圧
H (m)	$E_r$	$V_0$ (m/s)	q (N/m <sup>2</sup> )
50.55	1.27	30	871

\*: 建物高さは、軒高さ (47.60m) と最高高さ (53.50m) の平均値とした

表 3.2-17 ピーク風力係数

建物高さ* H (m)	屋根面		妻壁面	
	一般部	周縁部	一般部	隅角部
50.55	-2.5	-3.2	-2.02	-2.5

\*: 建物高さは、軒高さ (47.60m) と最高高さ (53.50m) の平均値とした



a' は平面の短辺の長さで H の 2 倍の数値のうちいずれか小さな数値 (30 を超えるときは、30 とする) (単位 : m)

図 3.2-6 風力係数の算定箇所

### 3) 外装材の強度検討

検討は、応力が厳しくなる部位について行う。ここでは、折板の自重は考慮しないものとする。折板の間隔はドーム屋根が 3.4m で連続支持、妻壁が 4.0m で単純支持されているものと仮定する。屋根材及び壁材の材料諸元を表 3.2-18 に示す。また、検討結果を表 3.2-19 に示す。断面検討の結果、全ての外装材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 3.2-18 屋根材及び壁材の材料諸元

板厚	自重	正曲げ方向		負曲げ方向	
		断面 2 次 モーメント	断面係数	断面 2 次 モーメント	断面係数
t (mm)	G (N/m <sup>2</sup> )	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)
0.8	118	360	43.6(13.1*)	347	40.6(12.2*)

\* : 括弧内の数値は折曲加工部を示す

表 3.2-19 応力度に対する検討結果

部位	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
ドーム屋根	189	205*	0.93	O. K.
妻壁	109	205*	0.54	O. K.

\* : 「JIS G 3321-2010」による

#### ・ 応力度に対する検討

##### ①ドーム屋根

$$w = 871 \times (-3.20) = -2790 \text{ (N/m}^2\text{)}$$

$$M = (9/128) \times w \times L^2 = (9/128) \times (-2790) \times 3.4^2 \times 10^{-3} = -2.3 \text{ (kNm/m)}$$

$$\sigma_b = M/Z = 2.3 \times 10^6 / (12.2 \times 10^3) = 189 \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

$$\sigma_b / f_b = 189 / 205 = 0.93 \leq 1.0 \quad \text{OK}$$

##### ②妻壁

$$w = 871 \times (-2.50) = -2180 \text{ (N/m}^2\text{)}$$

$$M = (1/8) \times w \times L^2 = (1/8) \times (-2180) \times 4.0^2 \times 10^{-3} = -4.4 \text{ (kNm/m)}$$

$$\sigma_b = M/Z = 4.4 \times 10^6 / (40.6 \times 10^3) = 109 \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

$$\sigma_b / f_b = 109 / 205 = 0.54 \leq 1.0 \quad \text{OK}$$



### 3.3 耐震性

#### (1) 検討方針

耐震性の検討は、架構、水平振れ止め装置（ストップ）、制震装置（オイルダンパ）、基礎、原子炉建屋接触部及び原子炉建屋の健全性について行い、基準地震動  $S_s$  に対して、これらの応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。なお、地震応答解析は水平方向及び鉛直方向を同時に入力する。

#### (2) 架構の耐震性に対する検討

##### 1) 解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（東京電力株式会社，平成 20 年 3 月 31 日）にて作成した解放基盤表面で定義される基準地震動  $S_s$  とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 3.3-1 に示す。モデルに入力する地震動は一次元波動論に基づき、解放基盤表面で定義される基準地震動  $S_s$  に対する地盤の応答として評価する。解放基盤表面位置（G.L. -206.0m（震災前 O.P. -196.0m））における基準地震動  $S_s$ -1,  $S_s$ -2 及び  $S_s$ -3 の加速度時刻歴波形を図 3.3-2(1) 及び図 3.3-2(2) に示す。

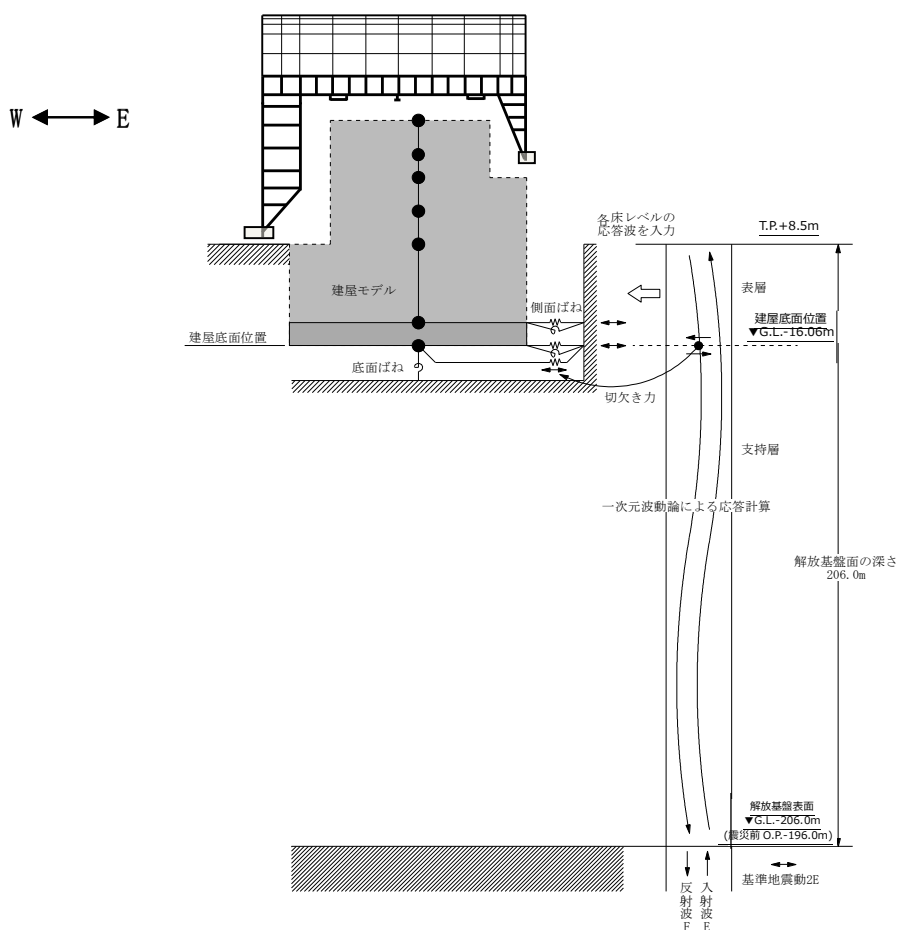
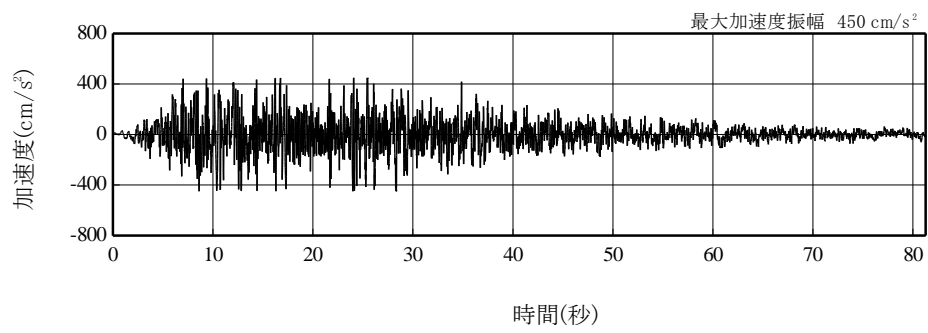
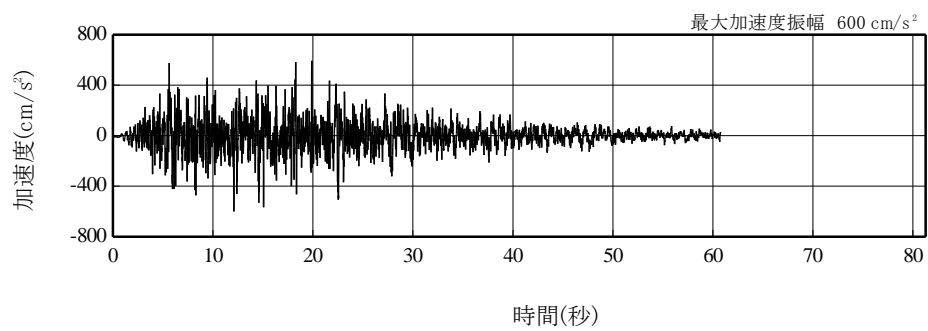


図 3.3-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

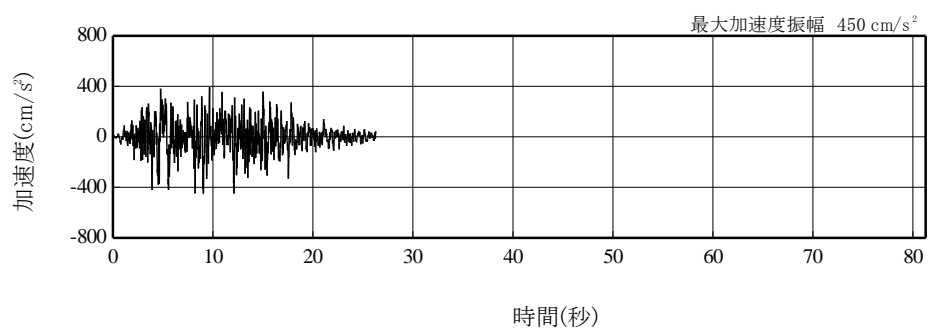
本章に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm



(Ss-1H)

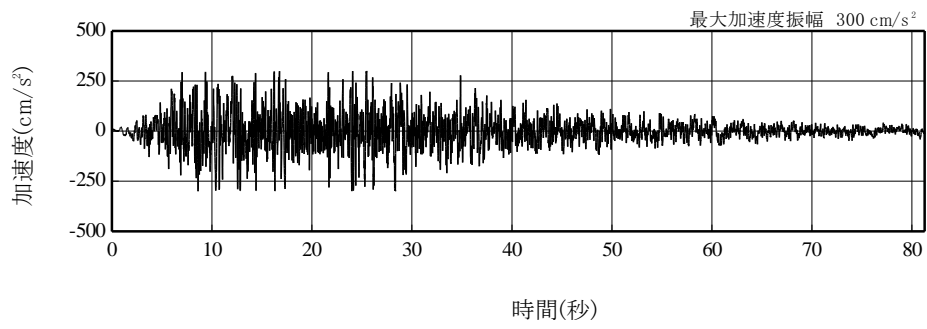


(Ss-2H)

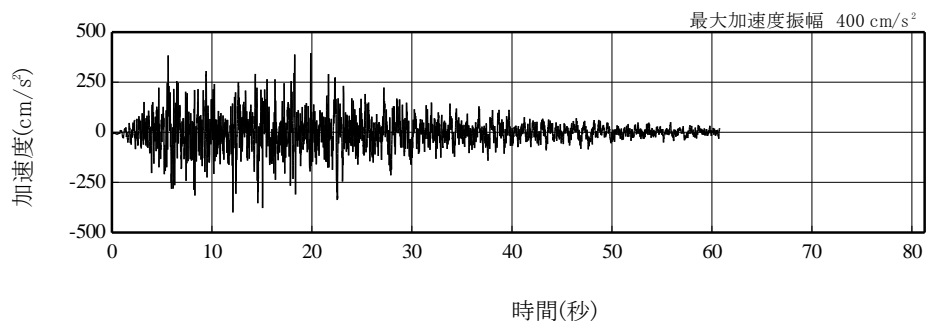


(Ss-3H)

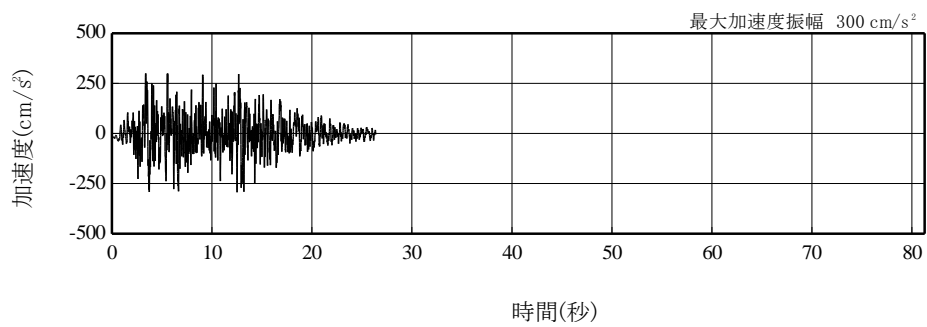
図 3.3-2(1) 解放基盤表面位置における地震動の加速度時刻歴波形(水平方向)



(Ss-1V)



(Ss-2V)



(Ss-3V)

図 3.3-2(2) 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(鉛直方向)

## 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルは、門型架構及びドーム屋根を構成する主要な鉄骨部材からなる立体架構を原子炉建屋の質点系モデルに接続した図 3.3-3 に示すモデルとし、地盤を等価ばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。ストッパ取り付け部は原子炉建屋 5 階質点 (G.L.+29.92m) と水平方向同一変位条件とし、鉛直方向の制震装置 (オイルダンパ) は原子炉建屋の 5 階床上面 4 箇所に門型架構と 5 階床の鉛直方向相対変位が減少する場合に減衰力を発揮するばねに置換して立体架構モデルに組み込んでいる。

地震応答解析に用いる物性値を表 3.3-1 に示す。門型架構及びドーム屋根の部材接合部の質点は仕上げ材等を考慮した重量とし、原子炉建屋の質点は瓦礫撤去の重量等を反映した表 3.3-2 に示す重量とする。門型架構の柱・梁及びドーム屋根の弦材は弾性部材とし、その他ブレース等は「鉄骨 X 型ブレース架構の復元力特性に関する研究」(日本建築学会構造工学論文集 37B 号 1991 年 3 月) に示されている修正若林モデルによる。また、原子炉建屋は、曲げとせん断に「JEAG 4601-1991」に示されている非線形特性を考慮する。

地盤定数は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」(東京電力株式会社, 平成 20 年 3 月 31 日) と同様とし、その結果を表 3.3-3 に示す。原子炉建屋の地盤ばねは、「JEAG 4601-1991」に示されている手法を参考にして、底面地盤を成層補正し振動アドミッタンス理論によりスウェイ及びロッキングばねを、側面地盤を Novak の方法により建屋側面ばねを評価した。

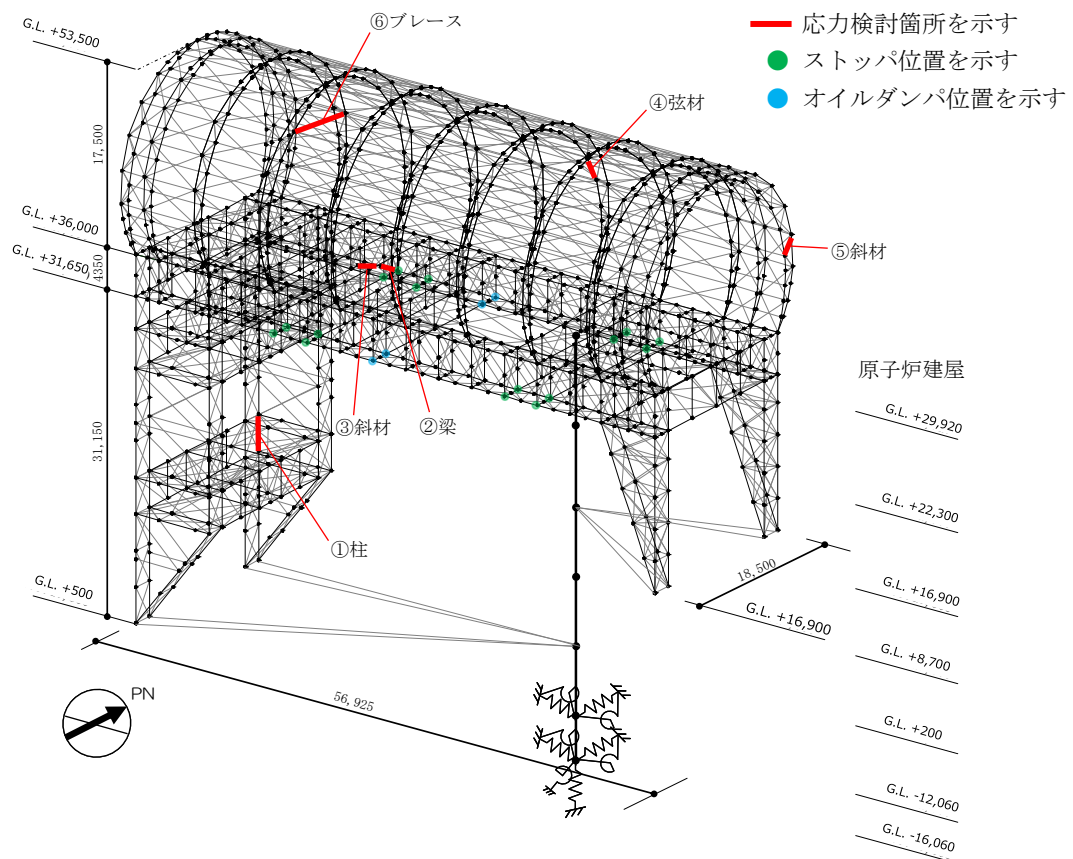


図 3.3-3 地震応答解析モデル (単位: mm)

表 3.3-1 地震応答解析に用いる物性値

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	減衰定数 h (%)	備考
架構	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0	2	SS400, SM490A STK490, STKT590

表 3.3-2 地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a) 水平 (NS) 方向

標高 G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 I <sub>G</sub> ( $\times 10^5$ kN $\cdot$ m <sup>2</sup> )	せん断断面積 A <sub>s</sub> (m <sup>2</sup> )	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
+29.92	72990	76.95		
			145.3	9598
+22.3	119490	238.33		
			146.1	29271
+16.9	111140	204.58		
			237.3	56230
+8.7	130160	239.58		
			208.6	60144
+0.2	252510	464.88		
			458.7	112978
-12.06	301020	554.17		
			2697.8	496620
-16.06	127000	233.79		
合計	1114310		ヤング係数 E <sub>c</sub> $2.57 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> ) せん断弾性係数 G $1.07 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> ) ポアソン比 $\nu$ 0.20 減衰 h 5%	

\* 「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書（その2）」（東京電力株式会社，平成23年7月13日）において用いた各階重量に瓦礫撤去等による重量増減を考慮した数値（ただし，門型架構の重量12800kN及びドーム屋根重量3200kNは含まない）

表 3.3-2 地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(b) 水平 (EW) 方向

標高 G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_S (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I ( $\text{m}^4$ )
+29.92	72990	56.10		
+22.3	119490	124.49	61.9	5665
+16.9	111140	204.58	123.4	12460
+8.7	130160	239.58	204.1	41352
+0.2	252510	693.32	226.6	61084
-12.06	301020	826.50	431.3	135128
-16.06	127000	348.72	2697.8	740717
合計	1114310		ヤング係数 $E_c$ $2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$ せん断弾性係数 $G$ $1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$ ポアソン比 $\nu$ 0.20 減衰 $h$ 5%	

(c) 鉛直方向

標高 G. L. (m)	質点重量* W (kN)	軸断面積 $A_N (\text{m}^2)$	軸ばね剛性 $K_A (\times 10^8 \text{ kN}/\text{m})$
+29.92	72990		
+22.3	119490	192.0	6.48
+16.9	111140	266.3	12.67
+8.7	130160	431.7	13.53
+0.2	252510	423.0	12.79
-12.06	301020	691.2	14.49
-16.06	127000	2697.8	173.33
合計	1114310	ヤング係数 $E_c$ $2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$ せん断弾性係数 $G$ $1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$ ポアソン比 $\nu$ 0.20 減衰 $h$ 5%	

\* 「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書(その2)」(東京電力株式会社, 平成23年7月13日)において用いた各階重量に瓦礫撤去等による重量増減を考慮した数値(ただし, 門型架構の重量12800kN及びドーム屋根重量3200kNは含まない)

表 3.3-3 地盤定数の設定結果

(a) Ss-1

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0 (震災前 0.P.-196.0)		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(b) Ss-2

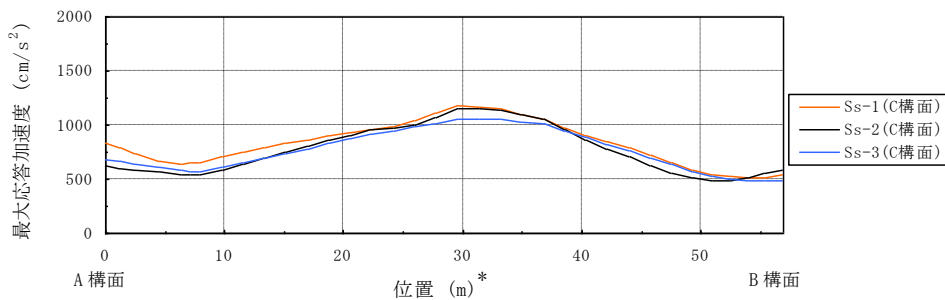
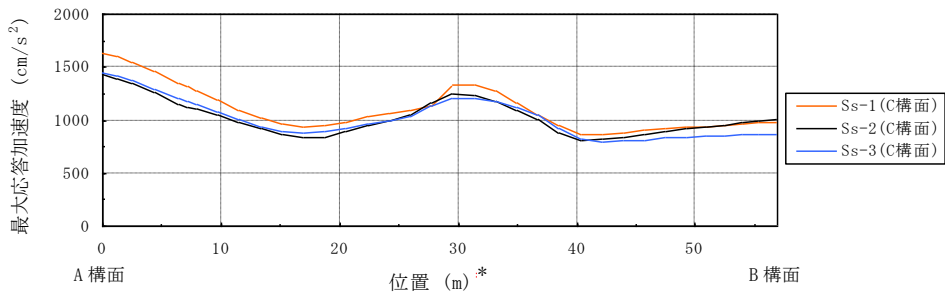
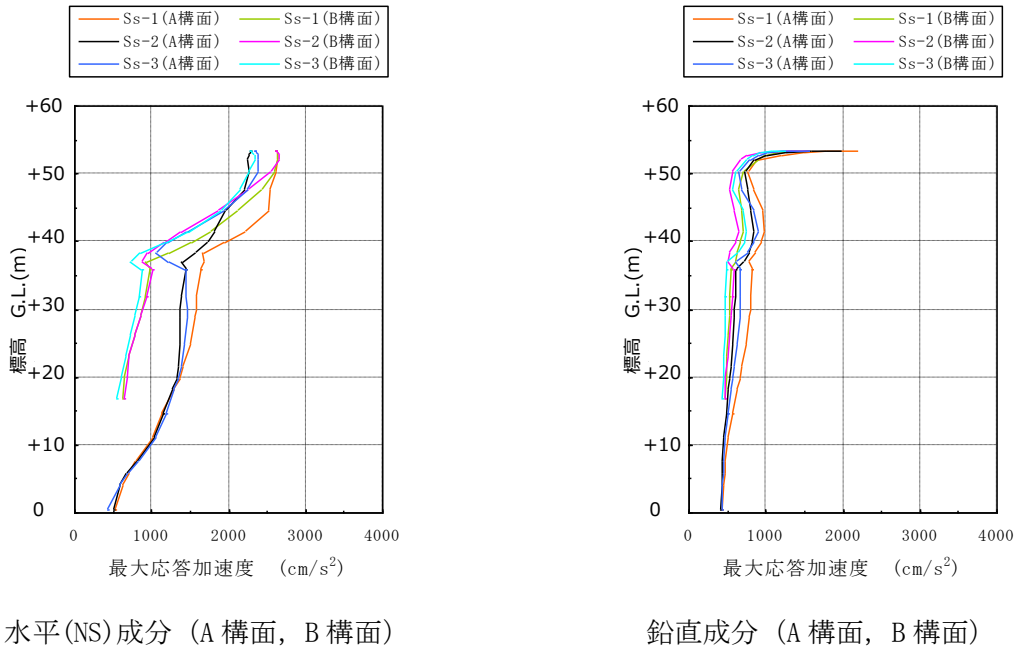
標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.76	3.41	0.81	8.08	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.53	4.36	0.81	10.27	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.56	5.63	0.81	13.19	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.29	6.53	0.81	15.26	3	88.0
-206.0 (震災前 0.P.-196.0)		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(c) Ss-3

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.25	2.62	0.86	6.63	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0 (震災前 0.P.-196.0)		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

### 3) 地震応答解析結果

最大応答加速度分布を図 3.3-4(1) 及び図 3.3-4(2) に示す。



注：燃料取扱設備が門型架構の中央に位置する場合

(図 3.2-1 の位置 D) を示す

\*：位置は A 構面側からの距離を示す

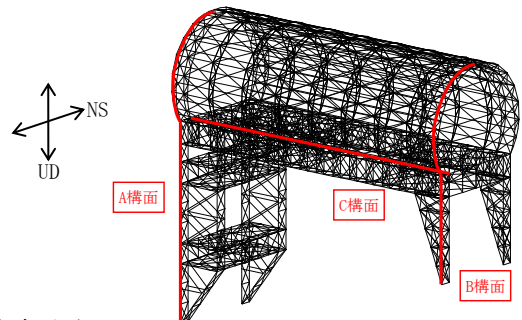
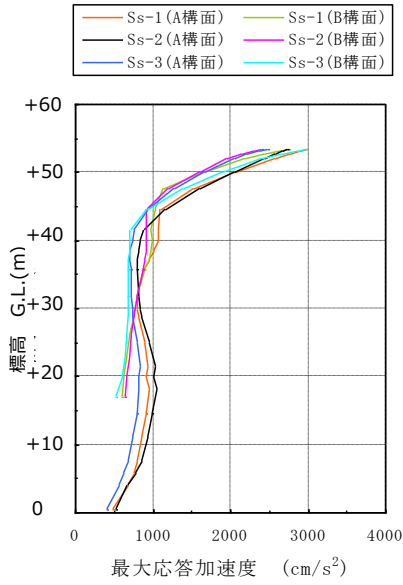
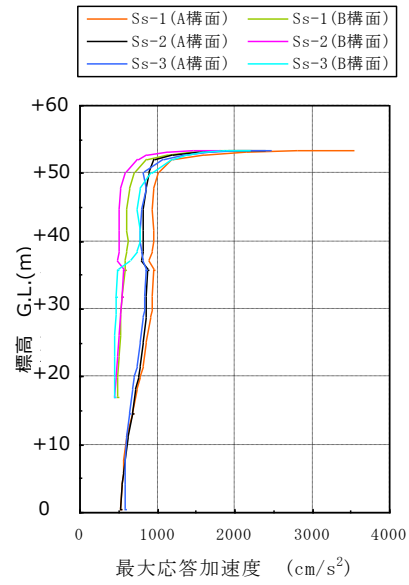


図 3.3-4(1) 最大応答加速度分布

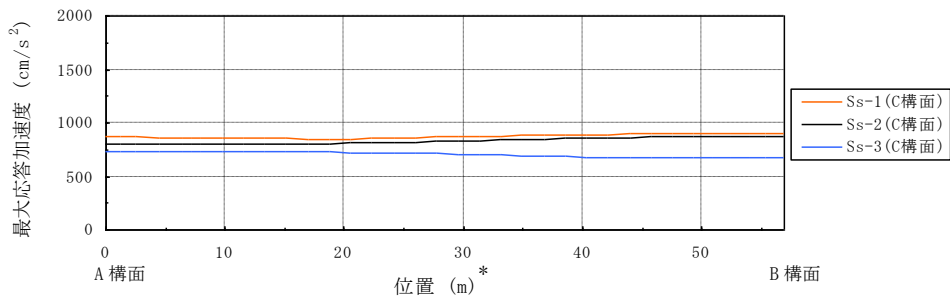




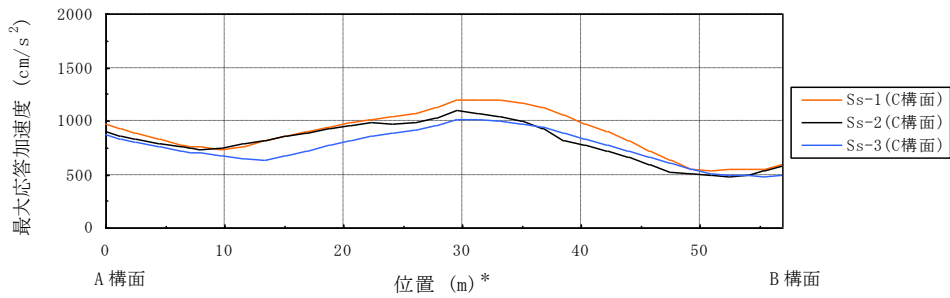
水平(EW)成分 (A 構面, B 構面)



鉛直成分 (A 構面, B 構面)



水平(EW)成分 (C 構面)



鉛直成分 (C 構面)  
(EW 方向)

注：燃料取扱設備が門型架構の中央に位置する場合  
(図 3.2-1 の位置 D) を示す

\*：位置は A 構面側からの距離を示す

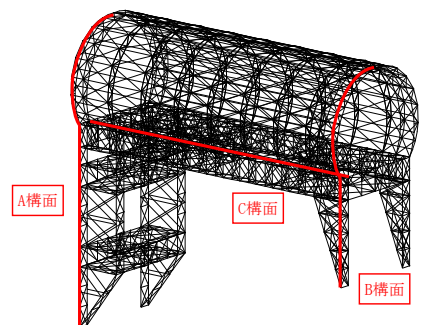
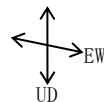


図 3.3-4(2) 最大応答加速度分布

#### 4) 波及的影響の評価

門型架構は、JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会，2002 年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は 1/75 以下，層の塑性率は 4 以下，部材の塑性率は 5 以下」\*）を満足することを確認する。ドーム屋根は，柱・梁によるフレームを構成しないため，JSCA 性能メニューのうち部材の塑性率のクライテリアを満足することを確認する。

なお，解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター，平成 19 年 7 月 20 日）に示されるクライテリア（層間変形角は 1/100 以下，層の塑性率は 2 以下，部材の塑性率は 4 以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し，安全性を確認する。

\*：北村春幸，宮内洋二，浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」，日本建築学会構造系論文集，第 604 号，2006 年 6 月

#### ・層間変形角の検討

門型架構の最大応答層間変形角を表 3.3-4 に示す。

検討の結果，最大応答層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 3.3-4 最大応答層間変形角の検討結果

検討箇所	地震波	入力方向(位置)*	最大応答値	クライテリア	判定
東側 G. L. +36.00 (m) ～G. L. +16.90 (m)	Ss-1	NS (A)	1/820	1/75	O. K.
		EW (B)	1/990	1/75	O. K.
	Ss-2	NS (B)	1/990	1/75	O. K.
		EW (B)	1/1000	1/75	O. K.
	Ss-3	NS (B)	1/990	1/75	O. K.
		EW (B)	1/1000	1/75	O. K.
西側 G. L. +36.00 (m) ～G. L. +0.50 (m)	Ss-1	NS (A)	1/720	1/75	O. K.
		EW (B)	1/1600	1/75	O. K.
	Ss-2	NS (C)	1/860	1/75	O. K.
		EW (B)	1/1600	1/75	O. K.
	Ss-3	NS (C)	1/800	1/75	O. K.
		EW (B)	1/1800	1/75	O. K.

\*：図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

・塑性率の検討

部材の塑性率は、引張及び圧縮に対して最大軸力時のひずみを引張耐力または座屈耐力時のひずみで除した値で表される。最大軸力時のひずみが引張耐力または座屈耐力時のひずみ未満の場合は弾性であり塑性率は1未満となる。最大応答軸力を引張耐力または座屈耐力で除した値を耐力比と定義し、表 3.3-5 に検討結果を示す。なお、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度（STKT590 材を除く）は「平成 19 年国土交通省告示第 625 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

表 3.3-5 より全てのケースで耐力比が 1 を下回ることから塑性率は 1 未満となり、クライテリアを満足することを確認した。

表 3.3-5 耐力比の検討結果

部位*1		部材形状 (mm)	地震波	入力方向 (位置)*2	耐力比		判定	
門型架構	①	柱	H-350×350 ×12×19 <SM490A>	Ss-2	NS (C)	C/Cu	0.50	OK
	②	梁	H-350×350 ×12×19 <SM490A>	Ss-1	NS (C)	C/Cu	0.45	OK
	③	斜材	2[s-150×75 ×6.5×10 <SM490A>	Ss-1	NS (C)	C/Cu	0.75	OK
ドーム屋根	④	弦材	φ-267.4×6.6 <STKT590>	Ss-1	NS (D)	C/Cu	0.63	OK
	⑤	斜材	φ-139.8×4.5 <STK490>	Ss-1	EW (D)	C/Cu	0.90	OK
	⑥	ブレース	φ-114.3×4.5 <STK490>	Ss-2	EW (C)	C/Cu	0.45	OK

\*1：①～⑥の符号は図 3.3-3 の応力検討箇所を示す

\*2：図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

C：部材軸方向の圧縮力の最大値

Cu：座屈耐力

T：部材軸方向の引張力の最大値

Tu：引張耐力

(3) 水平振れ止め装置（ストップ）の耐震性に対する検討

ストップ（鋼製）の耐震性に対する検討は、材料強度を基準強度F値の1.1倍としたせん断耐力とし、耐力比が1以下になることを確認する。図3.3-5にストップ概要図を示す。

表3.3-6に耐力比が最大となる部位の断面検討結果を示す。

断面検討の結果、全てのストップに対する耐力比が1以下になることを確認した。

表 3.3-6 ストップ（シアキ）の断面検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最大応答 ストップ反力 Q (kN)	せん断耐力 Qu (kN)	耐力比 Q/Qu	判定
東側ストップ	Ss-1	EW (D)	3970	9480	0.42	O. K.

\*：図3.2-1に示す燃料取扱設備の位置を示す

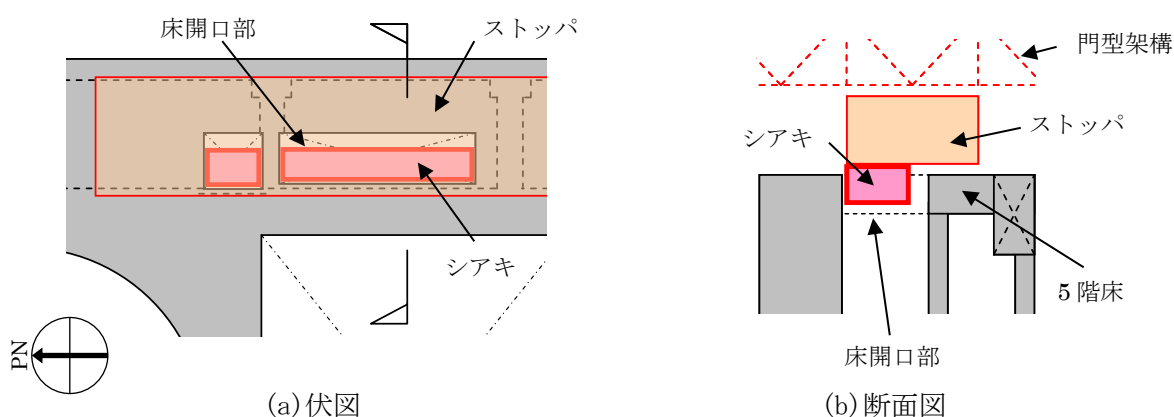


図 3.3-5 ストップ概要図

(4) 制震装置（オイルダンパ）の耐震性に対する検討

原子炉建屋の5階床上面4箇所に設置するオイルダンパ概念図を図3.3-6に示す。

オイルダンパの耐震性に対する検討は、架構と原子炉建屋5階床がオイルダンパを介して各々変形する時の相対的な応答値がオイルダンパの許容値以下であることを確認する。

表3.3-7に最大応答値と許容値を比較した結果を示す。

検討の結果、全てのオイルダンパで最大応答値が許容値以下になることを確認した。

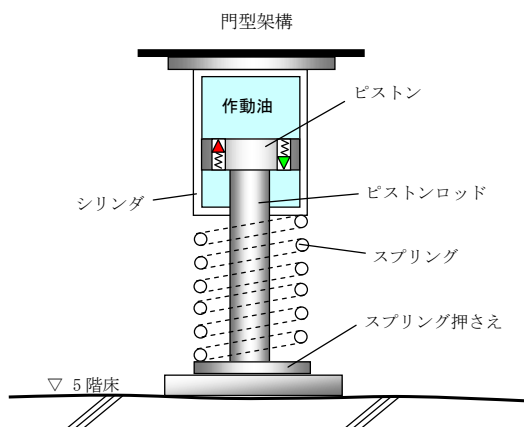


図 3.3-6 オイルダンパ概念図

表 3.3-7 オイルダンパの検討結果

検討	地震波	入力方向 (位置) *	最大応答値	許容値	判定
オイルダンパ変位 (mm)	Ss-3	NS (D)	72	±100	0. K.
オイルダンパ速度 (m/s)	Ss-1	NS (D)	0.48	1.00	0. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

(5) 基礎の耐震性に対する検討

基礎の浮き上がりに対しては基礎反力（圧縮力を正）の最小値が 0 以上であることを確認し、基礎のすべりに対しては基礎反力の水平力が摩擦耐力以下であることを確認する。

1) 基礎浮き上がりの検討

表 3.3-8 に基礎反力が最小となる部位の基礎浮き上がりの検討結果を示す。  
検討の結果、全ての基礎の最小圧縮力が 0 以上になることを確認した。

表 3.3-8 基礎浮き上がりの検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置) *	最小圧縮力 N(kN)	判定
東側柱脚 (北側)	Ss-3	NS (C)	227	0. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

2) 基礎すべりの検討

表 3.3-9 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。  
検討の結果、全ての耐力比が 1 以下になることを確認した。

表 3.3-9 基礎すべりの検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置) *	最大水平力 Q(kN)	摩擦耐力 Vu(kN)	耐力比 Q/Vu	判定
東側柱脚	Ss-1	EW (D)	2810	4780	0.59	0. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

(6) 原子炉建屋接触部の耐震性に対する検討

1) ストッパ接触部

ストッパ接触部の耐震性の検討では、最大ストッパ水平反力が、既存躯体の支圧耐力以下になることを確認する。なお、支圧耐力は、原子炉建屋の設計基準強度 (22.1N/mm<sup>2</sup>) を用いて「プレストレストコンクリート設計施工規準・同解説」に基づき算出する。

表 3.3-10 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、全てのストッパ接触部に対する耐力比が 1 以下になることを確認した。

表 3.3-10 ストッパ接触部の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置) *	最大ストッパ 水平反力 N (kN)	支圧耐力 Nu (kN)	耐力比 N/Nu	判定
西側ストッパ	Ss-1	NS (C)	10400	19600	0.54	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

2) オイルダンパ接触部

オイルダンパ接触部の耐震性の検討では、最大オイルダンパ鉛直反力が、既存躯体の支圧耐力以下になることを確認する。なお、支圧耐力は、原子炉建屋の設計基準強度 (22.1N/mm<sup>2</sup>) を用いて「プレストレストコンクリート設計施工規準・同解説」に基づき算出する。

表 3.3-11 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、全てのオイルダンパ接触部に対する耐力比が 1 以下になることを確認した。

$$N_u = f_n \cdot A_l$$

$$f_n = f_{na} \sqrt{\frac{A_c}{A_l}} \quad \text{ただし,} \quad \sqrt{\frac{A_c}{A_l}} \leq 2.0 *$$

ここに、

$f_n$  : 短期許容支圧応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

$f_{na}$  :  $F_{ci}/1.25$  または  $0.6F_c$  のうち小さいほうの値 (N/mm<sup>2</sup>)

$F_{ci}$  : コンクリート強度、特に定めのない場合には 20N/mm<sup>2</sup> ( $F_{ci}=22.1\text{N/mm}^2$ )

$A_c$  : 支圧端から離れて応力が一様分布となったところのコンクリートの支承面積 (mm<sup>2</sup>)

$A_l$  : 局部圧縮を受ける支圧面積 (mm<sup>2</sup>)

( $500 \times 500 = 2.50 \times 10^5 \text{mm}^2$ )

表 3.3-11 オイルダンパ接触部の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置) *	最大オイルダンパ 鉛直反力 N (kN)	支圧耐力 Nu (kN)	耐力比 N/Nu	判定
南側端部	Ss-1	NS (D)	1250	6620	0.19	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

3) 基礎設置部

基礎設置部の耐震性の検討では、柱脚の鉛直反力により生じる直下壁の最大軸力が壁の軸耐力以下であることを確認する。

表 3.3-12 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、全ての基礎設置部に対する耐力比が 1 以下になることを確認した。

$$N_u = s f_c \cdot A_1$$

ここに、

$s f_c$  : 短期許容圧縮応力度 (N/mm<sup>2</sup>) ( $s f_c = 22.1 \times 2/3 = 14.7$ )

$A_1$  : 柱脚部支配面積 (mm<sup>2</sup>)

表 3.3-12 壁の圧縮力の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置) *	最大軸力 N (kN)	軸耐力 Nu (kN)	耐力比 N/Nu	判定
東側柱脚 (南側)	Ss-3	NS (B)	7430	25900	0.29	O. K.

\* : 図 3.2-1 に示す燃料取扱設備の位置を示す

## (7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

### 1) 検討方針

架構の設置に伴う原子炉建屋の耐震性の評価は、耐震安全上重要な設備への波及的影響防止の観点から、地震応答解析により得られる耐震壁のせん断ひずみが鉄筋コンクリート造耐震壁の終局限界に対応した評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。

### 2) 原子炉建屋の地震応答解析

#### ・解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「(2) 架構の耐震性に対する検討」で示した基準地震動  $S_s$  とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図は図 3.3-1 と同様であり、モデルに入力する地震動は「(2) 架構の耐震性に対する検討」に示したものと同一である。

#### ・地震応答解析モデル

原子炉建屋の地震応答解析モデルは、図 3.3-7 に示すように質点系でモデル化し、地盤を等価なばねで評価した建屋—地盤連成系モデルとする。

地震応答解析モデルの諸元は、「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書（その2）」（東京電力株式会社，平成 23 年 7 月 13 日）に示される内容に、瓦礫撤去等による重量増減及び新規に設置する燃料取り出し用カバーの重量を考慮した。地震応答解析モデルの諸元のうち表 3.3-2 から変更した質点重量及び回転慣性重量を表 3.3-13 に示す。

地盤定数は、「(2) 架構の耐震性に対する検討」で示した地盤定数と同一である。

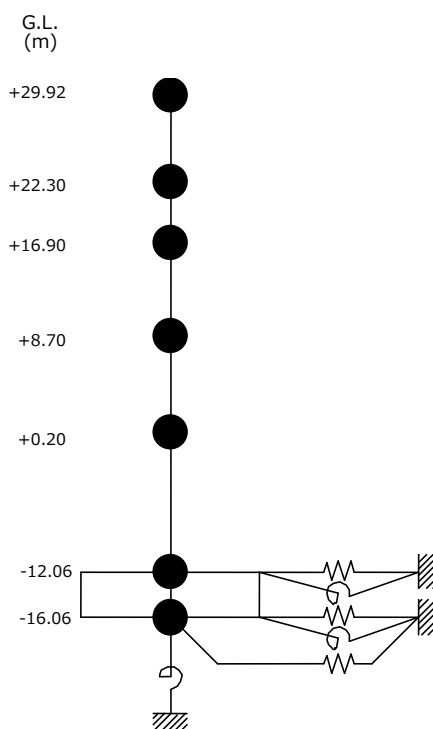


図 3.3-7 原子炉建屋の地震応答解析モデル



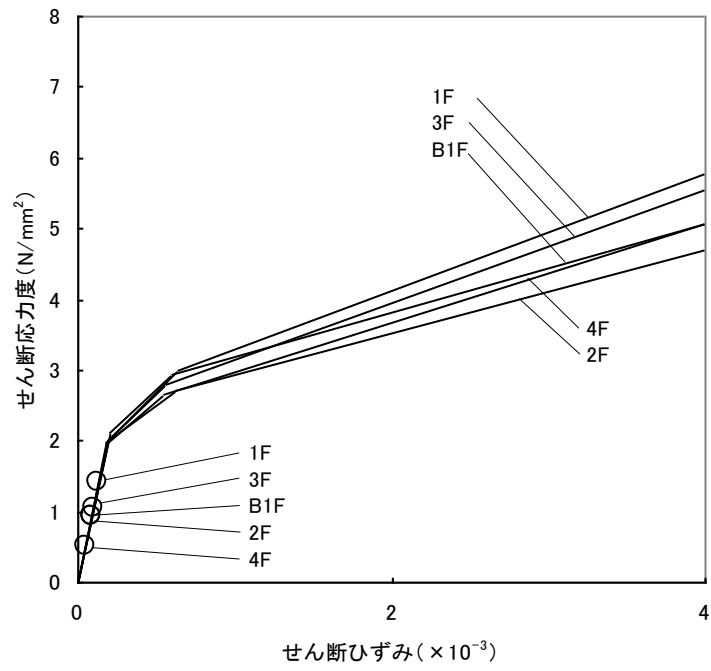
表 3.3-13 原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元（水平方向）

標高 G. L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	
		水平(NS)方向	水平(EW)方向
+29.92	87590	92.34	67.32
+22.3	119490	238.33	124.49
+16.9	111340	204.95	204.95
+8.7	130160	239.58	239.58
+0.2	253710	467.09	696.62
-12.06	301020	554.17	826.50
-16.06	127000	233.79	348.72
合計	1130310		

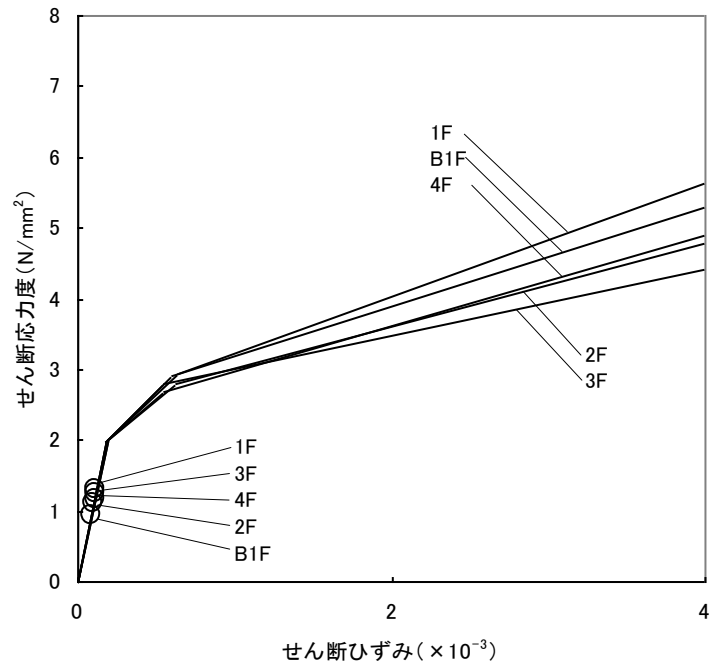
### 3) 検討結果

基準地震動  $S_s$  に対する最大応答値を、「JEAG 4601-1991」に基づき設定した耐震壁のせん断スケルトン曲線上にプロットした結果を、図 3.3-8 から図 3.3-10 に示す。

検討の結果、地震応答解析により得られる最大応答値は、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) に対して十分に余裕があることを確認した。

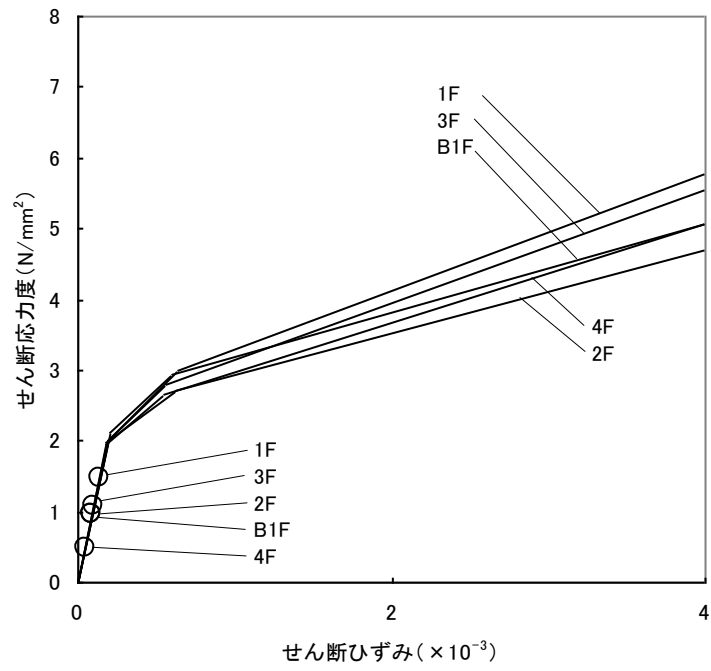


(a) NS 方向

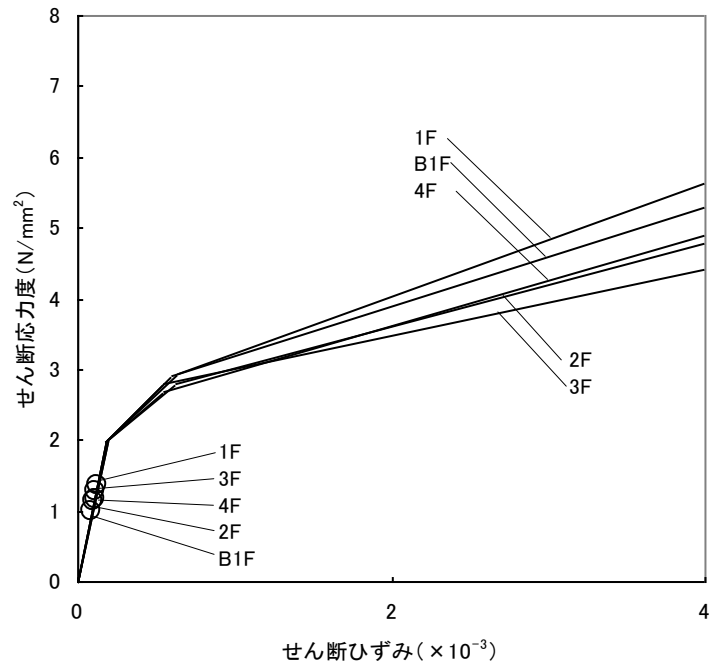


(b) EW 方向

図 3.3-8 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-1)

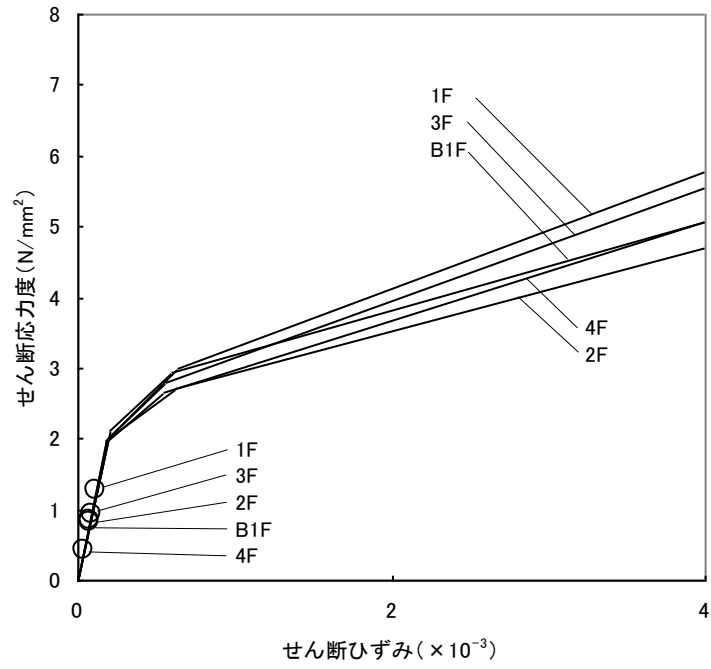


(a) NS 方向

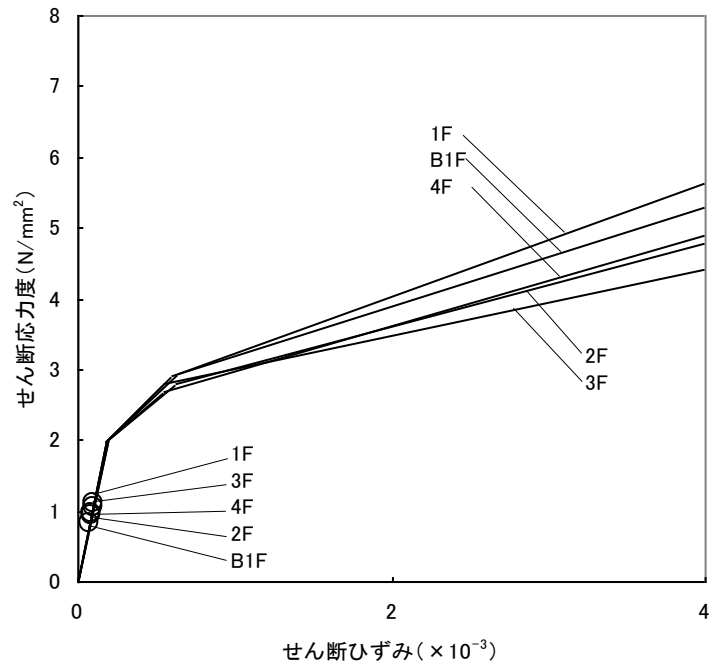


(b) EW 方向

図 3.3-9 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-2)



(a) NS 方向



(b) EW 方向

図 3.3-10 せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-3)

#### 4. 2号機燃料取り出し用構台の構造強度及び耐震性について

##### 4.1 概要

###### 4.1.1 一般事項

2号機燃料取り出し用構台は、原子炉建屋の南側に設置される基礎・構台・前室と、原子炉建屋に延伸して設置されるランウェイガーダ、弾性支承、オイルダンパから構成され、改良地盤上に設置する。また、ランウェイガーダ上を燃料取扱設備が走行する。ここでは、本燃料取り出し用構台の構造強度と耐震性について検討を行う。なお、2021年9月8日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆への被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして適切な耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計とし、具体的にはB+クラスに分類される燃料取出設備の間接支持構造物として、B+クラス相当の地震力に対する耐震評価を行う。なお、耐震クラス分類に係わる被ばく評価については、「別冊28 2号機 使用済燃料プールからの燃料取り出し設備に係る補足説明」（以下、別冊28と記載）P113～P130参照。

燃料取り出し用構台の構造強度は一次設計に対応した許容応力度設計を実施し、耐震性は検討用地震動（最大加速度900gal）の1/2の最大加速度450galの地震動（以下、1/2Ss450と記載）に対する地震応答解析を実施し、燃料取り出し用構台の損傷が原子炉建屋、使用済燃料プール及び使用済燃料ラックに波及的影響を及ぼさないことを確認する。ここで、波及的影響の確認は、燃料取り出し用構台が崩壊機構に至らないことを確認する。検討用地震動（最大加速度900gal）は「東京電力福島第一原子力発電所の外部事象に対する防護の検討について」（東京電力株式会社、平成26年10月3日、特定原子力施設監視・評価検討会（第27回））にて提示した地震動とする。

なお、2号機燃料取り出し用構台については、実施計画変更認可申請の審査期間中に、適用地震動見直しが行われたことから、一部の評価については、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果中間報告書」（東京電力株式会社、平成20年3月31日）にて作成した解放基盤表面で定義される新規制基準によらない従来のSs（最大加速度600gal）（以下、Ss600と記載）に対する地震応答解析結果との比較から耐震性を確認する。図4.1.1-1に燃料取り出し用構台のイメージを示す。

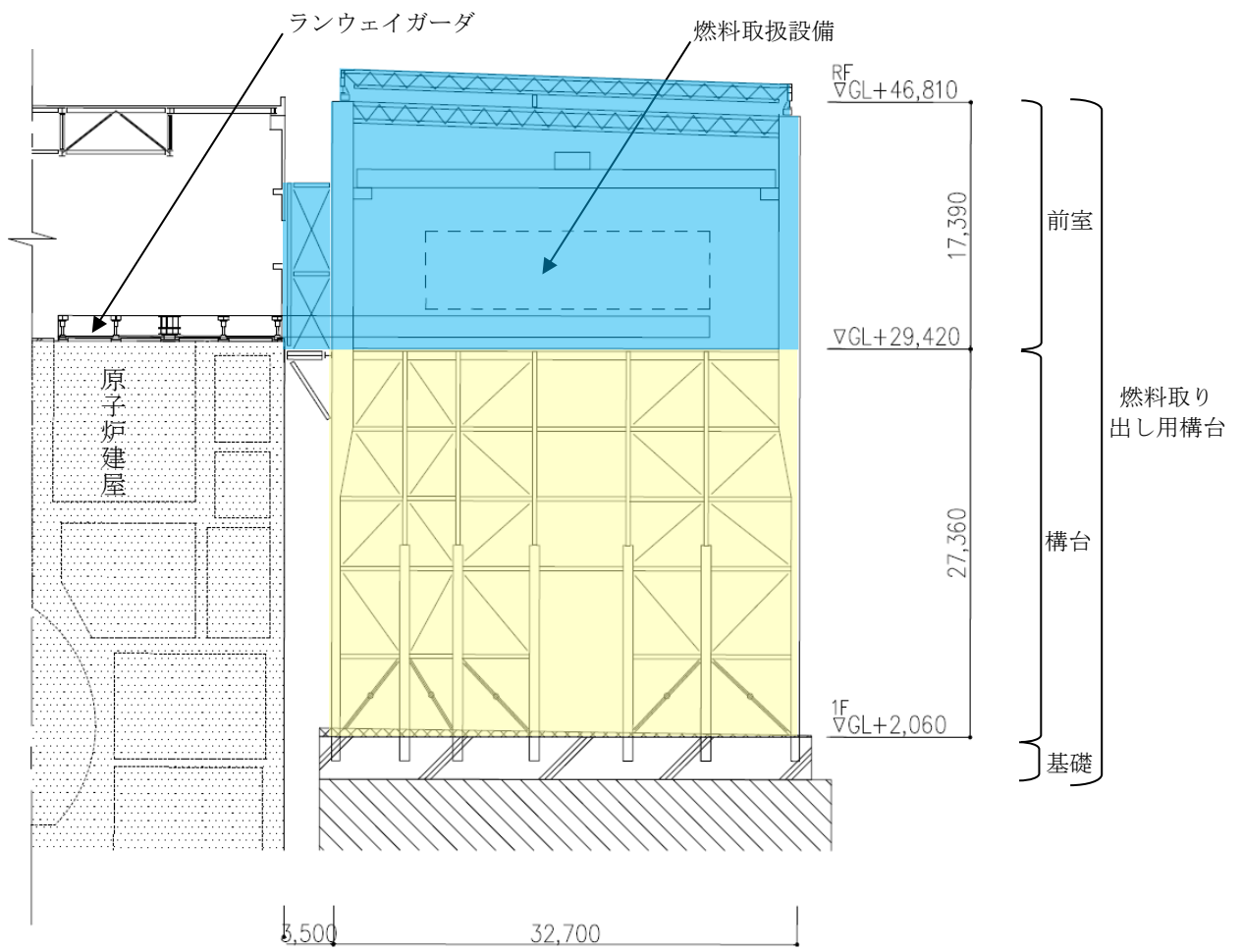


図 4.1.1-1 燃料取り出し用構台のイメージ (単位: mm)

燃料取り出し用構台の検討は原則として下記の法規及び基規準類に準拠して行う。

- (1) 建築基準法・同施行令及び関連告示
- (2) 原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，改訂版 2013 年 8 月発行）
- (3) 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2018 年 12 月）
- (4) 鋼構造設計規準－許容応力度設計法－（日本建築学会，2005 年 9 月）
- (5) 2015 年版 建築物の構造関係技術基準解説書(国土交通省住宅局建築指導課・国土交通省  
国土技術政策総合研究所・独立行政法人建築研究所・日本建築行政会議，2015 年)
- (6) 鋼構造塑性設計指針（日本建築学会，2010 改定）
- (7) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1987)（日本電気協会 電気技術基準調査委員会，  
昭和 62 年 8 月 改訂）
- (8) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1991 追補版)（日本電気協会 電気技術基準調査  
委員会，平成 3 年 6 月 発刊）
- (9) 原子力発電所耐震設計技術規程(JEAC 4601-2015)（日本電気協会 原子力規格委員会，平成  
27 年 6 月 改定）
- (10) 乾式キャスク使用済燃料中間建屋の基礎構造の設計技術規程(JEAC 4616-2009)（日本電気協  
会 原子力規格委員会，平成 22 年 4 月 発刊）

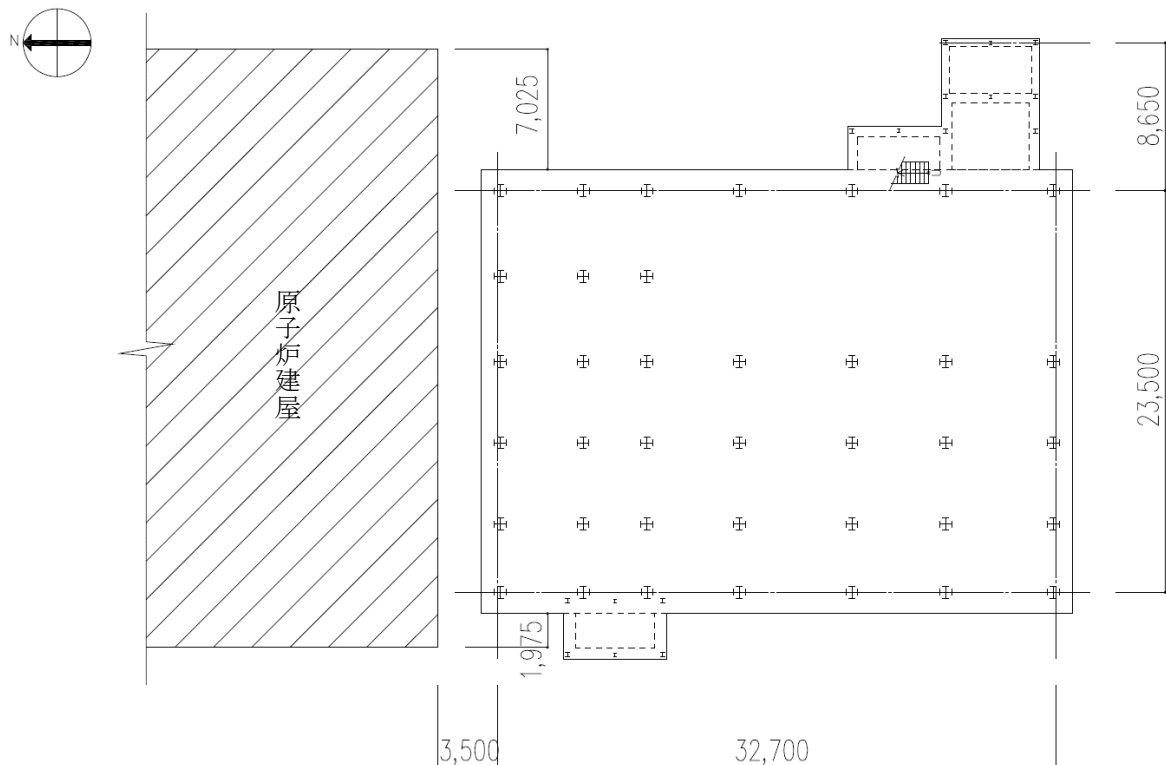


#### 4.1.2 構造概要

燃料取り出し用構台は、東西方向 27.0m、南北方向 32.7m、高さ 44.75m の矩形架構で構造種別は鉄骨造である。燃料取り出し用構台の概要を以下に示す。なお、オイルダンパ、弾性支承の設置目的及び役割については、別冊 2 8 P6 参照。

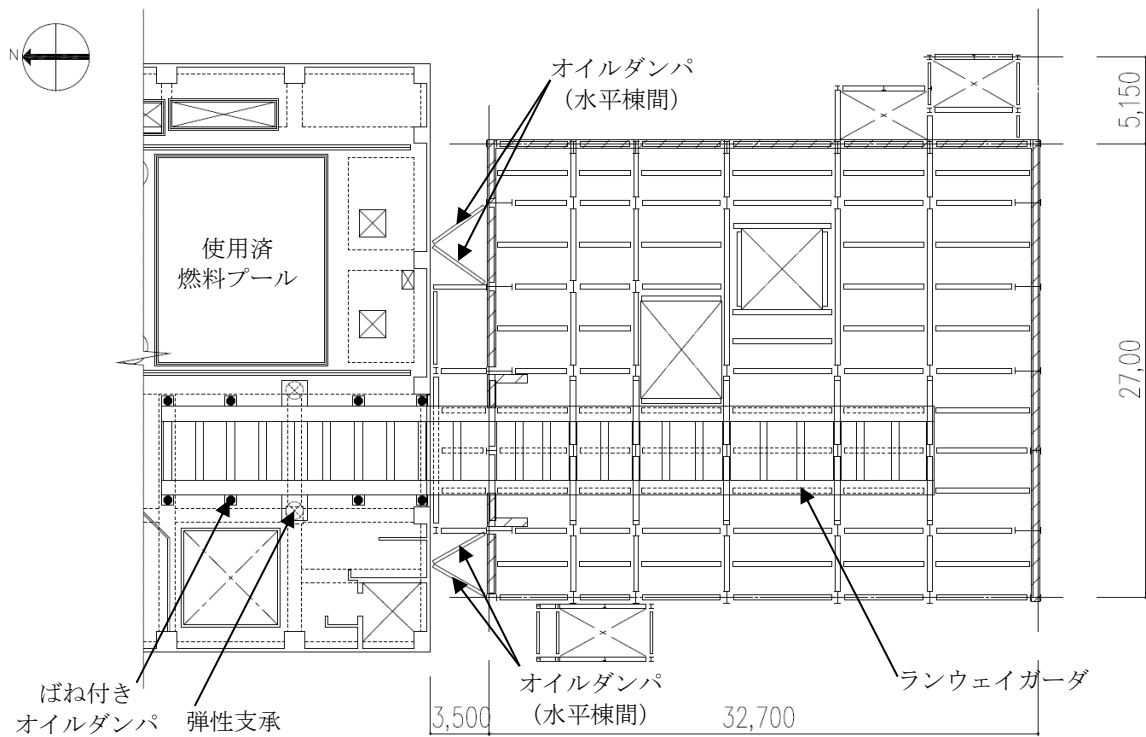
- (1) 原子炉建屋と燃料取り出し用構台の間にオイルダンパ（水平棟間）を設置する。
- (2) 構台は 5 層の柱・梁・ブレース及びオイルダンパ（鉛直）から成る架構とし、オイルダンパ（鉛直）はブレース状に配置する。
- (3) 前室は、柱・梁・ブレース及び屋根トラスから成る架構とする。
- (4) ランウェイガーダは、原子炉建屋南側外壁に開口を設け、構台と原子炉建屋に跨がる形で設置する。構台内では EW 方向の大梁に接続し、水平方向、鉛直方向ともに支持する。原子炉建屋内では水平方向の支持は行わないため、構台からの片持形式であり、鉛直方向は弾性支承で支持する。なお、弾性支承と原子炉建屋床面の固定は行わない。また、ランウェイガーダと原子炉建屋床面との間にばね付きオイルダンパを設置する。ばね付きオイルダンパの下面にはすべり材を取付け、原子炉建屋床面上に設置したすべり板との間で接触させ、水平方向に滑動可能な構造とする。

燃料取り出し用構台の概要図を図 4.1.2-1～図 4.1.2-3 に示す。

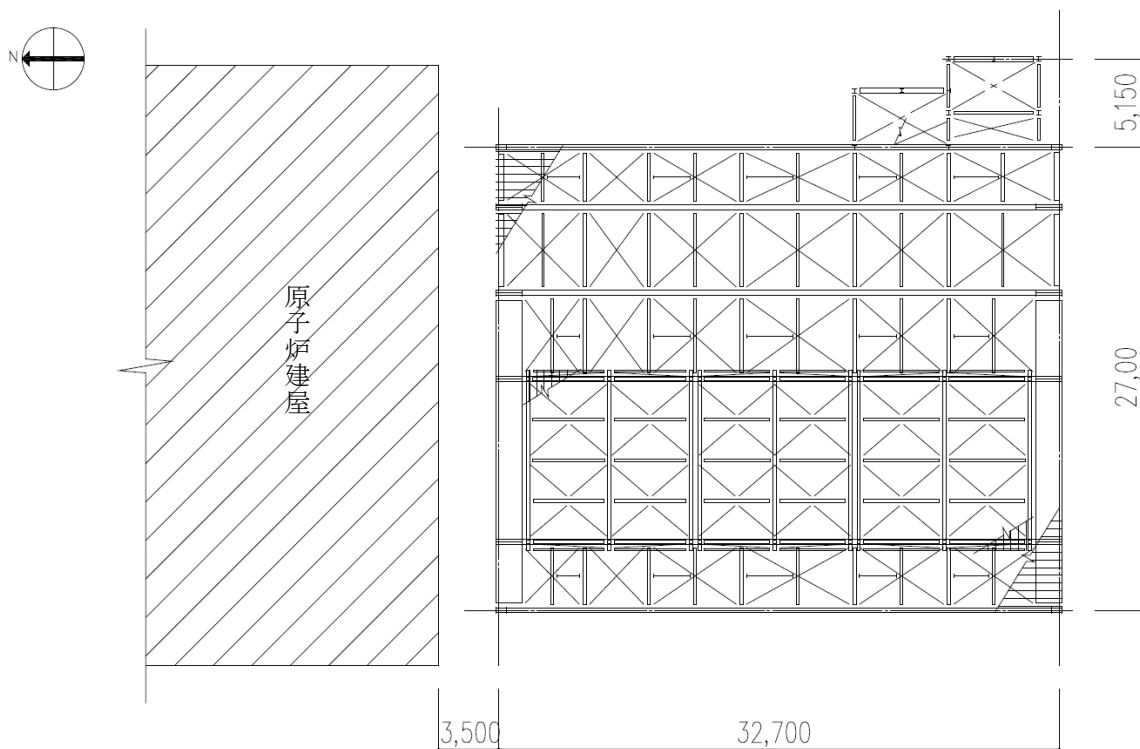


(a) 1F 伏図 (G. L. 2, 020)

図 4.1.2-1 燃料取り出し用構台の概要（単位：mm）

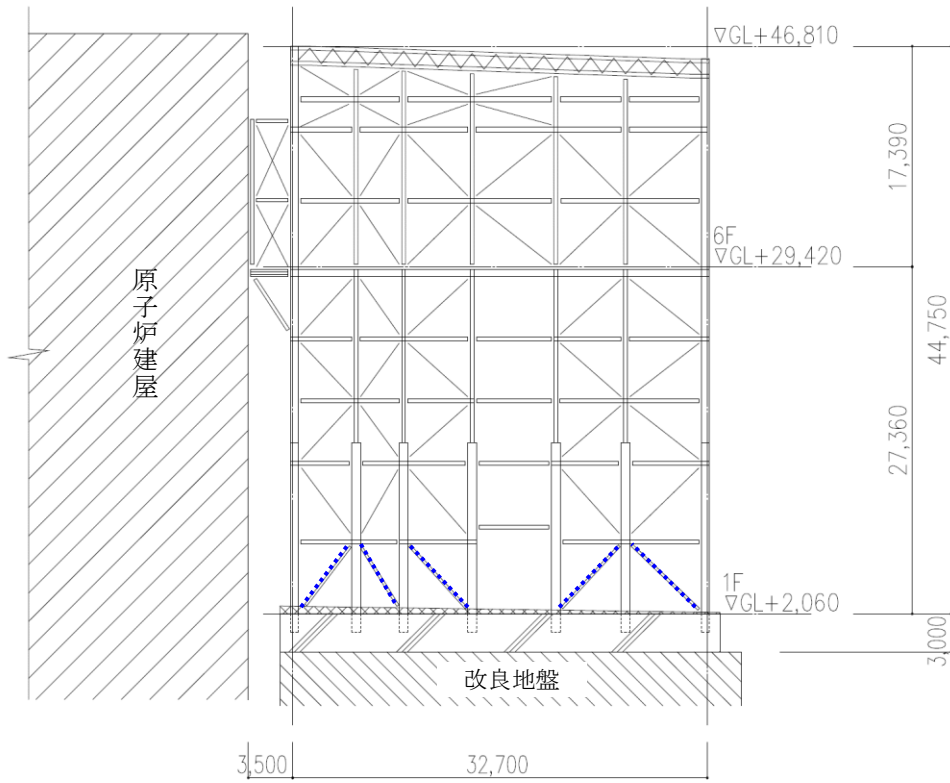


(a) 6F 伏図 (G. L. 29, 420)

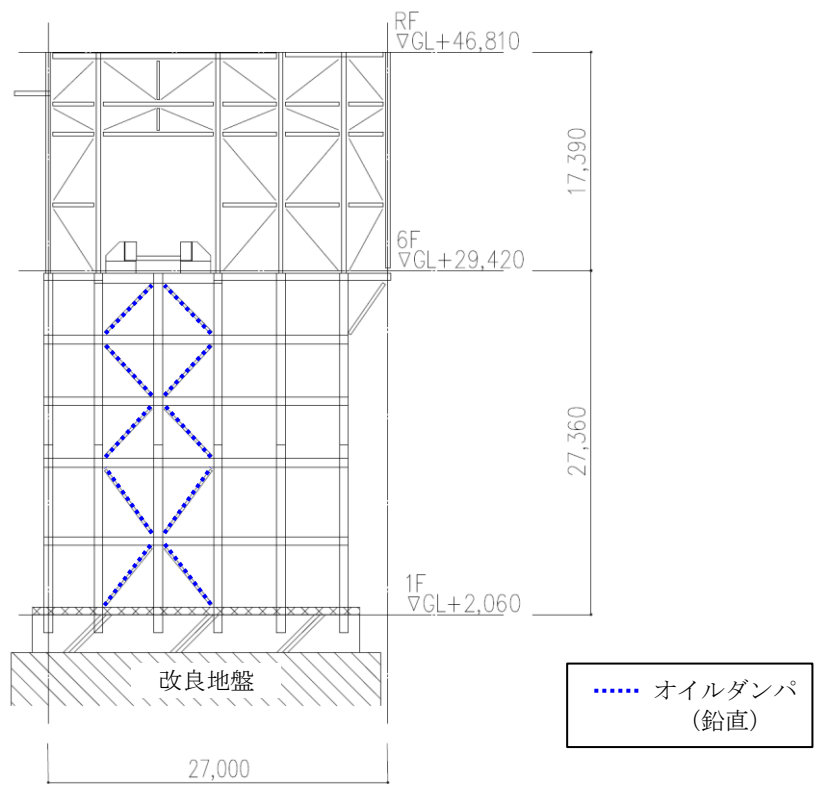


(b) 屋根伏図

図 4. 1. 2-2 燃料取り出し用構台の概要 (単位 : mm)



(a) 構台最西側軸組図



(b) 構台最北側軸組図

図 4.1.2-3 燃料取り出し用構台の概要 (単位: mm)

#### 4.1.3 検討フロー

燃料取り出し用構台の構造強度及び耐震性の検討フローを図 4.1.3-1 に示す。

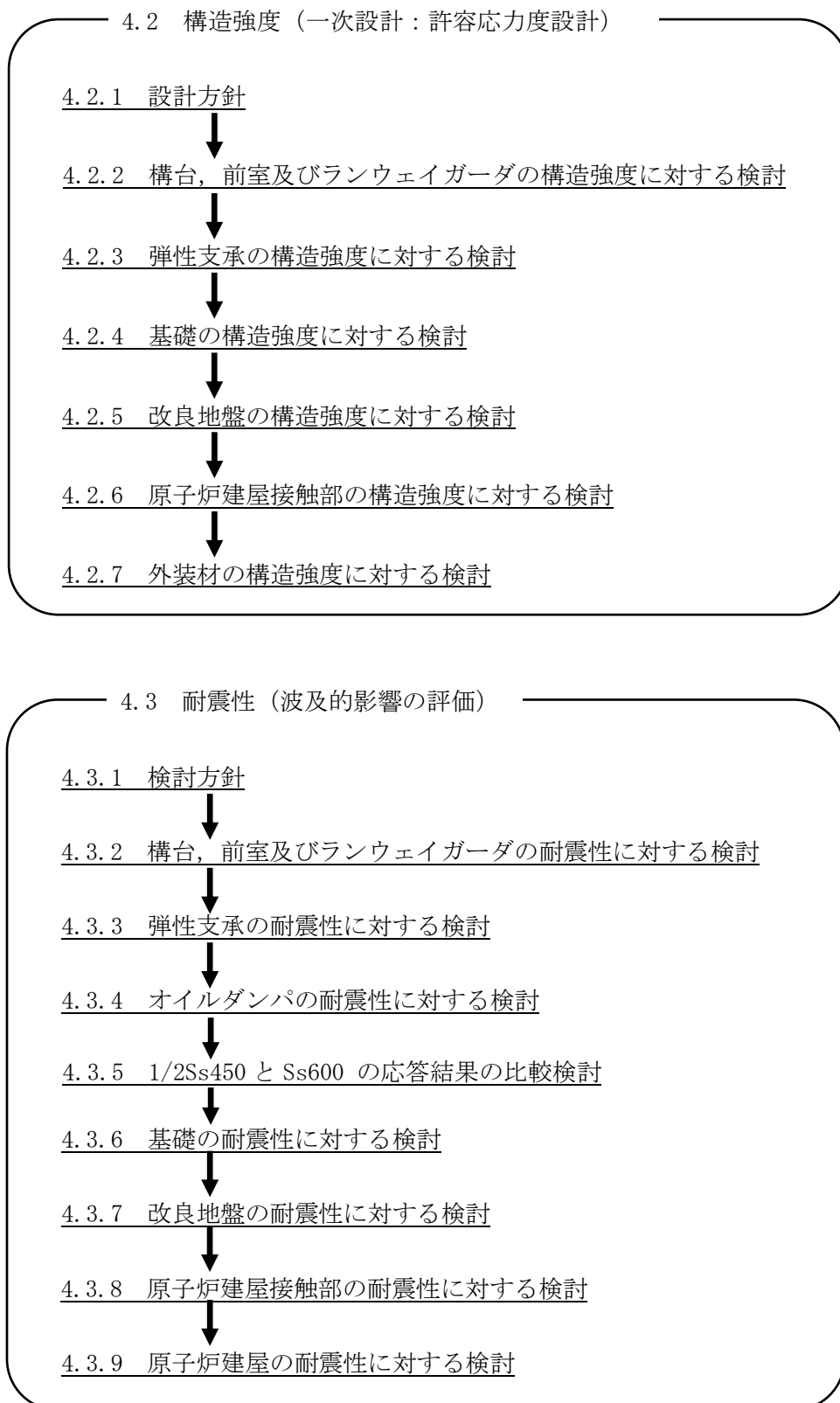


図 4.1.3-1 燃料取り出し用構台の検討フロー

## 4.2 構造強度

### 4.2.1 設計方針

構造強度の検討は、構台、前室及びランウェイガード、弾性支承、基礎及び改良地盤について許容応力度設計を実施する。

#### (1) 使用材料及び許容応力度

使用材料の物性値及び許容応力度を表 4.2.1-1～表 4.2.1-3 に示す。なお、弾性支承の詳細仕様については、別冊 2 8 P46, P47 参照。

表 4.2.1-1 燃料取り出し用構台の物性値及び許容応力度

#### 材料定数

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )
架 構	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0
床・基礎スラブ	コンクリート	$2.27 \times 10^4$	0.2	23.0

#### コンクリートの許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

設計基準強度	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
24	8.0	—	0.73	16.0	—	1.095

#### 鉄筋の許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD295	—	195	195	295	295
SD345	D29 未満	215	195	345	345
	D29 以上	195			

#### 構造用鋼材の許容応力度

(単位：N/mm<sup>2</sup>)

板厚	材料	基準強度 F	許容応力度
T ≤ 40mm	SGLCC	205	JIS G 3321 に従い、左記 F の値 (降伏点又は耐力) より求める
	SS400	235 *	「建設省告示第 2464 号」に従い、左記 F の値より求める *: 終局強度は基準強度 F 値の 1.1 倍とする。
	SM490A, STK490	325 *	
	SN490B, SN490C	325 *	
T > 40mm	SN490B	295 *	
	TMCP325	325	

表 4. 2. 1-2 弾性支承の物性値

弾性支承の物性値

種別	ゴム			鋼材	
	ゴム径 (mm)	鉛直剛性 ( $\times 10^3$ kN/m)	水平剛性 ( $\times 10^3$ kN/m)	フランジ プレート	内部鋼板
積層ゴム	750	2140	0*	SS400	SS400

\* : ローラー支承と仮定

表 4. 2. 1-3 改良地盤・支持地盤の許容応力度

改良地盤の許容応力度

(単位 : kN/m<sup>2</sup>)

設計基準強度=3000* <sup>1</sup>	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
改良地盤	1000	—	200	2000	—	400
断面欠損を考慮* <sup>2</sup>	980	—	150	1960	—	300

\*1 : 設計圧縮強度 = 5000kN/m<sup>2</sup>

\*2 : 「JEAC4616-2009」に準拠し、断面欠損を鉛直方向に 2%、せん断方向に 25%考慮した

支持地盤の許容支持力度

(単位 : kN/m<sup>2</sup>)

種別	長期* <sup>3</sup>	短期* <sup>3</sup>
泥岩 (岩盤)	1960	3920

\*3 : 「福島第一原子力発電所第 4 号機工事計画認可申請書」による

(2) 荷重及び荷重組合せ

設計で考慮する荷重を以下に示す。

1) 鉛直荷重 (VL)

燃料取り出し用構台に作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重及び積載荷重とする。

・燃料取扱設備荷重 (CL)

燃料取扱設備による荷重を表 4.2.1-4 に示す。なお、燃料取扱設備位置の選定根拠については、別冊 2 8 P52～P54 参照。

構内用輸送容器揚重時を想定し、構内用輸送容器を含んだ重量とする。

表 4.2.1-4 燃料取扱設備荷重

位 置	合計重量(t)
原子炉建屋内(A)	310
前室内(B)	310

2) 積雪荷重 (SL)

積雪荷重は建築基準法施行令第 86 条及び福島県建築基準法施行規則細則に準拠し以下の条件とする。

なお、国土交通省告示 594 号による多雪区域以外の区域における積雪後の降雨を見込んだ割増係数を乗じた積雪荷重を考慮する。

積雪量：30cm，単位荷重：20N/m<sup>2</sup>/cm

3) 風圧力 (WL)

風圧力は建築基準法施行令第 87 条および建設省告示第 1454 号に基づき、基準風速を 30m/s，地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 4.2.1-5 に示す。

表 4.2.1-5 速度圧の算定結果

建物高さ*	平均風速の鉛直分布係数	ガスト影響係数	建物高さ粗度区分による係数	基準風速	速度圧
H(m)	Er	Gf	E	Vo(m/s)	q(N/m <sup>2</sup> )
46.81	1.26	2.00	3.16	30	1707

\*：建物高さは、安全側に水上鉄骨天端とする

#### 4) 地震荷重 (K)

燃料取り出し用構台に作用させる地震荷重は、G.L.+2.06m（構台基礎上端レベル）を基準面とした構台の水平地震力の算定結果より設定する。水平地震力は下式より算定し、算定結果を表 4.2.1-6 および表 4.2.1-7 に示す。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_0$$

ここで、

$Q_i$  : 層せん断力 (kN)

$n$  : 施設の重要度に応じた係数

建築基準法で定める地震力の 1.5 倍を考慮する。

$C_i$  : 地震層せん断力係数

$W_i$  : 当該部分が支える重量 (kN)

$Z$  : 地震地域係数 ( $Z=1.0$ )

$R_t$  : 振動特性係数 ( $R_t=0.8$ )

$A_i$  : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、燃料取り出し用構台の固有値を用いたモーダル解析法（二乗和平方根法）により求める。

$C_0$  : 標準せん断力係数 ( $C_0=0.2$ )

$i$  層の水平震度  $k_i$  は、下式によって算定する。

$$P_i = Q_i - Q_{i-1}$$

$$k_i = P_i / w_i$$

ここで、

$P_i$  : 当該階とその直下階の水平地震力の差 (kN)

$w_i$  : 各階重量 (kN)



表 4.2.1-6 燃料取り出し用構台の水平震度の算定結果 (NS 方向)

階	標高 G. L. (m)	各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n · Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
R	46.81	3523.2	—	—	—	—	1068	0.304
8	46.81~40.42	2275.1	3523.2	1.263	0.303	1068	655	0.288
7	40.42~34.82	1316.1	5798.3	1.238	0.297	1722	354	0.269
6	34.82~29.42	22168.4	7114.4	1.216	0.293	2076	5631	0.254
5	29.42~24.30	2805.8	29282.8	1.097	0.263	7707	638	0.228
4	24.30~19.38	2426.8	32088.5	1.084	0.260	8345	487	0.201
3	19.38~14.46	2957.4	34515.3	1.066	0.257	8832	524	0.178
2	14.46~8.26	3530.4	37472.7	1.040	0.249	9356	484	0.138
1	8.26~2.06	—	41003.1	1.000	0.240	9841	—	—

表 4.2.1-7 燃料取り出し用構台の水平震度の算定結果 (EW 方向)

階	標高 G. L. (m)	各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n · Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
R	46.81	3523.2	—	—	—	—	1147	0.326
8	46.81~40.42	2275.1	3523.2	1.357	0.326	1147	719	0.317
7	40.42~34.82	1316.1	5798.3	1.341	0.323	1866	376	0.286
6	34.82~29.42	22168.4	7114.4	1.313	0.315	2242	6033	0.273
5	29.42~24.30	2805.8	29282.8	1.178	0.282	8276	609	0.217
4	24.30~19.38	2426.8	32088.5	1.154	0.278	8884	394	0.163
3	19.38~14.46	2957.4	34515.3	1.120	0.269	9278	339	0.115
2	14.46~8.26	3530.4	37472.7	1.069	0.257	9617	224	0.064
1	8.26~2.06	—	41003.1	1.000	0.240	9841	—	—

5) 荷重組合せ

設計で考慮する燃料取扱設備の位置を図 4.2.1-1 に、荷重組合せを表 4.2.1-8 に示す。

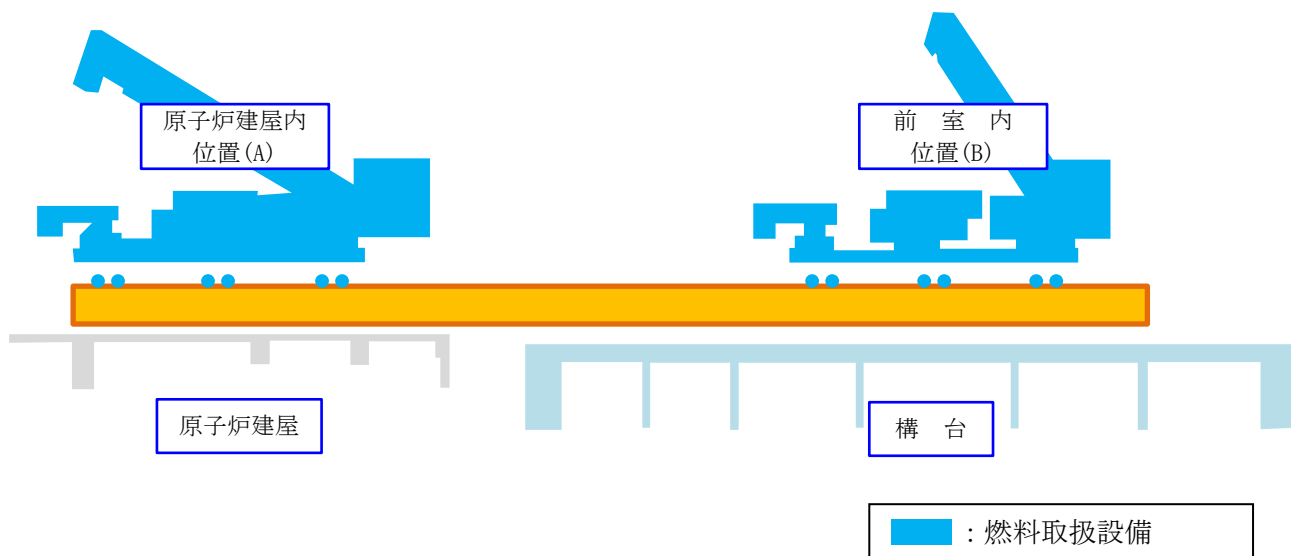


図 4.2.1-1 燃料取扱設備の位置

表 4.2.1-8 荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL	長期
積雪時	S	VL+SL	短期
暴風時	W	VL+WL	
地震時	E1	VL+K(+NS)	
	E2	VL+K(-NS)	
	E3	VL+K(+EW)	
	E4	VL+K(-EW)	

注：各荷重ケースにおいて、燃料取扱設備の位置は原子炉建屋内位置(A)と前室内位置(B)の2ケース考慮する。

地震時と暴風時の燃料取り出し用構台の層せん断力について、風荷重の受圧面積が大きい EW 方向で比較した結果を図 4.2.1-2 に示す。図 4.2.1-2 より、地震時の層せん断力は暴風時の層せん断力を包絡しており、支配的な荷重である。

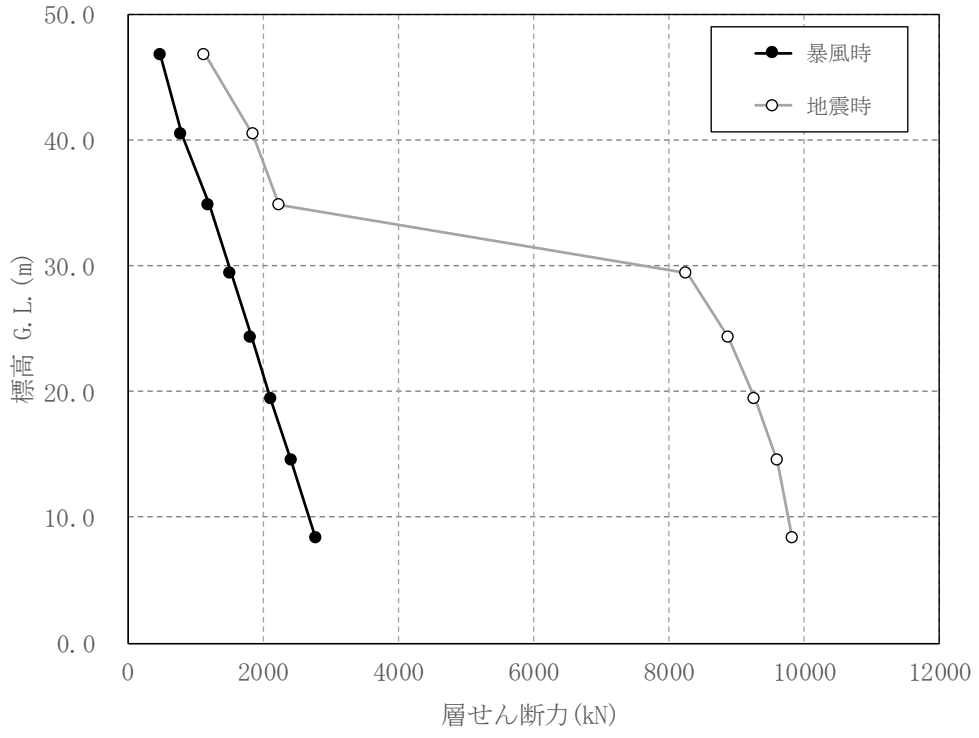


図 4.2.1-2 地震時と暴風時の層せん断力の比較 (EW 方向)

#### 4.2.2 構台、前室及びランウェイガーダの構造強度に対する検討

##### (1) 解析モデル

架構の解析モデルは、構台及び前室とランウェイガーダを構成する主要な鉄骨部材からなる立体架構モデルとする。図 4.2.2-1 に架構の立体解析モデルを示す。解析モデルの柱脚部は固定とする。

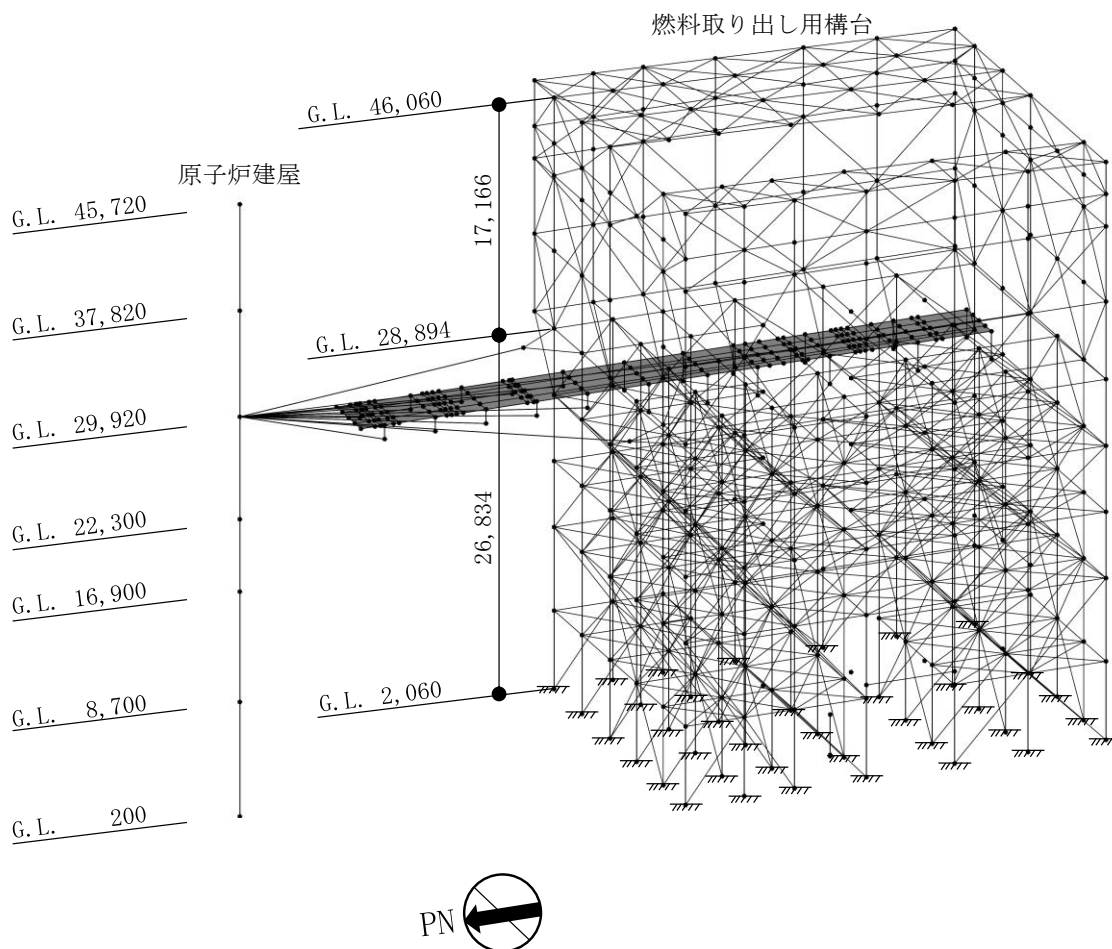


図 4.2.2-1 解析モデル

## (2) 断面検討

### 1) 柱及び梁部材の検討

部材の応力度比は、「鋼構造設計規準」に従い、2方向の曲げ、軸力及びせん断力の各最大応力と各許容応力度との比を組み合わせた値で表される。

$$\cdot \text{軸圧縮の場合} \quad \sqrt{\left(\frac{\sigma_c}{f_c} + \frac{\sigma_{by}}{f_{by}} + \frac{\sigma_{bz}}{f_{bz}}\right)^2 + \left(\frac{\tau}{f_s}\right)^2} \leq 1$$

$$\cdot \text{軸引張の場合} \quad \sqrt{\left(\frac{\sigma_t}{f_t} + \frac{\sigma_{by}}{f_{by}} + \frac{\sigma_{bz}}{f_{bz}}\right)^2 + \left(\frac{\tau}{f_s}\right)^2} \leq 1$$

ここで、 $\sigma_c, \sigma_t$  : 圧縮応力度 (N/A) 及び引張応力度 (T/A) (N/mm<sup>2</sup>)

N : 圧縮力(N), T : 引張力(N), A : 断面積(mm<sup>2</sup>)

$\sigma_{by}, \sigma_{bz}$  : 強軸まわりの曲げ応力度 ( $M_y/Z_y$ )

及び弱軸まわりの曲げ応力度 ( $M_z/Z_z$ ) (N/mm<sup>2</sup>)

$M_y, Z_y$  : 強軸まわりの曲げモーメント(Nm) 及び断面係数(mm<sup>3</sup>)

$M_z, Z_z$  : 弱軸まわりの曲げモーメント(Nm) 及び断面係数(mm<sup>3</sup>)

$\tau$  : せん断応力度 ( $Q/A_s$ ) (N/mm<sup>2</sup>)

Q : せん断力(N),  $A_s$  : せん断断面積(mm<sup>2</sup>)

$f_c$  : 許容圧縮応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_t$  : 許容引張応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_{by}$  : 強軸まわりの許容曲げ応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_{bz}$  : 弱軸まわりの許容曲げ応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_s$  : 許容せん断応力度(N/mm<sup>2</sup>)

### 2) トラス梁の斜材, ブレースの検討

応力度比の検討は、軸力に対し下式にて検討を行う。

$$\cdot \text{軸圧縮の場合} \quad \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

$$\cdot \text{軸引張の場合} \quad \frac{\sigma_t}{f_t} \leq 1$$

ここで、 $\sigma_c, \sigma_t$  : 圧縮応力度 (N/A) 及び引張応力度 (T/A) (N/mm<sup>2</sup>)

N : 圧縮力(N), T : 引張力(N), A : 断面積(mm<sup>2</sup>)

$f_c$  : 許容圧縮応力度(N/mm<sup>2</sup>)

$f_t$  : 許容引張応力度(N/mm<sup>2</sup>)

表 4. 2. 2-1 に常時に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を、図 4. 2. 2-2 に応力度比が最大となる部材を示した図を示す。同様に、表 4. 2. 2-2 に地震時に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を、図 4. 2. 2-3 に応力度比が最大となる部位を示した図を示す。

断面検討の結果、全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 4. 2. 2-1 断面検討結果（常時）

部 位		部材形状(mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置)	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定
前 室	㊸柱	H-1500×400 ×16×32 〈SM490A〉	C (A, B)	$\sigma_c$	7.4	$f_c$	203	0.32	O. K.
				$\sigma_{by}$	49.7	$f_{by}$	211		
				$\sigma_{bz}$	9.4	$f_{bz}$	216		
				$\tau$	4.6	$f_s$	125		
	㊸梁	H-1500×500 ×19×40 〈SM490A〉	C (A, B)	$\sigma_t$	0.2	$f_t$	216	0.11	O. K.
				$\sigma_{by}$	5.1	$f_{by}$	193		
				$\sigma_{bz}$	16.0	$f_{bz}$	216		
				$\tau$	1.2	$f_s$	125		
	㊸鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×9.5 〈STK490〉	C (A, B)	$\sigma_c$	30.2	$f_c$	157	0.20	O. K.
	㊸屋根トラ ス上下弦材	H-300×300×16 ×16 〈SM490A〉	C (A, B)	$\sigma_c$	76.4	$f_c$	174	0.45	O. K.
				$\sigma_{bz}$	2.1	$f_{bz}$	216		
				$\tau$	0.2	$f_s$	125		
㊸屋根トラ ス斜材	2[s-150×75× 6.5×10 〈SS400〉	C (A, B)	$\sigma_c$	59.9	$f_c$	136	0.45	O. K.	
㊸ランウエ イガード	□-1500×900× (80+40)×80 〈SN490B〉	C (B)	$\sigma_c$	0.0	$f_c$	196	0.25	O. K.	
			$\sigma_b$	45.7	$f_b$	196			
			$\tau$	9.2	$f_s$	113			
構 台	㊸柱	H-700×300 ×16×32 〈SM490A〉	C (B)	$\sigma_c$	48.7	$f_c$	144	0.48	O. K.
				$\sigma_{by}$	20.5	$f_{by}$	161		
				$\sigma_{bz}$	2.1	$f_{bz}$	216		
				$\tau$	3.8	$f_s$	125		
	㊸梁	H-800×350 ×19×36 〈SM490A〉	C (B)	$\sigma_c$	0.0	$f_c$	200	0.44	O. K.
				$\sigma_{by}$	59.0	$f_{by}$	207		
				$\sigma_{bz}$	0.0	$f_{bz}$	216		
$\tau$				41.4	$f_s$	125			
㊸鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×9.5 〈STK490〉	C (B)	$\sigma_c$	21.4	$f_c$	142	0.16	O. K.	

\*1 : ㊸～㊸の符号は図 4. 2. 2-2 の応力検討箇所を示す

\*2 : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4. 2. 1-4 参照)

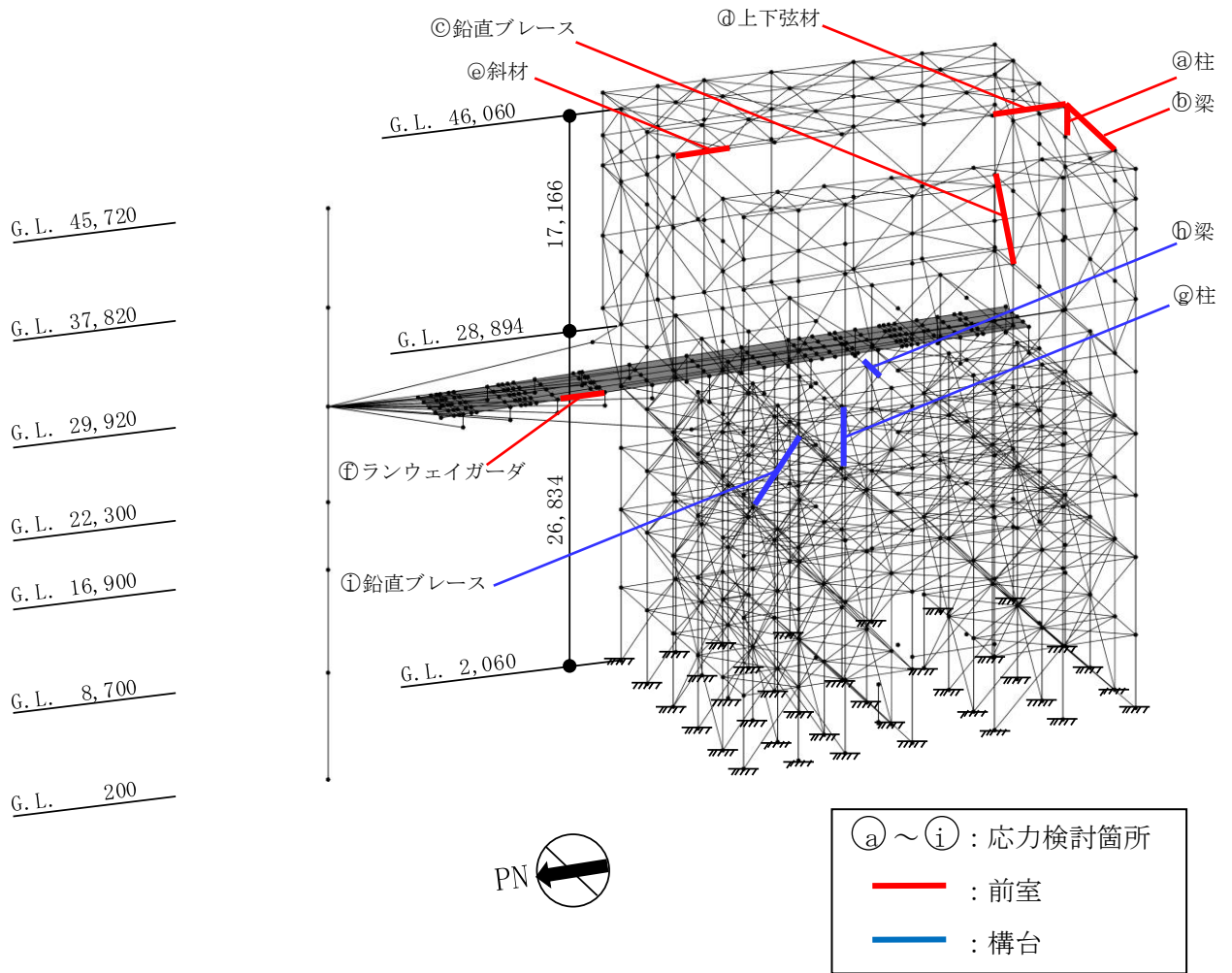


図 4. 2. 2-2 応力度比が最大となる部材 (常時)

表 4. 2. 2-2 断面検討結果 (地震時)

部 位		部材形状 (mm) <使用材料>	荷重ケース (位置)	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定
前 室	㊸柱	H-1500×400 ×16×32 <SM490A>	E3 (B)	$\sigma_c$	7.8	$f_c$	304	0.25	O. K.
				$\sigma_{by}$	48.5	$f_{by}$	316		
				$\sigma_{bz}$	21.1	$f_{bz}$	324		
				$\tau$	4.4	$f_s$	187		
	㊸梁	H-390×300 ×10×16 <SM490A>	E3 (B)	$\sigma_t$	9.2	$f_t$	192	0.17	O. K.
				$\sigma_{by}$	0.0	$f_{by}$	220		
				$\sigma_{bz}$	37.5	$f_{bz}$	324		
				$\tau$	0.6	$f_s$	187		
	㊸鉛直 ブレース	$\phi$ -406.4×12.7 <STK490>	E3 (A)	$\sigma_c$	76.2	$f_c$	253	0.31	O. K.
	㊸水平ブ レース	2[s-150×75×9 ×12.5 <SS400>	E3 (A)	$\sigma_t$	35.8	$f_t$	234	0.16	O. K.
㊸屋根トラ ス上下弦材	H-300×300×16 ×16 <SM490A>	E4 (A)	$\sigma_c$	80.3	$f_c$	261	0.35	O. K.	
			$\sigma_{bz}$	10.5	$f_{bz}$	324			
			$\tau$	0.3	$f_s$	187			
㊸屋根トラ ス斜材	2[s-150×75× 6.5×10 <SS400>	E2 (A, B)	$\sigma_c$	61.0	$f_c$	204	0.30	O. K.	
㊸ランウェ イガーダ	□-1500×900× (80+40)×80 <SN490B>	E3 (B)	$\sigma_c$	14.3	$f_c$	294	0.22	O. K.	
			$\sigma_b$	45.7	$f_b$	294			
			$\tau$	9.2	$f_s$	169			
構 台	㊸柱	(X)H-700×300 ×40×40 (Y)H-700×350 ×40×40 <SM490A>	E1 (A)	$\sigma_c$	42.5	$f_c$	285	0.67	O. K.
				$\sigma_{by}$	11.2	$f_{by}$	312		
				$\sigma_{bz}$	154.4	$f_{bz}$	324		
				$\tau$	7.3	$f_s$	187		
	㊸梁	H-700×350 ×19×36 <SM490A>	E3 (A)	$\sigma_c$	1.0	$f_c$	241	0.57	O. K.
				$\sigma_{by}$	134.0	$f_{by}$	261		
				$\sigma_{bz}$	2.1	$f_{bz}$	324		
				$\tau$	38.1	$f_s$	187		
	㊸鉛直 ブレース	$\phi$ -406.4×9.5 <STK490>	E2 (A)	$\sigma_t$	83.8	$f_t$	231	0.37	O. K.
	㊸水平 ブレース	[-180×75×7× 10.5 <SS400>	E1 (A)	$\sigma_t$	44.5	$f_t$	234	0.20	O. K.

\*1: ㊸~㊸の符号は図 4. 2. 2-3 の応力検討箇所を示す

\*2: ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4. 2. 1-4 参照)



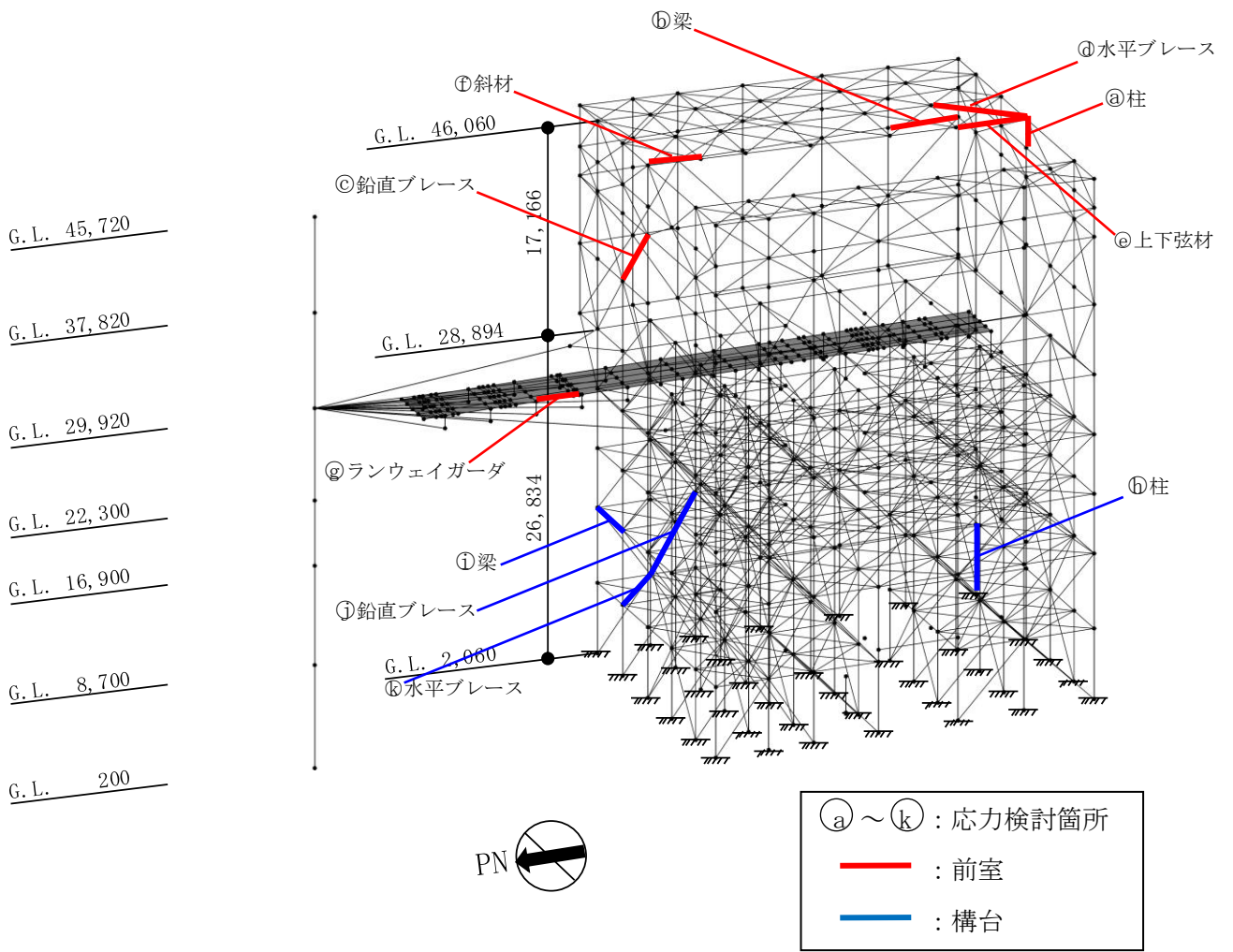


図 4.2.2-3 応力度比が最大となる部材 (地震時)

#### 4.2.3 弾性支承の構造強度に対する検討

弾性支承に作用する圧縮力による面圧が、弾性支承の圧縮限界強度以下となることを確認する。圧縮限界強度はゴム材料の弾性係数に応じて製品が規定する数値である。

検討の結果、最大圧縮面圧が圧縮限界強度以下となることを確認した。

表 4.2.3-1 弾性支承の構造強度に対する検討結果

設置位置	最大面圧発生ケース (位置)*	圧縮限界強度 $\sigma_v$ (N/mm <sup>2</sup> )	最大圧縮面圧 $\sigma_D$ (N/mm <sup>2</sup> )	$\sigma_D / \sigma_v$	判定
西側	E2(A)	43.00	6.37	0.15	O.K.
東側	E2(A)	43.00	6.36	0.15	O.K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

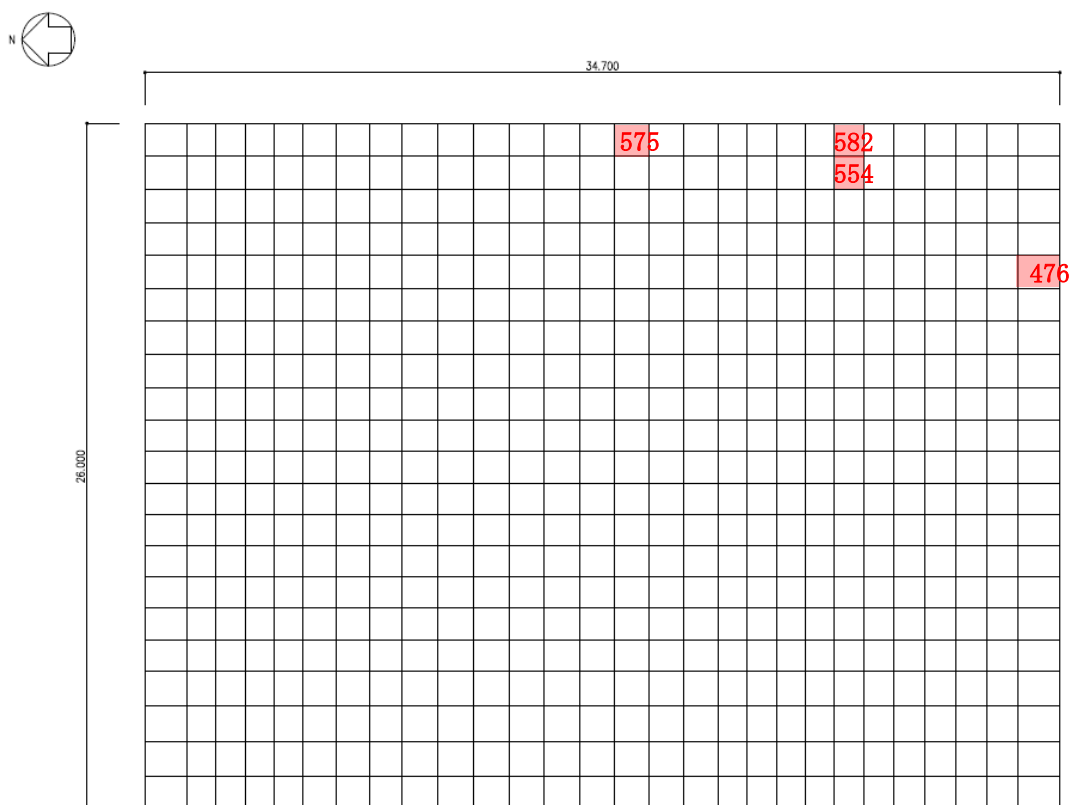
#### 4.2.4 基礎の構造強度に対する検討

##### (1) 設計方針

基礎の応力解析は、弾性地盤上に支持された版として有限要素法を用いて行い、解析モデルは図 4.2.4-1 に示すように四辺形の均質等方な板要素により構成し、支持地盤は等価な弾性ばねとしてモデル化する。但し、浮き上がった場合は、ばねの剛性が 0 となる。

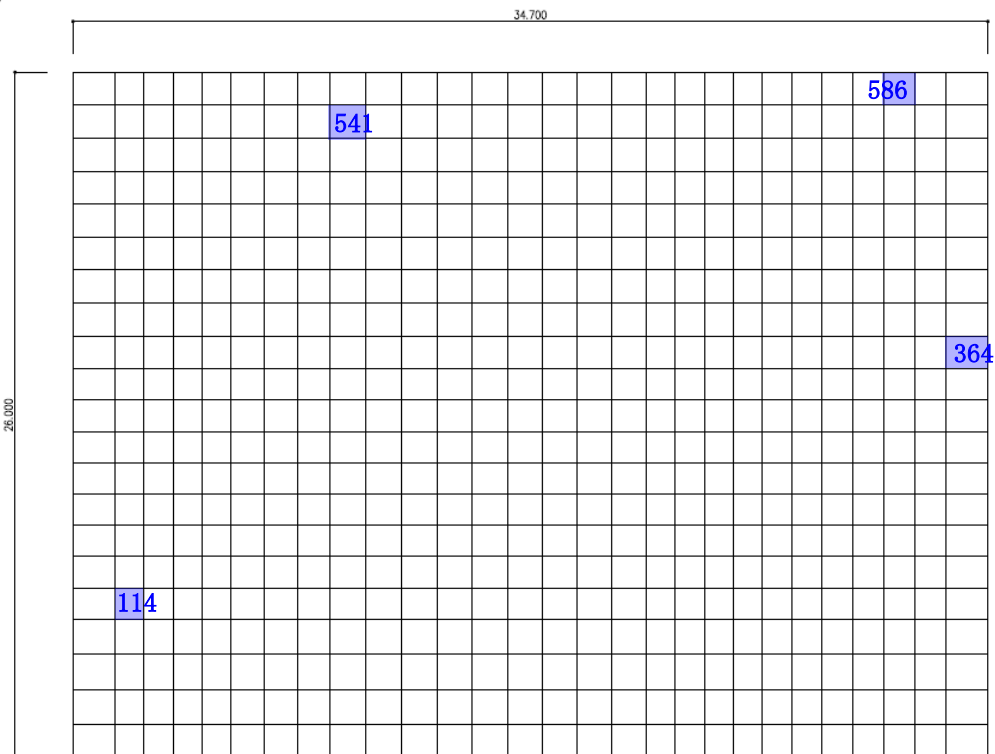
##### (2) 解析モデル

解析モデルを図 4.2.4-1、図 4.2.4-2 に示す。



凡例 #### : 断面算定要素(常時:C) (数字は要素番号)

図 4.2.4-1 解析モデル図(常時:C) (単位: mm)




凡例  : 断面算定要素(地震時:E1~E4) (数字は要素番号)

図 4. 2. 4-2 解析モデル図 (単位 : mm)

### (3) 断面検討

組合せた応力より、各要素の必要鉄筋比を「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」より求め、設計配筋が必要鉄筋比を上回ること及び面外せん断力が許容せん断力以下であることを確認する。必要鉄筋比が最大となる要素と設計面外せん断力と許容せん断力との比が最大になる要素の断面検討結果を表 4.2.4-1, 表 4.2.4-2 に示し、配筋図を図 4.2.4-3 に示す。

断面検討の結果、設計配筋は必要鉄筋比を上回り、面外せん断力は許容せん断力以下であることを確認した。

表 4. 2. 4-1 断面検討結果 (常時:C)

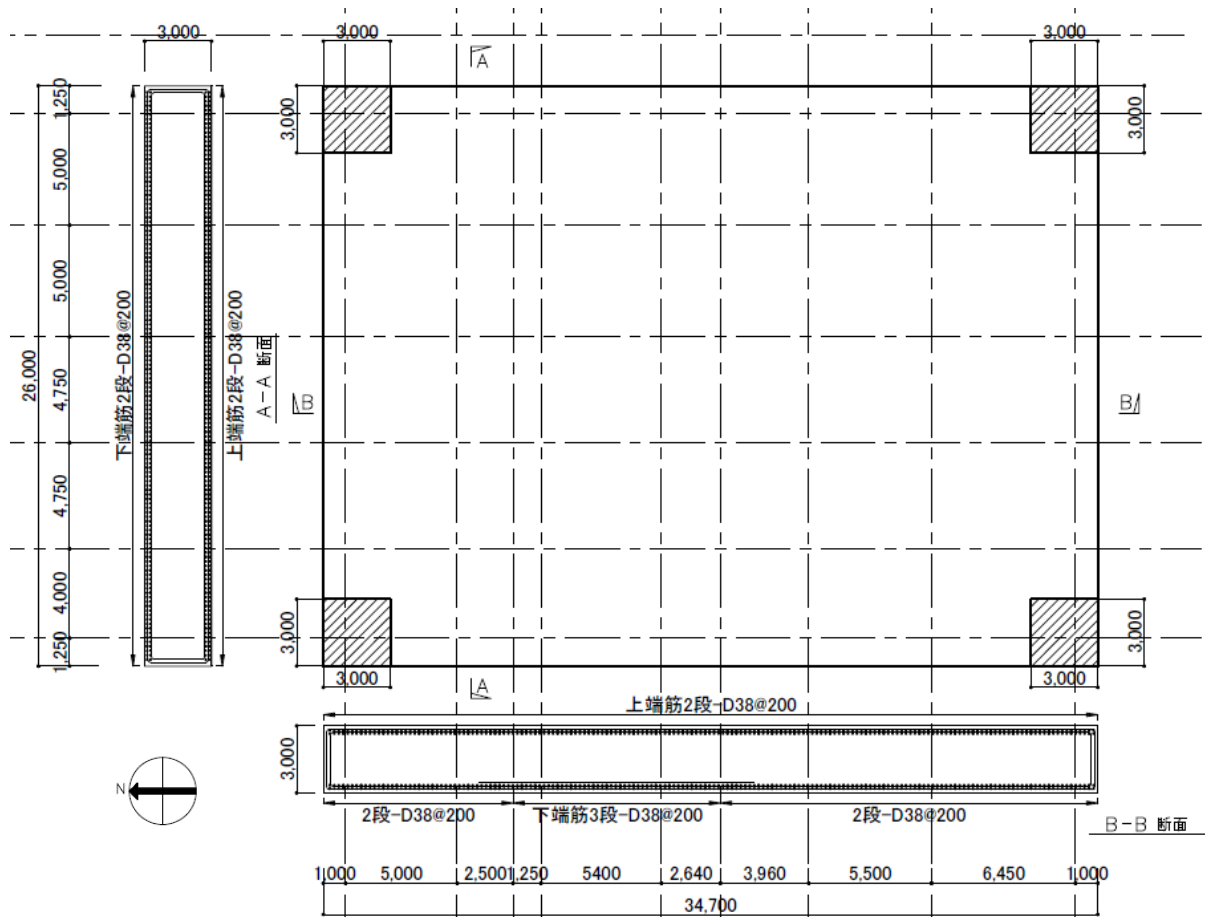
要素番号	方向	荷重ケース (位置)*1	設計応力		N/(b・D) <sup>*2</sup> (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	M/(b・D <sup>2</sup> ) (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	Pt (%)	設計配筋 上段：上端筋 下段：下端筋 (pt:%)	設計面外 せん断力 Q (kN/m)	許容せん断力 f <sub>s</sub> ・b・j (kN/m)	判定
			N*2 (kN/m)	M (kN・m/m)							
575	NS	C(B)	-0.5	408.2	0.000	0.045	0.026	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	75.5	1775	O.K.
476	EW	C(B)	-0.8	798.1	0.000	0.089	0.051	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	101.1	1775	O.K.
582	NS	C(B)	1.6	75.3	0.001	0.008	0.005	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	466.3	1775	O.K.
554	EW	C(B)	-0.7	22.0	0.000	0.002	0.001	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	488.7	1775	O.K.

表 4. 2. 4-2 断面検討結果 (地震時:E1～E4)

要素番号	方向	荷重ケース (位置)*1	設計応力		N/(b・D) <sup>*2</sup> (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	M/(b・D <sup>2</sup> ) (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	Pt (%)	設計配筋 上段：上端筋 下段：下端筋 (pt:%)	設計面外 せん断力 Q (kN/m)	許容せん断力 f <sub>s</sub> ・b・j (kN/m)	判定
			N*2 (kN/m)	M (kN・m/m)							
541	NS	E2(B)	-119.5	969.9	0.040	0.108	0.061	2-D38@200 3-D38@200 (0.38) (0.57)	50.8	2616	O.K.
114	EW	E4(A)	-104.7	1140.3	0.035	0.127	0.046	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	14.4	2663	O.K.
586	NS	E3(A)	29.4	316.8	0.010	0.035	0.010	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	748.8	2663	O.K.
364	EW	E1(B)	26.5	109.7	0.009	0.012	0.003	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	677.2	2663	O.K.

\*1：( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4. 2. 1-4 参照)

\*2：圧縮を正とする。



▨部は面外せん断補強を実施  
D19@400×200

図 4. 2. 4-3 基礎の配筋図 (単位 : mm)

#### 4.2.5 改良地盤の構造強度に対する検討

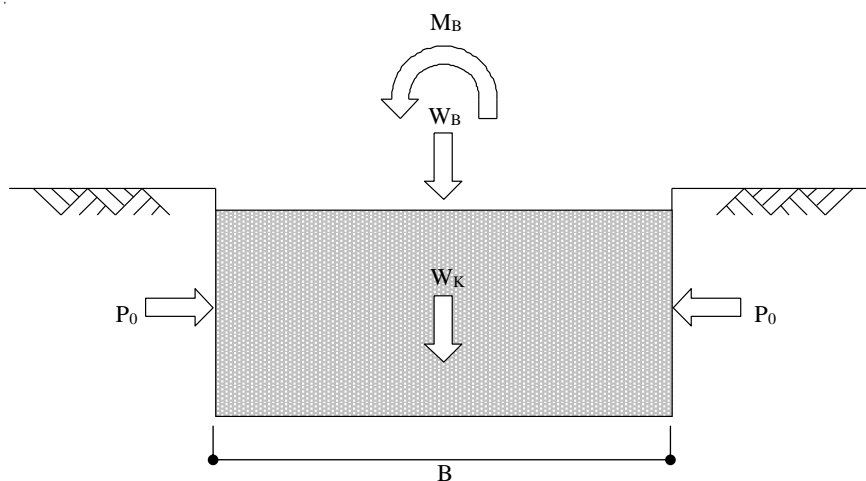
##### (1) 設計方針

燃料取り出し用構台を支持する改良地盤は、基礎直下の地盤を南北方向に 34.7m、東西方向に 26.0m、改良厚さ 7.16m とし、G.L. -8.1m の泥岩に支持する。検討は「JEAC4616-2009」に準拠し、常時及び地震時の改良地盤に生じる最大応力が許容応力度以下であることを確認する。さらに、改良地盤直下の支持地盤の支持力に対して、常時及び地震時の改良地盤に生じる最大接地圧が許容支持力度以下であることを確認する。

##### (2) 常時に対する検討

###### 1) 改良地盤の検討

常時において、改良地盤底面に生じる最大接地圧が改良地盤の長期許容圧縮応力度以下であることを確認する。図 4.2.5-1 に作用荷重を示す。



$W_B$  : 燃料取り出し用構台荷重

$W_K$  : 改良地盤の自重

$M_B$  : 燃料取り出し用構台の偏心による転倒モーメント

$P_0$  : 長期設計用土圧

$B$  : 改良幅

図 4.2.5-1 作用荷重 (常時:C)



改良地盤の荷重負担範囲は、基礎底盤における矩形断面部分を対象とした面積  $A=902.2\text{m}^2$ 、断面係数  $Z_x=3909\text{m}^3$ 、 $Z_y=5217\text{m}^3$  として算定する。改良地盤底面に生じる最大接地圧は下式にて求める。

$$\begin{aligned} \text{鉛直力の合計} & \quad \Sigma W = WB+WK = 233360 \text{ kN} \\ \text{転倒モーメントの合計} & \quad \Sigma M_{BX} = 32707 \text{ kNm (X 軸回り:EW 方向加力)} \\ & \quad \Sigma M_{BY} = 58936 \text{ kNm (Y 軸回り:NS 方向加力)} \\ \text{改良地盤の最大接地圧} & \quad q_r = \Sigma W/A + \Sigma M_{BX}/Z_x + \Sigma M_{BY}/Z_y = 279 \text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

改良地盤に生じる最大接地圧 ( $q_r$ ) は、改良地盤の長期許容圧縮応力度 ( $\iota_{fsc}$ ) 以下であることを確認した。

$$q_r = 279 \text{ kN/m}^2 \leq \iota_{fsc} = 980 \text{ kN/m}^2$$

## 2) 支持力の検討

改良地盤底面に生じる最大接地圧 ( $q_r$ ) が、改良地盤直下の支持地盤の長期許容支持力度 ( $\iota_{qa}$ ) 以下であることを確認した。

$$\begin{aligned} \text{改良地盤の最大接地圧} & \quad q_r = 279 \text{ kN/m}^2 \\ \text{支持地盤の長期許容支持力度} & \quad \iota_{qa} = 1960 \text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

$$q_r = 279 \text{ kN/m}^2 \leq \iota_{qa} = 1960 \text{ kN/m}^2$$

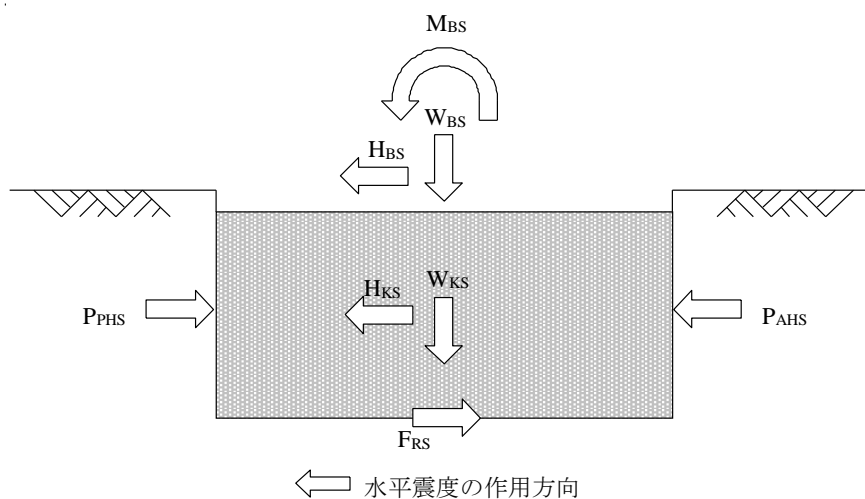
## 3) 沈下の検討

支持地盤は泥岩（岩盤）であるため、沈下の検討は不要である。

(3) 地震時に対する検討

1) 改良地盤の検討

地震時において、改良地盤底面の最大接地圧及びせん断応力が、改良地盤の短期許容応力度以下であることを確認する。図 4.2.5-2 に作用荷重を示す。



$W_{BS}$  : 燃料取り出し用構台荷重

$W_{KS}$  : 改良地盤の自重

$H_{BS}$  : 燃料取り出し用構台による水平力

$M_{BS}$  : 燃料取り出し用構台による改良地盤底面における  
転倒モーメント

$H_{KS}$  : 改良地盤の慣性力 (地中震度 0.15)

$P_{AHS}$  : 地震時主働土圧による水平力

$P_{PHS}$  : 地震時受働土圧による水平力

$F_{RS}$  : 支持地盤のせん断抵抗力

図 4.2.5-2 作用荷重 (地震時:E1~E4)

改良地盤の荷重負担範囲は、基礎底盤における矩形断面部分を対象とした面積  $A=902.2\text{m}^2$ 、断面係数  $Z_X=3909\text{m}^3$ 、 $Z_Y=5217\text{m}^3$  として算定する。改良地盤底面の最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) 及び最大せん断応力 ( $\tau_{\max}$ ) は下式にて求める。

$$\begin{aligned} \text{鉛直力の合計} \quad \Sigma W &= W_{BS}+W_{KS} = 233360 \text{ kN} \\ \text{水平力の合計} \quad \Sigma H_X &= H_{BS}+H_{KS}+P_{AHS}+P_{PHS} = 37007 \text{ kN (NS 方向)} \\ \Sigma H_Y &= H_{BS}+H_{KS}+P_{AHS}+P_{PHS} = 37391 \text{ kN (EW 方向)} \\ \text{転倒モーメントの合計} \quad \Sigma M_X &= M_{BS}+M_{KS}+M_{AHS}+M_{PHS} = 629283 \text{ kNm (X 軸回り:EW 方向加力)} \\ \Sigma M_Y &= M_{BS}+M_{KS}+M_{AHS}+M_{PHS} = 611209 \text{ kNm (Y 軸回り:NS 方向加力)} \end{aligned}$$

ここに、  $M_{KS}$  : 改良地盤の転倒モーメント  
 $M_{AHS}$  : 地震時主働土圧による転倒モーメント  
 $M_{PHS}$  : 地震時受働土圧による転倒モーメント

$$\begin{aligned} \text{改良地盤底面の最大接地圧} \quad q_{1SX} &= \Sigma W/A + \Sigma M_Y/Z_Y = 396 \text{ kN/m}^2 \\ q_{1SY} &= \Sigma W/A + \Sigma M_X/Z_X = 440 \text{ kN/m}^2 \\ \text{改良地盤底面の最大せん断応力} \quad \tau_{X\max} &= 1.2 \times \Sigma H_X/A = 50 \text{ kN/m}^2 \\ \tau_{Y\max} &= 1.2 \times \Sigma H_Y/A = 50 \text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

改良地盤底面の最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) 及び最大せん断応力 ( $\tau_{\max}$ ) は短期許容応力度 ( ${}_s f_{sc}$  及び  ${}_s f_{ss}$ ) 以下であることを確認した。

$$q_{1S} = 440 \text{ kN/m}^2 \leq {}_s f_{sc} = 1960 \text{ kN/m}^2$$

$$\tau_{\max} = 50 \text{ kN/m}^2 \leq {}_s f_{ss} = 300 \text{ kN/m}^2$$

## 2) 支持力の検討

改良地盤底面に生じる最大接地圧 ( $q_{1S}$ ) が、改良地盤直下の支持地盤の短期許容支持力度 ( ${}_s q_a$ ) 以下であることを確認した。

$$\begin{aligned} \text{改良地盤の最大接地圧} \quad q_{1S} &= 440 \text{ kN/m}^2 \\ \text{支持地盤の短期許容支持力度} \quad {}_s q_a &= 3920 \text{ kN/m}^2 \end{aligned}$$

$$q_{1S} = 440 \text{ kN/m}^2 \leq {}_s q_a = 3920 \text{ kN/m}^2$$

#### 4.2.6 原子炉建屋接触部の構造強度に対する検討

##### (1) 弾性支承反力に対する検討

弾性支承からの反力によって原子炉建屋 RC 梁に生じるせん断力が、梁の許容せん断耐力以下となることを確認する。

弾性支承の反力は基本的に、プール壁及び下階柱に直接かかるように配置するが、一部梁端に作用するため、それを考慮する。

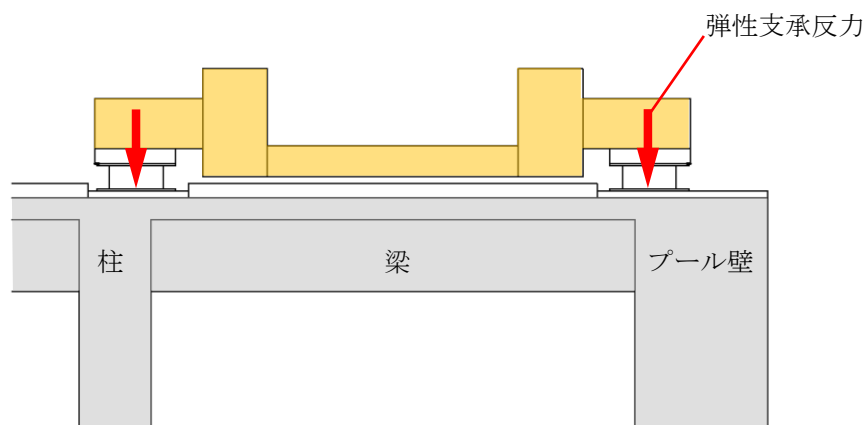


図 4.2.6-1 弾性支承からの反力

検討の結果、梁の発生せん断力が長期許容せん断力以下になることを確認した。

表 4.2.6-1 弾性支承反力に対する検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	梁端せん断力 Q (kN)	長期許容せん断力 Qa (kN)	耐力比 Q/Qa	判定
弾性支承受梁	C (A)	760	1486	0.52	O.K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

#### 4.2.7 外装材の構造強度に対する検討

##### (1) 設置目的

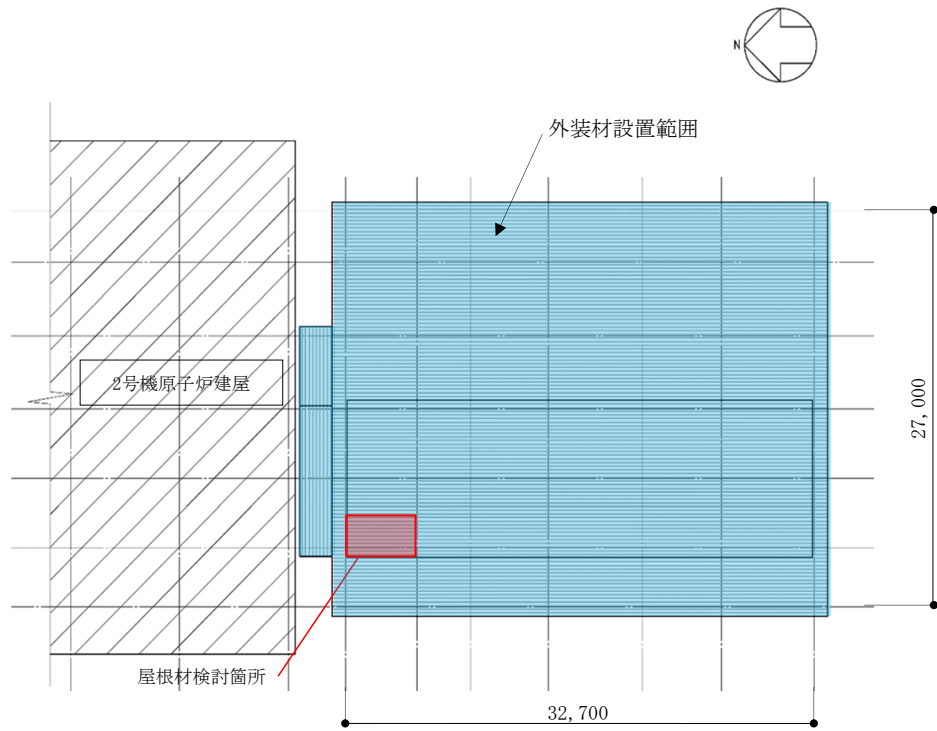
燃料取り出し用構台前室周囲には、燃料取り出し作業環境の整備並びに放射性物質の飛散・拡散防止のため、外装材を設置する。

##### (2) 評価方針

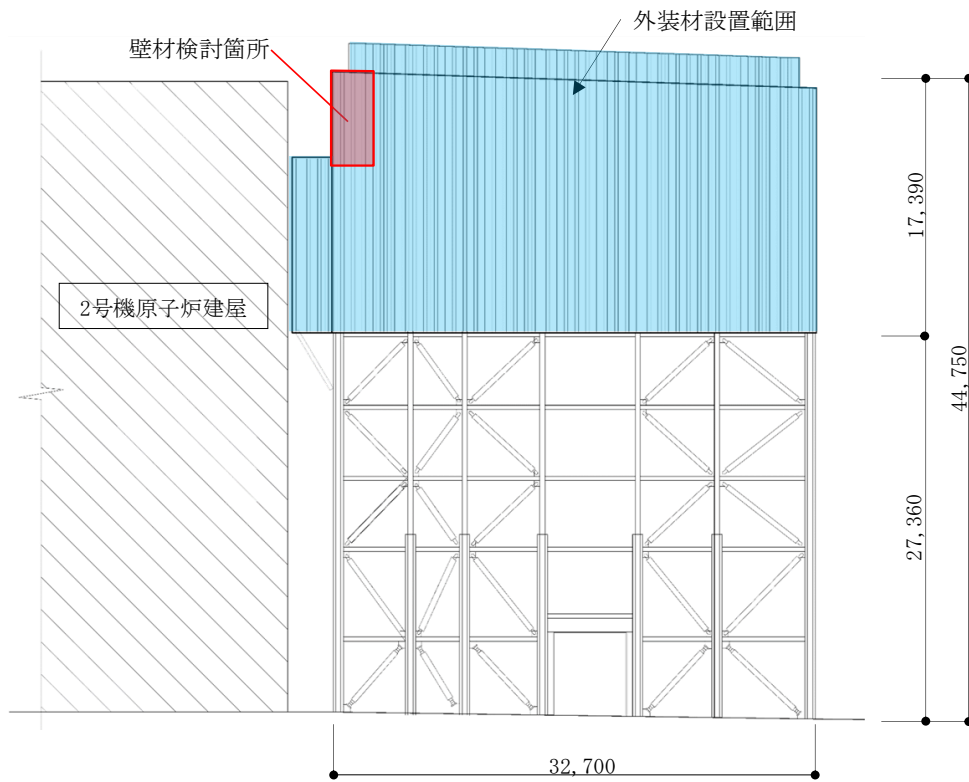
架構の屋根材、壁材には金属製外装材を用いる。断面検討は、屋根材、壁材それぞれに風圧力によって生じる応力度が短期許容応力度以下であることを確認する。

##### (3) 検討箇所

短期事象においては、暴風時の影響が支配的であることから、積雪時及び地震時の検討は省略する。検討箇所を図 4.2.7-1 に示す。



a. 屋根伏図



b. 西側立面

図 4.2.7-1 外装材検討箇所 (単位: mm)

(3) 設計用荷重の算定

設計用風圧力は、建築基準法施行令第 82 条の 4 及び建設省告示第 1458 号に基づき、基準風速 30m/s、地表面粗度区分Ⅱとして算定する。

表 4.2.7-1 速度圧の算定結果

建物高さ* H (m)	平均風速の高さ方向 の分布を表す係数 Er	基準風速 V <sub>0</sub> (m/s)	平均速度圧 q (N/m <sup>2</sup> )
47	1.258	30	855

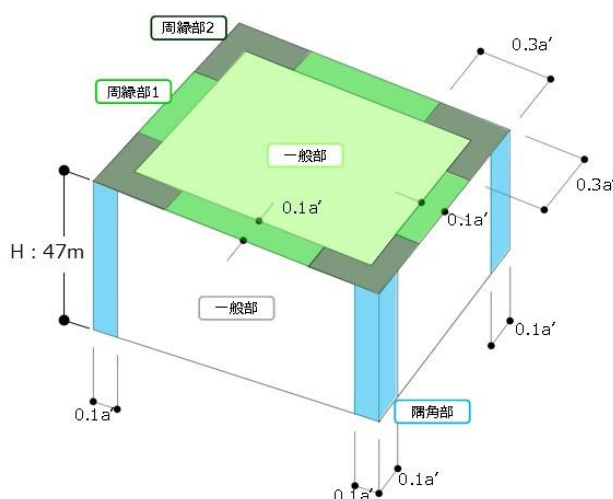
表 4.2.7-2 ピーク風力係数（屋根）

建物高さ* H (m)	正圧	負圧		
		一般部	周縁部 1	周縁部 2
47	0.50	-2.50	-3.20	-4.30

表 4.2.7-3 ピーク風力係数（壁）

建物高さ* H (m)	正圧	負圧	
		一般部	隅角部
47	2.60	-1.88	-2.31

\*：建物高さは、安全側に建築物の高さと軒の高さ（水上側鉄骨天端）との平均値以上とした



a' は平面の短辺の長さ $\times$ H の 2 倍の数値のうちいずれか  
小さな数値 (30 を超えるときは、30 とする) (単位: m)

図 4.2.7-2 風力係数の算定箇所

(4) 外装材の断面検討

検討は、応力が厳しくなる部位について行う。ここでは、外装材の自重は考慮しないものとする。外装材の支持間隔は、保守的な評価となるように最長スパンを用いて評価するものとし、屋根材の間隔は、3.3m で連続支持、壁材は0.75m で連続支持されているものと仮定する。

屋根材及び壁材の材料諸元を表 4.2.7-4 及び表 4.2.7-5 に示す。また、検討結果を表 4.2.7-6 に示す。

断面検討の結果、全ての外装材に対する応力度比が1以下になることを確認した。

表 4.2.7-4 屋根材の材料諸元

板厚	自重	正曲げ方向		負曲げ方向	
		断面 2 次 モーメント	断面係数	断面 2 次 モーメント	断面係数
t (mm)	G (N/m <sup>2</sup> )	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)
0.8	118	360	43.6	347	40.6

表 4.2.7-5 壁材の材料諸元

板厚	自重	正曲げ方向		負曲げ方向	
		断面 2 次 モーメント	断面係数	断面 2 次 モーメント	断面係数
t (mm)	G (N/m <sup>2</sup> )	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)
0.6	59	2.31	1.67	2.31	1.67

表 4.2.7-6 応力度に対する検討結果

部位	材料	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
屋根材	SGLCC <sup>*1</sup>	124	205 <sup>*2</sup>	0.61	O. K.
壁材	SGLCC <sup>*1</sup>	96	205 <sup>*2</sup>	0.47	O. K.

\*1：溶融 55%アルミニウム-亜鉛合金めっき鋼板

\*2：「JIS G 3321」の「降伏点又は耐力」とする



#### 4.3 耐震性

##### 4.3.1 検討方針

耐震性の検討は、構台、前室及びランウェイガーダ、弾性支承、オイルダンパ、基礎、改良地盤、原子炉建屋接触部及び原子炉建屋の健全性について行い、1/2Ss450 に対して、これらの応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。1/2Ss450 を用いた地震応答解析は水平 2 方向及び鉛直方向を同時に入力する。また、前述の通り 2 号機燃料取り出し用構台については、実施計画変更認可申請の審査期間中に適用地震動見直しが行われたことから、一部の評価については、Ss600 に対する地震応答解析結果との比較から耐震性を確認する。Ss600 を用いた地震応答解析は水平 1 方向及び鉛直方向を同時に入力する。

##### 4.3.2 構台、前室及びランウェイガーダの耐震性に対する検討

###### (1) 解析に用いる入力地震動

解析に用いる地震動は、2 波ある 1/2Ss450 のうち振幅の大きな検討用地震動①の 1/2 の地震動および Ss600 を用いる。

1/2Ss450 を用いた地震応答解析は水平 2 方向及び鉛直方向を同時に入力するが、全く同じ地震動が同時に水平 2 方向に入力されることは現実的に考えにくいことから、応答スペクトルに基づく検討用地震動①を作成した方法と同一の方法で、目標とする応答スペクトルに適合する位相の異なる模擬地震波（別冊 2 8 P98, P99 参照）を利用する。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 4.3.2-1 に示す。なお、入力地震動策定の詳細については、別冊 2 8 P25, 上下動の解析モデルへの入力方法の妥当性については、別冊 2 8 P26, P27 参照。

解放基盤表面位置 (G. L. -206. 0m) (震災前 O. P. -196. 0m) における 1/2Ss450 と、Ss600 の 3 波の加速度時刻歴波形を図 4.3.2-2, 図 4.3.2-3 及び図 4.3.2-4 に示す。

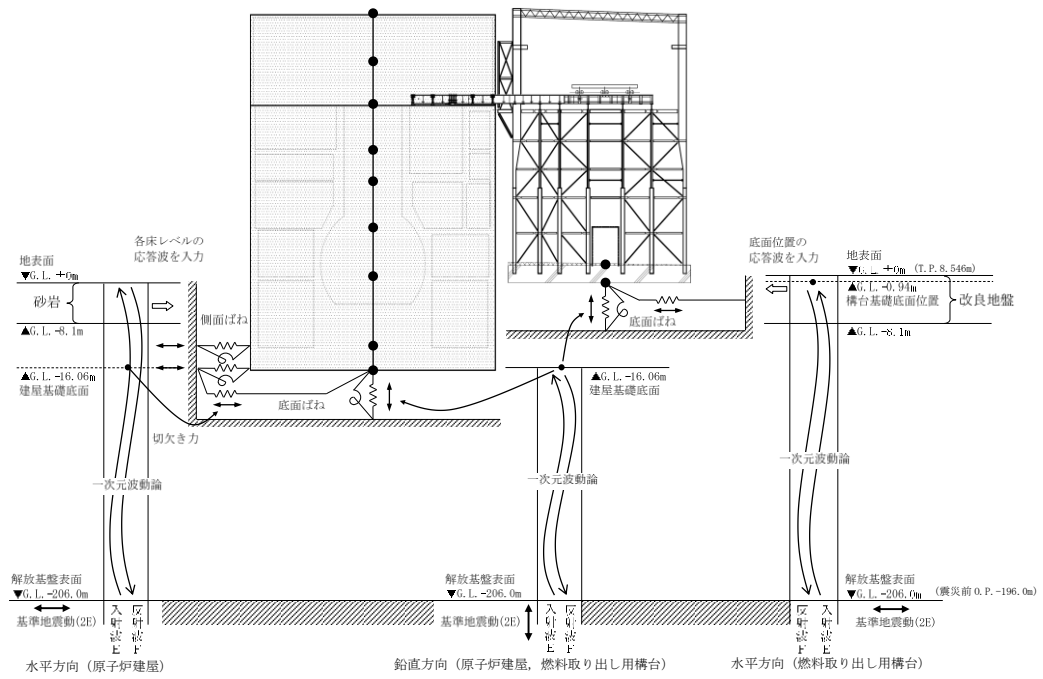
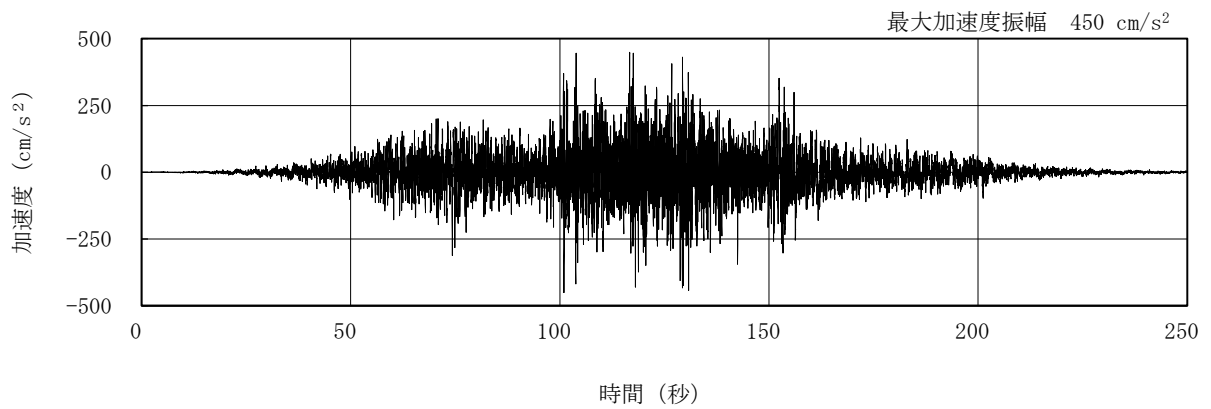
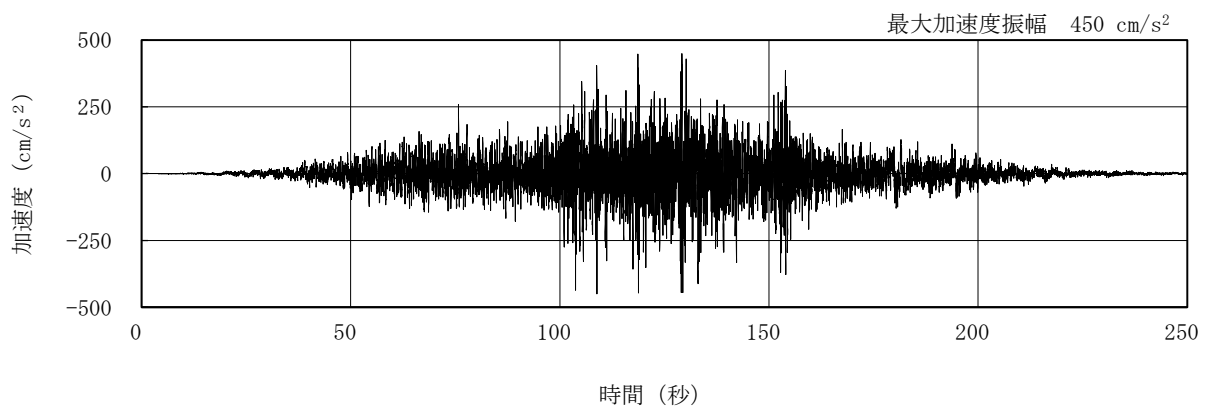


図 4.3.2-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

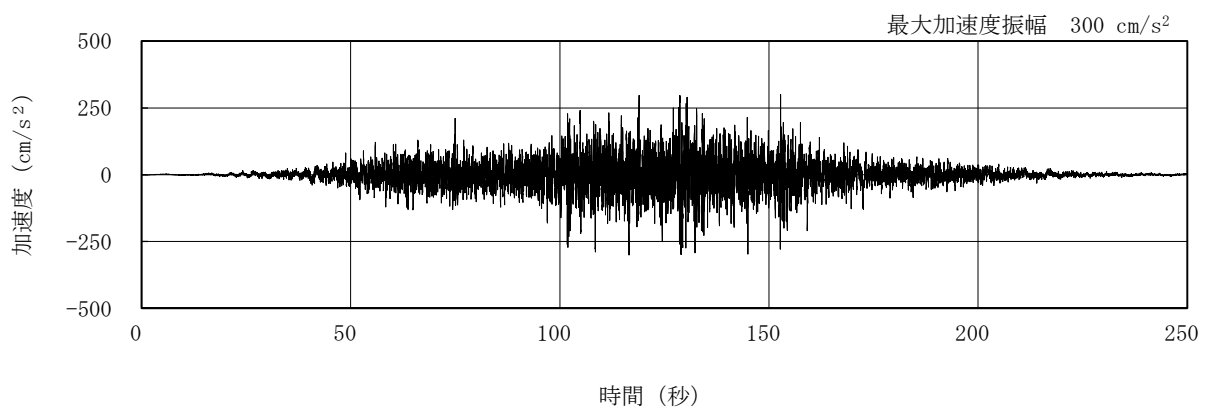
本章に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P. から T.P. への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式> T.P. =旧 O.P. -1,436mm



(水平)

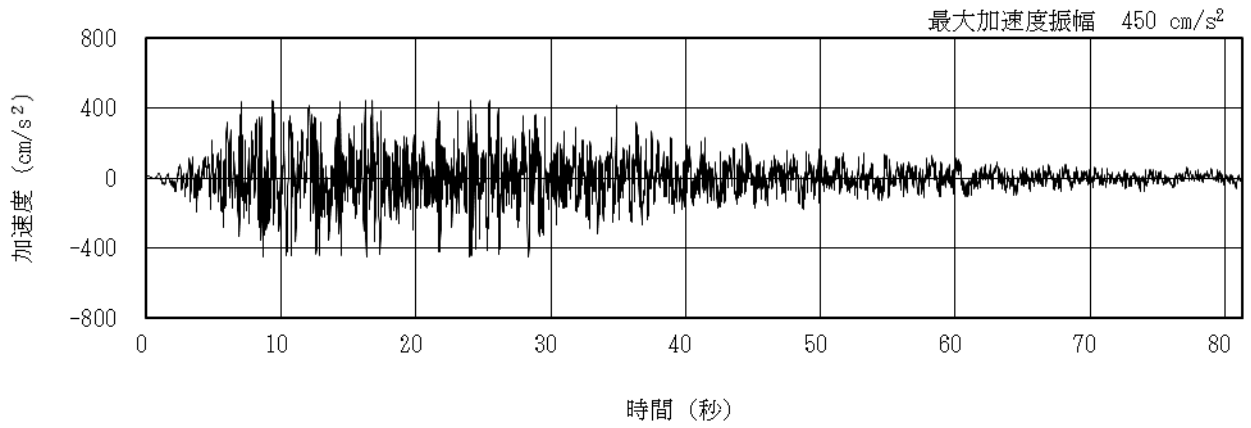


(水平, 位相の異なる模擬地震波)

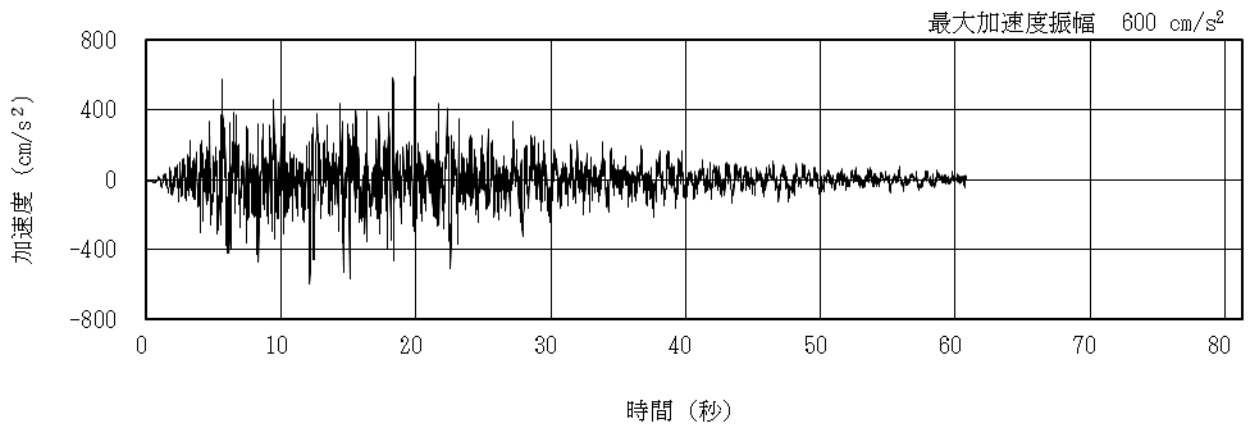


(鉛直)

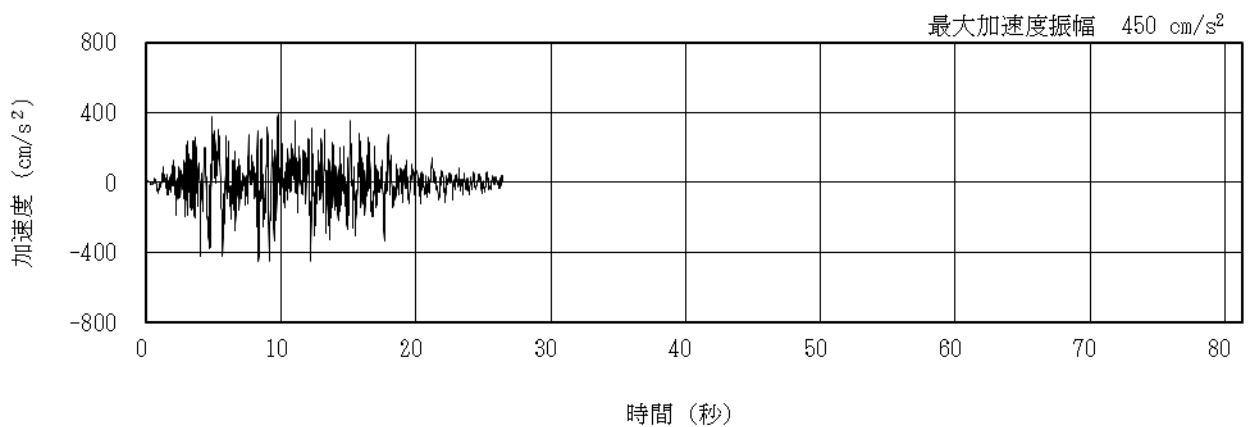
図 4.3.2-2 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(1/2Ss450)



(従来の Ss-1H)

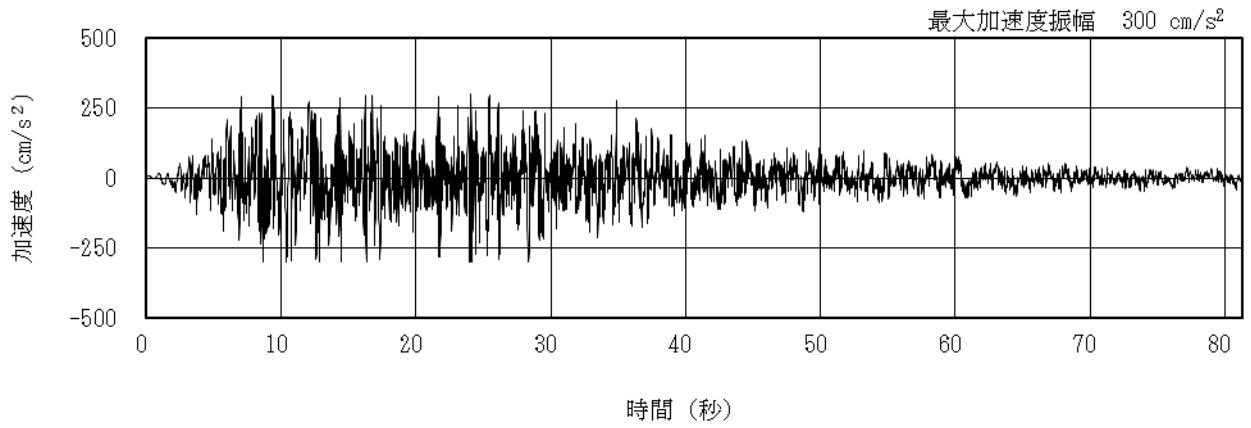


(従来の Ss-2H)

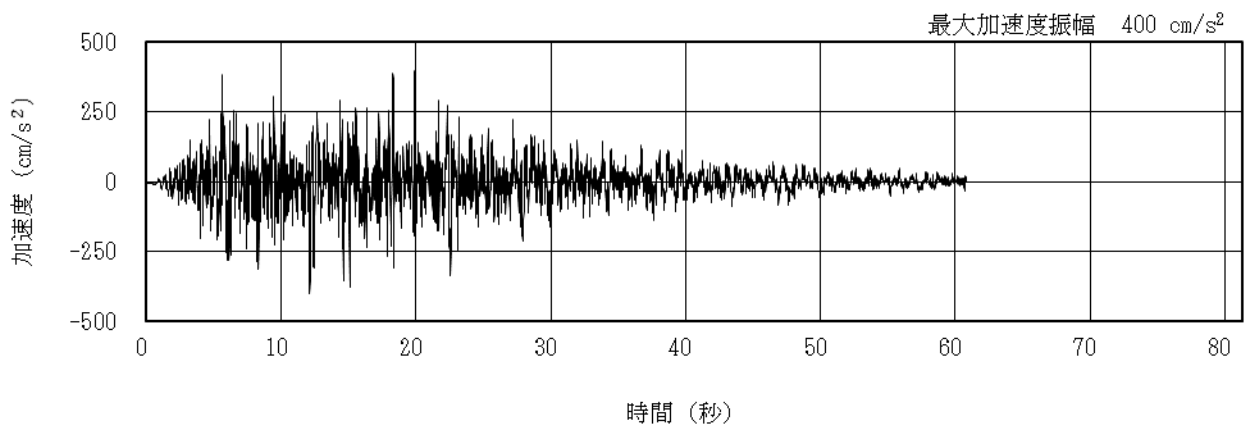


(従来の Ss-3H)

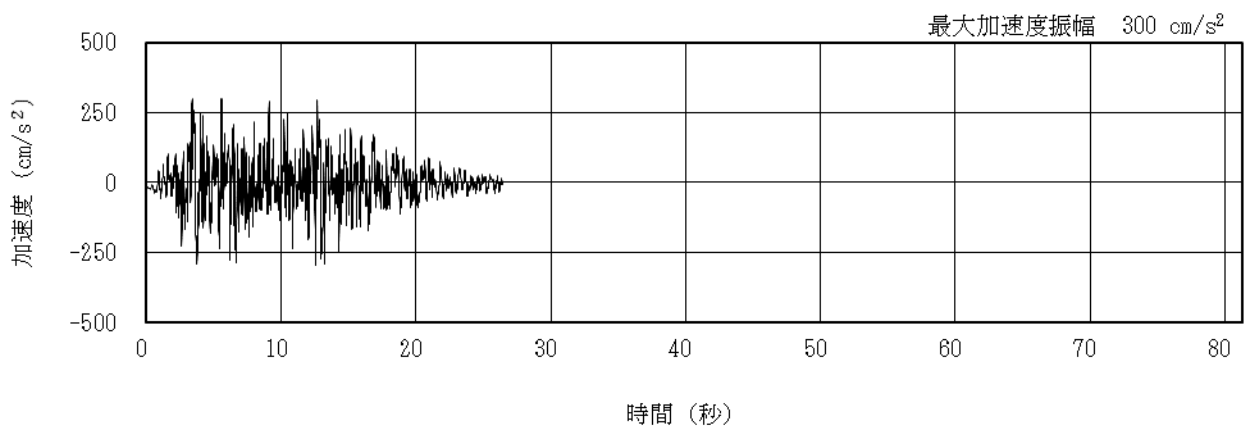
図 4.3.2-3 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(Ss600, 水平方向)



(従来の Ss-1V)



(従来の Ss-2V)



(従来の Ss-3V)

図 4.3.2-4 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(Ss600, 鉛直方向)

## (2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルは、曲げ、せん断剛性及び軸剛性を考慮した原子炉建屋の質点系モデルの質点に、三次元立体骨組でモデル化した燃料取り出し用構台を接続し、地盤との相互作用を考慮した建屋-地盤連成系モデルとする。原子炉建屋のモデルは「Ⅱ章 2.11 添付資料-7 別添-1 第2号機原子炉建屋西側外壁開口設置後の原子炉建屋の耐震安全性」で用いた解析モデルを基本に、南側外壁開口や遮蔽コンクリート等の設置（別冊28 P13 参照）を考慮して、重量や剛性を増減させたモデル（別冊28 P34, P35 参照）とする。なお、原子炉建屋の質点は炉心位置にモデル化する。解析モデルを図4.3.2-5及び図4.3.2-6に示す。

地震応答解析に用いる鉄骨およびオイルダンパの物性値を表4.3.2-1、表4.3.2-2に示す。燃料取り出し用構台の部材接合部の節点は機器荷重・仕上げ材等を考慮した重量とし、原子炉建屋の質点は表4.3.2-3に示す重量とする。燃料取り出し用構台の柱、梁は弾性部材の梁要素、鉛直ブレースは弾性部材のトラス要素とする。

構台と原子炉建屋南側壁間、構台鉛直面、およびランウェイガーダと原子炉建屋床間に設置するオイルダンパは、減衰要素とばね要素を直列に結合したモデルとする。ランウェイガーダと原子炉建屋床間に設置する弾性支承の鉛直方向は軸ばねとし、水平方向はローラーとする。なお、床上のオイルダンパ・弾性支承とも、圧縮専用ばねを原子炉建屋質点との間に設けることにより浮き上りを許容したモデルとする。なお、弾性支承及びバネ付きオイルダンパを含めた原子炉建屋～構台間の接続条件については、別冊28 P29, P30, 弾性支承及びバネ付きオイルダンパの設置条件および境界条件設定の妥当性については、それぞれ、別冊28 P48, 別冊28 P50, P51, 弾性支承及びバネ付きオイルダンパ下部に設置するすべり材の耐放射線性については、それぞれ別冊28 P49, 別冊28 P51 参照。また、原子炉建屋の質点系モデルは、軸方向は弾性とし、曲げとせん断に非線形特性を考慮する。

燃料取り出し用構台の地盤定数は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果中間報告書」（東京電力株式会社、平成20年3月31日）を参考に、水平成層地盤と仮定し地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定めた。改良地盤の諸元を表4.3.2-4に、非線形特性を図4.3.2-7に、地盤定数の設定結果を表4.3.2-5に示す。また、原子炉建屋の地盤定数は、1/2Ss450 に対しては上記報告書を参考に水平成層地盤と仮定し地震時のせん断ひずみレベルを考慮して定め、Ss600 に対しては上記報告書と同様として定めた。原子炉建屋の地盤定数を表4.3.2-6に示す。なお、改良地盤物性の設定及び改良地盤部の地中構築物の影響については、別冊28 P40～P42 参照。

地盤ばねは、「JEAG 4601-1991 追補版」に示されている手法を参考にして、底面地盤を成層補正し振動アドミタンス理論によりスウェイ及びロッキングばねを、側面地盤を Novak の方法により建屋側面ばねとして評価する。なお、燃料取り出し用構台は改良地盤への埋込がほとんどないため、底面地盤ばねのみ考慮する。

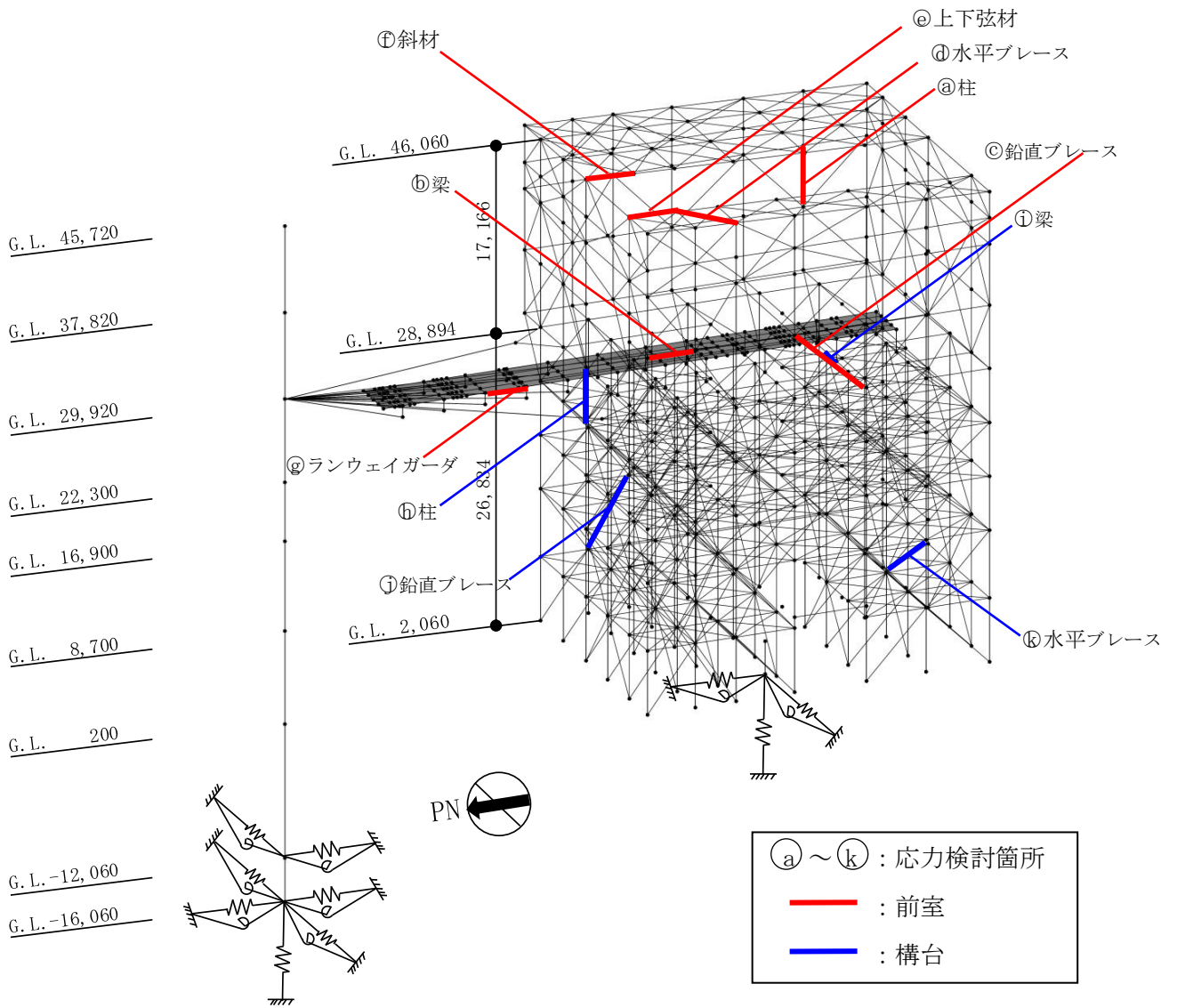


図 4.3.2-5 地震応答解析モデル (単位: mm) (1/2Ss450 応力検討箇所記載)

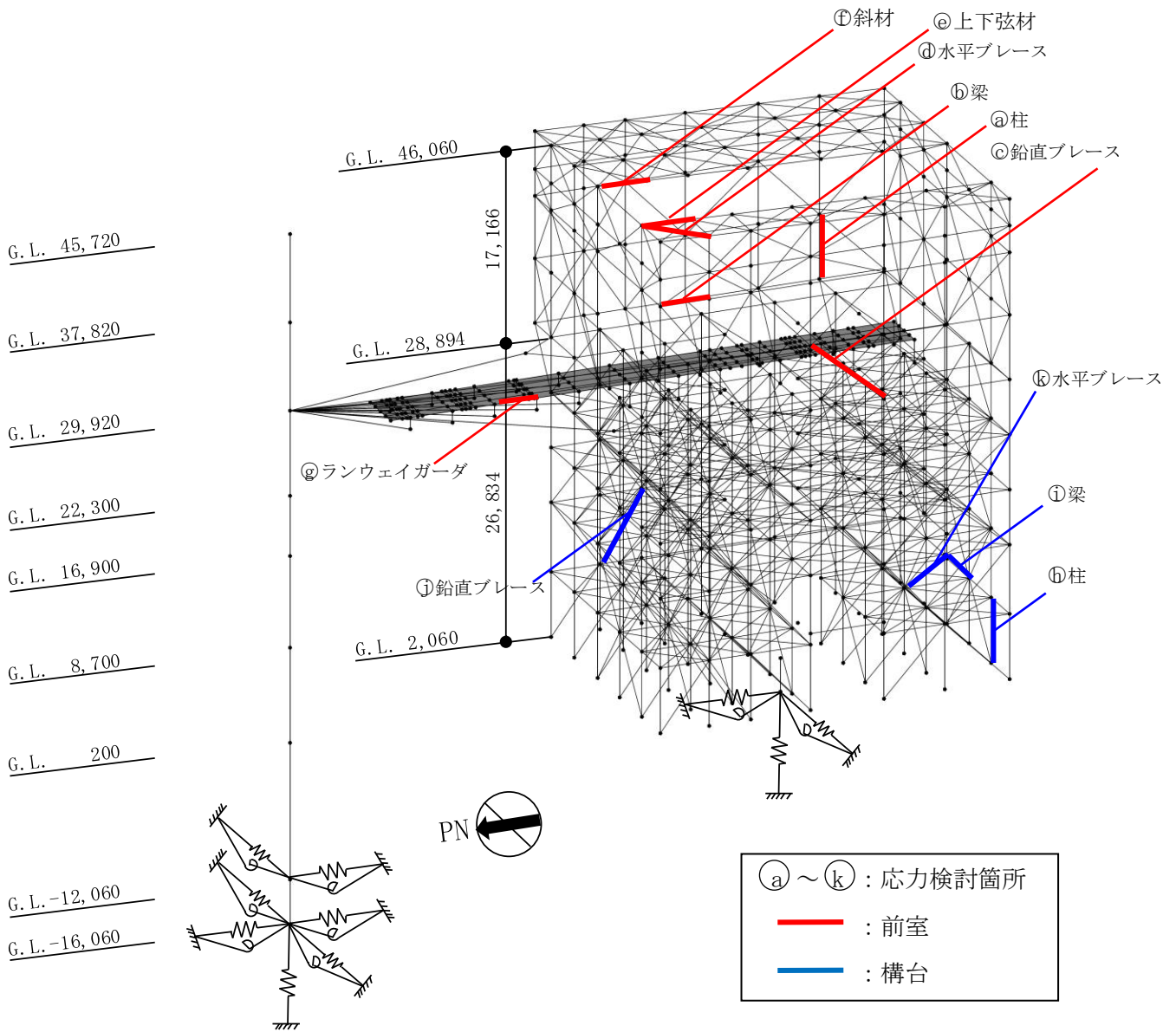


図 4.3.2-6 地震応答解析モデル (単位: mm) (Ss600 応力検討箇所記載)

表 4.3.2-1 地震応答解析に用いる物性値

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	減衰定数 h (%)	備考
燃料取り出し用構台	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0	2	SS400, SM490A, SN490B, SN490C, STK490, TMCP325



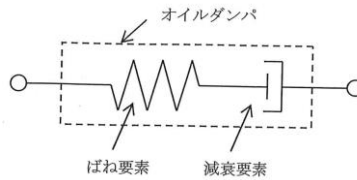
表 4.3.2-2 オイルダンパの物性値及び許容値

オイルダンパ (水平棟間)

オイルダンパ	最大減衰力 (kN)	リリーフ荷重 (kN)	最大速度 (m/s)	第一減衰係数 (kN・s/m)	第二減衰係数 (kN・s/m)	ストローク (mm)
	1970	1700	0.7	12000	490	±100

オイルダンパ (鉛直)

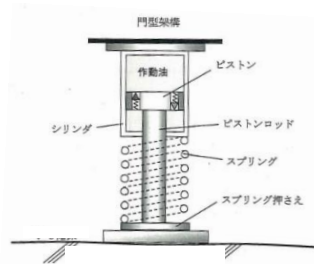
オイルダンパ	最大減衰力 (kN)	リリーフ荷重 (kN)	最大速度 (m/s)	第一減衰係数 (kN・s/m)	第二減衰係数 (kN・s/m)	ストローク (mm)
	2060	1600	0.5	40000	1000	±60



オイルダンパのモデル化

ばね付きオイルダンパ

ばね付き オイルダンパ	最大減衰力 (kN)	リリーフ荷重 (kN)	最大速度 (m/s)	第一減衰係数 (kN・s/m)	第二減衰係数 (kN・s/m)	ストローク (mm)
	1500	1200	1.0	5000	395	±100



ばね付きオイルダンパ概念図

表 4. 3. 2-3(1) 地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a) 水平 (NS) 方向

標高 G.L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_S (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I ( $\text{m}^4$ )
45.72	12880	23.28		
			18.6	10154
37.82	10220	18.53		
			16.1	10626
29.92	74470	134.76		
			184.3	22551
22.3	79440	143.78		
			166.8	24629
16.9	107720	194.96		
			249.3	44401
8.7	116670	211.14		
			157.1	40661
0.2	201190	364.11		
			456.8	110444
-12.06	341290	617.55		
			2656.2	480675
-16.06	125030	226.24		
合計	1068910			
		ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		ポアソン比 $\nu$	0.20	
		減衰 $h$	5%	

表 4. 3. 2-3(2) 地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(b)水平 (EW) 方向

標高 G.L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_S (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I ( $\text{m}^4$ )
45.72	12880	13.18		
			13.6	5926
37.82	10220	10.40		
			12.6	6255
29.92	74470	76.06		
			108.2	11927
22.3	79440	81.06		
			117.3	14199
16.9	107720	194.96		
			185.7	33796
8.7	116670	211.14		
			173.1	41960
0.2	201190	544.79		
			418.1	132121
-12.06	341290	923.98		
			2656.2	719166
-16.06	125030	338.53		
合計	1068910			
			ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$
			せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$
			ポアソン比 $\nu$	0.20
			減衰 $h$	5%

表 4. 3. 2-3(3) 地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(c) 鉛直方向

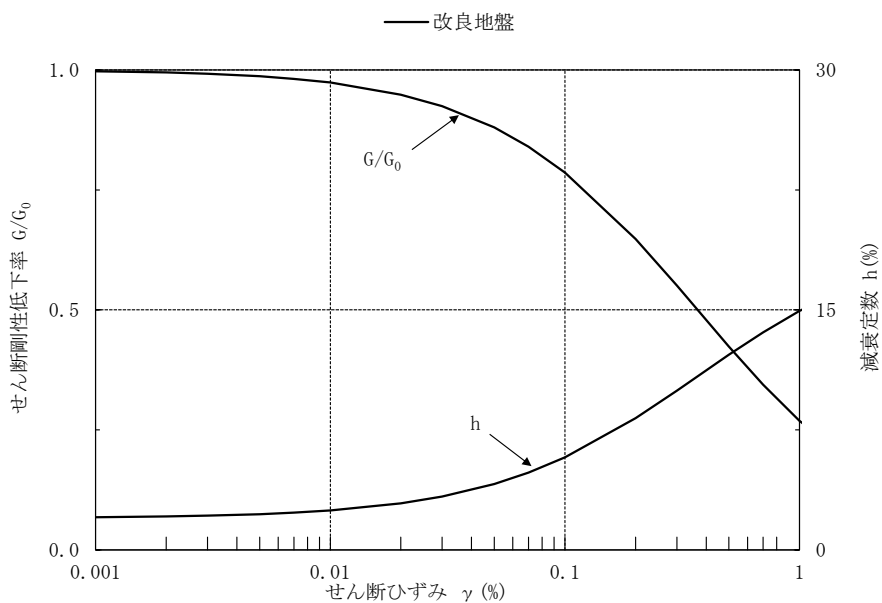
標高 G. L. (m)	質点重量 W (kN)	軸断面積 $A_N$ (m <sup>2</sup> )	軸ばね剛性 $K_A$ ( $\times 10^8$ kN/m)
45.72	12880		
		43.0	1.40
37.82	10220		
		42.5	1.38
29.92	74470		
		291.9	9.84
22.3	79440		
		295.1	14.04
16.9	107720		
		437.5	13.71
8.7	116670		
		359.4	10.87
0.2	201190		
		627.4	13.15
-12.06	341290		
		2656.2	170.66
-16.06	125030		
合計	1068910		

ヤング係数  $E_c$   $2.57 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 せん断弾性係数  $G$   $1.07 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 ポアソン比  $\nu$  0.20  
 減衰  $h$  5%

表 4.3.2-4 改良地盤の諸元

せん断波速度*	単位体積重量	ポアソン比*	初期せん断弾性係数
$V_s$ (m/s)	$\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	$\nu$	$G_0$ ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )
800	17.7	0.31	11.52

\*: 『柏崎刈羽原子力発電所 1 号機 建物・構築物の耐震安全性評価について (指摘事項に関する回答)』 (東京電力株式会社, 平成 22 年 2 月 19 日, 総合資源エネルギー調査会原子力安全・保安部会耐震・構造設計小委員会構造 WG (第 46 回) 会合資料)



\*: 『柏崎刈羽原子力発電所 1 号機 建物・構築物の耐震安全性評価について (指摘事項に関する回答)』 (東京電力株式会社, 平成 22 年 2 月 19 日, 総合資源エネルギー調査会原子力安全・保安部会耐震・構造設計小委員会構造 WG (第 46 回) 会合資料)

図 4.3.2-7 改良地盤の非線形特性

表 4.3.2-5(1) 地盤定数の設定結果 (燃料取り出し用構台)

(a) 1/2Ss450

標高 G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	改良地盤	800	17.7	0.310	11.40	11.52	0.99	29.87	2	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.73	3.41	0.80	7.99	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.49	4.36	0.80	10.16	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.50	5.63	0.80	13.01	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.22	6.53	0.80	15.05	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	-	-	-

表 4.3.2-5(2) 地盤定数の設定結果 (燃料取り出し用構台)

(b) 従来の Ss-1

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	改良地盤									
-8.1		800	17.7	0.310	11.40	11.52	0.99	29.87	2	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

(c) 従来の Ss-2

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	改良地盤									
-8.1		800	17.7	0.310	11.40	11.52	0.99	29.87	2	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.73	3.41	0.80	7.99	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.49	4.36	0.80	10.16	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.50	5.63	0.80	13.01	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.22	6.53	0.80	15.05	3	88.0
	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

(d) 従来の Ss-3

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	改良地盤									
-8.1		800	17.7	0.310	11.40	11.52	0.99	29.87	2	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.63	3.41	0.77	7.70	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.36	4.36	0.77	9.78	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.34	5.63	0.77	12.55	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.03	6.53	0.77	14.51	3	88.0
	(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-	-

表 4.3.2-6(1) 地盤定数の設定結果 (原子炉建屋)

(a) 1/2Ss450

標高 G.L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 $\nu$	せん断 弾性係数 G ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E ( $\times 10^5$ kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.73	3.41	0.80	7.99	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.49	4.36	0.80	10.16	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.50	5.63	0.80	13.01	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.22	6.53	0.80	15.05	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	-	-	-



表 4. 3. 2-6(2) 地盤定数の設定結果 (原子炉建屋)

(b) 従来の Ss-1

標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(c) 従来の Ss-2

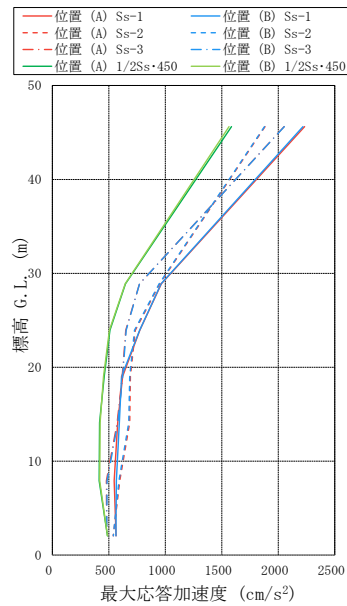
標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.76	3.41	0.81	8.08	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.53	4.36	0.81	10.27	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.56	5.63	0.81	13.19	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.29	6.53	0.81	15.26	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(d) 従来の Ss-3

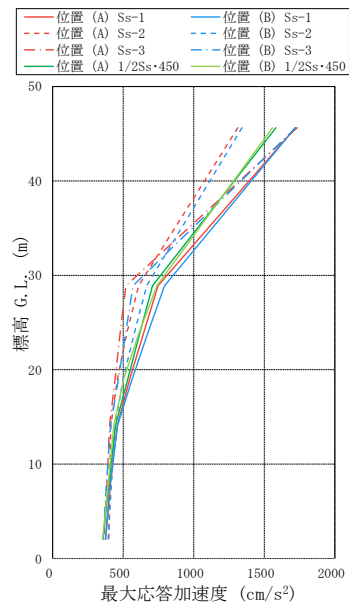
標高 G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位体積 重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.25	2.62	0.86	6.63	3	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.66	3.41	0.78	7.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	3.40	4.36	0.78	9.89	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	4.39	5.63	0.78	12.70	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	5.09	6.53	0.78	14.68	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(3) 地震応答解析結果

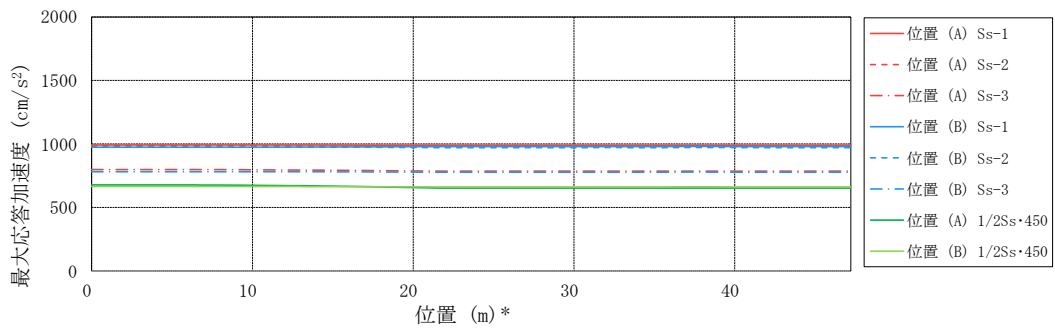
最大応答加速度分布を図 4.3.2-8(1) 及び図 4.3.2-8(2) に示す。



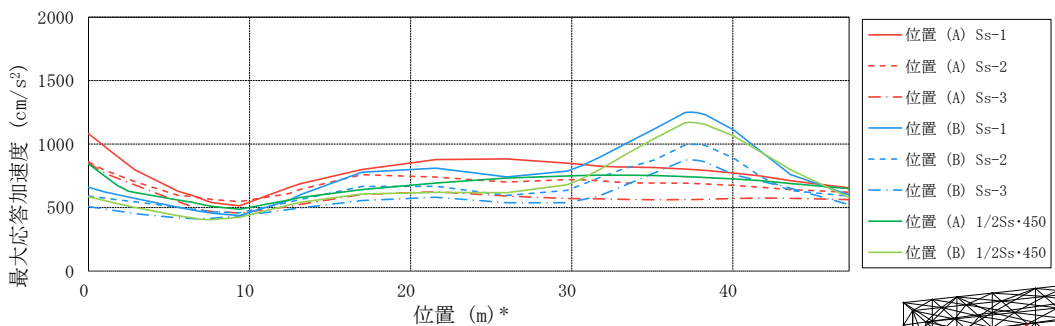
(a) 水平(NS)成分 (構台+前室)



(b) 鉛直成分 (構台+前室)



(c) 水平(NS)成分 (ランウェイガーダ)



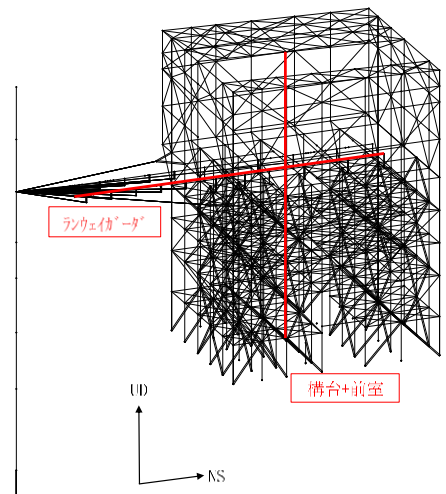
(d) 鉛直成分 (ランウェイガーダ)

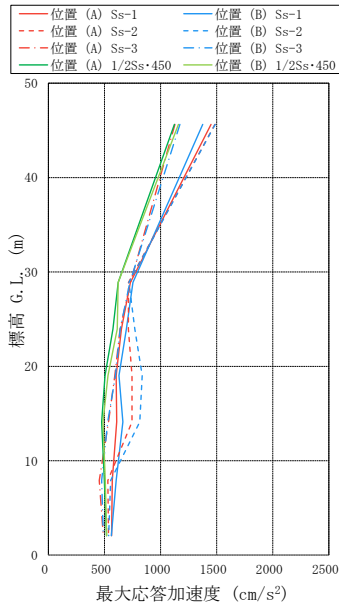
注：凡例位置の条件は表 4.2.1-4 に示す

\*：位置は原子炉建屋側の先端からの距離を示す

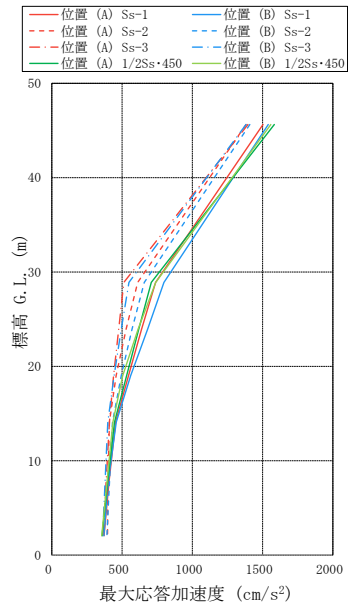
図 4.3.2-8(1) 最大応答加速度分布

(Ss600 : NS 及び UD 方向加力時, 1/2Ss450 : 3 方向加力時)

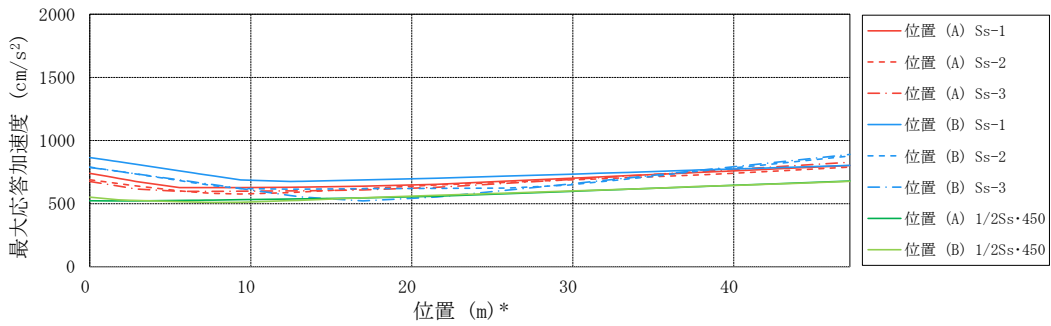




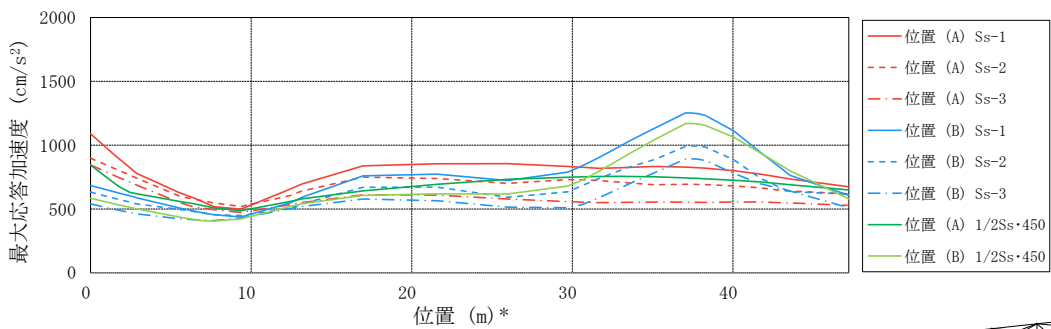
(a) 水平(EW)成分 (構台+前室)



(b) 鉛直成分 (構台+前室)



(c) 水平(EW)成分 (ランウェイガーダ)

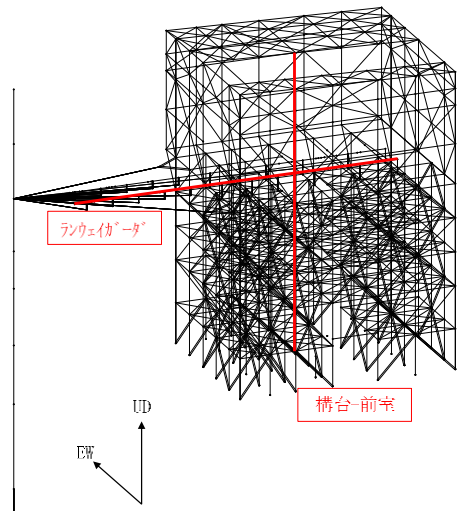


(d) 鉛直成分 (ランウェイガーダ)

注：凡例位置の条件は表 4.2.1-4 に示す

\*：位置は原子炉建屋側の先端からの距離を示す

図 4.3.2-8(2) 最大応答加速度分布  
(Ss600 : EW 及び UD 方向加力時, 1/2Ss450 : 3 方向加力時)



(4) 波及的影響の評価

地震応答解析結果が、JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会，2018 年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は 1/75 以下，層の塑性率は 4 以下，部材の塑性率は 5 以下」\* 及びせん断力はせん断耐力以下）を満足することを確認する。

なお，解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター，平成 19 年 7 月 20 日）に示されるクライテリア（層間変形角は 1/100 以下，層の塑性率は 2 以下，部材の塑性率は 4 以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し，安全性を確認する。

\*：北村春幸，宮内洋二，浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」，日本建築学会構造系論文集，第 604 号，2006 年 6 月

1) 層間変形角の検討

最大応答層間変形角を表 4.3.2-7 に示す。

検討の結果，最大応答層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 4.3.2-7(1) 最大応答層間変形角の検討結果 (1/2Ss450)

検討箇所	地震波	入力方向 (位置)*	最大応答値	クライテリア	判定
前室	1/2Ss450	NS (A)	1/604	1/75	O. K.
		EW (B)	1/624	1/75	O. K.
構台		NS (B)	1/741	1/75	O. K.
		EW (B)	1/386	1/75	O. K.

\*：( )内は，燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

表 4.3.2-7(2) 最大応答層間変形角の検討結果 (Ss600)

検討箇所	地震波	入力方向 (位置)*	最大応答値	クライテリア	判定
前室	従来の Ss-1	NS (A)	1/431	1/75	O. K.
		EW (A)	1/484	1/75	O. K.
	従来の Ss-2	NS (A)	1/433	1/75	O. K.
		EW (A)	1/472	1/75	O. K.
	従来の Ss-3	NS (B)	1/442	1/75	O. K.
		EW (A)	1/551	1/75	O. K.
構台	従来の Ss-1	NS (B)	1/443	1/75	O. K.
		EW (B)	1/320	1/75	O. K.
	従来の Ss-2	NS (B)	1/461	1/75	O. K.
		EW (B)	1/280	1/75	O. K.
	従来の Ss-3	NS (A)	1/591	1/75	O. K.
		EW (B)	1/262	1/75	O. K.

\*：( )内は，燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

2) 断面検討

部材の応答結果が塑性していないため、断面検討結果を応力度比で示す。部材の応力度比は、2方向の曲げ、軸力及びせん断力の各最大応力と各許容応力度との比を組み合わせた値で表される。表 4.3.2-8 に断面検討結果を示す。なお、各許容応力度、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度は「平成 12 年建設省告示第 2464 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

表 4.3.2-8 より全てのケースで応力度比が 1 以下になり、クライテリアを満足することを確認した。

表 4.3.2-8(1) 断面検討結果 (前室) (1/2Ss450)

部 位 <sup>*1</sup>	部材形状 (mm) 〈使用材料〉	燃料取扱 設備位置 <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定	
			$\sigma_c$	$\sigma_{bz}$	$f_c$	$f_{bz}$			
前 室	㊸柱 H-700×300 ×14×28 〈SM490A〉	A	$\sigma_c$	24.2	$f_c$	310	0.71	O. K.	
			$\sigma_{by}$	180.8	$f_{by}$	313			
			$\sigma_{bz}$	17.9	$f_{bz}$	357			
			$\tau$	3.0	$f_s$	205			
	㊹梁 H-390×300 ×10×16 〈SM490A〉	B	$\sigma_t$	3.8	$f_t$	357	0.70	O. K.	
			$\sigma_{by}$	0.0	$f_{by}$	273			
			$\sigma_{bz}$	243.8	$f_{bz}$	357			
			$\tau$	4.2	$f_s$	205			
	㊺鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×9.5 〈STK490〉	B	$\sigma_c$	128.8	$f_c$	279	0.47	O. K.
	㊻水平 ブレース	2[s-150×75×9 ×12.5 〈SS400〉	B	$\sigma_t$	129.7	$f_t$	258	0.51	O. K.
	㊼屋根トラ ス上下弦材	H-300×300×16 ×16 〈SM490A〉	B	$\sigma_c$	169.2	$f_c$	316	0.66	O. K.
				$\sigma_{bz}$	43.7	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	0.7	$f_s$	205		
	㊽屋根トラ ス斜材	2[s-150×75× 6.5×10 〈SS400〉	A	$\sigma_c$	117.1	$f_c$	239	0.49	O. K.
㊾ランウェ イガーダ	□-1500×900× (80+40)×80 〈SN490B〉	A	$\sigma_c$	20.4	$f_c$	323	0.29	O. K.	
			$\sigma_b$	69.8	$f_b$	323			
			$\tau$	12.5	$f_s$	186			

\*1 : ㊸～㊾の符号は図 4.3.2-5 の応力検討箇所を示す

\*2 : 表 4.2.1-4 参照

表 4. 3. 2-8(2) 断面検討結果 (構台) (1/2Ss450)

部 位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	燃料取扱 設備位置*2	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定
構 台	㊦柱	(X)H-1500×400 ×16×32 (Y)H- 700×350 ×16×32 〈SM490A〉	B	$\sigma_c$	41.6	$f_c$	348	0.83	O. K.
				$\sigma_{by}$	120.5	$f_{by}$	303		
				$\sigma_{bz}$	108.5	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	12.8	$f_s$	205		
	㊦梁	H-800×350 ×19×36 〈SM490A〉	B	$\sigma_c$	0.1	$f_c$	342	0.69	O. K.
				$\sigma_{by}$	152.4	$f_{by}$	339		
				$\sigma_{bz}$	0.7	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	106.1	$f_s$	205		
	㊦鉛直 ブレース	$\phi$ -406.4×9.5 〈STK490〉	B	$\sigma_c$	137.7	$f_c$	294	0.47	O. K.
	㊦水平 ブレース	[-180×75×7× 10.5 〈SS400〉	B	$\sigma_t$	36.1	$f_t$	258	0.14	O. K.

\*1 : ㊦～㊦の符号は図 4. 3. 2-5 の応力検討箇所を示す

\*2 : 表 4. 2. 1-4 参照

表 4.3.2-8(3) 断面検討結果（前室）（Ss600）

部 位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置)*2	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定
前 室	㊸柱	H-700×300 ×14×28 〈SM490A〉	従来の Ss-1 -EW+UD (A)	$\sigma_c$	13.7	$f_c$	310	0.82	O. K.
				$\sigma_{by}$	223.5	$f_{by}$	298		
				$\sigma_{bz}$	3.6	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	27.6	$f_s$	205		
	㊸梁	H-390×300 ×10×16 〈SM490A〉	従来の Ss-1 +EW-UD (B)	$\sigma_t$	6.8	$f_t$	357	0.91	O. K.
				$\sigma_{by}$	0.0	$f_{by}$	273		
				$\sigma_{bz}$	314.6	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	5.5	$f_s$	205		
	㊸鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×9.5 〈STK490〉	従来の Ss-2 +NS+UD (A)	$\sigma_c$	199.6	$f_c$	279	0.72	O. K.
	㊸水平 ブレース	2[s-200×90×8 ×13.5 〈SS400〉	従来の Ss-1 +EW-UD (B)	$\sigma_t$	178.7	$f_t$	258	0.70	O. K.
	㊸屋根トラ ス上下弦材	H-300×300×16 ×16 〈SM490A〉	従来の Ss-1 +NS-UD (B)	$\sigma_c$	221.0	$f_c$	316	0.80	O. K.
				$\sigma_{bz}$	33.3	$f_{bz}$	357		
$\tau$				0.5	$f_s$	205			
㊸屋根トラ ス斜材	2[s-150×75× 6.5×10 〈SS400〉	従来の Ss-1 -NS+UD (B)	$\sigma_c$	148.7	$f_c$	239	0.63	O. K.	
㊸ランウェ イガード	□-1500×900× (80+40)×80 〈SN490B〉	従来の Ss-1 +NS-UD と +EW-UD と の包絡 (A)	$\sigma_c$	24.2	$f_c$	323	0.35	O. K.	
			$\sigma_b$	85.4	$f_b$	323			
			$\tau$	14.9	$f_s$	186			

\*1 : ㊸～㊸の符号は図 4.3.2-6 の応力検討箇所を示す

\*2 : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

表 4.3.2-8(4) 断面検討結果 (構台) (Ss600)

部 位*1		部材形状 (mm) <使用材料>	荷重ケース (位置)*2	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力度比	判定
構 台	㊦柱	(X)H-700×300 ×36×36 (Y)H-700×350 ×36×40 <SM490A>	従来の Ss-3 +EW-UD (B)	$\sigma_c$	43.4	$f_c$	343	0.91	O.K.
				$\sigma_{by}$	246.2	$f_{by}$	337		
				$\sigma_{bz}$	17.1	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	18.8	$f_s$	205		
	㊦梁	H-750×350 ×40×40 <SM490A>	従来の Ss-3 +EW-UD (B)	$\sigma_c$	24.1	$f_c$	350	0.87	O.K.
				$\sigma_{by}$	265.9	$f_{by}$	352		
				$\sigma_{bz}$	5.0	$f_{bz}$	357		
				$\tau$	41.5	$f_s$	205		
	㊦鉛直 ブレース	$\phi$ -406.4×9.5 <STK490>	従来の Ss-1 +NS-UD (B)	$\sigma_c$	214.2	$f_c$	294	0.73	O.K.
	㊦水平 ブレース	[-180×75×7× 10.5 <SS400>	従来の Ss-3 -EW+UD (B)	$\sigma_t$	63.3	$f_t$	258	0.25	O.K.

\*1 : ㊦～㊦の符号は図 4.3.2-6 の応力検討箇所を示す

\*2 : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)



#### 4.3.3 弾性支承の耐震性に対する検討

弾性支承に作用する圧縮力による面圧が、圧縮限界強度以下となることを確認する。圧縮限界強度はゴム材料の弾性係数に応じて製品が規定する数値である。

検討の結果、最大圧縮面圧が圧縮限界強度以下となることを確認した。

表 4.3.3-1(1) 弾性支承の耐震性に対する検討結果 (1/2Ss450)

設置位置	燃料取扱設備位置*	圧縮限界強度 $\sigma_v$ (N/mm <sup>2</sup> )	最大圧縮面圧 $\sigma_D$ (N/mm <sup>2</sup> )	$\sigma_D / \sigma_v$	判定
西側	A	43.00	8.80	0.21	O. K.
東側	A	43.00	8.86	0.21	O. K.

\* : 表 4.2.1-4 参照

表 4.3.3-1(2) 弾性支承の耐震性に対する検討結果 (Ss600)

設置位置	荷重ケース (位置)*	圧縮限界強度 $\sigma_v$ (N/mm <sup>2</sup> )	最大圧縮面圧 $\sigma_D$ (N/mm <sup>2</sup> )	$\sigma_D / \sigma_v$	判定
西側	従来の Ss-1 +NS-UD (A)	43.00	10.83	0.26	O. K.
東側	従来の Ss-1 +NS-UD (A)	43.00	10.83	0.26	O. K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

#### 4.3.4 オイルダンパの耐震性に対する検討

各部位で用いられるオイルダンパの耐震性に対する検討は、地震応答解析における最大応答値が許容値以下であることを確認する。

表 4.3.4-1 に最大応答値と許容値を比較した結果を示す。

検討の結果、全てのオイルダンパで最大応答値が許容値以下になることを確認した。

表 4.3.4-1(1) オイルダンパの検討結果 (1/2Ss450)

種類	検討項目	燃料取扱設備位置*	最大応答値	許容値	判定
オイルダンパ (水平棟間)	変位 (mm)	A	40	±100	O. K.
	速度 (m/s)	A	0.42	0.70	O. K.
オイルダンパ (鉛直)	変位 (mm)	B	13	±60	O. K.
	速度 (m/s)	B	0.07	0.50	O. K.
ばね付き オイルダンパ	変位 (mm)	A	14	±100	O. K.
	速度 (m/s)	A	0.10	1.00	O. K.

\* : 表 4.2.1-4 参照

表 4.3.4-1(2) オイルダンパの検討結果 (Ss600)

種類	検討項目	荷重ケース (位置)*	最大応答値	許容値	判定
オイルダンパ (水平棟間)	変位 (mm)	従来の Ss-1 NS (B)	50	±100	O. K.
	速度 (m/s)	従来の Ss-2 NS (B)	0.54	0.70	O. K.
オイルダンパ (鉛直)	変位 (mm)	従来の Ss-3 EW (B)	18	±60	O. K.
	速度 (m/s)	従来の Ss-1 NS (B)	0.16	0.50	O. K.
ばね付き オイルダンパ	変位 (mm)	従来の Ss-1 NS (A)	18	±100	O. K.
	速度 (m/s)	従来の Ss-1 NS (A)	0.14	1.00	O. K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

#### 4.3.5 1/2Ss450 と Ss600 の応答結果の比較検討

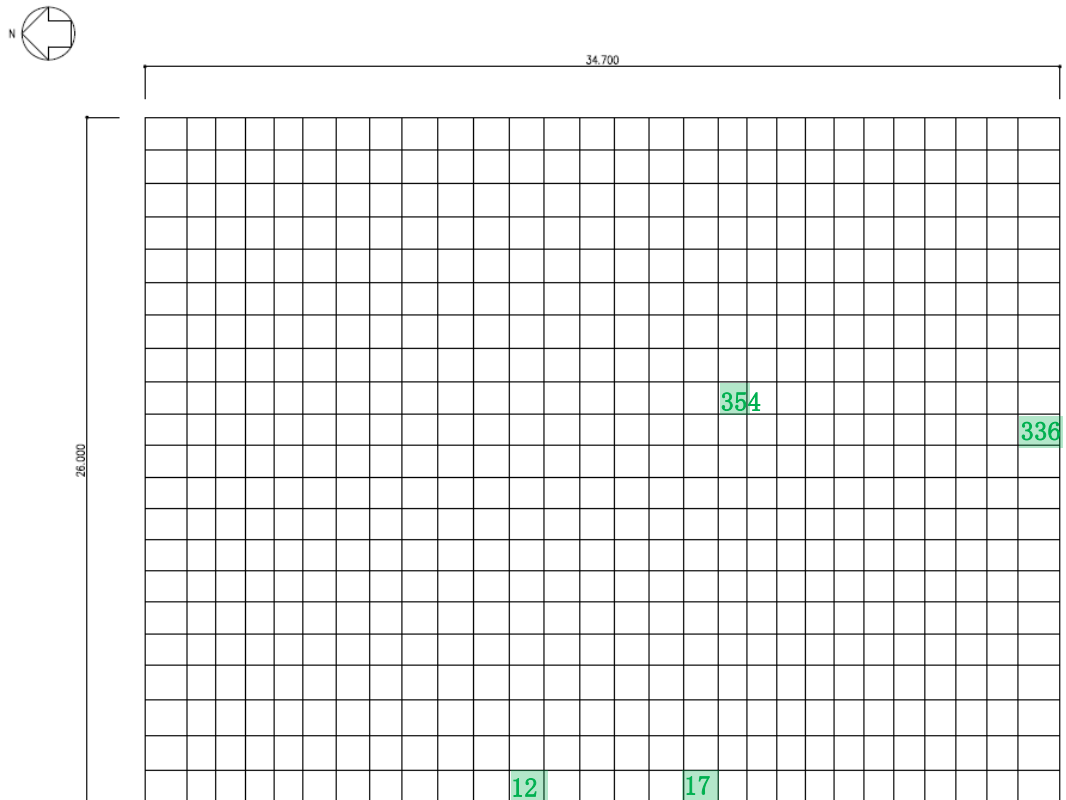
前述の通り，最大応答層間変形角，部材の断面検討結果，弾性支承の最大圧縮面圧およびオイルダンパの最大応答の全てにおいて，1/2Ss450 評価結果が Ss600 評価結果を下回り，1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認した。（別冊 2 8 P97～P103 参照）

#### 4.3.6 基礎の耐震性に対する検討

##### (1) 解析モデル

基礎の応力解析は、弾性地盤上に支持された版として有限要素法を用いて行う。解析モデルは、図 4.3.6-1 に示すように四辺形の均質等方な板要素により構成し、支持地盤は等価な弾性ばねとしてモデル化する。但し、浮き上がった場合は、ばねの剛性が 0 となる。

なお、前述の通り 1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。



凡例 #### : Ss600 時断面算定要素 (数字は要素番号)

図 4.3.6-1 基礎モデル(Ss600 時)

##### (2) 断面検討

組合せた応力より、各要素の必要鉄筋比を「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」より求め、設計配筋が必要鉄筋比を上回ること及び面外せん断力が許容せん断力以下であることを確認する。必要鉄筋比が最大となる要素と設計面外せん断力と許容せん断力との比が最大になる要素の断面検討結果を表 4.3.6-1 に示す。なお、各許容応力度、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度は「平成 12 年建設省告示第 2464 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

断面検討の結果、設計配筋は必要鉄筋比を上回り、面外せん断力は許容せん断力以下であることを確認した。

表 4.3.6-1 断面検討結果

要素番号	方向	荷重ケース (位置)*1	設計応力		N/(b・D) <sup>*2</sup> (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	M/(b・D <sup>2</sup> ) (×10 <sup>-2</sup> N/mm <sup>2</sup> )	Pt (%)	設計配筋 上段：上端筋 下段：下端筋 (pt:%)	設計面外 せん断力 Q (kN/m)	許容せん断力 f <sub>s</sub> ・b・j (kN/m)	判定
			N*2 (kN/m)	M (kN・m/m)							
12	NS	従来のSs-1 +NS-UD (A)	382.3	11137.8	0.127	1.238	0.378	2-D38@200 3-D38@200 (0.38) (0.57)	542.8	2616	O. K.
336	EW	従来のSs-3 +EW-UD (B)	702.3	8453.6	0.234	0.939	0.261	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	513.9	2663	O. K.
17	NS	従来のSs-1 +NS-UD (A)	485.8	3585.9	0.162	0.398	0.099	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	2048.4	2663	O. K.
354	EW	従来のSs-2 -EW+UD (B)	700.2	4994.3	0.233	0.555	0.139	2-D38@200 2-D38@200 (0.38) (0.38)	1806.0	2663	O. K.

\*1：( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)  
\*2：圧縮を正とする。

#### 4.3.7 改良地盤の耐震性に対する検討

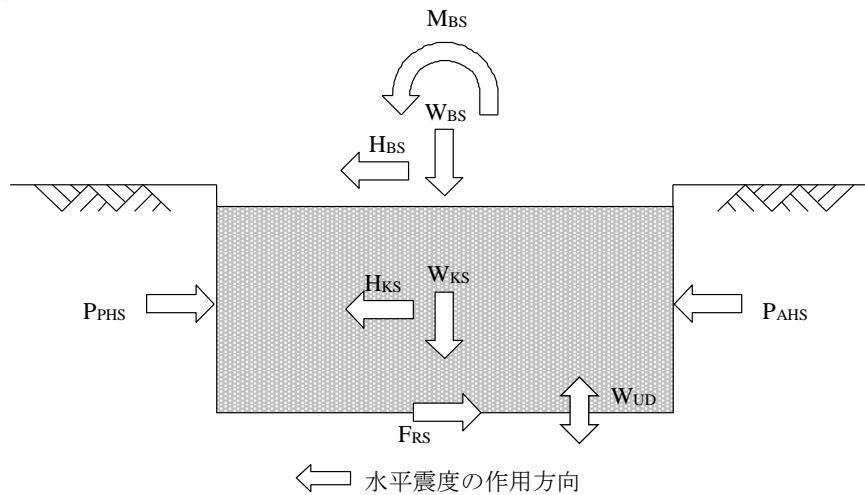
##### (1) 検討方針

検討は「JEAC 4616-2009」に準拠し、地震により発生する荷重に対して許容限界を満足することを確認する。改良地盤の許容限界は、改良地盤の設計圧縮強度、せん断抵抗に対する安全率に基づき設定する。支持地盤の許容限界は、支持地盤の極限支持力に対する安全率に基づき設定する。

なお、前述の通り 1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。

##### (2) 地震時に対する検討

地震時において、改良地盤底面の最大接地圧及びせん断応力が、改良地盤の短期許容応力以下であることを確認する。図 4.3.7-1 に作用荷重を示す。



$W_{BS}$  : 燃料取り出し用構台荷重

$W_{KS}$  : 改良地盤の自重

$H_{BS}$  : 燃料取り出し用構台による水平力

$M_{BS}$  : 燃料取り出し用構台による改良地盤底面における  
転倒モーメント

$H_{KS}$  : 改良地盤の慣性力

$P_{AHS}$  : 地震時主働土圧による水平力

$P_{PHS}$  : 地震時受働土圧による水平力

$F_{RS}$  : 支持地盤のせん断抵抗力

$W_{UD}$  : 上下動による鉛直応力

図 4.3.7-1 作用荷重 (Ss600 時)

改良地盤の荷重負担範囲は、基礎底盤における矩形断面部分を対象とした面積  $A=902.2\text{m}^2$ 、断面係数  $Z_x=3909\text{m}^3$ 、 $Z_y=5217\text{m}^3$  として算定する。改良地盤底面の最大接地圧 ( $q_{1s}$ ) 及び最大せん断応力 ( $\tau_{\max}$ ) は下式にて求める。

$$\begin{aligned} \text{鉛直力の合計} & \quad \Sigma W = W_{BS} + W_{KS} \\ \text{水平力の合計} & \quad \Sigma H_x = H_{BS} + H_{KS} + P_{AHS} + P_{PHS} \quad (\text{NS 方向}) \\ & \quad \Sigma H_y = H_{BS} + H_{KS} + P_{AHS} + P_{PHS} \quad (\text{EW 方向}) \\ \text{転倒モーメントの合計} & \quad \Sigma M_x = M_{BS} + M_{KS} + M_{AHS} + M_{PHS} \quad (\text{X 軸回り:EW 方向加力}) \\ & \quad \Sigma M_y = M_{BS} + M_{KS} + M_{AHS} + M_{PHS} \quad (\text{Y 軸回り:NS 方向加力}) \end{aligned}$$

ここに、  $M_{KS}$  : 改良地盤の転倒モーメント  
 $M_{AHS}$  : 地震時主働土圧による転倒モーメント  
 $M_{PHS}$  : 地震時受働土圧による転倒モーメント

$$\begin{aligned} \text{改良地盤底面の最大接地圧} & \quad q_{2SX+} = \Sigma W/A + \Sigma M_y/Z_y + W_{UD}/A \\ & \quad q_{2SX-} = \Sigma W/A + \Sigma M_y/Z_y - W_{UD}/A \\ & \quad q_{2SY+} = \Sigma W/A + \Sigma M_x/Z_x + W_{UD}/A \\ & \quad q_{2SY-} = \Sigma W/A + \Sigma M_x/Z_x - W_{UD}/A \end{aligned}$$

ここに、  $W_{UD}$  : 上下動による鉛直応力

### (3) 波及的影響の評価

改良地盤の評価は、「JEAC 4616-2009」に準じ、改良地盤に発生する最大応力が許容値に対して 1.5以上の安全率を有していることを確認する。

#### 1) 改良地盤に生じる鉛直応力に対する検討結果

改良地盤に作用する鉛直応力に対し改良地盤の圧縮強度の安全率が 1.5 以上であることを確認する。

$$\frac{ssf_{sc}}{\sigma_{y\max}} \geq 1.5$$

ここで、  $ssf_{sc}$  : 改良地盤の圧縮強度  
 $\sigma_{y\max}$  : 有限要素解析による各要素の鉛直応力の最大値

改良地盤の圧縮強度 ( $ssf_{sc}$ ) は、「JEAC 4616-2009」により改良地盤の圧縮強度の平均値である設計圧縮強度  $5000 \text{ kN/m}^2$  とし、断面欠損を考慮した場合  $4900 \text{ kN/m}^2$  とする。

安全率の検討結果を表 4.3.7-1 に示す。検討結果より改良地盤の圧縮強度は改良地盤の基礎スラブ直下における最大鉛直応力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。

表 4.3.7-1 改良地盤の鉛直応力に対する検討結果

方向	最大鉛直応力 $\sigma_{y\max}$ (kN/m <sup>2</sup> )	最大鉛直応力 発生地震波	圧縮強度 $ssf_{sc}$ (kN/m <sup>2</sup> )	安全率	クライテリア	判定
NS	761	従来の Ss-1	4900	6.43	1.50	OK
EW	793	従来の Ss-2	4900	6.17	1.50	OK

2) 改良地盤に作用するせん断力に対する検討

検討は、改良地盤の基礎直下及び改良地盤下端のせん断力について行う。改良地盤上端及び下端にせん断面を想定し、せん断に対する安全率  $F_s(t)$  が 1.5 以上であることを確認する。

$$F_s(t) = \frac{F_R(t)}{F_H(t)} \geq 1.5$$

ここで、  
 $F_s(t)$  : せん断に対する安全率  
 $F_R(t)$  : せん断面上の地盤の水平抵抗力 (kN)  
 $F_H(t)$  : せん断面上の地盤のせん断力 (kN)  
 $ssf_{ss}$  : 改良地盤のせん断強度 (kN/m<sup>2</sup>)

改良地盤のせん断強度 ( $ssf_{ss}$ ) は下式より設定する。

$$ssf_{ss} = \frac{1}{5} ssf_{sc}$$

ここで、 $ssf_{ss}$  : 1000 kN/m<sup>2</sup>

断面欠損を考慮し

$ssf_{ss}$  : 750 kN/m<sup>2</sup>



安全率の検討結果を表 4.3.7-2, 表 4.3.7-3 に示す。

検討結果より改良地盤の水平抵抗力は、改良地盤の基礎直下及び改良地盤下端の最大せん断力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。

表 4.3.7-2 改良地盤のせん断力に対する検討結果 (基礎下端)

方向	最大せん断力 発生地震波	最大せん断力 F <sub>H</sub> (kN)	水平抵抗力 F <sub>R</sub> (kN)	安全率 F <sub>S</sub>	クライテリア	判定
NS	従来の Ss-2	56816	676650	11.90	1.50	OK
EW	従来の Ss-1	55076	676650	12.28	1.50	OK

表 4.3.7-3 改良地盤のせん断力に対する検討結果 (改良地盤下端)

方向	最大せん断力 発生地震波	最大せん断力 F <sub>H</sub> (kN)	水平抵抗力 F <sub>R</sub> (kN)	安全率 F <sub>S</sub>	クライテリア	判定
NS	従来の Ss-2	105335	676650	6.42	1.50	OK
EW	従来の Ss-1	106956	676650	6.32	1.50	OK

### 3) 支持力の検討

支持力の評価は、改良地盤下端における最大鉛直応力が支持地盤の極限支持力度に対して 1.5 以上の安全率を有していることを確認する。

$$\frac{R_u}{V} \geq 1.5$$

ここで、

R<sub>u</sub>: 極限鉛直支持力度

V: 地震応答解析から得られる最大鉛直応力

検討の結果、支持地盤の極限支持力度 ( 6860 kN/m<sup>2</sup> ) \*は改良地盤底部における最大鉛直応力の 1.5 以上の安全率を有していることを確認した。

\* : 「福島第一原子力発電所 原子炉設置変更許可申請書 ( 4号炉増設 )」による

$$\text{NS 方向} : 6860 \text{ kN/m}^2 / 761 \text{ kN/m}^2 = 9.01 \geq 1.50 \dots \text{OK}$$

$$\text{EW 方向} : 6860 \text{ kN/m}^2 / 793 \text{ kN/m}^2 = 8.65 \geq 1.50 \dots \text{OK}$$

#### 4.3.8 原子炉建屋接触部の耐震性に対する検討

##### (1) 弾性支承反力に対する検討

地震応答解析で得られる弾性支承に生ずる最大圧縮軸力の反力として原子炉建屋の RC 梁に生じるせん断力が、梁の許容せん断耐力以下となることを確認する。なお、原子炉建屋接触部の状況については、別冊 2 8 P64 参照。

弾性支承の反力は基本的に、プール壁及び下階柱に直接かかるように配置するが、一部梁端に作用するため、それを考慮する。この時、地震時の鉛直方向震度を下向きに考慮する。鉛直震度は、時刻歴解析時のオペフロ床質点の鉛直方向最大加速度を震度換算して算定する。

なお、前述の通り 1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。

検討の結果、梁のせん断力が許容せん断耐力以下となることを確認した。

表 4.3.8-1 弾性支承反力に対する検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	梁端せん断力 Q (kN)	許容せん断耐力 Qa (kN)	耐力比	判定
弾性支承受梁	従来の Ss-1 NS (A)	1203	2313	0.52	O. K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

(2) ばね付きオイルダンパの反力に対する検討

ばね付きオイルダンパの反力を受ける原子炉建屋床架構を有限要素法を用いてモデル化し弾性解析を行う。床スラブは板要素で、大梁は線材でモデル化する。

ばね付きオイルダンパの反力は、地震応答解析における各支点での最大鉛直方向反力値を取り出し静的に作用させる。

なお、前述の通り 1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。

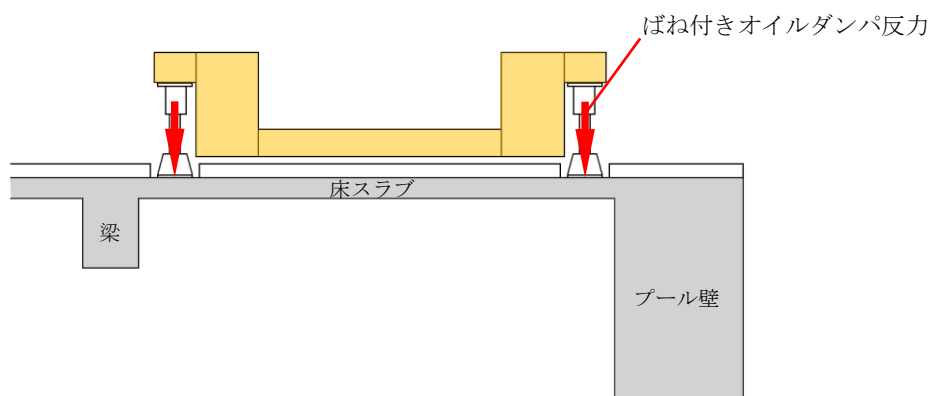


図 4.3.8-1 ばね付きオイルダンパ反力概要図

検討の結果、床スラブの発生応力が許容耐力以下となることを確認した。

表 4.3.8-2 ばね付きオイルダンパの反力に対する検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	応力	発生応力	許容耐力	耐力比	判定
ばね付きオイルダンパ 受け床スラブ	従来の Ss-1 NS (A)	曲げ M (kN・m)	79	216	0.37	0. K.
		せん断 Q (kN)	321	420	0.77	0. K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

(3) オイルダンパ（水平棟間）反力に対する検討

オイルダンパ（水平棟間）の反力を受ける原子炉建屋南側外壁（壁・大梁及び柱）を有限要素法を用いてモデル化し、弾性解析を行う。

床スラブ・壁付梁は板要素で、柱は線材でモデル化する。

オイルダンパ（水平棟間）の反力を受ける箇所は2箇所あるが、面外方向の反力値が大きく、躯体断面の小さい西側での検定比が支配的となるため西側での検討を代表として行う。

オイルダンパ（水平棟間）の反力は、地震応答解析において発生した最大反力を取り出し静的に作用させる。

この時、地震時の水平方向震度を考慮する。水平震度は、時刻歴解析の原子炉建屋床質点の水平方向最大加速度を震度換算して算定し、慣性力として架構面外に作用させる。

なお、前述の通り 1/2Ss450 を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。

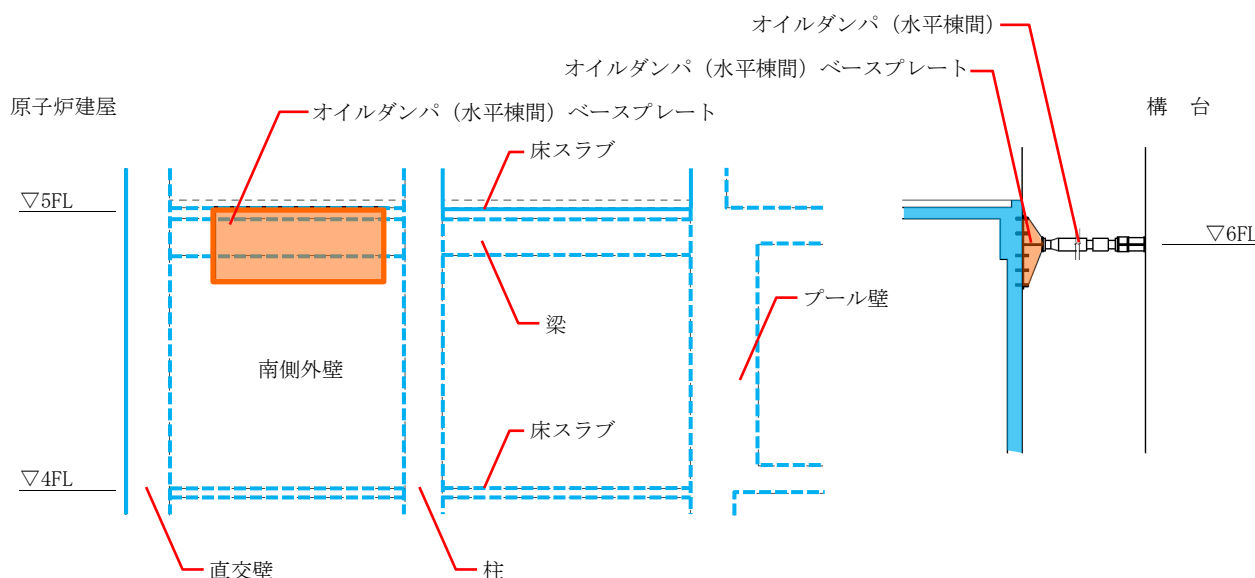


図 4.3.8-2 オイルダンパ（水平棟間）ベースプレート概要図

検討の結果、原子炉建屋南側外壁の発生応力が許容耐力以下となることを確認した。

表 4.3.8-3 オイルダンパ（水平棟間）反力に対する検討結果

部位	荷重ケース (位置) *	応力	発生応力	許容耐力	耐力比	判定
オイルダンパ (水平棟間) 受け外壁	従来の Ss-2 NS (B)	曲げ M (kN・m)	206	422	0.49	O. K.
		せん断 Q (kN/m)	273	589	0.47	O. K.

\* : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

(4) オイルダンパ（水平棟間）反力に対するあと施工アンカーの検討

オイルダンパ（水平棟間）は、原子炉建屋南側外壁のオペフロ床より少し下がった位置で、あと施工アンカー（M30及びM60の2種類）を用いて壁面に固定されたベースプレートと接続している。取り合い部の詳細を図4.3.8-3に示す。なお、あと施工アンカーの適用性については、別冊28 P63参照。

なお、前述の通り1/2Ss450を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600での検討結果を記載する。

あと施工アンカーは、地震応答解析で得られたオイルダンパ（水平棟間）の反力（引張及びせん断方向）の最大値に対して短期許容強度以下となることを確認した。

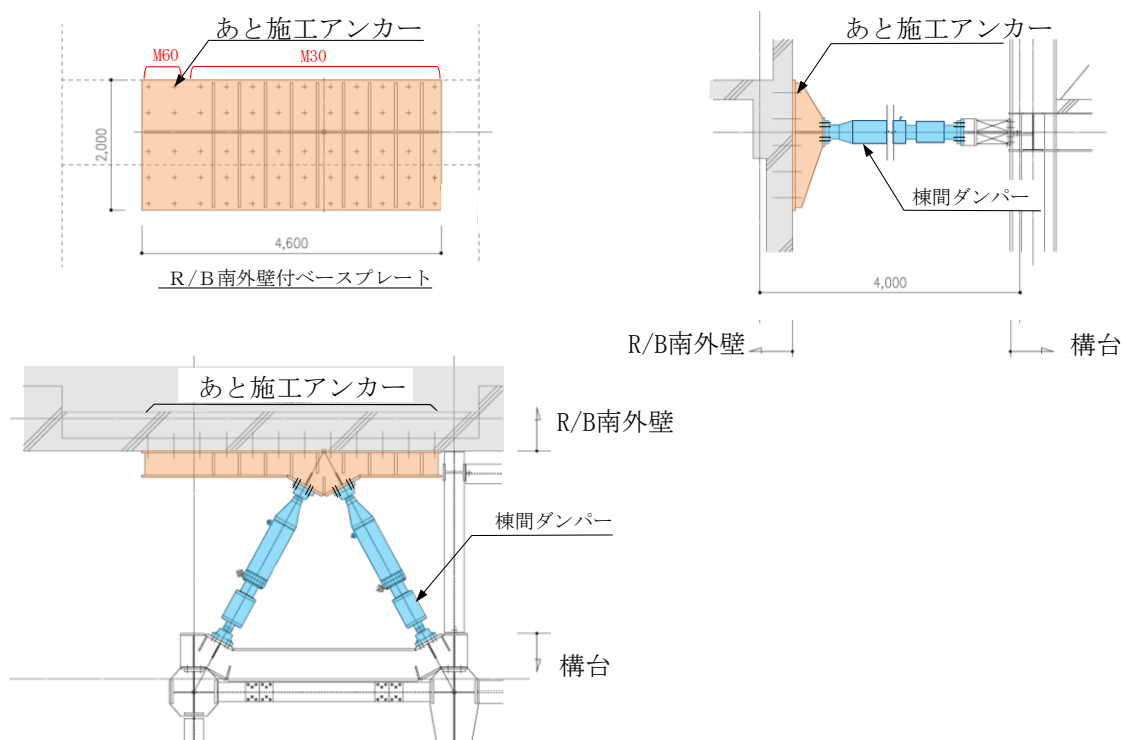


図 4.3.8-3 取り合い部の詳細

表 4.3.8-4 オイルダンパ（水平棟間）反力に対するあと施工アンカーの検討結果  
一般あと施工アンカー及びFMボルトの許容耐力

種類	径	有効埋込長	短期許容強度	
一般あと施工アンカー	M30	300 mm	107 kN/本	引張
FMボルト	M60	265 mm	329 kN/本	せん断
検討結果				
種類	作用応力 (kN)	許容耐力 (kN)	耐力比	判定
引張	3203	5350	0.60	O. K.
せん断	2219	3290	0.68	O. K.

#### 4.3.9 原子炉建屋の耐震性に対する検討

##### (1) 検討方針

燃料取り出し用構台を支持する原子炉建屋の耐震性の検討は、耐震安全上重要な設備への波及的影響防止の観点から、原子炉建屋の耐震壁及び屋根トラス（以下、原子炉建屋上部架構）の健全性について行い、Ss600 に対して原子炉建屋上部架構の応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。

なお、前述の通り  $1/2Ss450$  を適用した場合の影響が十分小さいことを確認したことから、Ss600 での検討結果を記載する。

##### (2) 原子炉建屋上部架構の地震応答解析

###### 1) 解析に用いる入力地震動

原子炉建屋上部架構の地震応答解析に用いる入力地震動は、Ss600 を入力したときの原子炉建屋 G. L. 29.92m の時刻歴応答加速度とし、水平方向、回転方向及び鉛直方向の同時入力とする。入力地震動の概念図を図 4.3.9-1 に示す。

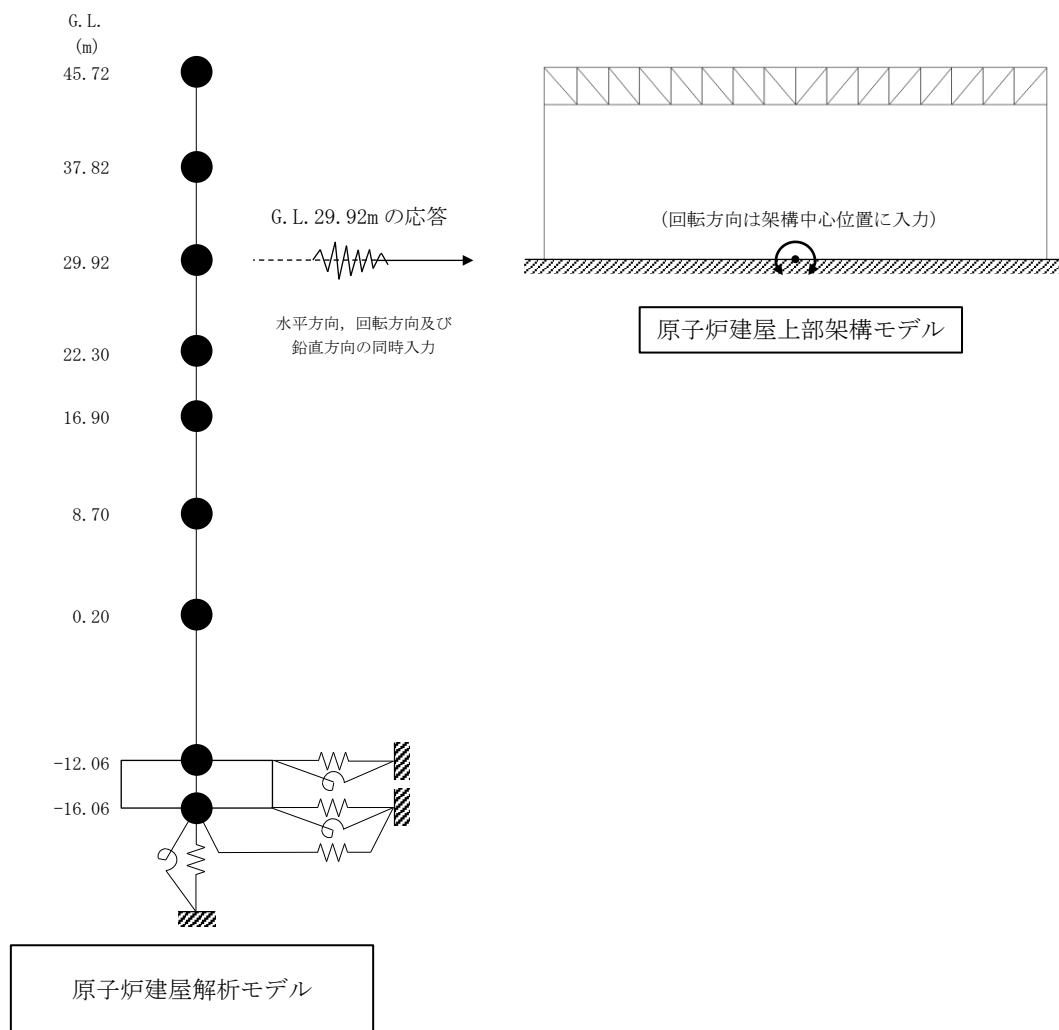


図 4.3.9-1 入力地震動の概念図

## 2) 地震応答解析モデル

原子炉建屋上部架構の地震応答解析モデルは、G. L. 29.92m より上部の鉄骨造の屋根と鉄筋コンクリート造の柱、梁及び耐震壁を組み込んだ立体架構モデルとし、境界条件は柱及び耐震壁脚を固定とする。解析モデルを図 4.3.9-2 に、物性値を表 4.3.9-1 に示す。

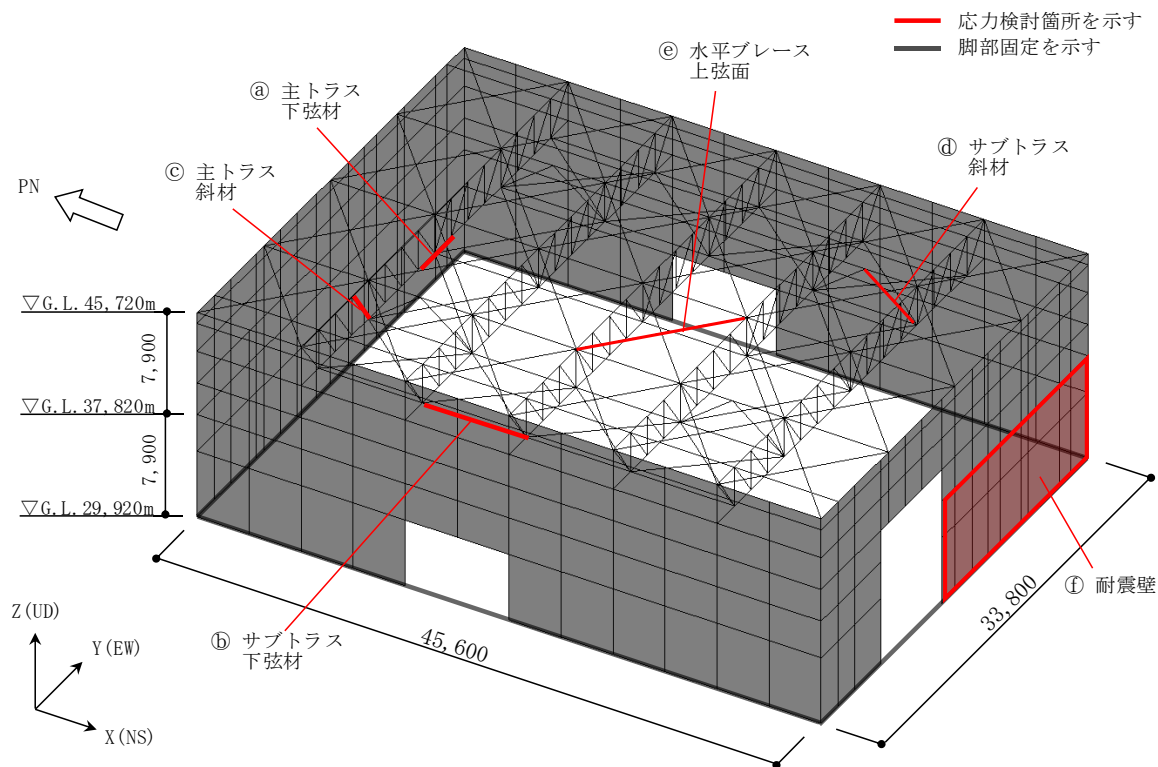


図 4.3.9-2 原子炉建屋上部架構の地震応答解析モデル

表 4.3.9-1 地震応答解析に用いる物性値

部 位	材 料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	せん断弾性係数 G (N/mm <sup>2</sup> )	減衰定数 h (%)
屋根	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	$7.90 \times 10^4$	2
外周部	コンクリート*	$2.57 \times 10^4$	$1.07 \times 10^4$	5

\* : 実強度 (Fc35) に基づく物性値を示す。

### (3) 波及的影響の評価

原子炉建屋上部架構の変形は、JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会，2018 年）を参考に定めたクライテリアとして、鉄骨造部材は、塑性率が 5 以下を満足することを確認する。

耐震壁のせん断ひずみは、鉄筋コンクリート造耐震壁の終局限界に対応した評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。

#### 1) 応力度比及び塑性率の検討

部材の応力度比は、2 方向の曲げ、軸力及びせん断力の各最大応力と各許容応力度との比を組み合わせた値で表され、部材の塑性率は、引張及び圧縮に対して最大軸力時のひずみを引張耐力または座屈耐力時のひずみで除した値で表される。表 4.3.9-2 及び表 4.3.9-3 に応力度比及び塑性率が最大となる部位の検討結果を示す。なお、各許容応力度、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度は「平成 12 年建設省告示第 2464 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

表 4.3.9-2 より応力度比は 1 以下、表 4.3.9-3 より塑性率は 5 以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

表 4.3.9-2 応力度比の検討結果

部 位*1			部材形状 (mm) <使用材料>	荷重ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
主トラス	㉑	下弦材	H-400×400 ×13×21 <SS400>	従来の Ss-1 +NS+UD (A)	$\sigma_t$	108.4	258	0.72	O.K.
					$\sigma_{by}$	49.7	190		
					$\sigma_{bz}$	7.4	258		
					$\tau$	5.0	148		
サブ トラス	㉒	下弦材	H-248×249 ×8×13 <SS400>	従来の Ss-1 +EW-UD (A)	$\sigma_c$	53.1	142	0.38	O.K.
					$\sigma_{by}$	0.0	157		
					$\sigma_{bz}$	0.0	258		
					$\tau$	0.0	148		

\*1：㉑、㉒の符号は図 4.3.9-2 の応力検討箇所を示す

\*2：( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

$\sigma_t$  : 引張応力度の最大値

$\sigma_c$  : 圧縮応力度の最大値

$\sigma_{by}$  : 強軸まわりの曲げ応力度の最大値 b

$\sigma_{bz}$  : 弱軸まわりの曲げ応力度の最大値

$\tau$  : せん断応力度の最大値



表 4.3.9-3 塑性率の検討結果

部 位 <sup>*1</sup>			部材形状 (mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	塑性率		判定
主トラス	㊸	斜材	2Ls-100×100×13 〈SS400〉	従来の Ss-1 +NS+UD (A)	T/Tu	0.82	0. K.
サブ トラス	㊹	斜材	2Ls-100×100×7 〈SS400〉	従来の Ss-1 +NS+UD (A)	C/Cu	0.58	0. K.
水平 ブレース	㊺	上弦面	CT-125×250×9× 14 〈SS400〉	従来の Ss-2 +EW+UD (A)	C/Cu	1.68	0. K.

\*1 : ㊸~㊺の符号は図 4.3.9-2 の応力検討箇所を示す

\*2 : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)

C : 部材軸方向の圧縮力の最大値

Cu : 座屈耐力

T : 部材軸方向の引張力の最大値

Tu : 引張耐力

## 2) 耐震壁のせん断ひずみの検討

原子炉建屋上部架構の耐震壁の最大せん断ひずみを表 4.3.9-4 に示す。

検討の結果、耐震壁の最大せん断ひずみは  $4.0 \times 10^{-3}$  以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

また、「4.3.2 構台、前室及びランウェイガーダの耐震性に対する検討」で実施した地震応答解析による原子炉建屋の最大せん断ひずみを、「JEAG 4601-1991 追補版」に基づき設定した耐震壁のせん断スケルトン曲線上にプロットした結果を図 4.3.9-3 に示す。

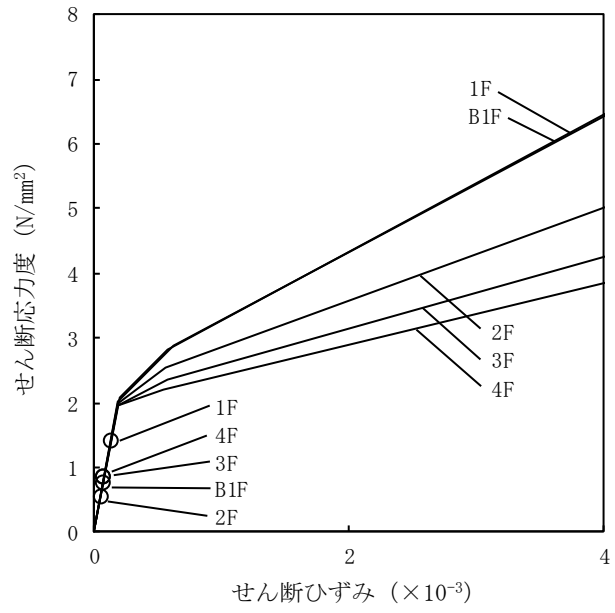
検討の結果、耐震壁の最大せん断ひずみは  $4.0 \times 10^{-3}$  以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

表 4.3.9-4 耐震壁の最大せん断ひずみの検討結果

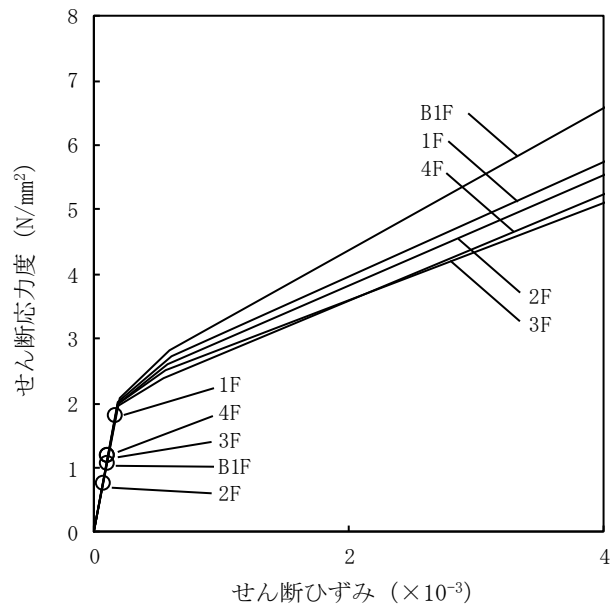
部 位 <sup>*1</sup>			部材形状 (mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	せん断ひずみ ( $\times 10^{-3}$ )	判定
耐震壁	㊻	建屋南側 5F	t=200 〈Fc22.1〉	従来の Ss-1 +EW+UD (A)	0.24	0. K.

\*1 : ㊻の符号は図 4.3.9-2 の応力検討箇所を示す

\*2 : ( )内は、燃料取扱設備の位置を示す。(表 4.2.1-4 参照)



(a) NS 方向



(b) EW 方向

図 4.3.9-3 せん断スケルトン曲線上の最大応答値

## 5. 1号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について

### 5.1 概要

#### 5.1.1 一般事項

1号機燃料取り出し用カバーは、大型カバーと内部カバーから構成されている。ここでは、大型カバーの構造強度と機能維持及び波及的影響の防止について検討を行う。

大型カバーは、原子炉建屋オペレーティングフロアを覆う構造としており、屋根部、一般部及び燃料取扱設備支持部から構成され、オペレーティングフロア上にあるガレキを撤去するガレキ撤去用天井クレーンを有する。また、大型カバーの燃料取扱設備支持部は燃料取扱設備（燃料取扱機及びクレーン）を支持する。

大型カバーおよびガレキ撤去用天井クレーンの耐震クラス分類は、2021年9月8日及び2022年11月16日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合における公衆への被ばく影響を評価した結果、Cクラスとなる。なお、燃料取扱設備支持部が燃料取扱設備の間接支持構造物であることから、大型カバーに適用する地震力はB+クラス相当とする。

大型カバーの構造強度は、B+クラスの設備に要求される静的地震力に対して許容応力度設計を実施し、耐震性のうち機能維持の検討は、基準地震動  $S_s$ （最大加速度 900gal。以下、「 $S_s900$ 」という。）の1/2の最大加速度 450galの地震動（以下、「 $1/2S_s450$ 」という。）に対する地震応答解析を実施し、燃料取扱設備の間接支持機能が維持されることを確認する。

ガレキ撤去用天井クレーンの構造強度は、Cクラスの設備に要求される静的地震力に対して許容応力度設計を実施する。

大型カバーとガレキ撤去用天井クレーンの耐震性のうち波及的影響の防止の検討は、 $S_s900$ に対する地震応答解析を実施し、大型カバーおよびガレキ撤去用天井クレーンの損傷が原子炉建屋、使用済燃料プール及び使用済燃料ラックに波及的影響を及ぼさないことを確認する。ここで、波及的影響の確認は、大型カバー及びガレキ撤去用天井クレーンが崩壊機構に至らないことを確認する。図 5.1.1-1 に大型カバーのイメージを示す。

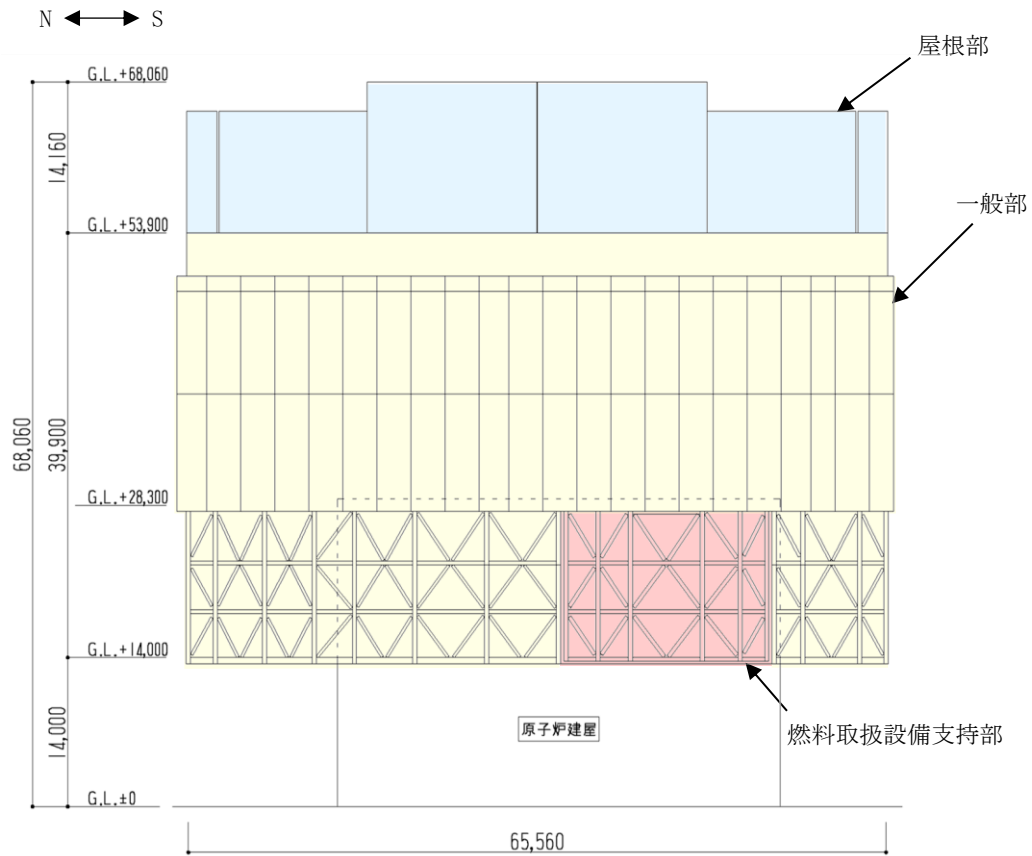


図 5.1.1-1 大型カバーのイメージ (単位 : mm)

本章では、G.L. ±0m=T.P. 8,564mm\*とする。  
 また、記載の寸法は現場状況に応じて変更する場合がある。  
 \*：震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P. から T.P. への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式>T.P.=旧 O.P. -1,436mm

大型カバーの検討は原則として下記の法規及び基規準類に準拠して行う。

- (1) 建築基準法・同施行令及び関連告示
- (2) 原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，改定版 2013 年）
- (3) 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2018 年）
- (4) 鋼構造設計規準－許容応力度設計法－（日本建築学会，2005 年）
- (5) 2015 年版 建築物の構造関係技術基準解説書(国土交通省住宅局建築指導課・国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人建築研究所・日本建築行政会議，2015 年)
- (6) 各種合成構造設計指針・同解説（日本建築学会，2010 年）
- (7) クレーン等安全規則（昭和 47 年 9 月 30 日労働省令第 34 号）
- (8) クレーン構造規格（平成 7 年 12 月 26 日労働省令第 134 号）
- (9) 日本産業規格（JIS）

また，原子力施設の設計において参照される下記の指針及び規程を参考にして検討を行う。

- (10) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1987)（日本電気協会 電気技術基準調査委員会，昭和 62 年）
- (11) 原子力発電所耐震設計技術指針(JEAG 4601-1991 追補版)（日本電気協会 電気技術基準調査委員会，平成 3 年）
- (12) 原子力発電所耐震設計技術規程(JEAC 4601-2015)（日本電気協会 原子力規格委員会，平成 27 年）

### 5.1.2 構造概要

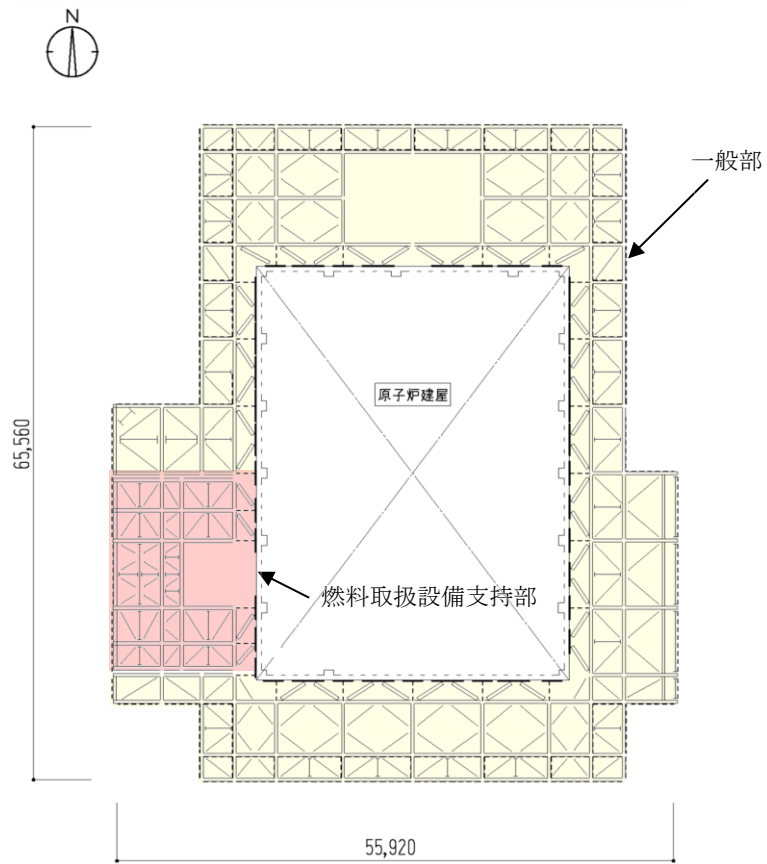
大型カバーは、東西方向 55.92m、南北方向 65.56m、高さ 68.06m の構造物で、構造形式はトラス構造、構造種別は鉄骨造である。また、一般部と燃料取扱設備支持部は構造的に分離している。大型カバー頂部付近は、水平剛性を高めるため、鋼板による箱桁架構とし、屋根は可動式としている。

大型カバーは、原子炉建屋に支持される構造物である。原子炉建屋との取り合い部においては、アンカーボルトにより接続している。

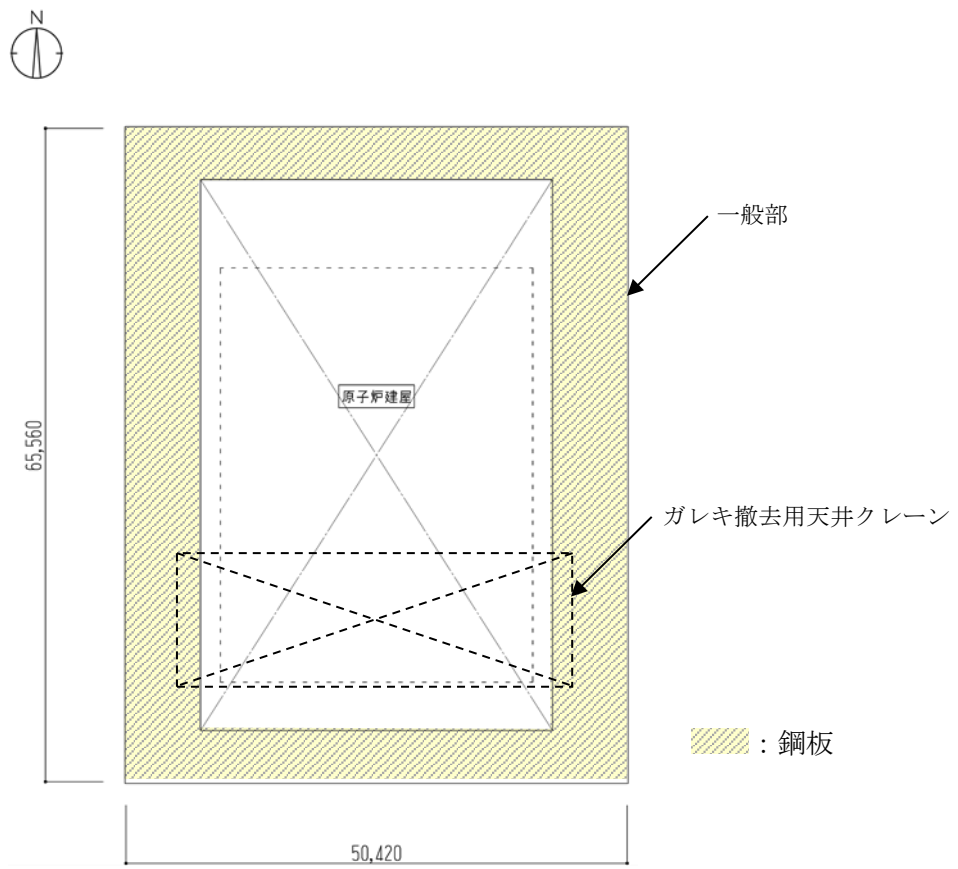
屋根は、4つの架構（中央の2つを「大屋根」、大屋根の外側の2つを「小屋根」という。また、小屋根の外側の稼働しない部分を「妻壁」という。）から構成され、それぞれが可動する構造である。屋根と大型カバーは構造的に分離されており、屋根は通常時、固定ピンを介して大型カバーに固定されている。また、屋根は固定ピンを外すことによって、南北方向へ動くことが可能となる。なお、屋根の逸走を防止するための逸走防止受けを大型カバー頂部にある鋼板部（以下、「箱桁架構」という）に設置し、屋根が動く際には屋根の落下防止材として機能する。

大型カバー内部にあるガレキ撤去用天井クレーンは、箱桁架構を南北方向に走行する。また、ガレキ撤去用天井クレーンを構成する2本のクレーンガーダ上に2台のトロリーがあり、これらが東西方向に移動する。

大型カバーの概要図を図 5.1.2-1 及び図 5.1.2-2 に示す。ガレキ撤去用天井クレーンの概要図を図 5.1.2-3 に示す。屋根伏図を図 5.1.2-4 に、断面図を図 5.1.2-5 に示す。屋根部の落下防止の概要図を図 5.1.2-6 に示す。

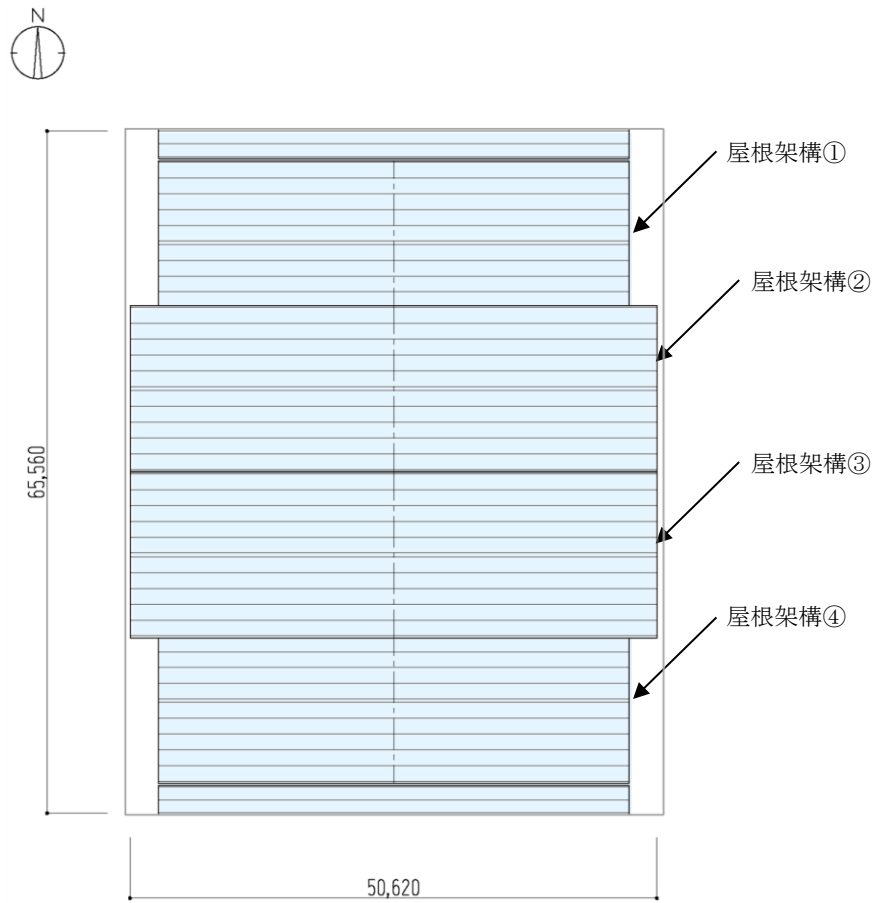


(a) 伏図 (G. L. +28, 300)



(b) 伏図 (G. L. +53, 900)

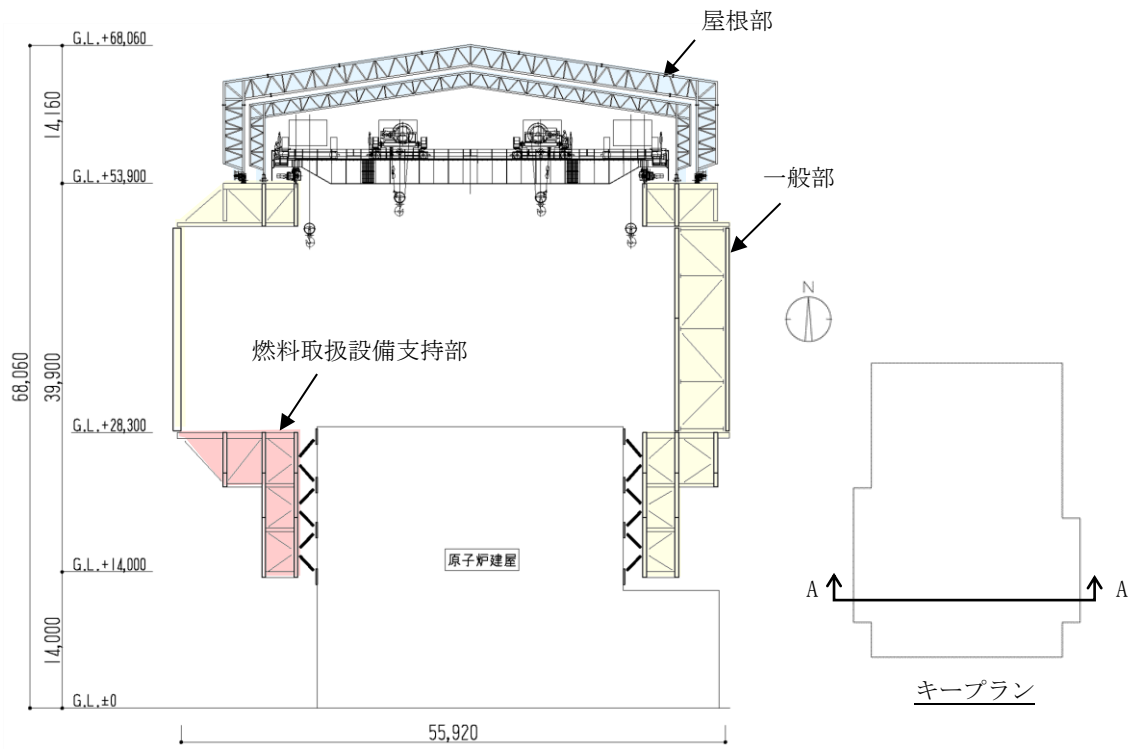
図 5. 1. 2-1(1) 大型カバーの概要 (単位 : mm)



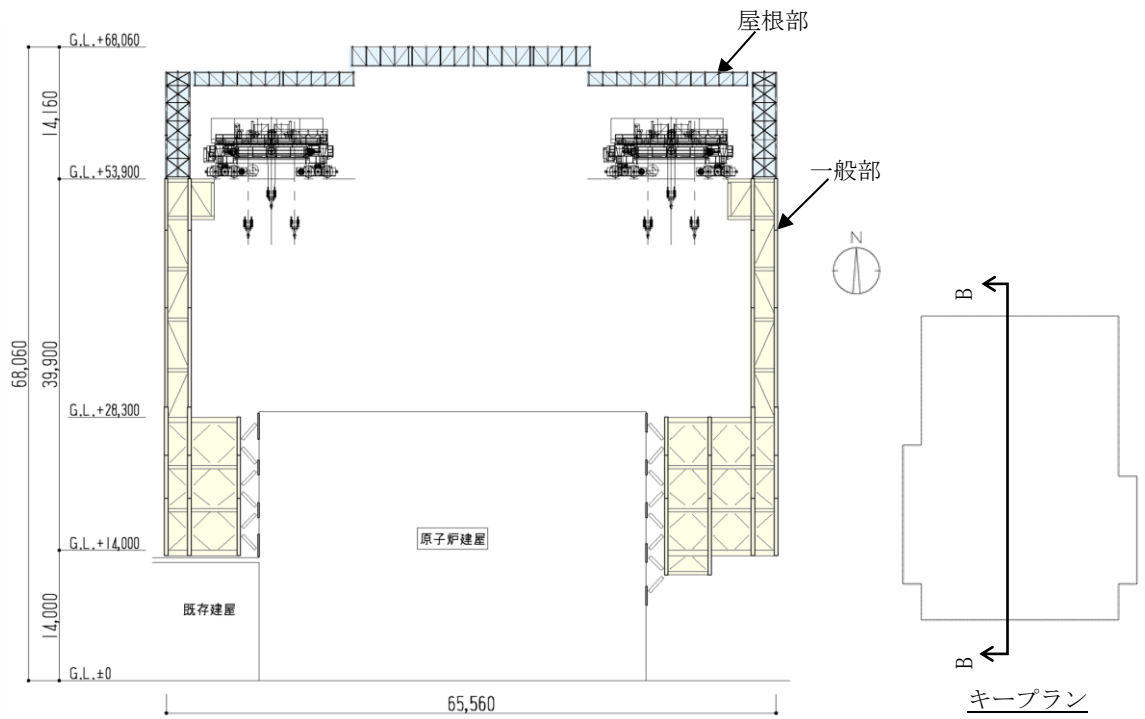
屋根伏図

図 5. 1. 2-1 (2) 大型カバーの概要 (単位 : mm)





(a) 大型カバーA-A 断面図



(b) 大型カバーB-B 断面図

図 5.1.2-2 大型カバーの概要 (単位: mm)

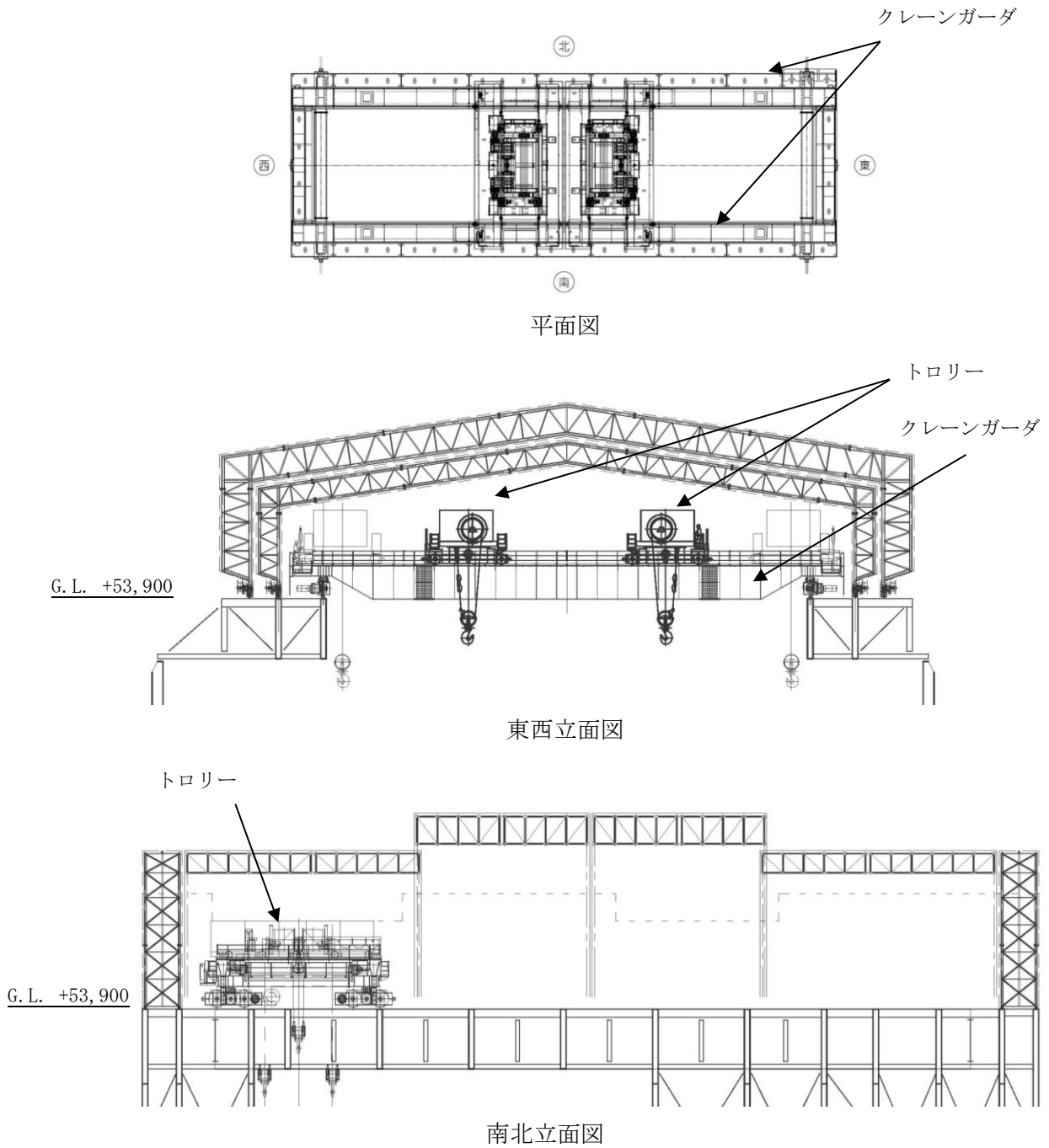


図 5.1.2-3 ガレキ撤去用天井クレーン概要図

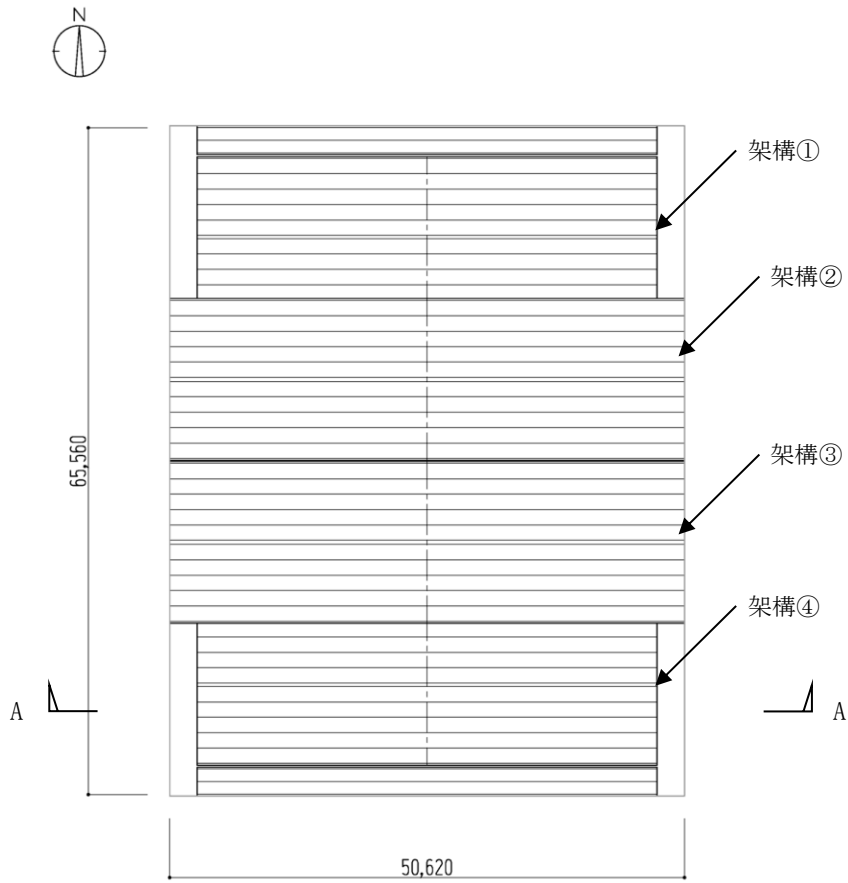


图 5.1.2-4 屋根伏図 (单位: mm)

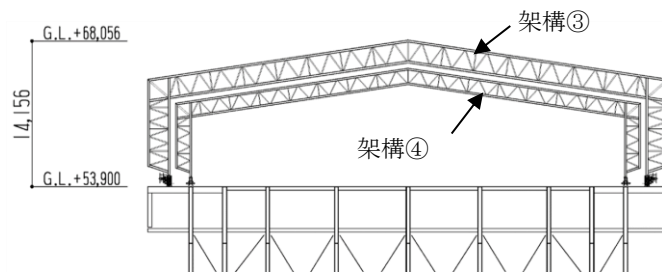


图 5.1.2-5 A-A 断面图 (单位: mm)

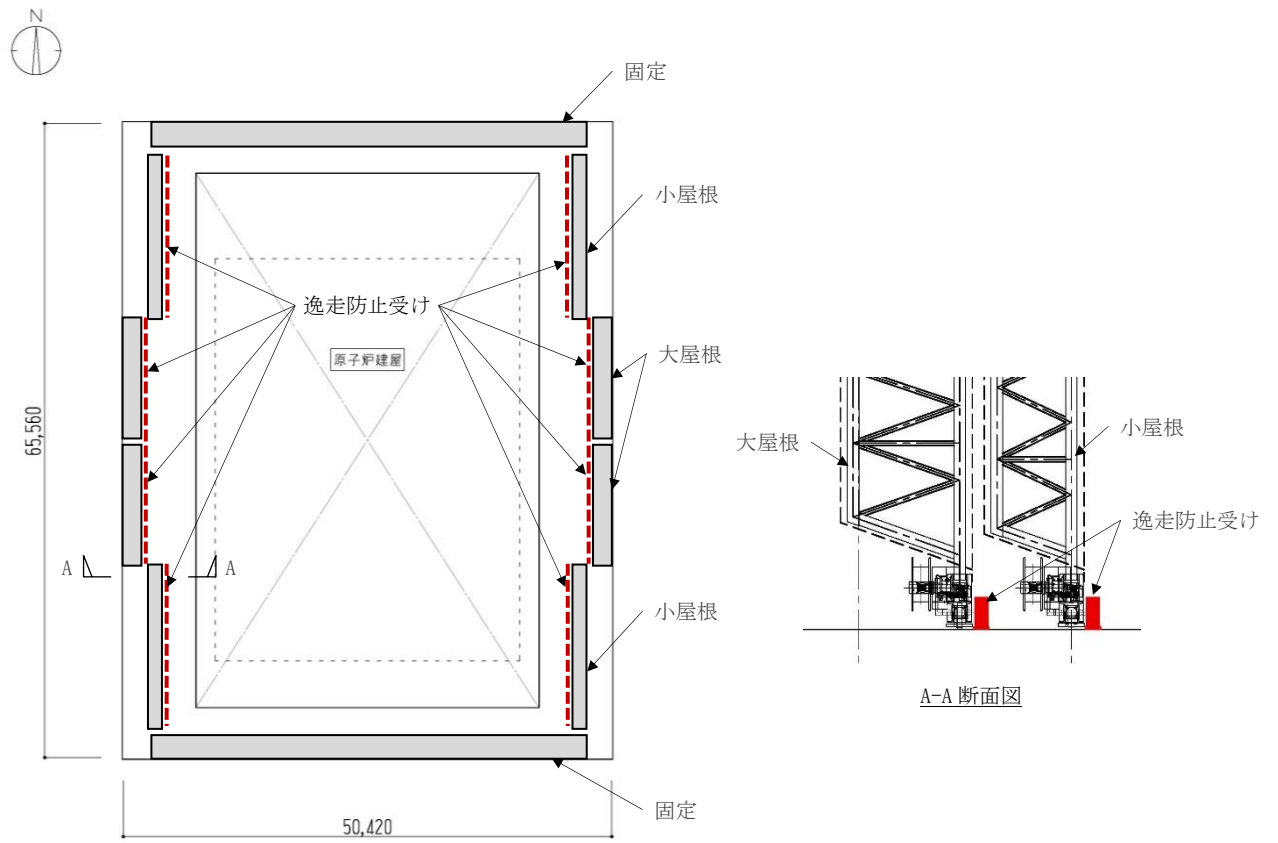


図 5.1.2-6 屋根部の落下防止概要図

### 5.1.3 検討フロー

大型カバーの構造強度及び耐震性の検討フローを図 5.1.3-1～2 に示す。検討に当たっては、大型カバーを設置し、原子炉建屋上のガレキを撤去しようとする状態（以下、「ガレキ撤去時」という）と、ガレキを撤去した後に、燃料取扱設備を設置した状態（以下、「燃料取り出し時」という）を評価する。

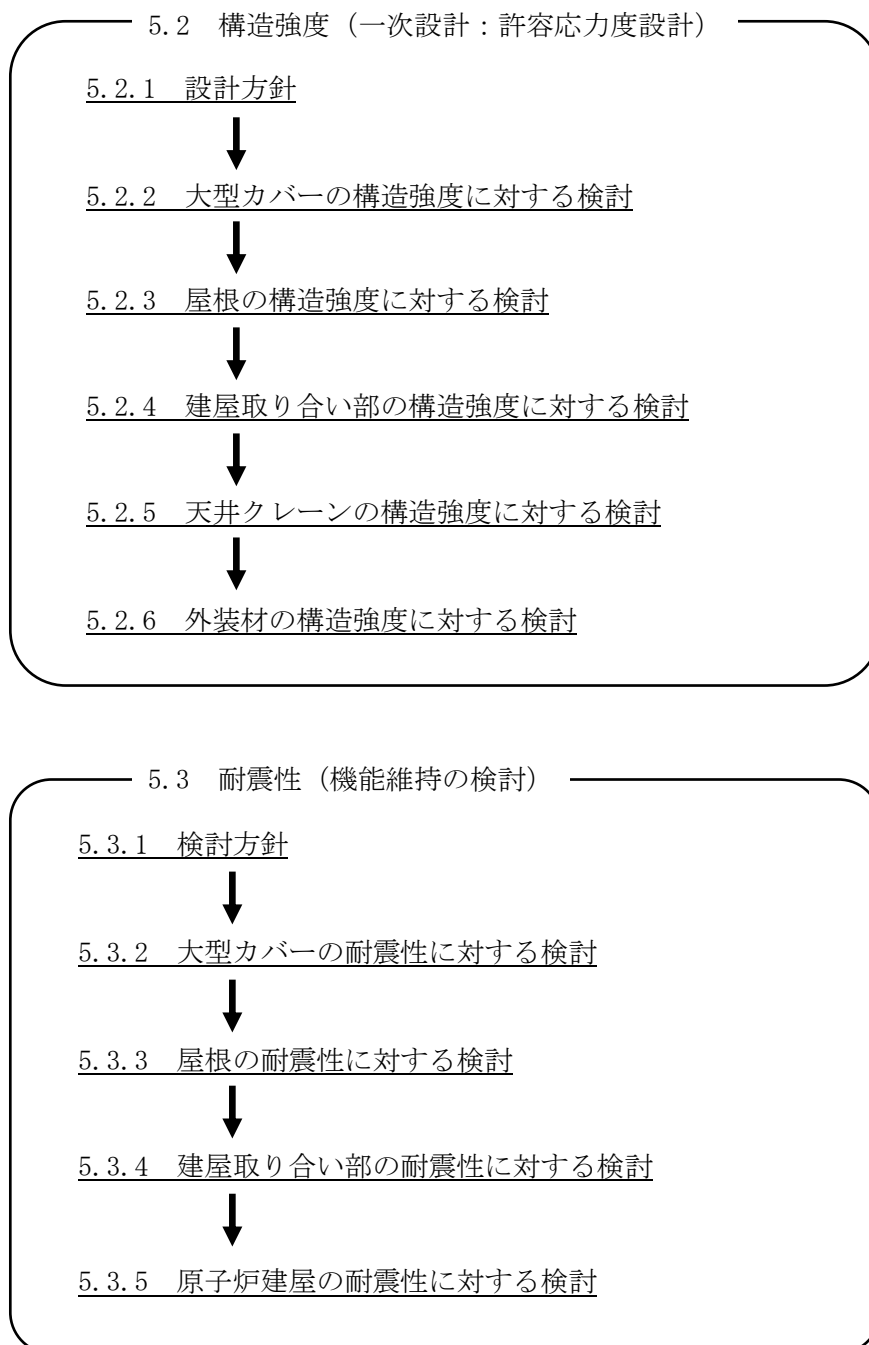


図 5.1.3-1 大型カバーの検討フロー

5.4 耐震性（波及的影響の検討）

5.4.1 検討方針



5.4.2 大型カバーの耐震性に対する検討



5.4.3 屋根の耐震性に対する検討



5.4.4 建屋取り合い部の耐震性に対する検討



5.4.5 天井クレーンの耐震性に対する検討



5.4.6 原子炉建屋の耐震性に対する検討

図 5.1.3-2 大型カバーの検討フロー

## 5.2 構造強度

### 5.2.1 設計方針

構造強度の検討は、大型カバー、屋根、建屋取り合い部、天井クレーン及び外装材について許容応力度設計を実施する。

#### (1) 使用材料及び許容応力度

使用材料の物性値及び許容応力度を表 5.2.1-1 に示す。

表 5. 2. 1-1 使用材料の物性値及び許容応力度

材料定数

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )
大型カバー	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0
原子炉建屋	コンクリート	$2.57 \times 10^4$ *	0.2	24.0

\* : 実強度に基づく剛性

コンクリートの許容応力度

(単位 : N/mm<sup>2</sup>)

設計基準強度	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
22.1 (225) *	7.4	—	0.71	14.8	—	1.07

\* : 建設時の設計基準強度 (単位 : kgf/cm<sup>2</sup>)

鉄筋の許容応力度

(単位 : N/mm<sup>2</sup>)

記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD345	D29 未満	215	195	345	345
	D29 以上	195			

構造用鋼材の許容応力度

(単位 : N/mm<sup>2</sup>)

板厚	材料	基準強度 F	許容応力度*3
T ≤ 40mm	SS400, SN400B, STK400	235	建築基準法及び国土交通省告示に従い、左記 F の値より求める
T > 40mm	SN400B	215	
T ≤ 40mm	SM490A, SN490B, STKN490B STK490, SNR490B	325	
T > 40mm	TMCP325B	325*1	
—	S45C	490*2	

\*1 : 国土交通大臣指定書 (国住指第 326-2, 平成 14 年 5 月 7 日又は国住指第 1208-2, 1209-2, 平成 15 年 7 月 31 日) による

\*2 : 「JIS G 4051-2005」による

\*3 : 終局強度は許容応力度を 1.1 倍とする



(2) 解析モデル

大型カバーの解析モデルは、原子炉建屋を質点系とし、一般部、燃料取扱設備支持部及び屋根部を構成する主要な鉄骨部材をモデル化した立体架構モデルとする。また、ガレキ撤去用天井クレーンもモデル化する。図 5.2.1-1 に立体解析モデルを示す。

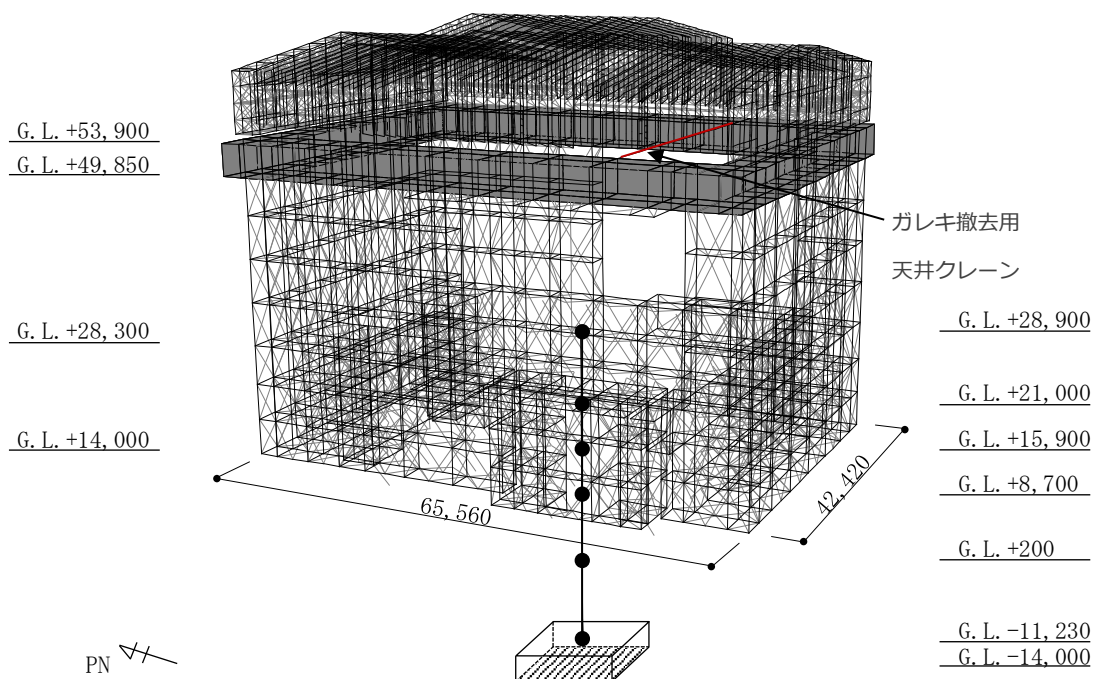


図 5.2.1-1 解析モデル

(3) 荷重及び荷重組合せ

設計で考慮する荷重を以下に示す。

1) 鉛直荷重 (VL)

大型カバー及び原子炉建屋に作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重及び積載荷重とする。主な鉛直荷重を表 5.2.1-2 及び表 5.2.1-3 に示す。

表 5.2.1-2 大型カバーに作用する主な鉛直荷重(kN)

	ガレキ撤去時	燃料取り出し時
屋根	3800	3800
外装材	5800	4360
遮蔽体	1050	6430
ガレキ撤去用天井クレーン	4200	4200
遠隔解体重機	2600	0
配管	500	830

表 5.2.1-3 原子炉建屋に作用する主な鉛直荷重(kN)

	ガレキ撤去時	燃料取り出し時
ガレキ	12130	0
機器等	4260	43540
遮蔽体	0	21110

2) 積雪荷重 (SL)

積雪荷重は建築基準法施行令第 86 条及び福島県建築基準法施行規則細則に準拠し、以下の条件とする。

なお、国土交通省告示第 594 号による多雪区域以外の区域における積雪後の降雨を見込んだ割増係数を乗じた積雪荷重を考慮する。

積雪量：30cm，単位荷重：20N/m<sup>2</sup>/cm

3) 風圧力 (WL)

風圧力は建築基準法施行令第 87 条および建設省告示第 1454 号に基づき、基準風速を 30m/s，地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 5.2.1-4 に示す。

表 5.2.1-4 速度圧の算定結果

建物高さ*	平均風速の鉛直分布係数	ガスト影響係数	建物高さ粗度区分による係数	基準風速	速度圧
H(m)	Er	Gf	E	Vo(m/s)	q(N/m <sup>2</sup> )
66.2	1.32	2.00	3.51	30	1900

\*：建物高さは、軒高さ（64.3m）と最高高さ（68.1m）の平均値とした

4) 地震荷重 (K)

大型カバーに作用させる地震荷重は、G.L. +0.20m（原子炉建屋1階床）を基準面とした水平地震力の算定結果より設定する。水平地震力は下式より算定する。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_0$$

ここで、

$Q_i$  : 層せん断力 (kN)

$n$  : 施設の重要度に応じた係数

建築基準法で定める地震力の1.5倍を考慮する。

なお、天井クレーンに関しては1.2倍を考慮する。

$C_i$  : 地震層せん断力係数

$W_i$  : 当該部分が支える重量 (kN)

ここに、大型カバーの設計で考慮する原子炉建屋の全体重量は、ガレキ撤去の効果と大型カバー等を新規に設置する影響を考慮した。原子炉建屋の全体重量を表5.2.1-5に示す。

表 5.2.1-5 原子炉建屋の全体重量(kN)

	ガレキ撤去時	燃料取り出し時
原子炉建屋の全体重量	701430	701430
ガレキ撤去による軽減重量	0	-12130
大型カバー設置等の付加重量	+82500	+143090
大型カバー設計用原子炉建屋全体重量	783930	832390

$Z$  : 地震地域係数 ( $Z=1.0$ )

$R_t$  : 振動特性係数 ( $R_t=0.8$ )

$A_i$  : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、原子炉建屋の固有値を用いたモーダル解析法（二乗和平方根法）により求める。

$C_0$  : 標準せん断力係数 ( $C_0=0.2$ )

$i$  層の水平震度  $k_i$  は、下式によって算定する。

$$P_i = Q_i - Q_{i-1}$$

$$k_i = P_i / w_i$$

ここで、

$P_i$  : 当該階とその直下階の水平地震荷重の差 (kN)

$w_i$  : 各階重量 (kN)

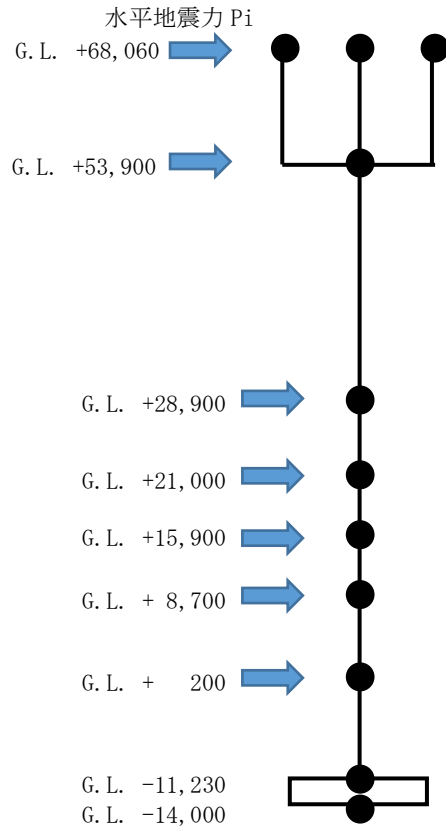
算定した水平地震力を原子炉建屋、大型カバー一般部、燃料取扱設備支持部及び屋根の重量比に基づいて分配し、それぞれに作用させる水平地震力を算定する。屋根については各架構が構造

的に分離されていることから、大屋根、小屋根、妻壁の3種類に分けて水平地震力を算定する。なお、高さ方向に関しては、原子炉建屋の各階の高さと大型カバーの節点の高さが異なるため、高さ毎に区分けを行った上で重量比を計算する。図5.2.1-2に大型カバーに作用させる水平地震力の概要図を示す。

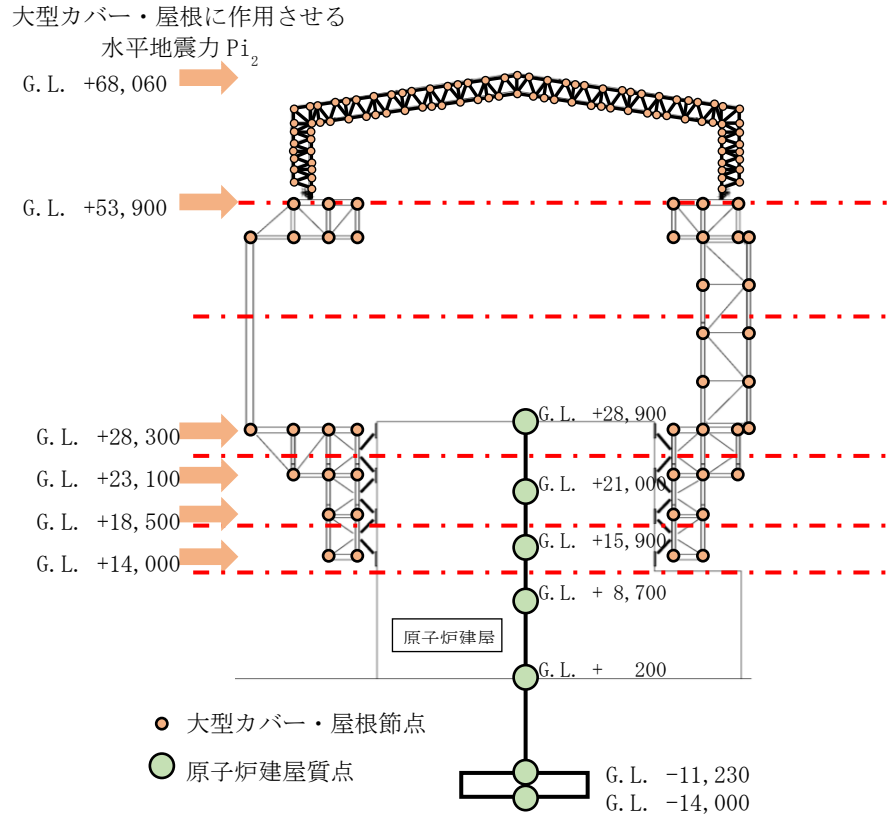
$P_{i2} = P_i \times (i \text{ 層の大型カバー (一般部又は燃料取扱設備支持部) の重量} / i \text{ 層の原子炉建屋及び大型カバーの重量})$

$P_{i2}$  : 当該階とその直下階の大型カバー (一般部又は燃料取扱設備支持部) に作用させる水平地震荷重の差 (kN)

n=1.5 とした算定結果を表 5.2.1-6 及び表 5.2.1-7 に示し、n=1.2 とした算定結果を表 5.2.1-8 及び表 5.2.1-9 に示す。



原子炉建屋と大型カバー集約質点系モデル



大型カバーの解析モデル

図 5. 2. 1-2 大型カバーの水平地震力の概要図 (単位 : mm)

表 5.2.1-6(1) ガレキ撤去時の水平地震力の算定結果 (大型カバー検討用) (NS 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	5.473	1.314	—	2365	1.314
	小屋根	1400	—	5.283	1.268	—	1775	1.268
	妻壁	600	—	5.220	1.253	—	752	1.253
+68.06～+53.9		21050	3800	—	—	4892	20828	0.989
+53.9～+28.9		88990	24850	4.314	1.035	25720	11506	0.129
+28.9～+21.0		83750	113840	1.360	0.327	37226	18494	0.221
+21.0～+15.9		88690	197590	1.172	0.282	55720	18570	0.209
+15.9～+8.7		87240	286280	1.082	0.260	74290	15355	0.176
+8.7～+0.2		—	373520	1.000	0.240	89645	—	—

\* : n=1.5 とした算定結果を示す

表 5.2.1-6(2) ガレキ撤去時の水平地震力の算定結果 (大型カバー検討用) (EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	6.617	1.589	—	2859	1.588
	小屋根	1400	—	7.115	1.707	—	2390	1.707
	妻壁	600	—	6.441	1.547	—	928	1.547
+68.06～+53.9		21050	3800	—	—	6177	20027	0.951
+53.9～+28.9		88990	24850	4.391	1.055	26204	13071	0.147
+28.9～+21.0		83750	113840	1.437	0.345	39275	17631	0.211
+21.0～+15.9		88690	197590	1.200	0.288	56906	17813	0.201
+15.9～+8.7		87240	286280	1.089	0.261	74719	14926	0.171
+8.7～+0.2		—	373520	1.000	0.240	89645	—	—

\* : n=1.5 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-6 (3) ガレキ撤去時の大型カバーの地震荷重の算定結果 (大型カバー検討用)

(NS・EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	NS 方向			EW 方向		
			Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)	Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)
+68.06	大屋根	1800	2400	2400	—	2900	2900	—
	小屋根	1400	1800	1800	—	2400	2400	—
	妻壁	600	800	800	—	1000	1000	—
+53.9		21050	21000	21000	—	20100	20100	—
+28.3		88990	11900	3300	600	13500	3700	700
+23.1		83750	18600	1300	300	17900	1300	300
+18.5				1000	200		1000	200
+14.0		88690	18700	1100	250	18000	1100	250

\* : n=1.5 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-7(1) 燃料取り出し時の水平震度の算定結果 (大型カバー検討用) (NS 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	5.901	1.416	—	2549	1.416
	小屋根	1400	—	5.650	1.356	—	1898	1.356
	妻壁	600	—	5.602	1.344	—	806	1.343
+68.06~+53.9		20510	3800	—	—	5253	22023	1.074
+53.9~+28.9		137080	24310	4.678	1.122	27276	24530	0.179
+28.9~+21.0		83750	161390	1.338	0.321	51806	18427	0.220
+21.0~+15.9		88680	245140	1.191	0.287	70233	16894	0.191
+15.9~+8.7		87810	333820	1.090	0.261	87127	14064	0.160
+8.7~+0.2		—	421630	1.000	0.240	101191	—	—

\* : n=1.5 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-7(2) 燃料取り出し時の水平震度の算定結果 (大型カバー検討用) (EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	6.546	1.571	—	2827	1.571
	小屋根	1400	—	5.982	1.436	—	2010	1.436
	妻壁	600	—	5.788	1.389	—	833	1.388
+68.06~+53.9		20510	3800	—	—	5670	20402	0.995
+53.9~+28.9		137080	24310	4.466	1.073	26072	27429	0.200
+28.9~+21.0		83750	161390	1.384	0.332	53501	18202	0.217
+21.0~+15.9		88680	245140	1.216	0.293	71703	16425	0.185
+15.9~+8.7		87810	333820	1.099	0.264	88128	13063	0.149
+8.7~+0.2		—	421630	1.000	0.240	101191	—	—

\* : n=1.5 とした算定結果を示す



表 5. 2. 1-7(3) 燃料取り出し時の大型カバーの地震荷重の算定結果 (大型カバー検討用)

(NS・EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	NS 方向			EW 方向		
			Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)	Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)
+68.06	大屋根	1800	2600	2600	—	2900	2900	—
	小屋根	1400	1900	1900	—	2100	2100	—
	妻壁	600	900	900	—	900	900	—
+53.9		20510	22300	22300	—	20600	20600	—
+28.3		137080	24800	4300	900	27600	4700	1000
+23.1		83750	18600	1300	300	18400	1300	300
+18.5				1000	200		1000	200
+14.0		88680	17200	1100	250	16700	1000	250

\* : n=1.5 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-8(1) ガレキ撤去時の水平地震力の算定結果 (天井クレーン検討用) (NS 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	5.473	1.051	—	1892	1.051
	小屋根	1400	—	5.283	1.014	—	1420	1.014
	妻壁	600	—	5.220	1.002	—	601	1.002
+68.06～+53.9		21050	3800	—	—	3913	16663	0.792
+53.9～+28.9		88990	24850	4.314	0.828	20576	9205	0.103
+28.9～+21.0		83750	113840	1.360	0.262	29781	14795	0.177
+21.0～+15.9		88690	197590	1.172	0.226	44576	14856	0.168
+15.9～+8.7		87240	286280	1.082	0.208	59432	12284	0.141
+8.7～+0.2		—	373520	1.000	0.192	71716	—	—

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-8(2) ガレキ撤去時の水平地震力の算定結果 (天井クレーン検討用) (EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	6.617	1.271	—	2287	1.271
	小屋根	1400	—	7.115	1.366	—	1912	1.366
	妻壁	600	—	6.441	1.237	—	742	1.237
+68.06～+53.9		21050	3800	—	—	4941	16022	0.761
+53.9～+28.9		88990	24850	4.391	0.844	20963	10457	0.118
+28.9～+21.0		83750	113840	1.437	0.276	31420	14105	0.168
+21.0～+15.9		88690	197590	1.200	0.230	45525	14250	0.161
+15.9～+8.7		87240	286280	1.089	0.209	59775	11941	0.137
+8.7～+0.2		—	373520	1.000	0.192	71716	—	—

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-8(3) ガレキ撤去時の大型カバーの地震荷重の算定結果 (天井クレーン検討用)

(NS・EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	NS 方向			EW 方向		
			Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)	Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)
+68.06	大屋根	1800	1900	1900	—	2300	2300	—
	小屋根	1400	1500	1500	—	2000	2000	—
	妻壁	600	700	700	—	800	800	—
+53.9		21050	16800	16800	—	16100	16100	—
+28.3		88990	9500	2600	500	10800	3000	500
+23.1		83750	14900	1100	200	14300	1100	200
+18.5				800	150		800	150
+14.0		88690	15100	1000	200	14400	900	200

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-9(1) 燃料取り出し時の水平震度の算定結果 (天井クレーン検討用) (NS 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	5.901	1.133	—	2039	1.133
	小屋根	1400	—	5.650	1.085	—	1519	1.085
	妻壁	600	—	5.602	1.075	—	645	1.075
+68.06~+53.9		20510	3800	—	—	4203	17618	0.859
+53.9~+28.9		137080	24310	4.678	0.898	21821	19624	0.143
+28.9~+21.0		83750	161390	1.338	0.257	41445	14741	0.176
+21.0~+15.9		88680	245140	1.191	0.229	56186	13516	0.152
+15.9~+8.7		87810	333820	1.090	0.209	69702	11251	0.128
+8.7~+0.2		—	421630	1.000	0.192	80953	—	—

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

表 5. 2. 1-9(2) 燃料取り出し時の水平震度の算定結果 (天井クレーン検討用) (EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	Wi (kN)	Ai	n・Ci	Qi (kN)	Pi (kN)	水平震度 ki
+68.06	大屋根	1800	—	6.546	1.256	—	2262	1.257
	小屋根	1400	—	5.982	1.148	—	1608	1.149
	妻壁	600	—	5.788	1.111	—	667	1.112
+68.06~+53.9		20510	3800	—	—	4537	16321	0.796
+53.9~+28.9		137080	24310	4.466	0.858	20858	21943	0.160
+28.9~+21.0		83750	161390	1.384	0.265	42801	14562	0.174
+21.0~+15.9		88680	245140	1.216	0.234	57363	13140	0.148
+15.9~+8.7		87810	333820	1.099	0.211	70503	10450	0.119
+8.7~+0.2		—	421630	1.000	0.192	80953	—	—

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

表 5.2.1-9(3) 燃料取り出し時の大型カバーの地震荷重の算定結果 (天井クレーン検討用)

(NS・EW 方向)

G. L. (m)		各階重量 wi (kN)	NS 方向			EW 方向		
			Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)	Pi (kN)	屋根 一般部 Pi <sub>2</sub> (kN)	燃料取扱 設備支持部 Pi <sub>2</sub> (kN)
+68.06	大屋根	1800	2100	2100	—	2300	2300	—
	小屋根	1400	1600	1600	—	1700	1700	—
	妻壁	600	700	700	—	700	700	—
+53.9		20510	17700	17700	—	16400	16400	—
+28.3		137080	20000	3500	800	22200	3900	800
+23.1		83750	14900	1100	200	14700	1100	200
+18.5				800	150		800	150
+14.0		88680	13800	900	200	13400	900	200

\* : n=1.2 とした算定結果を示す

5) 荷重組合せ

設計で考慮する荷重組合せを表 5.2.1-10 に示す。また、ガレキ撤去時におけるガレキ撤去用天井クレーンの位置を図 5.2.1-3 に、燃料取り出し時における燃料取扱設備の位置を図 5.2.1-4 に示す。なお、燃料取り出し時にはガレキ撤去用天井クレーンの位置は北側とする。

表 5.2.1-10 荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース*1	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL	長期
積雪時*2	S	VL+SL	短期
暴風時*2	W	VL+WL	
地震時	E1	VL+K (+NS)	
	E2	VL+K (-NS)	
	E3	VL+K (+EW)	
	E4	VL+K (-EW)	

\*1：ガレキ撤去時は case1 及び case2，燃料取り出し時は case3 及び case4 の状態とする。

\*2：短期事象では地震時が支配的であることから、積雪時及び暴風時の検討は省略する。ただし、外装材の検討は暴風時が支配的であることから暴風時に対して検討を行う。

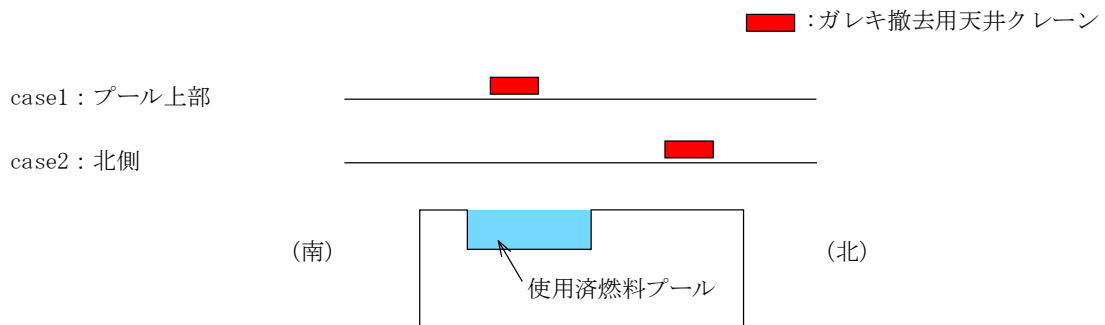
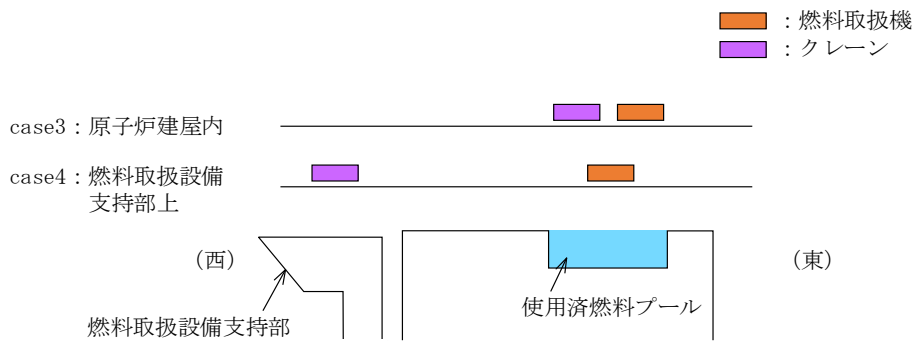


図 5.2.1-3 ガレキ撤去用天井クレーンの位置



※：原子炉建屋オペレーティングフロア上で、燃料取扱機及びクレーンを用い燃料をキャスクに入れる。その後、クレーンを用いキャスクを燃料取扱設備支持部に移動させ地上に下ろす。従って、燃料取扱機とクレーンの両方が原子炉建屋内にいるケースと燃料取扱機が原子炉建屋内、クレーンが燃料取扱設備支持部上にいるケースの 2 ケースとなる。

※：燃料取り出し時のガレキ撤去用天井クレーン位置は北側とする。

図 5.2.1-4 燃料取扱設備の位置

地震時と暴風時の大型カバーの層せん断力について、風荷重の受圧面積が大きい EW 方向で比較した結果を図 5.2.1-5 に示す。図 5.2.1-5 より、地震時の層せん断力は暴風時の層せん断力を包絡しており、支配的な荷重である。

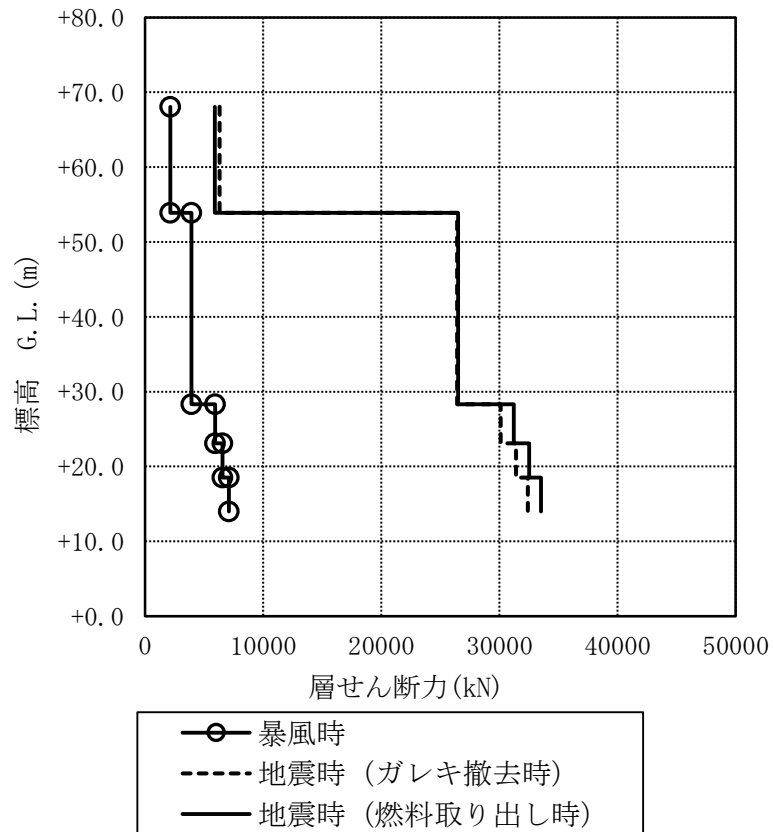


図 5.2.1-5 地震時と暴風時の層せん断力の比較 (EW 方向)

## 5.2.2 大型カバーの構造強度に対する検討

### (1) 断面検討

#### 1) 柱，梁，水平・鉛直ブレース

部材の応力度比は、「鋼構造設計規準」に従い，軸力に対して下式にて検討を行う。

$$\cdot \text{軸圧縮の場合} \quad \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

$$\cdot \text{軸引張の場合} \quad \frac{\sigma_t}{f_t} \leq 1$$

ここで、 $\sigma_c$  : 圧縮応力度 (N/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
 $\sigma_t$  : 引張応力度 (T/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
N : 圧縮力(N)，T : 引張力(N)，A : 断面積(mm<sup>2</sup>)  
 $f_c$  : 許容圧縮応力度(N/mm<sup>2</sup>)  
 $f_t$  : 許容引張応力度(N/mm<sup>2</sup>)

#### 2) 大型カバー頂部鋼板部

応力度比の検討は、「鋼構造設計規準」に従い，面内力に対し下式にて検討を行う。

$$\cdot \text{組合せ応力の場合} \quad \frac{\sigma_x^2 + \sigma_y^2 - \sigma_x \cdot \sigma_y + 3\tau_{xy}^2}{f_t^2} \leq 1$$

ここで、 $\sigma_x$  : X方向圧縮応力度 (N<sub>x</sub>/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
 $\sigma_y$  : Y方向圧縮応力度 (N<sub>y</sub>/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
N<sub>x</sub> : X方向面内力(N)，N<sub>y</sub> : Y方向面内力(N)，A : 断面積(mm<sup>2</sup>)  
 $\tau_{xy}$  : せん断応力度 (N<sub>xy</sub>/A<sub>s</sub>) (N/mm<sup>2</sup>)  
N<sub>xy</sub> : 面内せん断力(N)，A<sub>s</sub> : せん断断面積(mm<sup>2</sup>)  
 $f_t$  : 許容引張応力度(N/mm<sup>2</sup>)



3) ガレキ撤去時

表 5. 2. 2-1 及び表 5. 2. 2-2 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。  
断面検討の結果、全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 5. 2. 2-1(1) 断面検討結果（一般部，常時）上部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定	
			$\sigma_c$		$f_c$				
①	柱	H-400×400×13×21	C (case1)	$\sigma_c$	96.1	$f_c$	170.9	0.57	O.K.
②	梁	B[-300×220×16×25	C (case1)	$\sigma_t$	47.8	$f_t$	216.6	0.23	O.K.
③	鉛直 ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	C (case2)	$\sigma_c$	61.6	$f_c$	173.0	0.36	O.K.
④	鋼板	PL-16 〈SN400B〉	C (case1)	$\sigma_x$	1.9	$f_t$	156.0	0.31	O.K.
				$\sigma_y$	4.1				
				$\tau_{xy}$	27.2				

表 5. 2. 2-1(2) 断面検討結果（一般部，常時）下部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定	
			$\sigma_c$		$f_c$				
⑤	柱	H-400×400×13×21	C (case2)	$\sigma_c$	102.4	$f_c$	202.7	0.51	O.K.
⑥	梁	H-588×300×12×20	C (case1)	$\sigma_c$	52.9	$f_c$	201.1	0.27	O.K.
⑦	鉛直 ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	C (case1)	$\sigma_c$	153.7	$f_c$	203.0	0.76	O.K.
⑧	接続部 水平ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case1)	$\sigma_c$	110.8	$f_c$	187.5	0.60	O.K.
⑨	接続部 鉛直ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case2)	$\sigma_c$	123.6	$f_c$	197.7	0.63	O.K.

表 5. 2. 2-1(3) 断面検討結果 (燃料取扱設備支持部, 常時)

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑩	柱	H-400×400×13×21	C (case1)	$\sigma_c$	15.1	$f_c$	183.1	0.09	O.K.
⑪	梁	H-800×300×14×26	C (case1)	$\sigma_c$	20.3	$f_c$	175.8	0.12	O.K.
⑫	水平 ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case1)	$\sigma_t$	40.8	$f_t$	216.6	0.19	O.K.
⑬	鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	C (case1)	$\sigma_c$	58.7	$f_c$	207.7	0.29	O.K.

\*1 : ⑩~⑬の符号は図 5. 2. 2-1 の応力検討箇所を示す

\*2 : 各部材の使用材料は, 特記なき限り, 鋼管 : STKN490B, その他 SN490B

\*3 : 図 5. 2. 1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

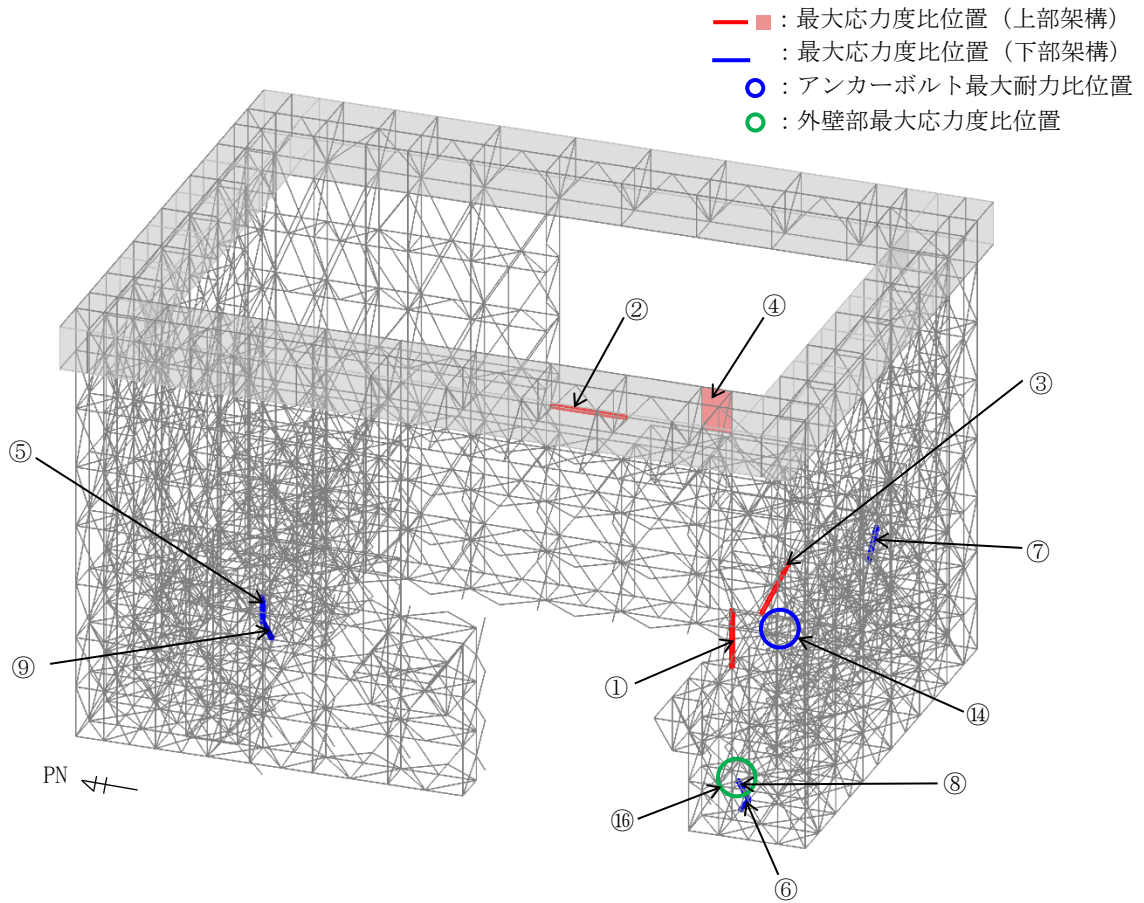


図 5. 2. 2-1 (1) 最大応力度比位置図(一般部, 常時)

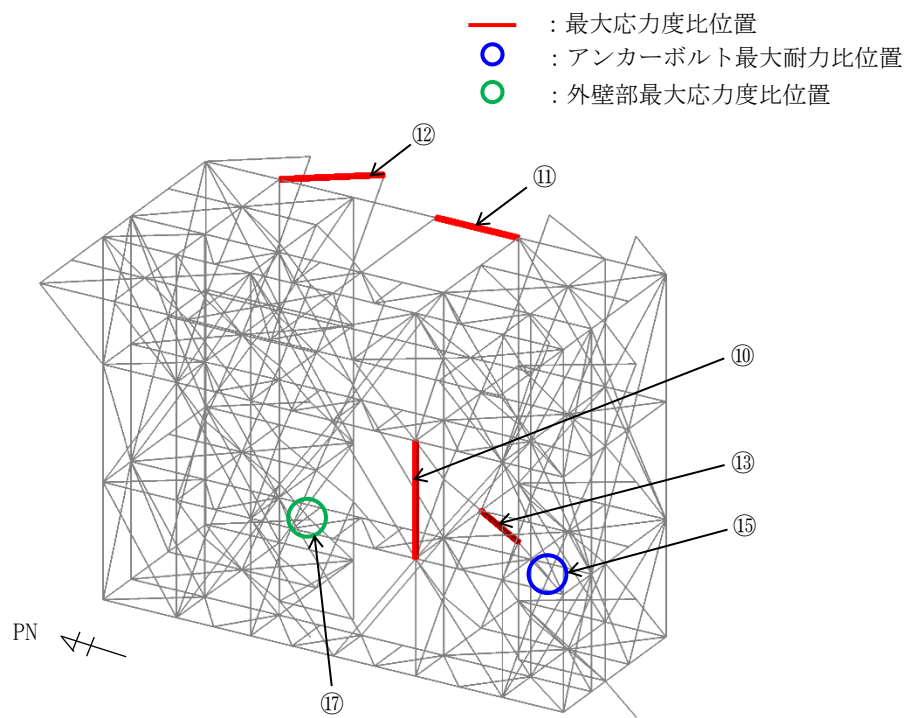


図 5. 2. 2-1 (2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 常時)

表 5. 2. 2-2(1) 断面検討結果（一般部，地震時）上部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_c$		$f_c$			
①	柱 H-400×400×13×21	E4 (case1)	$\sigma_c$	142.0	$f_c$	256.4	0.56	O. K.
②	梁 B[-300×220×16×25	E1 (case1)	$\sigma_c$	85.4	$f_c$	269.9	0.32	O. K.
③	鉛直 ブレース $\phi$ -355.6×9.5	E1 (case1)	$\sigma_c$	259.5	$f_c$	282.0	0.93	O. K.
④	鋼板 PL-16 〈SN400B〉	E2 (case1)	$\sigma_x$	1.9	$f_t$	235.0	0.35	O. K.
			$\sigma_y$	9.2				
			$\tau_{xy}$	46.9				

表 5. 2. 2-2(2) 断面検討結果（一般部，地震時）下部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_c$		$f_c$			
⑤	柱 H-400×400×13×21	E1 (case2)	$\sigma_c$	179.6	$f_c$	304.1	0.60	O. K.
⑥	梁 H-588×300×12×20	E4 (case1)	$\sigma_c$	136.9	$f_c$	301.6	0.46	O. K.
⑦	鉛直 ブレース $\phi$ -267.4×6.6	E1 (case2)	$\sigma_t$	301.3	$f_t$	325.0	0.93	O. K.
⑧	接続部 水平ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E4 (case2)	$\sigma_t$	306.2	$f_t$	325.0	0.95	O. K.
⑨	接続部 鉛直ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E1 (case2)	$\sigma_c$	266.8	$f_c$	297.4	0.90	O. K.

表 5. 2. 2-2(3) 断面検討結果 (燃料取扱設備支持部, 地震時)

部位*1		部材形状 (mm) <使用材料*2>	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑩	柱	H-400×400×13×21	E4 (case1)	$\sigma_c$	15.9	$f_c$	274.7	0.06	O. K.
⑪	梁	H-800×300×14×26	E4 (case1)	$\sigma_c$	23.5	$f_c$	263.7	0.09	O. K.
⑫	水平 ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E1 (case1)	$\sigma_t$	56.0	$f_t$	325.0	0.18	O. K.
⑬	鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	E1 (case1)	$\sigma_c$	68.4	$f_c$	311.5	0.22	O. K.

\*1 : ⑩~⑬の符号は図 5. 2. 2-2 の応力検討箇所を示す

\*2 : 各部材の使用材料は, 特記なき限り, 鋼管 : STKN490B, その他 SN490B

\*3 : 図 5. 2. 1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

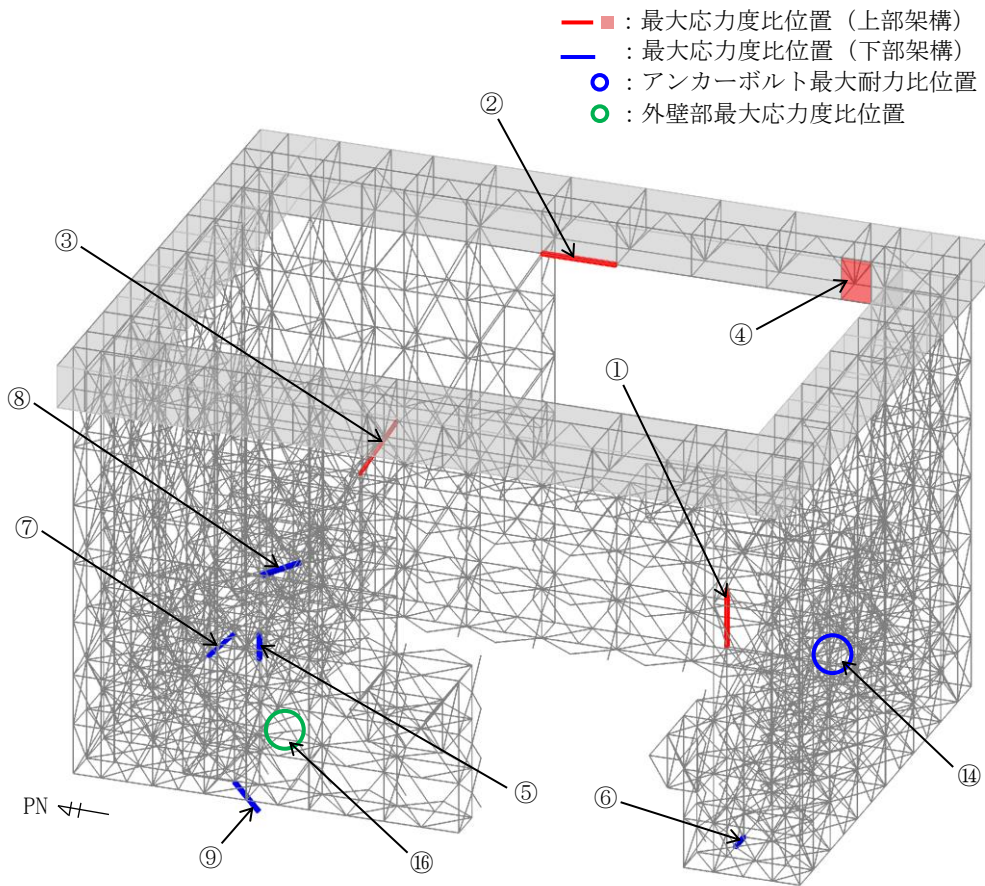


図 5.2.2-2(1) 最大応力度比位置図(一般部, 地震時)

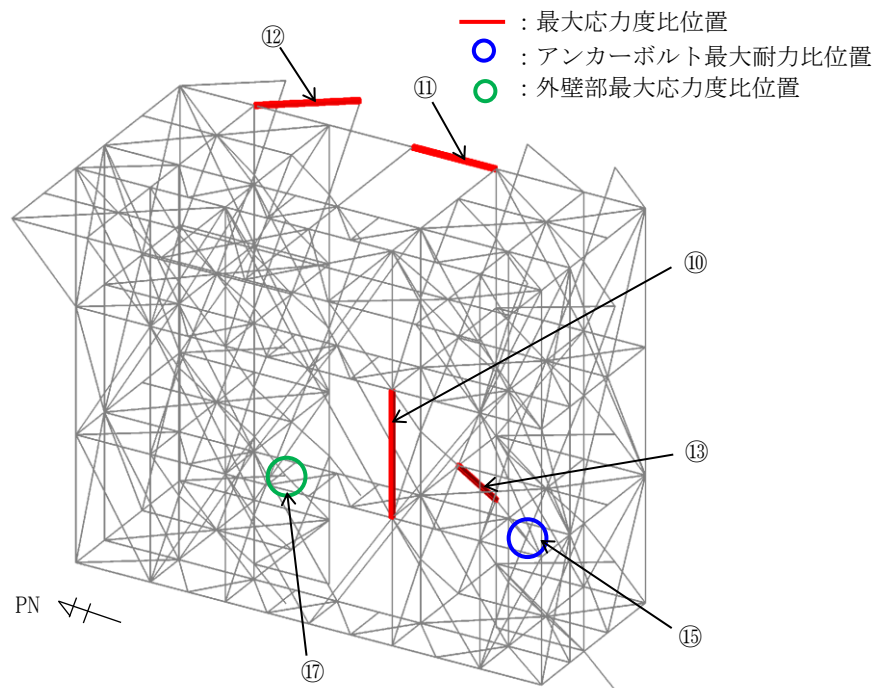


図 5.2.2-2(2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 地震時)

4) 燃料取り出し時

表 5. 2. 2-3 及び表 5. 2. 2-4 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。  
断面検討の結果、全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 5. 2. 2-3(1) 断面検討結果（一般部，常時）上部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定	
			$\sigma_c$		$f_c$				
①	柱	H-400×400×13×21	C (case4)	$\sigma_c$	68.8	$f_c$	170.9	0.41	O. K.
②	梁	B[-300×220×16×25	C (case4)	$\sigma_c$	17.9	$f_c$	179.9	0.10	O. K.
③	鉛直 ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	C (case4)	$\sigma_c$	57.0	$f_c$	173.0	0.33	O. K.
④	鋼板	PL-16 〈SN400B〉	C (case4)	$\sigma_x$	0.0	$f_t$	156.0	0.17	O. K.
				$\sigma_y$	9.5				
				$\tau_{xy}$	13.8				

表 5. 2. 2-3(2) 断面検討結果（一般部，常時）下部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定	
			$\sigma_c$		$f_c$				
⑤	柱	H-400×400×13×21	C (case4)	$\sigma_c$	93.1	$f_c$	202.7	0.46	O. K.
⑥	梁	H-350×350×12×19	C (case4)	$\sigma_c$	49.5	$f_c$	183.8	0.27	O. K.
⑦	鉛直 ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	C (case4)	$\sigma_c$	122.8	$f_c$	196.2	0.63	O. K.
⑧	接続部 水平ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case4)	$\sigma_c$	90.1	$f_c$	187.5	0.49	O. K.
⑨	接続部 鉛直ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case4)	$\sigma_c$	112.4	$f_c$	197.7	0.57	O. K.

表 5. 2. 2-3(3) 断面検討結果 (燃料取扱設備支持部, 常時)

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_c$		$f_c$			
⑩	柱 H-400×400×13×21	C (case4)	$\sigma_c$	34.7	$f_c$	202.7	0.18	O.K.
⑪	梁 H-350×350×12×19	C (case4)	$\sigma_c$	29.1	$f_c$	201.5	0.15	O.K.
⑫	水平 ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	C (case4)	$\sigma_t$	42.9	$f_t$	216.6	0.20	O.K.
⑬	鉛直 ブレース $\phi$ -355.6×7.9	C (case4)	$\sigma_c$	93.6	$f_c$	207.7	0.46	O.K.

\*1 : ⑩~⑬の符号は図 5. 2. 2-3 の応力検討箇所を示す

\*2 : 各部材の使用材料は, 特記なき限り, 鋼管 : STKN490B, その他 SN490B

\*3 : 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す



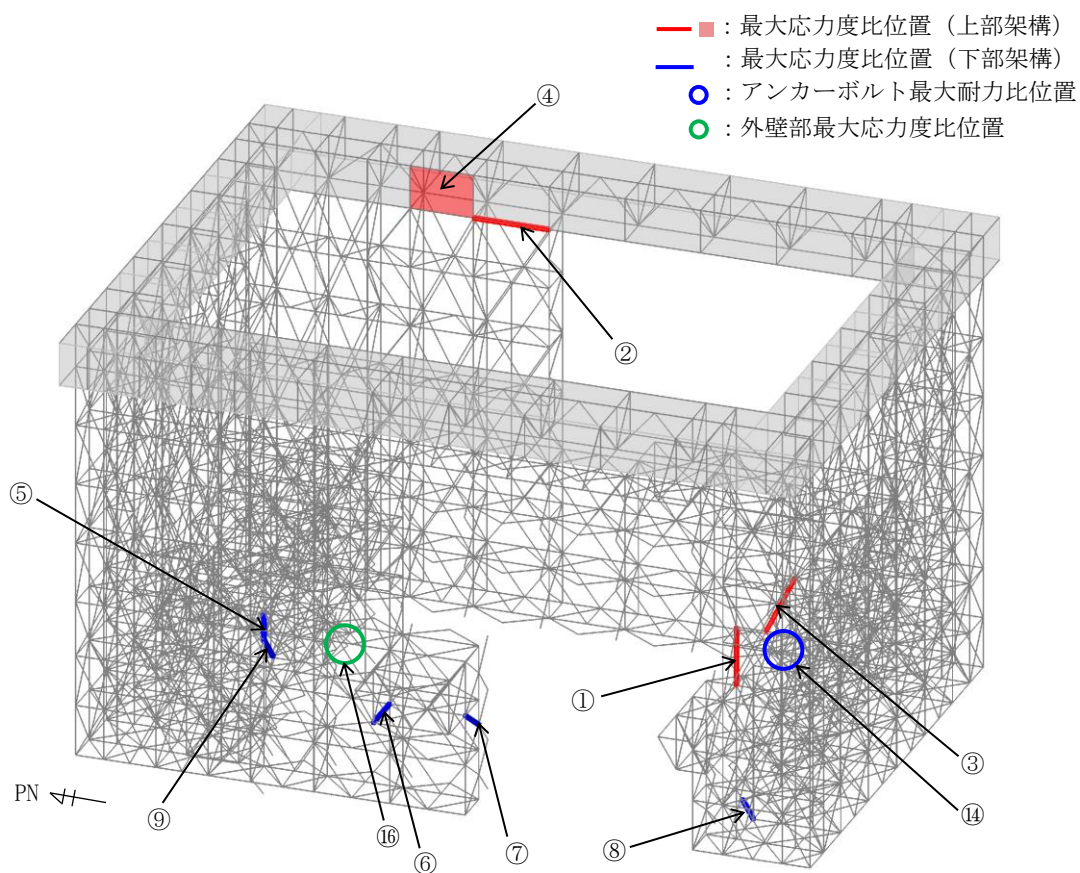


図 5. 2. 2-3 (1) 最大応力度比位置図(一般部, 常時)

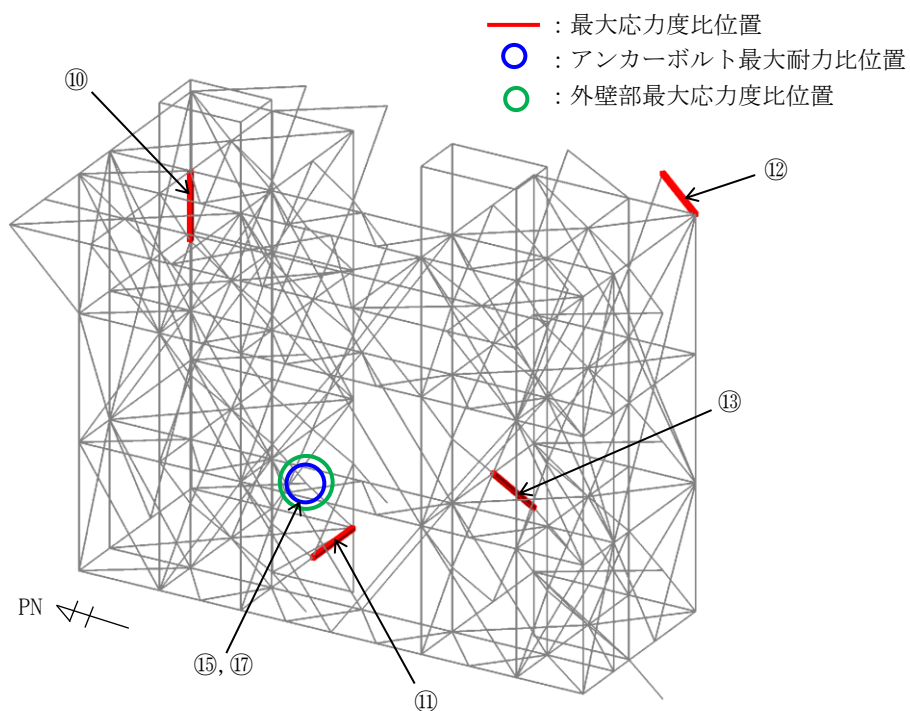


図 5. 2. 2-3 (2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 常時)

表 5. 2. 2-4(1) 断面検討結果 (一般部, 地震時) 上部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_c$		$f_c$			
①	柱 H-400×400×13×21	E2 (case4)	$\sigma_c$	136.8	$f_c$	256.4	0.54	O. K.
②	梁 B[-300×220×16×25	E1 (case4)	$\sigma_c$	67.5	$f_c$	269.9	0.26	O. K.
③	鉛直 ブレース $\phi$ -355.6×9.5	E1 (case4)	$\sigma_c$	245.5	$f_c$	282.0	0.88	O. K.
④	鋼板 PL-16 〈SN400B〉	E4 (case4)	$\sigma_x$	28.0	$f_t$	235.0	0.33	O. K.
			$\sigma_y$	9.1				
			$\tau_{xy}$	41.6				

表 5. 2. 2-4(2) 断面検討結果 (一般部, 地震時) 下部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_c$		$f_c$			
⑤	柱 H-400×400×13×21	E1 (case4)	$\sigma_c$	176.0	$f_c$	304.1	0.58	O. K.
⑥	梁 H-588×300×12×20	E1 (case4)	$\sigma_t$	138.0	$f_t$	325.0	0.43	O. K.
⑦	鉛直 ブレース $\phi$ -267.4×6.6	E1 (case4)	$\sigma_t$	298.9	$f_t$	325.0	0.92	O. K.
⑧	接続部 水平ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E4 (case4)	$\sigma_t$	298.8	$f_t$	325.0	0.92	O. K.
⑨	接続部 鉛直ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E2 (case4)	$\sigma_c$	269.3	$f_c$	296.6	0.91	O. K.

表 5. 2. 2-4(3) 断面検討結果 (燃料取扱設備支持部, 地震時)

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	荷重 ケース (位置)*3	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑩	柱	H-400×400×13×21	E4 (case4)	$\sigma_c$	33.0	$f_c$	274.7	0.13	O.K.
⑪	梁	H-350×350×12×19	E1 (case4)	$\sigma_c$	38.7	$f_c$	302.3	0.13	O.K.
⑫	水平 ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	E1 (case4)	$\sigma_t$	60.6	$f_t$	325.0	0.19	O.K.
⑬	鉛直 ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	E1 (case4)	$\sigma_c$	106.1	$f_c$	311.5	0.35	O.K.

\*1 : ⑩~⑬の符号は図 5. 2. 2-4 の応力検討箇所を示す

\*2 : 各部材の使用材料は, 特記なき限り, 鋼管 : STKN490B, その他 SN490B

\*3 : 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

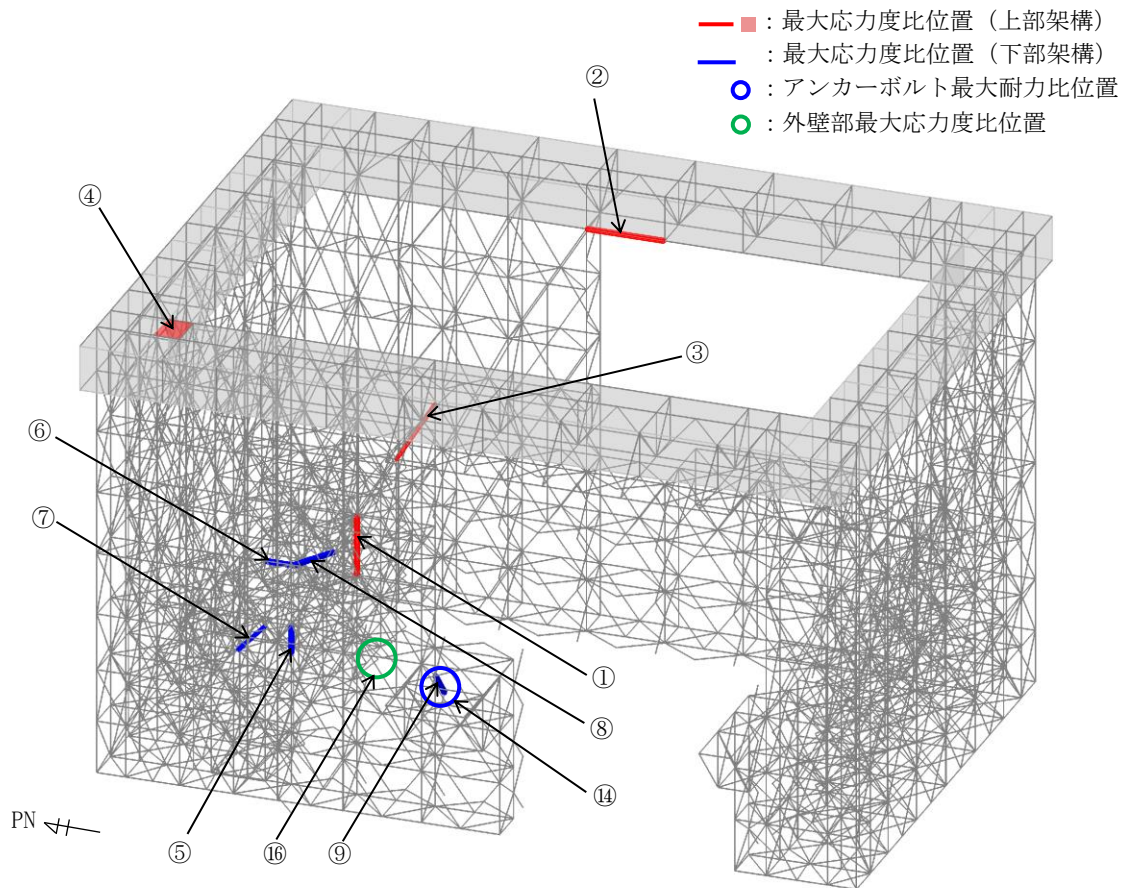


図 5. 2. 2-4(1) 最大応力度比位置図(一般部, 地震時)

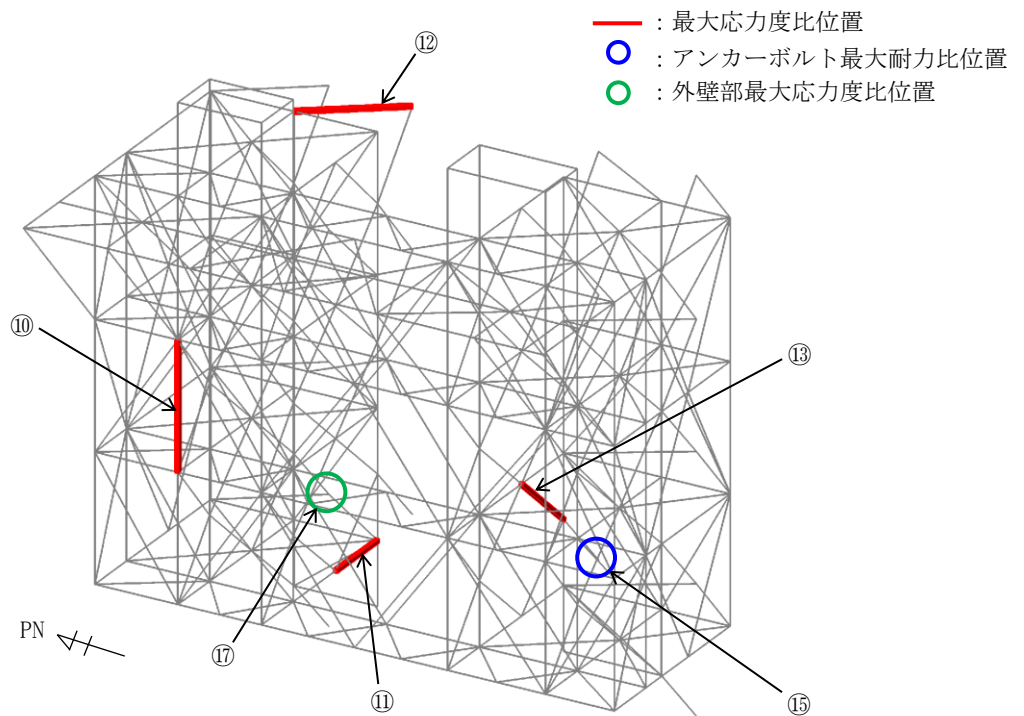


図 5. 2. 2-4(2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 地震時)

### 5.2.3 屋根の構造強度に対する検討

#### (1) 断面検討

##### 1) 弦材, 斜材, ブレース

部材の応力度比は, 「鋼構造設計規準」に従い, 下記にて検討を行う。

$$\cdot \text{軸圧縮の場合} \quad \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

$$\cdot \text{軸引張の場合} \quad \frac{\sigma_t}{f_t} \leq 1$$

ここで,  $\sigma_c$  : 圧縮応力度 (N/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
 $\sigma_t$  : 引張応力度 (T/A) (N/mm<sup>2</sup>)  
N : 圧縮力 (N), T : 引張力 (N), A : 断面積 (mm<sup>2</sup>)  
 $f_c$  : 許容圧縮応力度 (N/mm<sup>2</sup>)  
 $f_t$  : 許容引張応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

##### 2) 検討結果

表 5.2.3-1 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。

断面検討の結果, 全ての部材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。



表 5. 2. 3-1(1) 断面検討結果 (常時, ガレキ撤去時)

部位*1		部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	弦材	P-216.3φ×7.0t <STK490>	C (case1)	$\sigma_c$	48.2	$f_c$	213.1	0.23	O.K.
②	斜材	P-89.1φ×3.2t <STK400>	C (case1)	$\sigma_t$	42.3	$f_t$	156.7	0.27	O.K.
③	ブレース	1-M30 <SNR490B>	C (case1)	$\sigma_t$	107.7	$f_t$	216.7	0.50	O.K.

\*1: ①~③の符号は図 5. 2. 3-1 の応力検討箇所を示す

\*2: 図 5. 2. 1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

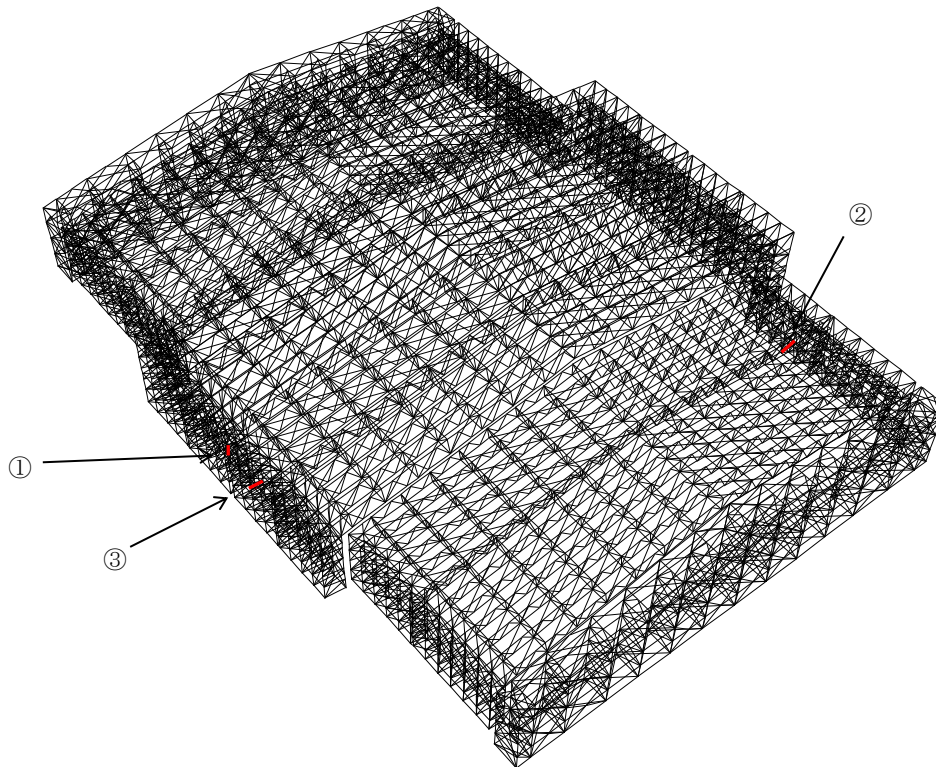


図 5. 2. 3-1 最大応力度比位置図

表 5. 2. 3-1(2) 断面検討結果 (常時, 燃料取り出し時)

部位*1		部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	弦材	P-216.3φ×6.0t <STK490>	C (case4)	$\sigma_c$	23.4	$f_c$	214.1	0.11	O.K.
②	斜材	P-89.1φ×3.2t <STK400>	C (case4)	$\sigma_t$	32.6	$f_t$	156.7	0.21	O.K.
③	ブレース	1-M27 <SNR490B>	C (case4)	$\sigma_t$	75.0	$f_t$	216.7	0.35	O.K.

\*1: ①~③の符号は図 5. 2. 3-2 の応力検討箇所を示す

\*2: 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

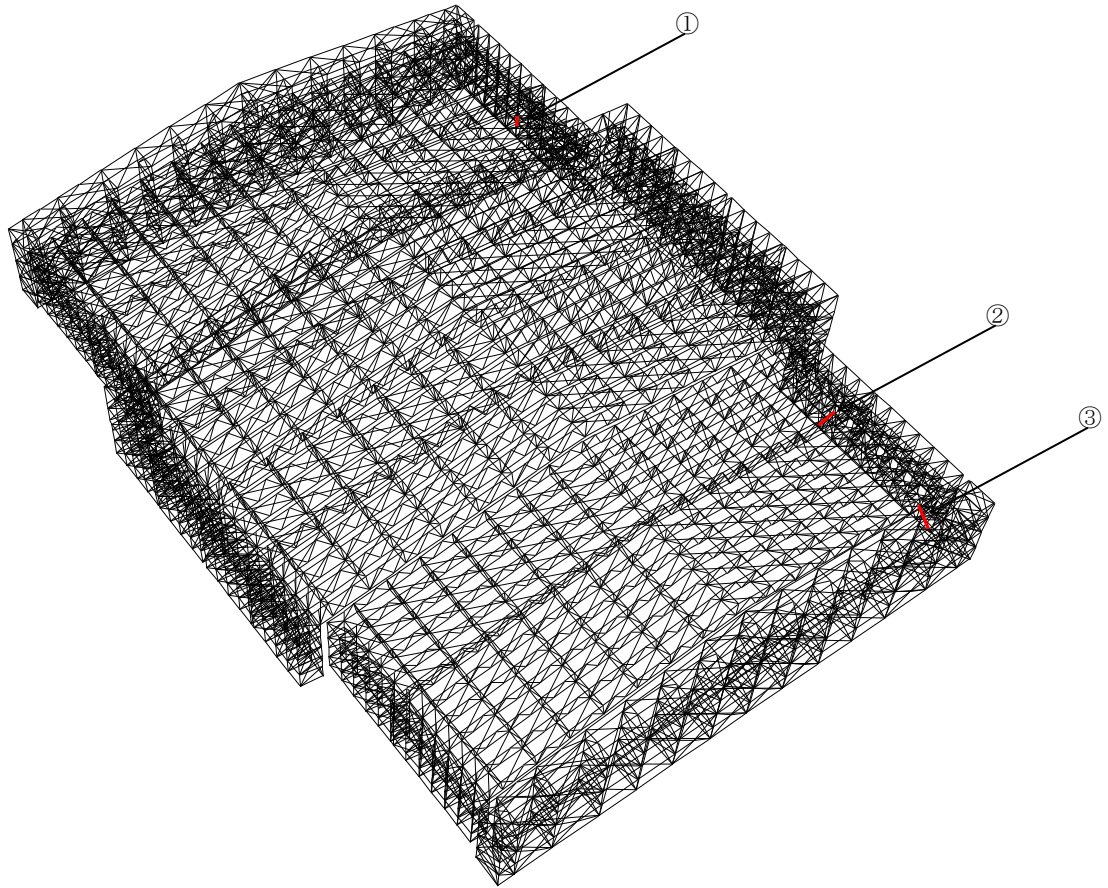


図 5. 2. 3-2 最大応力度比位置図

表 5. 2. 3-1 (3) 断面検討結果 (地震時, ガレキ撤去時)

部位*1		部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	弦材	P-216.3φ×7.0t <STK490>	E2 (case1)	$\sigma_c$	99.2	$f_c$	319.7	0.32	O.K.
②	斜材	P-89.1φ×3.2t <STK400>	E3 (case2)	$\sigma_t$	159.2	$f_t$	235.0	0.68	O.K.
③	ブレース	1-M27 <SNR490B>	E1 (case1)	$\sigma_t$	299.7	$f_t$	325.0	0.93	O.K.

\*1: ①~③の符号は図 5. 2. 3-3 の応力検討箇所を示す

\*2: 図 5. 2. 1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

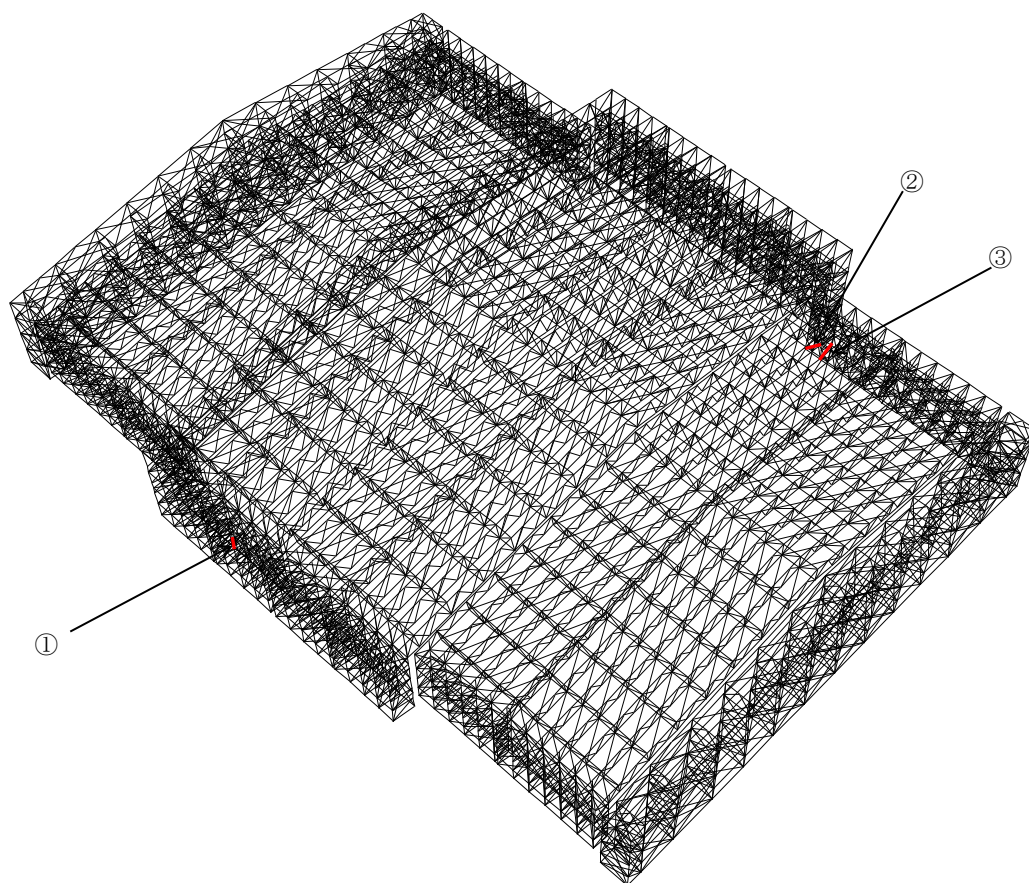


図 5. 2. 3-3 最大応力度比位置図



表 5. 2. 3-1(4) 断面検討結果 (地震時, 燃料取り出し時)

部位*1		部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	弦材	P-216.3φ×7.0t <STK490>	E2 (case4)	$\sigma_t$	81.6	$f_t$	325.0	0.26	O.K.
②	斜材	P-89.1φ×3.2t <STK400>	E3 (case4)	$\sigma_t$	154.2	$f_t$	235.0	0.66	O.K.
③	ブレース	1-M30 <SNR490B>	E1 (case4)	$\sigma_t$	261.0	$f_t$	325.0	0.81	O.K.

\*1: ①~③の符号は図 5. 2. 3-4 の応力検討箇所を示す

\*2: 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

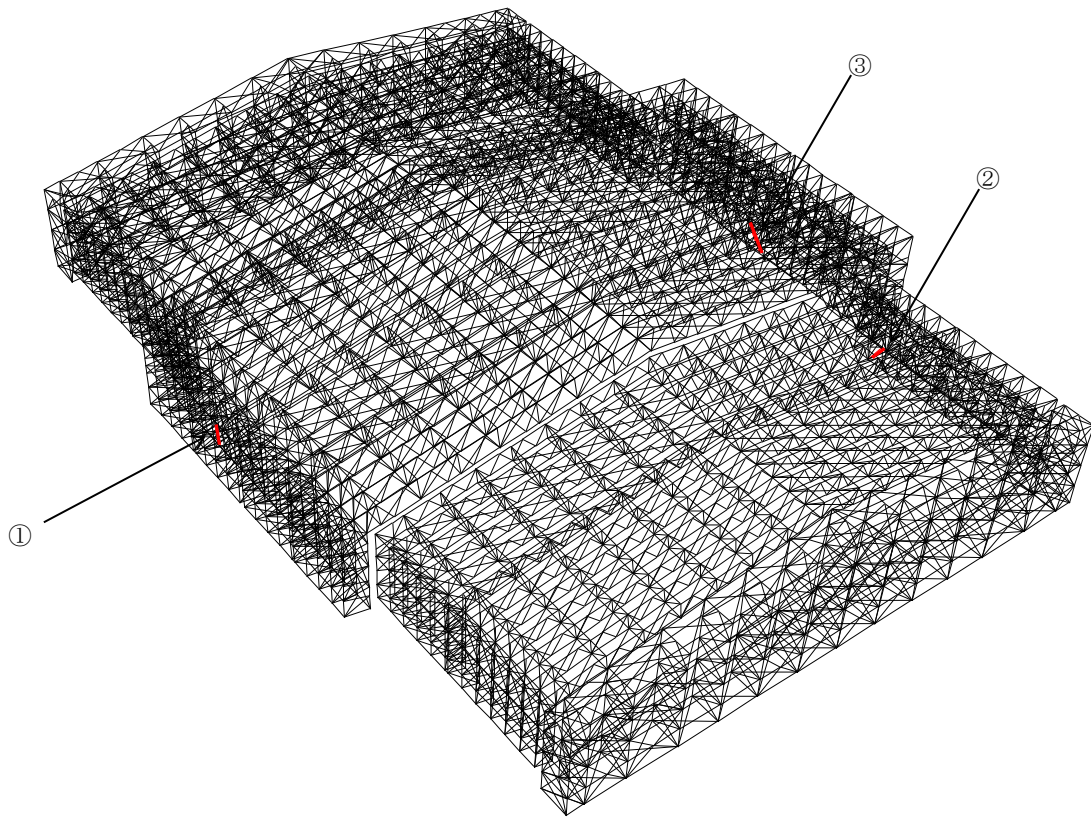


図 5. 2. 3-4 最大応力度比位置図

## 5.2.4 建屋取り合い部の構造強度に対する検討

### (1) アンカーボルトの検討（引抜き，せん断）

大型カバーはアンカーボルトにより原子炉建屋外壁に取り付く。アンカーボルトの仕様は，M33（SNR490B）の接着系アンカーボルトとし，許容耐力は「あと施工アンカー施工指針（案）（一般社団法人日本建築あと施工アンカー協会）」，「各種合成構造設計指針・同解説」に従い，原子炉建屋の設計基準強度を用いて下式によって求める。表 5.2.4-1 にアンカーボルトの許容耐力を，図 5.2.4-1 にアンカー標準図を示す。

$$pa = \min(\phi_1 \cdot pa_1, \phi_2 \cdot pa_2, \phi_3 \cdot pa_3)$$

$$qa = \min(\phi_1 \cdot qa_1, \phi_2 \cdot qa_2)$$

$\phi_1 \sim \phi_3$ ：低減係数（長期，短期）

$pa$ ：接着系アンカーボルトの許容引張力（kN/本）

$pa_1$ ：アンカーボルトの降伏により決まる許容引張力（kN/本）

$pa_2$ ：躯体のコーン状破壊により決まる許容引張力（kN/本）

$pa_3$ ：付着力により決まる許容引張力（kN/本）

$qa$ ：接着系アンカーボルトの許容せん断力（kN/本）

$qa_1$ ：アンカーボルトのせん断強度により決まる許容せん断力（kN/本）

$qa_2$ ：躯体の支圧強度により決まる許容せん断力（kN/本）

表 5.2.4-1 接着系アンカーボルトの許容耐力

部位		一般部	燃料取扱設備支持部	
			GL+13.7	
タイプ		標準	標準	
鋼材種類		M33	M33	
		SNR490B	SNR490B	
埋め込み長さ (mm)		345	345	
アンカーボルト間隔 (mm)		400	400	
長期	許容引張力 ( $pa_L$ ) (kN/本)	78	106	92
	許容せん断力 ( $qa_L$ ) (kN/本)	76	76	76
短期	許容引張力 ( $pa_S$ ) (kN/本)	156	212	185
	許容せん断力 ( $qa_S$ ) (kN/本)	152	152	152

アンカーボルトの検討は、建屋取り合い部に生じる最大支点反力に対し、下式にて検討を行う。

$$\frac{P}{P_a} \leq 1$$

$$\frac{Q}{Q_a} \leq 1$$

$$\left(\frac{P}{P_a}\right)^2 + \left(\frac{Q}{Q_a}\right)^2 \leq 1$$

$P_a$  : アンカーボルトの許容引張耐力 (kN)

$Q_a$  : アンカーボルトの許容せん断耐力 (kN)

$P$  : アンカーボルトの引張力 (kN)

$Q$  : アンカーボルトのせん断力 (kN)

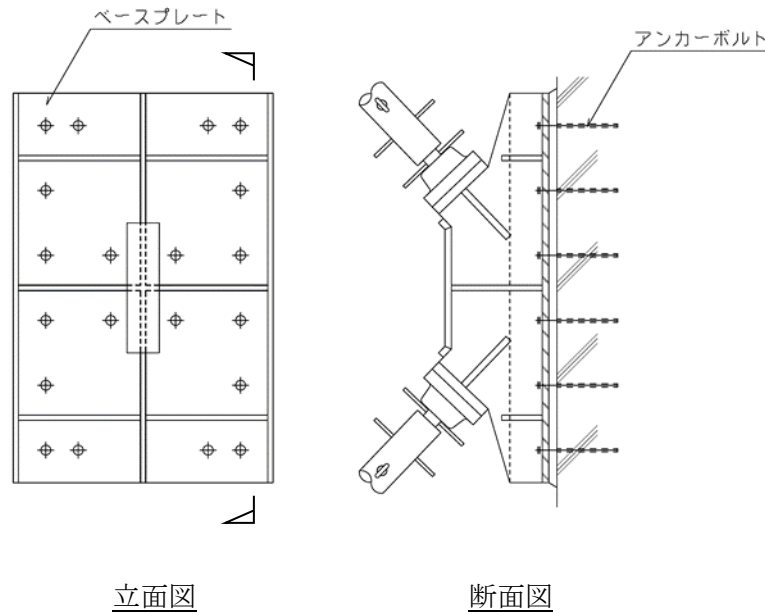


図 5. 2. 4-1 アンカー標準図

1) ガレキ撤去時

表 5.2.4-2 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、アンカーボルトの最大耐力比は 1 以下になることを確認した。

表 5.2.4-2(1) アンカーボルトの検討結果（一般部，常時）

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑭ アンカー ボルト (12)	C (case1)	36	749	936	912	0.83	O.K.

表 5.2.4-2(2) アンカーボルトの検討結果（燃料取扱設備支持部，常時）

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑮ アンカー ボルト (12)	C (case1)	0	349	1272	912	0.39	O.K.

\*1：図 5.2.2-1 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

表 5. 2. 4-2(3) アンカーボルトの検討結果 (一般部, 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑭ アンカー ボルト (34)	E3 (case1)	0	3412	5304	5168	0.67	0. K.

表 5. 2. 4-2(4) アンカーボルトの検討結果 (燃料取扱設備支持部, 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑮ アンカー ボルト (12)	E1 (case1)	0	474	2544	1824	0.26	0. K.

\*1 : 図 5. 2. 2-2 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5. 2. 1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

2) 燃料取り出し時

表 5. 2. 4-3 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、アンカーボルトの最大耐力比は 1 以下になることを確認した。

表 5. 2. 4-3(1) アンカーボルトの検討結果 (一般部, 常時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑭ アンカー ボルト (12)	C (case4)	0	744	936	912	0. 82	0. K.

表 5. 2. 4-3(2) アンカーボルトの検討結果 (燃料取扱設備支持部, 常時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑮ アンカー ボルト (16)	C (case4)	0	770	1472	1216	0. 64	0. K.

\*1 : 図 5. 2. 2-3 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

表 5. 2. 4-3(3) アンカーボルトの検討結果 (一般部, 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑭ アンカー ボルト (36)	E2 (case4)	0	3537	5616	5472	0.65	0. K.

表 5. 2. 4-3(4) アンカーボルトの検討結果 (燃料取扱設備支持部, 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	荷重 ケース (位置)*2	作用応力		許容耐力		耐力比	判定
		引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	許容 引張力 Pa (kN)	許容 せん断力 Qa (kN)		
⑮ アンカー ボルト (12)	E1 (case4)	0	695	2544	1824	0.39	0. K.

\*1 : 図 5. 2. 2-4 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

(2) 原子炉建屋外壁部の検討

原子炉建屋外壁部に生じる最大圧縮反力に対し，下式にて検討を行う。

図 5. 2. 4-2 にベースプレート標準図を示す。

$$\frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

ここで，  $\sigma_c$  : 圧縮応力度 (N/A) (N/mm<sup>2</sup>)

N : 圧縮力 (N)， A : ベースプレート面積 (B×H) (mm<sup>2</sup>)

$f_c$  : 許容応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

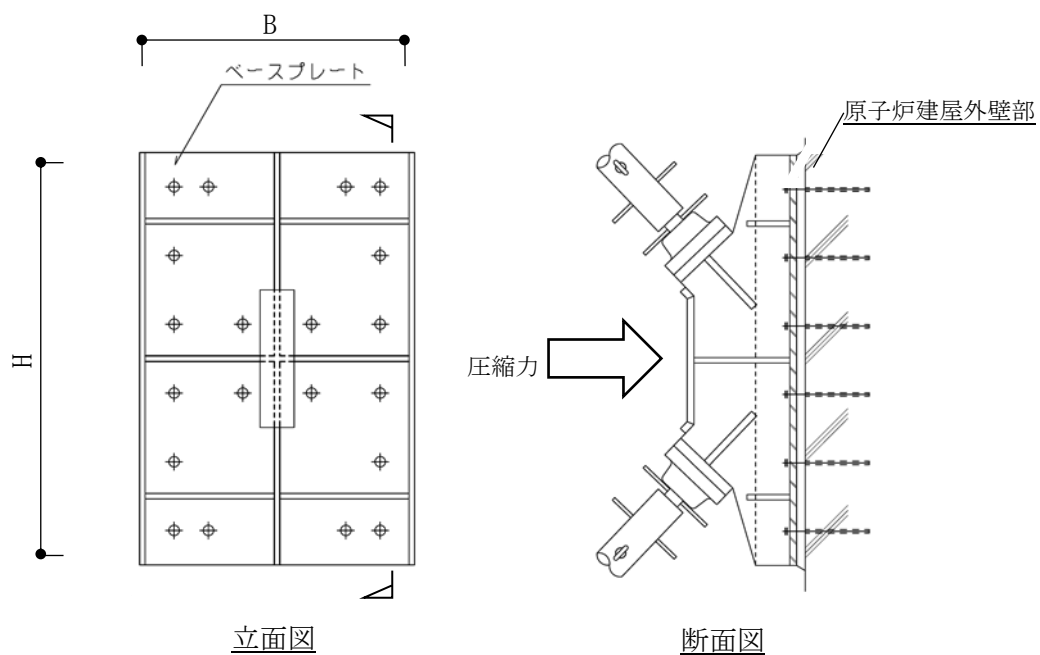


図 5. 2. 4-2 ベースプレート標準図



1) ガレキ撤去時

表 5.2.4-4 及び表 5.2.4-5 に応力度比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、原子炉建屋外壁部の最大応力度比は 1 以下になることを確認した。

表 5.2.4-4(1) 外壁部の検討結果 (一般部, 常時)

部位 <sup>*1</sup>	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑯	外壁 C (case1)	0.3	7.4	0.05	O.K.

表 5.2.4-4(2) 外壁部の検討結果 (燃料取扱設備支持部, 常時)

部位 <sup>*1</sup>	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑰	外壁 C (case2)	0.3	7.4	0.05	O.K.

\*1 : 図 5.2.2-1 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

表 5.2.4-5(1) 外壁部の検討結果 (一般部, 地震時)

部位 <sup>*1</sup>	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑯	外壁 E1 (case2)	0.6	14.8	0.05	O.K.

表 5.2.4-5(2) 外壁部の検討結果 (燃料取扱設備支持部, 地震時)

部位 <sup>*1</sup>	荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑰	外壁 E1 (case2)	0.3	14.8	0.03	O.K.

\*1 : 図 5.2.2-2 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

2) 燃料取り出し時の検討

表 5. 2. 4-6 及び表 5. 2. 4-7 に応力度比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果，原子炉建屋外壁部の最大応力度比は 1 以下になることを確認した。

表 5. 2. 4-6(1) 外壁部の検討結果（一般部，常時）

部位 <sup>*1</sup>		荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑩	外壁	C (case4)	0.3	7.4	0.05	O. K.

表 5. 2. 4-6(2) 外壁部の検討結果（燃料取扱設備支持部，常時）

部位 <sup>*1</sup>		荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑩	外壁	C (case4)	0.4	7.4	0.06	O. K.

\*1：図 5. 2. 2-3 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

表 5. 2. 4-7(1) 外壁部の検討結果（一般部，地震時）

部位 <sup>*1</sup>		荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑩	外壁	E1 (case4)	0.6	14.8	0.05	O. K.

表 5. 2. 4-7(2) 外壁部の検討結果（燃料取扱設備支持部，地震時）

部位 <sup>*1</sup>		荷重ケース (位置) <sup>*2</sup>	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
⑩	外壁	E1 (case4)	0.5	14.8	0.04	O. K.

\*1：図 5. 2. 2-4 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

## 5.2.5 天井クレーンの構造強度に対する検討

### (1) 断面検討

#### 1) クレーンガーダ

部材の応力度比は、「鋼構造設計規準」に従い、曲げモーメントに対して下式にて検討を行う。

$$\frac{\sigma_b}{f_b} \leq 1$$

ここで、 $\sigma_b$  : 曲げ応力度 (M/Z) (N/mm<sup>2</sup>)

$f_b$  : 許容曲げ応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

#### 2) 検討結果

##### 2.1) ガレキ撤去時

表 5.2.5-1 に断面検討結果を示す。

断面検討の結果、全応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 5.2.5-1(1) 断面検討結果 (常時)

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置) <sup>*1</sup>	作用 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_b$		$f_b$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	C (case1)	$\sigma_b$	82.3	$f_b$	216.7	0.38	O.K.

\*1 : 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

表 5.2.5-1(2) 断面検討結果 (地震時)

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置) <sup>*1</sup>	作用 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_b$		$f_b$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	E2 (case1)	$\sigma_b$	82.3	$f_b$	325.0	0.26	O.K.

\*1 : 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

2.2) 燃料取り出し時

表 5.2.5-2 に断面検討結果を示す。

断面検討の結果、全応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 5.2.5-2(1) 断面検討結果 (常時)

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*1	作用 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_b$		$f_b$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	C (case4)	$\sigma_b$	55.6	$f_b$	216.7	0.26	O.K.

\*1 : 図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

表 5.2.5-2(2) 断面検討結果 (地震時)

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース (位置)*1	作用 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (鉛直) (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
			$\sigma_b$		$f_b$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	E2 (case4)	$\sigma_b$	55.6	$f_b$	325.0	0.18	O.K.

\*1 : 図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

## 5.2.6 外装材の構造強度に対する検討

### (1) 検討箇所

大型カバーの側面を覆う外装材は、折板を用いる。強度検討は、外装材に風圧力により生じる応力度が短期許容応力度以下であることを確認する。なお、短期事象においては、暴風時の影響が支配的であることから、積雪時及び地震時の検討は省略する。検討箇所を図 5.2.6-1 に示す。

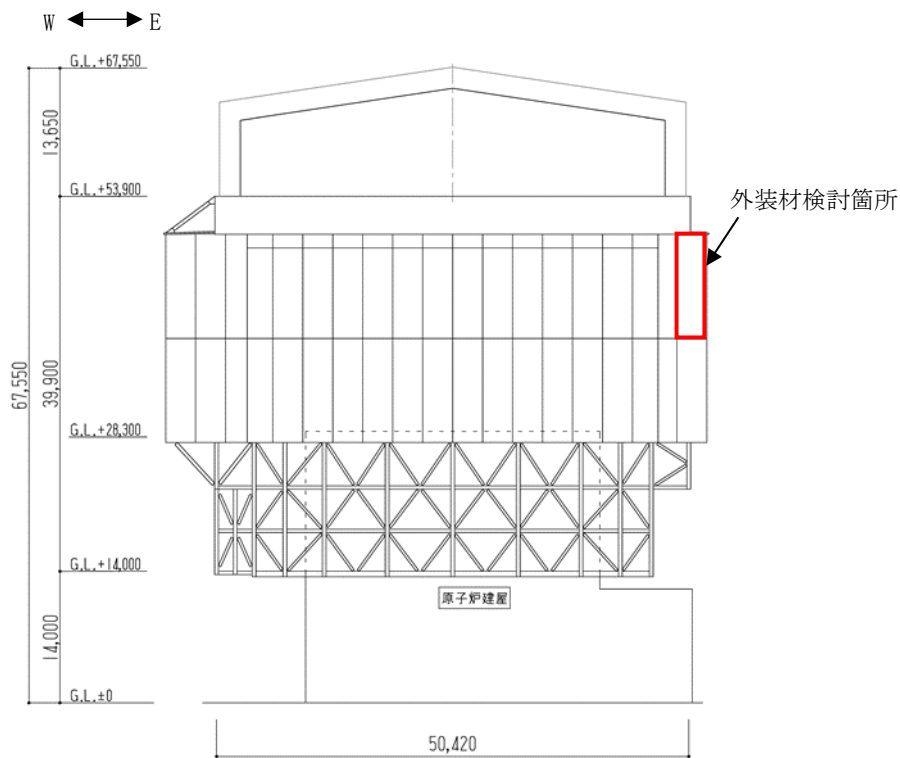


図 5.2.6-1 外装材検討箇所 (単位: mm)

(2) 設計用荷重の算定

設計用風圧力は、建築基準法施行令第 82 条の 4 及び建設省告示第 1458 号に基づき、基準風速 30m/s、地表面粗度区分Ⅱとして算定する。速度圧の算定結果を表 5.2.6-1 に、ピーク風力係数を表 5.2.6-2 に、風力係数の算定箇所を図 5.2.6-2 に示す。

表 5.2.6-1 速度圧の算定結果

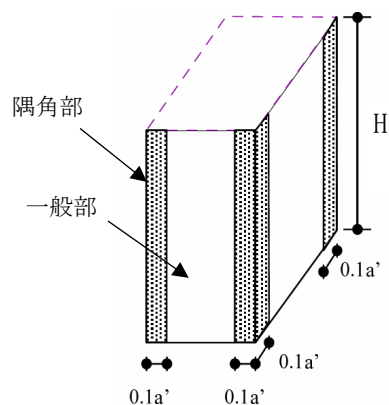
高さ*	平均風速の高さ方向の分布を表す係数	基準風速	平均速度圧
H (m)	$E_r$	$V_0$ (m/s)	q (N/m <sup>2</sup> )
49.9	1.32	30	945

\*：高さは外装材の最頂部の高さとした

表 5.2.6-2 ピーク風力係数

高さ*	壁面		
	正圧	負圧(一般部)	負圧(隅角部)
49.9	2.43	-2.40	-3.00

\*：高さは外装材の最頂部の高さとした



a' は平面の短辺の長さで H の 2 倍の数値のうちいずれか小さな数値 (30 を超えるときは、30 とする) (単位 : m)

図 5.2.6-2 風力係数の算定箇所のイメージ

(3) 外装材の強度検討

検討は、応力が厳しくなる部位について行う。ここでは、折板の自重は考慮しないものとする。折板の間隔は 0.6m で単純支持されているものと仮定する。

外装材の材料諸元を表 5.2.6-3 に示す。また、検討結果を表 5.2.6-4 に示す。

断面検討の結果、全ての外装材に対する応力度比が 1 以下になることを確認した。

表 5.2.6-3 外装材の材料諸元

板厚	自重	正曲げ方向		負曲げ方向	
		断面 2 次 モーメント	断面係数	断面 2 次 モーメント	断面係数
t (mm)	G (N/m <sup>2</sup> )	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)
0.6	59	2.31	1.67	2.31	1.67

表 5.2.6-4 応力度に対する検討結果

部位	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容 応力度* (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
外装材	78	137	0.57	O. K.

\* : 「JIS G 3321-2010」による

・ 応力度に対する検討

壁面

$$w = 945 \times (-3.00) = -2835 \text{ (N/m}^2\text{)}$$

$$M = (1/8) \times w \times L^2 = (1/8) \times (-2835) \times 0.6^2 \times 10^{-3} = -0.13 \text{ (kNm/m)}$$

$$\sigma_b = M/Z = 0.13 \times 10^6 / (1.67 \times 10^3) = 78 \text{ (N/mm}^2\text{)}$$

$$\sigma_b / f_b = 78 / 137 = 0.57 \leq 1.0 \quad \text{O. K.}$$

### 5.3 耐震性（機能維持の検討）

#### 5.3.1 検討方針

耐震性のうち機能維持の検討は、大型カバー、屋根、建屋取り合い部及び原子炉建屋について行い、1/2Ss450 に対して、これらの応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。なお、地震応答解析は水平 2 方向及び鉛直方向の 3 方向の地震動を同時に入力する。

##### (1) 解析に用いる入力地震動

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 5.3.1-1 に示す。モデルに入力する地震動は次元波動論に基づき、解放基盤表面で定義される地震動 1/2Ss450 に対する地盤の応答として評価する。解放基盤表面位置（G.L. -206.0m（震災前 O.P. -196.0m））における地震動 1/2Ss450 Ss-1 及び Ss-2 の加速度時刻歴波形を図 5.3.1-2～図 5.3.1-4 に示す。

地震波の入力方向は下記のように表し、3 方向の組合せを表現する。

+NS：建屋北側から南側方向への地震入力

-NS：建屋南側から北側方向への地震入力

+EW：建屋東側から西側方向への地震入力

-EW：建屋西側から東側方向への地震入力

+UD：建屋上側から下側方向への地震入力

-UD：建屋下側から上側方向への地震入力



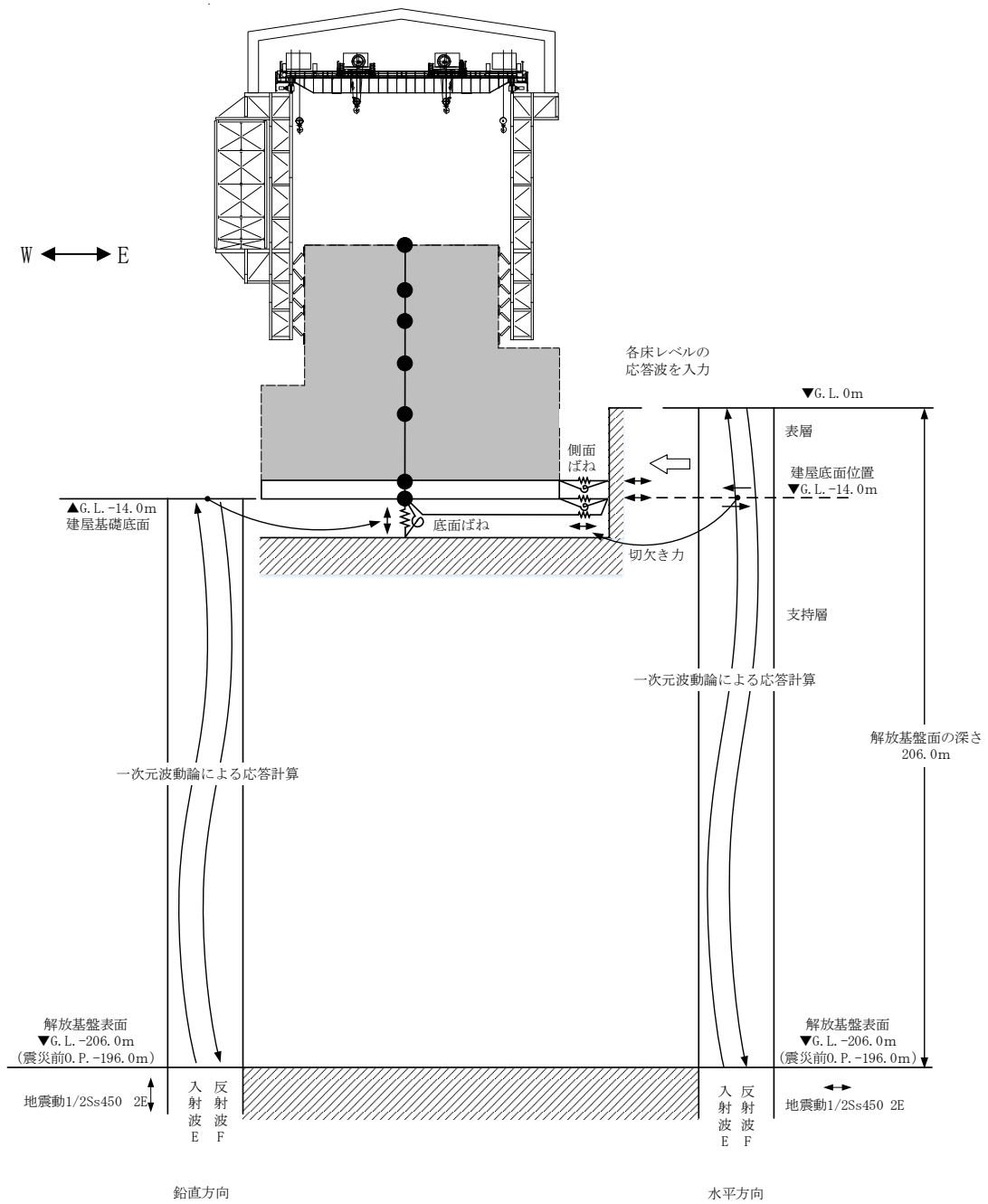
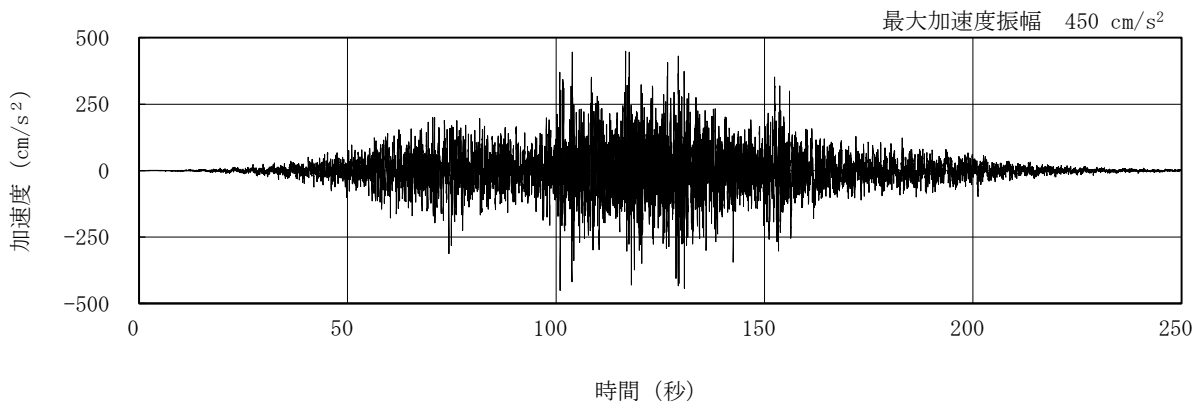
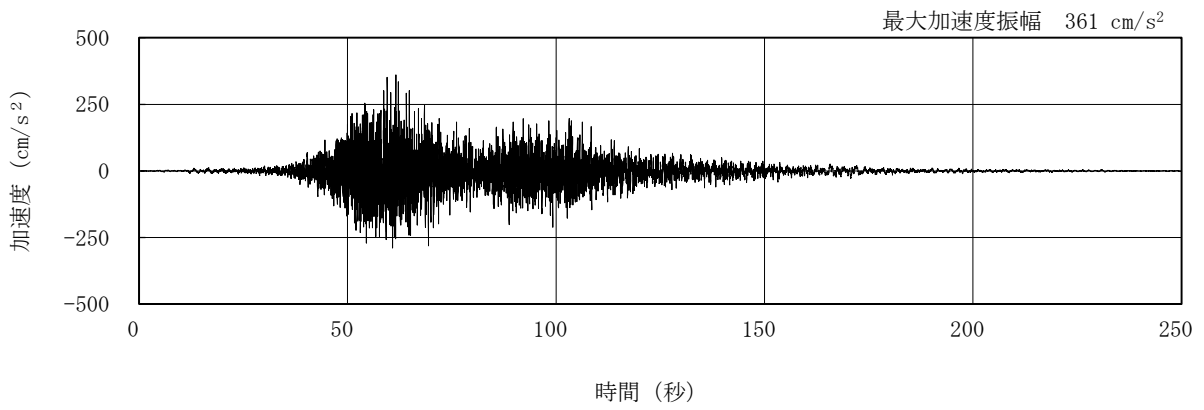


図 5.3.1-1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

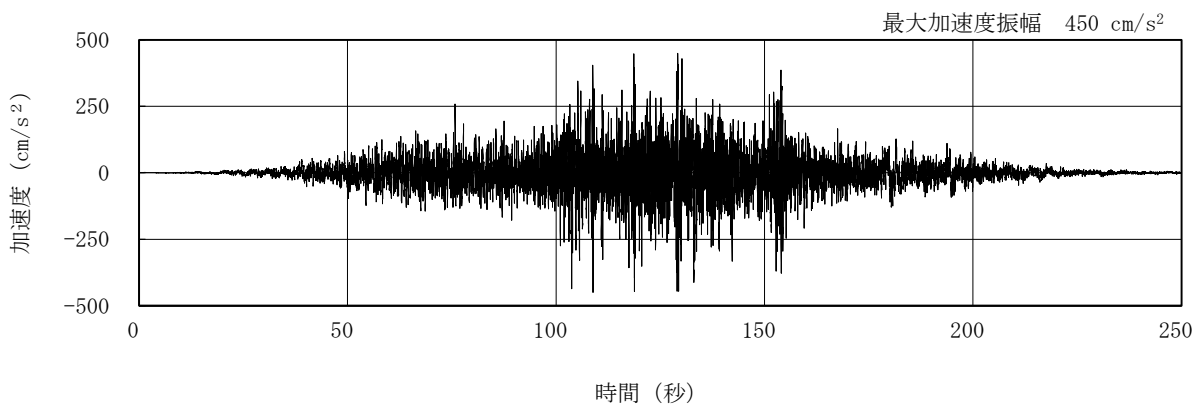


(1/2Ss450-1 NS 方向)

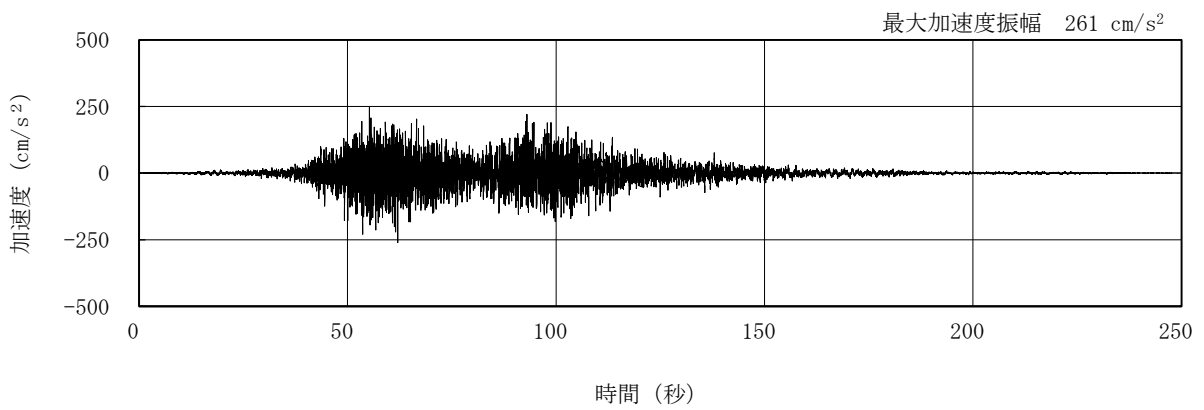


(1/2Ss450-2 NS 方向)

図 5.3.1-2 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(NS 方向)

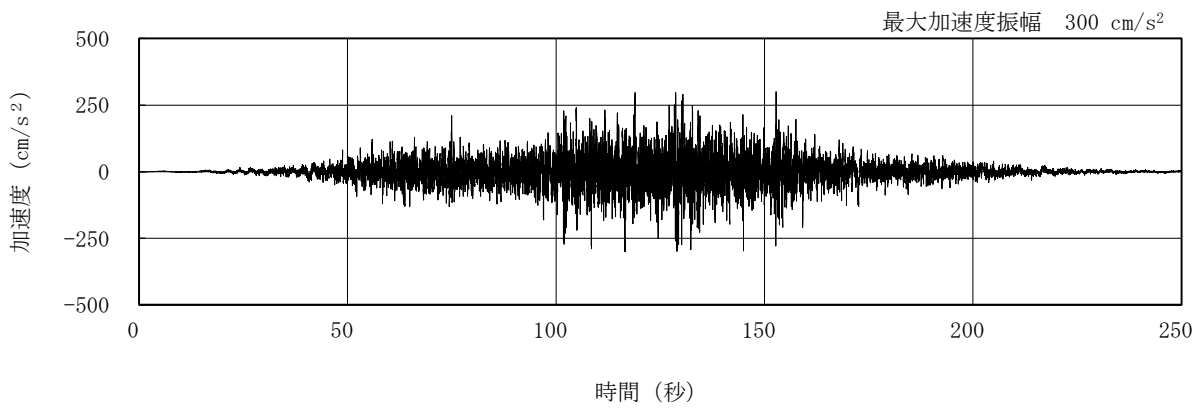


(1/2Ss450-1 EW 方向)

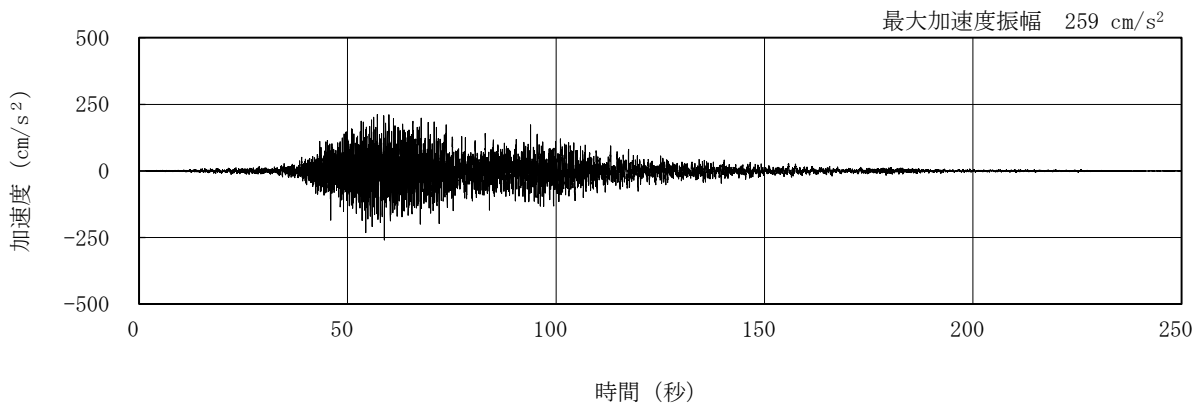


(1/2Ss450-2 EW 方向)

図 5.3.1-3 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(EW 方向)



(1/2Ss450-1 UD 方向)



(1/2Ss450-2 UD 方向)

図 5.3.1-4 解放基盤表面における地震動の加速度時刻歴波形  
(鉛直方向)

## (2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルは、曲げ、せん断剛性及び軸剛性を考慮した原子炉建屋の質点系モデルの質点に、立体架構でモデル化した大型カバーを接続し、地盤との相互作用を考慮した建屋－地盤連成系モデルとする。なお、原子炉建屋の質点は炉心位置にモデル化する。解析モデルを図 5.3.1-5 に示す。

地震応答解析に用いる鉄骨の物性値を表 5.3.1-1 に示す。大型カバーの部材接合部の節点は機器荷重・仕上げ材等を考慮した重量とし、原子炉建屋の諸元は表 5.3.1-2～表 5.3.1-3 に示す諸元とする。大型カバーの柱・梁・鋼板は弾性部材とし、大型カバーのブレースは「鉄骨 X 型ブレース架構の復元力特性に関する研究」（日本建築学会構造工学論文集 37B 号 1991 年 3 月）に示されている修正若林モデルによる。また、原子炉建屋の質点系モデルは、軸方向は弾性とし、曲げとせん断に「JEAG4601-1991」に示されている非線形特性を考慮する。

大型カバーの地盤定数は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（東京電力株式会社，平成 20 年 3 月 31 日）と同様とし、その結果を表 5.3.1-4 に示す。

原子炉建屋の地盤ばねは、「JEAG4601-1991」に示されている手法を参考にして、底面地盤を成層補正し振動アドミッタンス理論によりスウェイ及びロッキングばねを、側面地盤を Novak の方法により建屋側面ばねとして評価する。NS 方向，EW 方向，UD 方向の 3 方向全ての地盤ばねが取り付けいた解析モデルを用いる。

表 5.3.1-1 地震応答解析に用いる物性値

材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )	減衰定数 h (%)	備考
鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0	2	SS400, SN400B, SM490A, SN490B, STKN490B, TMCP325B, S45C

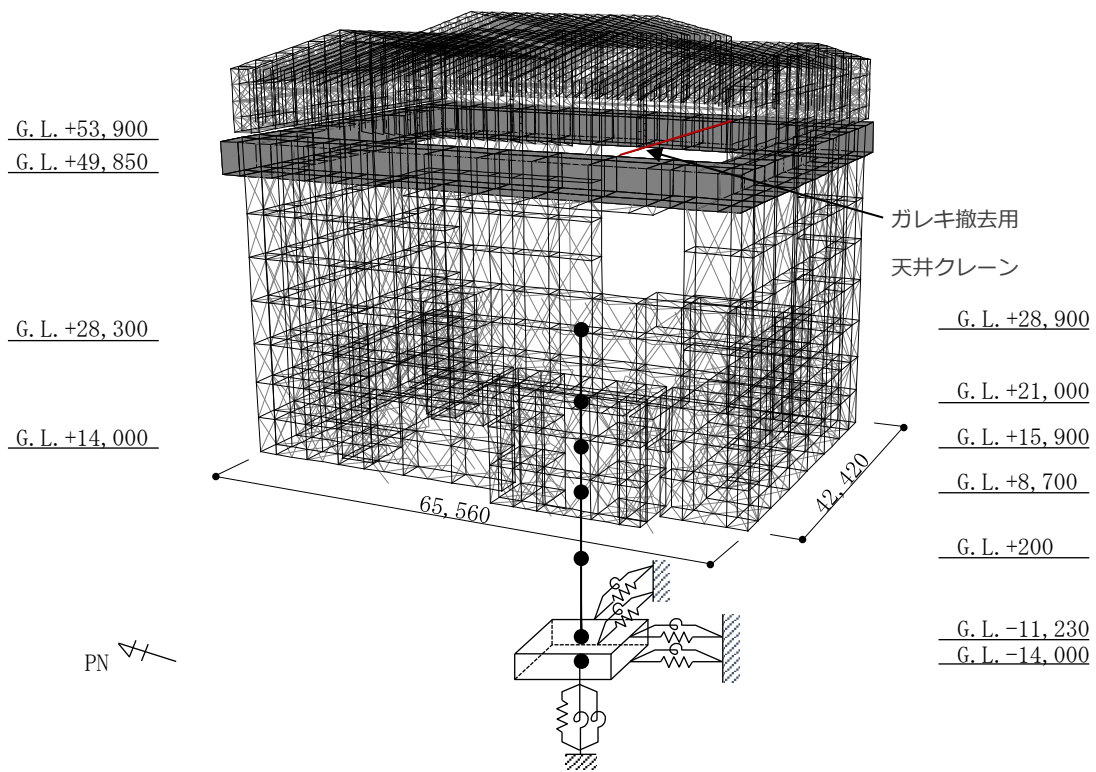


図 5.3.1-5 解析モデル

表 5.3.1-2(1) ガレキ撤去時の原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a) 水平 (NS) 方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_G$ ( $\times 10^5$ kN $\cdot$ m $^2$ )	せん断断面積 $A_S$ (m $^2$ )	断面二次モーメント I (m $^4$ )
+28.90	58690	84.43	135.0	16012
+21.00	72170	103.90		
+15.90	77220	111.11	160.8	21727
+8.70	87200	125.53	132.8	24274
+0.20	162800	234.31	155.6	36481
-11.23	185210	266.64	294.0	52858
-14.00	62400	89.83	1914.3	275530
合計	705690		ヤング係数 $E_c$ $2.57 \times 10^7$ (kN/m $^2$ ) せん断弾性係数 $G$ $1.07 \times 10^7$ (kN/m $^2$ ) ポアソン比 $\nu$ 0.20 減衰 $h$ 5%	

(b) 水平 (EW) 方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_G$ ( $\times 10^5$ kN $\cdot$ m $^2$ )	せん断断面積 $A_S$ (m $^2$ )	断面二次モーメント I (m $^4$ )
+28.90	58690	48.33	102.7	9702
+21.00	72170	59.41		
+15.90	77220	63.55	163.9	13576
+8.70	87200	125.53	131.6	14559
+0.20	162800	234.31	197.8	36427
-11.23	185210	327.39	294.0	52858
-14.00	62400	110.32	1914.3	338428
合計	705690		ヤング係数 $E_c$ $2.57 \times 10^7$ (kN/m $^2$ ) せん断弾性係数 $G$ $1.07 \times 10^7$ (kN/m $^2$ ) ポアソン比 $\nu$ 0.20 減衰 $h$ 5%	

\*:「II.2.6 滞留水を貯留している (滞留している場合を含む) 建屋 添付資料-2 構造強度及び耐震性 (地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全評価)」において用いた各階重量

表 5.3.1-2(2) ガレキ撤去時の原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(c) 鉛直方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	軸断面積 $A_N$ (m <sup>2</sup> )	軸ばね剛性 $K_A$ ( $\times 10^8$ kN/m)
+28.90	58690		
		151.1	4.92
+21.00	72170		
		205.0	10.33
+15.90	77220		
		221.7	7.91
+8.70	87200		
		301.0	9.10
+0.20	162800		
		495.7	11.15
-11.23	185210		
		1914.3	177.61
-14.00	62400		
合計	705690		
		ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> )
		せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> )
		ポアソン比 $\nu$	0.20
		減衰 $h$	5%

\*:「II.2.6 滞留水を貯留している（滞留している場合を含む）建屋 添付資料-2 構造強度及び耐震性（地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全評価）」において用いた各階重量



表 5.3.1-3(1) 燃料取り出し時の原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a) 水平 (NS) 方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_s (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I ( $\text{m}^4$ )
+28.90	106080	152.60		
			135.0	16012
+21.00	72170	103.90		
			160.8	21727
+15.90	77220	111.11		
			132.8	24274
+8.70	87730	126.29		
			155.6	36481
+0.20	163140	234.80		
			294.0	52858
-11.23	185210	266.64		
			1914.3	275530
-14.00	62400	89.83		
合計	753950			
		ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		ポアソン比 $\nu$	0.20	
		減衰 $h$	5%	

(b) 水平 (EW) 方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{ kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_s (\text{m}^2)$	断面二次モーメント I ( $\text{m}^4$ )
+28.90	106080	87.35		
			102.7	9702
+21.00	72170	59.41		
			163.9	13576
+15.90	77220	63.55		
			131.6	14559
+8.70	87730	126.29		
			197.8	36427
+0.20	163140	234.80		
			294.0	52858
-11.23	185210	327.39		
			1914.3	338428
-14.00	62400	110.32		
合計	753950			
		ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7 (\text{kN}/\text{m}^2)$	
		ポアソン比 $\nu$	0.20	
		減衰 $h$	5%	

\*: 「II.2.6 滞留水を貯留している (滞留している場合を含む) 建屋 添付資料-2 構造強度及び耐震性 (地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全評価)」において用いた各階重量にガレキ撤去等による重量増減を考慮した数値

表 5.3.1-3(2) 燃料取り出し時の原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(c) 鉛直方向

G. L. (m)	質点重量* W (kN)	軸断面積 $A_N$ (m <sup>2</sup> )	軸ばね剛性 $K_A$ ( $\times 10^8$ kN/m)
+28.90	106080		
		151.1	4.92
+21.00	72170		
		205.0	10.33
+15.90	77220		
		221.7	7.91
+8.70	87730		
		301.0	9.10
+0.20	163140		
		495.7	11.15
-11.23	185210		
		1914.3	177.61
-14.00	62400		
合計	753950		
		ヤング係数 $E_c$	$2.57 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> )
		せん断弾性係数 $G$	$1.07 \times 10^7$ (kN/m <sup>2</sup> )
		ポアソン比 $\nu$	0.20
		減衰 $h$	5%

\*:「II.2.6 滞留水を貯留している（滞留している場合を含む）建屋 添付資料-2 構造強度及び耐震性（地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全評価）」において用いた各階重量にガレキ撤去等による重量増減を考慮した数値

表 5.3.1-4 地盤定数の設定結果

(a) 1/2Ss450-1

G. L. (m)	地質	せん断 波速度 Vs (m/s)	単位体 積重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0										
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	2.23	2.62	0.85	6.57	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	2.73	3.41	0.80	7.99	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.49	4.36	0.80	10.16	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	4.50	5.63	0.80	13.01	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.22	6.53	0.80	15.05	3	88.0
		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

(b) 1/2Ss450-2

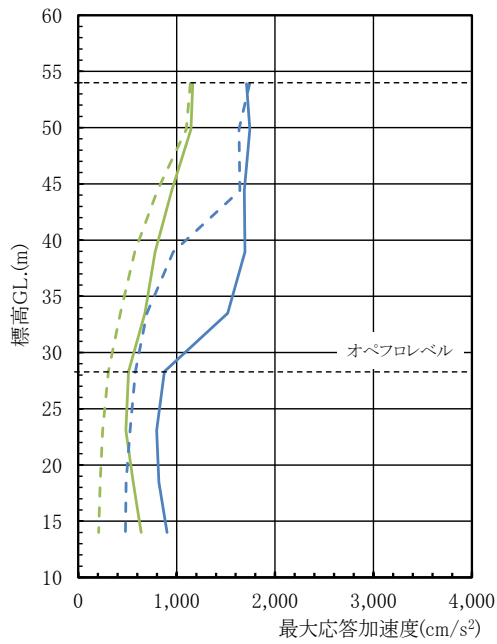
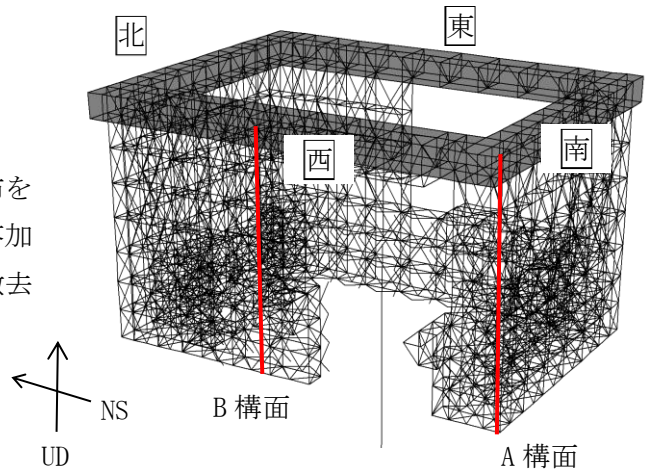
G. L. (m)	地質	せん断 波速度 Vs (m/s)	単位体 積重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0										
-8.1	砂岩	380	17.8	0.473	2.33	2.62	0.89	6.86	3	8.1
-20.0	泥岩	450	16.5	0.464	3.03	3.41	0.89	8.87	3	11.9
-90.0		500	17.1	0.455	3.88	4.36	0.89	11.29	3	70.0
-118.0		560	17.6	0.446	5.01	5.63	0.89	14.49	3	28.0
-206.0		600	17.8	0.442	5.81	6.53	0.89	16.76	3	88.0
		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

### 5.3.2 大型カバーの耐震性に対する検討

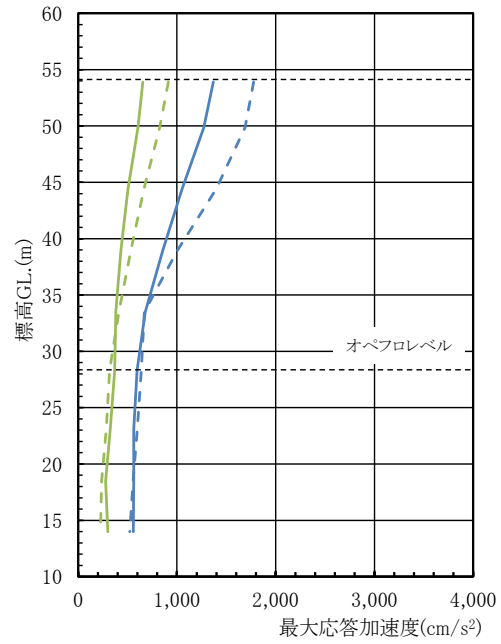
#### (1) 地震応答解析結果

##### 1) ガレキ撤去時

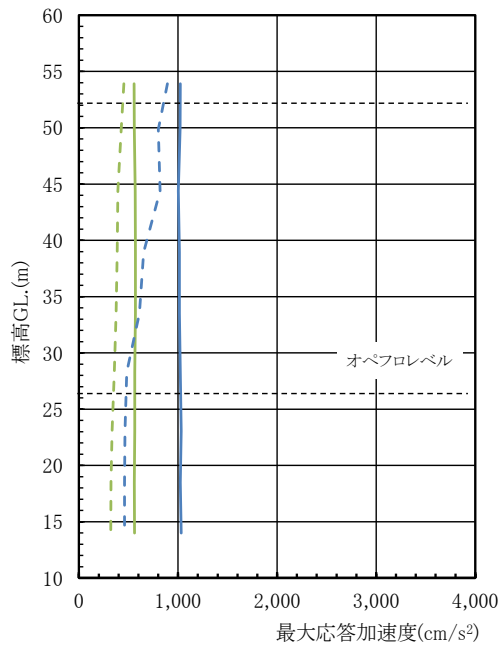
ガレキ撤去時の一般部の最大応答加速度分布を図 5.3.2-1 に、燃料取扱設備支持部の最大応答加速度分布を図 5.3.2-2 に示す。なお、ガレキ撤去用天井クレーン位置は case1 とする。



(a) 水平(NS)成分 (A, B構面)



(b) 水平(EW)成分 (A, B構面)



(c) 鉛直(UD)成分 (A, B構面)

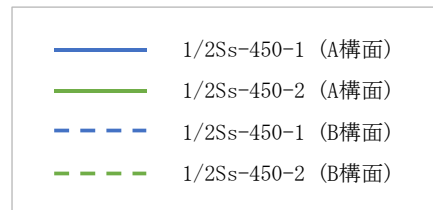
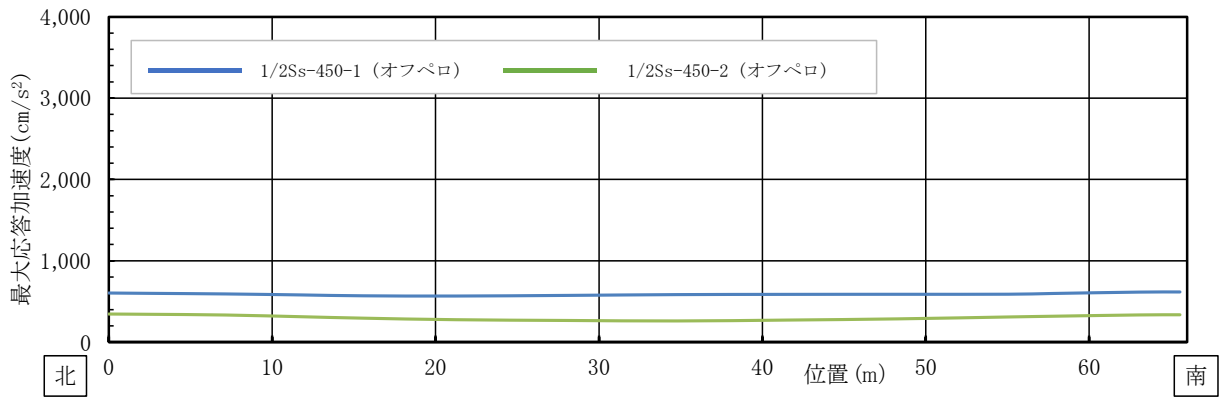
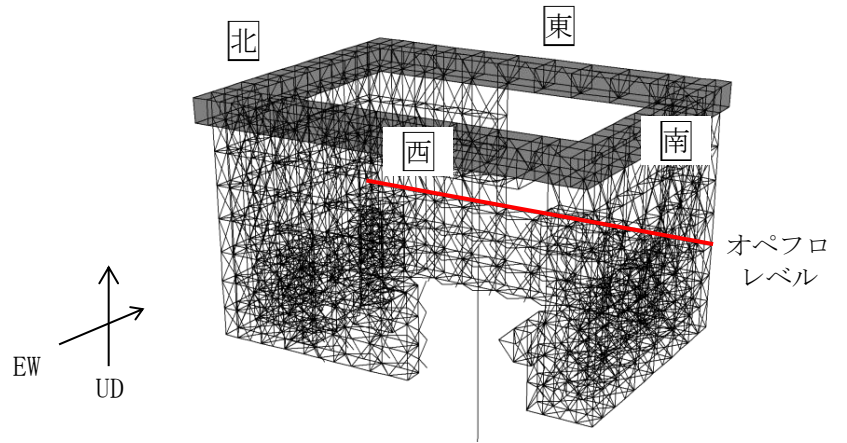
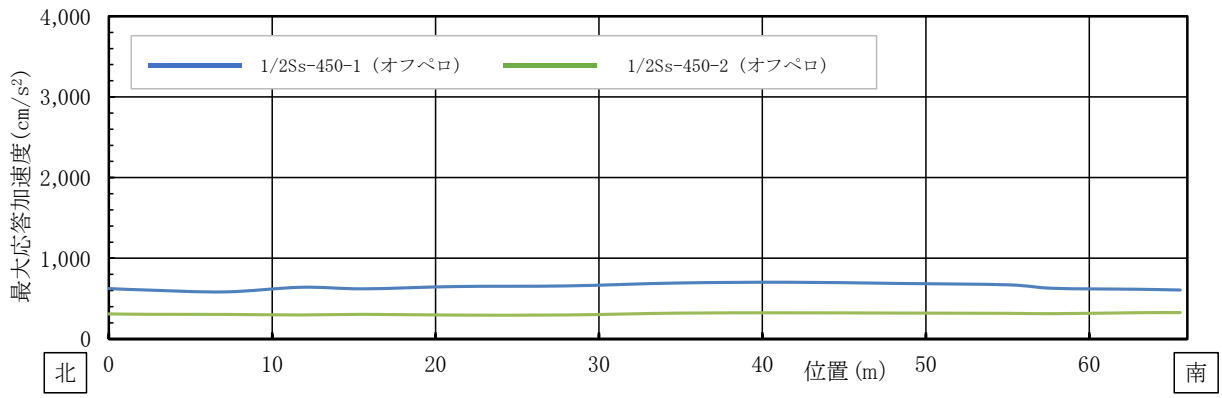


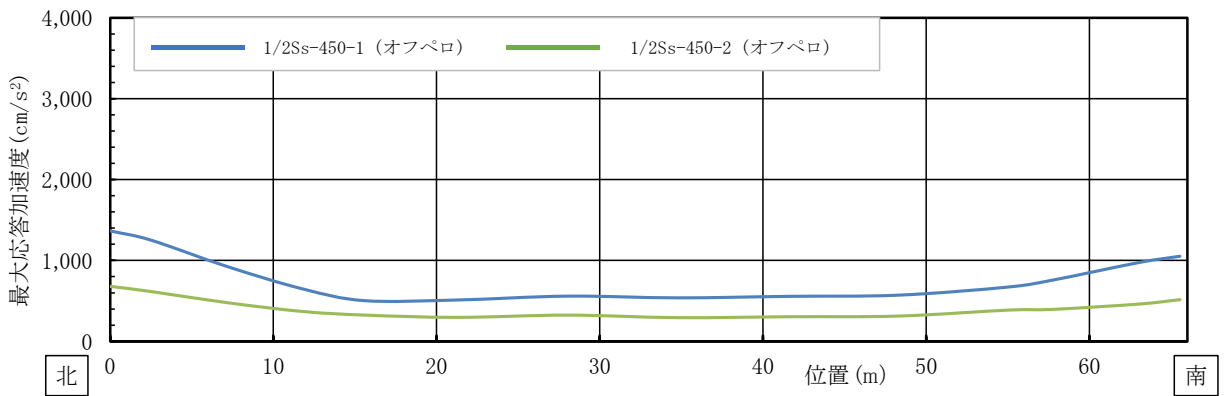
図 5.3.2-1(1) NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布(一般部)



(d) 水平(NS)成分 (オペフロレベル)

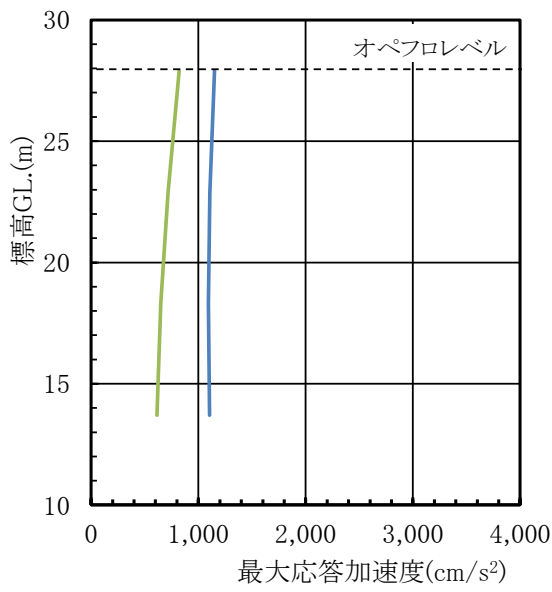
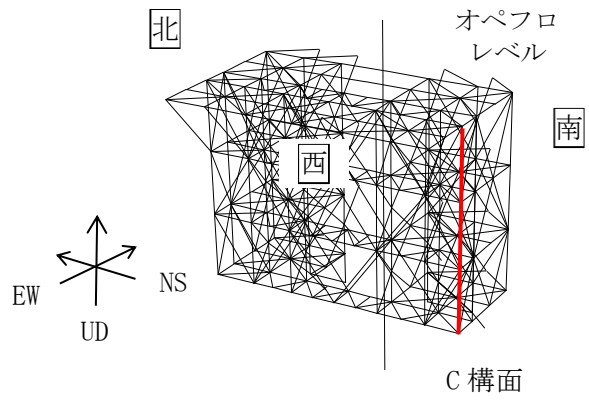


(e) 水平(EW)成分 (オペフロレベル)

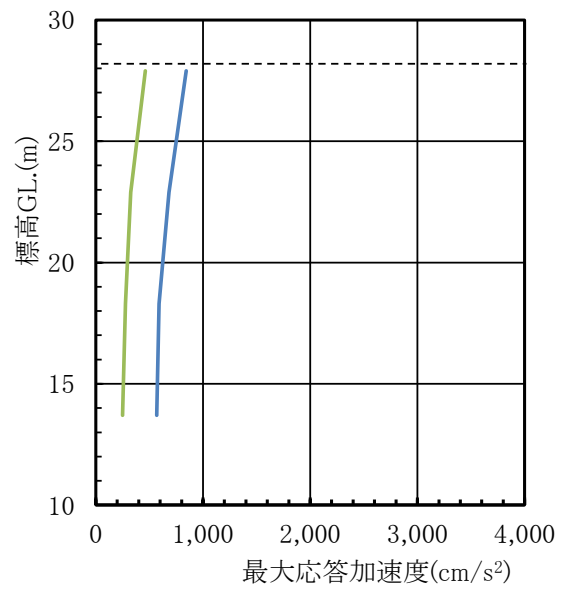


(f) 鉛直(UD)成分 (オペフロレベル)

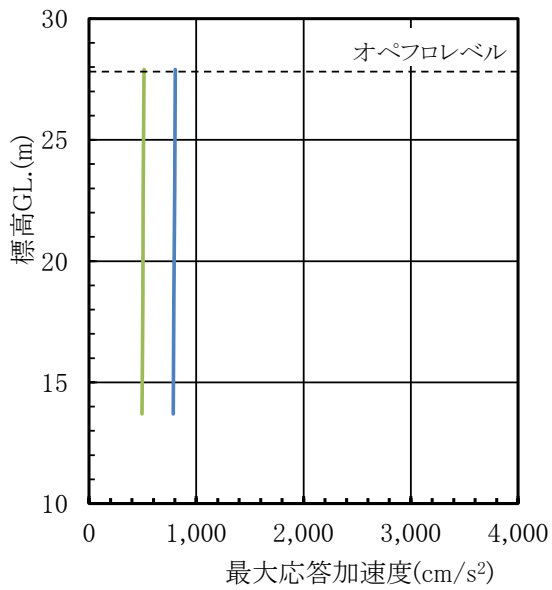
図 5.3.2-1(2) NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布(一般部)



(a) 水平(NS)成分 (C構面)



(b) 水平(EW)成分 (C構面)



(c) 鉛直(UD)成分 (C構面)

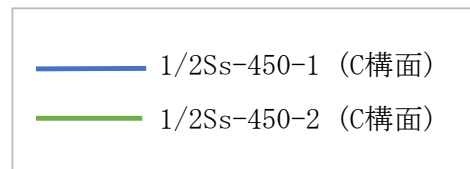
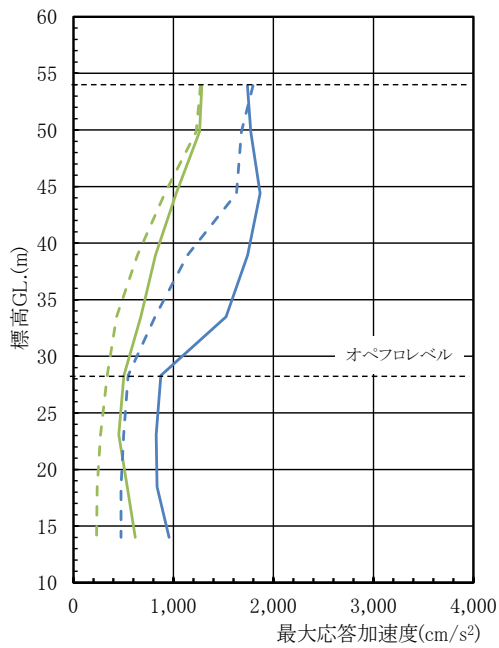
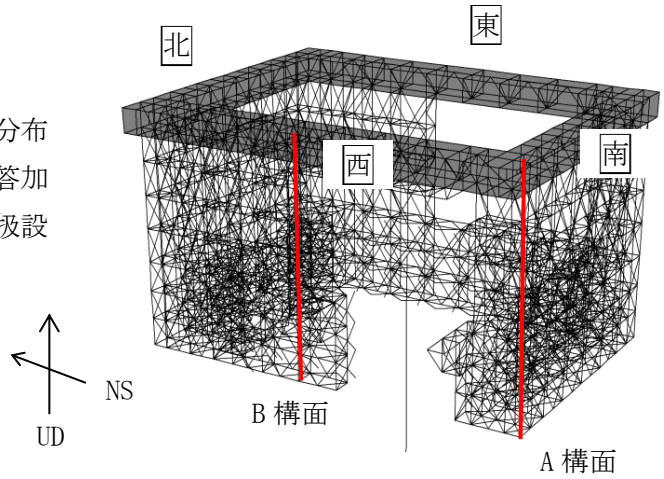


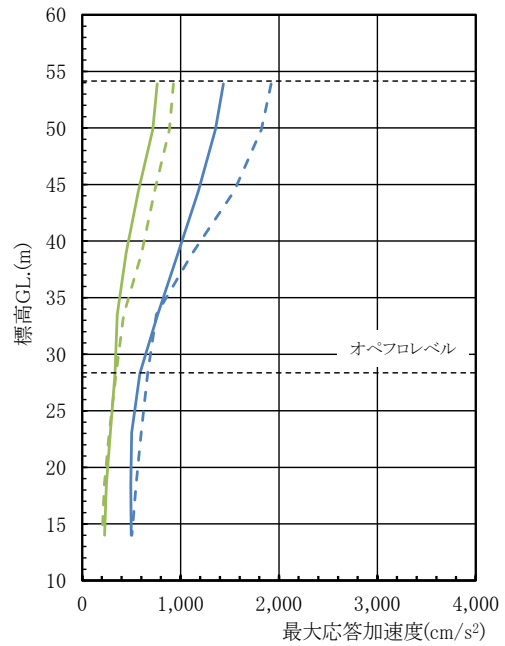
図 5.3.2-2 NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布(燃料取扱設備支持部)

2) 燃料取り出し時

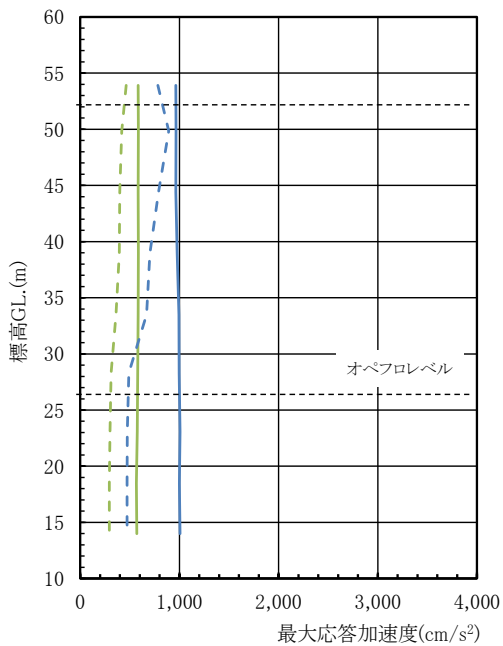
燃料取り出し時の一般部の最大応答加速度分布を図 5.3.2-3 に、燃料取扱設備支持部最大応答加速度分布を図 5.3.2-4 に示す。なお、燃料取扱設備位置は case4 とする。



(a) 水平(NS)成分 (A, B構面)



(b) 水平(EW)成分 (A, B構面)



(c) 鉛直(UD)成分 (A, B構面)

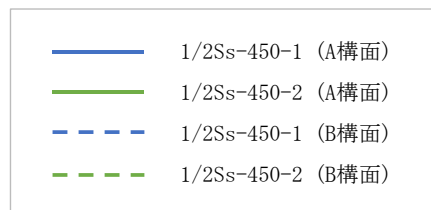
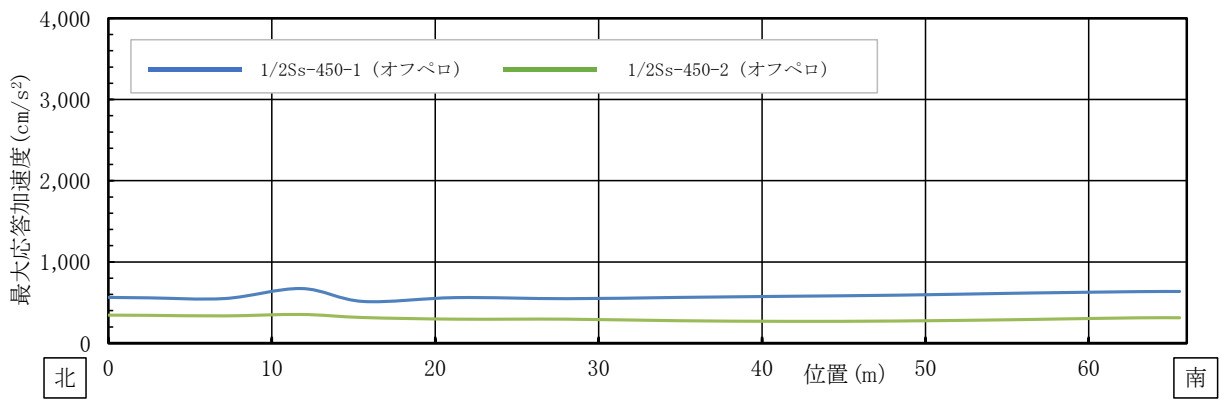
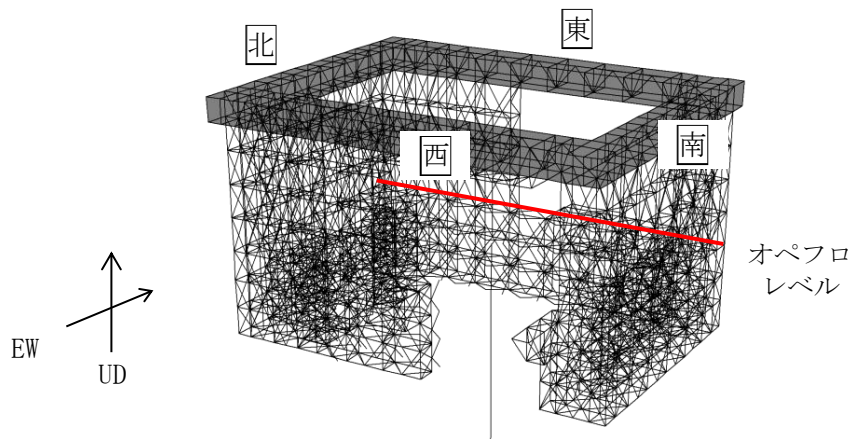
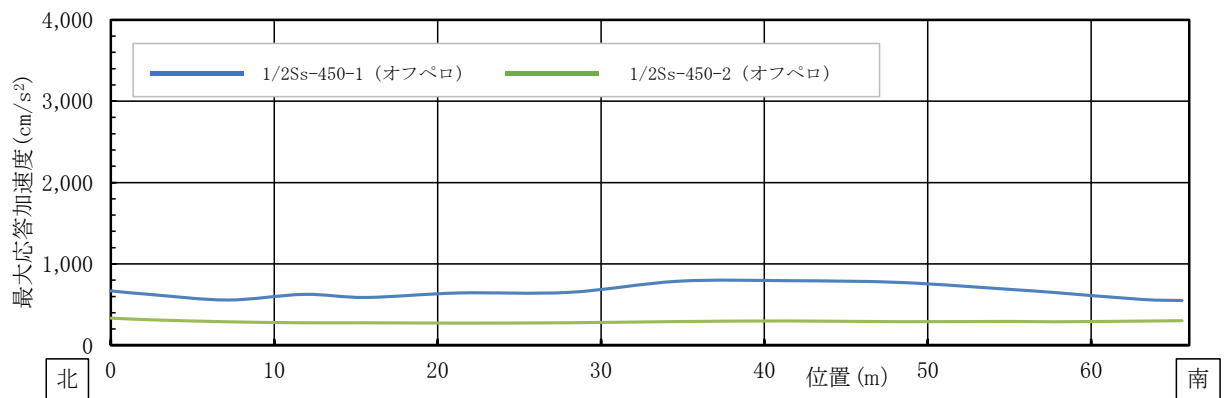


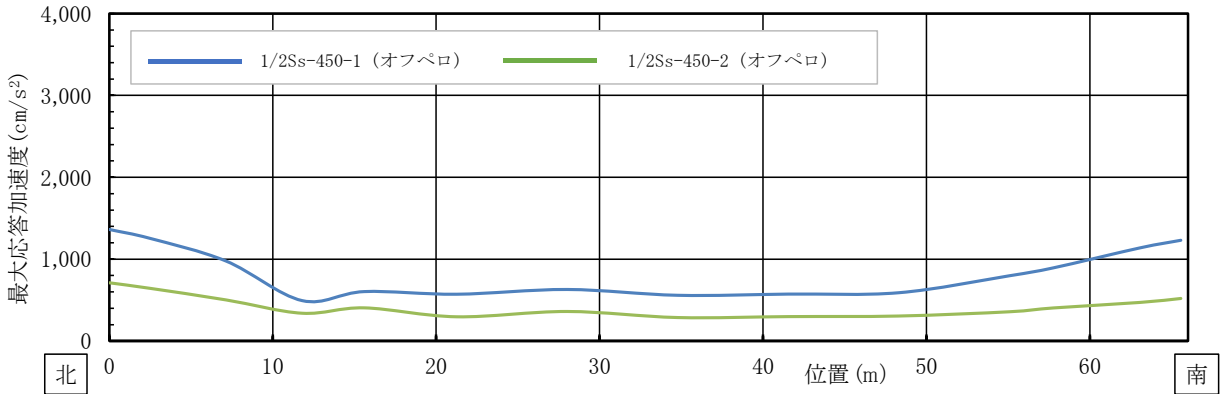
図 5.3.2-3(1) NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布(一般部)



(d) 水平(NS)成分 (オペフロレベル)



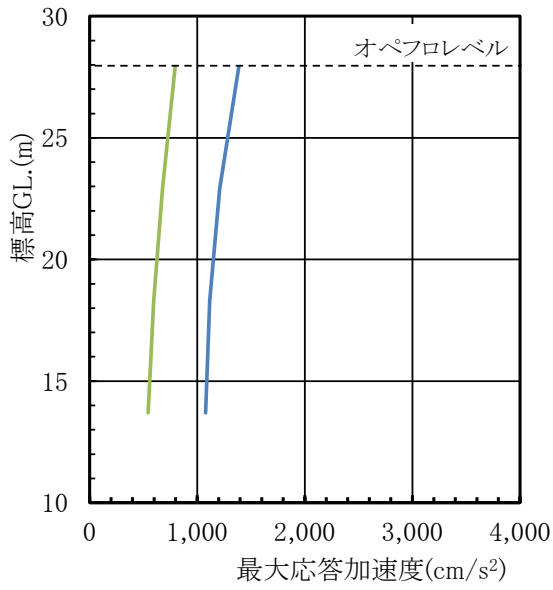
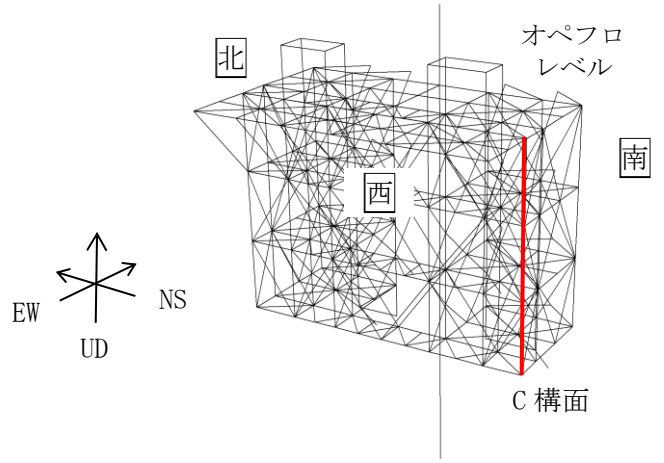
(e) 水平(EW)成分 (オペフロレベル)



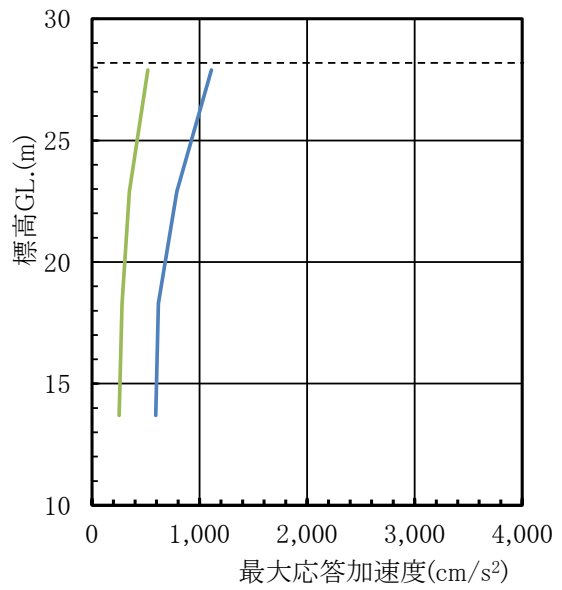
(f) 鉛直(UD)成分 (オペフロレベル)

図 5.3.2-3(2) NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布 (一般部)

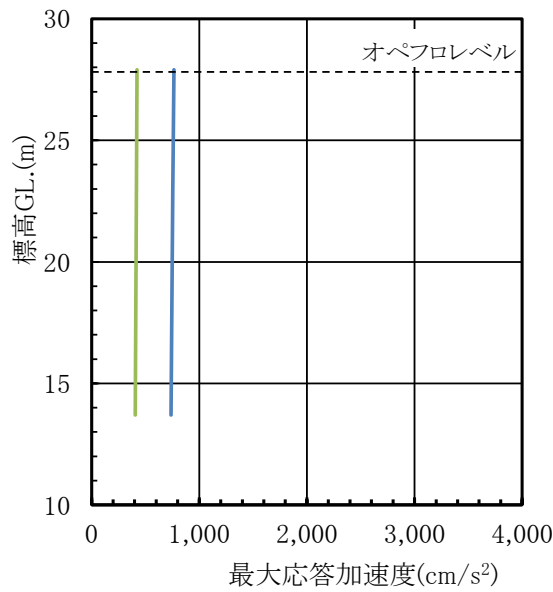




(a) 水平(NS)成分 (C構面)



(b) 水平(EW)成分 (C構面)



(c) 鉛直(UD)成分 (C構面)

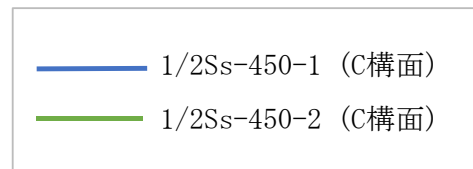


図 5.3.2-4 NS・EW・UD 方向 最大応答加速度分布(燃料取扱設備支持部)

## (2) 機能維持の検討

地震応答解析結果が、JSCA 性能設計説明書 2017 年版（社団法人日本建築構造技術者協会，2018 年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は 1/75 以下，層の塑性率は 4 以下，部材の塑性率は 5 以下」\*）を満足することを確認する。なお，大型カバーは立体架構による検討のため，JSCA 性能メニューのうち層の塑性率の評価を省略する。

また，主要架構（柱，梁）の解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター，平成 19 年 7 月 20 日）に示されるクライテリア（層間変形角は 1/100 以下，層の塑性率は 2 以下，部材の塑性率は 4 以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し，安全性を確認する。

\*：北村春幸，宮内洋二，浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」，日本建築学会構造系論文集，第 604 号，2006 年 6 月

### 1) 層間変形角の検討

#### a) ガレキ撤去時

最大応答層間変形角を表 5.3.2-1 に示す。

検討の結果，最大応答層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 5.3.2-1 一般部の最大応答層間変形角の検討結果

検討箇所	地震波 (位置) <sup>*1</sup>	方向	応答値	クライテリア	判定
南北側 G. L. +53.9(m) ～G. L. +28.3(m) h =25.6(m)	1/2Ss450-1 (case1)	NS	1/167	1/75	O. K.
東西側 G. L. +53.9(m) ～G. L. +28.3(m) h =25.6(m)	1/2Ss450-1 (case1)	EW	1/176	1/75	O. K.

\*1：図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

b) 燃料取り出し時

最大応答層間変形角を表 5.3.2-2 に示す。

検討の結果、最大応答層間変形角は 1/75 以下となりクライテリアを満足することを確認した。

表 5.3.2-2 一般部の最大応答層間変形角の検討結果

検討箇所	地震波 (位置)*1	方向	応答値	クライテリア	判定
南北側 G. L. +53.9 (m) ~G. L. +28.3 (m) h=25.6 (m)	1/2Ss450-1 (case4)	NS	1/160	1/75	O. K.
東西側 G. L. +53.9 (m) ~G. L. +28.3 (m) h=25.6 (m)	1/2Ss450-1 (case4)	EW	1/163	1/75	O. K.

\*1 : 図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

2) 断面検討

部材の応答結果が塑性化する箇所があるため、断面検討結果は応力度比または塑性率で示す。

部材の応力度比は、軸力と各許容応力度との比で表される。部材の塑性率は、引張及び圧縮に対して最大軸力時のひずみを引張耐力又は座屈耐力時のひずみで除した値で表される。表 5.3.2-3 及び 5.3.2-4 に断面検討結果を示す。なお、各許容応力度、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度は「平成 12 年建設省告示第 2464 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

a) ガレキ撤去時

表 5.3.2-3 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。断面検討の結果、全ての部材の応力度比が 1 以下または、塑性率が 5 以下になることを確認した。

表 5.3.2-3(1) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，応力度比）上部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	柱	H-428×407×20×35	1/2Ss450-1 (case1)	-NS-EW-UD	$\sigma_c$	286.2	$f_c$	344.0	0.84	O. K.
②	梁	B[-300×220×16×25	1/2Ss450-1 (case1)	-NS-EW+UD	$\sigma_c$	175.1	$f_c$	322.9	0.55	O. K.
③	ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	1/2Ss450-1 (case1)	-NS+EW+UD	$\sigma_c$	251.3	$f_c$	337.2	0.75	O. K.
④	鋼板	PL-16 〈SN400B〉	1/2Ss450-1 (case1)	+NS+EW+UD	$\sigma_x$	45.9	$f_t$	258.0	0.63	O. K.
					$\sigma_y$	15.0				
					$\tau_{xy}$	90.7				

表 5.3.2-3(2) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，塑性率）上部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	塑性率	判定
⑤	鉛直ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	2.15	O. K.

表 5.3.2-3(3) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，応力度比）下部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑥	柱	H-400×400×13×21	1/2Ss450-1 (case1)	-NS+EW-UD	$\sigma_c$	273.6	$f_c$	320.4	0.86	O. K.
⑦	梁	H-588×300×12×20	1/2Ss450-1 (case1)	+NS+EW+UD	$\sigma_t$	235.8	$f_t$	357.5	0.66	O. K.

表 5.3.2-3(4) 断面検討結果 (一般部, 1/2Ss450 地震時, 塑性率) 下部架構

部位*1	部材形状 (mm) <使用材料*2>	地震波 (位置)*3	入力 方向	塑性率	判定
⑧	鉛直ブレース $\phi$ -267.4×6.6	1/2Ss450-1 (case1)	+NS+EW-UD	2.42	0. K.
⑨	接続部水平ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	2.82	0. K.
⑩	接続部鉛直ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case1)	+NS+EW+UD	1.96	0. K.

表 5.3.2-3(5) 断面検討結果 (燃料取扱設備支持部, 1/2Ss450 地震時, 応力度比)

部位*1	部材形状 (mm) <使用材料*2>	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑪	柱 H-400×400×13×21	1/2Ss450-1 (case1)	-NS-EW+UD	$\sigma_c$	37.9	$f_c$	326.1	0.12	0. K.
⑫	梁 H-350×350×12×19	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	$\sigma_t$	77.5	$f_t$	357.5	0.22	0. K.
⑬	水平 ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	$\sigma_t$	167.1	$f_t$	357.5	0.47	0. K.
⑭	鉛直 ブレース $\phi$ -355.6×7.9	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	$\sigma_c$	144.2	$f_c$	349.6	0.42	0. K.

\*1: ①~⑭の符号は図 5.3.2-5 の応力検討箇所を示す

\*2: 特記なき限り, 各部材の使用材料は, 鋼管: STKN490B, その他は SN490B

\*3: 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

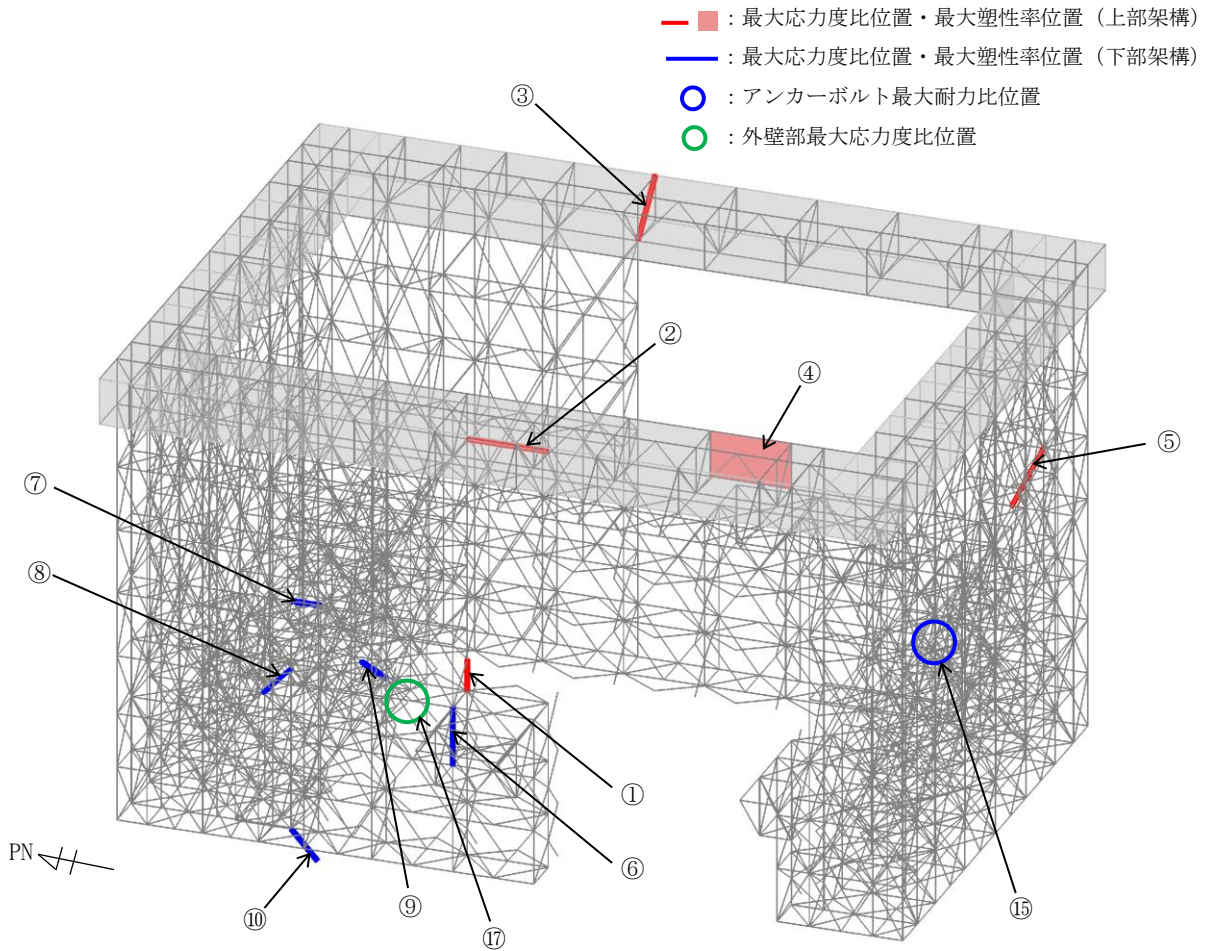


図 5.3.2-5(1) 最大応力度比位置図(一般部, 1/2Ss450 地震時)

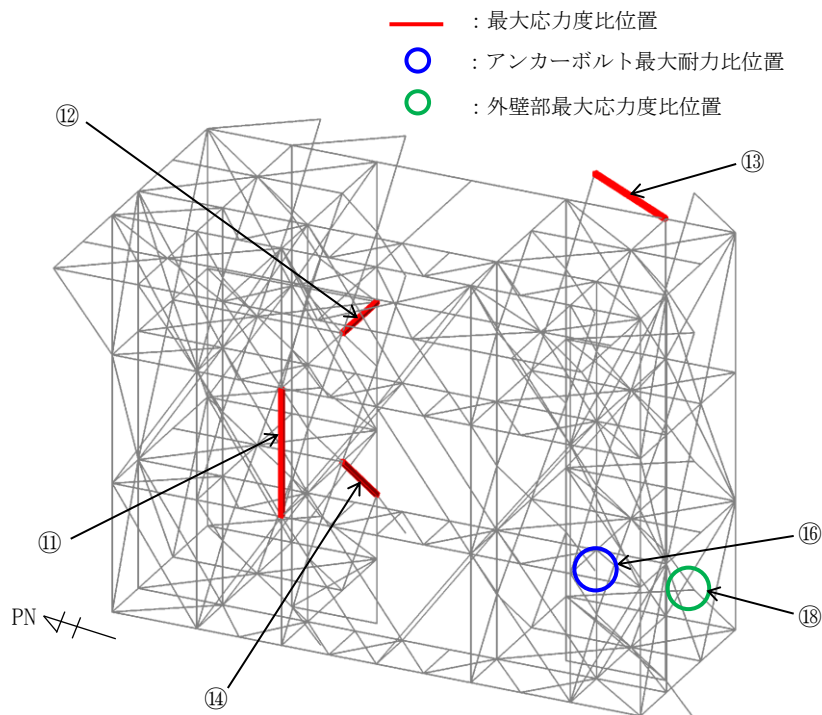


図 5.3.2-5(2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 1/2Ss450 地震時)

b) 燃料取り出し時

表 5.3.2-4 に応力度比が最大となる部位の断面検討結果を示す。断面検討の結果、全ての部材の応力度比が 1 以下又は、塑性率が 5 以下になることを確認した。

表 5.3.2-4(1) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，応力度比）上部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
①	柱	H-428×407×20×35	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	$\sigma_c$	281.2	$f_c$	344.0	0.82	O. K.
②	梁	B[-300×220×16×25	1/2Ss450-1 (case4)	-NS+EW-UD	$\sigma_c$	142.2	$f_c$	322.9	0.45	O. K.
③	ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	1/2Ss450-1 (case4)	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	271.3	$f_c$	337.2	0.81	O. K.
④	鋼板	PL-16 〈SN400B〉	1/2Ss450-1 (case4)	+NS+EW-UD	$\sigma_x$	88.4	$f_t$	258.0	0.58	O. K.
					$\sigma_y$	56.9				
					$\tau_{xy}$	72.4				

表 5.3.2-4(2) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，塑性率）上部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	塑性率	判定
⑤	鉛直ブレース	$\phi$ -267.4×6.6	1/2Ss450-1 (case4)	+NS-EW-UD	2.23	O. K.

表 5.3.2-4(3) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，応力度比）下部架構

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑥	柱	H-400×400×13×21	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW-UD	$\sigma_c$	309.6	$f_c$	345.1	0.90	O. K.
⑦	梁	H-588×300×12×20	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	$\sigma_t$	238.9	$f_t$	357.5	0.67	O. K.

表 5.3.2-4(4) 断面検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時，塑性率）下部架構

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	塑性率	判定
⑧	鉛直ブレース φ -267.4×6.6	1/2Ss450-1 (case4)	+NS+EW+UD	2.86	O. K.
⑨	接続部水平ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case4)	+NS-EW-UD	3.20	O. K.
⑩	接続部鉛直ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW-UD	2.20	O. K.

表 5.3.2-4(5) 断面検討結果（燃料取扱設備支持部，1/2Ss450 地震時，応力度比）

部位*1	部材形状 (mm) 〈使用材料*2〉	地震波 (位置)*3	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
⑪	柱 H-400×400×13×21	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	$\sigma_c$	70.4	$f_c$	326.1	0.22	O. K.
⑫	梁 H-350×350×12×19	1/2Ss450-1 (case4)	+NS-EW+UD	$\sigma_t$	116.3	$f_t$	357.5	0.33	O. K.
⑬	水平 ブレース 十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	1/2Ss450-1 (case4)	+NS-EW-UD	$\sigma_t$	199.0	$f_t$	357.5	0.56	O. K.
⑭	鉛直 ブレース φ -355.6×7.9	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	$\sigma_c$	222.0	$f_c$	349.6	0.64	O. K.

\*1：①～⑭の符号は図 5.3.2-6 の応力検討箇所を示す

\*2：特記なき限り，各部材の使用材料は，鋼管：STKN490B，その他は SN490B

\*3：図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す



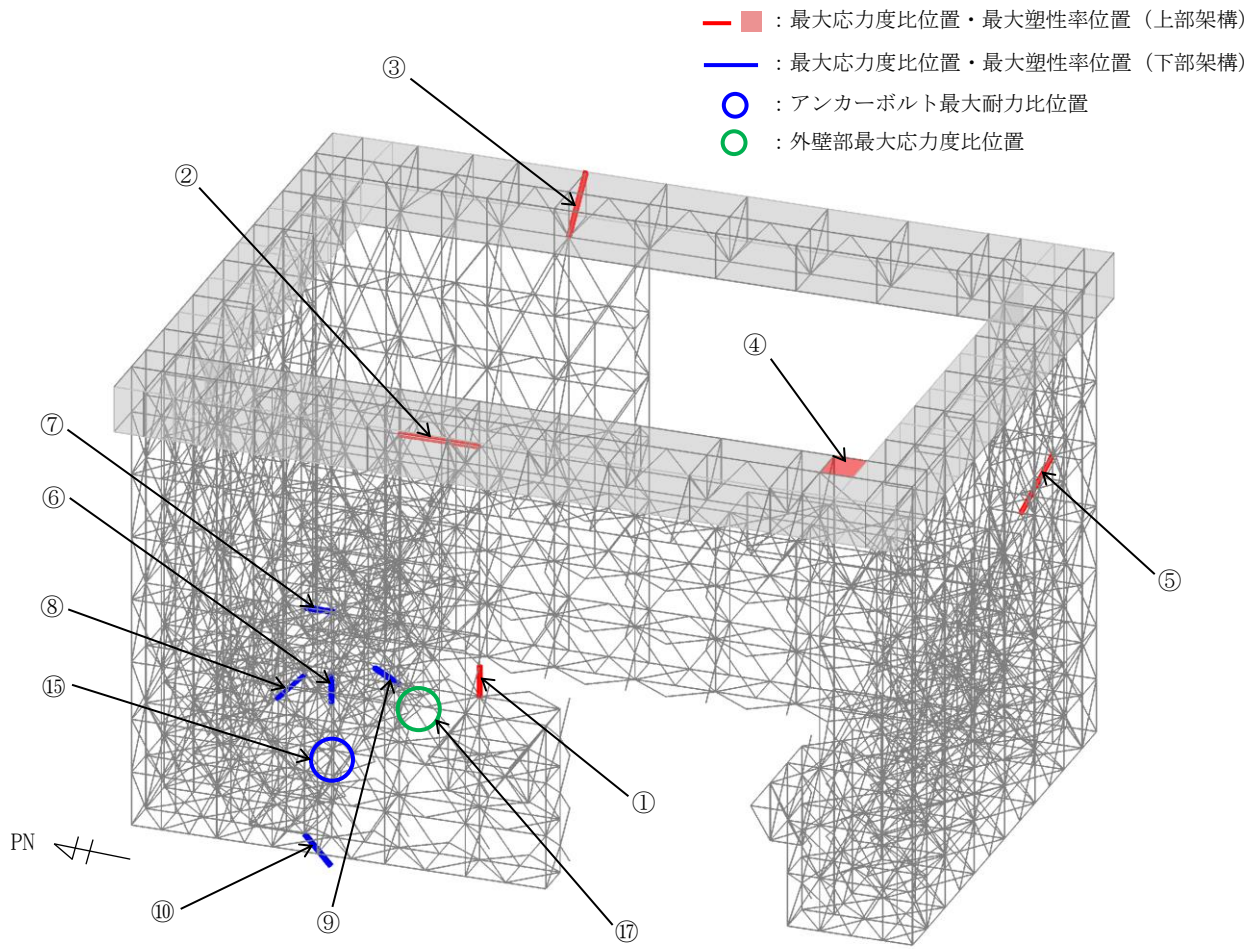


図 5.3.2-6(1) 最大応力度比位置図(一般部, 1/2Ss450 地震時)

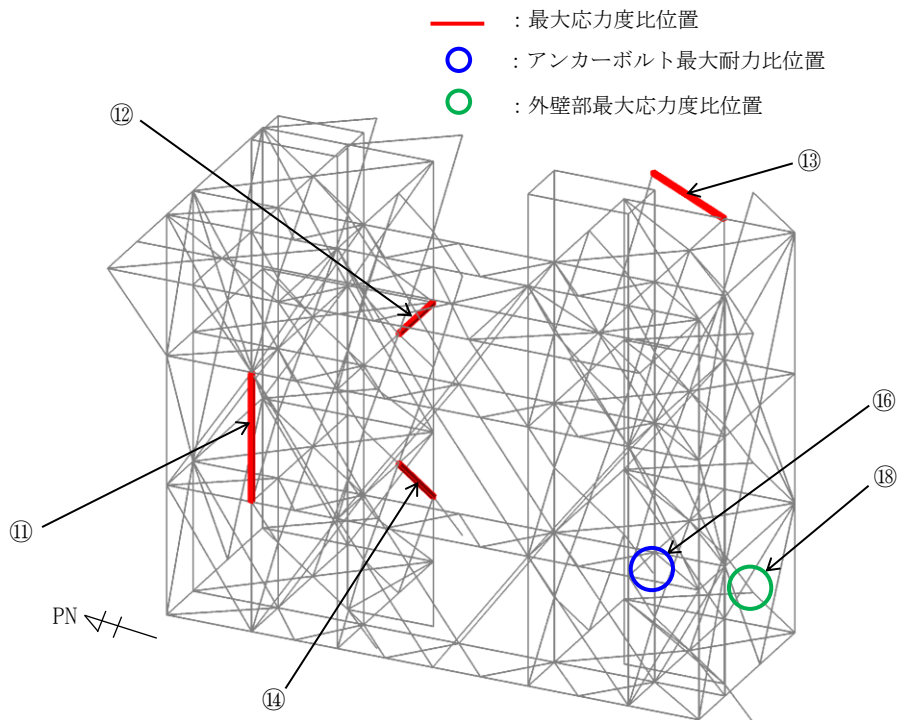


図 5.3.2-6(2) 最大応力度比位置図(燃料取扱設備支持部, 1/2Ss450 地震時)

### 5.3.3 屋根の耐震性に対する検討

#### (1) 断面検討

部材の塑性率は、引張及び圧縮に対して最大軸力時のひずみを引張耐力または座屈耐力時のひずみで除した値で表される。表 5.3.3-1 及び表 5.3.3-2 に断面検討結果を示す。なお、各許容応力度、引張耐力及び座屈耐力算定時の材料強度は「平成 12 年建設省告示第 2464 号」に定められた基準強度 F 値の 1.1 倍を用いる。

1) ガレキ撤去時

表 5.3.3-1 に塑性率が最大となる部位の断面検討結果を示す。断面検討の結果、全ての部材の塑性率が 5 以下になることを確認した。

表 5.3.3-1 断面検討結果（屋根部，1/2Ss450 地震時）

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	地震波 (位置) *2	塑性率	判定
①	弦材	P-190.7 φ × 5.3t 〈STK490〉	1/2Ss450-1 (case1)	0.62	0. K.
②	斜材	P-89.1 φ × 3.2t 〈STK400〉	1/2Ss450-1 (case1)	4.22	0. K.
③	ブレース	1-M16 〈SNR400B〉	1/2Ss450-1 (case1)	2.61	0. K.

\*1 : ①～③の符号は図 5.3.3-1 の応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

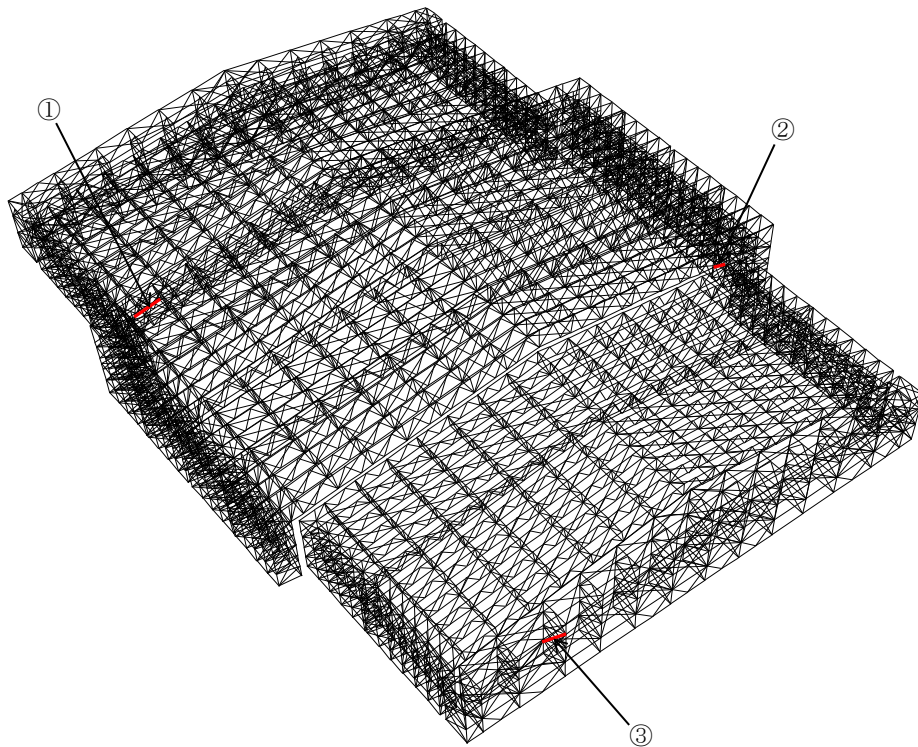


図 5.3.3-1 最大塑性率位置図

2) 燃料取り出し時

表 5. 3. 3-2 に塑性率が最大となる部位の断面検討結果を示す。断面検討の結果、全ての部材の塑性率が 5 以下になることを確認した。

表 5. 3. 3-2 断面検討結果 (屋根部, 1/2Ss450 地震時)

部位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	地震波 (位置) *2	塑性率	判定
①	弦材	P-190.7 φ × 5.3t 〈STK490〉	1/2Ss450-1 (case4)	0.60	0. K.
②	斜材	P-89.1 φ × 3.2t 〈STK400〉	1/2Ss450-1 (case4)	4.47	0. K.
③	ブレース	1-M16 〈SNR400B〉	1/2Ss450-1 (case4)	2.59	0. K.

\*1 : ①～③の符号は図 5. 3. 3-2 の応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5. 2. 1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

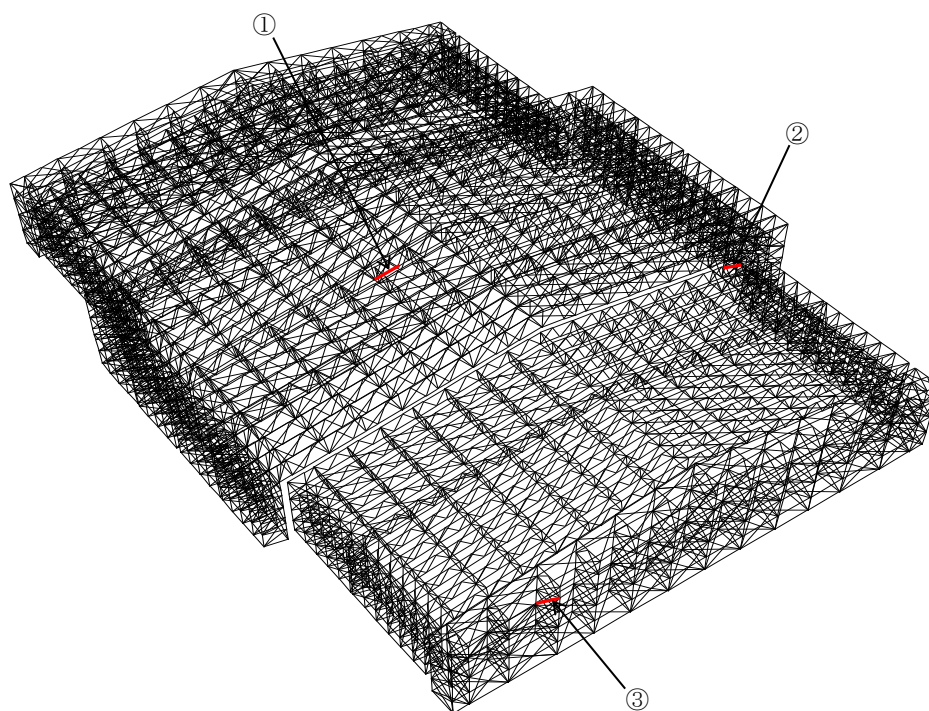


図 5. 3. 3-2 最大塑性率位置図

### 5.3.4 建屋取り合い部の耐震性に対する検討

#### (1) アンカーボルトの検討（引抜き、せん断）

大型カバーはアンカーボルトにより原子炉建屋外壁に取り付く。アンカーボルトの仕様は、M33（SNR490B）の接着系アンカーボルトとし、終局耐力は「あと施工アンカー施工指針（案）（一般社団法人日本建築あと施工アンカー協会）」に従い、原子炉建屋の設計基準強度を用いて下式によって求める。表 5.3.4-1 にアンカーボルトの終局耐力を示す。

$$p_u = \min(p_{u1}, p_{u2}, p_{u3})$$

$$q_u = \min(q_{u1}, q_{u2})$$

$p_u$  : 接着系アンカーボルトの終局引張力 (kN/本)

$p_{u1}$  : アンカーボルトの降伏により決まる終局引張力 (kN/本)

$p_{u2}$  : 躯体のコーン状破壊により決まる終局引張力 (kN/本)

$p_{u3}$  : 付着力により決まる終局引張力 (kN/本)

$q_u$  : 接着系アンカーボルトの終局せん断力 (kN/本)

$q_{u1}$  : アンカーボルトのせん断強度により決まる終局せん断力 (kN/本)

$q_{u2}$  : 躯体の支圧強度により決まる終局せん断力 (kN/本)

表 5.3.4-1 接着系アンカーボルトの終局耐力

部位	一般部	燃料取扱設備 支持部
		GL+13.7
タイプ	標準	標準
鋼材種類	M33	M33
	SNR490B	SNR490B
埋め込み長さ (mm)	345	345
アンカーボルト間隔 (mm)	400	400
終局	許容引張力( $p_u$ ) (kN/本)	234
	許容せん断力( $q_u$ ) (kN/本)	193

アンカーボルトの検討は、建屋取り合い部に生じる最大支点反力に対し、下式にて検討を行う。

$$\frac{P}{P_u} \leq 1$$

$$\frac{Q}{Q_u} \leq 1$$

$$\left(\frac{P}{P_u}\right)^2 + \left(\frac{Q}{Q_u}\right)^2 \leq 1$$

$P_u$  : アンカーボルトの終局引張耐力 (kN)

$Q_u$  : アンカーボルトの終局せん断耐力 (kN)

$P$  : アンカーボルトの引張力 (kN)

$Q$  : アンカーボルトのせん断力 (kN)

1) ガレキ撤去時

表 5.3.4-2 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、アンカーボルトの最大耐力比は 1 以下になることを確認した。

表 5.3.4-2(1) アンカーボルトの検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時）

部位*1 (アンカー本数)	地震波 (位置)*2	入力 方向	作用応力		終局耐力		耐力比	判定
			引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	引張 耐力 Pu (kN)	せん断 耐力 Qu (kN)		
⑮ アンカー ボルト (34)	1/2Ss450-1 (case1)	-NS+EW+UD	565	5056	7956	6562	0.78	O. K.

表 5.3.4-2(2) アンカーボルトの検討結果（燃料取扱設備支持部，1/2Ss450 地震時）

部位*1 (アンカー本数)	地震波 (位置)*2	入力 方向	作用応力		終局耐力		耐力比	判定
			引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	引張 耐力 Pu (kN)	せん断 耐力 Qu (kN)		
⑯ アンカー ボルト (12)	1/2Ss450-1 (case1)	-NS-EW-UD	354	1191	3816	2316	0.52	O. K.

\*1：図 5.3.2-5 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

2) 燃料取り出し時

表 5.3.4-3 に耐力比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、アンカーボルトの最大耐力比は 1 以下になることを確認した。

表 5.3.4-3(1) アンカーボルトの検討結果 (一般部, 1/2Ss450 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	地震波 (位置)*2	入力 方向	作用応力		終局耐力		耐力比	判定
			引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	引張 耐力 Pu (kN)	せん断 耐力 Qu (kN)		
⑮ アンカー ボルト (32)	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW-UD	604	5145	7488	6176	0.84	O. K.

表 5.3.4-3(2) アンカーボルトの検討結果 (燃料取扱設備支持部, 1/2Ss450 地震時)

部位*1 (アンカー本数)	地震波 (位置)*2	入力 方向	作用応力		終局耐力		耐力比	判定
			引張力 P (kN)	せん断力 Q (kN)	引張 耐力 Pu (kN)	せん断 耐力 Qu (kN)		
⑯ アンカー ボルト (12)	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	527	1635	3816	2316	0.71	O. K.

\*1 : 図 5.3.2-6 に応力検討箇所を示す

\*2 : 図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す



(2) 原子炉建屋外壁部の検討

「5.2.4(2) 原子炉建屋外壁部の検討」と同様に、壁面の圧縮応力度が許容応力度以下となることを確認する。

1) ガレキ撤去時

表 5.3.4-4 に応力度比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、原子炉建屋外壁部の最大応力度比は 1 以下になることを確認した。

表 5.3.4-4(1) 外壁部の検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時）

部位 <sup>*1</sup>		地震波 (位置) <sup>*2</sup>	入力 方向	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比	判定
⑰	外壁	1/2Ss450-1 (case1)	+NS-EW-UD	1.0	22.1	0.05	0. K.

表 5.3.4-4(2) 外壁部の検討結果（燃料取扱設備支持部，1/2Ss450 地震時）

部位 <sup>*1</sup>		地震波 (位置) <sup>*2</sup>	入力 方向	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比	判定
⑱	外壁	1/2Ss450-1 (case1)	-NS+EW+UD	0.6	22.1	0.03	0. K.

\*1：図 5.3.2-5 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5.2.1-3 にガレキ撤去用天井クレーンの位置を示す

2) 燃料取り出し時

表 5.3.4-5 に応力度比が最大となる部位の検討結果を示す。

検討の結果、原子炉建屋外壁部の最大応力度比は 1 以下になることを確認した。

表 5.3.4-5(1) 外壁部の検討結果（一般部，1/2Ss450 地震時）

部位 <sup>*1</sup>		地震波 (位置) <sup>*2</sup>	入力 方向	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比	判定
⑰	外壁	1/2Ss450-1 (case4)	+NS-EW+UD	1.1	22.1	0.05	0. K.

表 5.3.4-5(2) 外壁部の検討結果（燃料取扱設備支持部，1/2Ss450 地震時）

部位 <sup>*1</sup>		地震波 (位置) <sup>*2</sup>	入力 方向	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力 度比	判定
⑱	外壁	1/2Ss450-1 (case4)	-NS-EW+UD	1.0	22.1	0.05	0. K.

\*1：図 5.3.2-6 に応力検討箇所を示す

\*2：図 5.2.1-4 に燃料取扱設備の位置を示す

### 5.3.5 原子炉建屋の耐震性に対する検討

#### (1) 検討方針

大型カバーの設置に伴う原子炉建屋の耐震性の評価は、燃料取扱設備の間接支持機能維持の観点から、地震応答解析により得られる耐震壁のせん断ひずみが鉄筋コンクリート造耐震壁の許容限界に対応した評価基準値 ( $2.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。また、最大接地圧が地盤の許容限界を超えないことを確認する。

#### (2) 原子炉建屋の地震応答解析

##### 1) 解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「5.3.1 検討方針」で示した 1/2Ss450 とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図は図 5.3.1-1 と同様である。

##### 2) 地震応答解析モデル

原子炉建屋の地震応答解析モデルは、図 5.3.5-1 に示すように質点系でモデル化し、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。

地震応答解析モデルの諸元は、「II.2.6 滞留水を貯留している（滞留している場合を含む）建屋 添付資料-2 構造強度及び耐震性（地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全評価）」に示される内容に、ガレキ撤去等による重量増減及び新規に設置する大型カバー、燃料取扱設備等の重量を考慮した。地震応答解析モデルの諸元の質点重量および回転慣性重量を表 5.3.5-1 に示す。

地盤定数は、「5.3.1 検討方針」で示した地盤定数と同一である。

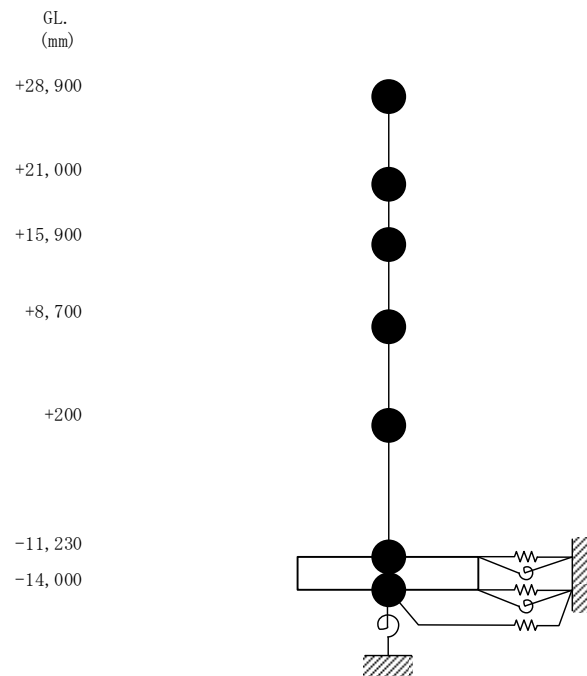


図 5.3.5-1 原子炉建屋の地震応答解析モデル

表 5. 3. 5-1(1) 原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元（水平方向，ガレキ撤去時）

G. L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G$ ( $\times 10^5$ kN $\cdot$ m $^2$ )	
		水平(NS)方向	水平(EW方向)
+28.90	113830	163.75	93.73
+21.00	81500	117.34	67.09
+15.90	90680	130.48	74.63
+8.70	87510	125.98	125.98
+0.20	162800	234.31	234.31
-11.23	185210	266.64	327.39
-14.00	62400	89.83	110.32
合計	783930		

表 5. 3. 5-1(2) 原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元（水平方向，燃料取り出し時）

G. L. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_G$ ( $\times 10^5$ kN $\cdot$ m $^2$ )	
		水平(NS)方向	水平(EW方向)
+28.90	161390	232.17	132.90
+21.00	81500	117.34	67.09
+15.90	90670	130.46	74.62
+8.70	88080	126.80	126.80
+0.20	163140	234.80	234.80
-11.23	185210	266.64	327.39
-14.00	62400	89.83	110.32
合計	832390		

### (3) 検討結果

1/2Ss450 に対する最大応答値を、「JEAG4601-1991」に基づき設定した耐震壁のせん断スケルトン曲線上にプロットした結果を、図 5.3.5-2 及び図 5.3.5-3 に示す。

検討の結果、地震応答解析により得られる最大応答値は、評価基準値 ( $2.0 \times 10^{-3}$ ) 以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

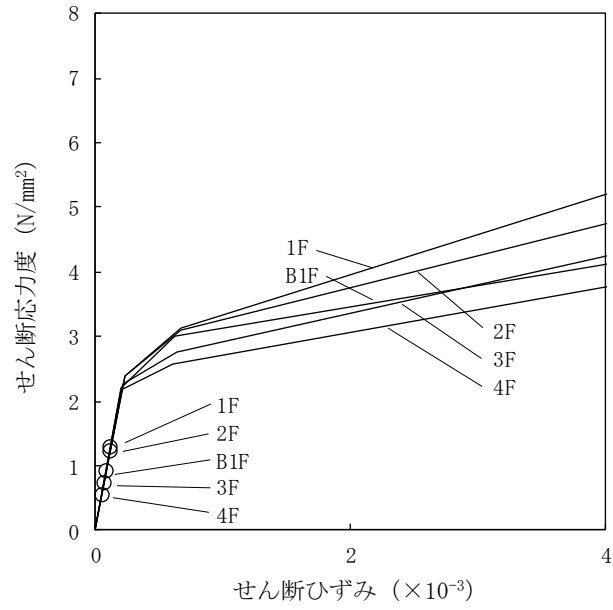
また、1/2Ss450 に対する最大接地圧を、表 5.3.5-2 に示す。最大接地圧は、地盤の極限支持力度 ( $9800\text{kN/m}^2$ ) を超えないことを確認した。

表 5.3.5-2(1) 1/2Ss450 に対する最大接地圧 (ガレキ撤去時)

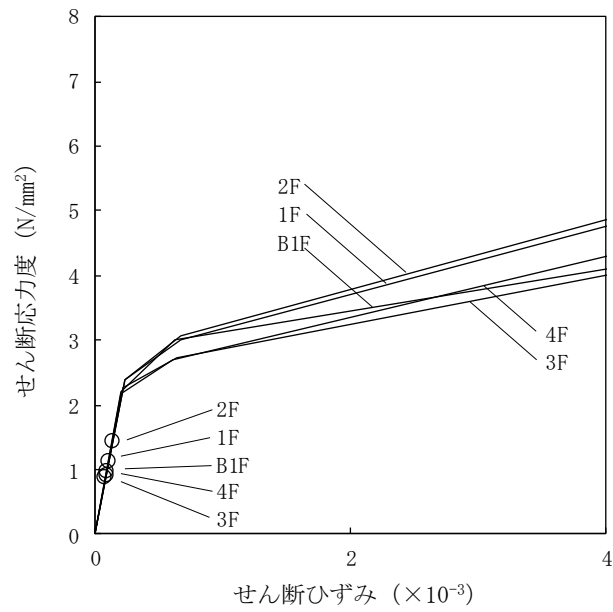
	NS 方向	EW 方向
地震波	1/2Ss450-1	1/2Ss450-1
鉛直力N ( $\times 10^5\text{kN}$ )	9.1	9.1
転倒モーメントM ( $\times 10^6\text{kN}\cdot\text{m}$ )	8.0	9.1
最大接地圧 ( $\text{kN/m}^2$ )	1210	1310

表 5.3.5-2(2) 1/2Ss450 に対する最大接地圧 (燃料取り出し時)

	NS 方向	EW 方向
地震波	1/2Ss450-1	1/2Ss450-1
鉛直力N ( $\times 10^5\text{kN}$ )	9.7	9.7
転倒モーメントM ( $\times 10^6\text{kN}\cdot\text{m}$ )	9.2	10.0
最大接地圧 ( $\text{kN/m}^2$ )	1380	1440

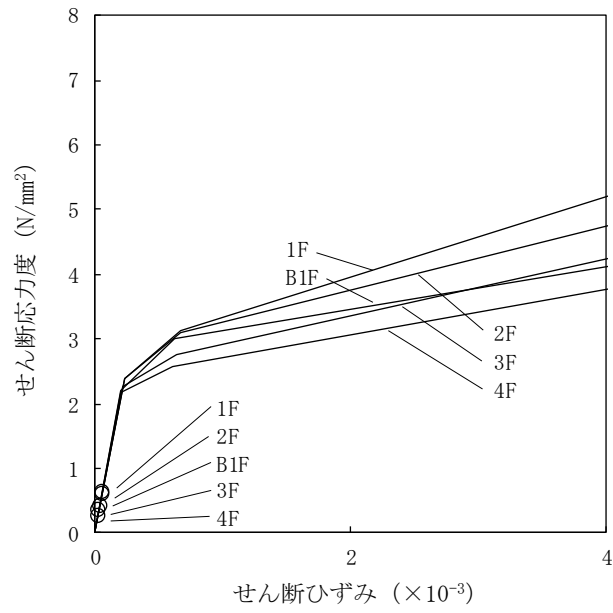


(a) NS 方向

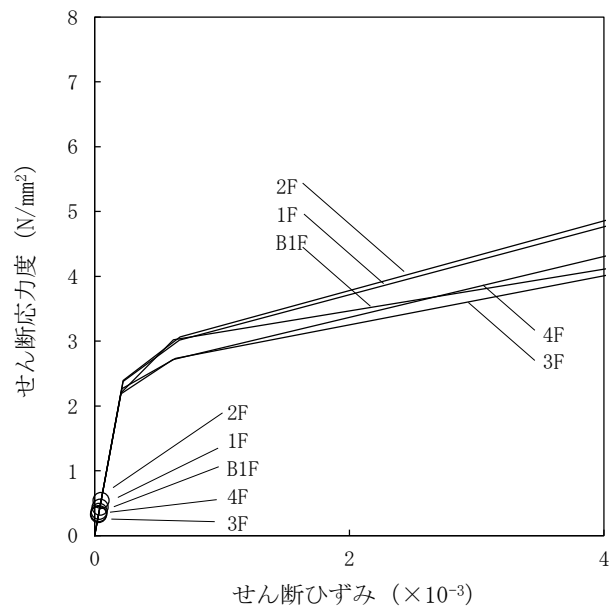


(b) EW 方向

図 5.3.5-2(1) せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (1/2Ss450-1) (ガレキ撤去時)

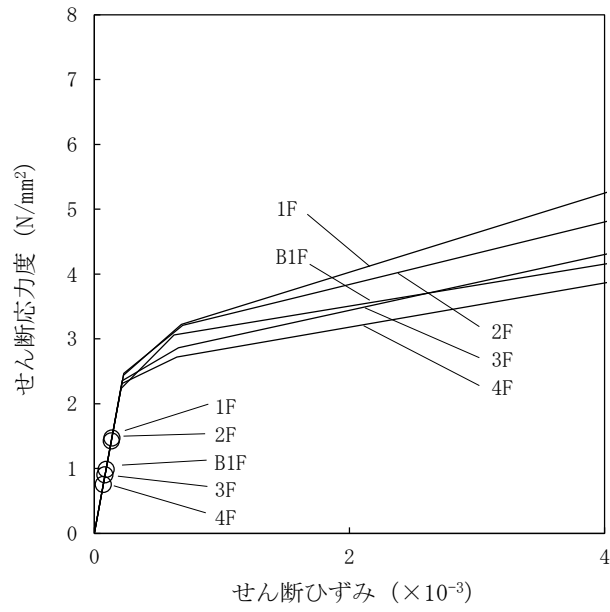


(a) NS 方向

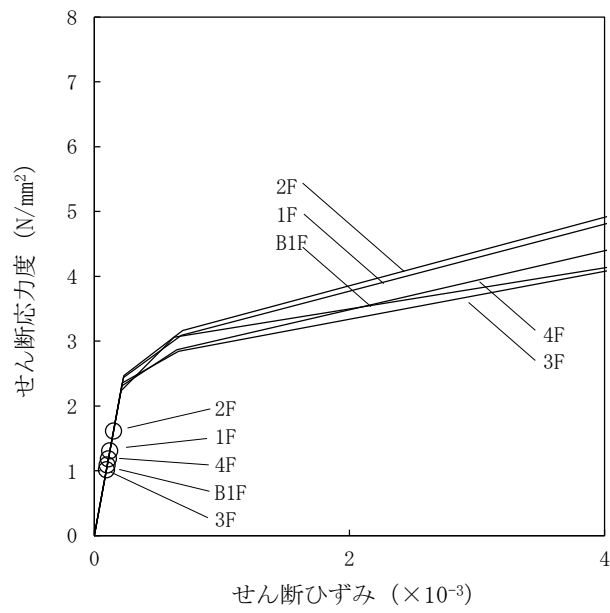


(b) EW 方向

図 5.3.5-2(2) せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (1/2Ss450-2) (ガレキ撤去時)



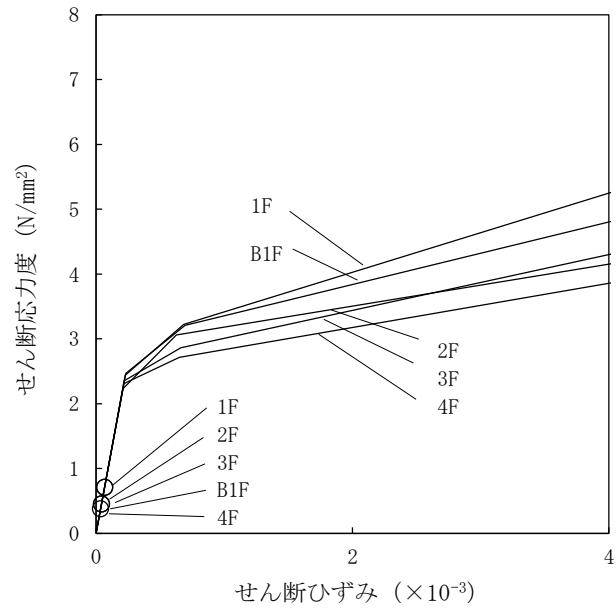
(a) NS 方向



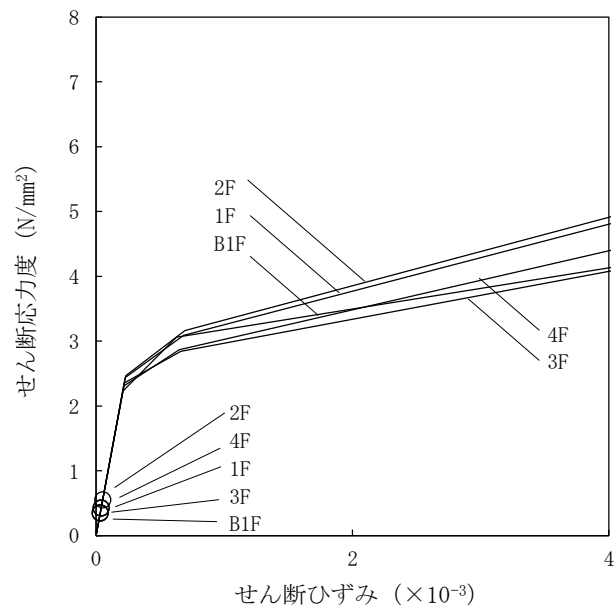
(b) EW 方向

図 5.3.5-3(1) せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (1/2Ss450-1) (燃料取り出し時)





(a) NS 方向



(b) EW 方向

図 5.3.5-3(2) せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (1/2Ss450-2) (燃料取り出し時)

## 5.4 耐震性（波及的影響の検討）

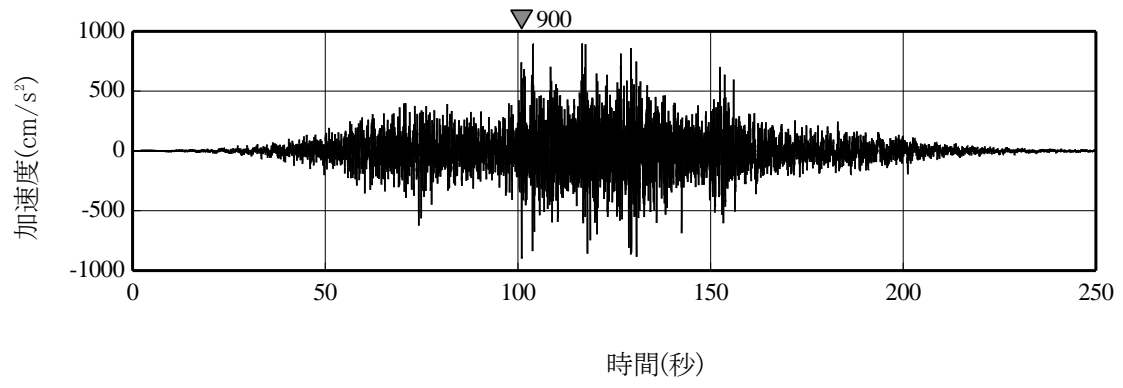
### 5.4.1 検討方針

耐震性のうち波及的影響の検討は、大型カバー、屋根、建屋取り合い部、ガレキ撤去用天井クレーン及び原子炉建屋について行い、Ss900 に対して、これらの応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。なお、地震応答解析は水平 2 方向及び鉛直の 3 方向の地震動を同時に入力する。

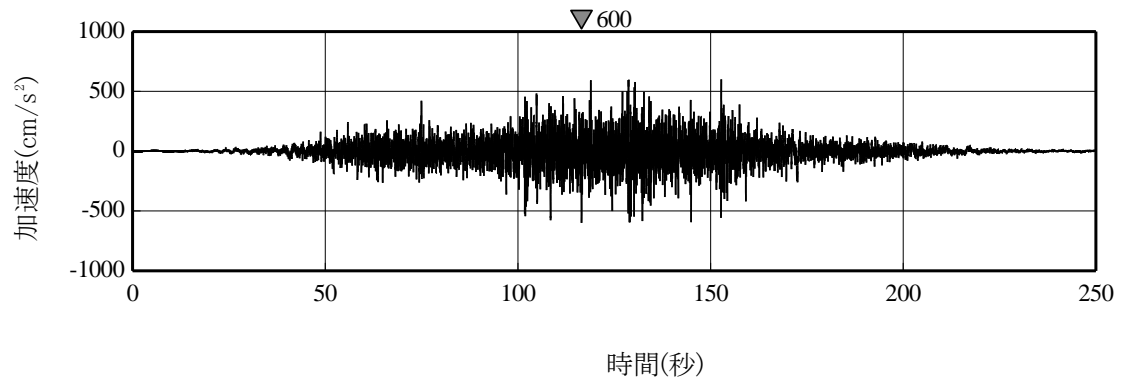
#### (1) 解析に用いる入力地震動

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図は図 5.3.1-1 と同一である。モデルに入力する地震動は、2 波ある Ss900 のうち振幅の大きな検討用地震動①を用いる。Ss900 の加速度時刻歴波形を図 5.4.1-1～図 5.4.1-2 に示す。

Ss900 を用いた地震応答解析は水平 2 方向及び鉛直方向を同時に入力するが、全く同じ地震動が同時に水平 2 方向に入力されることは現実的に考えにくい。このため、応答スペクトルに基づく検討用地震動①を作成した方法と同一の方法で、目標とする応答スペクトルに適合し、Ss900-1 と直交する位相を用いた模擬地震波を利用する。検討用地震動①と組み合わせる模擬地震波の加速度時刻歴波形を図 5.4.1-3 に示す。

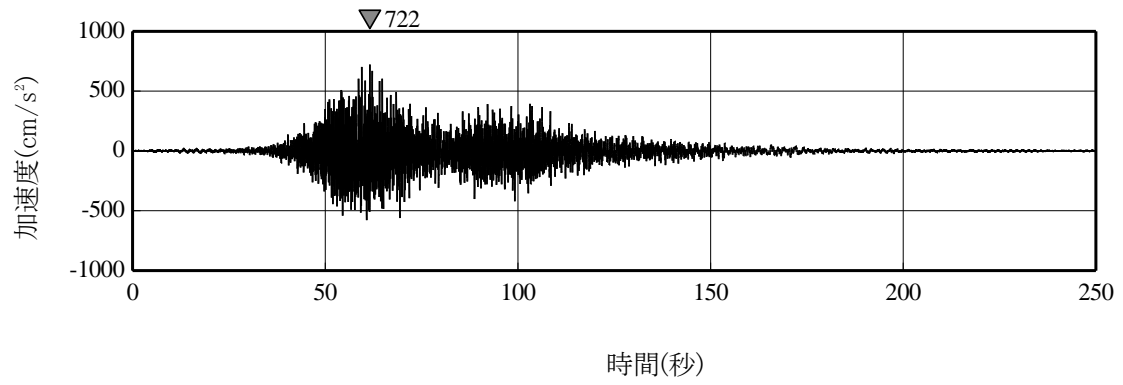


(a) 水平方向

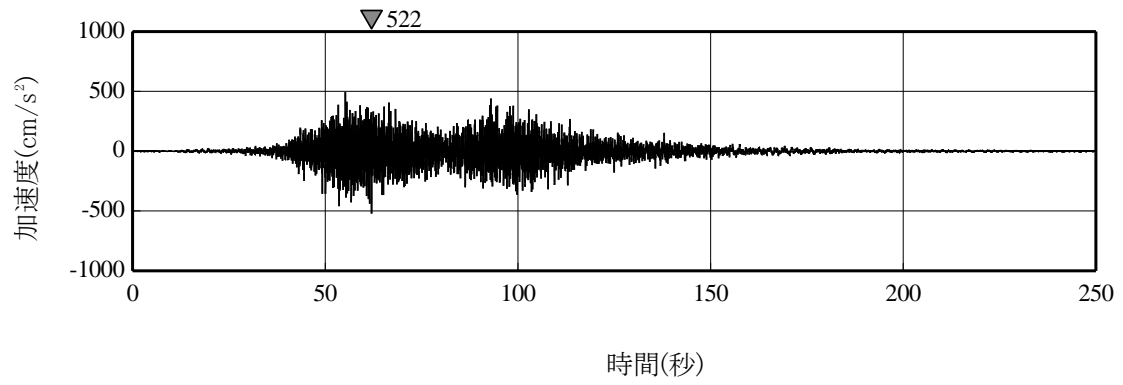


(b) 鉛直方向

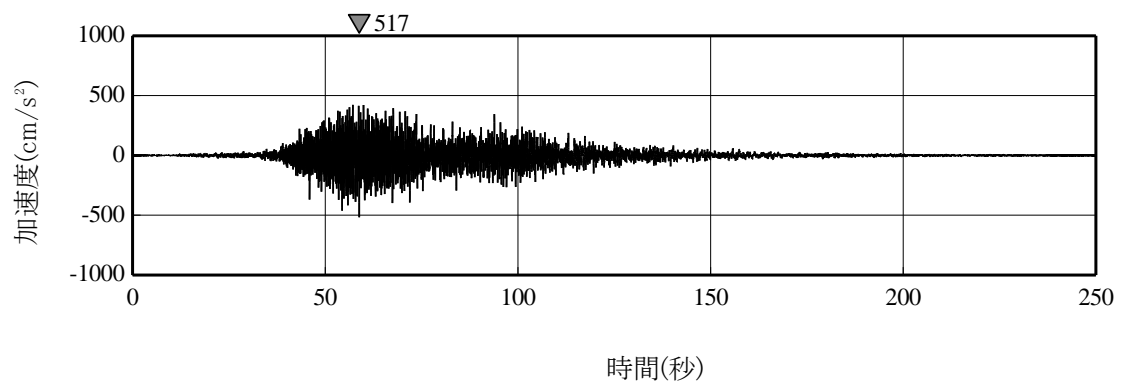
図 5.4.1-1 Ss900 のうち検討用地震動①



(a) NS 方向



(b) EW 方向



(c) 鉛直方向

図 5.4.1-2 Ss900 のうち検討用地震動②

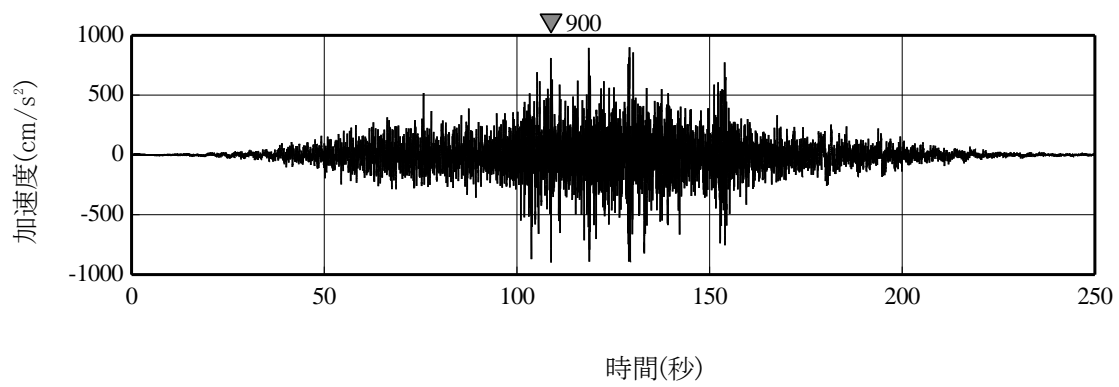


図 5. 4. 1-3 検討用地震動①（水平方向）と組み合わせる模擬地震波

## (2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデル，地震応答解析に用いる鉄骨の物性値及び原子炉建屋の諸元は，「5.3.1(2)地震応答解析モデル」と同一である。

大型カバーの地盤定数は，「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（東京電力株式会社，平成20年3月31日）と同様とし，その結果を表5.4.1-1に示す。

表 5.4.1-1 等価地盤物性

G. L. (m)	地質	せん断波 速度 Vs (m/s)	単位 体積重量 γ (kN/m <sup>3</sup> )	ポアソン 比 ν	せん断 弾性係数 G (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	初期せん断 弾性係数 G <sub>0</sub> (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	剛性 低下率 G/G <sub>0</sub>	ヤング 係数 E (×10 <sup>5</sup> kN/m <sup>2</sup> )	減衰 定数 h (%)	層厚 H (m)
0.0	砂岩	380	17.8	0.473	2.04	2.62	0.78	6.01	4	8.1
-8.1		450	16.5	0.464	2.32	3.41	0.68	6.79	3	11.9
-20.0	泥岩	500	17.1	0.455	2.96	4.36	0.68	8.61	3	70.0
-90.0		560	17.6	0.446	3.83	5.63	0.68	11.08	3	28.0
-118.0		600	17.8	0.442	4.44	6.53	0.68	12.80	3	88.0
-206.0		(解放基盤)	700	18.5	0.421	9.24	9.24	1.00	26.26	-

## (3) 解析ケース

ガレキ撤去時と燃料取り出し時の2ケースについて地震応答解析を行う。

ガレキ撤去時は，使用済み燃料プール上部にガレキ撤去用天井クレーンを配置し，定格荷重相当のガレキを吊った状態を想定する。

燃料取り出し時は，ガレキ撤去用天井クレーンの使用頻度は低いため，北側配置で吊り荷なしの状態を想定する。

表 5. 4. 1-2 解析ケース

ケース No.	状態	入力地震動 (3 方向同時入力)			ガレキ撤去用 天井クレーン状態
		NS 方向	EW 方向	UD 方向	
1	ガレキ撤去時	Ss900 +NS (N→S)	Ss900 +EW (E→W)	Ss900 +UD (U→D)	プール上部配置 吊り荷考慮 (case1)
2	燃料取り出し時	同上	同上	同上	北側配置 吊り荷なし (case2)

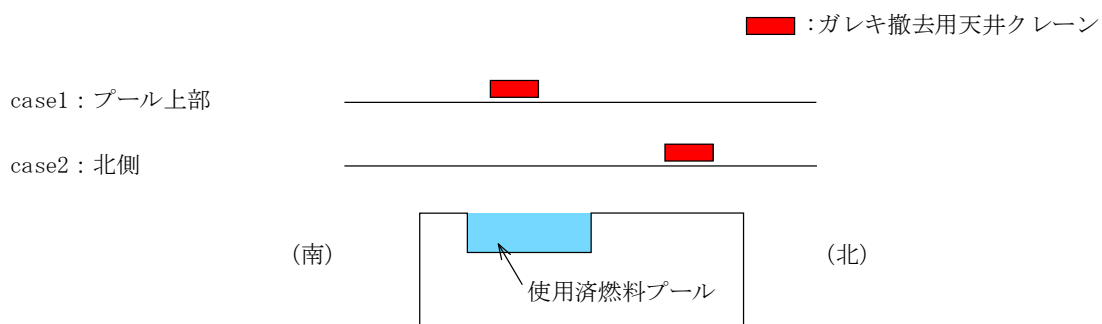


図 5. 4. 1-4 ガレキ撤去用天井クレーンの位置

(4) 評価項目とクライテリア

波及的影響の検討は、表 5.4.1-3 に示す項目について評価を行う。

表 5.4.1-3(1) 大型カバーのクライテリア

部位	考え方	許容限界
大型カバー架構 (一般部)	最大層間変形角が波及的影響を及ぼさないための許容限界を超えないことを確認	層間変形角 1/30 <sup>※1</sup>
大型カバー架構 (柱梁・鋼板) (屋根弦材)	部材に生じる応力が許容限界を超えないことを確認、超える場合はエネルギー一定則による評価を実施し、塑性率の許容限界を超えないことを確認	弾性限界強度または 塑性率 5.0 <sup>※2</sup>
大型カバー架構 (ブレース) (屋根斜材・ 屋根ブレース)	部材に生じる塑性率が許容限界を超えないことを確認、超える場合は応答による繰り返し回数が許容限界に対して十分な裕度を有することを確認	塑性率 5.0 または 評価最大ひずみ度に対する 破断寿命 1.0
大型カバー架構 アンカーボルト	引張とせん断の二乗累加則により検定し許容限界に至らないことを確認	終局強度に対する検定比 1.0

※1:「震災建築物の被災度区分判定基準及び復旧技術指針（(財)日本建築防災協会)」を参考に許容限界を設定している。なお、被災度区分判定基準においては、柱の残留傾斜角が 1/30 を超えた場合に大破と判定しているが、保守的に最大層間変形角を用いて評価を行う。

※2: JSCA 性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会、2002 年）を参考に定めたクライテリア  
（北村他：「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」、日本建築学会構造系論文集、第 604 号、PP183-191、2006.6）

表 5.4.1-3(2) ガレキ撤去用天井クレーンのクライテリア

部位	考え方	許容限界
ガレキ撤去用 天井クレーン クレーンガーダ	東西レール間の最大相対水平変位がクレーンの水平かかり代に比べ小さいことを確認	東西レール間相対変位 2300mm
	クレーンガーダの最大応答値が全塑性モーメントを超える不安定状態に至らないことを確認	全塑性モーメント Mp
ガレキ撤去用 天井クレーン トロリー	クレーンガーダの最大応答変位がトロリ脱 落防止材の鉛直かかり代に比べ小さいことを確認	鉛直変位 259mm
	トロリの水平力による脱 落防止材の発生応力が弾性限界強度を超えないことを確認	弾性限界せん断強度 149N/mm <sup>2</sup> (SS400)



#### 5.4.2 大型カバーの耐震性に対する検討

##### (1) 層間変形角の検討結果

大型カバー一般部の層間変形角を表 5.4.2-1 に示す。

ガレキ撤去時及び燃料取り出し時の最大層間変形角は、許容限界である 1/30 を超えないことを確認した。

表 5.4.2-1(1) 最大応答層間変形角（ガレキ撤去時）

方向	地震条件	検討箇所	最大層間変形角	許容限界	判定
南北方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9(m) ～+28.3(m) h=25.6(m)	1/87	1/30	O. K.
東西方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9(m) ～+28.3(m) h=25.6(m)	1/84	1/30	O. K.

表 5.4.2-1(2) 最大応答層間変形角（燃料取り出し時）

方向	地震条件	検討箇所	最大層間変形角	許容限界	判定
南北方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9(m) ～+28.3(m) h=25.6(m)	1/73	1/30	O. K.
東西方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9(m) ～+28.3(m) h=25.6(m)	1/78	1/30	O. K.

(2) 断面検討結果

1) 一般部

大型カバー一般部の断面検討結果を表 5. 4. 2-2 に示す。

柱、梁は一部で弾性限界を超えるものの、エネルギー一定則による評価で最大塑性率が5を超えないことを確認した。なお、弾性限に対する検定比は ( ) 内に示す。また、ブレース、鋼板の最大塑性率は5を超えないことを確認した。

接続部ブレース及び下部ブレースは最大塑性率が5を超えることから、破断寿命評価を実施し、部材が破断しないことを確認した。

表 5. 4. 2-2(1) 断面検討結果 (一般部, ガレキ撤去時)

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		最大塑性率	判定
				$\sigma_c$		$f_c$			
柱	H-400×400×13×21	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	343.0	$f_c$	320.4	1.08(1.08)	0.K.
梁	H-800×300×14×26	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	212.7	$f_c$	184.1	1.17(1.16)	0.K.
ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	—	$f_c$	337.2	2.09	0.K.
鋼板	PL-12	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_x$	18.8	$f_t$	258.0	0.97	0.K.
				$\sigma_y$	256.6				
				$\tau_{xy}$	19.8				

表 5. 4. 2-2(2) 断面検討結果 (一般部, 燃料取り出し時)

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		最大塑性率	判定
				$\sigma_c$		$f_c$			
柱	H-400×400×13×21	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	423.5	$f_c$	345.1	1.26(1.23)	0.K.
梁	H-800×300×14×26	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	260.5	$f_c$	184.1	1.50(1.42)	0.K.
ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	—	$f_c$	337.2	2.20	0.K.
鋼板	PL-12	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_x$	17.3	$f_t$	258.0	0.91	0.K.
				$\sigma_y$	239.5				
				$\tau_{xy}$	19.5				

表 5.4.2-2(3) 断面検討結果（一般部，ガレキ撤去時）

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大塑性率 (破断寿命評価)	判定
接続部ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	Ss900	+NS+EW+UD	19.40 (0.37)	0. K.
下部ブレース	φ-267.4×6.6	Ss900	+NS+EW+UD	15.84 (0.69)	0. K.

表 5.4.2-2(4) 断面検討結果（一般部，燃料取り出し時）

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大塑性率 (破断寿命評価)	判定
接続部ブレース	十字 PL (PL-28×210 +2PL-28×91)	Ss900	+NS+EW+UD	10.64 (0.04)	0. K.
下部ブレース	φ-318.5×6.9	Ss900	+NS+EW+UD	16.57 (0.86)	0. K.

なお，大型カバーと燃料取扱設備支持部との地震時の干渉について，一般部と燃料取扱設備支持部のクリアランス 30cm に対して最大相対変位が 18.9cm（燃料取り出し時）であることから，地震時に衝突しないことを確認している。

2) 燃料取扱設備支持部

大型カバー燃料取扱設備支持部の断面検討結果を表 5.4.2-3 に示す。

ガレキ撤去時，燃料取り出し時共に，応力度比 1.0 を超えないことを確認した。

表 5.4.2-3(1) 断面検討結果（燃料取扱設備支持部，ガレキ撤去時）

部位	部材形状 (mm) 〈使用材料〉	地震波 (位置)	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
				$\sigma_c$		$f_c$			
柱	H-400×400×13×21	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	51.5	$f_c$	326.1	0.16	O. K.
梁	H-350×350×12×19	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	102.2	$f_c$	344.0	0.30	O. K.
接続部 ブレース	十字 PL (PL-28×10 +2PL-28×91)	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_t$	240.3	$f_t$	357.5	0.68	O. K.
下部 ブレース	$\phi$ -355.6×7.9	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	202.4	$f_c$	349.6	0.58	O. K.

表 5.4.2-3(2) 断面検討結果（燃料取扱設備支持部，燃料取り出し時）

部位	部材形状 (mm) 〈使用材料〉	地震波 (位置)	入力 方向	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )		応力 度比	判定
				$\sigma_c$		$f_c$			
柱	H-400×400×13×21	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	89.9	$f_c$	326.1	0.28	O. K.
梁	H-350×350×12×19	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_t$	135.5	$f_t$	357.5	0.38	O. K.
接続部 ブレース	十字 PL (PL-28×10 +2PL-28×91)	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_t$	246.2	$f_t$	357.5	0.69	O. K.
下部 ブレース	$\phi$ -406.4×9.5	Ss900	+NS+EW+UD	$\sigma_c$	279.8	$f_c$	351.3	0.80	O. K.

### 5.4.3 屋根の耐震性に対する検討

大型カバー屋根部の断面検討結果を表 5.4.3-1 に示す。弦材、ブレースは最大塑性率 5 を超えないことを確認した。斜材は最大塑性率が 5 を超えることから、破断寿命評価を実施し、部材が破断しないことを確認した。

表 5.4.3-1(1) 断面検討結果 (ガレキ撤去時)

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大塑性率 (破断寿命評価)	判定
		Ss900	+NS+EW+UD		
弦材	P-190.7φ×5.3t	Ss900	+NS+EW+UD	0.80	0. K.
斜材	P-89.1φ×3.2t	Ss900	+NS+EW+UD	15.72 (0.26)	0. K.
ブレース	1-M30	Ss900	+NS+EW+UD	4.12	0. K.

表 5.4.3-1(2) 断面検討結果 (燃料取り出し時)

部位	部材形状 (mm)	地震条件		最大塑性率 (破断寿命評価)	判定
		Ss900	+NS+EW+UD		
弦材	P-261.3φ×7.0t	Ss900	+NS+EW+UD	0.94	0. K.
斜材	P-89.1φ×3.2t	Ss900	+NS+EW+UD	20.90 (0.39)	0. K.
ブレース	1-M27	Ss900	+NS+EW+UD	4.69	0. K.

#### 5.4.4 建屋取り合い部の耐震性に対する検討

大型カバーのアンカーボルトの終局強度に対する検定比を表5.4.4-1に示す。ガレキ撤去時及び燃料取り出し時ともに、検定比1.0を超えないこと確認した。

表 5.4.4-1(1) アンカーボルトの検討結果（一般部，ガレキ撤去時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカー ボルト (16)	Ss900	+NS+EW+UD	1860	2329	3744	3088	0.83	O. K.

表 5.4.4-1(2) アンカーボルトの検討結果（一般部，燃料取り出し時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカー ボルト (16)	Ss900	+NS+EW+UD	1802	2350	3744	3088	0.84	O. K.

表 5.4.4-1(3) アンカーボルトの検討結果（燃料取扱設備支持部，ガレキ撤去時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカー ボルト (12)	Ss900	+NS+EW+UD	906	1606	3816	2316	0.70	O. K.

表 5.4.4-1(4) アンカーボルトの検討結果（燃料取扱設備支持部，燃料取り出し時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカー ボルト (24)	Ss900	+NS+EW+UD	3577	2964	5832	4632	0.80	O. K.

#### 5.4.5 天井クレーンの耐震性に対する検討

地震応答解析より得られた東西レール間の最大相対水平変位は、ガレキ撤去時 39mm、燃料取り出し時 41mm で、クレーン端部の水平かかり代 2300mm に比べ小さく、ガレキ撤去用天井クレーンが落下する危険性はないことを確認した。

地震応答解析より得られたガレキ撤去用天井クレーンガーダの水平方向（NS 方向）および鉛直方向の最大応答曲げモーメントを表 5.4.5-1 に示す。

ガレキ撤去時、燃料取り出し時ともに、クレーンガーダの全塑性曲げモーメント  $M_p$  を超える不安定状態には至らないことを確認した。

表 5.4.5-1(1) ガレキ撤去用天井クレーンガーダの断面検討結果（ガレキ撤去時）

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース	最大応答曲げ モーメント (鉛直) ( $\times 10^6 \text{Nm}$ )		全塑性 モーメント (鉛直) ( $\times 10^6 \text{Nm}$ )		応力 度比	判定
			M		$M_p$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	Ss900	M	149.2	$M_p$	168.0	0.89	O.K.

表 5.4.5-1(2) ガレキ撤去用天井クレーンガーダの断面検討結果（燃料取出し時）

部位	部材形状 (mm)	荷重 ケース	最大応答曲げ モーメント (鉛直) ( $\times 10^6 \text{Nm}$ )		全塑性 モーメント (鉛直) ( $\times 10^6 \text{Nm}$ )		応力 度比	判定
			M		$M_p$			
① クレーン ガーダ	□-1500×2700 <SM490>	Ss900	M	107.9	$M_p$	168.0	0.65	O.K.

地震応答解析より得られたクレーンガーダの最大鉛直変位は、ガレキ撤去時 174mm、燃料取り出し時 119mm となり、トロリの脱落防止材の鉛直かかり代 259mm に比べ小さいことを確認した。

ガレキ撤去用天井クレーンの最大応答水平加速度にトロリ重量 (56ton) を乗じ求めた水平力に対し、トロリの脱落防止材に生じるせん断応力度を求めた結果を表 5. 4. 5-2 に示す。

ガレキ撤去時、燃料取り出し時ともに、トロリの脱落防止材に発生する応力は弾性限界強度を超えないことを確認した。

表 5. 4. 5-2(1) 脱落防止材の断面検討結果 (ガレキ撤去時)

天井クレーン 最大水平応答加速度 ( $m/s^2$ )	トロリー脱落防止材 水平力 (kN)	トロリー脱落防止材 せん断応力度 ( $N/mm^2$ )	弾性限界応力度 ( $N/mm^2$ )	検定比	判定
45.7	2559	94.8	149	0.64	O. K.

表 5. 4. 5-2(2) 脱落防止材の断面検討結果 (燃料取り出し時)

天井クレーン 最大水平応答加速度 ( $m/s^2$ )	トロリー脱落防止材 水平力 (kN)	トロリー脱落防止材 せん断応力度 ( $N/mm^2$ )	弾性限界応力度 ( $N/mm^2$ )	検定比	判定
42.0	2352	87.1	149	0.58	O. K.



## 5.4.6 原子炉建屋の耐震性に対する検討

### (1) 検討方針

大型カバー設置に伴う原子炉建屋の耐震性の評価は、耐震安全上重要な設備への波及的影響防止の観点から、地震応答解析により得られる耐震壁のせん断ひずみが鉄筋コンクリート造耐震壁の終局限界に対応した評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。最大接地圧が地盤の許容限界を超えないことを確認する。

また、大型カバーを設置する前後でのオペフロでの最大応答加速度を比較する。

### (2) 原子炉建屋の地震応答解析

#### 1) 解析に用いる入力地震動

検討に用いる地震動は、「5.4.1 検討方針」で示した Ss900 とする。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図は図 5.3.1-1 と同様である。

#### 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析に用いるモデルは、図 5.4.6-1 に示すように建屋を質点系とし地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。

地震応答解析モデルの諸元は、「5.3.5 原子炉建屋の耐震性に対する検討」と同一である。

大型カバー設置前の原子炉建屋の建屋の諸元は「1/2Ss450gal 検討」に示す。また、地盤定数は、「5.3.1 検討方針」で示した地盤定数と同一である。

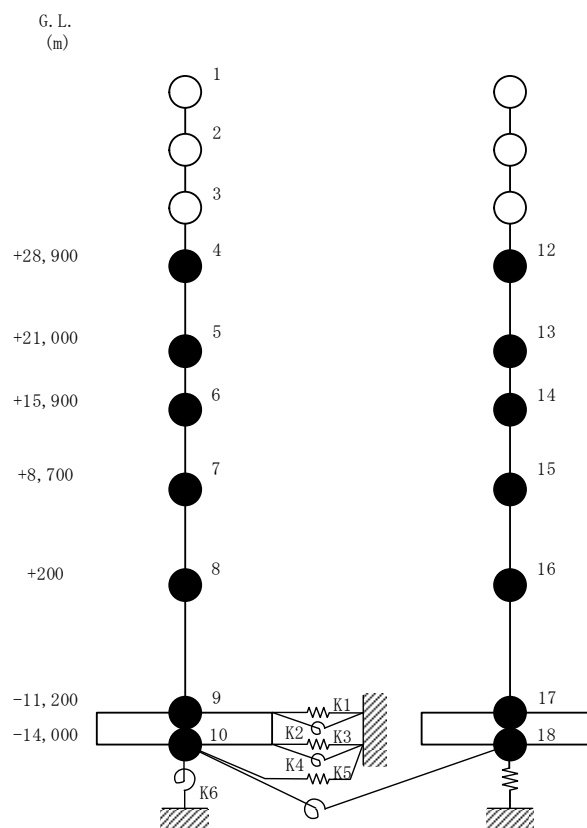


図 5.4.6-1 原子炉建屋の地震応答解析モデル

### (3) 検討結果

大型カバー設置後のSs900に対する最大応答値を、「JEAG4601-1991」に基づき設定した耐震壁のせん断スケルトン曲線上にプロットした結果を図5.4.6-2に示す。

検討の結果、地震応答解析により得られる最大応答値は、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下となり、クライテリアを満足することを確認した。

Ss900 に対する最大接地圧を、表 5.4.6-1 に示す。最大接地圧は、地盤の極限支持力度 ( $9800\text{kN/m}^2$ ) を超えないことを確認した。

また、カバー設置前とカバー設置後のガレキ撤去時及び燃料取り出し時の最大応答加速度の比較を図5.4.6-3に示す。各階の最大応答加速度は大きな違いが見られず、大型カバーを設置した影響は小さい。

表 5.4.6-1(1) Ss900 に対する最大接地圧 (ガレキ撤去時)

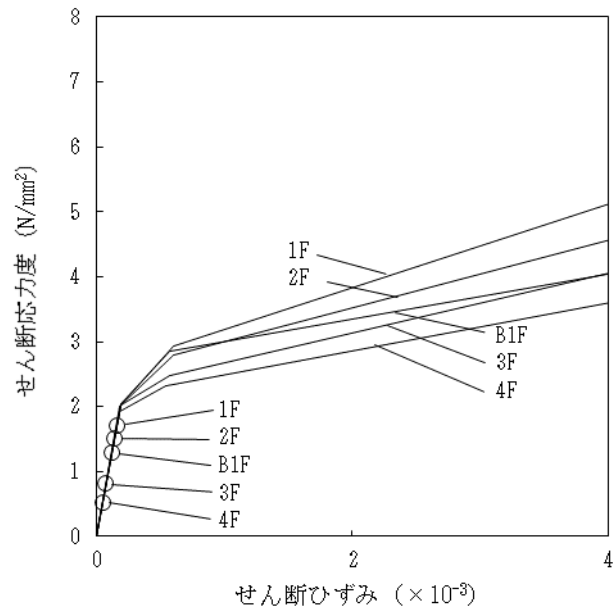
	NS 方向*1	EW 方向*1
地震波	Ss900-1	Ss900-1
鉛直力N ( $\times 10^5\text{kN}$ )	10.4	10.4
転倒モーメントM ( $\times 10^6\text{kN}\cdot\text{m}$ )	13.2	13.4
最大接地圧 ( $\text{kN/m}^2$ )	3480	3000

\*1：誘発上下動考慮の結果を示す。

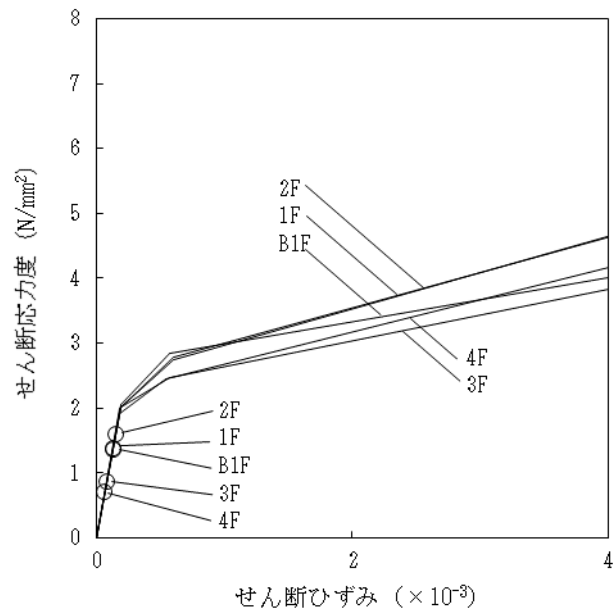
表 5.4.6-1(2) Ss900 に対する最大接地圧 (燃料取り出し時)

	NS 方向*1	EW 方向*1
地震波	Ss900-1	Ss900-1
鉛直力N ( $\times 10^5\text{kN}$ )	11.0	11.0
転倒モーメントM ( $\times 10^6\text{kN}\cdot\text{m}$ )	13.2	14.8
最大接地圧 ( $\text{kN/m}^2$ )	2950	3680

\*1：誘発上下動考慮の結果を示す。

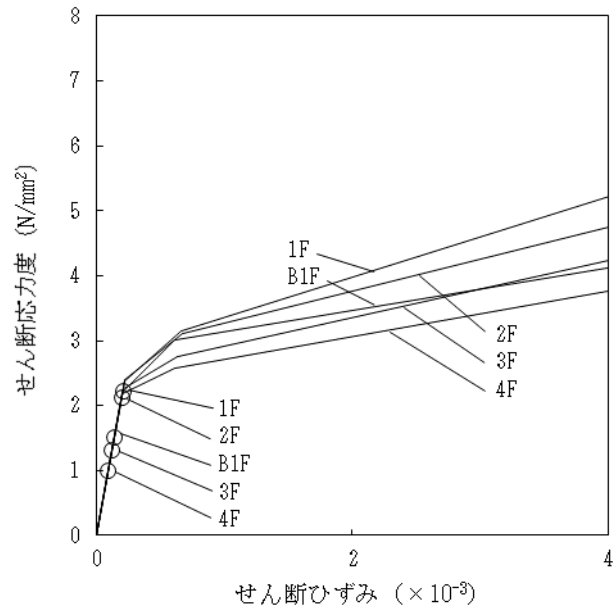


(a) NS 方向

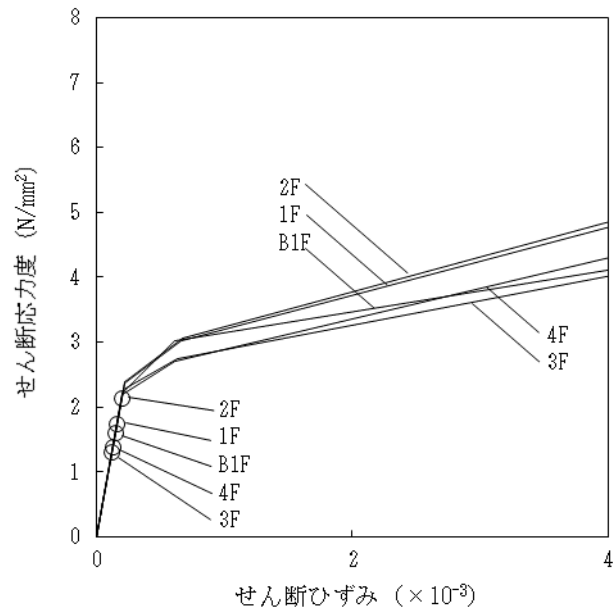


(b) EW 方向

図 5. 4. 6-2(1) せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (大型カバー設置前)

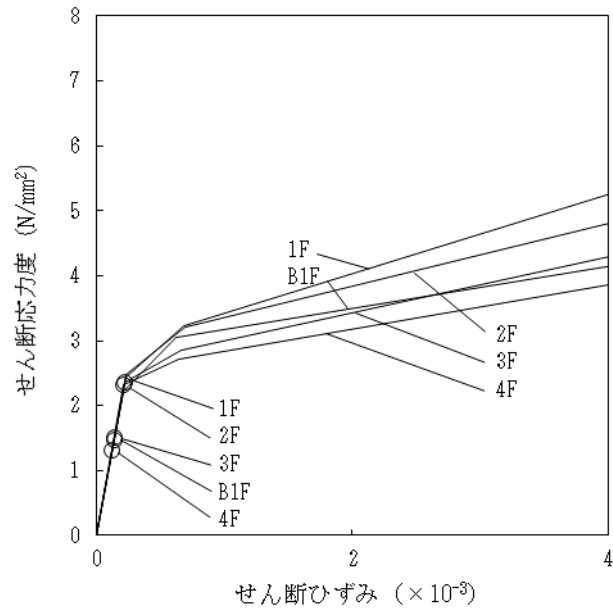


(a) NS 方向

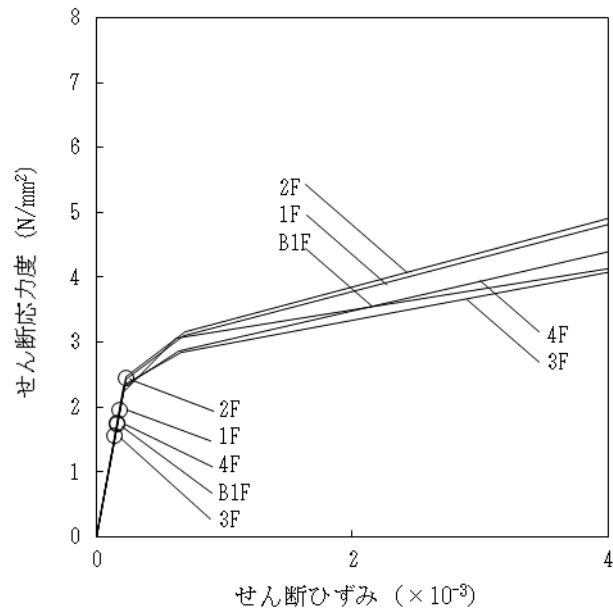


(b) EW 方向

図 5.4.6-2(2) セン断スケルトン曲線上の最大応答値 (ガレキ撤去時)

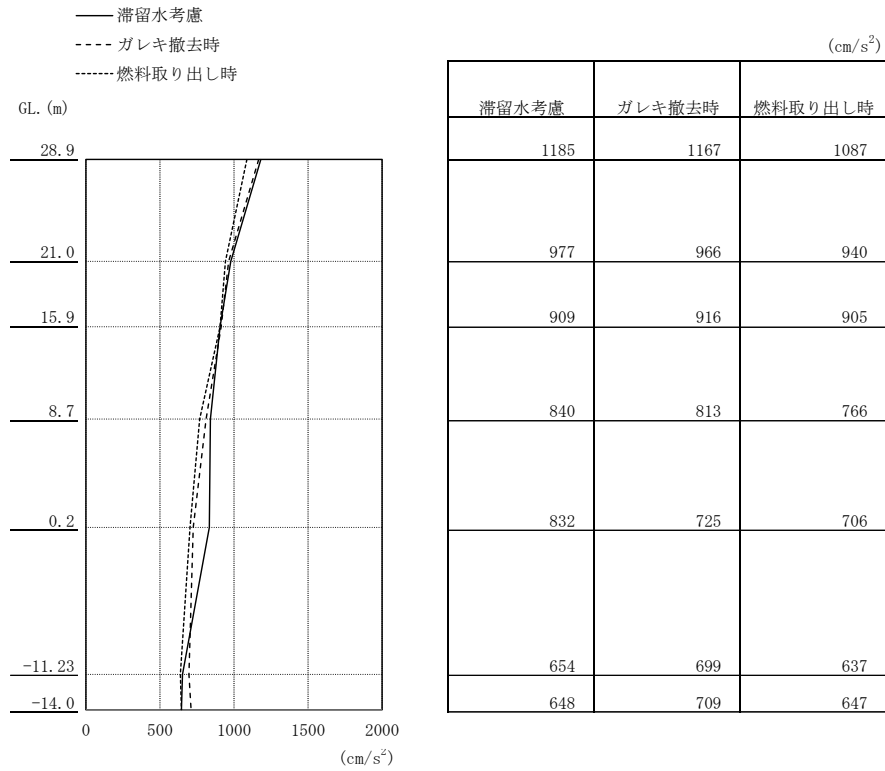


(a) NS 方向

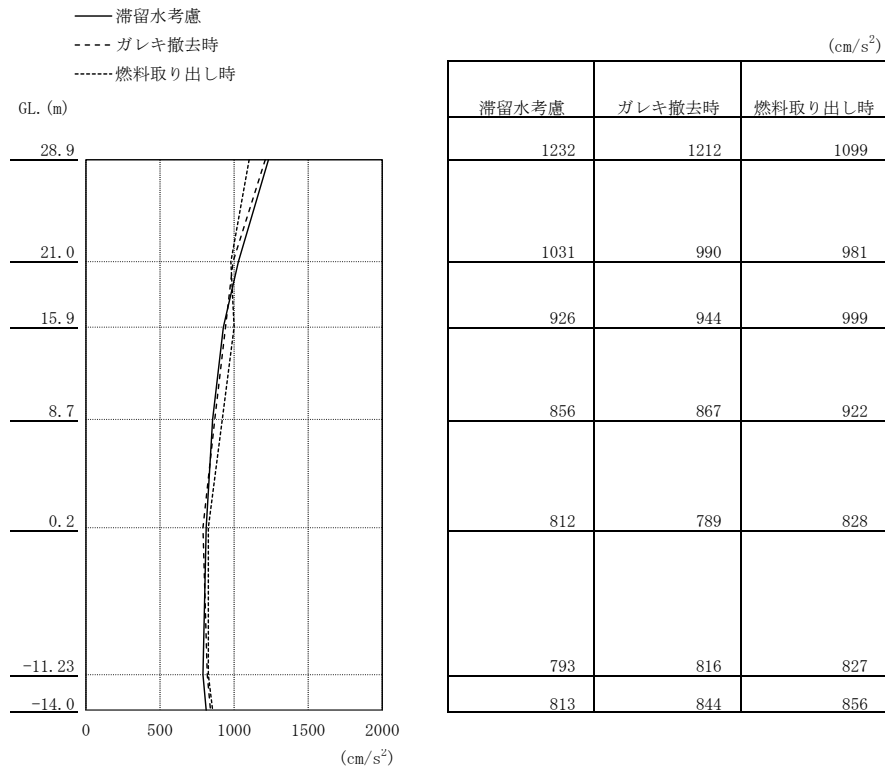


(b) EW 方向

図 5.4.6-2(3) セン断スケルトン曲線上の最大応答値 (燃料取出し時)



(a) NS 方向



(b) EW 方向

図 5.4.6-3 最大応答加速度の比較

## 6. 別添

- 別添－1 福島第一原子力発電所 3号機大型カバーの構造強度及び耐震性について（東京電力株式会社，平成25年2月21日，特定原子力施設監視・評価検討会（第4回）資料4）
- 別添－2 福島第一原子力発電所 3号機大型カバーの構造強度及び耐震性について（コメント回答）（東京電力株式会社，平成25年3月8日，特定原子力施設監視・評価検討会（第6回）資料5）
- 別添－3 4号機燃料取り出し用カバーに係る確認事項
- 別添－4 3号機燃料取り出し用カバーに係る確認事項
- 別添－5 3号機原子炉建屋の躯体状況調査結果を反映した使用済燃料プール等の耐震安全性評価結果
- 別添－6 3号機原子炉建屋 遮へい体設置における滑動対策について
- 別添－7 2号機燃料取り出し用構台に係る確認事項
- 別添－8 2号機原子炉建屋 オペレーティングフロア床面に設置する遮蔽体の落下防止について
- 別添－9 1号機大型カバーに係る確認事項
- 別添－10 水平2方向及び鉛直方向地震力の同時入力時に用いる模擬地震波について
- 別添－11 1号機大型カバーの構造強度及び耐震性に関する補足説明
- 別添－12 1号機原子炉建屋外壁の3次元FEM解析による耐震安全性評価

特定原子力施設監視・  
評価検討会(第4回)  
資料4  
(第3回資料4を一部改定)

# 福島第一原子力発電所 3号機燃料取り出し用カバーの 構造強度及び耐震性について

平成25年2月21日  
東京電力株式会社



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

1. 施設概要と要求機能
2. 構造概要
3. 設計概要
4. 解析モデル
5. 耐震性に対する検討結果
6. 建屋損傷の反映状況と今後の対応
  - ・ コメント回答
  - ・ 参考資料



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

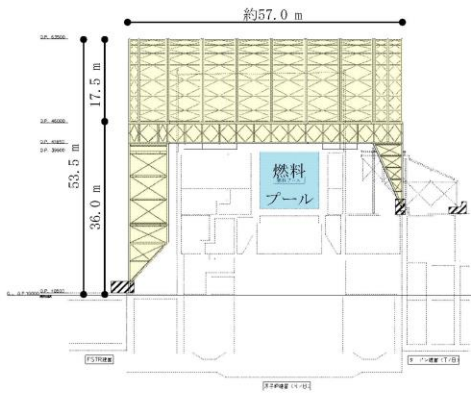


※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

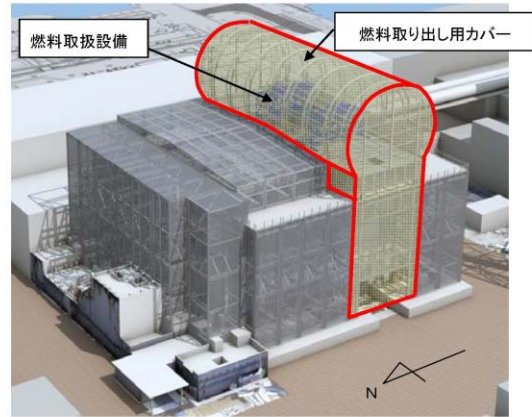
# 1. 施設概要と要求機能

## (1) 施設概要

- 燃料取り出し用カバーは、プール内燃料の取り出しと燃料取り出し中の作業環境保持のために設置する。
- 東西約57.0m、南北約22.8m、高さ53.5mの鉄骨構造物で、周囲を鋼製の折板で覆う。

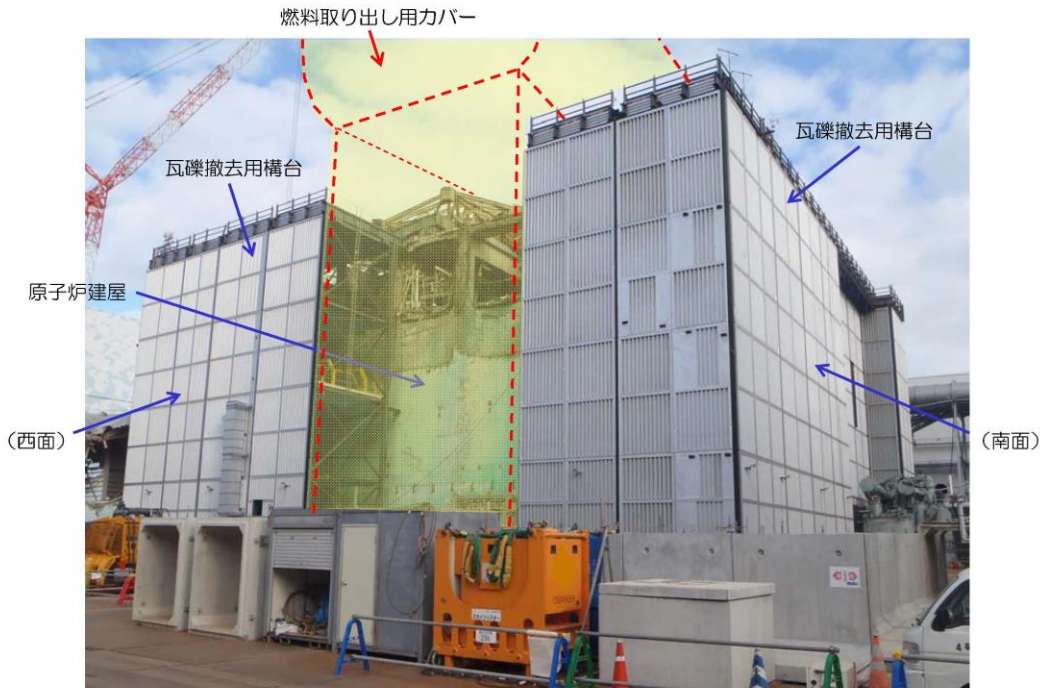


東西断面図



完成イメージ図（北西側外観）

# 1. 施設概要と要求機能



3号機原子炉建屋の現況写真  
 (南西面、2013年1月8日撮影)

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

# 1. 施設概要と要求機能

## (2) 要求機能

### 1. 作業環境保持

燃料取り出し作業に支障が生じることのないよう、風雨を遮る構造とする。

### 2. 飛散・拡散抑制

外周覆いの隙間を低減し、排気設備によりカバー内の放射性物質の大気への放出を抑制できる構造とする。

### 3. 燃料取扱設備の支持

燃料取扱設備を支持できる構造とする。

## (3) 使用期間

ロードマップに示した燃料取り出し作業に支障がない期間とする。

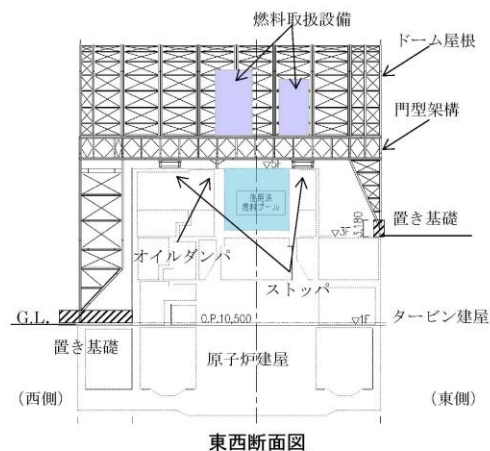
ロードマップ (2012年7月)



# 2. 構造概要

## (1) 構造概要

- ① 高線量下での建設となるため、作業員の被ばくを最小限とする構造とする。
  - ・ 軽量の鉄骨トラス構造を採用し、建屋上部に予め大組みした鉄骨ブロックをクレーンで吊り込むことで、現地作業の低減をはかる。
  - ・ 建屋との取り合い部は、アンカー等による固縛が不要な構造とし、現地作業の低減をはかる。
- ② 建屋1、3階部にコンクリート造の置き基礎を設け、燃料取扱設備を支持する門型架構を構築する。
- ③ 門型架構の中央部にはストッパおよびオイルダンパを配置し、地震時の建屋との一体挙動を確保する。
- ④ 門型架構の上部に、軽量のドーム屋根を取り付けて、燃料取り出し時の作業空間を確保する。



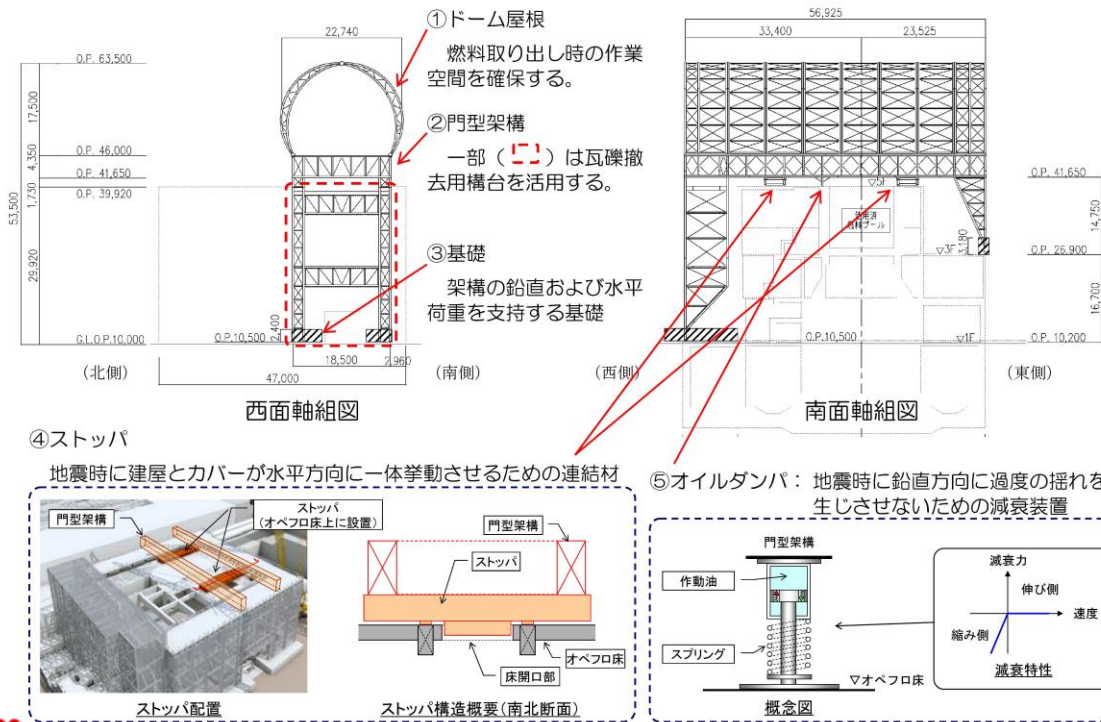
東西断面図





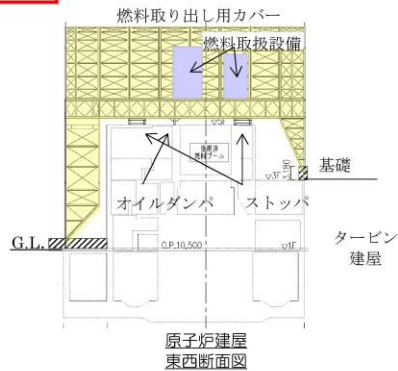
※O.P表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 2. 構造概要

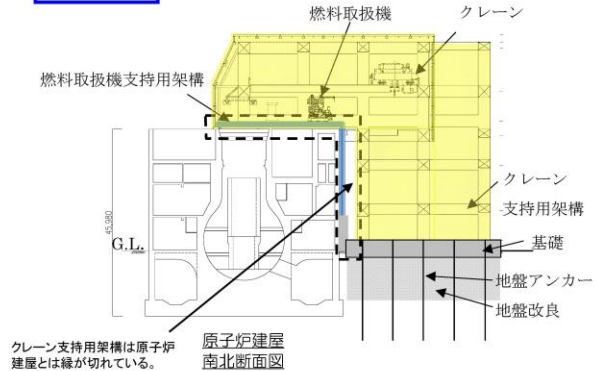


## 2. 構造概要 (2) 4号機との比較

### 3号機



### 4号機



放射線量の高い作業環境(数m~数百mSv/h)

放射線量の比較的低い作業環境(1.0mSv/h程度)

軽量の鉄骨トラス構造物とし、建屋上部に設置

大型の鉄骨柱・梁構造物とし、建屋と分離設置

小型の基礎、ストッパ等を介し建屋と一体化

地盤改良等による独立基礎で支持

建屋と一体の燃料取扱機支持用架構を別途設置

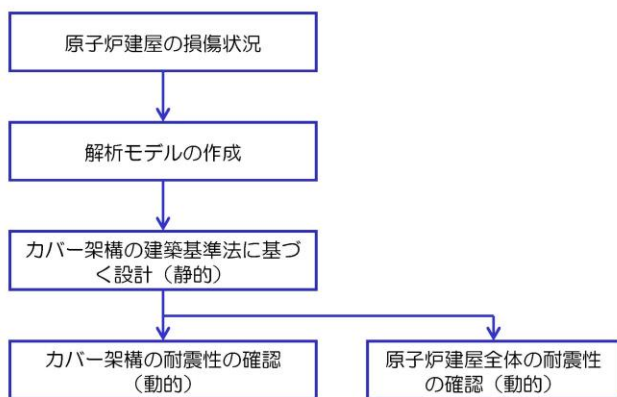
現地作業を低減し作業員の被ばくを最小限とする

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

### 3. 設計概要

#### 設計方針

- 耐震クラスは、燃料取り出し用カバーは安全機能を有しないため定めない。
- 設計は、建築基準法（地震\*1、風圧力\*2、積雪）に基づく。
- 基準地震動Ssに対して耐震性\*3を確認する。

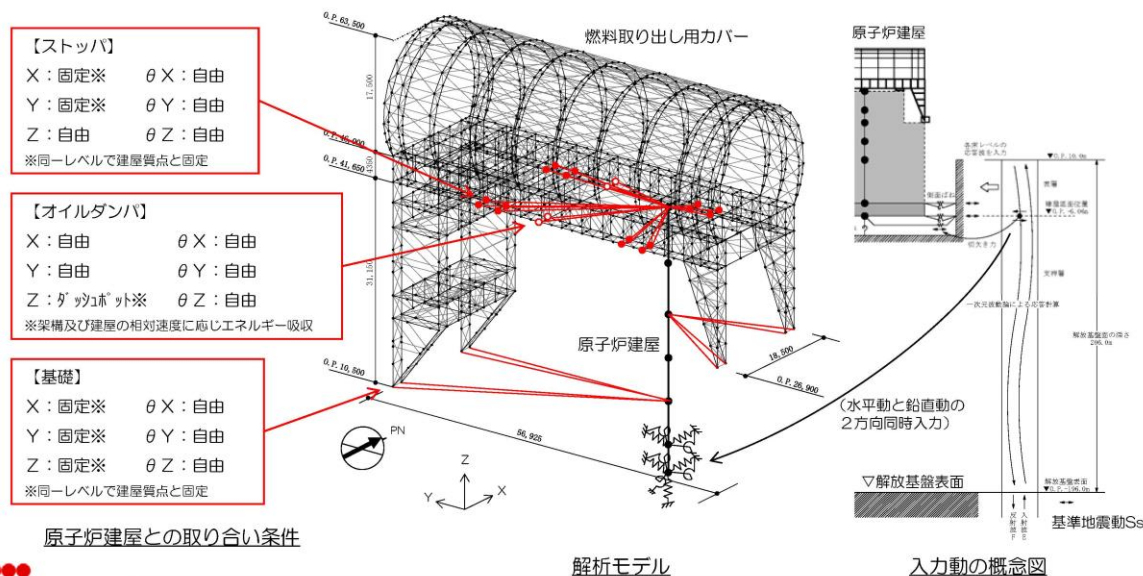


\*1：建築基準法で定める地震力の1.5倍を考慮する。  
 \*2：基準風速30m/s（10分間平均風速、最大瞬間風速50m/s相当）  
 \*3：原子炉建屋、使用済み燃料プールおよび使用済み燃料貯蔵ラックに波及的影響を与えないこと。  
 (注記) その他の荷重に対する考え方  
 津波：燃料取り出し用カバーは鉄骨トラスと鋼製の外装材により構成されているが、閉空間になっておらず、津波襲来時には、水は燃料取り出し用カバーの裏側に回り込む。そのため、津波による波圧は生じにくい。  
 暴風：外装材は、設計風圧力の約4倍の耐力を有することを確認している。

### 4. 解析モデル

#### 基準地震動Ssに対する耐震性評価モデル

- 立体架構を原子炉建屋の質点系モデルに接続したモデルとし、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。





※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 5. 耐震性に対する検討結果

いずれも評価クライテリア以下であることを確認した。

### (1) 架構の耐震性

部位	評価項目	検定比、最大応答値	評価クライテリア	判定
門型架構	層間変形角	1/720	1/75以下	OK
門型架構	塑性率	0.75	5以下	OK
ドーム屋根	塑性率	0.90	5以下	OK
オイルダンパ	相対変位	72 mm	100 mm以下	OK
	相対速度	0.48 m/s	1.0 m/s以下	OK
ストッパ	せん断耐力比	0.42	1.0以下	OK
基礎	浮き上がりの有無	生じない	生じないこと	OK
	すべり摩擦抵抗比	0.59	1.0以下	OK

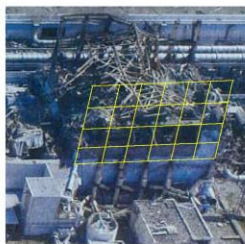
### (2) 原子炉建屋の耐震性

部位	評価項目	検定比、最大応答値	評価クライテリア	判定
ストッパ接触部	支圧耐力比	0.54	1.0以下	OK
オイルダンパ接触部	支圧耐力比	0.19	1.0以下	OK
基礎設置部	圧縮耐力比	0.29	1.0以下	OK
原子炉建屋	せん断ひずみ	$0.14 \times 10^{-3}$	$4.0 \times 10^{-3}$ 以下	OK

## 6. 建屋損傷の反映状況と今後の予定

### (1) 建屋損傷の反映状況

- ・外壁 : 損傷状況を解析モデルに反映
- ・基礎設置部 : 目視調査により損傷が無いことを確認



①西面



②東面

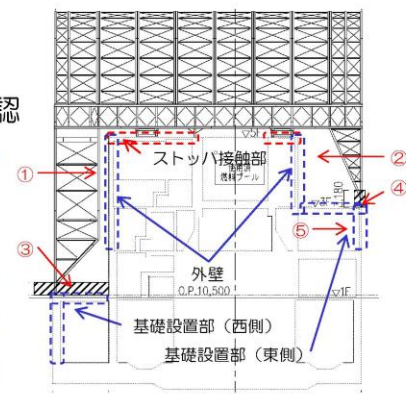
外壁



③基礎設置部 (西側)



④基礎設置部 (東側、外部)



東側の基礎を支持する建屋外壁



⑤基礎設置部 (東側、内部)

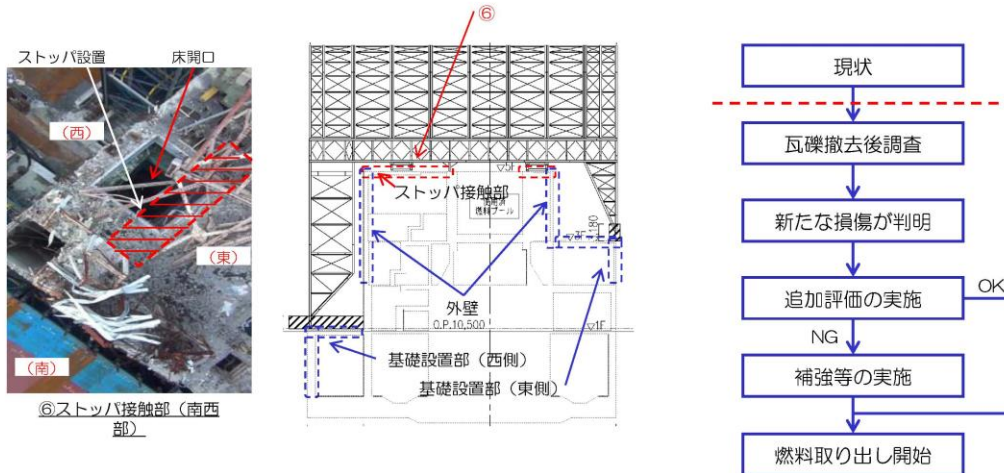
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 6. 建屋損傷の反映状況と今後の予定

### (2) 今後の予定

- ・ストッパ接触部：瓦礫撤去後にカメラ等による無人調査を予定

今後、燃料取り出し開始前に、瓦礫撤去後予定する建屋オペフロ床の調査結果を基に、安全性の再確認を実施する。



## コメント回答①

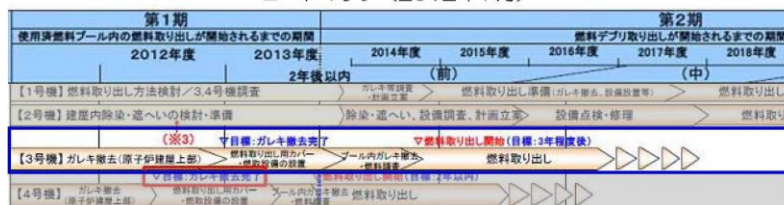
①使用期間と設計のクライテリアは密接に関係することから、3号機燃料取り出し用カバーの使用期間を明確に記載すること。仮に、燃料取り出し後も継続使用するのであれば、竜巻、あるいは地震・津波に関わる新安全設計基準にどのように対応するつもりなのかを明確にすること。

### 使用期間

3号機燃料取り出し用カバーの使用期間は、ロードマップに示した「使用済み燃料」取り出し作業に支障がない期間（2017年度頃まで）としている。

その後に計画している「デブリ燃料」取り出し作業に関しては、別の構造体を構築することを想定している。当該構造体については、別途申請する予定である。

ロードマップ（2012年7月）





## コメント回答②

② JSCAのクライテリア（層間変形角  $1/75$ 、層の塑性率4以下、部材の塑性率5以下を満足すること）については、一般の建築物に採用するクライテリアであるため、使用期間及び耐震安全性の観点から、リスク評価の観点から検討し、燃料取り出し用カバーの設計に適用して支障ないことを説明すること。特に、①とも関係し、ドーム屋根の塑性率に対する検定比が0.90となっていることは、仮に損傷を受けた場合に、補修方法も含めて問題がないか説明すること。

### 1. 評価には、JSCA及び日本建築センター両者のクライテリアを用いている。

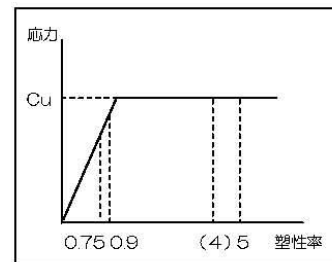
日本建築センターのクライテリアは、層間変形角  $1/100$  以下、層の塑性率2以下、部材の塑性率4以下とされており、これを越える場合には、水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し、安全性を確認するものとされている。

## コメント回答②

### 2. 評価結果は、JSCA及び日本建築センター両者のクライテリアに対し十分余裕がある結果となっており、十分な耐震安全性を確保している。

部位	評価項目	最大応答値	評価クライテリア	耐震余裕
門型架構	層間変形角	1/720	1/75以下 (1/100以下)	9.6倍 (7.2倍)
門型架構	塑性率	0.75	5以下 (4以下)	6.6倍 (5.3倍)
ドーム屋根	塑性率	0.90	5以下 (4以下)	5.5倍 (4.4倍)

(注) ( ) は、日本建築センター「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」の判定基準に基づく値を示す。



門型架構、ドーム屋根の最大塑性率

(注) Cuは、建築学会鋼構造設計規準、建築基準法告示を基に算定した座屈荷重

### 3. 本構造物の使用期間は、前述の通り一般の建築物に比べ短い。

⇒ 2つのクライテリアを用いること、両者のクライテリアに対し十分余裕があること、使用期間が一般の建築物に比べ短いことから、3号機燃料取り出し用カバーの耐震性評価に適用して支障がないと考えている。

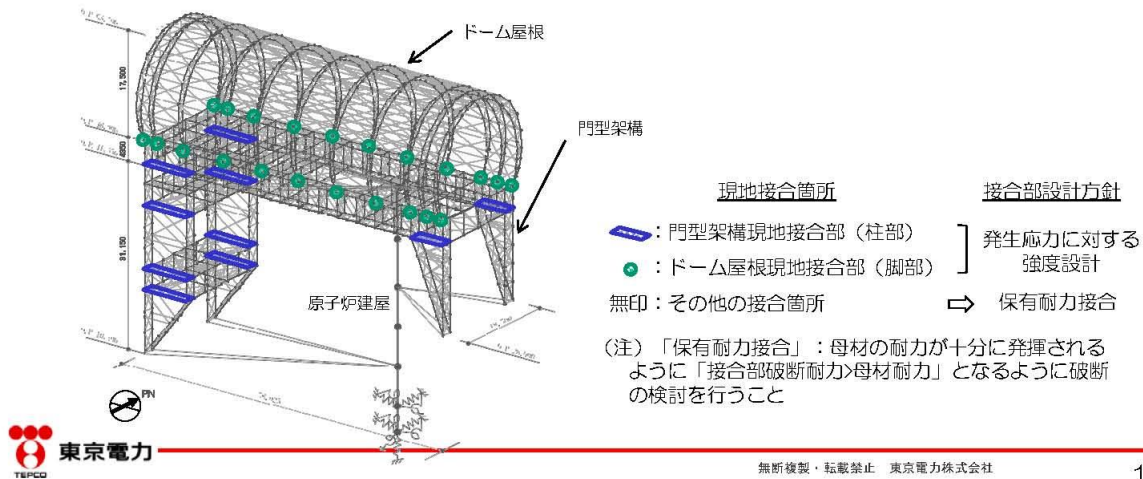
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## コメント回答③

③鋼構造において接合部等の詳細設計は耐震安全性を判断する上で重要な審査項目であるので、接合部等の詳細設計結果を追加報告すること。

### 1. 接合部の設計方針

- ・原則として、保有耐力接合（接合部で破断させない設計）とする。
- ・高線量下での作業となる一部の現地接合部については、発生応力に対する強度設計を行う。（強度余裕確保）



16

## コメント回答③

### 2. 基準地震動Ssに対する接合部の検討結果

架構	検討部位	設計	検定比 (最大箇所)	耐震余裕
門型架構	現地接合部 (柱部)	発生応力に対する強度設計	0.60 ≤ 1.0 (フランジプレート)	1.6倍
ドーム屋根	現地接合部 (脚部)	発生応力に対する強度設計	0.36 ≤ 1.0 (スプラインプレート)	2.7倍
門型架構 ドーム屋根	その他の接合部	保有耐力接合	接合部では破断しない	

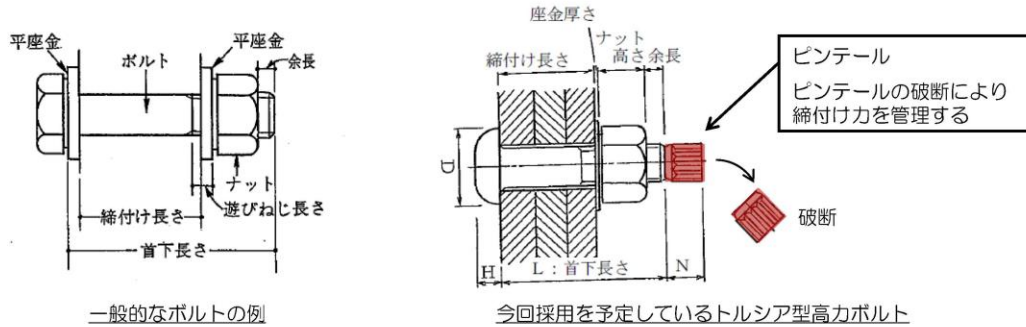
(注) 検定比=発生応力/接合部破断耐力



## コメント回答④

④立ち入りが難しい場所で施工管理（特に接合部）の計画について説明すること。

1. 有人にて現地作業が行えるよう、除染、遮へいにより作業環境を確保する。
2. ボルト接合部については、短時間の現地作業によって安定した品質確保及び品質管理が可能なトルシア型の高力ボルト接合法を採用する。

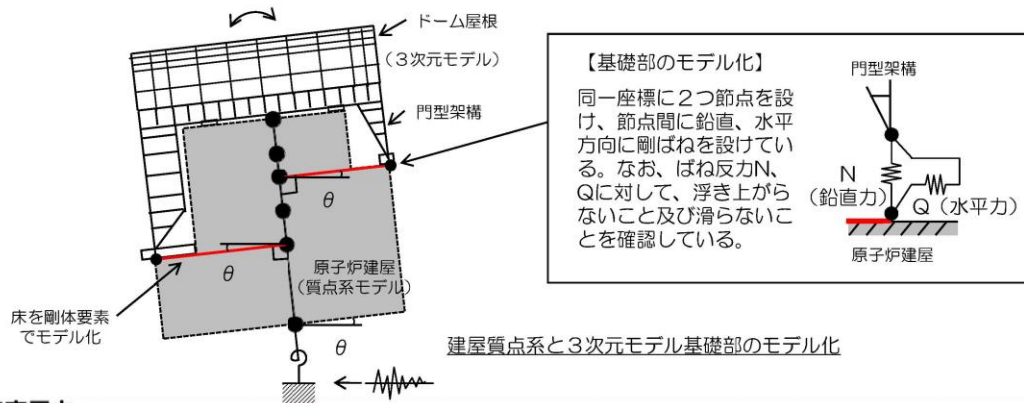


3. 施工品質の管理は、作業完了後に、施工会社（協力会社）が現場環境を考慮し、全数確認（遠隔操作室からのカメラまたはその他のカメラ、あるいは目視）を実施し、東京電力は抜き取りで確認を実施する。

## コメント回答⑤

⑤燃料取り出し用カバーの3次元モデルと原子炉建屋の質点系モデルを連成した地震応答解析モデルにおいて、原子炉建屋の剛体的なロッキング運動による燃料取り出し用カバーへの影響（架構基礎部からの鉛直動入力及び柱脚基礎部の相対変位）を反映されていることについて説明すること。

- ・ 建屋のロッキング運動による影響を模擬するため、距離効果を表現できる剛体要素で建屋質点系モデルと3次元モデルの基礎部を連結する。
- ・ さらに、基礎との連結部には鉛直と水平方向に剛ばねを設け、建屋から架構基礎への入力伝達が表現できる境界条件となっている。



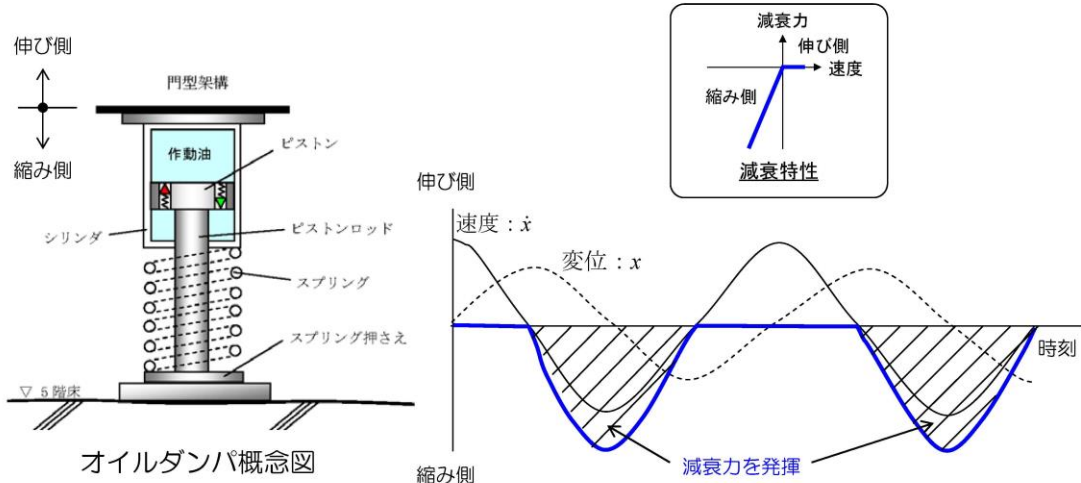
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## コメント回答⑥

⑥オイルダンパーの機構が分かりにくいので確認したい。資料に示された復元力特性は、横軸が速度で良いかについて確認したい。

オイルダンパーの減衰特性の横軸は速度を示している。

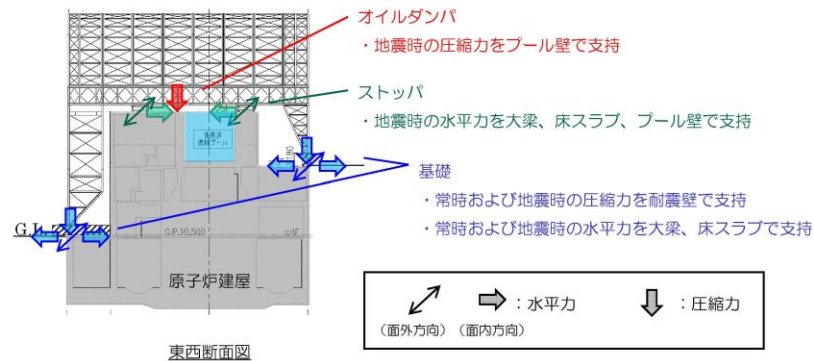
オイルダンパーは、地震時に上下方向の縮み側に変形する場合に減衰力が発生し、伸び側に変形する場合にフリーとなる機構を有している。



## コメント回答⑦

⑦今回設置する構造物の荷重が原子炉建屋にどのようにかかるのか。建屋カバー（燃料取り出し用カバー）を考慮した場合と考慮しない場合の建屋の耐震上の余裕の変化を主要な部分についてまとめて示して欲しい。

- ・燃料取り出し用カバーからの荷重は、ストッパ接触部、オイルダンパ接触部、基礎設置部から原子炉建屋に作用する。
- ・接触部の原子炉建屋躯体については、耐震安全性を確認している。（構造強度 p.43、耐震性 p.67）



※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## コメント回答⑦

- ・カバー設置前後の、原子炉建屋重量および、建屋の主要な耐震安全指標として、基準地震動Ssによる耐震壁の評価結果を以下に示す。
- ・原子炉建屋に対して、カバー設置による影響はほとんど見られない。



## コメント回答⑧

⑧燃料取り出し用カバー東側の2つの支点を支える置き基礎の直下、あるいはダンパの直下の既存コンクリート接触部の鉛直耐力は局所的な損傷等を考慮し十分な余裕を見ているか。あるいは補強などは行わないのか。

- ・燃料取り出し用カバーの基礎およびオイルダンパの支点は、直下に強固な耐震壁(オイルダンパ部はプール壁)のある部分に設定している。
- ・Ss地震時の評価結果は、以下に示す通り3倍以上の余裕のある結果となっている。

原子炉建屋接触部の耐震安全性評価結果

部位	検討用応力 (kN)	耐力 (kN)	耐力比	裕度
東側基礎	7430	25900	0.29	3.4
オイルダンパ	1250	6620	0.19	5.2



## コメント回答⑨

⑨東側置き基礎の滑り摩擦抵抗は直下に接する既存コンクリート部の損傷、凹凸など考慮したものになっているか。

- ・基礎は現地で既存コンクリート上部にコンクリートを流し込む方法で構築している。従って、凹凸などに対し密着性を確保している。
- ・日本建築学会「現場打ち同等型プレキャストコンクリート構造設計指針(案)・同解説(2002)」に様々な条件下での摩擦係数が規定されている。今回の基礎底面の摩擦抵抗は凹凸などは考慮せず、コンクリート-コンクリート間に相当すると考え、摩擦係数として0.6を採用している。

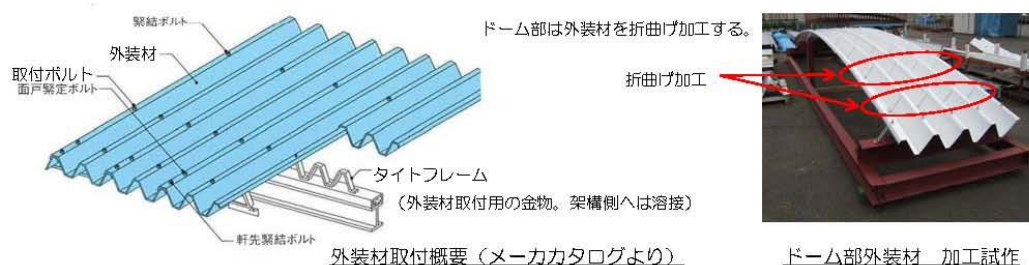
境界面の状態	摩擦係数
コンクリート-コンクリート間	0.6
目荒ししたコンクリート-コンクリート間	1.0
一体で打設したコンクリート-コンクリート間	1.4

- ・なお、米国規準 (AC I 318) でも、日本建築学会と同様、0.6の摩擦係数が規定されている。

## コメント回答⑩

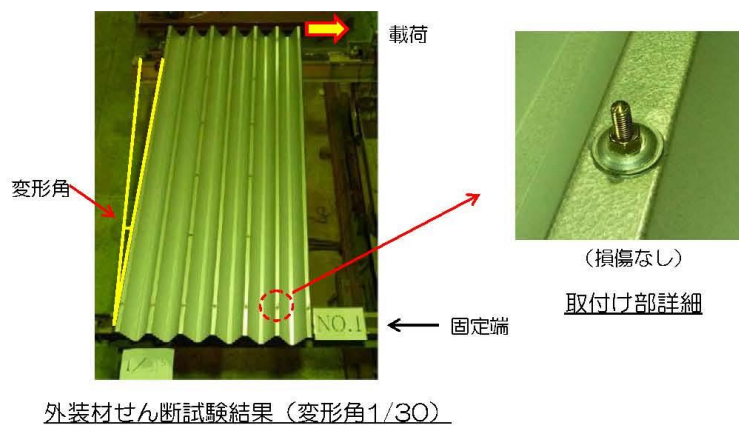
⑩燃料取り出し用カバーの外装材の耐震性は大丈夫か（地震時の層間変形に対して安全な構法か、特に東西面の円形部分）。

- ・外装材は下図に示す通り、ボルトを用いてタイトフレームを介して直接架構に取付ける納まりとなっている。



## コメント回答⑩

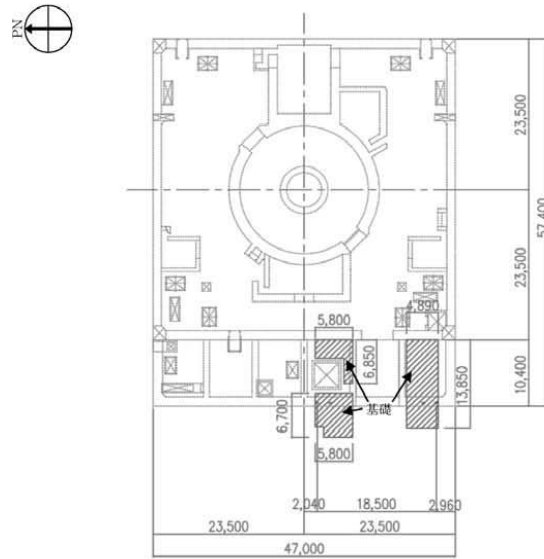
- ・変形に対する外装材の追従性の確認試験を行い、外装材の変形角1/30でも外装材は外れず、地震時の変形に対して追従性があることを確認している。



## 【参考資料】

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

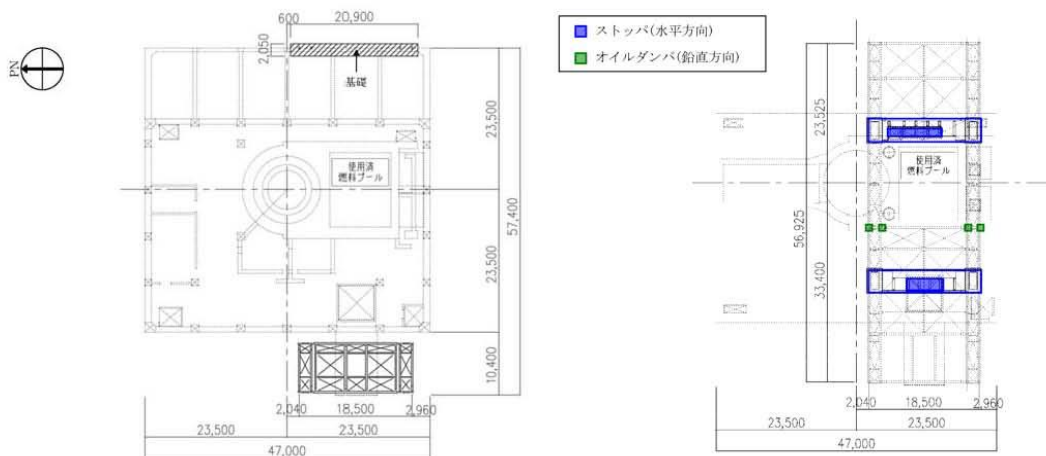
## 参考1 構造概要



(a) 基礎伏図 (O.P.10,500 原子炉建屋1階レベル+300mm)

燃料取り出し用カバーの概要 (単位: mm)

## 参考1 構造概要



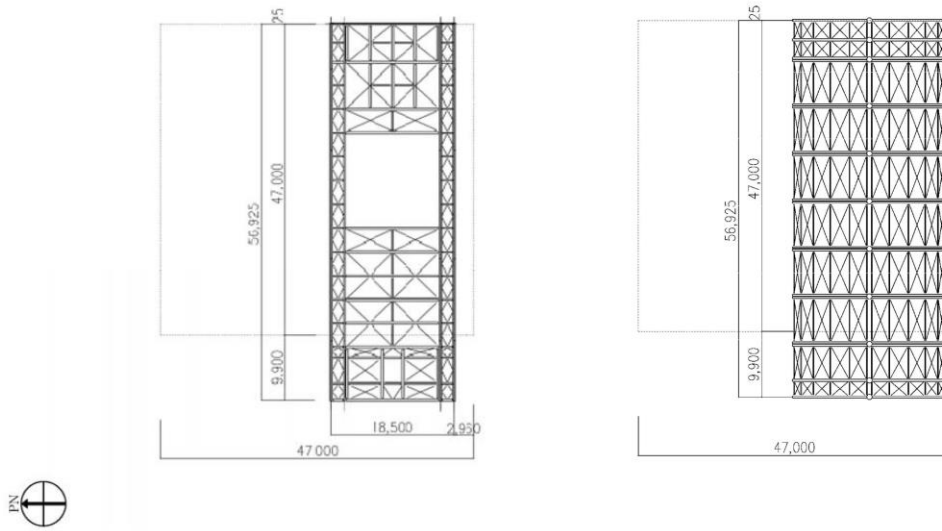
(a) 基礎伏図 (O.P.26,900 原子炉建屋3階)

(b) 梁伏図 (O.P.26,900 原子炉建屋5階)

燃料取り出し用カバーの概要 (単位: mm)

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 参考1 構造概要



(a) 架構カーダー部平面図 (O.P.46,000)

(b) 屋根伏図

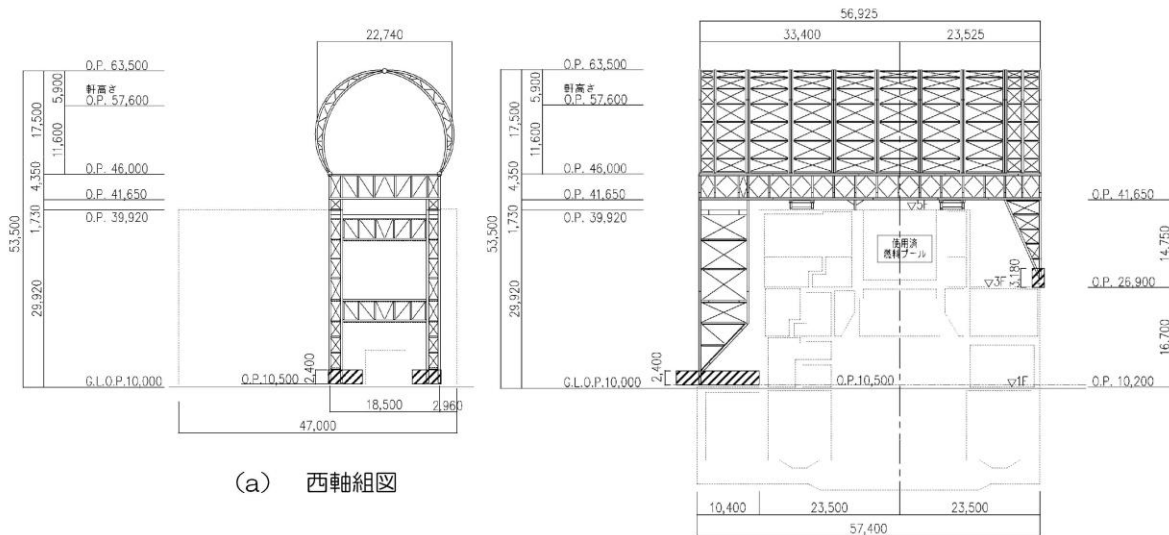
燃料取り出し用カバーの概要 (単位：mm)



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

30

## 参考1 構造概要



(a) 西軸組図

(b) 南軸組図

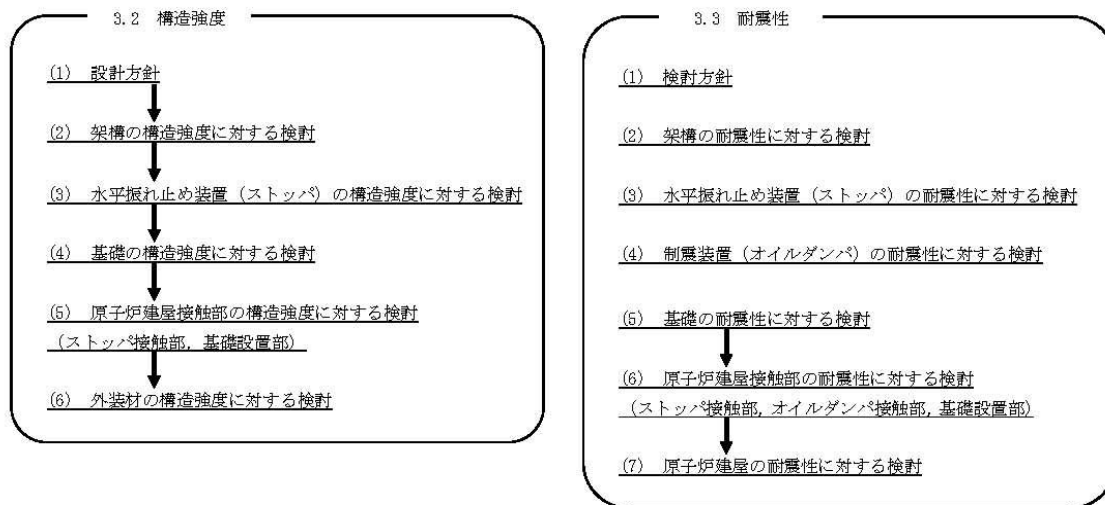
燃料取り出し用カバーの概要 (単位：mm)



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

31

## 参考2 検討フロー



## 参考3 構造強度

### (1) 設計方針

#### 1) 使用材料及び許容応力度

材料定数

部位	材料	ヤング係数 E (N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 $\nu$	単位体積重量 $\gamma$ (kN/m <sup>3</sup> )
架 構	鉄骨	$2.05 \times 10^5$	0.3	77.0
基 礎	コンクリート	$2.27 \times 10^4$	0.2	24.0

コンクリートの許容応力度

(単位: N/mm<sup>2</sup>)

設計基準強度=24	長期			短期		
	圧縮	引張	せん断	圧縮	引張	せん断
	8.0	—	0.73	16.0	—	1.095

鉄筋の許容応力度

(単位: N/mm<sup>2</sup>)

記号	鉄筋径	長期		短期	
		引張及び圧縮	せん断補強	引張及び圧縮	せん断補強
SD345	D29未満	215	195	345	345
	D29以上	195			

構造用鋼材の許容応力度

(単位: N/mm<sup>2</sup>)

板厚	材料	基準強度F	許容応力度
T ≤ 40mm	SS400, SN400B	235	「鋼構造設計規準」に従い、左記Fの値より求める
T > 40mm	SN400B	215	
T ≤ 40mm	SM490A, SN490B, STK490	325	
—	STKT590	440*	

\*「JIS G 3474-2008」による



※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考3 構造強度

### (1) 設計方針

### 2) 荷重及び荷重組合せ

#### ・鉛直荷重 (VL)

燃料取り出し用カバーに作用する鉛直方向の荷重で、固定荷重、機器荷重、配管荷重及び積載荷重とする。

#### ・燃料取扱設備荷重 (CL)

燃料取扱機	788 kN
クレーン	755 kN
吊荷	461 kN

#### ・積雪荷重 (SL)

積雪荷重は建築基準法施行令及び福島県建築基準法施行規則細則に準拠し以下の条件とする。

積雪量：30cm、単位荷重：20N/m<sup>2</sup>/cm

#### ・風圧力 (WL)

建築基準法施行令第87条に基づき、基準風速を30m/s、地表面粗度区分Ⅱとして算定する。

建物高さ*	平均風速の鉛直分布係数	ガスト影響係数	建物高さ粗度区分による係数	基準風速	速度圧
H (m)	Er	Gf	E	Vo (m/s)	q (N/m <sup>2</sup> )
50.55	1.27	2.00	3.23	30	1750



東京電力

※：建物高さは、軒高さ (47.60m) と最高高さ (53.50m) の平均値とした

無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

34

## 参考3 構造強度

### (1) 設計方針

### 2) 荷重及び荷重組合せ

#### ・地震荷重 (K)

燃料取り出し用カバーに作用させる地震荷重は、O.P.-2.06m (原子炉建屋基礎スラブ上端レベル) を基準面とした原子炉建屋の水平地震力の算定結果より設定する。原子炉建屋の水平地震力は下式より算定する。

$$Q_i = n \cdot C_i \cdot W_i$$

$$C_i = Z \cdot R_t \cdot A_i \cdot C_o$$

Q<sub>i</sub> : 水平地震力 (kN)

n : 施設の重要度に応じた係数 (n=1.5)  
建築基準法で定める地震力の1.5倍を考慮する。

C<sub>i</sub> : 地震層せん断力係数

Z : 地震地域係数 (Z=1.0)

R<sub>t</sub> : 振動特性係数 (R<sub>t</sub>=1.0)

A<sub>i</sub> : 地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数で、  
原子炉建屋の固有値を用いたモーダル解析法 (二乗和平方根法) より求める。

C<sub>o</sub> : 標準せん断力係数 (C<sub>o</sub>=0.2)



東京電力

無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

35

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 参考3 構造強度

### (1) 設計方針

### 2) 荷重及び荷重組合せ

#### ・地震荷重 (K)

i層の水平震度は下式より算定する。

$$P_i = Q_i - Q_{i-1}$$

$$k_i = P_i / w_i$$

$P_i$  : 当該階とその直下の水平地震力の差 (kN)

$w_i$  : 各階重量 (kN)

架構に作用させる水平震度は、原子炉建屋1階、3階及び5階の水平震度を用いるものとし、水平地震力を設定する。ドーム屋根部分の水平震度は、建設省告示第1389号に基づく1.0に1.5を乗じて用いる。表3.2-7に燃料取り出し用カバーに作用させる水平地震力の算定結果を示す。

水平地震力の算定結果

標高 O.P.(m)	各階重量 $w_i$ (kN)	NS方向		EW方向	
		水平震度 $k_i$	水平地震力 $P_i$ (kN)	水平震度 $k_i$	水平地震力 $P_i$ (kN)
63.50	3200	1.500	4800	1.500	4800
46.00	11400	0.492	5609	0.555	6327
26.90	200	0.286	57	0.272	54
10.20	1200	0.099	119	0.103	124



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

36

## 参考3 構造強度

### (1) 設計方針

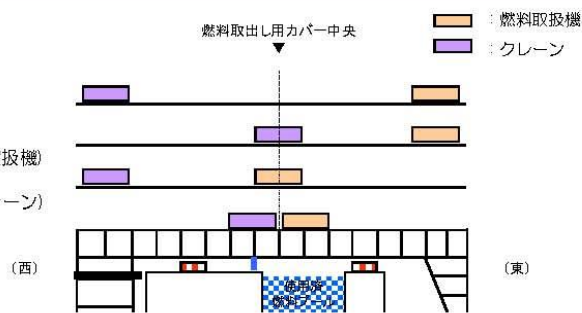
### 2) 荷重及び荷重組合せ

位置A：両端

位置B：中央(クレーン)+東端(燃料取扱機)

位置C：中央(燃料取扱機)+西端(クレーン)

位置D：中央



燃料取扱設備の位置

燃料取り出し用カバーの荷重組合せ

想定する状態	荷重ケース	荷重組合せ内容	許容応力度
常時	C	VL+CL *1	長期
積雪時*3	S	VL+CL *1+SL	
暴風時*3	W	VL+CL *1+WL	
地震時	E1	VL+CL *1+K(+NS) *2	短期
	E2	VL+CL *1+K(-NS) *2	
	E3	VL+CL *1+K(+EW) *2	
	E4	VL+CL *1+K(-EW) *2	

\*1：吊荷荷重は、常時、積雪時及び暴風時は上図に示すクレーンの位置、地震時は使用済燃料プール直上の架構にて考慮する。

\*2：地震荷重はNS方向及びEW方向を考慮する。

\*3：短期事象では地震時が支配的であることから、積雪時及び暴風時の検討は省略する。

ただし、外装材の検討は暴風時が支配的であることから暴風時に対し検討を行う。



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

37

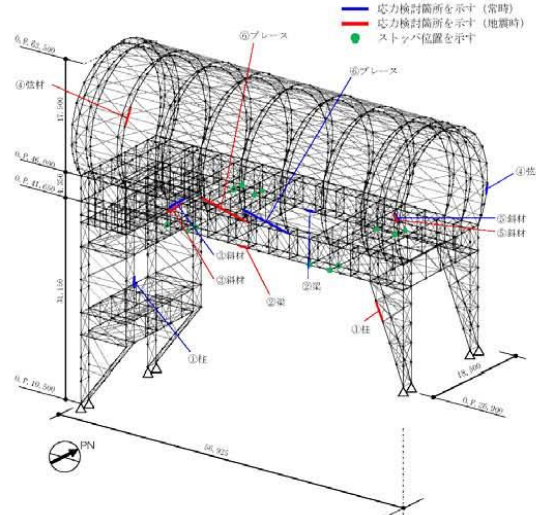
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考3 構造強度

### (2) 架構の強度設計構造強度に対する検討

#### 1) 解析モデル

架構の解析モデルは、門型架構及びドーム屋根を構成する主要な鉄骨部材からなる立体架構モデルとする。下図に架構の立体解析モデルを示す。解析モデルの柱脚部はピン支持、ストッパ取り付け部は水平方向のみピン支持とする。



解析モデル図 (単位: mm)

## 参考3 構造強度

### (2) 架構の強度設計構造強度に対する検討

#### 2) 断面検討

応力度比の検討は「鋼構造設計規準」に従い、検討を行う。  
 全ての部材に対する応力度比が1以下になることを確認した。

断面検討結果 (常時)

部位*1		部材形状 (mm) <使用材料>	荷重ケース (位置) *2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
門型 架構	①	柱 H-350×350 ×12×19 <SM490>	C (D)	圧縮 77.4	164	0.48	O.K.
	②	梁 H-350×350 ×12×19 <SM490>	C (D)	引張 91.4	216	0.43	O.K.
	③	斜材 2ls-150×75 ×6.5×10 <SM490>	C (D)	圧縮 103.0	120	0.86	O.K.
ドーム 屋根	④	弦材 φ-318.5×6.9 <STK490>	C (B)	引張 33.5	293	0.12	O.K.
	⑤	斜材 φ-139.8×4.5 <STK490>	C (B)	圧縮 4.34	203	0.22	O.K.
	⑥	ブレース φ-114.3×4.5 <STK490>	C (D)	圧縮 1.94	92	0.22	O.K.

\*1: ①~⑥の符号はP24の応力検討箇所を示す

\*2: P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

# 参考3 構造強度

## (2) 架構の強度設計構造強度に対する検討

### 2) 断面検討

断面検討結果（地震時）

部 位*1		部材形状 (mm) 〈使用材料〉	荷重ケース (位置)*2	作用 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容 応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
門型 架構	①	柱 H-350×350 ×12×19 〈SM490〉	E1 (D)	圧縮 138.9	289	0.49	O.K.
	②	梁 H-350×350 ×12×19 〈SM490〉	E1 (D)	引張 108.3	324	0.34	O.K.
	③	斜材 2[s-150×75 ×6.5×10 〈SM490〉	E1 (D)	圧縮 164.5	180	0.92	O.K.
ドーム 屋根	④	弦材 φ-267.4×6.6 〈STKT590〉	E1 (D)	圧縮 155.2	396	0.40	O.K.
	⑤	斜材 φ-139.8×4.5 〈STK490〉	E3 (A)	圧縮 165.8	304	0.55	O.K.
	⑥	ブレース φ-114.3×4.5 〈STK490〉	E3 (D)	圧縮 80.6	138	0.59	O.K.

\*1：①～⑥の符号はP24の応力検討箇所を示す

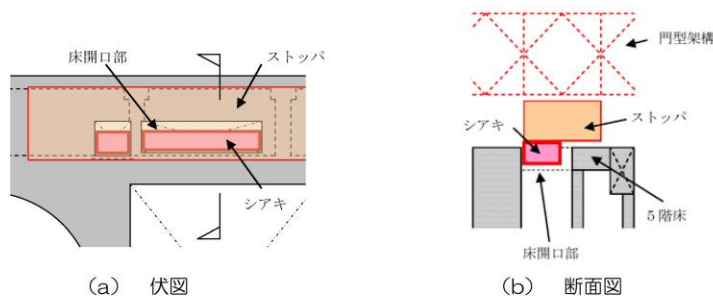
\*2：P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

# 参考3 構造強度

## (3) 水平振れ止め装置（ストップ）の構造強度に対する検討

架構と原子炉建屋を結んだバネ材に発生する水平力の最大値が、床開口に差し込むシアキの短期許容せん断力以下であることを確認する。全ての部材に対する応力度比が1以下になることを確認した。

なお、原子炉建屋と水平振れ止め装置（ストップ）の接触部については、設置前において、本説明書で想定しているように、施工に十分な状況かどうか、雰囲気線量等の作業安全性を鑑みながら、可能な範囲で確認した点検結果を別途報告するとともに、不具合が見つかった場合には適切に補修等を実施する。



ストップ概要図

全てのストップに対する応力比が1以下になることを確認した。

断面検討結果（常時）

部位	荷重ケース (位置)*	ストップ反力 Q(kN)	短期許容せん断力 Qa(kN)	応力比 Q/Qa	判定
東側ストップ	E4 (A)	2560	8620	0.30	O.K.

\*：P23に示す燃料取扱設備の位置を示す



## 参考3 構造強度

### (4) 基礎の構造強度に対する検討

基礎の浮き上がりに対しては基礎反力（圧縮力を正）の最小値が0以上であることを確認し、基礎のすべりに対しては基礎反力の水平力が許容摩擦力以下であることを確認する。

なお、基礎底面の摩擦係数は「現場打ち同等型プレキャスト鉄筋コンクリート構造設計指針(案)・同解説(2002)」に準じて、0.6とする。

基礎浮き上がりの検討の結果、全ての基礎の最小圧縮力が0以上であることを確認した。

基礎浮き上がりの検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	最小圧縮力 N(kN)	判定
東側柱脚 (北側)	E1 (C)	1990	OK

\*: P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

基礎すべりの検討の結果、全ての基礎に対する応力比が1以下であることを確認した。

基礎すべりの検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	水平力 Q(kN)	許容摩擦力 Va(kN)	応力比 Q/Va	判定
東側柱脚	C (D)	2410	5270	0.46	OK
	E4 (D)	2430	4580	0.54	OK

\*: P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

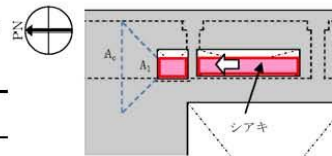
## 参考3 構造強度

### (5) 原子炉建屋接触部の構造強度に対する検討

#### 1) ストッパ接触部

ストッパ接触部の構造強度の検討では、ストッパ水平反力が、既存躯体の短期許容支圧力以下になることを確認する。なお、許容支圧応力度は、原子炉建屋の設計基準強度(22.1N/mm<sup>2</sup>)を用いて「プレストレスコンクリート設計施工規程・同解説」に基づき算出する。

全てのストッパ接触部に対する応力比が1以下であることを確認した。



ストッパ接触部の検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	ストッパ水平反力 N(kN)	短期許容支圧力 Na(kN)	応力比 N/Na	判定
東側ストッパ	E2 (B)	3980	10300	0.39	OK

\*: P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

#### 2) 基礎設置部

柱脚の鉛直反力により生じる直下壁の軸力が壁の許容軸力以下であることを確認する。

全ての基礎設置部に対する応力比が1以下であることを確認した。

壁の圧縮力の検討結果

部位	荷重ケース (位置)*	軸力 N(kN)	許容軸力 Na(kN)	応力比 N/Na	判定
東側柱脚 (南側)	C (B)	4280	12900	0.34	OK
	E1 (B)	6540	25900	0.26	OK

\*: P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

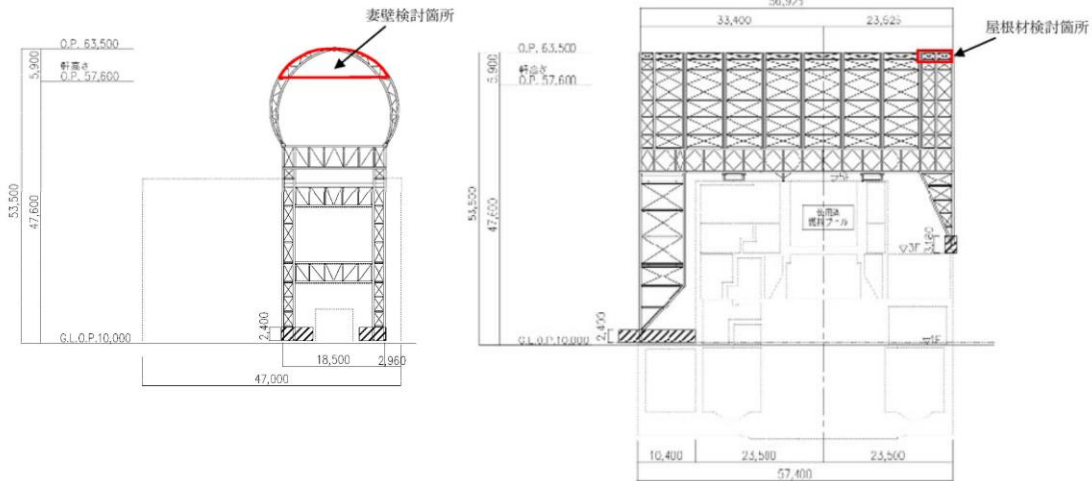
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考3 構造強度

### (6) 外装材の構造強度に対する検討

#### 1) 検討箇所

架構の屋根面及び側面を覆う外装材は、折板を用いる。強度検討は、壁材、屋根材それぞれに風圧力により生じる応力度が短期許容応力度以下であることを確認する。



外装材検討箇所 (単位: mm)

## 参考3 構造強度

### (6) 外装材の構造強度に対する検討

#### 3) 外装材の強度検討

全ての外装材に対する応力度比が1以下になることを確認した。

屋根材及び壁材の材料諸元

板厚	自重	正曲げ方向		負曲げ方向	
		断面2次モーメント	断面係数	断面2次モーメント	断面係数
t (mm)	G (N/m <sup>2</sup> )	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)	I <sub>x</sub> (cm <sup>4</sup> /m)	Z <sub>x</sub> (cm <sup>3</sup> /m)
0.8	118	360	43.6 (13.1*)	347	40.6 (12.2*)

\*: 括弧内の数値は折曲加工部を示す

応力度に対する検討結果

部位	作用応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	許容応力度 (N/mm <sup>2</sup> )	応力度比	判定
ドーム屋根	189	205*	0.93	O.K.
妻壁	109	205*	0.54	O.K.

\*: 「JIS G 3321-2010」による

(注) ドーム屋根外装材については、設計風圧力の約4倍の耐力を有することを試験により確認している。

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考4 耐震性

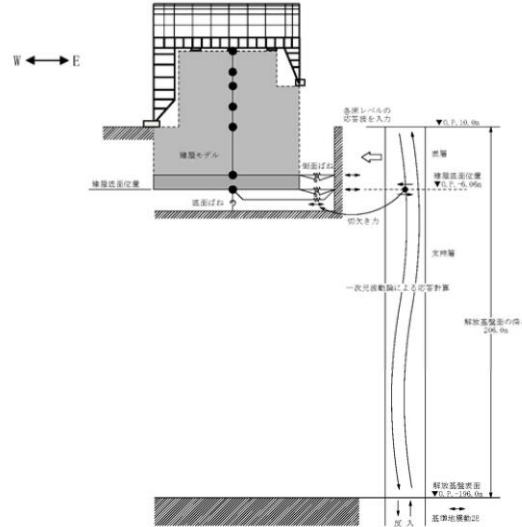
### (1) 検討方針

耐震性の検討は、架構、水平振れ止め装置（ストッパ）、制震装置（オイルダンパ）、基礎、原子炉建屋接触部及び原子炉建屋の健全性について行い、基準地震動Ssに対して、これらの応答性状を適切に表現できる地震応答解析を用いて評価する。なお、地震応答解析は水平方向及び鉛直方向を同時に入力する。

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 1) 解析に用いる入力地震動

検討用地震動は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」（東京電力株式会社，平成20年3月31日）にて作成した解放基盤表面で定義される基準地震動Ssを用いる。



地震応答解析に用いる入力地震動の概念図

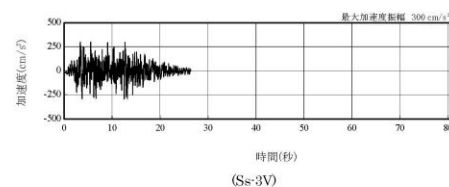
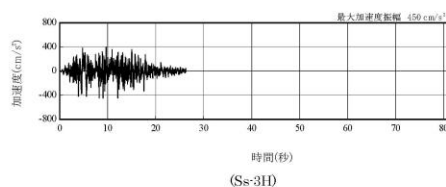
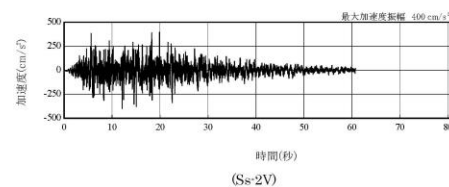
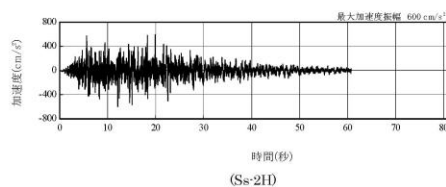
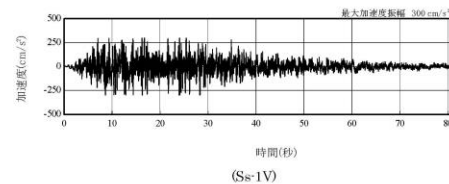
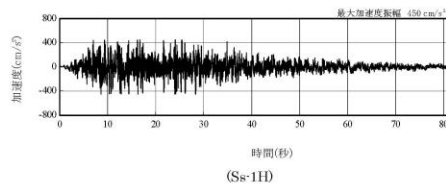


無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 1) 解析に用いる入力地震動



解放基盤表面位置における地震動の  
 加速度時刻歴波形(水平方向)

解放基盤表面位置における地震動の  
 加速度時刻歴波形(鉛直方向)



無断複製・転載禁止 東京電力株式会社



※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

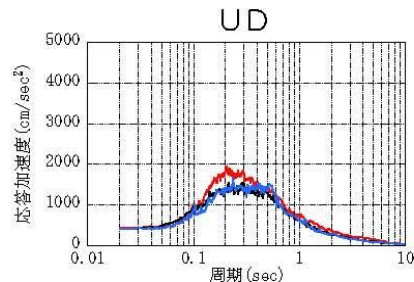
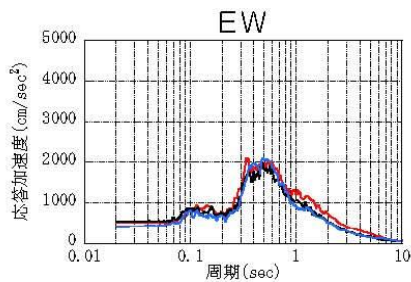
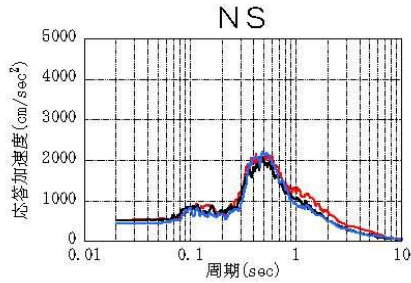
## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 1) 解析に用いる入力地震動

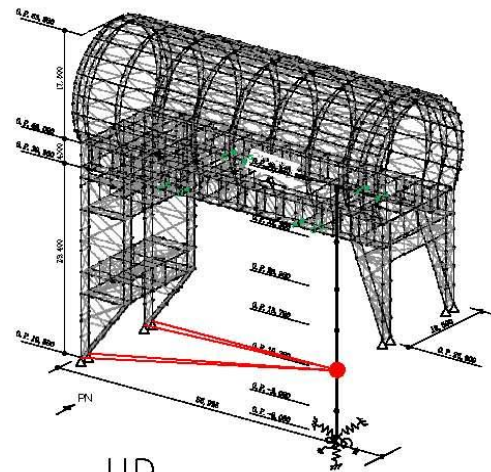
建屋質点の応答解析結果（カバー架構の入力地震動に相当）

1F



(h=2%)

— Ss-1  
 — Ss-2  
 — Ss-3



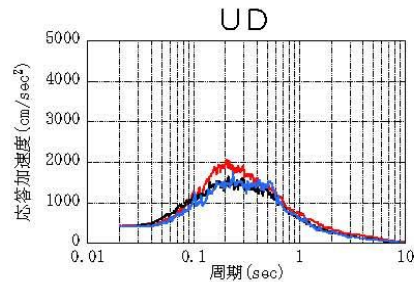
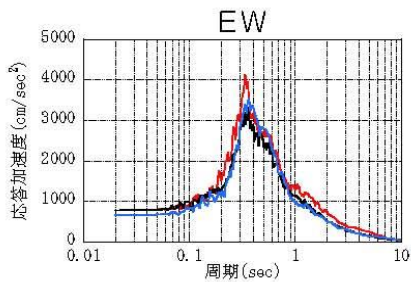
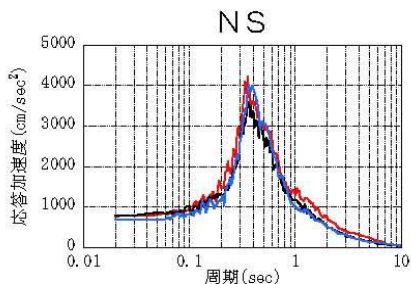
## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 1) 解析に用いる入力地震動

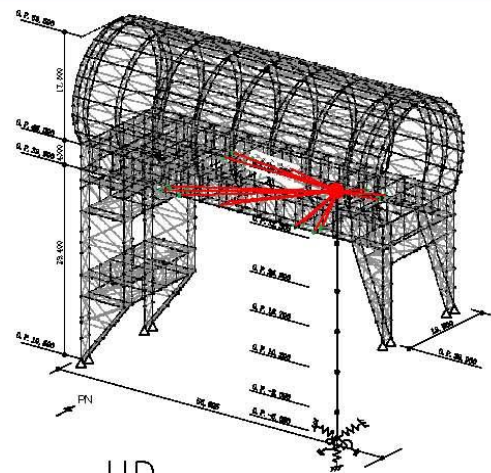
建屋質点の応答解析結果（カバー架構の入力地震動に相当）

5F



(h=2%)

— Ss-1  
 — Ss-2  
 — Ss-3





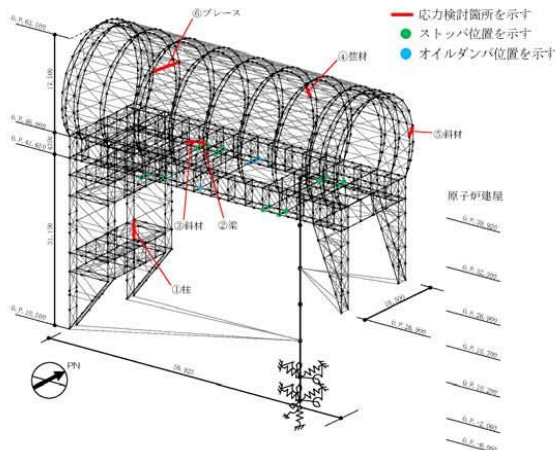
※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルは、門型架構及びドーム屋根を構成する主要な鉄骨部材からなる立体架構を原子炉建屋の質点系モデルに接続した下図に示すモデルとし、地盤を等価ばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。ストップ取り付け部は原子炉建屋5階質点（O.P.39.92 m）と水平方向同一変位条件とし、鉛直方向の制震装置（オイルダンパ）は原子炉建屋の5階床上面4箇所に門型架構と5階床の鉛直方向相対変位が減少する場合に減衰力を発揮するばねに置換して立体架構モデルに組み込んでいる。



地震応答解析モデル（単位：mm）

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析に用いる物性値を下表に示す。門型架構及びドーム屋根の部材接合部の質点は仕上げ材等を考慮した重量とし、原子炉建屋の質点は瓦礫撤去の重量等を反映したP38に示す重量とする。門型架構の柱・梁及びドーム屋根の弦材は弾性部材とし、その他ブレース等は「鉄骨X型ブレース架構の復元力特性に関する研究」（日本建築学会構造工学論文集37B号 1991年3月）に示されている修正若林モデルによる。また、原子炉建屋は、曲げとせん断に「JEAG 4601-1991」に示されている非線形特性を考慮する。

地震応答解析に用いる物性値

部位	材料	ヤング係数 E(N/mm <sup>2</sup> )	ポアソン比 ν	単体積重量 γ(kN/m <sup>3</sup> )	減衰定数 h(%)	備考
架構	鉄骨	2.05×10 <sup>5</sup>	0.3	77.0	2	SS400,SM490A, STK490,STKT590

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 2) 地震応答解析モデル

地震応答解析モデルのうち原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元

(a)水平(NS)方向

標高 O.P. (m)	質点重量* W (kN)	回転慣性重量 $I_g$ ( $\times 10^5$ kN·m <sup>2</sup> )	せん断断面積 $A_s$ (m <sup>2</sup> )	断面二次モーメント I (m <sup>4</sup> )
39.92	72990	76.95		
32.3	119490	238.33	145.3	9598
26.9	111140	204.58	146.1	29271
18.7	130160	239.58	237.3	56230
10.2	252510	464.88	208.6	60144
-2.06	301020	554.17	458.7	112978
-6.06	127000	233.79	2697.8	496620
合計	1114310			
		ヤング係数Ee	2.57×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> )	
		せん断弾性係数G	1.07×10 <sup>7</sup> (kN/m <sup>2</sup> )	
		ポアソン比ν	0.20	
		減衰h	5%	

\* 「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書(その2)」(東京電力株式会社、平成23年7月13日)において用いた各階重量に互換除去等による重量増減を考慮した数値(ただし、門型架構の重量12800kN及びドーム屋根重量3200kNは含まない)

地盤定数は、「福島第一原子力発電所『発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針』の改訂に伴う耐震安全性評価結果 中間報告書」(東京電力株式会社、平成20年3月31日)と同様とする。原子炉建屋の地盤ばねは、「JEAG 4601-1991」に示されている手法を参考にして、底面地盤を成層補正し振動アードミッタンス理論によりスウェイ及びロッキングばねを、側面地盤をNovakの方法により建屋側面ばねを評価した。



東京電力

無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

52

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 2) 地震応答解析モデル

固有値解析結果

次数	固有振動数 (Hz)	固有周期 (秒)	刺激係数			備考
			NS方向 (X方向)	EW方向 (Y方向)	UD方向 (Z方向)	
17	1.35	0.742	3.034	-0.001	-0.019	ドーム屋根NS方向1次
25	1.78	0.561	-0.056	2.478	0.422	ドーム屋根EW方向1次
33	2.53	0.396	2.914	-0.031	-0.045	門型架構・原子炉建屋NS方向1次
34	2.65	0.377	-0.111	-7.751	-0.073	門型架構・原子炉建屋EW方向1次
35	2.94	0.340	2.165	-0.950	4.500	門型架構UD方向1次
54	4.30	0.233	-0.428	0.038	-40.498	原子炉建屋UD方向1次



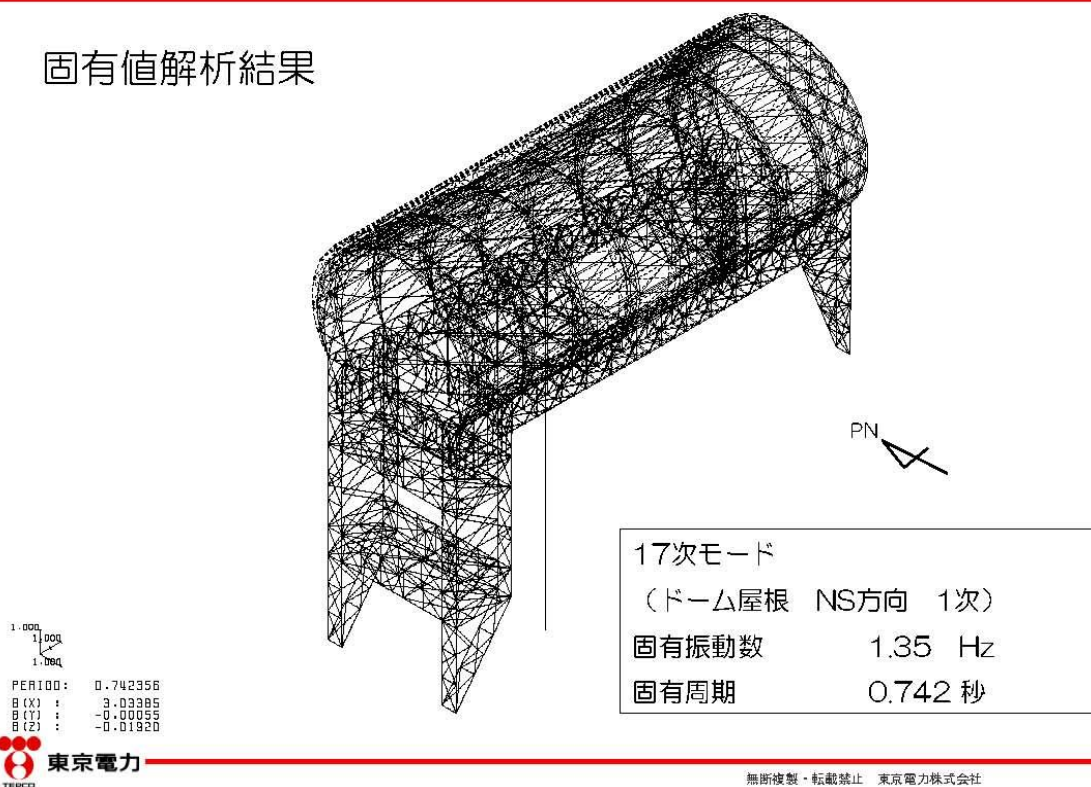
東京電力

無断複製・転載禁止 東京電力株式会社

53

## 参考4 耐震性

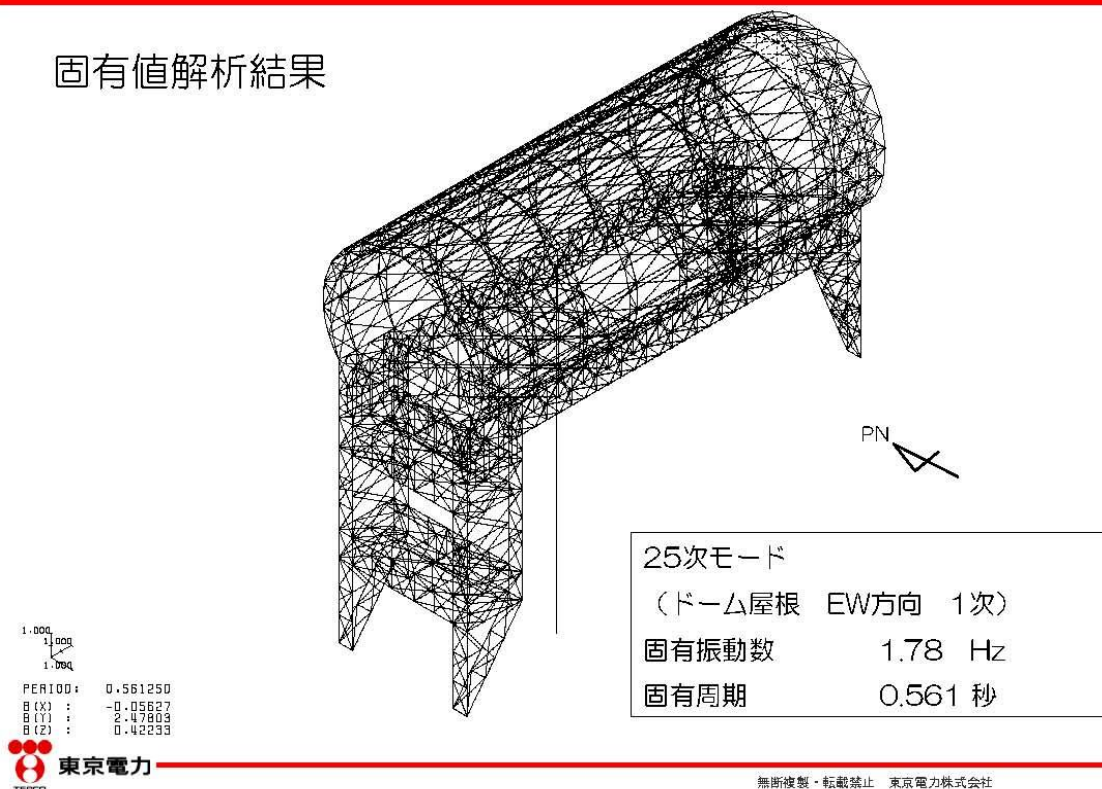
### 固有値解析結果



54

## 参考4 耐震性

### 固有値解析結果

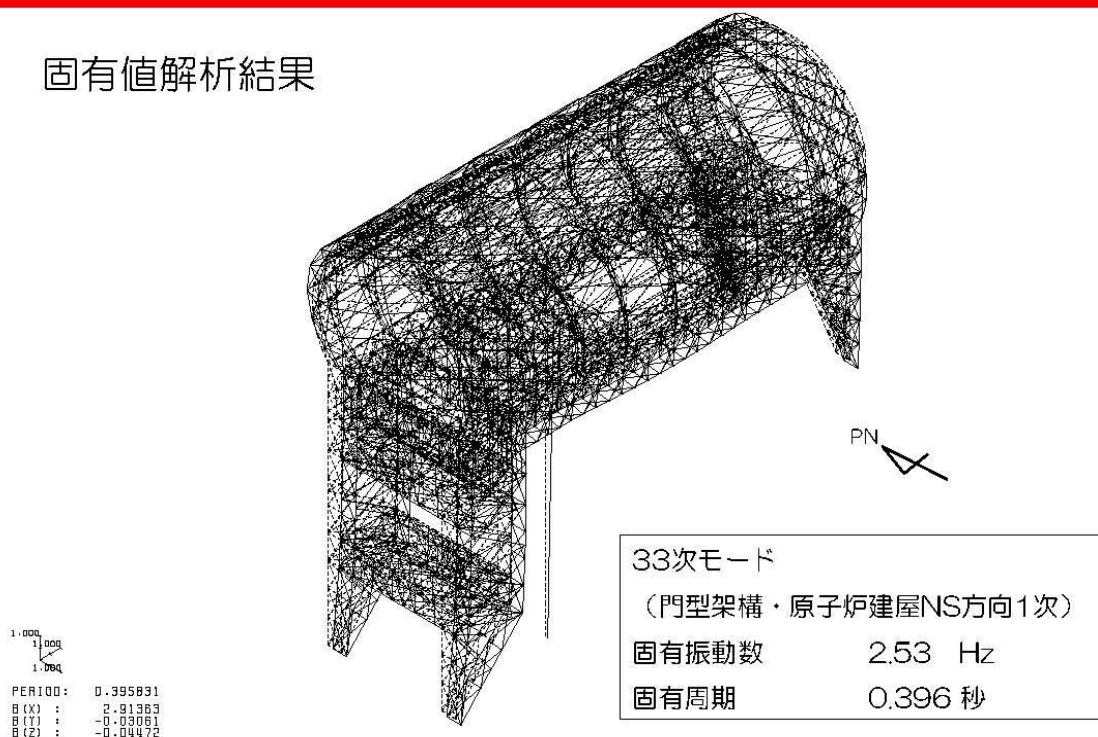


55



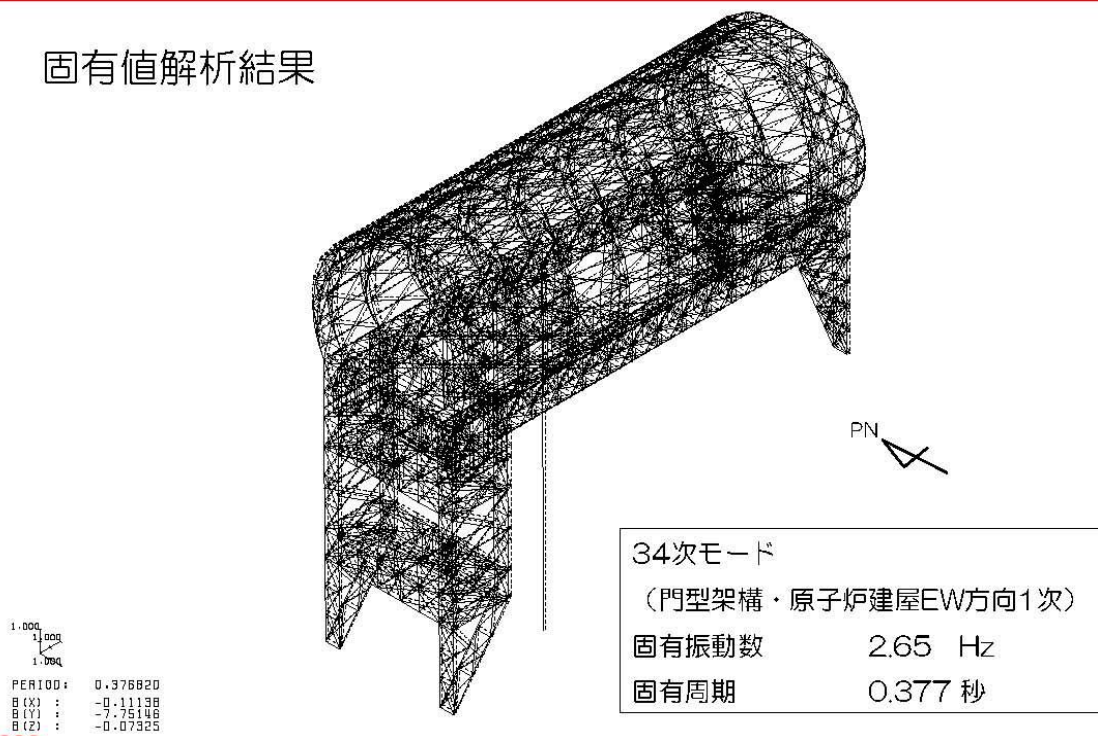
## 参考4 耐震性

固有値解析結果



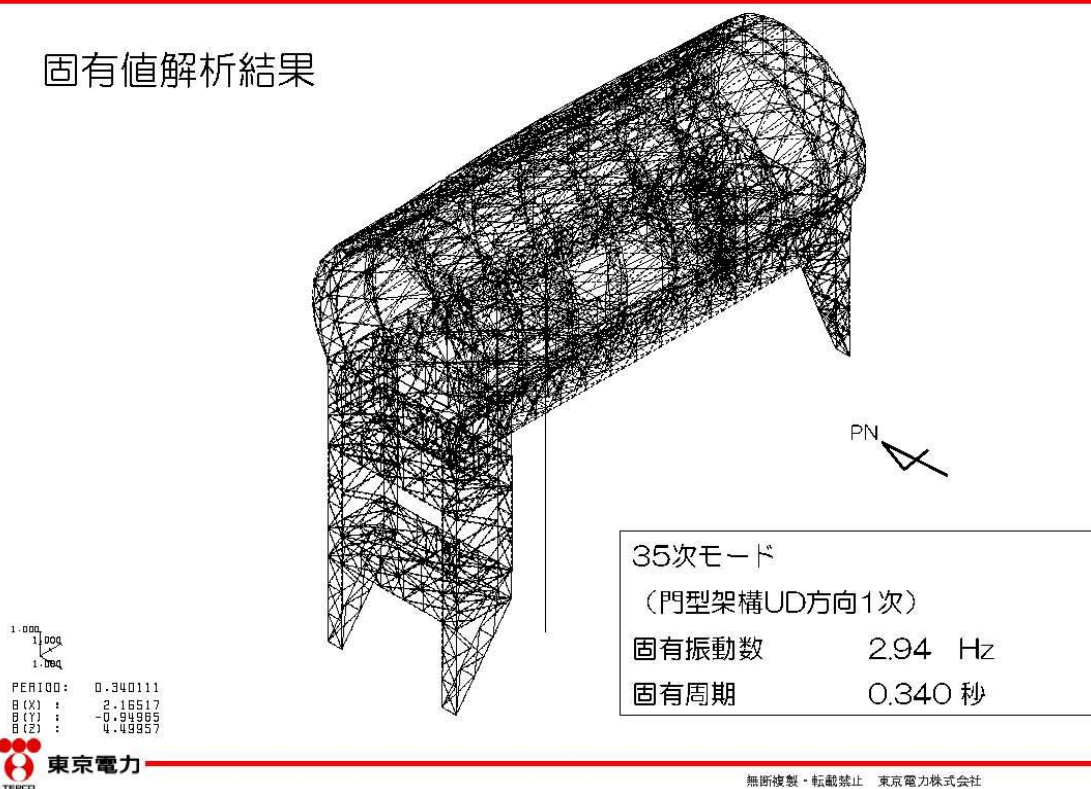
## 参考4 耐震性

固有値解析結果



## 参考4 耐震性

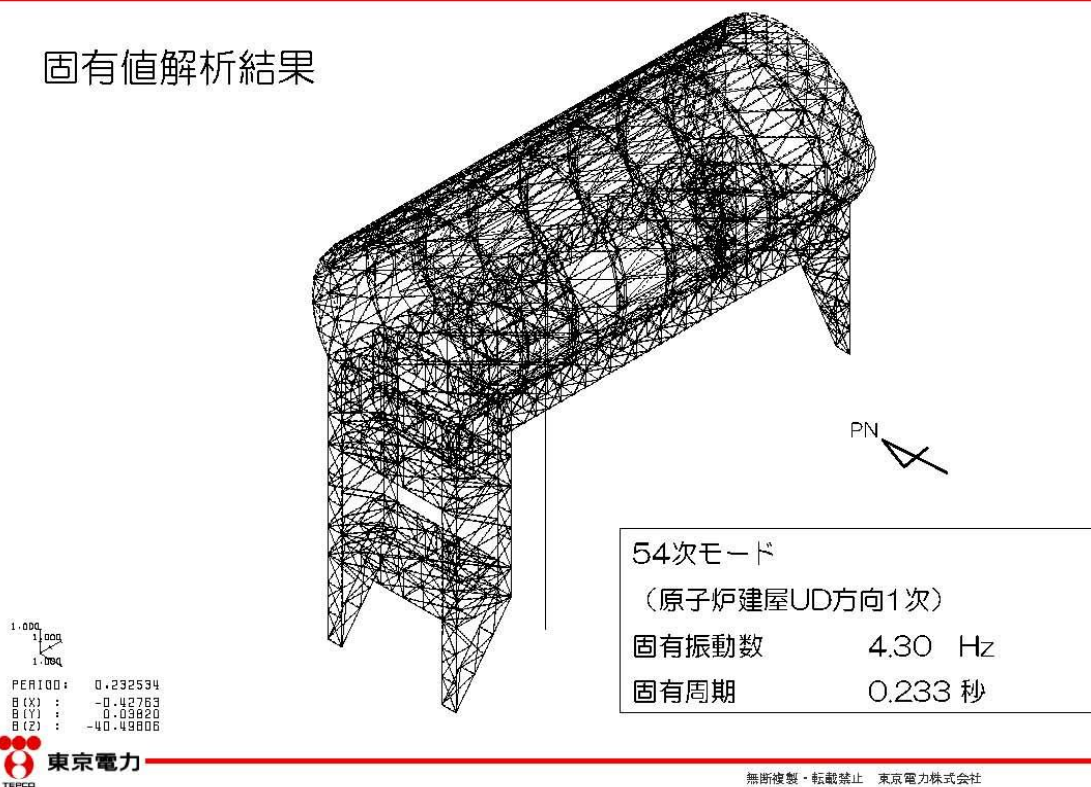
固有値解析結果



58

## 参考4 耐震性

固有値解析結果



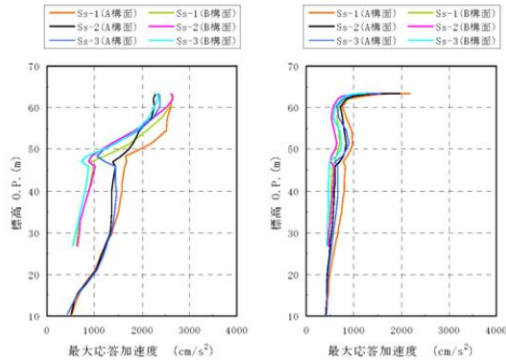
59

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

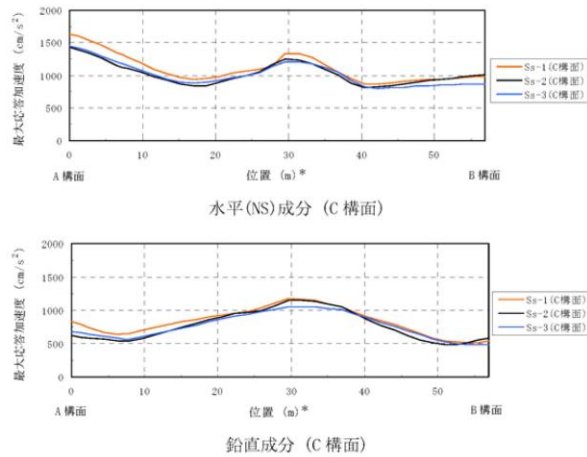
## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 3) 地震応答解析結果

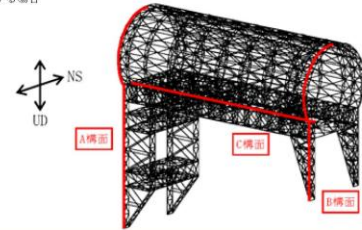


水平(NS)成分 (A構面, B構面) 鉛直成分 (A構面, B構面)



注：燃料取扱設備が門型架構の中央に位置する場合  
 (図3.2-1の位置D)を示す  
 \*：位置はA構面側からの距離を示す

最大応答加速度分布



## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 4) 波及的影響の評価

門型架構は、JSCA性能メニュー（社団法人日本建築構造技術者協会、2002年）を参考に定めたクライテリア（「層間変形角は1/75以下、層の塑性率は4以下、部材の塑性率は5以下」\*）を満足することを確認する。ドーム屋根は、柱・梁によるフレームを構成しないため、JSCA性能メニューのうち部材の塑性率のクライテリアを満足することを確認する。

なお、解析結果が「時刻歴応答解析建築物性能評価業務方法書」（財団法人日本建築センター、平成19年7月20日）に示されるクライテリア（層間変形角は1/100以下、層の塑性率は2以下、部材の塑性率は4以下）を超える場合には水平変形に伴う鉛直荷重の付加的影響を考慮した解析を実施し、安全性を確認する。

\*：北村春幸、宮内洋二、浦本弥樹「性能設計における耐震性能判断基準値に関する研究」、日本建築学会構造系論文集、第604号、2006年6月



※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
 T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 4) 波及的影響の評価

##### ・層間変形角の検討

最大応答層間変形角は1/75以下となりクライテリアを満足することを確認した。

最大応答層間変形角の検討結果

検討箇所	地震波	入力方向(位置)*	最大応答値	変形率	判定
東側 O.P.46.00(m) ~O.P.26.90(m)	Ss-1	NS (A)	1/820	1/75	OK
		EW (B)	1/990	1/75	OK
	Ss-2	NS (B)	1/990	1/75	OK
		EW (B)	1/1000	1/75	OK
	Ss-3	NS (B)	1/990	1/75	OK
		EW (B)	1/1000	1/75	OK
西側 O.P.46.00(m) ~O.P.10.50(m)	Ss-1	NS (A)	1/720	1/75	OK
		EW (B)	1/1600	1/75	OK
	Ss-2	NS (C)	1/860	1/75	OK
		EW (B)	1/1600	1/75	OK
	Ss-3	NS (C)	1/800	1/75	OK
		EW (B)	1/1800	1/75	OK

\*: P.23に示す燃料取扱設備の位置を示す

## 参考4 耐震性

### (2) 架構の耐震性に対する検討

#### 4) 波及的影響の評価

##### ・塑性率の検討

全てのケースで耐力比が1を下回ることから塑性率は1未満となり、クライテリアを満足することを確認した。

耐力比の検討結果

部位*1		部材形状 (mm)	地震波	入力方向 (位置)*2	耐力比		判定
門型架構	①	柱 H-350×350 ×12×19 <SM490A>	Ss-2	NS (C)	C/Cu	0.50	OK
	②	梁 H-350×350 ×12×19 <SM490A>	Ss-1	NS (C)	C/Cu	0.45	OK
	③	斜材 2[s-150×75 ×6.5×10 <SM490A>	Ss-1	NS (C)	C/Cu	0.75	OK
ドーム屋根	④	弦材 φ-267.4×6.6 <STKT590>	Ss-1	NS (D)	C/Cu	0.63	OK
	⑤	斜材 φ-139.8×4.5 <STK490>	Ss-1	EW (D)	C/Cu	0.90	OK
	⑥	ブレース φ-114.3×4.5 <STK490>	Ss-2	EW (C)	C/Cu	0.45	OK

\*1: ①~⑥の符号はP.36の耐力検討箇所を示す  
 \*2: P.23に示す燃料取扱設備の位置を示す

C: 部材軸方向の圧縮力の最大値  
 Cu: 座屈耐力  
 T: 部材軸方向の引張力の最大値  
 Tu: 引張耐力

## 参考4 耐震性

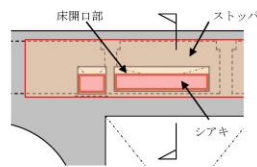
### (3) 水平振れ止め装置（ストップ）の耐震性に対する検討

全てのストップに対する耐力比が1以下になることを確認した。

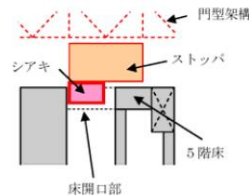
ストップ（シアキ）の断面検討結果

部位	地震波	入力方向（位置）	最大応答 ストップ反力 Q <sub>u</sub> (kN)	せん断耐力 Q <sub>u</sub> (kN)	耐力比 Q/Q <sub>u</sub>	判定
東側ストップ	Ss-1	EW (D)	3970	9480	0.42	OK

\*：P23に示す燃料取扱設備の位置を示す



(a) 伏図



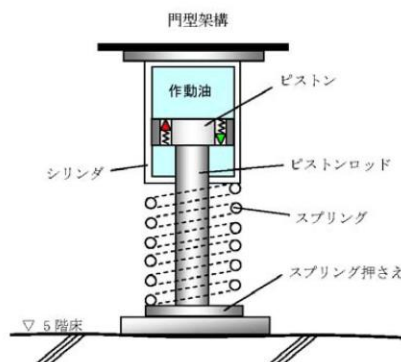
(b) 断面図

ストップ概要図

## 参考4 耐震性

### (4) 制震装置（オイルダンパ）の耐震性に対する検討

全てのオイルダンパで最大応答値が許容値以下になることを確認した。



オイルダンパ概念図

オイルダンパの検討結果

検討	地震波	入力方向 (位置)*	最大応答値	許容値	判定
オイルダンパ変位 (mm)	Ss-3	NS (D)	72	±100	OK
オイルダンパ速度 (m/s)	Ss-1	NS (D)	0.48	1.00	OK

\*：P23に示す燃料取扱設備の位置を示す



## 参考4 耐震性

### (5) 基礎の耐震性に対する検討

基礎の浮き上がりに対しては基礎反力（圧縮力を正）の最小値が以上であることを確認し、基礎のすべりに対しては基礎反力の水平力が摩擦耐力以下であることを確認した。

#### 1) 基礎浮き上がりの検討

基礎浮き上がりの検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最小圧縮力 N(kN)	判定
東側柱脚 (北側)	Ss-3	NS (C)	227	OK

\* : P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

#### 2) 基礎すべりの検討

基礎すべりの検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最大水平力 Q(kN)	摩擦耐力 Vu(kN)	耐力比 Q/Vu	判定
東側柱脚	Ss-1	EW (D)	2810	4780	0.59	OK

\* : P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

## 参考4 耐震性

### (6) 原子炉建屋接触部の耐震性に対する検討

#### 1) ストッパ接触部

最大ストッパ水平反力が、既存躯体の支圧耐力以下になることを確認する。なお、支圧耐力は、原子炉建屋の設計基準強度(22.1N/mm<sup>2</sup>)を用いて「プレストレストコンクリート設計施工規準・同解説」に基づき算出する。

ストッパ接触部の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最大ストッパ 水平反力 N(kN)	支圧耐力 Nu(kN)	耐力比 N/Nu	判定
西側ストッパ	Ss-1	NS (C)	10400	19600	0.54	OK

\* : P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

#### 2) オイルダンバ接触部

最大オイルダンバ鉛直反力が、既存躯体の支圧耐力以下になることを確認する。なお、支圧耐力は、原子炉建屋の設計基準強度(22.1N/mm<sup>2</sup>)を用いて「プレストレストコンクリート設計施工規準・同解説」に基づき算出する。

オイルダンバ接触部の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最大水平力 Q(kN)	摩擦耐力 Vu(kN)	耐力比 Q/Vu	判定
東側柱脚	Ss-1	EW (D)	2810	4780	0.59	OK

\* : P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

#### 3) 基礎設置部

柱脚の鉛直反力により生じる直下壁の最大軸力が壁の軸耐力以下であることを確認する。

壁の圧縮力の検討結果

部位	地震波	入力方向 (位置)*	最大軸力 N(kN)	軸耐力 Nu(kN)	耐力比 N/Nu	判定
東側柱脚 (南側)	Ss-3	NS (B)	7430	25900	0.29	OK

\* : P23に示す燃料取扱設備の位置を示す

※O.P.表記は震災前の「旧 O.P.表記」を指す。  
T.P.表記に換算する際は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算する。  
<換算式> T.P.=旧 O.P.-1,436mm

## 参考4 耐震性

### (7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

#### 1) 検討方針

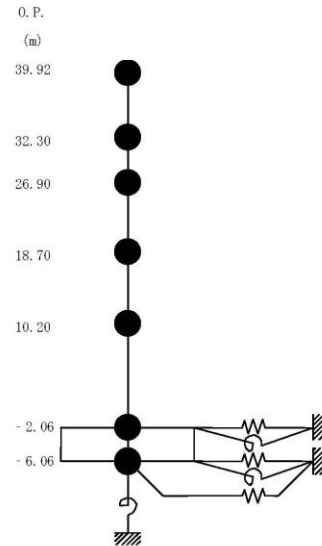
架構の設置に伴う原子炉建屋の耐震性の評価は、耐震安全上重要な設備への波及的影響防止の観点から、地震応答解析により得られる耐震壁のせん断ひずみが鉄筋コンクリート造耐震壁の終局限界に対応した評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下になることを確認する。

#### 2) 原子炉建屋の地震応答解析

##### ・入力地震動 基準地震動Ss

原子炉建屋の地震応答解析モデルは、右図に示すように質点系でモデル化し、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。

地震応答解析モデルの諸元は、「福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性および補強等に関する検討に係る報告書(その2)」(東京電力株式会社、平成23年7月13日)に示される内容に、瓦礫撤去等による重量増減及び新規に設置する燃料取り出し用カバーの重量を考慮した。



原子炉建屋の地震応答解析モデル

## 参考4 耐震性

### (7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

#### 2) 原子炉建屋の地震応答解析

原子炉建屋の地震応答解析モデルの諸元 (水平方向)

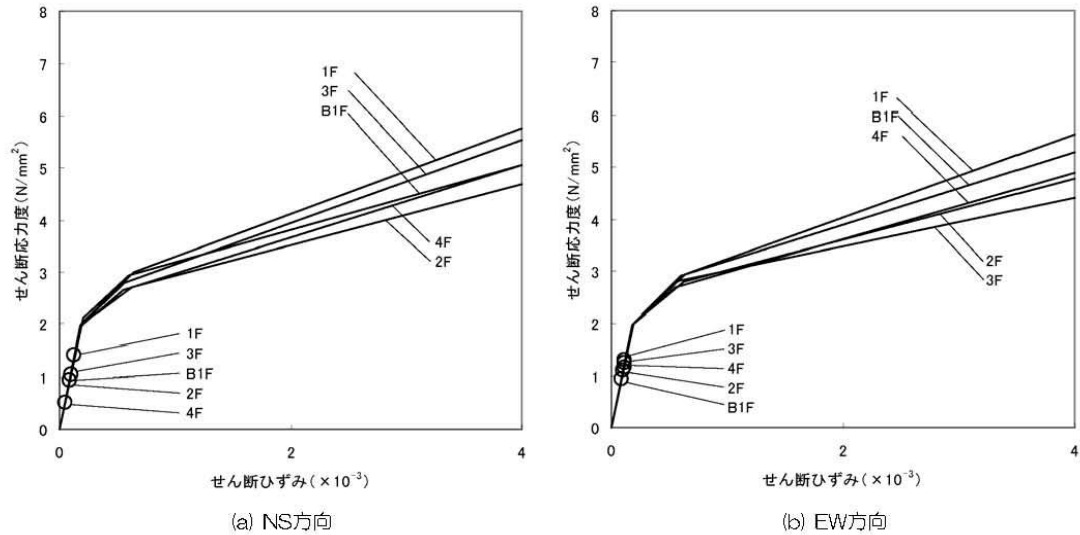
標高 O.P. (m)	質点重量 W (kN)	回転慣性重量 $I_0 (\times 10^6 \text{ kN} \cdot \text{m}^2)$	
		水平(NS)方向	水平(EW)方向
39.92	87590	92.34	67.32
32.3	119490	238.33	124.49
26.9	111340	204.95	204.95
18.7	130160	239.58	239.58
10.2	253710	467.09	696.62
-2.06	301020	554.17	826.50
-6.06	127000	233.79	348.72
合計	1130310		

## 参考4 耐震性

### (7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

#### 3) 検討結果

地震応答解析により得られる最大応答値は、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) に対して十分に余裕があることを確認した。

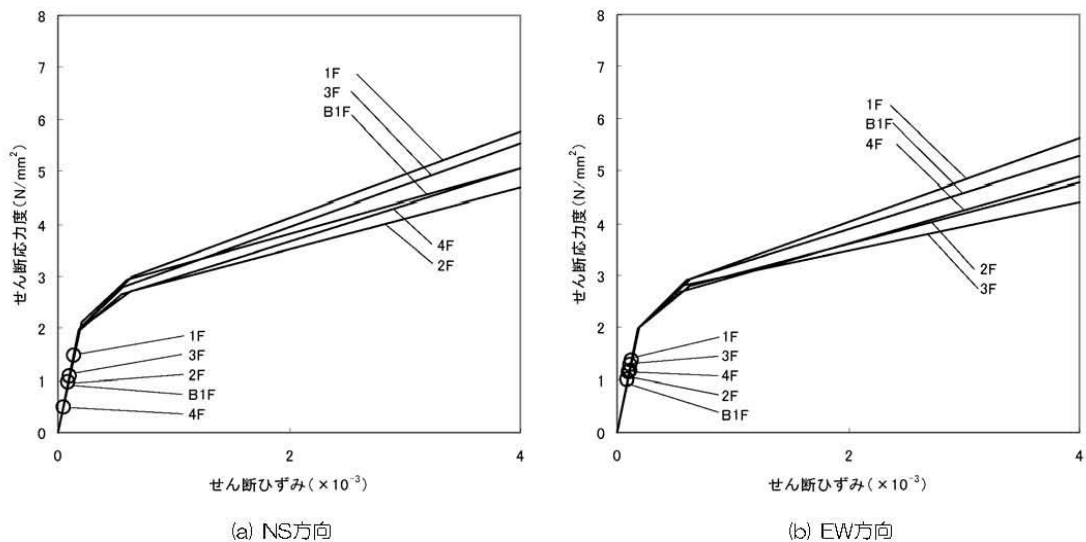


せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-1)

## 参考4 耐震性

### (7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

#### 3) 検討結果

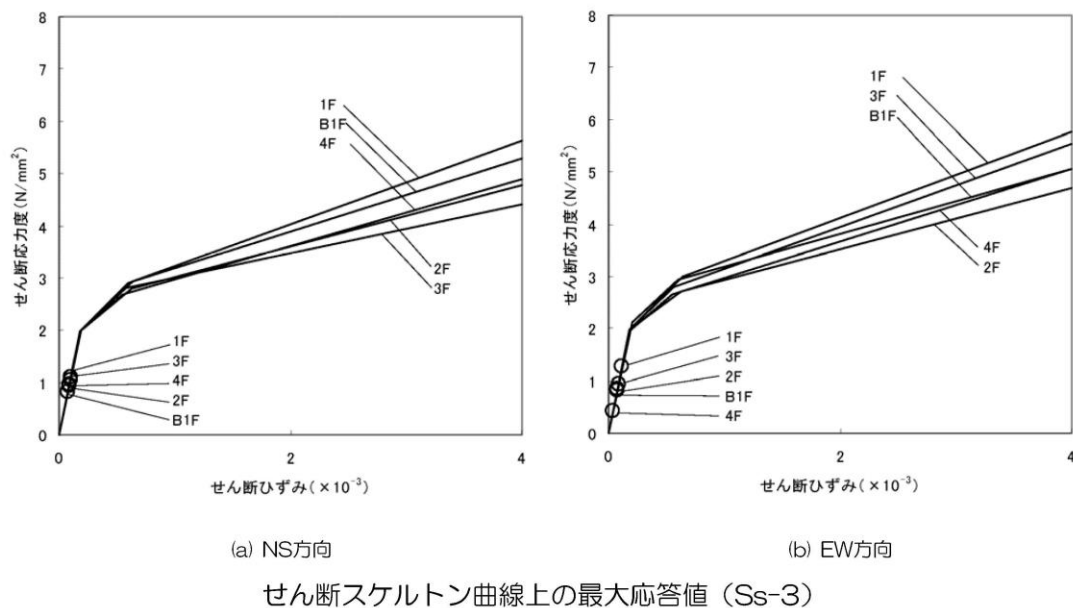


せん断スケルトン曲線上の最大応答値 (Ss-2)

## 参考4 耐震性

(7) 原子炉建屋の耐震性に対する検討

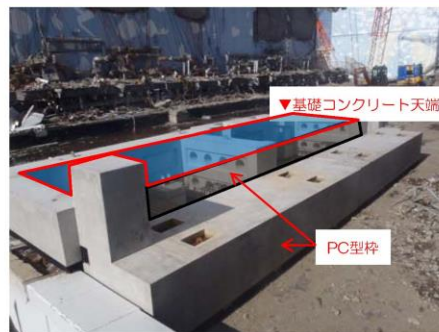
### 3) 検討結果



## 参考5 瓦礫撤去用構台基礎の施工状況



瓦礫撤去用構台西側基礎部 PC型枠設置



瓦礫撤去用構台東側基礎部 PC型枠設置



瓦礫撤去用構台西側基礎部 コンクリート打設



瓦礫撤去用構台東側基礎部 コンクリート打設



特定原子力施設監視・  
評価検討会(第8回)  
資料5

## 福島第一原子力発電所 3号機燃料取り出し用カバーの 構造強度及び耐震性について (コメント回答)

東京電力株式会社

平成25年3月8日



### 目次

- ・コメント回答① 地震・津波・竜巻等への対応について ……P.2
- ・コメント回答② 耐震性の検討結果(表)の記載について ……P.4
- ・コメント回答③ 作業環境の確保について ……P.6
- ・コメント回答④ オイルダンパの機構および損傷時の対応について……P.7



## コメント回答①

①3号機燃料取り出し用カバーの使用期間が短いとしても、地震・津波に関わる新安全設計基準への対応あるいは竜巻などの想定外事象に対する安全性や修復性は確保しなくてよいのか、既にされているのかを説明すること。（林教授）

- ・現在、国により策定中の新安全設計基準への対応については今後となるが、以下を念頭に計画している。
- ・地震：各部の検討において、可能な限り余裕を確保した計画<sup>\*1</sup>としている。また、脆性的な破壊を生じないよう、原則として保有耐力接合<sup>\*2</sup>・<sup>\*3</sup>としている。
- ・津波：燃料取り出し用カバーは鉄骨トラスと鋼製の外装材により構成されているが、閉空間になっておらず、津波襲来時には、水は燃料取り出し用カバーの裏側に回り込む。そのため、津波による波圧は生じにくい。

- \*1 5ページ参照。例えば、ドーム屋根は基準地震動 $S_s$ に対し、約5倍の裕度がある。
- \*2 母材の耐力が十分に発揮されるように「接合部の破断耐力>母材耐力」となるように破断の検討を行うこと。
- \*3 特定原子力施設監視・評価検討会（第4回）資料4 16A'-Z'参照

## コメント回答①

- ・竜巻：ドーム屋根の外装材は、設計風圧力の約4倍以上の耐力を有することを確認しており、最大瞬間風速100m/s程度の暴風に対しても飛散しない計画となっている。
- ・修復性については、除染・遮へい対策を施す計画（コメント回答③参照）であり、現地へのアクセスは可能であると考えている。また、オペレーティングフロア上のガレキ撤去に用いたクレーン等により、遠隔操作による作業も可能であると考えている。

## コメント回答②

②特定原子力施設監視・評価検討会（第4回）資料4の10ページの耐震性の検討結果の表は、検定比なのか、最大応答値なのかを区別できるように明確にすること。（林教授）

- ・評価項目欄が、「耐力比」もしくは「抵抗比」となっている項目が「検定比」で評価している項目であり、その他が「最大応答値」で評価している項目である。
- ・「検定比」か「最大応答値」かが分かるように、結果欄に追記した。  
(次ページ参照)

## 5. 耐震性に対する検討結果

いずれも評価クライテリア以下であることを確認した。

### (1) 架構の耐震性

部位	評価項目	検定比、最大応答値	評価クライテリア	判定
門型架構	層間変形角	最大応答値 1/720	1/75以下	OK
門型架構	塑性率	最大応答値 0.75	5以下	OK
ドーム屋根	塑性率	最大応答値 0.90	5以下	OK
オイルダンパ	相対変位	最大応答値 72 mm	100 mm以下	OK
	相対速度	最大応答値 0.48 m/s	1.0 m/s以下	OK
ストッパ	せん断耐力比	検定比 0.42	1.0以下	OK
基礎	浮き上がりの有無	最大応答値 生じない	生じないこと	OK
	すべり摩擦抵抗比	検定比 0.59	1.0以下	OK

### (2) 原子炉建屋の耐震性

部位	評価項目	検定比、最大応答値	評価クライテリア	判定
ストッパ接触部	支圧耐力比	検定比 0.54	1.0以下	OK
オイルダンパ接触部	支圧耐力比	検定比 0.19	1.0以下	OK
基礎設置部	圧縮耐力比	検定比 0.29	1.0以下	OK
原子炉建屋	せん断ひずみ	最大応答値 $0.14 \times 10^{-3}$	$4.0 \times 10^{-3}$ 以下	OK

## コメント回答③

③立ち入りが難しい場所で有人にて接合部などの現地作業が行えるように、作業環境をどのように確保するのかについて説明すること。（林教授）

- ・線量的に、立入りが最も厳しい箇所はオペレーティングフロア上部と考えている。当該部における有人作業ができるように、有人作業が発生するまでに、線量低減対策として、遠隔操作重機による下記3段階の作業を計画している。

### 1. 瓦礫撤去作業（現在実施中）

オペレーティングフロア上部に残存する瓦礫（鉄骨、コンクリート、機械設備等）を撤去する。

### 2. 除染作業

オペレーティングフロア上部の瓦礫撤去後に、床面はつき装置や吸引装置等を使用し、除染作業を実施する。

### 3. 遮へい体設置作業

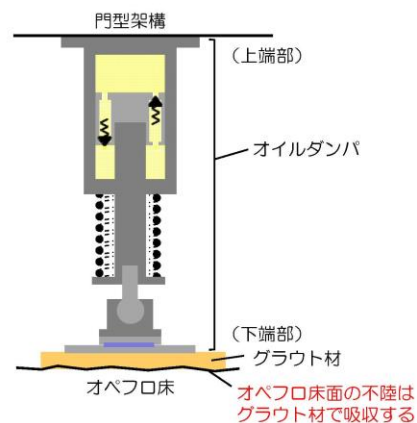
除染作業後にオペレーティングフロア上部に遮へい体（鉄板等）を設置する。

なお、作業中は適宜、雰囲気線量を計測し、慎重に作業を実施する。

## コメント回答④

④オイルダンパについては、5階床面の不陸や門型架構の変形などにより、5階床と門型架構が平行でなくなり、スプリング押さえ等の損傷が生じないかについて説明すること。また、スプリング押さえ等の損傷により、システム上の問題が発生しないのかについて確認したい。（林教授）

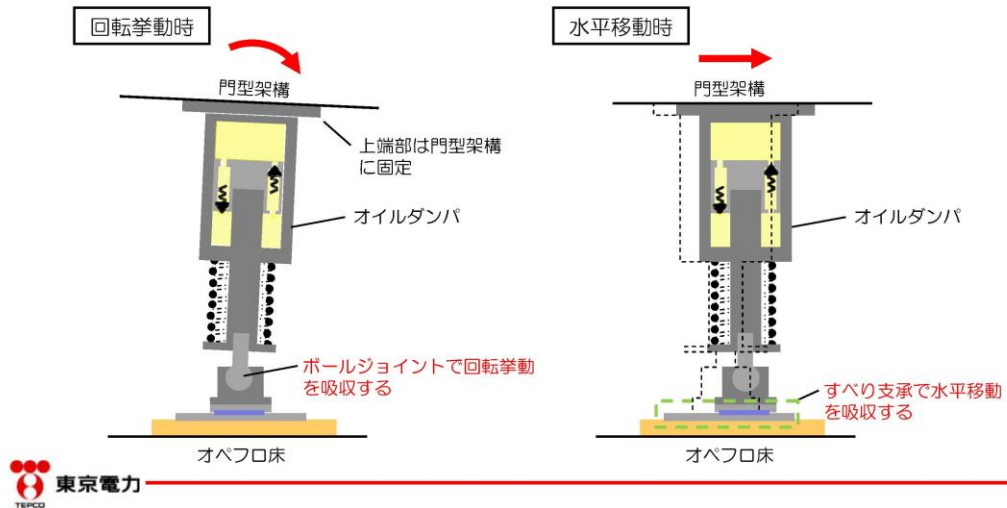
- ・5階床面は躯体の不陸が想定される。
- ・オイルダンパは上端部を架構側に接合し、下端部とオペフロ床とのGAP部にグラウト材を充填し、床面の不陸を吸収する計画としている。
- ・オイルダンパが故障や損傷した場合は、修理・取替をする計画としている。
- ・グラウト材は既存躯体コンクリートの強度よりも高強度のものを使用している。





## コメント回答④

- ・ 門型架構とオペフロ床間の挙動が平行ではなくなった場合に備え、オイルダンパ下端部にはボールジョイントとすべり支承を取り付けている。
- ・ ボールジョイントとすべり支承により、オイルダンパの機構損傷が生じないようにしている。



## 4号機燃料取り出し用カバーに係る確認事項

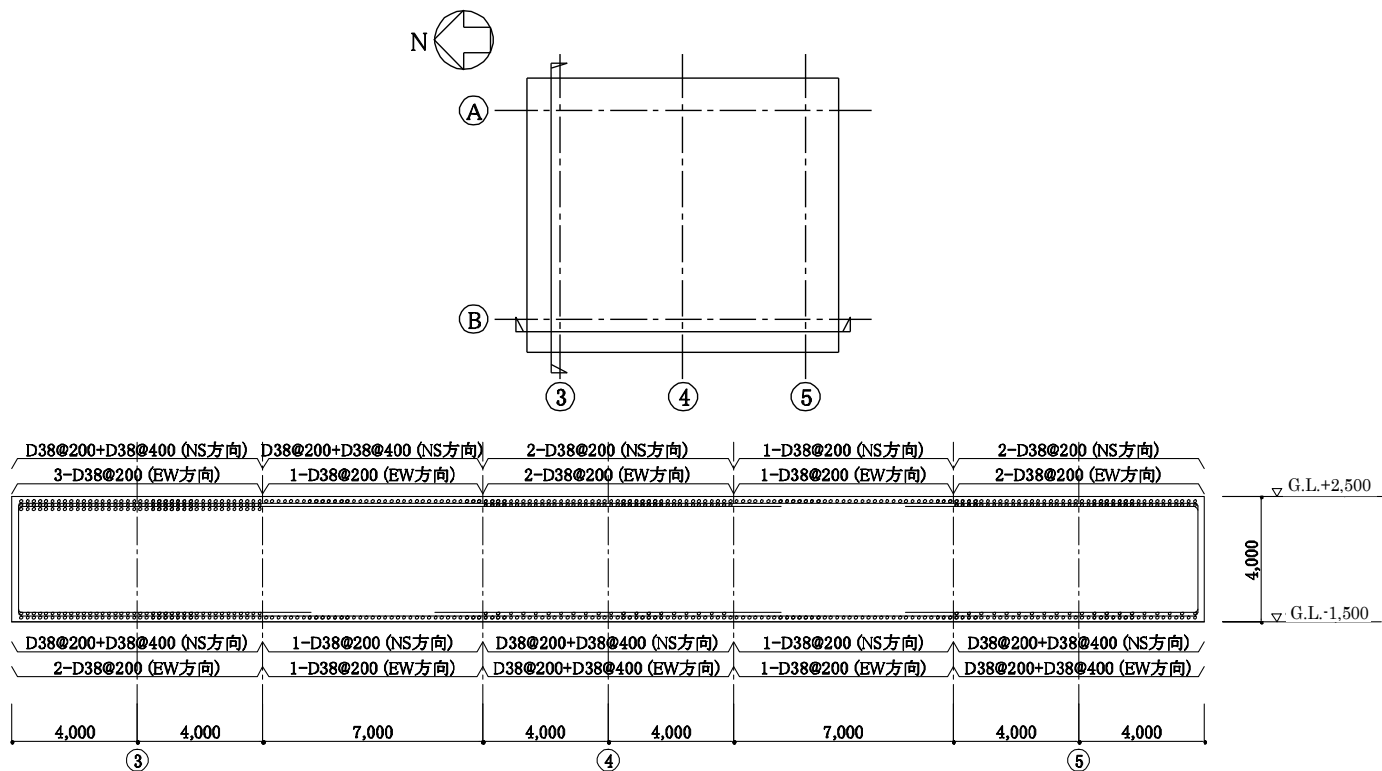
4号機燃料取り出し用カバーの工事に係る主要な確認項目を表-1および表-2に示す。

表-1 4号機燃料取り出し用カバーに係る確認項目（クレーン支持用架構）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 及び 耐震性	材料確認	地盤改良土の一軸圧縮強さを確認する。	地盤改良土の一軸圧縮強さが、実施計画に記されている設計基準強度に対して JEAC4616-2009 の基準を満足すること。
		構造体コンクリートの圧縮強度を確認する。	構造体コンクリート強度が、実施計画に記載されている設計基準強度に対して、JASS 5N の基準を満足すること。
		鉄筋の材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3112 に適合すること。
		地盤アンカーの材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3536 JIS G 3502 に適合すること。
		鋼材の材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3106 又は建築基準法第 37 条第二号に基づく国土交通大臣の認定に適合すること。
		高力ボルトの締め付け張力を確認する。	特殊ボルト（ワンサイドボルト）について、導入張力試験を JASS 6 に準じて実施し、所定の張力が得られること。
		外装材の仕様を確認する。	実施計画に記載されている材料諸元に適合することを、検査証明書、出荷証明書及びメーカー技術資料により確認する。
	寸法確認	地盤アンカー長を確認する。	地盤アンカー長が 26.75m 以上であること。
	据付確認	地盤改良範囲（深さ）を確認する。	支持層に着底していること。
		鉄筋の径、間隔（図-1 参照）を確認する。	鉄筋の径が実施計画に記載されている通りであること。鉄筋の間隔が実施計画に記載しているピッチにほぼ均等に分布していること。
接合部（図-2～4 参照）の施工状況を確認する。		高力ボルトが所定の本数・種類であること。	
外装材の施工状況を確認する。		外装材の設置範囲が、図-7～9 の通りであること。	

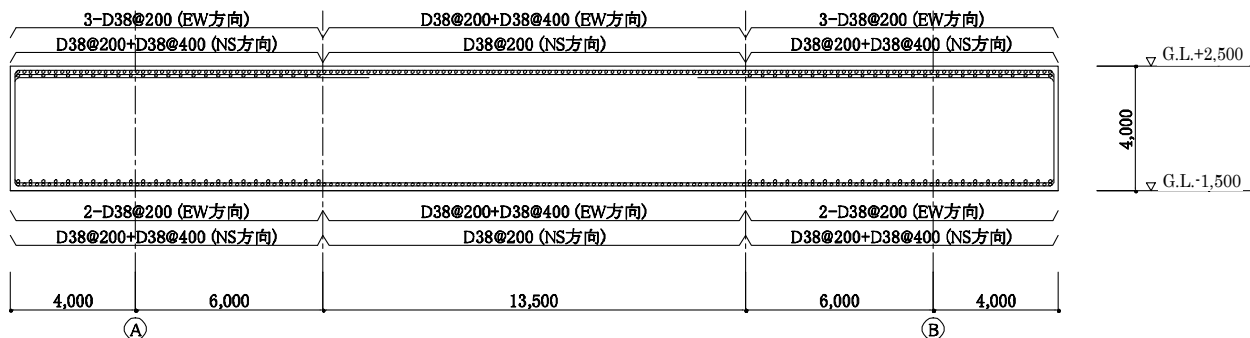
表-2 4号機燃料取り出し用カバーに係る確認項目（燃料取扱機支持用架構）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 及び 耐震性	材料確認	構造体コンクリートの圧縮強度を確認する。	構造体コンクリート強度が、実施計画に記載されている設計基準強度に対して、JASS 5Nの基準を満足すること。
		鋼材の材質，強度，化学成分を確認する。	JIS G 3106 又は建築基準法第 37 条第二号に基づく国土交通大臣の認定に適合すること。
		アンカーボルトの材質，強度，化学成分（床面）を確認する。	JIS G 3138 に適合すること。
		アンカーボルトの材質，強度，化学成分（壁面）を確認する。	JIS G 3112 に適合すること。
	寸法確認	アンカーボルト埋め込み長さ（床面）を確認する。	有効埋め込み長さが700mm以上かつボルトの余長はナット面から突き出た長さが3山以上であること。
		アンカーボルト埋め込み長さ（壁面）を確認する。	有効埋め込み長さが450mm以上であること。
	据付確認	接合部（図-5，6参照）の施工状況を確認する。	高力ボルトが所定の本数・種類であること。



かぶり厚さ 7cm 以上

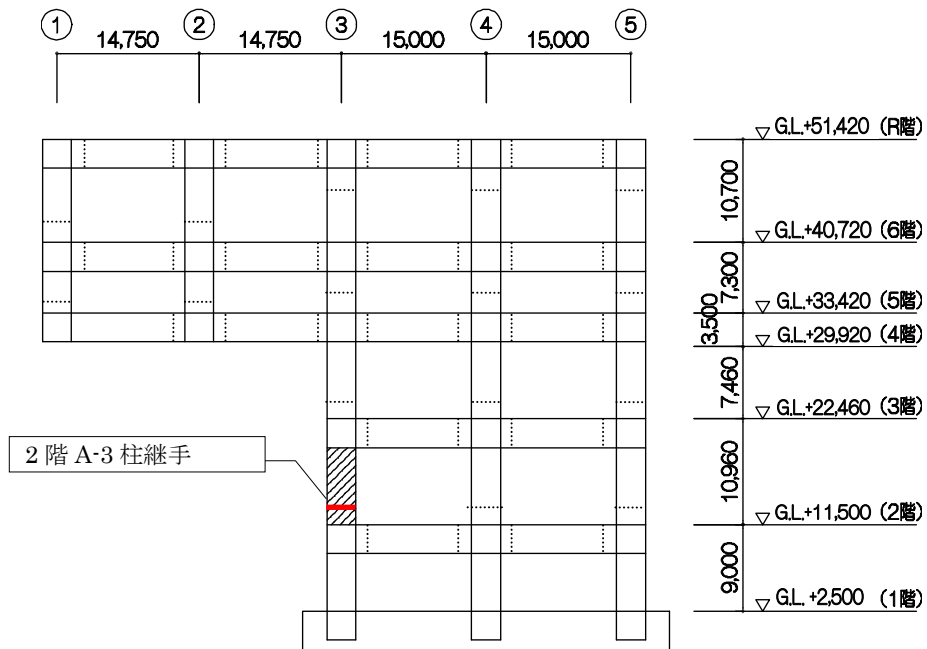
クレーン支持用架構 基礎配筋図(B 通り)



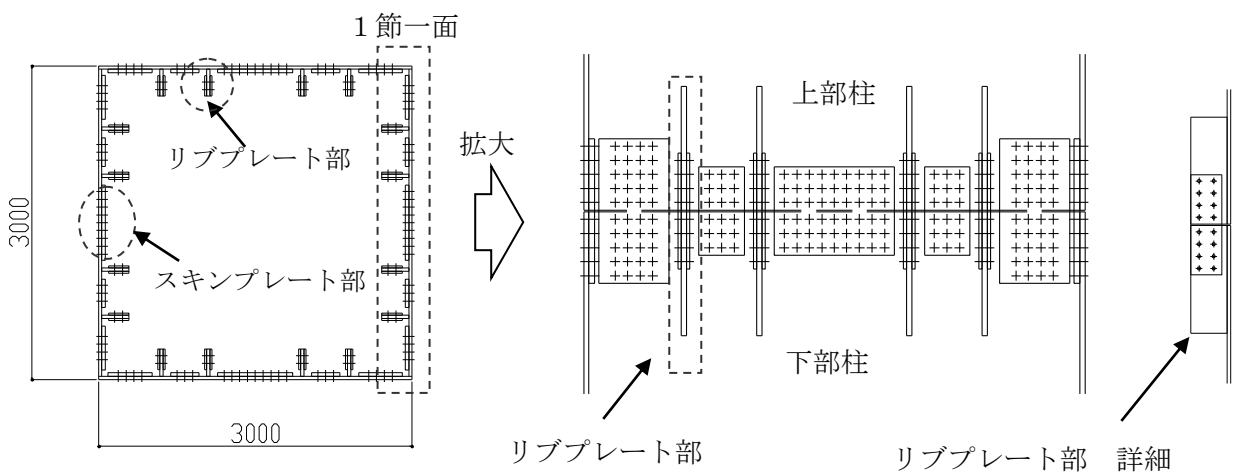
かぶり厚さ 7cm 以上

クレーン支持用架構 基礎配筋図(3 通り)

図-1 クレーン支持用架構 基礎配筋図



(1) 接合部位置 (A通り軸組図)

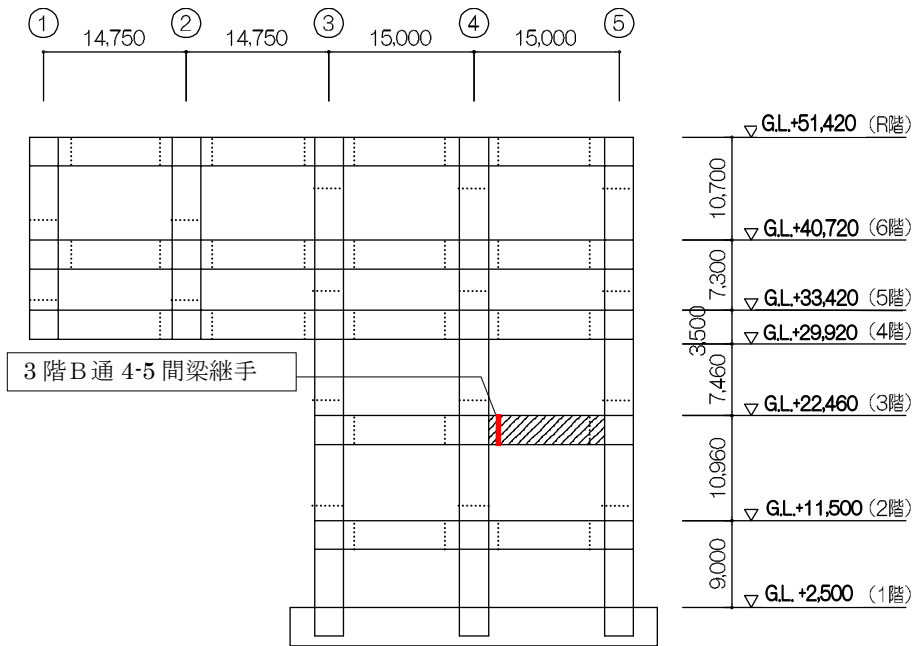


【スキンプレート部】  
 ボルト種類：MUTF27  
 本数：85本×2 (1面あたり)

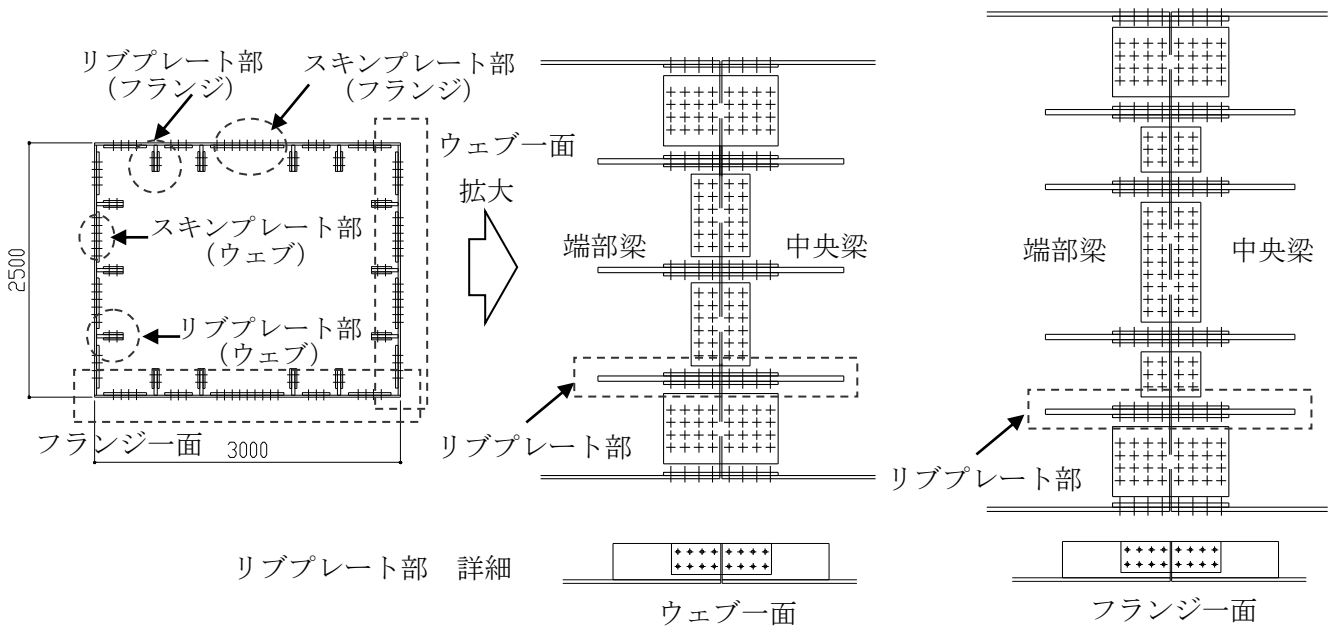
【リブプレート部】  
 ボルト種類：SHTB M24  
 本数：8本×2 (1箇所あたり)

(2) クレーン支持用架構 接合部詳細

図-2 クレーン支持用架構 接合部①



(1) クレーン支持用架構 接合部位置 (B通り軸組図)

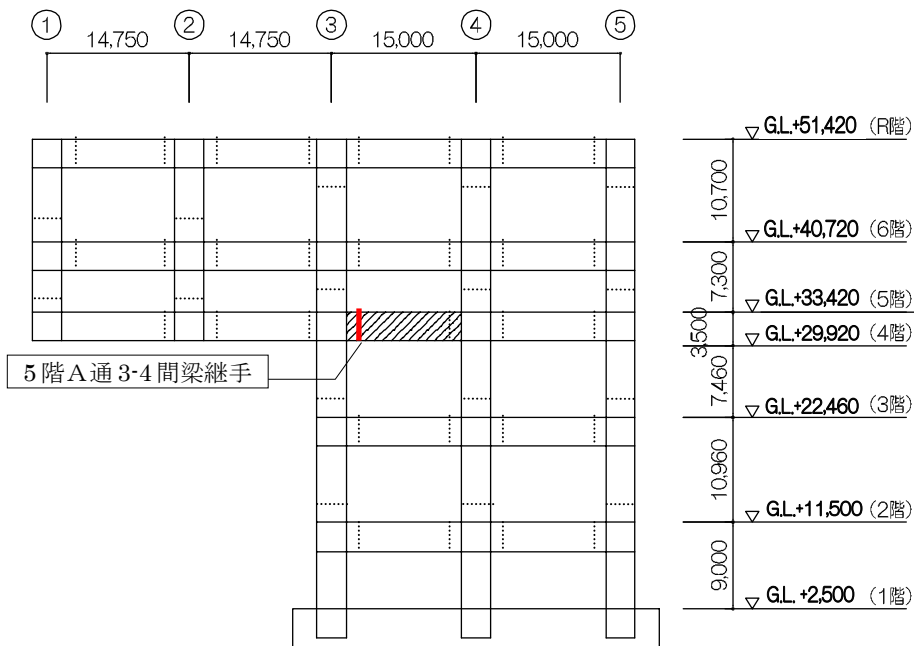


**【スキンプレート部】**  
 ボルト種類：MUTF27  
 本数：62本×2 (フランジ1面あたり)  
 本数：56本×2 (ウェブ1面あたり)

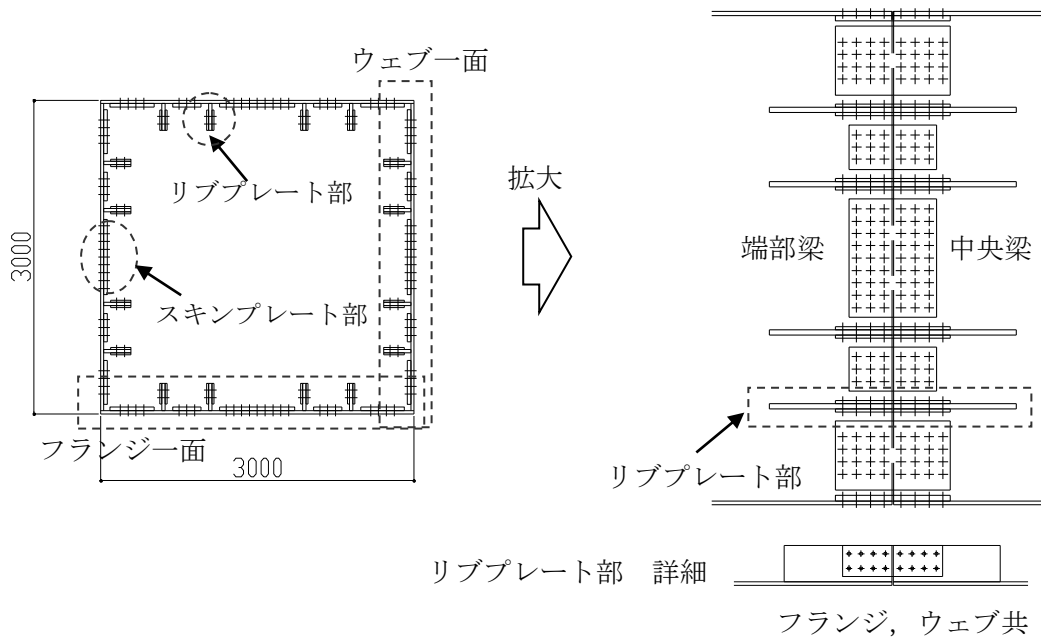
**【リブプレート部】**  
 ボルト種類：SHTB M24  
 本数：8本×2 (1箇所あたり)

(2) 接合部詳細(3階B通 4-5間梁)

図-3 クレーン支持用架構 接合部②



(1) 接合部位置 (A通り軸組図)



【スキンプレート部】

ボルト種類：MUTF27

本数：77本×2 (フランジ, ウェブ共1面あたり)

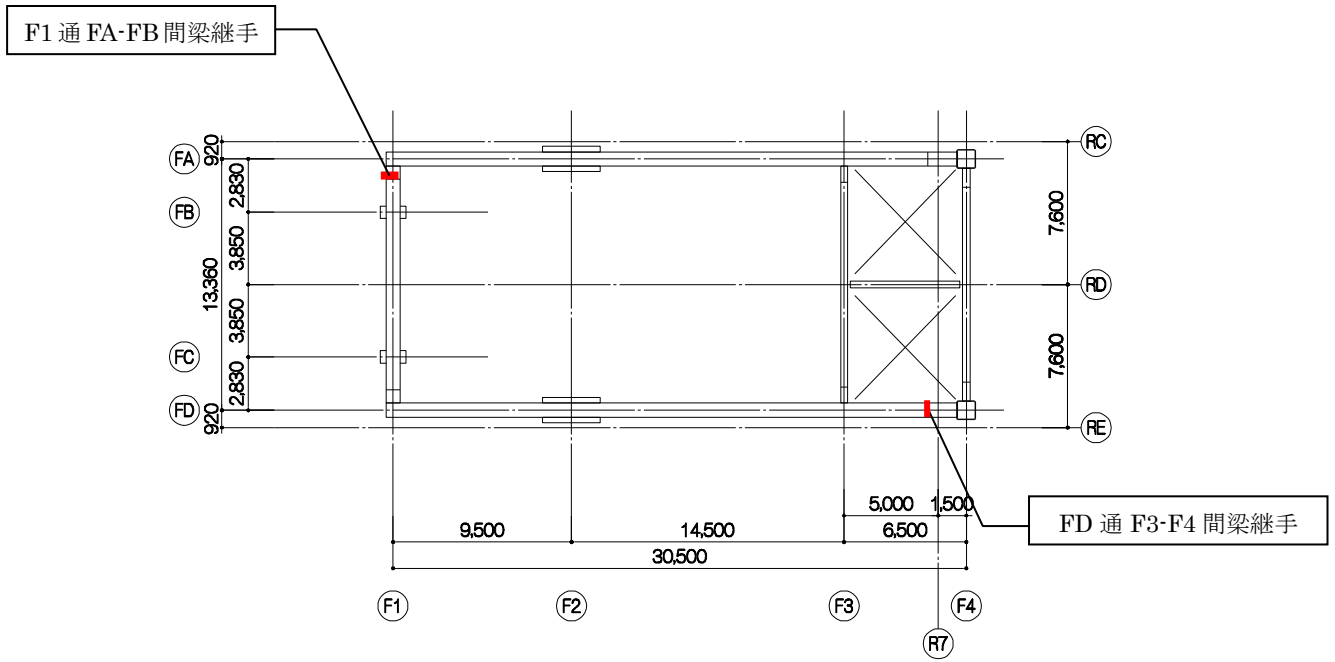
【リブプレート部】

ボルト種類：SHTB M24

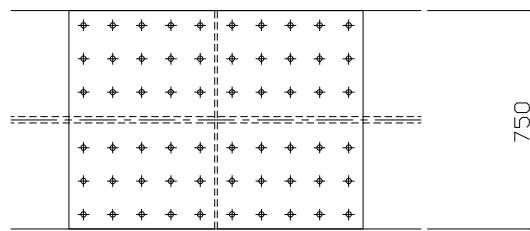
本数：8本×2 (1箇所あたり)

(2) 接合部詳細(5階A通3-4間梁)

図-4 クレーン支持用架構 接合部③



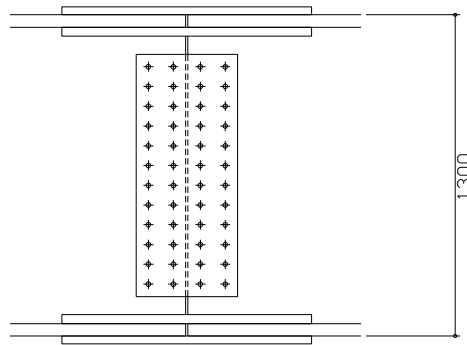
(1) 接合部位置



(a) フランジ

ボルト種類：HTB M27

ボルト本数：30本×2



(b) ウェブ

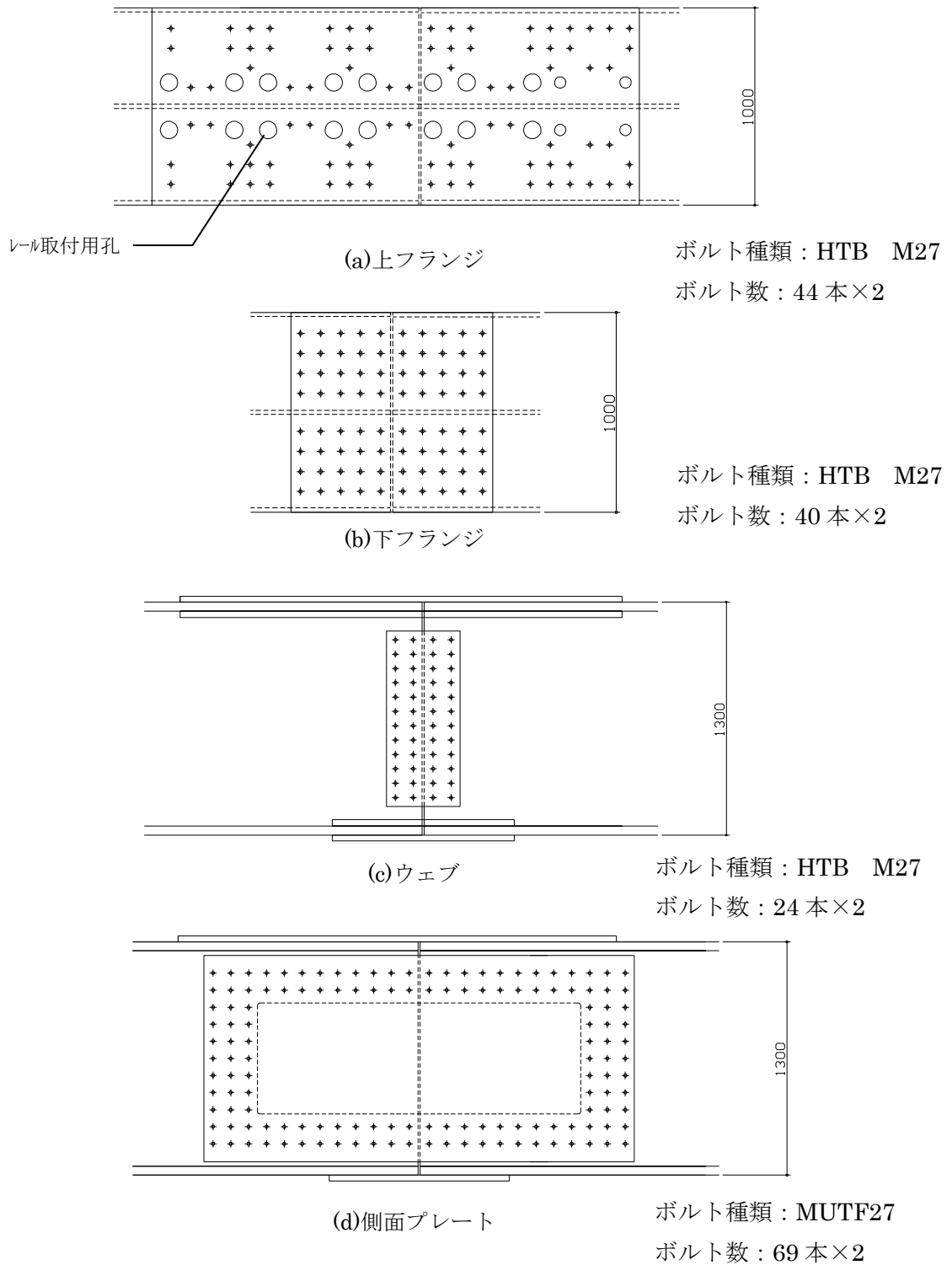
ボルト種類：HTB M27

ボルト数：24本×2

(2) 接合部詳細図 (F1通 FA-FB間梁継手)

図-5 燃料取扱機支持用架構 接合部図①





接合部詳細図 (FD 通 F3-F4 間梁継手) (接合部位置は図-5 参照)

図-6 燃料取扱機支持用架構 接合部図②

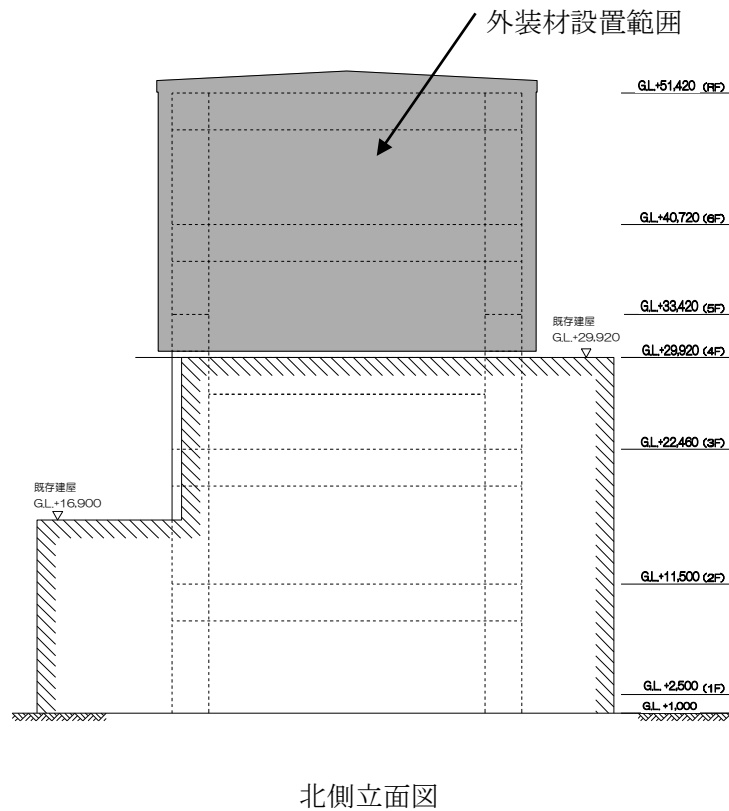
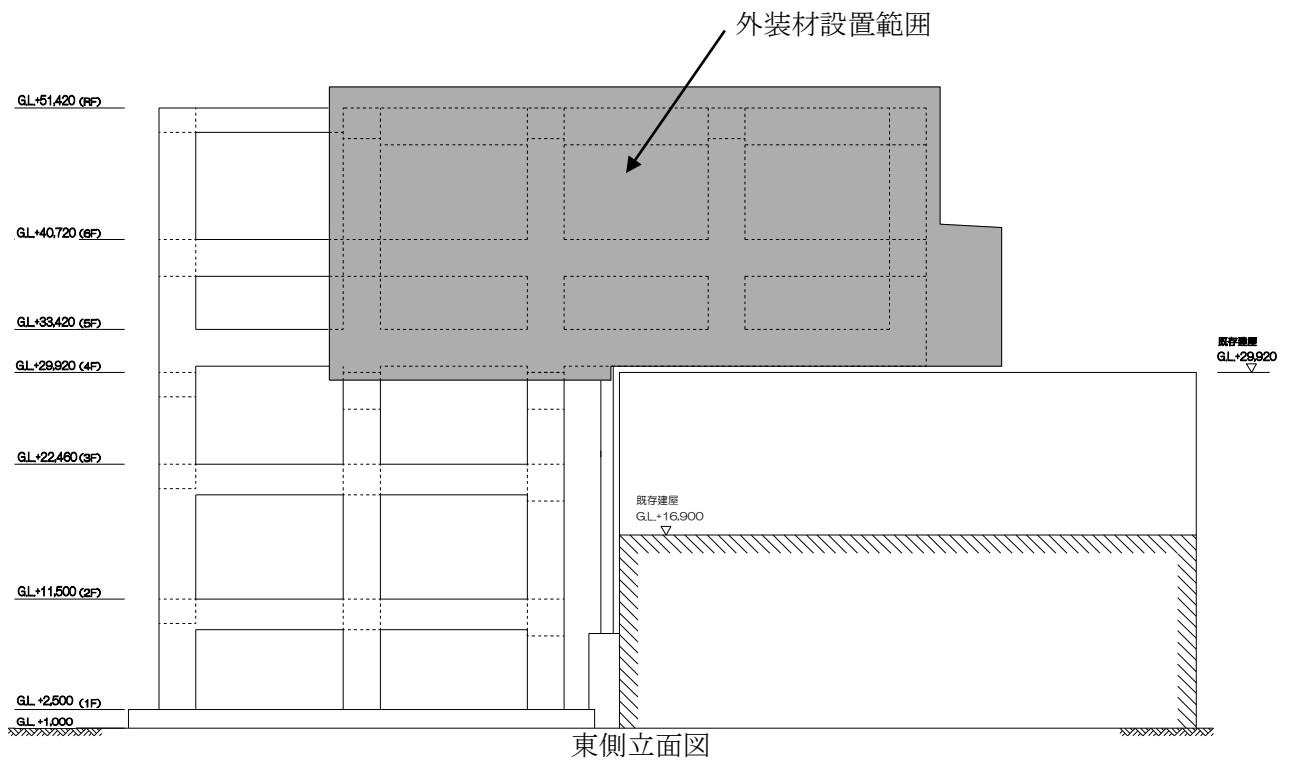
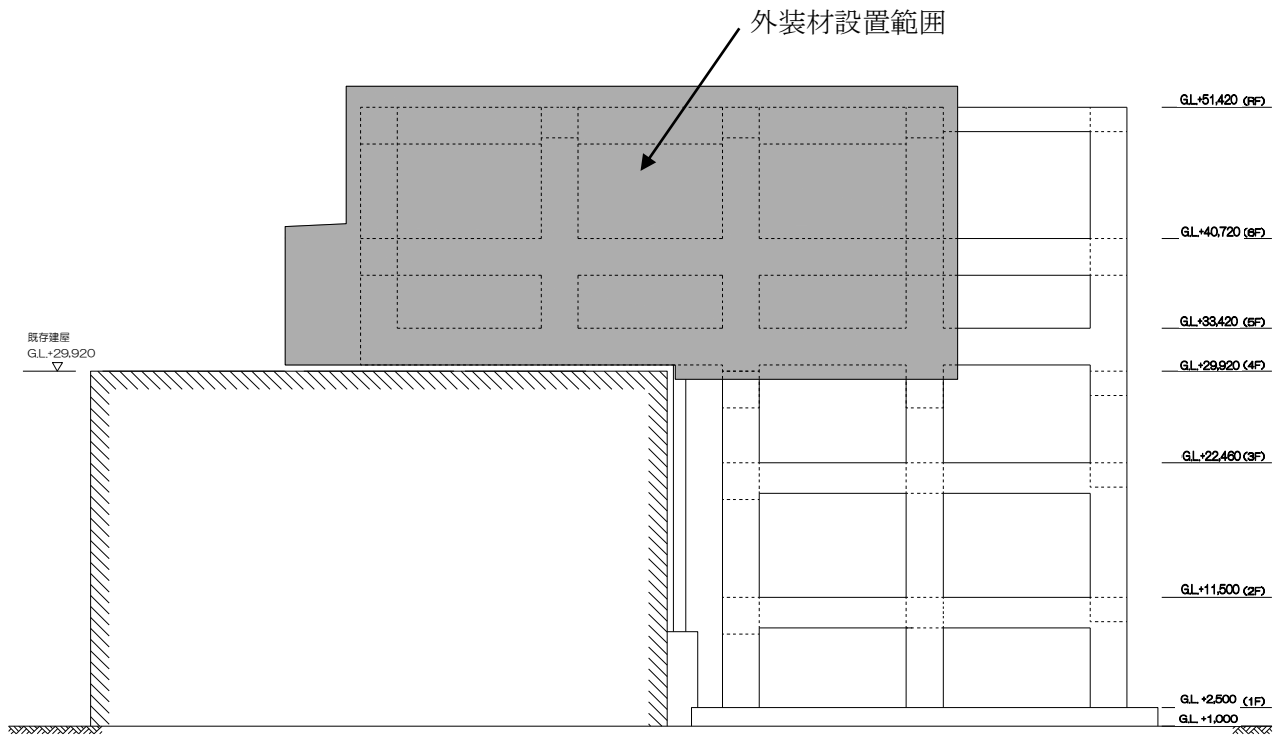
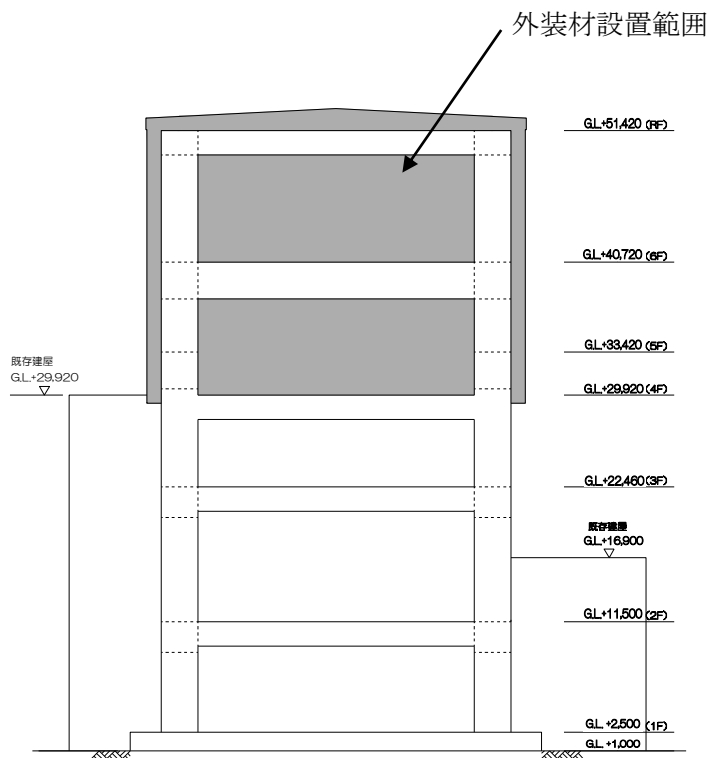


図-7 外装材設置範囲図①

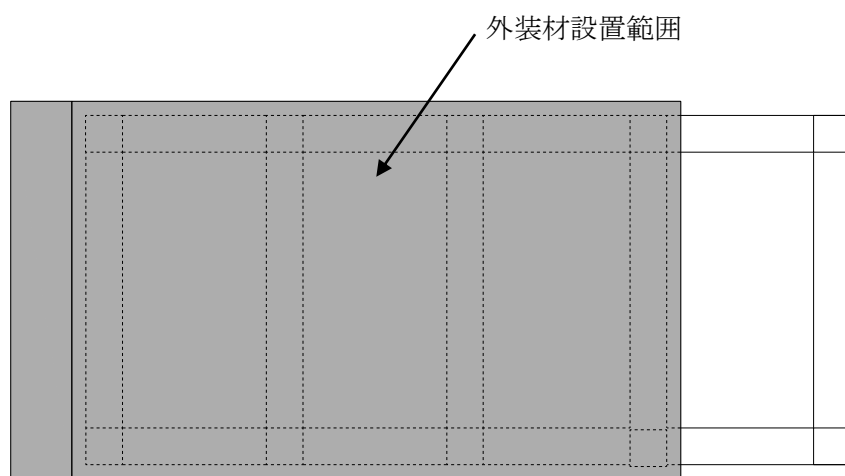


西側立面図



南側立面図

図-8 外装材設置範囲図②



屋根伏図

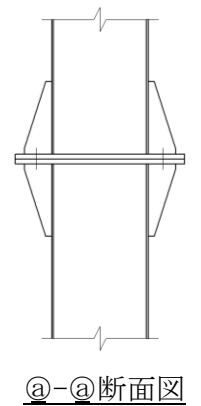
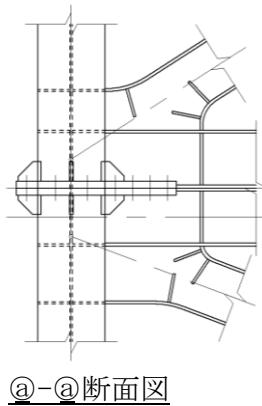
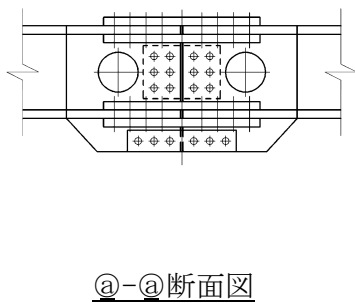
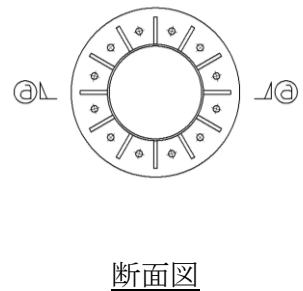
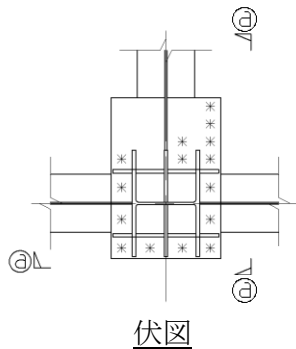
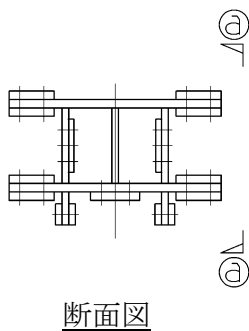
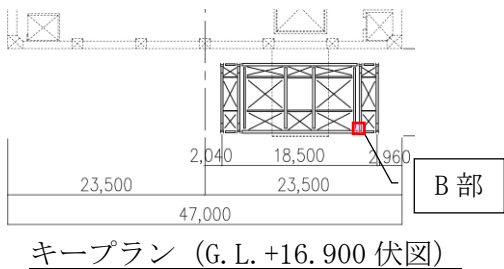
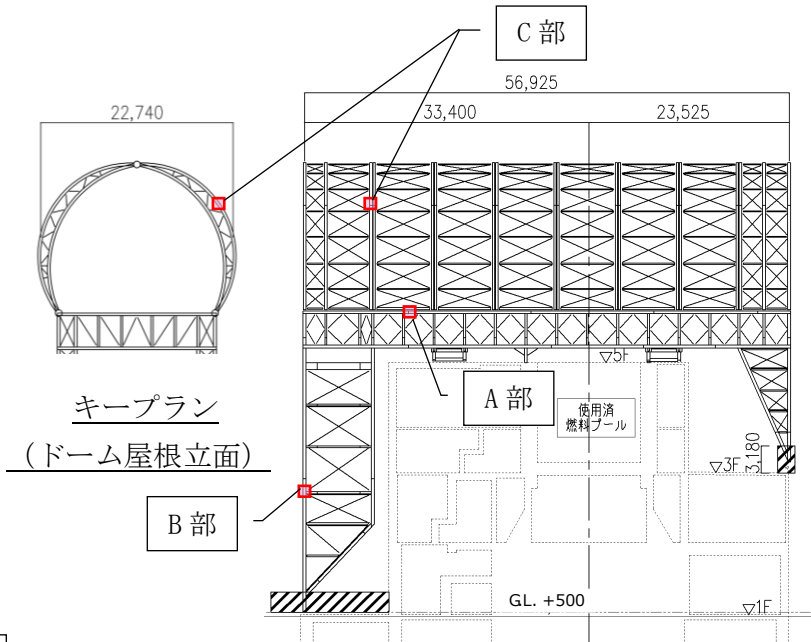
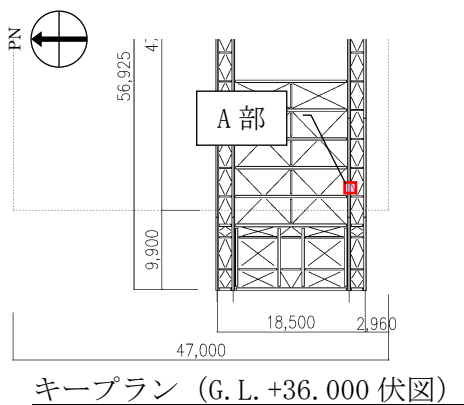
図-9 外装材設置範囲図③

## 3号機燃料取り出し用カバーに係る確認事項

3号機燃料取り出し用カバーの工事に係る主要な確認項目を表－1に示す。

表－1 3号機燃料取り出し用カバーの工事に係る確認項目

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度及び耐震性	材料確認	鋼材の材質，強度，化学成分を確認する。	JIS G 3136, JIS G 3101, JIS G 3106, JIS G 3444, JIS G 3474に適合すること。
		制震装置（オイルダンパ）の減衰係数を確認する。	減衰係数（ $C_1=50 \times 10^5 \text{ N} \cdot \text{s/m}$ , $C_2=3.95 \times 10^5 \text{ N} \cdot \text{s/m}$ ）が $\pm 10\%$ 以内であること。
		トルシア型超高力ボルト（SHTB）の仕様を確認する。	建築基準法 68 条の 26 第 1 項の規定に基づき、同法第 37 条第二号の規定に適合すること。
	据付確認	接合部（図－1 参照）の施工状況を確認する。	SHTB が所定の本数・種類であること。
	外観確認	制震装置（オイルダンパ）の外観を確認する。	有害な欠陥がないこと。
		ドーム屋根に取付ける外装材の外観を確認する。	外装材の設置範囲が、図－2 の通りであること。



ボルト種類 : SHTB M24  
本数 58×2

(a) ガーダ上弦材 (A部)

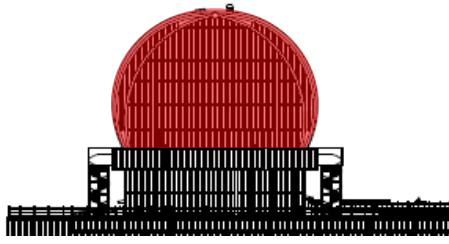
ボルト種類 : SHTB M24  
本数 15

(b) 柱材 (B部)

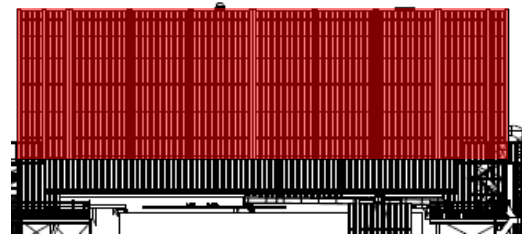
ボルト種類 : SHTB M22  
本数 12

(c) 弦材 (C部)

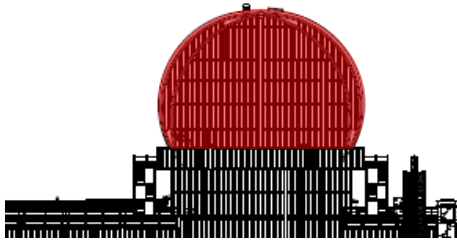
図-1 接合部詳細



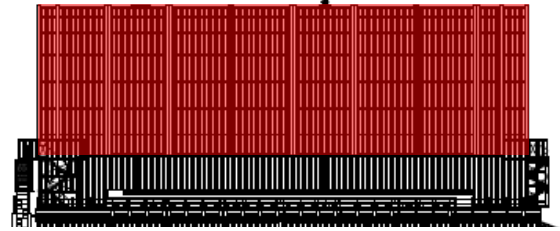
東立面図



北立面図



西立面図



南立面図


 ドーム屋根外装材設置箇所

図-2 3号機燃料取り出し用カバーのドーム屋根外装材設置範囲

### 3号機原子炉建屋の躯体状況調査結果を反映した 使用済燃料プール等の耐震安全性評価結果

#### 1. はじめに

3号機原子炉建屋では、現在、瓦礫撤去及び燃料取り出し用カバーの施工が進捗している。瓦礫撤去に伴い、新たな損傷調査が可能になり、躯体の詳細な損傷状況が明らかになった。一方で、燃料取り出し用カバーには、使用済燃料プール部近傍のオペレーティングフロア（5階床）を支持点として、水平振れ止め装置（ストッパ）及び鉛直方向の制震装置（オイルダンパ）の設置や、同じくオペレーティングフロアの随所に、作業の安全のため遮へい体の設置などが計画されている。

本報告書では、燃料取り出し用カバー設置に際し、使用済燃料プール、オペレーティングフロア（以下、オペフロとする）及び1～5階の最新の損傷状況調査結果と、その損傷状況を反映し、かつ使用済燃料の取り出し時の荷重状態を想定した原子炉建屋の3次元FEM解析により、使用済燃料プール等（使用済み燃料プール壁床、プールを拘束するシェル壁、オペフロ床）の耐震安全性評価結果を報告する。

#### 2. 損傷状況の調査結果

原子炉建屋の瓦礫撤去に伴い、損傷状況の調査を行った。調査は耐震安全性に関わる内外壁及び床を対象に、クレーン吊りの遠隔操作カメラによる映像分析及び遠隔操作ロボットによる建屋内調査の映像分析により実施した。主にクレーン吊りカメラではオペフロ床面及びオペフロ南西部に位置する大物搬入用の床開口から2～5階の開口周辺部の使用済燃料プール壁を含む壁、床を確認した。遠隔操作ロボットによる建屋内調査映像ではクレーン吊りカメラでは確認できない1階、2階のシェル壁を含むエリアの壁、床の状況を確認した。調査結果として、通りスパンごとに損傷の程度を3段階（損傷なし、一部損傷、全壊）に分類した。図-2.1～図-2.10に原子炉建屋内の各階における損傷状況を、図-2.11に建屋外壁状況写真をそれぞれ示す。



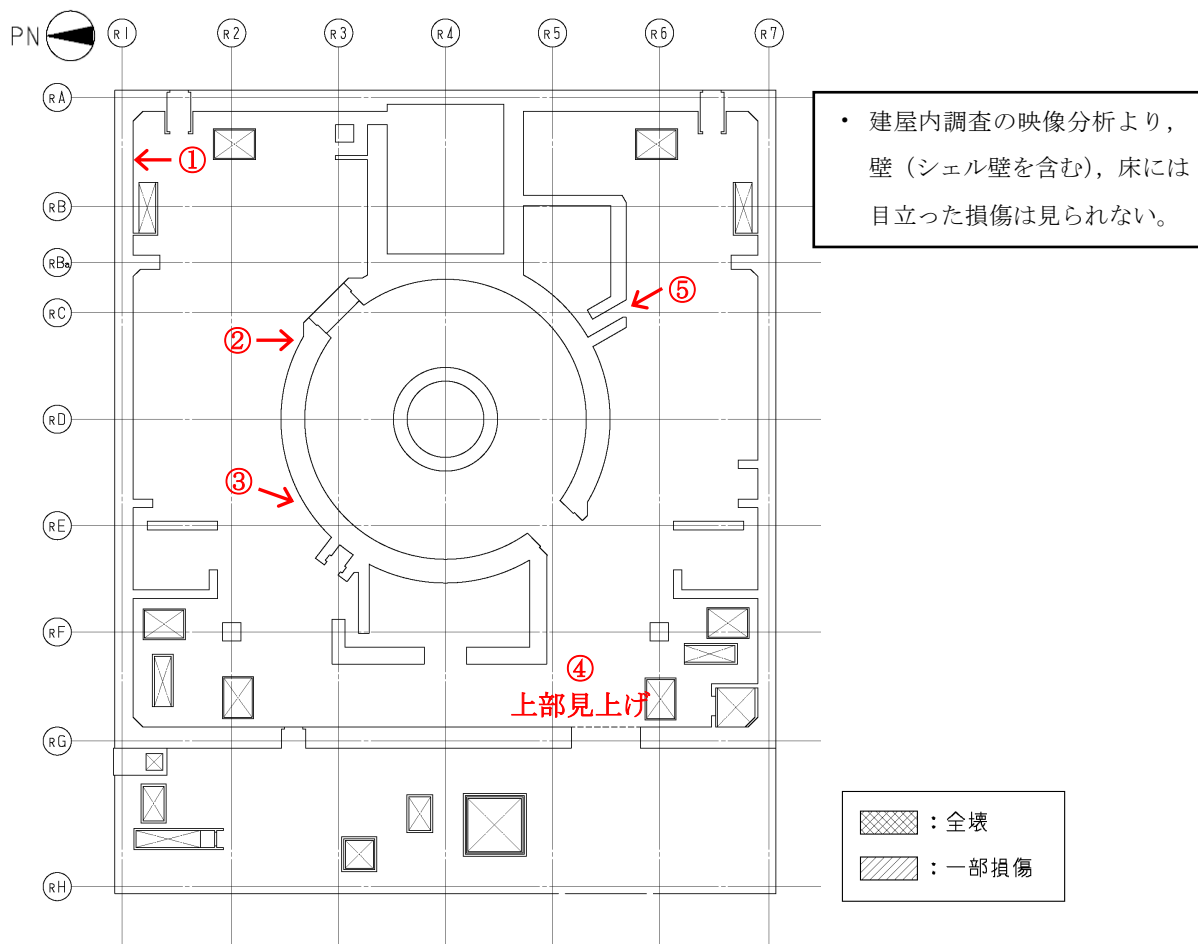


図-2.1 損傷状況（1階）

①1F北側外壁



②1Fシェル壁

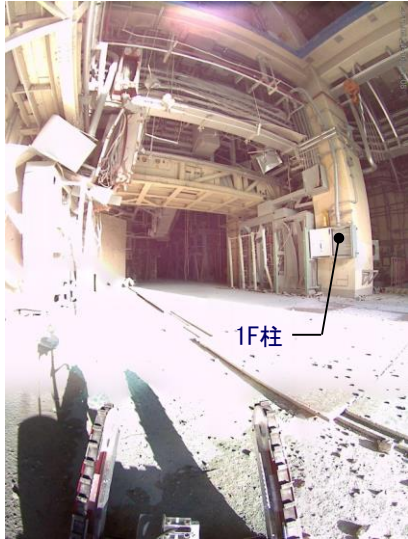


③1Fシェル壁及び1F床



図-2.2(1) 建屋内状況写真（1階）

④1F大物搬入口付近



⑤1Fシェル壁

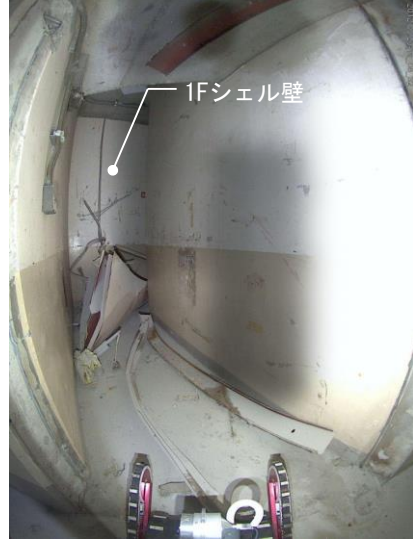


図-2.2(2) 建屋内状況写真（1階）

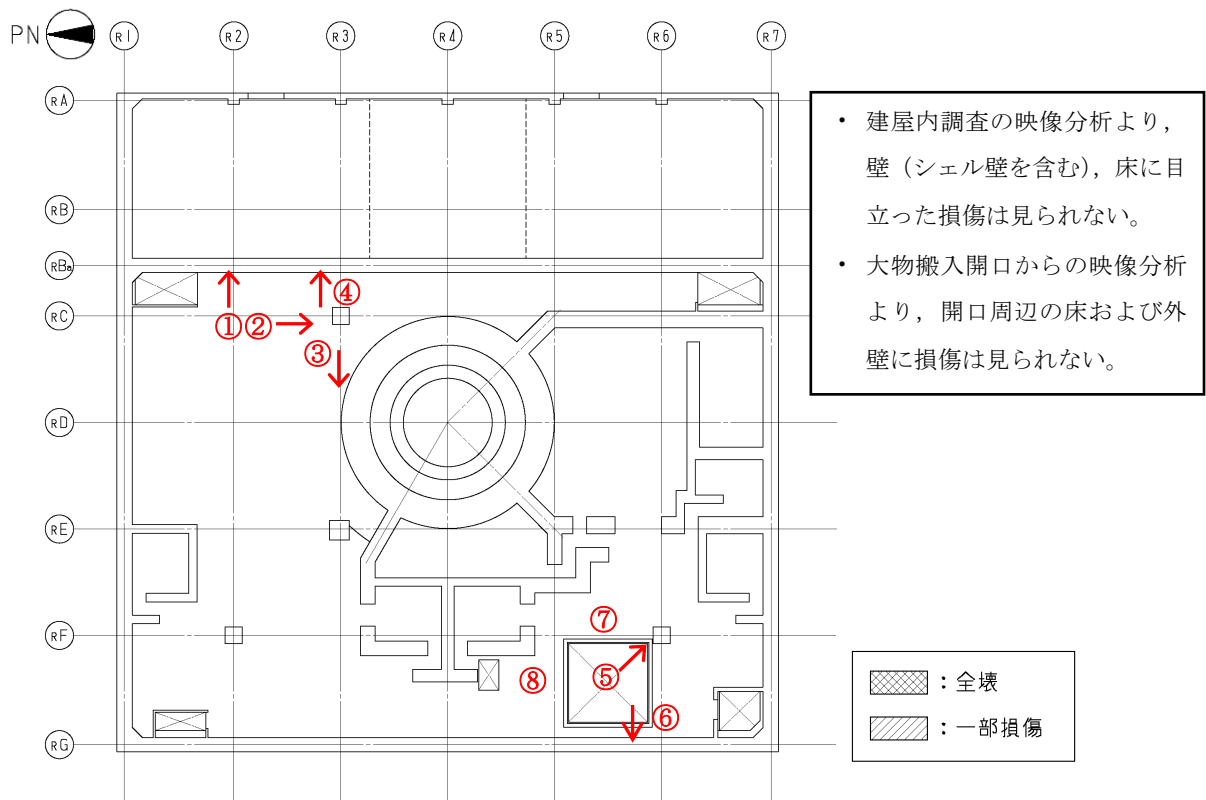


図-2.3 損傷状況（2階）



図-2.4(1) 建屋内状況写真（2階）

③2Fシェル壁



④2F東側外壁



⑤2F柱脚



⑥2F西側外壁脚部



⑦2F床 (大物搬入口東側)



⑧2F床 (大物搬入口北側)



図-2.4(2) 建屋内状況写真 (2階)



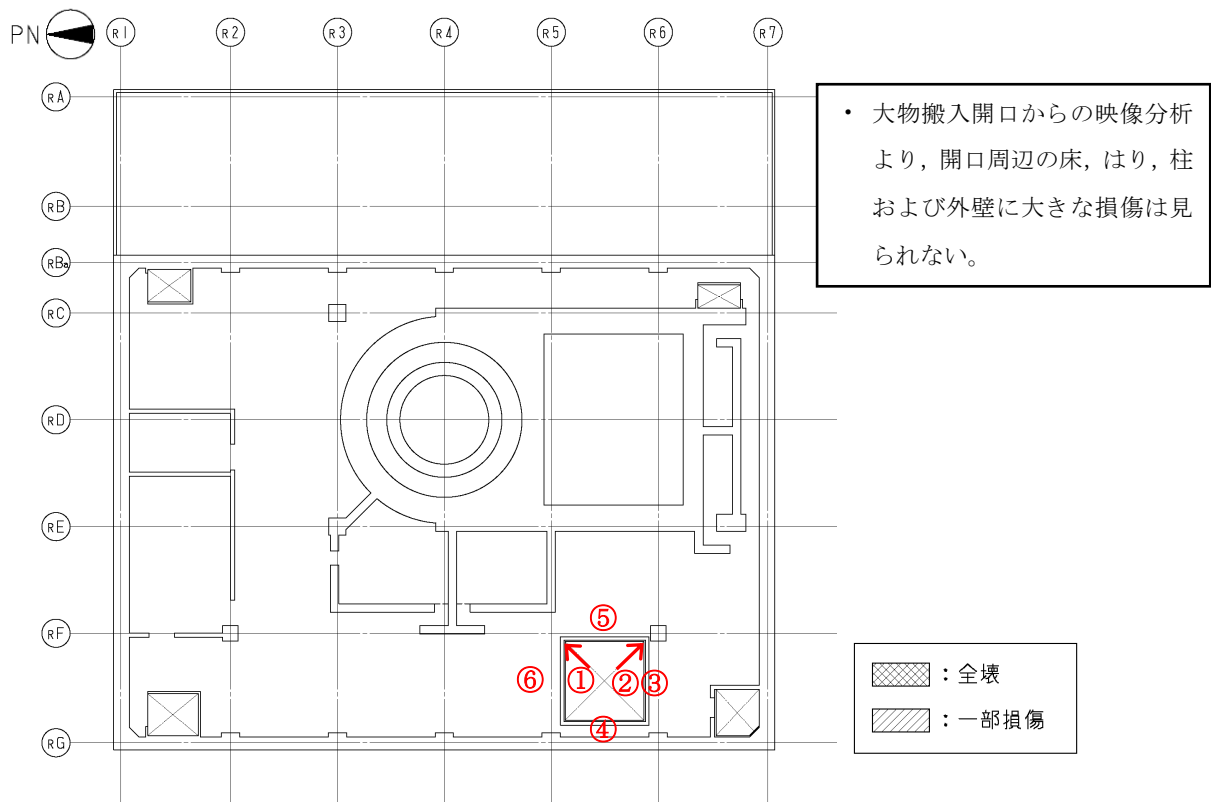


図-2.5 損傷状況（3階）

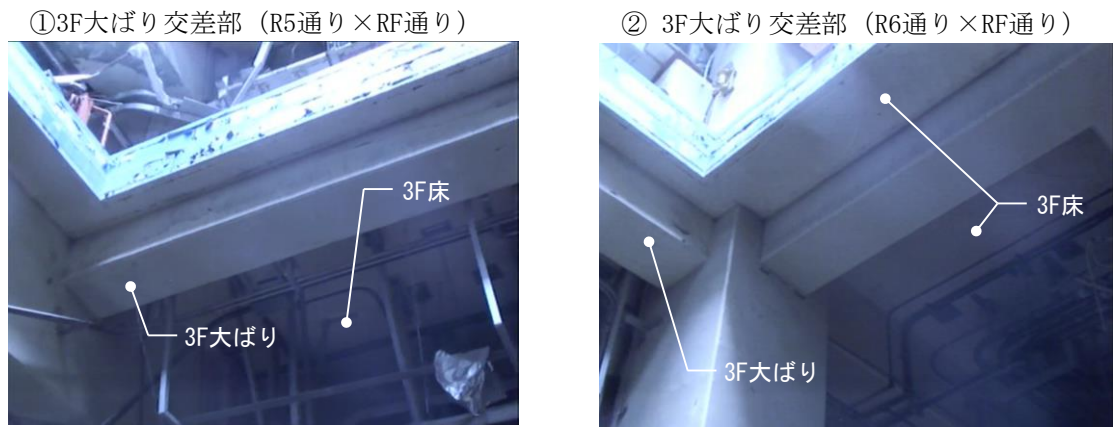
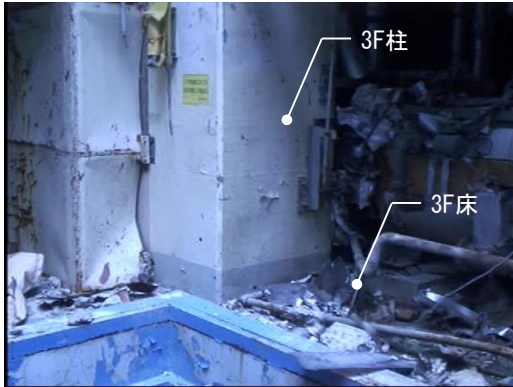


図-2.6(1) 建屋内状況写真（3階）

③3F柱脚



④3F西側外壁中央部



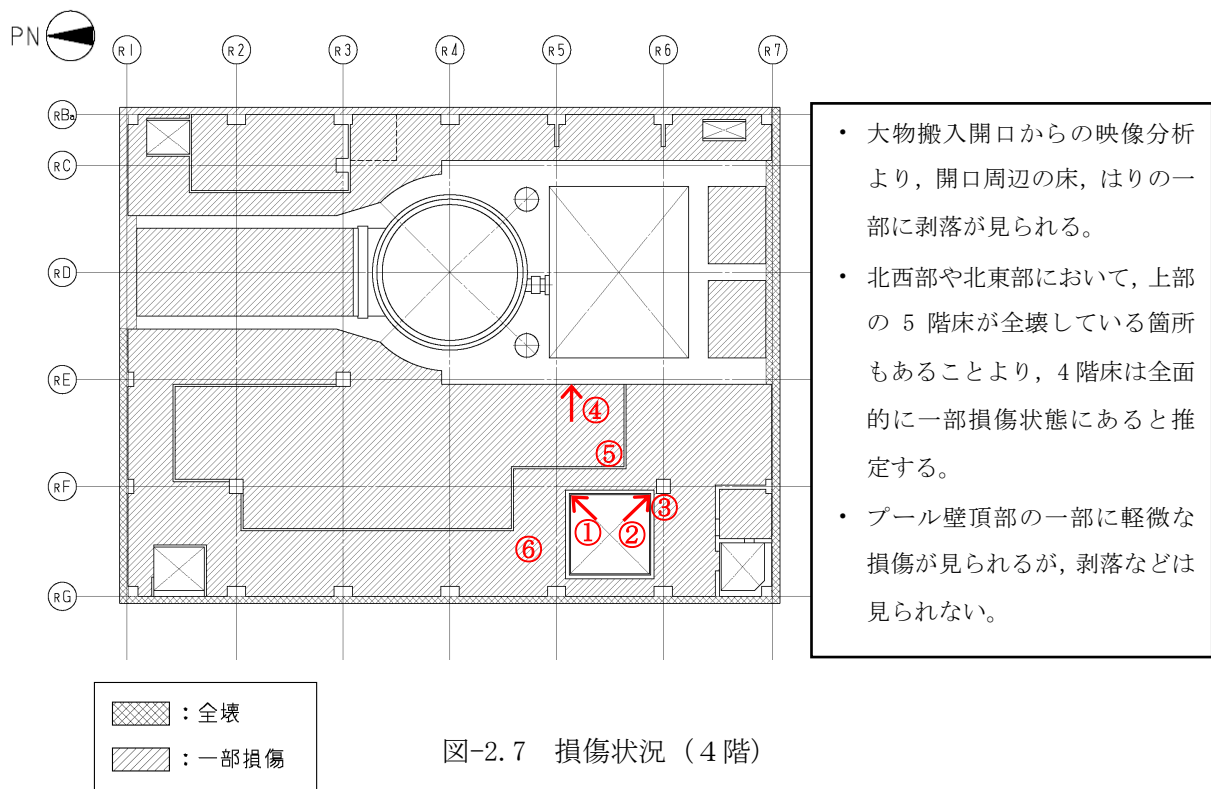
⑤3F床 (大物搬入口東側)



⑥3F床 (大物搬入口北側)



図-2.6(2) 建屋内状況写真 (3階)



①4F大ばり交差部（R5通り×RF通り）

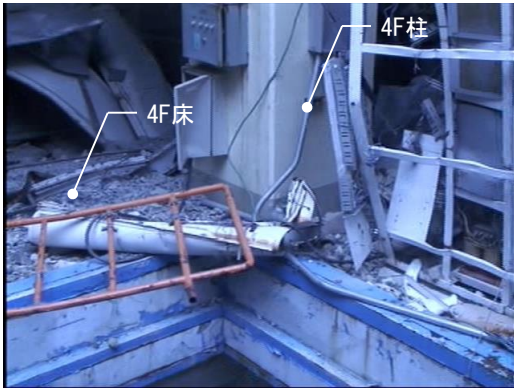


②4F大ばり交差部（R6通り×RF通り）

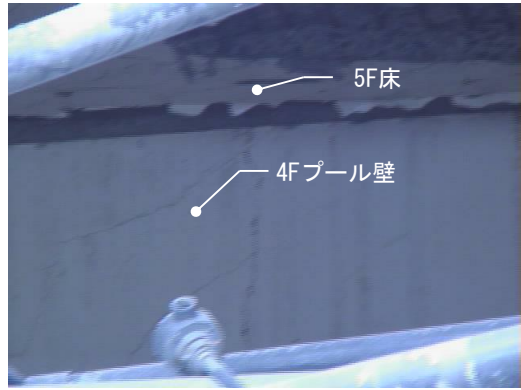


図-2.8(1) 建屋内状況写真（4階）

③4F柱脚



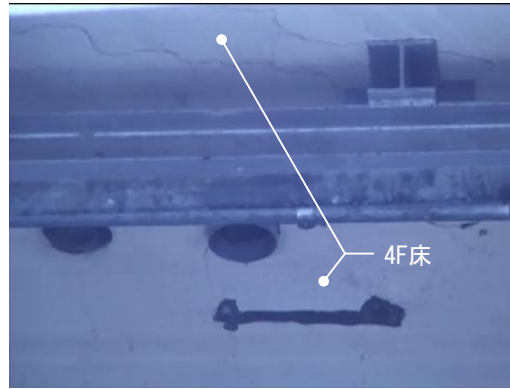
④4Fプール壁 (頂部)



⑤4F床 (大物搬入口東側)



⑤4F床 (大物搬入口東側)



⑥4F床 (大物搬入口北側)



⑥4F床 (大物搬入口北側)

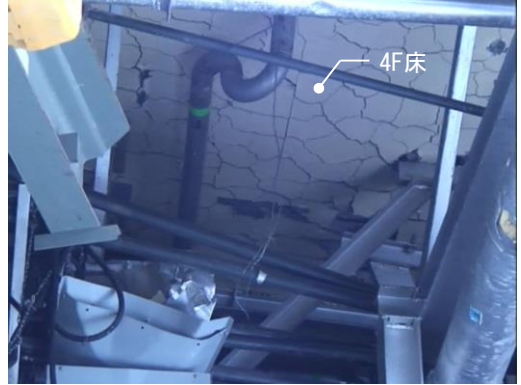


図-2.8(2) 建屋内状況写真 (4階)



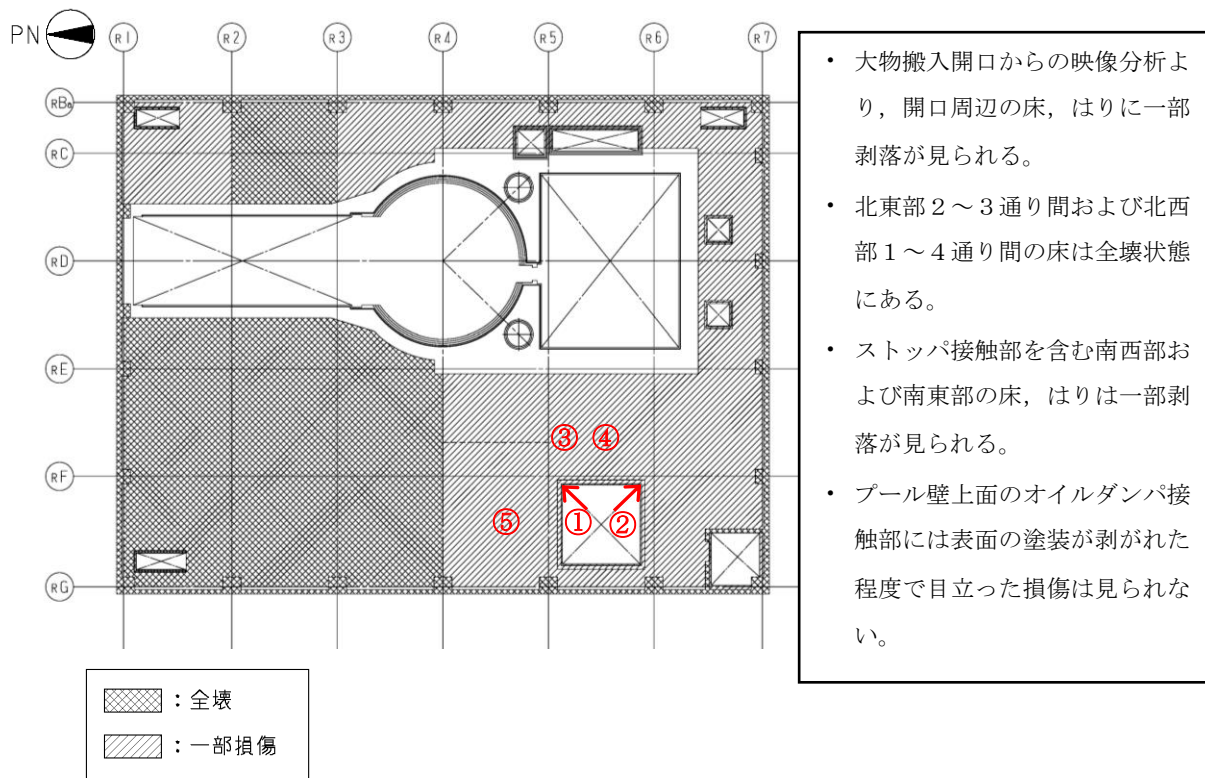


図-2.9 損傷状況（5階）

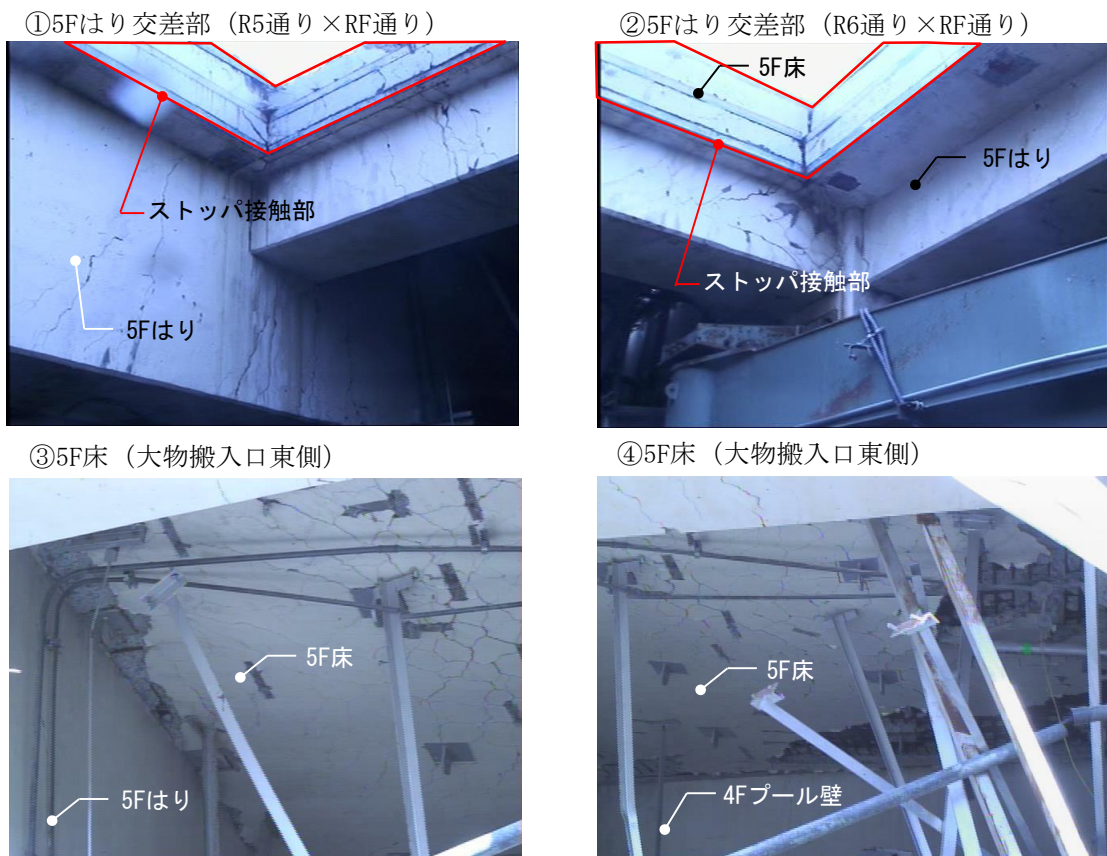
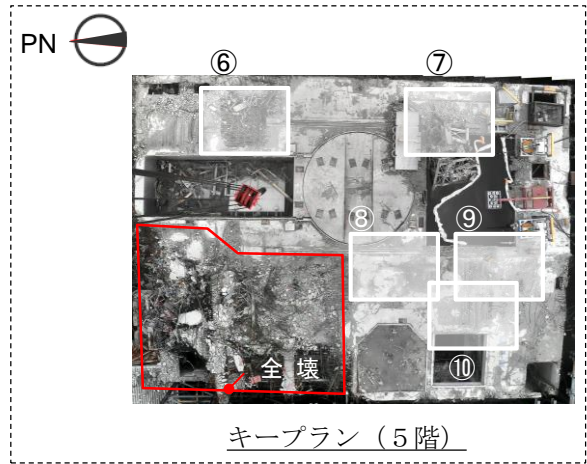
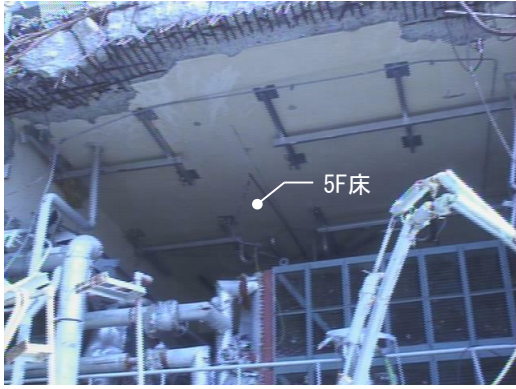
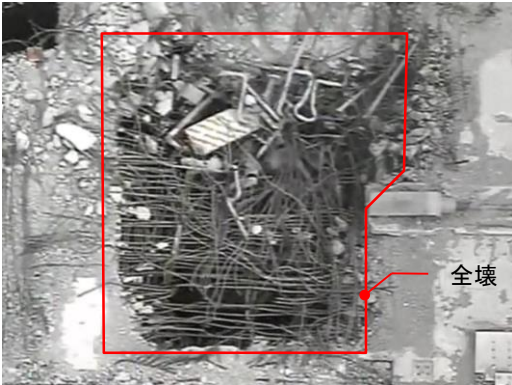


図-2.10(1) 建屋内状況写真（5階）

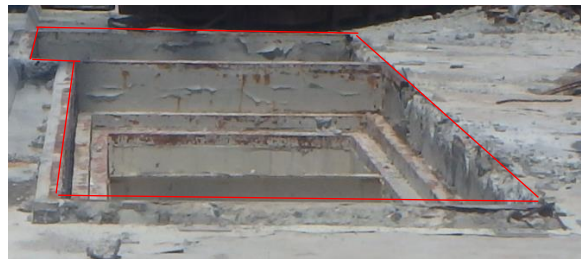
⑤5F床（大物搬入口北側）



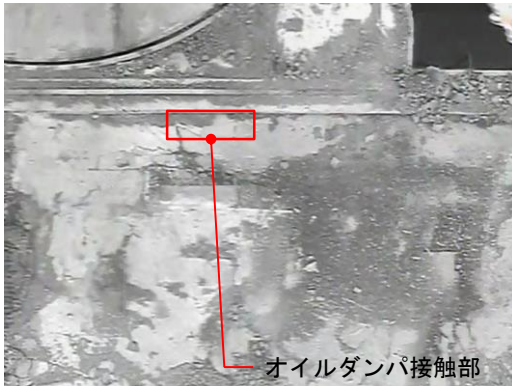
⑥5F床（機器仮置プール）



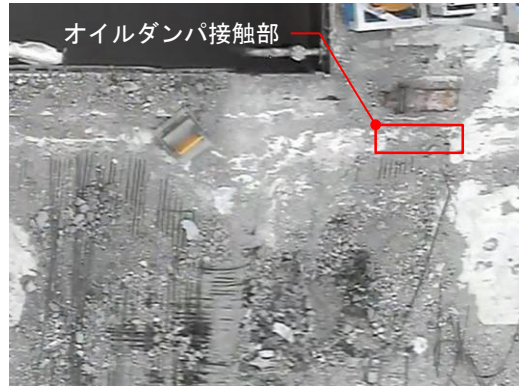
⑦東側ストップ接触部



⑧オイルダンパ接触部（北側）



⑨オイルダンパ接触部（南側）



⑩西側ストップ接触部

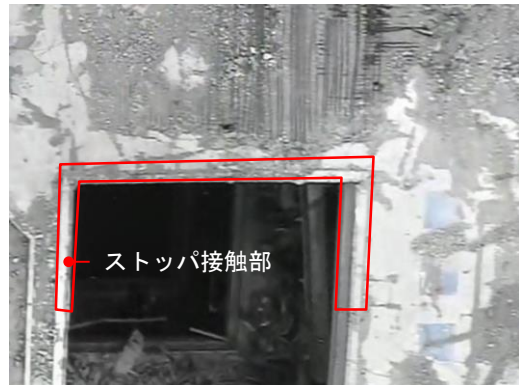


図-2.10(2) 建屋内状況写真（5階）



①西側壁面



②東側壁面



③南側壁面



④北側壁面



・ 外壁4面とも新たな損傷は見られない。

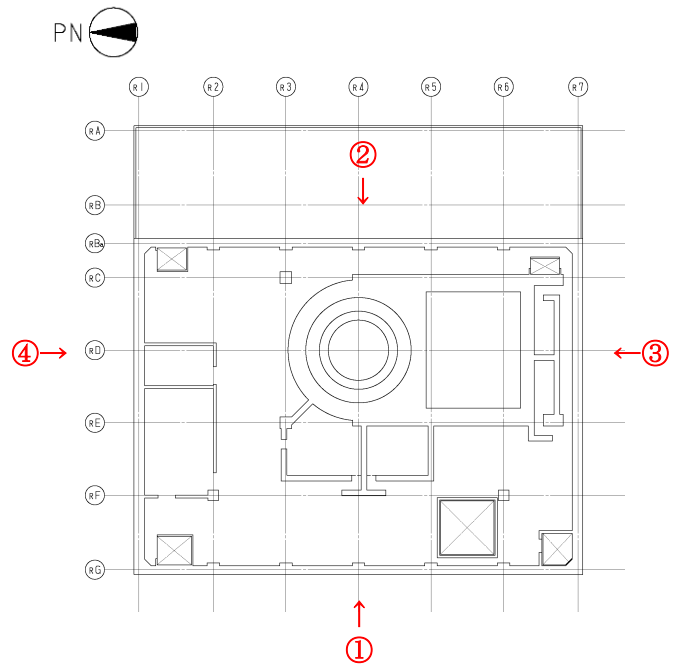


図-2.11 建屋外壁状況写真

### 3. 3次元FEM解析による耐震安全性評価

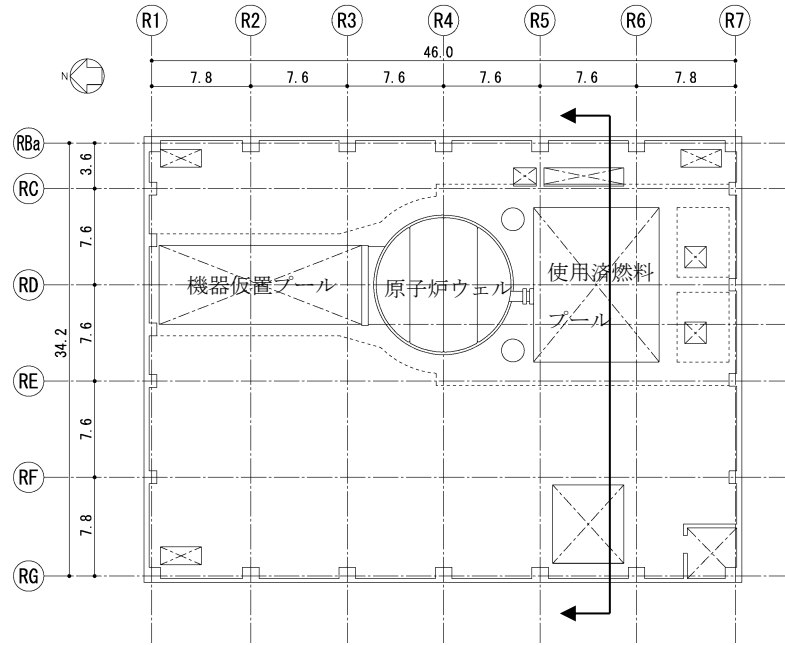
#### 3.1 解析方針

本検討では、使用済燃料の取出し時における原子炉建屋の状況を反映するとともに、2章において損傷が確認された箇所を反映した解析モデルを作成し、基準地震動  $S_s$  に対する耐震安全性を、3次元FEM解析によって評価する。

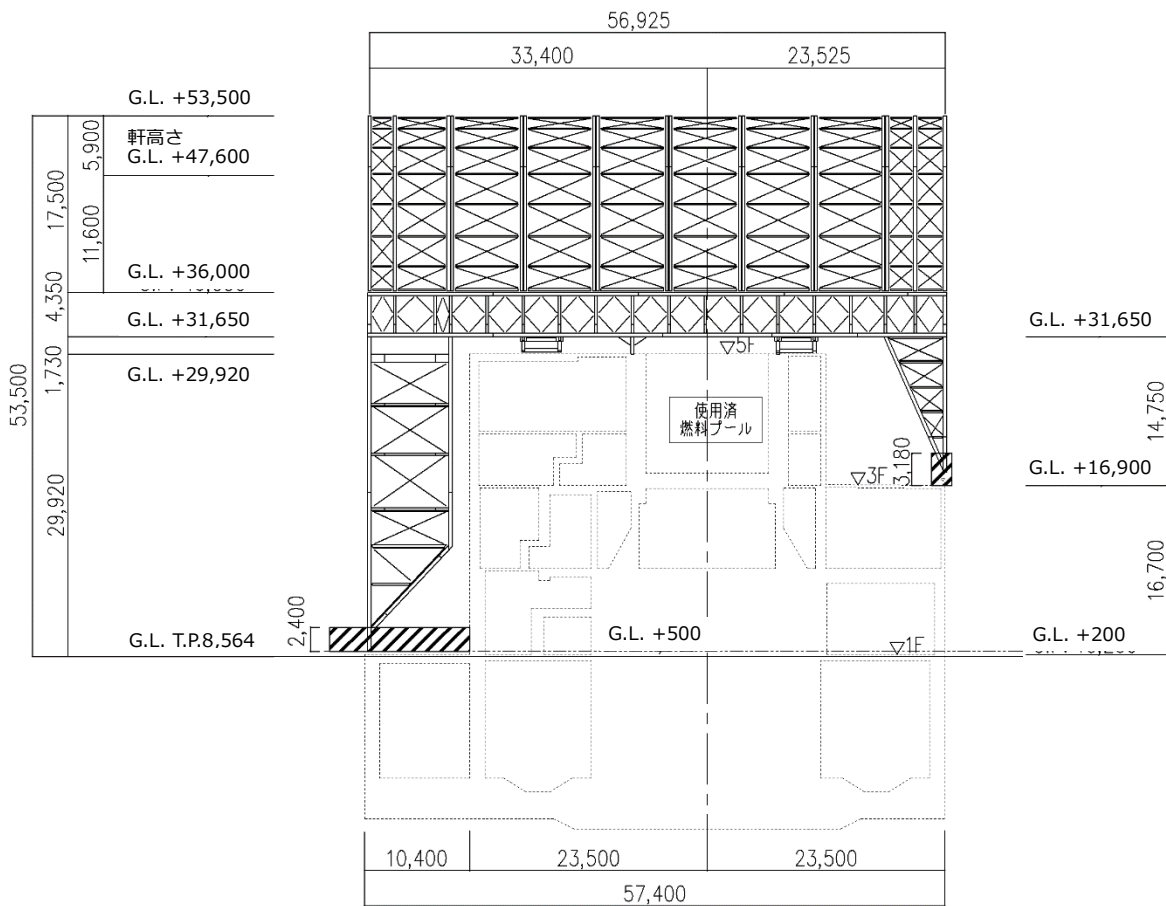
図-3.1.1 に原子炉建屋及び燃料取り出し用カバーの概要図を示す。

耐震安全性評価は、図-3.1.2 のフローに示すように以下の手順で行う。

- ・ 使用済燃料プール周辺の2階の床 (G.L. +8.7m) から5階の床 (G.L. +29.92m) までの建屋部分をもとに、2章において新たに損傷が確認された箇所の強度を期待せず、剛性を低下あるいは無視した3次元FEM解析モデルを作成する。
- ・ 死荷重、遮へい体・燃料取り出し用カバー荷重、使用済燃料プール水による静水圧、地震応答解析結果にもとづく地震荷重、地震時の燃料取り出し用カバー反力及び荷重組合せの条件を設定する。
- ・ 応力解析として鉄筋コンクリート部材の塑性化を考慮した弾塑性解析を行い、使用済燃料プール部、シェル壁及び燃料取り出し用カバーが取り付く5階オペフロに発生する応力及びひずみを算出する。
- ・ 評価基準値と比較し、耐震安全性を評価する。



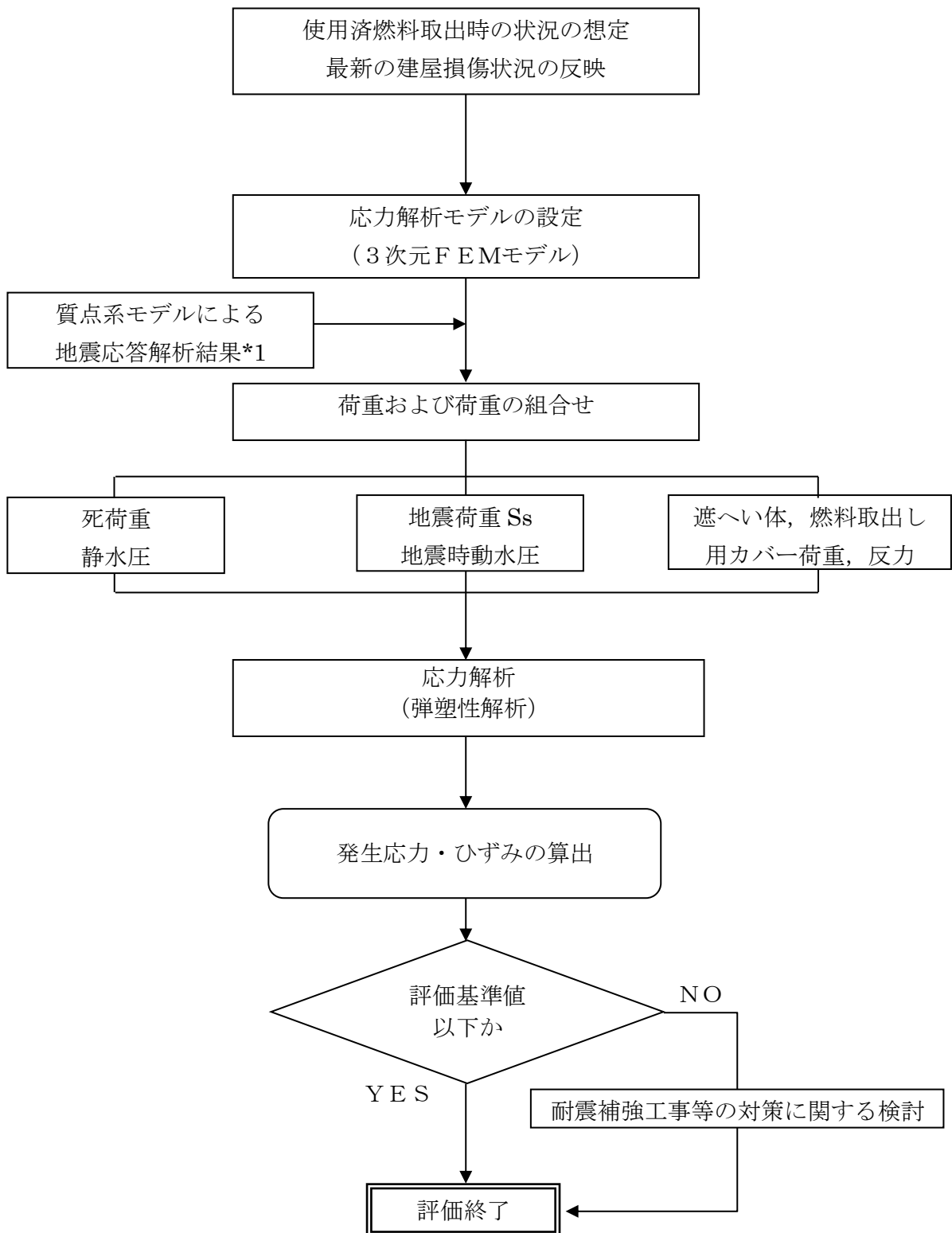
平面図



断面図

図-3.1.1 原子炉建屋及び燃料取り出し用カバーの概要図

本章に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)と O.P.から T.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式> T.P.=旧 O.P.-1.436mm



\*1: 「Ⅱ-2-11 添付資料-4-2 3. 3号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について」中の3号機の燃料取出し時の状態を考慮した地震応答解析結果にもとづく。

図-3.1.2 耐震安全性評価フロー

### 3.2 応力解析モデルの設定

鉄筋コンクリート部材の塑性化を考慮した弾塑性解析を実施し、使用済燃料プール及びシェル壁等に発生する応力及びひずみを算定する。2階壁から5階のオペフロまでの鉄筋コンクリート部材を有限要素の集合体としてモデル化した。2章において損傷（一部損傷及び全壊）が確認された箇所について、建屋損傷状況を反映した応力解析モデルを構築した。

使用計算機コードは「ABAQUS」である。解析モデルに使用する板要素は、鉄筋層をモデル化した異方性材料による積層シェル要素（コンクリート部：10要素 11積分点）を用いた。一般には断面の板厚方向の応力分布を評価するには板厚方向の分割は4～5要素で十分であるが、今回は鉄筋層の外側のコンクリート剛性を考慮できるように10要素と細かくした。なお、面外せん断剛性は「ABAQUS」では、板厚方向には分割されず1要素のままとなる。各要素には、板の軸力と曲げ応力を同時に考える。また、板のたわみには曲げによる変形とせん断による変形を考慮する。柱と梁は、軸力、曲げ、せん断を同時に考慮できる梁要素としてモデル化し、板要素を含めそれぞれの要素の接合条件は剛接とした。

図-3.2.1に解析モデル概要図を、図-3.2.2にコンクリートと鉄筋の構成則を、図-3.2.3に解析モデルの境界条件を示す。

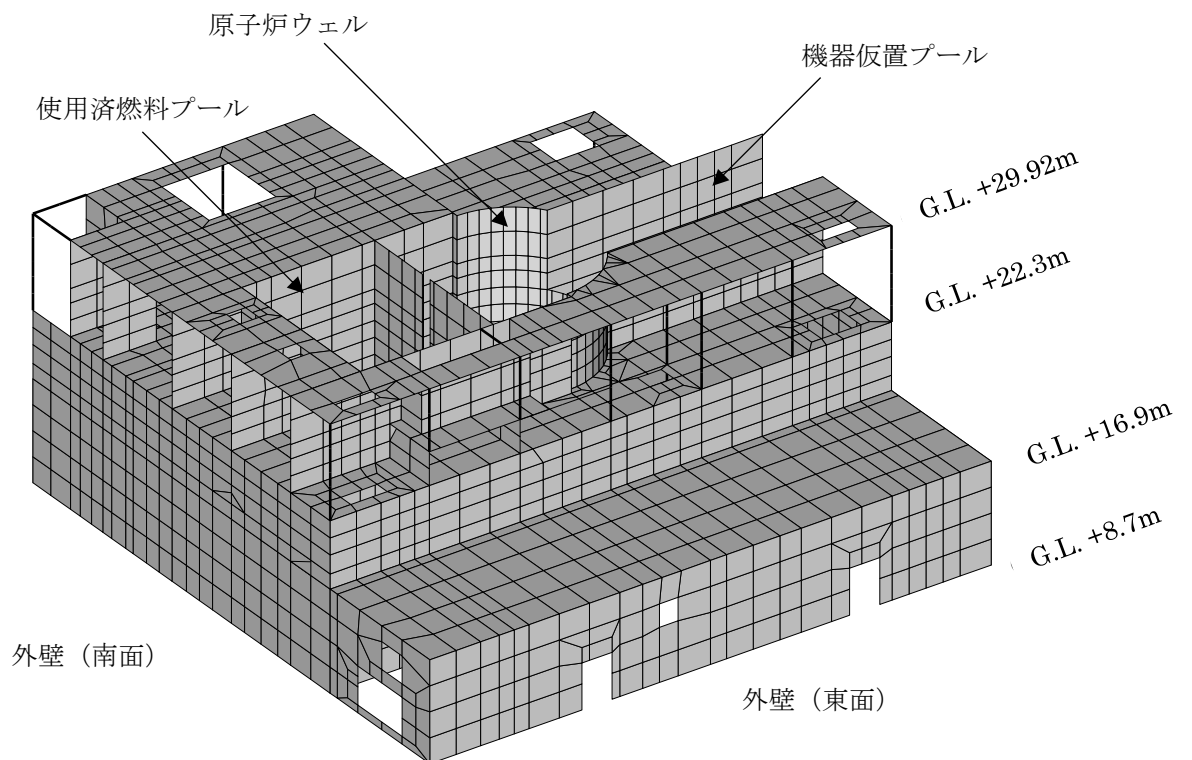
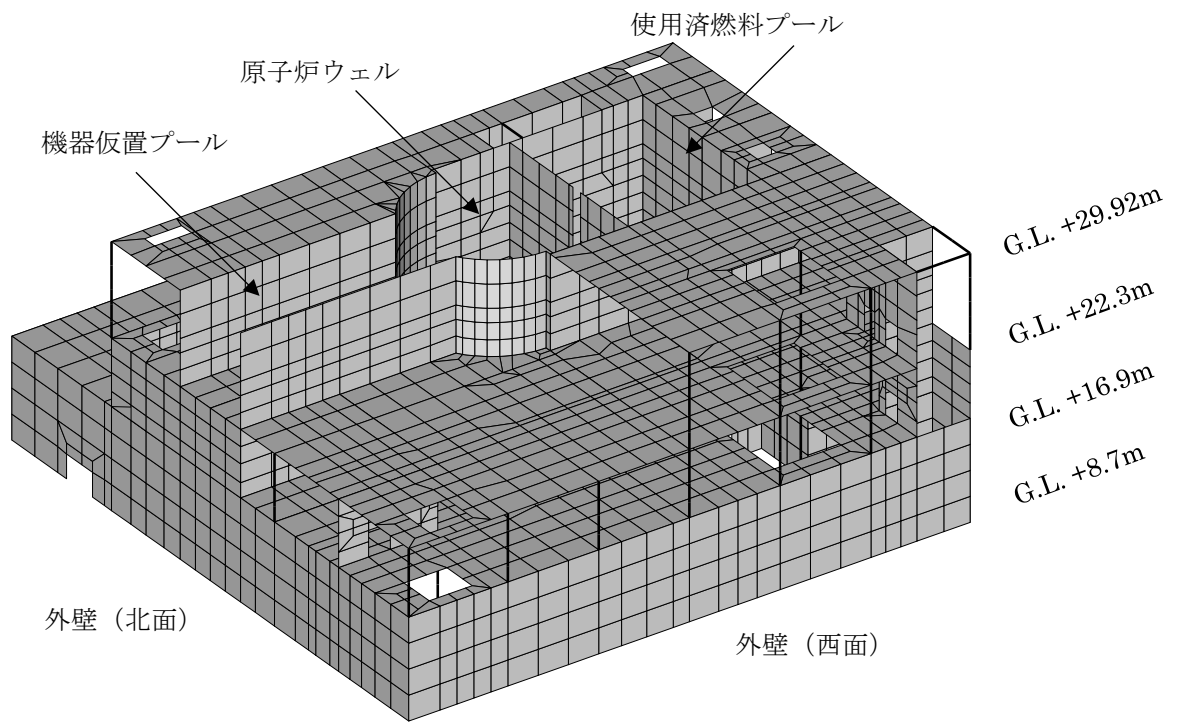
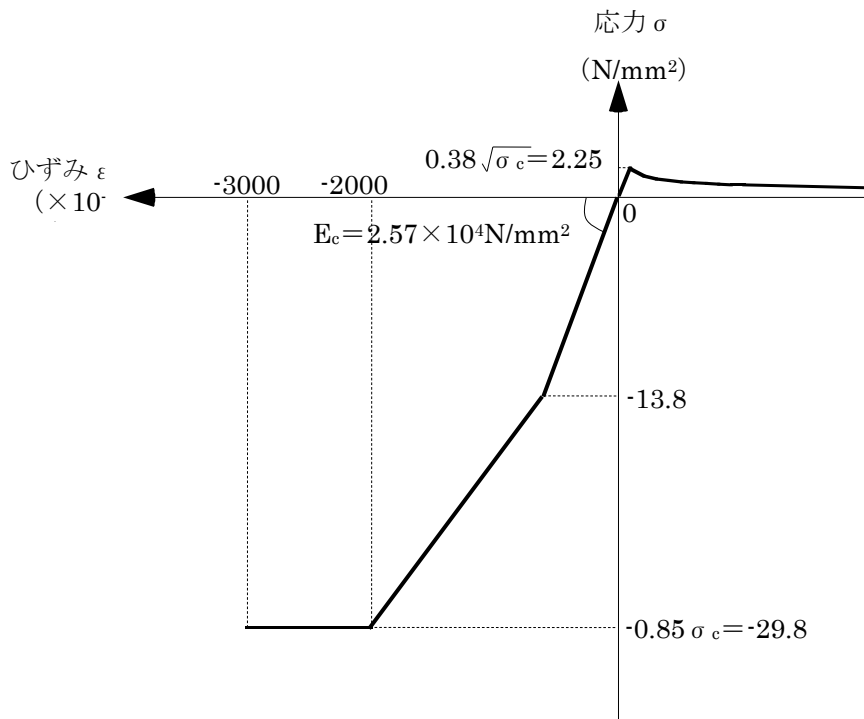
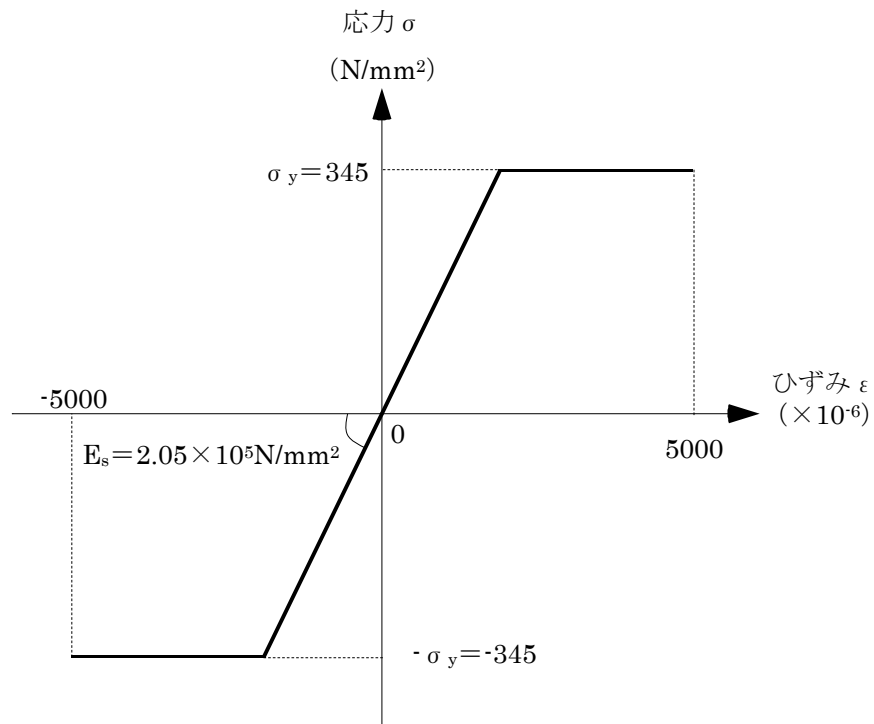


図-3.2.1 解析モデル概要図





(a) コンクリートの応力-ひずみ関係  
(コンクリート強度  $\sigma_c = 35$  N/mm<sup>2</sup>)



(b) 鉄筋の応力-ひずみ関係  
(鉄筋降伏点  $\sigma_y = 345$  N/mm<sup>2</sup>)

図-3.2.2 コンクリートと鉄筋の構成則

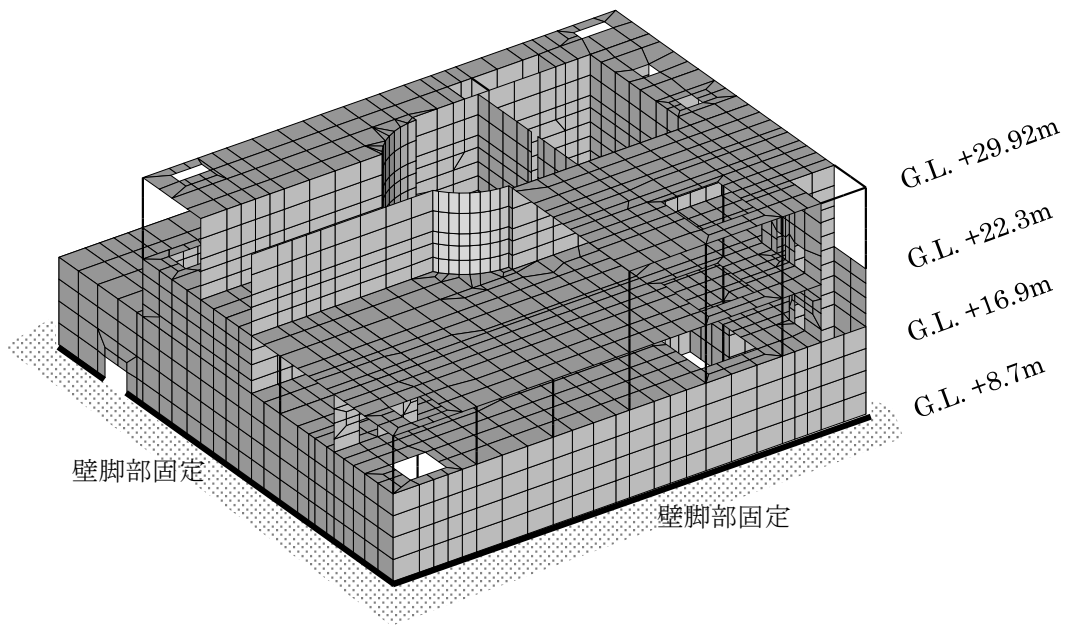


図-3.2.3 解析モデルの境界条件

### 3.3 損傷状況の仮定

損傷状況の仮定にあたっては、2章において損傷（一部損傷及び全壊）が確認された箇所を反映し、3次元FEM解析モデルを作成する。図-3.3.1～図-3.3.4に損傷状況を仮定した損傷モデルを示す。

#### (1)床スラブ

床スラブは、5階～4階において、床全壊箇所は剛性を0%とし、床一部損壊箇所は剛性を50%とする。損傷状況の調査結果より明らかとなったオペフロ（5階）の北東部の床は、剛性を0%とする。4階の床は、大物搬入開口周辺の床、はりの一部に剥落が見られること、および、北西部や北東部において、上部の5階床が全壊している箇所もあることより、4階床は全面的に一部損傷状態にあると推定する。

#### (2)外壁・内壁

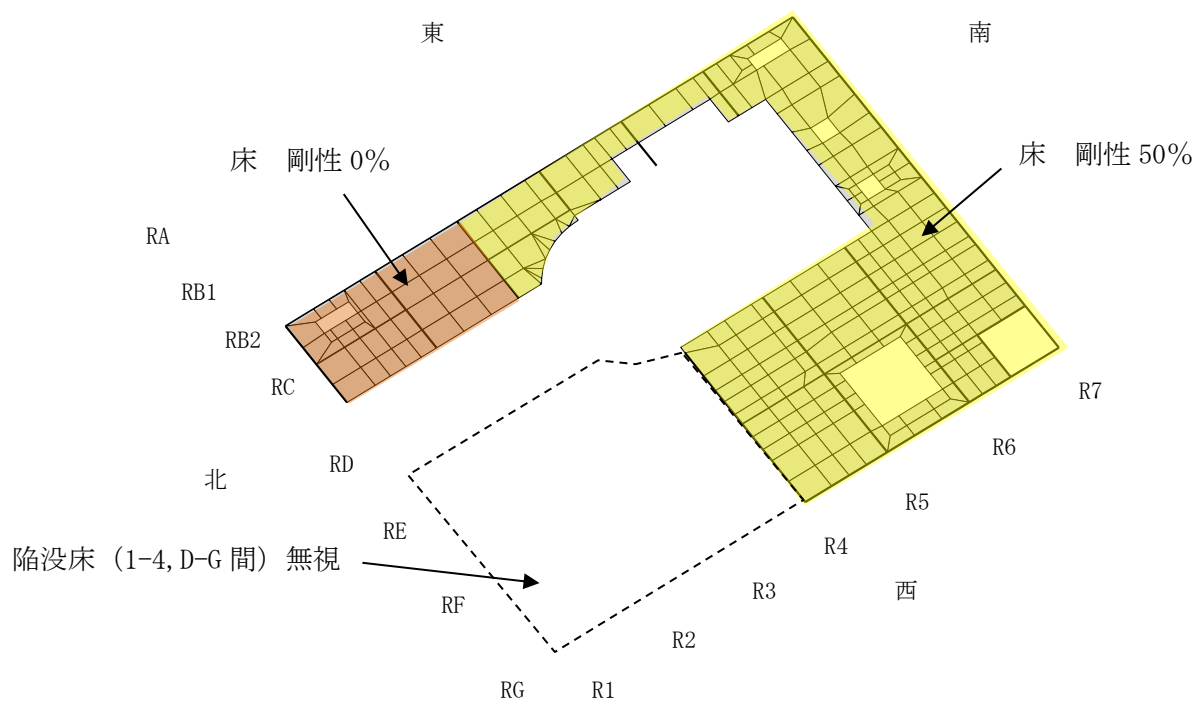
外壁・内壁は、新たな損傷が確認されていないため、変更は行わない。

#### (3)使用済燃料プール・機器仮置プール

使用済燃料プール・機器仮置プールについては壁及び床ともに健全であった壁や床よりも、十分な厚さがあるため、損傷なしとして評価を行う。

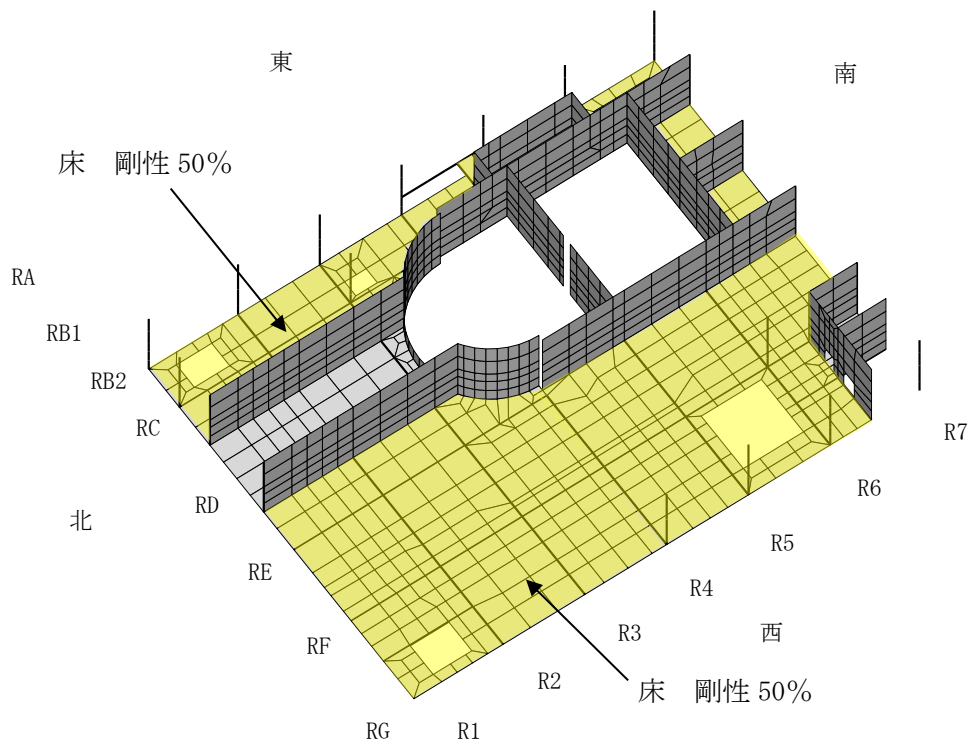
#### (4)シェル壁

シェル壁については健全であった壁や床よりも、十分な厚さがあるため、損傷なしとして評価を行う。



※特記なき箇所は剛性低下を考慮しない。

図-3.3.1 損傷状況仮定 アイソメ図 5階 (G. L. +29.92m)



※特記なき箇所は剛性低下を考慮しない。

図-3.3.2 損傷状況仮定 アイソメ図 4階 (G. L. +22.3m)

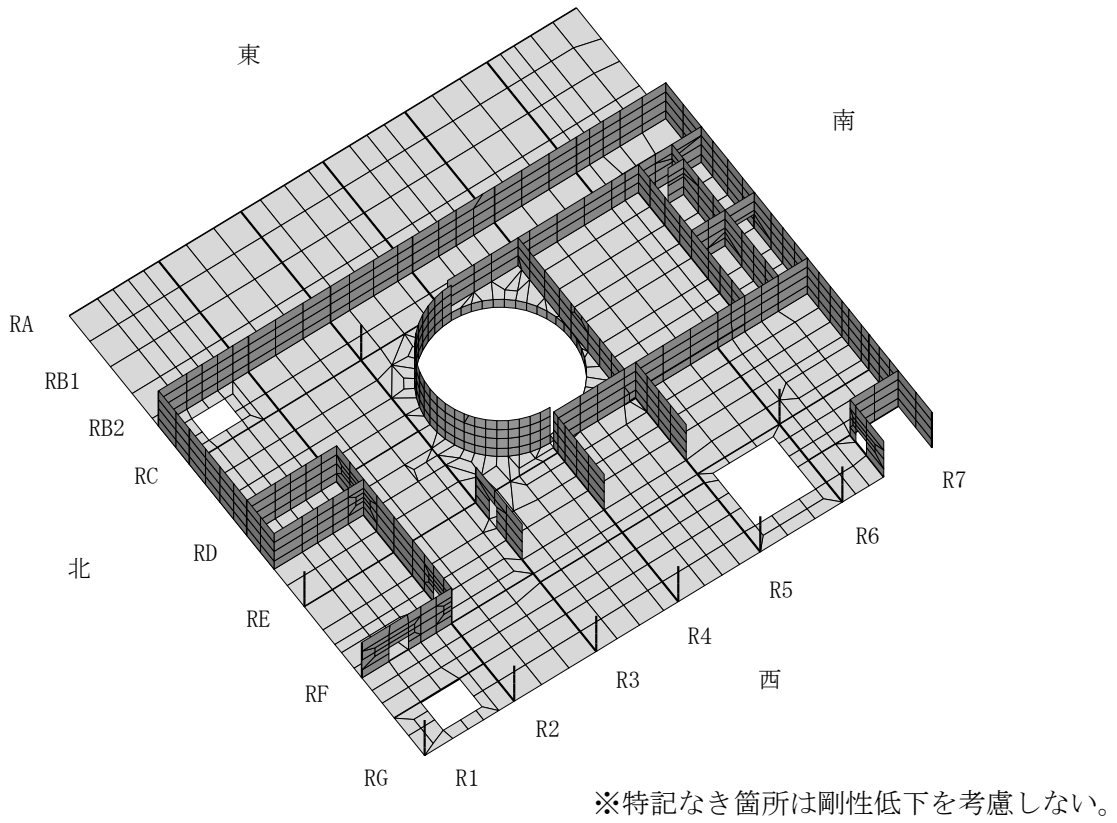


図-3.3.3 損傷状況仮定 アイソメ図 3階 (G.L. +16.9m)

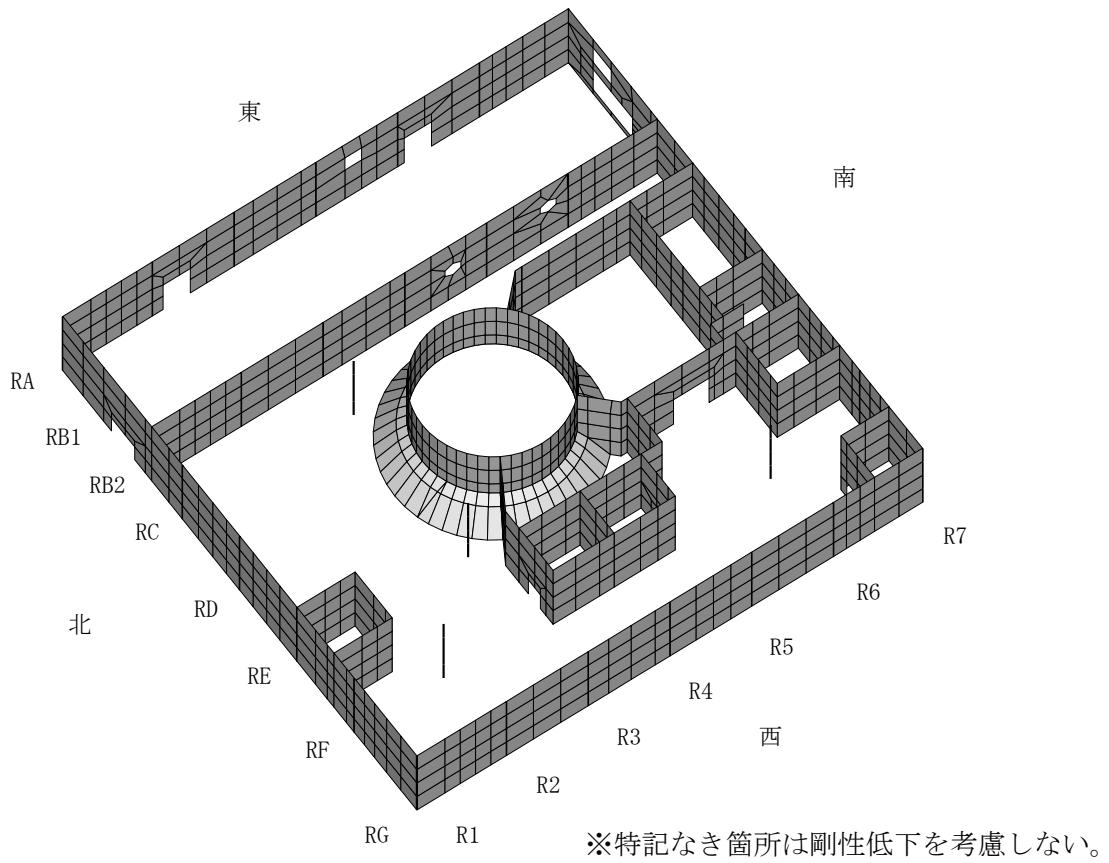


図-3.3.4 損傷状況仮定 アイソメ図 2階 (G.L. +8.7m)

### 3.4 荷重及び荷重の組合せ

#### (1) 死荷重 DL

解析モデルに付与する死荷重は、モデル化範囲の建屋躯体の自重に加え、機器・配管・その他の重量は床に一様に積載されているものとする。死荷重を表-3.4.1に示す。

表-3.4.1 死荷重

荷重	荷重の与え方	荷重 (kN)
死荷重 (原子炉建屋)	シェル要素に物体力 (密度×体積) として入力する	330619

#### (2) 遮へい体・燃料取り出し用カバー荷重 DF

遮へい体及び燃料取り出し用カバー重量を表-3.4.2に示す。

表-3.4.2 遮へい体・燃料取り出し用カバー荷重 (固定荷重)

荷重	荷重の与え方	荷重 (kN)	
遮へい体荷重 (固定荷重)	オペフロ階 (既存躯体の5階) の鉛直支持位置に、支配面積に応じて按分した荷重を節点荷重として入力する	18000	
燃料取り出し用カバー荷重 (固定荷重)	ストッパ	オペフロ階 (既存躯体の5階) のストッパ脚部反力を節点荷重として入力する	1500
	東側脚部 <sup>※1</sup>	カバー架構 (オイルダンパを含む) の脚部反力を節点荷重として入力する	7700 <sup>※2</sup>
	置き基礎	死荷重 (原子炉建屋) として考慮済み <sup>※3</sup>	(1500)

※1：解析モデル (3次元 FEM モデル) において、2階壁から上部をモデル化しているため、西側脚部 (1階床面レベル) は該当なし。

※2：東側脚部の荷重 7700kN は、全体モデルの取合い点の反力より算出している。

※3：置き基礎は、原子炉建屋下屋部分に一様に荷重 (2階外壁上。3階床レベル。) がかかるため、原子炉建屋の死荷重として考慮した。

### (3) 静水圧 H

使用済燃料プールが満水状態（プール水重量 13640 kN）にあると仮定した場合の静水圧（ $\sigma = 113 \text{ kN/m}^2$ ）を考慮する。荷重は圧力荷重としてシェル要素に入力する。

$$\text{静水圧} \quad P_s = \rho g H$$

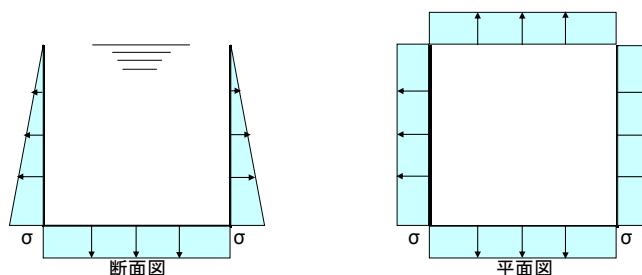
ここで

$\rho$  : 液体の密度 ( $10^3 \text{ kg/m}^3$ )

$g$  : 重力加速度 ( $9.80665 \text{ m/s}^2$ )

$H$  : プール水深 ( $11.51 \text{ m}$ )

$$P_s = 113 (\text{kN} / \text{m}^2)$$



### (4) 地震荷重 K

全体架構モデルによる基準地震動  $S_s$  に対する地震応答解析結果に基づき、水平方向及び鉛直方向の地震荷重を考慮する。地震荷重を表-3.4.3 に示す。

表-3.4.3(1) 地震荷重 (kN)

G. L. (m)	フロア重量 (kN)	NS 方向地震力			荷重の与え方
		せん断力 (kN)	地震力 (kN)	震度	
+29.92	87590	—	71920	0.83	基準地震動 $S_s$ に対する応答せん断力に基づく地震力を震度換算し、シェル要素の物体力（密度×体積）に乗じて入力する。
+22.3	119490	71920	83080	0.70	
+16.9	111340	155000	74320	0.67	
+8.7	130160	229320	77190	0.60	
+0.2	—	306510	—	—	

表-3.4.3(2) 地震荷重 (kN)

G. L. (m)	フロア重量 (kN)	EW 方向地震力			荷重の与え方
		せん断力 (kN)	地震力 (kN)	震度	
+29.92	87590	—	72110	0.83	基準地震動 S <sub>s</sub> に対する応答せん断力に基づく 地震力を震度換算し、シェル要素の物体力（密度×体積）に乗じて入力する。
+22.3	119490	72110	85770	0.72	
+16.9	111340	157880	72640	0.66	
+8.7	130160	230520	74140	0.57	
+0.2	—	304660	—	—	

表-3.4.3(3) 地震荷重 (kN)

G. L. (m)	フロア重量 (kN)	UD 方向地震力			荷重の与え方
		軸力 (kN)	地震力 (kN)	震度	
+29.92	87590	—	43860	0.50	基準地震動 S <sub>s</sub> に対する応答軸力に基づく 地震力を震度換算し、シェル要素の物体力（密度×体積）に乗じて入力する。
+22.3	119490	43860	54730	0.46	
+16.9	111340	98590	47810	0.43	
+8.7	130160	146400	57000	0.44	
+0.2	—	203400	—	—	



(5) 燃料取り出し用カバー反力 KF

地震時に生じる燃料取り出し用カバーからの反力を表-3.4.4に示す。

表-3.4.4 燃料取り出し用カバー反力 (地震時)

荷重	荷重の与え方	作用方向	反力 (kN)	
オイルダンパ反力	節点力として入力	鉛直下向き	5200	
燃料取り出し用 カバー反力	節点力として入力		ストッパ	東側脚部
		N→S	15500	700
		S→N	15600	700
		W→E	14600	2500
	E→W	16300	2500	
	節点力として入力	鉛直方向	7700	

(6) 地震時動水圧荷重 KH

JEAC4601に基づき、使用済燃料プール水の基準地震動  $S_s$  時の動水圧 ( $\sigma_{NS}=44 \text{ kN/m}^2$ ,  $\sigma_{EW}=56 \text{ kN/m}^2$ ) を考慮する。荷重は圧力荷重としてシェル要素に入力する。

動水圧は保守的にプール最深部の衝撃圧を壁面全体に作用させる。

$$\text{衝撃圧} \quad {}_iP_W = \rho L \ddot{X} \frac{\sqrt{3}H}{2L} \left[ 1 - \left( \frac{y}{H} \right)^2 \right] \tanh \left( \sqrt{3} \frac{L}{H} \right)$$

ここで

$\rho$  : 液体の密度 ( $10^3 \text{ kg/m}^3$ )

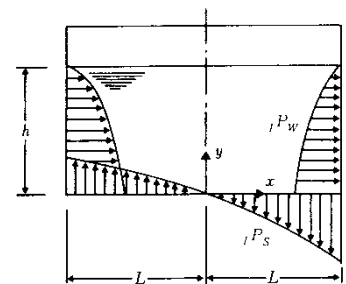
$h$  : 液体の深さ(11.51m)

$H$  :  $H=h$  ( $h \leq 1.5L$ ),  $H=1.5L$  ( $h > 1.5L$ )

$2L$  : 矩形プール幅(m)

$\ddot{X}$  : プール設置床の応答最大加速度 ( $\text{m/s}^2$ ) 又は設置床とその上階床との平均の応答最大加速度 ( $\text{m/s}^2$ )

$y$  : プール底板の中心を原点とする鉛直方向座標(m)  
最深部の評価の場合 0m



(a) 衝撃圧分布形状

NS 方向

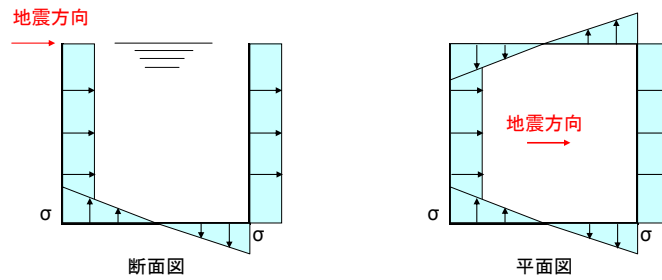
$$L=4.953(\text{m})、\ddot{X}=8.08 (\text{m/s}^2)$$

$${}_iP_w = 44(\text{kN/m}^2)$$

EW 方向

$$L=6.096(\text{m})、\ddot{X}=8.14 (\text{m/s}^2)$$

$$P_w = 56(\text{kN/m}^2)$$



(7) 荷重の組合せ

表-3.4.5 に荷重の組合せを示す。なお、水平方向及び鉛直方向の地震動の組合せは、組合せ係数法（組合せ係数 0.4）により評価する。

表-3.4.5 荷重の組合せ

荷重時名称	荷重の組合せ
S <sub>s</sub> 地震時	DL + DF + H + K + KF + KH

ここに、 DL : 死荷重, DF : 遮へい体・燃料取り出し用カバー荷重, H : 静水圧,  
K : 地震荷重 (基準地震動 S<sub>s</sub>), KF : 燃料取り出し用カバー反力, KH : 地震時動水圧

### 3.5 評価結果

配筋諸元等に基づき構造検討を行い、耐震安全性を評価する。評価においては、応力解析より求まる発生応力及びひずみが、評価基準値以下となることを確認した。評価基準値は、日本機械学会「発電用原子力設備規格 コンクリート製原子炉格納容器規格」(CCV 規格)に基づき設定した。表-3.5.1 にひずみの評価基準値の値を示す。発生応力(面外せん断力)の評価基準値は、下式による。

シェル壁の面外せん断力に対する評価基準値 ( $Q_A$ ) は、次の2つの計算式により計算した値のいずれか小さい方の値とシェル壁の断面積を乗じて算出した値とする。

$$\tau_R = \Phi \{ 0.1(p_t \cdot f_y - \sigma_0) + 0.5p_w \cdot f_y + 0.235\sqrt{F_c} \} \quad \dots\dots\dots (3.5-1)$$

$$\tau_R = 1.10\sqrt{F_c} \quad \dots\dots\dots (3.5-2)$$

ここで、

$\tau_R$  : 終局面外せん断応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

$p_t$  : 主筋の鉄筋比

$f_y$  : 鉄筋の許容引張応力度および許容圧縮応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

$F_c$  : コンクリートの設計基準強度 (N/mm<sup>2</sup>)

$\sigma_0$  : 外力による膜応力度 (N/mm<sup>2</sup>) (引張の符号を正とする)

$p_w$  : 面外せん断力に対する補強筋の鉄筋比であって、次の計算式により計算した値

$$p_w = a_w / (b \cdot x) \quad \dots\dots\dots (3.5-3)$$

$a_w$  : 面外せん断力に対する補強筋の断面積 (mm<sup>2</sup>)

$b$  : 断面の幅 (mm)

$x$  : 面外せん断力に対する補強筋の間隔 (mm)

$\Phi$  : 低減係数であり、次の計算式により計算した値 (1を超える場合は1, 0.58未満の場合は0.58とする)

$$\Phi = 1 / \sqrt{M / (Q \cdot d)} \quad \dots\dots\dots (3.5-4)$$

$M$  : 曲げモーメント (N・mm)

$Q$  : せん断力 (N)

$d$  : 断面の有効せい (mm)

シェル壁以外の面外せん断力に対する評価基準値 ( $Q_A$ ) は、次の(1)または(2)に示す計算式により計算した値とする。

(1) 次の計算式により計算した値

$$Q_A = b \cdot j \cdot c f_s \quad \dots\dots\dots (3.5-5)$$

ここで、

$Q_A$  : 許容面外せん断力 (N)

$b$  : 断面の幅 (mm)

$j$  : 断面の応力中心間距離で  $c f_s$ , 断面の有効せいの7/8倍の値 (mm)

$c f_s$  : コンクリートの許容せん断応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

(2) (1)の規定を超えるものについては、次の計算式により計算した値

$$Q_A = b \cdot j \left\{ \alpha \cdot \epsilon_s + 0.5 p_w f_t (p_w - 0.002) \right\} \dots\dots\dots (3.5-6)$$

ここで、

$p_w$  : 面外せん断力に対する補強筋の鉄筋比であり、次の計算式により計算した値  
(0.012を超える場合は0.012として計算する)

$$p_w = a_w / (b \cdot x) \dots\dots\dots (3.5-7)$$

$a_w$  : 面外せん断力に対する補強筋の断面積 (mm<sup>2</sup>)

$x$  : 面外せん断力に対する補強筋の間隔 (mm)

$f_t$  : 面外せん断力に対する補強筋の許容引張応力度 (N/mm<sup>2</sup>)

$\alpha$  : 割増し係数であり、次の計算式により計算した値 (2を超える場合は 2, 1未満の場合は1とする)

$$\alpha = \frac{4}{M / (Q \cdot d) + 1} \dots\dots\dots (3.5-8)$$

$M$  : 曲げモーメント (N・mm)

$Q$  : せん断力 (N)

$d$  : 断面の有効せい (mm)

なお、 $Q_A$ ,  $b$ ,  $j$ および $\epsilon_s$ は、(1)に定めるところによる。

検定比は、発生ひずみ及び面外せん断力の発生応力と評価基準値の比とする。(1以下で評価基準値を満足する。)

ひずみの検定比 :  $\epsilon / \epsilon_A$

面外せん断力の検定比 :  $Q / Q_A$

検定比を示した結果を図-3.5.1～図-3.5.9に示す。いずれの箇所においても発生ひずみ及び発生応力は弾性範囲内であり、評価基準値を十分に下回っている。このことから、使用済燃料取り出し時の状況において、使用済燃料プール・燃料取り出し用カバーが取りつくオペフロ (5階)床は、2章の損傷状況の調査結果を考慮しても、耐震安全性を有しているものと評価した。

また、ひずみが弾性範囲内であるため、コンクリートに内張りされたライナーが損傷し、使用済燃料プールの水が漏れ出る可能性はないと考えられる。

なお、付録において、パラメトリックスタディとして、本章の損傷状況をより安全側に評価したケースを実施し、耐震安全性に及ぼす影響を確認した。この目的は、2章の損傷状況の調査結果に示すように、現状の調査範囲では一部で損傷判定の不確定な箇所があり、解析上、これらの箇所の残存剛性を安全側に評価し、評価結果に及ぼす感度を把握するためである。併せて、このパラメトリックスタディにおいては、事故時の影響で使用済燃料プール部やシェル壁の剛性が低下した可能性についても考慮した。この結果、多少の数値変動はあるものの解析結果に大きな差

異は生じておらず，仮定条件の変動が解析結果に与える影響はそれほど大きくなく，パラメトリックスタディにおいても耐震安全性を有していると評価した。（付録参照）

表-3.5.1 評価対象別の  $\varepsilon_A$

評価対象	評価基準値 $\varepsilon_A$ ( $\times 10^{-6}$ )
コンクリート	-3000
鉄筋	$\pm 5000$

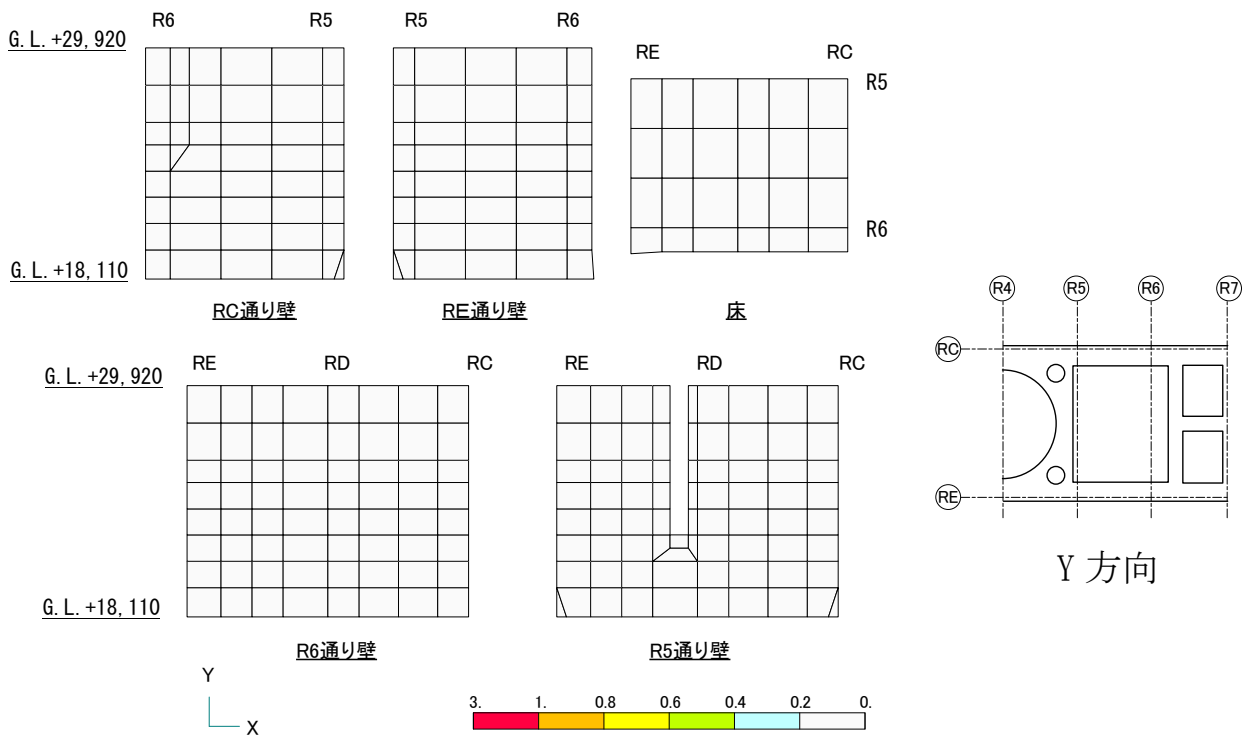
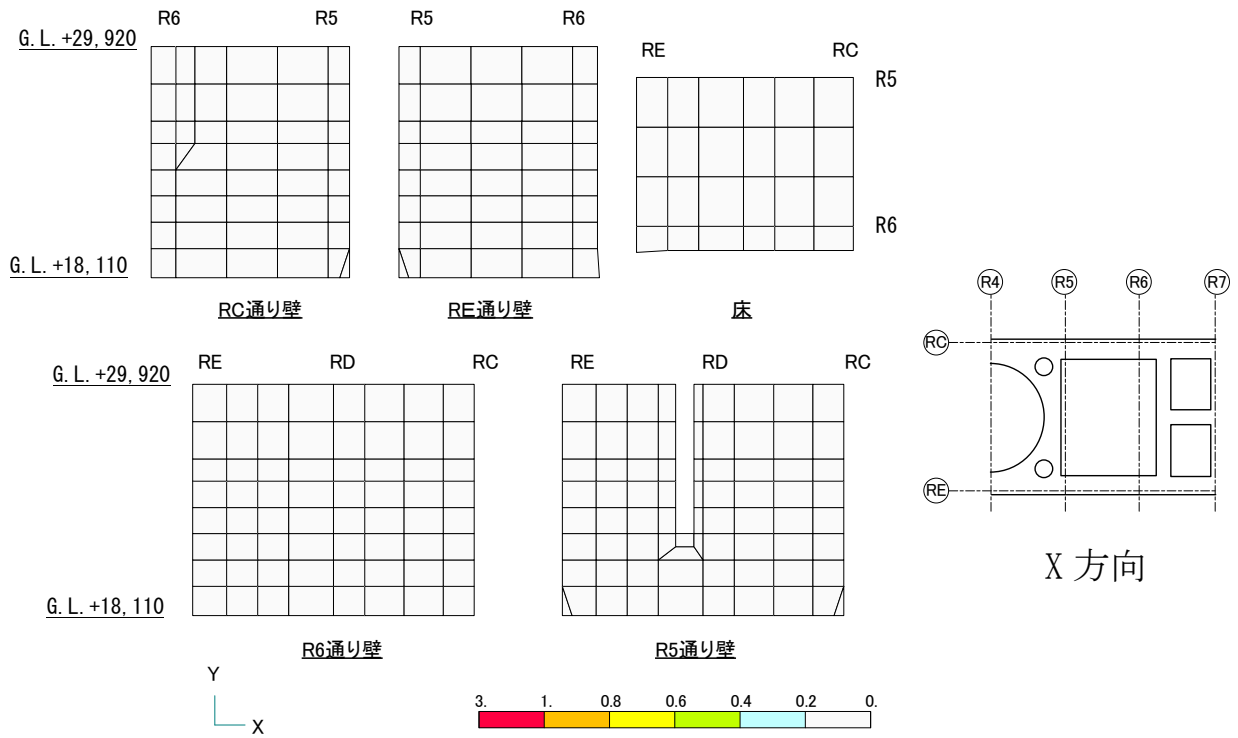


図-3.5.1 コンクリート圧縮ひずみの検定比（使用済燃料プール部）

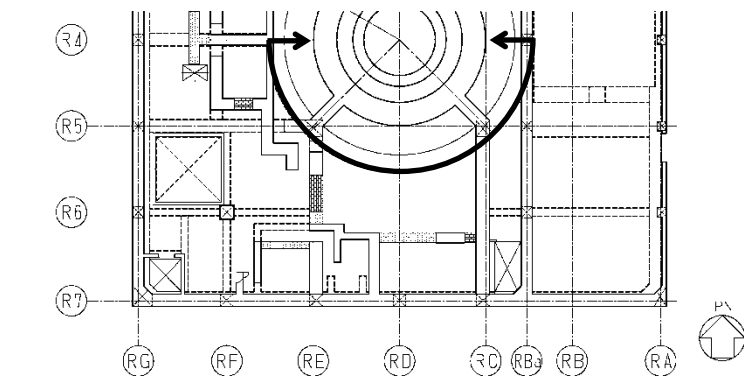
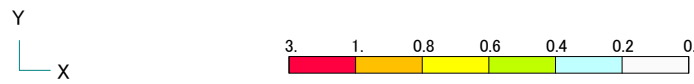
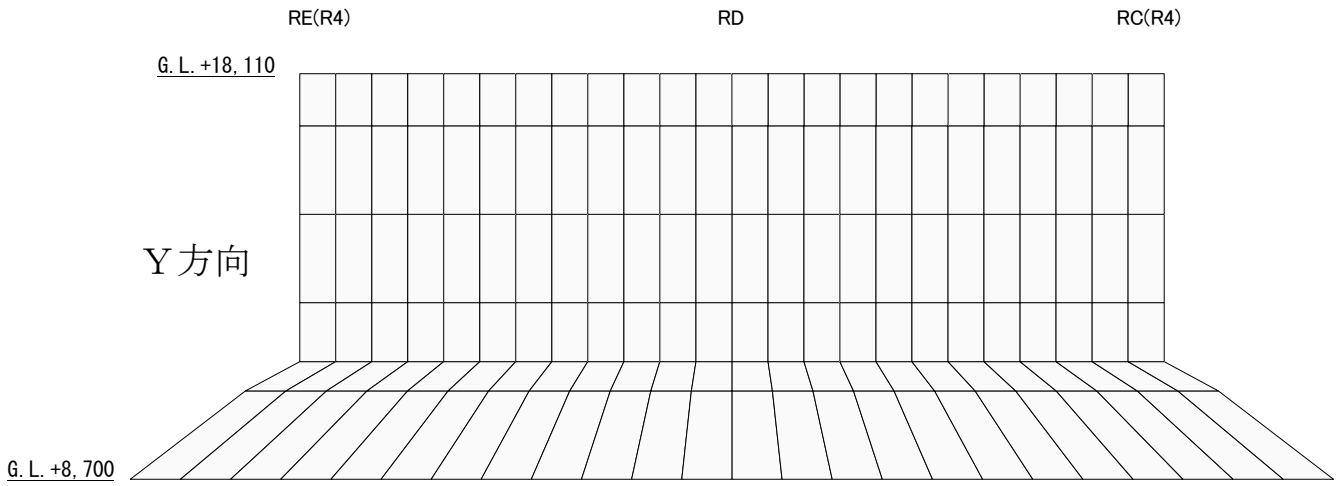
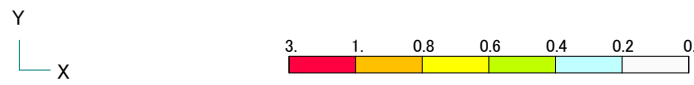
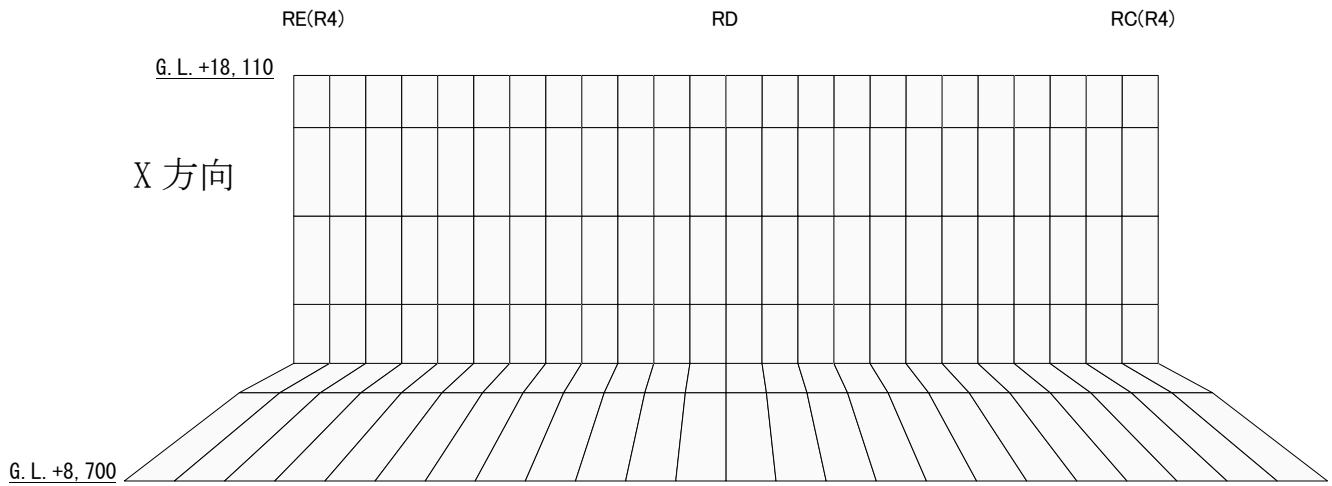


図-3.5.2 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (シェル壁部)

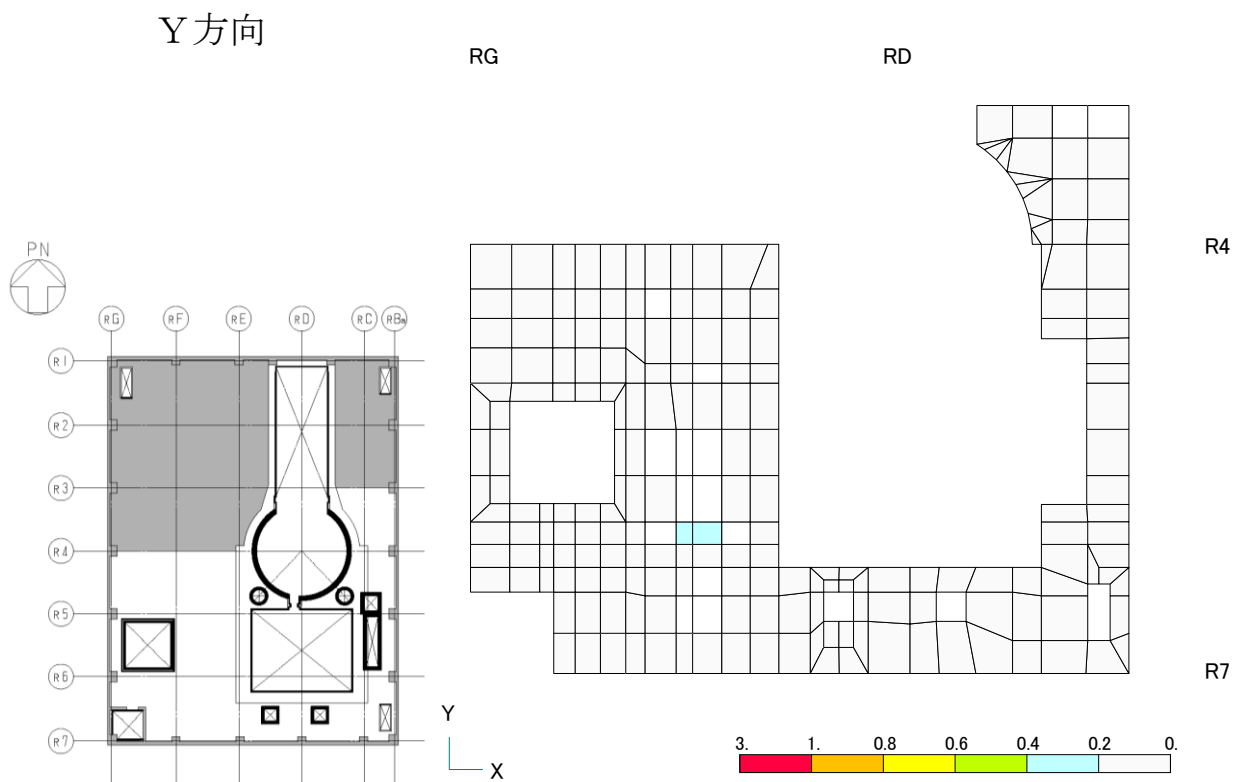
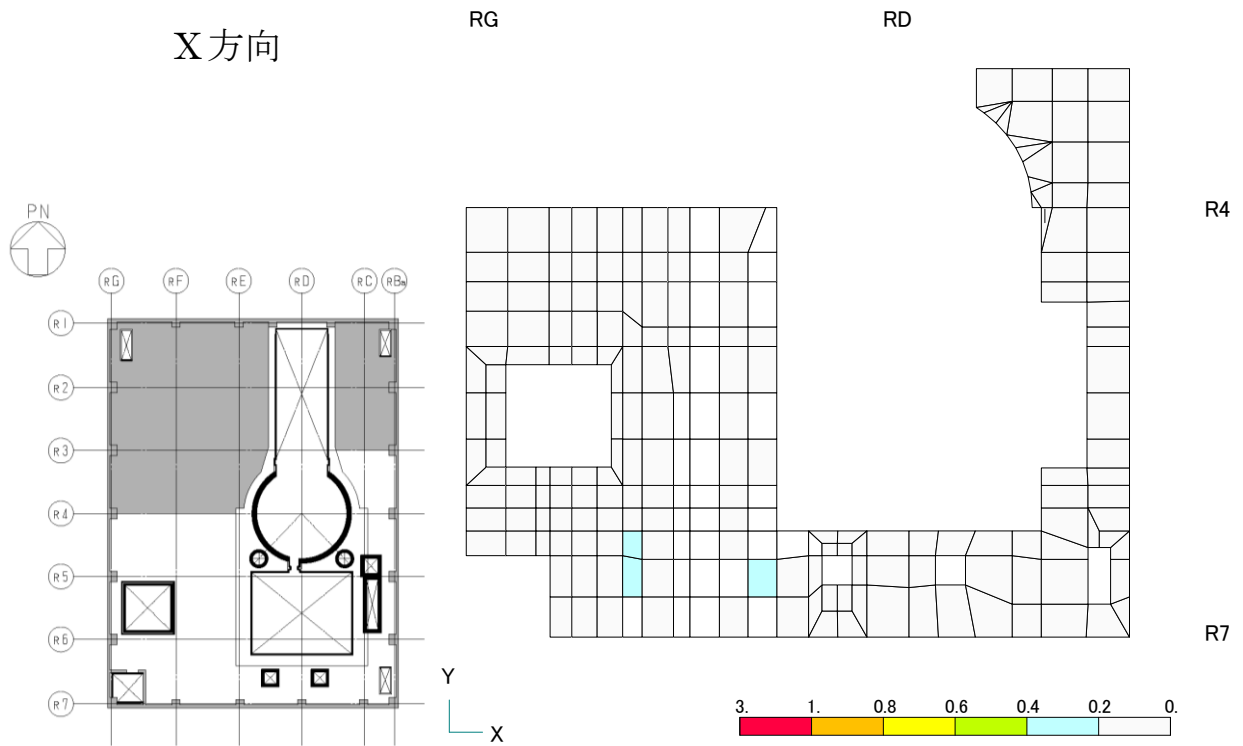


図-3.5.3 コンクリート圧縮ひずみの検定比（オペフロ床部）



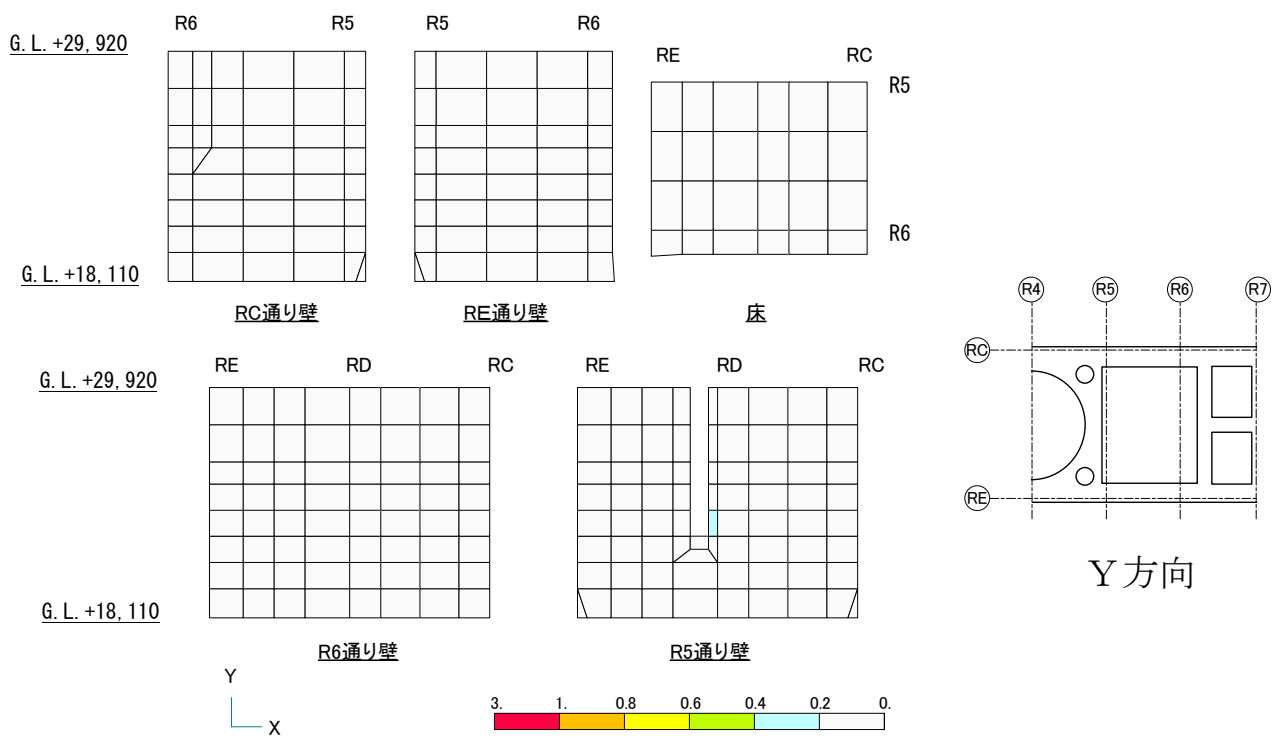
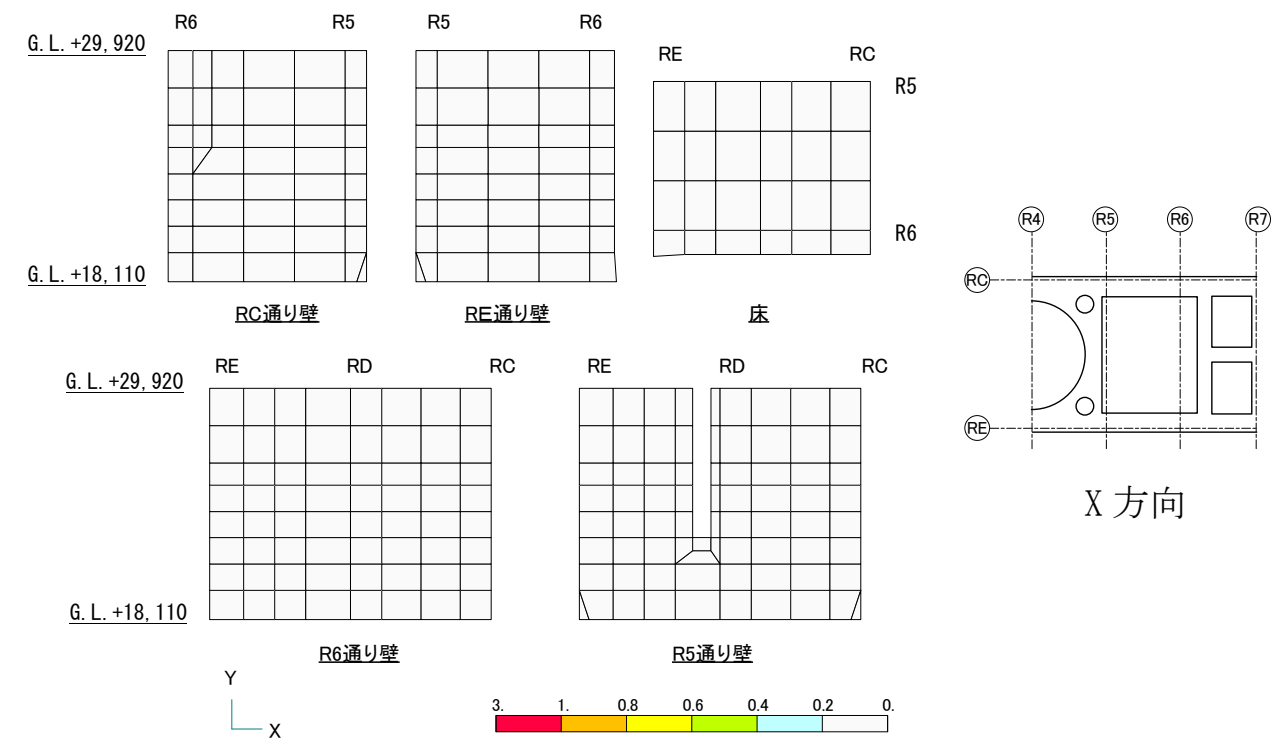


図-3.5.4 鉄筋ひずみの検定比（使用済燃料プール部）

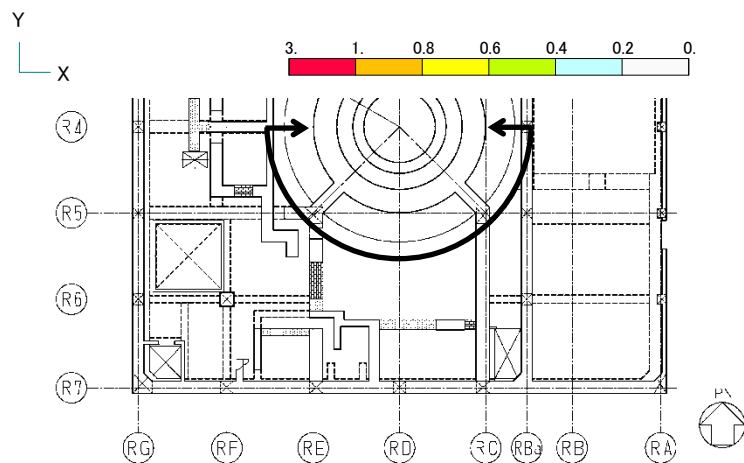
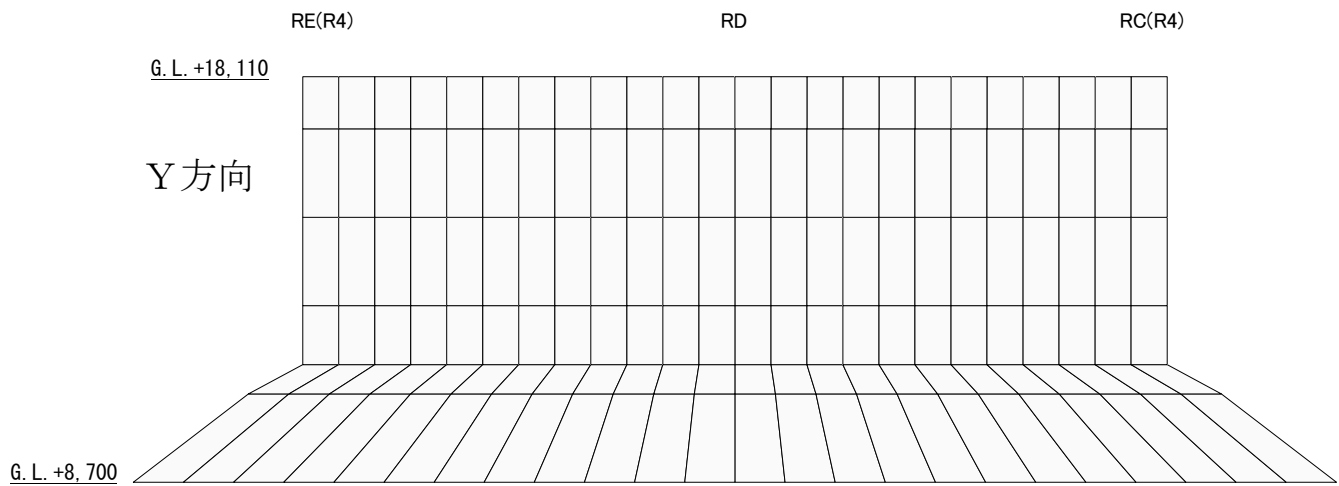
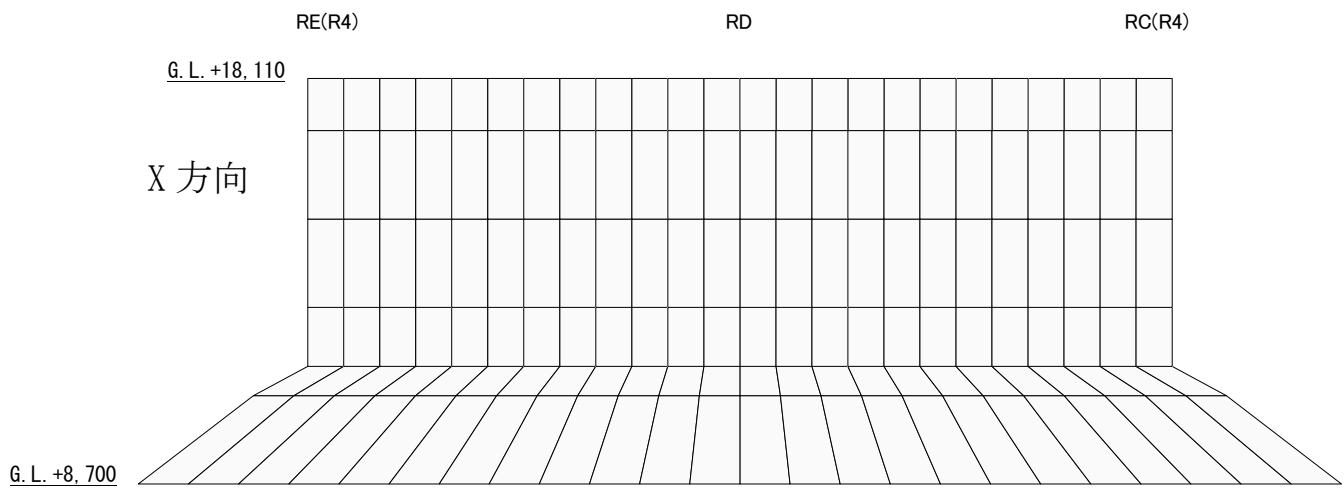


図-3.5.5 鉄筋ひずみの検定比（シェル壁部）

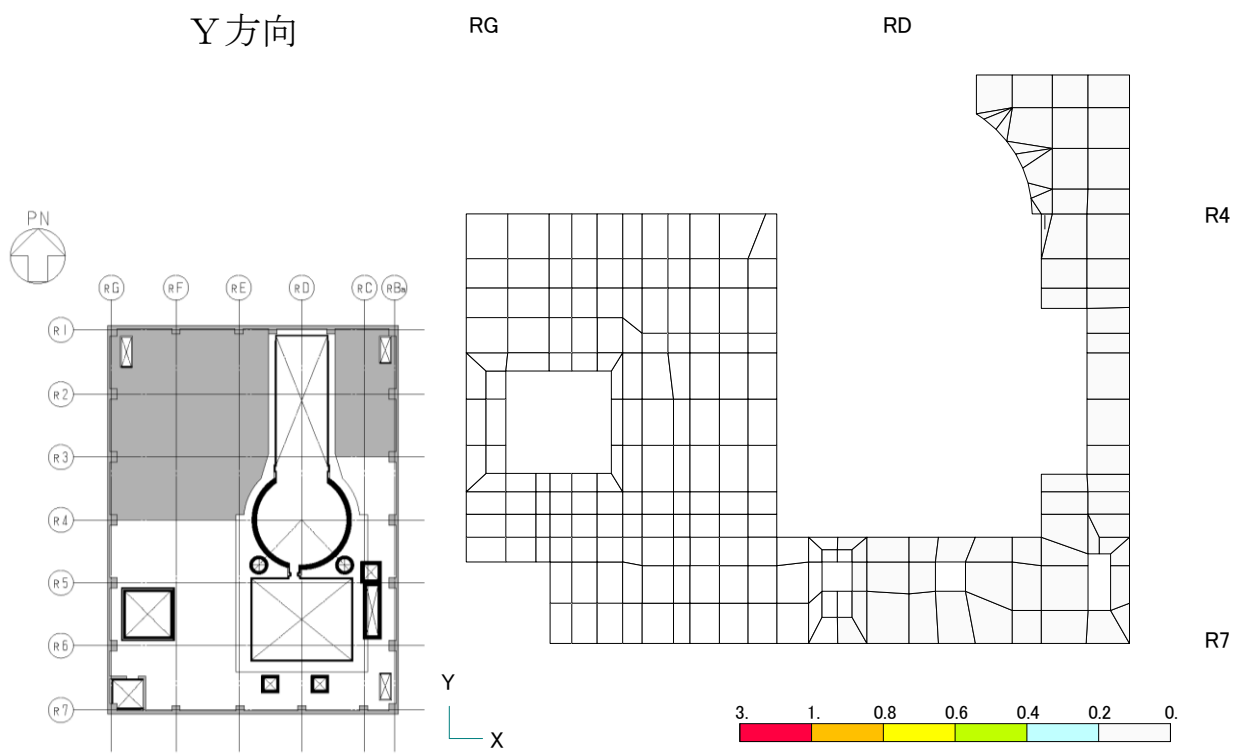
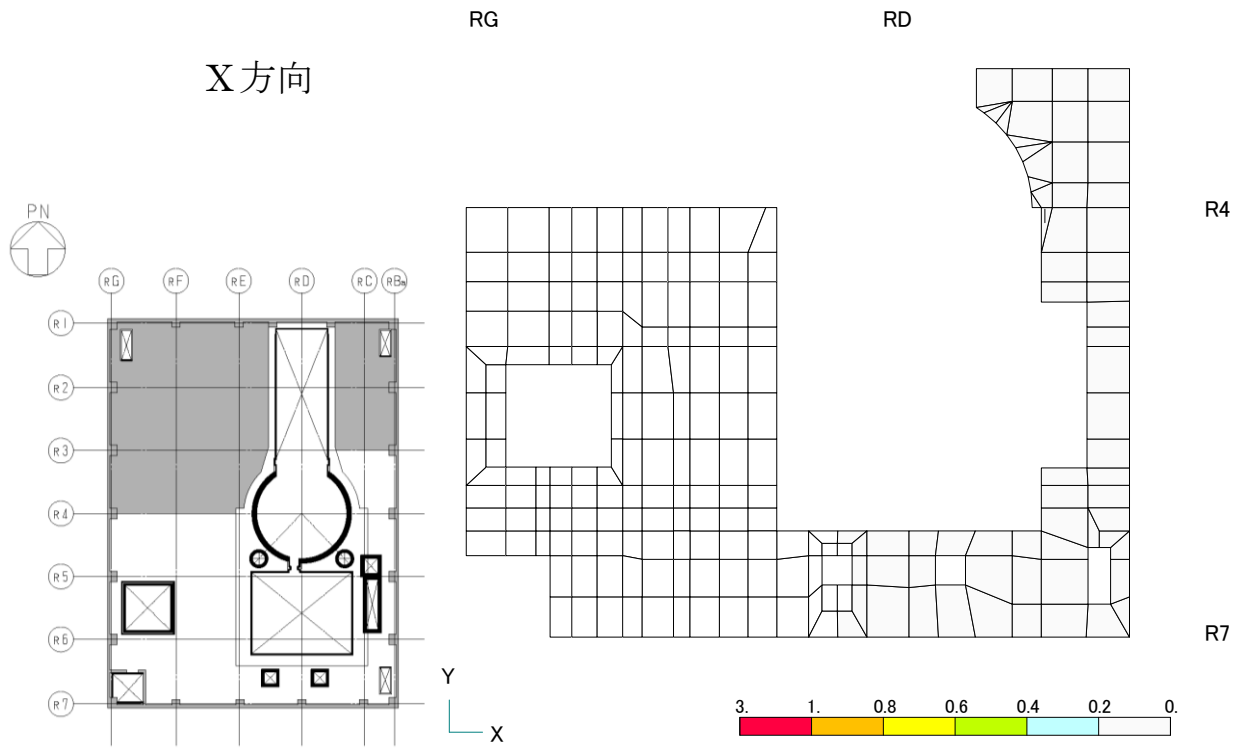


図-3.5.6 鉄筋ひずみの検定比（オペフロ床部）

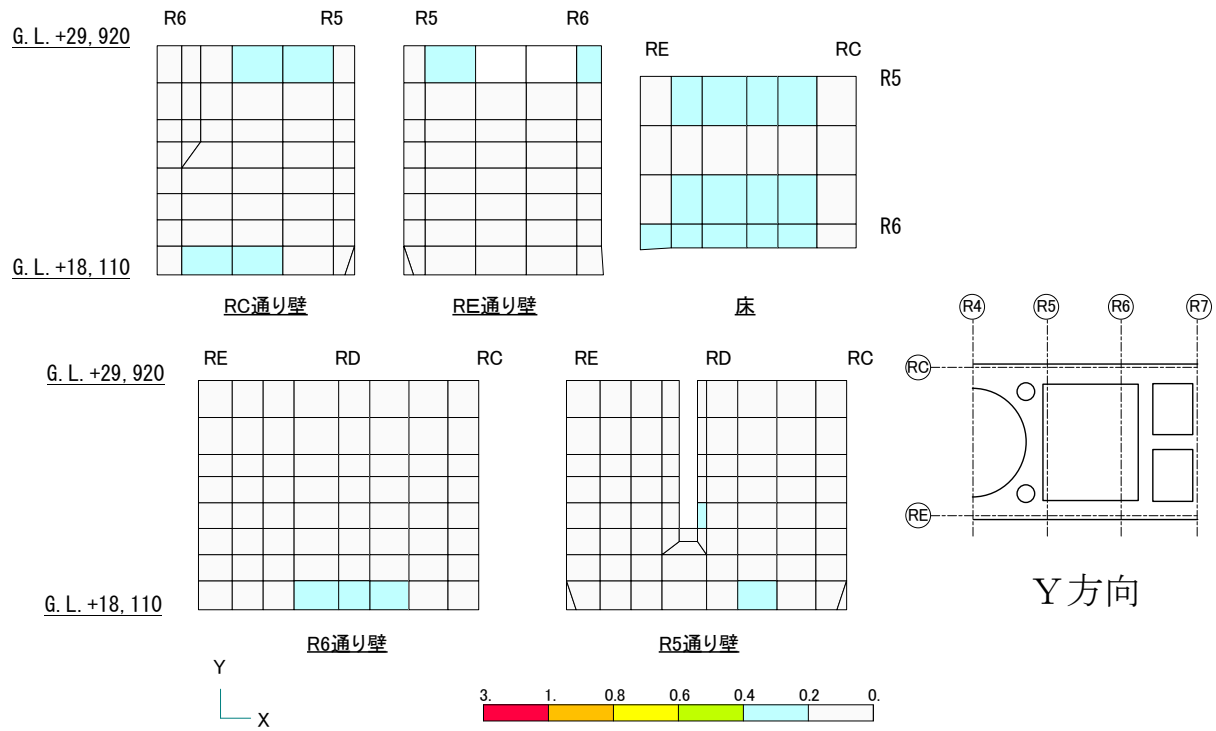
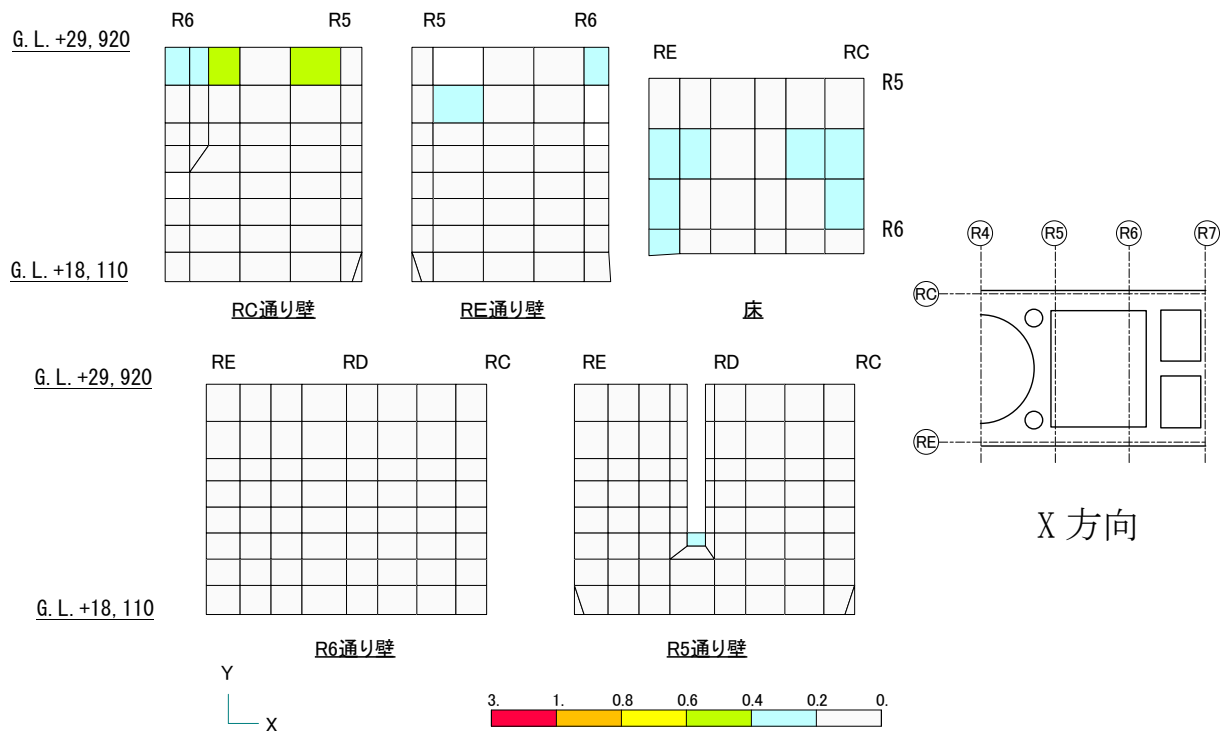


図-3.5.7 面外せん断力の検定比（使用済燃料プール部）

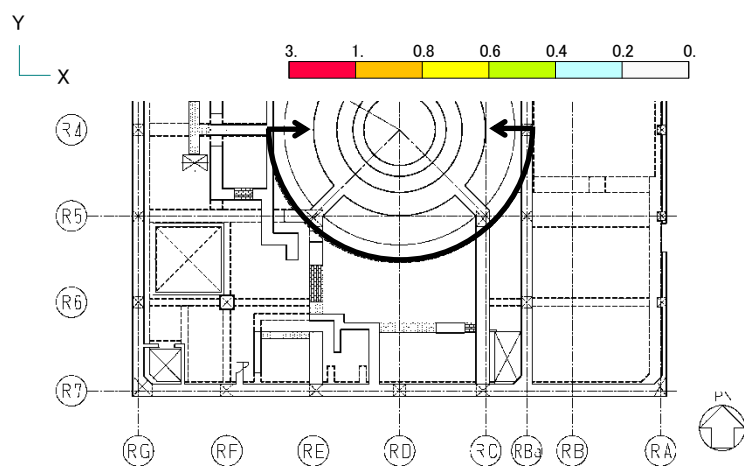
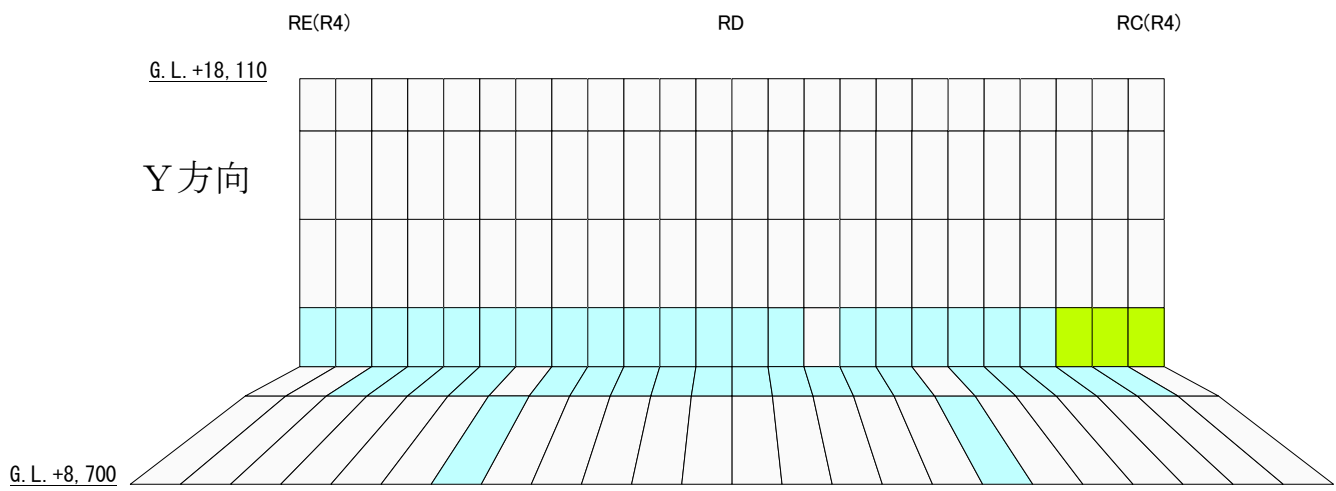
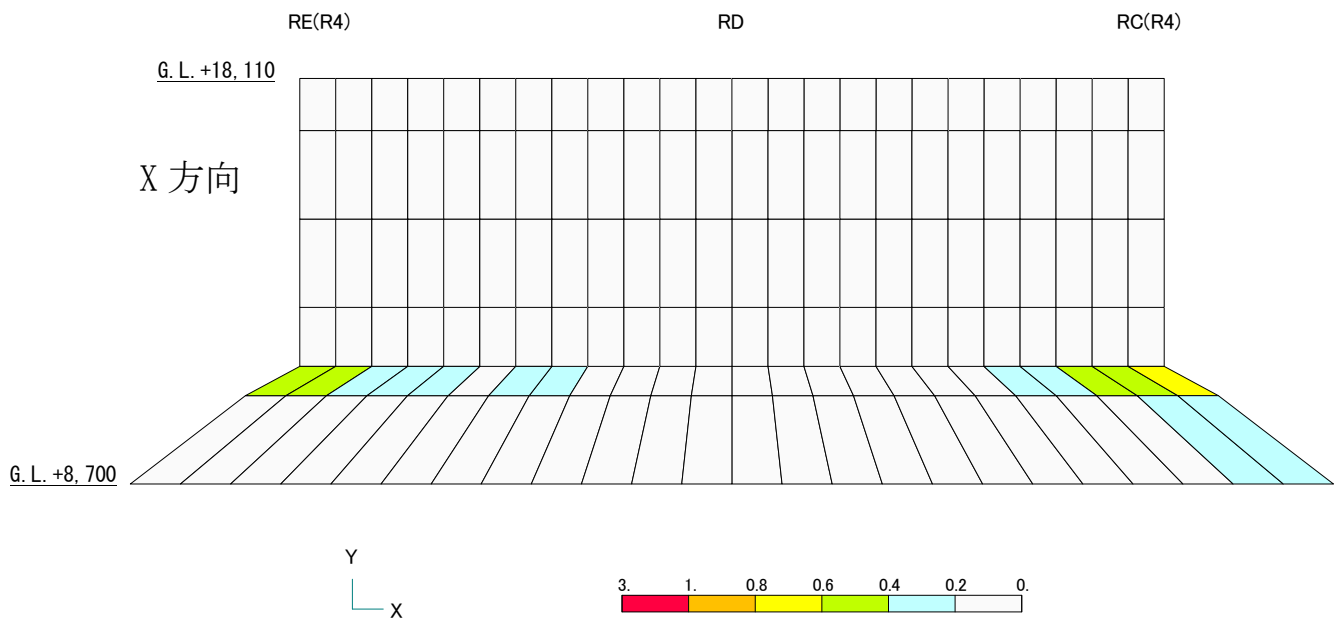


図-3.5.8 面外せん断力の検定比（シェル壁部）

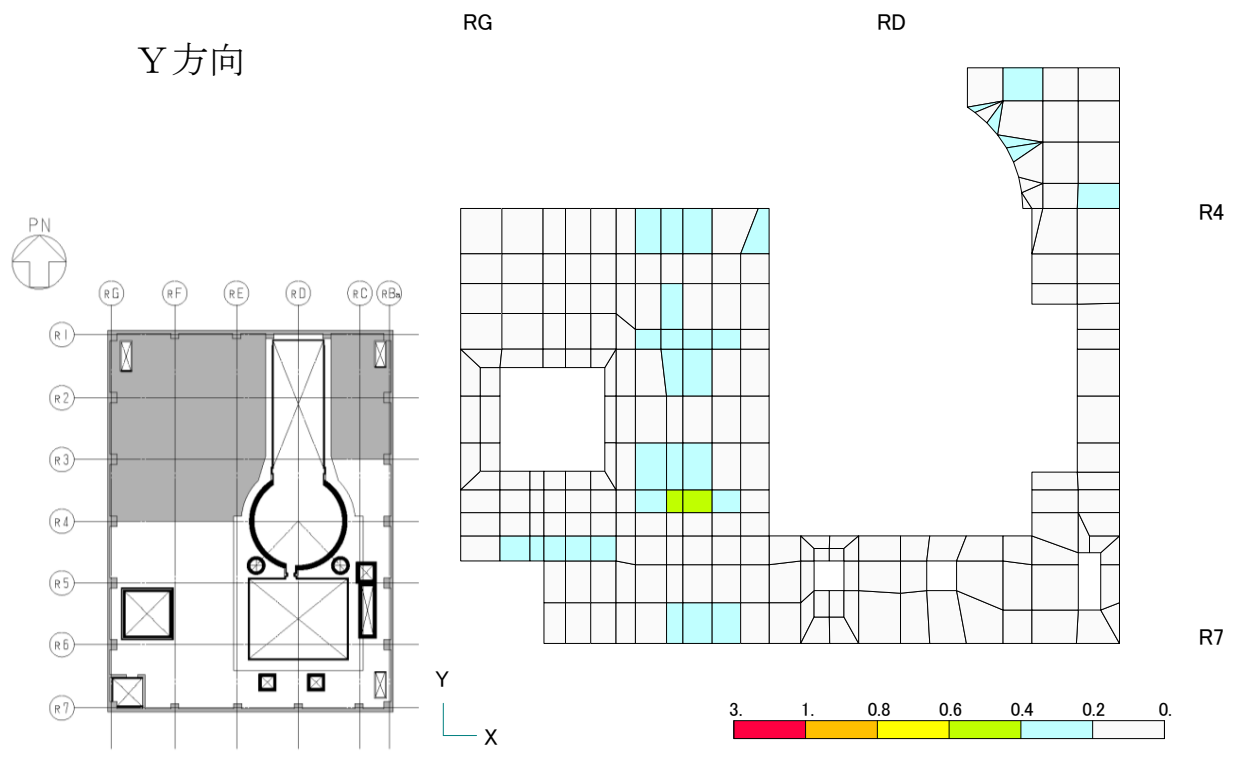
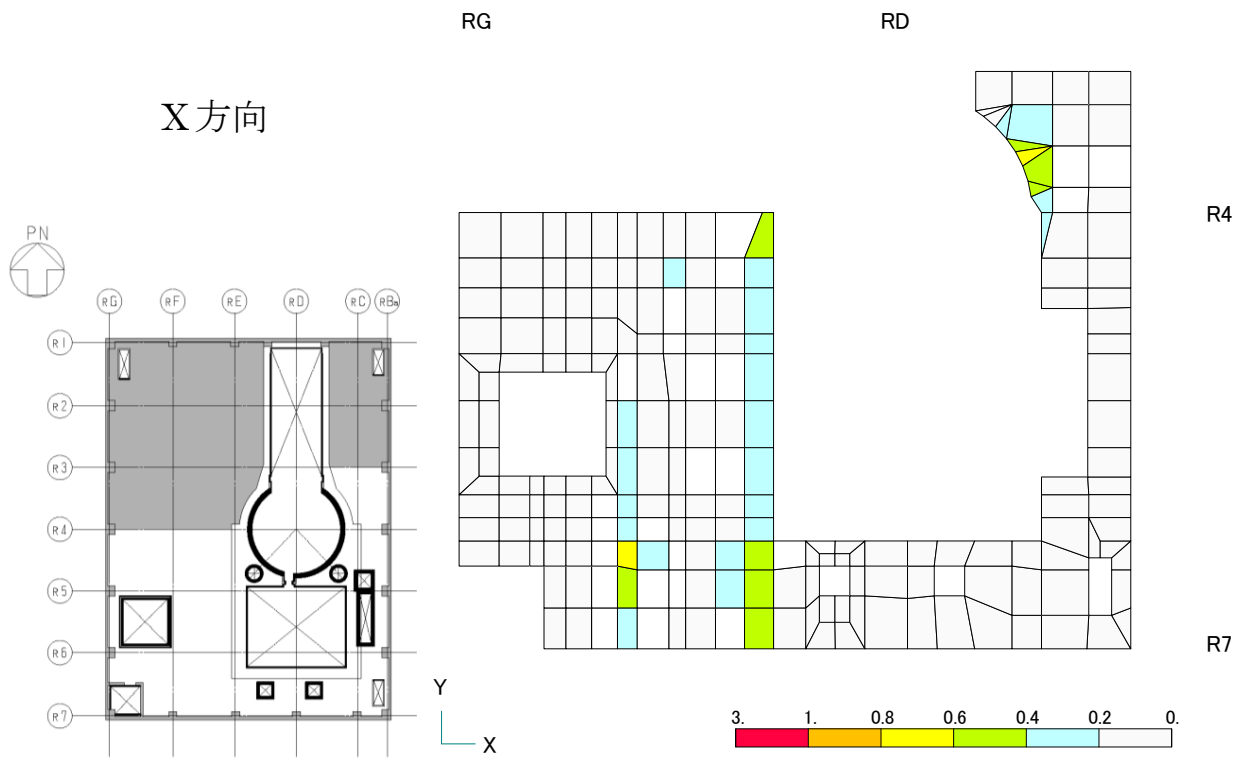


図-3.5.9 面外せん断力の検定比（オペフロ床部）

## 使用済燃料プール等の耐震安全性評価結果に係わるパラメトリックスタディについて

## 1. 概要

付録では、使用済燃料プール部等の剛性を安全側に低下させた場合について解析を行い、その影響を把握する。

## 2. 検討条件

図-1～図-4 にパラメトリックスタディで想定する損傷仮定条件を示す。

## (1) 床スラブ

2章より、5階（G.L. +29.92m）のプール部の西側床において、周辺に比べ比較的激しい損傷状況が確認されており、その箇所の剛性を無視した場合を想定する。

4階床において、5階床の全壊箇所の瓦礫の落下や、爆発の影響を受けたと想定し、床の剛性を無視した場合を想定する。

また、今回の調査において十分な損傷確認が実施できなかった3階床について、剛性を50%に低減した場合を想定する。

## (2) 使用済燃料プール・燃料仮置プール・シェル壁

使用済燃料プール・燃料仮置プール・シェル壁について、事故時の影響を考慮し剛性を50%に低減させた場合を想定する。

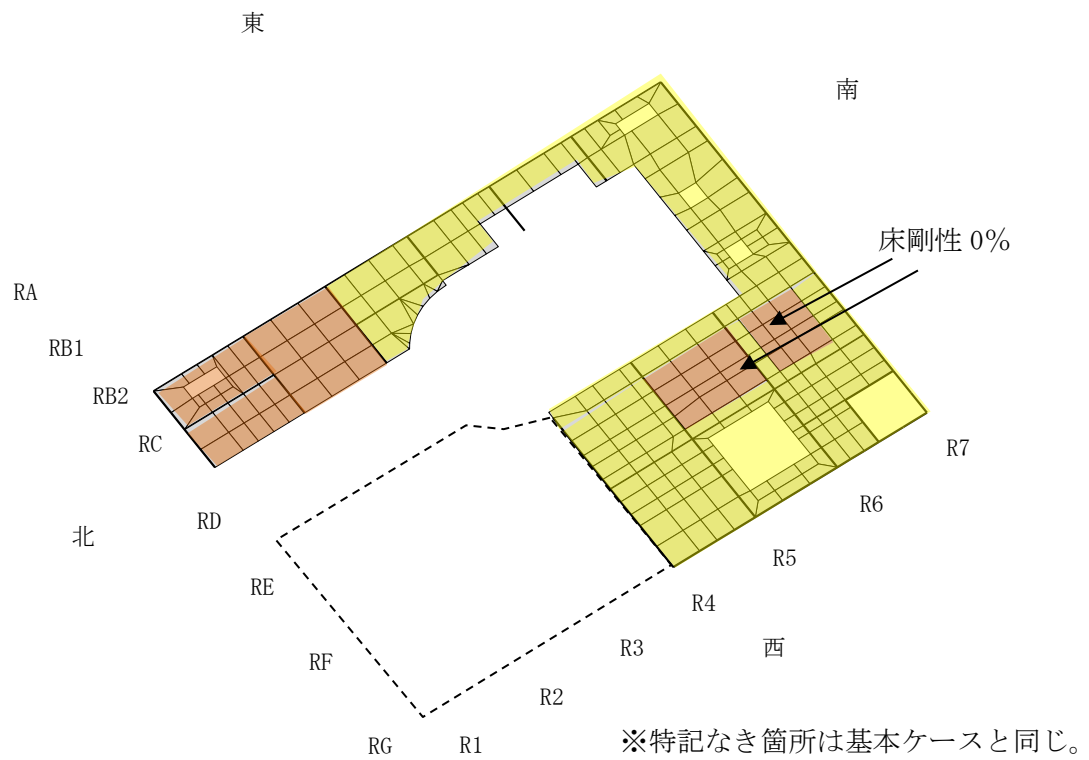


図-1 損傷仮定 アイソメ図 5階 (G.L. +29.92m) (パラメータケース)

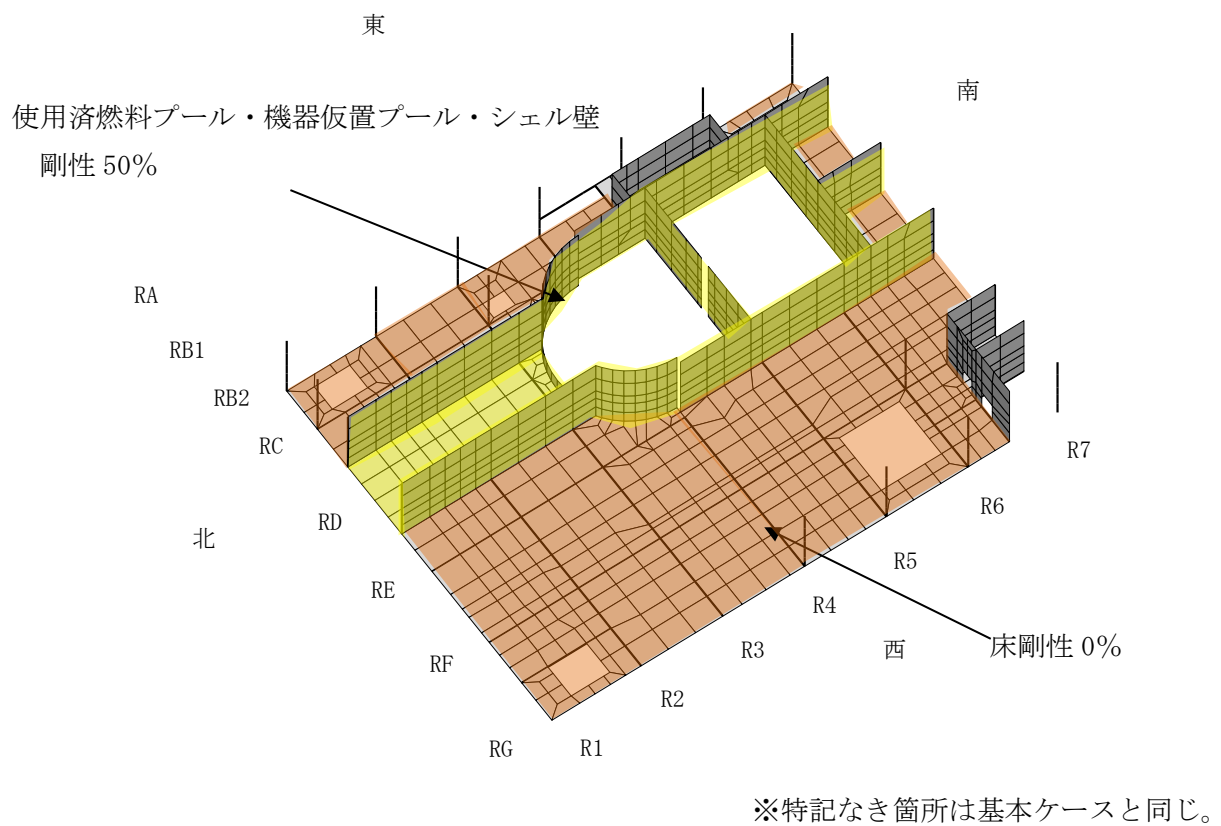


図-2 損傷仮定 アイソメ図 4階 (G.L. +22.3m) (パラメータケース)



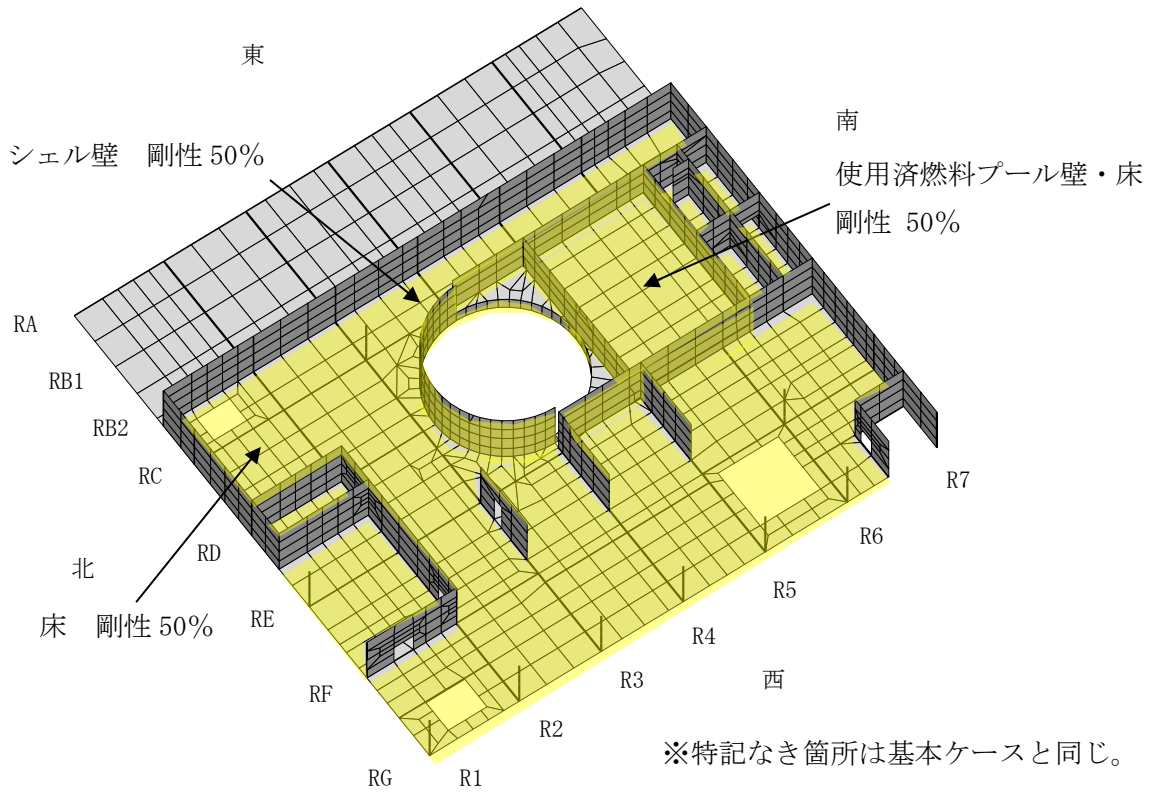


図-3 損傷仮定 アイソメ図 3階 (G. L. +16.9m) (パラメータケース)

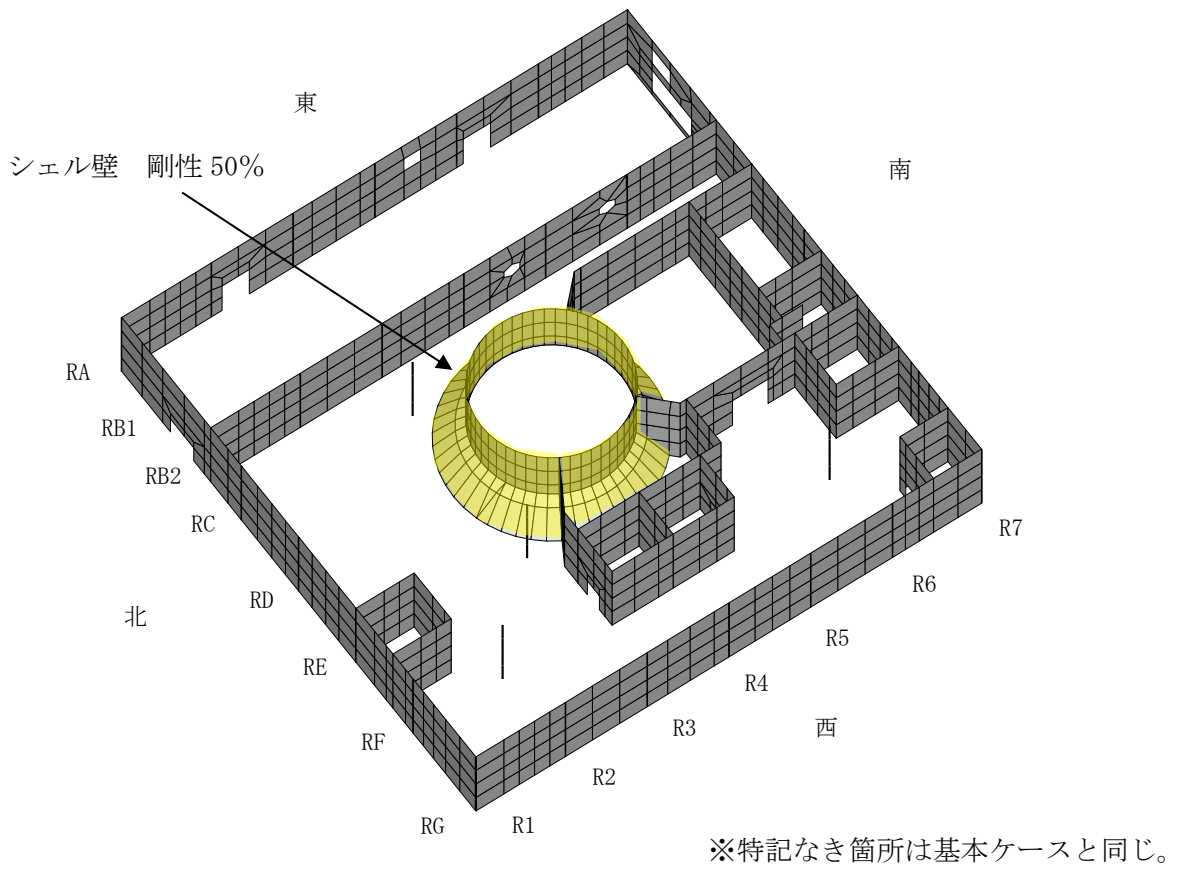


図-4 損傷仮定 アイソメ図 2階 (G. L. +8.7m) (パラメータケース)

### 3. 検討結果

パラメータケースの発生ひずみ及び面外せん断力の発生応力と評価基準値の比（検定比）を示した結果を図-5～図-13 に示す。損傷仮定を安全側に低下させた場合においても耐震安全性を有しており、解析結果には大きな影響を与えないことが確認された。

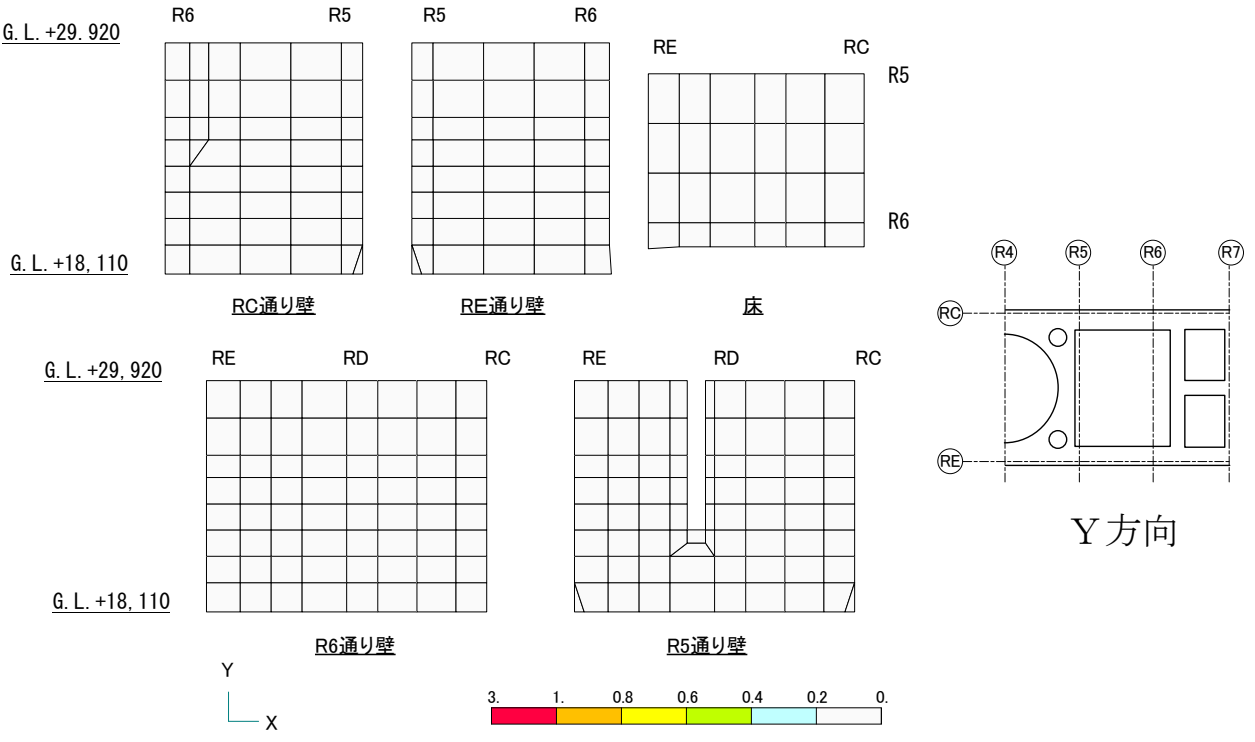
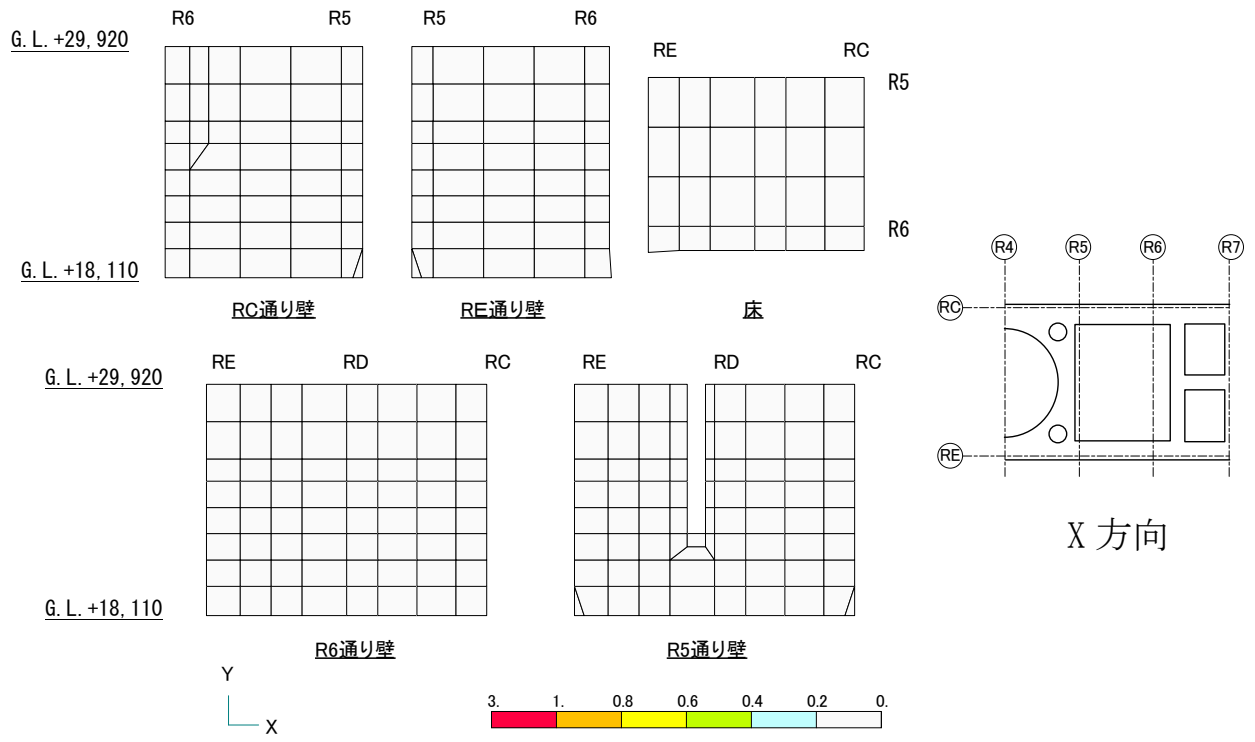


図-5 コンクリート圧縮ひずみの検定比（使用済燃料プール部）

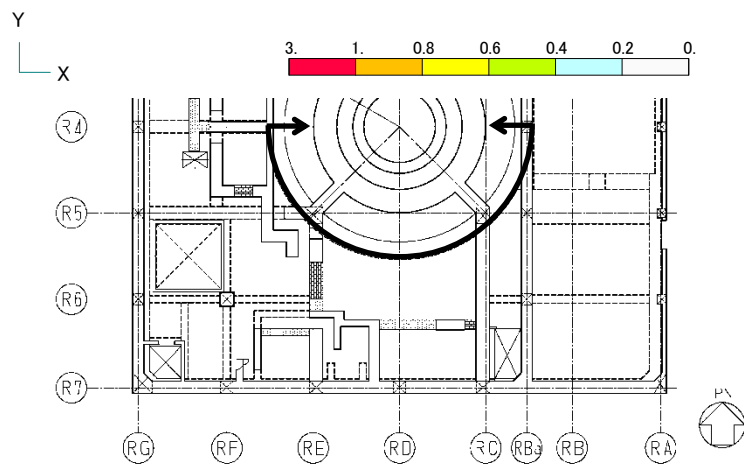
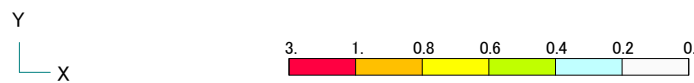
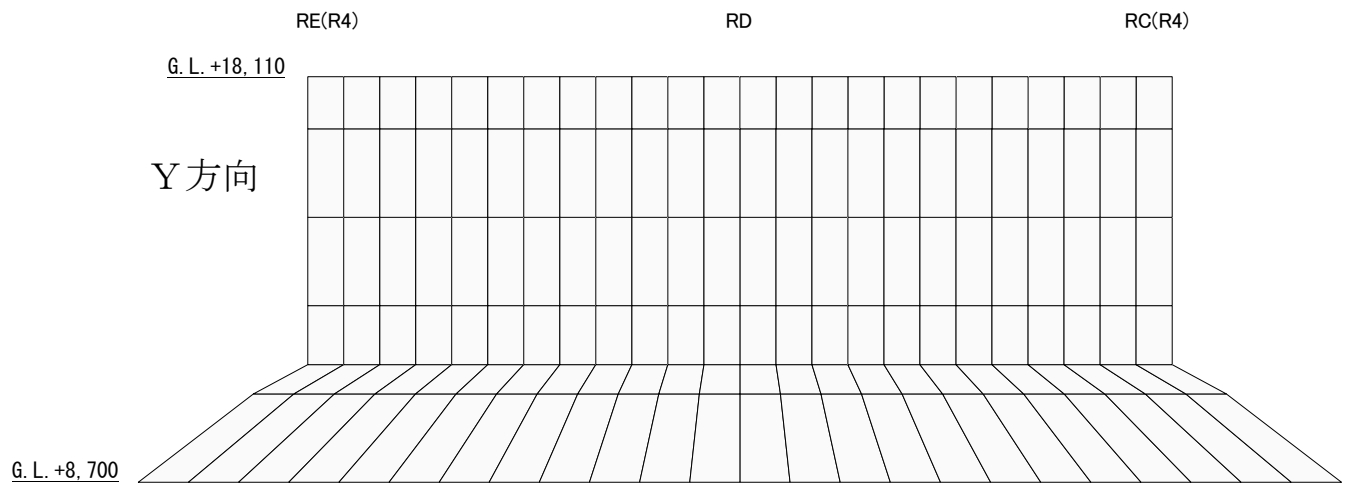
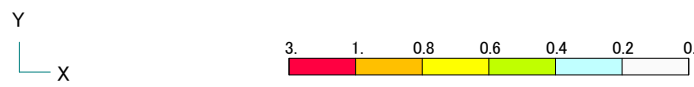
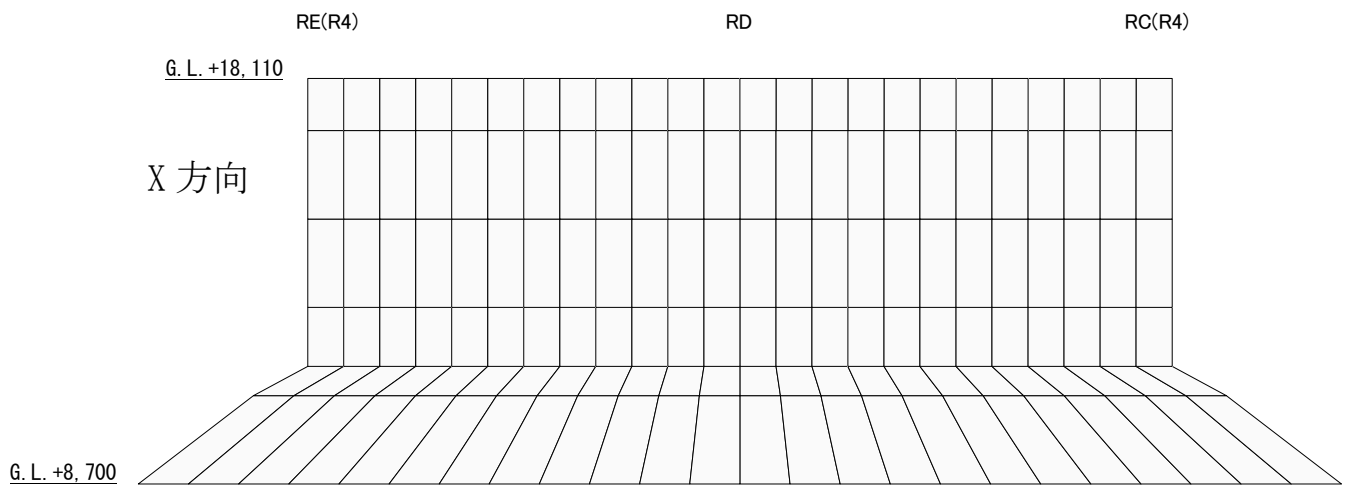


図-6 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (シェル壁部)

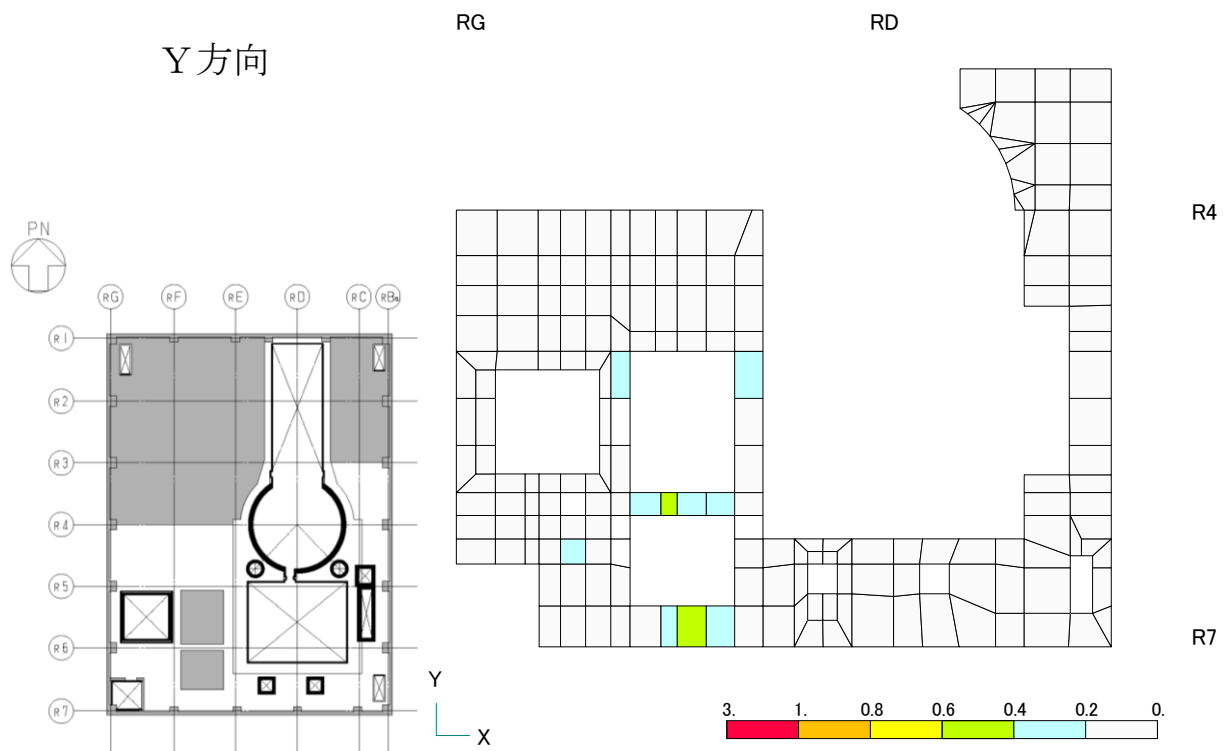
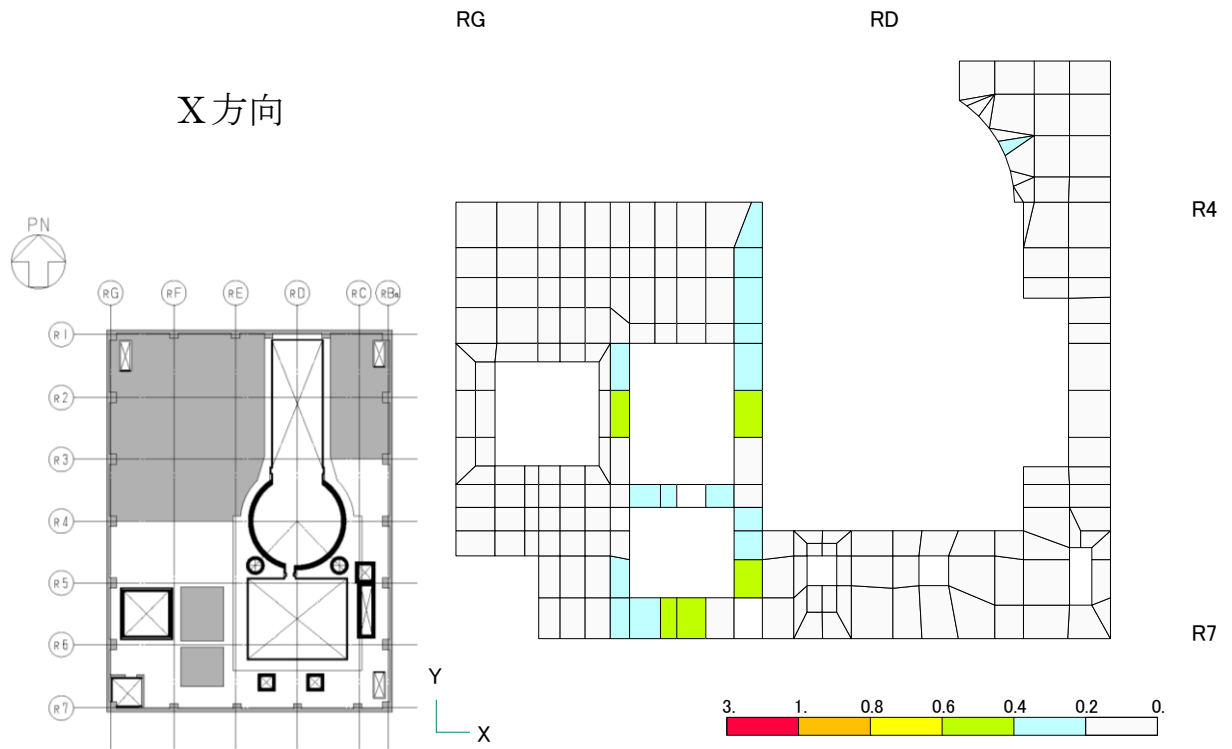


図-7 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (オペフロ床部)

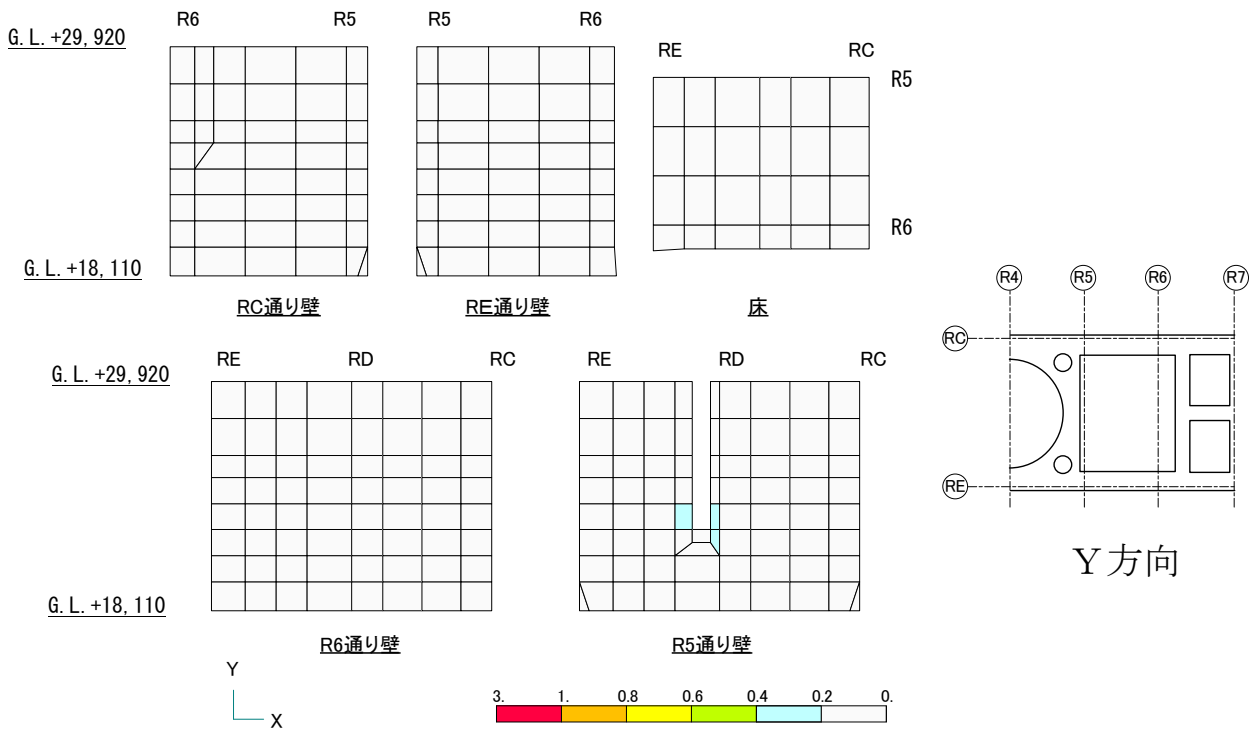
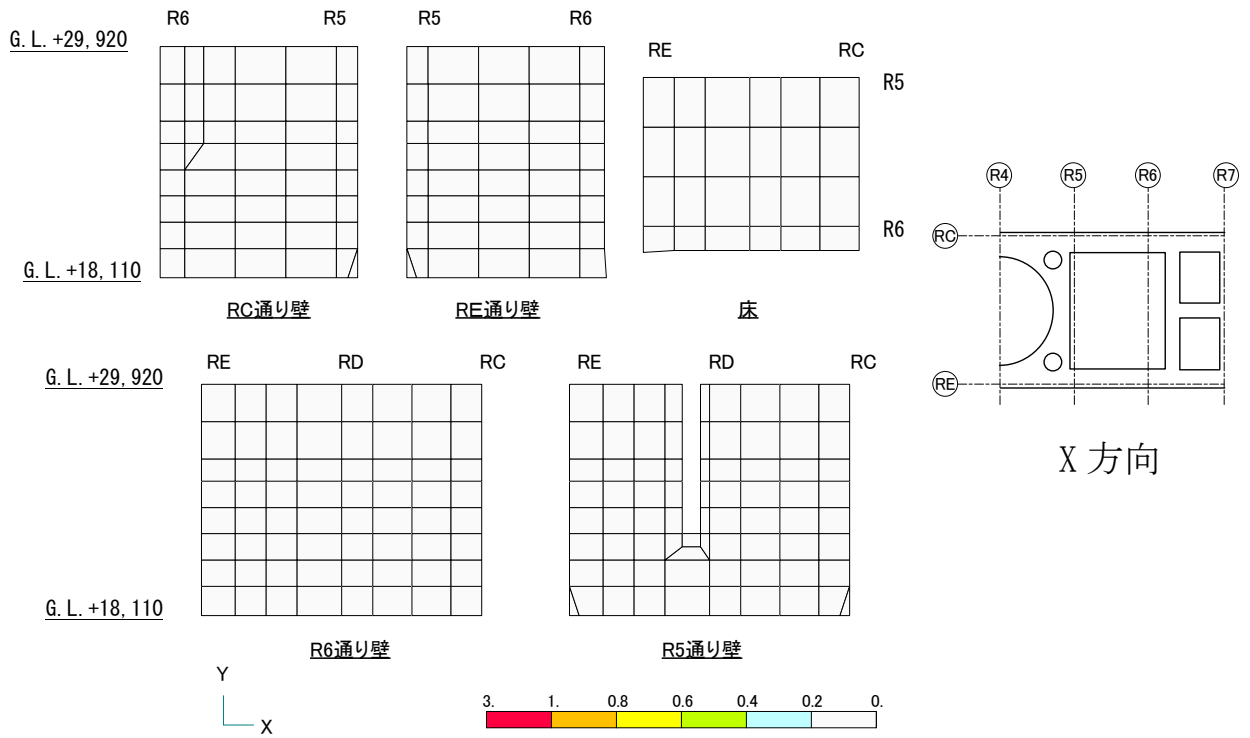


図-8 鉄筋ひずみの検定比（使用済燃料プール部）

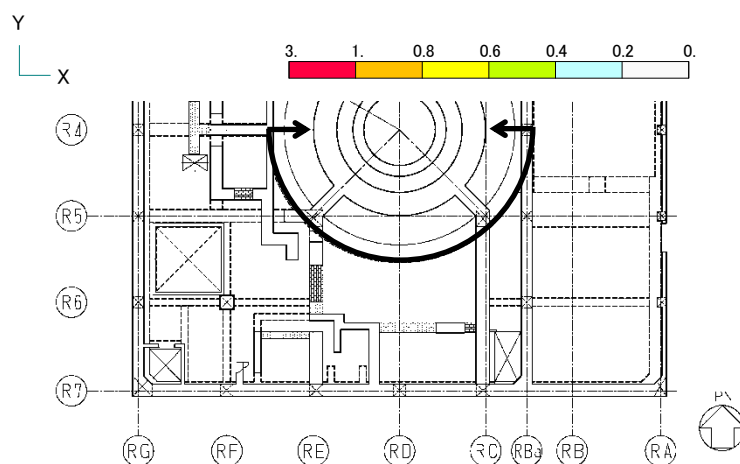
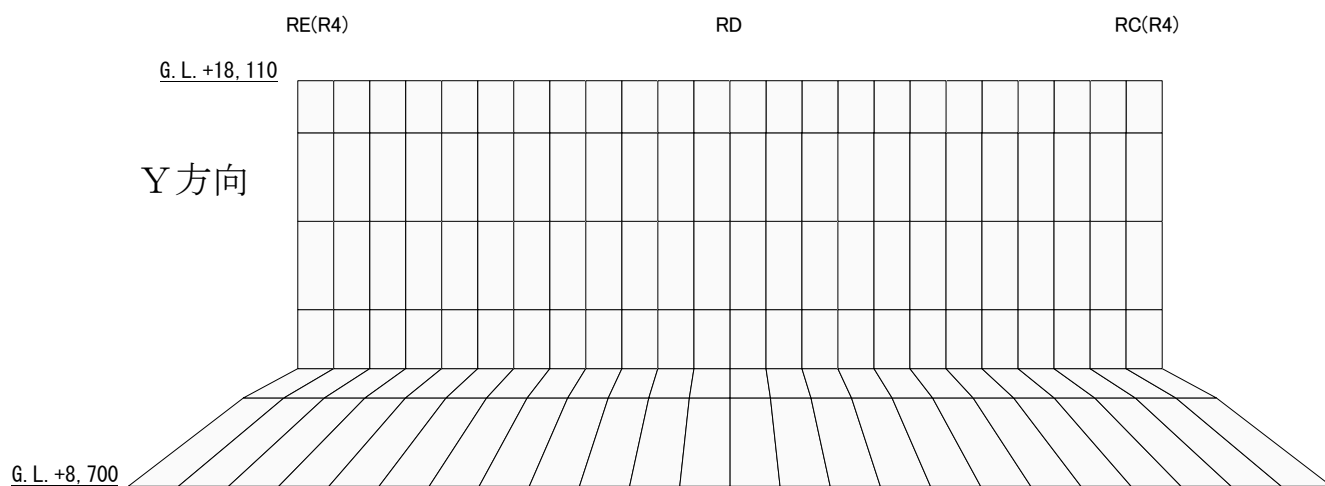
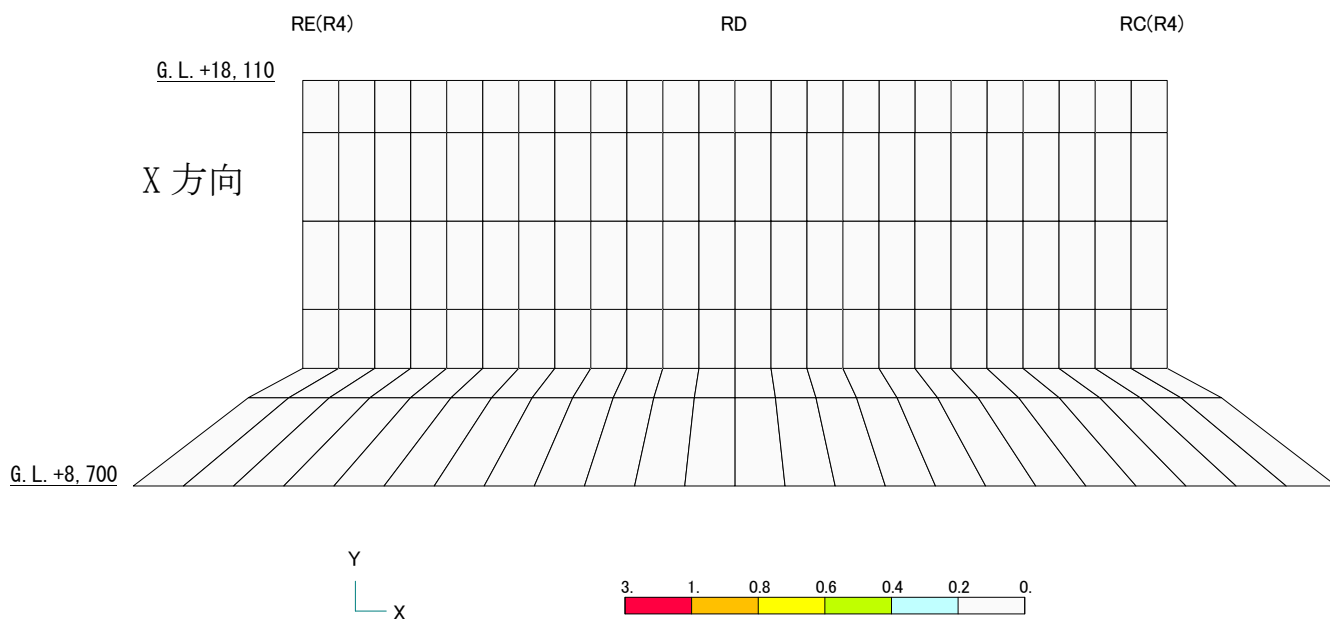


図-9 鉄筋ひずみの検定比 (シェル壁部)

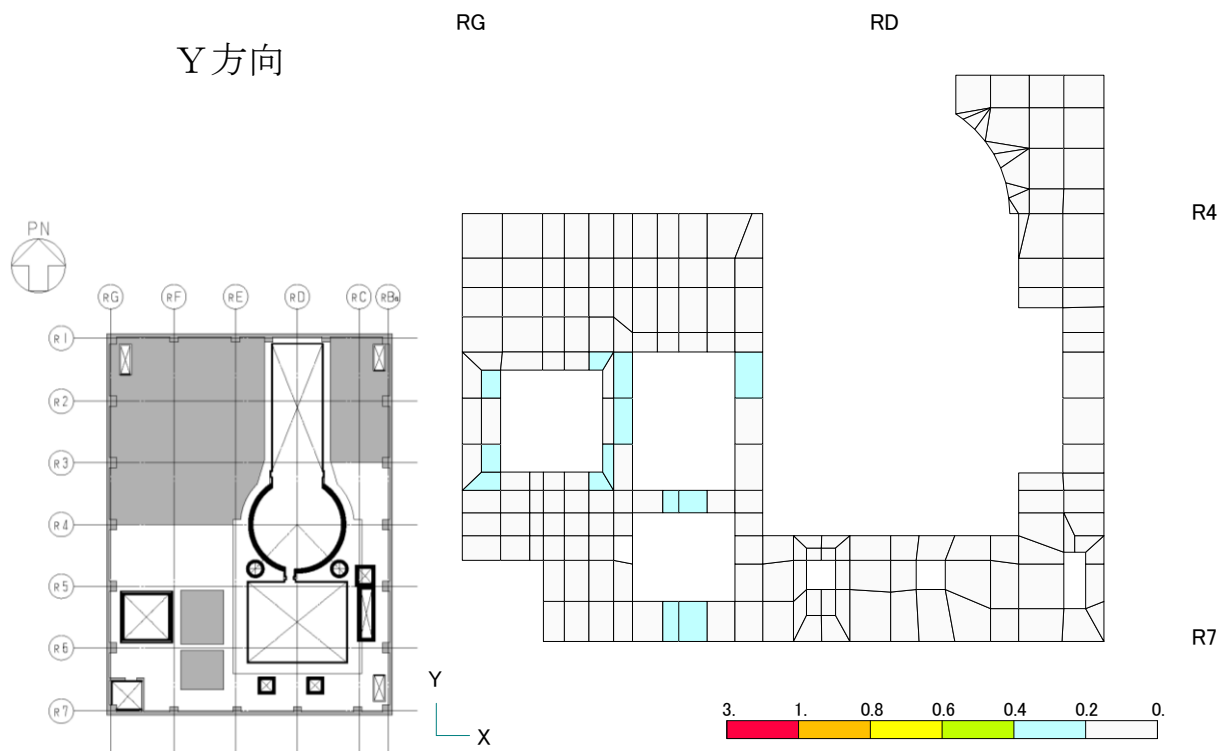
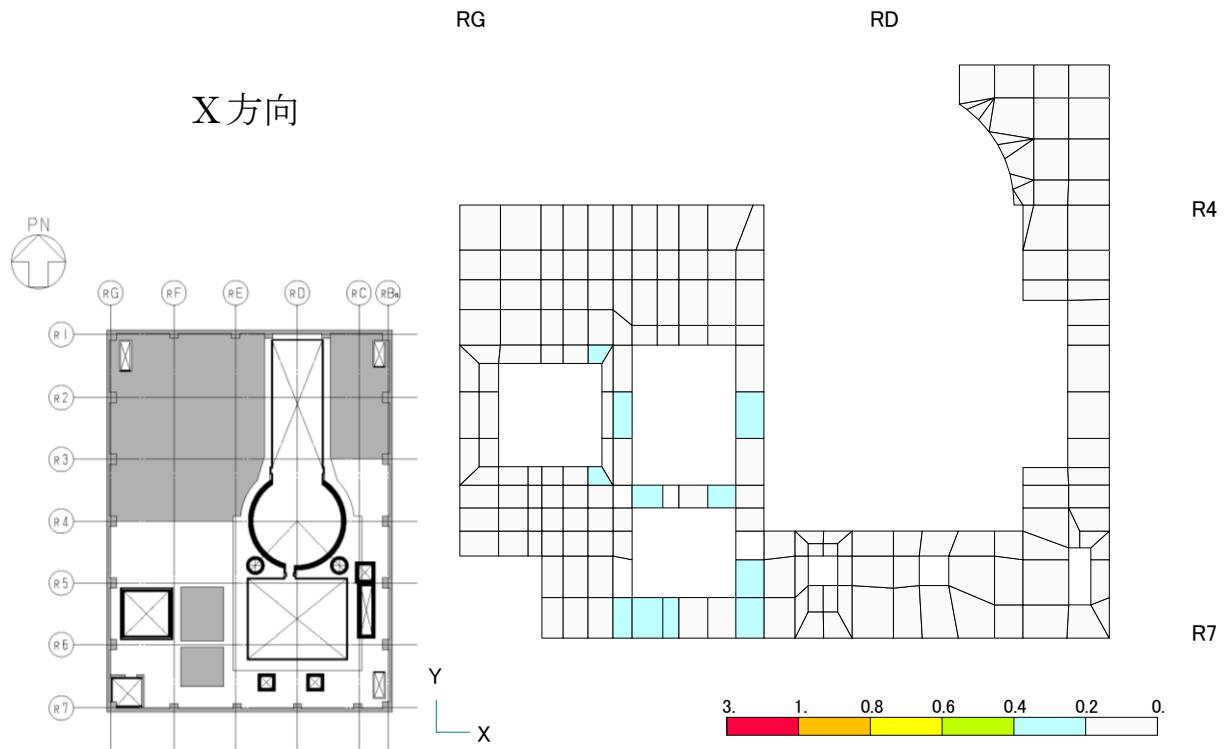


図-10 鉄筋ひずみの検定比 (オペフロ床部)



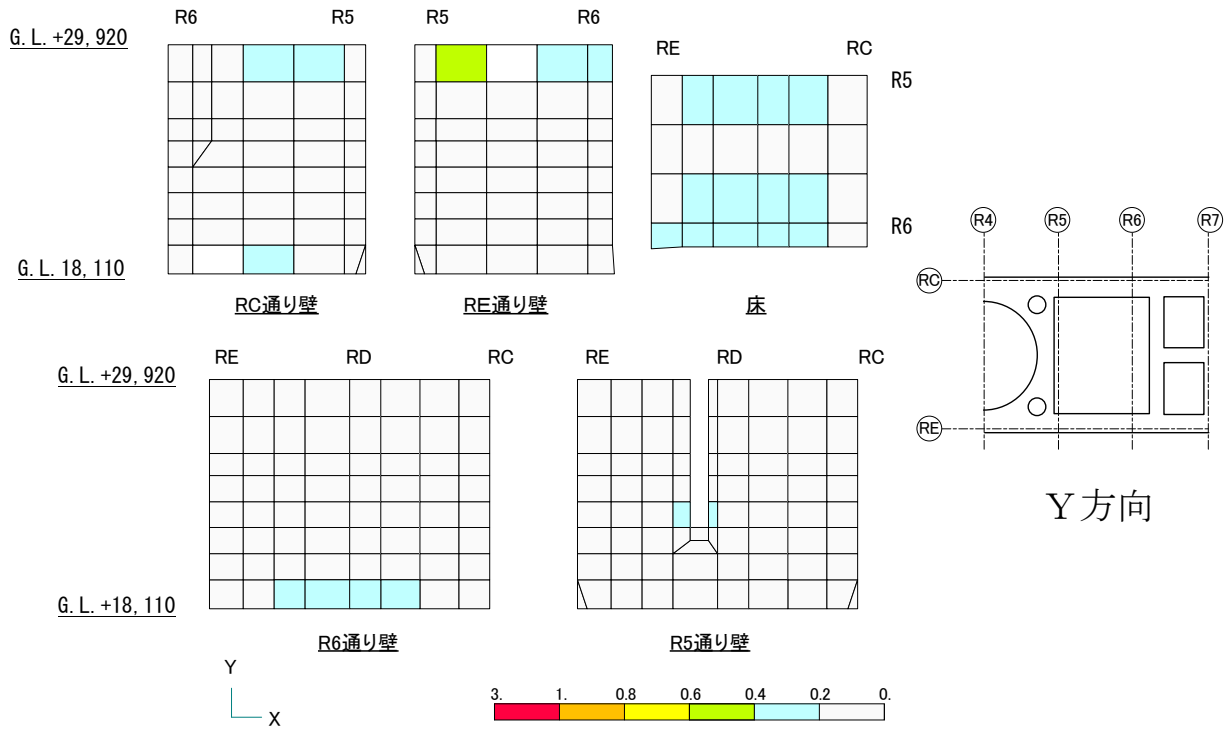
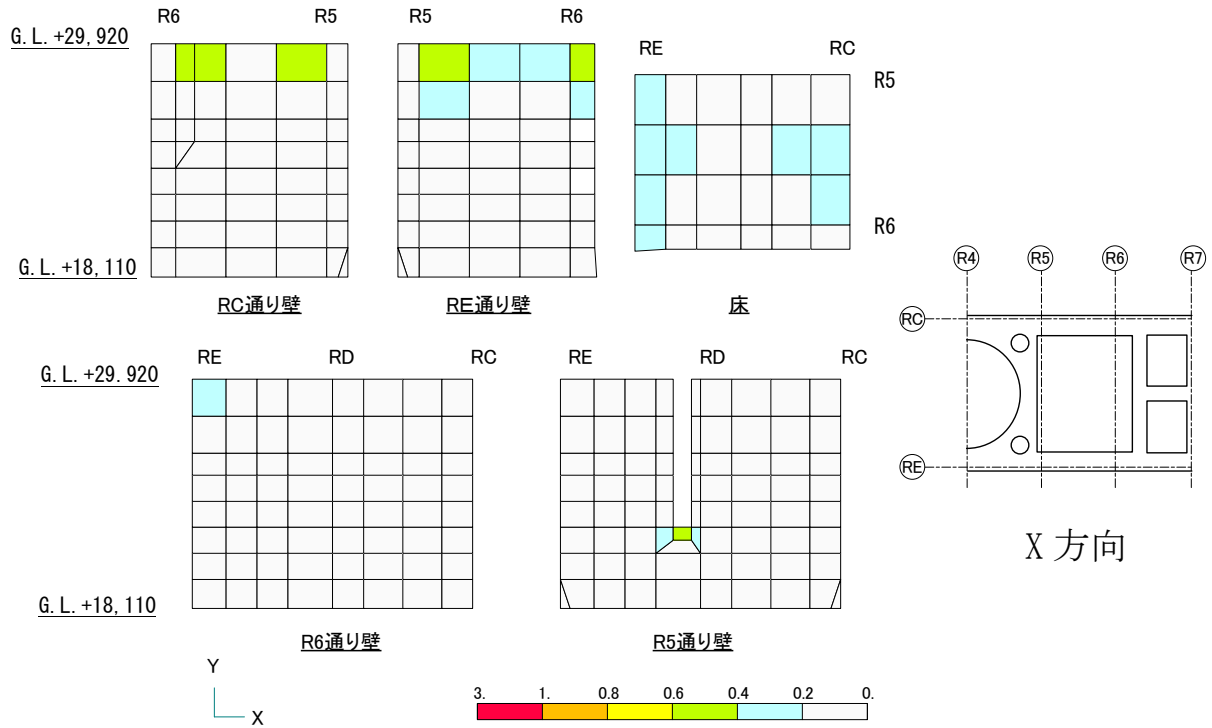


図-11 面外せん断力の検定比（使用済燃料プール部）

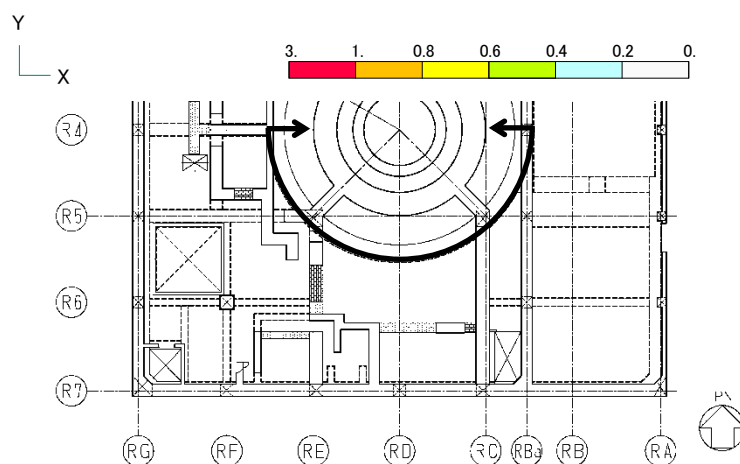
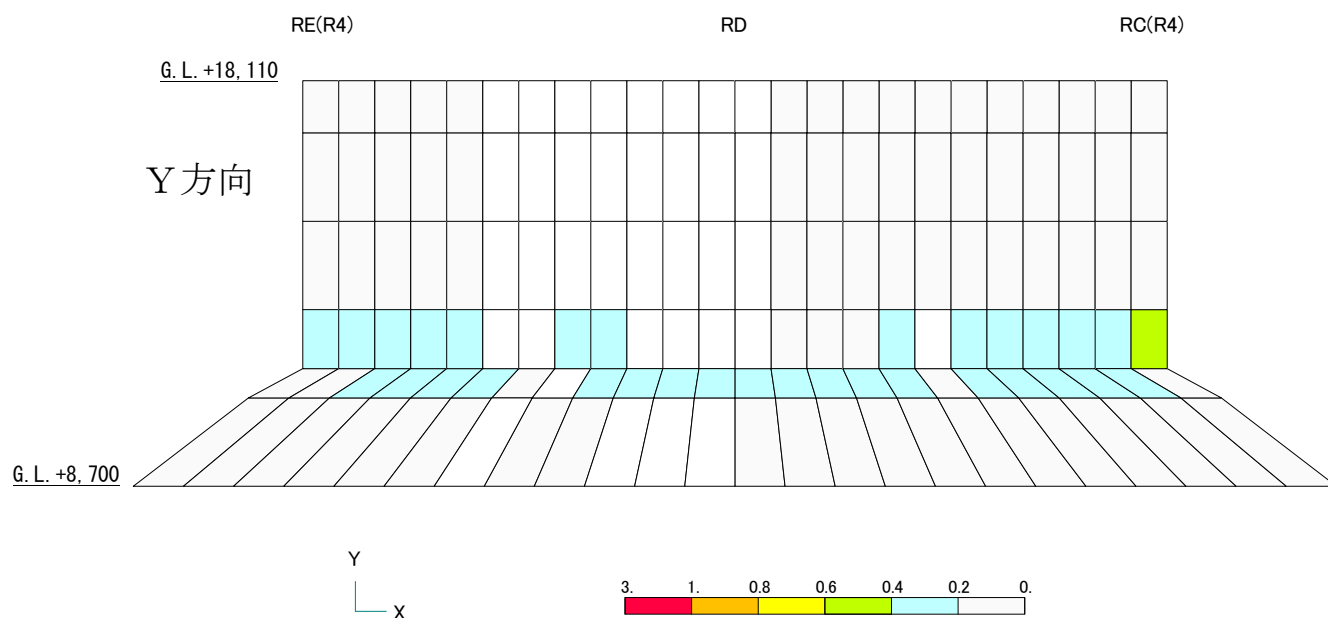
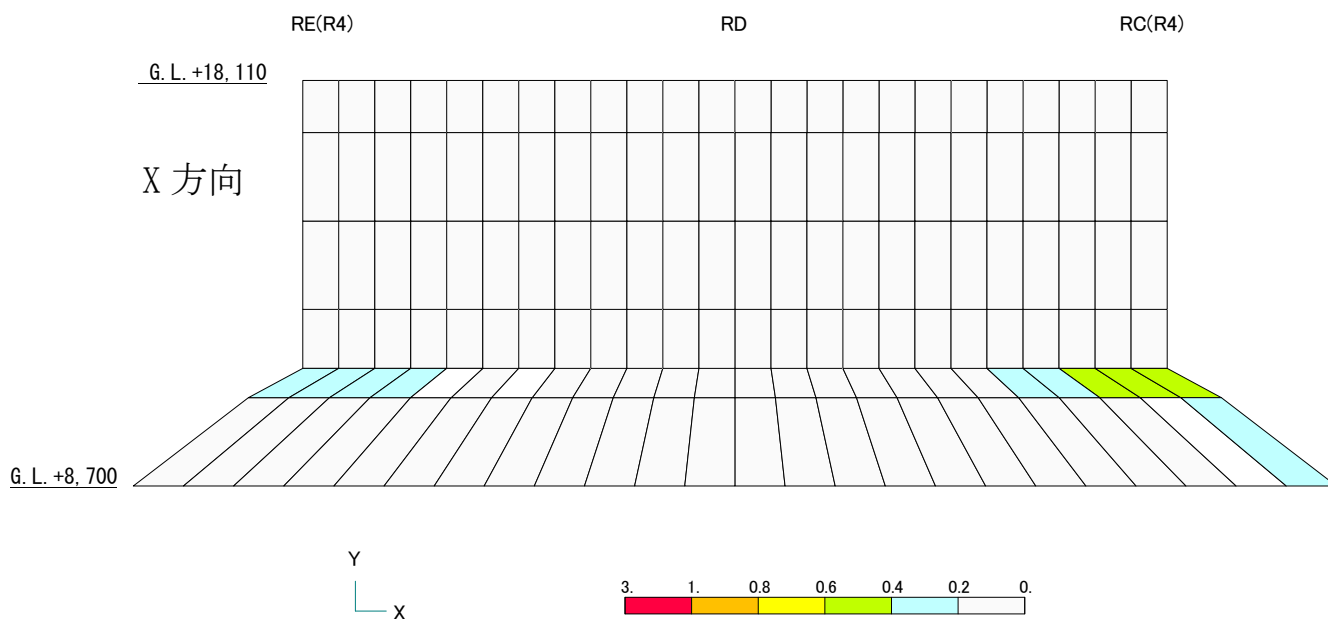


図-12 面外せん断力の検定比 (シェル壁部)

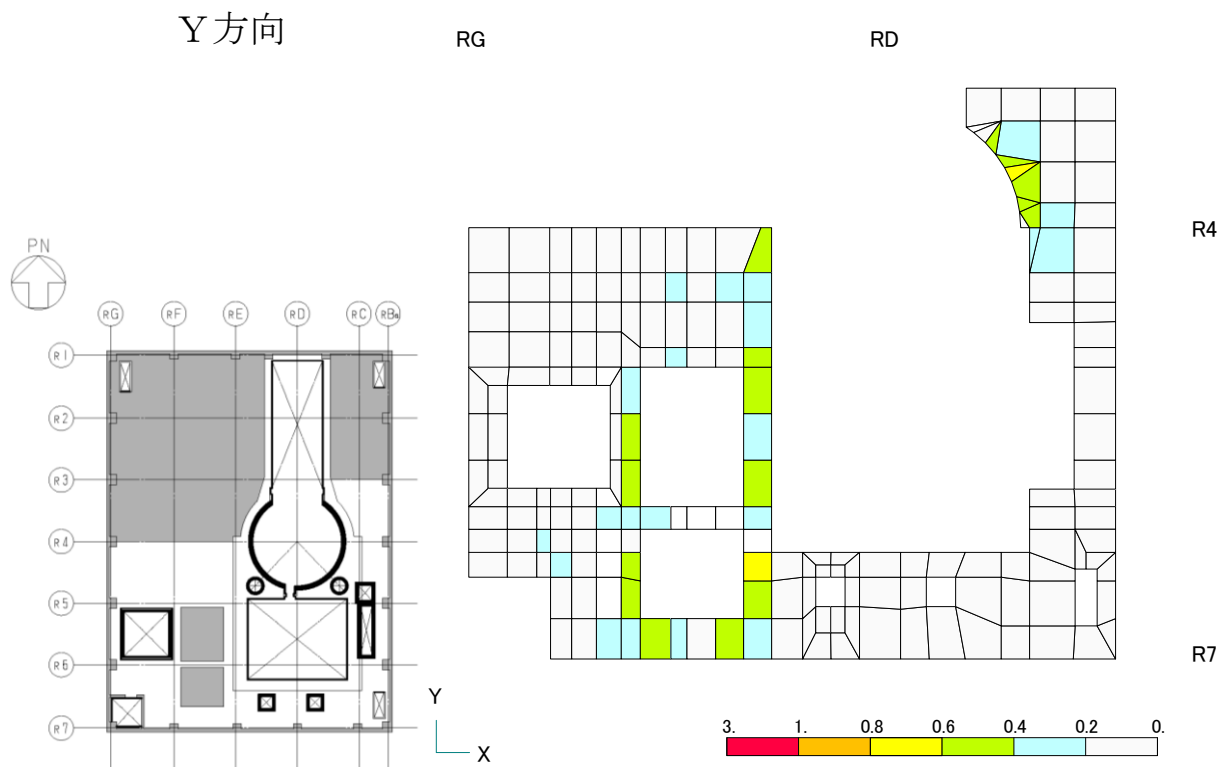
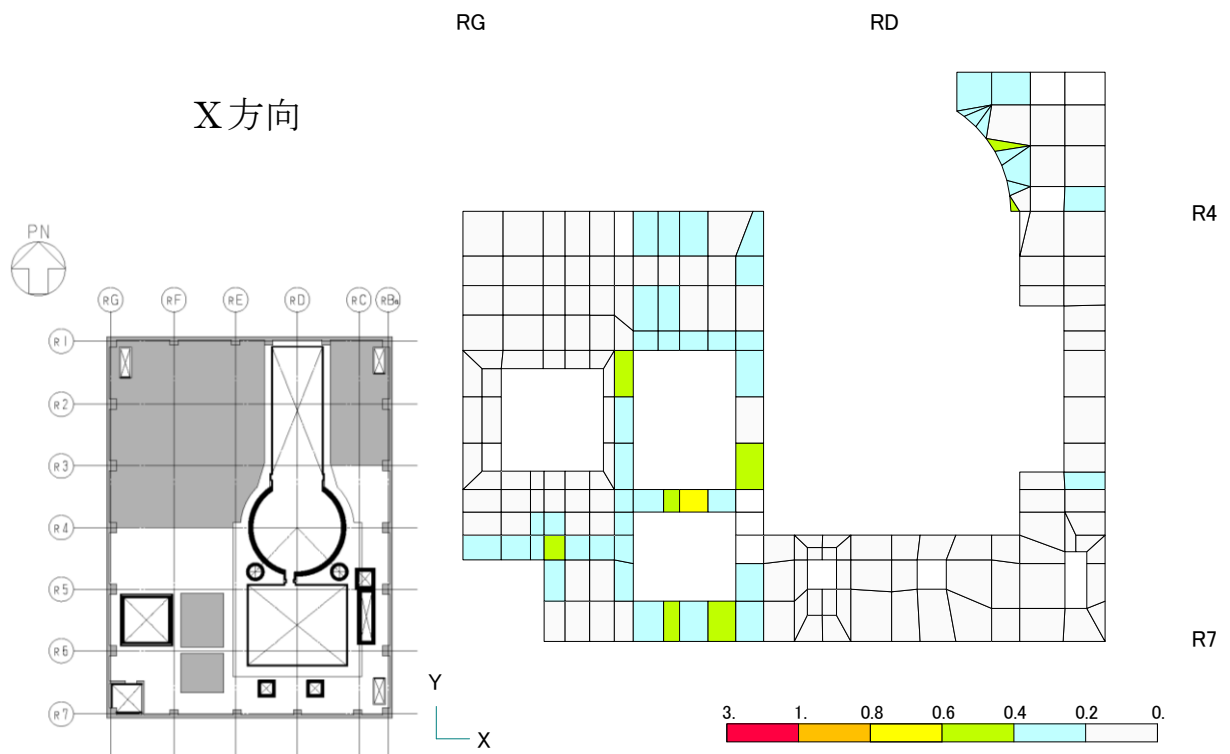


図-13 面外せん断力の検定比（オペフロ床部）

## 3号機原子炉建屋 遮へい体設置における滑動対策について

## 1. 概要

3号機原子炉建屋は作業環境改善のため、オペレーティングフロア（以下、オペフロとする）床面に遮へい体を設置する計画としている。遮へい体の内、使用済燃料プール周りに設置するものについては、地震時（基準地震動  $S_s$ ）に遮へい体へ慣性力が作用することで、遮へい体が使用済燃料プール方向に滑動して使用済燃料プール内に落下しないように、滑動対策を施している。

滑動対策は、遮へい体に作用する使用済燃料プール方向の慣性力を、使用済燃料プール壁等の原子炉建屋躯体で支持することで、遮へい体の使用済燃料プール方向への滑動を防止することである（以下、ずれ止め）。ずれ止めの方法は、下記の2通りがある。

## ①間接支持

ずれ止めを目的とした支持部材（以下、ずれ止め部材）を遮へい体の上に設置する。遮へい体に作用する使用済燃料プール方向の慣性力がずれ止め部材に伝達され、ずれ止め部材が原子炉建屋躯体に接触することで、遮へい体を間接支持する。

対象箇所：A工区 B C工区

## ②直接支持

遮へい体を原子炉建屋躯体に接触させ、遮へい体に作用する使用済燃料プール方向の慣性力を、原子炉建屋躯体で直接支持する。

対象工区：D工区（東側） D工区（南側）

遮へい体の設置方法については、一部の小規模遮へい体を除き、大型クレーンを遠隔操作して遮へい体をオペフロの所定の位置に吊り込むことにより、オペフロへ無人で設置する。この際、大型クレーンの遠隔操作精度に依ることなく遮へい体を設置できるように、鉛直支持材を大型クレーンの遠隔操作により、あらかじめオペフロ床に直置きする。鉛直支持材には溝型部材（凹）が、鉛直支持材に対応する遮へい体の下面には突起部材（凸）が取り付けられており、突起部材を溝形部材に沿わせて遮へい体を設置する。オペフロ床の損傷状況や既設設備（既設 FHM レール）の干渉により、鉛直支持材が設置できない箇所もあり、この箇所については遮へい体をオペフロ床に直置きする。

本資料では、遮へい体設置に関する局所評価として、地震時（基準地震動  $S_s$ ）における使用済燃料プール周りの遮へい体、及び、ずれ止め部材、並び、遮へい体またはずれ止め部材と接触する原子炉建屋躯体を対象に行う構造評価の結果を示す。また、ずれ止め部材設置前の状況下での地震（基準地震動  $S_s$ ）を想定して、間接支持される遮へい体、及び、鉛直支持材を下記の対象（以下、滑動対象物）に行う滑動評価の結果を示す。

A工区 : 遮へい体

B C工区 : 鉛直支持材（遮へい体と一体化となり滑動する）

D工区（南側）：鉛直支持材（遮へい体は単独で床スラブで直接支持され、滑動しない）

D工区（東側）：滑動評価対象外（遮へい体下面の突起部材が既設 FHM レール及び使用済燃料プール壁に接触して、遮へい体が直接支持されるため、滑動しない）

## 2. 遮へい体設置に関する局所評価

### 2.1 評価方法

ずれ止め部材の例を図 2.1-1 に、計画概要を図 2.1-2 に示す。

燃料取り出し用カバー検討用モデルの基準地震動  $S_s$  時の地震応答解析結果のうち、オペフロ階の最大応答加速度を保守的に設定した水平震度 ( $k=0.8$ ) を用いる。検討に用いる応力はこの水平震度により生じる慣性力からずれ止め箇所の構造を考慮して算出する。なお、評価基準値は、遮へい体及びずれ止め部材は鋼材の材料強度 ( $F$  値 $\times 1.1$  倍) に基づく許容値を、接触部は原子炉建屋躯体コンクリートの設計基準強度  $22.1\text{N/mm}^2$  に基づく許容値とする。

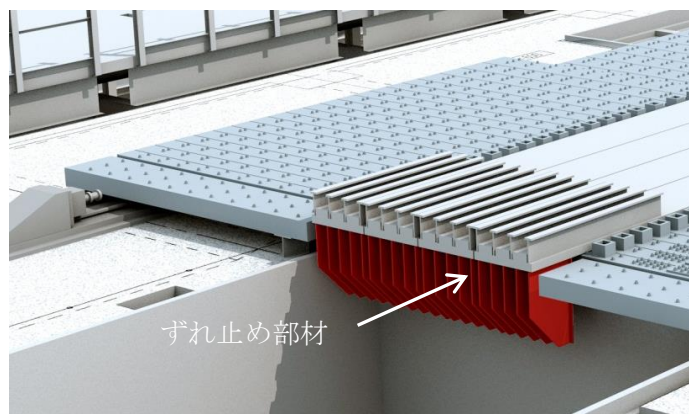
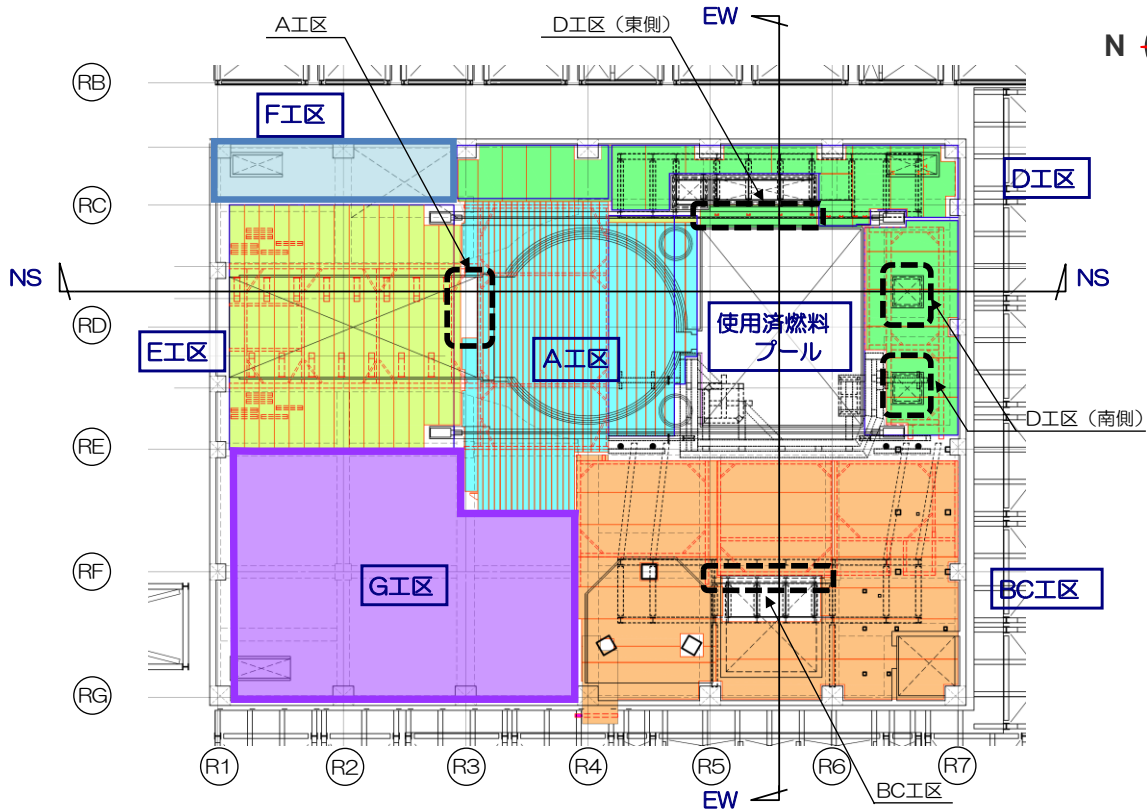
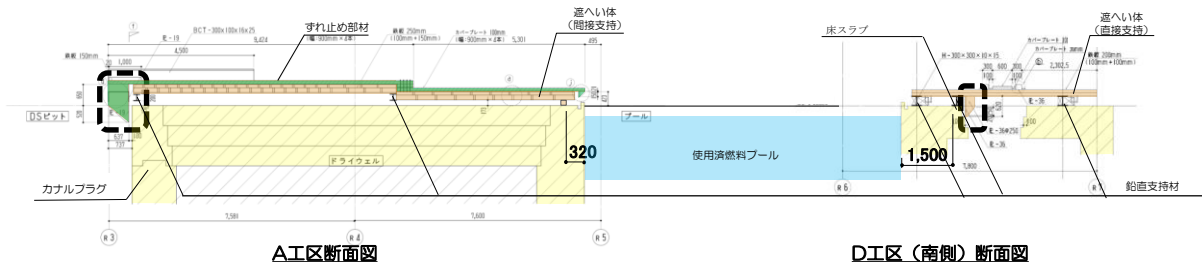


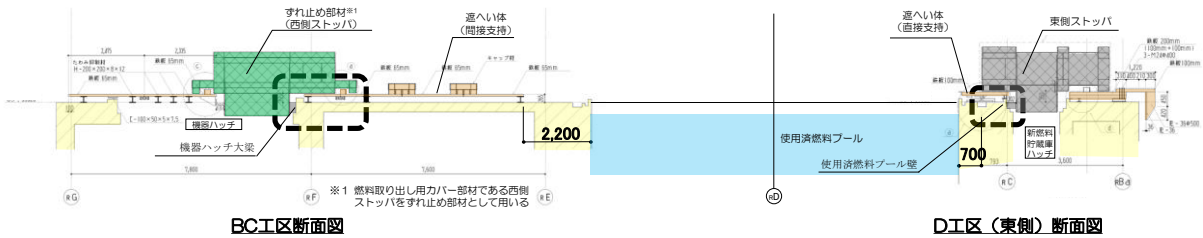
図 2.1-1 ずれ止め部材の例 (A 工区)



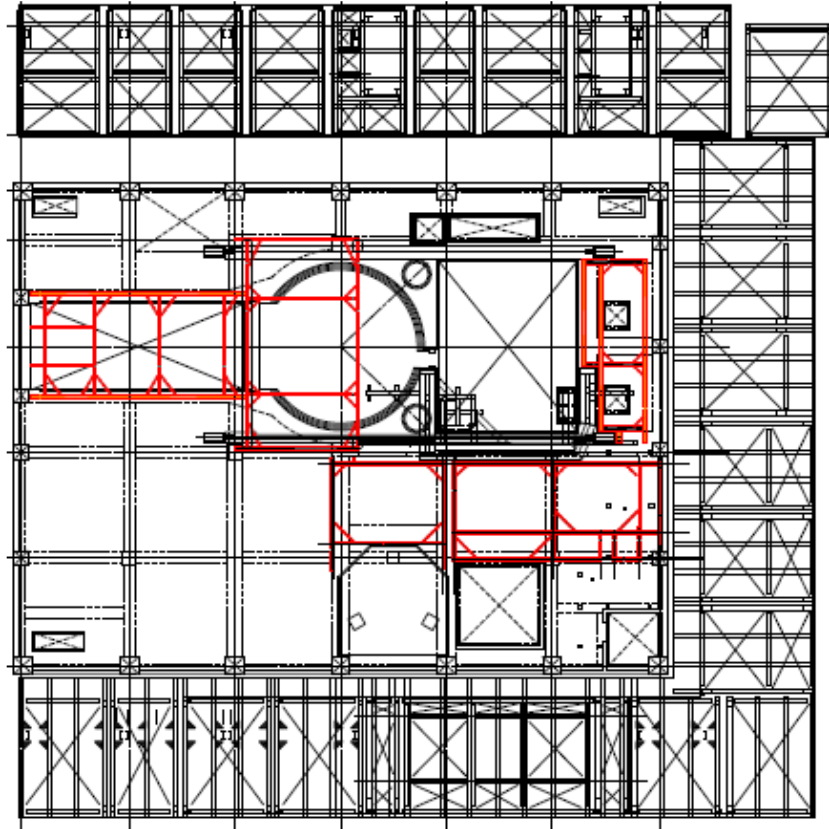
(a) 平面計画




(b) 使用済燃料プール周りの南北断面



(c) 使用済燃料プール周りの東西断面



(d) 鉛直支持材配置図 (赤線：鉛直支持材)

図 2.1-2 遮へい体計画概要 (  : 使用済燃料プール周りの遮へい体のずれ止め箇所 )

<算定式>

・ずれ止め箇所（曲げ，せん断の評価）

$$M_a = {}_s f_b \cdot Z$$

$$Q_a = {}_s f_s \cdot A_s$$

ここに，  $M_a$  : 許容曲げモーメント

$Q_a$  : 許容せん断力

${}_s f_b$  : 曲げ応力に対する許容値<sup>※1</sup>

${}_s f_s$  : せん断応力に対する許容値<sup>※1</sup>

$Z$  : ずれ止め箇所の断面係数

$A_s$  : ずれ止め箇所のせん断断面積

$W$  : 遮へい体重量

$k$  : 地震時の水平震度 (0.8)

$M$  : 地震時の曲げモーメント ( $M = Q \times l$ )

$Q$  : 地震時のせん断力 ( $Q = W \times k$ )

$l$  : 作用間距離

※1 : 建築基準法に基づく鋼材の材料強度 (F値の1.1倍) による許容値

・接触部（支圧の評価）

$$P_a = f_n \cdot A_1$$

$$\text{ここに， } f_n = f_{na} \sqrt{\frac{A_c}{A_1}} \quad , \quad f_{na} = 0.6F_c \quad , \quad \sqrt{\frac{A_c}{A_1}} \leq 2.0$$

$P_a$  : 許容支圧力

$F_c$  : コンクリートの設計基準強度 (22.1N/mm<sup>2</sup>)

$A_c$  : 支承面積

$A_1$  : 接触面積

・接触部（曲げの評価）

$$M_a = A_t \cdot f_t \cdot j$$



ここに、  $A_t$  : 鉄筋断面積  
 $f_t$  : 鉄筋の引張に対する許容値<sup>※2</sup>  
 $j$  : 応力中心間距離

※2 : 建築基準法に基づく鋼材の材料強度（F値の1.1倍）による許容値

## 2.2 評価結果

図 2.1-2 に示す使用済燃料プールの四方の遮へい体工区について検討を実施した。遮へい体、ずれ止め部材及び原子炉建屋躯体の結果を表 2.2-1、表 2.2-2 に示す。

遮へい体またはずれ止め部材の設置に関する局所評価として使用済燃料プールに隣接する四方の工区について、基準地震動  $S_s$  時、使用済燃料プール周りの遮へい体、及び、ずれ止め部材、並び、遮へい体またはずれ止め部材と接触する原子炉建屋躯体に加わる応力は許容応力を下回り、遮へい体及使用済燃料プールに落下することはない。

表 2.2-1 遮へい体またはずれ止め部材の構造評価（基準地震動  $S_s$ ）

工区	応力	許容応力	検定比	検定部位
A	$M= 903 \text{ kN} \cdot \text{m}$	$M_a= 1, 260 \text{ kN} \cdot \text{m}$	0.72	ずれ止め部材（曲げ）
B C	$Q= 621 \text{ kN}$	$Q_a= 15, 694 \text{ kN}$	0.04	ずれ止め部材（せん断）
D（南側）	$M= 194 \text{ kN} \cdot \text{m}$	$M_a= 1, 525 \text{ kN} \cdot \text{m}$	0.13	遮へい体（曲げ）
D（東側）	$Q= 58 \text{ kN}$	$Q_a= 2, 238 \text{ kN}$	0.03	遮へい体（せん断）

表 2.2-2 原子炉建屋躯体の構造評価（基準地震動  $S_s$ ）

工区	応力	許容応力	検定比	検定部位
A	$P= 879 \text{ kN}$	$P_a= 11, 925 \text{ kN}$	0.08	カナルプラグ（支圧）
B C	$P= 1, 860 \text{ kN}$	$P_a= 39, 856 \text{ kN}$	0.05	機器ハッチ大梁（支圧）
D（南側）	$P= 431 \text{ kN}$	$P_a= 11, 368 \text{ kN}$	0.04	床スラブ（支圧）
D（東側）	$M= 594 \text{ kN} \cdot \text{m}$	$M_a= 5, 351 \text{ kN} \cdot \text{m}$	0.12	使用済燃料プール壁（曲げ）※

※D工区（東側）遮へい体下面の突起部は既設 FHM レールと使用済燃料プール壁に接触するので、基準地震動  $S_s$  時にD工区（東側）遮へい体に発生する慣性力は両箇所でも負担可能であるが、評価上は慣性力を使用済燃料プール壁で負担するものとする。

## 3. 遮へい体の滑動に対する評価

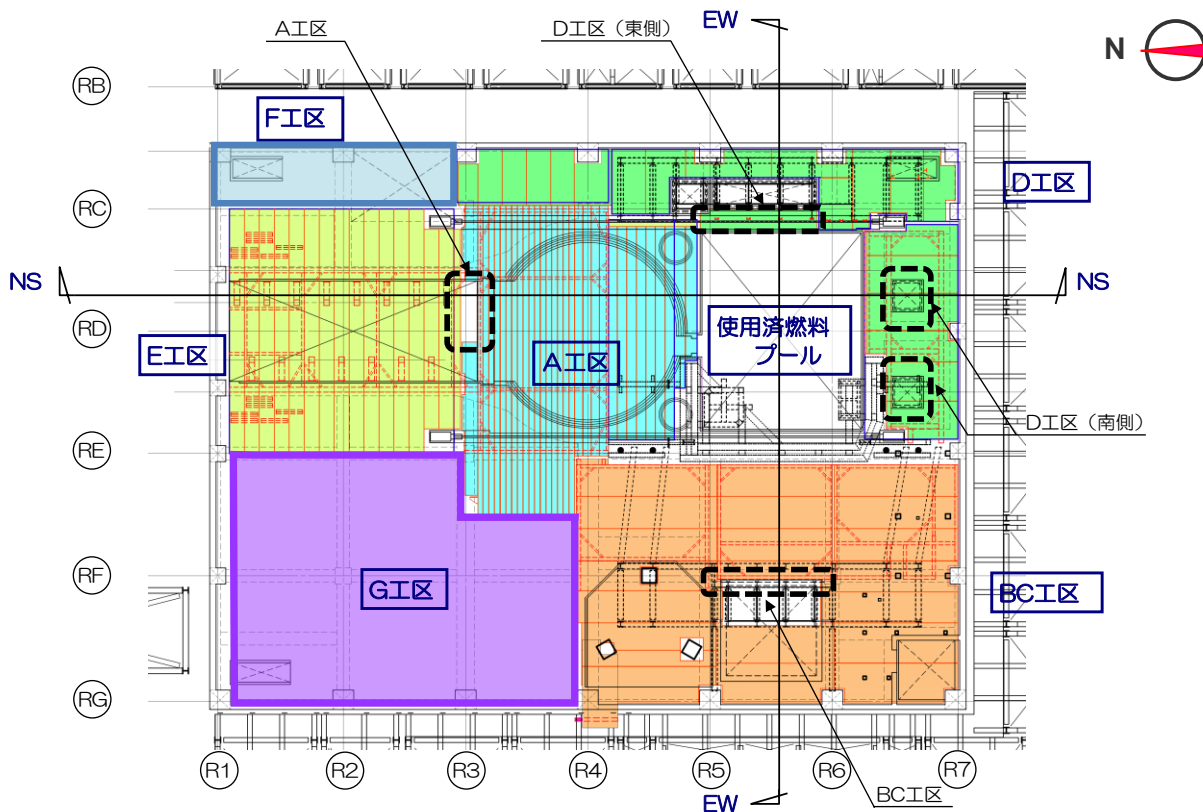
### 3.1 評価方法

本検討では、滑動対象物の端部と使用済燃料プール壁面までのクリアランスが地震時のすべり量より大きいことを確認する。各工区のクリアランスを表 3.1-1 及び図 3.1-1 に、工区ごとの詳細を図 3.1-2 に示す。

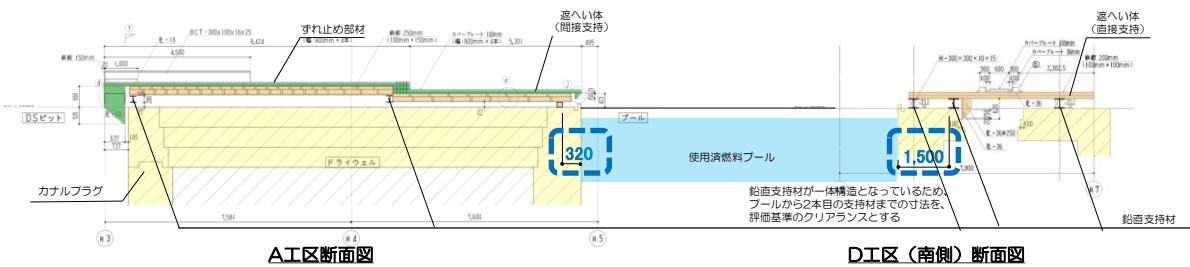
燃料取り出し用カバー検討用モデルの基準地震動  $S_s$  時の地震応答解析結果のうちオペフロ階の応答加速度時刻歴を入力として、滑動対象物を模擬した 1 自由度系に遮へい体の動摩擦係数と保守的に上向きの鉛直震度による摩擦抵抗の減少を条件とした地震応答解析を行い、滑動対象物とオペフロ床の相対変位を算出する。地震応答解析の概要を図 3.1-3 に、摩擦係数と鉛直震度の組合せを表 3.1-2 に示す。ここで算出した相対変位が使用済燃料プール壁面までのクリアランス以下であることを確認する。

表 3.1-1 滑動対象物と使用済燃料プールのクリアランス

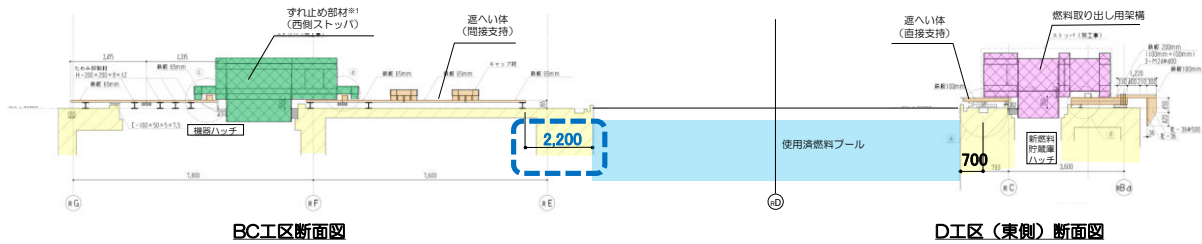
工区	クリアランス
A	320 mm
BC	2, 200 mm
D (南側)	1, 500 mm



(a) 平面計画



(b) 使用済燃料プール周りの南北断面



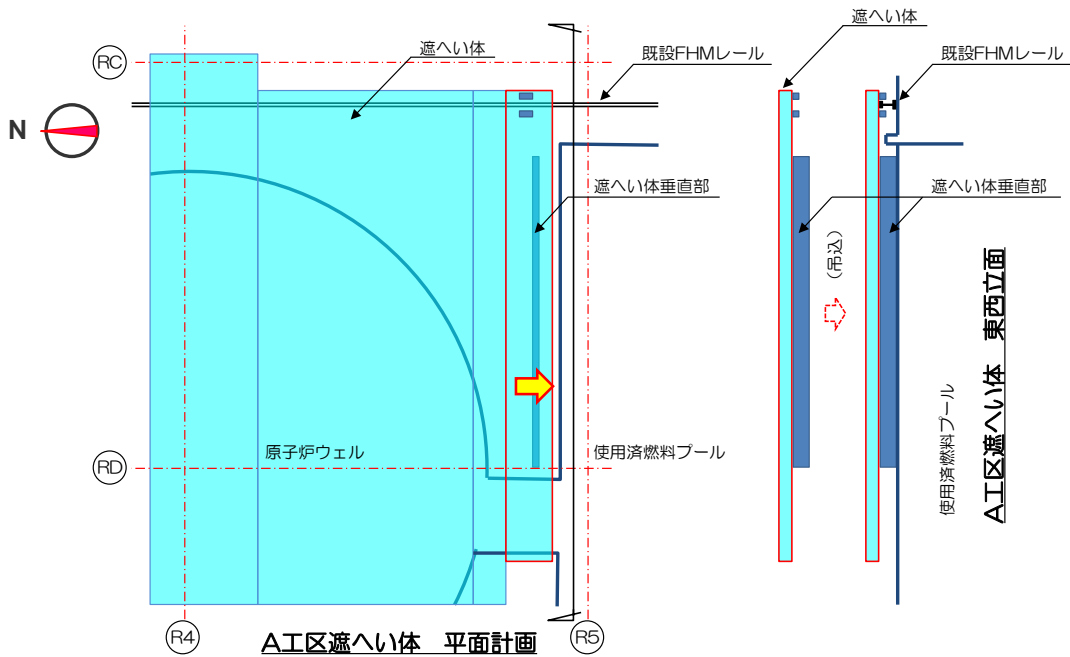
**滑動対象物と使用済燃料プールのクリアランス**

(c) 使用済燃料プール周りの東西断面

図 3.1-1 滑動対象物と使用済燃料プールのクリアランス

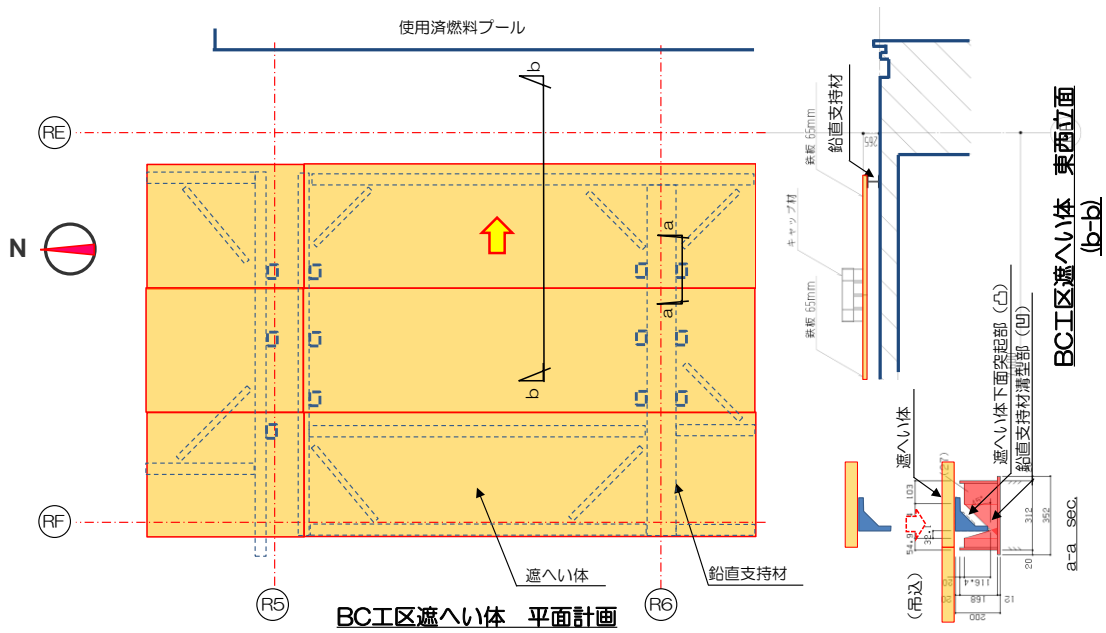
A工区遮へい体の使用済燃料プール際は、東側を既設 FHM レールに、西側を原子炉建屋躯体に載せる。

- 「オペフロ床面 (コンクリート) に対する遮へい体 (鋼材) のすべり量」及び「既設 FHM レール (鋼材) に対する遮へい体 (鋼材) のすべり量」の確認を行う。



(a) 使用済燃料プール際A工区遮へい体

- BC工区遮へい体は、鉛直支持材をオペフロ床面に載せ、その上に遮へい体を載せる。
- 「オペフロ床面（コンクリート）に対する、鉛直支持材（鋼材）と一体化された遮へい体（鋼製）のすべり量」の確認を行う。

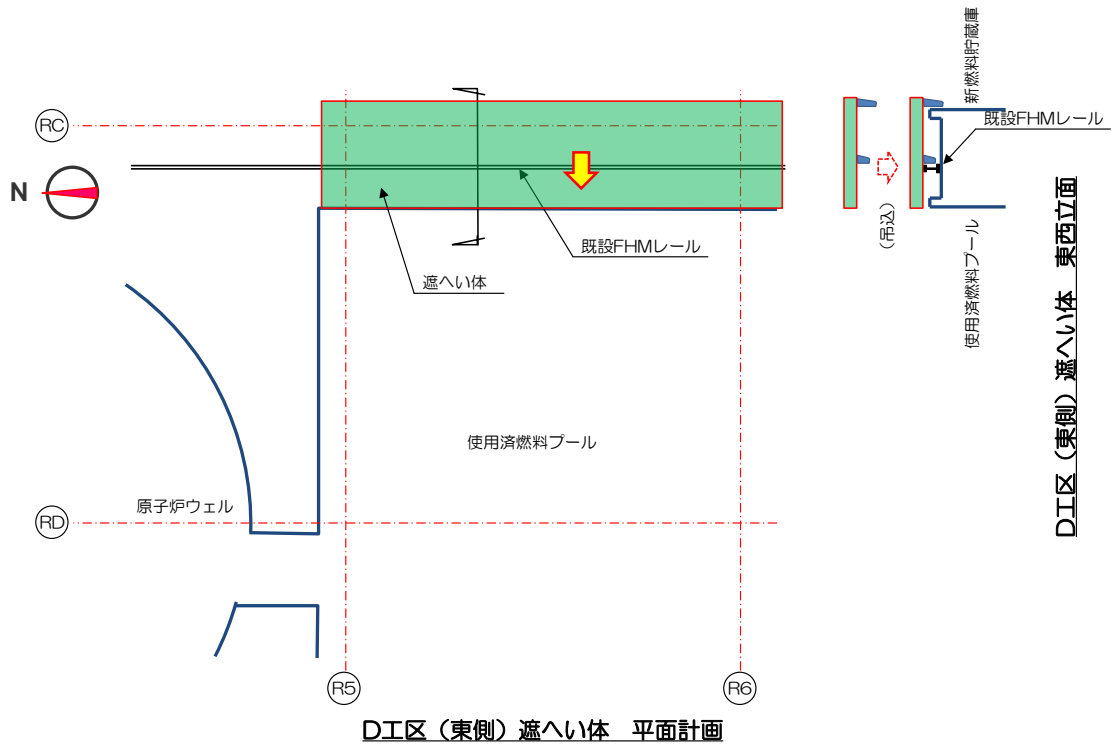


(b) 使用済燃料プール際BC工区遮へい体

図 3.1-2 遮へい体詳細(1)

D工区（東側）遮へい体の使用済燃料プール際は，東側を原子炉建屋躯体に，西側を既設 FHM レールに載せる。

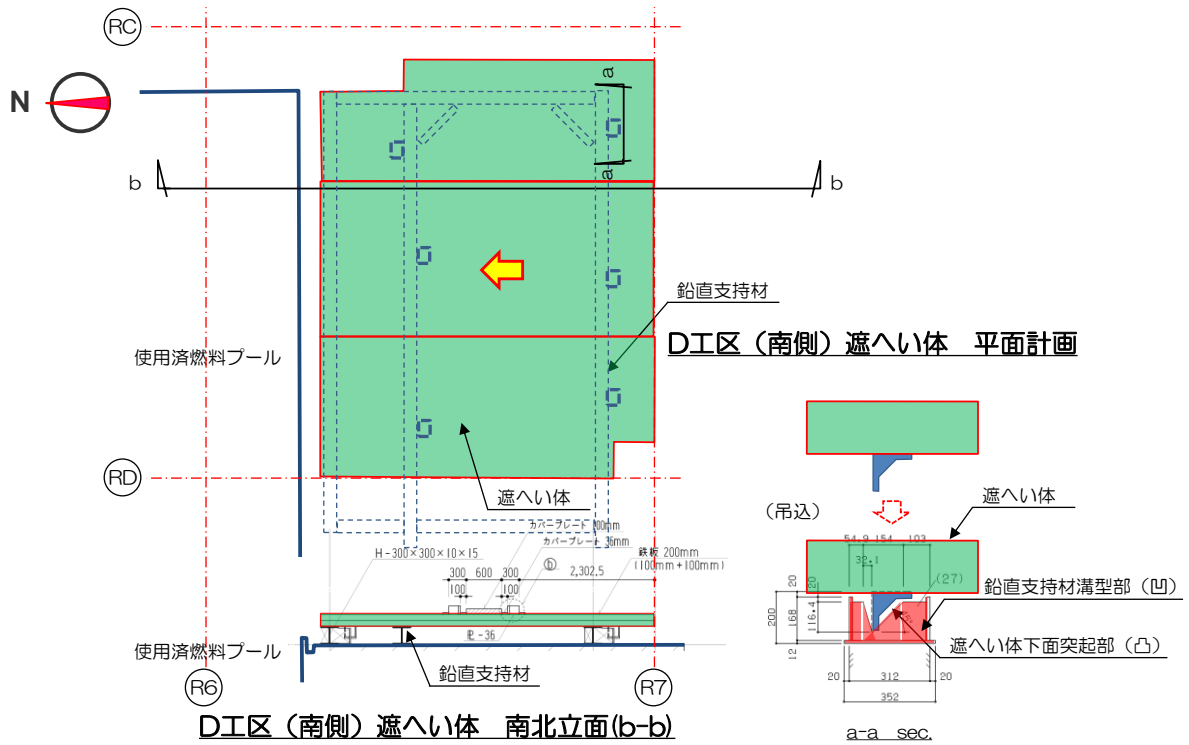
- ・遮へい体は原子炉建屋躯体で直接支持されるため滑動せず，使用済燃料プール側には落下しないと評価。（滑動に対する評価は実施しない）



(c) 使用済燃料プール際D工区（東側）遮へい体

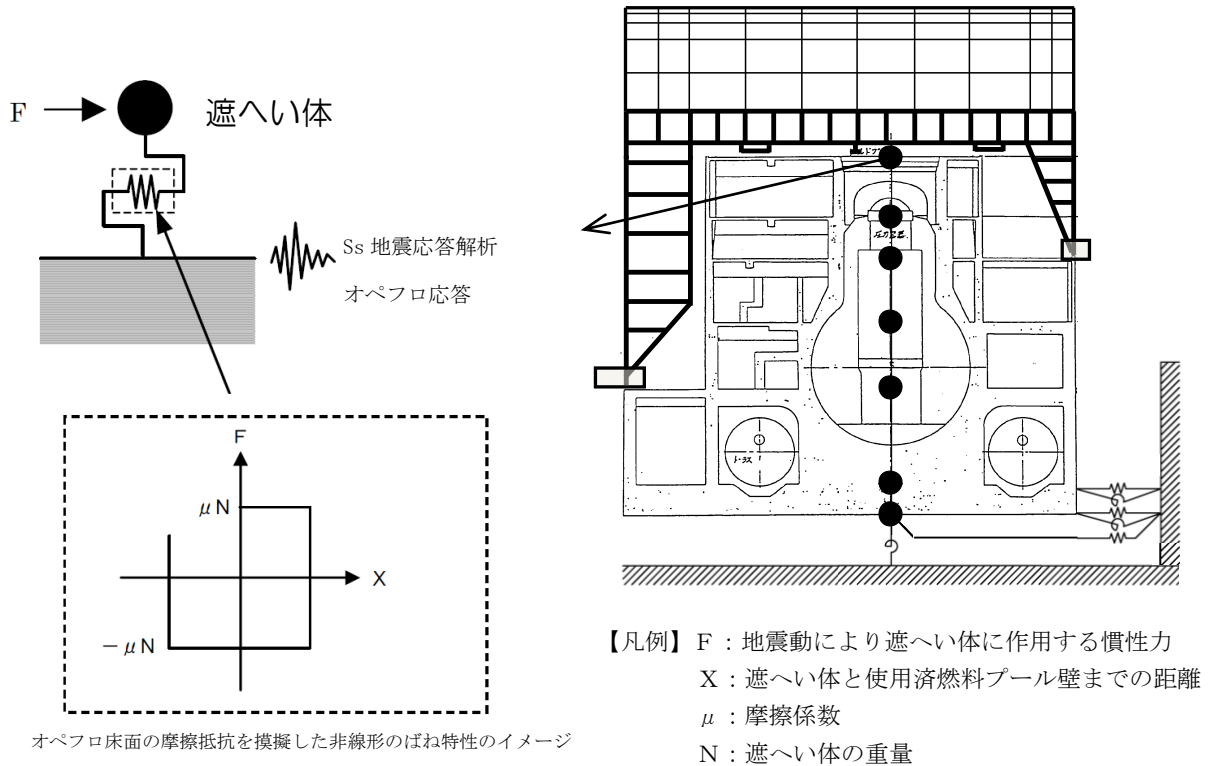
D工区（南側）遮へい体は、鉛直支持材（鋼製）をオペフロ床面に載せ、その上に遮へい体を載せる。

- ・「オペフロ床面（コンクリート）に対する、鉛直支持材（鋼材）のすべり量」の確認を行う。



(d) 使用済燃料プール際D工区（南側）遮へい体

図 3.1-2 遮へい体詳細(2)



\*：解析モデルの諸元は、「添付資料-4-2 燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する説明書」の中で用いたものを使用。

\*：遮へい体とオペフロ床面の摩擦抵抗については、遮へい体に生じる慣性力が静止摩擦力を超過すると、一定の摩擦力が抵抗力として作用しながら遮へい体が移動し、慣性力が静止摩擦力以下の場合には、遮へい体は移動せずその場にとどまるような、非線形のばね特性で評価。

図 3.1-3 遮へい体滑動検討の地震応答解析モデル

表 3.1-2 摩擦係数と鉛直震度の組合せ

CASE	摩擦面	摩擦係数	備考
1	鋼材とコンクリート	0.40	鋼構造設計規準（日本建築学会）
2	鋼材とコンクリート	0.25	電中研報告書「使用済燃料キャスク貯蔵技術の確立-地震時のキャスク転倒評価-」（研究報告：U92037） コンクリート及び鋼材表面の塗装条件を様々に変化させた試験結果のうち最も不利な摩擦係数。
3	鋼材とコンクリート	0.25	CASE2 に鉛直震度（0.45G）による鉛直力Nを低減させた場合。
4	鋼材と鋼材	0.35~0.40	機械工業ハンドブック改訂版 「鋼材とコンクリート」の評価により包絡されるため、省略。



### 3.2 評価結果

表 3.1-2 の組合せケースの結果を表 3.2-1 に示す。基準地震動 Ss 時の相対変位が最大となるケース 3 において相対変位が 22.3cm となり、使用済燃料プール壁面までの最小クリアランス 32.0cm 以下である。よって、ずれ止め設置前においても滑動対象物が使用済燃料プールに落下することはない。

表 3.2-1 地震応答解析による滑動対象物とオペフロの相対変位（基準地震動 Ss）

CASE	摩擦係数	鉛直震度	最大相対変位 (cm)	クリアランス (cm)
1	0.40	0	5.8	32.0
2	0.25	0	10.8	32.0
3	0.25	0.45（上向き）	22.3	32.0

## 2号機燃料取り出し用構台に係る確認事項

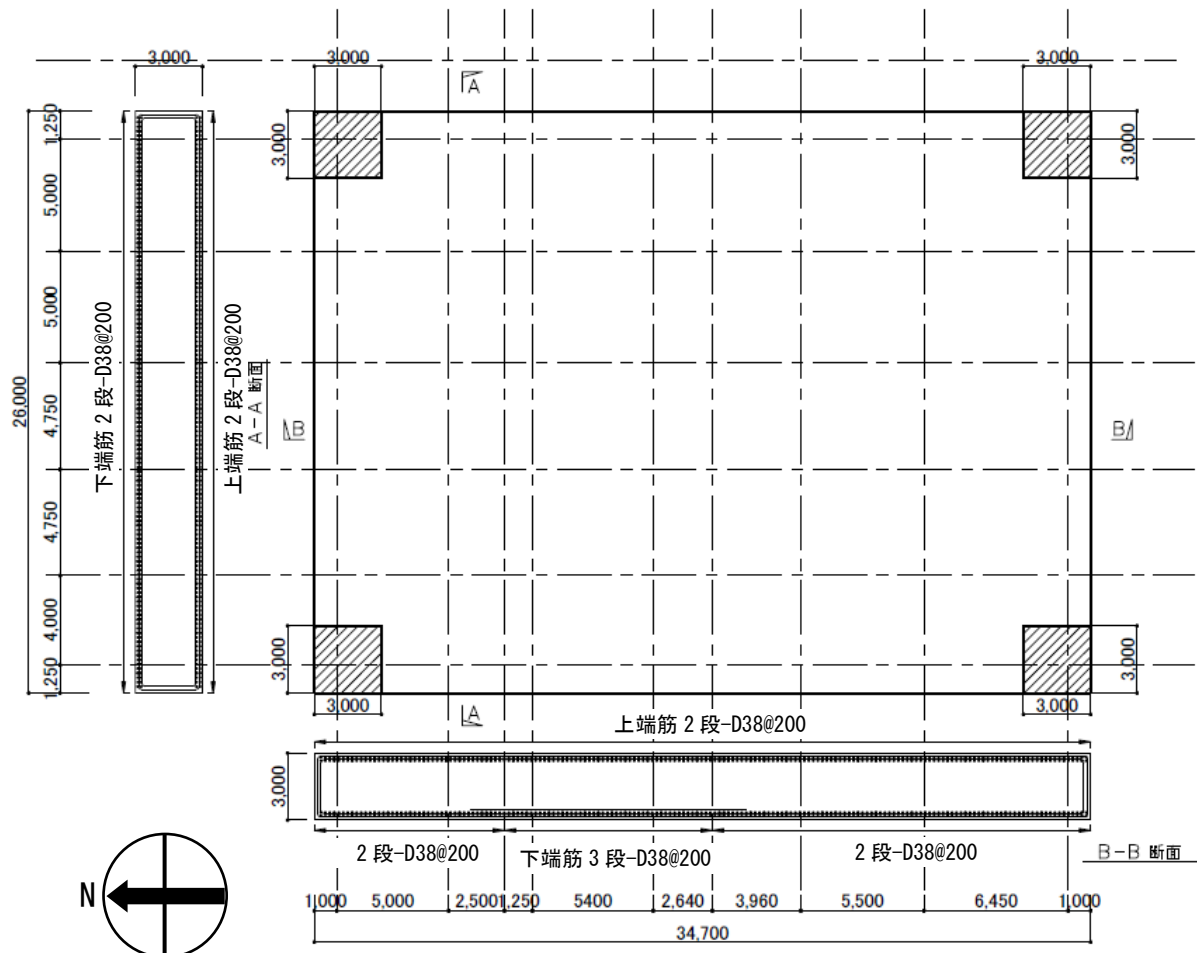
2号機燃料取り出し用構台の工事に係る主要な確認項目を表－1に示す。

表－1 2号機燃料取り出し用構台に係る確認項目

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 および 耐震性	材料確認	地盤改良土の一軸圧縮強さを確認する。	地盤改良土の一軸圧縮強さが、実施計画に記載されている設計基準強度を満足すること。
		構造体コンクリートの圧縮強度を確認する。	構造体コンクリート強度が、実施計画に記載されている設計基準強度対して、JASS5Nの基準を満足すること。
		鉄筋の材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3112 に適合すること。
		鋼材の材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3101, JIS G 3136, JIS G 3106, JIS G 3444, JIS G 3321 又は建築基準法第 37 条第二号の規定に適合すること。
		特殊ボルト（ワンサイドボルト）の締め付け張力を確認する。	導入張力試験を JASS 6 に準じて実施し、所定の張力が得られること。
		トルシア型超高力ボルト（SHTB）、トルシア型高力ボルト（S10T）、高力六角ボルト（F10T）の仕様を確認する。	JIS B 1186 又は建築基準法第 37 条第二号の規定に適合すること。
		アンカーボルトの材質、強度、化学成分を確認する。	JIS G 3138 に適合すること。
		弾性支承の鉛直剛性を確認する。	弾性支承の鉛直剛性が、Ⅱ章 2.11 添付資料－4－2 に記載した値の±20%以内であること。
		オイルダンパの減衰係数を確認する。	ばね付きオイルダンパの第一減衰係数は、試験時の各速度における荷重が、Ⅱ章 2.11 添付資料－4－2 に記載したオイルダンパの減衰係数に各速度を掛けて算出した荷重の±10%以内であること。オイルダ

			<p>ンパ（水平棟間）およびオイルダンパ（鉛直）の第一減衰係数は、正弦波加力を行った際の減衰力ループから算出した第一減衰係数が、添付資料－４－２に記載したオイルダンパの減衰係数の±10%以内であること。</p> <p>第二減衰係数は、試験時の各速度における荷重の平均が、Ⅱ章 2.11 添付資料－４－２に記載したオイルダンパのリリーフ荷重と、減衰係数に各速度を掛けて、並列配置を考慮し算出した荷重の和の±10%以内であること。</p>
		オイルダンパのリリーフ荷重を確認する。	<p>試験で複数の加力速度を用いて得られる近似直線と、Ⅱ章 2.11 添付資料－４－２に記載した第一減衰係数の交点として得られる荷重が、Ⅱ章 2.11 添付資料－４－２に記載したリリーフ荷重の±10%以内であること。</p>
		オイルダンパのストロークを確認する。	<p>オイルダンパのストロークが、Ⅱ章 2.11 添付資料－４－２に記載した値以上であること。</p>
据付確認		地盤改良範囲（深さ）を確認する。	<p>支持レベルに着底していること。</p>
		鉄筋の径，間隔（図-1 参照）を確認する。	<p>鉄筋の径が実施計画書に記載されている通りであること。鉄筋の間隔が実施計画に記載しているピッチにほぼ均等に分布していること。</p>
		接合部（図-2～図-5 参照）の施工状況を確認する。	<p>高力ボルトが所定の本数・種類であること。</p>
		アンカーボルト埋め込み長さを確認する。	<p>有効埋め込み長さが所定の値（M30：300mm、M60：265mm）であり、かつボルトの余長はナット面から突き出た長さが3山以上であること。</p>
		制震装置（オイルダンパ）の設置状況を確認する。	<p>制震装置（オイルダンパ）の設置位置および設置数が図-6～図-13の通</p>

			りであること。
		免震装置（弾性支承）の設置状況を確認する。	免震装置（弾性支承）の設置位置および設置数が図-13 の通りであること。
		外装材および床の施工状況を確認する。	外装材および床の設置範囲が，図-14～図-17 の通りであること。
	外観確認	制震装置（オイルダンパ）の外観を確認する。	有害な欠陥がないこと。
	外観確認	免震装置（弾性支承）の外観を確認する。	有害な欠陥がないこと。




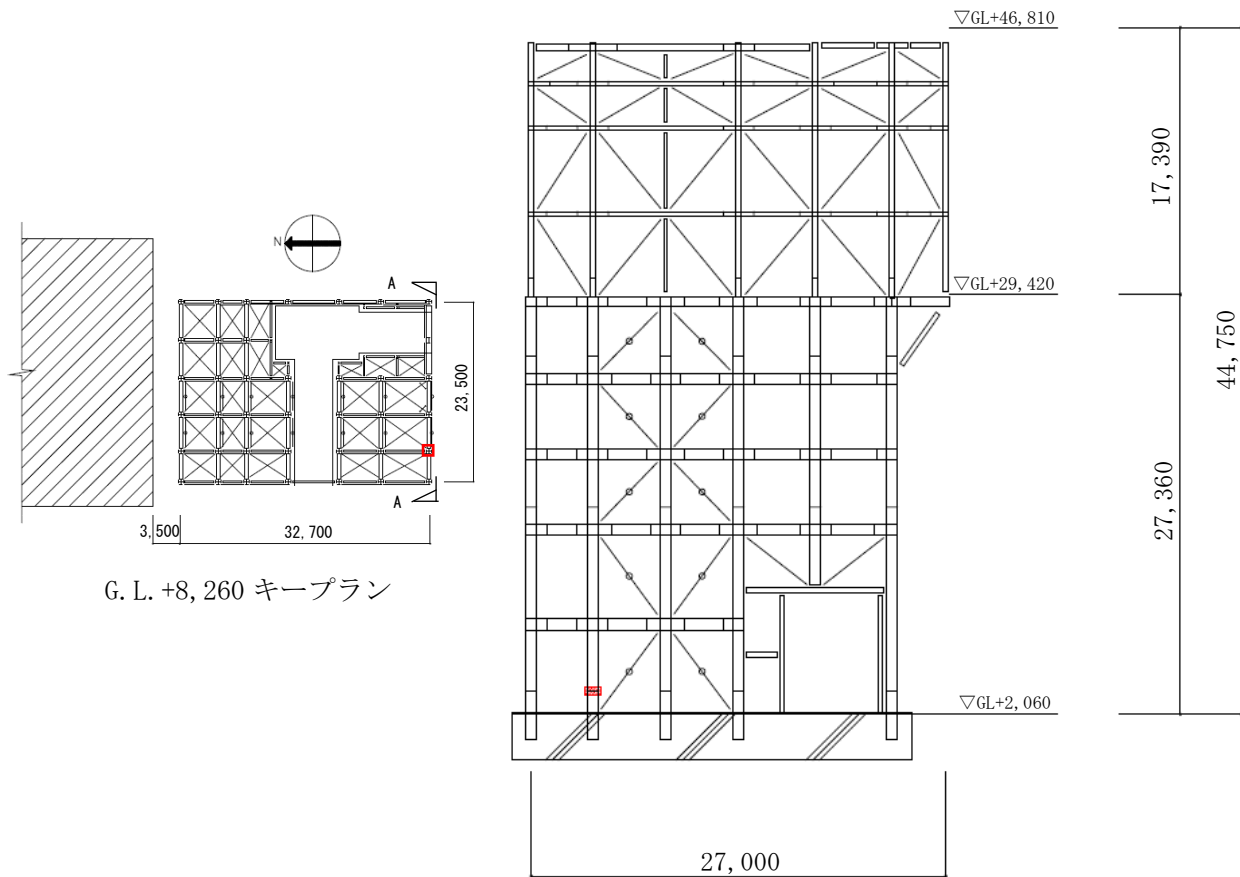
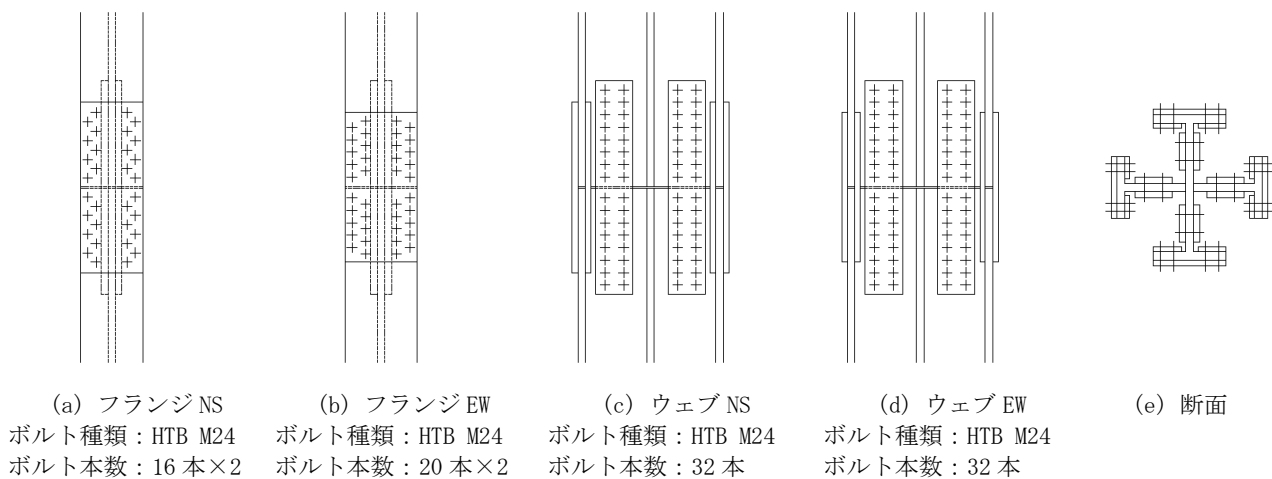
 部は面外せん断補強を実施  
 D19@400×200  
 鉄筋材質：SD345

図-1 基礎配筋図 (単位：mm)



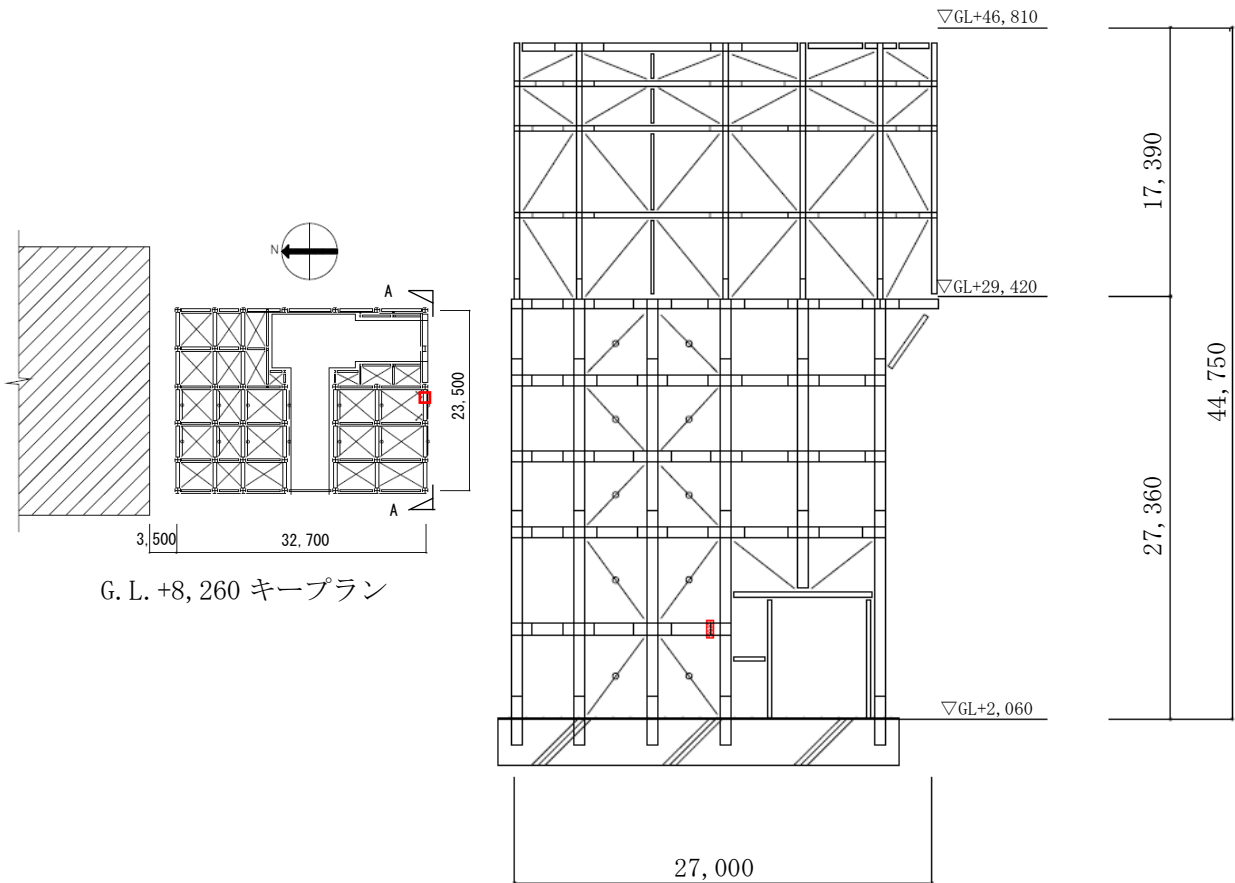
A-A 断面図

(1) 接合部位置 (構台部柱材最大応力度比発生箇所)



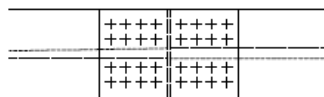
(2) 接合部詳細 (片側の構造材に取り付くボルト本数を記載)

図-2 構台接合部①



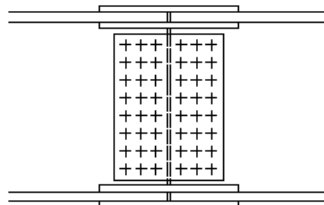
A-A 断面図

(1) 接合部位置 (構台部梁材最大応力度比発生箇所)



(a) 上下フランジ

ボルト種類 : SHTB M24  
ボルト本数 : 16 本×2



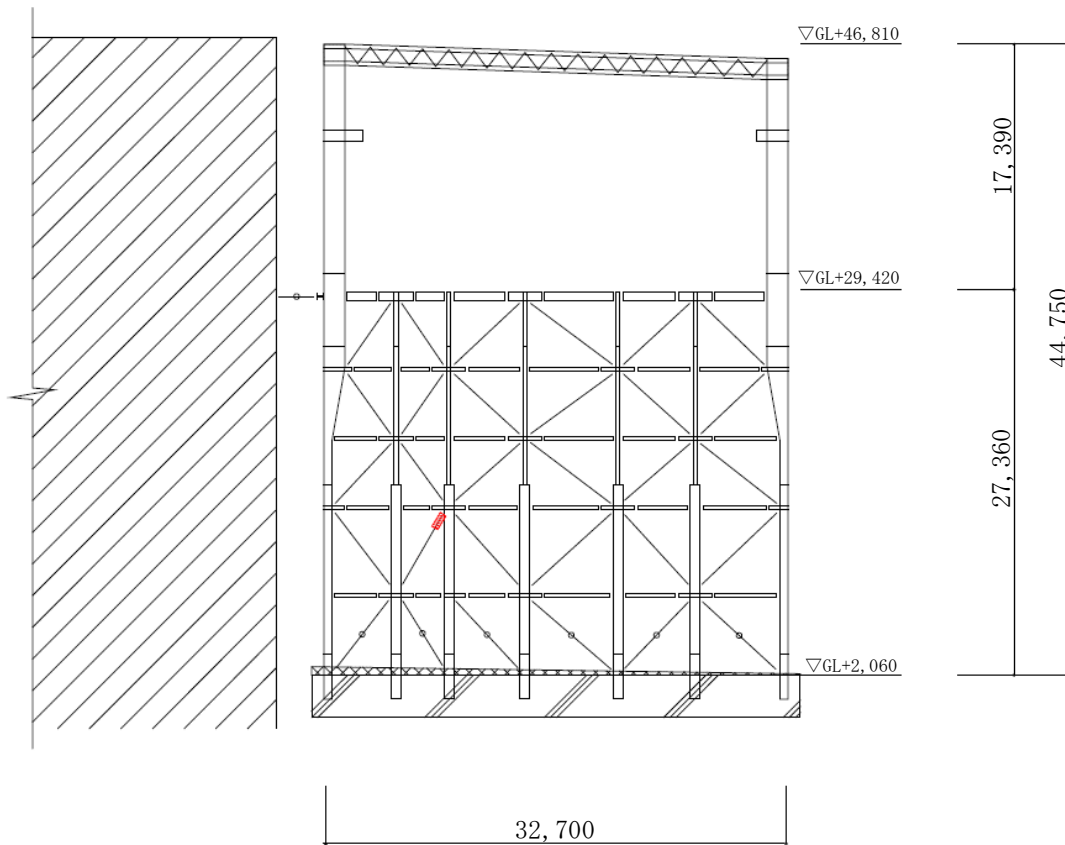
(b) ウェブ

ボルト種類 : SHTB M24  
ボルト本数 : 24 本

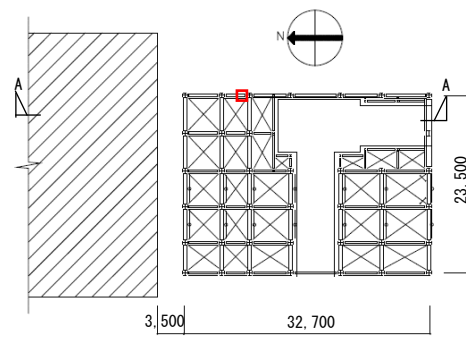
(2) 接合部詳細 (片側の構造材に取り付くボルト本数を記載)

図-3 構台接合部②

II-2-11-添 4-2-452

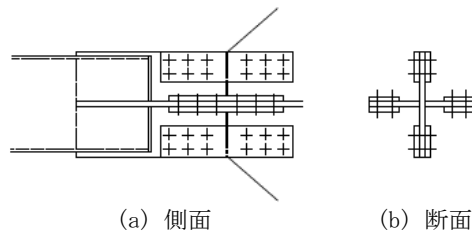


A-A 断面図



G. L. +8, 260 キープラン

(1) 接合部位置 (構台部ブレース材最大応力度比発生箇所)



(a) 側面  
 ボルト種類 : SHTB M22  
 ボルト本数 : 12 本×2

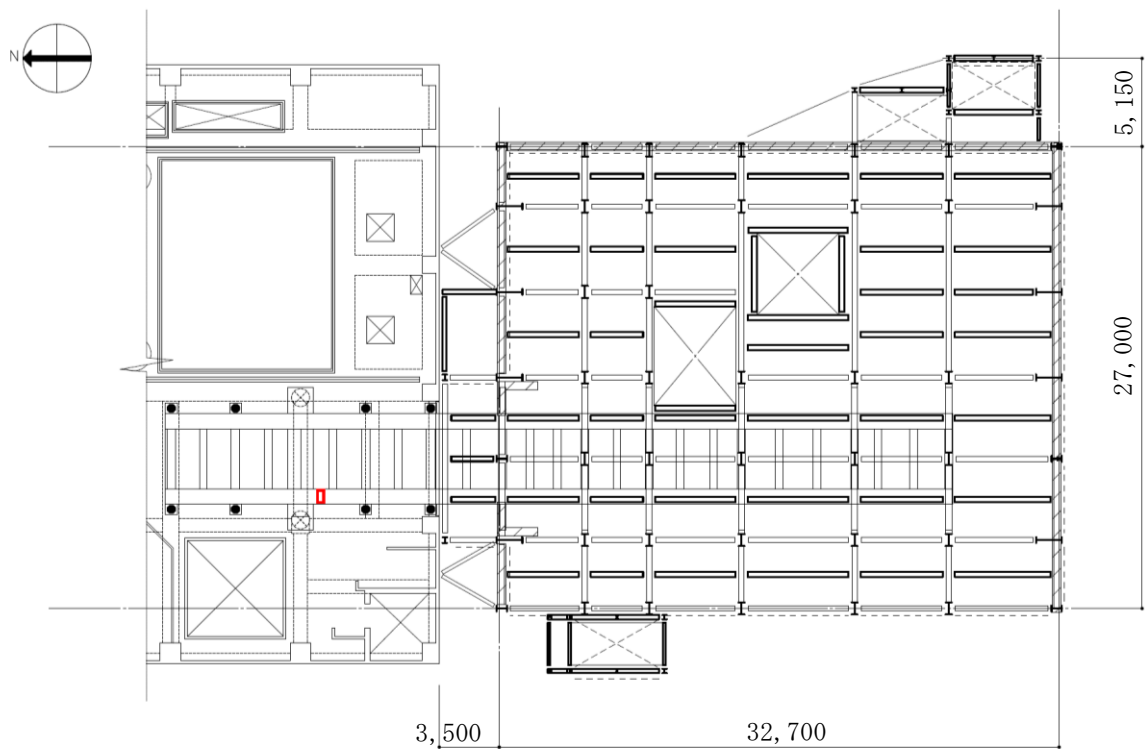
(b) 断面

(2) 接合部詳細 (片側の構造材に取り付くボルト本数を記載)

図-4 構台接合部③

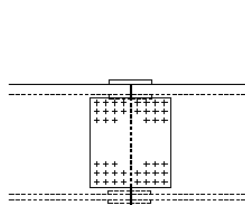
II-2-11-添 4-2-453





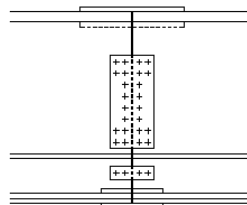
G. L. +29, 420 キープラン

(1) 接合部位置 (ランウェイガード最大応力度比発生箇所)



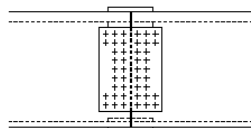
(a) 上フランジ

ボルト種類：SHTB M24  
ボルト本数：22 本



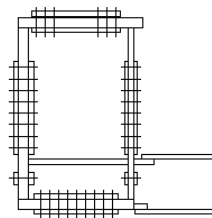
(c) ウェブ

ボルト種類：SHTB M24  
ボルト本数：14 本×2



(b) 下フランジ

ボルト種類：SHTB M24  
ボルト本数：22 本

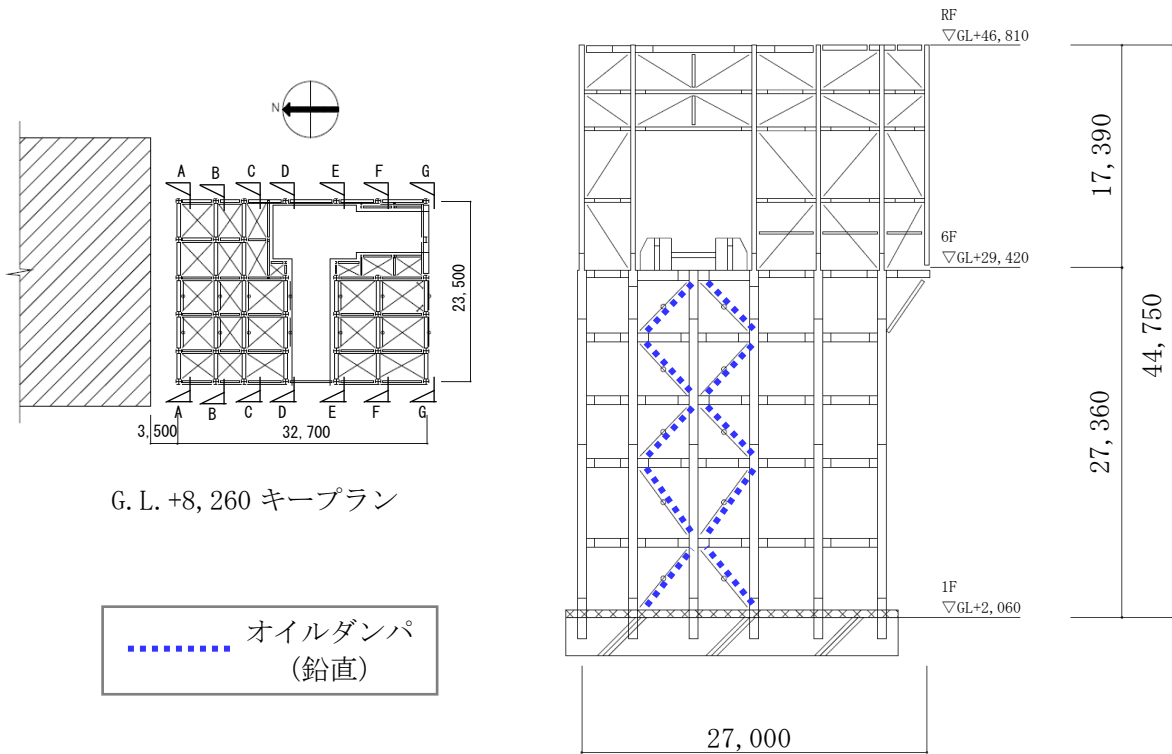


(d) 断面

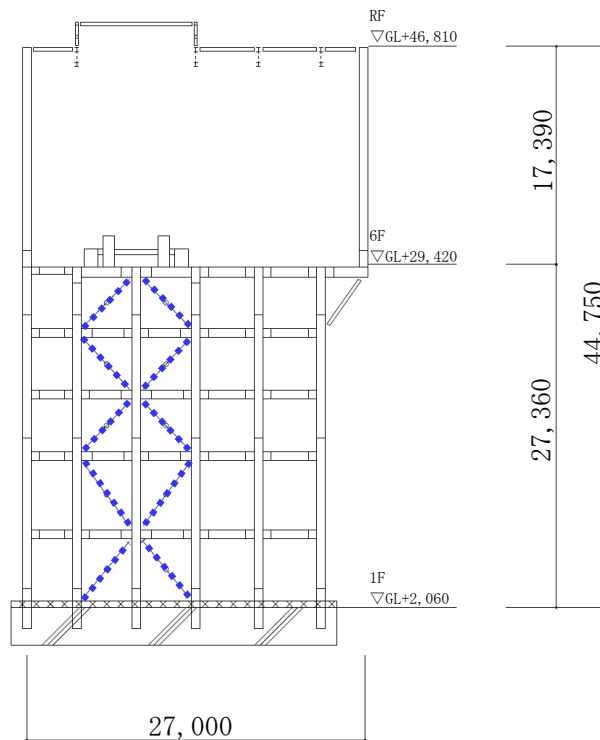
(2) 接合部詳細 (片側の構造材に取り付くボルト本数を記載)

図-5 ランウェイガード接合部

II-2-11-添 4-2-454

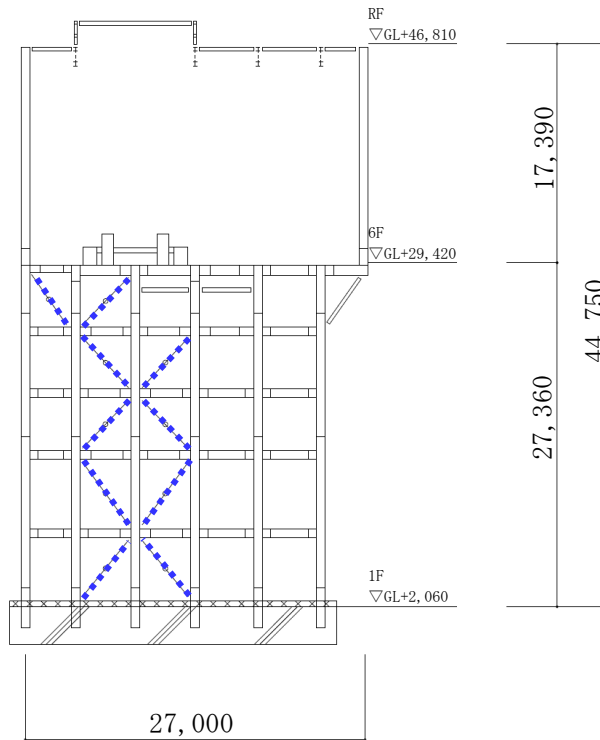


(1) オイルダンパ位置図 (A-A 断面図)

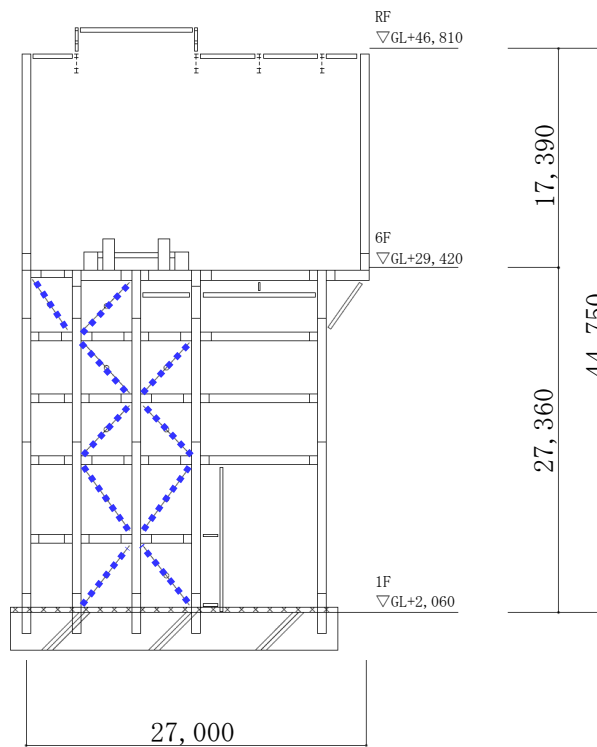


(2) オイルダンパ位置図 (B-B 断面図)

図-6 オイルダンパ位置図①

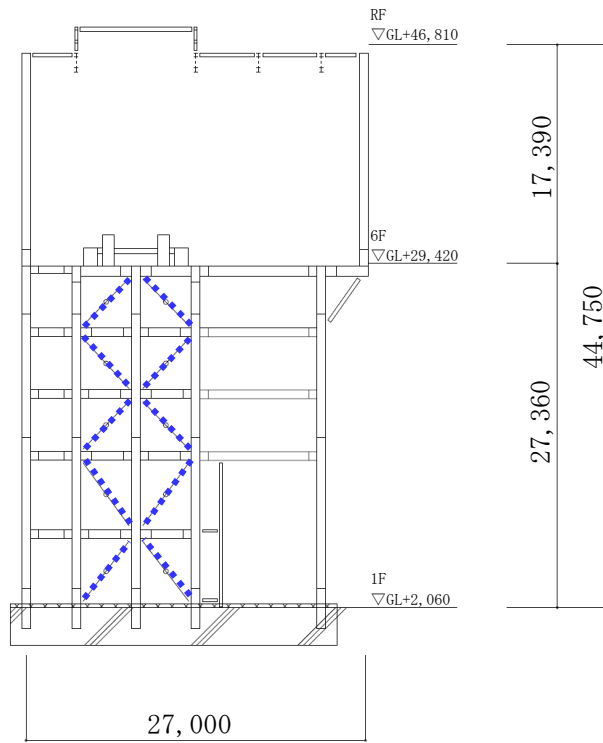


(1) オイルダンパ位置図 (C-C 断面図)

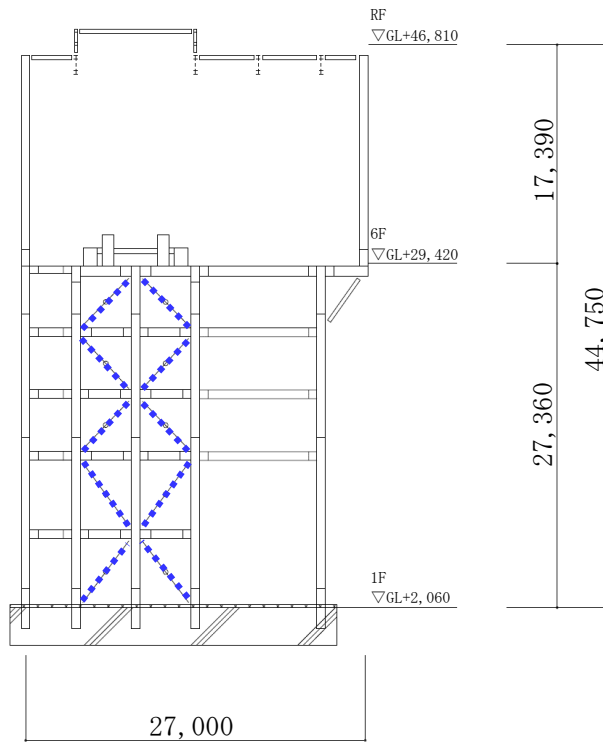


(2) オイルダンパ位置図 (D-D 断面図)

図-7 オイルダンパ位置図②

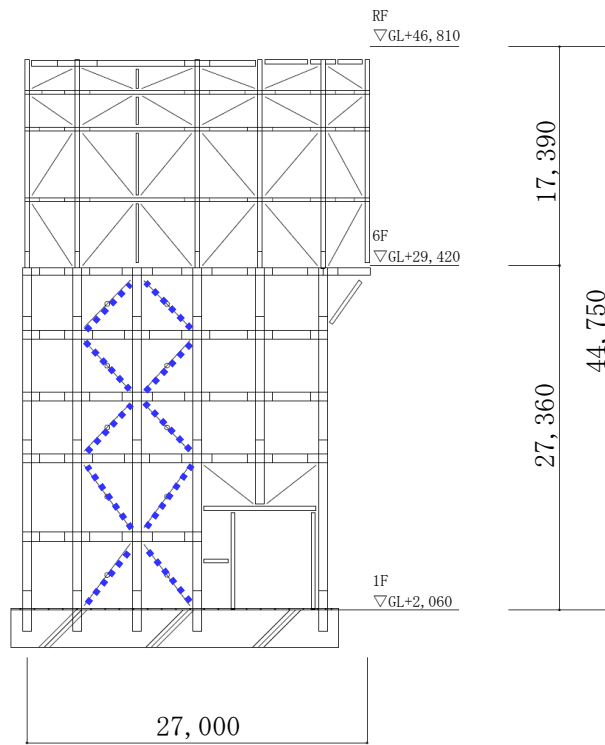


(1) オイルダンパ位置図 (E-E 断面図)



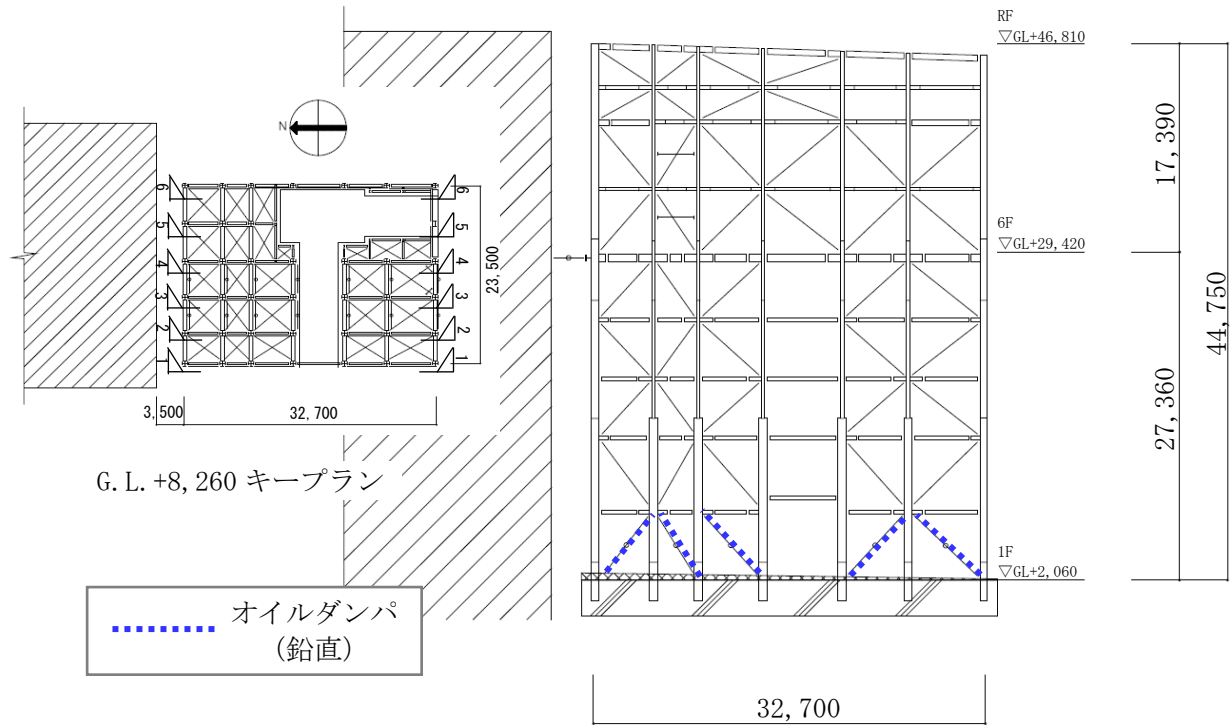
(2) オイルダンパ位置図 (F-F 断面図)

図-8 オイルダンパ位置図③

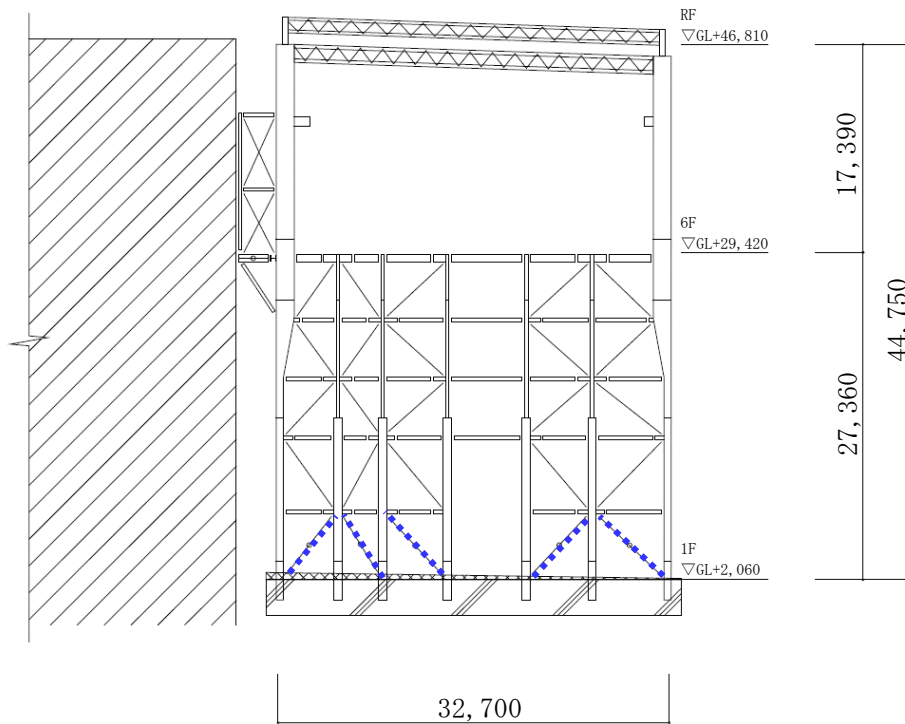


(1) オイルダンパ位置図 (G-G 断面図)

図-9 オイルダンパ位置図④

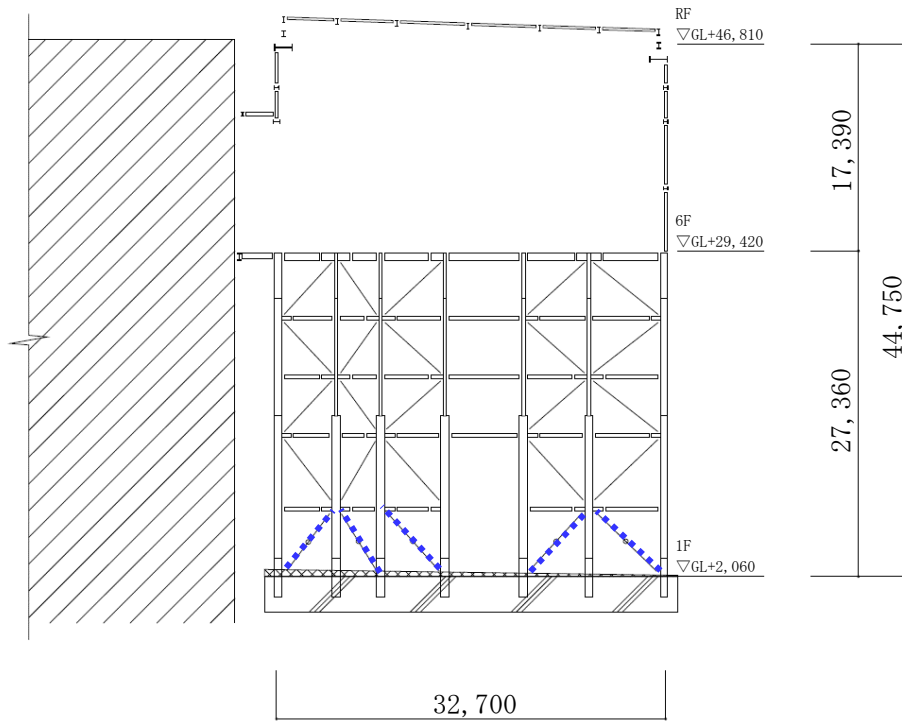


(1) オイルダンパ位置図 (1-1 断面図)

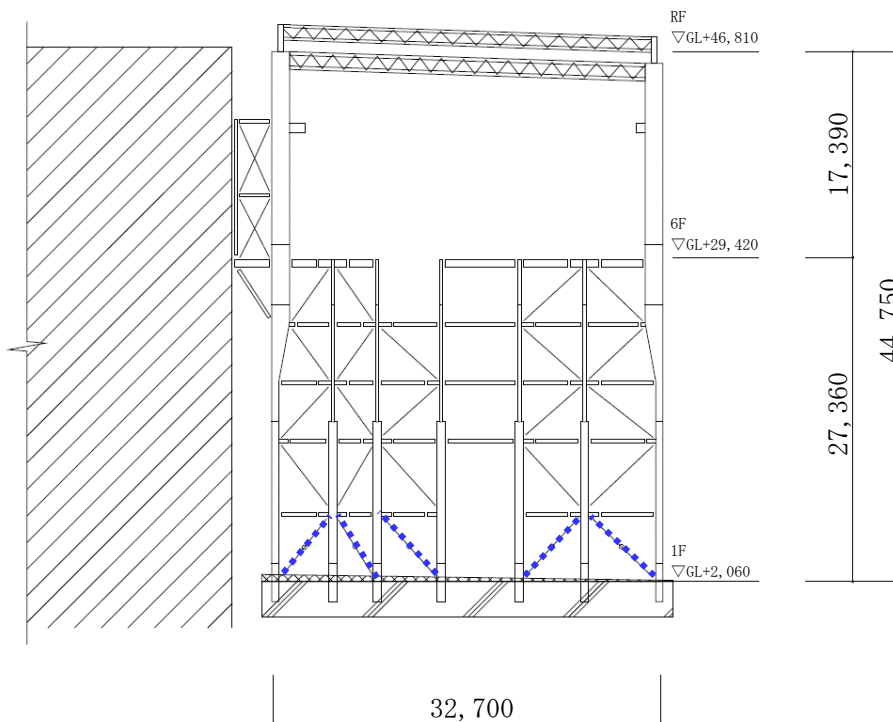


(2) オイルダンパ位置図 (2-2 断面図)

図-10 オイルダンパ位置図⑤



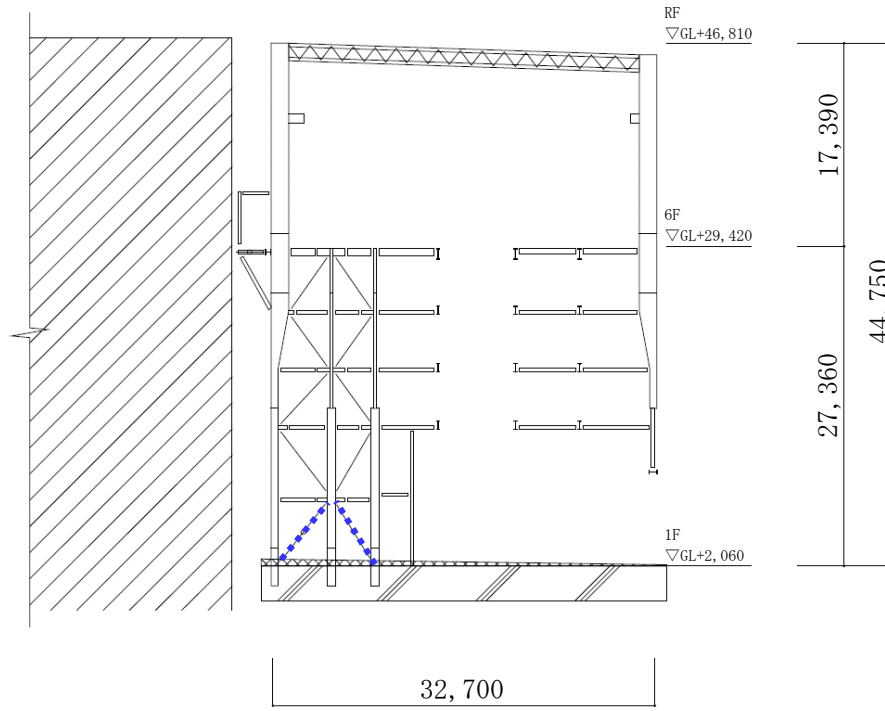
(1) オイルダンパ位置図 (3-3 断面図)



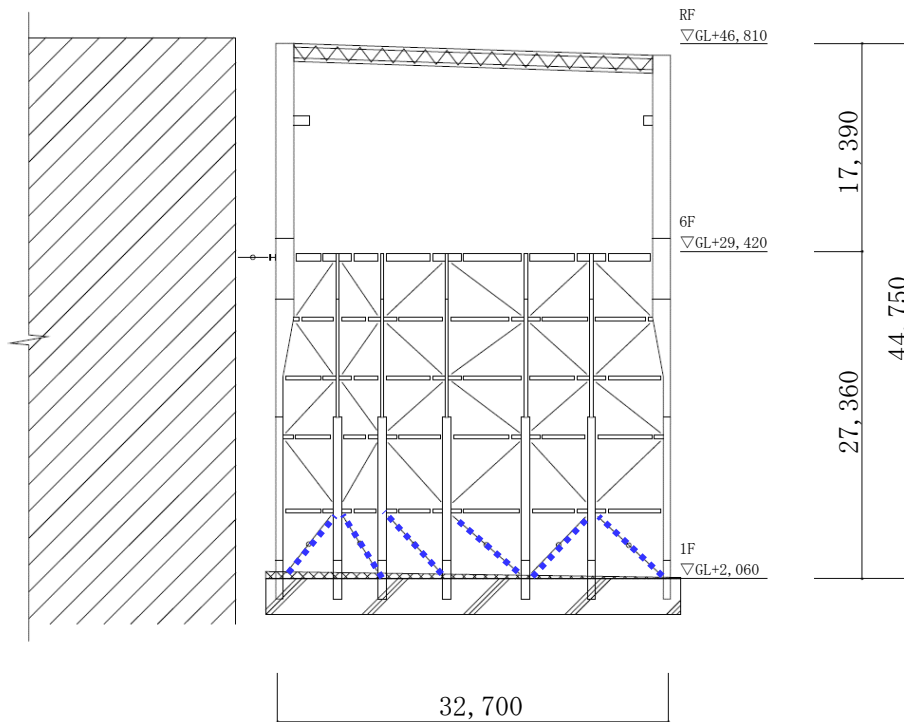
(2) オイルダンパ位置図 (4-4 断面図)

図-11 オイルダンパ位置図⑥

II-2-11-添 4-2-460



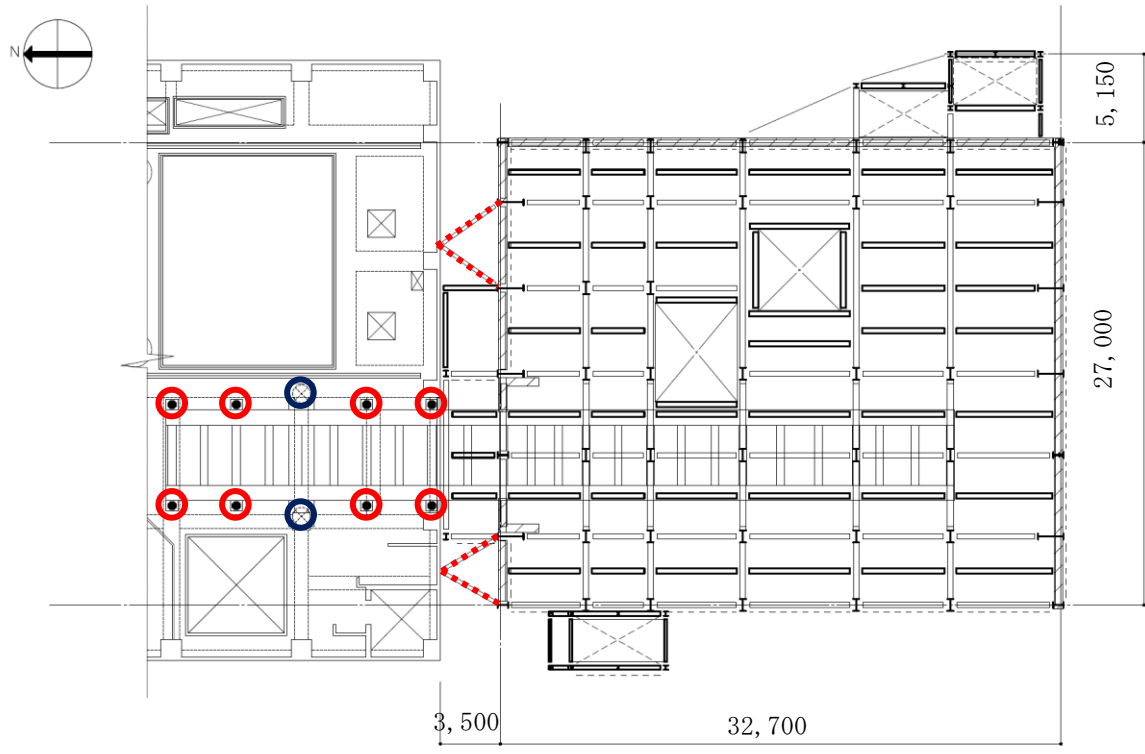
(1) オイルダンパ位置図 (5-5 断面図)



(2) オイルダンパ位置図 (6-6 断面図)

図-12 オイルダンパ位置図⑦








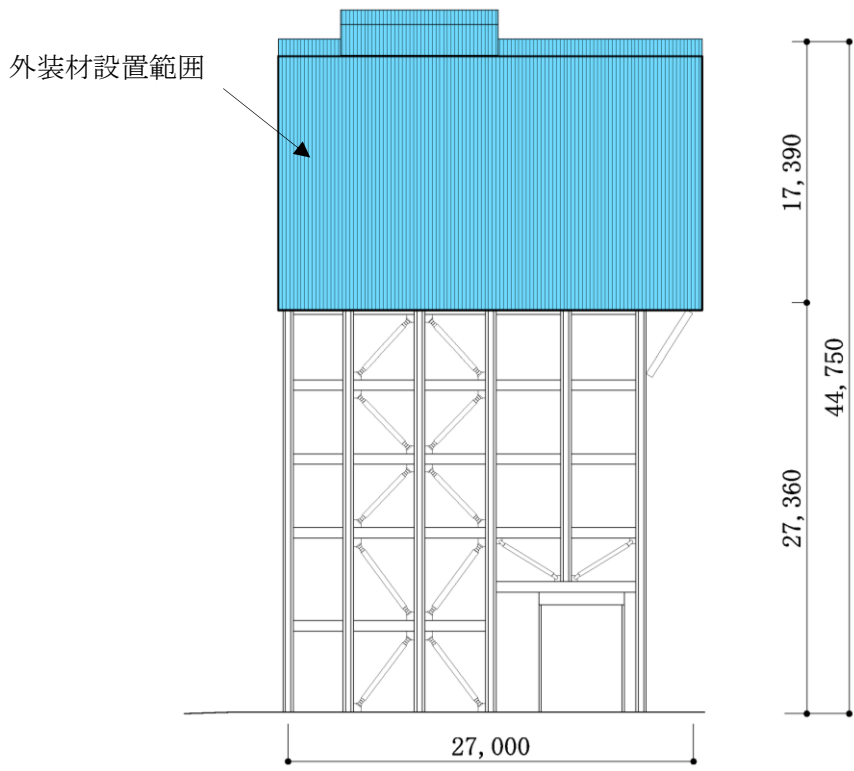
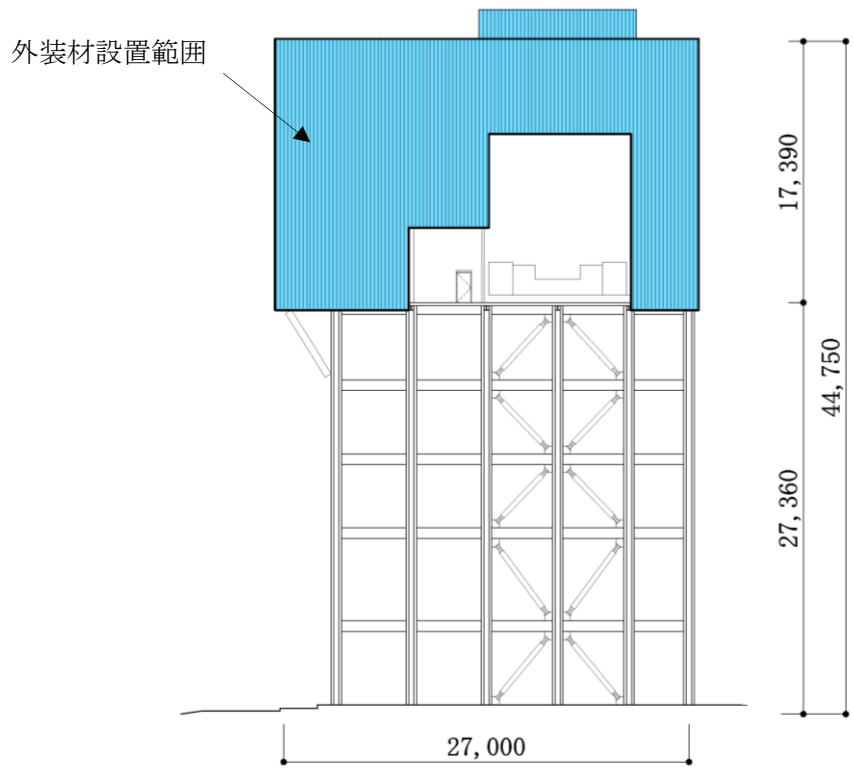
	オイルダンパ (水平棟間)	G. L. +29, 420 キープラン
	ばね付き オイルダンパ	
	弾性支承	

図-13 オイルダンパおよび弾性支承位置図



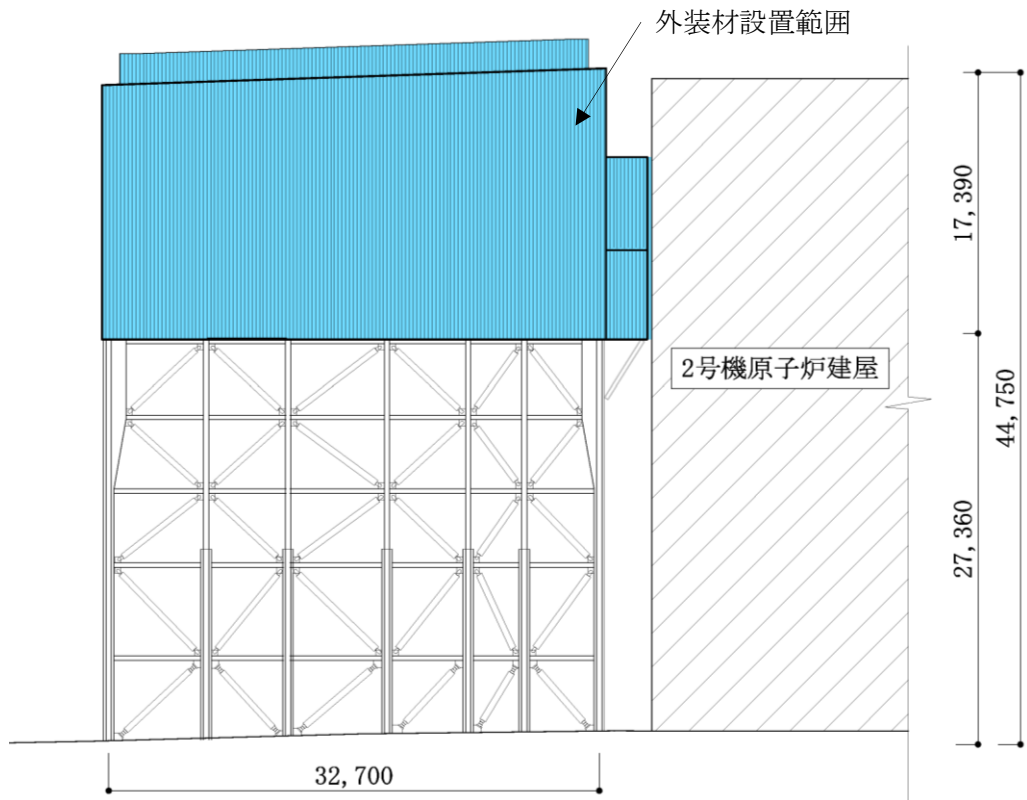
南側立面



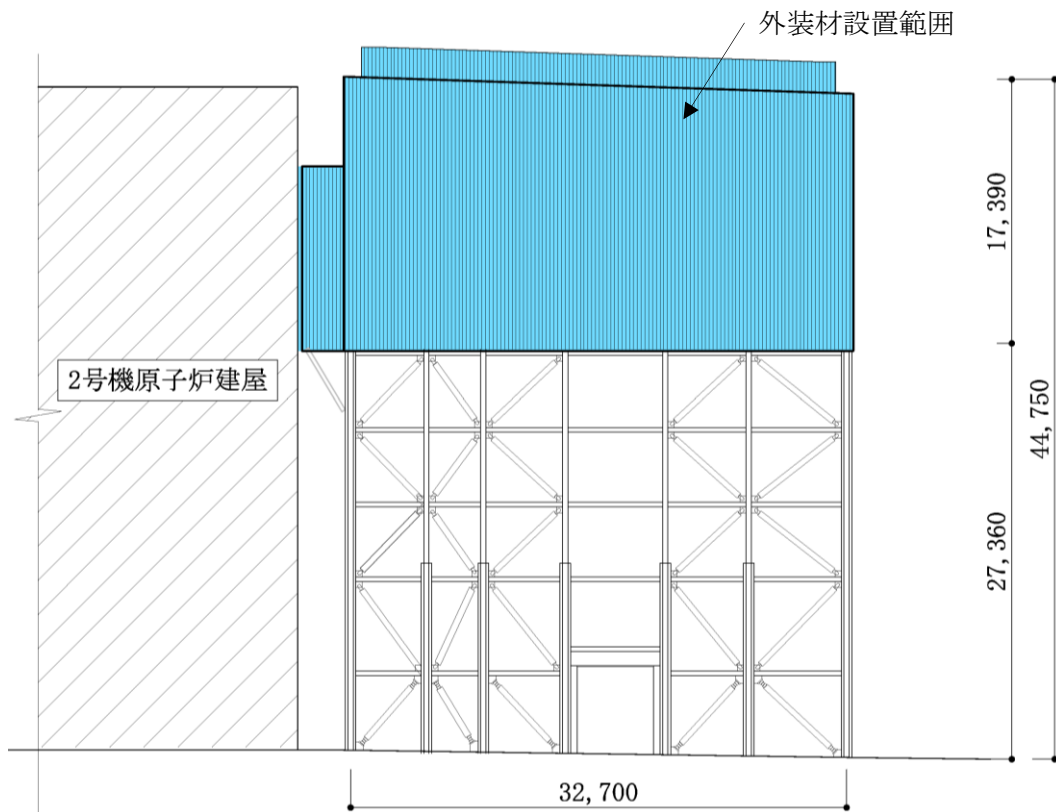
北側立面

図-14 外装材設置範圍図①

II-2-11-添 4-2-463



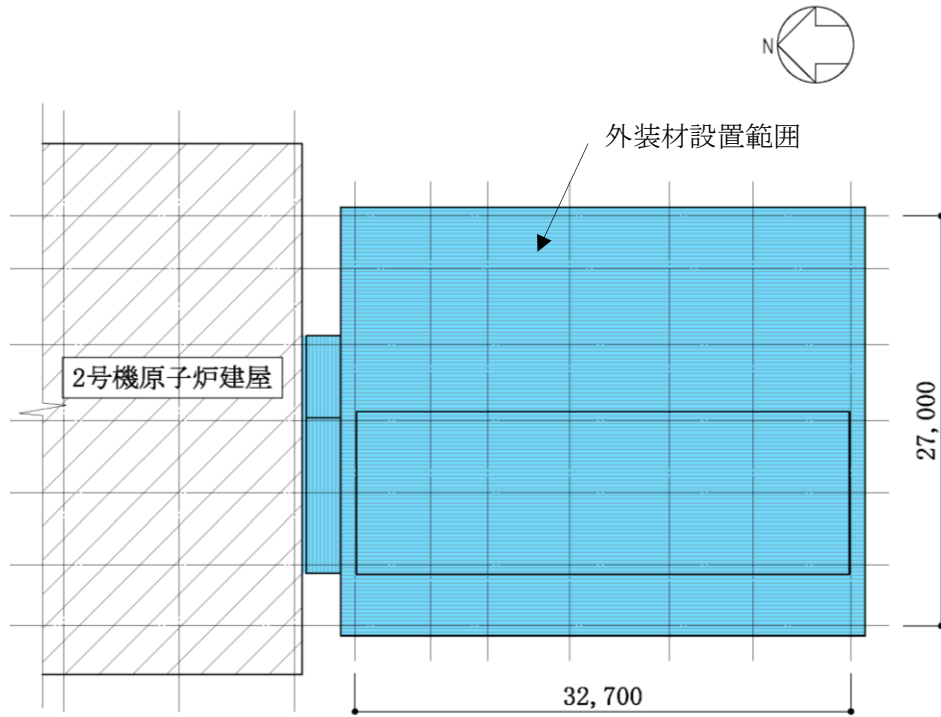
東側立面



西側立面

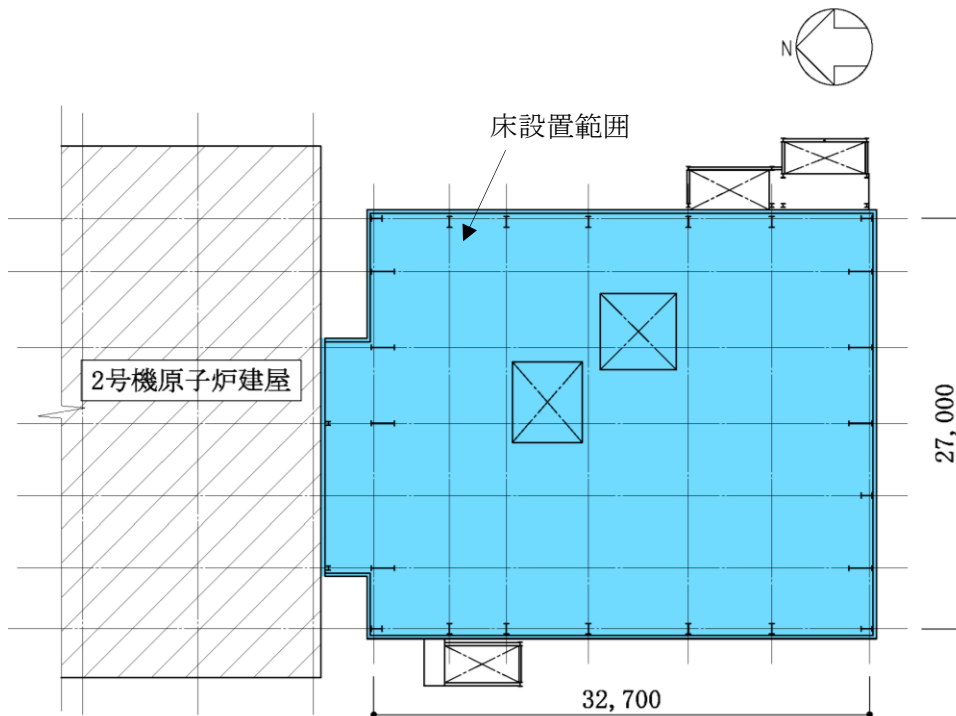
図-15 外装材設置範囲図②

II-2-11-添 4-2-464



屋根伏図

図-16 外装材設置範囲図③



6F 伏図 (G. L. 29, 420)

図-17 床設置範囲図

## 2号機原子炉建屋 オペレーティングフロア床面に設置する遮蔽体の落下防止について

## 1. 概要

2号機原子炉建屋内の作業環境改善のため、原子炉建屋内オペレーティングフロア床面及び壁側に遮蔽体を設置する計画としている。オペレーティングフロアに設置する遮蔽体のうち、使用済燃料プール周りに設置するものが、地震時时使用済燃料プール及び使用済燃料ラックに波及的影響を及ぼさないことを、遮蔽体の地震水平方向荷重に対する支持部材の構造強度を評価により確認する。

本資料では、地震時における使用済燃料プール周りに設置する下記遮蔽体の支持部材の構造評価の結果を示す。各遮蔽体の配置を図 1-1 に示す。

- (1) 使用済燃料プール(SFP)北側遮蔽
- (2) 使用済燃料プール(SFP)南側遮蔽
- (3) 使用済燃料プール(SFP)東側遮蔽
- (4) 使用済燃料プール(SFP)西側遮蔽

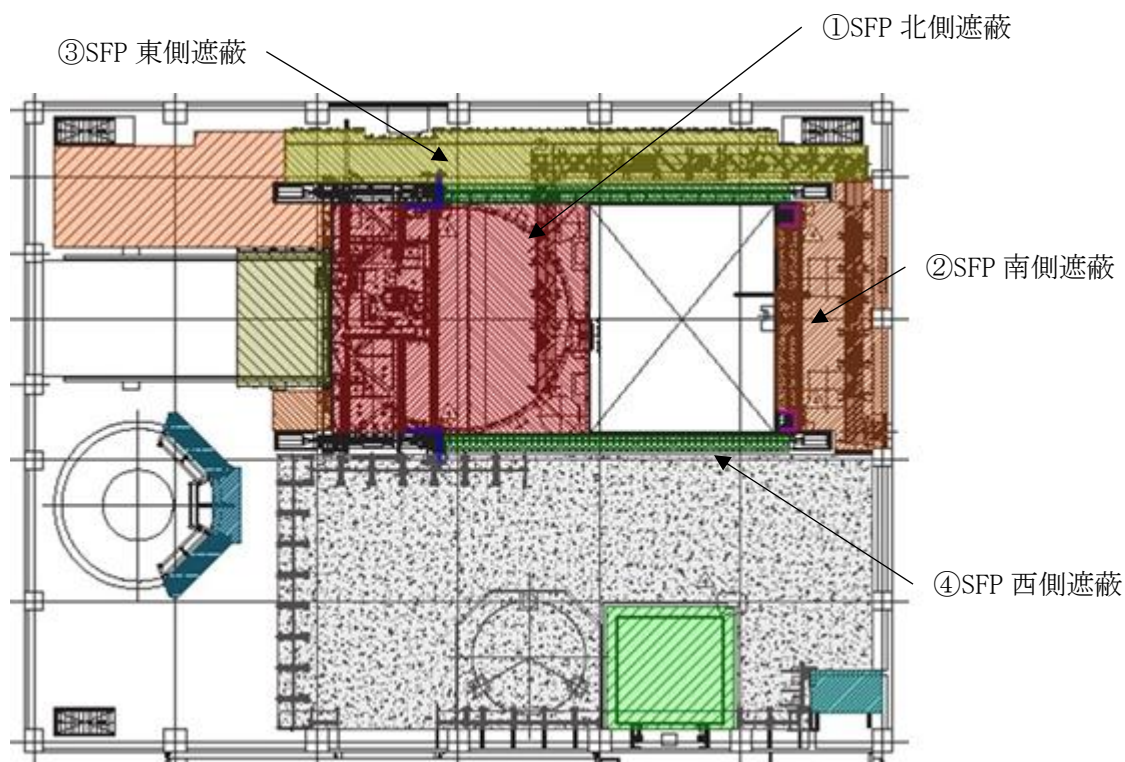


図 1-1 使用済燃料プール周りに設置する遮蔽体

## 2. 遮蔽体の耐震評価

### 2.1 評価方法

遮蔽体の耐震評価には、燃料取り出し用構台検討用モデルの地震応答解析結果のうち、原子炉建屋オペレーティングフロアの層せん断係数より保守的に設定した水平震度を用いる。解析に用いる地震動は、2波ある1/2Ss450のうち振幅の大きな検討用地震動①の1/2の地震動を用いるが、実施計画の審査期間中に適用地震動見直しが行われたことから、Ss600に対する地震応答解析結果との比較から耐震性を確認する。(別冊2-8 P104 参照) なお、1/2Ss450を適用した場合の算出応力は、Ss600での算出応力に包絡されている。

また、遮蔽体は原子炉建屋のオペレーティングフロア上に設置されるため、摩擦係数( $\mu=0.25$ )を考慮する。地震時水平方向荷重により支持部材に生じる応力を、JEAG4601-1987の支持構造物の評価基準値を用いて評価する。

### 2.1.1 SFP 北側遮蔽

SFP 北側遮蔽の地震時水平方向荷重が D/S プールカバー支持ビームを介して D/S プール南壁と取合うブラケットに負荷されるものとしてブラケットの強度評価を行う。評価対象部を図 2-1 に示す。

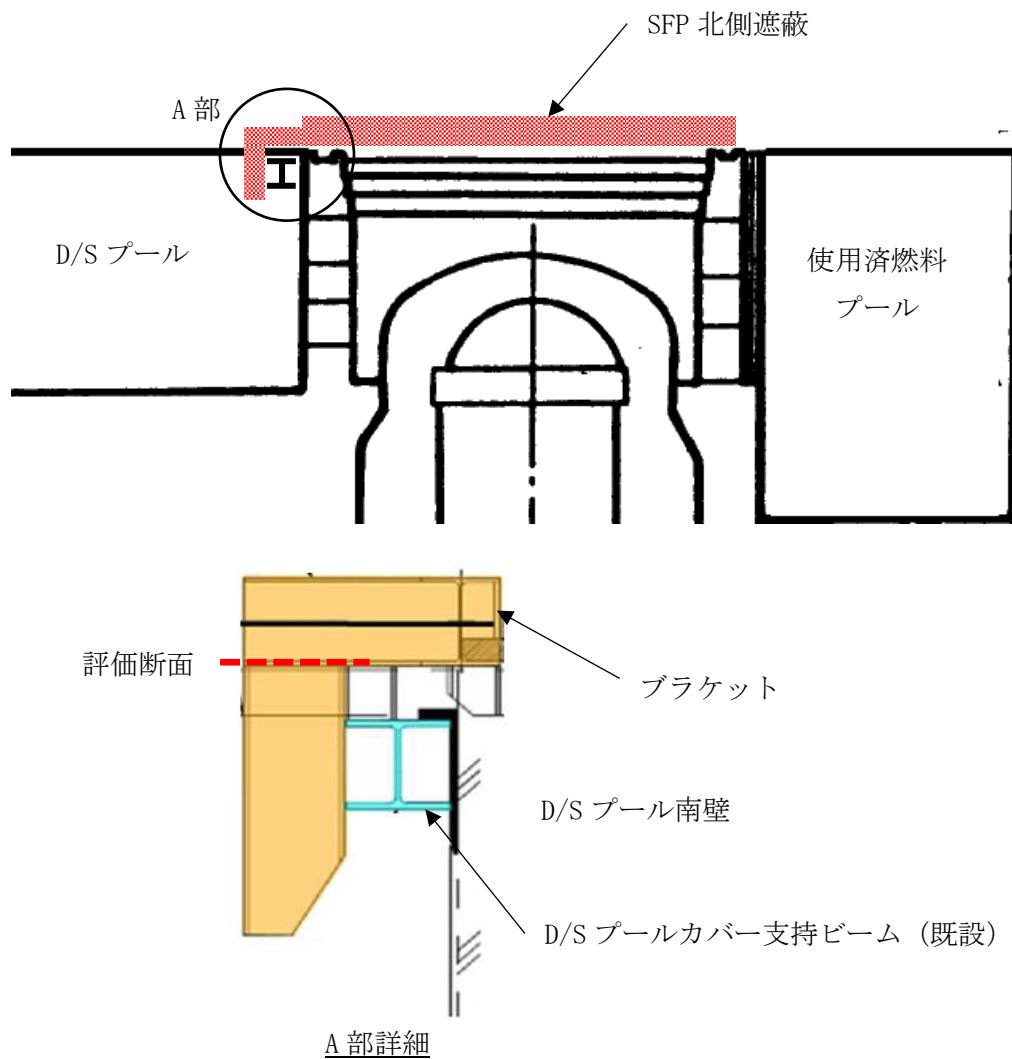


図 2-1 SFP 北側遮蔽 評価対象部

### 2.1.2 SFP 南側遮蔽

SFP 南側遮蔽の地震時水平荷重が、ジブクレーン及びチャンネル取扱いブームと取り合う荷重受け部材に負荷されるものとして荷重受け部材の強度評価を行う。また、SFP 南側遮蔽のうち、荷重受け部材より使用済燃料プール側に設置する遮蔽体の地震時水平荷重が、同遮蔽体の引っ掛け部材に負荷されるものとして引っ掛け部材の強度評価を行う。評価対象部を図 2-2 に示す。

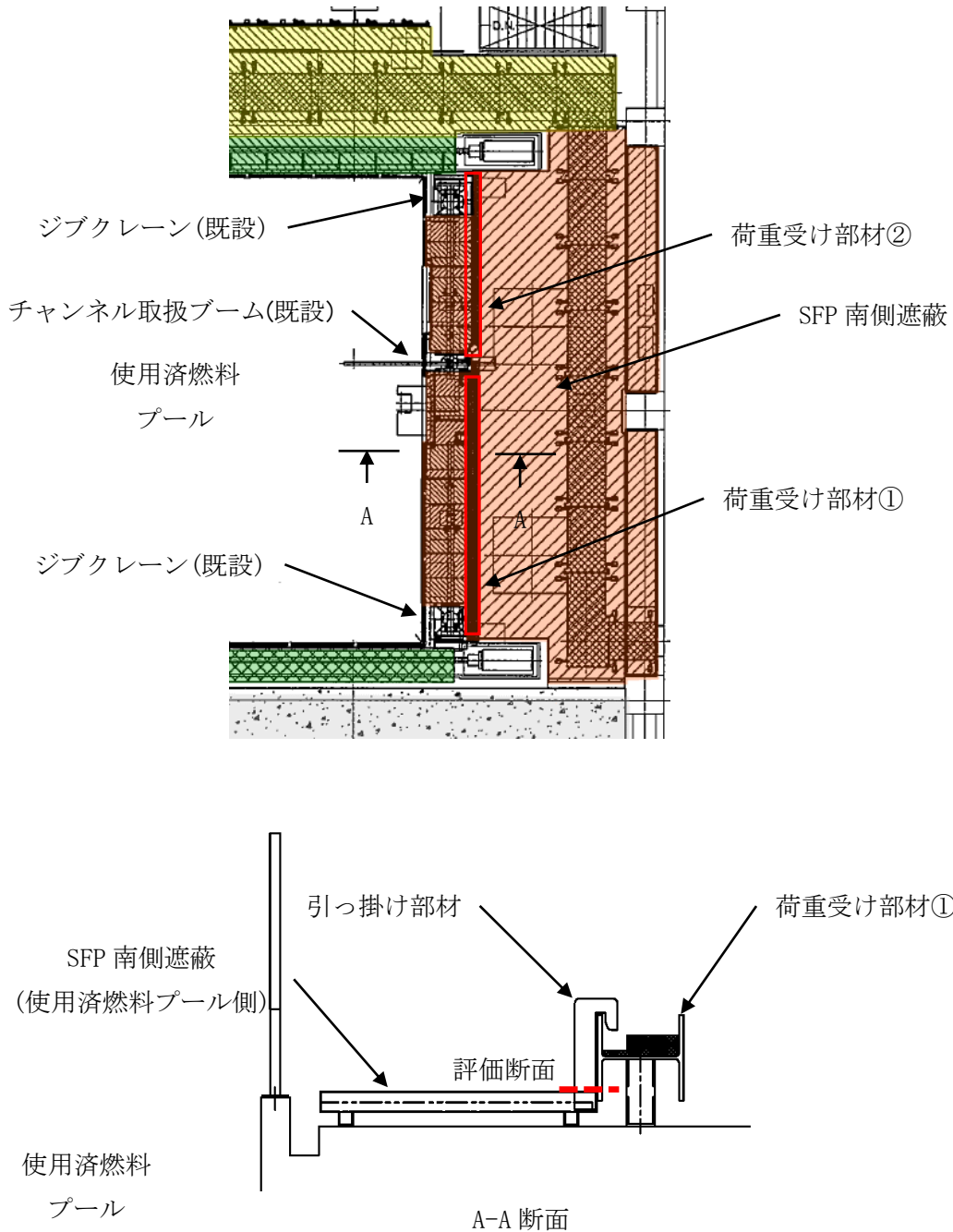


図 2-2 SFP 南側遮蔽体 評価対象部



### 2.1.3 SFP 東側遮蔽

SFP 東側遮蔽のうち、燃料取替機レールより使用済燃料プール側に設置する遮蔽体の地震時水平方向荷重が、同遮蔽体の引っ掛け部材及び燃料取替機レールよりプール外側に設置する遮蔽体の荷重受け部材に負荷されるものとして引っ掛け部材及び荷重受け部材の強度評価を行う。評価対象部を図 2-3 に示す。

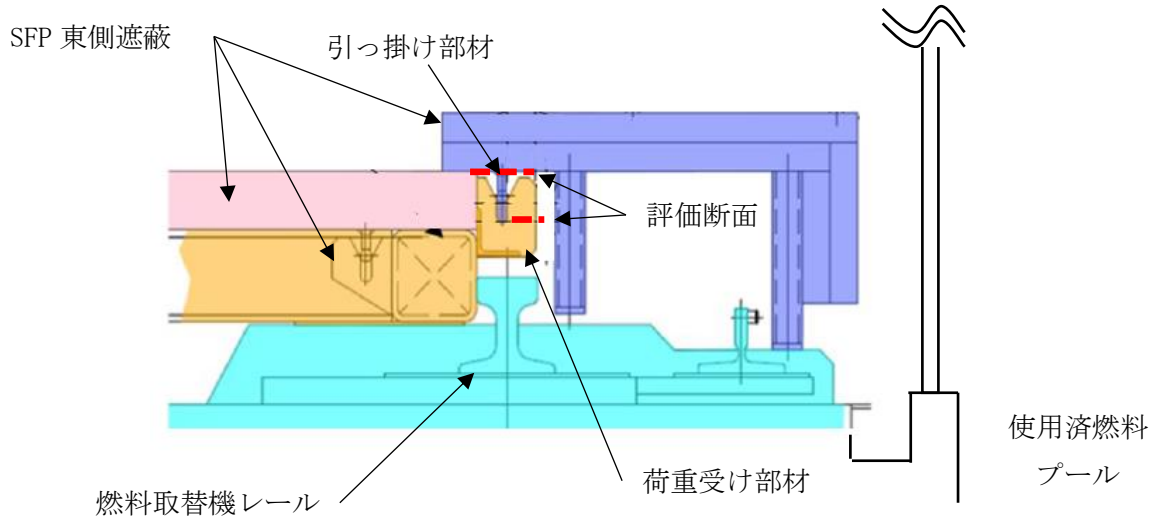


図 2-3 SFP 東側遮蔽体 評価対象部

### 2.1.4 SFP 西側遮蔽

SFP 西側遮蔽の地震時水平方向荷重が、燃料取替機レールと取合う荷重受け部材に負荷されるものとして、荷重受け部材の強度評価を行う。評価対象部を図 2-4 に示す。

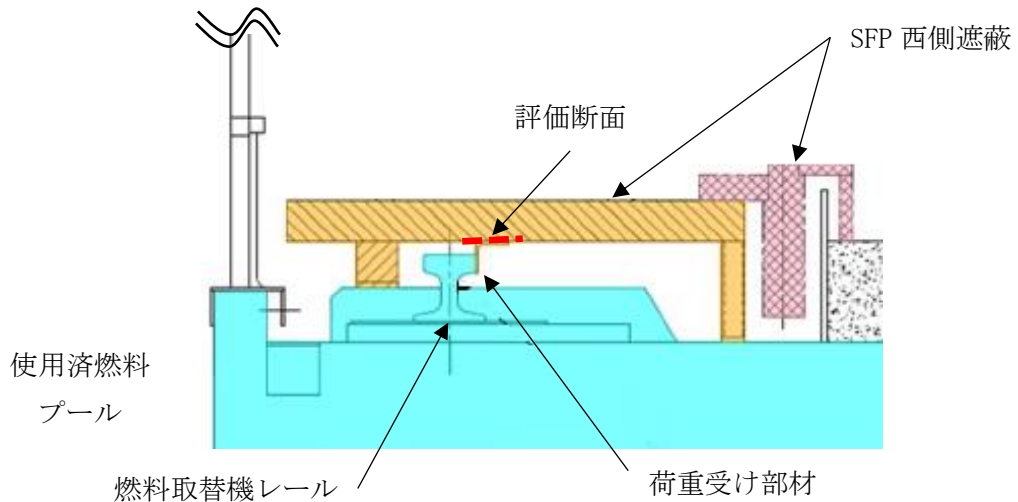


図 2-4 SFP 西側遮蔽 評価対象部

## 2.2 評価結果

強度評価の結果を表 2-1 に示す。使用済燃料プール周りに設置する遮蔽体について、地震時水平荷重に対して支持部材に生じる応力は許容応力を下回るため、遮蔽体が使用済燃料プールへ落下することはない。

表 2-1 遮蔽体支持部材の構造強度評価結果

部位		材質	許容応力 (MPa)		算出応力 Ss600 (MPa)	算出応力 1/2Ss450 (MPa)
SFP 北側遮蔽	ブラケット	SS400	曲げ	280	146	143
			せん断	161	46	46
			組合せ	280	167	164
SFP 南側遮蔽	荷重受け部材 ①	SS400	曲げ	280	244	240
			せん断	161	17	17
			組合せ	280	246	242
	荷重受け部材 ②	SS400	曲げ	280	270	265
			せん断	161	20	19
			組合せ	280	273	268
	引っ掛け部材	SS400	曲げ	280	52	51
			せん断	161	3	3
			組合せ	280	53	52
SFP 東側遮蔽	荷重受け部材	SS400	曲げ	280	23	23
			せん断	161	6	5
			組合せ	280	26	25
	引っ掛け部材	SS400	曲げ	323	201	186
			せん断	161	13	12
			組合せ	280	203	188
SFP 西側遮蔽	荷重受け部材	SS400	曲げ	323	57	56
			せん断	161	2	2
			組合せ	280	58	57

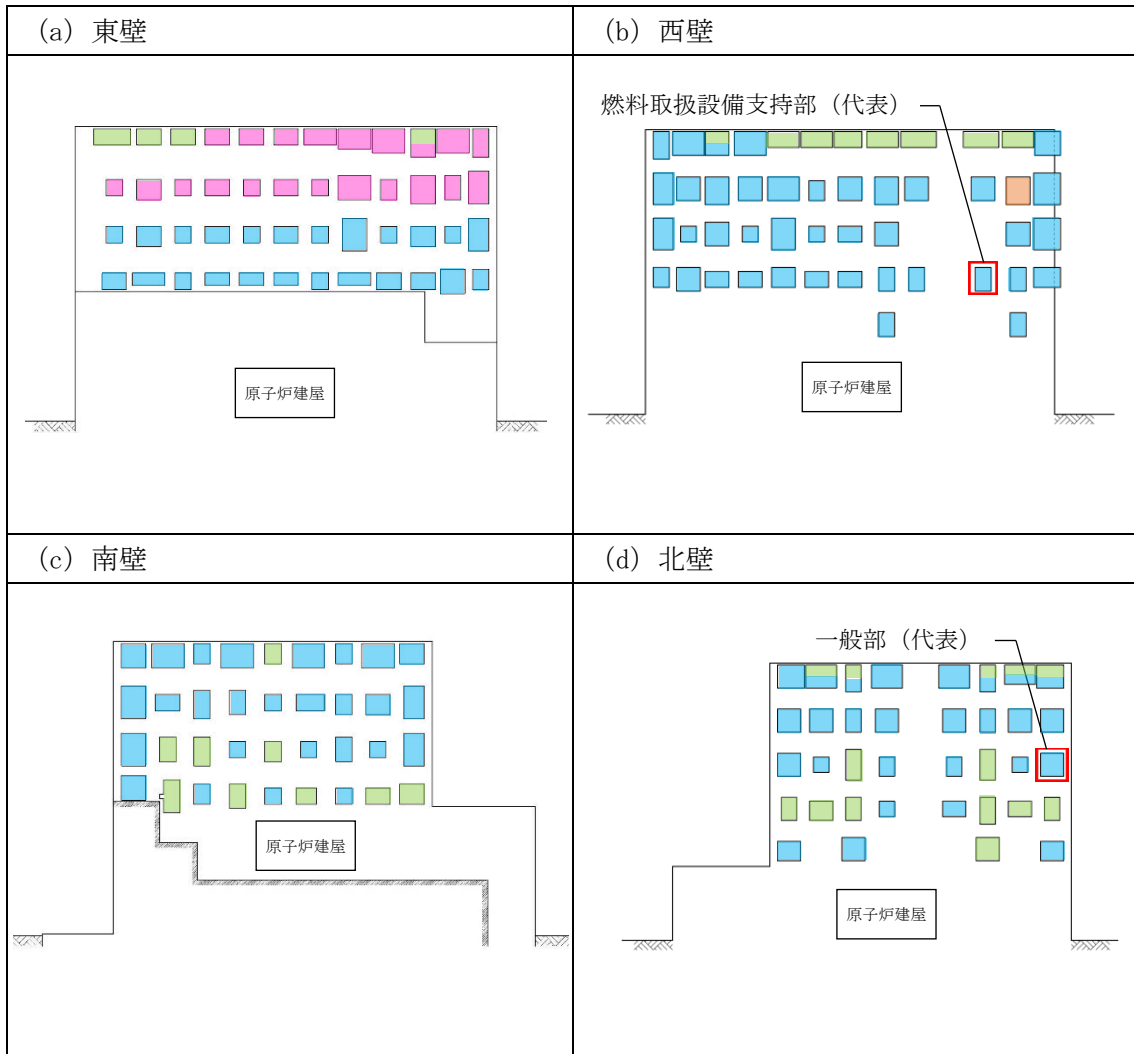
## 1号機大型カバーに係る確認事項

1号機大型カバーの工事に係る主要な確認項目を表－1に示す。

表－1 1号機大型カバーに係る確認項目

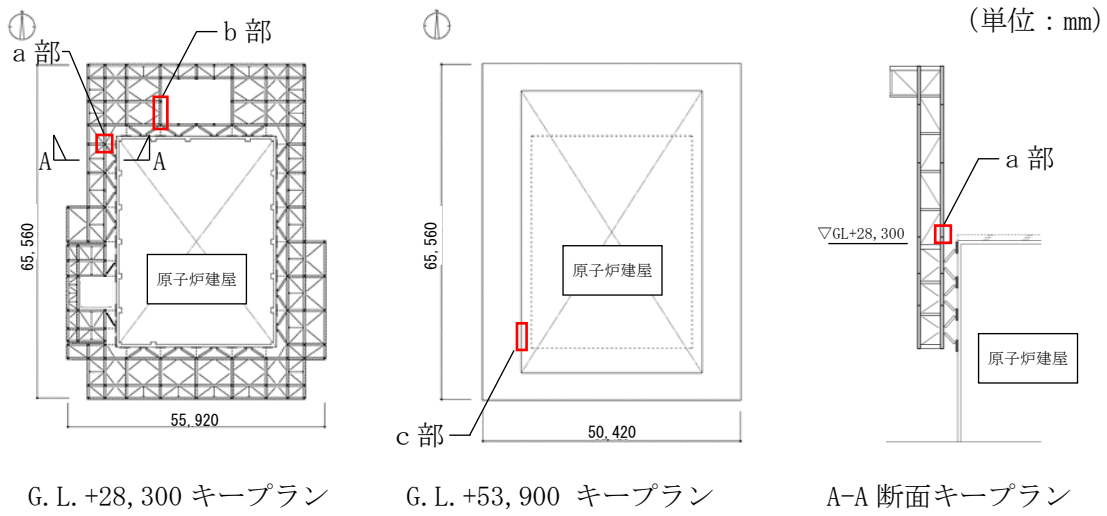
確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 および 耐震性	材料確認	鋼材の材質, 強度, 化学成分を確認する。	JIS G 3101, JIS G 3106, JIS G 3136, JIS G 3138, JIS G 3444, JIS G 3475, JIS G 4051, JIS B 1186 又は建築基準法第 37 条第二号に基づく国土交通大臣の認定に適合すること。
		トルシア型超高力ボルト (SHTB), トルシア型高力ボルト (HTB) 及び溶融亜鉛めっき高力ボルト (12G SHTB) の仕様を確認する。	建築基準法第 37 条第二号に基づく国土交通大臣の認定に適合すること。
		アンカーボルトの材質, 強度, 化学成分を確認する。	JIS G 3138 に適合すること。
		外装材の仕様を確認する。	実施計画に記載されている材料諸元に適合することを, 検査証明書, 出荷証明書又はメーカー技術資料により確認する。
	据付確認	アンカーボルトの埋め込み長さを確認する。	アンカーボルトの有効埋め込み長さが図－1の通りであり, かつボルトの余長はナット面から突き出た長さが3山以上であること。
		接合部の施工状況を確認する。	高力ボルトの本数・種類が図－2の通りであること。
		外装材の施工状況を確認する。	外装材の範囲が図－3の通りであること。

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 および 耐震性	機能検査 (外観検査)	大型カバーの外観を確認する。	機能に影響を及ぼす有意な欠陥がないこと。



- 有効埋め込み長さ：280mm 以上
- 有効埋め込み長さ：345mm 以上
- 有効埋め込み長さ：375mm 以上
- 有効埋め込み長さ：420mm 以上

図-1 アンカーボルト詳細



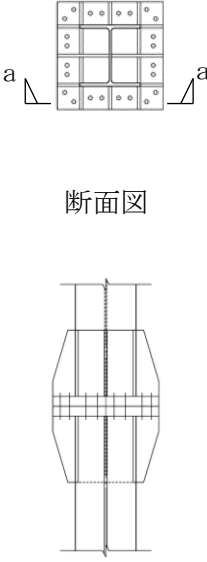

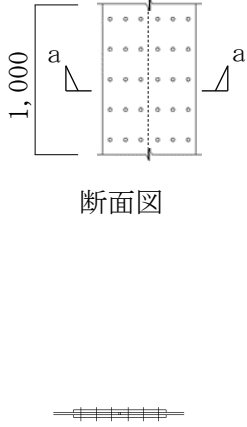
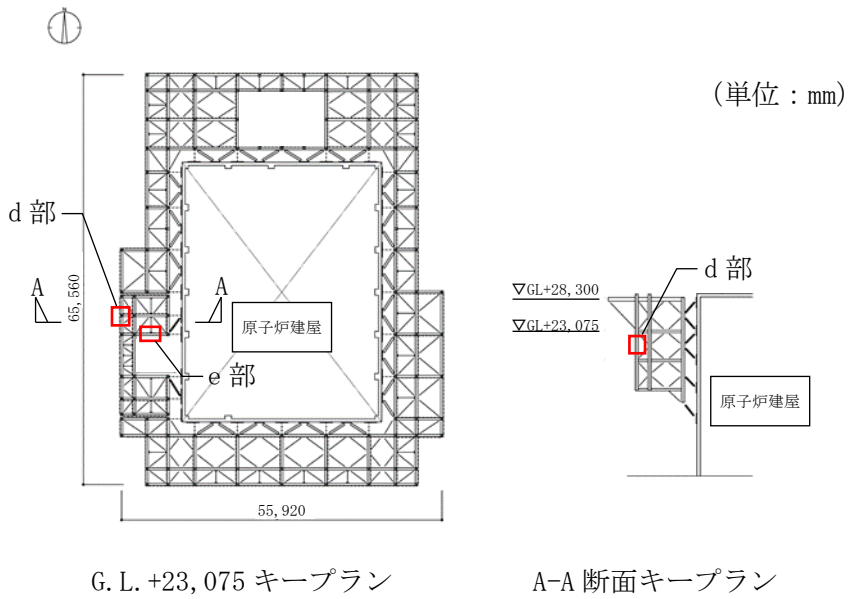
(a) 柱 材	(b) 梁 材	(c) 鋼 板
 <p>断面図</p> <p>a-a 矢視図</p> <div data-bbox="263 1668 566 1780" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ボルト種類 : SHTB M24 本 数 : 24 本</p> </div>	 <p>断面図</p> <p>a-a 矢視図</p> <div data-bbox="638 1668 941 1780" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ボルト種類 : SHTB M24 本 数 : 18 本×2</p> </div>	 <p>断面図</p> <p>a-a 矢視図</p> <div data-bbox="997 1668 1348 1780" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ボルト種類 : HTB M22 本 数 : 15 本×2 @1,000mm</p> </div>

図-2 (1) 一般部接合部詳細



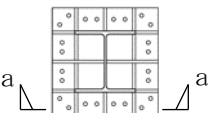
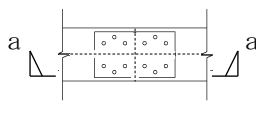
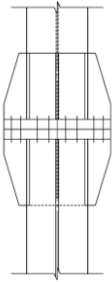
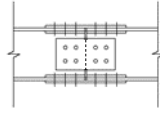
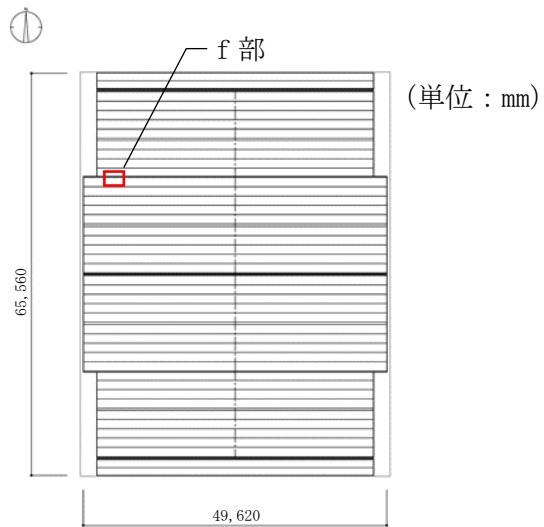
(d) 柱 材	(e) 梁 材
 <p>断面図</p>	 <p>断面図</p>
 <p>a-a 矢視図</p>	 <p>a-a 矢視図</p>
<p>ボルト種類 : SHTB M24 本 数 : 24 本</p>	<p>ボルト種類 : SHTB M24 本 数 : 16 本×2</p>

図-2 (2) 燃料取扱設備支持部接合部詳細



屋根伏図

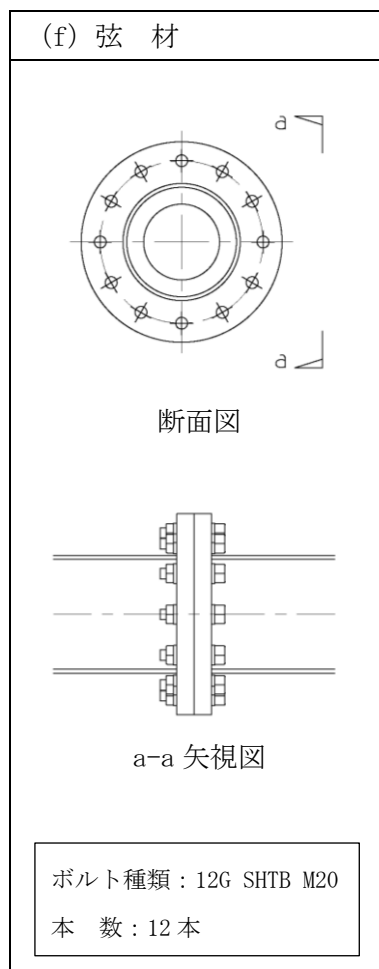
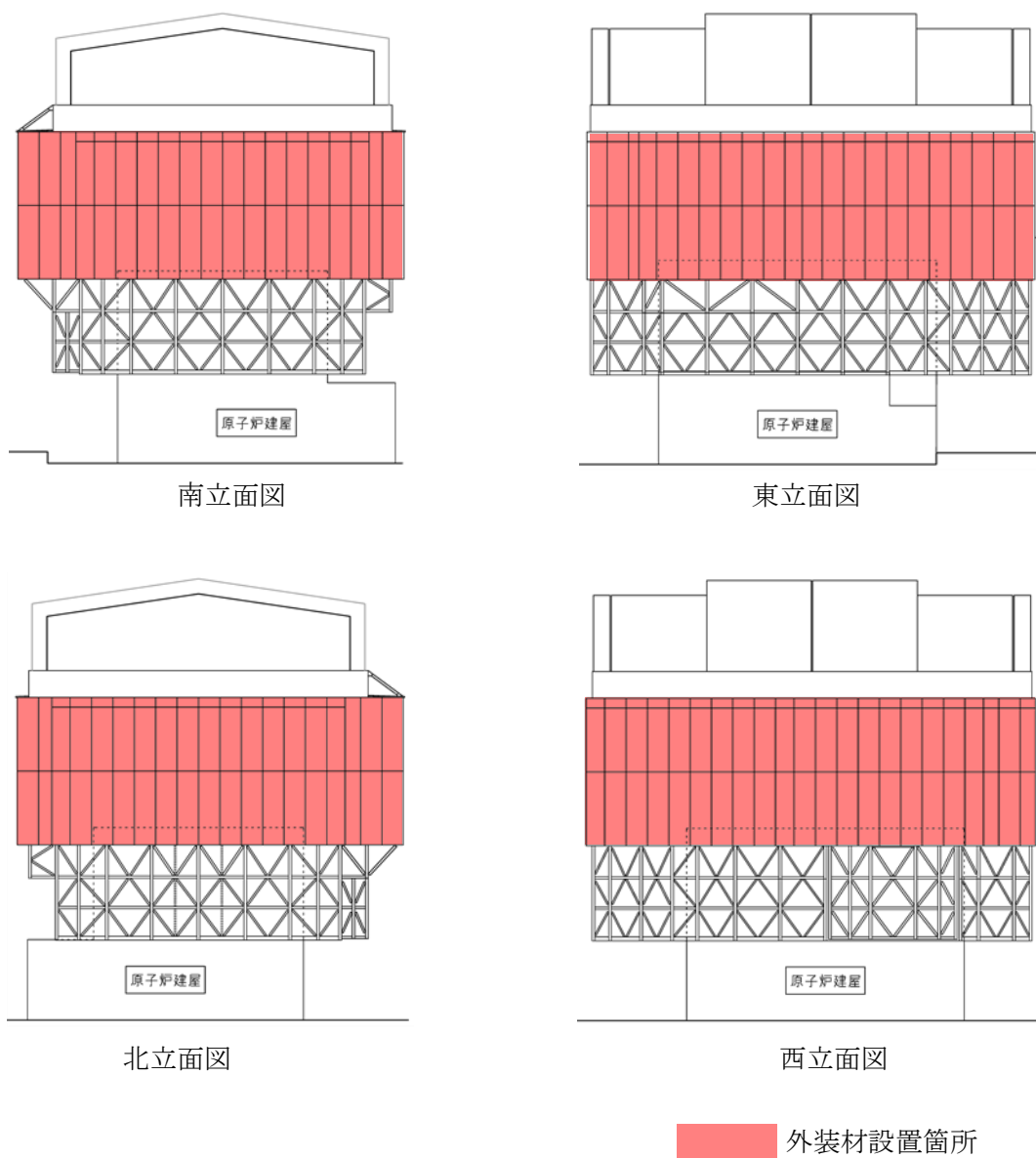


図-2 (3) 屋根部接合部詳細



図一 3 外装材設置範囲図



## 水平2方向及び鉛直方向地震力の同時入力時に用いる模擬地震波について

## 1. はじめに

水平2方向及び鉛直方向地震力の同時入力による検討を行う際に、Ss900-1を用いている。

この際、水平1方向にはSs900-1を用いるが、その直交方向にはSs900-1とは位相の異なる模擬地震波を用いる。

水平2方向及び鉛直方向地震力の同時入力による検討において、全く同じ地震動が同時に水平2方向に入力されることは現実的に考えにくいことから、Ss900-1を作成した方法と同一の方法で、目標とする応答スペクトルに適合する模擬地震波を利用する。

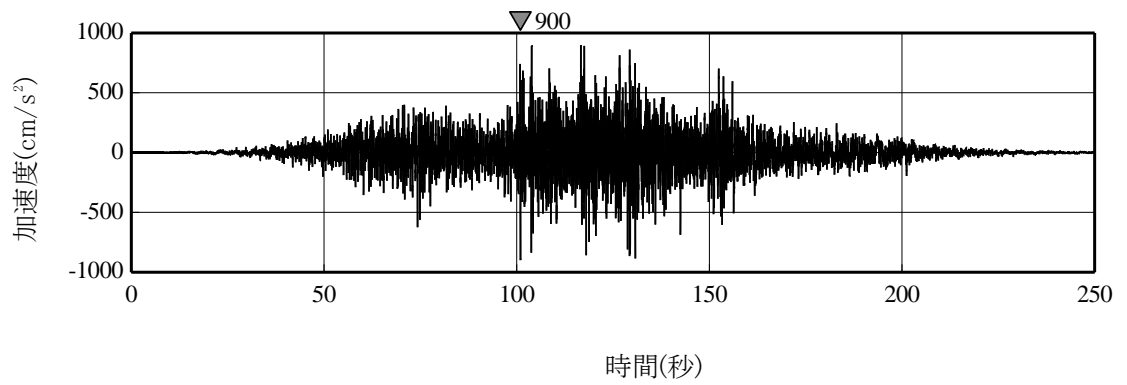
## 2. 模擬地震波の作成方針

応答スペクトル法に基づく手法によるSs900-1については、水平方向の地震動に方向性がないことから、水平2方向及び鉛直方向地震力の同時入力による検討を行う場合、水平2方向のうち1方向について模擬地震波を作成し入力する方法が考えられる。

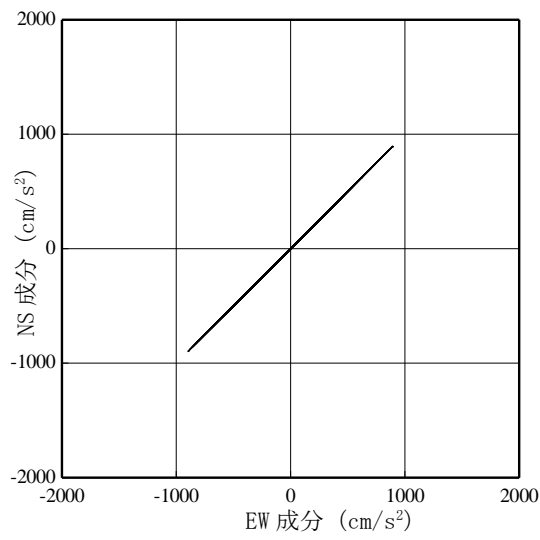
Ss900-1の位相は、2011年東北地方太平洋沖地震において福島第一原子力発電所内の地震観測記録のNS方向の位相を基に模擬地震波を作成している。そこで組み合わせる地震動は、同一の方法でNS方向と直交するEW方向の位相を基に作成した模擬地震波とする。

## 2.1 敷地で得られた観測記録による確認

自由地盤観測点における、2011年東北地方太平洋沖地震（以下、3.11地震）、2021年2月13日の福島県沖の地震（以下、2.13地震）及び2022年3月16日の福島県沖の地震（以下、3.16地震）の観測記録から、当該サイトにおいて、水平2方向の地震波で位相差が生じる傾向を確認した。確認の方法として、Ss900-1を同時に水平2方向に入力したオービット（図2.1-1）と、観測記録の水平2方向のオービット（図2.1-2、図2.1-3、図2.1-4）との比較を行った。図2.2-1から、全く同じ地震動を同時に水平2方向に入力した場合、オービットは現実的に考えにくい45°方向に直線的な軌跡を示す。一方、図2.1-2、図2.1-3及び図2.1-4より観測記録ではオービットは位相差によって生じるランダムな軌跡を示すことを確認した。

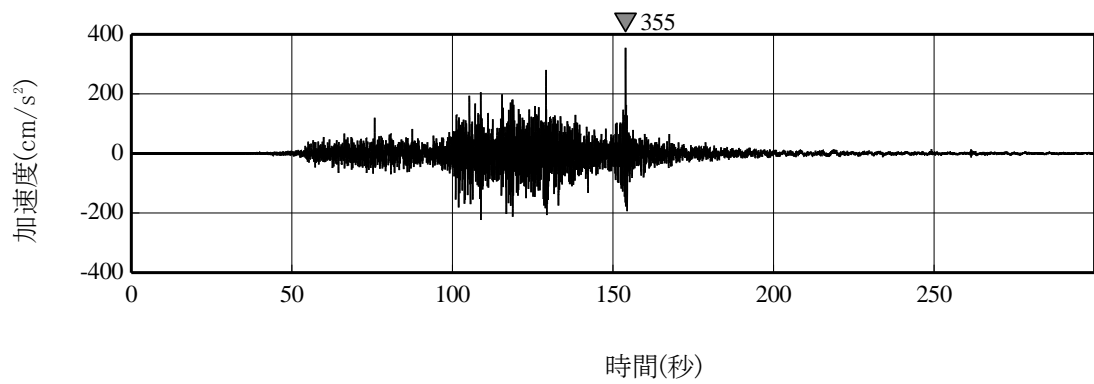
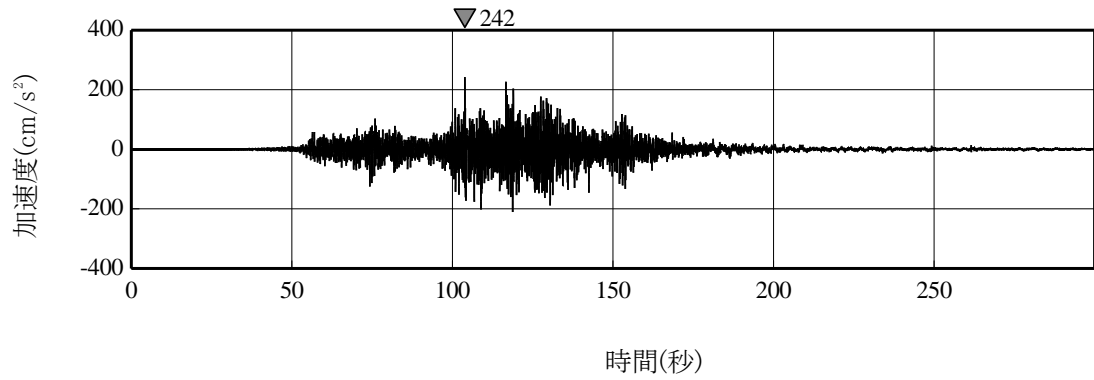


(a) 加速度時刻歴波形

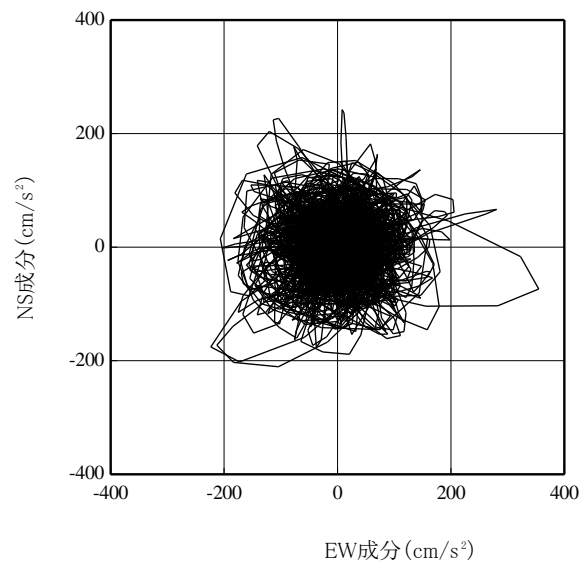


(b) 水平2方向の加速度成分のオービット

図 2.1-1 Ss900-1

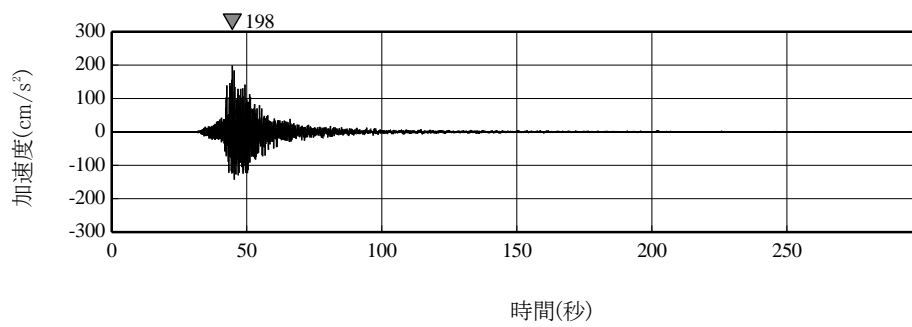
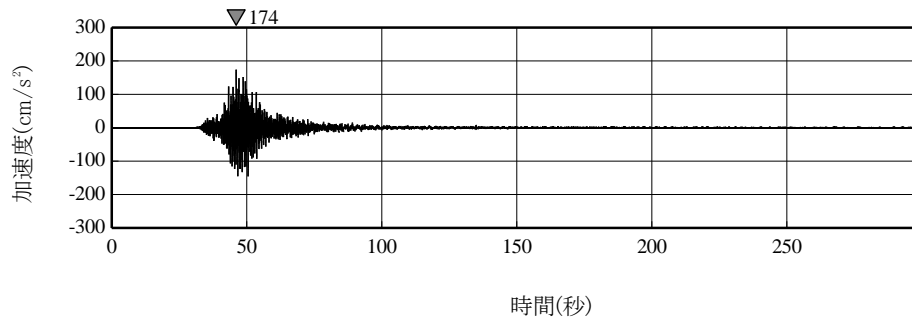


(a) 加速度時刻歴波形

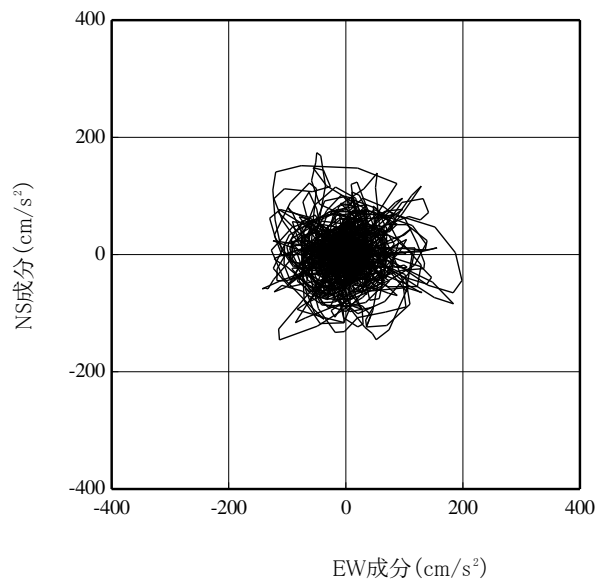


(b) 水平2方向の加速度成分のオービット

図 2.1-2 3.11 地震観測記録 (自由地盤観測点)

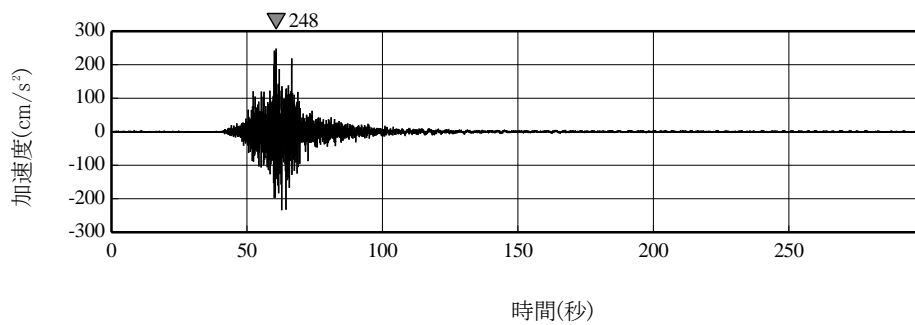


(a) 加速度時刻歴波形

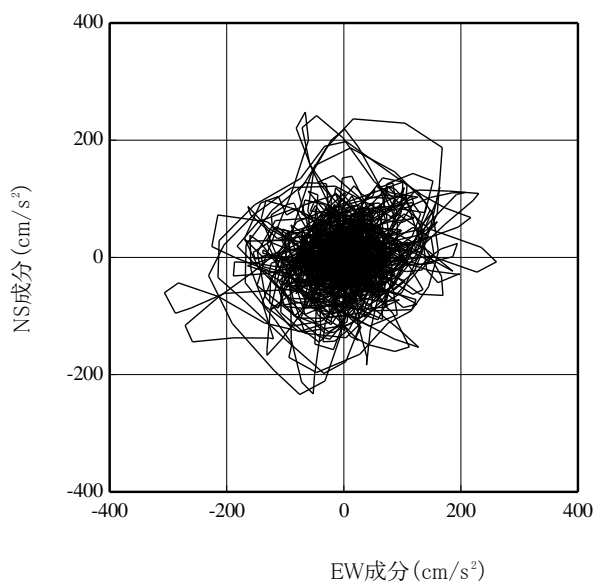


(b) 水平 2 方向の加速度成分のオービット

図 2.1-3 2.13 地震観測記録 (自由地盤観測点)



(a) 加速度時刻歴波形

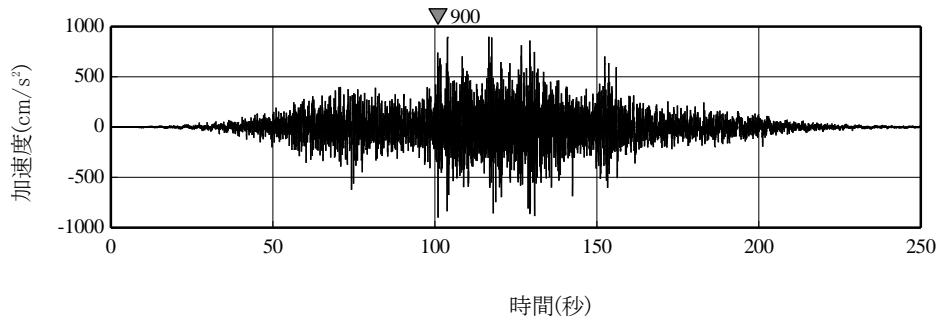


(b) 水平2方向の加速度成分のオービット

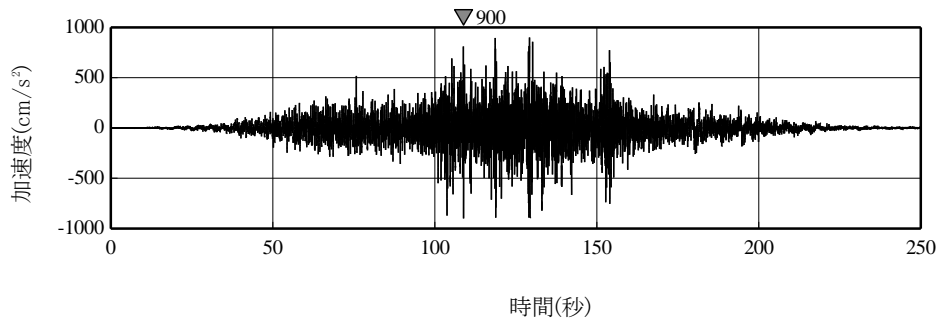
図 2.1-4 3.16 の福島県沖の地震観測記録 (自由地盤観測点)

### 3. 位相特性の異なる模擬地震波の作成結果

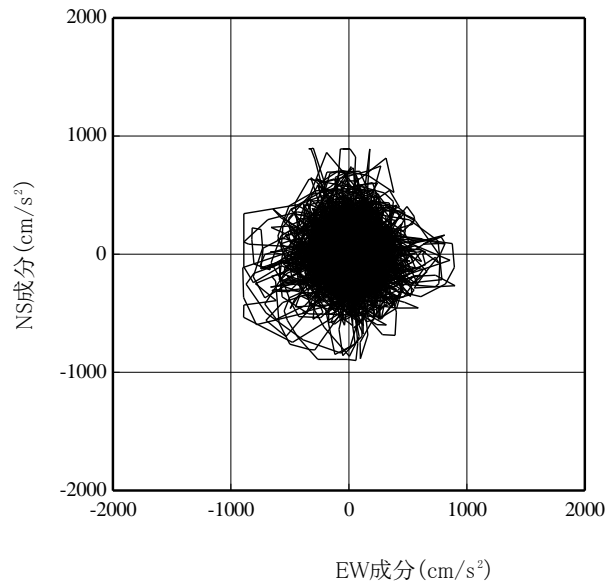
Ss900-1 及び Ss900-1 と組み合わせる模擬地震波の加速度時刻歴波形及びそれぞれの地震波を2方向入力した場合のオービット及び応答スペクトルを図 2.1-5 に示す。



(a) Ss900-1 の加速度時刻歴波形

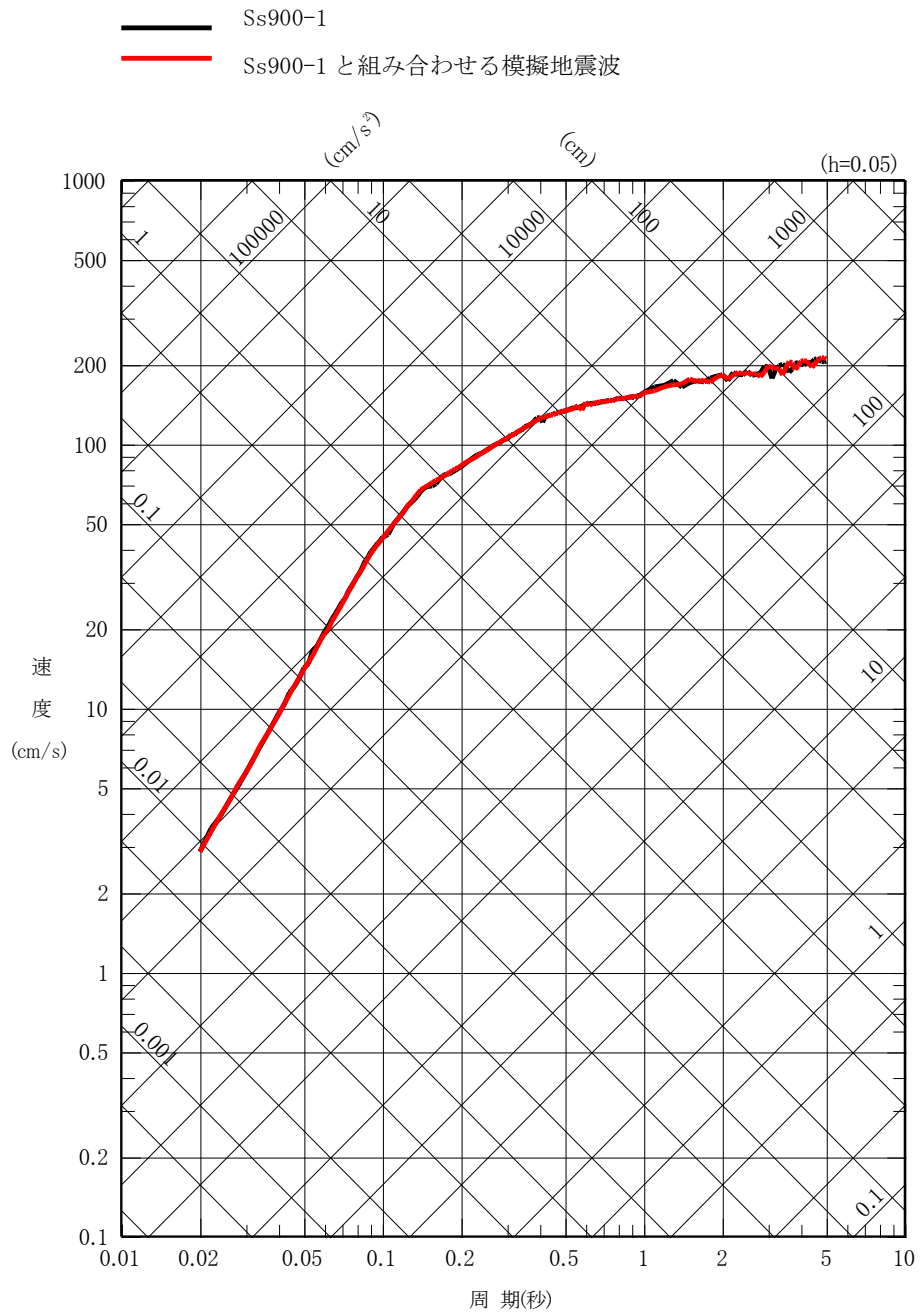


(b) Ss900-1 と組み合わせる模擬地震波の加速度時刻歴波形



(c) 水平2方向の加速度成分のオービット

図 2.1-5 Ss900-1 (1/2)



(d) 水平 2 方向の地震動の応答スペクトル  
 図 2.1-5 Ss900-1 (2/2)

## 1号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する補足説明

## 1. 1号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する補足説明

## 1.1 はじめに

本書は、II.2.11 使用済燃料プールからの燃料取り出し設備のうち、1号機燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性について補足するものである。

## 1.2 補足説明

## 1.2.1 Ss900 解析モデルの補足説明

建屋質点系モデルの脚部には、Ss900 地震により算定した等価地盤物性に基づくスウェイロッキングばねおよび側面地盤 Novak ばねを設けている。質点系モデルの軸方向は弾性とし、曲げとせん断に「JEAG4601-1991」に示されている非線形特性を考慮する。

3方向同時入力を実施していることから、誘発上下動は本モデルで考慮されている。

大型カバーの地震応答解析モデルにおけるカバー架構と原子炉建屋の接合部については、アンカーボルトで接続していることを考慮してモデル化している。

大型カバーと原子炉建屋を接続するアンカーボルトは、発生するせん断力が大きいことから、せん断力が生じる水平方向及び鉛直方向はバイリニアのばね要素として評価する。一方で、面外方向は発生する応力が小さいことから、剛要素として評価する。

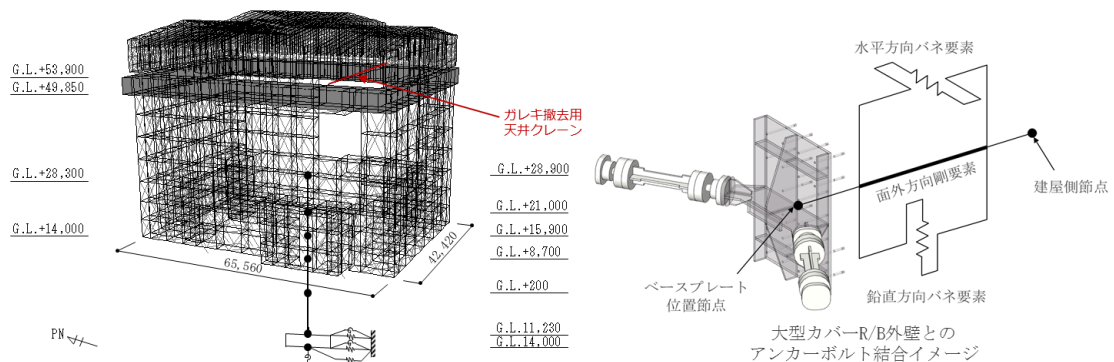


図 1.2.1-1 解析モデル



### 1.2.2 接合部の設計方法に関する補足説明

大型カバーのカバー架構の接合部については、柱・梁及びブレース等 共通で、降伏強度が十分確保されるよう以下の設計方法としている。

- ・ ボルト本数

ボルト欠損を考慮しない母材全断面の降伏強度が確保されるよう、ボルトの短期許容で必要本数を算出している。

- ・ ガセットほか

母材全断面の降伏強度が確保されるよう、保有耐力接合条件（安全率  $\alpha = 1.2$ ）を満足していることを確認している。

### 1.2.3 Ss900 接合部のモデル化に関する補足説明

本形式のアンカーボルトは、アンカーボルトに大きなせん断力が作用するため、せん断終局強度の75%に達すると固定度が低下するバイリニア型ばねで建屋と結合するモデルとする。なお、初期剛性はアンカーボルトの芯材のみを考慮する。

アンカーボルトのバイリニア型ばねのモデルと、参考までに今回行ったせん断実験の荷重-変位関係も併せて示す。

引張力、せん断力の組合せ応力に対して、ミーゼスの降伏条件から

$$\sigma^2 + 3\tau^2 \leq \sigma_y^2$$

$$\Rightarrow \left(\frac{A\sigma}{A\sigma_y}\right)^2 + \left(\frac{A\tau}{A\sigma_y/\sqrt{3}}\right)^2 \leq 1$$

$$\therefore \left(\frac{P}{P_u}\right)^2 + \left(\frac{Q}{Q_u}\right)^2 \leq 1$$

A : アンカーボルトの断面積 (mm<sup>2</sup>)

P<sub>u</sub> : アンカーボルトの終局引張耐力 (kN)

Q<sub>u</sub> : アンカーボルトの終局せん断耐力 (kN)

P : アンカーボルトの引張力 (kN)

Q : アンカーボルトのせん断力 (kN)

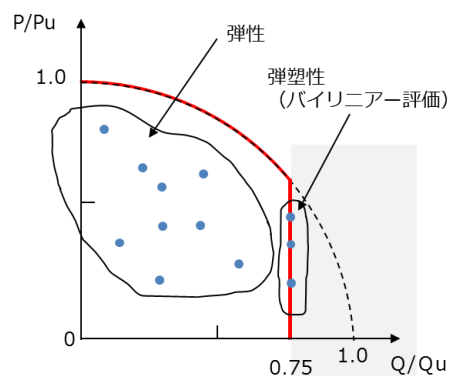


図 1.2.3-1 バイリニア評価の概要

せん断終局強度の75%を制限値とした評価としていることから、

$$\frac{Q}{Q_u} \leq 0.75$$

バイリニア評価した検定値は、上図の $\frac{Q}{Q_u}=0.75$ の直線上にあり、弾性範囲内の検定値は全て上図の赤線内側の範囲に収まっている。

設計強度に対してひび割れの有無に関わらず、20%以上の裕度（23%～53%）を実験から確認でき、これは過去のセメフォースアンカーのせん断試験結果と同様である。

せん断実験結果（荷重変位関係）より設計強度の75%程度において、せん断剛性がやや低下している。

従って、設計強度の75%程度でアンカーに作用する応力は頭打ちとなり、応力再配分が行われ、地震による慣性力と釣り合うと考え、せん断力の制限値を75%とした。

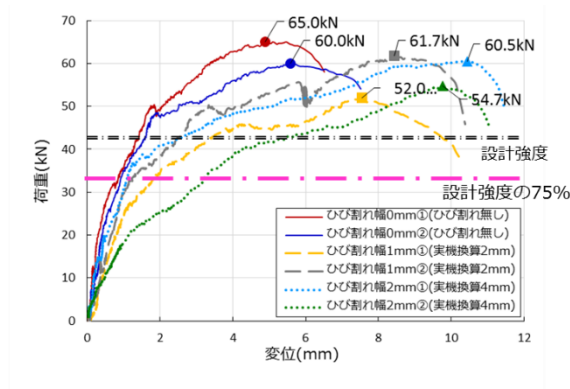


図 1.2.3-2 せん断実験結果（荷重変位関係）

アンカーボルトのせん断終局強度の75%を制限値とせずに、評価を実施した結果を下表に示す。

実験によって得られた剛性により評価した結果、最大検定比は最大でも1.17であり、先に実施した実験における裕度（23%～53%）に収まることから制限値を考慮しない場合であってもアンカーは損傷に至らない。

表 1.2.3-1 せん断強度の制限による評価結果

		せん断耐力に対する検定比		
		0.75以上 1.0未満のBPL箇所数	1.0以上のBPL 箇所数	最大 検定比
せん断終局強度 を制限する	ガレキ撤去時	なし	なし	0.75
	燃料取り出し時	なし	なし	0.75
せん断終局強度 を制限しない	ガレキ撤去時	54箇所※	4箇所※	1.08
	燃料取り出し時	58箇所※	7箇所※	1.17

※ベースプレート全168箇所に対する箇所数

アンカー部の剛性について、アンカー実験の剛性値を初期剛性としたケースについて、パラスタを実施した。

最大層間変形角は1/30を超えないことを表 1.2.3-2、表 1.2.3-3 により確認するとともに、基本ケースと大きな違いなく、大型カバー全体の応答への影響がないことを確認した。

表 1.2.3-2 最大応答層間変形角（ガレキ撤去時）

方向	地震条件	検討箇所	最大層間変形角	許容限界	判定
南北方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9 (m) ~+28.3 (m) h=25.6 (m)	1/83	1/30	0. K.
東西方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9 (m) ~+28.3 (m) h=25.6 (m)	1/82	1/30	0. K.

表 1.2.3-3 最大応答層間変形角（燃料取り出し時時）

方向	地震条件	検討箇所	最大層間変形角	許容限界	判定
南北方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9 (m) ~+28.3 (m) h=25.6 (m)	1/83	1/30	0. K.
東西方向	Ss900 (+NS+EW+UD)	G. L. +53.9 (m) ~+28.3 (m) h=25.6 (m)	1/82	1/30	0. K.

アンカーボルト部における検定比は下表に示す通りとなり、大型カバーの構造成立性に影響を与えるものではない。

表 1.2.3-4 アンカーボルト検討結果（一般部，ガレキ撤去時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカーボルト (20)	Ss900	+NS+EW+UD	2726	2895	5620	3860	0.82	0.K.

表 1.2.3-5 アンカーボルト検討結果（一般部，燃料取り出し時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカーボルト (36)	Ss900	+NS+EW+UD	3456	5211	7128	6948	0.82	0.K.

表 1.2.3-6 アンカーボルト検討結果（燃料取扱設備支持部，ガレキ撤去時）

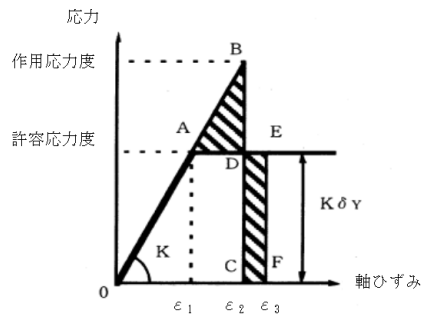
部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカーボルト (16)	Ss900	+NS+EW+UD	1427	1837	4448	3088	0.60	0.K.

表 1.2.3-7 アンカーボルト検討結果（燃料取扱設備支持部，燃料取り出し時）

部位 (アンカー本数)	地震条件		最大反力		終局強度		耐力比	判定
			引張力 (kN)	せん断力 (kN)	引張 (kN)	せん断 (kN)		
アンカーボルト (32)	Ss900	+NS+EW+UD	5988	4094	8576	6176	0.94	0.K.

### 1.2.4 エネルギー一定則に関する補足説明

一部の部材の弾性応答値が弾性限界強度をわずかに上回った場合、周辺の弾性応答部材への応力再配分が期待できるため、エネルギー一定則の考え方に基づき相当する塑性率を算定する。



エネルギー一定則を利用して、塑性率を  $\varepsilon_3/\varepsilon_1$  (エネルギー一定則を利用した軸ひずみ/許容応力度における軸ひずみ) により算出し、許容値以下となることを確認する。

図 1.2.4-1 部材の応力-ひずみ関係

柱及び梁の弾性部材のうち、検定比が1を超える部材は図に示すとおり、全体の1%程度とごくわずかである。このため、カバー全体の变形に影響を与えるほど柱、梁は塑性化しておらず、カバーの層間变形角に影響を与えるものではない。

また、塑性化を許容しているブレース材のうち、塑性率が5を超える部材は図に示すとおり、全体の4%程度である。このため、カバー全体の变形に影響を与えるほど塑性化していない。

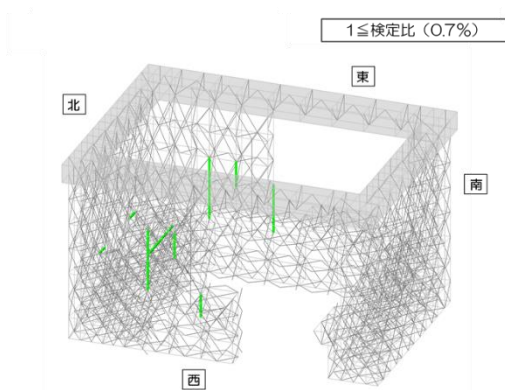


図 1.2.4-2

柱梁部材検定比1を超える割合図

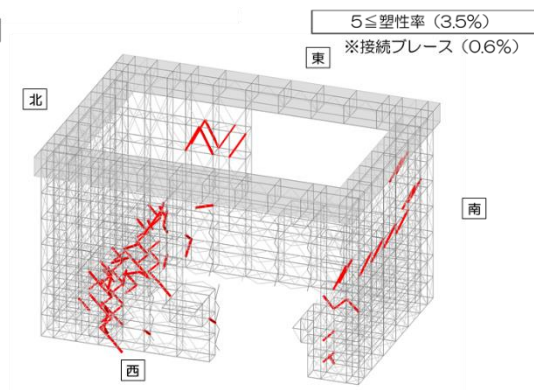


図 1.2.4-3

ブレース材塑性率5を超える割合図

### 1.2.5 破断寿命評価に関する補足説明

対象部材に対して、応答解析より求まる最大等価軸ひずみ（設定歪振幅）を算定する。

対象部材の最大等価軸ひずみに対応する鋼材の破断寿命を中込ほか<sup>1</sup>より算出し、これを評価基準とする。

対象部材の軸ひずみ時刻歴波形より、降伏ひずみ及び座屈ひずみを超え、勾配の正負が切り替わる全点（波形のピーク）を数え上げ、それを繰り返し回数とする。

ガレキ撤去時の破断寿命に対する繰り返し回数の算定を示す。

表 1.2.5-1 破断寿命に対する繰り返し回数の算定（ガレキ撤去時）

部位 (使用部材)	部材	最大等価 軸ひずみ $\epsilon_{\text{max}} (\times 10^{-3})$	応答による 繰返し回数 <sup>※1</sup> $n_i$	評価基準 <sup>※2</sup> (破断寿命) $N_p$	$\frac{n_i}{N_p}$	判定
接続部ブレース 十字PL-210x28 (SN490B)	鉛直ブ レース	1.49	197	544	0.37	OK

※1: 対象部材の軸ひずみ時刻歴波形をカウントする。

※2: 最大等価軸ひずみ（設定ひずみ振幅）に対応する鋼材の破断寿命を引用文献より算定する（参考表）。破断寿命は、参考表 の設定ひずみより求める。

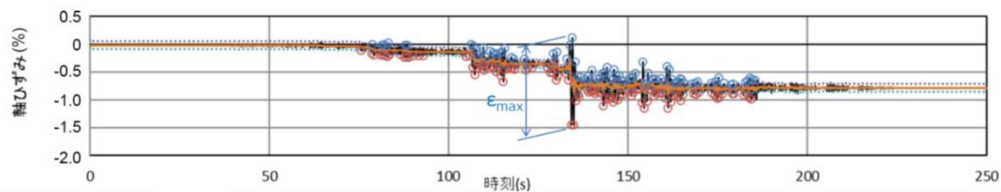


図 1.2.5-1 軸ひずみ時刻歴波形

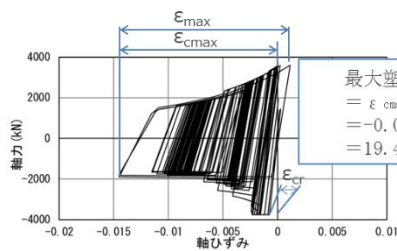


表 1.2.5-2 設定ひずみ振幅と疲労寿命

設定歪振幅	亀裂発生寿命	破断寿命
10.00%	3	$1.8 \times 10$
7.00%	$1.0 \times 10$	$3.9 \times 10$
5.00%	$2.6 \times 10$	$6.7 \times 10$
3.50%	$3.5 \times 10$	$1.02 \times 10^2$
2.00%	$1.70 \times 10^2$	$2.99 \times 10^2$
1.00%	$4.40 \times 10^2$	$9.66 \times 10^2$
0.90%	$8.00 \times 10^2$	$1.29 \times 10^3$
0.70%	$1.45 \times 10^3$	$2.76 \times 10^3$

図 1.2.5-2 軸ひずみ-軸力時刻歴

<sup>1</sup> [中込他, 繰返し力を受ける SM490 鋼の疲労性に関する研究, 1995 年 3 月]

### 1.2.6 屋根の補足説明

大型カバーの屋根は可動式とし、通常時は動かないように固定ピンで固定する。屋根を開閉する際は、固定ピンを外し南北方向に動かす。この際、逸走防止受けが落下防止材として働くことにより屋根の落下を防止する。

移動時など、逸走防止と固結（固定ピンが挿入されていない）されていなかった場合に、逸走防止受け自体が落下防止材として働くようにする。

片側の逸走防止受け柱脚（片側8箇所）に作用するせん断力は、柱脚アンカーボルトのせん断耐力以下となっている。

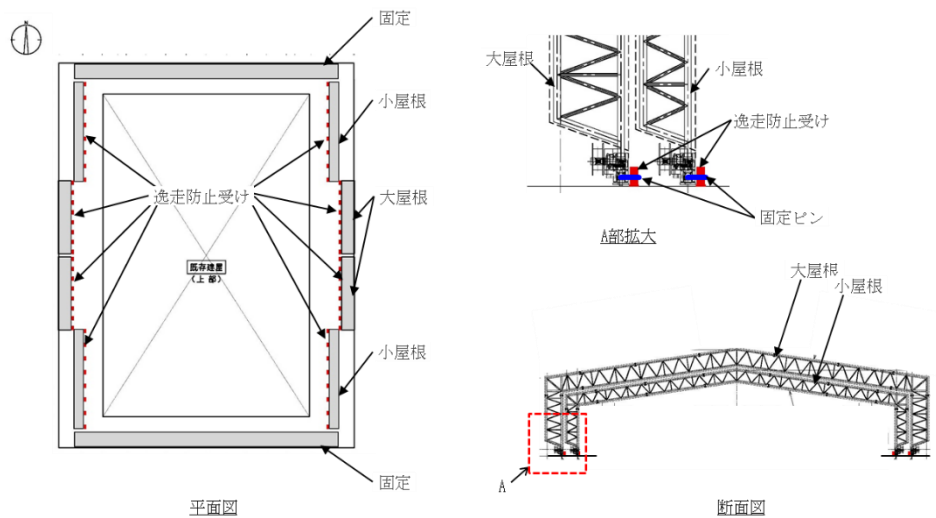


図 1.2.6-1 屋根部の逸走防止受けの概要

せん断力Q (kN)	せん断耐力Qu (kN)	検定比	判定
675	2710	0.25	0. K.

$$Q = W \cdot K_H / 8$$

$$Q_u = n \cdot F_{qu}$$

- Q : 逸走防止受け1箇所あたりに作用するせん断力 (kN)
- Qu : 柱脚アンカーボルトのせん断耐力 (kN)
- W : 大屋根の全重量 (900kN)
- K<sub>H</sub> : EW方向水平震度  
(屋根頂部加速度より安全側に6Gと設定)
- n : ボルトの本数 (10本)
- F<sub>qu</sub> : ボルトの最大せん断耐力 (271kN)  
(HTB M24最大せん断耐力 (一面))

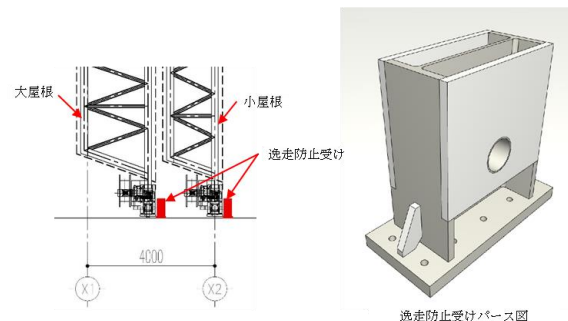


図 1.2.6-2 落下防止の検討



### 1.2.7 ガレキ撤去用天井クレーンに関する補足説明

ガレキ撤去用天井クレーン（以下、天井クレーンと言う。）は大型カバー頂部に設置され、クレーンガーダ2本の上をトロリが移動する。Ss900 に対する波及的影響の評価にあたっては、以下を考慮する。

- ・ 天井クレーン端部に2.3mの水平かかり代を設け、地震時の天井クレーン落下を回避する。万が一レールから脱輪して、さらに回転したとしても、クレーンガーダ端部のハンチ部がカバー架構頂部に当たる形状であることから、物理的に落下しない。
- ・ 天井クレーン不使用時はカバー北側に駐機する。
- ・ 電源喪失時に電磁ブレーキにより揚重状態を保持する。
- ・ フックには外れ止めを装備する。
- ・ トロリ部には脱落防止材を設置し、地震時のトロリ落下を回避する。

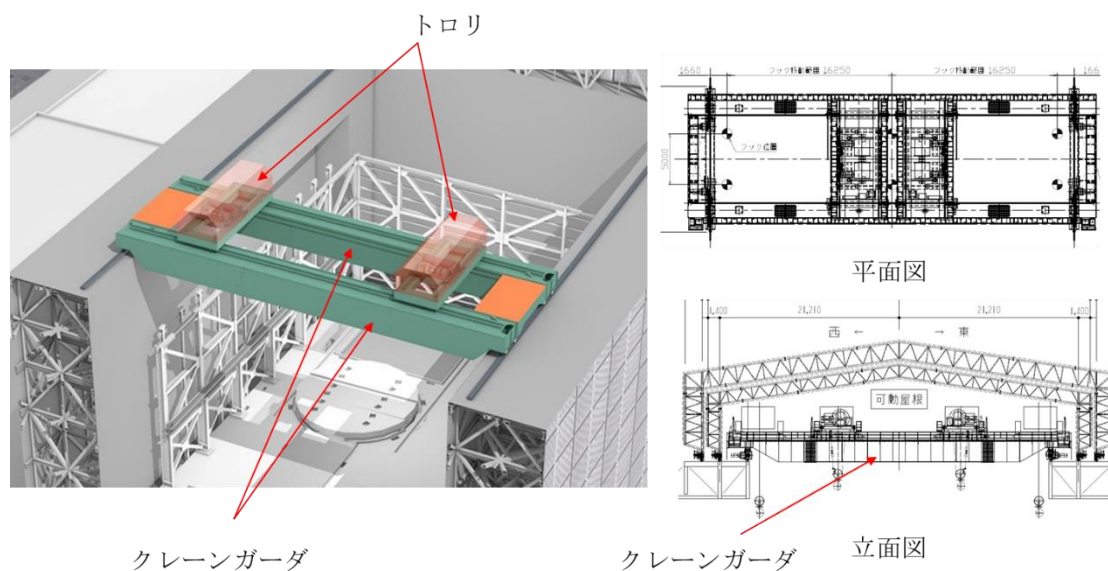


図 1.2.7-1 天井クレーンの概要図

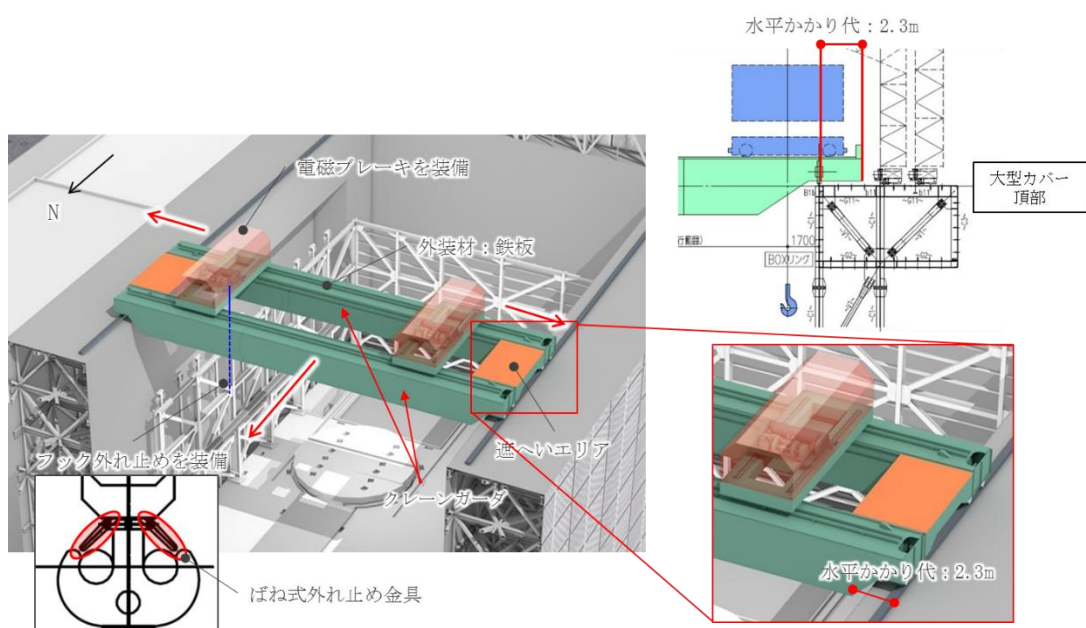
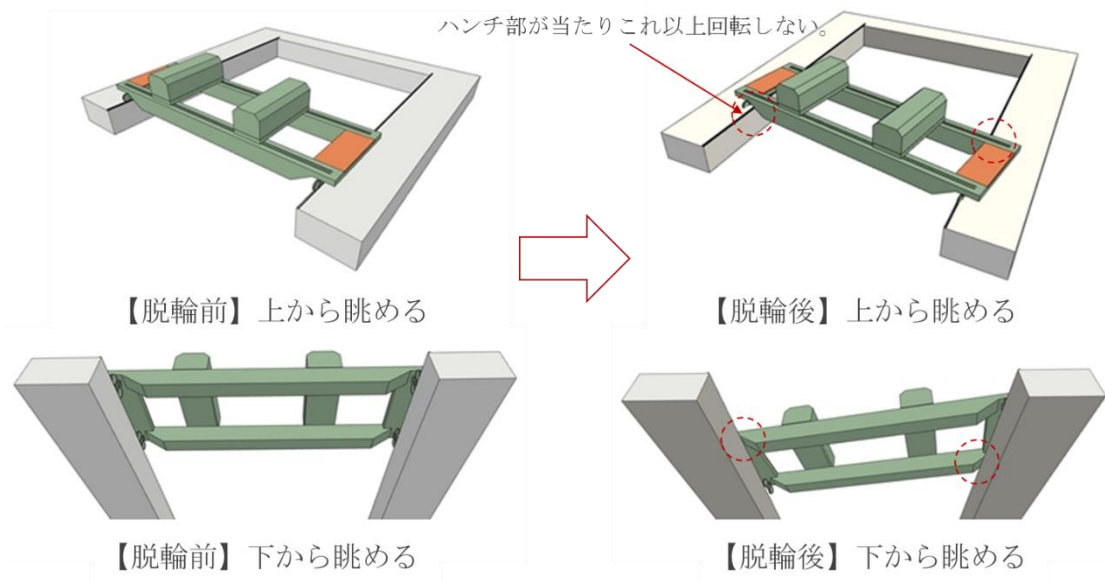
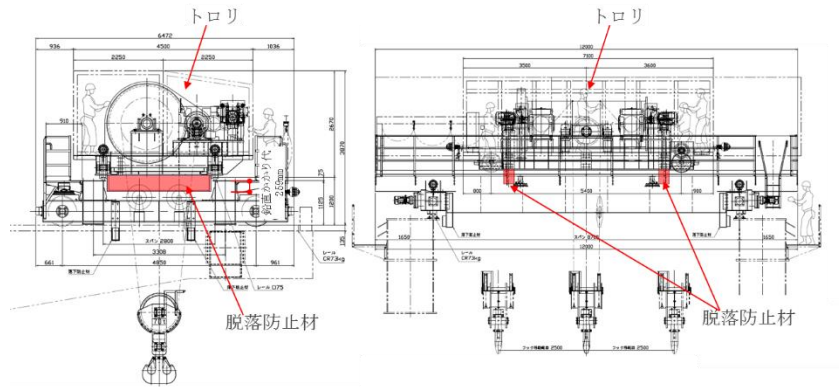


図 1.2.7-2 天井クレーン安全対策の概要図

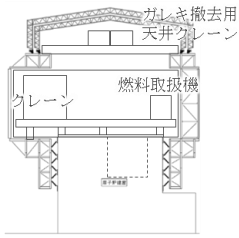
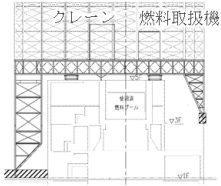
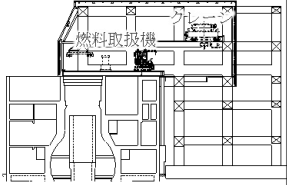


トロリの脱落防止材（赤色部：H-900×300×16×28(SS400)）

図 1.2.7-3 トロリの脱落防止材の概要

1.2.8 3,4号機との比較に関する補足説明

3,4号機との主要な比較項目を表に示す。

号機	1号機	3号機	4号機
イメージ図			
構造	鉄骨造, トラス構造	鉄骨造, トラス構造	鉄骨造, ラーメン構造
カバーの支持	原子炉建屋外壁に支持	原子炉建屋1階, 3階及び5階に支持	地盤, 原子炉建屋外壁及びシェル壁に支持
屋根	可動式	可動しない	可動しない
外装材	屋根: 膜材 外壁: 金属製外装材	金属製外装材	金属製外装材
カバーに支持する主要設備	ガレキ撤去用天井クレーン (一般部に設置) 燃料取扱機, クレーン (原子炉建屋及び燃料取扱設備支持部に設置)	燃料取扱機, クレーン	燃料取扱機, クレーン

## 1号機原子炉建屋外壁の3次元FEM解析による耐震安全性評価

## 1. 1号機原子炉建屋外壁の3次元FEM解析による耐震安全性評価

## 1.1 はじめに

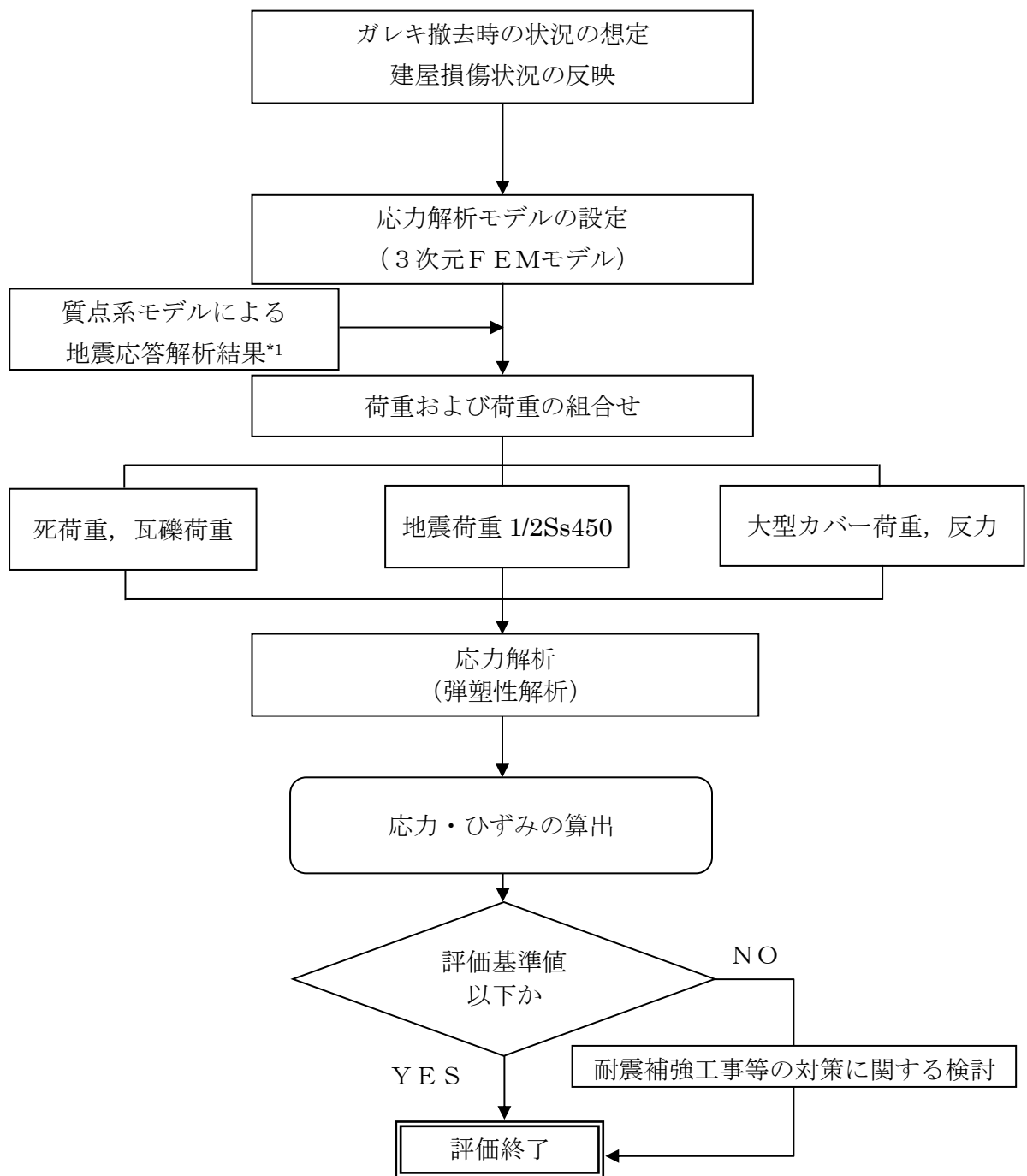
大型カバーは、原子炉建屋の外壁面に支持されており、原子炉建屋に波及的影響を及ぼさない設計としている。本章では、事前の外壁調査結果やその他損傷状況を反映し、かつ瓦礫撤去時の荷重状態を想定した原子炉建屋の1/2Ss450に対する3次元FEM解析により、原子炉建屋外壁の耐震安全性評価を実施する。

## 1.2 3次元FEM解析による耐震安全性評価

## 1.2.1 解析方針

耐震安全性評価は、図-1.1のフローに示すように以下の手順で行う。

- ・ 1階壁から5階オペレーティングフロア（以降5階オペフロ床と略す）の外壁を含む原子炉建屋の地上部について、3次元FEM解析モデルを作成する。
- ・ 死荷重、瓦礫荷重・大型カバー荷重、地震応答解析結果にもとづく地震荷重、地震時の大型カバー反力及び荷重組合せの条件を設定する。
- ・ 応力解析として鉄筋コンクリート部材の塑性化を考慮した弾塑性解析を行い、大型カバーが取り付く建屋外壁に発生する応力及びひずみを算出する。
- ・ 評価基準値と比較し、耐震安全性を評価する。



\*1 : 「Ⅱ-2-11 添付資料-4-2 燃料取り出し用カバーの構造強度及び耐震性に関する説明書」中の1号機のガレキ撤去時の状態を考慮した地震応答解析結果にもとづく。

図-1.1 耐震安全性評価フロー

### 1.2.2 応力解析モデルの設定

鉄筋コンクリート部材の塑性化を考慮した弾塑性解析を実施し、建屋外壁に発生する応力及びひずみを算定する。1階壁から5階オペフロ床までの鉄筋コンクリート部材を有限要素の集合体としてモデル化した。

外壁については、事前の外壁調査において、ひび割れや浮きが認められたものの、局所的であり、耐震壁としての性能を保持していると評価し、剛性低下は行わない。一方、5階オペフロ床の北西部の一部については、崩落が確認されており、当該床の要素を削除する。

解析モデルに使用する板要素は、鉄筋層をモデル化した積層シェル要素を用いた。各要素には、板の軸力と曲げ応力を同時に考えるが、板の曲げには面外せん断変形の影響も考慮した。使用計算機コードは「ABAQUS」である。

図-1.2に解析モデル概要図を、図-1.3に解析モデルの境界条件を、図-1.4にコンクリートと鉄筋の構成則を示す。

※外壁は「Ⅲ-3-1-3 添付資料-2 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その1）（東京電力株式会社，平成23年5月28日）」同様に損傷がないものとして評価。床については2014年3月27日に実施した1号機建屋内現場調査時に4階床面より見上げて5階オペフロ床の北西部の一部の崩落が確認できたため、「Ⅲ-3-1-3 添付資料-2 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その1）（東京電力株式会社，平成23年5月28日）」から変更している。

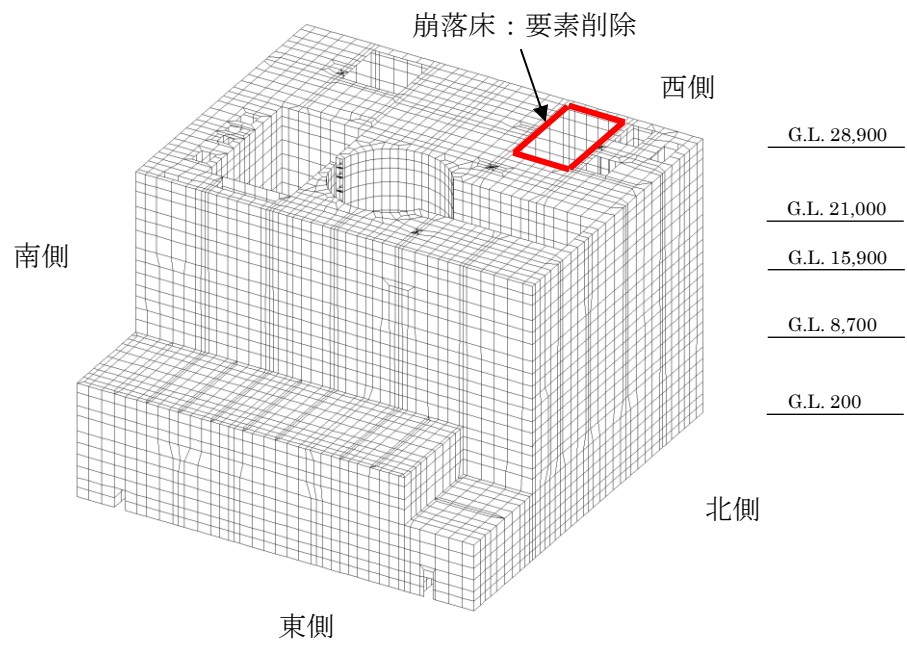


図-1.2 解析モデル概要図

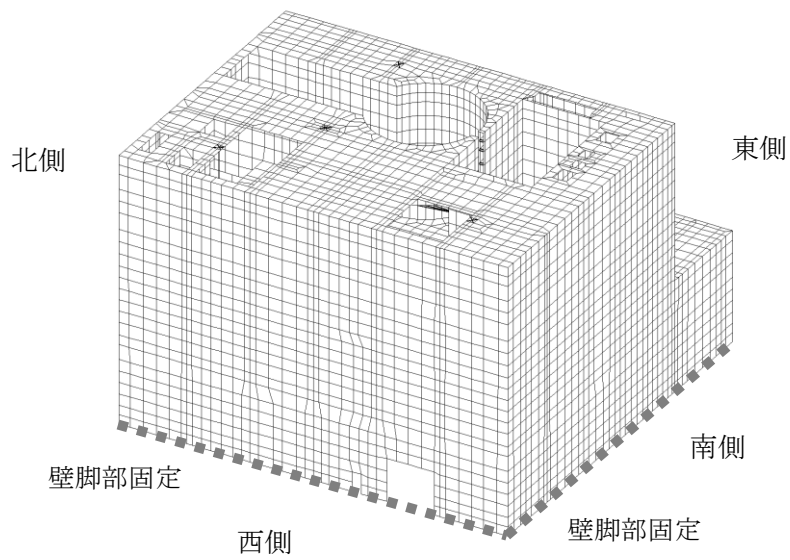
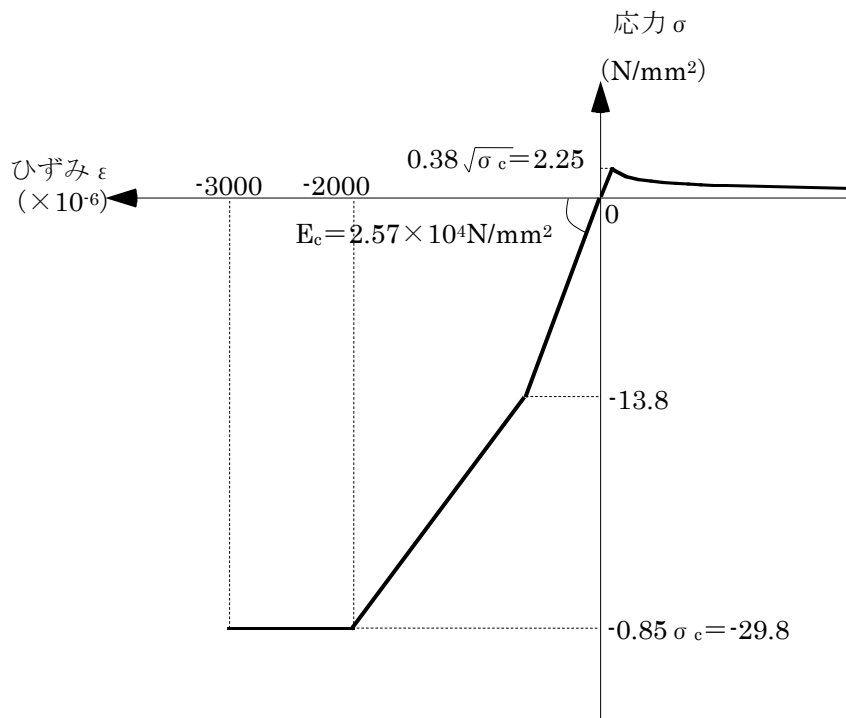
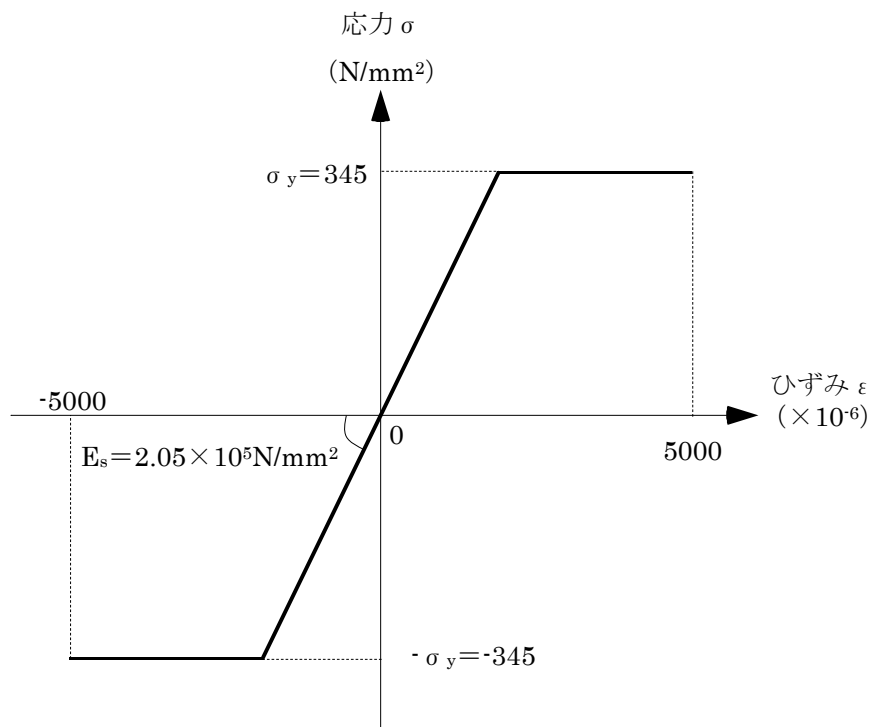


図-1.3 解析モデルの境界条件





(a) コンクリートの応力-ひずみ関係 (コンクリート強度  $\sigma_c = 35$  N/mm<sup>2</sup>)



(b) 鉄筋の応力-ひずみ関係 (鉄筋降伏点  $\sigma_y = 345$  N/mm<sup>2</sup>)

図-1.4 コンクリートと鉄筋の構成則

### 1.2.3 荷重及び荷重の組合せ

#### (1) 死荷重及び瓦礫荷重 DL

解析モデルに付与する死荷重は、モデル化範囲の建屋躯体の自重に加え、機器・配管・その他の重量は床に一様に積載されているものとする。また、瓦礫荷重は、外部への落下分を無視し崩れた屋根や鉄骨重量が全て5階オペフロ床に一様に積載されているものとする。

#### (2) 大型カバー荷重 DF

大型カバー重量を、外壁面支持位置に考慮する。

#### (3) 地震荷重 K

質点系モデルによる1/2Ss450地震動に対する地震応答解析結果にもとづき、水平方向及び鉛直方向の地震荷重を設定する。

#### (4) 大型カバー反力 KF

地震時に生じる大型カバーからの反力を考慮する。

#### (5) 荷重の組合せ

表-1.1 に荷重の組合せを示す。水平2方向及び鉛直方向の地震動の組合せは、組合せ係数法に基づく。(水平のいずれかを1.0とし、±を考慮し合計16ケース)

表-1.1 荷重の組合せ

荷重時名称	荷重の組合せ
Ss 地震時	DL + DF + K + KF

ここに、DL：死荷重及び瓦礫荷重、DF：大型カバー荷重、K：地震荷重（1/2Ss450地震動）、KF：大型カバー反力

#### 1.2.4 評価結果

配筋諸元等にもとづき構造検討を行い、耐震安全性を評価する。評価においては、応力解析より求まる応力及びひずみが、評価基準値以下となることを確認した。評価基準値はコンクリート並びに鉄筋のひずみについては日本機械学会「発電用原子力設備規格 コンクリート製原子炉格納容器規格」にもとづき設定した。表-1.2 にひずみの評価基準値の値を示す。なお、許容面外せん断力については「原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・解説」に基づき以下の式から算定する。

$$Q_d = bj\alpha f_s$$

$$\text{ただし, } \alpha = \frac{4}{\frac{M}{Qd} + 1} \quad \text{かつ } 1 \leq \alpha \leq 2$$

ここで、

- $Q_d$  : 短期許容面外せん断力
- $b$  : 断面の幅
- $j$  : 断面の応力中心間距離で有効せいの(7/8)倍の値とすることができる
- $\alpha$  : せん断スパン比  $M/(Qd)$ による割増係数
- $f_s$  : コンクリートの短期許容せん断応力度
- $M$  : 設計する壁の短期荷重による最大曲げモーメント
- $Q$  : 設計する壁の短期荷重による最大せん断力
- $d$  : 有効せい

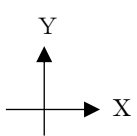
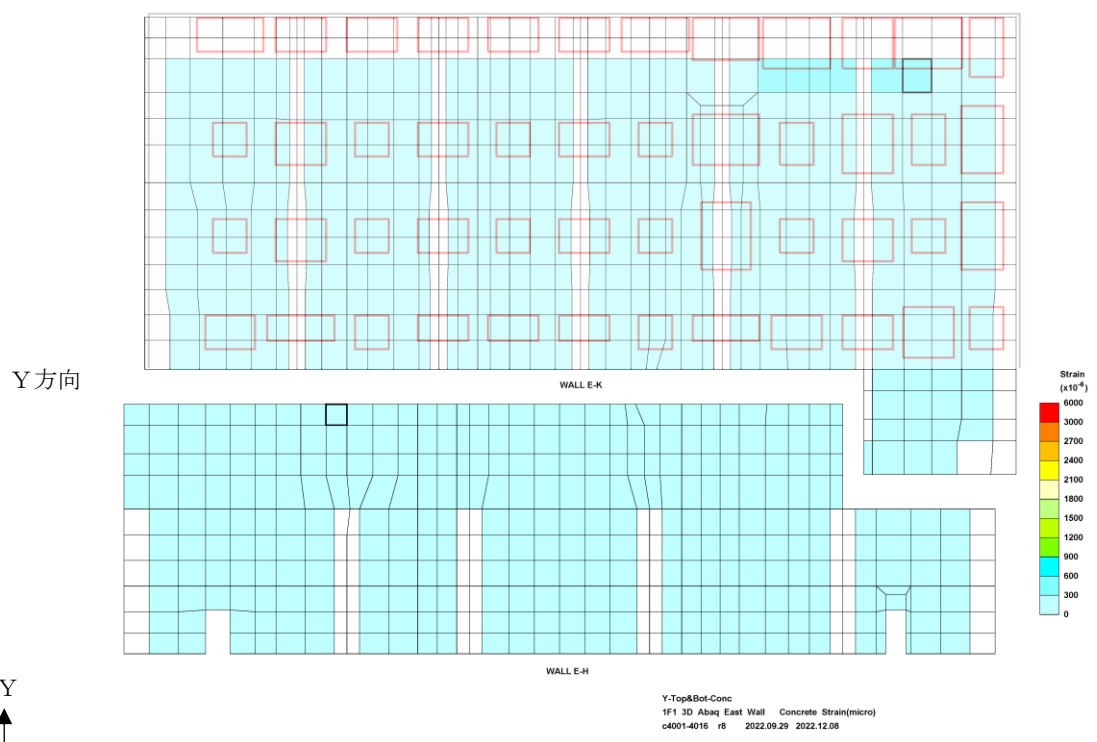
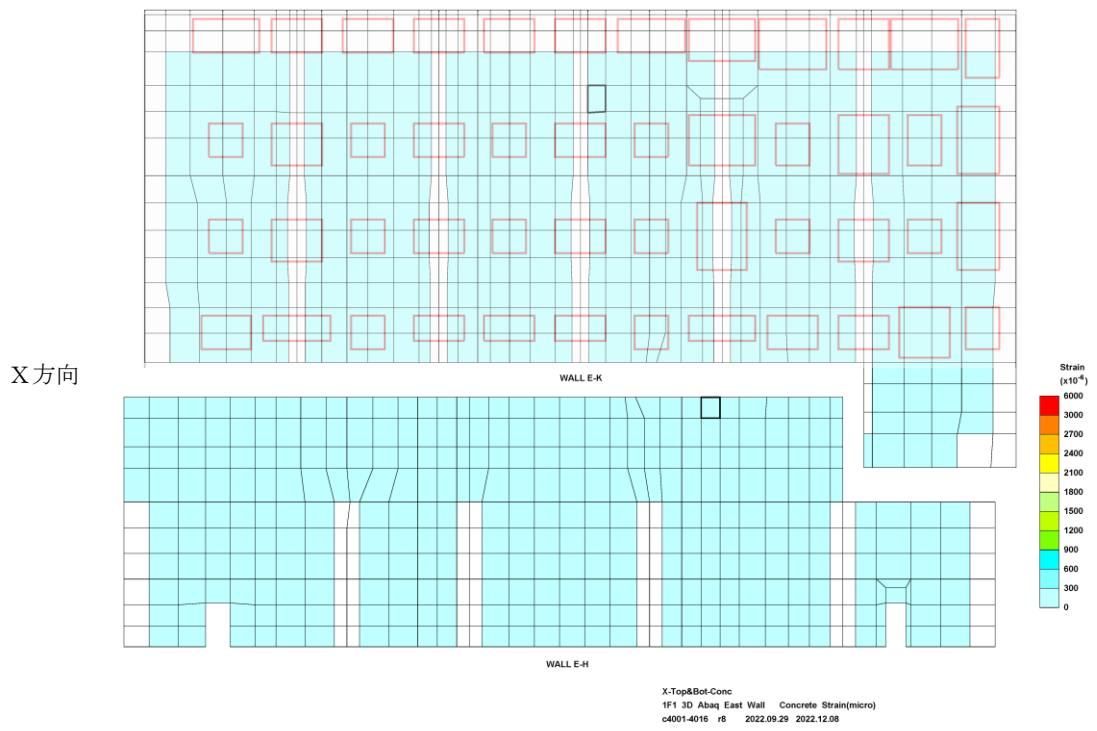
発生ひずみ及び面外せん断力の発生応力と評価基準値の比(検定比。1以下で評価基準値を満足する。)を示した結果を図-1.5～図-1.16に、各面の最大値一覧を表-1.3に示す。いずれの箇所においても発生ひずみ及び面外せん断力は許容限界以内であり、評価基準値を十分に下回っている。このことから、瓦礫撤去時の状況において、大型カバーが取りつく建屋外壁は、耐震安全性を有しているものと評価した。

表-1.2 ひずみの評価基準値

評価対象	評価基準値 $\epsilon_a$ ( $\times 10^{-6}$ )
コンクリート	-3000
鉄筋	$\pm 5000$

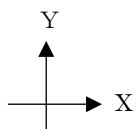
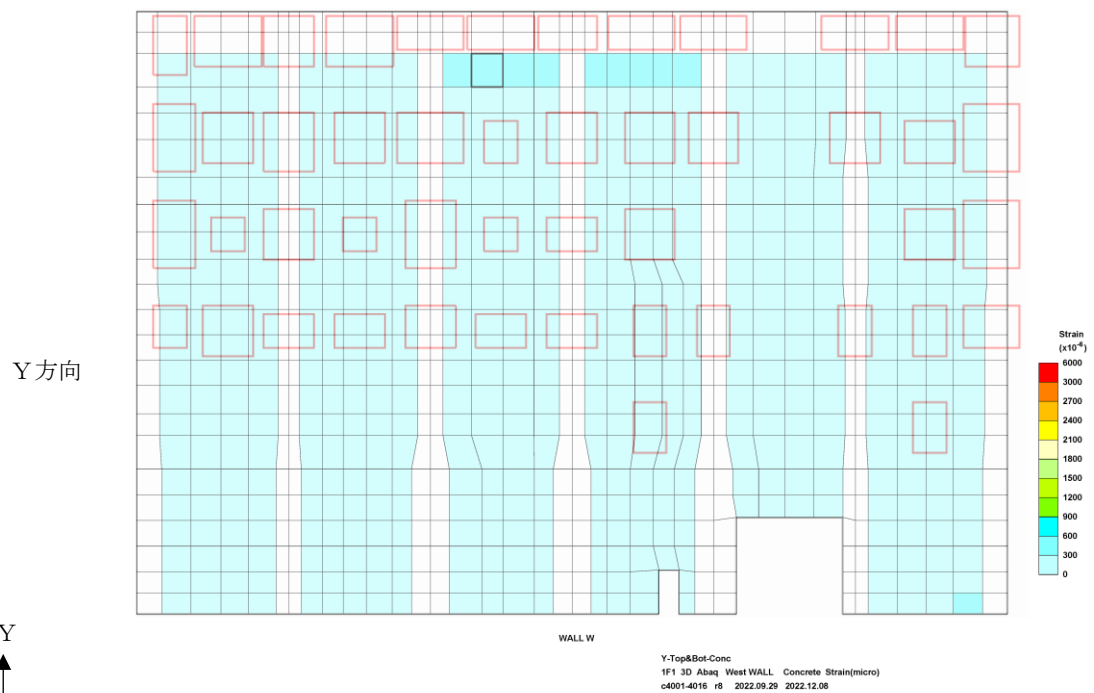
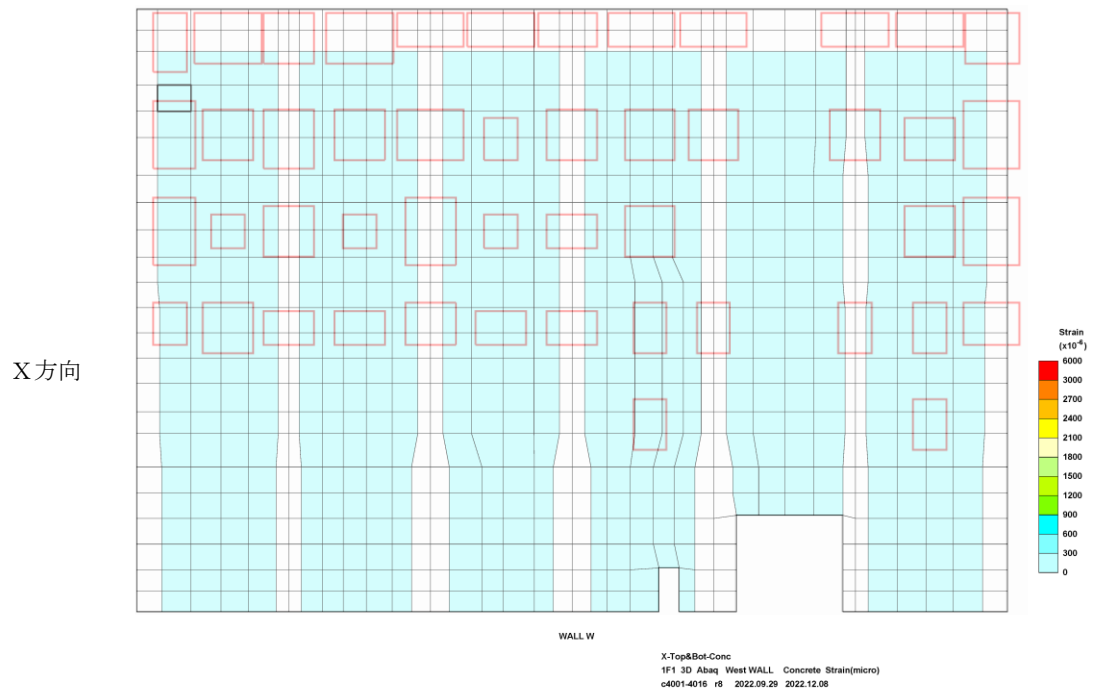
表-1.3 外壁各面の最大値一覧

部位	コンクリート ひずみ( $\times 10^{-6}$ )	鉄筋ひずみ ( $\times 10^{-6}$ )	面外せん断力 検定比
東壁	-389	367	0.703
西壁	-383	429	0.722
南壁	-359	470	0.656
北壁	-317	670	0.797



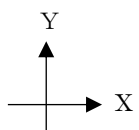
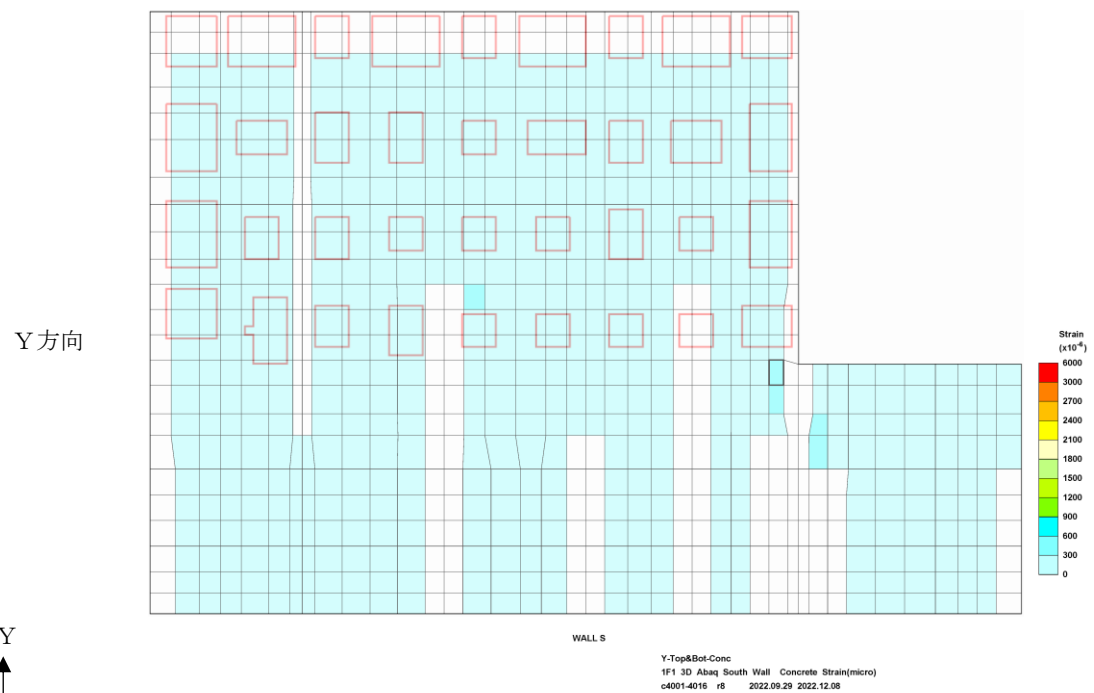
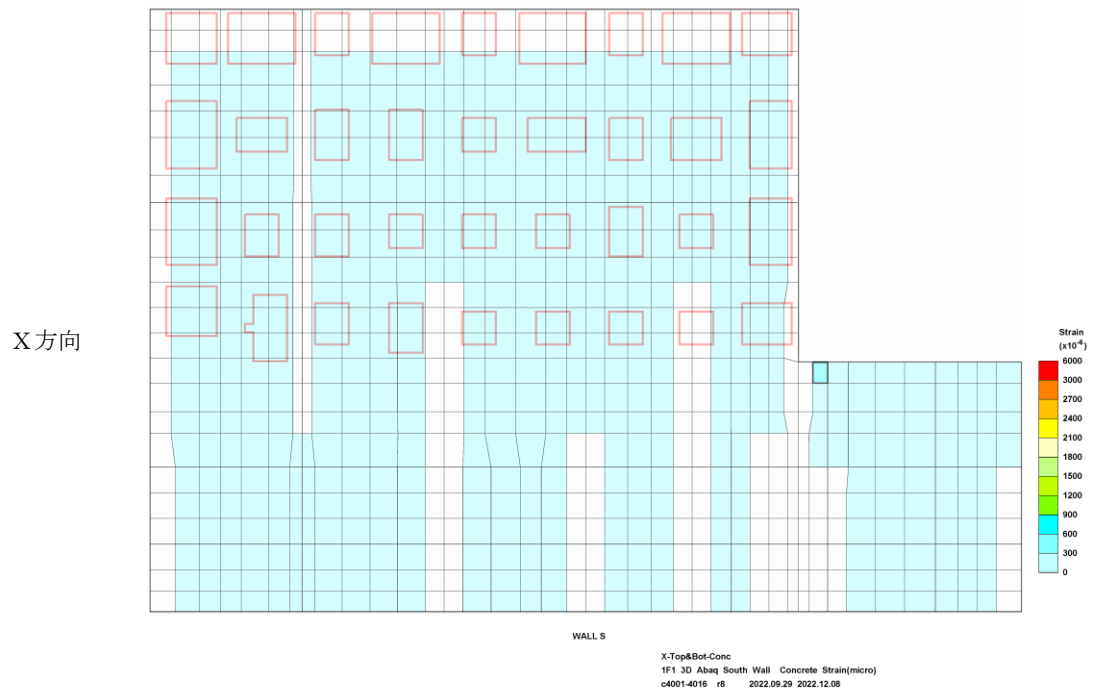
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.5 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁東面)



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

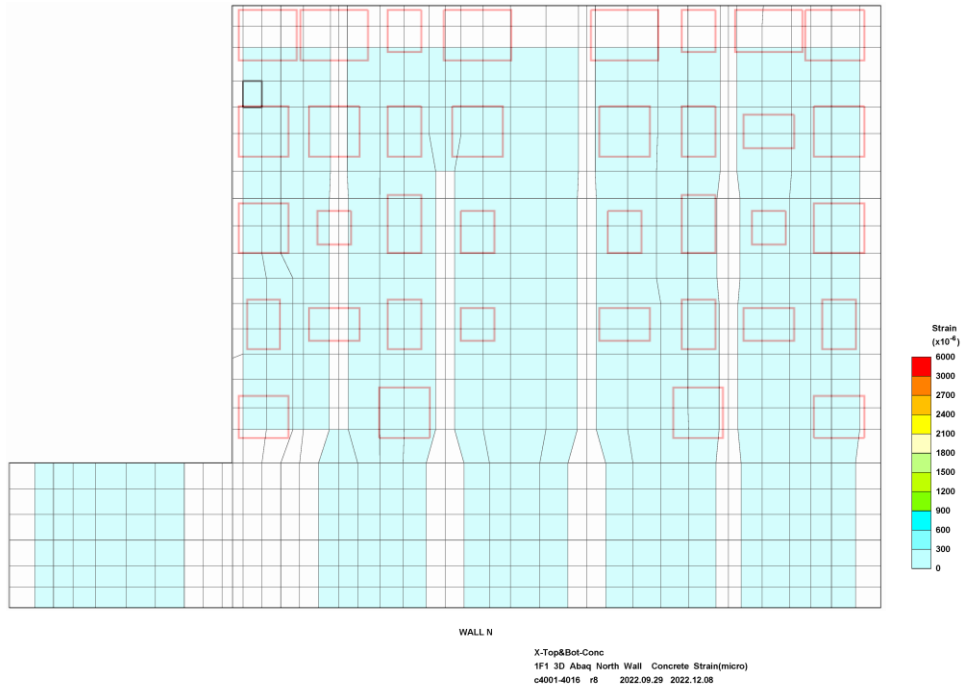
図-1.6 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁西面)



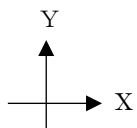
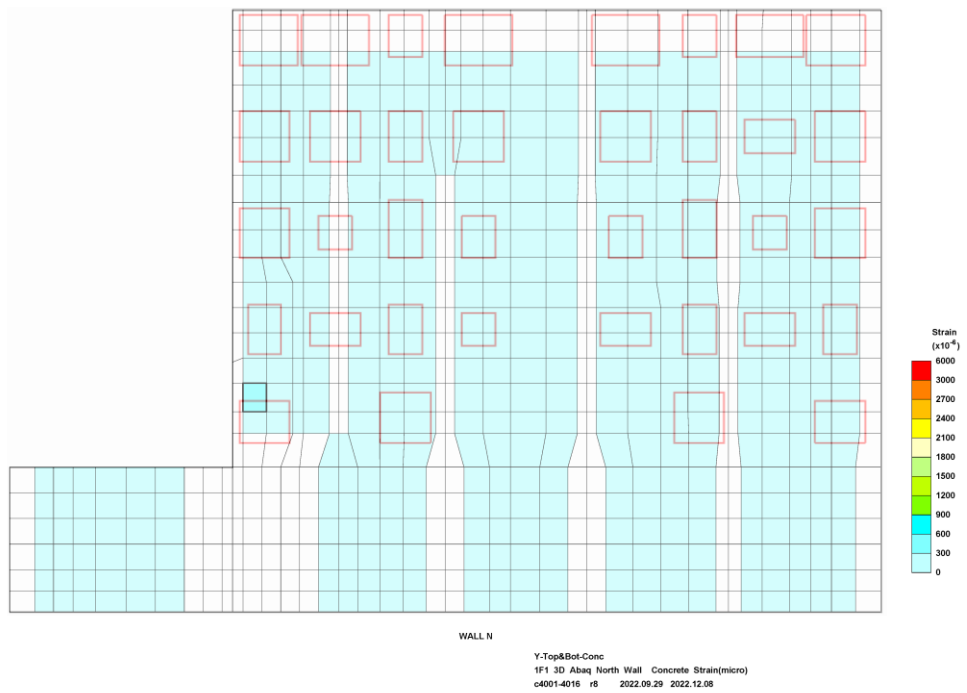
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.7 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁南面)

X方向



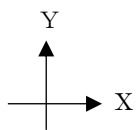
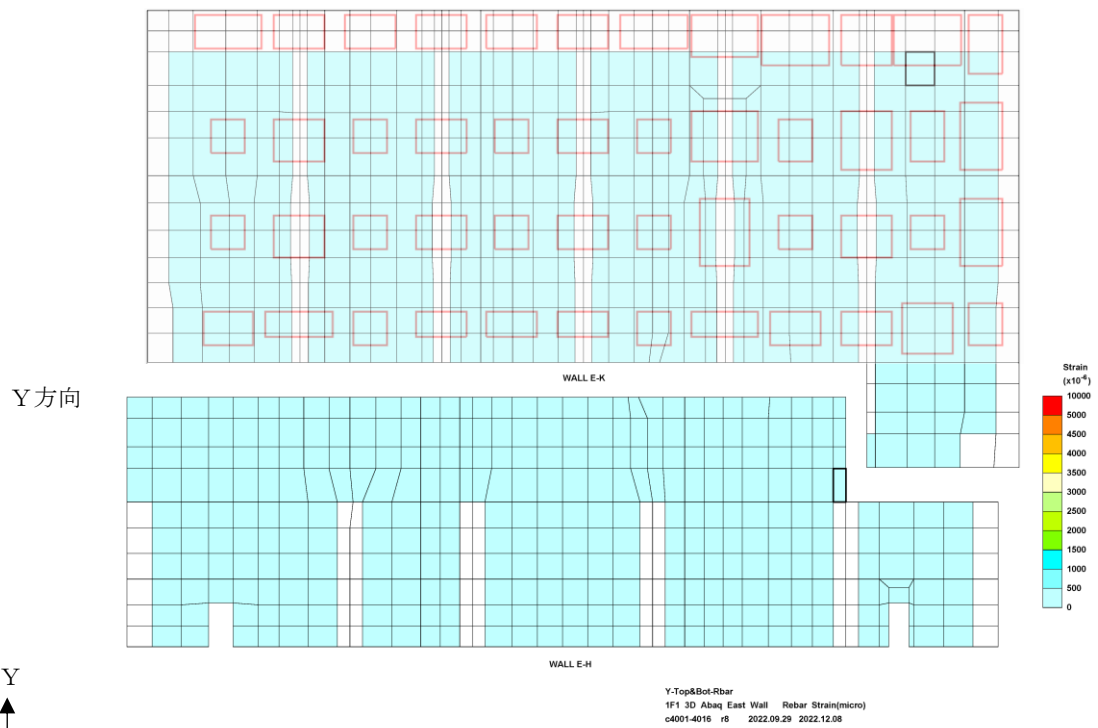
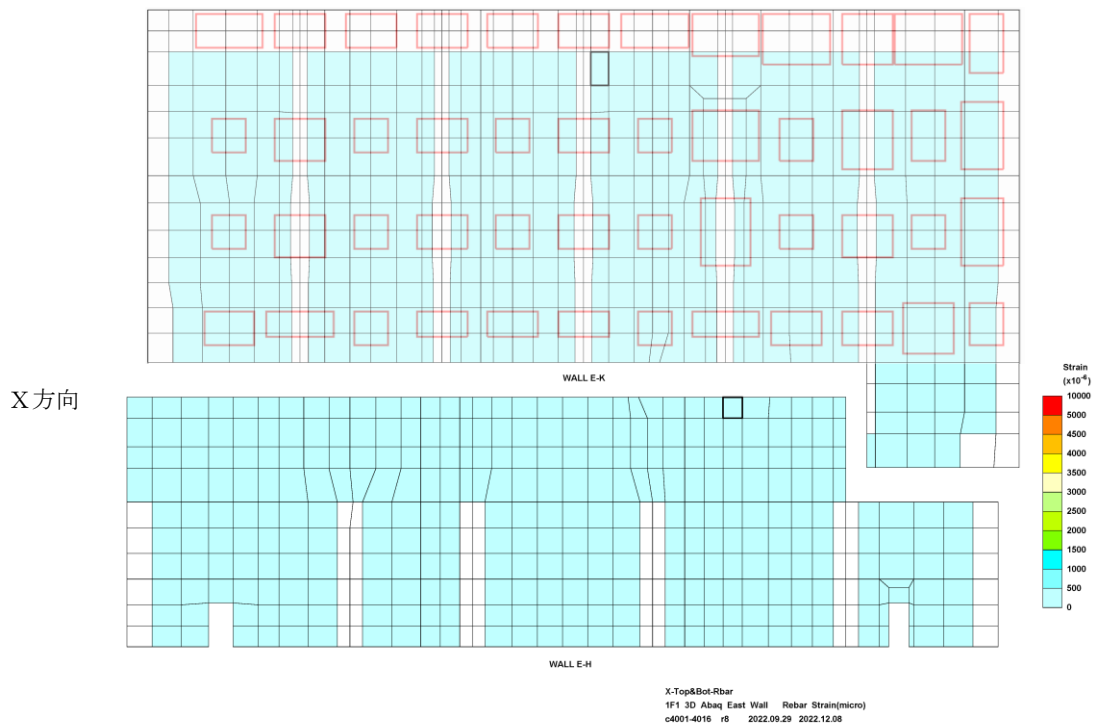
Y方向



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

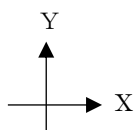
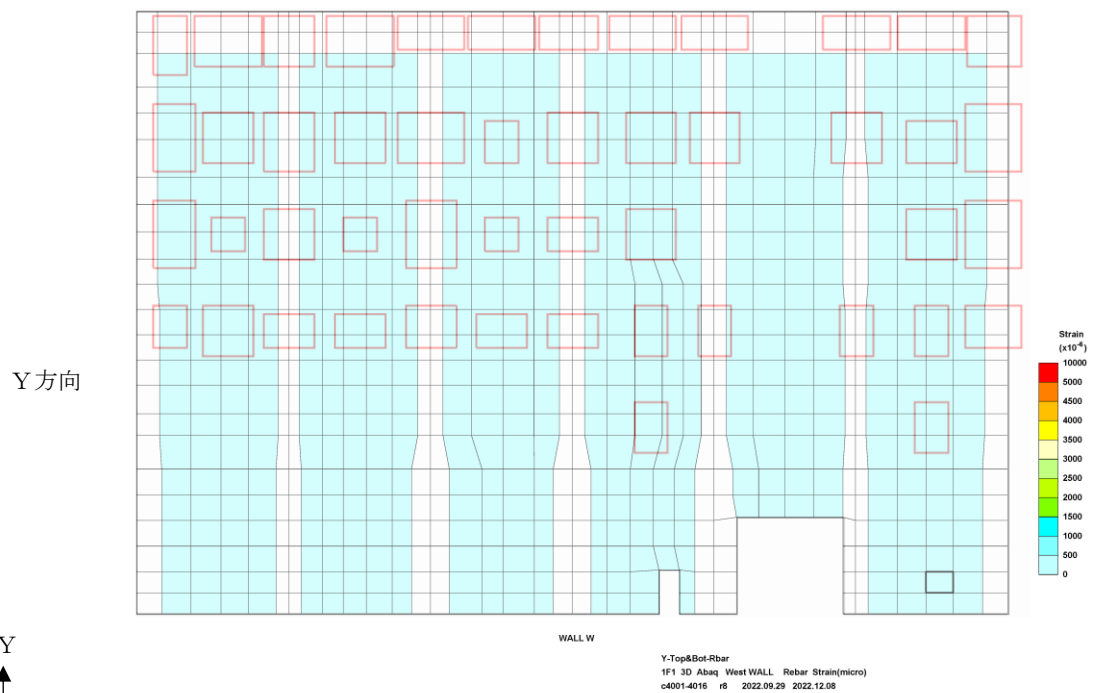
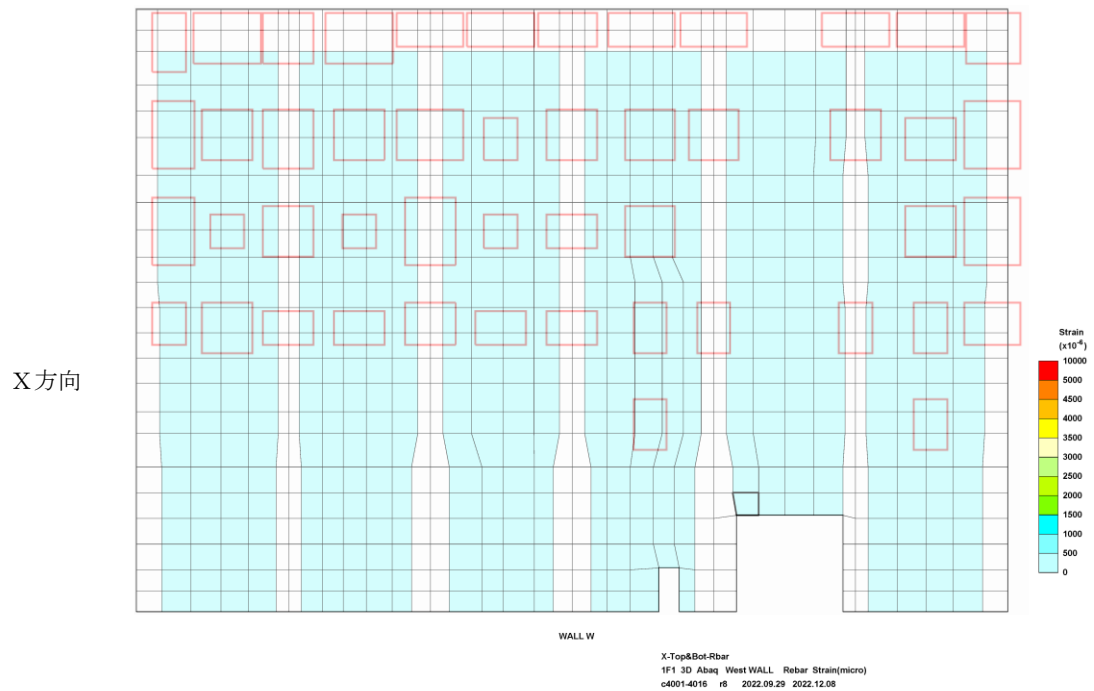
図-1.8 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁北面)





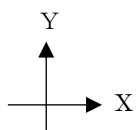
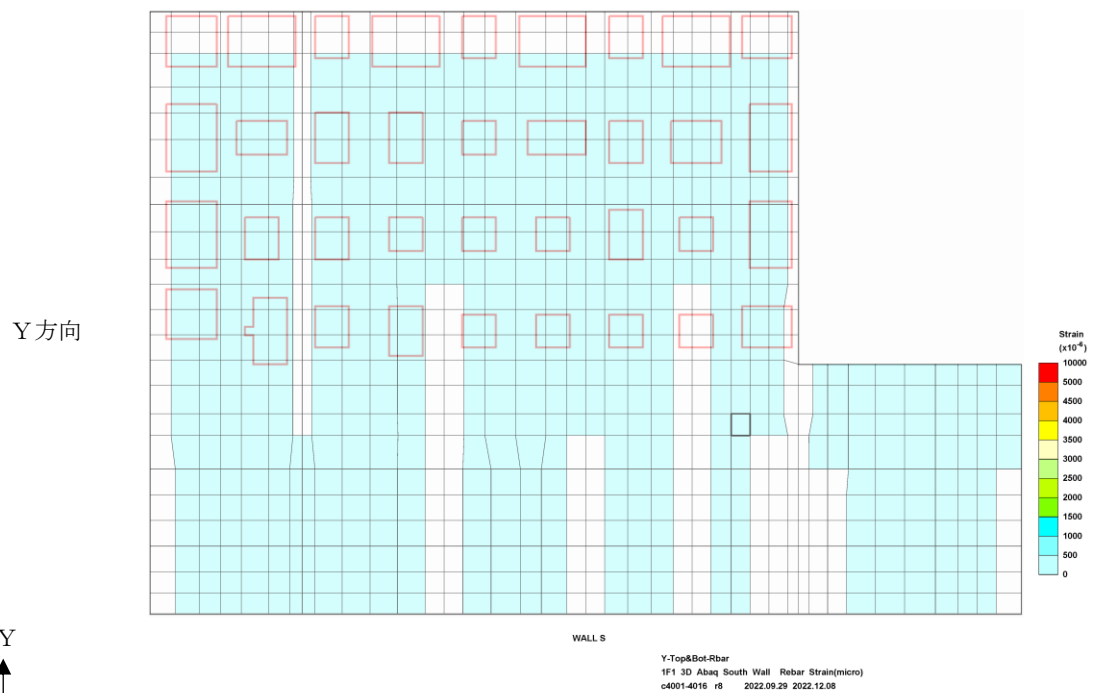
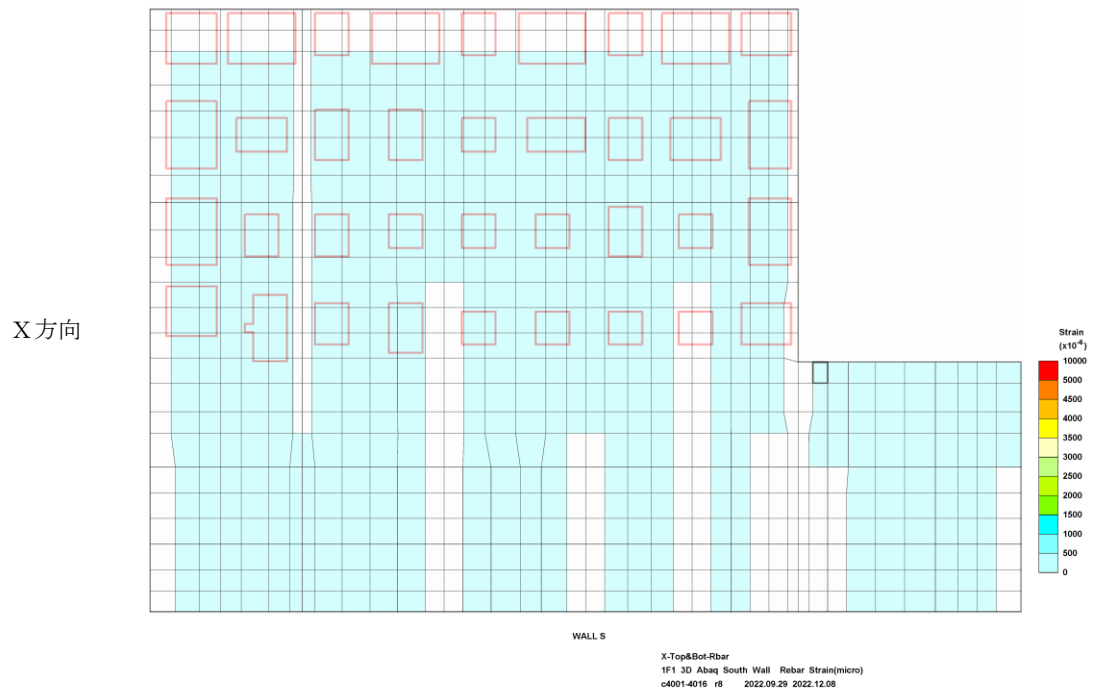
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.9 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁東面)



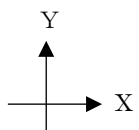
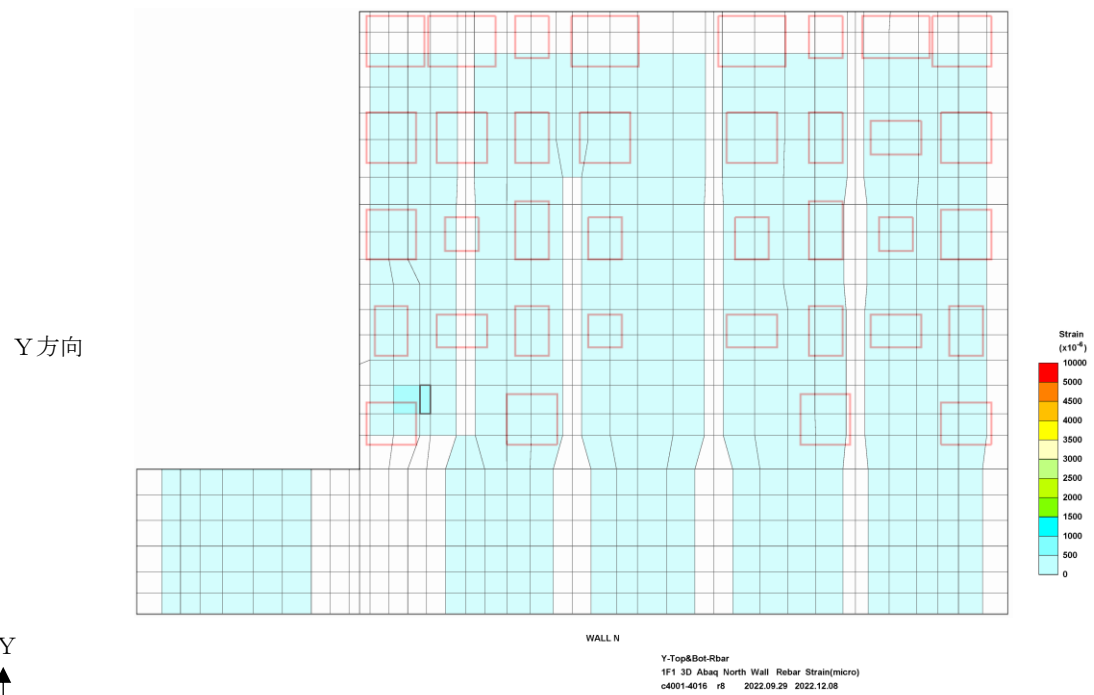
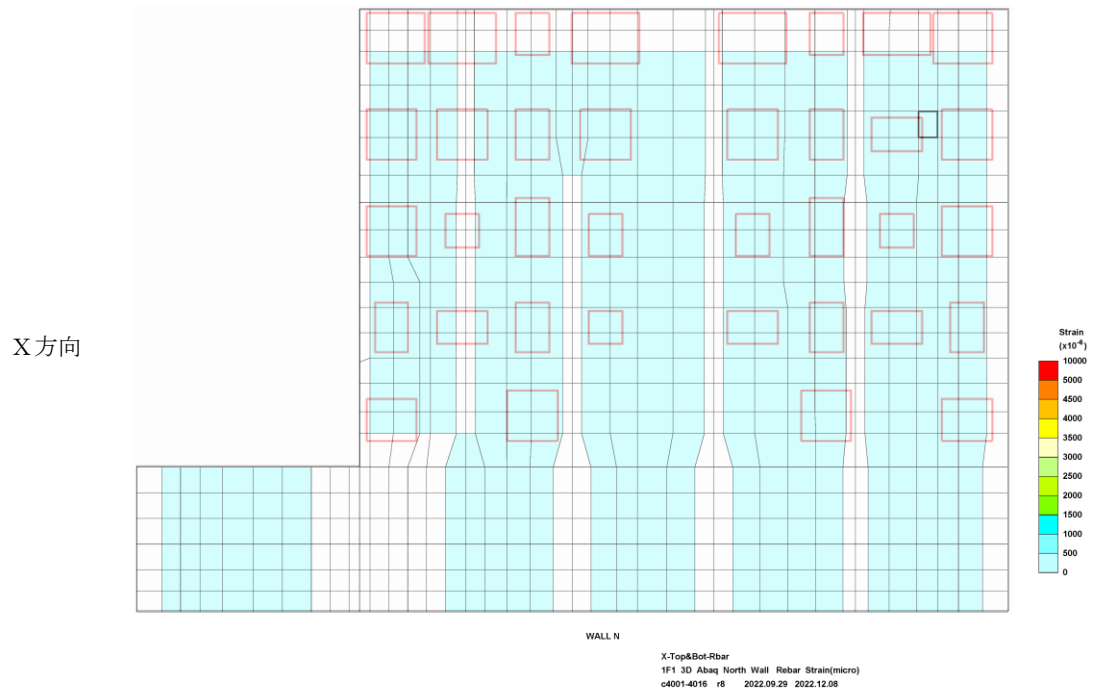
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.10 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁西面)



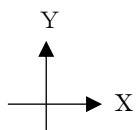
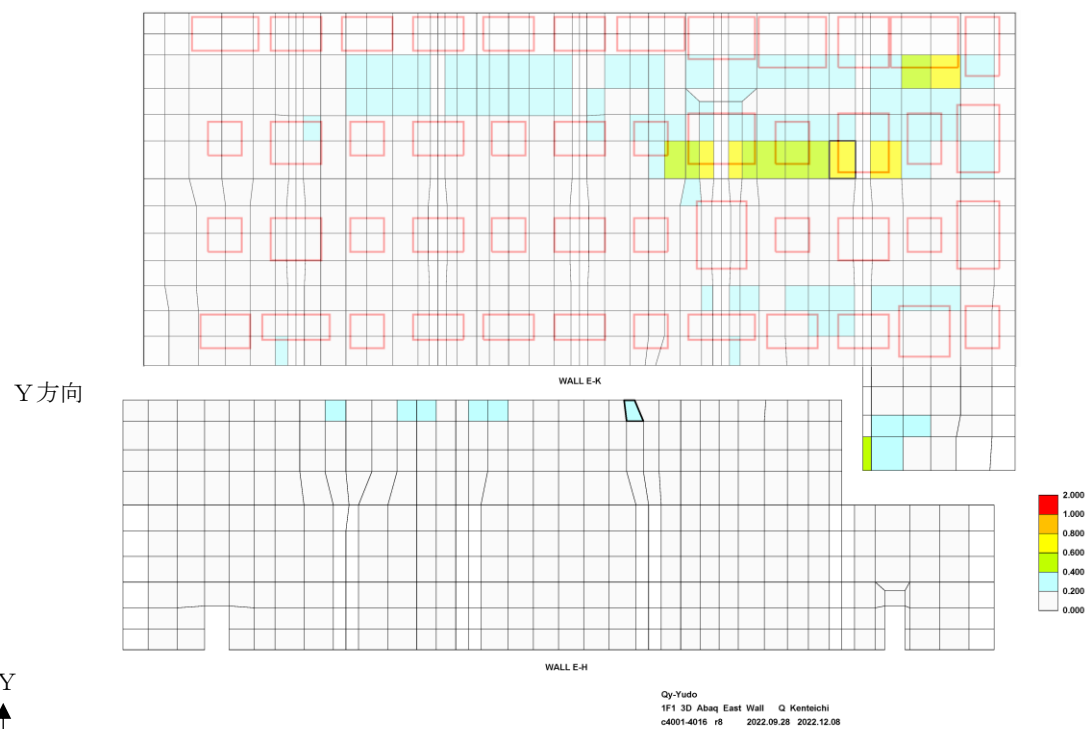
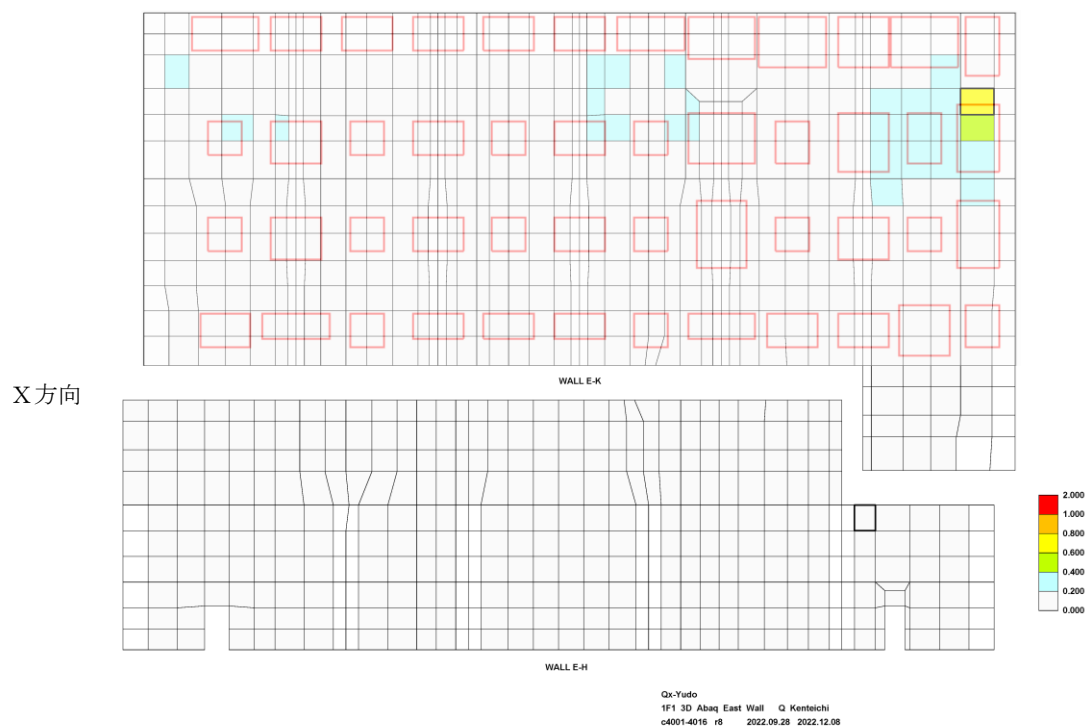
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.11 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁南面)



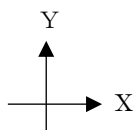
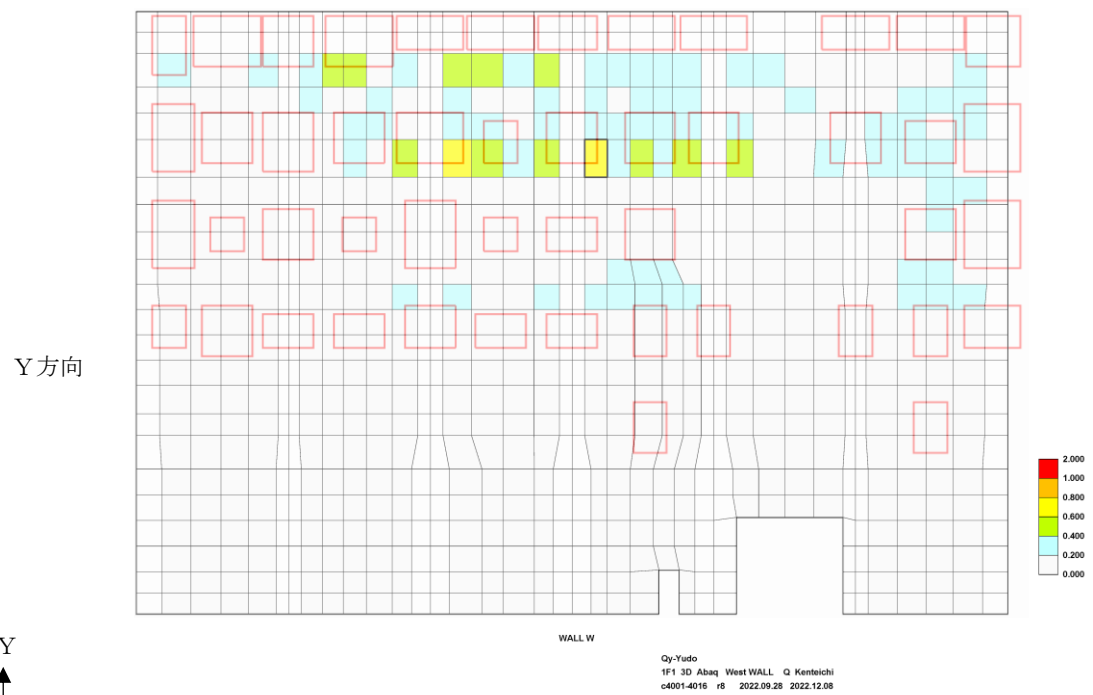
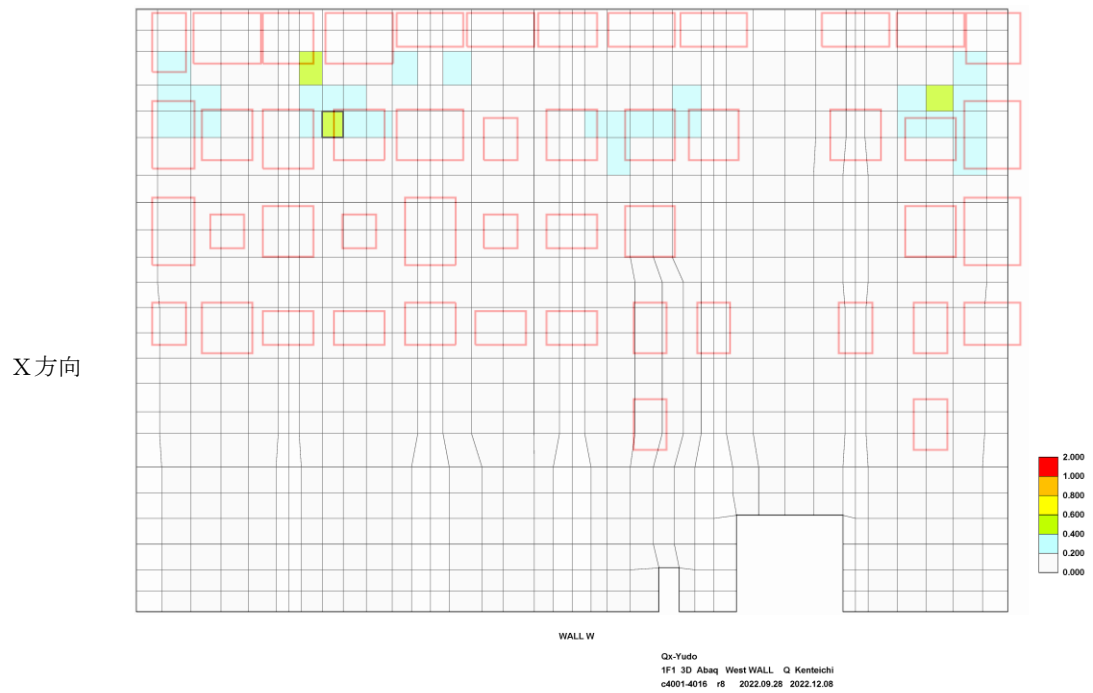
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.12 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁北面)



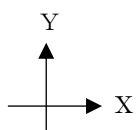
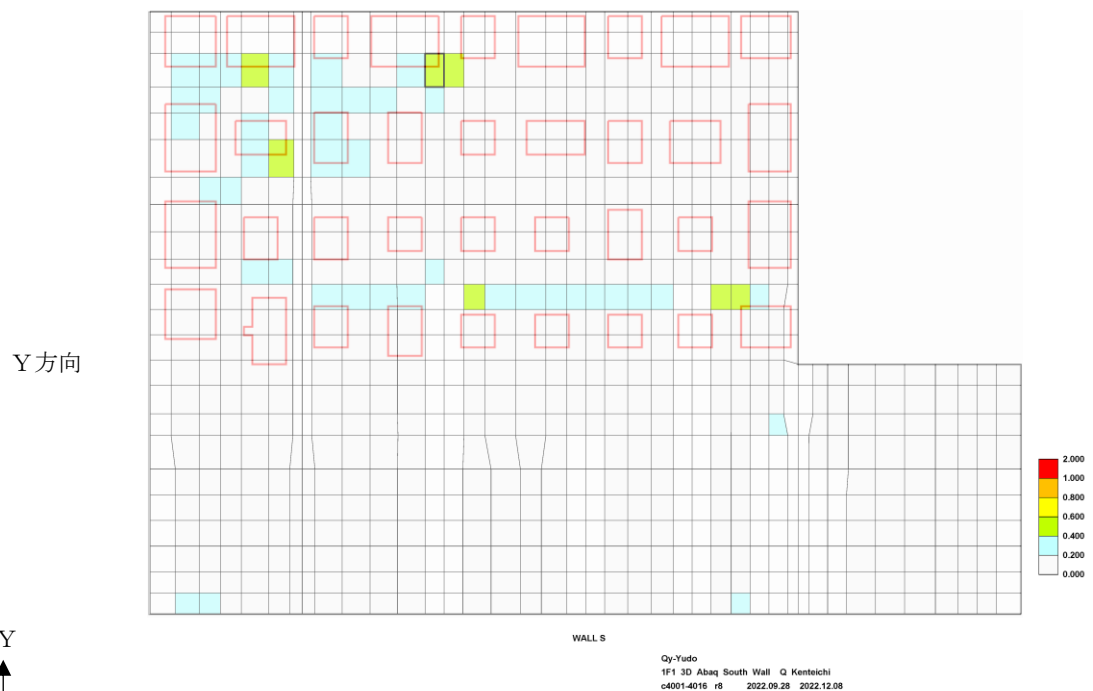
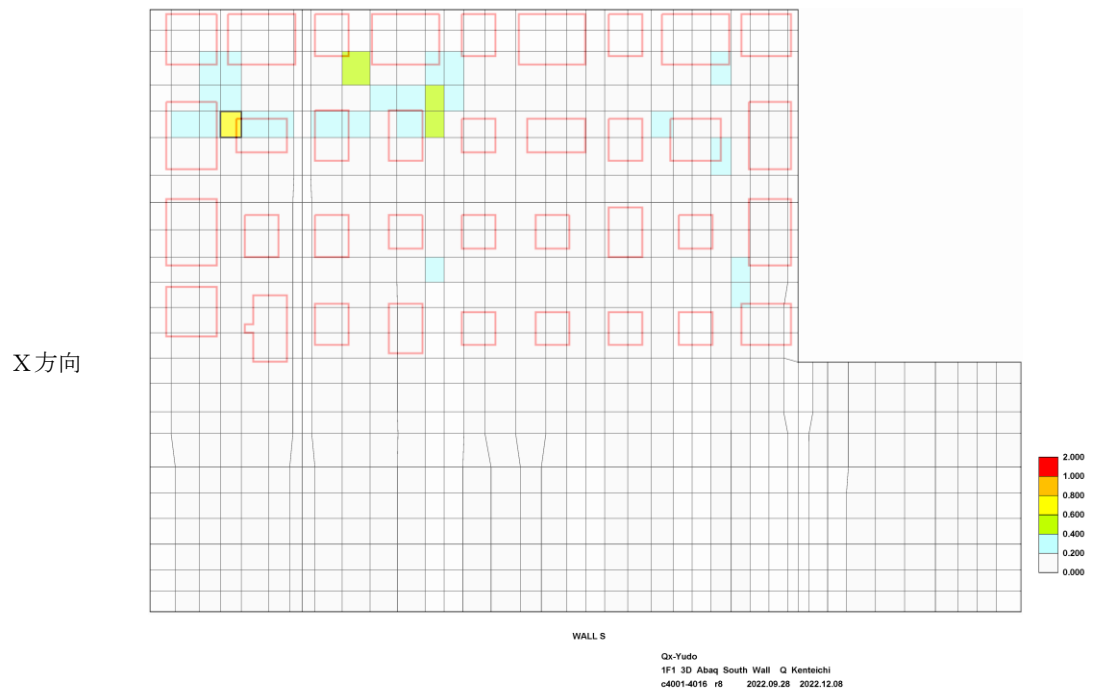
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.13 面外せん断力の検定比 (建屋外壁東面)



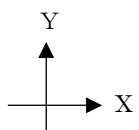
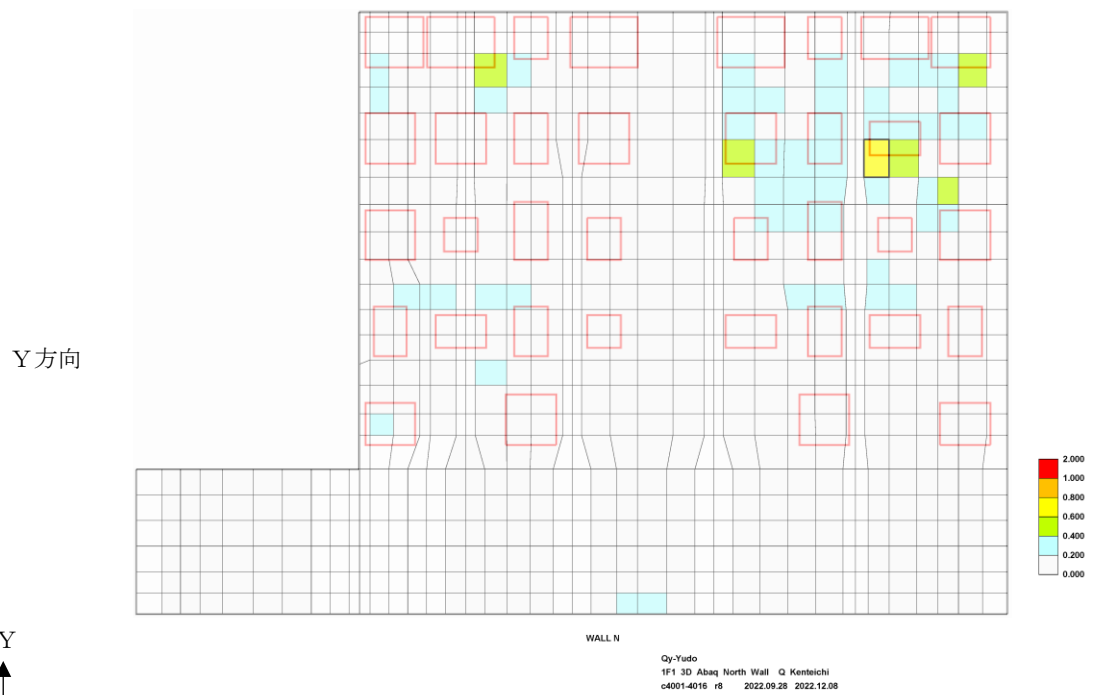
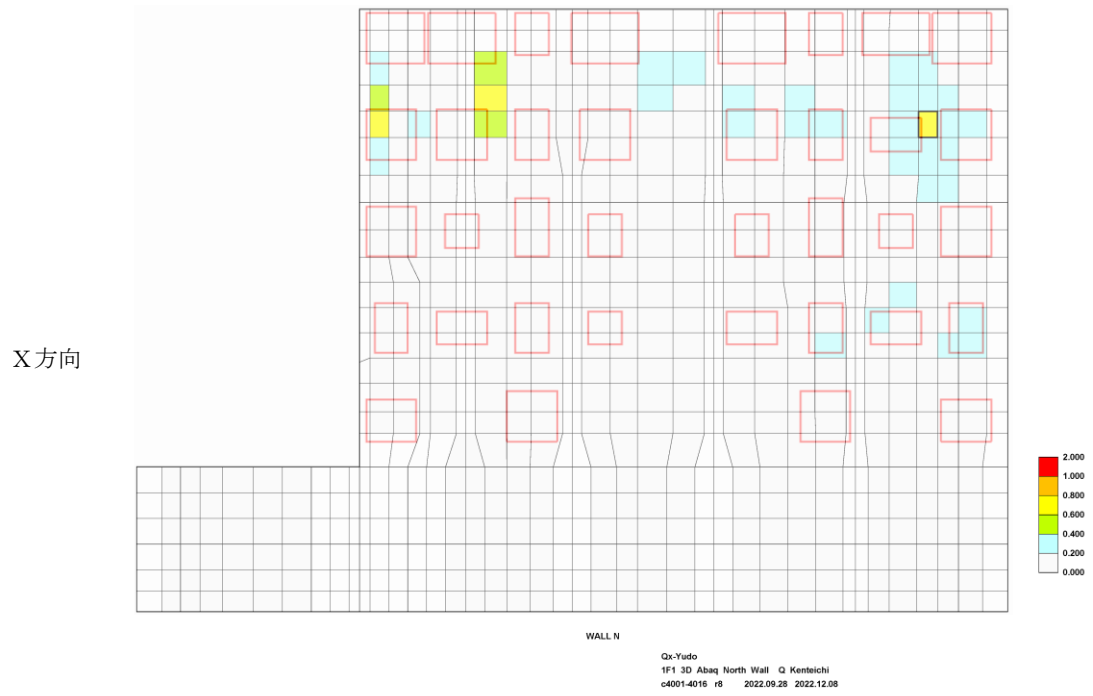
(図中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.14 面外せん断力の検定比 (建屋外壁西面)



(図中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.15 面外せん断力の検定比 (建屋外壁南面)



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.16 面外せん断力の検定比 (建屋外壁北面)



### 1.3 Ss900 地震動に対する影響検討

#### 1.3.1 検討概要

大型カバーを支持する原子炉建屋の外壁面について、Ss900 地震動に対する影響検討を行う。1/2Ss450 地震動に対する耐震安全性評価の検定値が最も厳しいケース（-1.0NS+0.4EW-0.4UD）を対象に、1/2Ss450 と同じ解析モデルと評価基準値を用いて Ss900 地震動に対する影響を評価する。

なお、作用する地震力が 1/2Ss450 に比べ大きくなり外壁部の変形が進むため、図-1.3 に示す解析モデル壁脚部の境界条件をピンとする。また、外壁面に作用する大型カバーからの反力荷重が大きい箇所については、ベースプレートからの荷重分散性を考慮することとし、図-1.17 に示すように反力荷重を外壁厚分拡幅した範囲に作用させる。

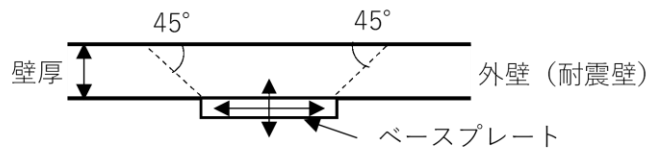


図-1.17 荷重分散範囲

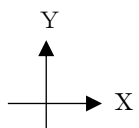
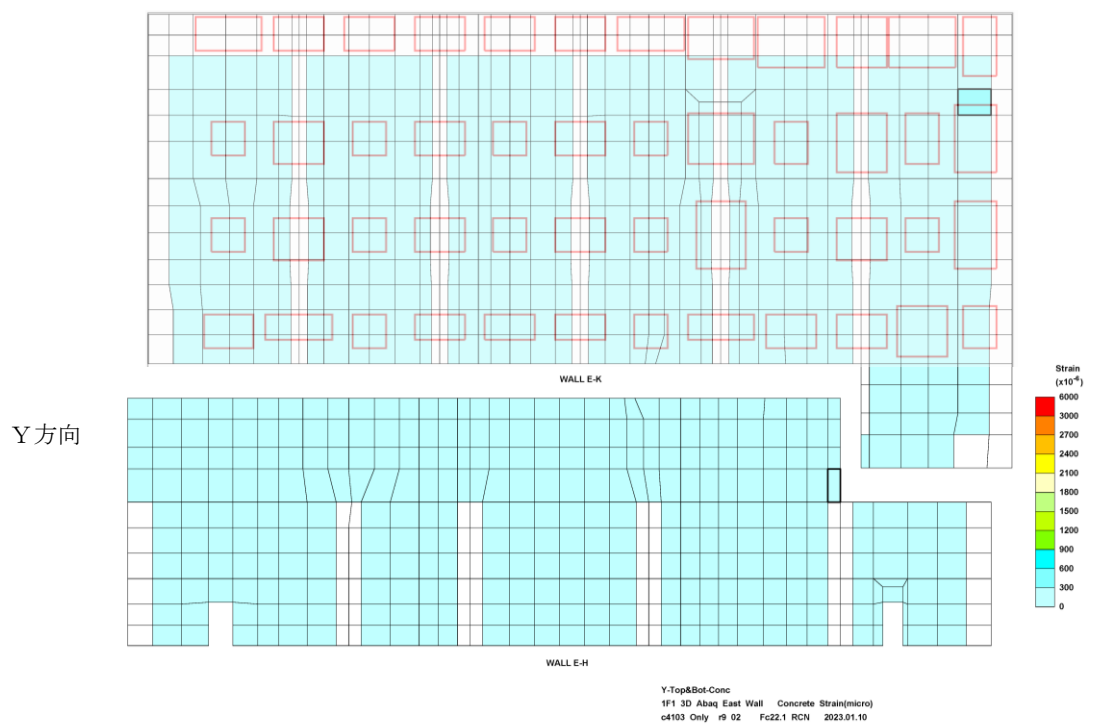
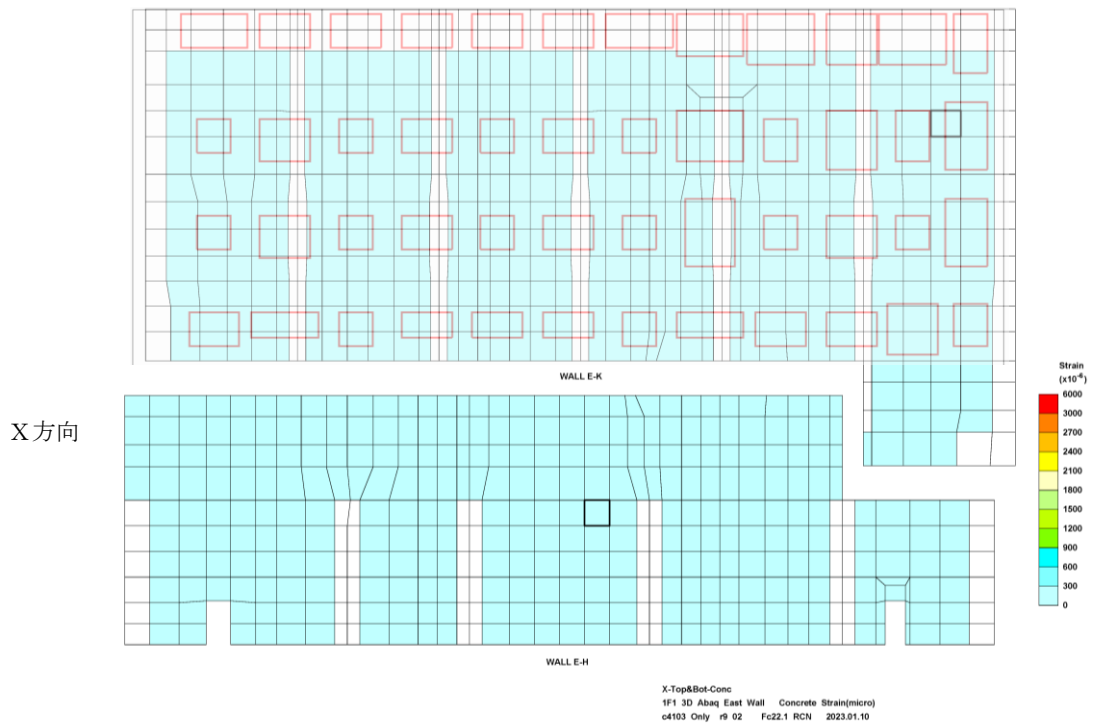
#### 1.3.2 検討結果

発生ひずみ及び面外せん断力と評価基準値の比（検定比。1 以下で評価基準値を満足する。）を示した結果を図-1.18～図-1.29 に、各面の最大値一覧を表-1.4 に示す。いずれの箇所においても発生ひずみ並びに面外せん断力は許容限界以内であり、Ss900 地震動を入力した場合であっても躯体の健全性が確保されることを確認した。

なお、壁脚部に固定条件を仮定しても、許容限界以内にあり壁全体の崩壊系につながらないことを確認している。

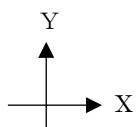
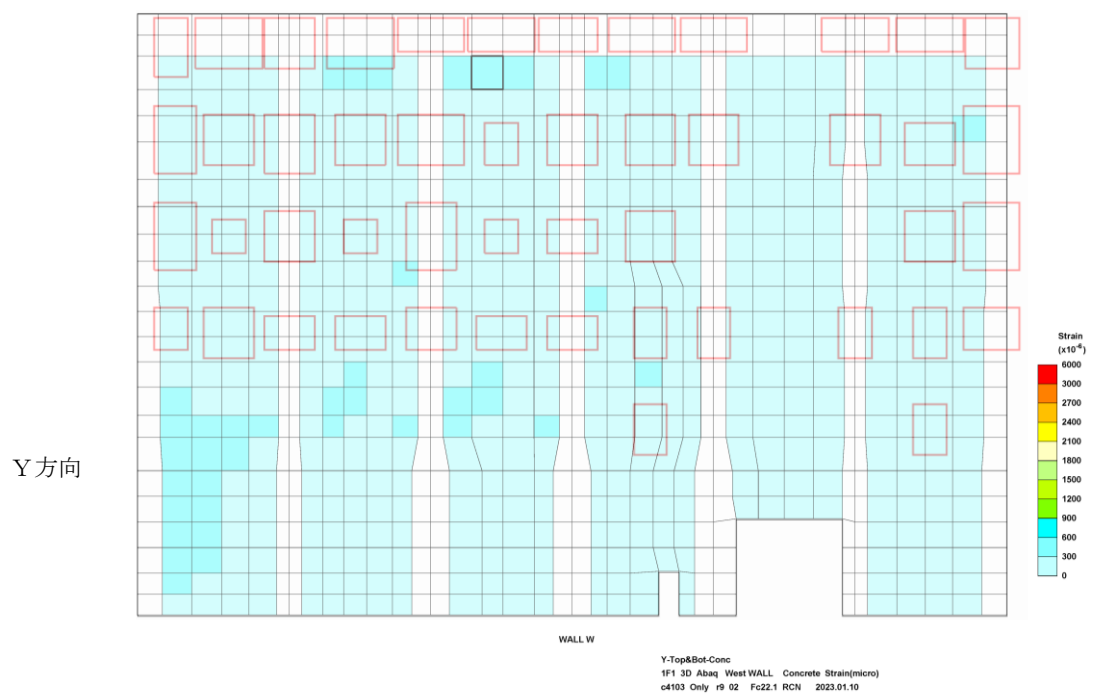
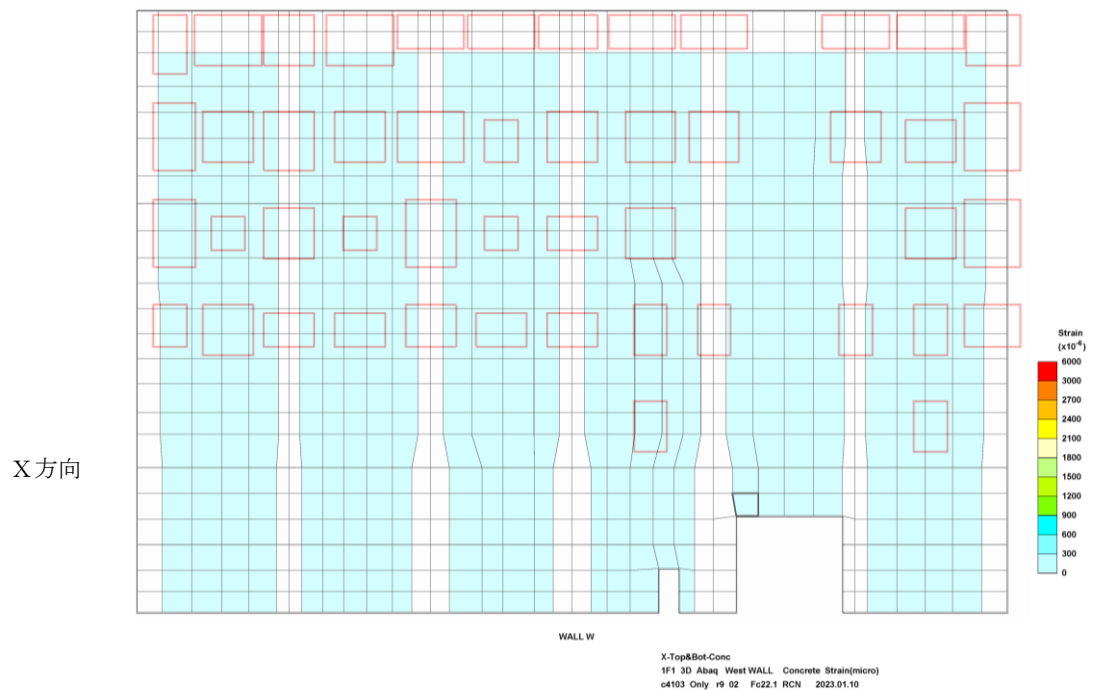
表-1.4 外壁各面の最大値一覧

部位	コンクリート ひずみ( $\times 10^{-6}$ )	鉄筋ひずみ ( $\times 10^{-6}$ )	面外せん断力 検定比
東壁	-306	983	0.533
西壁	-442	821	0.695
南壁	-279	873	0.967
北壁	-603	848	0.953



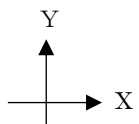
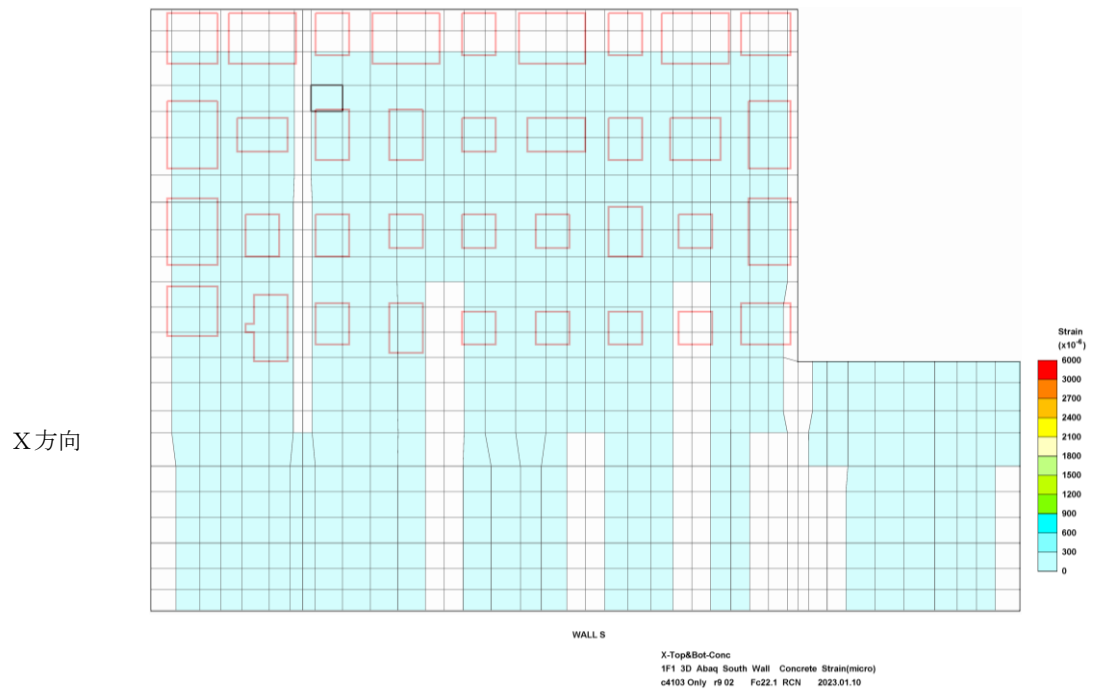
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.18 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁東面)



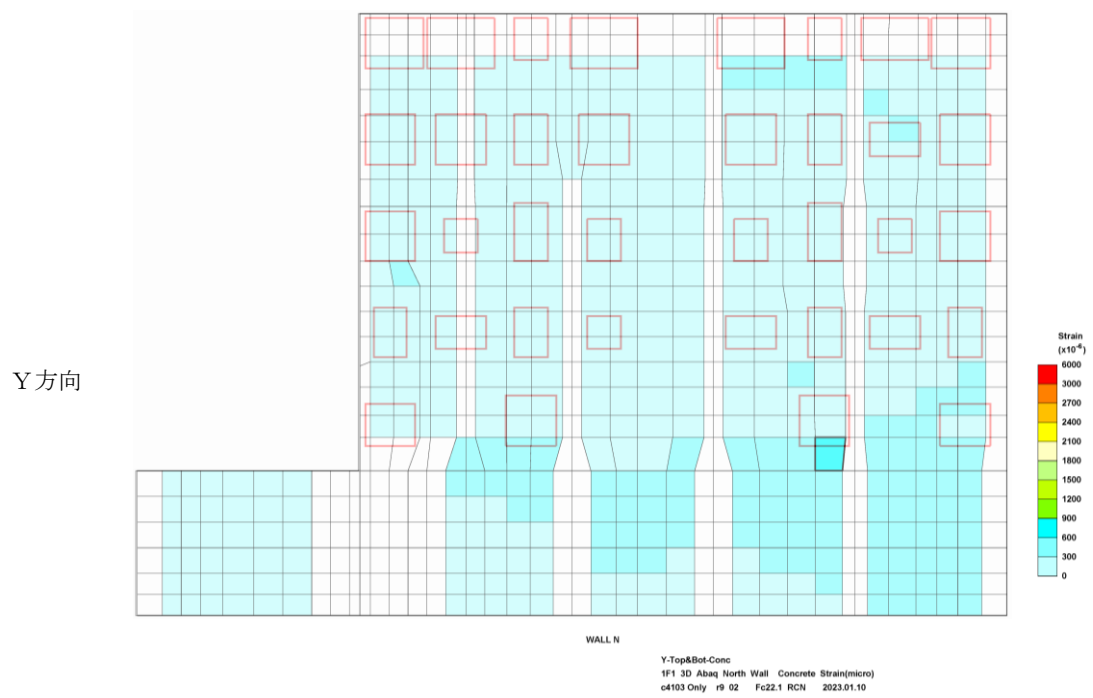
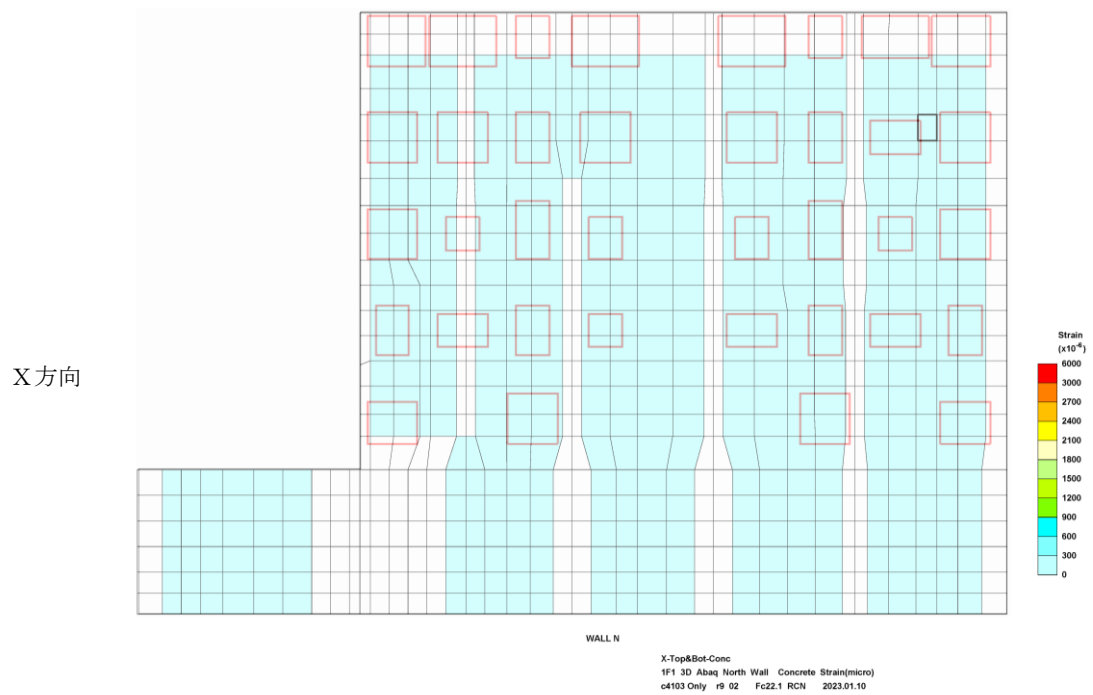
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.19 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁西面)



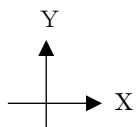
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

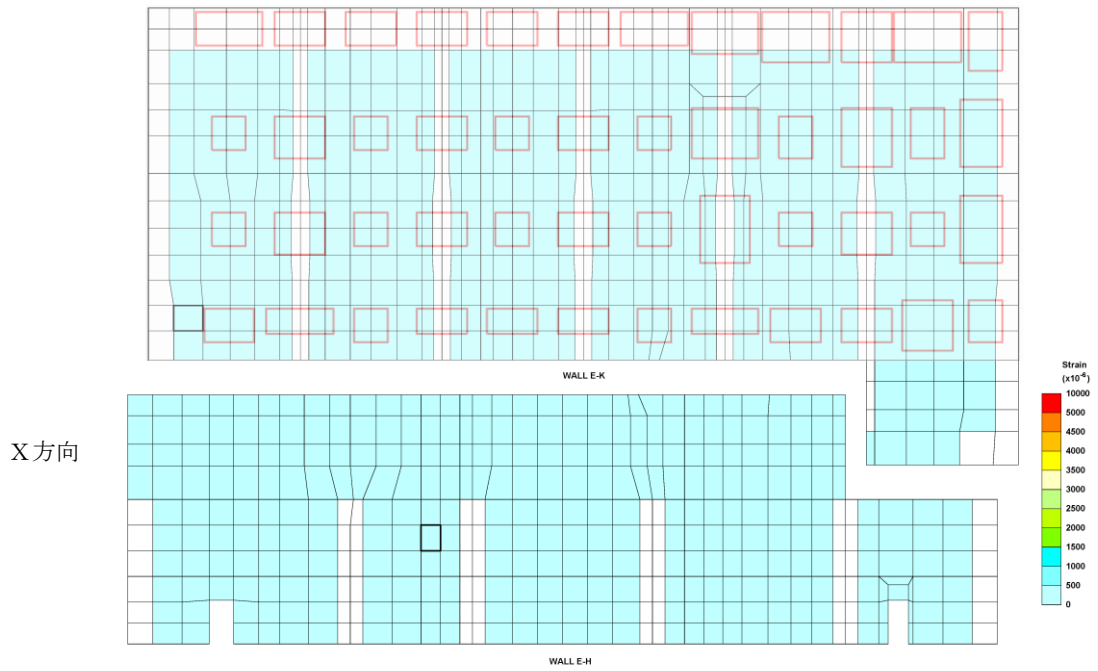
図-1.20 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁南面)



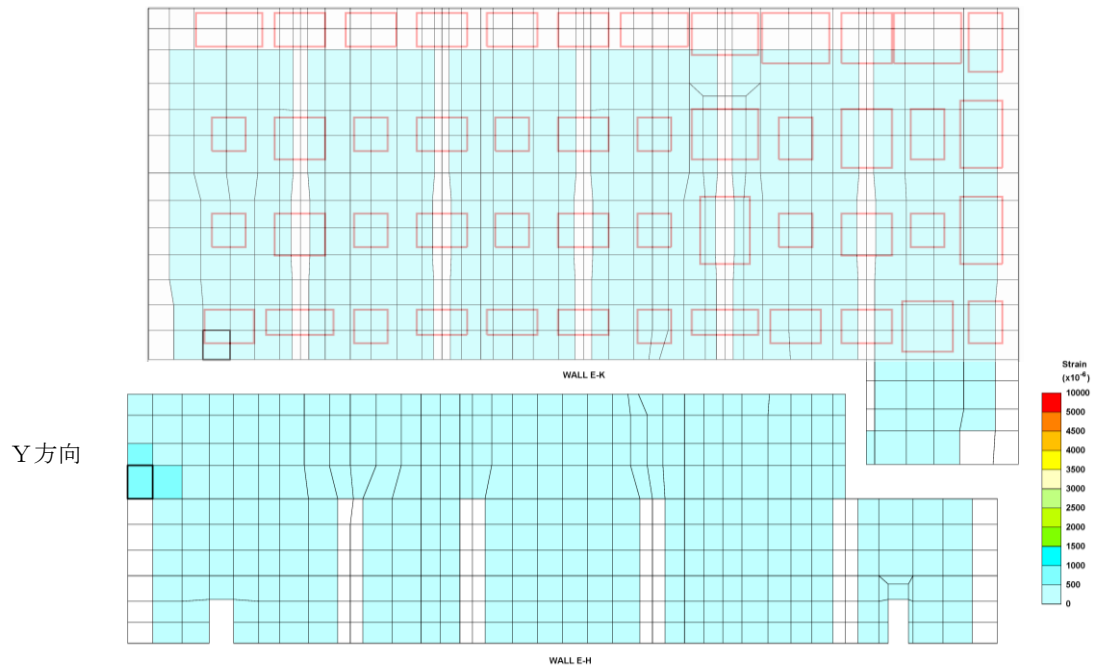
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.21 コンクリート圧縮ひずみの検定比 (建屋外壁北面)

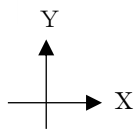




X-Top&Bot-Rbar  
1F1 3D Abaq East Wall Rebar Strain(micro)  
c4103 Only r# 02 Fc22.1 RCN 2023.01.10

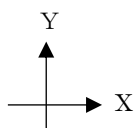
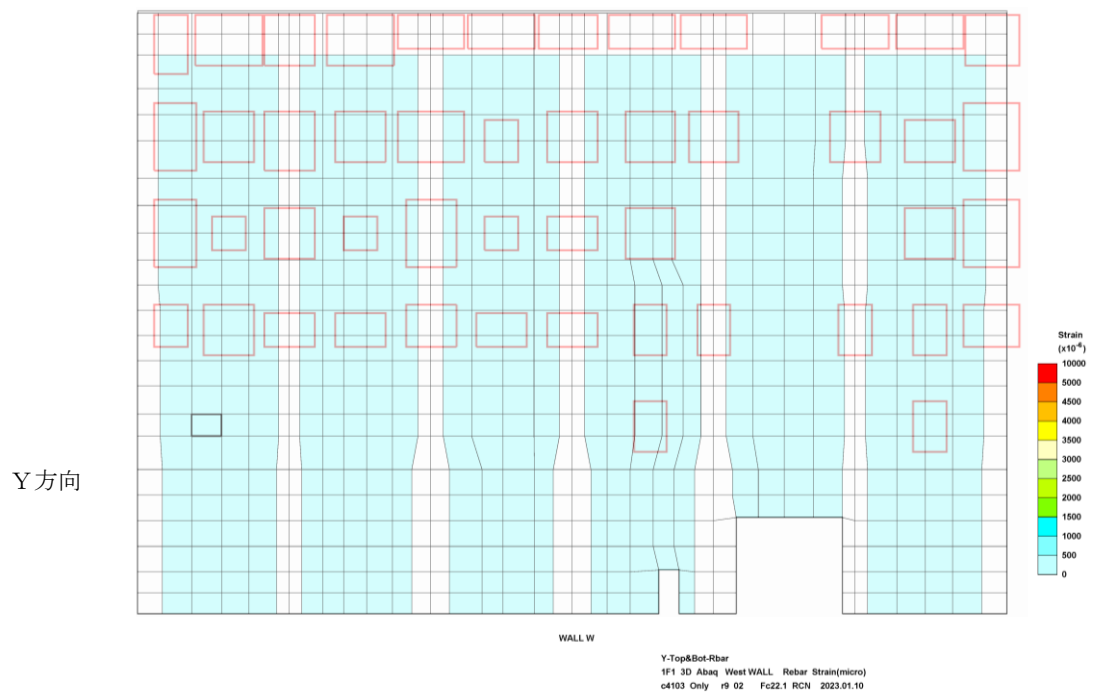
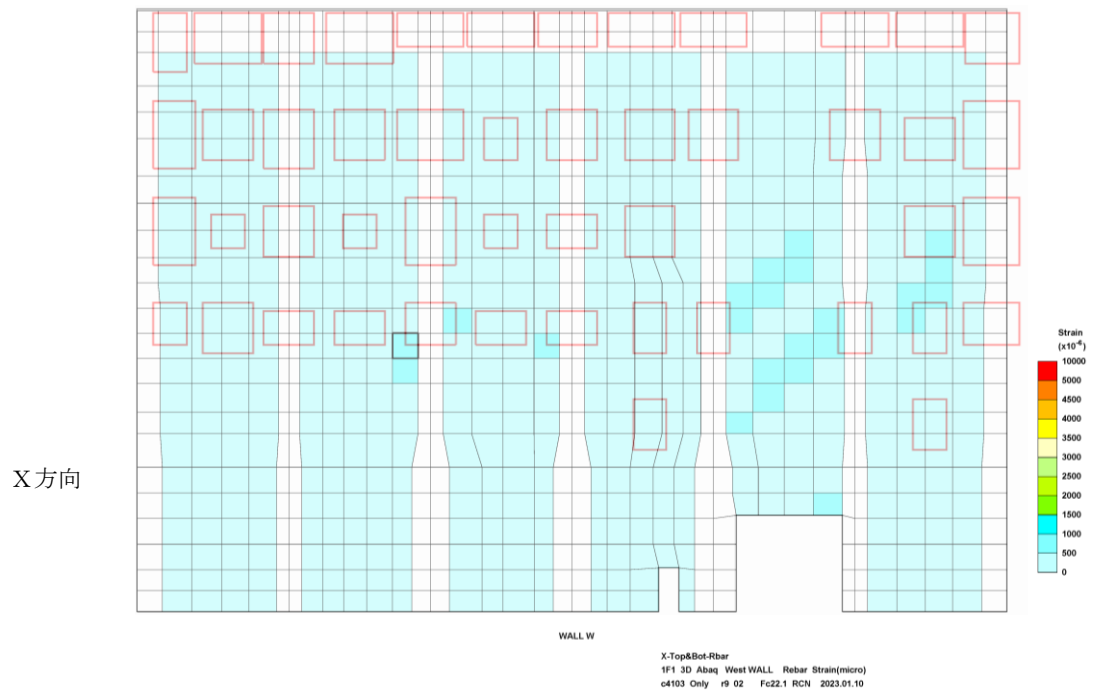


Y-Top&Bot-Rbar  
1F1 3D Abaq East Wall Rebar Strain(micro)  
c4103 Only r# 02 Fc22.1 RCN 2023.01.10



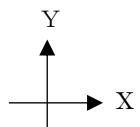
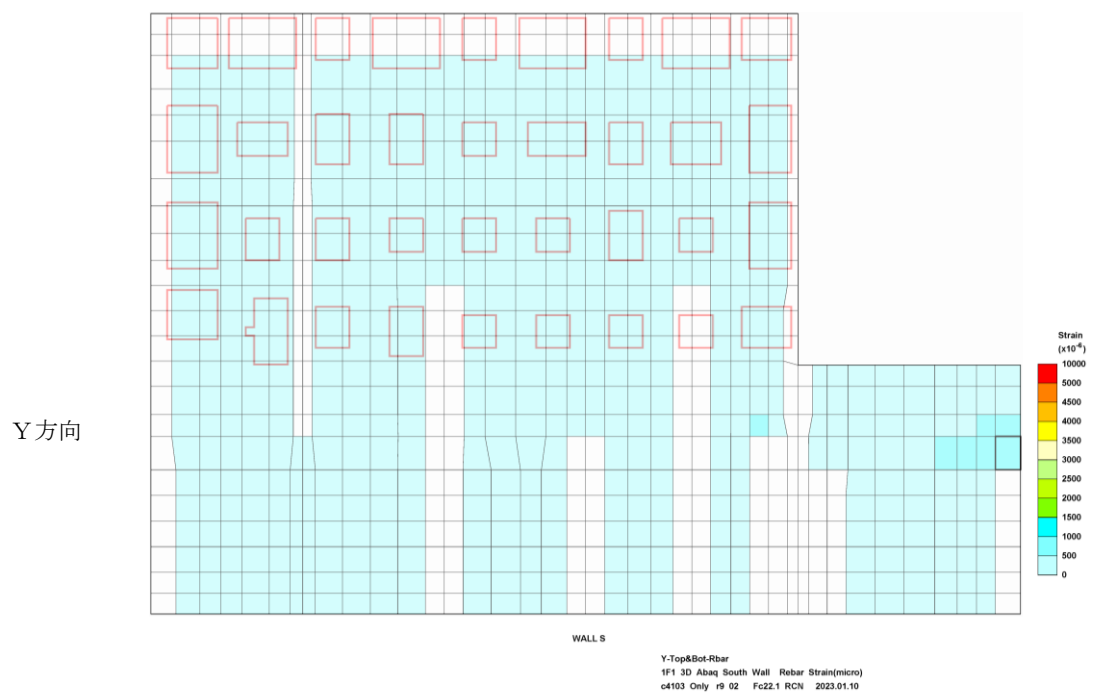
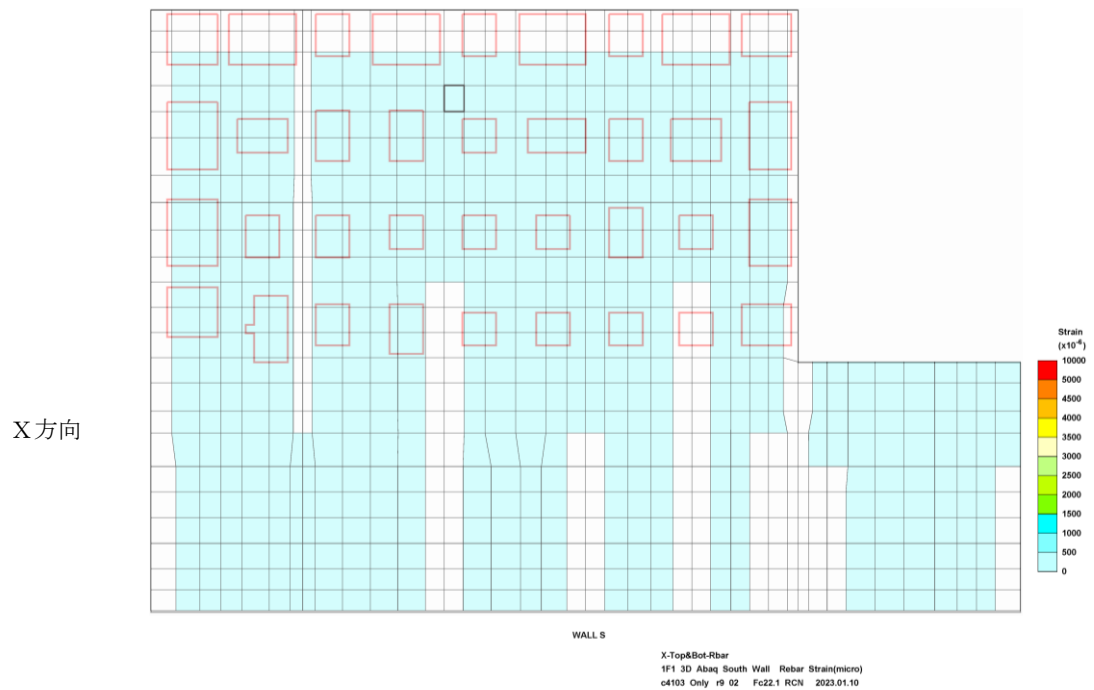
(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.22 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁東面)



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

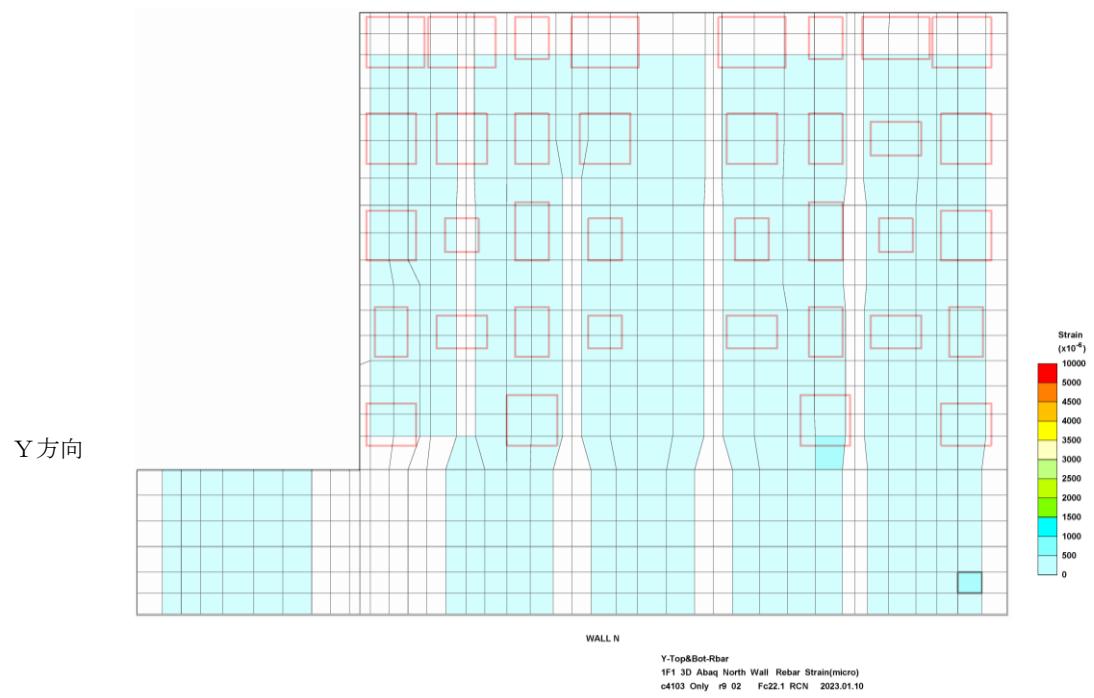
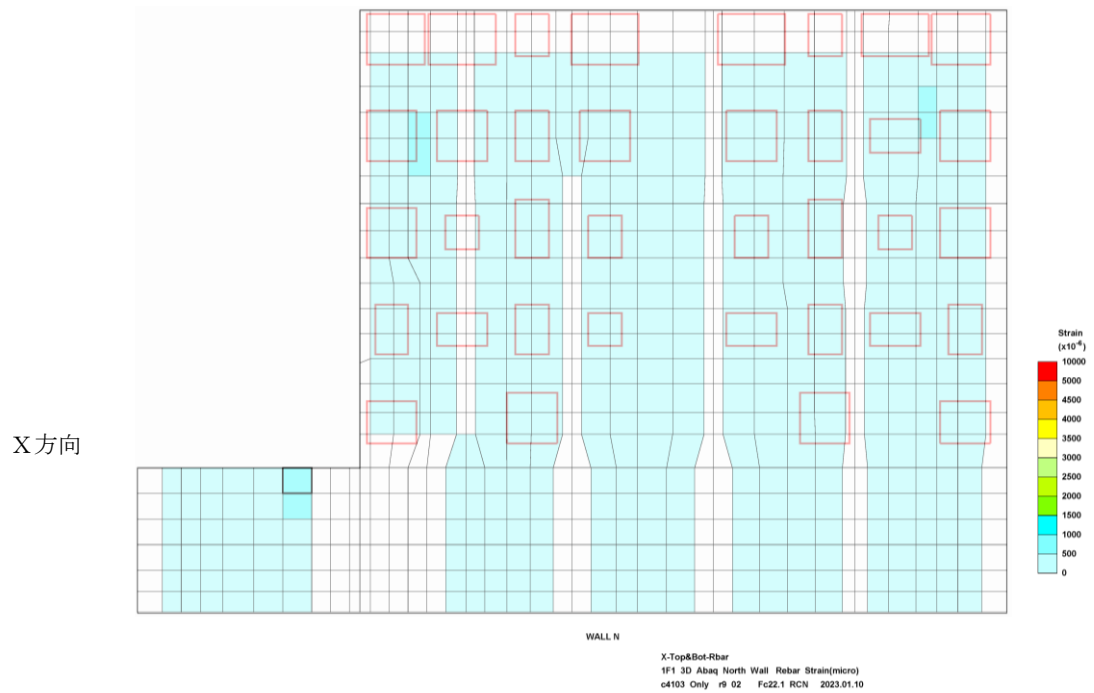
図-1.23 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁西面)



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

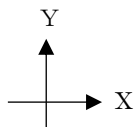
図-1.24 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁南面)

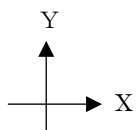
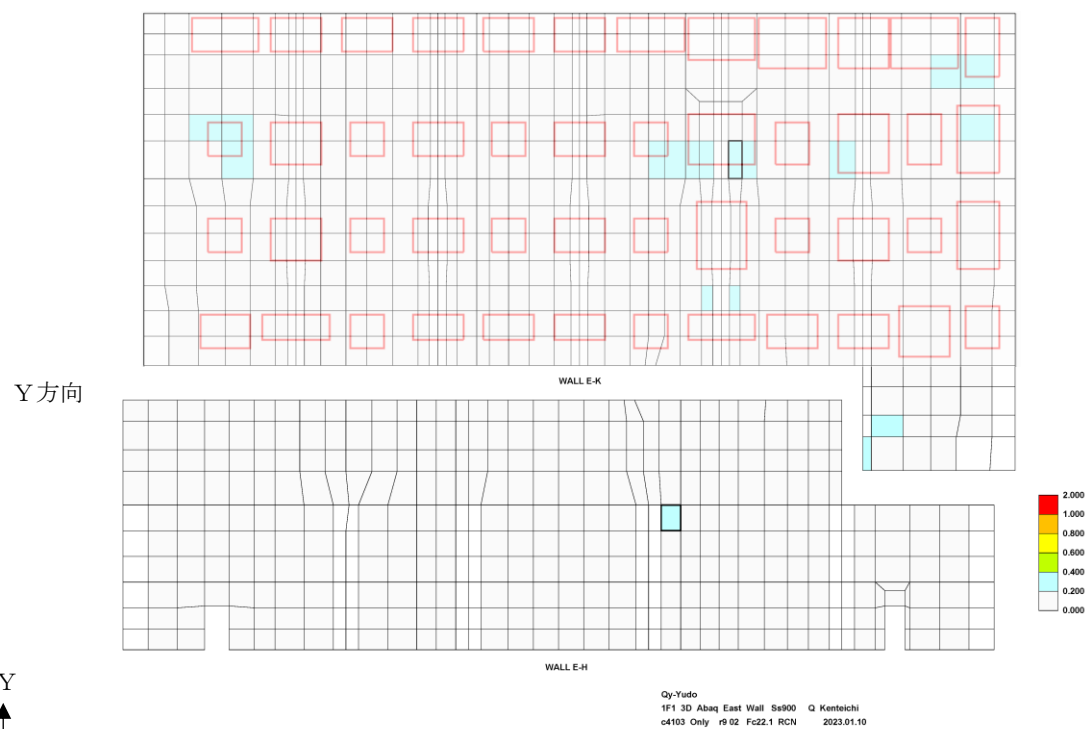
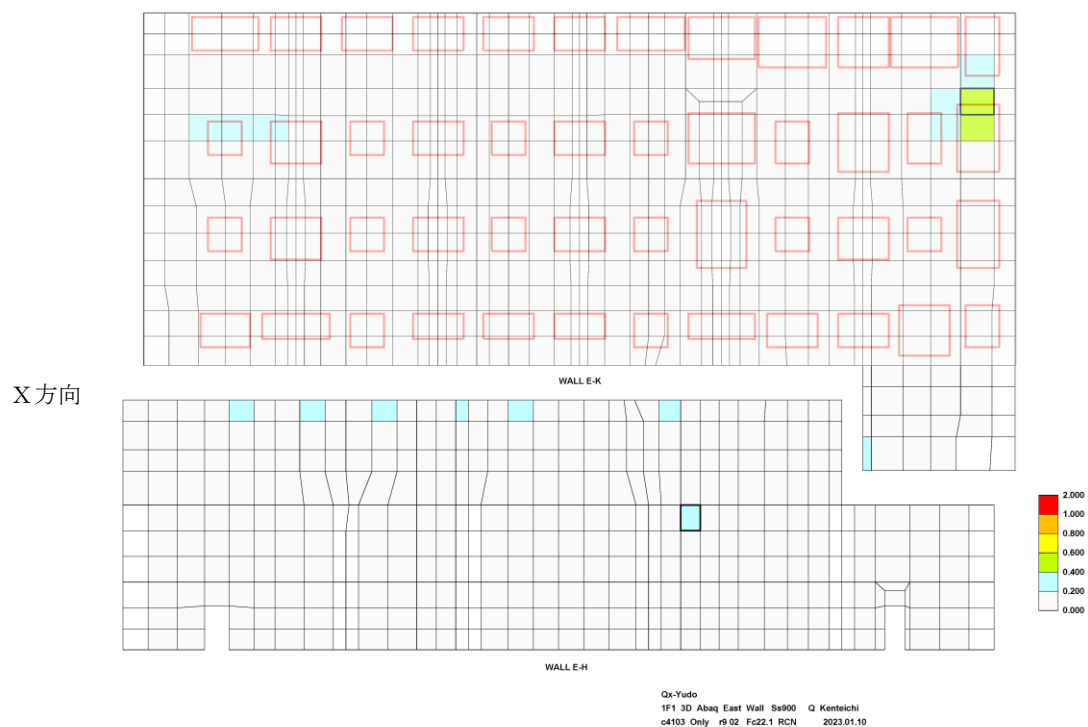




(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

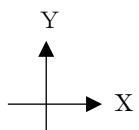
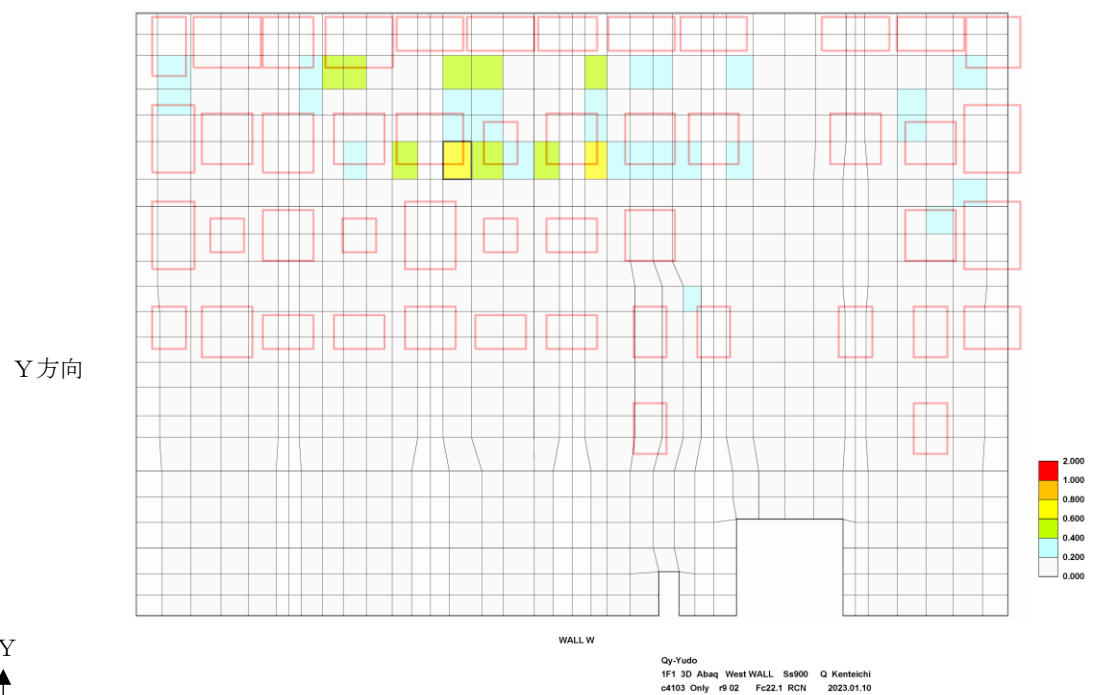
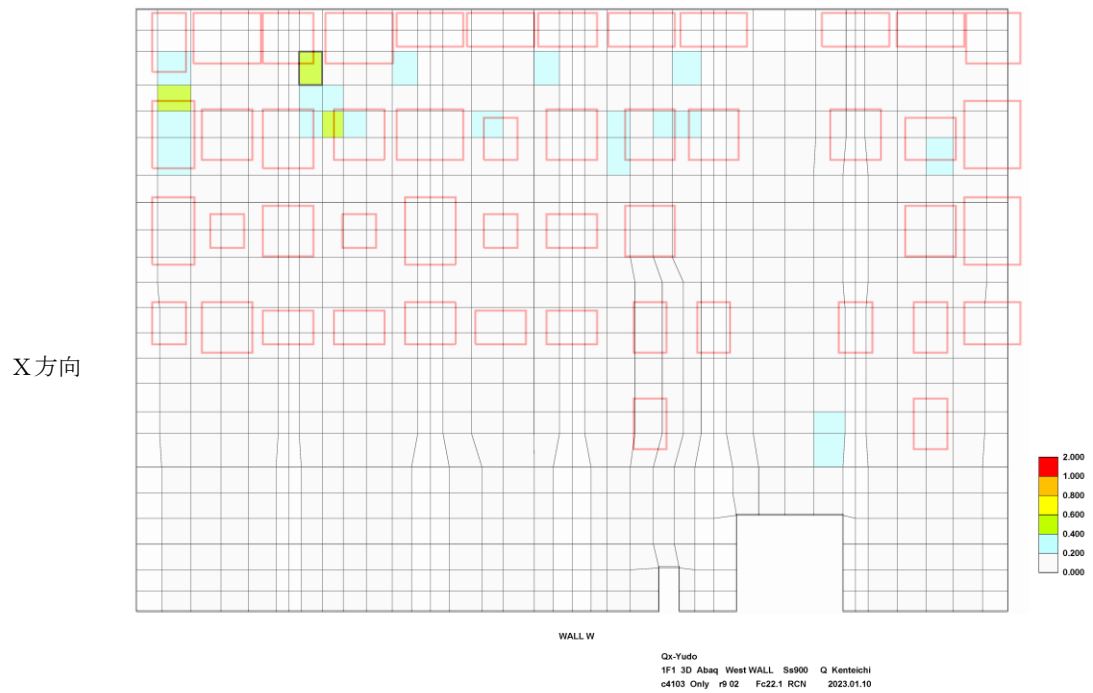
図-1.25 鉄筋ひずみの検定比 (建屋外壁北面)





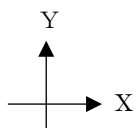
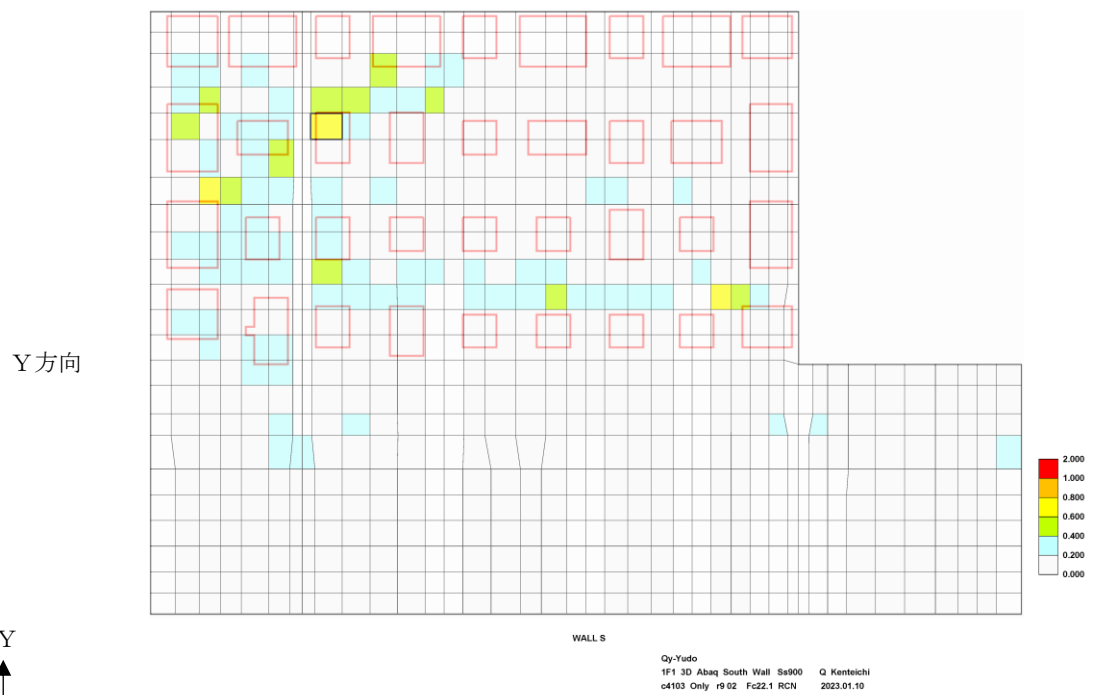
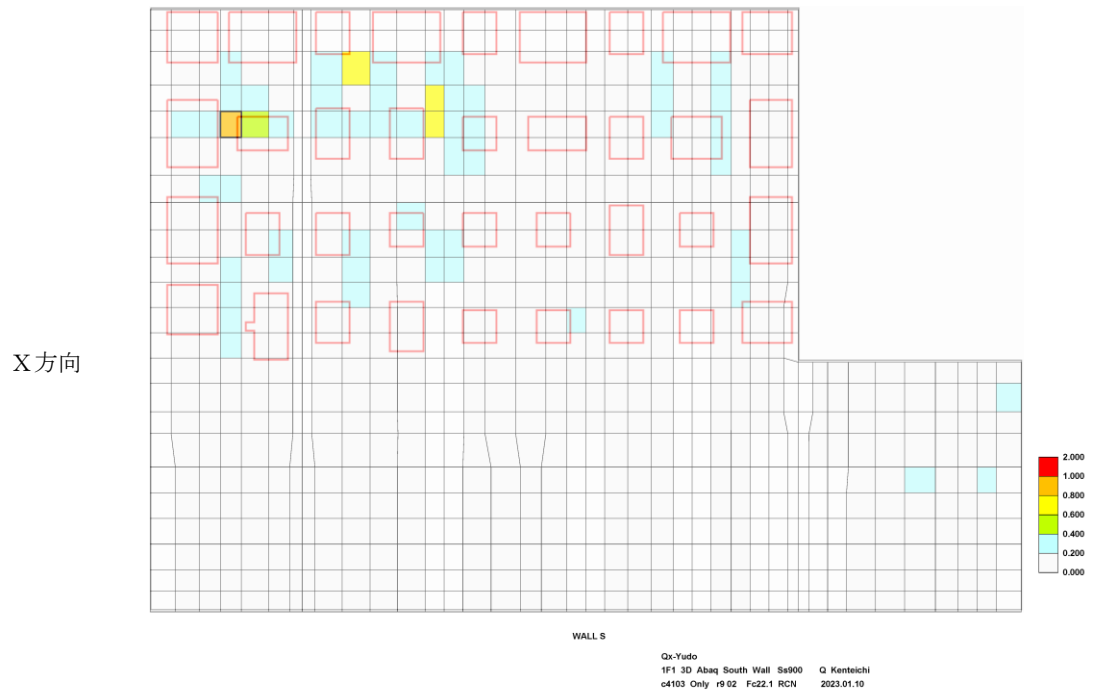
(図中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.26 面外せん断力の検定比 (建屋外壁東面)



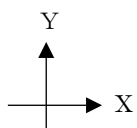
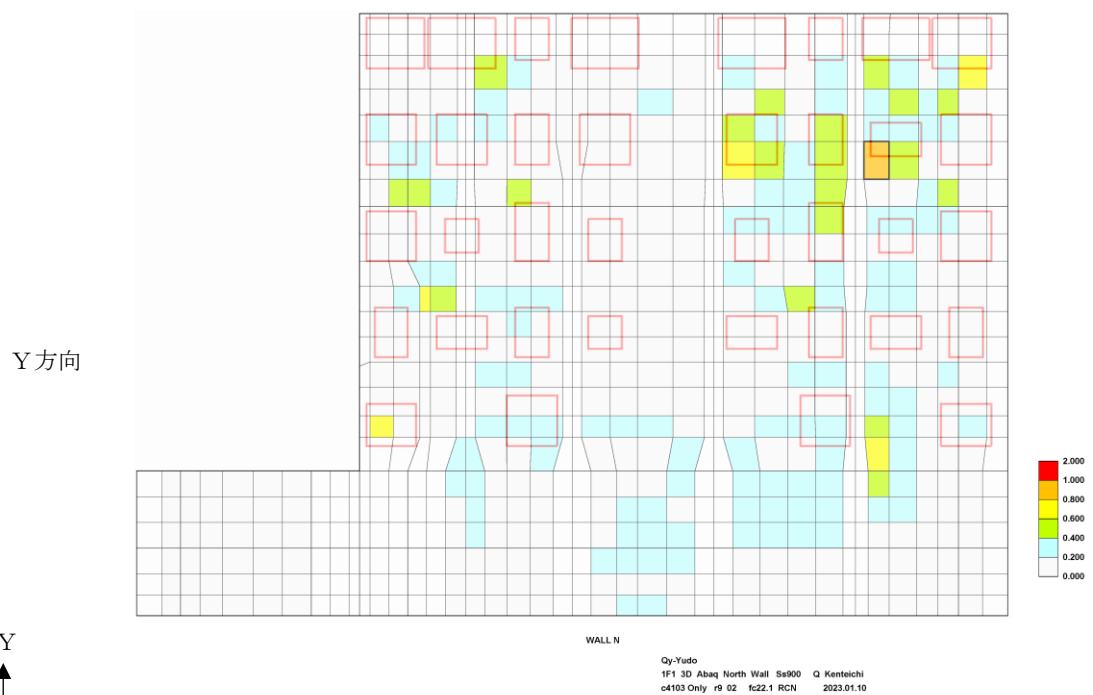
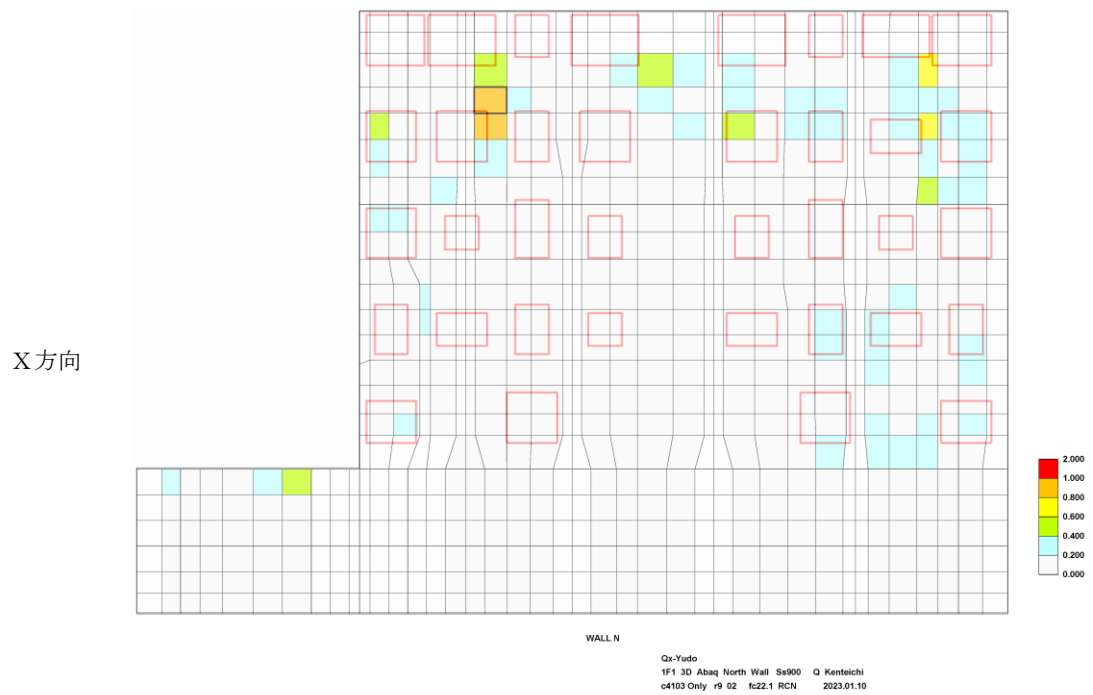
(図中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.27 面外せん断力の検定比 (建屋外壁西面)



(図中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.28 面外せん断力の検定比 (建屋外壁南面)



(图中赤枠はベースプレート設置位置を示す)

図-1.29 面外せん断力の検定比 (建屋外壁北面)

## 福島第一原子力発電所第 2 号機原子炉建屋西側外壁の開口設置について

### 1. 西側外壁開口の目的

第 2 号機原子炉建屋（以下、原子炉建屋という）の使用済燃料プール内の燃料取り出しに要する燃料取り出し用カバー（またはコンテナ）及び燃料取扱設備を設置するために、原子炉建屋上部を解体する計画である。

原子炉建屋上部解体に先立ち、オペレーティングフロア（5 階）内で準備作業として片付け、清掃及び使用済燃料プールへの養生設置を行う計画である。そのため、原子炉建屋の西側外壁の 5 階部分に作業搬出入用の前室及び開口を設置する。

なお、原子炉建屋上部解体に関しては、工事開始前までに報告し、確認を受ける。

### 2. 前室、開口概要

(1) 原子炉建屋の西側に設ける前室概要は以下の通りとする。

- ・ 構造 : 鉄骨造
- ・ 屋根外壁材 : 鋼製折板
- ・ 大きさ : 高さ方向 約 10m, 東西方向 約 16m, 南北方向 約 22m

(2) 原子炉建屋の西側外壁に設ける開口概要は以下の通りとする。

- ・ 位置 : 原子炉建屋の西側外壁
- ・ 高さ : 原子炉建屋の 5 階（開口下端レベル 地上約 30m）
- ・ 大きさ : 高さ約 7m, 幅約 5m

### 3. 開口設置方法

開口位置に附帯する設備等を図面や現場調査により確認し、安全を確保した計画を立案する。この計画に基づき、解体機械等により開口を設置する。

### 4. 開口設置作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

- ・ 開口を設置する原子炉建屋西側に構台を設置し、開口全体を覆う前室を設置する。
- ・ 開口設置作業開始前及び終了後に、飛散防止剤を散布する。
- ・ 前室の外部にダストモニタを設置し、放射性物質の有意な変化を確認した場合は、速やかに作業を中断する。
- ・ 前室空気中の放射性物質を低減するため、前室内の空気を換気空調設備により吸気する。吸気した空気はフィルタユニットにより除塵し、前室に戻す。また、換気空調設備入口にダストモニタを設置し、前室空気中の放射性物質濃度を計測する。

## 5. 津波・台風・竜巻・豪雨の影響

前室及び開口は、15m 級津波が到達しないと考えられる地上約 30m の高さに設置する。前室は、建築基準法及び関係法令に基づく風圧力に対し耐えられるよう設計し、開口は、建築基準法及び関係法令に基づく風圧力に対し耐えられるよう設計している前室内に設置する。前室は、鋼製折板にて覆うことにより風雨を遮る設計とし、開口は、風雨を遮る設計としている前室内に設置する。

## 6. 耐震安全性

### (1) 適用規格

耐震安全性の検討は、下記に準拠して行う。

- ・ 建築基準法及び関連法令
- ・ 原子力施設鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2013 年）
- ・ 鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説（日本建築学会，2010 年）
- ・ 原子力発電所耐震設計技術指針（JEAG4601-1987）
- ・ 原子力発電所耐震設計技術指針（JEAG4601-1991 補）
- ・ 原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601-2008）
- ・ 鋼構造設計規準（日本建築学会，2005 年）
- ・ 鋼構造接合部設計指針（日本建築学会，2006 年）
- ・ 日本産業規格（JIS）

### (2) 原子炉建屋の検討結果

開口（せん断断面積及び断面二次モーメントを低減）並びに構台及び使用済燃料プールへの養生の重量を考慮した原子炉建屋の解析モデルを用い、基準地震動  $S_s$  による地震応答解析を実施した。その結果、耐震壁のせん断ひずみが評価基準値  $4.0 \times 10^{-3}$  を下回っており、耐震安全性を確保していることを確認した。（最大値： $0.17 \times 10^{-3}$ （5 階， $S_s-1$ ，EW 方向））（詳細は別添－1 を参照）

### (3) 前室の検討結果

主要な鉄骨部材からなる立体架構モデルを用い、原子力発電所耐震設計技術指針に定める C クラス相当の地震力に対して、断面検討を実施した。その結果、全ての部材に対する検定比（作用応力度/許容応力度）が 1 を下回っており、耐震安全性を確保していることを確認した。（最大値：0.21）

## 7. 開口設置に伴う放射性物質の環境影響

燃料取り出しに向け原子炉建屋西側外壁に開口を設置した場合、開口部からの放射性物質の飛散が懸念される。このため、放射性物質の放出量について評価を行った結果、敷地

境界における被ばく評価への影響は少ないと評価される。(詳細は別添-2を参照)

#### 8. 廃棄物の保管

解体撤去に伴い発生する固体廃棄物の発生量は約 31 m<sup>3</sup> (コンクリート約 26 m<sup>3</sup>, 金属類約 5 m<sup>3</sup>), 線量率は 1 ~ 30mSv/h と想定しており, 「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い, 構内一時保管エリアにて保管・管理する。

#### 9. 作業者の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所では, 外部放射線に係わる線量率を把握し, 放射線業務従事者等の立入頻度や滞在時間等を管理することで, 作業時における放射線業務従事者が受ける線量が労働安全衛生法及びその関連法令に定められた線量限度 (100mSv/5年及び50mSv/年) を超えないようにする。

開口設置作業における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として, 以下の対策を実施する。

- ・省人化を目的とした遠隔操作設備の設置による作業員被ばく量の低減
- ・遮蔽した退避場所の設置による作業員被ばく量の低減
- ・必要に応じ作業員の被ばく量を低減させるための遮蔽ベストの着用
- ・作業時間管理による作業員被ばくの低減

高線量エリアにおける施工であるため, 現場状況を踏まえ, 今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去, 線源に対する遮蔽, 作業区域管理の検討を行い, 更なる被ばく線量低減に努める。

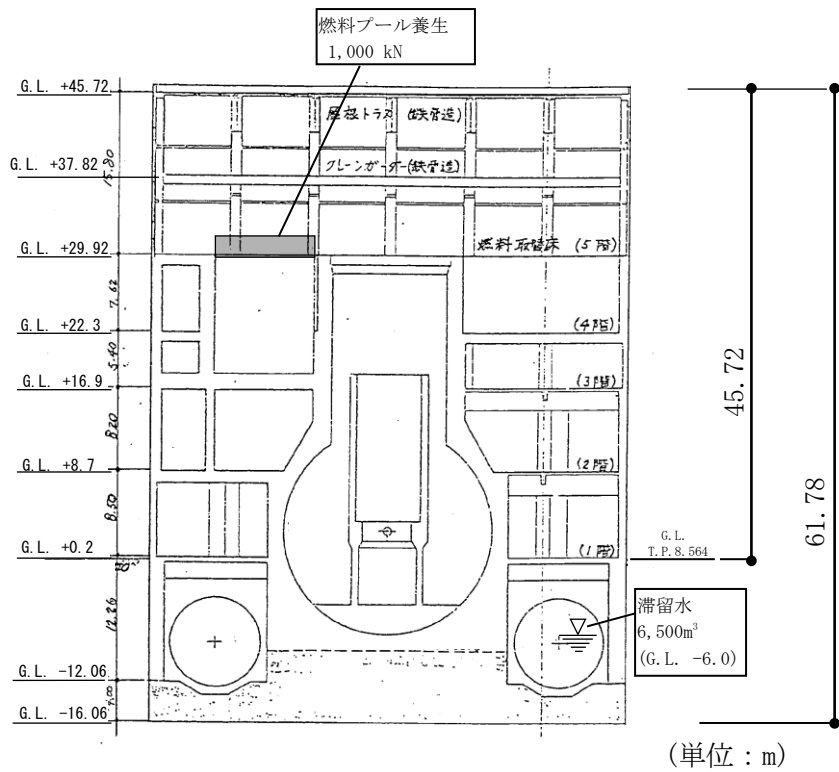


## 第2号機原子炉建屋西側外壁開口設置後の原子炉建屋の耐震安全性

### 1. はじめに

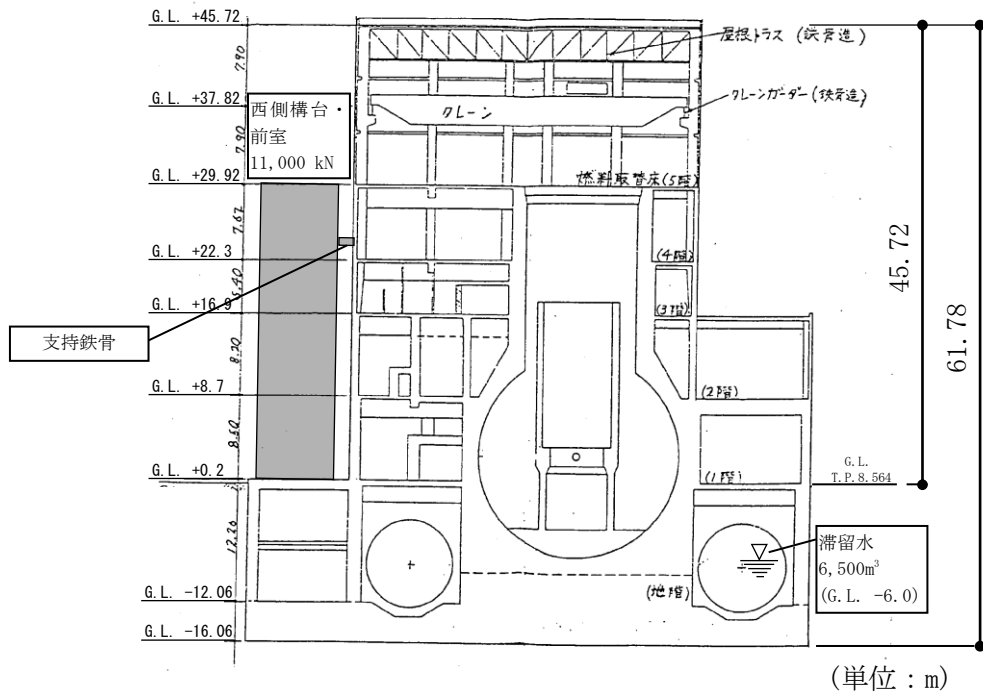
本書は、「Ⅱ章 2.6 添付資料－2 構造強度及び耐震性（地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全性評価）」で用いた解析モデルを基本に、西側外壁開口、西側構台・前室及び燃料プール落下防止養生の重量を考慮した解析モデルを用いて基準地震動  $S_s$  に対する評価を行う。なお、評価に用いる地震動（基準地震動  $S_s$ ）及び地盤定数は「Ⅱ章 2.6 添付資料－2 構造強度及び耐震性（地下滞留水を考慮した建屋の耐震安全性評価）」で用いたものと同じである。

建屋の概要図を図 1－1 に示す。



(a) NS 方向断面

西側外壁開口：高さ約7m×幅 約5m



(b) EW 方向断面

図 1-1 原子炉建屋の概略断面図

添付資料7に記載の標高は、震災後の地盤沈下量(-709mm)とO.P.からT.P.への読替値(-727mm)を用いて、下式に基づき換算している。  
 <換算式> T.P. = 旧 O.P. - 1,436mm

## 2. 解析に用いる入力地震動

原子炉建屋への入力地震動は、解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  を用いる。

地震応答解析に用いる入力地震動の概念図を図 2-1 に示す。この原子炉建屋の解析モデルに入力する地震動は、一次元波動論に基づき、解放基盤表面レベルに想定する基準地震動  $S_s$  に対する建屋基礎底面レベルの地盤応答として評価する。また、建屋基礎底面レベルにおけるせん断力を入力地震動に付加することにより、地盤の切欠き効果を考慮する。

解放基盤表面位置 (G.L. -206m (震災前 O.P. -196.0m)) における基準地震動  $S_s$  の加速度波形については、図 2-2 に示す。

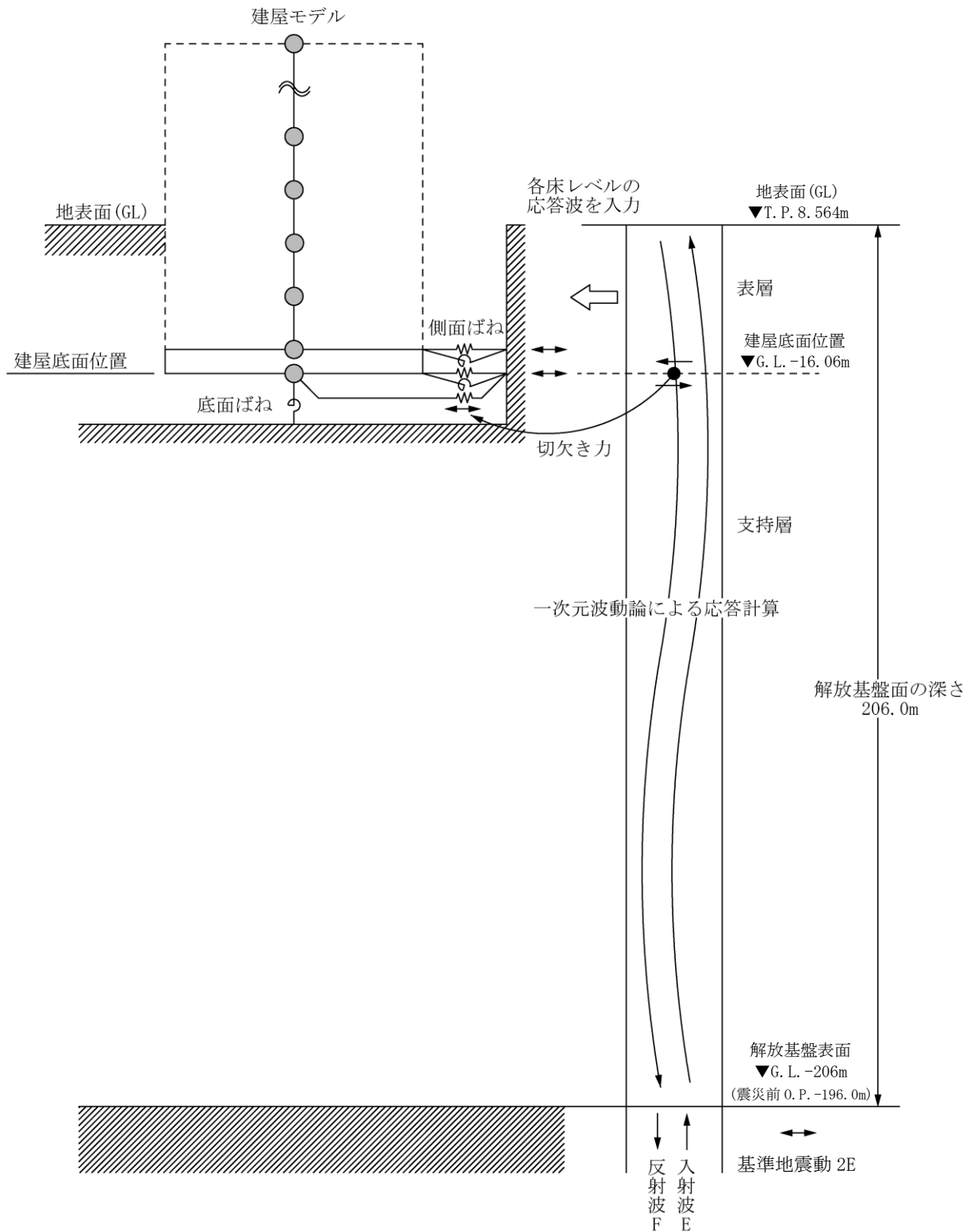


図 2 - 1 地震応答解析に用いる入力地震動の概念図 (水平方向)

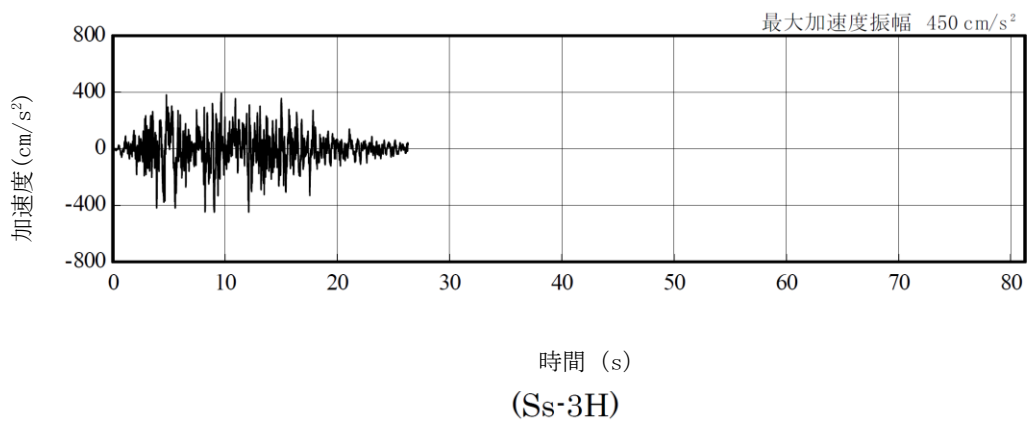
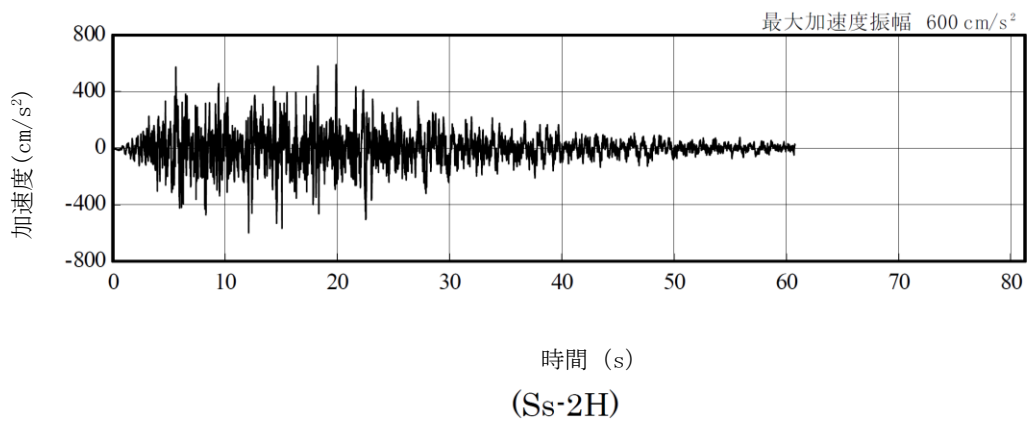
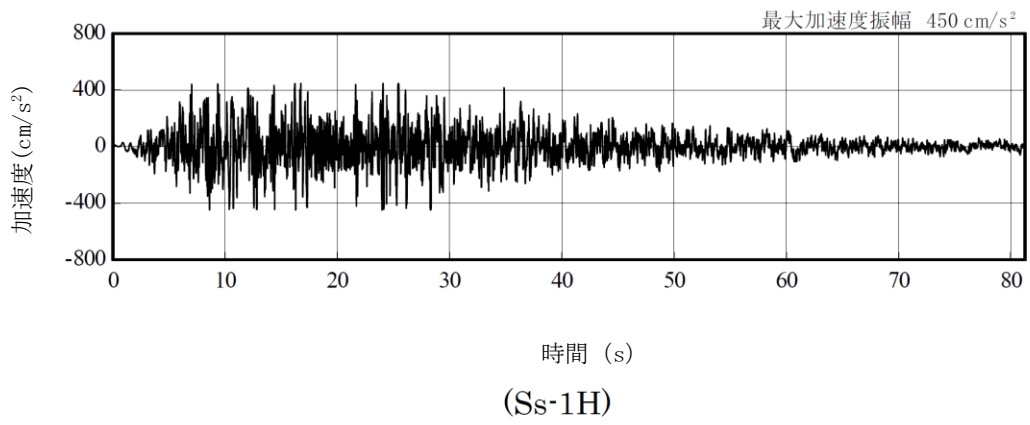


図 2 - 2 解放基盤表面位置における地震動の加速度時刻歴波形（水平方向）

### 3. 地震応答解析モデル

基準地震動  $S_s$  に対する原子炉建屋の地震応答解析は、「2. 解析に用いる入力地震動」で算定した入力地震動を用いた動的解析による。

地震応答解析モデルは、図 3-1 に示すように、建屋を曲げ変形とせん断変形をする質点系とし、地盤を等価なばねで評価した建屋-地盤連成系モデルとする。建屋-地盤連成系としての効果は地盤ばね及び入力地震動によって評価される。建屋解析モデルの諸元は、滞留水を貯留している建屋の耐震安全性を評価した諸元に、オペレーティングフロア階に設けた西側外壁開口、西側構台・前室の重量及び燃料プール落下防止養生の重量を考慮する。建屋解析モデルの諸元に追加した重量を表 3-1 に、建屋モデル諸元を表 3-2 に示す。

表 3-1 建屋解析モデル追加重量

	質点	G. L. (m)	重量 (kN)
燃料プール落下防止養生	3	+29.92	1,000
西側構台・前室	4	+22.3	9,000
	7	+0.2	2,000
合計			12,000

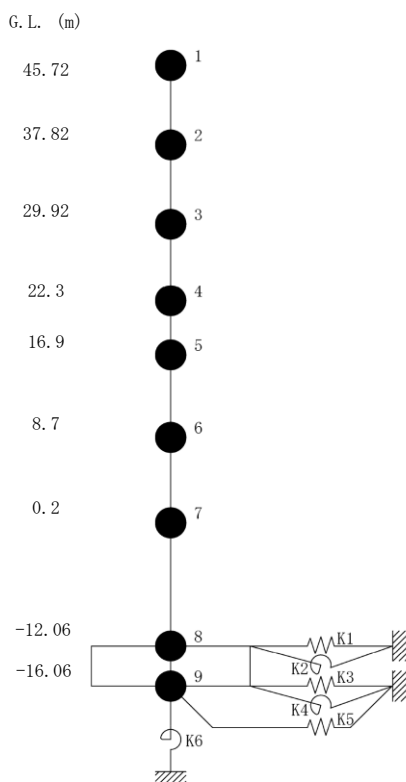
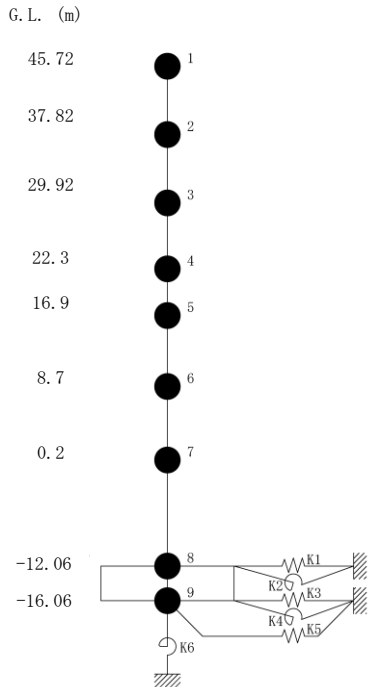


図 3-1 原子炉建屋 地震応答解析モデル (NS, EW 方向)

表 3-2 建屋解析モデルの諸元  
(NS 方向)

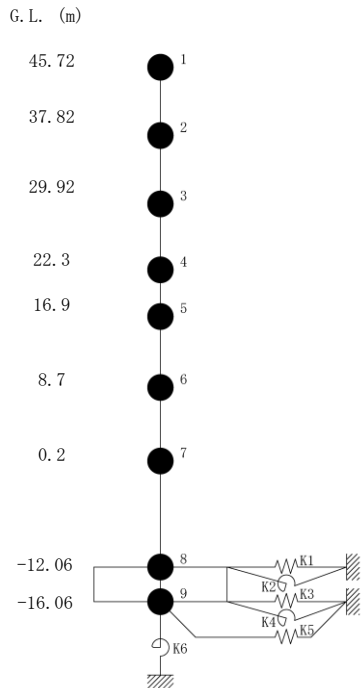


質点番号	質点重量 W(kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_s (\text{m}^2)$	断面2次モーメント $I (\text{m}^4)$
1	14,380	25.99		
2	10,220	18.53	18.6	10,154
3	59,470 [1,000]	107.62 [1.81]	17.4 {1.2}	10,650 {25}
4	79,440 <9,000>	143.78 <16.29>	184.3	22,551
5	107,720	194.96	166.8	24,629
6	116,670	211.14	249.3	44,401
7	201,190 <2,000>	364.11 <3.62>	157.1	40,661
8	341,290 (63,750)	617.55 (115.35)	456.8	110,444
9	125,030	226.24	2,656.2	480,675
合計	1,055,410			

注 ( ) 内は滞留水による付加重量分を示す。  
 [ ] 内は燃料プール養生による付加重量分を示す。  
 < > 内は燃料取り出し用西側構台による付加重量分を示す。  
 { } 内は耐震壁開口による減少分を示す。

ヤング係数  $E_c$   $2.57 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 せん断弾性係数  $G$   $1.07 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 ポアソン比  $\nu$  0.20  
 減衰  $h$  5%  
 基礎形状 46.60m(NS方向) × 57.00m(EW方向)

(EW 方向)



質点番号	質点重量 W(kN)	回転慣性重量 $I_G (\times 10^5 \text{kN}\cdot\text{m}^2)$	せん断断面積 $A_s (\text{m}^2)$	断面2次モーメント $I (\text{m}^4)$
1	14,380	14.71		
2	10,220	10.40	14.0	5,941
3	59,470 [1,000]	60.74 [1.02]	14.0	6,307
4	79,440 <9,000>	81.06 <9.18>	108.2	11,927
5	107,720	194.96	117.3	14,199
6	116,670	211.14	185.7	33,796
7	201,190 <2,000>	544.79 <5.42>	173.1	41,960
8	341,290 (63,750)	923.98 (172.59)	418.1	132,121
9	125,030	338.53	2,656.2	719,166
合計	1,055,410			

注 ( ) 内は滞留水による付加重量分を示す。  
 [ ] 内は燃料プール養生による付加重量分を示す。  
 < > 内は燃料取り出し用西側構台による付加重量分を示す。

ヤング係数  $E_c$   $2.57 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 せん断弾性係数  $G$   $1.07 \times 10^7$  (kN/m<sup>2</sup>)  
 ポアソン比  $\nu$  0.20  
 減衰  $h$  5%  
 基礎形状 46.60m(NS方向) × 57.00m(EW方向)

4. 耐震安全性評価結果（耐震壁のせん断ひずみの確認）

地震応答解析により得られた耐震壁のせん断ひずみ一覧を表4-1に示す。せん断ひずみは基準地震動  $S_s$  による解析でも、最大で  $0.17 \times 10^{-3}$  であり、評価基準値 ( $4.0 \times 10^{-3}$ ) 以下である。

表4-1 耐震壁のせん断ひずみ一覧

(NS 方向)

(単位： $\times 10^{-3}$ )

G. L. (m)	Ss-1H		Ss-2H		Ss-3H		評価基準
	今回	参考*1	今回	参考*1	今回	参考*1	
45.72~37.82	0.09	0.09	0.08	0.08	0.07	0.07	4.0 以下
37.82~29.92	0.15	0.14	0.13	0.12	0.12	0.11	
29.92~22.3	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	0.03	
22.3~16.9	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.06	
16.9~8.7	0.07	0.07	0.08	0.07	0.07	0.06	
8.7~0.2	0.15	0.15	0.16	0.15	0.14	0.13	
0.2~-12.06	0.08	0.07	0.08	0.08	0.07	0.07	

\*1: 「西側外壁開口, 西側構台及び燃料プール落下防止養生の重量」を考慮しない場合

(EW 方向)

(単位： $\times 10^{-3}$ )

G. L. (m)	Ss-1H		Ss-2H		Ss-3H		評価基準
	今回	参考*1	今回	参考*1	今回	参考*1	
45.72~37.82	0.11	0.11	0.11	0.11	0.10	0.10	4.0 以下
37.82~29.92	0.17	0.17	0.16	0.16	0.15	0.15	
29.92~22.3	0.07	0.06	0.06	0.06	0.06	0.05	
22.3~16.9	0.10	0.10	0.10	0.09	0.09	0.08	
16.9~8.7	0.10	0.10	0.10	0.10	0.09	0.08	
8.7~0.2	0.14	0.14	0.15	0.14	0.12	0.12	
0.2~-12.06	0.08	0.08	0.09	0.08	0.07	0.07	

\*1: 「西側外壁開口, 西側構台及び燃料プール落下防止養生の重量」を考慮しない場合



## 第2号機原子炉建屋西側外壁開口設置後の放射性物質の放出量評価

## 1. 放出量評価方法の考え方

原子炉建屋西側外壁開口設置後の放出量評価は、従前の放出箇所であるブローアウトパネルの隙間・原子炉建屋排気設備出口・原子炉格納容器ガス管理設備に加え、新たに設置する開口を考慮して評価を行った。

本評価は、開口設置前に採取した平成27年8月～平成29年2月の期間において、原子炉建屋排気設備入口で最大濃度であった平成27年9月のダスト濃度を評価に適用した。

開口設置に際し、放射性物質の飛散抑制のために開口全体を覆う前室を設置する。そのため、新たに設置する開口の面積については、前室と開口の間に生ずる隙間（以下「開口の隙間」という）を開口面積として評価に適用した。

なお、大物搬入口、二重扉、非常用扉については、実態にあわせた開口面積を評価に適用した。

## 2. 放出量評価

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間・原子炉建屋排気設備出口・原子炉格納容器ガス管理設備の各放出箇所において、下記のとおりの評価を行った。

## ① 開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間に関しては、外部の風による流量の変動幅が大きいため、変動幅を考慮して評価を行った。

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間からの放出量（最大）

$$\begin{aligned} &= \text{原子炉建屋排気設備入口のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \\ &\quad \times \text{流量 (開口の隙間の流量+ブローアウトパネルの隙間の流量)} \\ &= 4.6 \times 10^{-5} [\text{Bq/cm}^3] \times (9.6 \times 10^3 + 1.5 \times 10^4) [\text{m}^3/\text{h}] \times 10^6 [\text{cm}^3/\text{m}^3] \\ &= \text{約 } 1.1 \times 10^6 [\text{Bq/h}] \quad = \text{約 } 1.1 \times 10^{-2} [\text{億 Bq/h}] \end{aligned}$$

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間からの放出量（最小）

$$\begin{aligned} &= \text{原子炉建屋排気設備入口のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \\ &\quad \times \text{流量 (開口の隙間の流量+ブローアウトパネルの隙間の流量)} \\ &= 4.6 \times 10^{-5} [\text{Bq/cm}^3] \times (3.8 \times 10^3 + 7.9 \times 10^3) [\text{m}^3/\text{h}] \times 10^6 [\text{cm}^3/\text{m}^3] \\ &= \text{約 } 5.4 \times 10^5 [\text{Bq/h}] \quad = \text{約 } 5.4 \times 10^{-3} [\text{億 Bq/h}] \end{aligned}$$

② 原子炉建屋排気設備

原子炉建屋排気設備からの放出量

$$\begin{aligned} &= \text{原子炉建屋排気設備出口の月間平均ダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \\ &\quad \times \text{原子炉建屋排気設備の流量} \\ &= 4.9 \times 10^{-7} [\text{Bq/cm}^3] \times 1.0 \times 10^4 [\text{m}^3/\text{h}] \times 10^6 [\text{cm}^3/\text{m}^3] \\ &= \text{約 } 4.9 \times 10^3 [\text{Bq/h}] \quad = \text{約 } 4.9 \times 10^{-5} [\text{億 Bq/h}] \end{aligned}$$

③ 原子炉格納容器ガス管理設備

原子炉格納容器ガス管理設備からの放出量

$$\begin{aligned} &= \text{原子炉格納容器ガス管理設備出口の月間平均ダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \\ &\quad \times \text{原子炉格納容器ガス管理設備の流量} \\ &= 1.2 \times 10^{-5} [\text{Bq/cm}^3] \times 1.9 \times 10^1 [\text{m}^3/\text{h}] \times 10^6 [\text{cm}^3/\text{m}^3] \\ &= \text{約 } 2.2 \times 10^2 [\text{Bq/h}] \quad = \text{約 } 2.2 \times 10^{-6} [\text{億 Bq/h}] \end{aligned}$$

※計算に引用した数値（ダスト濃度・流量）は以下のとおり。

・ダスト濃度

平成 27 年 9 月の原子炉建屋排気設備入口のダスト濃度，原子炉建屋排気設備出口及び原子炉格納容器ガス管理設備出口の月間平均ダスト濃度を適用した。

・開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間の流量

外部の風による運動エネルギーにより建物風上側と風下側に圧力差が発生し，圧力差により建屋開口部から空気の流出入が発生する。この圧力差による建屋開口部からの流出入量をベルヌーイの定理を用いて流量を評価した。各前提については，以下のとおり。

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間の前提

開口の隙間及びブローアウトパネルの隙間の開口面積を縮小せず，二重扉を全開，非常用扉を全開及び大物搬入口を全閉した場合を想定。

風速の前提

昭和 54 年 4 月～昭和 55 年 3 月の 1 年間における福島第一原子力発電所の露場の平均風速（3.1[m/s]）を適用した。（原子炉設置変更許可申請書添付書類 6）

上記の風速を入力条件として 16 方位毎に開口の隙間及びブローアウトパ

ネルの隙間からの流量を評価し、最大と最小の流量をそれぞれ以下のとおり評価した。

	合計	開口の隙間	ブローアウトパネルの隙間
最大流量[m <sup>3</sup> /h]	約 2.4×10 <sup>4</sup>	9.6×10 <sup>3</sup>	1.5×10 <sup>4</sup>
最小流量[m <sup>3</sup> /h]	約 1.2×10 <sup>4</sup>	3.8×10 <sup>3</sup>	7.9×10 <sup>3</sup>

- ・原子炉建屋排気設備の流量

原子炉建屋排気設備の容量 (1.0×10<sup>4</sup> [m<sup>3</sup>/h]) を適用した。

- ・原子炉格納容器ガス管理設備の流量

ダスト濃度と同様に平成 27 年 9 月の値を適用した。

上記 3 箇所の放出箇所からの放出量の評価より、開口設置後の原子炉建屋からの放出量合計値は以下のとおり。

開口設置後の放出量評価 (最大)

$$= \text{約 } 1.1 \times 10^{-2} \text{ [億 Bq/h]} + \text{約 } 4.9 \times 10^{-5} \text{ [億 Bq/h]} + \text{約 } 2.2 \times 10^{-6} \text{ [億 Bq/h]}$$

$$= \text{約 } 0.011 \text{ [億 Bq/h]}$$

開口設置後の放出量評価 (最小)

$$= \text{約 } 5.4 \times 10^{-3} \text{ [億 Bq/h]} + \text{約 } 4.9 \times 10^{-5} \text{ [億 Bq/h]} + \text{約 } 2.2 \times 10^{-6} \text{ [億 Bq/h]}$$

$$= \text{約 } 0.0054 \text{ [億 Bq/h]}$$

よって、開口設置後の放出量は、約 0.0054～0.011 億 Bq/h と評価した。

なお、開口設置前の原子炉建屋の平成 27 年 8 月～平成 29 年 2 月の平均の放出量は、約 0.0013 億 Bq/h である。

### 3. 被ばく評価

以下の計算条件で、開口が設置された場合の放出量による被ばく評価を行った。

#### ① 気象条件

被ばく評価に用いる気象条件は、昭和 54 年 4 月～昭和 55 年 3 月の 1 年間における風向、風速、日射量、放射収支量の観測データを統計処理して用い、統計処理は「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」に基づいて行った。

#### ② 実効線量の計算方法

放射性セシウムによる実効線量の計算は、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目

標値に対する評価指針」及び「発電用軽水型原子炉施設の安全審査における一般公衆の線量評価について」を準用する。

外部被ばく及び吸入摂取による実効線量は、原子炉施設周辺でそれぞれ最大の被ばくを与える地点に居住する人を対象とし、外部被ばくについては放射性雲からのγ線による実効線量と地表に沈着した放射性物質からのγ線による実効線量を考慮する。

具体的な計算方法等については、「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.2 線量評価」に準じる。

### ③ 計算地点

計算地点は、1. 2号機共用排気筒を中心として16方位に分割した陸側9方位の敷地境界外について行う。

上記の評価方法で、評価した結果は、以下のとおり。

敷地境界における被ばく量は年間約0.0012～0.0025 [mSv]

## 4. 評価

第2号機原子炉建屋西側外壁開口設置後の放出量評価は、約0.0054～0.011 億 Bq/h であり、開口設置前と比較して約0.0042～0.0099 億 Bq/h 増加することとなる。これによる敷地境界における被ばく量は年間約0.0016～0.0029 mSv となる。(表参照)

なお、気体廃棄物の管理については、「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.1.3 放射性気体廃棄物等の管理」に準じる。

放出量 [単位：億 Bq/h]	第2号機開口設置前	第2号機開口設置後 (評価値)
第1号機	約0.000027 <sup>※1</sup>	
第2号機	約0.0013 <sup>※1</sup>	約0.0054～0.011
第3号機	約0.0012 <sup>※1</sup>	
第4号機	約0.00022 <sup>※1</sup>	
合計	0.0027 <sup>※2</sup>	0.0068～0.013 <sup>※2</sup>
敷地境界線量 [単位：mSv/y]	0.0007	0.0016～0.0029

※1 平成27年8月～平成29年2月の平均値を用いている。

※2 数値処理の都合上、合計が一致しない。

## 2.20 5・6号機 原子炉格納施設

### 2.20.1 系統の概要

原子炉格納施設は、工学的安全施設の一つであり、原子炉格納容器設計用の想定事象時に発生する放射性物質を原子炉格納容器で隔離し、所定の漏えい量以下に抑えることによりその放射性物質の大气への放出を十分低い量に抑制する機能をもつ。原子炉格納施設は、原子炉格納容器（一次格納施設）ならびに原子炉建屋（二次格納施設）で構成されている。

#### (1) 原子炉格納容器（一次格納施設）

原子炉格納容器は、冷却材喪失事故のなかで、もっとも過酷な原子炉再循環配管 1 本の完全破断がおこり、破断両端口から冷却材が最大流量で放出されることを仮定して設計されている。その際ドライウェル圧力の上昇が抑制され、放出された放射性物質は原子炉格納容器内に保留される。

#### (2) 原子炉建屋（二次格納施設）

原子炉建屋の大物搬入口及び所員エアロックは、電氣的にインターロックされた二重扉になっており、その他すべての貫通部も十分シールされているので原子炉建屋は気密性が高い。事故時には、原子炉建屋は非常用ガス処理系によって負圧に保たれるので、原子炉格納容器から放射性物質の漏えいがあってもこれが発電所周辺にフィルタを通らずに直接放出されることはない。（添付資料－1 参照）

#### [系統の現況]

現状、原子炉格納容器のハッチ類は開放されており、原子炉格納容器内の機器において不具合が発生した場合、早期発見ならびに目視による確認が可能である。

さらに、機器の点検や巡視点検の際、原子炉格納容器内へのアクセスも可能となり、ハッチ類を閉鎖するより原子炉格納容器内機器の状況の的確な把握及び不適合が発生した場合における対応が迅速に図られることから、ハッチ類は現状の通り開放状態を維持する。

また、5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはなく、ジルコニウム－水反応による水素の大量発生は考えられないことから、原子炉格納容器のバウンダリを形成し窒素（窒素ガス供給系）を封入する必要はなく、可燃性ガス濃度制御系についても必要としない。

5・6号機の使用済燃料は、震災後8年以上冷却されており、原子炉停止後から放射能は減衰している。II.2.11 添付資料－3－2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えないことから原子炉建屋の負圧を維持する必要はない。

## 2.20.2 要求される機能

なし。

## 2.20.3 主要な機器

### (1) 5号機

#### a. 原子炉格納容器（一次格納施設）

原子炉格納容器については、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
建設時第1回工事計画認可申請書(46公第15243号 昭和46年12月22日認可)

#### b. 原子炉建屋（二次格納施設）

原子炉建屋については、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
建設時第2回工事計画認可申請書(47公第1375号 昭和47年5月12日認可)

### (2) 6号機

#### a. 原子炉格納容器（一次格納施設）

原子炉格納容器については、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。  
建設時第8回工事計画変更認可申請書(51資庁第12459号 昭和51年11月12日認可)  
建設時第14回工事計画変更認可申請書(52資庁第8607号 昭和52年8月23日認可)

#### b. 原子炉建屋（二次格納施設）

原子炉建屋については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第1回工事計画認可申請書(47公第11995号 昭和48年3月16日認可)  
建設時第8回工事計画変更認可申請書(51資庁第12459号 昭和51年11月12日認可)  
建設時第14回工事計画変更認可申請書(52資庁第8607号 昭和52年8月23日認可)  
建設時第1回工事計画軽微変更届出書(総官第451号 昭和48年7月26日届出)

## 2.20.4 構造強度及び耐震性

構造強度及び耐震性については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

(1) 5号機

a. 原子炉格納容器（一次格納施設）

- 建設時第1回工事計画認可申請書(46公第15243号 昭和46年12月22日認可)
- 建設時第1 1回工事計画変更認可申請書(49資庁第21842号 昭和50年3月4日認可)
- 建設時第1 2回工事計画変更認可申請書(50資庁第2959号 昭和50年5月31日認可)
- 建設時第2 3回工事計画変更認可申請書(52資庁第519号 昭和52年3月1日認可)
- 建設時第2 6回工事計画変更認可申請書(52資庁第1839号 昭和52年3月29日認可)
- 建設時第1回工事計画軽微変更届出書(総官第829号 昭和47年11月9日届出)
- 建設時第1 3回工事計画軽微変更届出書(総官第237号 昭和50年6月20日届出)

b. 原子炉建屋（二次格納施設）

- 建設時第1回工事計画認可申請書(46公第15243号 昭和46年12月22日認可)
- 建設時第2回工事計画認可申請書(47公第1375号 昭和47年5月12日認可)

(2) 6号機

a. 原子炉格納容器（一次格納施設）

- 建設時第1回工事計画認可申請書(47公第11995号 昭和48年3月16日認可)
- 建設時第3回工事計画変更認可申請書(49資庁第18331号 昭和49年10月14日認可)
- 建設時第8回工事計画変更認可申請書(51資庁第12459号 昭和51年11月12日認可)
- 建設時第2回工事計画軽微変更届出書(総官第57号 昭和49年4月15日届出)
- 建設時第4回工事計画軽微変更届出書(総官第1193号 昭和50年2月26日届出)

b. 原子炉建屋（二次格納施設）

- 建設時第1回工事計画認可申請書(47公第11995号 昭和48年3月16日認可)
- 建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)
- 建設時第5回工事計画軽微変更届出書(総官第70号 昭和50年4月17日届出)

2.20.5 添付資料

添付資料－1 原子炉建屋（二次格納施設）について

## 2.26 5・6号機 原子炉建屋常用換気系

### 2.26.1 系統の概要

原子炉建屋常用換気系は、建屋内に加熱あるいは冷却した清浄な空気を供給し建屋内の雰囲気温度を調整すると共に、これら供給空気の流れを適切に保ち、建屋内の清浄区域汚染を防止する。

原子炉建屋常用換気系は、他の換気系とは独立になっており、空気供給系と排気系を備え、それぞれ100%容量のファン2台（1台は予備）をもっている。また、差圧制御器により、出口弁を調整し、原子炉建屋内はわずかに負圧に保たれている。排気空気は、フィルタを通じて主排気筒から大気中へ放出される。（添付資料－1 参照）

換気用の原子炉建屋入口及び出口ダクトには、それぞれ2個の空気作動隔離弁があり、原子炉建屋放射能高の信号で原子炉建屋常用換気系が隔離し、非常用ガス処理系が自動起動することで放射性物質の系外放出を防ぐ。

#### [系統の現況]

原子炉建屋常用換気系は、建屋内の作業環境維持や機器類保護のため、現在換気運転をしている。5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはない。

5・6号機の使用済燃料は、震災後8年以上冷却されており、原子炉停止後から放射能は減衰している。II.2.11 添付資料－3－2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えないことから原子炉建屋の負圧を維持する必要はない。

また、原子炉建屋放射能高の信号で原子炉建屋常用換気系の隔離及び非常用ガス処理系の自動起動は必要としない。

なお、震災後に建屋の給排気ケーシング内に高性能フィルタを設置し、放射性気体廃棄物の放出量の抑制、適切な処理を行っている。（高性能フィルタは放射性物質の捕集校率が高いが、その能力を発揮するために当該系統の風量を定格値の70%程度で運転する）

### 2.26.2 要求される機能

機器類保護等のために建屋の換気を行えること。

### 2.26.3 主要な機器

系統概要図 添付資料－2に示す。

#### (1) 5号機

##### a. 送風機

送風機については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。



建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)  
工事計画届出書(総文発官2第166号 平成2年6月5日届出)

b. 排風機・ページ用排気ファン

排風機・ページ用排気ファンについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)  
工事計画届出書(総文発官2第166号 平成2年6月5日届出)

(2) 6号機

a. 送風機

送風機については、以下の工事計画変更認可申請書等により確認している。

工事計画変更認可申請書(52資庁第8607号 昭和52年8月23日認可)  
工事計画届出書(総文発官元第312号 平成元年8月25日届出)

b. 排風機・ページ用排気ファン

排風機・ページ用排気ファンについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

工事計画変更認可申請書(52資庁第8607号 昭和52年8月23日認可)

2.26.4 添付資料

添付資料－1 主排気筒について

添付資料－2 系統概要図

## 2.29 5・6号機 非常用ガス処理系

### 2.29.1 系統の概要

非常用ガス処理系は、原子炉建屋放射能高の信号で原子炉建屋常用換気系が隔離し、自動起動する。非常用ガス処理系が起動することで原子炉建屋を負圧に保ち、原子炉格納容器等から漏えいしてきた放射性物質をフィルタで除去する機能を有する。

非常用ガス処理系は100%容量の2系列からなり、各系列は、排風機、高性能フィルタ及びチャコールフィルタ等から構成されている。この系により処理されたガスは、主排気筒に沿って設けている配管を通して主排気筒排気口から放出される。

#### [系統の現況]

非常用ガス処理系の系統機能は、復旧済みである。

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはない。

5・6号機の使用済燃料は、震災後8年以上冷却されており、原子炉停止後から放射能は減衰している。Ⅱ.2.11 添付資料-3-2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても、周辺公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えないことから非常用ガス処理系の機能を維持する必要はない。

また、原子炉建屋放射能高の信号で原子炉建屋常用換気系の隔離及び非常用ガス処理系の自動起動は必要としない。

### 2.29.2 要求される機能

なし。

### 2.29.3 主要な機器

#### (1) 5号機

##### a. 排風機

排風機については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第12回工事計画認可申請書(49資庁第2326号 昭和49年4月26日認可)

##### b. フィルタ

フィルタについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第12回工事計画認可申請書(49資庁第2326号 昭和49年4月26日認可)

##### c. トレイン

トレインについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第12回工事計画認可申請書(49資庁第2326号 昭和49年4月26日認可)

d. 主配管

主配管については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第12回工事計画認可申請書(49資庁第2326号 昭和49年4月26日認可)

(2) 6号機

a. 排風機

排風機については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第13回工事計画認可申請書(51資庁第9101号 昭和51年12月8日認可)

b. フィルタ

フィルタについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第13回工事計画認可申請書(51資庁第9101号 昭和51年12月8日認可)

c. トレイン

トレインについては、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第15回工事計画軽微変更届出書(総官第446号 昭和52年6月30日届出)

d. 主配管

主配管については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第16回工事計画認可申請書(53資庁第5742号 昭和53年6月27日認可)

建設時第15回工事計画軽微変更届出書(総官第446号 昭和52年6月30日届出)

2. 29. 4 構造強度及び耐震性

構造強度及び耐震性については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

(1) 5号機

建設時第12回工事計画認可申請書(49資庁第2326号 昭和49年4月26日認可)

建設時第8回工事計画軽微変更届出書(総官第534号 昭和49年7月29日届出)

建設時第13回工事計画軽微変更届出書(総官第237号 昭和50年6月20日届出)

(2) 6号機

建設時第13回工事計画認可申請書(51資庁第9101号 昭和51年12月8日認可)

建設時第15回工事計画軽微変更届出書(総官第446号 昭和52年6月30日届出)

建設時第22回工事計画軽微変更届出書(総官第1788号 昭和53年3月23日届出)

## 2.30 5・6号機 中央制御室換気系

### 2.30.1 系統の概要

中央制御室換気系（5・6号機共用）は、中央制御室へ一部外気を取り入れる再循環方式により空気調節を行うが、事故時には、必要な運転操作を汚染の可能性がなく継続することができるように他系統と分離されており、チャコールフィルタを通して再循環できる構成である。

#### [系統の現況]

中央制御室換気系の系統機能は、復旧済みである。

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはない。

5・6号機の使用済燃料は、震災後8年以上冷却されており、原子炉停止後から放射能は減衰している。Ⅱ.2.11 添付資料-3-2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても、運転員の放射線被ばくの影響は小さいことから中央制御室換気系の機能を維持する必要はない。

なお、中央制御室換気系は、中央制御室の環境維持のため、現在換気運転をしている。

### 2.30.2 要求される機能

なし。

### 2.30.3 主要な機器

#### (1)送風機

送風機については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

5号機：建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)

#### (2)排風機

排風機については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

5号機：建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)

#### (3)フィルタユニット

フィルタユニットについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

5号機：建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)

### 2.30.4 耐震性

耐震性については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

5号機：建設時第7回工事計画認可申請書(48公第5381号 昭和48年8月21日認可)

5号機：建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第1102号 昭和51年3月17日届出)

## 2.33 5・6号機 放射性液体廃棄物処理系

### 2.33.1 5・6号機 既設設備

#### 2.33.1.1 系統の概要

放射性液体廃棄物処理系は、機器ドレン系、床ドレン系等で構成し、原子炉施設で発生する放射性廃液及び潜在的に放射性物質による汚染の可能性のある廃液を、その性状により分離収集し、処理する。

#### [系統の現況]

5・6号機タービン建屋等には津波により流入した大量の海水と地下水が、震災前から建屋内で管理されていた低濃度の放射性物質と共に滞留した。（以下、これを「滞留水」という）

地下水については止水処置を実施しているが、流入を完全に抑制できないことから建屋内水位が上昇した場合、使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却の維持に必要な設備への影響が懸念される。

滞留水の発生抑制については、地下水の水位を低下させることが必要であるが、地下水を汲み上げて水位を下げる設備として建屋周辺に設置されているサブドレン設備は、震災により被災したことから、設備の浄化等を行いサブドレン設備の使用に向けた準備を実施する。

放射性液体廃棄物処理系については、一部未復旧の設備があるが、5・6号機で発生する廃液については、5号機にてろ過器、脱塩器による処理後、復水貯蔵タンクに回収することができる。しかし、大量の滞留水を処理することができないため、サブドレン設備及び放射性液体廃棄物処理系が復旧するまで、仮設の滞留水貯留設備にて処理している。（添付資料－1，2，3 参照）

#### 2.33.1.2 要求される機能

放射性液体廃棄物処理系は、原子炉施設で発生する廃液を、その性状により分離収集し、処理する機能を有すること。

#### 2.33.1.3 主要な機器

系統概要図 添付資料－4に示す。

##### (1) 5号機

##### a. 機器ドレン系

##### (a) 廃液収集タンク

廃液収集タンクについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
工事計画認可申請書(57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可)

##### (b) 廃液収集ポンプ

廃液収集ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

##### (c) 廃液ろ過器

廃液ろ過器については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(62資庁第10732号 昭和62年12月4日認可)

(d) 廃液脱塩器

廃液脱塩器については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

(e) 廃液サンプルタンク

廃液サンプルタンクについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(f) 廃液サンプルポンプ

廃液サンプルポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

(g) 廃液サージタンク

廃液サージタンクについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(h) 廃液サージポンプ

廃液サージポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

b. 床ドレン系

(a) 床ドレン収集タンク

床ドレン収集タンクについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可)

(b) 床ドレン収集ポンプ

床ドレン収集ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

(c)床ドレンろ過器

床ドレンろ過器については，以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(d)床ドレンサージタンク

床ドレンサージタンクについては，以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

(e)床ドレン濃縮器給液ポンプ

床ドレン濃縮器給液ポンプについては，以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(61資庁第13609号 昭和62年2月5日認可)

(f)床ドレン濃縮器

床ドレン濃縮器については，以下の工事計画届出書により確認している。

工事計画届出書(総文発官57第685号 昭和57年9月25日届出)

(g)床ドレン濃縮器復水器

床ドレン濃縮器復水器については，以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

建設時第5回工事計画変更認可申請書(49資庁第1067号 昭和49年4月26日認可)

(h)凝縮水貯蔵タンク

凝縮水貯蔵タンクについては，以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第8回工事計画軽微変更届出書(総官第534号 昭和49年7月29日届出)

(i)凝縮水移送ポンプ

凝縮水移送ポンプについては，以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

建設時第3回工事計画軽微変更届出書(総官第923号 昭和48年10月30日届出)

(j)床ドレン脱塩器

床ドレン脱塩器については，以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)



(k) 床ドレンサンプルタンク

床ドレンサンプルタンクについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(l) 床ドレンサンプルポンプ

床ドレンサンプルポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

c. 再生廃液系

(a) 廃液中和タンク

廃液中和タンクについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
工事計画認可申請書(57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可)

(b) 廃液中和ポンプ

廃液中和ポンプについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)  
建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(c) 廃液濃縮器給液ポンプ

廃液濃縮器給液ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(63資庁第13号 昭和63年5月31日認可)

(d) 廃液濃縮器

廃液濃縮器については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(59資庁第10414号 昭和59年9月28日認可)

工事計画認可申請書(元資庁第4474号 平成元年6月15日認可)

(e) 廃液濃縮器復水器

廃液濃縮器復水器については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

工事計画認可申請書(63資庁第14698号 平成元年2月23日認可)

工事計画認可申請書(元資庁第4474号 平成元年6月15日認可)

建設時第5回工事計画変更認可申請書(49資庁第1067号 昭和49年4月26日認可)

d. 主配管

主配管については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

工事計画認可申請書(56資庁第3240号 昭和56年8月19日認可)

工事計画認可申請書(57資庁第13908号 昭和57年11月9日認可)

工事計画認可申請書(61資庁第13609号 昭和62年2月5日認可)

工事計画認可申請書(62資庁第10732号 昭和62年12月4日認可)

工事計画認可申請書(63資庁第13号 昭和63年5月31日認可)

工事計画認可申請書(平成12・03・28資第17号 平成12年4月26日認可)

工事計画認可申請書(平成14・05・24原第9号 平成14年6月11日認可)

建設時第5回工事計画変更認可申請書(49資庁第1067号 昭和49年4月26日認可)

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

建設時第2・3回工事計画変更認可申請書(52資庁第519号 昭和52年3月1日認可)

工事計画変更認可申請書(56資庁第15242号 昭和57年1月16日認可)

建設時第1・3回工事計画軽微変更届出書(総官第237号 昭和50年6月20日届出)

建設時第2・8回工事計画軽微変更届出書(総官第303号 昭和52年5月30日届出)

(2) 6号機

a. 機器ドレン系

(a) 機器ドレン収集タンク

機器ドレン収集タンクについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

(b) 機器ドレン混合ポンプ

機器ドレン混合ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第2・6回工事計画変更認可申請書(53資庁第14829号 昭和53年12月9日認可)

(c) ろ過器給液ポンプ

ろ過器給液ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第2・6回工事計画変更認可申請書(53資庁第14829号 昭和53年12月9日認可)

(d) 機器ドレンろ過器

機器ドレンろ過器については、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第1・6回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(e) 機器ドレンろ過水タンク

機器ドレンろ過水タンクについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

(f) 機器ドレンろ過水ポンプ

機器ドレンろ過水ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第26回工事計画変更認可申請書(53資庁第14829号 昭和53年12月9日認可)

(g) 機器ドレン補助ろ過器ポンプ

機器ドレン補助ろ過器ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(60資庁第8681号 昭和60年7月24日認可)

(h) 機器ドレン補助ろ過器

機器ドレン補助ろ過器については、以下の工事計画認可申請書により確認している。

工事計画認可申請書(60資庁第8681号 昭和60年7月24日認可)

(i) 機器ドレン脱塩器

機器ドレン脱塩器については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(j) 廃液サンプルタンク

廃液サンプルタンクについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(k) 廃液サンプルポンプ

廃液サンプルポンプについては、工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

建設時第26回工事計画変更認可申請書(53資庁第14829号 昭和53年12月9日認可)

b. 床ドレン化学廃液系

(a) 床ドレン化学廃液収集タンク

床ドレン化学廃液収集タンクについては、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(b) 床ドレン化学廃液混合ポンプ

床ドレン化学廃液混合ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

(c) 床ドレン化学廃液ろ過器

床ドレン化学廃液ろ過器については、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(d) 床ドレン化学廃液ろ過水タンク

床ドレン化学廃液ろ過水タンクについては、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(e) 床ドレン化学廃液ろ過水ポンプ

床ドレン化学廃液ろ過水ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

(f) 蒸発濃縮器給液ポンプ

蒸発濃縮器給液ポンプについては、以下の工事計画届出書により確認している。  
工事計画届出書(総文発官6第1066号 平成7年2月17日届出)

(g) 蒸発濃縮器

蒸発濃縮器については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

工事計画認可申請書(59資庁第10413号 昭和59年9月21日認可)

工事計画届出書(総文発官57第470号 昭和57年7月20日届出)

(h) 蒸発濃縮器復水器

蒸発濃縮器復水器については、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(i) 蒸留水タンク

蒸留水タンクについては、以下の工事計画軽微変更届出書により確認している。  
建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(j) 蒸留水ポンプ

蒸留水ポンプについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

(k) 蒸留水脱塩器

蒸留水脱塩器については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)  
建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(l) 蒸留水サンプルタンク

蒸留水サンプルタンクについては、以下の工事計画認可申請書により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

(m) 蒸留水サンプルポンプ

蒸留水サンプルポンプについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)  
建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

(n) 蒸発濃縮器循環ポンプ

蒸発濃縮器循環ポンプについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)  
工事計画届出書(総文発官59第928号 昭和59年11月19日届出)

c. 洗浄廃液系

(a) 洗浄廃液収集タンク

洗浄廃液収集タンクについては、以下の工事計画認可申請書等により確認している。  
建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)  
建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

(b) 洗浄廃液ポンプ

洗浄廃液ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

(c) 洗浄廃液ろ過器

洗浄廃液ろ過器については、以下の工事計画変更認可申請書等により確認している。

建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

d. 主配管

主配管については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

工事計画認可申請書(58資庁第2841号 昭和58年3月28日認可)

工事計画認可申請書(60資庁第8681号 昭和60年7月24日認可)

工事計画認可申請書(61資庁第8632号 昭和61年7月11日認可)

建設時第4回工事計画軽微変更届出書(総官第1193号 昭和50年2月26日届出)

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

建設時第19回工事計画軽微変更届出書(総官第1268号 昭和52年12月12日届出)

建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(3) 5・6号機共用

a. シャワードレン系

(a) シャワードレン受タンク

シャワードレン受タンクについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(b) シャワードレン移送ポンプ

シャワードレン移送ポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(c) シャワードレンタンク

シャワードレンタンクについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

(d) シャワードレンポンプ

シャワードレンポンプについては、以下の工事計画変更認可申請書により確認している。

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

b. サプレッションプール水サージタンク

サプレッションプール水サージタンクについては、以下の工事計画変更認可申請書及び工事計画認可申請書により確認している。

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

6号機：建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

6号機：建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

2.33.1.4 構造強度及び耐震性

構造強度及び耐震性については、以下の工事計画認可申請書等により確認している。

(1) 5号機

建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

工事計画認可申請書(59資庁第10414号 昭和59年9月28日認可)

工事計画認可申請書(61資庁第13609号 昭和62年2月5日認可)

工事計画認可申請書(62資庁第10732号 昭和62年12月4日認可)

工事計画認可申請書(63資庁第13号 昭和63年5月31日認可)

工事計画認可申請書(63資庁第14698号 平成元年2月23日認可)

工事計画認可申請書(元資庁第4474号 平成元年6月15日認可)

建設時第5回工事計画変更認可申請書(49資庁第1067号 昭和49年4月26日認可)

建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

建設時第2、3回工事計画変更認可申請書(52資庁第519号 昭和52年3月1日認可)

建設時第4回工事計画軽微変更届出書(総官第1375号 昭和49年1月30日届出)

(2) 6号機

建設時第4回工事計画認可申請書(49資庁第21657号 昭和50年2月5日認可)

工事計画認可申請書(59資庁第10413号 昭和59年9月21日認可)

工事計画認可申請書(60資庁第8681号 昭和60年7月24日認可)

建設時第7回工事計画変更認可申請書(51資庁第9100号 昭和51年10月8日認可)

建設時第26回工事計画変更認可申請書(53資庁第14829号 昭和53年12月9日認可)

建設時第16回工事計画軽微変更届出書(総官第704号 昭和52年8月15日届出)

建設時第25回工事計画軽微変更届出書(総文発官第636号 昭和53年8月31日届出)

(3) 5・6号機共用

1号機：工事計画認可申請書(48公第657号 昭和48年3月3日認可)

5号機：建設時第3回工事計画認可申請書(47公第11378号 昭和48年2月19日認可)

5号機：建設時第9回工事計画変更認可申請書(49資庁第15900号 昭和50年3月10日認可)

5号機：建設時第23回工事計画変更認可申請書(52資庁第519号 昭和52年3月1日認可)



## 2.33.2 5・6号機 仮設設備（滞留水貯留設備）

### 2.33.2.1 基本設計

#### 2.33.2.1.1 設置の目的

5・6号機タービン建屋等の大量の滞留水については、一部未復旧の設備がある既設放射性液体廃棄物処理系では処理できないことから、サブドレン設備復旧等による滞留水の発生量抑制及び放射性液体廃棄物処理系の復旧による滞留水の処理ができる時期（サブドレン設備復旧後3年を目途）まで、屋外に滞留水貯留設備を仮設にて設置し処理を行う。

#### 2.33.2.1.2 要求される機能

滞留水を貯留し、放射性物質を閉じ込める機能を有すること。

#### 2.33.2.1.3 設計方針

##### (1)処理能力

地下水の流入により増加する滞留水に対して、十分対処できる貯留容量とすると共に、散水可能な放射能濃度を満足する性能を有するものとする。

##### (2)規格・基準等

機器の設計、材料の選定、製作及び検査については、原則として適切と認められる規格及び基準によるものとする。

##### (3)滞留水の漏えい防止及び管理されない放出の防止

滞留水の漏えい及び所外への管理されない放出を防止し、信頼性を確保するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいを防止するため、滞留水貯留設備は、設置環境や滞留水の性状に応じた適切な材料を使用すると共に、タンク水位の検出器を設ける。
- b. 異常のないことを巡視点検等により容易に確認できる設備とし、漏えいを停止するための適切な処置ができるようにする。
- c. タンクは漏えい水の拡大を抑制するための堰を設ける。堰の高さは、想定最大漏えい量を確保できる高さとする。
- d. 鋼材もしくはポリエチレンの移送配管継手部は、可能な限り溶接構造もしくは融着構造とする。また、屋外でフランジ構造となる移送配管継手部は、漏えい拡大防止のため堰内に設置するか、堰内に漏えい水が導かれるよう受けを設置する。
- e. タンク水位は、6号機中央操作室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

f. 堰内に溜まった雨水のうち、その放射能濃度が排水基準（詳細は「Ⅲ 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」を参照）を上回るものに対して、適切に処置できる設備とする。

(4) 遮へいに関する考慮

遮へいについては、内包する滞留水の線量が低いため設置は考慮しない。

(5) 監視

漏えいの検知及び貯留状況の確認に必要な水位を監視できる設計とする。また、設備の異常を検知できる設計とする。

(6) 設備の確認

滞留水貯留設備については、設備の健全性及び能力を確認できる設計とする。

(7) 検査可能性に対する設計上の考慮

5・6号機仮設設備（滞留水貯留設備）は、滞留水を移送できること及び処理量ならびに放射能濃度を低減できることを確認するための検査が可能な設計とする。

2.33.2.1.4 供用期間中に確認する項目

滞留水貯留設備からの有意な漏えいがないこと。

2.33.2.1.5 主要な機器

系統概要図 添付資料-4に示す。

滞留水は、6号機タービン建屋から移送設備により貯留設備に移送され、貯留する。

貯留設備に貯留された滞留水の一部は、浄化装置、浄化ユニット及び淡水化装置により放射性核種を除去した後、構内散水に使用し、滞留水を低減する。

滞留水は、これまでの実績より地下水の流入により約30m<sup>3</sup>/日で増加しており、構内散水により約25m<sup>3</sup>/日（実績）で増加を抑制している。なお、2012年11月末現在、貯留タンクの設定容量約10,000m<sup>3</sup>に対し約70%貯留している。今後、滞留水は平衡状態にあるものの、地下水流入量の変動が予想されるため、貯留タンク全体の空き容量\*約2,000m<sup>3</sup>を目安に、貯留能力増強について計画する。

滞留水漏えい時の汚染拡大を防止し信頼性向上を図るため、受入タンク・油分分離装置エリア、受入タンクエリア、貯留タンクエリアの各エリアについて、堰（地面の防水処置含む）を設置する。（添付資料-5 参照）

震災以降緊急対応的に（2013年8月14日より前に）設置した淡水化装置（以下、旧淡水化装置）については、新たに浄化ユニットを設置することに伴い廃止する。

\*：空き容量は、水位警報設定値の水位高までの容量とする。

## (1) 貯留設備

### a. タンク（受入タンク、貯留タンク及び中間タンク）

タンクは、屋外に設置された受入タンク、貯留タンク及び中間タンクで構成され、5・6号機の滞留水を貯留する。

受入タンクは、建屋からの滞留水を受け入れる。

貯留タンクは、受入タンクから必要に応じて油分除去した滞留水を受け入れた後、浄化装置又は浄化ユニットにより放射性核種を除去し、貯留する。また、淡水化装置の戻り水を貯留する。

中間タンクは、建屋からの滞留水及び浄化ユニットにより放射性核種を除去した処理水を一時的に貯留する。

## (2) 移送設備

移送設備は、滞留水を貯留設備へ移送することを目的に、移送ポンプ、耐圧ホース、鋼管及びポリエチレン管で構成する。

移送ポンプは、地下水の流入により増加する滞留水に対して十分対処可能な設備容量を確保する。滞留水の移送は、移送元のタービン建屋の水位や移送先となる貯留設備の水位の状況に応じて、移送ポンプの起動時間を適宜選定して実施する。

耐圧ホース、鋼管及びポリエチレン管は、使用環境を考慮した材料を選定し、必要に応じて保温等を設置する。また、屋外で耐圧ホースを使用する箇所は、汚染拡大防止のため、継手部に抜け防止治具の取付けを実施し、継手が外れない処置をする。

## (3) 油分分離装置

油分分離装置は、滞留水に含まれる油分を活性炭により除去する。

## (4) 浄化装置

浄化装置は、内部に充填されたキレート樹脂及びゼオライトにより、滞留水に含まれる放射性核種を除去する。

浄化装置の使用済キレート樹脂及びゼオライトは水抜きした後、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵する。

## (5) 淡水化装置

淡水化装置は、逆浸透膜の性質を利用して滞留水に含まれる放射性核種を散水可能な放射能濃度（詳細は「Ⅲ 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」参照）まで除去する。

また、淡水化後は散水し滞留水の低減を実施する。

淡水化装置の使用済逆浸透膜及びフィルタ類は水抜きした後、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵する。

#### (6) 監視装置

滞留水貯留設備には、設備の状態を正確かつ迅速に把握できるように警報装置及び監視カメラを設置する。

警報装置は、タンク水位高・低及び移送ポンプ用電動機の過負荷を検知し、5・6号機の中央制御室に警報を発する。

#### (7) 電源設備

電源設備については、II.2.32 参照。

#### (8) 浄化ユニット

浄化ユニットは、前置フィルタ、吸着塔タイプ1、吸着塔タイプ2、出口フィルタ、移送ポンプ、鋼管、耐圧ホースにて構成される。前置フィルタは、後に続く吸着塔の吸着性能に影響が出ないように、あらかじめ大きめの不純物を取り除き、吸着塔タイプ1に充填された活性炭により浮遊物質やコロイド状物質という比較的分子量の大きい物質を除去する。さらに、その後段の吸着塔タイプ2に充填されたセシウム/ストロンチウム同時吸着材により、滞留水に含まれる放射性核種を散水可能な放射能濃度（詳細は「III 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」参照）まで除去する。なお、出口フィルタは、前段までの吸着材が下流に流出することを防ぐために設置する。（添付資料-8 参照）

浄化ユニットの使用済セシウム/ストロンチウム同時吸着塔は水抜きした後、使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵する。

### 2.33.2.1.6 自然災害対策等

#### (1) 津波

受入タンク、貯留タンク、中間タンク、浄化装置、淡水化装置、浄化ユニットは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる5・6号機の標高より高台に設置する。（III.3.1.3 参照）

なお、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は装置の運転を停止し、隔離弁を閉止することで、滞留水の流失を防止する。

また、メガフロートについても、アウターライズ津波の影響は小さいが、港湾内構造物に衝突する可能性は否定できないため、被害が最小限になるような場所に係留する。（添付資料-6 参照）

#### (2) 台風・豪雨・竜巻

滞留水貯留設備は、大雨警報、暴風警報、竜巻警報、特別警報により台風・豪雨・竜巻の発生の可能性が予見される場合には、汚染水の漏えい防止を図るため、滞留水貯留設備の停止等を行い、設備損傷による影響が最小限になるよう対策を図る。

さらに、放射性物質を吸着する浄化ユニット吸着塔は、ジャバラハウス内に収納しており、直接、雨水、強風の影響を受けない構造としている。

### (3)外部人為事象

外部人為事象に対する設計上の考慮については、Ⅱ.1.14 参照。

### (4)火災

火災発生防止の観点から基本的に不燃性又は難燃性の材料を使用し、装置周辺から可能な限り可燃物を排除する。また、浄化ユニット及び電源設備の近傍に消火器を設置することで、万一火災が発生しても早急に初期消火できるよう備える。さらに火災の検知の観点から、巡視点検、監視カメラによる監視を行う。

### (5)環境条件

滞留水貯留設備については、屋外に設置されているため、紫外線による劣化及び凍結による破損が懸念されるが、貯留設備、油分分離装置、浄化装置及び淡水化装置は、主に鋼製の材料を使用していることから、問題ないと考ええる。また、耐圧ホース及びポリエチレン管については、紫外線による劣化及び凍結による破損が懸念されるため、保温材を取り付ける。

また、添付資料－8 別添－4に示す増設及び取替範囲に該当する設備の環境条件対策については以下に示す。

#### ① 腐食対策

海水による炭素鋼の腐食速度は、「材料環境学入門」（腐食防食協会編、丸善株式会社）より、0.1mm/年程度と評価される。炭素鋼を使用している配管・機器は、必要肉厚に対して十分な肉厚があり腐食代を有していることを確認している。また、炭素鋼を使用している配管及び浄化ユニット構成機器の内面に対して、ゴムライニング又はポリエチレンライニングを施す。

その他については、耐食性を有するステンレス材、ポリエチレン管等を使用する。

#### ② 紫外線対策

屋外に設置する移送ポンプ（水中ポンプを除く）はテントハウスに、浄化ユニットはジャバラハウスに設置することにより紫外線劣化を防止する。なお、ジャバラハウス及びテントハウスの素材は紫外線に強い素材を使用する。また、屋外に設置する配管は保温材を適切に設けることにより紫外線劣化を防止する。

#### ③ 凍結防止対策

屋外に設置する移送ポンプ（水中ポンプを除く）はテントハウスに、浄化ユニットはジャバラハウスに設置し、ヒータで加温することにより凍結を防止する。また、屋外に設置する配管には保温材等を適切に設けることにより凍結を防止する。

### 2.33.2.1.7 構造強度

滞留水貯留設備を構成する機器は、発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令上、廃棄物処理設備に相当するクラス3 機器と位置付けられる。この適用規格は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「設計・建設規格」という。）で規定されるものであるが、各機器については、以下のとおり個別に評価する。

## (1) 貯留設備

- a. 震災以降緊急対応的に設置又は既に（2013年8月14日より前に）設計に着手したタンクは、「設計・建設規格」におけるクラス3 機器の要求を満足するものではないが、漏えい試験を行い、有意な漏えいがないことを確認する。

また、これらは全て大気開放のため、水頭圧以上の内圧が作用することはない。

以上のことから、震災以降緊急対応的に設置又は既に（2013年8月14日より前に）設計に着手したタンクは、必要な構造強度を有するものと評価する。（添付資料－7 参照）

- b. 2013年8月14日以降に設計するタンク

2013年8月14日以降に設計するタンクは、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス3 機器の規定を適用することを基本とする。クラス3機器の適用規格は、「設計・建設規格」で規定される。

以上のことから、2013年8月14日以降に設計するタンクは、必要な構造強度を有するものと評価する。（添付資料－7 参照）

## (2) 移送設備

- a. 移送ポンプ

移送ポンプについては、「設計・建設規格」におけるクラス3 機器の要求を満足するものではないが、系統の温度（常温）、圧力（約0.25MPa）を考慮して仕様を選定した上で、試運転を行い有意な漏えい、運転状態に異常がないことを確認する。

以上のことから、移送ポンプは、必要な構造強度を有するものと評価する。

- b. 耐圧ホース

「設計・建設規格」上のクラス 3 機器に対する規定を満足する材料ではないが、系統の温度（常温）、圧力（約 0.25MPa）を考慮して仕様を選定した上で、漏えい試験を行い、有意な漏えいがないことを確認する。従って、耐圧ホースは、必要な構造強度を有していると評価する。

- c. ポリエチレン管

「設計・建設規格」上のクラス 3 機器に対する規定を満足する材料ではないが、系統の温度（常温）、圧力（約 0.25MPa）を考慮して仕様を選定している。また、ポリエチレン管は、一般に耐食性、電気特性（耐電気腐食）、耐薬品性を有しており、鋼管と同等の信頼性を有している。また、以下により高い信頼性を確保している。

- ・ 日本水道協会規格（JWWA 規格）、ISO 規格に適合したポリエチレン管を採用。
- ・ 継手は可能な限り融着構造とする。
- ・ 敷設時には漏えい試験を行い、有意な漏えいがないことを確認する。

以上のことから、ポリエチレン管は、必要な構造強度を有するものと評価する。

### (3) 油分分離装置及び浄化装置

油分分離装置及び浄化装置は、「設計・建設規格」におけるクラス3 機器の要求を満足するものではないが、系統の温度（常温）、圧力（約0.25MPa）を考慮して仕様を選定した上で、漏えい試験を行い、有意な漏えいがないことを確認する。

以上のことから、油分分離装置及び浄化装置は、必要な構造強度を有するものと評価する。

### (4) 淡水化装置

淡水化装置は、「設計・建設規格」におけるクラス3 機器の要求を満足するものではないが、系統の温度（常温）、圧力（約0.25MPa）を考慮して仕様を選定した上で、試運転を行い、有意な漏えいがないこと及び運転状態に異常がないことを確認する。

以上のことから、淡水化装置は、必要な構造強度を有するものと評価する。

### (5) 浄化ユニット

浄化ユニットは、「実用発電用原子炉及びその付属設備の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備に相当するクラス3 機器に準ずるものと位置付けられる。浄化ユニットについては、「設計・建設規格」、日本産業規格（JIS 規格）等の国内外の民間規格に適合した工業製品の採用、JIS 規格またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

また、「設計・建設規格」で規定される材料の JIS 規格年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

さらに、「設計・建設規格」に記載のない非金属材料（耐圧ホース）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、非金属材料については、JIS 規格、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

以上のことから、浄化ユニットは、必要な構造強度を有するものと評価する。

## 2.33.2.1.8 耐震性

滞留水貯留設備を構成する機器のうち放射性物質を内包するものは、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」上の B クラス相当の設備と位置付けられる。

耐震性を評価するにあたっては、「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態に合わせたものを採用する場合もある。

支持部材がない等の理由によって、耐震性に関する評価ができない設備を設置する場合においては、可撓性を有する材料の使用等により、耐震性を確保する。（添付資料－7 参照）

## 2.33.2.1.9 機器の故障への対応

### (1) 移送ポンプの故障

移送ポンプが故障した場合は、ポンプの修理または交換を行い、1 週間程度で機能を回復する。

## (2) 電源喪失

移送ポンプの電源が喪失した場合は、仮設発電機を使用することで、1週間程度で機能を回復する。

## (3) 受入タンク・貯留タンク等からの漏えい

受入タンク・貯留タンク等から滞留水の漏えいが発生した場合は、タンク等の修理を行い、1ヶ月程度で機能を回復する。ただし、漏えいに伴い堰内に溜まった雨水の放射能濃度が排水基準を上回った場合、その雨水\*1を処理することになるが1ヶ月以内\*2で処理可能であることからタンク等の修理と合わせて2ヶ月以内で機能を回復する。

\*1：発電所周辺の年間降雨量1,500mmが降雨したと仮定した場合、推定される堰内に溜まる雨量は、最も広い面積を有する貯留タンクエリアで約1,500m<sup>3</sup>程度である。

\*2：滞留水貯留設備は1ヶ月間で最大3,000m<sup>3</sup>の処理が可能である。

## (4) 異常時の評価

滞留水貯留設備への移送が長期に停止した場合、地下水の流入により建屋内の水位が上昇し、使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却の維持に必要な設備に電力を供給している所内高圧母線が被水する可能性がある。

移送停止後、建屋内水位が使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却の維持に必要な設備に電力を供給している所内高圧母線が被水する可能性がある水位に達するまでの水量の余裕は、約4,500m<sup>3</sup>と想定しているため、地下水が約30m<sup>3</sup>/日で流入することを考慮しても約5ヶ月の余裕がある。

したがって、滞留水貯留設備の機器が故障した場合、長くても2ヶ月程度で機能を回復（受入タンク・貯留タンク等からの漏えい時）できるため、建屋内水位が電源設備に影響するまでの期間内（約5ヶ月）に十分復旧可能である。

### 2.33.2.2 基本仕様

#### (1) 貯留設備

##### a. 受入タンク（完成品）

合計容量	2, 1 0 2 m <sup>3</sup>
基 数	2 3 基
容 量	3 5 m <sup>3</sup> /基× 6 基
	4 2 m <sup>3</sup> /基× 6 基
	1 1 0 m <sup>3</sup> /基× 4 基
	1 6 0 m <sup>3</sup> /基× 5 基
	2 0 0 m <sup>3</sup> /基× 2 基



b-1. 貯留タンク

合計容量	16,101 m <sup>3</sup>
基数	34 基
容量	50 m <sup>3</sup> /基 × 4 基 (完成品)
	90 m <sup>3</sup> /基 × 4 基 (完成品)
	299 m <sup>3</sup> /基 × 3 基 (完成品)
	508 m <sup>3</sup> /基 × 18 基 (完成品)
	1,100 m <sup>3</sup> /基 × 5 基

(追 設)

b-2. 中間タンク

合計容量	5,800 m <sup>3</sup>
基数	5 基
容量	1,160 m <sup>3</sup> /基 × 5 基

タンク型式		—	溶接型
タンク容量		m <sup>3</sup>	1,160
主要寸法	内 径	mm	11,000
	胴板厚さ	mm	12.0
	底板厚さ	mm	12.0
	高 さ	mm	13,000
管台厚さ	100A	mm	6.0
	200A	mm	8.2
	650A	mm	12.0
材 料	胴板・底板	—	SM400C
	管台	—	STPG370, SM400C

c. (廃止) メガフロート (完成品)

d. 水位警報

(a) 受入タンク (35 m<sup>3</sup>, 42 m<sup>3</sup>)

設定値	水位高：底部より	1,835 mm 以下
	水位低：底部より	205 mm 以上

(b) 受入タンク (110 m<sup>3</sup>)

設定値	水位高：底部より	2,051 mm 以下
	水位低：底部より	206 mm 以上

(c) 受入タンク (160 m<sup>3</sup>, 200 m<sup>3</sup>)

設定値	水位高：底部より	4,100 mm 以下
	水位低：底部より	600 mm 以上

(d) 貯留タンク (50 m<sup>3</sup>)

設定値	水位高：底部より	2,200 mm 以下
	水位低：底部より	100 mm 以上

(e)貯留タンク (90 m<sup>3</sup>)

設定値 水位高：底部より 2,500 mm 以下  
水位低：底部より 100 mm 以上

(f)貯留タンク (299 m<sup>3</sup>, 508 m<sup>3</sup>)

設定値 水位高：底部より 8,242 mm 以下  
水位低：底部より 600 mm 以上

(g)貯留タンク (1,100 m<sup>3</sup>)

設定値 水位高：底部より 8,800 mm 以下  
水位低：底部より 1,500 mm 以上

(追 設)

(h)中間タンク (1,160 m<sup>3</sup>)

設定値 水位高：底部より 12,060 mm 以下  
水位低：底部より 1,150 mm 以上

(2)移送設備

a. 移送ポンプ (完成品)

台 数	16 台	
容量 揚程 台数	13.8 m <sup>3</sup> /h	20 m×3 台
	20 m <sup>3</sup> /h	33 m×2 台
	20 m <sup>3</sup> /h	54.4 m×5 台
	20 m <sup>3</sup> /h	65 m×1 台

(追 設)

容量 揚程 台数	13.8 m <sup>3</sup> /h	20 m×1 台
	24.2 m <sup>3</sup> /h	65 m×1 台
	20 m <sup>3</sup> /h	65 m×1 台
	13.8 m <sup>3</sup> /h	13 m×1 台
	35 m <sup>3</sup> /h	43.2 m×1 台

(廃 止)

容量 揚程 台数	20 m <sup>3</sup> /h	35 m×1 台
	12.5 m <sup>3</sup> /h	35 m×3 台

b. 耐圧ホース (完成品)

呼び径 75 A相当, 100 A相当, 200 A相当  
材質 ポリ塩化ビニル  
最高使用圧力 0.98 MPa  
最高使用温度 50 °C

c. ポリエチレン管 (完成品)

呼び径 50 A相当, 75 A相当, 100 A相当  
材質 ポリエチレン  
最高使用圧力 0.98 MPa  
最高使用温度 40 °C

(追 設)

名 称	仕 様	
6号機タービン建屋内移送ポンプ出口合流から6号機タービン建屋出口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
6号機タービン建屋出口配管分岐から受入タンクまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
受入タンク出口配管分岐から中間タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50 A相当, 75 A相当, 100 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
中間タンク出口から浄化ユニット入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50 A相当, 75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
貯留タンク出口から浄化ユニット入口配管合流まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
浄化ユニット出口から中間タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50 A相当, 100 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
中間タンク出口から移送ポンプ(65m)入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100 A/Sch 40 STPG 370 +ポリエチレンライニング 0.98 MPa 40 °C

名 称	仕 様	
移送ポンプ（65m）出口から中間タンク入口まで （鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／S c h 40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98 MP a 40 ℃
（ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A相当 ポリエチレン 0.98 MP a 40 ℃
移送ポンプ（65m）出口配管分岐から貯留タンク入口配管合流まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当，75A相当， 100A相当 ポリエチレン 0.98 MP a 40 ℃
中間タンク出口から移送ポンプ（43.2m）入口まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当，100A相当 ポリエチレン 0.98 MP a 40 ℃
（鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／S c h 40 65A／S c h 40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98 MP a 40 ℃
移送ポンプ（43.2m）出口から配管末端まで （鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／S c h 40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98 MP a 40 ℃
（ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当 ポリエチレン 0.98 MP a 40 ℃

名 称	仕 様	
中間タンク出口から移送ポンプ（13m）入口まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当，75A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40℃
（鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98 MPa 40℃
移送ポンプ（13m）出口から淡水化装置入口配管合流まで （鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A／Sch40 50A／Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98 MPa 40℃
（ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A相当，75A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40℃
移送ポンプ（20m）（水中ポンプ）から貯留タンク出口まで （耐圧ホース）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A相当 ポリ塩化ビニル 0.98 MPa 50℃
貯留タンク出口から淡水化装置入口配管合流まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40℃

（廃 止）

名 称	仕 様	
6号機タービン建屋内移送ポンプ出口合流から6号機タービン建屋出口まで （耐圧ホース）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A相当 ポリ塩化ビニル 0.98 MPa 50℃
貯留タンク内の旧淡水化装置用移送ポンプ（35m）（水中ポンプ）から貯留タンク出口まで （耐圧ホース）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A相当 ポリ塩化ビニル 0.98 MPa 50℃

名 称	仕 様	
貯留タンク出口から旧淡水化装置入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
旧淡水化装置から貯留タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
旧淡水化装置から淡水化处理した水を貯留タンクへ送水する配管の分岐まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50 A相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C

(3)油分分離装置

処 理 量                      20 m<sup>3</sup>/h  
系 列 数                      直列2 系列  
最高使用圧力                0.6 MPa

(4)浄化装置

吸 着 剤                      キレート樹脂及びゼオライト  
処 理 量                      20 m<sup>3</sup>/h  
系 列 数                      1 系列  
最高使用圧力                0.6 MPa

(5)淡水化装置 (完成品)

処 理 量                      100 m<sup>3</sup>/日  
基 数                          1 基  
最高使用圧力                静水圧～6.0 MPa

(廃 止)

旧淡水化装置

(追 設)

(6)浄化ユニット

吸 着 材                      活性炭  
                                        セシウム/ストロンチウム同時吸着材  
処 理 量                      100 m<sup>3</sup>/日/系列  
系 列 数                      4 系列  
最高使用圧力                0.98 MPa

a. 前置フィルタ

名 称		前置フィルタ	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	4.2	
最高使用圧力	MPa	0.98	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 内 径	mm	339.8
	胴 板 厚 さ	mm	7.9
	上部鏡板厚さ	mm	8.0
	下部鏡板厚さ	mm	8.0
	高 さ	mm	1380.0
材 料	胴 板	—	SGP+ゴムライニング
	鏡 板	—	SS400+ゴムライニング
個 数	個/系列	1	
系 列 数	系列	4	

b. 吸着塔タイプ1

名 称		吸着塔タイプ1	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	4.2	
最高使用圧力	MPa	0.98	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 外 径	mm	508.0
	胴 板 厚 さ	mm	9.53
	上部, 下部平板厚さ	mm	50.0
	高 さ	mm	2286.0
材 料	胴 板	—	ASTM A106Gr. B +ゴムライニング
	上部, 下部平板	—	SS400+ゴムライニング
個 数	個/系列	1	
系 列 数	系列	4	

c. 吸着塔タイプ2

名 称		吸着塔タイプ2	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	4.2	
最高使用圧力	MPa	0.98	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 内 径	mm	700.0
	胴 板 厚 さ	mm	8.0
	上部鏡板厚さ	mm	8.0
	下部鏡板厚さ	mm	8.0
	高 さ	mm	1500.0 1550.0
材 料	胴 板	—	SUS316L
	鏡 板	—	SUS316L
個 数	個/系列	3	
系 列 数	系列	4	

d. 移送ポンプ（完成品）

台 数	1 台/系列
容 量	100 m <sup>3</sup> /日/台
揚 程	91 m

e. 出口フィルタ（完成品）

名 称		出口フィルタ	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	4.2	
最高使用圧力	MPa	0.98	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 外 径	mm	219.0
	胴 板 厚 さ	mm	3.0
	上部鏡板厚さ	mm	3.0
	下部鏡板厚さ	mm	3.0
	高 さ	mm	1308.0
材 料	胴 板	—	GB S31603
	鏡 板	—	GB S31603
個 数	個/系列	1	
系 列 数	系列	4	



f. 主要配管仕様

名 称	仕 様	
浄化ユニット入口から 移送ポンプまで (鋼管)	呼び径/厚さ  材質  最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch40 40A/Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98MPa 40℃
移送ポンプから 前置フィルタまで (鋼管)	呼び径/厚さ  材質  最高使用圧力 最高使用温度	40A/Sch40 32A/Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98MPa 40℃
前置フィルタから 出口フィルタまで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質  最高使用圧力 最高使用温度	40A/Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A相当 EPDM(合成ゴム) 0.98MPa 40℃
出口フィルタから 浄化ユニット出口まで (鋼管)	呼び径/厚さ  材質  最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch40 40A/Sch40 STPG370 +ポリエチレンライニング 0.98MPa 40℃

(7) 堰

受入タンク・油分分離装置エリア

高 さ 510mm以上\*

受入タンクエリア

高 さ 560mm以上\*

貯留タンクエリア

高 さ 520mm以上\*

\*：高さは、以下の各エリア毎に想定最大量及び堰内の面積から算出。

受入タンク・油分分離装置エリア 想定最大量 408 m<sup>3</sup> 堰内の面積 814 m<sup>2</sup>

受入タンクエリア 想定最大量 1,043 m<sup>3</sup> 堰内の面積 1,865 m<sup>2</sup>

貯留タンクエリア 想定最大量 3,301 m<sup>3</sup> 堰内の面積 6,392 m<sup>2</sup>

### 2.33.3 添付資料

- 添付資料－1 建屋内の滞留水による影響について
- 添付資料－2 6号機 放射性液体廃棄物処理系の未復旧期間における廃液の処理について
- 添付資料－3 6号機 原子炉建屋付属棟の一部没水機器について
- 添付資料－4 系統概要図及び全体概要図
- 添付資料－5 滞留水貯留設備の増設について
- 添付資料－6 メガフロート係留場所の津波に対する考慮について
- 添付資料－7 タンク等の構造強度及び耐震性に関する評価結果について
- 添付資料－8 滞留水貯留設備の増設及び廃止について
- 添付資料－9 浄化ユニット用ジャバラハウスの耐震評価について
- 添付資料－10 浄化ユニット吸着塔，貯留タンク及び中間タンクからの敷地境界線量評価
- 添付資料－11 廃棄物発生量に関する評価
- 添付資料－12 メガフロート津波等リスク低減対策工事について

## 滞留水貯留設備の増設及び廃止について

### 1. 工事概要

滞留水貯留設備について、中間タンク及び移送ポンプの増設、浄化ユニットの設置、堰の増設を実施する。

尚、堰設置にあたり、既設堰の一部を撤去する必要があるが、当該貯留タンクエリアには既に使用中の貯留タンクが設置されており、タンクから漏えいが発生した場合においても、常に堰外への漏えいを防ぐ必要がある。このため、既設堰の一部を撤去する前に仮堰(鉄板堰)を取付け、既設堰と仮堰(高さ 520 mm～594mm 以上\*)により、常に堰内に想定最大漏えい量を貯留できるよう計画する。

また、旧淡水化装置及びその移送設備並びに付属配管を廃止する。

※工事の各工程により異なる

### 2. 設備概要

工事概要図 別添－ 2 に示す。

系統概要図 (廃止範囲) 別添－ 3 に示す。

系統概要図 (増設及び取替範囲) 別添－ 4 に示す。

付属配管概要図 (増設及び取替範囲) 別添－ 5 に示す。

浄化ユニット概要図 別添－ 6 に示す。

全体概要図 (増設及び廃止後) 別添－ 7 に示す。

3. 工 程

図-1 工事工程

年度	2017	2018								2019			
	1~12月	1~3月	4~6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
中間タンク*1				設置									
移送ポンプ*1				増設									
浄化ユニット*1				設置									
堰				設置									
旧淡水化装置 移送ポンプ 付属配管			廃止										

\* 1 : 各設備付属配管の設置を含む。

4. 確認事項

表－1 中間タンク

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について材料証明書により確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。
	寸法確認	主要寸法（板厚，内径，高さ）を確認する。	実施計画に記載の通りであること。
	外観確認	タンク本体（塗装状態含む）の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	据付状態を確認する。	据付状態に異常がないこと。
		タンク基礎の不陸について確認する。	異常な不陸がないこと。
	耐圧・漏えい確認	設計・建設規格に基づき耐圧・漏えい試験を行う。	各部からの有意な漏えいおよび水位の低下がないこと。
地盤支持力確認	支持力試験にてタンク基礎の地盤支持力を確認する。	必要な支持力を有していること。	
機能 ・性能	監視確認	水位計について，6号機中央操作室にタンク水位が表示できることを確認する。	6号機中央操作室にタンク水位が表示できること。
	貯留機能	漏えいなく貯留できることを確認する。	タンク及び付属設備（マンホール，ドレン弁）に漏えいがないこと。

表－2－1 移送ポンプ（水中ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
性能	運転確認	ポンプの運転確認を行う。	必要な流量を有していること。

表－2－2 移送ポンプ（横置きポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
性能	運転確認	ポンプの運転確認を行う。	必要な流量を有していること。

表－3 浄化ユニット\*

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について材料証明書により確認する。	実施計画の通りであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	浄化ユニットの据付位置、据付状態について確認する。	実施計画の通りに据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	確認圧力で保持した後、確認圧力に耐えていること及び耐圧部から漏えいがないことについて記録を確認する。	確認圧力に耐え、かつ構造物の変形等がないこと。 また、耐圧部から著しい漏えいがないこと。
	運転時漏えい確認	運転時に漏えいの有無を確認する。	耐圧部から漏えいがないこと。
性能	性能確認	浄化ユニットの性能確認を行う。	実施計画に記載の処理量を満足すること。また、系統出口水の放射能濃度が入口放射能濃度より低減されていること。
	除去性能	浄化ユニット処理水に含まれる放射性核種について放射能濃度を確認する。	「Ⅲ 第3編 2.1.2.3(4)②浄化ユニットにより浄化処理した水」に示す内容を満足すること。

\*：別添－6 図－1 5・6号機 浄化ユニット概要図 参照

表－4 漏えい検知器，警報装置

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置、据付状態について確認する。	実施計画の通り、施工・据付されていること。
機能	漏えい警報確認	漏えい信号により、警報が作動することを確認する。	警報が作動すること。

表－5 各設備付属配管\*

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について材料証明書により確認する。	実施計画の通りであること。
	寸法確認	主要寸法について記録を確認する。	実施計画の通りであること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	運転時 漏えい確認	運転時に漏えいの有無を確認する。	耐圧部から漏えいがないこと。

\*: 別添－5 図－1 5・6号機 付属配管概要図（増設及び取替範囲） 参照

表－6 堰

確認事項	確認項目	確認内容	判定
性能	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	寸法確認	堰の高さを確認する。	実施計画に記載の通りであること。

表－7 淡水化装置，移送ポンプ，付属配管

確認事項	確認項目	確認内容	判定
機能	機能確認	淡水化装置，移送ポンプ，付属配管の廃止状態について確認する。	実施計画の通り廃止されていること。

## 5. 補足事項

- ・許容範囲について

表－8 許容範囲一覧

名称		寸法 (mm)	許容範囲 (mm)	根拠
堰の高さ	貯留タンクエリア	520 以上	520 以上* <sup>2</sup>	自主管理値* <sup>1</sup>

\*<sup>1</sup>：想定最大量（水位警報設定値の水位高での容量）が漏えいしても堰外への汚染拡大を防止する。

\*<sup>2</sup>：高さは、以下の各エリア毎に想定最大量及び堰内の面積から算出。

貯留タンクエリア 想定最大量 3,301 m<sup>3</sup> 堰内の面積 6,392 m<sup>2</sup>

・浄化ユニット，中間タンク，移送配管で使用する主要材料については，以下の規格・基準類に準拠する。

- (1) 発電用原子力設備規格 設計・建設規格 (JSME S NC1-2005/2007)
- (2) 原子力発電所耐震設計技術規程 (JEAC-4601 (2008))
- (3) 石油学会規格 縦形容器用レグ (JPI-7R-71-96)
- (4) 日本産業規格 (JIS 規格)
- (5) ASTM インターナショナル (ASTM 規格)
- (6) 中華人民共和国国家標準 (GB 規格)
- (7) 国際標準化機構規格 (ISO 規格)
- (8) 日本水道協会規格 (JWWA 規格)

## 6. 別添

- 別添－1 浄化ユニット等の構造強度及び耐震性に関する評価結果について
- 別添－2 工事概要図
- 別添－3 系統概要図（廃止範囲）
- 別添－4 系統概要図（増設及び取替範囲）
- 別添－5 付属配管概要図（増設及び取替範囲）
- 別添－6 浄化ユニット概要図
- 別添－7 全体概要図（増設及び廃止後）
- 別添－8 浄化ユニット等の安全確保策
- 別添－9 浄化ユニット基礎に関する説明書
- 別添－10 貯留タンクエリアの基礎外周堰の堰内容量に関する説明書



## 浄化ユニット等の構造強度及び耐震性に関する評価結果について

## 1.1 基本方針

## 1.1.1 構造強度評価の基本方針

浄化ユニット等を構成する機器は、「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則（平成25年6月28日原子力規制委員会規則第6号）」において、廃棄物処理設備に相当するクラス3機器に準ずるものと位置付けられる。

浄化ユニット等を構成する機器については、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME 規格）」（以下、「JSME 規格」という。）、日本産業規格（JIS 規格）等の国内外の民間規格に適合した工業用品の採用、またはこれらと同等の技術的妥当性を有する規格での設計・製作・検査を行う。

また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格（JIS）年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

さらに、JSME 規格に記載のない非金属材料（耐圧ホース、ポリエチレン管等）については、現場の作業環境等から採用を継続する必要があるが、これらの機器等については、日本産業規格（JIS）や日本水道協会規格（JWWA 規格）、製品の試験データ等を用いて設計を行う。

## 1.1.2 耐震性評価の基本方針

浄化ユニット等を構成する機器のうち放射性物質を内包するものは、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」のBクラス相当の設備と位置づけられる。耐震性を評価するにあたっては、「JEAC4601 原子力発電所耐震設計技術規程」等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態にあわせたものを採用する。浄化ユニットについては、構成する機器は架台に据え付けられ、架台は基礎に据え付けることから、機器単体と浄化ユニット全体に対し、それぞれ耐震性評価を行う。

ポンプ（水中ポンプを除く）については、スキッドに据え付け、スキッドは基礎に据え付けることから、ポンプ単体とポンプスキッド全体に対し、それぞれ耐震性評価を行う。

支持部材がない等の理由によって、耐震性に関する評価ができない設備を設置する場合においては、可撓性を有する材料の使用等により、耐震性を確保する。

## 1.2 評価結果

### 1.2.1 構造強度評価

#### (1) 前置フィルタ，吸着塔タイプ1，吸着塔タイプ2及び出口フィルタ板厚の強度評価

設計・建設規格に準拠し，板厚評価を行った。評価の結果，最高使用圧力に対して十分な厚さを有することを確認した。(表-1 参照)

a. 胴について，以下の計算式により必要な厚さを計算した。

(a) 前置フィルタ，吸着塔タイプ1，吸着塔タイプ2及び出口フィルタ

$$t = \frac{P \cdot Di}{2 \cdot S \cdot \eta - 1.2 \cdot P}$$

ここで，

$t$  : 胴の計算上必要な厚さ

$P$  : 最高使用圧力

$Di$  : 胴の内径

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

$\eta$  : 長手継手の効率

b. 鏡板について，以下の計算式により必要な厚さを計算した。

(a) 前置フィルタ，出口フィルタ

以下の i，ii で計算した値のうちいずれか大きい値

i.

$$t = \frac{P \cdot Di}{2 \cdot S \cdot \eta - 1.2 \cdot P}$$

ここで，

$t$  : 鏡板の計算上必要な厚さ

$P$  : 最高使用圧力

$Di$  : 胴の内径

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

$\eta$  : 長手継手の効率

ii .

$$t = \frac{P \cdot D \cdot K}{2 \cdot S \cdot \eta - 0.2 \cdot P}$$

ここで,

$t$  : 鏡板の計算上必要な厚さ

$D$  : 鏡板の内面における長径

$K$  : 半だ円形鏡板の形状による係数で、以下の計算式により計算した値

$$K = \frac{1}{6} \left\{ 2 + \left( \frac{D}{2h} \right)^2 \right\}$$

$h$  : 鏡板の内面における短径の 1/2

$P$  : 最高使用圧力

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

$\eta$  : 鏡板を継ぎ合せて作る場合の当該継手の効率

(b) 吸着塔タイプ 1

$$t = d \cdot \sqrt{\frac{2 \cdot K \cdot P}{S}}$$

$$K = 0.20 + \frac{1.0 \cdot F \cdot hg}{W \cdot d}$$

ここで,

$t$  : 平板の計算上必要な厚さ

$d$  : 平板の径

$P$  : 最高使用圧力

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

$K$  : 平板の取付方法による係数

$F$  : 全体のボルトに作用する力

$hg$  : ボルトのピッチ円の直径と  $d$  との差の 1/2

$W$  : パッキンの外径又は平板の接触面の外径内の面積に作用する全圧力

(c) 吸着塔タイプ2

$$t = \frac{P \cdot R \cdot W}{2 \cdot S \cdot \eta - 0.2 \cdot P}$$

ここで,

$t$  : 鏡板の計算上必要な厚さ

$P$  : 最高使用圧力

$R$  : 鏡板の中央部の内半径

$W$  : さら形鏡板の形状による係数で、以下の計算式により計算した値

$$W = \frac{1}{4} \left( 3 + \sqrt{\frac{R}{r}} \right)$$

$r$  : さら形鏡板のすみの丸みの内半径

$\eta$  : 鏡板を継ぎ合せて作る場合の当該継手の効率

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

表ー1 前置フィルタ, 吸着塔タイプ1, 吸着塔タイプ2, 出口フィルタの強度評価

機器名称	評価部位	必要板厚 [mm]	板厚 [mm]
前置フィルタ	胴板	3.26	6.91
	鏡板	1.68	6.80
吸着塔タイプ1	胴板	3.00	7.43
	平板	41.78	49.00
吸着塔タイプ2	胴板	4.45	5.51
	鏡板	4.77	5.20
出口フィルタ	胴板	1.50	2.50
	鏡板	0.95	2.10

(2) 配管（鋼管）の強度評価

設計・建設規格に準拠し、板厚評価を行った。評価の結果、最高使用圧力に対して十分な厚さを有することを確認した。(表ー2 参照)

内面に圧力を受ける配管について、以下の計算式により計算した値及び設計・建設規格 表 PPD-3411-1 に定める値のいずれか大きい方の値以上であること。

$$t = \frac{P \cdot D_o}{2 \cdot S \cdot \eta + 0.8 \cdot P}$$

ここで、

$t$  : 管の計算上必要な厚さ

$P$  : 最高使用圧力

$D_o$  : 管の外径

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力

$\eta$  : 長手継手の効率

表-2 配管（鋼管）の板厚評価結果

機器名称	口径	スケジュール	材質	最高使用温度 (°C)	必要板厚 (mm)	設計板厚 (mm)
配管	32A	40	STPG370	40	1.9	3.10
配管	40A	40	STPG370	40	2.2	3.20
配管	50A	40	STPG370	40	2.4	3.40
配管	65A	40	STPG370	40	2.7	4.55
配管	100A	40	STPG370	40	3.4	5.25

### (3) 配管（ポリエチレン管）の強度評価

配管（ポリエチレン管）は鋼材ではなく、一般産業品であるため、設計・建設規格の要求に適合するものではない。しかしながら、配管（ポリエチレン管）は、一般に耐食性、電気特性（耐電気腐食）、耐薬品性を有しており、鋼管と同等の信頼性を有している。また、以下により高い信頼性を確保する。

- ・日本水道協会規格及び ISO 規格に適合したポリエチレン管を採用する。
- ・継手は、可能な限り融着構造とする。

また、配管（ポリエチレン管）には保温材を取付け凍結防止対策を施す。なお、本対策は、配管（ポリエチレン管）の紫外線劣化対策を兼ねる。

### (4) 配管（耐圧ホース）の強度評価

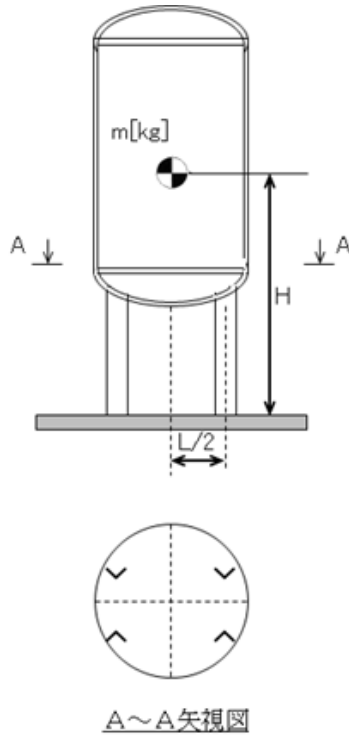
配管（耐圧ホース）は鋼材ではなく、一般産業品であるため、設計・建設規格の要求に適合するものではない。しかしながら、以下により高い信頼性を確保する。

- ・継手金属と樹脂の結合部（カシメ部）の外れ防止対策として、結合部に外れ防止金具を装着する。
- ・通水等による漏えい確認を行う。

## 1.2.2 耐震評価

### (1) 前置フィルタの耐震評価

耐震設計技術規程並びに「JPI-7R-71-96 石油学会規格 縦形容器レグ」の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、前置フィルタの胴板、脚及び取付ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-1 参照)



$L$  : 脚断面の図心の描く円の直径

$m$  : 機器重量

$g$  : 重力加速度

$H$  : 据付面から重心までの距離

$A_b$  : 取付ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度

$C_V$  : 鉛直方向設計震度

$\sigma_b$  : 脚に生じる曲げ応力

$\sigma_c$  : 脚に生じる圧縮応力

$\tau$  : 脚に生じるせん断応力

$f_b$  : 脚の許容曲げ応力

$f_c$  : 脚の許容圧縮応力

$\sigma_{\phi 1}$  : 内圧による周方向応力

$\sigma_{x 1}$  : 内圧による軸方向応力

$\sigma_{x 2}$  : 運転時質量による軸方向応力

$\sigma_{x 5}$  : 地震力により生じる転倒モーメントによる軸方向応力

$\sigma_{x 7}$  : 胴の鉛直方向地震による軸方向応力

#### a. 取付ボルトの耐震評価

$$\text{取付ボルトの引張応力} : \sigma_{bt} = \frac{1}{A_b} \left\{ \frac{m \times g \times C_H \times H}{L} - \frac{m \times g \times (1 - C_V)}{4} \right\}$$

$$\text{取付ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{1}{4 \times A_b} \{ m \times g \times C_H - 0.1 \times m \times g \times (1 - C_V) \}$$

#### b. 脚の耐震評価

$$\text{脚の組合せ応力} : \sigma_s = \sqrt{(\sigma_b + \sigma_c)^2 + 3 \times \tau^2}$$

$$\text{脚の座屈評価} : \frac{\sigma_b}{f_b} + \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

#### c. 胴板の耐震評価

$$\text{胴板の一次一般膜応力} : \sigma_0 = \text{Max} \{ \sigma_{0\phi}, \sigma_{0x} \}$$

$$\text{胴板の一次一般膜応力 (周方向)} : \sigma_{0\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 7}$$

$$\text{胴板の一次一般膜応力 (軸方向)} : \sigma_{0x} = \sigma_{x 1} + \sigma_{x 2} + \sigma_{x 5} + \sigma_{x 7}$$

d. 条件

機器名称	耐震設計上の 重要度分類	水平方向設計震度	鉛直方向設計震度	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	周囲環境温度 (°C)
前置フィルタ	耐震Bクラス 相当	0.36	—	0.98	40	40

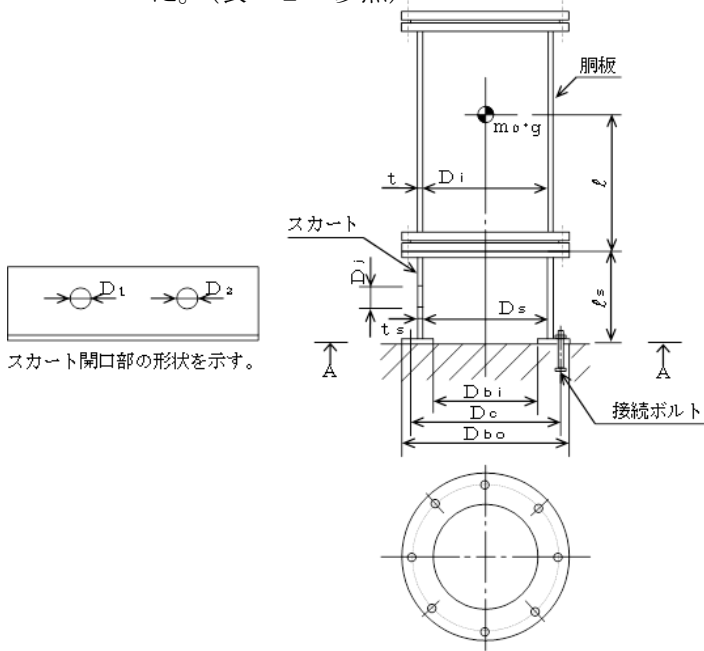
表-1 前置フィルタ耐震評価結果

部材	材料	応力	算出応力 (MPa)	許容応力 (MPa)
胴板	SGP	一次一般膜	$\sigma_o = 22$	147
脚	SS400	組合せ	$\sigma_s = 25$	245
		座屈	0.11 (無次元)	1 (無次元)
取付ボルト	SS400	引張	$\sigma_{bt} = 10$	176
		せん断	$\tau_b = 1$	135

すべて許容応力以下である。

(2) 吸着塔タイプ1の耐震評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、吸着塔タイプ1の胴板、スカート及び取付ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-2 参照)



スカート開口部の形状を示す。

A~A矢視図

a. 取付ボルトの耐震評価

$$\text{取付ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{2 \times Ft}{t_1 \times Dc \times Ct}$$

$$\text{取付ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{C_H \times m_0 \times g}{n \times Ab}$$

b. スカートの耐震評価

$$\text{スカートの組合せ応力} : \sigma_s = \sqrt{(\sigma_{S1} + \sigma_{S2} + \sigma_{S3})^2 + 3 \times \tau_s^2}$$

$$\text{スカートの座屈評価} : \frac{\eta \times (\sigma_{S1} + \sigma_{S3})}{f_c} + \frac{\eta \times \sigma_{S2}}{f_b} \leq 1$$

c. 胴板の耐震評価

$$\text{胴板の組合せ応力} : \sigma_0 = \text{Max} \{ \sigma_{0t}, \sigma_{0c} \}$$

$$\text{胴板の組合せ引張応力} : \sigma_{0t} = \frac{1}{2} \times \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xt})^2 + 4 \times \tau^2} \right\}$$

$$\text{胴板の組合せ圧縮応力} : \sigma_{0c} = \frac{1}{2} \times \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xc})^2 + 4 \times \tau^2} \right\}$$

$m_0$  : 容器の運転時質量

$g$  : 重力加速度

$C_t$  : 取付ボルト計算における係数

$D_c$  : 取付ボルトのピッチ円直径

$t_1$  : 取付ボルト計算における中立軸から荷重作用点までの距離

$n$  : 取付ボルトの本数

$A_b$  : 取付ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度

$F_t$  : 取付ボルトに作用する引張力

$\sigma_{S1}$  : スカートの運転時質量による軸方向応力

$\sigma_{S2}$  : スカートの曲げモーメントによる軸方向応力

$\sigma_{S3}$  : スカートの鉛直方向地震力による軸方向応力

$\tau_s$  : 地震によりスカートに生じるせん断力

$\eta$  : 座屈応力に対する安全率

$f_b$  : 曲げモーメントに対する許容座屈応力

$f_c$  : 軸圧縮荷重に対する許容座屈応力

$\sigma_\phi$  : 胴の周方向応力の和

$\sigma_{xt}$  : 胴の軸方向応力の和 (引張側)

$\sigma_{xc}$  : 胴の軸方向応力の和 (圧縮側)

$\tau$  : 地震により胴に生じるせん断力



d. 条件

機器名称	耐震設計上の 重要度分類	水平方向設計震度	鉛直方向設計震度	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	周囲環境温度 (°C)
吸着塔タイプ1	耐震Bクラス 相当	0.36	—	0.98	40	40

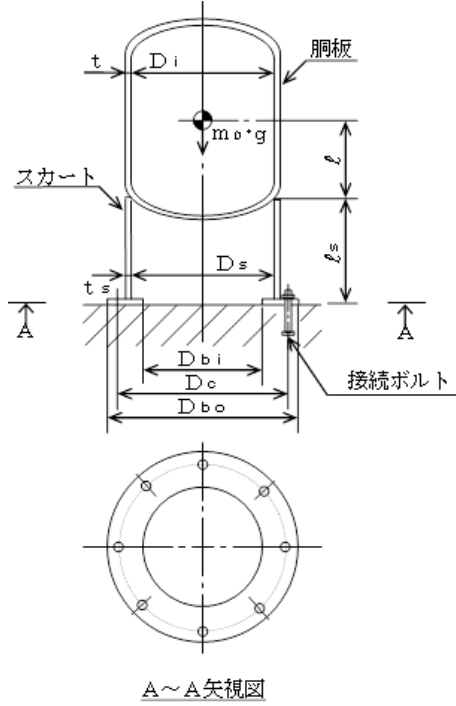
表-2 吸着塔タイプ1 耐震評価結果

部材	材料	応力	算出応力 (MPa)	許容応力 (MPa)
胴板	ASTM A106 Gr. B	組合せ	$\sigma_o=26$	245
スカート	ASTM A106 Gr. B	組合せ	$\sigma_s=7$	245
		座屈	0.03 (無次元)	1 (無次元)
取付ボルト	SS400	引張	$\sigma_b=6$	176
		せん断	$\tau_b=3$	135

すべて許容応力以下である。

(3) 吸着塔タイプ2の耐震評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、吸着塔タイプ2の胴板、スカート及び取付ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-3 参照)



A~A矢視図

$m_0$  : 容器の運転時質量

$g$  : 重力加速度

$C_t$  : 取付ボルト計算における係数

$D_c$  : 取付ボルトのピッチ円直径

$t_l$  : 取付ボルト計算における中立軸から荷重作用点までの距離

$n$  : 取付ボルトの本数

$A_b$  : 取付ボルトの軸断面積

$C_H$  : 水平方向設計震度

$F_t$  : 取付ボルトに作用する引張力

$\sigma_{S1}$  : スカートの運転時質量による軸方向応力

$\sigma_{S2}$  : スカートの曲げモーメントによる軸方向応力

$\sigma_{S3}$  : スカートの鉛直方向地震力による軸方向応力

$\tau_s$  : 地震によりスカートに生じるせん断力

$\eta$  : 座屈応力に対する安全率

$f_b$  : 曲げモーメントに対する許容座屈応力

$f_c$  : 軸圧縮荷重に対する許容座屈応力

$\sigma_\phi$  : 胴の周方向応力の和

$\sigma_{xt}$  : 胴の軸方向応力の和 (引張側)

$\sigma_{xc}$  : 胴の軸方向応力の和 (圧縮側)

$\tau$  : 地震により胴に生じるせん断力

a. 取付ボルトの耐震評価

$$\text{取付ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{2 \times F_t}{t_l \times D_c \times C_t}$$

$$\text{取付ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{C_H \times m_0 \times g}{n \times A_b}$$

b. スカートの耐震評価

$$\text{スカートの組合せ応力} : \sigma_s = \sqrt{(\sigma_{S1} + \sigma_{S2} + \sigma_{S3})^2 + 3 \times \tau_s^2}$$

$$\text{スカートの座屈評価} : \frac{\eta \times (\sigma_{S1} + \sigma_{S3})}{f_c} + \frac{\eta \times \sigma_{S2}}{f_b} \leq 1$$

c. 胴板の耐震評価

$$\text{胴板の組合せ応力} : \sigma_0 = \text{Max} \{ \sigma_{0t}, \sigma_{0c} \}$$

$$\text{胴板の組合せ引張応力} : \sigma_{0t} = \frac{1}{2} \times \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xt})^2 + 4 \times \tau^2} \right\}$$

$$\text{胴板の組合せ圧縮応力} : \sigma_{0c} = \frac{1}{2} \times \left\{ \sigma_\phi + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_\phi - \sigma_{xc})^2 + 4 \times \tau^2} \right\}$$

d. 条件

機器名称	耐震設計上の 重要度分類	水平方向設計震度	鉛直方向設計震度	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	周囲環境温度 (°C)
吸着塔タイプ2	耐震Bクラス 相当	0.36	—	0.98	40	40

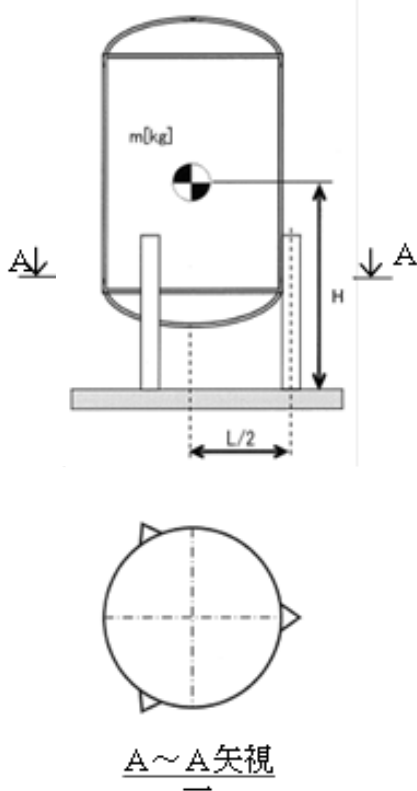
表-3 吸着塔タイプ2耐震評価結果

部材	材料	応力	算出応力 (MPa)	許容応力 (MPa)
胴板	SUS316L	組合せ	$\sigma_o=44$	175
スカート	SUS316L	組合せ	$\sigma_s=2$	175
		座屈	0.01 (無次元)	1 (無次元)
取付ボルト	SS400	引張	$\sigma_b=1$	161
		せん断	$\tau_b=2$	124

すべて許容応力以下である。

(4) 出口フィルタの耐震評価

耐震設計技術規程並びに「JPI-7R-71-96 石油学会規格 豎形容器レグ」の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、出口フィルタの胴板、脚、取付ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-4 参照)



- $L$  : 脚断面の図心の描く円の直径
- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面から重心までの距離
- $A_b$  : 取付ボルトの軸断面積
- $C_H$  : 水平方向設計震度
- $C_V$  : 鉛直方向設計震度
- $\sigma_b$  : 脚に生じる曲げ応力
- $\sigma_c$  : 脚に生じる圧縮応力
- $\tau$  : 脚に生じるせん断応力
- $f_b$  : 脚の許容曲げ応力
- $f_c$  : 脚の許容圧縮応力
- $\sigma_{\phi 1}$  : 内圧による周方向応力
- $\sigma_{\phi 7}$  : 鉛直方向地震による胴の周方向応力
- $\sigma_{x 1}$  : 内圧による軸方向応力
- $\sigma_{x 2}$  : 運転時質量による軸方向応力
- $\sigma_{x 5}$  : 地震力により生じる転倒モーメントによる軸方向応力
- $\sigma_{x 7}$  : 胴の鉛直方向地震による軸方向応力

a. 取付ボルトの耐震評価

$$\text{取付ボルトの引張応力} : \sigma_{bt} = \frac{1}{3 \times A_b} \left\{ \frac{4 \times m \times g \times C_H \times H}{L} - m \times g \times (1 - C_V) \right\}$$

$$\text{取付ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{1}{3 \times A_b} \{ m \times g \times C_H - 0.1 \times m \times g \times (1 - C_V) \}$$

b. 脚の耐震評価

$$\text{脚の組合せ応力} : \sigma_s = \sqrt{(\sigma_b + \sigma_c)^2 + 3 \times \tau^2}$$

$$\text{脚の座屈評価} : \frac{\sigma_b}{f_b} + \frac{\sigma_c}{f_c} \leq 1$$

c. 胴板の耐震評価

$$\text{胴板の一次一般膜応力} : \sigma_0 = \text{Max} \{ \sigma_{0\phi}, \sigma_{0x} \}$$

$$\text{胴板の一次一般膜応力 (周方向)} : \sigma_{0\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 7}$$

$$\text{胴板の一次一般膜応力 (軸方向)} : \sigma_{0x} = \sigma_{x 1} + \sigma_{x 2} + \sigma_{x 5} + \sigma_{x 7}$$

d. 条件

機器名称	耐震設計上の 重要度分類	水平方向設計震度	鉛直方向設計震度	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	周囲環境温度 (°C)
出口フィルタ	耐震Bクラス 相当	0.36	—	0.98	40	40

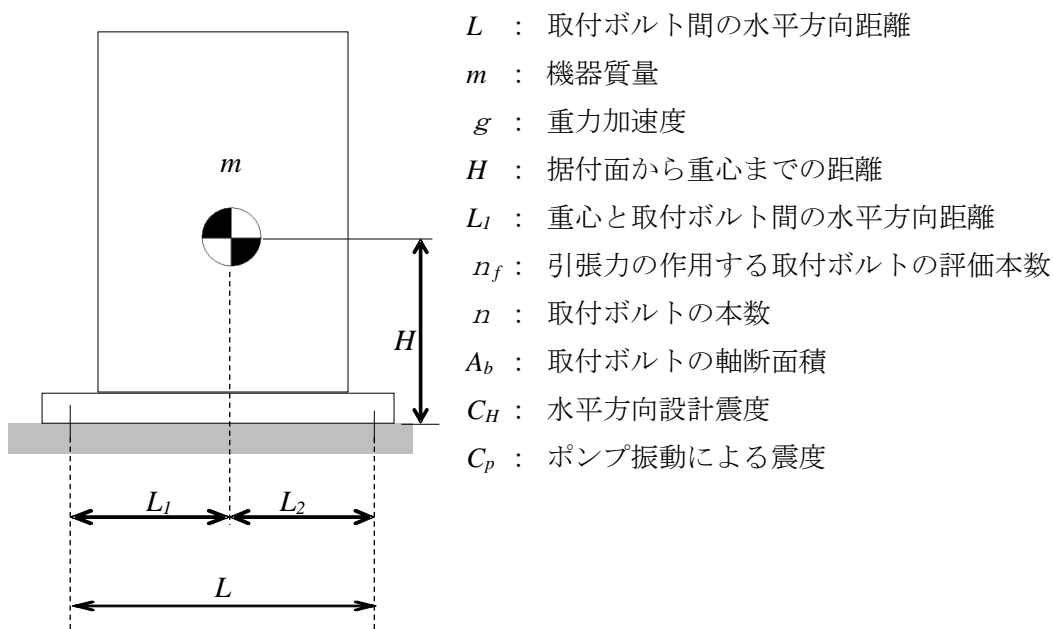
表-4 出口フィルタ耐震評価結果

部材	材料	応力	算出応力 (MPa)	許容応力 (MPa)
胴板	GB S31603	一次一般膜	$\sigma_o=36$	175
脚	AISI 304	組合せ	$\sigma_s=51$	205
		座屈	0.27 (無次元)	1 (無次元)
取付ボルト	SS400	引張	$\sigma_{bt}=34$	183
		せん断	$\tau_b=2$	141

すべて許容応力以下である。

(5) 移送ポンプ取付ボルトの耐震評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、取付ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-5 参照)



- $L$  : 取付ボルト間の水平方向距離
- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面から重心までの距離
- $L_1$  : 重心と取付ボルト間の水平方向距離
- $n_f$  : 引張力の作用する取付ボルトの評価本数
- $n$  : 取付ボルトの本数
- $A_b$  : 取付ボルトの軸断面積
- $C_H$  : 水平方向設計震度
- $C_p$  : ポンプ振動による震度

$$\text{取付ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L} (m \times g \times (C_H + C_p) \times H - m \times g \times L_1)$$

$$\text{取付ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

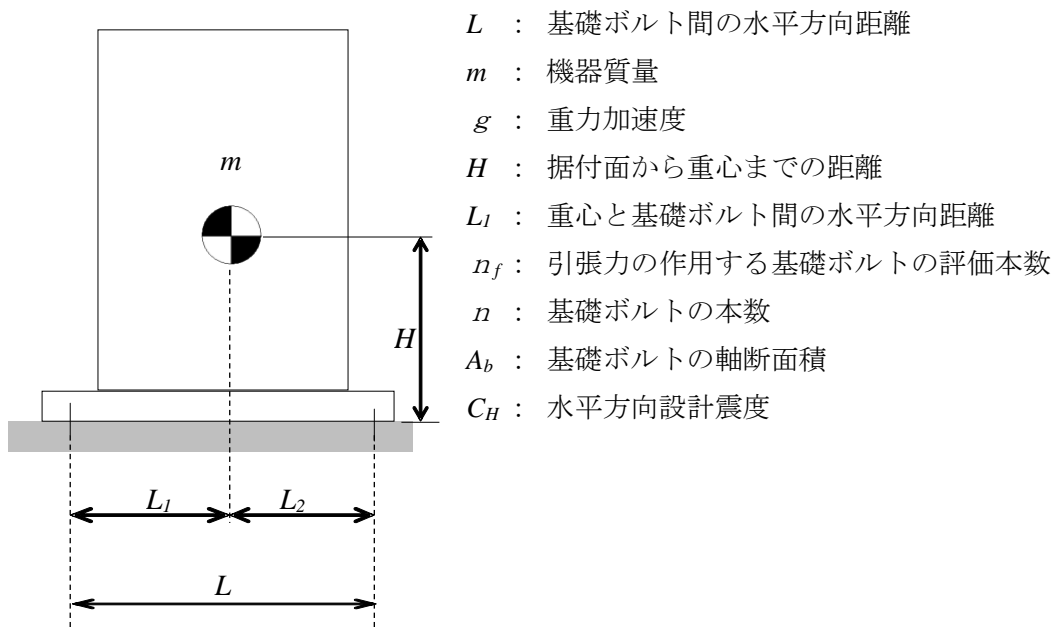
$$\text{取付ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times (C_H + C_p)}{n \times A_b}$$

表-5 移送ポンプ耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
移送ポンプ	取付ボルト	引張	0.36	—	153	MPa
		せん断	0.36	3	118	MPa

(6) 浄化ユニット基礎ボルトの耐震評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-6 参照)



- $L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離
- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面から重心までの距離
- $L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離
- $n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数
- $n$  : 基礎ボルトの本数
- $A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積
- $C_H$  : 水平方向設計震度

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{1}{L}(m \times g \times C_H \times H - m \times g \times L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

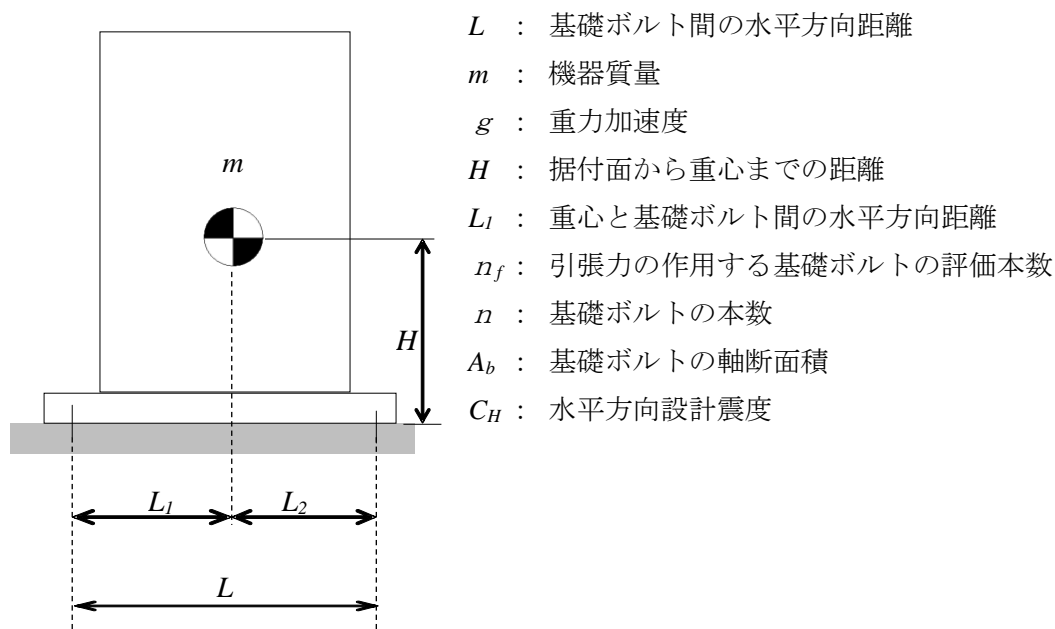
$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times C_H}{n \times A_b}$$

表-6 浄化ユニット耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
浄化ユニットA	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	18	38	MPa
浄化ユニットB	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	16	38	MPa
浄化ユニットC	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	17	38	MPa
浄化ユニットD	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	16	38	MPa

(7) 移送ポンプスキッド基礎ボルトの耐震評価

耐震設計技術規程の強度評価方法に準拠し、下記式にて評価を実施した。評価の結果、基礎ボルトの強度が確保されていることを確認した。(表-7 参照)



- $L$  : 基礎ボルト間の水平方向距離
- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面から重心までの距離
- $L_1$  : 重心と基礎ボルト間の水平方向距離
- $n_f$  : 引張力の作用する基礎ボルトの評価本数
- $n$  : 基礎ボルトの本数
- $A_b$  : 基礎ボルトの軸断面積
- $C_H$  : 水平方向設計震度

$$\text{基礎ボルトに作用する引張力} : F_b = \frac{I}{L} (m \times g \times C_H \times H - m \times g \times L_1)$$

$$\text{基礎ボルトの引張応力} : \sigma_b = \frac{F_b}{n_f \times A_b}$$

$$\text{基礎ボルトのせん断応力} : \tau_b = \frac{m \times g \times C_H}{n \times A_b}$$

表-7 移送ポンプスキッド耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
移送ポンプ (6.5 m) スキッド	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	9	38	MPa
移送ポンプ (4.3. 2 m) スキッド	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	11	38	MPa
移送ポンプ (1.3 m) スキッド	基礎ボルト	引張	0.36	—	27	MPa
		せん断	0.36	5	38	MPa

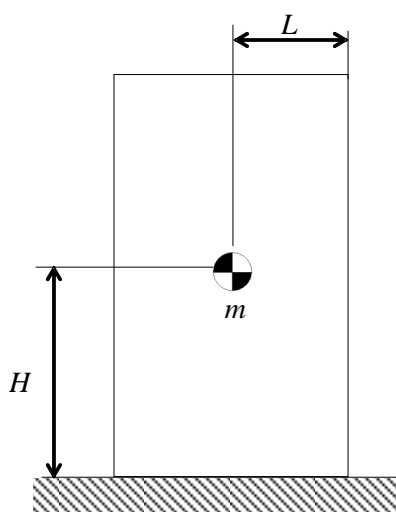
注1) : 移送ポンプ (2.0 m) については、水中ポンプであり、タンク内へ吊り下げて設置するため耐震評価は行わない。



(8) 浄化ユニットの耐震評価

a. 転倒評価

地震時の水平荷重による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらを比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、「①地震時の水平荷重による転倒モーメント<②自重による安定モーメント」となることから、転倒しないことを確認した。(表-8 参照)



- $C_H$  : 水平方向設計震度
- $m$  : 浄化ユニットの合計質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 地面から重心までの距離
- $L$  : 転倒支点から重心までの距離

①地震による転倒モーメント :  $M_1 = m \times g \times C_H \times H$

②自重による安定モーメント :  $M_2 = m \times g \times (1-C_v) \times L$

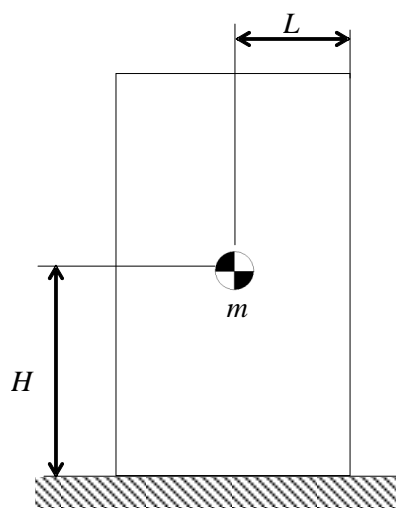
表-8 浄化ユニット耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	①	②	単位
浄化ユニットA	本体	転倒	0.36	110	304	kN・m
浄化ユニットB	本体	転倒	0.36	99	269	kN・m
浄化ユニットC	本体	転倒	0.36	99	280	kN・m
浄化ユニットD	本体	転倒	0.36	100	255	kN・m

(9) 移送ポンプスキッドの耐震評価

a. 転倒評価

地震時の水平荷重による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を行った。評価の結果、「①地震時の水平荷重による転倒モーメント<②自重による安定モーメント」となることから、転倒しないことを確認した。(表-9 参照)



- $C_H$  : 水平方向設計震度
- $m$  : 移送ポンプスキッドの合計質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 地面から重心までの距離
- $L$  : 転倒支点から重心までの距離

①地震による転倒モーメント :  $M_1 = m \times g \times C_H \times H$

②自重による安定モーメント :  $M_2 = m \times g \times (1 - C_V) \times L$

表-9 移送ポンプスキッド耐震評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平震度	①	②	単位
移送ポンプ (6.5 m) スキッド	本体	転倒	0.36	8	26	kN・m
移送ポンプ (4.3.2 m) スキッド	本体	転倒	0.36	8	21	kN・m
移送ポンプ (1.3 m) スキッド	本体	転倒	0.36	4	6	kN・m

注1) : 移送ポンプ (2.0 m) については、水中ポンプであり、タンク内へ吊り下げて設置するため耐震評価は行わない。

(10) 配管の耐震評価

a. 配管（鋼管）

配管（鋼管）は、定ピッチスパン法に基づき定められた間隔で支持する。

b. 配管（ポリエチレン管）

配管（ポリエチレン管）は、可撓性を有しており、地震変位による有意な応力は発生しないと考える。

c. 配管（耐圧ホース）

配管（耐圧ホース）は、可撓性を有しており地震により有意な応力は発生しない。

以上

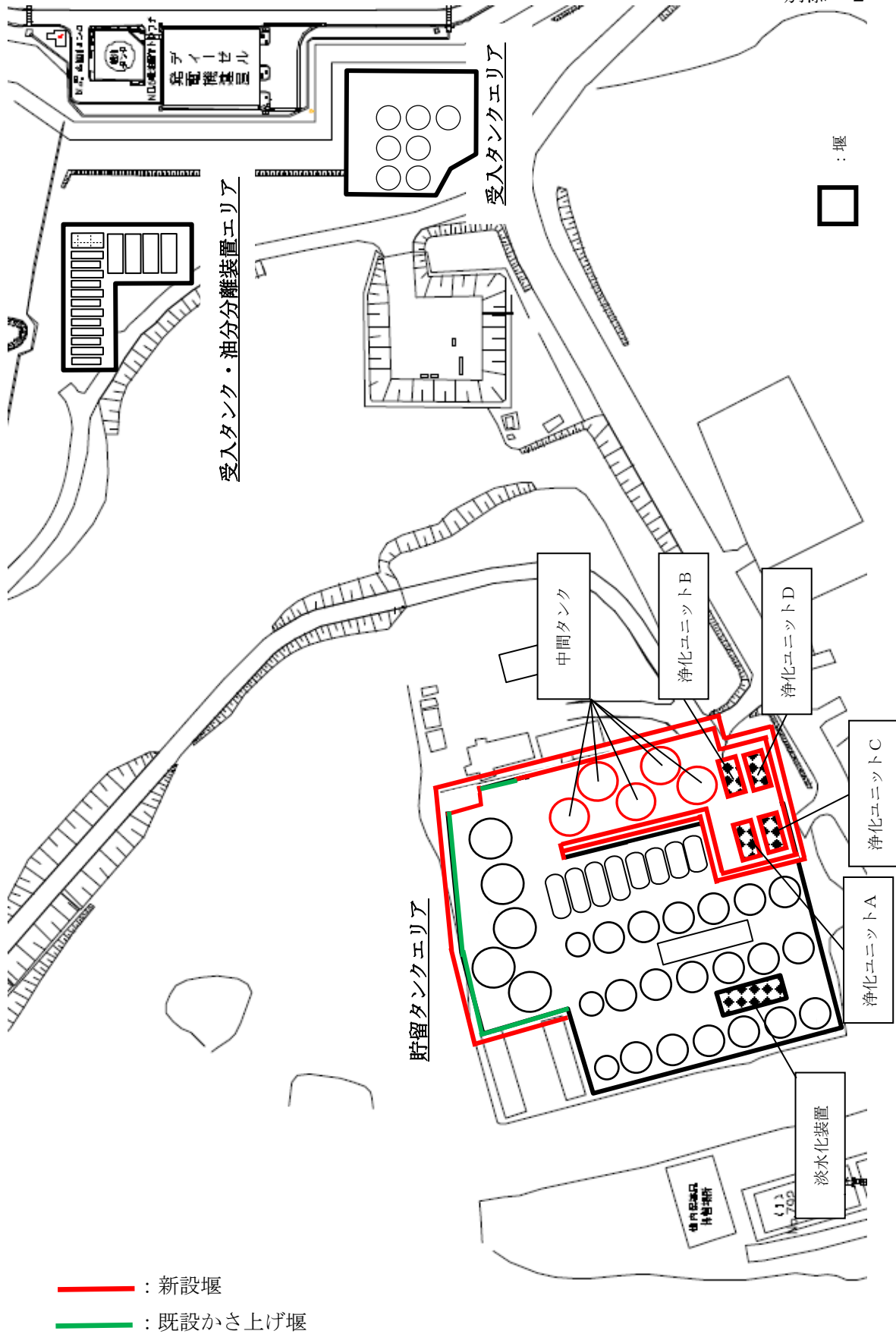


図-1 5・6号機 滞留水貯留設備 工事概要図

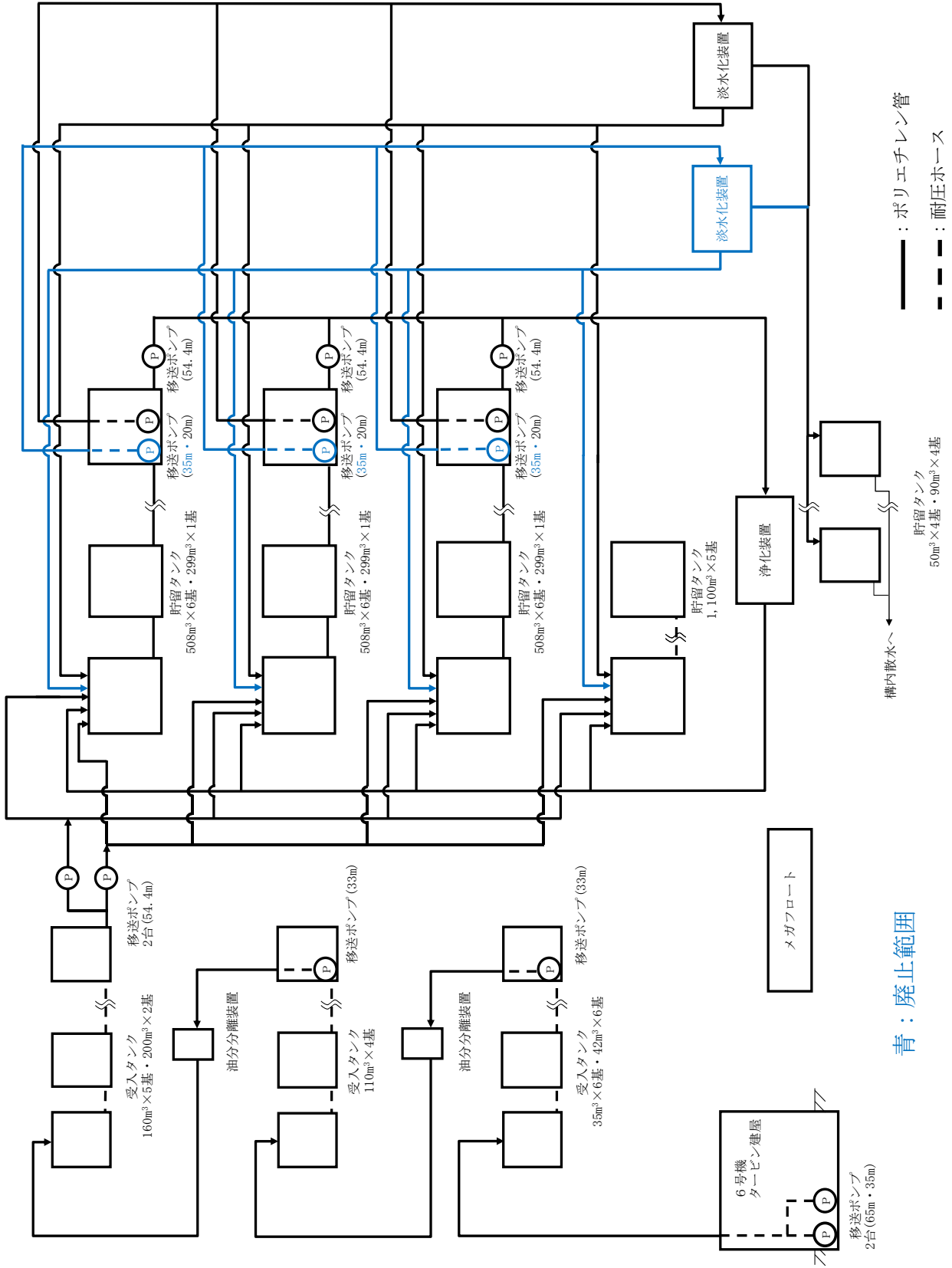


図-1 5・6号機 滞留水貯留設備 系統概要図 (廃止範囲)

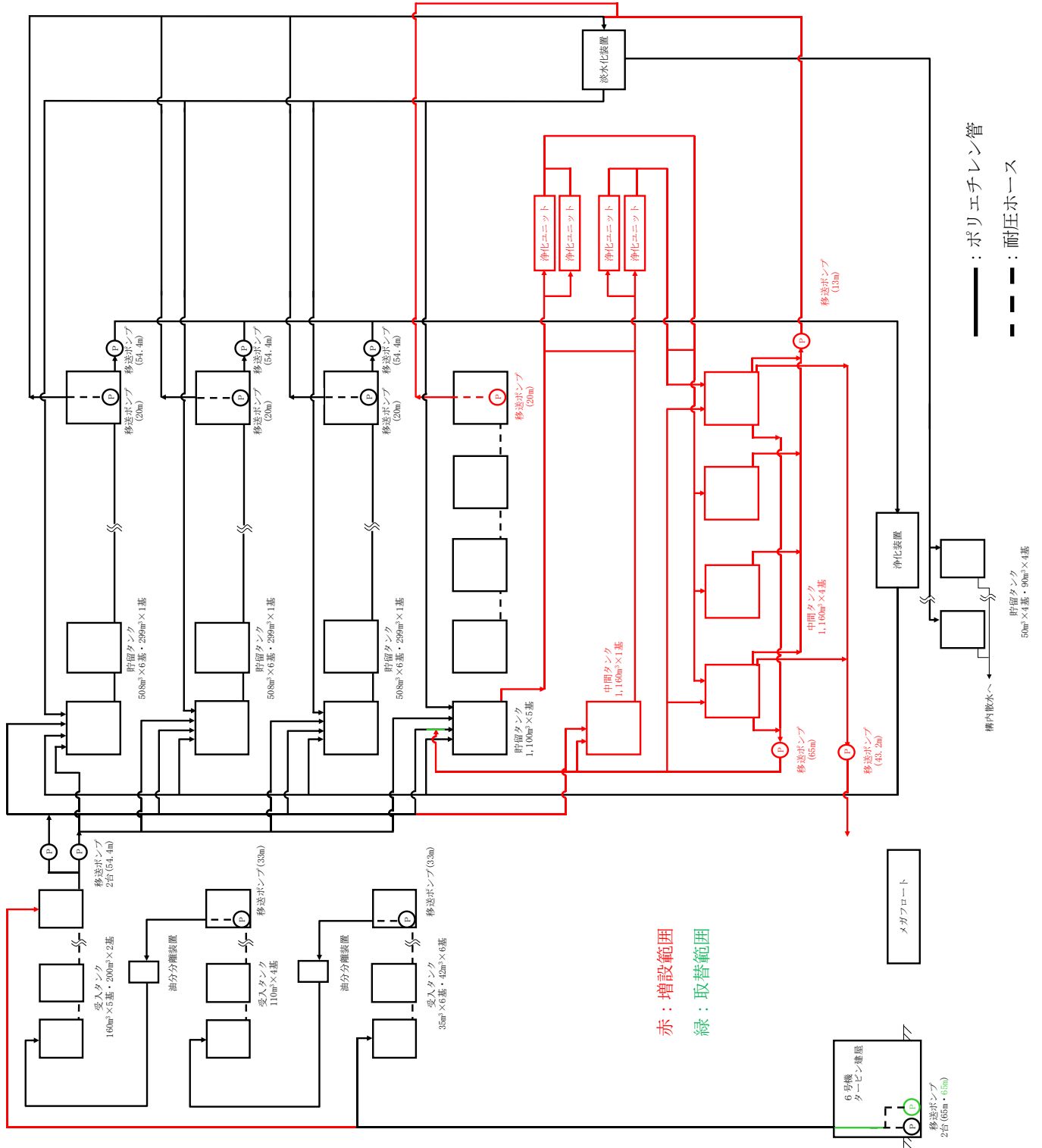
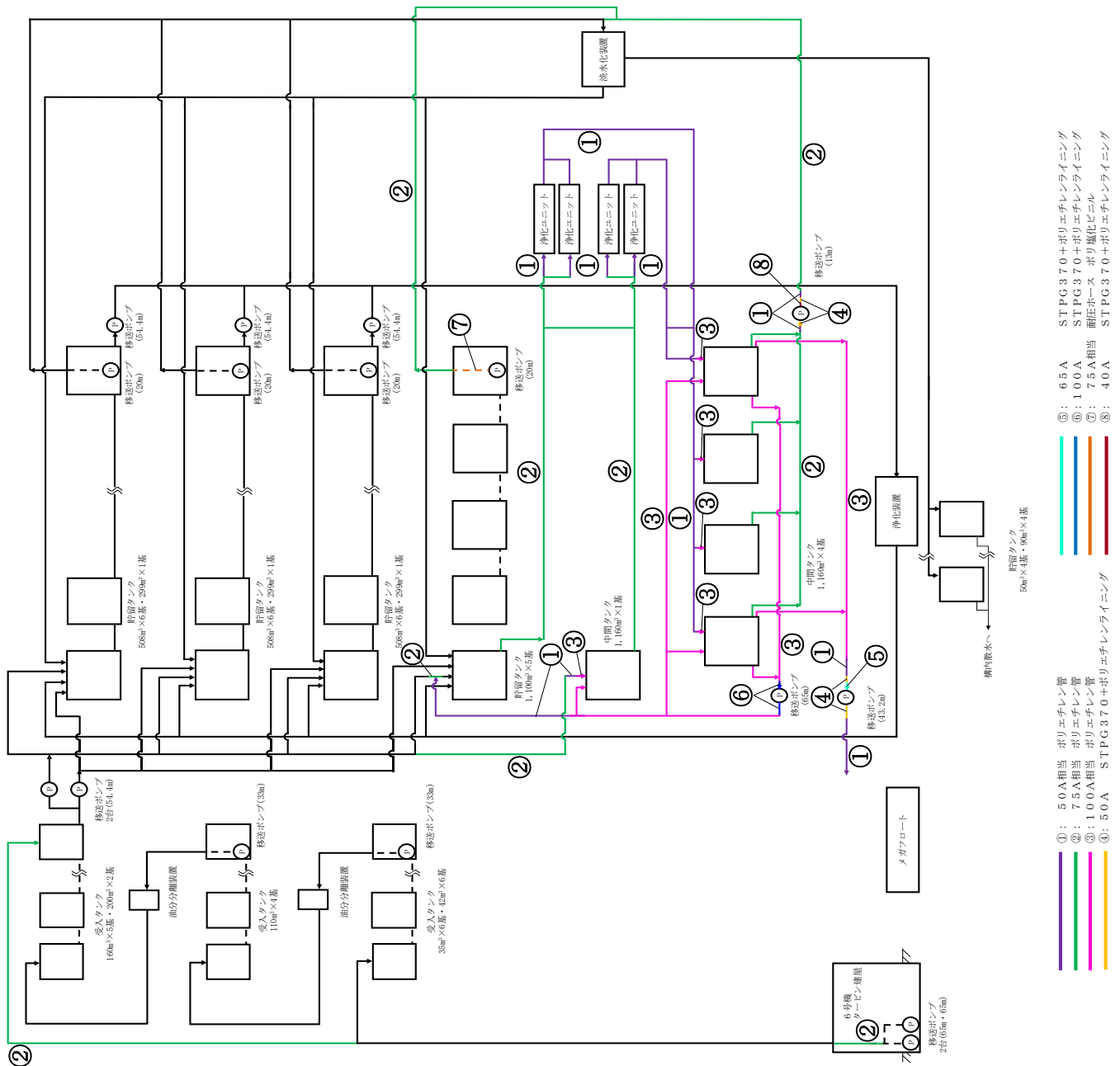
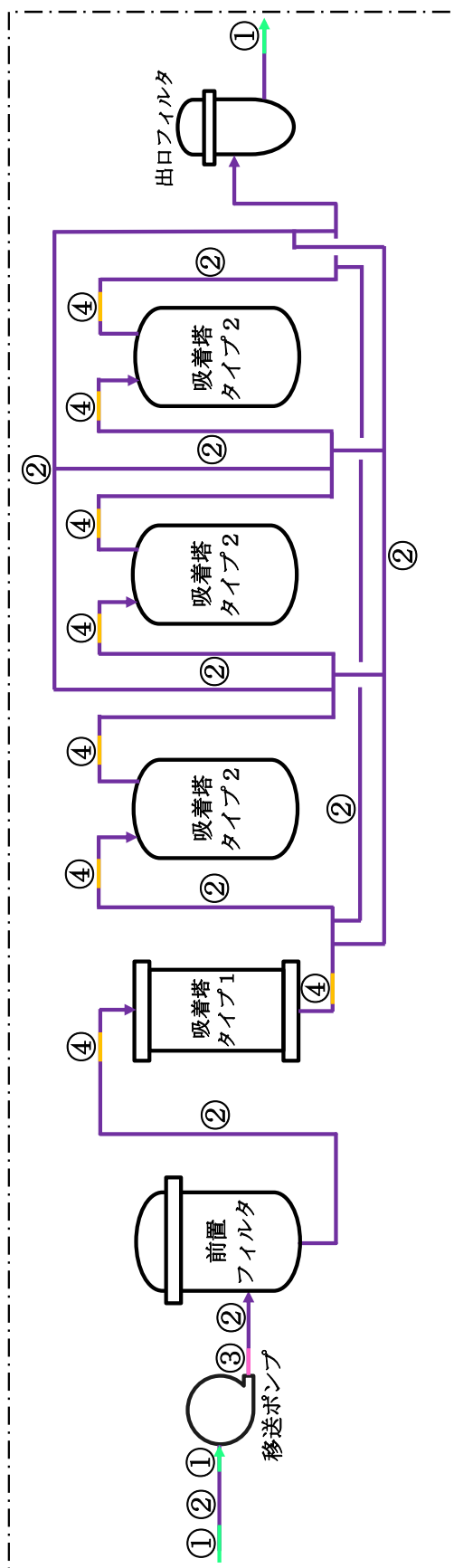


図-1 5・6号機 滯留水貯留設備 系統概要図 (増設及び取替範囲)



図一1 5・6号機 滞留水貯留設備 付属配管概要図 (増設及び取替範囲)

浄化ユニット



- ①: 50A STPG370+ポリエチレンライニング
- ②: 40A STPG370+ポリエチレンライニング
- ③: 32A STPG370+ポリエチレンライニング
- ④: 40A相当 EPDM (合成ゴム)

図-1 5・6号機 浄化ユニット概要図



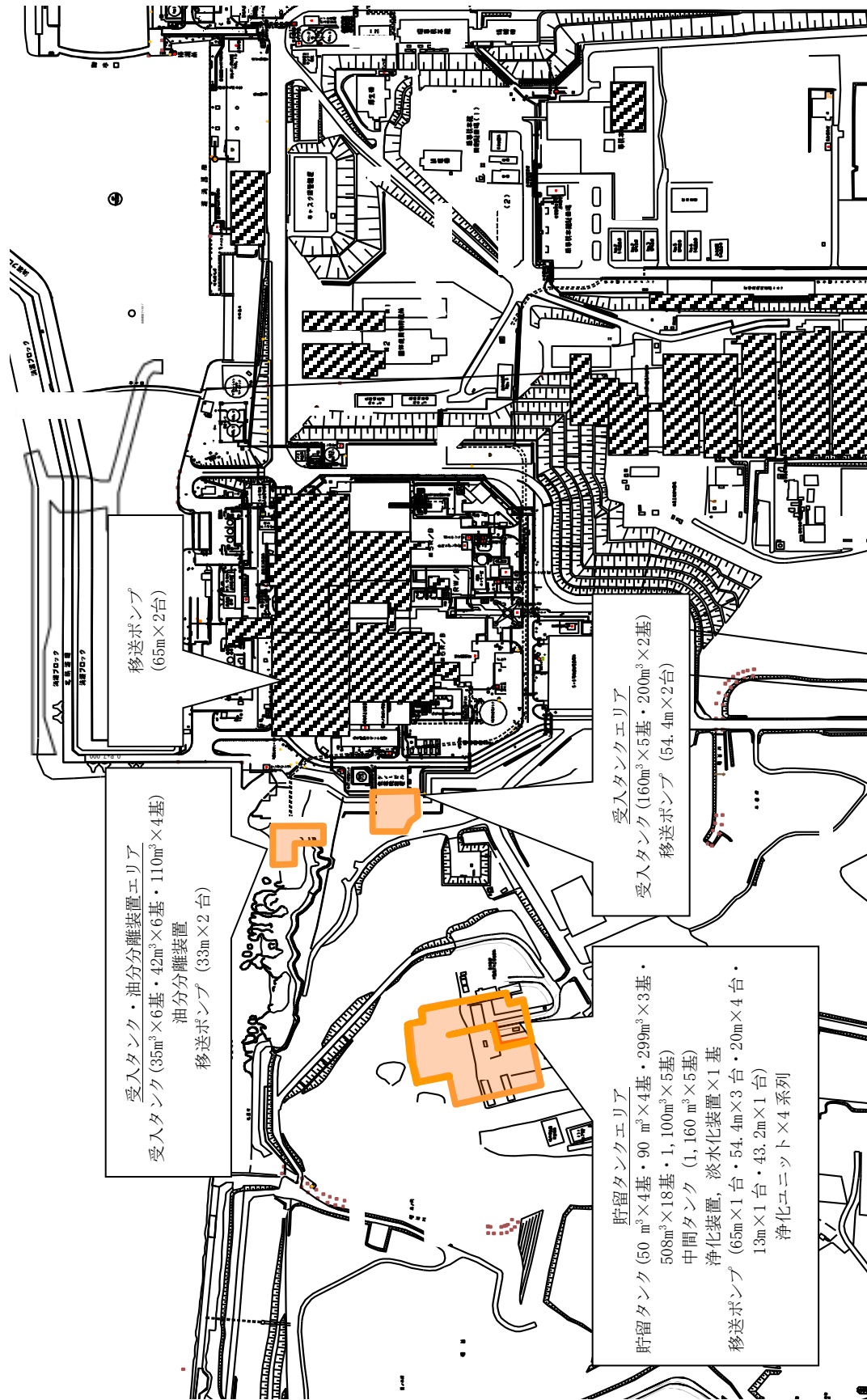


図-1 5・6号機 滯留水貯留設備 全体概要図 (増設及び廃止後)

## 浄化ユニット等の安全確保策

浄化ユニット等<sup>\*1</sup>における漏えい防止対策，放射線遮へい・被ばく低減，崩壊熱除去，可燃性ガス滞留防止，使用済吸着塔の貯蔵について，2.33.2.1.3 に記載した事項の他，追加的な安全確保策を以下の通り定め実施する。

※１：別添－４に示す増設・取替範囲に該当する設備

## １．放射性物質漏えい防止等に対する考慮

## (１) 漏えい発生防止

処理対象水及び処理済水の移送配管は，耐食性を有するポリエチレン管を基本とする。また，浄化ユニット内の配管は，耐食性を有するよう炭素鋼に内面ポリエチレンライニングを施し，前置フィルタ及び吸着塔タイプ１は炭素鋼に内面ゴムライニング，吸着塔タイプ２及び出口フィルタは，耐食性を有するステンレス鋼とする。

浄化ユニット内の配管のうち可撓性を要する部分は，耐食性を有する合成ゴム（EPDM）製耐圧ホースとする。なお，福島第一原子力発電所で発生した耐圧ホースと継手金属との結合部（カシメ部）の外れ事象に鑑み，耐圧ホースと継手金属の結合部（カシメ部）は外れを防止する設計とする。

タンク溢水による放射性物質の漏えいを防止するため，タンク水位の検出器，インターロック回路を設ける。また，浄化ユニット運転中は６号機中央操作室にて移送先タンクの水位を監視する。

## (２) 漏えい検知・漏えい拡大防止

浄化ユニット等の漏えい検知・漏えい拡大防止として下記を実施する。

- a. 浄化ユニット，中間タンクは堰で囲まれている貯留タンクエリア内に設置する（添付資料－８ 別添－２参照）。これにより浄化ユニット，中間タンク及び堰内の移送配管から漏えいが発生した場合の漏えい拡大を防止する。
- b. 漏えいの早期検知として，浄化ユニット毎に漏えいパンを設けるとともに，漏えい検知器を設ける（図－１）。浄化ユニットの機器の取合点は，漏えいパン内に設置し，漏えい水は漏えいパンに受ける設計とする。
- c. 上記漏えいを検知した場合には，６号機中央操作室に警報を発するとともに，浄化ユニットの移送ポンプが自動停止し，装置内の隔離弁が自動閉止する。運転操作員は，移送ポンプの停止確認や漏えい拡大防止等の必要な措置を講ずる。
- d. 浄化ユニットは，運転開始までに漏えい確認等を実施し，施工不良，装置の初期欠陥等による大規模な漏えいの発生を防止する。また，浄化ユニット内包水が漏えい

した場合でも浄化ユニット内の漏えいパン内に収まることから、系外へ漏えいが拡大することはない。(表-1)

- e. 移送配管は、運転開始までに漏えい確認等を実施し、施工不良、装置の初期欠陥等による大規模な漏えいの発生を防止する。また、移送配管は定期的なパトロールを実施して、漏えい検知を図る。屋外でフランジ構造となる移送配管継手部は、漏えい拡大防止のため堰内に設置するか、堰内に漏えい水が導かれるよう受けを設置する。タンク等との接合部、装置との接合部はフランジ接合とするが、タンク堰内や浄化ユニット内に設置することで漏えい拡大を防止する。移送配管は、サポートにより地表面から離すことにより、漏えい検知を容易にする。

浄化ユニットは定期的なパトロール及び運転中の流量常時監視により、漏えい検知を図る。タンクは定期的なパトロール及び定期的な水位確認により、漏えい検知を図る。異常の場合は速やかに現場の状況を確認し、タンク止め弁の閉操作等適切な対応を取る。

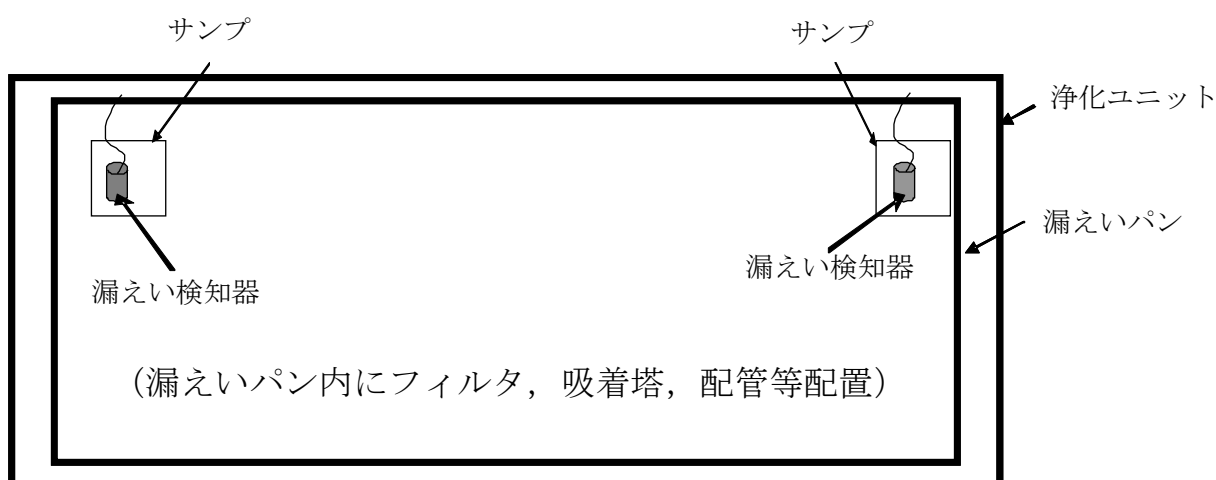


図-1 漏えいパンの概念図

表-1 浄化ユニットの漏えいパン仕様

対象設備	縦幅 (m)	横幅 (m)	高さ (m)	容積※1 (m <sup>3</sup> )	容器単体の 最大容量 (m <sup>3</sup> )
浄化ユニットA	12.198	2.288	0.3	6.69	3.04
浄化ユニットB	9.988	2.288	0.3	5.48	3.04
浄化ユニットC	11.488	2.288	0.3	6.30	3.04
浄化ユニットD	10.188	2.288	0.2	3.72	3.04

※1：漏えいパン容積のうち20%を機器の一部、サポートが占めると評価した値

## 2. 放射線遮へい・被ばく低減に対する考慮

浄化ユニットの処理対象水は放射性物質濃度が比較的低いことから、吸着塔を対象に放射線遮へい・被ばく低減を検討する。滞留水を処理した使用済吸着塔表面の吸着材中心高さにおける 1cm 線量当量率を評価した。評価の結果、1mSv/h 以下であり、作業員が過剰被ばくすることはないが、被ばく低減の観点から、浄化ユニットを設置するジャバラハウスの入口には吸着塔付近の線量表示、関係者以外立ち入りを禁止する表示を行い、作業員が不用意に近づくことを防止する。

なお、放射線遮へいの必要が生じた場合には、状況に応じて適切な放射線遮へいを行う。

## 3. 崩壊熱除去

滞留水を処理した使用済吸着塔内の吸着材中心温度を評価した。評価の結果、温度上昇は 1℃であり、吸着塔及び吸着材の健全性を損なうものではない。

## 4. 可燃性ガスの滞留防止

- a. 浄化ユニットでは、吸着塔で水の放射線分解により発生する可能性のある可燃性ガス（水素ガス）は、通水時は処理水とともに排出される。通水停止後は、吸着塔上部に設けたベント弁を開放し吸着塔外に排出する。
- b. 浄化ユニットにて発生する使用済吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、エアブローにより内部の水抜きを実施する。
- c. 使用済吸着塔一時保管施設においては、接続配管を開放した状態で保管することにより、可燃性ガスを大気に放出する。

### 1) 評価概要

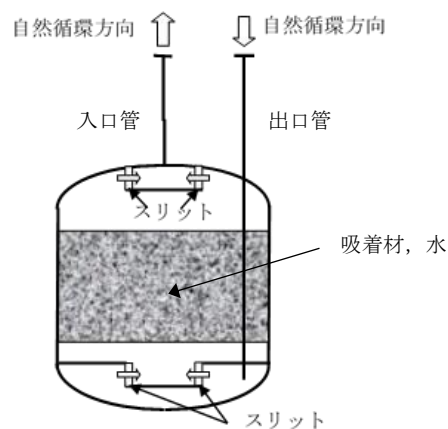
使用済吸着塔は、可燃性ガスの発生抑制のため、内部の水抜き後に使用済セシウム吸着塔一時保管施設に一時的に貯蔵するが、放射性物質を内包しており、内部に残留する湿分の放射線分解により、可燃性ガスが発生する恐れがあることから、使用済吸着塔内部の可燃性ガスの濃度を評価し、その濃度が 4%未満であることを確認する。

本評価では、吸着塔内部の温度変化による影響は小さいため 25 度の常温を代表点とし、吸着塔内部の湿分についても、吸着材領域は水で満たされているものとして評価した。（実際は、使用済吸着塔は水抜き後に保管される。）

### 2) 評価方法

吸着塔内の吸着材充填領域から発生した可燃性ガスは、吸着塔上部の空間部に排出され、空気との混合気体となる。吸着塔は、保管時に入口管と出口管を開放し、上部空間の混合気体は空気との密度差により上昇し入口管から排出される。また、排出

された混合気体の体積に応じて、出口管から空気が流入する（図－1 参照）。このときの混合気体の排出と空気の流入量を算出し、吸着塔内の水素濃度を評価した。



図－1 使用済吸着塔 保管時の概念図

### 3) 水素発生量

水素は、吸着した核種の崩壊エネルギーが容器内に残留する水に吸収され発生する。水素発生速度  $H(\text{mol/s})$  は次式により求めた。

$$H = G \times E \div A$$

$H$  : 水素発生速度 ( $\text{mol/s}$ )

$G$  : 水が  $100\text{eV}$  のエネルギーを吸収した際に発生する水素分子の個数,  $0.45$

$E$  : 水が吸収するエネルギー : 約  $2.75 \times 10^{13} (\text{MeV/s})$

$A$  : アボガドロ数 ( $6.02 \times 10^{23}$  個/ $\text{mol}$ )

評価の結果、爆発下限界 4%未満であることを確認した。なお、吸着塔上部にはベント配管を設けてあり、常時開運用とすることで水素の滞留を防止する。

### 5. 耐放射線性

浄化ユニットの処理対象水は放射性物質濃度が比較的低いことから、機器への放射線照射による劣化の影響は小さい。

## 6. 使用済吸着塔の貯蔵

### a. 使用済吸着塔の発生量

使用済吸着塔は、淡水置換し、水抜きした後、使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第1施設、第3施設、第4施設）（Ⅱ2.5.2.1.2 参照）のコンクリート製ボックスカルバート内に保管する。

使用済吸着塔の発生量は、最大でも年間4基程度、ボックスカルバートの使用数では最大でも年間2基程度と想定される。

なお、必要に応じて使用済セシウム吸着塔一時保管施設を増設する。

使用済吸着塔の貯蔵による敷地境界への直接線・スカイシャイン線による寄与は、使用済セシウム吸着塔一時保管施設に貯蔵される他の廃棄物と同程度であり、同施設の敷地境界線量の評価結果に包絡される。

## 浄化ユニット基礎に関する説明書

## 1. 浄化ユニット基礎の支持力

## (1) 評価方法

浄化ユニットの鉛直荷重と極限支持力を比較し評価を行う。支持力の算定式は「社団法人日本道路協会（2002）：道路橋示方書・同解説IV下部構造編」に基づき次式を用いる。計算した結果、①浄化ユニットの鉛直荷重<②浄化ユニット基礎底面地盤の極限支持力であり、安全性を有していることを確認する。

$$\textcircled{1} \text{ タンクの鉛直荷重： } W = m \times g$$

$$\textcircled{2} \text{ タンク基礎底面地盤の極限支持力： } Q_u = A_e \left( \alpha k c N_c S_c + k q N_q S_q + \frac{1}{2} \gamma_1 \beta B_e N_r S_r \right)$$

$m$  : 機器質量

$g$  : 重力加速度

$A_e$  : 有効載荷面積

$\alpha, \beta$  : 基礎の形状係数

$k$  : 根入れ効果に対する割増し係数

$c$  : 地盤の粘着力

$N_c, N_q, N_r$  : 荷重の傾斜を考慮した支持力係数

$S_o, S_q, S_r$  : 支持力係数の寸法効果に関する補正係数

$q$  : 上載荷重 ( $q = \gamma_2 D_f$ )

$\gamma_1, \gamma_2$  : 支持地盤及び根入れ地盤の単位重量 ( $\gamma_1, \gamma_2 = 15.9 \text{ kN/m}^3$ )

$D_f$  : 基礎の有効根入れ深さ

$B_e$  : 荷重の偏心を考慮した基礎の有効載荷幅 ( $B_e = B - 2e_B$ )

$B$  : 基礎幅

$e_B$  : 荷重の偏心量

## (2) 管理

地盤改良後、簡易支持力測定器（キャスポル）※により地盤の強度を測定し、上記式により必要な極限支持力を有していることを確認する。

※ ランマー（重鎮）を一定の高さから地盤に自由落下させたときに生ずる衝撃加速度の最大値と地盤強度特性値と相関させる衝撃加速度法を基本原理とした簡易な測定器。

## 2. 浄化ユニット基礎の不陸

### (1) 評価方法

浄化ユニットの設置高さが、設計高さに対して許容値以内\*であることを確認する。

※ 設計高さ±30mm (社内基準値)

### (2) 管理

浄化ユニット基礎高さ (レベル) を測量し、当該高さが設計高さに対して±30mm 以内であることを確認する。



## 貯留タンクエリアの基礎外周堰の堰内容量に関する説明書

貯留タンクエリアは、中間タンク設置後も既設貯留タンクを残置するため、既設分を含めた堰内貯留量及び堰高を計算する。想定漏えい容量は貯留タンクエリア想定最大量の3,301m<sup>3</sup>とする。堰内はタンク以外に浄化ユニット等も含まれるため、それらの機器占有面積を削除し計算する。

なお、浄化ユニットの占有面積はジャバラハウスの面積とする。

貯留タンクエリアの基礎外周堰の高さ、堰内容量を表-1に示す。

表-1 貯留タンクエリアの基礎外周堰の堰内容量

想定最大漏えい量 (m <sup>3</sup> )	貯留可能面積 (m <sup>2</sup> )
3,301	6,392

$$\begin{aligned}
 \text{必要最低堰高 (m)} &= \text{想定最大漏えい量 (m}^3\text{)} \div \text{貯留可能面積 (m}^2\text{)} \\
 &= 3,301 \div 6,392 \\
 &= 0.52
 \end{aligned}$$

よって、貯留タンクエリアの堰高は0.52m以上とする。

なお、貯留タンクエリアの堰高は0.58m以上で管理されている。

## 2.34 5・6号機 計測制御設備

### 2.34.1 系統の概要

計測制御設備は、通常運転時に起こり得る運転条件の変化、負荷の変化及び外乱に対して、監視及び制御を行うためのものである。

さらに、これらの設備からの情報を基にプラントの主要な系統の運転に必要なパラメータの監視及び機器の操作を集中して管理するための計測制御設備を中央制御室に設ける。

#### [系統の現況]

使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却を維持・管理するための主要な系統を監視する主要な機器は復旧済みである。

### 2.34.2 要求される機能

(1)使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却を維持・管理するために監視ができること。

### 2.34.3 主要な機器

(1)使用済燃料プールに貯蔵されている燃料の冷却を維持・管理するための監視機器

#### a. 原子炉系計測制御設備

水位計，温度計，圧力計，導電率計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはないため、監視の必要はない。

#### b. 残留熱除去系計測制御設備

圧力計，温度計，流量計

#### c. 燃料プール冷却浄化系計測制御設備

圧力計，温度計，水位計，流量計

#### d. 非常用炉心冷却系計測制御設備

圧力計，流量計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはないため、監視の必要はない。

#### e. 復水補給水系計測制御設備

圧力計，水位計

#### f. 原子炉冷却材浄化系計測制御設備

圧力計，温度計，流量計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し、今後原子炉に燃料を戻すことはないため、監視の必要はない。

g. 原子炉補機冷却系計測制御設備

水位計，温度計，圧力計

h. 制御棒駆動系計測制御設備

圧力計，流量計，水位計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはないため，監視の必要はない。

i. 非常用予備電源装置関連計測制御設備

圧力計，温度計

j. 核計測装置

起動領域モニタ，出力領域モニタ（6号機のみ）

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはないため，監視の必要はない。

k. 安全保護系計測制御設備

地震計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはないため，監視の必要はない。

l. 制御棒駆動機構関連計測制御設備

原子炉手動制御系，制御棒位置指示系

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはないため，監視の必要はない。

m. 非常用ガス処理系計測制御設備

流量計，差圧計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはない。

5・6号機の使用済燃料は，震災後8年以上冷却されており，原子炉停止後から放射能は減衰している。Ⅱ.2.11 添付資料－3－2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても，周辺公衆に対し，著しい放射線被ばくのリスクを与えないことから非常用ガス処理系の監視の必要はない。

n. 原子炉建屋常用換気系及び中央制御室換気系計測制御設備

流量計，差圧計

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはない。

5・6号機の使用済燃料は，震災後8年以上冷却されており，原子炉停止後から放射能は減衰している。Ⅱ.2.11 添付資料－3－2「移送操作中の燃料集合体の落下」と同様の燃料集合体落下事故を想定しても，周辺公衆に対し，著しい放射線被ばくのリスクを与えないこと及び運転員の放射線被ばくの影響は小さいことから原

子炉建屋常用換気系及び中央制御室換気系の監視の必要はない。

o. 放射線モニタ関連計測制御設備

エリア放射線モニタ，プロセス放射線モニタ\*<sup>1</sup>

\*1：放射性気体廃棄物の放出管理は，主排気筒放射線モニタである。

(2) 炉心，冷却材圧力バウンダリの健全性を確認するための監視機器

5・6号機の原子炉格納容器に関しては，現状の開放状態を維持・継続することから除外する。(Ⅱ.2.20 参照)

a. 原子炉系計測制御設備

水位計，温度計

(3) 臨界未満であることを確認するための監視機器

a. 核計測装置

起動領域モニタ

5・6号機は原子炉から使用済燃料プールへの燃料移動を完了し，今後原子炉に燃料を戻すことはないため，監視の必要はない。

また，上記監視機器において，既に工事計画軽微変更届出書等により確認している，原子炉水位，原子炉圧力，残留熱除去系熱交換器入口温度（原子炉水温度），残留熱除去系流量，炉心スプレイ系圧力・流量（5号機），低圧炉心スプレイ系流量（6号機），起動領域モニタ，出力領域モニタ（6号機），エリア放射線モニタ，主排気筒放射線モニタ（5・6号機共用）のパラメータについては，添付資料－1に示す。

2.34.4 添付資料

添付資料－1 パラメータ一覧

## 2.35 サブドレン他水処理施設

### 2.35.1 基本設計

#### 2.35.1.1 設置の目的

サブドレン他水処理施設は、1～4号機タービン建屋等の周辺に設置されたサブドレンピットから地下水を汲み上げること（サブドレン集水設備）、海側遮水壁と既設護岸の間に設置される地下水ドレンポンドから地下水を汲み上げること（地下水ドレン集水設備）、汲み上げた水に含まれている放射性核種（トリチウムを除く）を十分低い濃度になるまで除去すること（サブドレン他浄化設備）及び浄化された水を排水すること（サブドレン他移送設備）を目的とする。（以下、「本格運転」という。）

#### 2.35.1.2 要求される機能

- (1) サブドレン集水設備は、1～4号機タービン建屋等の周辺に設置されたサブドレンピットから地下水を集水タンクに移送できること。
- (2) 地下水ドレン集水設備は、地下水ドレンポンドから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できること。
- (3) サブドレン他浄化設備は、サブドレン集水設備及び地下水ドレン集水設備で集水した地下水の処理、貯留、管理等を行い、放射性物質の濃度を適切な値に低減する能力を有すること。
- (4) サブドレン他浄化設備は、設備内で発生する気体状及び固体状の放射性物質及び可燃性ガスの管理が適切に行える機能を有すること。
- (5) サブドレン他移送設備は、サブドレン他浄化設備にて浄化された水を排水できること。
- (6) サブドレン他水処理施設は、漏えい防止機能を有すること。

#### 2.35.1.3 設計方針

##### 2.35.1.3.1 サブドレン集水設備の設計方針

###### (1) 処理能力

サブドレン集水設備は、1～4号機タービン建屋等の周辺に設置されたサブドレンピットから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できる処理容量とする。

###### (2) 材料

サブドレン集水設備は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

###### (3) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

サブドレン集水設備の機器等は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び敷地外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えい液体の除去を行えるようにする。
- c. サブドレンピットの水位、タンク水位等の警報については、免震重要棟集中監視室等に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにし、これを監視できるようにする。

(4) 健全性に対する考慮

サブドレン集水設備は、機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

(5) 検査可能性に対する設計上の考慮

サブドレン集水設備は、サブドレンピットから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できることを確認するための検査が可能な設計とする。

### 2.35.1.3.2 サブドレン他浄化設備の設計方針

(1) 放射性物質の濃度の低減

サブドレン他浄化設備は、サブドレン集水設備及び地下水ドレン集水設備で汲み上げた水を、ろ過、イオン交換等により、周辺環境に対して、放射性物質の濃度を合理的に達成できる限り低くする設計とする。

(2) 処理能力

サブドレン他浄化設備は、サブドレン集水設備及び地下水ドレン集水設備で想定される汲み上げ量以上の処理容量とする。

(3) 材料

サブドレン他浄化設備の機器等は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

(4) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

サブドレン他浄化設備の機器等は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び敷地外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器、インターロック回路等を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えい液体の除去を行えるようにする。
- c. タンク水位、漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室等に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにし、これを監視できるようにする。

d. サブドレン他浄化装置の機器等は、周辺に堰を設けた区画内に設け、漏えいの拡大を防止する。また、排水路から可能な限り離隔するとともに、排水路を跨ぐ箇所はボックス鋼内等に配管を敷設する。

(5) 被ばく低減

サブドレン他浄化設備は、遮へい、機器の配置等により被ばくの低減を考慮した設計とする。

(6) 可燃性ガスの管理

サブドレン他浄化設備は、水の放射線分解により発生する可燃性ガスの滞留を防止でき、必要に応じて適切に排出できる設計とする。また、可燃性ガスに放射性物質が含まれる可能性がある場合は、適切に除去する設計とする。

(7) 健全性に対する考慮

サブドレン他浄化設備は、機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

(8) 検査可能性に対する設計上の考慮

サブドレン他浄化設備は、処理量ならびに放射能濃度を低減できることを確認するための検査が可能な設計とする。

(9) 地下水の貯留

サブドレン他浄化設備は、地下水を浄化してサンプルタンクへ移送することを目的とするが、地下水の水質や処理状況に応じて、地下水を RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽へ移送することが可能な設計とする。なお、RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽へ移送した地下水はサブドレン他水処理施設へ移送して処理しない。

### 2.35.1.3.3 サブドレン他移送設備の設計方針

#### (1) 処理能力

サブドレン他移送設備は、サブドレン他浄化設備で想定される処理容量以上の処理容量とする。

#### (2) 材料

サブドレン他移送設備の機器等は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

#### (3) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

サブドレン他移送設備は浄化した水を取り扱うことから、液体中の放射性物質による影響はほとんど無い。ただし、液体状の放射性物質の漏えい防止及び敷地外への管理されない放出を防止するため、機器等は次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用するとともに、インターロック回路等を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えい液体の除去を行えるようにする。
- c. 漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室等に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにし、これを監視できるようにする。
- d. 浄化した水を排水する際には事前に水質分析を行い、浄化水に含まれる放射性物質濃度が、告示濃度限度よりも十分に低い排水の基準（詳細は「Ⅲ 2.1.2 放射性液体廃棄物の管理」を参照）を満足することを確認した後に、排水を行う。また、運転員の誤操作等により、水質分析前の水を排水することが無いよう配慮した設計とする。

#### (4) 健全性に対する考慮

サブドレン他移送設備は、機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

#### (5) 検査可能性に対する設計上の考慮

サブドレン他移送設備は、浄化された水を排水できることを確認するための検査が可能な設計とする。



#### 2.35.1.3.4 地下水ドレン集水設備の設計方針

##### (1) 処理能力

地下水ドレン集水設備は、地下水ドレンポンドから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できる処理容量とする。

##### (2) 材料

地下水ドレン集水設備は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

##### (3) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

地下水ドレン集水設備の機器等は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び敷地外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えい液体の除去を行えるようにする。
- c. 地下水ドレンのタンク水位等の警報については、免震重要棟集中監視室等に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにし、これを監視できるようにする。

##### (4) 健全性に対する考慮

地下水ドレン集水設備は、機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

##### (5) 検査可能性に対する設計上の考慮

地下水ドレン集水設備は、地下水ドレンポンドで汲み上げた地下水を移送できることを確認するための検査が可能な設計とする。

#### 2.35.1.4 供用期間中に確認する項目

- (1) サブドレン集水設備は、サブドレンピットから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できること。
- (2) サブドレン他浄化設備は、通水でき、放射性核種濃度を低減できること。
- (3) サブドレン他移送設備は、浄化した水を移送先まで移送できること。
- (4) 地下水ドレン集水設備は、地下水ドレンポンドから地下水を汲み上げ、集水タンクまで移送できること。

## 2.35.1.5 主要な機器

### 2.35.1.5.1 サブドレン集水設備

サブドレン集水設備は、揚水ポンプ、中継タンク、中継タンク移送ポンプ、集水タンク及び移送配管で構成する。汲み上げた地下水は集水タンクに集水する。また、共通設備として、運転監視を行う監視・制御装置、電源を供給する電源設備等で構成する。

サブドレン集水設備は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により遠隔操作及び運転状況の監視を行う。監視・制御装置は、故障により各設備の誤動作を引き起こさない構成とする。更に、運転員の誤操作、誤判断を防止するようにし、重要な装置の緊急停止操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。

電源は、異なる2系統の所内高圧母線から受電できる構成とする。

また、サブドレンピット内の水位が建屋内の滞留水の水位を下回らないように管理するため、各サブドレンピット内には水位計を設置し、サブドレンピット内の水位を監視する。

### 2.35.1.5.2 サブドレン他浄化設備

サブドレン他浄化設備は、集水タンク移送ポンプ、処理装置供給タンク、サブドレン他浄化装置、サンプルタンクで構成する。サブドレン他浄化装置は、2系列で構成し、1系列が点検等の場合においても対象水を処理できる設計とする。付帯設備として、運転監視を行う監視・制御装置、電源を供給する電源設備及び建屋等で構成する。また、放射能濃度が低減していることを確認するための試料採取が可能な設計とする。なお、サブドレン他浄化装置は、必要に応じ、2系列同時運転が可能な構成とする。

サブドレン他浄化設備の主要な機器は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により遠隔操作及び運転状況の監視を行う。監視・制御装置は、故障により各設備の誤動作を引き起こさない構成とする。更に、運転員の誤操作、誤判断を防止するようにし、重要な装置の緊急停止操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。

#### (1) サブドレン他浄化装置

サブドレン他浄化装置は、1系列あたり、3塔の前処理フィルタ、1塔のpH緩衝塔、5塔の吸着塔及び2台のポンプで構成する。

前処理フィルタは、浮遊物質を除去、及びストロンチウムを粗取りする。pH緩衝塔は、処理対象水の水質を弱アルカリ性にする。また、除去性能に影響しないため、バイパス配管を設置して、除外可能とする。吸着塔は、セシウム、ストロンチウム、アンチモン、及び重金属核種(銀・コバルト)を除去する。また、前処理フィルタ及び吸着塔の吸着材は、除去対象核種に応じて入れ替え可能な設計とし、アンチモン、重金属核種の除去に用いる吸着塔については、除外可能とする。

前処理フィルタは、一定量処理後、水抜きを行い、交換する。使用済前処理フィルタは、容器に収納して、固体廃棄物貯蔵庫に一時貯蔵する。pH緩衝塔及び吸着塔は、一定量処

理後、水抜きを行い、塔ごと交換する。使用済 pH 緩衝塔は、一時保管エリアに、使用済吸着塔は、使用済セシウム吸着塔一時保管施設あるいは大型廃棄物保管庫に一時貯蔵する。

## (2) 電源設備

電源は、異なる 2 系統の所内高圧母線から受電できる構成とする。なお、サブドレン他浄化設備は、電源が喪失した場合に系統が隔離され停止するため、外部への漏えいを発生させることはない。

## (3) サブドレン他浄化装置建屋

サブドレン他浄化装置建屋は、平面が約 46m×約 32m で厚さが約 1.5m の鉄筋コンクリート造のべた基礎を有し、漏えいの拡大を防止するための堰を設置する。

### 2.35.1.5.3 サブドレン他移送設備

サブドレン他移送設備は、浄化水移送ポンプ、移送配管等で構成する。浄化した水はサンプルタンクに一時貯留し、水質分析後、浄化水移送ポンプにより排水する。浄化した水の再浄化を行う場合は、サブドレン他浄化設備へ移送する。

また、共通設備として、運転監視を行う監視・制御装置、電源を供給する電源設備等で構成する。サブドレン他移送設備は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により遠隔操作及び運転状況の監視を行う。監視・制御装置は、故障により各設備の誤動作を引き起こさない構成とする。更に、運転員の誤操作、誤判断を防止するようにし、排水等の重要な操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。電源は、異なる 2 系統の所内高圧母線から受電できる構成とする。

### 2.35.1.5.4 地下水ドレン集水設備

地下水ドレン集水設備は、地下水ドレンポンド揚水ポンプ、地下水ドレン中継タンク、地下水ドレン中継タンク移送ポンプ、地下水ドレン前処理装置及び移送配管で構成する。地下水ドレン集水設備により汲み上げた地下水は集水タンクまたはタービン建屋へ移送する。

また、共通設備として、運転監視を行う監視・制御装置、電源を供給する電源設備等で構成する。地下水ドレン集水設備は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により遠隔操作及び運転状況の監視を行う。監視・制御装置は、故障により各設備の誤動作を引き起こさない構成とする。更に、運転員の誤操作、誤判断を防止するようにし、重要な装置の緊急停止操作については、ダブルアクションを要する等の設計とする。

電源は、異なる 2 系統の所内高圧母線から受電できる構成とする。

また、各地下水ドレンポンド内には水位計を設置し、地下水ドレンポンド内の水位を監視する。

## 2.35.1.6 自然災害対策等

### (1) 津波

放射性物質を蓄積するサブドレン他浄化装置およびサンプルタンクは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 33.5m 盤に設置する。集水タンクは、T.P. 2.5m 盤に設置することから、アウターライズ津波による波力がタンクに直接作用しないような高さの堰を設ける。また、大津波警報が出た際はサブドレン集水設備及び地下水ドレン集水設備を停止することで、汲み上げる水の流出防止に努める。また、サブドレン他移送設備を停止することで、排水前の水の流出防止に努める。

### (2) 台風

放射性物質を蓄積するサブドレン他浄化装置は、台風による設備損傷の可能性が低い鉄骨造の建屋内に設置する。

### (3) 積雪

積雪による設備の損傷を防止するため、建屋は建築基準法施行令及び福島県建築基準法施行細則に基づく積雪荷重に対して設計する。

### (4) 落雷

動的機器及び電気設備は、機器接地により落雷による損傷を防止する。

### (5) 竜巻

竜巻の発生の可能性が予見される場合は、設備の停止・隔離弁の閉止作業等を行い、サブドレンピット及び地下水ドレンポンドから汲み上げた地下水の漏えい防止を図る。

### (6) 火災

火災発生を防止するため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性の材料を使用する。火災検知のため、消防法及び関係法令に従い、建屋内には自動火災報知設備を設置する。集水移送加圧ポンプについては、巡視点検を実施するとともに、監視カメラを設置し、免震棟にて確認することで早期検知に努める。また、消火器を設置し、動力消防ポンプ（防火水槽及びポンプ車）を適切に配置することにより、初期消火の対応を可能とし、消火活動の円滑化を図る。放射性物質を吸着する前処理フィルタ及び吸着塔は鋼製容器のため、燃焼・延焼し難く、またこれらの機器付配管は鋼製であり、燃焼しない。

なお、建屋内には建築基準法及び関係法令並びに消防法及び関係法令に基づく安全避難通路を設定する。

## 2.35.1.7 構造強度及び耐震性

### 2.35.1.7.1 サブドレン集水設備

#### (1) 構造強度

中継タンク，集水移送加圧ポンプは，JIS 等に準拠する。集水タンクは，「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」に準拠する。配管のうち，ポリエチレン管は ISO 規格，JWWA 規格または JIS に準拠し，鋼管及び伸縮継手は，JIS に準拠する。また，JSME 規格で規定される材料の JIS 年度指定は，技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

#### (2) 耐震性

サブドレン集水設備を構成する主要な機器のうち放射性物質を内包するものは，「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」に従い設計する。主要な機器の耐震性を評価するにあたっては，「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」等に準拠する。ポリエチレン配管及び伸縮継手は，材料の可撓性により耐震性を確保する。

### 2.35.1.7.2 サブドレン他浄化設備

#### (1) 構造強度

前処理フィルタ，pH 緩衝塔及び吸着塔は，「ASME Boiler and Pressure Vessel Code」に準拠する。前処理フィルタ，pH 緩衝塔及び吸着塔廻りの鋼管は，「ASME B31.1 Power Piping」に準拠する。その他の主要機器及び配管は，「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」等に準拠し，このうちポリエチレン配管は ISO 規格，JWWA 規格に準拠する。また，JSME 規格で規定される材料の JIS 年度指定は，技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

#### (2) 耐震性

サブドレン他浄化設備を構成する主要な機器のうち放射性物質を内包するものは，「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」に従い設計する。主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては，「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」等に準拠する。ポリエチレン配管及び伸縮継手は，材料の可撓性により耐震性を確保する。

#### 2.35.1.7.3 サブドレン他移送設備

##### (1) 構造強度

サブドレン他移送設備のポンプは JIS 規格に準拠する。その他の主要機器及び配管は「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」等に準拠し、このうちポリエチレン配管は ISO 規格, JWVA 規格に準拠する。JSME 規格で規定される材料の JIS 年度指定は、技術的妥当性の範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。

##### (2) 耐震性

サブドレン他移送設備を構成する主要機器のうち放射性物質を内包するものは、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」に従い設計する。主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては、「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」等に準拠する。ポリエチレン配管及び伸縮継手は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

#### 2.35.1.7.4 地下水ドレン集水設備

##### (1) 構造強度

地下水ドレン集水設備を構成するタンクは、JIS 等に準拠する。配管のうち、ポリエチレン管は ISO 規格, JWVA 規格, または、JIS に準拠し、鋼管は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」等に準拠する。

##### (2) 耐震性

地下水ドレン集水設備を構成する主要機器のうち放射性物質を内包するものは、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」に従い設計する。主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては、「JEAG4601 原子力発電所耐震設計技術指針」等に準拠する。ポリエチレン配管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

#### 2.35.1.8 機器の故障への対応

##### 2.35.1.8.1 サブドレン集水設備

###### (1) 機器の単一故障

サブドレン集水設備は電源について多重化しており、上流の電源系統設備の単一故障については、速やかな集水の再開が可能である。

##### 2.35.1.8.2 サブドレン他浄化設備

###### (1) 機器の単一故障

サブドレン他浄化設備は、電源について多重化している。そのため、電源系統の単一故障については、電源系統の切替作業等により、速やかな処理の再開が可能である。

##### 2.35.1.8.3 サブドレン他移送設備

###### (1) 機器の単一故障

サブドレン他移送設備は、動的機器及び電源について多重化している。そのため、動的機器、電源系統の単一故障については、機器の切替作業等により、速やかな処理の再開が可能である。

##### 2.35.1.8.4 地下水ドレン集水設備

###### (1) 機器の単一故障

地下水ドレン集水設備は、電源について多重化しており、上流の電源系統設備の単一故障については、速やかな集水の再開が可能である。

2.35.2 基本仕様

2.35.2.1 主要仕様

2.35.2.1.1 サブドレン集水設備

(1) タンク

a. 中継タンク

名 称		中継タンク	
種 類	—	角形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	12.0	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	内 寸	mm	2000×4000
	側 板 厚 さ	mm	6.0
	底 板 厚 さ	mm	9.0
	高 さ	mm	1500
材 料	側 板	—	SS400
	底 板	—	SS400
個 数	個	5	

b. 集水タンク

名 称		集水タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	1235	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 内 径	m	11.0
	胴 板 厚 さ	mm	12.0
	底 板 厚 さ	mm	12.0
	高 さ	m	13.0
材 料	胴 板	—	SM400C
	底 板	—	SM400C
個 数	個	7	



(2) その他機器

a. 揚水ポンプ (完成品)

台 数	46 台
容 量	30 L/min

b. 中継タンク移送ポンプ (完成品)

台 数	5 台
容 量	400 L/min

c. 集水移送加圧ポンプ (完成品)

台 数	4 台
容 量	50 m <sup>3</sup> /h

## (3) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 2)

名 称	仕 様	
サブドレンピット内 (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	32A 相当 ポリエチレン 0.48 MPa 30 °C
サブドレンピット出口から 中継タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	32A/Sch. 40, 40A/Sch. 40, 50A/Sch. 40, 200A/Sch. 20S STPG370, SUS316LTP 0.98 MPa 40 °C
中継タンク出口から 中継タンク移送ポンプ入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A/Sch. 40 STPG370 静水頭 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A SUS316L 静水頭 40 °C
中継タンク移送ポンプ出口から 集水タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当, 150A 相当, 200A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 80A/Sch. 40 200A/Sch. 40 300A/Sch. 40 350A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 SUS316LTP 0.49 MPa 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A SUS316L 0.98 MPa 40 °C

主要配管仕様（2 / 2）

名 称	仕 様	
集水タンク 1～3 出口から 集水タンク 1～3 出口部まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 静水頭 40 ℃
集水タンク 1～3 出口部から 集水タンク 出口側ヘッダーまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 ℃
集水タンク 4～7 出口から 集水移送加圧ポンプ入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当, 200A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa (集水タンク連結管は静水頭) 40 ℃
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 40 100A/Sch. 40 200A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 ℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 200A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98 MPa 40 ℃
集水移送加圧ポンプ出口から 集水タンク 出口側ヘッダーまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 ℃
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A/Sch. 40 100A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 ℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98 MPa 40 ℃

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径、厚さ、材質）の一部を使用しない場合がある。

2.35.2.1.2 サブドレン他浄化設備

(1) サブドレン他浄化装置の対象水の種類, 処理方式, 容量並びに系列数

名 称		仕 様
対象水の種類	—	サブドレン
処 理 方 式	—	ろ過+吸着材方式
処 理 容 量	m <sup>3</sup> /h	50
系 列 数	系列	2

(2) 容器

a. 処理装置供給タンク

名 称		処理装置供給タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	30	
最 高 使 用 圧 力	MPa	静水頭	
最 高 使 用 温 度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 内 径	mm	3000
	胴 板 厚 さ	mm	9.0
	底 板 厚 さ	mm	12.0
	平 板 厚 さ	mm	6.0
	高 さ	mm	5006
材 料	胴 板	—	SUS316L/SM400C
	底 板	—	SUS316L/SM400C
個 数	個	2	

b. 前処理フィルタ 1, 2

名 称		前処理フィルタ 1, 2	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	50	
最高使用圧力	MPa	1.03	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 内 径	mm	901.7
	胴 板 厚 さ	mm	6.35
	上部平板厚さ	mm	63.5
	下部平板厚さ	mm	63.5
	高 さ	mm	2013
材 料	胴 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	上 部 平 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	下 部 平 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
個 数	個	2 (1 系列あたり)	

c. 前処理フィルタ 3

名 称		前処理フィルタ 3	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	50	
最高使用圧力	MPa	1.03	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 内 径	mm	901.7
	胴 板 厚 さ	mm	6.35
	上部平板厚さ	mm	63.5
	下部平板厚さ	mm	63.5
	高 さ	mm	1800
材 料	胴 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	上 部 平 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	下 部 平 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
個 数	個	1 (1 系列あたり)	

d. pH緩衝塔

名 称		pH緩衝塔	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	50	
最高使用圧力	MPa	1.03	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 内 径	mm	1346.2
	胴 板 厚 さ	mm	25.4
	鏡 板 厚 さ	mm	25.4
	高 さ	mm	2487
材 料	胴 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	鏡 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
個 数	—	1 (1系列あたり)	

e. 吸着塔 1, 2, 3, 4, 5

名 称		吸着塔 1, 2, 3, 4, 5	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /h/個	50	
最高使用圧力	MPa	1.55	
最高使用温度	℃	40	
主 要 寸 法	胴 内 径	mm	1346.2
	胴 板 厚 さ	mm	25.4
	鏡 板 厚 さ	mm	25.4
	高 さ	mm	3119
材 料	胴 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
	鏡 板	—	ASME SA 516 Gr. 70
個 数	—	5 (1系列あたり)	

f. サンプルタンク

名 称		サンプルタンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	1235	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 内 径	m	11.0
	胴 板 厚 さ	mm	12.0
	底 板 厚 さ	mm	12.0
	高 さ	m	13.0
材 料	胴 板	—	SM400C
	底 板	—	SM400C
個 数	個	11	

g. RO 濃縮水処理水中継タンク (RO 濃縮水処理設備<sup>※</sup>から用途変更)

名 称		RO 濃縮水処理水中継タンク	
種 類	—	たて置円筒形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	1235	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴 内 径	mm	11000
	胴 板 厚 さ	mm	12.0
	底 板 厚 さ	mm	12.0
	高 さ	mm	13000
材 料	胴 板	—	SM400C
	底 板	—	SM400C
個 数	個	1	

※Ⅱ-2.38 RO 濃縮水処理設備 2.38.2.2 機器仕様 (1) 容器

(3) その他機器

a. 集水タンク移送ポンプ（完成品）

台数	2台
容量	50 m <sup>3</sup> /h

b. 処理装置供給ポンプ（完成品）

台数	1台（1系列あたり）
容量	50 m <sup>3</sup> /h

c. 処理装置加圧ポンプ（完成品）

台数	1台（1系列あたり）
容量	50 m <sup>3</sup> /h

d. RO濃縮水処理水移送ポンプ（完成品）（RO濃縮水処理設備\*から用途変更）

台数	2台（1台予備）
容量	21 m <sup>3</sup> /h

※Ⅱ-2.38 RO濃縮水処理設備 2.38.2.2 機器仕様 (2) ポンプ



## (4) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 3)

名 称	仕 様	
集水タンク出口側ヘッダーから 処理装置供給タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当, 150A 相当 ポリエチレン 静水頭(集水タンク移送ポンプ 下流は 0.98 MPa) 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 80 100A, 150A/Sch. 40 STPT410 静水頭(集水タンク移送ポンプ 下流は 0.98 MPa) 40 °C
処理装置供給タンク出口から 処理装置供給ポンプ入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT410 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 40, 100A/Sch. 10 UNS S32750 (ASME SA 790) 静水頭 40 °C
処理装置供給ポンプ出口から 処理装置加圧ポンプ入口まで (鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 80A/Sch. 10, Sch. 40 UNS S32750 (ASME SA 790) 1.03 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 40 STPT410 1.03 MPa 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 EPDM 合成ゴム 1.03 MPa 40 °C

主要配管仕様 (2 / 3)

名 称	仕 様	
処理装置加圧ポンプ出口から サブドレン他浄化装置出口 (吸着塔5下流) まで (鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 80A/Sch. 10 UNS S32750 (ASME SA 790) 1.55 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 40 STPT410 1.55 MPa 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質  最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 UNS N04400 (ASME SB 127 / ASTM B 127) , 合成ゴム 1.55 MPa 40 °C
サブドレン他浄化装置出口 (吸着塔5下流) から サンプルタンクまで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 100A/Sch. 10 UNS S32750 (ASME SA 790) 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 100A/Sch. 40 STPT410 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
処理装置供給タンク入口側 配管分岐部から RO濃縮水処理水中継タンク 入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C

主要配管仕様 (3 / 3)

名 称	仕 様	
吸着塔 5 下流から RO 濃縮水処理水中継タンク入口まで* (ポリエチレン管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
RO 濃縮水処理水中継タンク出口から RO 濃縮水処理水移送ポンプ入口まで* (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT410 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 100A/Sch. 40 STPG370 静水頭 40 °C
(伸縮継手)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 合成ゴム 静水頭 40 °C
RO 濃縮水処理水移送ポンプ出口より RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽まで* (ポリエチレン管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン管 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 50A/Sch. 80 STPT410 0.98 MPa 40 °C

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径，厚さ，材質）の一部を使用しない場合がある。

\* RO 濃縮水処理設備から用途変更（II-2.38 RO 濃縮水処理設備 2.38.2.2 機器仕様 (3) 配管）

2.35.2.1.3 サブドレン他移送設備

(1) その他機器

a. 浄化水移送ポンプ（完成品）

台 数	2 台
容 量	50 m <sup>3</sup> /h 以上（1 台あたり）

b. 攪拌ポンプ（完成品）

台 数	2 台
容 量	330 m <sup>3</sup> /h 以上（1 台あたり）

## (2) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 3)

名 称	仕 様	
サンプルタンク出口から 浄化水移送ポンプ入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当 200A 相当 ポリエチレン 静水頭 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当, 200A 相当 EPDM 合成ゴム 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 150A/Sch. 40 STPG370 静水頭 40 °C
浄化水移送ポンプ出口から 排水箇所まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 150A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A/Sch. 40 SUS316LTP 0.98 MPa 40 °C

主要配管仕様 (2 / 3)

名 称	仕 様	
サンプルタンク出口から 攪拌ポンプ入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当, 250A 相当 ポリエチレン 静水頭 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 EPDM 合成ゴム 静水頭 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 250A/Sch. 40 STPG370 静水頭 40 °C
攪拌ポンプ出口から サンプルタンク攪拌水受入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当, 250A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 250A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 40 SUS316LTP 0.49 MPa 40 °C

主要配管仕様（3 / 3）

名 称	仕 様	
攪拌ポンプ出口からサブドレン他浄化設備（処理装置供給タンク）まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
（伸縮継手）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 EPDM 合成ゴム 0.98 MPa 40 °C
（鋼管）	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 200A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
（鋼管）	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 40 STPT410 0.98 MPa 40 °C

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径、厚さ、材質）の一部を使用しない場合がある。

2.35.2.1.4 地下水ドレン集水設備

(1) タンク

a. 地下水ドレン中継タンク

名 称		地下水ドレン中継タンク	
種 類	—	角形	
容 量	m <sup>3</sup> /個	12.0	
最 高 使 用 圧 力	MPa	静水頭	
最 高 使 用 温 度	℃	40	
主 要 寸 法	内 寸	mm	2000×4000
	側 板 厚 さ	mm	6.0
	底 板 厚 さ	mm	9.0
	高 さ	mm	1500
材 料	側 板	—	SS400
	底 板	—	SS400
個 数	個	3	

(2) その他機器

a. 地下水ドレンポンド揚水ポンプ (完成品)

台 数 5 台  
容 量 120 L/min

b. 地下水ドレン中継タンク移送ポンプ (完成品)

台 数 3 台  
容 量 400 L/min

c. 地下水ドレン前処理装置 (完成品)

台 数 1 台  
容 量 20m<sup>3</sup>/h  
材 料 FRP (RO ベッセル)  
SUS304 (脱塩器)



## (3) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 3)

名 称	仕 様	
地下水ドレンポンド内 (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 ポリエチレン 0.49 MPa 40 °C
地下水ドレンポンド出口から 地下水ドレン中継タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 ポリエチレン 0.49 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A/Sch. 40 SUS316LTP 0.49 MPa 40 °C
地下水ドレン中継タンク出口または 地下水ドレン前処理装置出口 (処理水) 移送配管分岐部から 集水タンク入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 150A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A, 150A, 200A/Sch. 40 SUS316LTP 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A/Sch. 40 STPG370 0.98 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径/厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A/Sch. 40 200A/Sch. 40 SUS316LTP 0.49 MPa 40 °C

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径、厚さ、材質）の一部を使用しない場合がある。

主要配管仕様（2 / 3）

名 称	仕 様	
地下水ドレン中継タンク出口移送配管 分岐部から 地下水ドレン前処理装置入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C
地下水ドレン前処理装置入口から 地下水ドレン前処理装置出口まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 20S 65A／Sch. 20S 80A／Sch. 20S SUS316LTP 0.5 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 80 65A／Sch. 20S, Sch. 80 SUS316LTP 1.5 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A／Sch. 80 50A／Sch. 20S, Sch. 40, Sch. 80 80A／Sch. 20S SUS304TP 0.5 MPa 40 °C
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	65A／Sch. 20S 80A／Sch. 20S SUS316LTP 0.98 MPa 40 °C
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当 合成ゴム 0.5 MPa 40 °C

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径、厚さ、材質）の一部を使用しない場合がある。

主要配管仕様（3 / 3）

名 称	仕 様	
地下水ドレン前処理装置出口（処理水） から 集水タンク入口配管分岐部または地下水ドレン中継タンク入口まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 0.50 MPa 40 °C
地下水ドレン前処理装置出口（濃縮水） から タービン建屋または地下水ドレン中継タンク入口まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.50 MPa, 大気圧 40 °C
地下水ドレン中継タンク出口配管分岐部から 地下水ドレン中継タンク入口まで （ポリエチレン管）	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.98 MPa 40 °C

※ 現場施工状況により、配管仕様（呼び径、厚さ、材質）の一部を使用しない場合がある。

### 2.35.3 添付資料

- 添付資料－1 : 全体概要図及び系統構成図
- 添付資料－2 : 機器配置図
- 添付資料－3 : サブドレン他水処理施設の耐震性に関する説明書
- 添付資料－4 : サブドレン集水設備の強度に関する説明書
- 添付資料－5 : サブドレン他浄化設備の強度に関する説明書
- 添付資料－6 : サブドレン他移送設備の強度に関する説明書
- 添付資料－7 : 地下水ドレン集水設備の強度に関する説明書
- 添付資料－8 : サブドレン他浄化装置建屋基礎の構造強度に関する検討結果
- 添付資料－9 : 流体状の放射性廃棄物の施設外への防止能力についての計算書
- 添付資料－10 : 工事工程表
- 添付資料－11 : サブドレン他水処理施設の具体的な安全確保策
- 添付資料－12 : サブドレン他水処理施設に係る確認事項
- 添付資料－13 : 地下水ドレン前処理装置について
- 添付資料－14 : 5・6号機サブドレン集水設備復旧による地下水流入低減について

## 5・6号機サブドレン集水設備復旧による地下水流入低減について

### 1. 概要

5・6号機タービン建屋等の周辺に設置されたサブドレンピットから地下水を汲み上げることにより、5・6号機建屋への地下水流入量を低減することを目的とする。

5・6号機サブドレンピットから汲み上げた地下水は、集水タンクに集水し（「添付資料－1 図－1 サブドレン他水処理施設の全体概要図」参照）、サブドレン他浄化設備にて浄化したのち、サブドレン他移送設備にて排水する。（排水の基準は「Ⅲ 特定原子力施設の保安 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」を参照）

5・6号機サブドレン集水設備は、揚水ポンプ、中継タンク、中継タンク移送ポンプ及び移送配管で構成する。（「添付資料－1 図－9 サブドレン集水設備系統図（5・6号機）」参照）

### 2. 5・6号機サブドレン集水設備の設計方針

#### (1) 処理能力

5・6号機サブドレン集水設備は、5・6号機タービン建屋等の周辺に設置されたサブドレンピットから地下水を汲み上げ、集水タンクに移送できる処理容量とする。

#### (2) 材料

5・6号機サブドレン集水設備は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

#### (3) 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

5・6号機サブドレン集水設備の機器等は、液体状の放射性物質の漏えい防止及び敷地外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用するとともに、タンク水位の検出器を設ける。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えい液体の除去を行えるようにする。
- c. サブドレンピットの水位、中継タンク水位等の警報については、5・6号機中央制御室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにし、これを監視できるようにする。

(4) 健全性に対する考慮

5・6号機サブドレン集水設備は、機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

3. 水位管理について

5・6号機タービン建屋等への地下水の流入を低減させるため、5・6号機サブドレン集水設備稼働し、サブドレン水位を低下させる。サブドレン水位の低下により各建屋からの滞留水の漏えいを防止するために、サブドレン水位を滞留水水位より高く保つ必要があることから、サブドレン揚水ポンプを建屋地下階床面+2mを超える位置に設置する。

## 2.36 雨水処理設備等

### 2.36.1 基本設計

#### 2.36.1.1 設置の目的

汚染水タンクエリアの堰内に溜まった雨水のうち、その放射能濃度が排水基準（詳細は「Ⅲ 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」を参照）を上回るもの（以下、『雨水』という）について逆浸透膜を利用し、処理することを目的とする。

#### 2.36.1.2 要求される機能

- (1) 雨水処理設備等は、雨水の処理、貯留および管理等を行い、放射性物質の放射能濃度を低減し、排水する能力を有すること。
- (2) 雨水処理設備等は、漏えいに対して適切な拡大防止機能を有すること。

#### 2.36.1.3 設計方針

##### 2.36.1.3.1 雨水処理設備、貯留設備（タンク）、雨水移送用貯留設備（タンク）および関連設備（移送配管、移送ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット）の設計方針

###### (1) 処理能力

雨水処理設備および関連設備（移送配管、移送ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット）は、集水した雨水に対して適切な管理および処理が可能な処理量とする。貯留設備（タンク）は、雨水処理設備の運転に支障のない容量とする。

なお、関連設備（移送配管、移送ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット）のうち、処理水移送ポンプ、雨水RO濃縮水を移送する場合のモバイルRO膜装置供給ポンプ、集水ピット抜出ポンプ、雨水回収タンク移送ポンプ、中継タンク移送ポンプ、中継タンク直送ポンプ及びその移送配管は、移送できれば良く処理量に関する要求はない。

###### (2) 材料

雨水処理設備等は、処理対象水の性状を考慮し、適切な材料を用いた設計とする。

(3) 放射性物質の漏えい防止および管理されない放出の防止

雨水処理設備等の機器等は、液体状の放射性物質の漏えい防止および敷地外への管理されない放出を防止するため、次の各項を考慮した設計とする。

- a. 雨水処理設備は、漏えいの発生を防止するため、機器等には適切な材料を使用する。また、漏えいした場合の検知機能を設ける。なお、雨水処理設備運転中において、万一電源供給が遮断された場合は、漏えいを検知する機能を喪失するものの、供給ポンプが停止することとなる。その際には運転員は、供給ポンプの停止確認や弁の閉止により万一の漏えい拡大防止の措置を講ずるものとする。
- b. 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えいした液体の除去を行えるようにする。また、雨水処理設備および貯留設備（タンク）、雨水移送用貯留設備（タンク）、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットにおいては、漏えい水の拡大を抑制するための堰を設ける。
- c. 運転員は、運転中は常時現場で待機し、漏えい等の異常がないことの監視に加えタンク水位、逆浸透（以下、逆浸透を『RO』という。）膜出口流量およびRO膜入口圧力のパラメータを監視することにより、異常時には適切な措置をとれるようにする。また、定期的なパトロールによって漏えいの有無の確認ならびに漏えい時に適切な措置をとる。また、漏えい拡大防止が図れるよう運転操作手順書に反映する。

(4) 放射線遮へいに対する考慮

雨水処理設備等にて取り扱う液体は、放射能濃度を  $100 \text{ Bq/cm}^3$  以下で管理している。放射線遮へいの必要が生じた場合には、状況に応じて適切な放射線遮へいを行う。

(5) 誤操作防止に対する考慮

雨水処理設備等には誤操作を防止するために、操作バルブ等には銘板を設ける。なお、運転にあたり運転操作手順書を整備し誤操作防止を図る。

(6) 検査に対する設計上の考慮

雨水処理設備等の性能を確認するための検査が可能である設計とする。

(7) 健全性に対する考慮

雨水処理設備等は、機器に応じた必要な保全が可能な設計とする。

(8) 規格・基準等

モバイルRO膜ユニット、RO膜ユニット、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット、移送ポンプ、移送配管およびタンクについては、日本産業規格、日本水道協会規格、設計・建設規格等に準拠した製品で構成される。



#### (9) 運用に関わる考慮

雨水受入タンクで扱う液体の放射能濃度は、100 Bq/cm<sup>3</sup>以下とする。

雨水処理設備は、雨水受入タンク内の液体を、処理水と濃縮水に分離する。処理水は、処理水タンクに移送される。処理水については、サンプリングを行い、放射能濃度を測定し、排水基準を満足することを確認した後、排水路に排水する。一方、濃縮水は、雨水受入タンクに戻すこととする。また、雨水受入タンク内の液体の放射能濃度が100 Bq/cm<sup>3</sup>以下となるよう、必要に応じて濃縮水をRO濃縮水貯槽※に移送する。1回の処理を完了した後、雨水受入タンクに雨水を追加して、再度、同様の雨水処理を進める。これらの操作において、適切な対応ができるよう運転操作手順書に反映する。

なお、処理水の排水路への排水は、関係箇所地了解なくしては行わないものとする。

また、対象核種を含めて排水基準については、堰内雨水及び雨水処理設備の処理水の詳細な核種分析をもとに平成27年度末までに別途見直すこととし、排水基準が確定するまでは、排水時と同様の確認を行い、処理水を構内散水する。

※2.5.2.1.1 汚染水処理設備、貯留設備（タンク等）及び関連設備（移送配管、移送ポンプ等）

#### 2.36.1.4 供用期間中に確認する項目

- (1) 雨水処理設備により、放射性核種が低減されていること及び運転状態に異常（異音、異臭、振動等）の無いこと
- (2) 雨水処理設備および雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットの堰内に設置された漏えい検知器が所定の水位にて漏えいを検知し、警報ランプが点灯表示すること

#### 2.36.1.5 主要な機器

雨水処理設備等は、雨水処理設備、貯留設備（タンク）、雨水移送用貯留設備（タンク）および関連設備（移送配管、移送ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット）で構成する。電源は、所内高圧母線から受電できる構成とする。

また、貯留設備（タンク）内には水位計を設置し、貯留設備内の水位を確認できる構成とする。

##### 2.36.1.5.1 雨水処理設備

###### (1) モバイルRO膜装置

モバイルRO膜装置は、5基のモバイルRO膜ユニットおよび配管で構成する。処理量の確認および性能を確認するためのサンプリングが可能な設計とする。2基のモバイルRO膜ユニットは、保安フィルタ、RO膜加圧ポンプ、RO膜、デミナーおよび配管から構成される。3基のモバイルRO膜ユニットは、保安フィルタ、RO膜加圧ポンプ、RO膜、

脱塩器および配管から構成される。保安フィルタは、大まかなゴミや鉄分等を捕捉する。RO膜は逆浸透圧を利用し、雨水中のイオンおよび微粒子等を除去する。デミナー、脱塩器に通水させることにより、RO膜通過後の雨水をさらに浄化する。

## (2) 淡水化处理RO膜装置

淡水化处理RO膜装置は、4基のRO膜ユニット、脱塩器および配管で構成する。処理量の確認および性能を確認するためのサンプリングが可能な設計とする。2基のRO膜ユニットは、保安フィルタ、RO膜加圧ポンプ、RO膜および配管から構成される。2基のRO膜ユニットは、保安フィルタ、RO膜加圧ポンプ、RO膜、脱塩器および配管から構成される。保安フィルタは、大まかなゴミや鉄分等を捕捉する。RO膜は逆浸透圧を利用し、雨水中のイオンおよび微粒子等を除去する。脱塩器に通水させることにより、RO膜通過後の雨水をさらに浄化する。

### 2.36.1.5.2 貯留設備（タンク）

貯留設備は、雨水処理設備にて処理する雨水を受け入れる6基の雨水受入タンクと、雨水処理設備にて放射性物質が除去された処理水を受け入れる9基の処理水タンク、雨水受入タンクで濃縮された水を一時的に受け入れる2基の雨水RO濃縮水受入タンク、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットで浮遊物質濃度を低減されたる過処理水を一時的に受け入れるる過処理水受入タンクで構成する。フランジ型タンク内部の底面は伸縮性の高いシーリング材にて全面塗装し、漏えい防止強化を図る。

なお、処理水タンクには散水箇所への移送設備を設ける。

### 2.36.1.5.3 雨水移送用貯留設備（タンク）

雨水移送用貯留設備は、汚染水タンクエリアの堰内雨水を受け入れる18基の雨水回収タンクと、必要に応じて処理前の雨水を雨水回収タンクから一時的に受け入れる5基の中継タンクで構成する。フランジ型タンク内部の底板については、漏えい防止対策としてフランジ部シーリングやシーリング材による底板全面塗装を行う。既に使用しているフランジ型タンクの内、上記対策が取れないものについては、汚染水タンクと同じ堰内に設置することで漏えい発生時の堰外への溢水を防止する。

また、必要に応じて雨水回収タンクに散水箇所への移送設備を設ける。

RO濃縮水貯槽※から用途変更するタンク（2.36.2.1.2(6) タンク型式：溶接型 容量：1,000m<sup>3</sup>が対象）については、RO濃縮水貯槽との連結管を取り外し、雨水とRO濃縮水等の混水を防止する。

※Ⅱ-2.5 汚染水処理設備等 2.5.2.1.1(39) RO濃縮水貯槽

実施計画の認可日以降に実施する検査において、既に雨水の受入に使用中のタンク

(2.36.2.1.2 (6)が対象)は、汚染水タンクエリアの堰内雨水の堰外への溢水を回避するために、雨水受入をし、雨水処理を継続することを最優先とし、雨水処理を継続しながら、タンクに係わる確認項目を確認するために、東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則第20条第1項に規定する使用前検査に準じた検査を受検する。

#### 2.36.1.5.4 関連設備

##### (1) 移送配管

移送配管は、鋼管、伸縮継手、ポリエチレン管、合成ゴム管およびポリ塩化ビニル管で構成する。ポリ塩化ビニル管は、接続部をフランジ接続とするなどし、サポート等により配管を固定する。サポート等により接続部が外れないように処置する。

##### (2) 移送ポンプ

雨水処理用の移送ポンプは、モバイルRO膜装置供給ポンプ、RO膜装置供給ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット供給ポンプ、ろ過処理水移送ポンプにて構成する。なお、モバイルRO膜装置供給ポンプは、モバイルRO膜装置雨水受入タンクから雨水RO濃縮水受入タンクへの移送にも使用する。

雨水移送用の移送ポンプは、集水ピット抜出ポンプ、雨水回収タンク移送ポンプ、中継タンク移送ポンプ、中継タンク直送ポンプにて構成する。

##### (3) 雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット

雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットは、コンテナ内に雨水RO濃縮水移送ラインフィルタおよび接続配管等を設置してユニット化したものである。雨水RO濃縮水移送ラインフィルタは浮遊物質濃度の低減を目的としたものを使用し、直列2基の2系列（合計4基）構成とする。

#### 2.36.1.6 自然災害対策等

##### (1) 津波

雨水処理設備等は、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 28m 以上の場所に設置する。

##### (2) 台風

雨水処理設備および雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットは、コンテナ内に設置する。コンテナは一般的に貨物輸送に使われる強固な鋼製のものであり、基本的に台風時にも横転することはないが、念のため基礎ボルト又はアンカーによってコンテナを固縛することで更なる横転防止を図る。暴風警報、竜巻警報等の予報、特別警報により、運転継

続に支障を来す可能性がある場合には、漏えい防止を図るため、装置を停止する。豪雨及び強風に対する対応は、予め定めたマニュアル等に従い実施する。

### (3) 火災

雨水処理設備等は、原則として難燃性の材料を用いる。ポンプ本体、モーターは金属材料を用いており、ケーブルについても難燃性の材料を用いている。RO膜等は難燃性ではないものの常時湿潤状態にあることから火災の発生環境にはない。

雨水処理設備等で使用するポリエチレン管は可燃性であるが、内部流体が水であることに加え、保温材カバーは難燃性であり、設備・配管周辺から可能な限り可燃物を排除するため、燃焼・延焼し難い。

雨水回収タンク移送ポンプ、中継タンク移送ポンプ、中継タンク直送ポンプ、2台のモバイルRO膜装置供給ポンプの運転操作は現場のみであり、運転時は定期的に現場で運転員が運転状態の確認をしていることから、早期に火災を検知することができる。雨水処理設備は、遠隔による監視カメラや運転監視パラメータの状況の確認により火災の早期検知に努める。また、運転停止中には動的機器は停止しており、空調機、漏えい検知器、制御盤等を除いて通電していない。

雨水処理設備のコンテナ、雨水回収タンク移送ポンプ、中継タンク移送ポンプ、中継タンク直送ポンプ、2台のモバイルRO膜装置供給ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットの近傍には消火器を設置する。更に、動力消防ポンプ（ポンプ車）を適切に配置することにより、初期消火の対応を可能にし、消火活動の円滑化を図る。

## 2.36.1.7 構造強度および耐震性

### 2.36.1.7.1 雨水処理設備等

#### (1) 構造強度

雨水処理設備等を構成する雨水処理設備、タンク、移送ポンプおよび移送配管は、日本産業規格、日本水道協会規格、設計・建設規格等に準拠する。

#### (2) 耐震性

雨水処理設備等を構成する主要な機器のうち、雨水処理設備、タンク、移送ポンプ、鋼管、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニットについては、耐震性評価の基本方針に基づき耐震性の評価を実施し耐震性を確認している。また、伸縮継手、ポリエチレン管、合成ゴム管およびポリ塩化ビニル管は、材料の可撓性により耐震性を確保する。

## 2.36.2 基本仕様

### 2.36.2.1 主要仕様

#### 2.36.2.1.1 雨水処理設備、貯留設備（タンク）、関連設備（移送配管、移送ポンプ、雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット）

##### (1) モバイルRO膜ユニット（完成品）

基数	5基
処理量	15m <sup>3</sup> /h/基
材料	FW, FRP (ROベッセル) FRP/PE (デミナー) SUS304 (脱塩器)

##### (2) RO膜ユニット（完成品）

基数	4基
処理量	18m <sup>3</sup> /h/基 (2基), 15m <sup>3</sup> /h/基 (2基)
材料	FW, FRP (ROベッセル) SUS304 (脱塩器)

##### (3) モバイルRO膜装置供給ポンプ（完成品）

台数	10台
容量	48m <sup>3</sup> /h/台 (8台), 30m <sup>3</sup> /h/台 (2台)

##### (4) RO膜装置供給ポンプ（完成品）

台数	8台
容量	48m <sup>3</sup> /h/台

##### (5) 廃止（濃縮水移送ポンプ（完成品））

##### (6) 雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット供給ポンプ

台数	2台
容量	30m <sup>3</sup> /h/台

##### (7) ろ過処理水移送ポンプ

台数	1台
容量	20m <sup>3</sup> /h

(8) 雨水受入タンク（モバイルRO膜装置雨水受入タンク，淡水化处理RO膜装置雨水受入タンク）

タンク型式	フランジ型
合計容量（公称）	2400m <sup>3</sup>
基数	4基
容量（単基）	600m <sup>3</sup> ／基
材料（胴板）	SS400
寸法 天板直径	9004mm
高さ	10072mm
厚さ	底板 12mm, 胴板 9mm, 12mm

タンク型式	溶接型
合計容量（公称）	2400m <sup>3</sup>
基数	2基
容量（単基）	1200m <sup>3</sup> ／基
材料（胴板）	SM400A
寸法 内径	12000mm
高さ	12012mm
厚さ	底板 12mm, 胴板 12mm

(9) 処理水タンク（モバイルRO膜装置処理水タンク，淡水化処理RO膜装置処理水タンク）

タンク型式	フランジ型
合計容量（公称）	3600m <sup>3</sup>
基数	6基
容量（単基）	600m <sup>3</sup> ／基
材料（胴板）	SS400
寸法	天板直径 9004mm
	高さ 10072mm
	厚さ 底板 12mm, 胴板 9mm, 12mm

タンク型式	溶接型
合計容量（公称）	2100m <sup>3</sup>
基数	3基
容量（単基）	700m <sup>3</sup> ／基
材料（胴板）	SM400A
寸法	内径 9000mm
	高さ 12012mm
	厚さ 底板 12mm, 胴板 12mm

(10) 雨水RO濃縮水受入タンク

タンク型式	溶接型
合計容量（公称）	36m <sup>3</sup>
基数	2基
容量（単基）	18m <sup>3</sup> ／基
材料（胴板）	SM400C
寸法	内径 2500mm
	高さ 4074mm
	厚さ 底板 12mm, 胴板 9mm

(11) ろ過処理水受入タンク

タンク型式	溶接型
合計容量 (公称)	10m <sup>3</sup>
基 数	1 基
容 量 (単基)	10m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400C
寸 法 内 径	2500mm
高 さ	2574mm
厚 さ	底板 12mm, 胴板 9mm

(12) 雨水R O濃縮水移送ラインフィルタユニット

基 数	1 基
材 料	SM400A (雨水R O濃縮水移送ラインフィルタ容器)

2.36.2.1.2 雨水移送用貯留設備 (タンク), 関連設備 (移送配管, 移送ポンプ)

(1) 集水ピット拔出ポンプ (完成品)

台 数	63 台
容 量	36m <sup>3</sup> / h / 台
台 数	16 台
容 量	48m <sup>3</sup> / h / 台

(2) 雨水回収タンク移送ポンプ (完成品)

台 数	12 台
容 量	24m <sup>3</sup> / h / 台

(3) 中継タンク移送ポンプ (完成品)

台 数	2 台
容 量	24m <sup>3</sup> / h / 台

(4) 中継タンク直送ポンプ (完成品)

台 数	1 台
容 量	24m <sup>3</sup> / h / 台



(5) 雨水回収タンク

タンク型式 (名称)	フランジ型 (J 6 - 1 ~ 6)
合計容量 (公称)	3600m <sup>3</sup>
基 数	6 基
容 量 (単基)	600m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SS400
寸 法	天板直径 9004mm
	高 さ 10072mm
	厚 さ 底板 12mm, 胴板 12mm

タンク型式 (名称)	溶接型 (H 1 - 1, H 1 - 2, J 1)
合計容量 (公称)	3600m <sup>3</sup>
基 数	3 基
容 量 (単基)	1200m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400A
寸 法	内 径 12000mm
	高 さ 12012mm
	厚 さ 底板 12mm, 胴板 12mm

タンク型式 (名称)	溶接型 (K)
合計容量 (公称)	1160m <sup>3</sup>
基 数	1 基
容 量 (単基)	1160m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400C
寸 法	内 径 11000mm
	高 さ 13000mm
	厚 さ 底板 12mm, 胴板 12mm

タンク型式 (名称)	溶接型 (H 6 (I), J 2, J 3)
合計容量 (公称)	2100m <sup>3</sup>
基 数	3 基
容 量 (単基)	700m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400A
寸 法	内 径 9000mm
	高 さ 12012mm
	厚 さ 底板 12mm, 胴板 12mm

タンク型式 (名称)	溶接型 (B)
合計容量 (公称)	1330m <sup>3</sup>
基 数	1 基
容 量 (単基)	1330m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400C
寸 法 内 径	11000mm
高 さ	14900mm
厚 さ	底板 12mm, 胴板 15mm

(6) 雨水回収タンク (平成 27 年 1 月 30 日以前から運用中)

タンク型式 (名称)	フランジ型 (H 9 - 1 ~ 3)
合計容量 (公称)	1800m <sup>3</sup>
基 数	3 基
容 量 (単基)	600m <sup>3</sup> / 基 (3 基)
材 料 (胴板)	SS400
寸 法 天板直径	9004mm
高 さ	10072mm
厚 さ	底板 12mm, 胴板 9mm

タンク型式 (名称)	溶接型 (G 3 西 - D 7)
合計容量 (公称)	1,000m <sup>3</sup>
基 数	1 基
容 量 (単基)	1,000m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SS400
寸 法 内 径	12,000mm
高 さ	10,537mm
厚 さ	底板 12mm, 胴板 12mm

(7) 廃止 (雨水回収タンク (RO処理水貯槽<sup>※</sup>から用途変更))

※II-2.5 汚染水処理設備等 2.5.2.1.1(35) RO処理水貯槽

(8) 中継タンク

タンク型式	溶接型
合計容量 (公称)	5800m <sup>3</sup>
基 数	5 基
容 量 (単基)	1160m <sup>3</sup> / 基
材 料 (胴板)	SM400C
寸 法	内 径 11,000mm
	高 さ 13,000mm
	厚 さ 底板 12mm, 胴板 12mm
連結管	呼び径 200A 相当
	材質 合成ゴム
	最高使用圧力 0.98MPa
	最高使用温度 50°C

表 2. 3 6. 1 雨水処理設備等の主要配管仕様

(1) モバイルRO膜装置

名 称	仕 様	
①モバイルRO膜装置雨水受入タンクからモバイルRO膜装置入口まで	呼び径	80A 相当
	材質	合成ゴム
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃
	呼び径	75A 相当, 100A 相当, 150A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 40 100A/Sch. 40 150A/Sch. 40 200A/Sch. 40
	材質	SUS304TP
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa, 0.74MPa 40℃
②モバイルRO膜装置入口からモバイルRO膜装置出口まで	呼び径/厚さ	25A/Sch. 10S 40A, 50A, 65A, 80A/ Sch. 10S, Sch. 20S, Sch. 40, Sch. 80
	材質	SUS304TP, SUS316LTP
	最高使用圧力	0.5MPa, 1.0MPa, 1.5MPa (RO膜加 圧ポンプからRO膜ま で, 濃縮水ラインのRO 膜出口から絞り弁まで)
	最高使用温度	40℃
	呼び径	25A 相当, 50A 相当, 65A 相当, 80A 相当
	材質	ポリ塩化ビニル
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃
	呼び径	25A 相当, 50A 相当
	材質	合成ゴム
最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃	
③モバイルRO膜装置出口からモバイルRO膜装置処理水タンクまで	呼び径	75A 相当, 100A 相当, 150A 相当
材質	ポリエチレン	
最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃	

	呼び径／厚さ	100A／Sch. 40 150A／Sch. 40
	材質	SUS304TP
	最高使用圧力	0.5MPa, 0.74MPa
	最高使用温度	40℃

(2) 淡水化処理RO膜装置

名 称	仕 様	
④淡水化処理RO膜装置雨水受入タンクから淡水化処理RO膜装置入口まで	呼び径	80A 相当
	材質	合成ゴム
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
④淡水化処理RO膜装置雨水受入タンクから淡水化処理RO膜装置入口まで	呼び径	50A 相当, 75A 相当, 100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
④淡水化処理RO膜装置雨水受入タンクから淡水化処理RO膜装置入口まで	呼び径／厚さ	80A／Sch. 40 100A／Sch. 40
	材質	SUS304TP
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
④淡水化処理RO膜装置雨水受入タンクから淡水化処理RO膜装置入口まで	呼び径／厚さ	50A／Sch. 40 50A／Sch. 80
	材質	STPT370
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
⑤淡水化処理RO膜装置入口から淡水化処理RO膜装置出口まで	呼び径	25A 相当, 50A 相当, 65A 相当
⑤淡水化処理RO膜装置入口から淡水化処理RO膜装置出口まで	材質	ポリ塩化ビニル
⑤淡水化処理RO膜装置入口から淡水化処理RO膜装置出口まで	最高使用圧力	0.5MPa
⑤淡水化処理RO膜装置入口から淡水化処理RO膜装置出口まで	最高使用温度	40℃

	呼び径／厚さ	40A, 50A, 65A, 80A ／Sch. 10S, Sch. 20S, Sch. 40, Sch. 80 25A, 100A ／Sch. 10S
	材質 最高使用圧力	SUS304TP, SUS316LTP 0.5MPa 1.35MPa (RO膜加圧ポン プからRO膜まで) 1.5MPa (RO膜加圧ポン プからRO膜まで, 濃縮 水ラインのRO膜出口か ら絞り弁まで)
	最高使用温度	40℃
	呼び径	50A 相当, 75A 相当, 100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径	50A 相当
	材質	合成ゴム
	最高使用圧力	0.5MPa
	最高使用温度	40℃
⑥ 淡水化処理RO膜装置出口から淡 水化処理RO膜装置処理水タンクま で	呼び径	75A 相当, 100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃
	呼び径／厚さ	100A／Sch. 40
	材質	STPT370
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃
	呼び径／厚さ	100A／Sch. 40
	材質	SUS304TP
	最高使用圧力 最高使用温度	0.5MPa 40℃

(3) 雨水移送

名 称	仕 様	
⑦ 集水ピット抜出ポンプから雨水回 収タンクまたは中継タンク入口ヘッ ダーまで	呼び径	75A 相当, 100A 相当, 150A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	0.5MPa, 0.74MPa
	最高使用温度	40℃

	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 100A／Sch. 40 150A／Sch. 40 SUS304TP 0.5MPa, 0.74MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 SUS304 0.74MPa 40℃ (伸縮継手)
⑧雨水回収タンクから集合ヘッダー または中継タンク入口ヘッダーまで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.74MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 100A／Sch. 40 200A／Sch. 40 SUS304TP 0.74MPa 40℃
⑨集合ヘッダーから中継タンクまた は雨水受入タンクまで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当, 150A 相当 ポリエチレン 0.74MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 100A／Sch. 40 150A／Sch. 40 200A／Sch. 40 SUS304TP 0.74MPa 40℃
⑩中継タンクから集合ヘッダーまで	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当, 100A 相当 ポリエチレン 0.74MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A／Sch. 40 100A／Sch. 40 SUS304TP 0.74MPa 40℃

(4) 雨水RO濃縮水移送

名 称	仕 様	
⑪モバイルRO膜装置入口分岐から雨水RO濃縮水受入タンクまで	呼び径	75A 相当, 80A 相当, 100A 相当
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	ポリエチレン 0.5MPa, 0.98MPa 40℃
⑫雨水RO濃縮水受入タンクから雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット入口まで	呼び径/厚さ	80A/Sch. 40
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	STPT410 0.98MPa 40℃
⑬雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット入口から雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット出口まで	呼び径	80A 相当
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	合成ゴム 0.98MPa 40℃
	呼び径/厚さ	80A/Sch. 40
⑭雨水RO濃縮水移送ラインフィルタユニット出口からろ過処理水受入タンクまで	呼び径	80A 相当
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	ポリエチレン 0.98MPa 40℃
⑮ろ過処理水受入タンクからRO濃縮水貯槽※入口まで	呼び径/厚さ	65A/Sch. 40 80A/Sch. 40
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	STPG370 0.98MPa 40℃
⑯ろ過処理水受入タンクからRO濃縮水貯槽※入口まで	呼び径	50A 相当, 80A 相当
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	ポリエチレン 0.98MPa 40℃
⑰ろ過処理水受入タンクからRO濃縮水貯槽※入口まで	呼び径/厚さ	50A/Sch. 80 80A/Sch. 40
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	STPT410 0.98MPa 40℃
⑱ろ過処理水受入タンクからRO濃縮水貯槽※入口まで	呼び径	50A 相当
	材質 最高使用圧力 最高使用温度	合成ゴム 0.98MPa 40℃



	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	75A 相当, 80A 相当 ポリエチレン 0.5MPa, 0.98MPa 40°C
	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	50A／Sch. 80 80A／Sch. 40 STPT410 0.98MPa 40°C

※ 2.5.2.1.1 汚染水処理設備, 貯留設備 (タンク等) 及び関連設備 (移送配管, 移送ポンプ等)

### 2.36.3 添付資料

- 添付資料－1：雨水処理設備等全体概略図
- 添付資料－2：雨水処理設備等概略配置図
- 添付資料－3：雨水処理設備等の構造強度・耐震性
- 添付資料－4：雨水処理設備等の具体的な安全確保策
- 添付資料－5：雨水処理設備等に係る確認事項
- 添付資料－6：雨水処理設備等の先行運用について

### 2.36.4 参考資料

- 参考資料－1：放射性固体廃棄物発生量に関する評価
- 参考資料－2：雨水処理設備等の散水設備について
- 参考資料－3：雨水処理設備等の円筒型タンクに関する計算書

## 2.38 RO 濃縮水処理設備

### 2.38.1 基本設計

#### 2.38.1.1 設置の目的

汚染水処理設備の処理済水を貯留する設備（タンク）のうち，逆浸透膜装置の廃液を貯留する RO 濃縮水貯槽は，高濃度の放射性ストロンチウムを含むため，RO 濃縮水処理設備により放射性ストロンチウム濃度を低減する。

なお，RO 濃縮水処理設備により放射性ストロンチウム濃度を低減した水は，多核種除去設備等により，放射性物質（トリチウムを除く）を十分低い濃度になるまで除去する。

上記の目的で設備を設置したが RO 濃縮水の処理完了に伴い，本設備を廃止する。なお，廃止する設備の一部については他設備へ用途変更する。

#### 2.38.1.2 主要な機器

RO 濃縮水処理設備のうち，前処理装置と核種除去装置，及び付属設備のうち処理済水のサンプリング設備は廃止する。付帯設備のうち，RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽へ移送する移送設備は，サブドレン他水処理施設にて汲み上げた地下水を RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽で貯留するための設備として用途変更する。

## 2.38.2 基本仕様

### 2.38.2.1 系統仕様

- (1) 廃止 (RO 濃縮水処理設備)

### 2.38.2.2 機器仕様

- (1) 容器

汚染水処理設備等へ用途変更\* (a. 処理装置供給タンク)

- ※ II-2.5 汚染水処理設備等 2.5.2.1.1 汚染水処理設備, 貯留設備 (タンク等) 及び関連設備 (移送配管, 移送ポンプ等) (93) 増設 RO 濃縮水受タンク

サブドレン他水処理施設\*へ用途変更\* (b. RO 濃縮水処理水中継タンク)

- ※ II-2.35 サブドレン他水処理施設 2.35.2.1.2 サブドレン他浄化設備 (2) 容器

廃止 (c. 前処理フィルタ 1, 2)

廃止 (d. 前処理フィルタ 3, 4)

廃止 (e. 吸着塔 1~5)

- (2) ポンプ

廃止 (a. 処理装置供給ポンプ (完成品))

廃止 (b. 処理装置加圧ポンプ (完成品))

サブドレン他水処理施設\*へ用途変更\* (c. RO 濃縮水処理水移送ポンプ (完成品))

- ※ II-2.35 サブドレン他水処理施設 2.35.2.1.2 サブドレン他浄化設備 (3) その他機器

### (3) 配管

#### 主要配管仕様

多核種除去設備<sup>※1</sup>へ用途変更\*

(RO 濃縮水移送ポンプ配管分岐部から処理装置供給タンク入口まで  
(ポリエチレン管の一部))

※1 II-2.16.1 多核種除去設備 2.16.1.2.1 (33)配管 (RO 濃縮水移送ポンプ/RO 濃縮水貯槽移送ポンプ配管分岐部から多核種除去設備入口まで)

廃止

(RO 濃縮水移送ポンプ配管分岐部から処理装置供給タンク入口まで  
(ポリエチレン管の一部, 鋼管))

(処理装置供給タンク出口から処理装置供給ポンプ入口まで)

(処理装置供給ポンプ出口から処理装置加圧ポンプ入口まで)

(処理装置加圧ポンプ出口から吸着塔 5 下流まで)

(吸着塔 5 下流から RO 濃縮水処理水中継タンク入口まで)

(ポリエチレン管の一部, 鋼管))

サブドレン他水処理施設<sup>※2</sup>へ用途変更\*

(吸着塔 5 下流から RO 濃縮水処理水中継タンク入口まで)

(ポリエチレン管の一部))

(RO 濃縮水処理水中継タンク出口から RO 濃縮水処理水移送ポンプ入口まで)

(RO 濃縮水処理水移送ポンプ出口より RO 濃縮水貯槽又は Sr 処理水貯槽まで)

※2 II-2.35 サブドレン他水処理施設 2.35.2.1.2 サブドレン他浄化設備 (4)配管

(4)廃止 (放射線監視装置)

\*RO 濃縮水処理設備は東京電力株式会社福島第一原子力発電所原子炉施設の保安及び特定核燃料物質の防護に関する規則第 20 条第 1 項に規定する使用前検査を終了している。RO 濃縮水処理設備のうち他設備へ用途変更する機器は、用途変更に伴い、構造強度・耐震性、機能及び性能について変更はないことから、用途変更後も機器を継続使用する。なお、用途変更する機器に係わる確認事項については、継続使用しながら確認を実施する。

## 2.50 ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設

### 2.50.1 基本設計

#### 2.50.1.1 ALPS 処理水希釈放出設備

##### 2.50.1.1.1 設置の目的

福島第一原子力発電所構内のタンク※には、多核種除去設備にて汚染水から放射性核種（トリチウムを除く。）を十分に低い濃度になるまで除去した水（以下「ALPS 処理水等」という。）を貯留している。

本設備は、ALPS 処理水等がトリチウムを除く放射性核種の告示濃度比総和 1 未満を満足している ALPS 処理水であることを確認した上で、海水にて希釈し海洋へ放出することを目的とする。

※：RO 濃縮水貯槽，多核種処理水貯槽，Sr 処理水貯槽

RO 濃縮水貯槽は、当初、逆浸透膜装置の濃縮水を貯留していたが、濃縮水の処理完了後は、ALPS 処理水等を貯留している。Sr 処理水貯槽は、当初、RO 濃縮水処理設備（廃止）の処理水を貯留していたが、処理水の処理完了後は、ALPS 処理水等を貯留している。

##### 2.50.1.1.2 要求される機能

- (1) 海洋への放出量は、発生する汚染水の量（地下水，雨水の流入による増量分）を上回る能力を有すること。
- (2) 希釈放出前の水が ALPS 処理水であることを確認するため、測定・確認用のタンク内およびタンク群の放射性物質濃度の均質化および試料採取ができること。
- (3) ALPS 処理水を海水で希釈し、放水設備へ排水できること。
- (4) 異常が発生した場合、速やかに ALPS 処理水の海洋への放出を停止できる機能を有すること。
- (5) ALPS 処理水を 100 倍以上及び海水希釈後のトリチウム濃度を 1,500Bq/L 未満となるまで希釈する能力を有すること。

### 2.50.1.1.3 設計方針

#### (1) 放射性液体廃棄物の処理等

ALPS 処理水希釈放出設備は、主に測定・確認用設備、移送設備、希釈設備により構成する。

測定・確認用設備では、タンク内およびタンク群の放射性物質濃度を均質にした後、試料採取・分析を行い、ALPS 処理水に含まれる、トリチウムを除く放射性核種の告示濃度比総和が 1 未満であること及びトリチウム濃度を確認する。

その後、移送設備により ALPS 処理水を希釈設備まで移送し、海水で希釈した上で、放水設備へ排水する。

#### a. 海洋放出前のタンク内 ALPS 処理水の放射能濃度の均質化

測定・確認用設備では、代表となる試料が得られるよう、採取する前にタンク群の水を循環ポンプにより循環することでタンク群の放射性物質の濃度をほぼ均質にする。また、各タンクに攪拌機器を設置し、均質化の促進を図る設計とする。

#### b. ALPS 処理水の海水への混合希釈率の調整及び監視

敷地境界における実効線量を達成できる限り低減するために、ALPS 処理水を海水で希釈した後に放出する水（以下「放出水」という。）中に含まれるトリチウムの濃度が運用の上限値である 1,500Bq/L 未満、海水による希釈倍率が 100 倍以上になるよう、希釈処理が可能な設計とする。なお、ALPS 処理水希釈放出設備における混合希釈状態について、解析コードを用いて評価を行う。

また、放出水中に含まれるトリチウムの濃度が運用の上限値である 1,500Bq/L 未満となるよう、混合希釈率の調整及び監視が実施可能な設計とする。

#### c. 異常の検出と ALPS 処理水の海洋放出の停止

供用期間中に想定される機器の故障等の異常により、「意図しない形での ALPS 処理水の海洋放出」に至るおそれのある事象（以下「異常事象」という。）等が発生した場合に備え、移送設備には緊急遮断弁を設置し、正常な運転状態を逸脱すると判断される場合においてはインターロックにより閉動作させるとともに、必要に応じて運転員の操作により ALPS 処理水の海洋放出を停止することが可能な設計とする。

d. 放射性物質の漏えい防止及び管理されない放出の防止

ALPS 処理水希釈放出設備は、放射性液体廃棄物として ALPS 処理水を取り扱うことから、その漏えい発生防止・汚染拡大防止等のため、次の各項を考慮した設計とする。ただし、当該設備のうち、放水立坑（上流水槽）については、通常時において放出水のみを取り扱うことから、放水設備以外への著しい流出が発生しないよう水密性を確保した設計とする。

- (a) 漏えいの発生を防止するため、機器等には設置環境や内部流体の性状に応じた適切な材料を使用する。
- (b) 液体状の放射性物質が漏えいした場合は、漏えいの早期検出を可能にするとともに、漏えい液体の除去を容易に行えるようにする。
- (c) 漏えい検知等の警報については、免震重要棟集中監視室に表示し、異常を確実に運転員に伝え適切な措置をとれるようにする。

e. 被ばく低減

ALPS 処理水希釈放出設備は、取り扱う放射性液体廃棄物の性状に応じて、機器等の設計において遮へい機能を考慮した設計とする。

(2) 準拠規格及び基準

ALPS 処理水希釈放出設備を構成する構築物、系統及び機器の設計、材料の選定、製作及び検査については、発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME）、（公社）土木学会等の技術基準（規準）、日本産業規格（JIS）等を適用することにより信頼性を確保する。

(3) 自然現象に対する設計上の考慮

a. 地震に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備を構成する構築物、系統及び機器は、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。

なお、主要な機器の耐震性を評価するにあたっては、原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601）等に準拠することを基本とするが、評価手法、評価基準について実態に合わせたものを採用する。

ポリエチレン管、耐圧ホース等は、材料の可撓性により耐震性を確保する。



b. 地震以外に想定される自然現象（津波，豪雨，台風，竜巻等）に対する設計上の考慮  
ALPS 処理水希釈放出設備は，地震以外の想定される自然現象（津波，豪雨，台風，竜巻等）によって，施設の安全性が損なわれないよう設計する。

(4) 外部人為事象に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は，想定される外部人為事象によって，施設の安全性を損なうことのない設計とする。また，第三者の不法な接近等に対し，これを防御するため，適切な措置を講じた設計とする。

(5) 火災に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は，火災の発生を防止し，火災の検知及び消火を行い，並びに火災の影響を軽減するための対策を適切に組み合わせることにより，火災により施設の安全性を損なうことのない設計とする。

(6) 環境条件に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備の構築物，系統及び機器は，経年事象を含む想定されるすべての環境条件に適合できる設計とする。

(7) 運転操作に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は，運転員による誤操作を防止できる設計とするとともに，異常事象や設備の運転に影響を及ぼしうる自然現象等が発生した状況下においても，運転員がこれらの事象に対処するために必要な設備を容易に操作できる設計とする。

(8) 信頼性に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は，ヒューマンエラーや機器の故障による「意図しない形での ALPS 処理水の海洋放出」が発生しないよう，高い信頼性を確保した設計とする。また，万が一，「意図しない形での ALPS 処理水の海洋放出」が発生したとしても，その量が極めて小さくなる設計とする。

(9) 検査可能性に対する設計上の考慮

ALPS 処理水希釈放出設備を構成する構築物，系統及び機器は，それらの健全性及び能力を確認するために，適切な方法によりその機能を検査できる設計とする。

(10) その他の設計上の考慮

a. 健全性に対する考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は，機器の重要度に応じた有効な保全が可能な設計とする。

b. 監視・操作に対する考慮

ALPS 処理水希釈放出設備は、免震重要棟集中監視室の監視・制御装置により、遠隔操作及び運転状況の監視が可能な設計とする。

c. 長期停止に対する考慮

ALPS 処理水希釈放出設備のうち、動的機器及び異常発生時に ALPS 処理水の海洋放出を速やかに停止する機器については、故障により設備が長期停止することがないように 2 系列設置する。また、電源は異なる 2 系統の所内高圧母線から受電可能な設計とする。

#### 2.50.1.1.4 主要な機器

ALPS 処理水希釈放出設備は、測定・確認用設備、移送設備、希釈設備により構成する。

##### (1) 測定・確認用設備

測定・確認用設備は、ALPS 処理水に含まれる放射性物質濃度の均質化および放出前の試料採取を目的に、測定・確認用タンク、攪拌機器、循環ポンプ、循環配管、受入配管により構成する。

測定・確認用タンクは、現状の汚染水発生量と ALPS 処理水に含まれる放射性物質濃度の測定・評価に要する時間を踏まえ、ALPS 処理水の海洋放出までには、少なくとも約 1 万 m<sup>3</sup>分の容量が必要であることから、「II 2.5 汚染水処理設備等」の多核種処理水貯槽に示す K4 エリアタンクのうち、10 基をタンク 1 群として 3 群 (30 基) を兼用して、それぞれのタンク群を ALPS 処理水の受入工程、測定・確認工程及び放出工程に振り分けて運用する。

攪拌機器は、測定・確認用タンクに 1 台ずつ設置し、タンク内の攪拌を行う。

循環ポンプは、2 台設置し、タンク 1 群 (10 基) の内部の水の循環攪拌を行う。

なお、循環ポンプ、攪拌機器ともに K4 エリアタンク内の放射性物質濃度の均質化に十分な処理容量を確保する。

##### (2) 移送設備

移送設備は、測定・確認用設備にて ALPS 処理水であることを確認した水を希釈設備へ移送するため、ALPS 処理水移送ポンプおよび移送配管により構成する。

ALPS 処理水移送ポンプは、運転号機と予備機の 2 台構成とし、ALPS 処理水を希釈設備まで移送する。

また、異常発生時に、速やかに移送停止ができるよう、緊急遮断弁-2 を海水配管ヘッダ手前に、津波対策として緊急遮断弁-1 を防潮堤内にそれぞれ 1 箇所設ける。

### (3) 希釈設備

希釈設備は、ALPS 処理水を海水で希釈し、放水立坑（上流水槽）まで移送し、放水設備へ排水することを目的に、海水移送ポンプ、海水配管（海水配管ヘッドを含む）、放水立坑（上流水槽）により構成する。

海水移送ポンプは、5号機の取水路から放水立坑まで海水の移送を行う。

なお、移送設備により移送する ALPS 処理水のトリチウム濃度が 1,500Bq/L 未満となるよう、ALPS 処理水を 100 倍以上に希釈する流量を確保する。

#### 2.50.1.1.5 供用期間中に確認する項目

ALPS 処理水希釈放出設備は、移送設備により ALPS 処理水を希釈設備まで移送し、海水で希釈した上で、放水設備へ排水できること。

また、異常が発生した場合に速やかに ALPS 処理水の海洋放出を停止できること。

## 2.50.1.2 放水設備

### 2.50.1.2.1 設置の目的

放水設備は、ALPS 処理水希釈放出設備の排水（海水で希釈して、トリチウムを含む全ての放射性核種の告示濃度比総和が 1 を下回った水）を、放水立坑（下流水槽）と海面との水頭差により、沿岸から約 1km 離れた海洋から放出することを目的とする。

### 2.50.1.2.2 要求される機能

ALPS 処理水希釈放出設備の排水（海水で希釈して、トリチウムを含む全ての放射性核種の告示濃度比総和が 1 を下回った水）を、沿岸から約 1km 離れた海洋から放出できること。

### 2.50.1.2.3 設計方針

「措置を講ずべき事項」に準じて、以下の通り設計を行う。

#### (1) 準拠規格及び基準

放水設備を構成する各設備の設計、材料の選定、製作について、(公社)土木学会等の技術基準（規準）や日本産業規格（JIS）等の国内外の民間規格を適用することにより信頼性を確保する。

#### (2) 自然現象に対する設計上の考慮

##### a. 地震に対する設計上の考慮

放水設備を構成する設備は、ALPS 処理水希釈放出設備の排水（海水で希釈して、トリチウムを含む全ての放射性核種の告示濃度比総和が 1 を下回った水）を取り扱うことを踏まえ、耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。

##### b. 地震以外に想定される自然現象（津波、豪雨、台風、竜巻等）に対する設計上の考慮

放水設備は、地震以外の想定される自然現象（津波、台風）によって施設の安全性が損なわれない設計とする。

#### (3) 火災に対する設計上の考慮

放水設備は、火災発生を防止するため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用する。

なお、設備内部に海水が充水されていることから、火災のおそれは非常に低い。

(4) 環境条件に対する設計上の考慮

放水設備を構成する設備は、経年事象を含む想定されるすべての環境条件に適合できる設計とする。

(5) 検査可能性に対する設計上の考慮

放水設備は、要求される機能を確認することができる設計とする。

(6) その他の設計上の考慮

a. 水理設計

放水立坑（下流水槽）内の水を放水立坑（下流水槽）と海面との水頭差により、約 1km 離れた放水口まで移送する設計とする。また、放水立坑（下流水槽）の壁高は、放水設備における水理損失およびサージングによる水位上昇等を考慮した設計とする。

b. 構造

放水設備を岩盤に設置することで、地震の影響を受けにくい構造とする。また、放水トンネルについては、岩盤内部に設置することとし、海底部の掘進における施工時の安全性や供用期間中の耐久性を考慮し、シールド工法を採用する。さらに、放水トンネルを構成する鉄筋コンクリート製の覆工板にシール材を設けることで止水性を確保する。

c. 健全性に対する考慮

長期荷重および短期荷重に対して、許容応力度以内であることを確認し、構造を設定している。また、構造物の浮き上がりが生じないことを確認している。さらに、鉄筋コンクリート製の躯体に生じるひび割れ幅および塩害の照査を実施し、適切な鉄筋かぶりを設定し、供用期間中の耐久性が確保されることを確認している。

また、一般土木構造物と同様に、点検長期計画に基づき維持管理する。

2.50.1.2.4 主要な設備

放水設備は、放水立坑（上流水槽）から放水立坑内の堰を越流し、放水立坑（下流水槽）へ流入した水を、沿岸から約 1km 離れた海洋から放出することを目的に、放水立坑（下流水槽）、放水トンネル、放水口により構成する。

2.50.1.2.5 供用期間中に確認する項目

海水移送ポンプを起動して、放水立坑（下流水槽）と海面との水頭差により、放水トンネル、放水口を通じて海洋へ放出できること。

## 2.50.2 基本仕様

### 2.50.2.1 ALPS 処理水希釈放出設備の主要仕様

#### 2.50.2.1.1 測定・確認用設備

##### (1) 循環ポンプ（完成品）

台 数	2 台
容 量	160m <sup>3</sup> /h（1 台あたり）

##### (2) 攪拌機器（完成品）

台 数	30 台
-----	------

##### (3) 測定・確認用タンク※

合計容量（公称）	30,000m <sup>3</sup>
基 数	30 基
容量（単基）	1,000m <sup>3</sup> ／基
材 料	SS400
板厚（側板）	15mm

※：「Ⅱ 2.5 汚染水処理設備等」の多核種処理水貯槽のうち、K4 エリアタンクの一部を兼用する。なお、公称容量を運用水位上限とする。

## (4) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 3)

名 称	仕 様	
測定・確認用タンク出口から 循環ポンプ入口まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 20S SUS316LTP 0.49MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 ポリエチレン 0.49MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 合成ゴム 0.49MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 合成ゴム 0.49MPa 40℃
循環ポンプ出口から 測定・確認用タンク入口まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	125A/Sch. 20S 150A/Sch. 20S 200A/Sch. 20S SUS316LTP 0.98MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	150A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	125A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃

主要配管仕様（2 / 3）

名 称	仕 様	
多核種除去設備出口から 処理済水貯留用タンク・槽類 <sup>※1</sup> まで <sup>※2</sup> (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 20S SUS316LTP 0.98MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃
サンプルタンク出口から 多核種処理水貯槽，RO 濃縮水貯槽または Sr 処理水貯槽まで <sup>※2</sup> [増設多核種除去設備] (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 20S SUS316LTP 0.98MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃

※1：多核種処理水貯槽，RO 濃縮水貯槽または Sr 処理水貯槽

※2：測定・確認用タンク（多核種処理水貯槽と兼用）への配管のうち上記仕様の配管は、「Ⅱ 2.16.1 多核種除去設備」，「Ⅱ 2.16.2 増設多核種除去設備」と兼用する。



主要配管仕様（3 / 3）

名 称	仕 様	
サンプルタンク出口から 多核種処理水貯槽，RO 濃縮水貯槽また は Sr 処理水貯槽まで※3 〔高性能多核種除去設備〕 (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 20S SUS316LTP 0.98MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃

※3：測定・確認用タンク（多核種処理水貯槽と兼用）への配管のうち上記仕様の配管は、「II 2.16.3  
高性能多核種除去設備」と兼用する。

## 2.50.2.1.2 移送設備

### (1) ALPS 処理水移送ポンプ (完成品)

台 数	2 台 (うち予備 1 台)
容 量	30m <sup>3</sup> /h (1 台あたり)

### (2) ALPS 処理水流量計

個 数	4 個 (うち予備 2 個) ※
計測方式	差圧式
計測範囲	0 ~ 40m <sup>3</sup> /h

### (3) 放射線モニタ

個 数	2 個 (うち予備 1 個)
種 類	シンチレーション検出器
計測範囲	10 <sup>-1</sup> ~10 <sup>5</sup> s <sup>-1</sup>

### (4) 緊急遮断弁-1 (完成品)

台 数	2 台 (うち予備 1 台)
-----	----------------

### (5) 緊急遮断弁-2 (完成品)

台 数	2 台 (うち予備 1 台)
-----	----------------

### (6) ALPS 処理水流量調整弁 (完成品)

台 数	2 台 (うち予備 1 台)
-----	----------------

※：差圧伝送器の個数を示す。

## (7) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 2)

名 称	仕 様	
測定・確認用タンク間 (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A/Sch. 20S SUS316LTP 0.49MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 ポリエチレン 0.49MPa 40℃
(耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 合成ゴム 0.49MPa 40℃
測定・確認用タンク出口から ALPS 処理水移送ポンプ入口まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A/Sch. 20S 150A/Sch. 20S SUS316LTP 0.49MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 150A 相当 ポリエチレン 0.49MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 80A 相当 合成ゴム 0.49MPa 40℃

主要配管仕様 (2 / 2)

名 称	仕 様	
ALPS 処理水移送ポンプ出口から 緊急遮断弁-1 まで (鋼管)	呼び径／厚さ  材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A/Sch. 20S 100A/Sch. 20S 150A/Sch. 20S SUS316LTP 0.98MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.98MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	40A 相当 合成ゴム 0.98MPa 40℃
緊急遮断弁-1 から 海水配管ヘッダ入口取合まで (鋼管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch. 20S SUS316LTP 0.60MPa 40℃
(ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 0.60MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 合成ゴム 0.60MPa 40℃

### 2.50.2.1.3 希釈設備

#### (1) 海水移送ポンプ（完成品）

台 数	3 台（うち予備 1 台）
容 量	7,086m <sup>3</sup> /h（1 台あたり）

#### (2) 海水流量計

個 数	3 個（うち予備 1 個）
計測方式	差圧式
計測範囲	0 ～ 10,000m <sup>3</sup> /h

#### (3) 放水立坑（上流水槽）

基 数	1 基
主要寸法	たて 34,500mm × よこ 16,900mm × 高さ 6,000mm（内空）
構 造	鉄筋コンクリート造 （コンクリート：40N/mm <sup>2</sup> ，鉄筋：SD345）

## (4) 配管

## 主要配管仕様 (1 / 2)

名 称	仕 様	
海水移送ポンプ出口から 海水配管ヘッド入口取合まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	800A／12.7mm 900A／12.7mm STPY400 0.60MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	900A／13mm SUS329J4L 0.60MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	900A／14mm SUS329J4LTPY 0.60MPa 40℃
(伸縮継手)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	800A 相当 900A 相当 合成ゴム 0.60MPa 40℃
海水配管ヘッド (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	900A／16mm 1800A／16mm 2200A／16mm SM400B 0.60MPa 40℃
(鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A／Sch. 40 STPG370 0.60MPa 40℃

主要配管仕様（2 / 2）

名 称	仕 様	
海水配管ヘッダ出口から 放水立坑（上流水槽）まで （鋼管）	呼び径／厚さ	1800A／16mm
	材質	SM400B
	最高使用圧力	0.60MPa
	最高使用温度	40℃
（伸縮継手）	呼び径	1800A 相当
	材質	合成ゴム
	最高使用圧力	0.60MPa
	最高使用温度	40℃

## 2.50.2.2 放水設備の主要仕様

### (1) 放水立坑（下流水槽）

基 数	1 基
主要寸法	たて 4,600mm × よこ 10,000mm × 高さ 17,200mm（内空）
構 造	鉄筋コンクリート造 （コンクリート：24N/mm <sup>2</sup> ，鉄筋：SD345）

### (2) 放水トンネル

基 数	1 式
主要寸法	延長 1,031m 内径 2,590mm
構 造	鉄筋コンクリート造 （コンクリート：42N/mm <sup>2</sup> ，鉄筋：SD345） 鉄鋼コンクリート造 （コンクリート：42N/mm <sup>2</sup> ，鉄鋼：SM490A）

### (3) 放水口

基 数	1 基
主要寸法	たて 8,000mm × よこ 11,000mm × 高さ 8,300mm（内空）
構 造	鉄筋コンクリート造 （コンクリート：30N/mm <sup>2</sup> ，鉄筋：SD345）



### 2.50.3 添付資料

- 添付資料－1 : 全体概要図及び系統構成図
- 添付資料－2 : ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設の具体的な安全確保策等
- 添付資料－3 : ALPS 処理水希釈放出設備の構造強度及び耐震性に関する説明書
- 添付資料－4 : ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設に係る確認事項
- 添付資料－5 : 放水立坑（上流水槽）および放水設備の設計に関する説明書
- 添付資料－6 : 工事工程表
- 添付資料－7 : 検査可能性に関する考慮事項

## ALPS 処理水希釈放出設備の構造強度及び耐震性に関する説明書

ALPS 処理水希釈放出設備を構成する設備について、構造強度評価及び耐震性の基本方針に基づき、構造強度及び耐震性の評価を行う。

## 1. 基本方針

## 1.1 構造強度評価の基本方針

ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設を構成する構築物、系統及び機器は、「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則」において、廃棄物処理設備等に相当するものと位置づけられることから、その設計、材料の選定、製作及び検査において、それらが果たすべき安全機能の重要度を考慮して、ALPS 処理水を内包する容器及び鋼管については、発電用原子力設備規格 設計・建設規格 (JSME S NC1) のクラス 3 機器の規定を適用して評価を行う。なお、海水のみを内包する鋼管についても、クラス 3 機器に準じて評価を行う。

ポリエチレン管は ISO 規格または JWWA 規格に準拠したものを、適用範囲内で使用することで、構造強度を有すると評価する。また、耐圧ホース、伸縮継手については、製造者仕様範囲内の圧力及び温度で使用することで構造強度を有すると評価する。なお、ALPS 処理水希釈放出設備におけるポリエチレン管、耐圧ホース及び伸縮継手の環境条件（最高使用温度・最高使用圧力）は以下のとおりであり、当該条件を満足する管を選定する。

表－ 1 ポリエチレン管、耐圧ホース及び伸縮継手の環境条件

管の種類	使用箇所	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)
ポリエチレン管	受入配管	0.98	40
	循環配管	0.49/0.98	40
	移送配管	0.49/0.60/0.98	40
耐圧ホース	受入配管	0.98	40
	循環配管	0.49	40
	移送配管	0.49	40
伸縮継手	循環配管	0.49/0.98	40
	移送配管	0.49/0.60/0.98	40
	海水配管	0.60	40

## 1.2 耐震性の基本方針

ALPS 処理水希釈放出設備は、2021 年 9 月 8 日の原子力規制委員会で示された耐震設計の考え方を踏まえ、その安全機能が喪失した場合における公衆への放射線影響を評価した結果、直接線・スカイシャイン線による外部被ばく線量と、漏えいした ALPS 処理水の一部が蒸発して大気中に移行した場合の内部被ばく線量を合わせたとしても、その実効線量は  $1\mu\text{Sv}$  未満と評価されることから、耐震 C クラスと位置付けられる。

ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設は、耐震 C クラスの設備に要求される地震動に対して必要な強度を確保する。耐震性の評価においては、表-2 のとおり、原則、構築物（間接支持構造物含む）は 1.0Ci、機器は 1.2Ci の水平方向設計震度を適用する。また、主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては、原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601）等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態に合わせたものを採用する。なお、ALPS 処理水希釈放出設備に使用する耐圧ホース、ポリエチレン管等については、材料の可撓性により耐震性を確保する。

表-2 設備重要度による耐震クラス分類

設備	耐震クラス
	C
(1) 測定・確認用設備	測定・確認用タンク 基礎外周堰 <sup>※1</sup> 循環ポンプ 主配管 <sup>※2</sup>
(2) 移送設備	ALPS 処理水移送ポンプ 主配管 <sup>※2</sup>
(3) 希釈設備	海水移送ポンプ 海水配管ヘッド 主配管 <sup>※2</sup> 放水立坑（上流水槽） <sup>※3</sup>
(4) 放水設備 <sup>※3</sup>	放水立坑（下流水槽） 放水トンネル 放水口

※1：B クラスの構築物に要求される水平方向設計震度に対して評価を実施する

※2：鋼管（弁含む）について定ピッチスパン法で評価されるサポート間隔とする

※3：詳細は、添付資料-5 放水立坑（上流水槽）および放水設備の設計に関する説明書を参照

## 2. 構造強度評価の方法・結果

### 2.1 主配管（海水配管ヘッダ除く鋼管）

構造評価箇所を図-1～図-5に示す。

記号凡例

PE：ポリエチレン管  
ホース

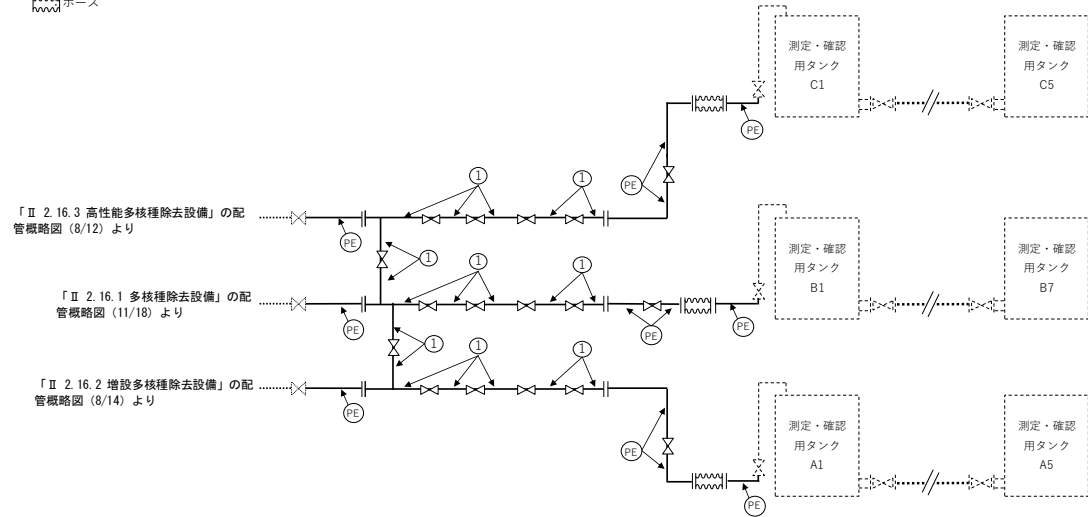


図-1 配管概略図 (1 / 5)

(測定・確認用設備)

記号凡例

- PE : ポリエチレン管
- E : 伸縮継手
- F : 流量計
- ホース

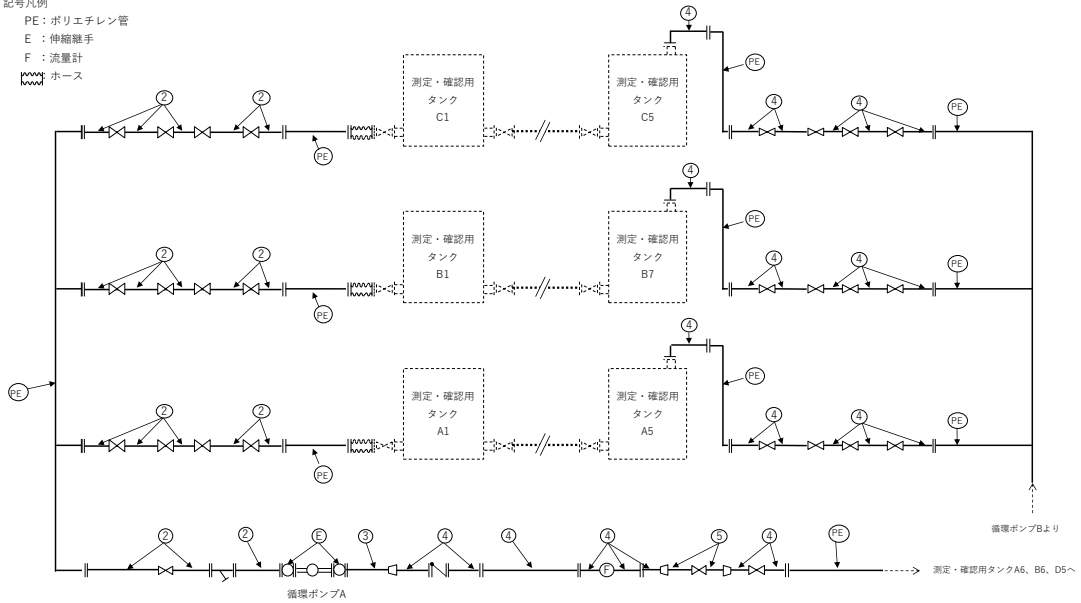


図-2 配管概略図 (2 / 5)

(測定・確認用設備)

記号凡例

- PE : ポリエチレン管
- E : 伸縮継手
- F : 流量計
- ホース

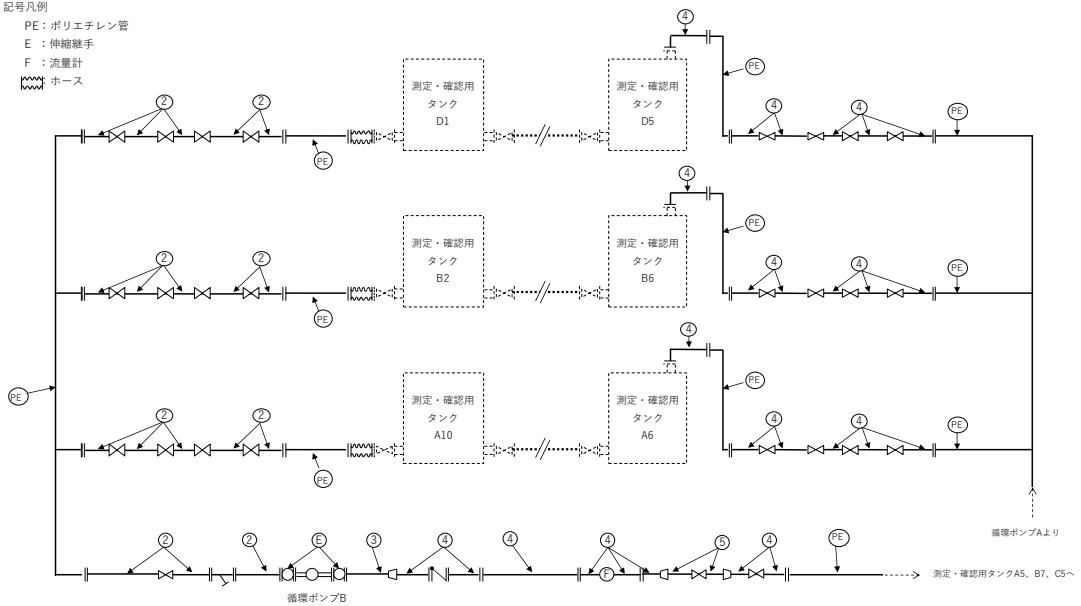



図-3 配管概略図 (3 / 5)

(測定・確認用設備)

記号凡例  
 PE : ポリエチレン管  
 E : 伸縮継手  
 F : 流量計  
 R : 放射線モニタ  
 : ホース

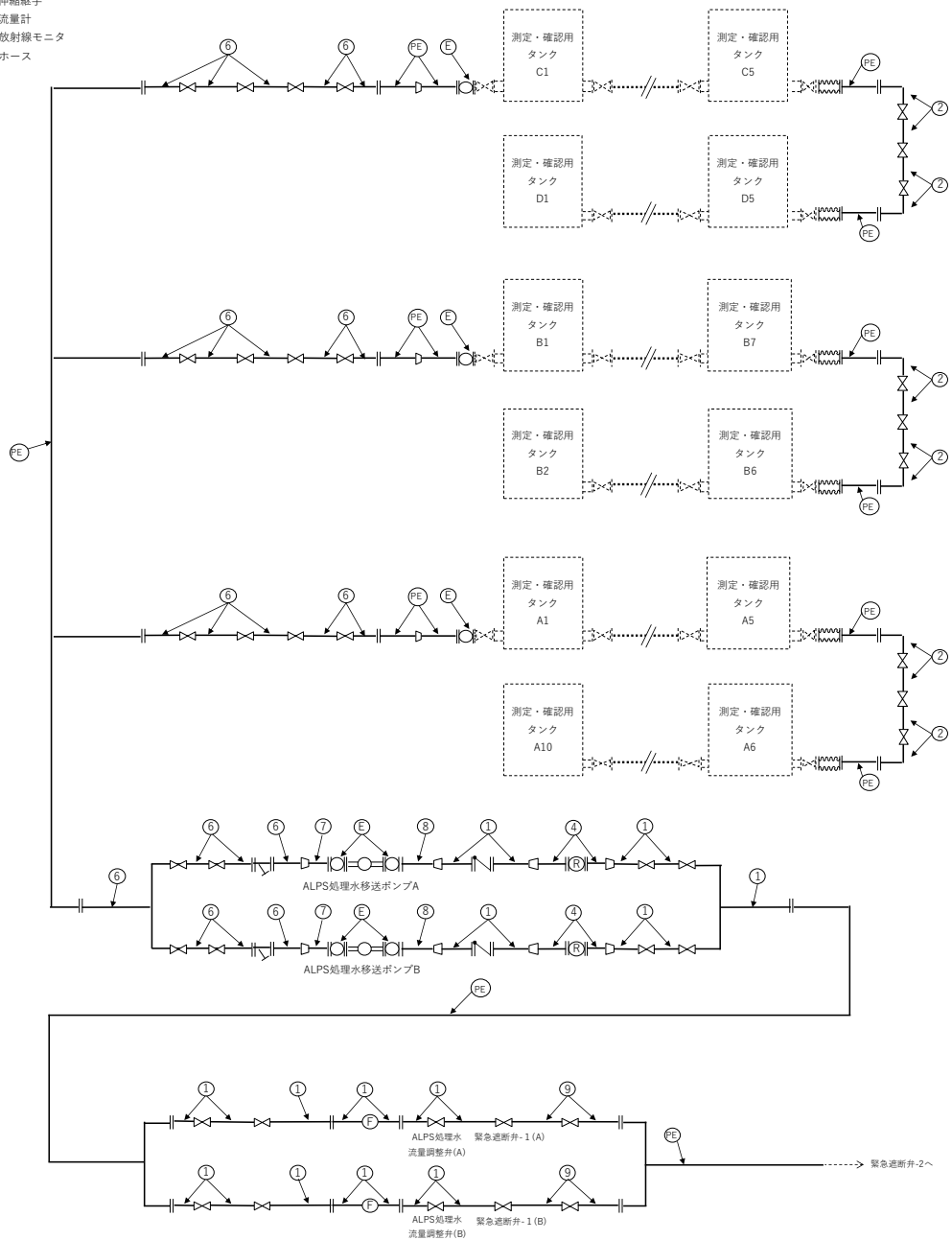


図-4 配管概略図 (4 / 5)  
 (移送設備)

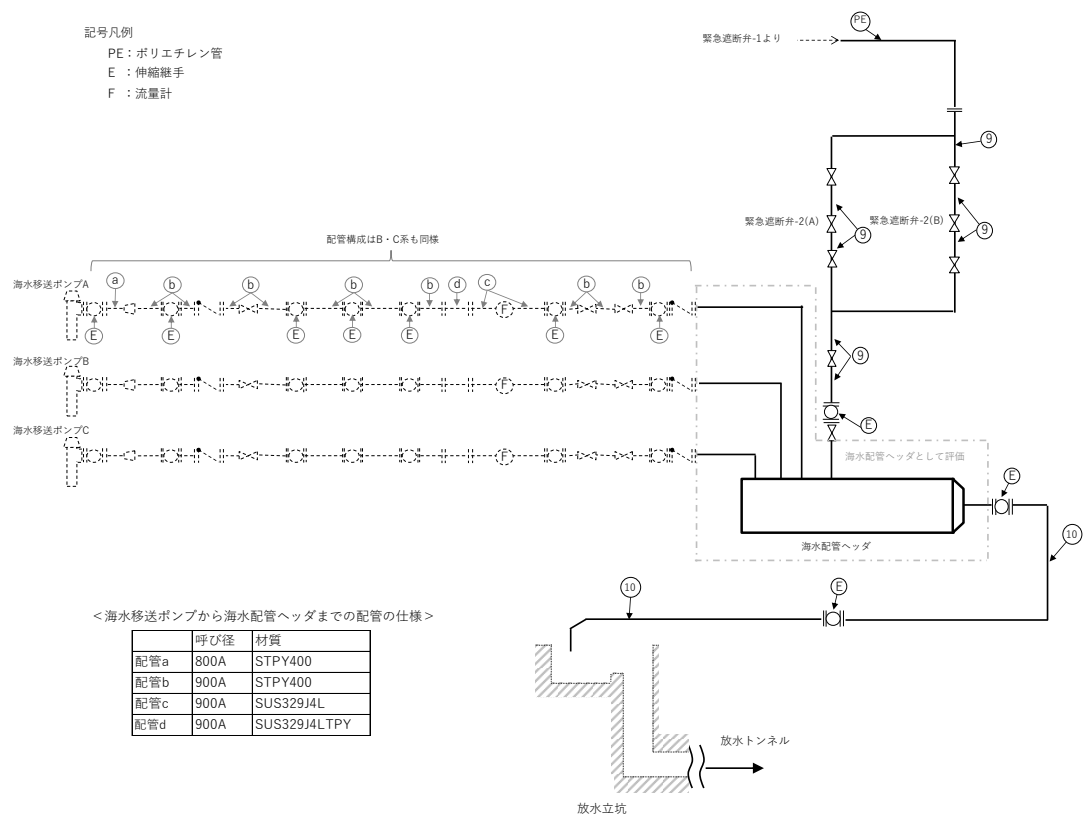


図-5 配管概略図 (5 / 5)  
(移送設備, 希釈設備)

## 2.2 評価方法

鋼管の最小厚さが設計・建設規格 PPD-3411 式 (PPD-1.3) または設計・建設規格 PPD-3411 (3) の表 PPD-3411-1 によって求められる必要厚さを満足することを確認する。

管の必要厚さは次に掲げる値のいずれか大きい方の値とする。

### a. 内面に圧力を受ける管

$$\text{管の計算上必要な厚さ} : t = \frac{PD_0}{2S\eta + 0.8P}$$

$P$  : 最高使用圧力 (MPa)

$D_0$  : 管の外径 (mm)

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 長手継手の効率

### b. 炭素鋼鋼管の設計・建設規格上必要な最小必要厚さ : $t_r$

設計・建設規格 PPD-3411 (3) の表 PPD-3411-1 より求めた値

## 2.3 評価結果

評価結果を表-3に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

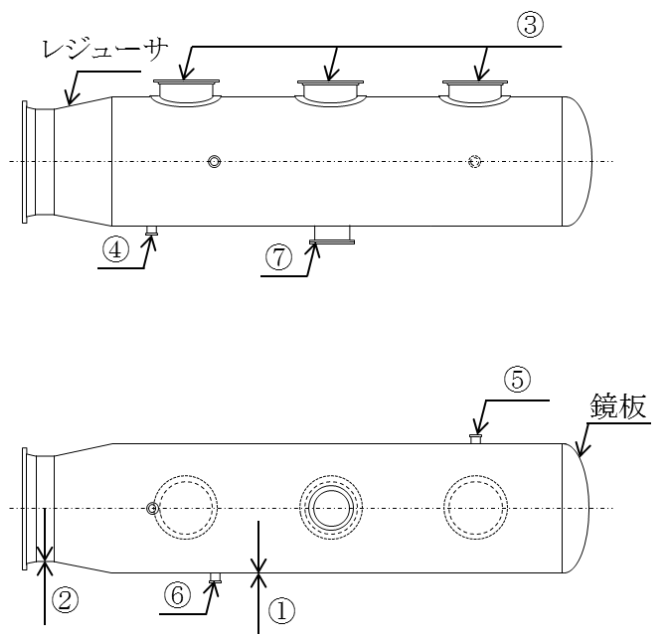
表-3 主配管（海水配管ヘッダ除く鋼管）の構造強度評価結果

評価機器	外径 (mm)	材質	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
配管①	114.3	SUS316LTP	0.98	40	0.48	3.50
配管②	216.3	SUS316LTP	0.49	40	0.46	5.68
配管③	139.8	SUS316LTP	0.98	40	0.59	4.37
配管④	165.2	SUS316LTP	0.98	40	0.69	4.37
配管⑤	216.3	SUS316LTP	0.98	40	0.91	5.68
配管⑥	165.2	SUS316LTP	0.49	40	0.35	4.37
配管⑦	89.1	SUS316LTP	0.49	40	0.19	3.50
配管⑧	48.6	SUS316LTP	0.98	40	0.21	2.50
配管⑨	114.3	SUS316LTP	0.60	40	0.30	3.50
配管⑩	1828.8	SM400B	0.60	40	9.11	14.20



3. 主配管（海水配管ヘッド）

構造強度評価箇所を図－6 に示す。



図－6 海水配管ヘッドの構造強度評価箇所

### 3.1 直管部

#### 3.1.1 構造強度評価方法

鋼管の最小厚さが設計・建設規格 PPD-3411 式(PPD-1.3)または設計・建設規格 PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 によって求められる必要厚さを満足することを確認する。

管の必要厚さは次に掲げる値のいずれか大きい方の値とする。

##### a. 内面に圧力を受ける管

$$\text{管の計算上必要な厚さ} : t = \frac{PD_0}{2S\eta + 0.8P}$$

$P$  : 最高使用圧力(MPa)

$D_0$  : 管の外径(mm)

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力(MPa)

$\eta$  : 長手継手の効率

##### b. 炭素鋼鋼管の設計・建設規格上必要な最小必要厚さ : $t_r$

設計・建設規格 PPD-3411(3)の表 PPD-3411-1 より求めた値

#### 3.1.2 構造強度評価結果

評価結果を表-4に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-4 海水配管ヘッダの直管部の構造強度評価結果

評価部位	外径(mm)	材質	最高使用圧力(MPa)	最高使用温度(°C)	必要厚さ(mm)	最小厚さ(mm)
①主管	2235.2	SM400B	0.60	40	11.14	14.20
②出口管	1828.8	SM400B	0.60	40	9.11	14.20
③海水ノズル管	914.4	SM400B	0.60	40	4.56	14.20
④ALPS処理水注入管	114.3	STPG370	0.60	40	3.40	5.25
⑤ベント管	114.3	STPG370	0.60	40	3.40	5.25
⑥ドレン管	114.3	STPG370	0.60	40	3.40	5.25
⑦点検用マンホール	609.6	SM400B	0.60	40	3.80	14.20

### 3.2 レジューサ

#### 3.2.1 構造強度評価方法

レジューサの最小厚さが設計・建設規格 PPD-3415.1 式(PPD-1.8 および PPD-1.9)によって求められる必要厚さを満足することを確認する。

レジューサの必要厚さは次に掲げる値のいずれか大きい方の値とする。

##### a. 円すいの部分

$$\text{計算上必要な厚さ: } t = \frac{PD_i}{2\cos\theta(S\eta - 0.6P)}$$

$P$  : 最高使用圧力 (MPa)

$D_i$  : 円すいの部分がすその丸みの部分に接続する部分の軸に垂直な断面の内径 (mm)

$\theta$  : 円すいの頂角の 2 分の 1 (度)

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 長手継手の効率

##### b. すその丸みの部分

$$\text{計算上必要な厚さ: } t = \frac{PD_iW}{4\cos\theta(S\eta - 0.1P)}$$

$$\text{ただし, } W = \frac{1}{4} \left( 3 + \sqrt{\frac{D_i}{2r\cos\theta}} \right)$$

$D_i$  : 円すいの部分がすその丸みの部分に接続する部分の軸に垂直な断面の内径 (mm)

$\theta$  : 円すいの頂角の 2 分の 1 (度)

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 長手継手の効率

$r$  : 円すいのすその丸みの部分の内半径 (mm)

### 3.2.2 構造強度評価結果

評価結果を表－5に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表－5 レジューサの構造強度評価結果

評価 機器	評価 部位	材質	最高使用 圧力(MPa)	最高使用 温度(°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
海水配管 ヘッド	レジューサ	SM400B	0.60	40	11.31	14.20

### 3.3 鏡板

海水配管ヘッドの鏡板の形状は設計・建設規格 PPD-3415.2(1)の条件より、さら形鏡板である。

#### 3.3.1 構造強度評価方法

海水配管ヘッドの鏡板の最小厚さが設計・建設規格 PPD-3415.2 式(PPD-1.12)によって求められる必要厚さを満足することを確認する。

鏡板の必要厚さは次に掲げる値とする。

$$\text{計算上必要な厚さ: } t = \frac{PRW}{2S\eta - 0.2P}$$

$$\text{ただし, } W = \frac{1}{4} \left( 3 + \sqrt{\frac{R}{r}} \right)$$

$P$  : 最高使用圧力(MPa)

$R$  : 鏡板の中央部の内半径 (mm)

$S$  : 最高使用温度における材料の許容引張応力(MPa)

$\eta$  : 長手継手の効率

$r$  : さら形鏡板のすみの丸みの内半径 (mm)

#### 3.3.2 構造強度評価結果

評価結果を表－6に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表－6 鏡板の構造強度評価結果

評価 機器	評価 部位	材質	最高使用 圧力(MPa)	最高使用 温度(°C)	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
海水配管ヘッド	鏡板	SM400B	0.60	40	10.19	13.40

### 3.4 穴の補強

#### 3.4.1 構造強度評価方法

海水配管ヘッドに設ける穴の補強の要否を設計・建設規格 PPD-3422 により評価し、穴の補強が必要な場合は、設計・建設規格 PPD-3424(1) によって求められる必要面積を満足することを確認する。

海水配管ヘッドに設ける穴は、設計・建設規格 PPD-3422 によって求められるいずれの穴径を超えるため、穴の補強計算を実施する。

- (1) 穴の径が 64mm 以下で、かつ、管の内径の 1/4 以下の穴径
- (2) (1) に掲げるものを除き、穴の径が 200mm 以下で、かつ、図 PPD-3422-1 および図 PPD-3422-2 により求めた  $d$  の値以下の穴径

補強が必要となった穴に関して補強に必要な面積に対して、補強に有効な総面積が満足していることを確認する。

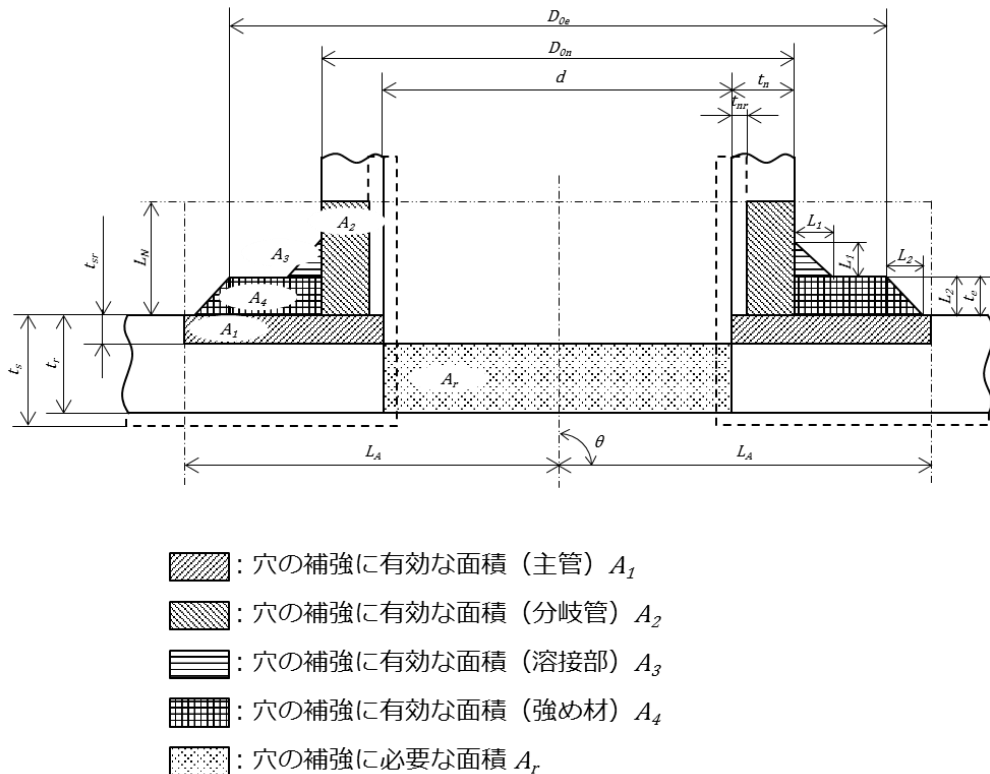


図-7 管台の取り付け形式

穴の補強に必要な面積： $A_r = 1.07 \cdot d \cdot t_{r3} \cdot (2 - \sin\theta)$

$d$  : 穴の径 (mm)

$t_{r3}$  : PPD-3411 の規定により必要とされる厚さ (mm)

$\theta$  : 分岐管の中心線と主管の中心線との交角 (度)

穴の補強に有効な総面積： $A_0 = A_1 + A_2 + A_3 + A_4$

穴の補強に有効な主管部の面積： $A_1 = (\eta \cdot t_s - F \cdot t_{sr}) \cdot (2 \cdot L_A - d)$

穴の補強に有効な管台部の面積： $A_2 = 2 \cdot (t_n - t_{nr}) \cdot \operatorname{cosec}\theta \cdot L_N \cdot \frac{S_n}{S_s}$

穴の補強に有効なすみ肉部の面積： $A_3 = (L_1)^2 \cdot \sin\theta \cdot \frac{S_e}{S_s}$

穴の補強に有効な強め材の面積： $A_4 = (D_{0e} - D_{0n} \cdot \operatorname{cosec}\theta) \cdot t_e \cdot \frac{S_e}{S_s} + (L_2)^2 \cdot \frac{S_e}{S_s}$

$\eta$  : 継手の効率

$t_s$  : 主管の厚さ (mm)

$t_{sr}$  : 主管の計算上必要な厚さ (mm)

$t_n$  : 管台の厚さ (mm)

$t_{nr}$  : 管台の計算上必要な厚さ (mm)

$t_e$  : 強め材の最小厚さ (mm)

$L_A$  : 穴の中心線に平行な直線で区切られる補強に有効な範囲 (mm)

$L_N$  : 主管の面に平行な線に区切られる補強に有効な範囲 (mm)

$S_n$  : 管台の材料の最高使用温度における許容引張応力 (MPa)

$S_s$  : 主管の材料の最高使用温度における許容引張応力 (MPa)

$S_e$  : 強め材の材料の最高使用温度における許容引張応力 (MPa)

$L_1$  : 管台のすみ肉部の脚長又は管台補強部の短辺長さ (mm)

$L_2$  : 強め材のすみ肉部の脚長 (mm)

$D_{0n}$  : 管台の外径 (mm)

$D_{0e}$  : 強め材の外径 (mm)

$d$  : 断面に現れる穴の径 (mm)

$\theta$  : 分岐管の中心線と主管の中心線との交角 (度)

$F$  : 図 PPD-3424-1 により求めた値

### 3.4.2 構造強度評価結果

評価結果を表-7に示す。補強に有効な総面積が必要な面積を満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-7 穴の補強の構造強度評価結果

評価機器	評価部位	管台口径	評価部位	Ar (mm <sup>2</sup> )	A <sub>0</sub> (mm <sup>2</sup> )
海水配管 ヘッド	③海水ノズル管	900A	管台	$6.35 \times 10^3$	$1.33 \times 10^4$
	④ALPS 処理水注入管	100A	管台	$7.44 \times 10^2$	$2.47 \times 10^3$
	⑤ベント管	100A	管台	$7.44 \times 10^2$	$2.47 \times 10^3$
	⑥ドレン管	100A	管台	$7.44 \times 10^2$	$2.47 \times 10^3$
	⑦点検用マンホール	600A	管台	$4.17 \times 10^3$	$8.35 \times 10^3$

### 3.5 強め材の取り付け強さ

#### 3.5.1 構造強度評価方法

設計・建設規格 PPD-3424(8)によって求めた溶接部の負うべき荷重を評価し、溶接部の強度が十分であることを確認する。

$$\text{溶接部の負うべき荷重} : W = d \cdot t_{sr} \cdot S_s - (\eta \cdot t_s - F \cdot t_{sr}) \cdot (2 \cdot L_A - d) \cdot S_s$$

$d$  : 断面に現れる穴の径 (mm)

$t_s$  : 主管の厚さ (mm)

$t_{sr}$  : 主管の計算上必要な厚さ (mm)

$S_s$  : 主管の材料の最高使用温度における許容引張応力 (MPa)

$\eta$  : 継手の効率

$F$  : 図 PPD-3424-1 により求めた値

$L_A$  : 穴の中心線に平行な直線で区切られる補強に有効な範囲 (mm)

#### 3.5.2 構造強度評価結果

評価結果を表-8に示す。溶接部の負うべき荷重が0以下であることから、溶接部の強度は十分であると評価している。

表-8 強め材の取り付け強さの構造強度評価結果

評価機器	評価部位	管台口径	評価部位	W (N)
海水配管 ヘッダ	③海水ノズル管	900A	管台	$-7.26 \times 10^4$
	④ALPS 処理水注入管	100A	管台	$-8.51 \times 10^3$
	⑤ベント管	100A	管台	$-8.51 \times 10^3$
	⑥ドレン管	100A	管台	$-8.51 \times 10^3$
	⑦点検用マンホール	600A	管台	$-4.76 \times 10^4$



#### 4. 耐震クラス分類に関する考え方

ALPS 処理水希釈放出設備は、その安全機能が喪失した場合における公衆への放射線影響を評価した結果、直接線・スカイシャイン線による外部被ばく線量と、漏えいした ALPS 処理水の一部が蒸発して大気中に移行した場合の内部被ばく線量を合わせたとしても、その実効線量は  $1\mu\text{Sv}$  未満であることから、耐震 C クラスと位置付けられる。

##### 4.1 機能喪失による公衆への放射線影響の程度について

ALPS 処理水希釈放出設備の測定・確認用タンクについて、機能喪失による公衆への放射線影響を確認するため、線量評価を実施した。評価条件については、「II 2.5 汚染水処理設備等」添付資料-11 別紙-7 に記載の評価条件に準じ、多核種処理済水の分析結果（平成 25 年 7 月）をタンク内保有水の放射能濃度として設定する\*。

※：測定・確認用タンクにトリチウム以外の放射性核種の告示濃度比総和 1 以上の水が混水することを防止するために、以下の設計、運用上の対策を行う。

- ・測定・確認用タンクへの移送に使用する配管は、多核種除去設備等の移送配管であり、配管構成上、Sr 処理水等が混水する可能性はない。
- ・多核種除去設備等の移送配管を使用し、至近に移送を行った G1 エリアタンクの放射能濃度は、トリチウム以外の放射性核種\*の告示濃度比総和が 1 未満であることを確認している。
- ・ALPS 処理水希釈放出設備の測定・確認用タンクには、多核種除去設備等のサンプルタンク、または多核種処理水貯槽にてトリチウム以外の放射性核種\*の告示濃度比総和が 1 未満であることを確認または評価した水の移送を行う。

※：Cs-134, Cs-137, Sr-90, Co-60, Sb-125, Ru-106, I-129 の 7 核種

##### 4.1.1 漏えい水の直接線・スカイシャイン線による被ばく評価

地震によるタンクの滑動等により連結管等が損傷し、測定・確認用タンクの貯留水全てがタンク外に漏えいしたことを想定する。タンク群と体積・高さが同じとなる 1 つの大型円柱形上で存在し続けると仮定した場合、最寄りの線量評価点 (No. 70) における直接線・スカイシャイン線による被ばく量は  $1\mu\text{Sv/y}$  未満であり、公衆への放射線影響は殆ど無い。

##### 4.1.2 漏えい水の気中移行による被ばく評価

地震によるタンクの滑動等により連結管等が損傷し、測定・確認用タンクの基礎外周堰の貯留可能面積全域に漏えい水が広がり、トリチウムを含む漏えい水から蒸発した水蒸気が拡散したことを想定する。漏えい水の回収に 2 週間を要したと仮定した場合の、最寄り線量評価点 (No. 70) に居住する住民が呼吸により摂取したトリチウムによる内部被ばく量は  $1\mu\text{Sv}$  未満であり、公衆への放射線影響は殆ど無い。

#### 4.2 機動的対応等の影響を緩和する措置について

ALPS 処理水希釈放出設備の測定・確認用タンクは、可撓性のある連結管にてタンク間を連結し、連結弁は基本的に開として運用を行う。地震により ALPS 処理水希釈放出設備から ALPS 処理水が漏えいするおそれがある場合又は漏えいした場合を想定し、漏えいの拡大による敷地外への影響を防止又は緩和するため、以下の対策を講じる。

- ・震度 5 弱以上の地震発生時、免震重要棟集中監視室からの遠隔操作により海洋放出を停止するとともに、測定・確認用設備の出口側電動弁を閉とし、タンク水位による漏えい確認を実施するとともに、屋外の ALPS 処理水移送配管を含む全ての設備の重点パトロールを行い、設備の異常の有無を確認する。
- ・地震により耐震 C クラスのタンク等が損傷し、貯留水が敷地外へ著しく漏えいすることを防止するために基礎外周堰を設置する。当該堰については、B クラスの構築物に要求される水平方向設計震度に対して、必要な強度を確保する。
- ・貯留水が漏えいし、基礎外周堰内に滞った場合には、仮設ポンプ、高圧吸引車等にて漏えい水の回収を行う。回収した漏えい水は、健全なタンク、建屋に排水を行う。
- ・ALPS 処理水の移送配管については、排水路から可能な限り離隔するとともに、移送配管に使用するポリエチレン管は、ポリエチレン管の外側に外装管（接合部は防水カバー）を取り付けることで、漏えい拡大を防止する施工を行う。

以上

## ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設に係る確認事項

ALPS 処理水希釈放出設備及び関連施設に係る主要な確認事項を表－ 1 ～ 7 に示す。

表－ 1 確認事項（循環ポンプ，ALPS 処理水移送ポンプ，攪拌機器，海水移送ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
	漏えい確認 <sup>※1</sup>	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	耐圧部から著しい漏えいがないこと。

※1：攪拌機器については、測定・確認用タンクの水中に設置されるプロペラ羽の回転機器であり、漏えい確認部位が無いことから対象外とする。

海水移送ポンプについては、現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表-2-1 確認事項（主配管（鋼管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径，厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
	耐圧・漏えい確認※1	最高使用圧力の 1.25 倍で一定時間保持後，同圧力に耐えていること，また，耐圧部からの漏えいがないことを確認する。	最高使用圧力の 1.25 倍に耐え，かつ異常のないこと。また，耐圧部から漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて品質記録を確認する。

表-2-2 確認事項（主配管（ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 <sup>※1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 <sup>※1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
	耐圧・漏えい確認 <sup>※1</sup>	製品の最高使用圧力以上で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを確認する。	製品の最高使用圧力に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表-2-3 確認事項（主配管（耐圧ホース））

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認 <sup>※1</sup>	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認 <sup>※1</sup>	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
	耐圧・漏えい確認 <sup>※1</sup>	最高使用圧力の 1.25 倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、耐圧確認終了後、耐圧部分からの漏えいの有無も確認する。	最高使用圧力の 1.25 倍に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表-2-4 確認事項（主配管（伸縮継手））

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
	耐圧・漏えい確認※1	最高使用圧力の 1.25 倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを確認する。	最高使用圧力の 1.25 倍に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表-3-1 確認事項（漏えい検出装置及び警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
機能	漏えい警報確認	漏えいの信号により警報が発生することを確認する。	漏えいの信号により警報が発生すること。

表-3-2 確認事項（ALPS 処理水流量計，海水流量計）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
性能	性能校正確認	基準入力に対して流量計の指示値が正しいことを確認する。	流量計指示値が許容範囲内であること。



表-3-3 確認事項（放射線モニタ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付けられていること。
機能	警報確認	レベル「高」※1の信号により警報が発生することを確認する。	レベル「高」※1の信号により警報が発生すること。
性能	線源校正確認	標準線源を用いて基準計数率を測定する。	基準計数率に対する測定値が許容範囲内であること。
	校正確認	基準入力に対して放射線モニタの指示値が正しいことを確認する。	放射線モニタ指示値が許容範囲内であること。

※1：放射線モニタにより信号名称は異なる。

表-4-1 確認事項（測定・確認用タンク）※1

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度・耐震性	材料確認	使用材料を材料証明書により確認する。連結管・連結弁については、納品記録、製品仕様にて確認する。	実施計画に記載の材料が使用されていること。連結管及び連結弁は製品仕様（最高使用圧力）がタンクの水頭圧以上であること。
	寸法確認	主要寸法（板厚，内径，高さ）を確認する。	実施計画の記載とおりのこと。
	外観確認	タンク本体（塗装状態含む），連結管・連結弁の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	組立状態及び据付状態を確認する。	組立状態及び据付状態に異常がないこと。
		タンク基礎の不陸について確認する。	異常な不陸がないこと。
	耐圧・漏えい確認	設計・建設規格に基づき耐圧・漏えい試験を行う。	各部からの有意な漏えいおよび水位の低下がないこと。
	地盤支持力確認	支持力試験にてタンク基礎の地盤支持力を確認する。	必要な支持力を有していること。
機能・性能	警報確認	液位「高高」側※2の信号により警報が発生することを確認する。	液位「高高」側※2の信号により警報が発生すること。
	寸法確認※3	基礎外周堰の堰内容量を確認する。	必要容量に相当する堰内容量があること。
	外観確認	基礎外周堰の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	貯留機能	漏えいなく貯留できることを確認する。	タンク及び附属設備（連結管，連結弁，マンホール，ドレン弁）に漏えいがないこと。

※1：「Ⅱ 2.5 汚染水処理設備等」（使用前検査終了済み）と兼用するため，過去の記録を確認する。

※2：タンクにより信号名称は異なる。

※3：「Ⅱ 2.5 添付資料-11 別紙-6 表-2」の設置場所：K4に記載の堰内容量を確認する。

表-4-2 確認事項（測定・確認用タンク入口配管（鋼管））※<sup>1</sup>

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画の記載とおりにあること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画の記載とおりにあること。
	外観確認	各部の外観について、立会いまたは記録により確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器が図面のおりに据付していることを立会いまたは記録により確認する。	図面のおりに施工・据付していること。
	耐圧・ 漏えい確認 <small>注1</small>	通水確認	①最高使用圧力の1.5倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。
②運転圧力で耐圧部からの漏えいのないことを立会いまたは記録により確認する。 ※ <sup>2</sup>			耐圧部から漏えいがないこと。
機能・性能	通水確認	通水ができることを確認する。	通水ができること。

※<sup>1</sup>：「II 2.5 汚染水処理設備等」（使用前検査終了済み）と兼用するため、過去の記録を確認する。

※<sup>2</sup>：運転圧力による耐圧部の漏えい検査が実施できない配管フランジ部については、トルク確認等の代替検査を実施する。

注1：耐圧漏えい確認は、①②のいずれかとする。

表－5 確認事項（放水立坑（上流水槽））

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した材料について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法（内空）を確認し、必要容積を確保していることを確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※1	外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付・組立確認	部材が図面のとおり据付・組立られていることを立会いまたは記録により確認する。	図面のとおり据付・組立られていること。
	耐圧確認	水槽内の水位を一定時間保持後、圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを立会いまたは記録により確認する。	水圧に耐え、かつ構造物の変形がないこと。また、耐圧部から漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表－6 確認事項（放水立坑（下流水槽）、放水トンネル、放水口）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した材料について、材料証明書または納品書により確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した部材の寸法および主要寸法（内空）を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※1	外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付・組立確認※2	部材が図面のとおり据付・組立られていることを立会いまたは記録により確認する。	図面のとおり据付・組立られていること。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

また、施工途中に放水トンネル内部に海水を充水することから、現地では実施可能な範囲とする。

※2：放水口は、沿岸から1kmの地点に据え付けられていることを記録（位置情報）により確認する。

表－7－1 確認事項（測定・確認用設備）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能・性能	攪拌運転確認	攪拌機器を起動し、タンク内を攪拌していることを確認する。	攪拌機器運転時にタンク水面に水流が発生していること。 電流値が適正範囲内であること。
機能・性能	通水・流量確認 <sup>※1</sup>	循環ポンプを起動し、通水できることを確認する。	ポンプについては、140m <sup>3</sup> /h <sup>※2</sup> 以上であること。また、異音、異臭、異常振動等がないこと。 配管については、通水できること。

※1：受入配管は、単品での通水確認，据付前の配管内の異物確認並びに締結部のトルク確認にて異常がないことを確認する。

※2：循環攪拌実証試験の実績より設定。

表－7－2 確認事項（移送設備）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能・性能	緊急遮断確認	入力信号に対して緊急遮断弁が動作することを確認する。	動作信号により、緊急遮断弁が動作すること。
機能・性能	通水・流量確認 <sup>※1</sup>	ALPS 処理水移送ポンプを起動し、流量調整弁を動作させ、通水できることを確認する。	設定した流量 <sup>※2</sup> で制御出来ていること。 ポンプについては、異音、異臭、異常振動等がないこと。 配管については、通水できること。

※1：ALPS 処理水移送ポンプの運転時に通水が確認できない配管は、単品での通水確認，据付前の配管内の異物確認並びに締結部のトルク確認にて異常がないことを確認する。

※2：ALPS 処理水流量は可変であるため、最大19m<sup>3</sup>/h以内で設定する。

表-7-3 確認事項（希釈設備，放水設備）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能・性能	通水・流量確認	海水移送ポンプを起動し，通水できることを確認する。	ポンプについては，実施計画に記載した容量以上であること。また，異音，異臭，異常振動等がないこと。 配管，放水立坑（上流水槽），放水設備については，通水できること。

別紙-1 測定・確認用タンクの基本仕様

別紙-2 ALPS 処理水希釈放出設備の漏えい検出装置の設置位置

以上

## 測定・確認用タンクの基本仕様

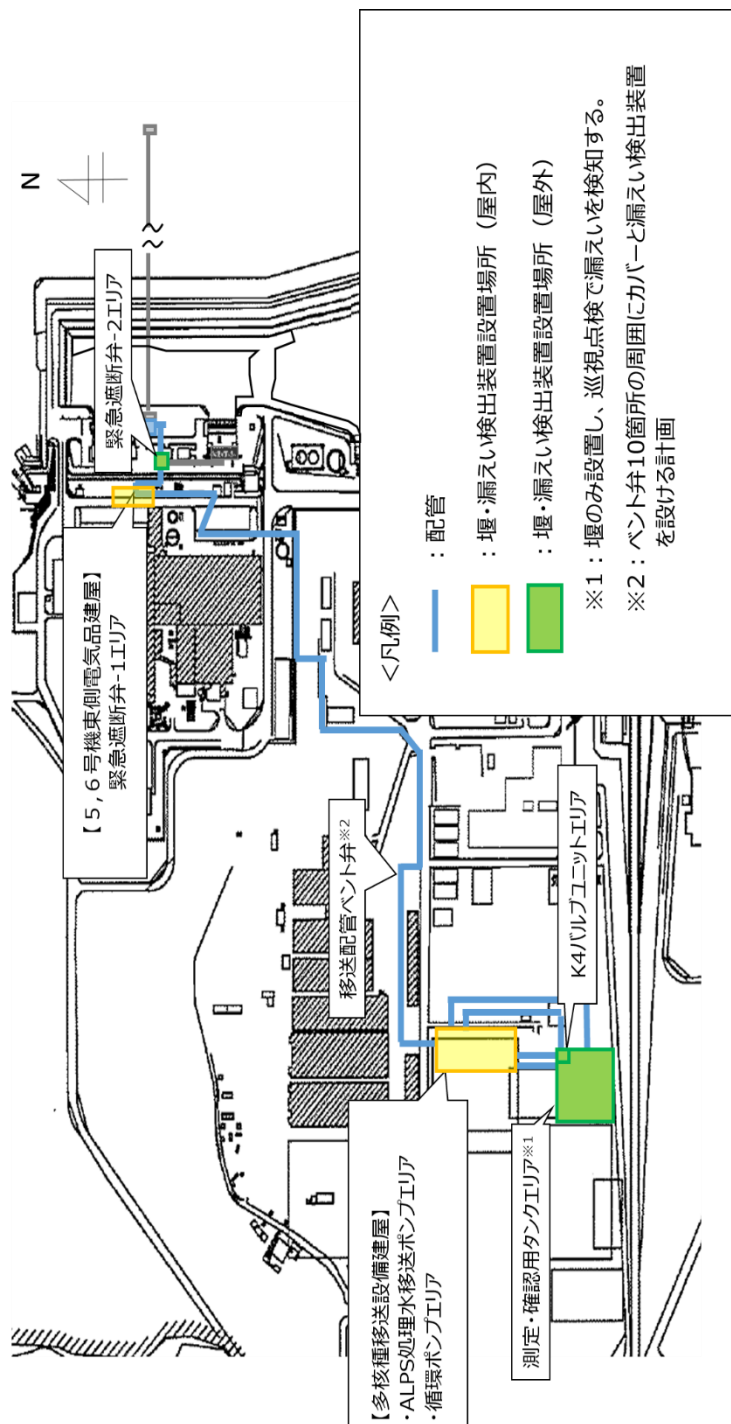
## 測定・確認用タンク

タンク容量		m <sup>3</sup>	1,000
主要寸法	内 径	mm	10,000
	胴板厚さ	mm	15
	底板厚さ	mm	25
	高 さ	mm	14,565
管台厚さ	100A	mm	8.6
	200A	mm	12.7
	600A	mm	16.0
材料	胴板・底板	—	SS400
	管台	—	STPT410, SS400

	連結管（耐圧ホース（完成品））	連結弁（完成品）
呼 び 径	200A 相当	200A 相当
材 質	EPDM 合成ゴム	FCD450-10
最高使用圧力	1.0MPa	1.0MPa
最高使用温度	50℃	50℃

	入口配管（鋼管）
厚 さ	8.6mm（100A）
材 質	STPT410
最高使用圧力	1.0MPa
最高使用温度	50℃





ALPS 処理水希釈放設備の漏えい検出装置の設置位置

### 1.3 地震及び津波への対応

#### 1.3.1 地震への対応

##### 1.3.1.1 機器の対応

原子炉圧力容器・格納容器注水設備，原子炉格納容器内室素封入設備，使用済燃料プール設備，原子炉圧力容器・格納容器ホウ酸水注入設備，汚染水処理設備等及び電気系統設備は，地震により想定されるリスクを評価しており，機能喪失時の代替手段を定めている。

##### 1.3.1.2 建屋の対応

対象設備は，燃料を内包する建屋（1～6号機原子炉建屋，運用補助共用施設共用プール棟）及び地下に滞留水を貯留する建屋（1～4号機原子炉建屋，1～4号機タービン建屋，1～4号機廃棄物処理建屋，1～4号機コントロール建屋，プロセス主建屋，高温焼却炉建屋）とする。

#### (1) 1～6号機原子炉建屋

1～6号機原子炉建屋の損傷状況や温度上昇等を考慮した，基準地震動 $S_s$ による耐震安全性評価を実施し，耐震壁及び使用済燃料プール躯体が終局状態に至らないことを確認している。<sup>\*1</sup>

- ※ 1: 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書(その1)  
(東京電力株式会社，平成23年5月28日)
- 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書(その1)  
(追補版)(改訂2)(東京電力株式会社，平成24年12月25日)
- 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書(その2)  
(東京電力株式会社，平成23年7月13日)
- 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書(その3)  
(東京電力株式会社，平成23年8月26日)
- 福島第一原子力発電所1～4号機本館建物の基準地震動 $S_s$ に対する耐震安全性評価について(東京電力株式会社，平成25年2月21日，特定原子力施設監視・評価検討会(第4回)資料5-1)

#### (2) 運用補助共用施設共用プール棟

運用補助共用施設共用プール棟の耐震壁および使用済燃料共用プール躯体について，基準地震動 $S_s$ による耐震安全性評価を実施し，問題ないことを確認している(Ⅱ.2.12 参照)。

#### (3) プロセス主建屋及び高温焼却炉建屋

プロセス主建屋及び高温焼却炉建屋について，基準地震動 $S_s$ に対する地下滞留水を考慮した地震応答解析を実施し，地下外壁のせん断ひずみが弾性範囲内であることを確認している。<sup>\*2, 3</sup>

※2：プロセス主建屋への移送に関する報告書（東京電力株式会社，平成23年4月18日）

※3：プロセス主建屋及び雑固体廃棄物減容処理建屋（以下，高温焼却炉建屋）への移送に関する報告書（東京電力株式会社，平成23年5月15日）

(4) 地下に滞留水を貯留する1～4号機原子炉建屋，1～4号機タービン建屋，1～4号機廃棄物処理建屋及び1～4号機コントロール建屋

1～4号機原子炉建屋について，基準地震動 $S_s$ に対する地下滞留水を考慮した地震応答解析を実施し，地下外壁が終局状態に至らないことを確認している（1～3号機についてはⅡ.2.6，4号機については添付資料-3参照）。

また，1～4号機タービン建屋，1～4号機廃棄物処理建屋及び1～4号機コントロール建屋について，それぞれ代表号機を選定した上で，基準地震動 $S_s$ に対する地下滞留水を考慮した地震応答解析を実施し，地下外壁が終局状態にいたらないことを確認している。また，代表号機以外については，代表号機の評価結果を踏まえ，建屋の類似性等を考慮して，耐震安全性を評価し，問題ないことを確認している。ここで，代表号機は滞留水の容量が最大の号機とする。（Ⅱ.2.6参照）

(5) 1～4号機原子炉建屋の点検について

1～4号機原子炉建屋について，作業安全性が確認された時点で，点検を実施する。

4号機原子炉建屋の点検は，使用済燃料プールと原子炉ウエルの水位測定，ひび割れ調査，建屋の垂直性の確認，コンクリートの強度確認を行う。このうち，使用済燃料プールと原子炉ウエルの水位測定とひび割れ調査は4回/年，建屋の垂直性の確認とコンクリートの強度確認は1回/年，プール燃料取り出し完了まで実施する。なお，プール燃料取り出し完了後は，建物耐久性維持の観点から必要な点検を実施する。

放射線量が高く，建屋内への進入が困難である1～3号機原子炉建屋については，遠隔操作装置等による点検手法を検討の上，点検を実施する。

### 1.3.1.3 その他の対応

#### (1) 1/2号機共用排気筒の解体について

1/2号機共用排気筒は，震災後の点検で一部の部材に損傷が確認されたことから，耐震上の裕度を向上させるため，排気筒の上部を解体する。

### 1.3.2 津波への対応

#### 1.3.2.1 アウターライズ津波を想定した対応

過去に福島沖のアウターライズで大規模な地震・津波が発生したことは知られていないものの，東北地方太平洋沖地震の影響によってアウターライズにおける地震の発生が専門家によって指摘されていることから（L a y e t a l.（2011）等），福島沖のア

ウターライズにおける地震に伴う津波を想定する。

津波の評価にあたって想定する地震規模については、日本海溝でのアウターライズ地震の既往最大規模は1933年昭和三陸地震（ $M_w$  8.4）であるが、ここでは、より安全側の評価としてプレート境界で発生した地震ではあるものの、三陸沖で過去に発生した最大規模の地震として1611年慶長三陸地震の地震規模 $M_w$  8.6を採用する。

また、評価にあたっては、波源の断層パラメータの不確かさを考慮することとし、断層の位置、走向を変化させ、発電所の津波高さが最大となる場合を想定する。

上記解析の結果、発電所港湾内から敷地（1～4号機側T. P. 約+8.5 m, 5・6号機側T. P. +約11.5 m）への遡上は確認されないものの、敷地南東側から1～4号機側敷地（T. P. +約8.5 m）への遡上が確認された。このため、敷地の南東部に仮設防潮堤を設置することとし、これをモデル化した数値解析を実施した。その結果、仮設防潮堤により敷地への遡上を防ぐことができることを確認したことから、敷地の南東部に仮設防潮堤を設置した。（添付資料-1）

### 1.3.2.2 アウターライズ津波を超える津波を想定した対応

#### (1) 機器の対応

原子炉压力容器・格納容器注水設備、原子炉格納容器内窒素封入設備、使用済燃料プール設備、原子炉压力容器・格納容器ホウ酸水注入設備、汚染水処理設備等及び電気系統設備は、津波により想定されるリスクを評価しており、機能喪失時の代替手段を定めている。

また、5・6号機については、津波により想定されるリスクを評価しており、機能喪失時の代替手段を定めている。

#### (2) 建屋の対応

対象設備は、燃料を内包する建屋（1～4号機原子炉建屋、運用補助共用施設共用プール棟）及び地下に滞留水を貯留する建屋（1～4号機原子炉建屋、1～4号機タービン建屋、1～4号機廃棄物処理建屋、1～4号機コントロール建屋、プロセス主建屋、高温焼却炉建屋）とする。

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による津波に対し、1～4号機原子炉建屋、1～4号機タービン建屋、1～4号機廃棄物処理建屋、1～4号機コントロール建屋、運用補助共用施設共用プール棟、プロセス主建屋及び高温焼却炉建屋について、津波による外壁や柱等の構造躯体に有意な損傷は確認されていない。

なお、地下に汚染水が貯留する建屋について、現場の状況等を勘案し、津波襲来時の地下からの汚染水流出防止を目的に、建屋開口部の閉塞等、低減対策を実施していく。

また、5・6号機については、平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による津波に対し、5・6号機原子炉建屋、5・6号機タービン建屋、5・6号機廃棄物処理建屋、5・6号機コントロール建屋について、津波による外壁や柱等の構造躯体に有

意な損傷は確認されていない。

### 1.3.2.3 今後の対応

原子力発電所で想定すべき津波については，東北地方太平洋沖地震を踏まえ，現在国によって検討が行われており，これら状況を注視しつつ必要に応じて今後の津波に対する安全性評価及び対策へ反映していく。

### 1.3.3 添付資料

- 添付資料－1 アウターライズ津波を想定した対策
- 添付資料－2 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その1）（東京電力株式会社，平成23年5月28日）
- 添付資料－3 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その1）（追補版）（改訂2）（東京電力株式会社，平成24年12月25日）
- 添付資料－4 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その2）（東京電力株式会社，平成23年7月13日）
- 添付資料－5 福島第一原子力発電所の原子炉建屋の現状の耐震安全性及び補強等に関する検討に係る報告書（その3）（東京電力株式会社，平成23年8月26日）
- 添付資料－6 福島第一原子力発電所1～4号機本館建物の基準地震動 $S_s$ に対する耐震安全性評価について（東京電力株式会社，平成25年2月21日，特定原子力施設監視・評価検討会（第4回）資料5－1）
- 添付資料－7 福島第一原子力発電所4号機原子炉建屋健全性確認のための定期点検頻度の見直しについて（東京電力株式会社，平成26年5月2日，特定原子力施設監視・評価検討会（第21回）参考6）

## 6 特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る補足説明

### 6.1 目的

福島第一原子力発電所においては最新の「東京電力（株）福島第一原子力発電所の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」、「東京電力福島第一原子力発電所の中期的リスクの低減目標マップ」に沿って、福島第一原子力発電所内に存在しているリスクの低減に取り組んでいる。

実施計画に必要な機能を有しない設備・機器（震災前から設置されている設備・機器を含む）の解体撤去（以下、解体撤去）は、福島第一原子力発電所全体のリスク低減対策を行うにあたり、今後の廃炉作業に必要な施設や設備の設置エリアの確保や廃炉作業に係る作業干渉の未然防止の為、安全確保を最優先に遅滞なく実施する必要がある。

本実施計画では、環境への放射性物質の放出抑制対策、汚染状況の調査結果等を踏まえた放射性物質の拡散防止対策、放射線業務従事者の被ばく低減対策等、解体撤去を実施するにあたっての共通的な対策を定め、この対策を遵守し解体撤去を実施していく。

なお、解体撤去を実施していく中で新たに確認された対策は、必要に応じて実施計画に反映する。

### 6.2 基本方針

#### 6.2.1 基本方針

解体撤去を実施するにあたっては、設備・機器の仕様や現場環境が多様であることから、作業毎に設備・機器の仕様や現場環境に適した工具・装置・工法を適用する必要がある、要求される安全対策についても様々である。

そのため、「I 特定原子力施設の全体工程及びリスク評価 2.1 評価の考え方」に基づき解体撤去における安全対策を整理し、共通的な対策を定める。

#### 【解体撤去における安全対策】

- ・ 解体撤去に伴う事前調査及び事前確認
- ・ 漏えい防止対策
- ・ 汚染拡大防止対策
- ・ 落下防止対策
- ・ 飛散拡散防止対策
- ・ 被ばく低減対策

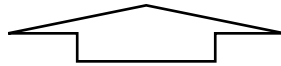
**【大目標】**

特定原子力施設から敷地外への放射性物質の影響を極力低減させ、事故前のレベルとする

**【大目標達成のための中目標】**

- 1) プラントの安定状態を維持しながら、廃止措置をできるだけ早期に完了させる
- 2) 敷地外の安全を図る（公衆への被ばく影響の低減）
- 3) 敷地内の安全を図る（作業員への被ばく影響の低減）

上記「I 特定原子力施設の全体工程及びリスク評価 2.1 評価の考え方」抜粋



**【中目標達成のための、解体撤去における安全対策】**

1) プラントの安定状態を維持しながら、廃止措置をできるだけ早期に完了させる

- ・ 解体撤去に伴う事前調査及び事前確認

2) 敷地外の安全を図る（公衆への被ばく影響の低減）

- ・ 漏えい防止対策
- ・ 汚染拡大防止対策
- ・ 落下防止対策
- ・ 飛散拡散防止対策

3) 敷地内の安全を図る（作業員への被ばく影響の低減）

- ・ 被ばく低減対策

6.2.2 解体撤去における共通的な対策の整理・策定

解体撤去にあたる具体的な各安全対策の共通的な対策の整理・策定については、これまでの解体作業等の実績も踏まえ、以下の考えより実施した。

- ① これまでの解体撤去における対策の抽出
- ② 上記①で抽出した対策のうち、特殊な工法を採用した作業を除き、一般的な工法を採用した解体撤去における対策を抽出

### 6.3 解体撤去における共通的な対策

#### 6.3.1 解体撤去に伴う事前調査及び事前確認

解体撤去に伴い、撤去作業周辺の稼働中の設備を損傷させないために、事前に図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じて適切な措置を講じる。以下の具体的な対策を実施する。

##### ➤ 解体撤去に伴う事前調査及び事前確認

- ・ 稼働中の周辺設備に影響を与えないことを図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じた防護措置を計画する。
- ・ 事前調査及び事前確認を踏まえ、作業計画を立てるとともに、現場環境に適した工具・装置・工法を採用する。
- ・ 現場状況に応じて、火気を使用する工法を選定する場合は、十分な火災防護対策を講じたうえで使用する。
- ・ 現場状況に応じて、モックアップ・トレーニングを実施し、作業上で想定されるリスクの事前抽出とその対策を行い、作業員の安全確保に努めるとともに、作業の成立性の確認を行う。

#### 6.3.2 漏えい防止対策，汚染拡大防止対策

解体撤去する設備・機器の内包する放射性液体廃棄物の性状に応じて、適切な漏えい防止対策・汚染拡大防止等を実施することにより、放射性液体廃棄物が環境中に放出しないようにする。また、解体撤去で発生した解体物の適切な保管を行い、漏えい防止，汚染拡大防止に努める。以下の具体的な対策を実施する。

##### ➤ 漏えい防止対策，汚染拡大防止対策

###### ■ 残水回収・移送作業

- ・ ホース（仮設ホース含む）を使用する場合は、ホースの継手が脱落しないようロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、ホースの継手に水受け（必要に応じて堰，漏えい検知器）を設け、漏えい時に残水を受けられるようにする。ホースは現場状況に応じて、二重構造型を使用し、適切な損傷防止対策を行う。
- ・ 残水回収作業にバキュームカーを使用する場合は、バキュームカーとホース（仮設ホース含む）の継手が脱落しないようロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、バキュームカーとホースの継手に水受け（必要に応じて堰，漏えい検知器）を設け、漏えい時に残水を受けられるようにする。ホースは現場状況に応じて、二重構造型を使用し、適切な損傷防止対策を行う。



- ・ 残水回収・移送作業中は，作業員による常時監視を行う。
- ・ 万が一，漏えいが発生した場合は，速やかに作業を中断し，漏えい水の回収を行う。

#### ■ 配管開放・切断作業

- ・ 配管開放・配管切断前に，系統の隔離措置及び水抜きを行う。
- ・ 配管開放・配管切断箇所の下部に水受け，養生を設ける。
- ・ 配管開放端部は閉止措置を行う。

#### ■ 解体撤去作業

- ・ 解体物は，線量，種類，形状，性状等に応じて，周辺の汚染レベルを上昇させないよう養生または保管容器へ収容を行い保管等を実施する。（再利用・再使用可能な解体物を除く）

### 6.3.3 落下防止対策，飛散拡散防止対策

解体撤去に伴い，重機による吊上げた解体物等の落下防止対策・環境中へ放出される放射性物質の適切な飛散防止対策を実施することにより，敷地境界での放射線量の放出抑制を図っていく。以下の具体的な対策を実施する。

#### ➤ 落下防止対策

- ・ 監視員の配置及び作業エリアの区画等を実施する。
- ・ クレーン，重機を使用する場合は，落下防止策を施した吊り治具等を使用する。また，単一故障による落下を防ぐため，駆動源を喪失しても把持部が開放されない構造等とする。
- ・ 重機・遠隔装置等の操作は経験を積んだ操作者が行う。
- ・ 始業前点検，カメラによる監視等の対策を実施する。
- ・ 解体物を運搬する場合は，解体物が確実に固縛されていることを確認する。運搬にあたっては低速で走行する。

#### ➤ 飛散拡散防止対策

- ・ 現場状況に応じて，局所排風機，吸引装置等を設置する。
- ・ 屋外作業となる場合は，強風時は作業を中断する。
- ・ タンク等の内部を洗浄する場合は，タンク等の内表面を散水し，表面の汚染を可能な限り洗い流す。
- ・ 現場状況に応じて，ハウス，飛散防止カバー等を設置する。
- ・ ハウス等の側面に物品搬出入口を設ける場合は，搬出入口は作業計画上で必要となる最小サイズとし，開閉可能かつ，閉止時にダストが通過しない構造のカバーを取付け，

人が出入りする際、物品搬出入する際以外はカバーを閉止する。また、物品搬出入する際は作業を中断する。

- ・ 作業中は、放射性ダストモニタを設置しダスト濃度を定期的を確認する。必要に応じて、飛散防止剤の散布または散水等を定期的に実施し、粉塵が固着された状態または湿潤状態にする。
- ・ 作業中にダスト濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、ダスト飛散元の養生や飛散防止剤の散布または散水等を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止する。その後、原因を調査し、必要な対策を講じたうえで再開する。
- ・ 高線量配管を切断する場合は、配管内部のダストを気中に飛散させないため、必要に応じて、配管切断箇所及び小割箇所へ発泡ウレタンを注入し、ウレタン注入箇所を切断する。
- ・ 解体開口部からの放射性物質の飛散により、周辺に汚染を拡大させないように養生等を実施する。
- ・ 解体物を仮置きする場合は、転倒防止が起きないように確実に固縛する。

#### 6.3.4 被ばく低減対策

作業者の被ばく管理等において、現存被ばく状況での放射線業務従事者の作業性等を考慮して、遮へい機器の配置、遠隔操作、換気、除染等、所要の放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置を講じることにより、放射線業務従事者が立ち入るエリアの線量及び作業に伴う被ばく線量を、達成できる限り低減する。以下の具体的な対策を実施する。

##### ➤ 被ばく低減対策

- ・ 作業エリアの区画等を実施する。
- ・ 作業エリアの空間線量率を測定し表示する。
- ・ 可能な限り遠隔操作を利用する。
- ・ 現場状況に応じて、適切な遮蔽等を設置する。
- ・ 現場状況に応じて、遮へいベスト、遮へいスーツ、全面マスク等の適切な装備を着用する。
- ・ 現場状況に応じて、除染作業を行う。
- ・ 現場状況に応じて、作業エリア近傍に遮へい効果のある退避場所を設置し、被ばく低減を図る。
- ・ 現場状況に応じて、作業時間管理・作業員ローテーションによる被ばく低減を図る。
- ・ 解体物を仮置きする場合は、仮置きに伴ってエリア周辺における作業員の被ばく線量が増加するのを防止するために、設置可能な範囲で最大限の距離を取って区画をする

とともに、線量率表示による注意喚起を通して被ばく低減を図る。

#### 6.4 放射性廃棄物等の管理

##### 6.4.1 放射性固体廃棄物等の管理

解体撤去に伴い発生する放射性固体廃棄物等は、その性状に応じて適切に処理することを含む作業計画が決まり次第、速やかに、十分な保管容量を確保できることを評価する。

また、「Ⅲ 第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、線量、種類で分類しできるだけ減容した上で、屋内保管施設（又は一時保管エリア）で保管する。

##### 6.4.2 放射性液体廃棄物等の管理

解体撤去に伴い発生する放射性液体廃棄物は、「Ⅲ 第3編 2.1.2 放射性液体廃棄物等の管理」に従い、浄化处理等必要な処理を行い、環境へ排水、散水する放射性物質の濃度を低減する。

#### 6.5 緊急時の安全避難

緊急時の避難指示は、「Ⅱ 1.13 緊急時対策」規定のもと、緊急放送等により施設内に周知することになっているが、緊急放送等が聞こえないエリアでの作業が存在することも考えられる為、作業前の現場調査にて緊急時の退避通路を確認する。

#### 6.6 自然現象への考慮

解体撤去は、実施計画上必要な機能を有しない設備・機器の解体撤去であり、設計における自然現象への考慮事項はない。ただし、解体撤去の作業期間において、自然現象（地震、津波、豪雨、台風、竜巻等）がもたらす影響として、解体物、工具・装置・重機等の飛散や転倒が考えられる為、解体物の速やかな保管（仮置き時は確実な固縛措置等）、作業終了後の現場の整理整頓を行うことで、自然現象がもたらす影響を可能な限り低減するよう努める。

## 6.7 添付資料

- 添付資料－1 : 既設処理水バッファタンク及び既設処理水バッファタンク接続配管の解体・撤去の方法について
- 添付資料－2 : 1号機原子炉格納容器窒素封入ライン（不活性ガス系）の撤去について
- 添付資料－3 : 2号機及び3号機の海水配管トレンチにおける高濃度汚染水の処理設備（モバイル式処理設備）の撤去について
- 添付資料－4 : 中低濃度タンク及び高濃度滞留水受タンクの解体・撤去の方法について
- 添付資料－5 : 淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）の撤去方法について
- 添付資料－6 : 蒸留水タンク, 濃縮水受タンク, 濃縮処理水タンクの撤去方法について
- 添付資料－7 : 地下貯水槽 No. 5の解体・撤去について
- 添付資料－8 : 除染装置処理水移送ポンプ及び弁を含む付属配管並びに除染装置処理水タンクの撤去について
- 添付資料－9 : 一時保管エリア A1, A2 仮設保管設備（テント）解体
- 添付資料－10 : がれき撤去等の手順に関する説明書
- 添付資料－11 : 福島第一原子力発電所第1号機原子炉建屋カバー解体について
- 添付資料－12 : 福島第一原子力発電所第1・2号機原子炉建屋作業エリアの整備に伴う干渉物解体撤去について
- 添付資料－13 : 福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋オペレーティングフロア北側のガレキの撤去について
- 添付資料－14 : 福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋オペレーティングフロア中央および南側のガレキの一部撤去について
- 添付資料－15 : 福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋オペレーティングフロア外周鉄骨の一部撤去について
- 添付資料－16 : 福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋オペレーティングフロア床上のガレキの一部撤去について
- 添付資料－17 : 福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について
- 添付資料－18 : 旧淡水化装置の撤去方法について
- 添付資料－19 : 前処理フィルタの撤去方法について
- 添付資料－20 : 雨水処理設備等の解体・撤去の方法について
- 添付資料－21 : RO濃縮水処理設備の撤去方法について
- 添付資料－22 : 福島第一原子力発電所1/2号機共用排気筒の上部解体について
- 添付資料－23 : 一時保管エリアの設備の解体撤去における補足説明

以 上

既設処理水バッファタンク及び既設処理水バッファタンク接続配管の  
解体・撤去の方法について

既設処理水バッファタンク（フランジタンク）及び既設処理水バッファタンク接続配管は、貯留している RO 処理水を新設処理水バッファタンクに移送した後、汚染拡大防止を図った上で解体・切断し、構内で保管する。

1. 既設処理水バッファタンク

(1) 残水回収処理作業時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

RO 処理水の移送後にタンク底部に残る残水及び散水により発生する残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー及び底部残水回収装置等を使ってタンク底部より残水を回収し、他の貯槽へ移送した後、多核種除去設備等により処理する。

なお、散水により発生する残水の量は、1 回に 1m<sup>3</sup>程度であり、ダスト上昇の追加対策として実施する追加散水を考慮しても最大で 5m<sup>3</sup>程度であり、汚染水の貯留に支障をきたすことはない。

当該作業を行う際の、漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホースを使用する場合は、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、タンクの撤去にあたり実施する残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には、バキュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより、漏えい時に残水を受けられるようにした上で、残水移送中には作業員による常時監視を行う。

(2) 解体作業時の汚染拡大防止策

解体作業手順の概要を図－1 に示す。

- a. タンク上部のマンホールからタンク内表面に散水し、表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクを低減する。
- b. 局所排気装置を設置し、タンク下部のマンホールからタンク内部の空気を吸引し、フィルタでろ過することにより、タンク上部から放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- c. タンク解体片は、地面に降ろした後、周辺の汚染レベルを上昇させないように養生等を実施し運搬する。

- d. 最下段の側板及び底板の解体は、残水が完全に除去されていることを確認した後に着手する。
- e. 解体作業の間中は、タンク上部の空気中の放射性物質濃度を定期的を確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、作業を中断し、追加散水や集塵の強化等の対策を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。
- f. 追加散水や集塵の強化等の対策を施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止し、タンク上部に仮天板を取り付ける。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

### (3) 減容作業・保管時の汚染拡大防止策

- a. 切断作業は既設建屋内で実施し、切断に伴い発生するダストを局所排風機で回収することにより汚染の拡大防止とする。
- b. タンク解体片を切断した減容片は、20ft コンテナ（以下、容器）に収納し保管する。
- c. 切断作業の間中は、既設建屋周辺の空気中の放射性物質濃度を定期的を確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、速やかに作業を中止し、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

### (4) 作業員の被ばく低減

- a. タンク内の残水処理では、底部残水回収装置を用いて可能な限り遠隔操作を行うことにより、被ばく低減を図る。
- b. タンク底部の解体では、ゴムマット等を敷くことにより、β線の被ばく低減を図る。
- c. タンク切断では、可能な限り遠隔作業により被ばくの低減を図る。
- d. 解体作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、念のため全面マスクを着用する。

### (5) 瓦礫類発生量

- a. フランジタンクの解体・撤去に伴い、約 240m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。
- b. 瓦礫類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア C, N, O, P1, AA））へ搬入する。ただし、タンク減容片を保管した容器については、一時保管エリア P1 または AA へ搬入する。
- c. 今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。また、固体廃棄物貯蔵庫第 9 棟等の設置を行うことにより容量不足を解消していく。

(6) 保管時の安定性評価

- a. 容器は、4段積みし、一時保管エリア P1 において、4行×4列×4段または1行×4列×4段を1ブロックとして、容器間を連結し固定した上で、保管する。また、一時保管エリア AA では、1行×1列×4段で保管する。保管の状態図を図-2-1, 2, 3に示す。
- b. 保管場所は、表面線量率 0.1mSv/h 以下の瓦礫類の一時保管エリア P1 または表面線量率 0.001mSv/h 以下の瓦礫類の一時保管エリア AA とする (図-3)。
- c. 容器は、内部に汚染水がない状態であるため、耐震Cクラス相当と考えて、地震による転倒評価を実施した。容器は4行×4列×4段または1行×4列×4段を1ブロックとして一体で評価した。評価の結果、地震による転倒モーメントが、1ブロックの自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-1-1, 2) また、一時保管エリア AA では、容器の転倒・落下により内容物が容器から出たとしても、屋外集積している状況と変わらないため、耐震性は考慮せず、4段積みを行う。

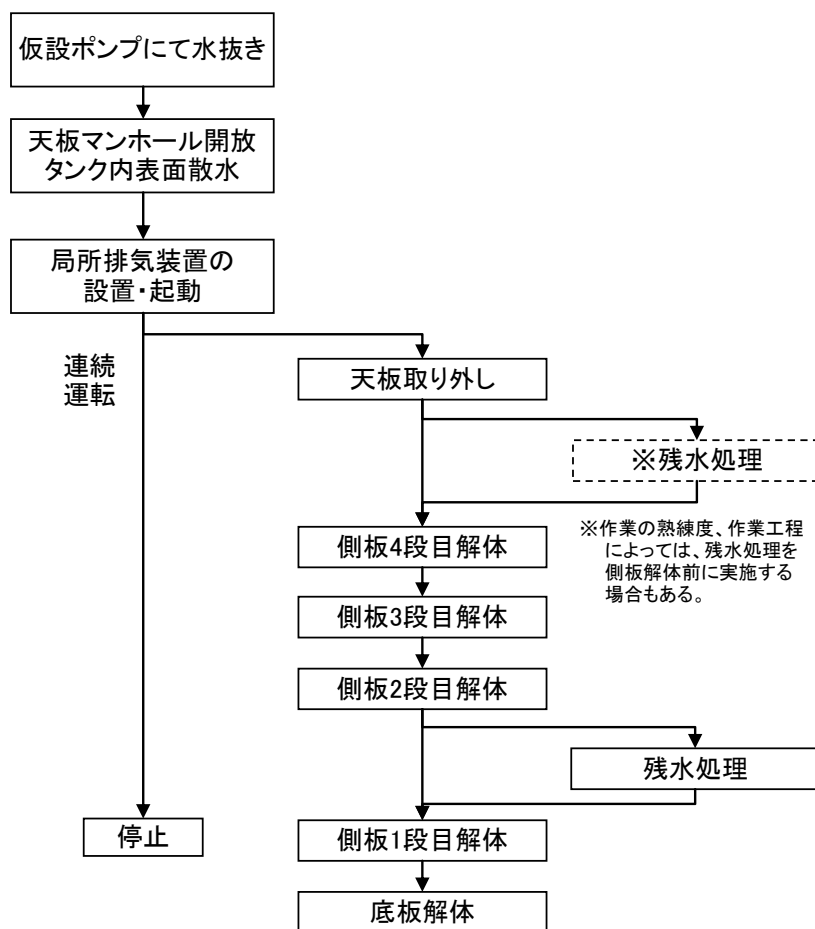


図-1 解体作業のフロー

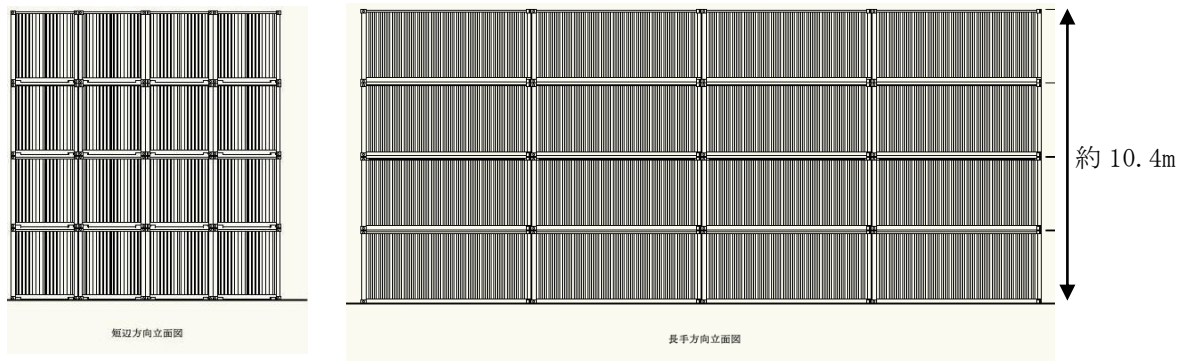


図-2-1 容器の保管状態

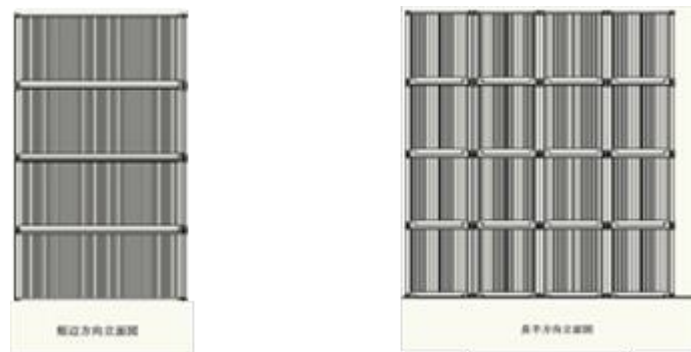


図-2-2 容器の保管状態

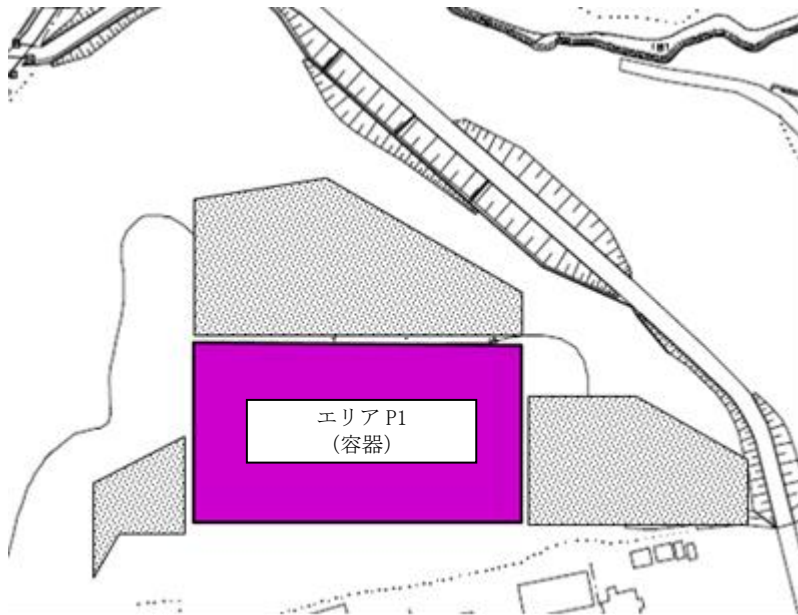


図-2-3 容器の保管状態



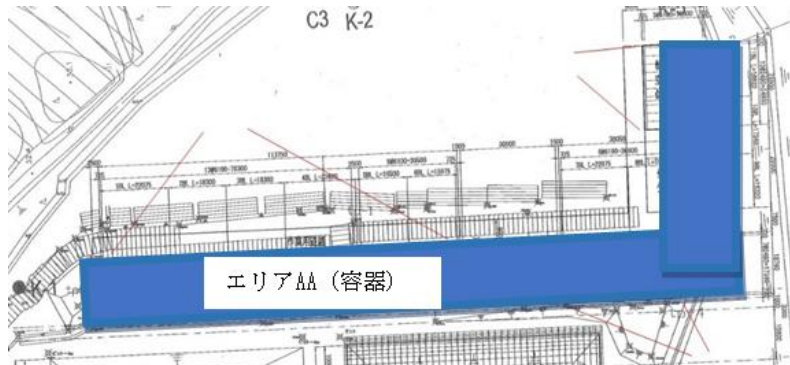


一時保管エリア（エリア P1, AA）



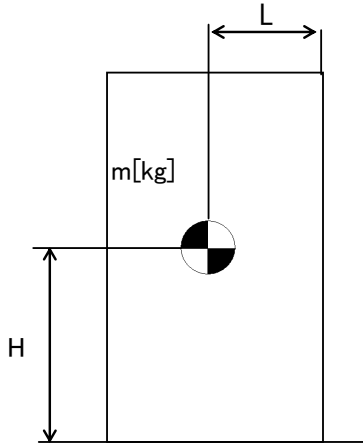
H28 年 11 月現在

エリア P1 詳細



エリア AA 詳細

図-3 容器を保管する一時保管エリア (エリア P1, AA)



m : 機器質量  
 g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)  
 H : 据付面からの重心までの距離  
 L : 転倒支点から機器重心までの距離  
 C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-1-1 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	4.60 × 10 <sup>3</sup>	1.80 × 10 <sup>4</sup>	kN・m

表-1-2 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	1.15 × 10 <sup>3</sup>	2.79 × 10 <sup>3</sup>	kN・m

2. 既設処理水バッファタンク接続配管

(1) 配管撤去時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

- a. 漏えい防止策として、汚染水を内包している配管の開放作業は、隔離処理及び水抜き後に実施する。
- b. 汚染拡大防止策として、汚染水を内包している配管は、開放作業時に受けパン及び飛散防止カバー等を設置する。
- c. 抜き取った水の移送時において仮設ホース及び仮設ポンプを使用する際には、継手

部に養生を行い、監視員による漏えい確認を行う。

d. 残水がある場合に備えて配管取り外し部には受け養生を実施する。

(2) 作業員の被ばく低減

a. 配管の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。

b. 作業を行わない間は作業エリアを区画し、放射線業務従事者が容易に近付けないようにする。

c. 配管の切断作業時においては、全面マスクを着用して作業を実施する。なお、切断作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空気中の放射性物質濃度を測定し、必要に応じて局所排風機、ハウスを設置する。

(3) 瓦礫類発生量

a. 既設処理水バッファタンク接続配管の撤去に伴い、約 50m<sup>3</sup> の配管類が発生する見込みである。

b. 配管類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア(受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア(一時保管エリア C, N, O, P1, AA))へ搬入する。

## １号機原子炉格納容器窒素封入ライン（不活性ガス系）の撤去について

### １．撤去理由

１号機プール燃料取り出しの準備作業として、原子炉建屋を覆う大型カバーを設置する。大型カバー設置工事において干渉する１号機原子炉格納容器窒素封入ラインについて、撤去を行う。

### ２．撤去の妥当性

本設備は、１号機原子炉格納容器内窒素封入設備において、常用系として使用されている原子炉压力容器内窒素封入（原子炉压力容器頂部冷却系、ジェットポンプ計装ラック）の予備設備として位置付けられる。

原子炉压力容器内窒素封入は、原子炉压力容器の気密性が確保されていないことから、封入した窒素が原子炉格納容器内に漏れ出すため、原子炉压力容器と格納容器の窒素封入を兼ねると考えることができる。

原子炉压力容器内窒素封入は、３系統（原子炉压力容器頂部冷却系：１系統、ジェットポンプ計装ラック：２系統）あり、各々が原子炉格納容器内の水素可燃限界以内に維持するために必要な窒素封入量を封入することができるため、窒素封入系統として多重化は確保される。

なお、原子炉格納容器窒素封入ラインは不活性ガス系を撤去しても、原子炉格納容器内酸素分析ラックからの窒素封入は可能である。

### ３．瓦礫類発生量

- （１）撤去工事で発生する瓦礫類は、約 4 6 m<sup>3</sup> 発生する見込みである。
- （２）撤去工事で発生する瓦礫類は、撤去・廃棄時に表面線量率を測定し、1 mSv/h 以下の表面線量率のものについては、所定の瓦礫類一時保管エリアへ搬入する。なお、表面線量率が 1 mSv/h を超えた瓦礫類については、固体廃棄物貯蔵庫第 8、9 棟に保管するものとする。

### ４．作業員の被ばく低減対策

- （１）撤去に関連した作業時においては、全面マスクを着用して作業を実施する。
- （２）配管切断時は、局所排風機・ハウスの設置を行い、ダストの飛散防止に努め、周辺の作業員への被ばく低減を図る。
- （３）高線量配管の周辺には、鉛マットで遮蔽することで、被ばく低減を図る。
- （４）作業場所近傍に低線量のエリアを設置し、控え作業員の被ばく低減を図る。

## 5. その他

既設不活性配管切断後、配管端部は閉止処置を行う。

2号機及び3号機の海水配管トレンチにおける高濃度汚染水の  
処理設備（モバイル式処理設備）の撤去について

1. 撤去の理由

千島海溝津波に対して、防潮堤を設置することで浸水を抑制し、建屋流入に伴う滞留水の流出と増加の防止、ならびに重要設備の津波被害軽減、廃炉作業の遅延リスク緩和のため、防潮堤を設置する。

防潮堤設置にあたっては、現在供用していないモバイル式処理設備が干渉するため、このモバイル式処理設備配管（PE管、バルブユニット等）を全撤去する。なお、モバイル式処理装置は、使用済燃料プール設備と放水路浄化設備とし今後も運用する。

2. 撤去の妥当性

本設備は、海水配管トレンチ（2, 3号機）の滞留水を海側立坑から汲み上げ後、モバイル式処理装置にてセシウム等の放射性核種を除去し、山側立坑または2号機タービン建屋へ移送するため設置した設備であるが、海水配管トレンチの閉止完了により、現在は供用していない。

3. 廃棄物発生量

- (1) モバイル式処理設備配管（PE管、バルブユニット等）撤去工事で発生する廃棄物は汚染されていることから金属製の容器に格納する。
- (2) 撤去工事で発生する廃棄物は、約150m<sup>3</sup>発生する見込みである。
- (3) 廃棄物について、「実施計画Ⅲ章第3編2.1.1放射性固体廃棄物等の管理」に従って保管管理する。撤去工事で発生する廃棄物は1mSv/hを超える表面線量率であるため、固体廃棄物貯蔵庫第9棟地下1階に保管するものとする。なお、表面線量率1mSv/h以下の廃棄物が発生した場合は、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリアへ搬入する。

4. 作業員の被ばく低減

- (1) 配管切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。
- (2) 高線量配管周辺には鉛遮蔽を設置する。
- (3) 作業を行わない間は、容易に近づけないよう作業エリアを区画する。

- (4) 配管の開放（切断）作業時においては、全面マスクを着用して作業を実施する。また、配管切断作業時は放射性ダスト濃度測定を実施し、必要に応じ、局所排風機、ハウスの設置を行い、放射性ダストの飛散防止に努める。
- (5) 作業前に線量測定を実施し、現場状況の把握および必要に応じ遮へい等の線量低減対策を行う。

5. 漏えい拡大防止策

- (1) 配管切断前に隔離処置（弁閉）を行い、配管内の水抜きを行う。
- (2) 配管切断箇所に仮設受けパンを設置し、仮設受けパン廻りをシート養生する。
- (3) 抜き取った水の排水において仮設ホース及び仮設ポンプを使用する際には、仮設ホース継手部に養生を行い、漏えい確認を行う。

6. 滞留水移送装置との取合箇所の処置

2号機タービン建屋内にて2.5.1.5.1 滞留水移送装置と接続する箇所について以下の処置を行う。

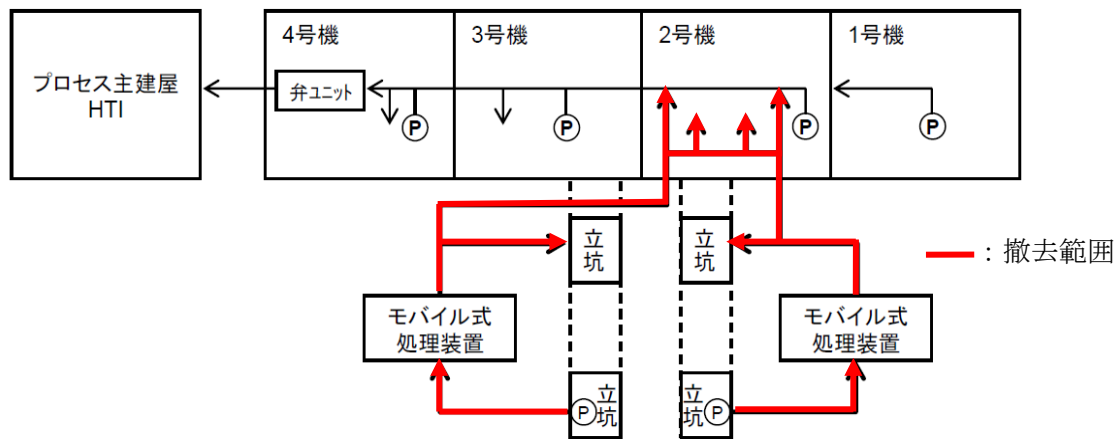
- (1) 弁で隔離された状態かつ、滞留水移送停止時に配管分岐部を切断・撤去する。
- (2) 切断箇所は新しい直管のPE管を融着して復旧する。
- (3) 滞留水処理を止めないために、2系列のうち1系列ずつ切断、復旧を行う。

7. 配管撤去に係る確認事項

- (1) モバイル式処理設備配管の撤去した範囲については、以下に基づき検査を実施する。

表－1 確認事項

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	実施計画の通り撤去されていること。	実施計画通りであること。

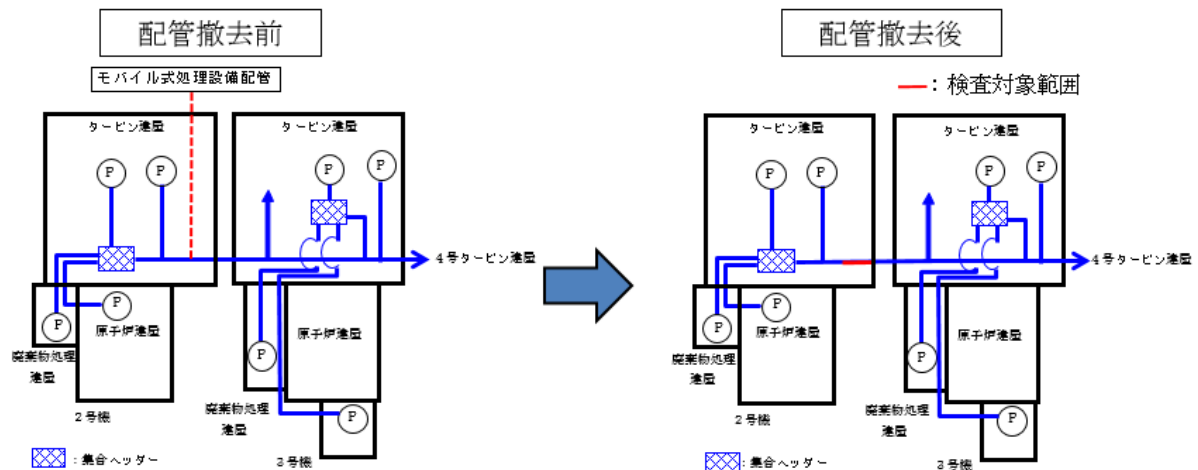


図－1 モバイル式処理設備 撤去範囲

(2) モバイル式処理設備撤去に伴い、2.5.1.5.1 滞留水移送装置（ポリエチレン管）復旧箇所については、以下に基づき検査を実施する。

表－2 確認事項

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認すること。	実施計画通りであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法（外径相当）について記録を確認する。	実施計画通りであること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	配管の据付状態について確認する。	実施計画の通り施工・据付されていること。
	漏えい確認	ろ過水による通水にて、漏えいがないことを確認する。	耐圧部からの漏えいがないこと。



図－2 滞留水移送装置 検査範囲図

以上



## 中低濃度タンク及び高濃度滞留水受タンクの解体・撤去の方法について

中低濃度タンク及び高濃度滞留水受タンクの取替に伴い、核燃料物質その他の放射性物質に汚染されている可能性のある既設のタンクの解体・撤去作業※の方法について1～5, 8に定める。

また、中低濃度タンクを雨水回収タンクに転用する場合のタンク洗浄作業の方法について6に、RO濃縮水貯槽(Dエリア)をRO処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽に転用する場合のタンク洗浄作業の方法について7に定める。

### 1. RO処理水一時貯槽

RO処理水一時貯槽は、Dエリアに設置されているノッチタンク（計139基）であり、貯留しているRO処理水をDエリアと隣接するエリアに移送し、ノッチタンクの汚染拡大防止策を図った上で、構内に仮置きを行う。ノッチタンクの仮置き場所を図－1に示す。

#### 1.1. 汚染拡大防止策

- (1) RO処理水の移送後は、ノッチタンクの付属機器を取り外し、タンク内に残水がないことを確認した後に、取り外し部をフランジで閉止する。なお、付属機器の取り外しの際には、仮設の水受けを設置する。

#### 1.2. 仮置き時のノッチタンクの安定性について

- (1) ノッチタンクは、空の状態で格子状に2段積みにして仮置きする。ノッチタンクの仮置き状態図を図－2に示す。仮置き時のノッチタンクについて、地震による転倒評価を実施した結果、地震による転倒モーメントはRO処理水一時貯槽の自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。

※実施計画上の撤去作業には仮置き作業を含む

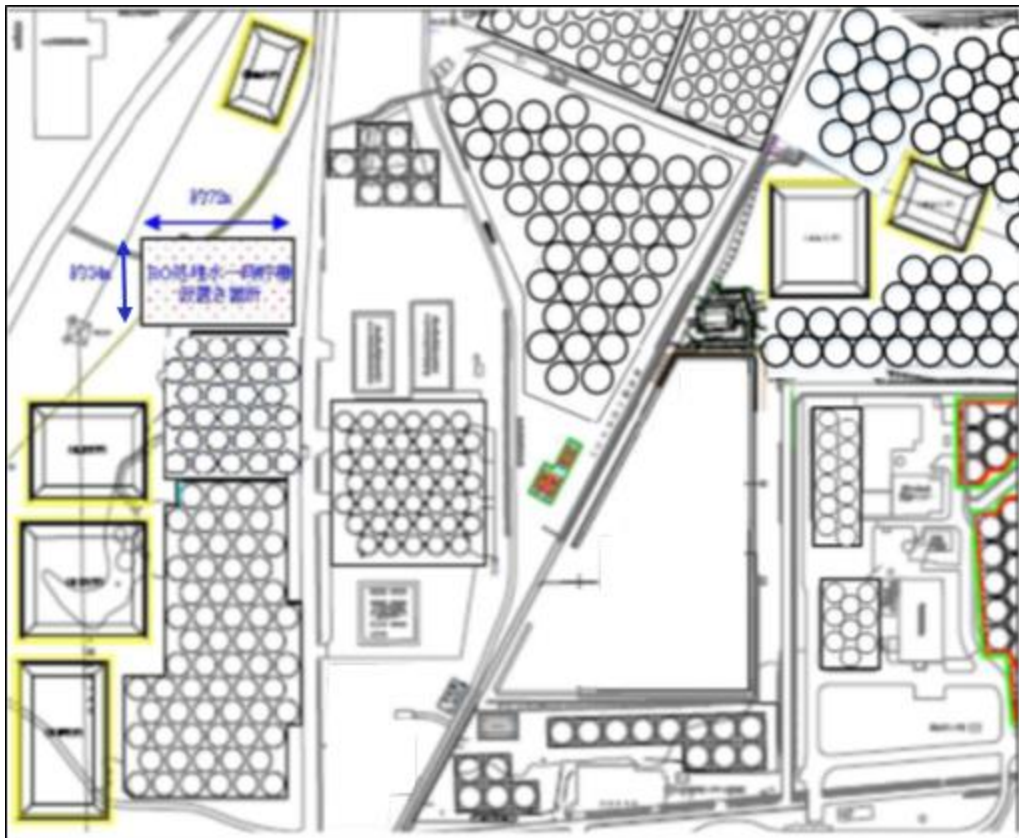


図-1 RO処理水一時貯槽の仮置き場所

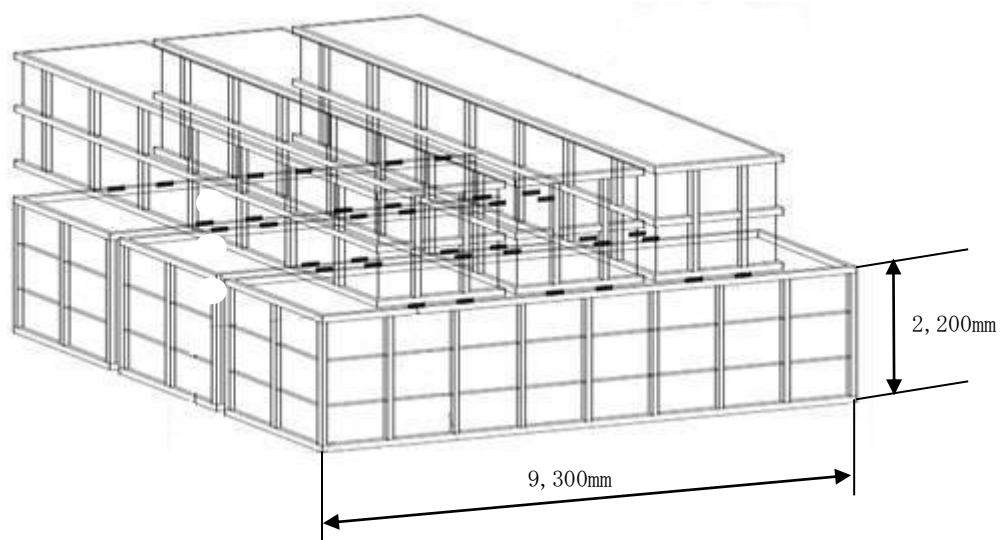


図-2 RO処理水一時貯槽の仮置き状態図

## 2. RO濃縮水貯槽（完成品）

RO濃縮水貯槽（完成品）は、H1 エリアのブルータンク（計 170 基）であり、貯留しているRO濃縮水を他のエリアのRO濃縮水貯槽に移送し、ブルータンクの汚染拡大防止策を図った上で、構内にて仮置きを行う。ブルータンクの仮置き場所を図-3に示す。

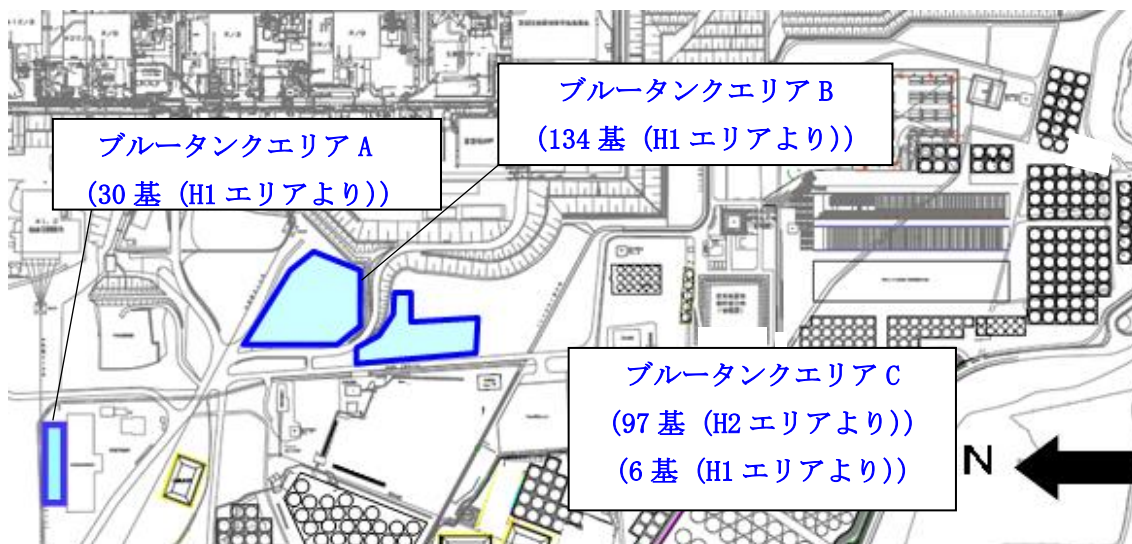


図-3 ブルータンクの仮置き場所

### 2.1. 汚染拡大防止策

(1) RO濃縮水の移送後は、ブルータンクの付属機器（出入口配管等）を取り外し、タンク内に残水がないことを確認した後に、取り外し部をフランジで閉止する。なお、付属機器の取り外しの際には、仮設の水受けを設置する。

### 2.2. 仮置き時のブルータンクの管理

#### (1) 区画

ブルータンクの仮置き場所に関係者以外が立ち入らないように、柵等で区画を明示するとともに、立入制限の表示を行う。

#### (2) 線量率測定

被ばく低減の観点から、仮置きエリアの線量当量率を定期的に測定し、作業員への注意喚起のために測定結果を表示する。

#### (3) 巡視、仮置き状態確認

ブルータンクの仮置き状態を確認するため、定期的に仮置きエリアを巡視する。

### 2.3. 被ばく低減

ブルータンクの仮置きに伴ってエリア周辺における作業員の被ばく線量が増加するのを防止するために、エリア周辺の線量当量率において、仮置きブルータンクからの線量寄与

がほとんど無視できる範囲に可能な限り区画をして立入制限を行う。エリア周辺の道路や干渉物の制約により、仮置きブルータンクからの線量寄与がほとんど無視できる範囲に区画をできない場合は、設置可能な範囲で最大限の距離を取って区画をするとともに、線量率表示による注意喚起を通して被ばく低減を図る。ブルータンクエリアの区画図を図-4及び図-5に示す。

なお、今後、敷地内の線量低減が進み、当該エリア周辺における仮置きブルータンクからの線量寄与により目標線量当量率※を達成できなくなると想定される場合には、適切な遮へいまたはブルータンクの移設等の追加処置により線量低減を図る。

※「Ⅲ 第三編 3.1.3 敷地内に飛散した放射性物質の拡散防止及び除染による線量低減」参照

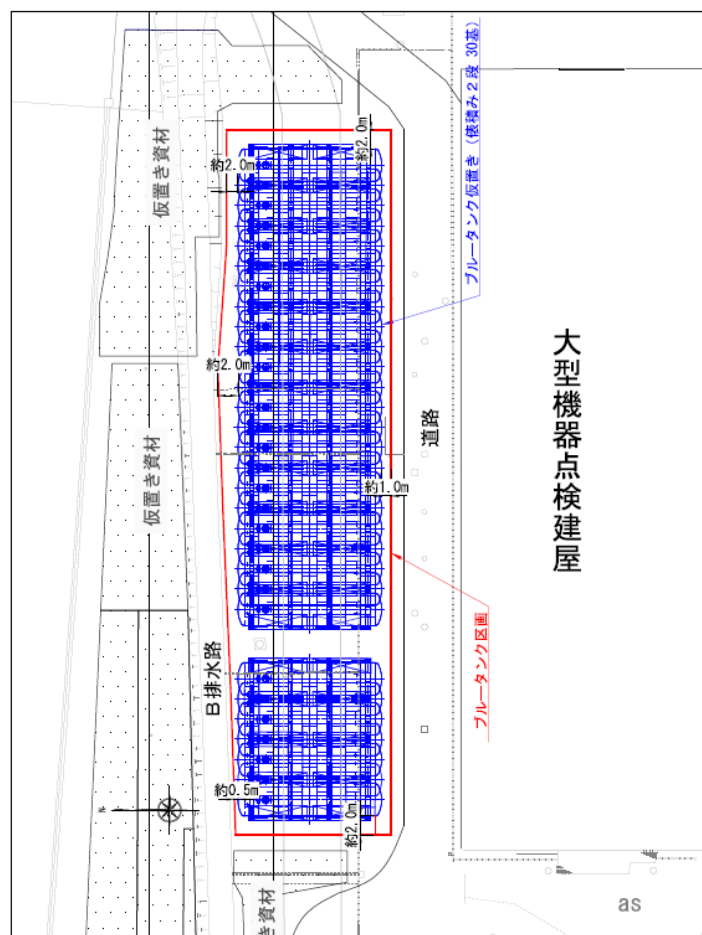


図-4 ブルータンクエリアA区画図

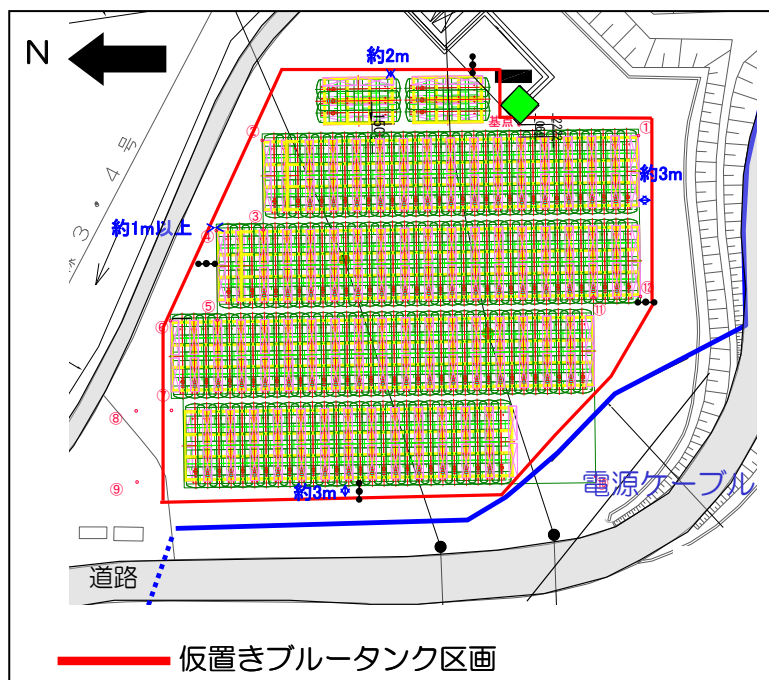


図-5 ブルータンクエリアB区画図

#### 2.4. ブルータンクの付属機器

H1 エリアのブルータンクの撤去に伴い、ブルータンク付属機器（ホース及び弁）が瓦礫類として約 140m<sup>3</sup> 発生する。瓦礫類は、1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下（一時保管エリア J・B・C・U・P1・F2・N・0）のエリアまたは受入目安表面線量率 1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア D・E1・P2・W））へ搬入する。

なお、保守的に瓦礫類が全て 0.5mSv/h を超え 1mSv/h 以下の表面線量率であったとしても、受入可能な一時保管エリアについては、平成 27 年 1 月 31 日時点で、瓦礫類保管量：24,800m<sup>3</sup>・瓦礫類保管容量：54,300m<sup>3</sup>・空き保管容量：29,500m<sup>3</sup>であり、ブルータンクの付属機器を瓦礫類として一時保管するにあたり支障をきたすことはない。

今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。また、固体廃棄物貯蔵庫第 9 棟等の設置を行うことにより容量不足を解消していく。

受入目安表面線量率	0.1mSv/h 以下	1mSv/h 以下	1～30mSv/h
瓦礫類保管量[m <sup>3</sup> ] (平成 27 年 1 月 31 日時点)	88,600	27,400	17,400
瓦礫類保管容量※[m <sup>3</sup> ]	207,850	57,300	33,650

※実施計画における貯蔵量（平成 26 年 6 月 25 日認可）の値を示す。

2.5. 仮置き時のブルータンクによる直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

仮置き時のブルータンクは、空の状態では仮置きするが、タンク内には貯留していたRO濃縮水による汚染が内包された状態であるため、仮置き時における敷地境界線量に及ぼす影響を評価する。ブルータンクエリアAに仮置きするブルータンクについては、仮置き予定のブルータンクを表面線量率に応じて2つに分けて配置し、エリアA1及びエリアA2としてモデル化する。ブルータンクエリアB及びブルータンクエリアCについては、それぞれ仮置き予定のブルータンクを1つのモデルとして評価する。各仮置きエリアからの最寄りの敷地境界評価地点における実効線量は以下の通り。

(1) ブルータンクエリアA1

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 70	約 $4.8 \times 10^{-4}$
(参考) No. 7*	約 $1.0 \times 10^{-4}$ 未満

※2017年3月現在で実効線量が最大となる敷地境界線量評価地点

(2) ブルータンクエリアA2

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 70	約 $6.7 \times 10^{-5}$
(参考) No. 7*	約 $1.0 \times 10^{-4}$ 未満

※2017年3月現在で実効線量が最大となる敷地境界線量評価地点

(3) ブルータンクエリアB

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 14	約 $4.47 \times 10^{-3}$
(参考) No. 5	約 $6.95 \times 10^{-4}$
(参考) No. 30	約 $1.71 \times 10^{-3}$
(参考) No. 38	約 $1.35 \times 10^{-3}$
(参考) No. 66	約 $6.99 \times 10^{-4}$
(参考) No. 70	約 $5.80 \times 10^{-4}$

(4) ブルータンクエリアC4

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 7	約 $5.98 \times 10^{-4}$
(参考) No. 15	約 $5.29 \times 10^{-4}$
(参考) No. 70	約 $1.0 \times 10^{-4}$ 未満

2.6. 仮置き時のブルータンクの安定性について

(1) 仮置きブルータンクの耐震性評価

① 仮置きブルータンクの転倒評価

ブルータンクは、俵積み状に2段積みし、仮置きする。ブルータンクの仮置き状態図を図-6に示す。仮置き時のブルータンクは、内部に汚染水がない空の状態であるため、耐震Cクラス相当と考えて、地震による転倒評価を実施した結果、地震による転倒モーメントがタンク自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-1)

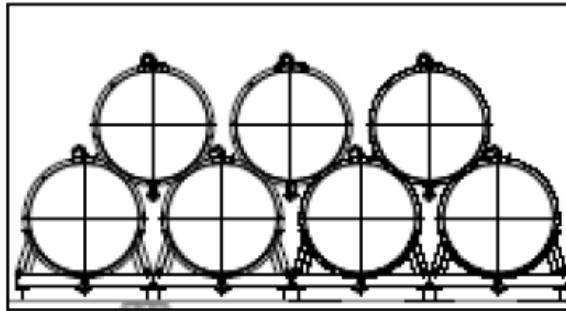
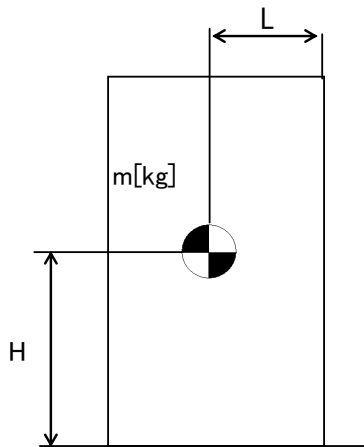


図-6 ブルータンクの仮置き状態



m : 機器質量

g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

H : 据付面からの重心までの距離

L : 転倒支点から機器重心までの距離

C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-1 転倒評価結果

機器名称		評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
ブルータンク	1段目	本体	転倒	0.24	2.43×10 <sup>2</sup>	7.15×10 <sup>2</sup>	kN・m
	2段目	本体	転倒	0.24	1.03×10 <sup>2</sup>	2.06×10 <sup>2</sup>	kN・m

② 仮置きブルータンクの滑動評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力は接触面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した。(表-2)

表-2 滑動評価結果

機器名称	評価項目	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値	許容値	単位
ブルータンク	滑動	0.24	0.24	0.52	-



(2) 周辺機器への波及的影響について

仮置きブルータンクについて耐震Cクラス相当の地震による転倒，滑動評価を実施して問題ないことを確認しているが，仮置きブルータンク周辺には，その他の機器が複数設置されていることから，機器自身の耐震クラスを超える地震によって周辺機器へ及ぼす波及的影響について考慮する。

① 周辺機器の状況

ブルータンクエリアA及びブルータンクエリアBの周辺の機器配置図を図-7及び図-8に示す。

ブルータンクエリアAの周辺近傍には，雨水濃縮水移送配管と通信ケーブルが設置されており，ブルータンクエリアBの周辺近傍には，電源ケーブル，地下水バイパス設備が設置されている。

周辺機器の状況から仮置きブルータンクが地震により転倒・滑動することによって，周辺の機器が損傷しないことを確認する。なお，地震時の機能要求のない地下水バイパス，本設化に伴い移設する雨水配管は，評価の対象外とする。

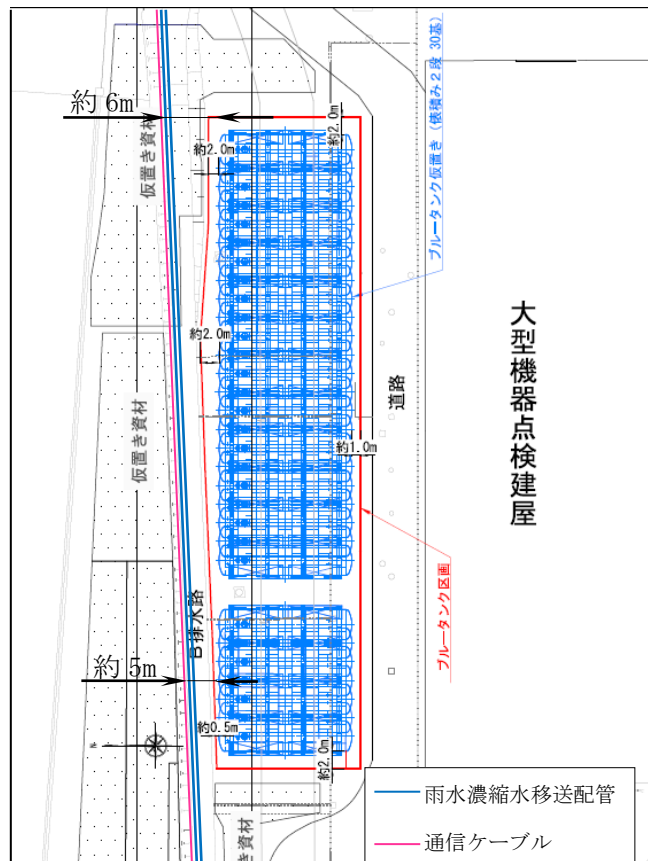


図-7 ブルータンクエリアA周辺図



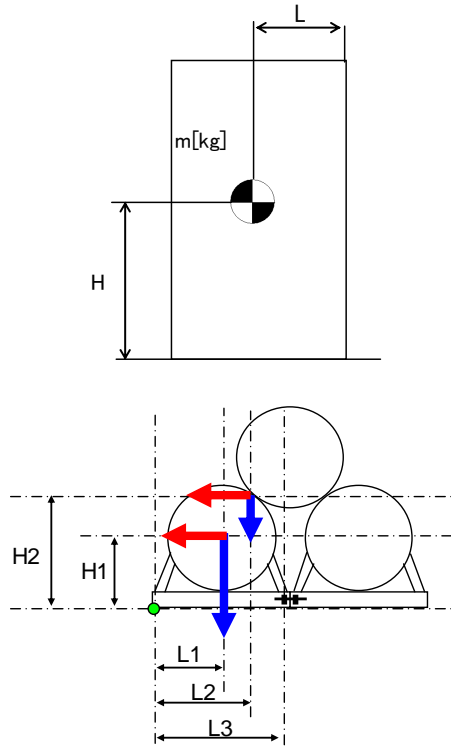
図-8 ブルータンクエリアB周辺図

② 耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価

仮置きブルータンクに対して、耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を行う。

a. ブルータンク 1 段目の締結ボルトの強度評価

据付面とベース端部の接点を転倒支点とし、水平方向地震動による転倒評価をした結果、隣接タンクとの締結ボルトの強度が確保されることを確認した。(表-3)



$m_1$  : 1 段目タンク重量

$m_2$  : 2 段目タンク重量

$H_1$  : 据付面から重心までの垂直距離

$H_2$  : 据付面から 2 段目タンク接点までの垂直距離

$L_1$  : ベース端部から機器重心までの水平距離

$L_2$  : ベース端部から 2 段目タンク接点までの水平距離

$L_3$  : ベース端部から締結ボルトまでの水平距離

$n_f$  : 引張力の作用する締結ボルトの評価本数

$n$  : せん断力の作用する締結ボルトの評価本数

$A$  : 締結ボルトの軸断面積

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

$$\text{締結ボルトに作用する引張力} : F = \frac{g}{L_3} \{ C_H \times ( m_1 \times H_1 + m_2 \times H_2 ) - ( m_1 \times L_1 + \frac{m_2}{2} \times L_2 ) \}$$

$$\text{締結ボルトの引張応力} : \sigma = \frac{F}{n_f \times A}$$

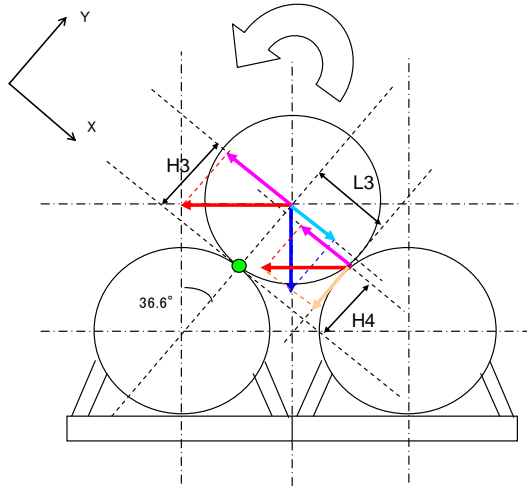
$$\text{締結ボルトのせん断応力} : \tau = \frac{(m_1 + m_2) \times g \times C_H}{n \times A}$$

表-3 タンク 1 段目の耐震Sクラス評価結果

評価対象	評価部位	評価項目	算出値	許容値	単位
タンク 1 段目	締結ボルト	引張	1	176	MPa
		せん断	48	135	MPa

b. ブルータンク 2 段目の転倒評価

2 段目と 1 段目との接点を転倒支点とし、水平方向地震動、タンク自重による転倒および抵抗モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも抵抗モーメントが大きくなるため、2 段目のタンクが転倒することはないことを確認した。(表-4)



$m_1$  : 1 段目タンク重量

$m_2$  : 2 段目タンク重量

$H_3$  : 転倒支点から重心までの Y 成分距離

$H_4$  : 転倒支点からタンク接点までの Y 成分距離

$L_3$  : 転倒支点からタンク接点までの X 成分距離

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

転倒モーメント :  $M_3[\text{N} \cdot \text{m}] = m \times g \times C_H \times H = g \times C_H \times \cos \theta \times (m_2 \times H_3 + m_1 \times H_4)$

安定モーメント :  $M_4[\text{N} \cdot \text{m}] = m \times g \times H + m \times g \times C_H \times L = g \times \sin \theta \times (m_2 \times H_3 + C_H \times m_1 \times L_3)$

表-4 タンク 2 段目の耐震 S クラス評価結果

評価対象	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値 $M_3$	許容値 $M_4$	単位
タンク 2 段目	0.72	$3.07 \times 10^2$	$3.10 \times 10^2$	kN・m

c. ブルータンクのすべり量評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力が接地面の摩擦力より大きくなり、滑動する結果となったことから、すべり量の評価を実施した。

すべり量は、ブルータンク1段目とブルータンク2段目の接地面に対する累積変位量として、地震応答加速度時刻歴をもとに算出した。評価の結果、ブルータンク全長15mに対して小さいことから、2段目のブルータンクが1段目から落下することはないことを確認した。(表-5)

表-5 すべり量評価結果

評価対象	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ブルータンク	すべり量	0.60	57.5	$7.5 \times 10^3$	mm

### ③ 追加的安全措置

仮置きブルータンクについて耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を実施し、周辺機器へ影響を与えないことを確認したが、更なる安全性向上のために追加的措置を行う。

仮置きブルータンク自体については、1段目の端に位置するタンク及び2段目の端に位置するタンクが地震により転倒すると想定し、1段目の端に位置する2基と2段目の1基の計3基をラッシングベルトで固縛して一体化し、周辺機器から可能な限りの離隔距離を確保して設置する。

更に、雨水濃縮水移送配管と通信ケーブルについてはH鋼と鉄板による養生を実施し、電源ケーブル（所内共通 M/C2B～所内共通 D/G(B)M/C，所内共通 M/C2B～プロセス建屋後備 M/C）については、仮置きブルータンクとの間に土嚢を設置することにより、仮置きブルータンクが転倒することを想定した場合に、周辺機器が損傷するリスクを低減する。

## 2.7 自然災害対策等

### (1) 津波

ブルータンクは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33m に仮置きするため、津波の影響は受けない。

### (2) 台風（強風）

建築基準法施行令及び建設省告示に基づいて評価したブルータンクに加わる風荷重が、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」における耐震Cクラス相当の地震荷重に比べて小さいため、ブルータンクは、仮置き状態において台風（強風）により転倒しない。

### (3) 豪雨

ブルータンクは、開口部を閉止して仮置きするため、雨水が内部に浸入しない。

### 3. 濃縮廃液貯槽（完成品）

濃縮廃液貯槽（完成品）は、H2エリアのブルータンク（計97基）であり、貯留している濃縮廃液を他のエリアのRO濃縮水貯槽に移送し、ブルータンクの汚染拡大防止策を図った上で、構内のブルータンクエリア C に仮置きを行う。ブルータンクの仮置き場所を図-9に示す。



図-9 ブルータンクの仮置き場所

#### 3.1. 濃縮廃液移送に係わる漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

- (1) 仮設ホース、仮設ポンプを使用して濃縮廃液を移送する際は、漏えい防止策として、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、漏えい拡大防止策として、仮設ホースの継手部を袋で養生し下部に水受けを設けることにより、漏えい時に汚染水を受けられるようにする。移送中は作業員による常時監視を行い、漏えいが発生した場合でも、速やかに移送ポンプを停止し、移送を中断できる体制とする。
- (2) 濃縮廃液の移送後は、ブルータンクの付属機器（出入口配管等）を取り外し、タンク内に残水がないことを確認した後に、取り外し部をフランジで閉止する。なお、付属機器の取り外しの際には、仮設の水受けを設置する。

#### 3.2. 仮置き時のブルータンクの管理

##### (1) 区画

ブルータンクの仮置き場所に関係者以外が立ち入らないように、柵等で区画を明示するとともに、立入制限の表示を行う。



(2) 線量率測定

被ばく低減の観点から、仮置きエリアの線量当量率を定期的に測定し、作業員への注意喚起のために測定結果を表示する。

(3) 巡視，仮置き状態確認

ブルータンクの仮置き状態を確認するため、定期的に仮置きエリアを巡視する。

3.3. 被ばく低減

ブルータンクの仮置きに伴ってエリア周辺における作業員の被ばく線量が増加するのを防止するために、エリア周辺の線量当量率において、仮置きブルータンクからの線量寄与がほとんど無視できる範囲に可能な限り区画をして立入制限を行う。エリア周辺の道路や干渉物の制約により、仮置きブルータンクからの線量寄与がほとんど無視できる範囲に区画をできない場合は、設置可能な範囲で最大限の距離を取って区画をするとともに、線量率表示による注意喚起を通して被ばく低減を図る。ブルータンクエリアの区画図を図-10に示す。

なお、今後、敷地内の線量低減が進み、当該エリア周辺における仮置きブルータンクからの線量寄与により目標線量当量率※を達成できなくなると想定される場合には、適切な遮へいまたはブルータンクの移設等の追加処置により線量低減を図る。

※「Ⅲ 第三編 3.1.3 敷地内に飛散した放射性物質の拡散防止及び除染による線量低減」参照

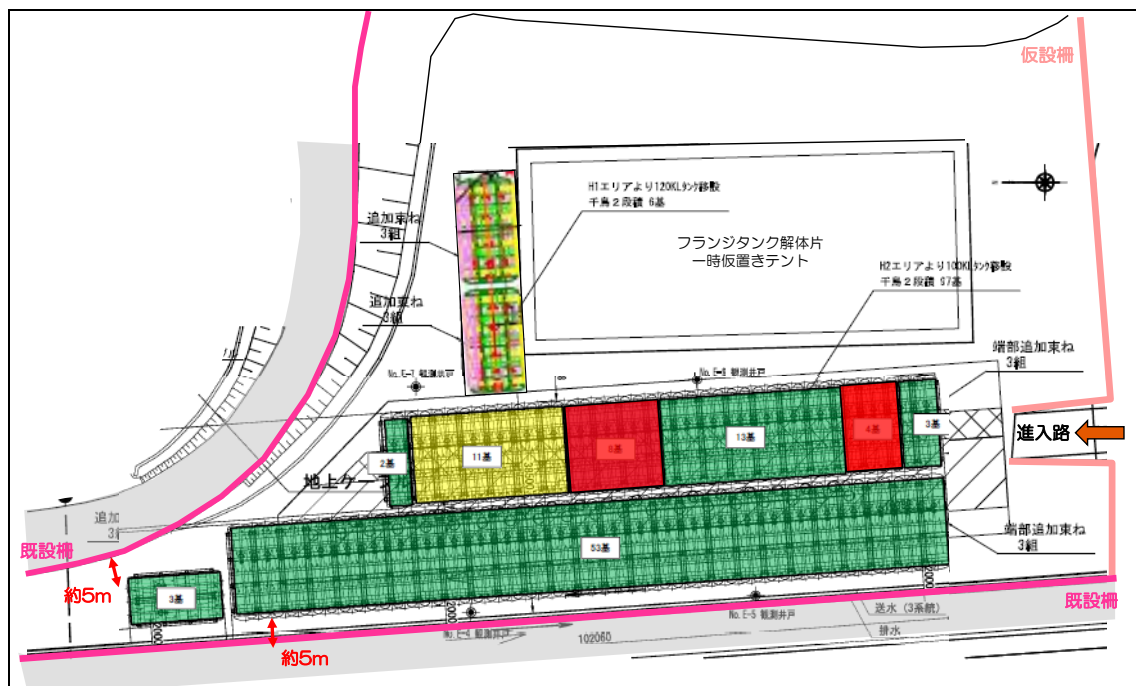


図-10 ブルータンクエリアC区画図



### 3.4. ブルータンクの付属機器

H2 エリアのブルータンクの撤去に伴い、ブルータンク付属機器（ホース及び弁）が瓦礫類として約 130m<sup>3</sup> 発生する。瓦礫類は、1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下（一時保管エリア J・B・C・U・P1・F2・N・0）のエリアまたは受入目安表面線量率 1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア D・E1・P2・W））へ搬入する。

今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。

### 3.5. 仮置き時のブルータンクによる直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

仮置き時のブルータンクは、空の状態で作置きするが、タンク内には貯留していた濃縮廃液による汚染が内包された状態であるため、仮置き時における敷地境界線量に及ぼす影響を評価する。ブルータンクエリア C に仮置きするブルータンクについては、仮置き予定のブルータンクを表面線量率に応じて 3 つに分けて配置し、エリア C1, エリア C2 及びエリア C3 としてモデル化する。各仮置きエリアからの最寄りの敷地境界評価地点における実効線量は以下の通り。

#### (1) ブルータンクエリア C1

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 7	約 $1.10 \times 10^{-2}$
(参考) No. 15	約 $1.05 \times 10^{-2}$
(参考) No. 70	約 $4.87 \times 10^{-4}$

#### (2) ブルータンクエリア C2

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 15	約 $4.07 \times 10^{-4}$
(参考) No. 7	約 $3.02 \times 10^{-4}$
(参考) No. 70	約 $1.0 \times 10^{-4}$ 未満

#### (3) ブルータンクエリア C3

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 15	約 $1.85 \times 10^{-3}$
(参考) No. 7	約 $1.39 \times 10^{-3}$
(参考) No. 70	約 $1.0 \times 10^{-4}$ 未満

### 3.6. 仮置き時のブルータンクの安定性について

#### (1) 仮置きブルータンクの耐震性評価

##### ① 仮置きブルータンクの転倒評価

ブルータンクは、俵積み状に2段積みし、仮置きする。ブルータンクの仮置き状態図を図-11に示す。仮置き時のブルータンクは、内部に汚染水がない空の状態であるため、耐震Cクラス相当と考えて、地震による転倒評価を実施した結果、地震による転倒モーメントがタンク自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-6)

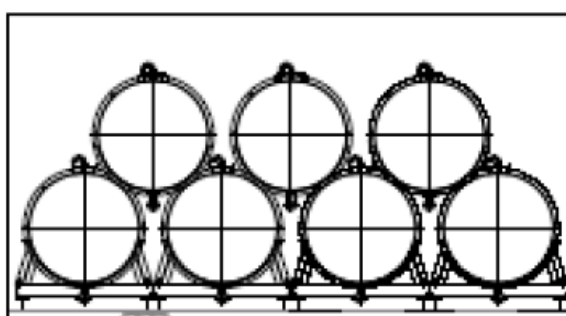
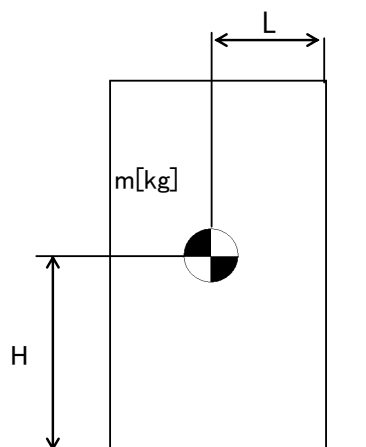


図-11 ブルータンクの仮置き状態



m : 機器質量

g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

H : 据付面からの重心までの距離

L : 転倒支点から機器重心までの距離

C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-6 転倒評価結果

機器名称		評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
ブルータンク	1段目	本体	転倒	0.24	204	557	kN・m
	2段目	本体	転倒	0.24	84	168	kN・m

② 仮置きブルータンクの滑動評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力は接触面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した。(表-7)

表-7 滑動評価結果

機器名称	評価項目	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値	許容値	単位
ブルータンク	滑動	0.24	0.24	0.52	-

(2) 周辺機器への波及的影響について

仮置きブルータンクについて耐震Cクラス相当の地震による転倒、滑動評価を実施して問題ないことを確認しているが、仮置きブルータンク周辺には、その他の機器が複数設置されていることから、機器自身の耐震クラスを超える地震によって周辺機器へ及ぼす波及的影響について考慮する。

① 周辺機器の状況

ブルータンクエリアCの周辺の機器配置図を図-12に示す。

ブルータンクエリアCの周辺近傍には、電源ケーブル、地下水バイパス設備が設置されている。

周辺機器の状況から仮置きブルータンクが地震により転倒・滑動することによって、周辺の機器が損傷しないことを確認する。なお、地震時の機能要求のない地下水バイパスは、評価の対象外とする。

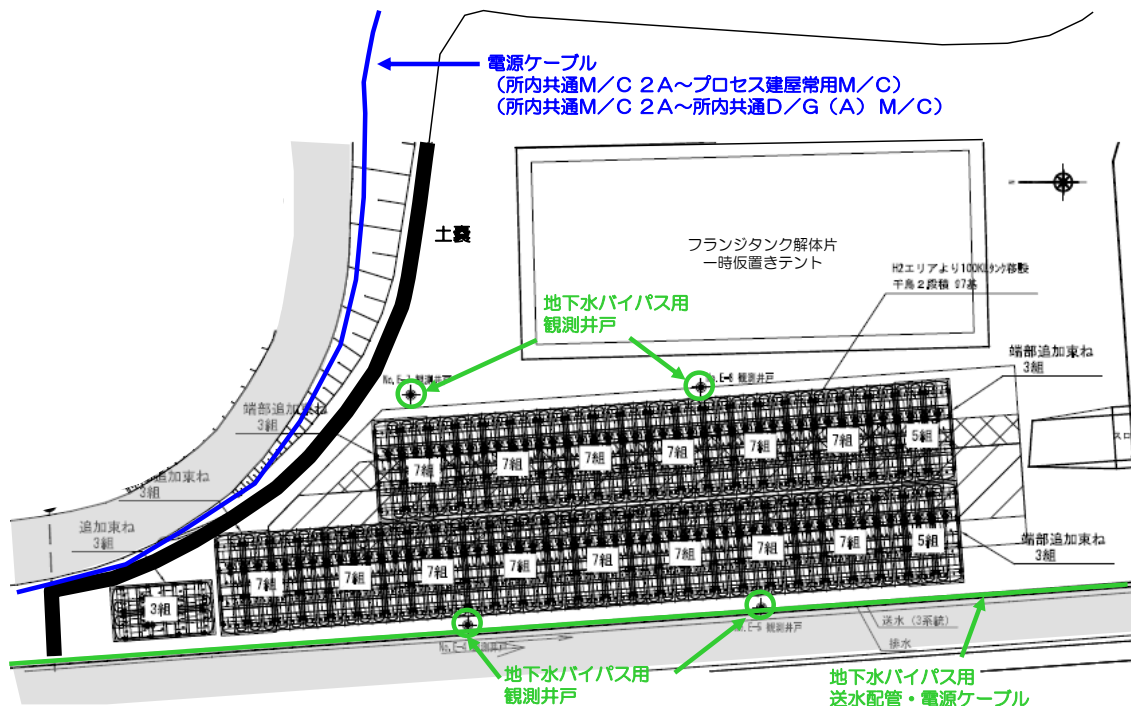


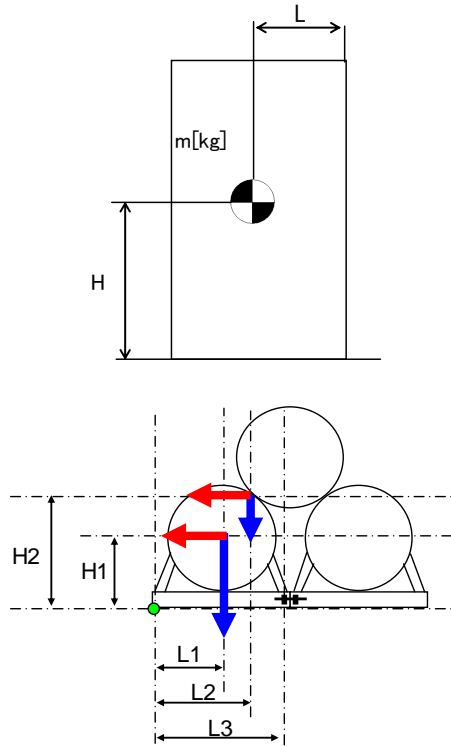
図-12 ブルータンクエリアC周辺図

② 耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価

仮置きブルータンクに対して、耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を行う。

a. ブルータンク 1 段目の締結ボルトの強度評価

据付面とベース端部の接点を転倒支点とし、水平方向地震動による転倒評価をした結果、隣接タンクとの締結ボルトの強度が確保されることを確認した。(表-8)



$m_1$  : 1 段目タンク重量

$m_2$  : 2 段目タンク重量

$H_1$  : 据付面から重心までの垂直距離

$H_2$  : 据付面から 2 段目タンク接点までの垂直距離

$L_1$  : ベース端部から機器重心までの水平距離

$L_2$  : ベース端部から 2 段目タンク接点までの水平距離

$L_3$  : ベース端部から締結ボルトまでの水平距離

$n_f$  : 引張力の作用する締結ボルトの評価本数

$n$  : せん断力の作用する締結ボルトの評価本数

$A$  : 締結ボルトの軸断面積

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

$$\text{締結ボルトに作用する引張力} : F = \frac{g}{L_3} \{ C_H \times ( m_1 \times H_1 + m_2 \times H_2 ) - ( m_1 \times L_1 + \frac{m_2}{2} \times L_2 ) \}$$

$$\text{締結ボルトの引張応力} : \sigma = \frac{F}{n_f \times A}$$

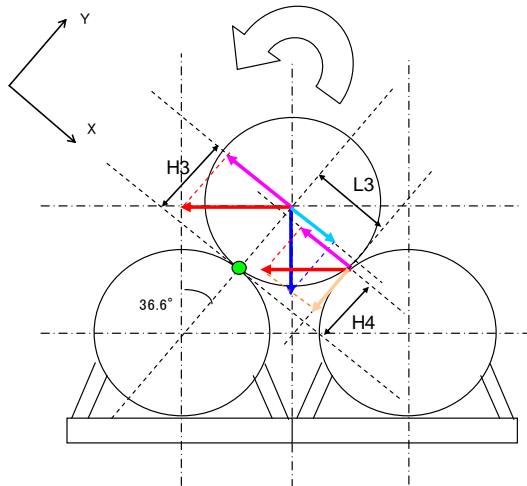
$$\text{締結ボルトのせん断応力} : \tau = \frac{(m_1 + m_2) \times g \times C_H}{n \times A}$$

表-8 タンク 1 段目の耐震Sクラス評価結果

評価対象	評価部位	評価項目	算出値	許容値	単位
タンク 1 段目	締結ボルト	引張	6	176	MPa
		せん断	42	135	MPa

b. ブルータンク 2 段目の転倒評価

2 段目と 1 段目との接点を転倒支点とし、水平方向地震動、タンク自重による転倒および抵抗モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも抵抗モーメントが大きくなるため、2 段目のタンクが転倒することはないことを確認した。(表-9)



$m_1$  : 1 段目タンク重量

$m_2$  : 2 段目タンク重量

$H_3$  : 転倒支点から重心までの Y 成分距離

$H_4$  : 転倒支点からタンク接点までの Y 成分距離

$L_3$  : 転倒支点からタンク接点までの X 成分距離

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

転倒モーメント :  $M_3[\text{N} \cdot \text{m}] = m \times g \times C_H \times H = g \times C_H \times \cos \theta \times (m_2 \times H_3 + m_1 \times H_4)$

安定モーメント :  $M_4[\text{N} \cdot \text{m}] = m \times g \times H + m \times g \times C_H \times L = g \times \sin \theta \times (m_2 \times H_3 + C_H \times m_1 \times L_3)$

表-9 タンク 2 段目の耐震 S クラス評価結果

評価対象	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値 $M_3$	許容値 $M_4$	単位
タンク 2 段目	0.72	251.4	252.5	kN・m

c. ブルータンクのすべり量評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力が接地面の摩擦力より大きくなり、滑動する結果となったことから、すべり量の評価を実施した。

すべり量は、ブルータンク1段目とブルータンク2段目の接地面に対する累積変位量として、地震応答加速度時刻歴をもとに算出した。評価の結果、ブルータンク全長14mに対して小さいことから、2段目のブルータンクが1段目から落下することはないことを確認した。(表-10)

表-10 すべり量評価結果

評価対象	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ブルータンク	すべり量	0.60	57.5	7000	mm

### ③ 追加的安全措置

仮置きブルータンクについて耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を実施し、周辺機器へ影響を与えないことを確認したが、更なる安全性向上のために追加的措置を行う。

仮置きブルータンク自体については、1段目の端に位置するタンク及び2段目の端に位置するタンクが地震により転倒すると想定し、1段目の端に位置する2基と2段目の1基の計3基をラッシングベルトで固縛して一体化する。

電源ケーブル（所内共通 M/C2A～所内共通 D/G(A)M/C, 所内共通 M/C2A～プロセス建屋常用 M/C）については、仮置きブルータンクとの間に土嚢を設置することにより、仮置きブルータンクが転倒することを想定した場合に、電源ケーブルが損傷するリスクを低減する。

## 3.7 自然災害対策等

### (1) 津波

ブルータンクは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33m に仮置きするため、津波の影響は受けない。

### (2) 台風（強風）

建築基準法施行令及び建設省告示に基づいて評価したブルータンクに加わる風荷重が、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」における耐震Cクラス相当の地震荷重に比べて小さいため、ブルータンクは、仮置き状態において台風（強風）により転倒しない。

### (3) 豪雨

ブルータンクは、開口部を閉止して仮置きするため、雨水が内部に浸入しない。



#### 4. 高濃度滞留水受タンク，中低濃度滞留水受タンク（完成品）

高濃度滞留水受タンク（完成品），中低濃度滞留水受タンク（完成品）は，G 1エリアのブルータンク（計 100 基）であり，中低濃度滞留水受タンクに貯留しているRO処理水（淡水）を他のエリアのG 3に移送し，ブルータンクの汚染拡大防止策を図った上で，同エリアのブルータンクエリアDに仮置きを行う。ブルータンクの仮置き場所を図-13に示す。

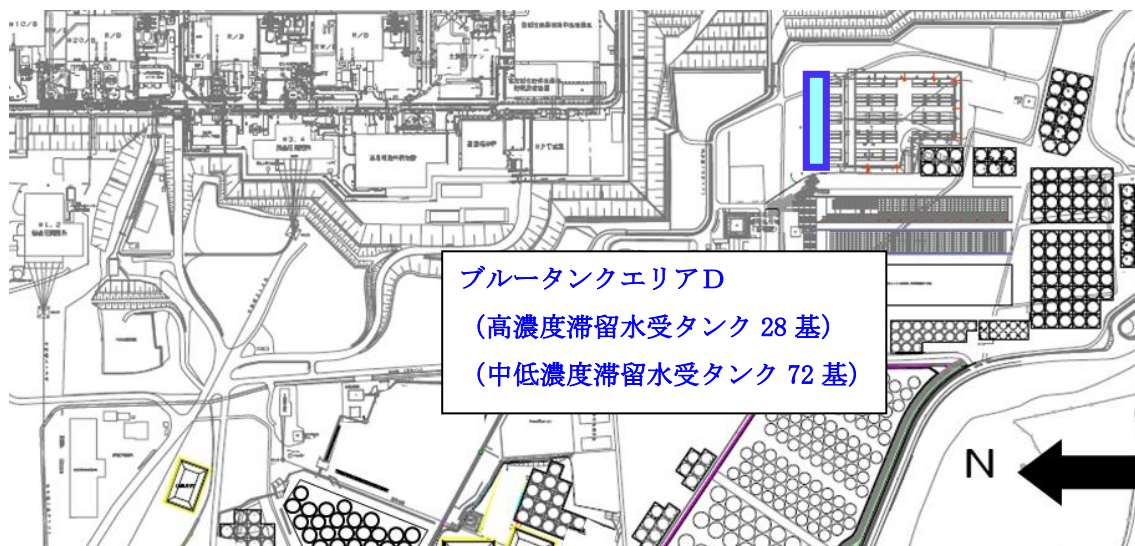


図-13 ブルータンクの仮置き場所

##### 4.1. RO処理水移送に係わる漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

(1) 仮設ホース，仮設ポンプを使用してRO処理水を移送する際は，漏えい防止策として，仮設ホースの継手部をカムロック式とし，番線等で固縛して，継手の外れ防止を行う。また，漏えい拡大防止策として，仮設ホースの継手部を袋で養生し下部に水受けを設けることにより，漏えい時に汚染水を受けられるようにする。移送中は作業員による常時監視を行い，漏えいが発生した場合でも，速やかに移送ポンプを停止し，移送を中断できる体制とする。

(2) RO処理水の移送後は，ブルータンクの付属機器（出入口配管等）を取り外し，タンク内に残水がないことを確認した後に，取り外し部をフランジで閉止する。

#### 4.2. 仮置き時のブルータンクの管理

##### (1) 区画

ブルータンクの仮置き場所に関係者以外が立ち入らないように、柵等で区画を明示するとともに、立入制限の表示を行う。

##### (2) 線量率測定

被ばく低減の観点から、仮置きエリアの線量当量率を定期的に測定し、作業員への注意喚起のために測定結果を表示する。

##### (3) 巡視，仮置き状態確認

ブルータンクの仮置き状態を確認するため、定期的に仮置きエリアを巡視する。

#### 4.3. 被ばく低減

ブルータンクの仮置きに伴ってエリア周辺における作業員の被ばく線量が増加するのを防止するために、エリア周辺の線量当量率において、仮置きブルータンクからの線量寄与がほとんど無視できる範囲に可能な限り区画をして立入制限を行う。エリア周辺の道路や干渉物の制約により、仮置きブルータンクからの線量寄与がほとんど無視できる範囲に区画をできない場合は、設置可能な範囲で最大限の距離を取って区画をするとともに、線量率表示による注意喚起を通して被ばく低減を図る。ブルータンクエリアの区画图を図-14に示す。

なお、今後、敷地内の線量低減が進み、当該エリア周辺における仮置きブルータンクからの線量寄与により目標線量当量率※を達成できなくなると想定される場合には、適切な遮へいまたはブルータンクの移設等の追加処置により線量低減を図る。

※「Ⅲ 第三編 3.1.3 敷地内に飛散した放射性物質の拡散防止及び除染による線量低減」参照

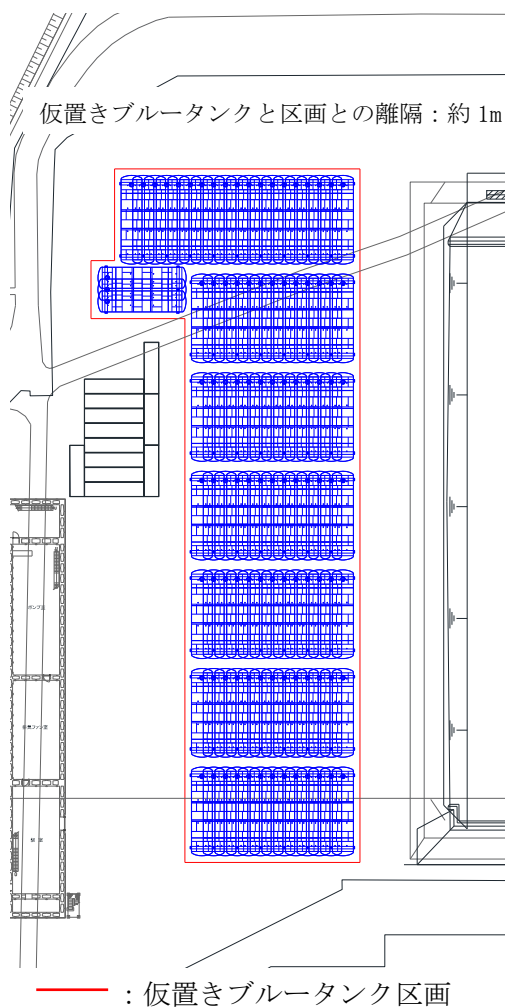


図-14 ブルータンクエリアD区画图

#### 4.4. ブルータンクの付属機器

G1 エリアのブルータンクの撤去に伴い、ブルータンク付属機器（ホース及び弁）が瓦礫類として約 480m<sup>3</sup> 発生する。瓦礫類は、1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時的保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下（一時的保管エリア J・B・C・U・P1・F2・N・O）のエリアまたは受入目安表面線量率 1mSv/h 以下のエリア（一時的保管エリア D・E1・P2・W））へ搬入する。

今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時的保管することにより保管容量を確保する。

#### 4.5. 仮置き時のブルータンクによる直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

仮置き時のブルータンクは、空の状態では仮置きするが、タンク内には貯留していた RO 処理水による汚染が内包された状態であるため、仮置き時における敷地境界線量に及ぼす影響を評価する。ブルータンクエリア D に仮置きするブルータンクについては、仮置き予定のブルータンクを 1 つのモデルとして評価する。各仮置きエリアからの最寄りの敷地境界評価地点における実効線量は以下の通り。

##### (1) ブルータンクエリア D

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 7	約 $7.8 \times 10^{-7}$

4.6. 仮置き時のブルータンクの安定性について

(1) 仮置きブルータンクの耐震性評価

① 仮置きブルータンクの転倒評価

ブルータンクは、俵積み状に2段積みし、仮置きする。ブルータンクの仮置き状態図を図-15に示す。仮置き時のブルータンクは、内部に汚染水がない空の状態であるため、耐震Cクラス相当と考えて、地震による転倒評価を実施した結果、地震による転倒モーメントがタンク自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-11)

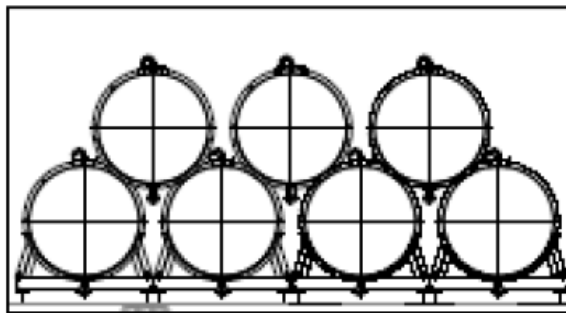
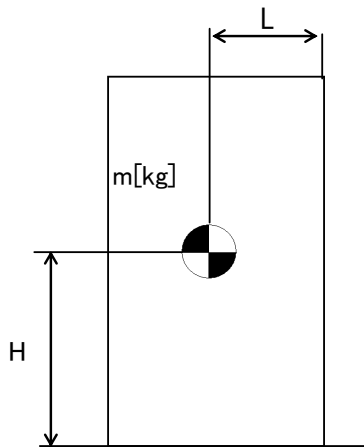


図-15 ブルータンクの仮置き状態



m : 機器質量

g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

H : 据付面からの重心までの距離

L : 転倒支点から機器重心までの距離

C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-11 転倒評価結果

機器名称		評価 部位	評価 項目	水平方向 設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
ブルータンク	1段目	本体	転倒	0.24	204	557	kN・m
	2段目	本体	転倒	0.24	84	168	kN・m

② 仮置きブルータンクの滑動評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力は接触面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した。(表-12)

表-12 滑動評価結果

機器名称	評価項目	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値	許容値	単位
ブルータンク	滑動	0.24	0.24	0.52	-

(2) 周辺機器への波及的影響について

仮置きブルータンクについて耐震Cクラス相当の地震による転倒、滑動評価を実施して問題ないことを確認しているが、仮置きブルータンク周辺には、その他の機器が複数設置されていることから、機器自身の耐震クラスを超える地震によって周辺機器へ及ぼす波及的影響について考慮する。

① 周辺機器の状況

ブルータンクエリアDの周辺の機器配置図を図-16に示す。

ブルータンクエリアDの周辺近傍には、廃スラッジ建屋及び濃縮処理水タンクが仮置きされている。

周辺機器の状況から仮置きブルータンクが地震により転倒・滑動することによって、周辺の機器が損傷しないことを確認する。なお、地震時の機能要求のない濃縮処理水タンクは、評価の対象外とする。

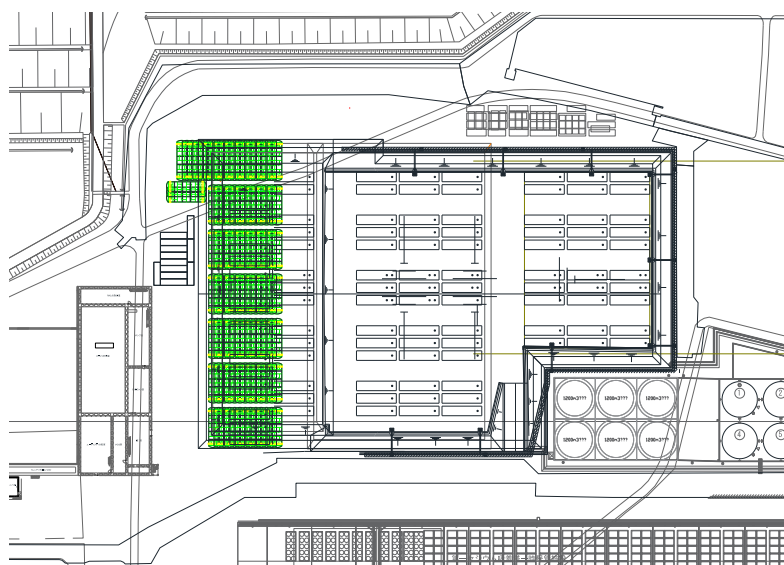


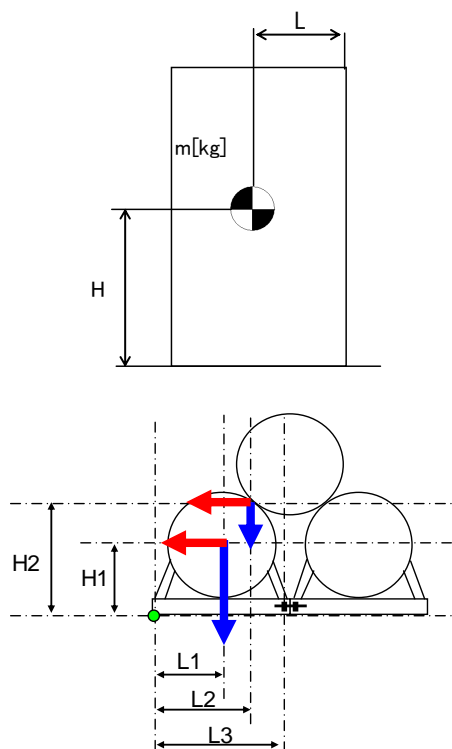
図-16 ブルータンクエリアD周辺図

② 耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価

仮置きブルータンクに対して、耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を行う。

a. ブルータンク 1 段目の締結ボルトの強度評価

据付面とベース端部の接点を転倒支点とし、水平方向地震動による転倒評価をした結果、隣接タンクとの締結ボルトの強度が確保されることを確認した。(表-13)



- $m_1$  : 1 段目タンク重量
- $m_2$  : 2 段目タンク重量
- $H_1$  : 据付面から重心までの垂直距離
- $H_2$  : 据付面から 2 段目タンク接点までの垂直距離
- $L_1$  : ベース端部から機器重心までの水平距離
- $L_2$  : ベース端部から 2 段目タンク接点までの水平距離
- $L_3$  : ベース端部から締結ボルトまでの水平距離
- $n_f$  : 引張力の作用する締結ボルトの評価本数
- $n$  : せん断力の作用する締結ボルトの評価本数
- $A$  : 締結ボルトの軸断面積
- $g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)
- $C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

$$\text{締結ボルトに作用する引張力} : F = \frac{g}{L_3} \{ C_H \times ( m_1 \times H_1 + m_2 \times H_2 ) - ( m_1 \times L_1 + \frac{m_2}{2} \times L_2 ) \}$$

$$\text{締結ボルトの引張応力} : \sigma = \frac{F}{n_f \times A}$$

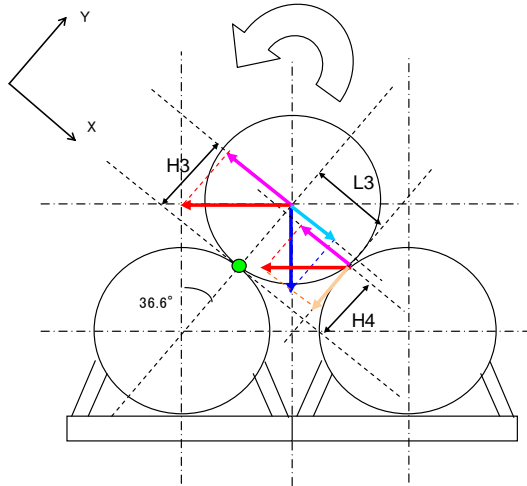
$$\text{締結ボルトのせん断応力} : \tau = \frac{(m_1 + m_2) \times g \times C_H}{n \times A}$$

表-13 タンク 1 段目の耐震Sクラス評価結果

評価対象	評価部位	評価項目	算出値	許容値	単位
タンク 1 段目	締結ボルト	引張	6	176	MPa
		せん断	42	135	MPa

b. ブルータンク 2 段目の転倒評価

2 段目と 1 段目との接点を転倒支点とし、水平方向地震動、タンク自重による転倒および抵抗モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも抵抗モーメントが大きくなるため、2 段目のタンクが転倒することはないことを確認した。(表-14)



$m_1$  : 1 段目タンク重量

$m_2$  : 2 段目タンク重量

$H_3$  : 転倒支点から重心までの Y 成分距離

$H_4$  : 転倒支点からタンク接点までの Y 成分距離

$L_3$  : 転倒支点からタンク接点までの X 成分距離

$g$  : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

$C_H$  : 水平方向設計震度 (0.72)

転倒モーメント :  $M_3[N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H = g \times C_H \times \cos \theta \times (m_2 \times H_3 + m_1 \times H_4)$

安定モーメント :  $M_4[N \cdot m] = m \times g \times H + m \times g \times C_H \times L = g \times \sin \theta \times (m_2 \times H_3 + C_H \times m_1 \times L_3)$

表-14 タンク 2 段目の耐震 S クラス評価結果

評価対象	水平方向 設計震度 $C_H$	算出値 $M_3$	許容値 $M_4$	単位
タンク 2 段目	0.72	251.4	252.5	kN・m



c. ブルータンクのすべり量評価

仮置きブルータンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、1段目と2段目のブルータンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力が接地面の摩擦力より大きくなり、滑動する結果となったことから、すべり量の評価を実施した。

すべり量は、ブルータンク1段目とブルータンク2段目の接地面に対する累積変位量として、地震応答加速度時刻歴をもとに算出した。評価の結果、ブルータンク全長14mに対して小さいことから、2段目のブルータンクが1段目から落下することはないことを確認した。(表-15)

表-15 すべり量評価結果

評価対象	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位
ブルータンク	すべり量	0.60	57.5	7000	mm

③ 追加的安全措置

仮置きブルータンクについて耐震Sクラス相当の地震による耐震性評価を実施し、周辺機器へ影響を与えないことを確認したが、更なる安全性向上のために追加的措置を行う。

仮置きブルータンク自体については、1段目の端に位置するタンク及び2段目の端に位置するタンクが地震により転倒すると想定し、1段目の端に位置する2基と2段目の1基の計3基をラッシングベルトで固縛して一体化する。

4.7 自然災害対策等

(1) 津波

ブルータンクは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33m に仮置きするため、津波の影響は受けない。

(2) 台風（強風）

建築基準法施行令及び建設省告示に基づいて評価したブルータンクに加わる風荷重が、「発電用原子炉施設に関する耐震設計審査指針」における耐震Cクラス相当の地震荷重に比べて小さいため、ブルータンクは、仮置き状態において台風（強風）により転倒しない。

(3) 豪雨

ブルータンクは、開口部を閉止して仮置きするため、雨水が内部に浸入しない。

## 5. RO濃縮水貯槽及びRO処理水貯槽

RO濃縮水貯槽（フランジタンク）及びRO処理水貯槽（フランジタンク）は、貯留しているRO濃縮水もしくはRO処理水を直接または多核種除去設備等により処理した後に他の貯槽に移送し、汚染拡大防止を図った上で解体・切断し、構内で保管する。

### 5.1. 残水処理作業時(残水処理前の仮設ポンプによる水抜き作業を含む)の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

汚染水の処理後にタンク底部に残る残水及び散水により発生する汚染水の残水（以下：残水等）の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー及び底部残水回収装置等を使ってタンク底部より残水を回収し、他の貯槽へ移送した後、多核種除去設備等により処理する。

なお、散水により発生する汚染水の量は、1回に1m<sup>3</sup>程度であり、ダスト上昇の追加対策として実施する追加散水を考慮しても最大でタンク1基あたり5m<sup>3</sup>程度であり、汚染水の貯留に支障をきたすことはない。

当該作業を行う際の、漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホースを使用する場合は、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、タンクの撤去にあたり実施する残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には、バキュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより、漏えい時に汚染水を受けられるようにした上で、残水移送中には作業員による常時監視を行う。

### 5.2. 解体作業時の汚染拡大防止策

解体作業手順の概要を図一17に示す。

- a. タンク上部のマンホールからタンク内表面に散水し、表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクを低減する。
- b. 局所排気装置を設置し、タンク下部のマンホールからタンク内部の空気を吸引し、フィルタでろ過することにより、タンク上部から放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- c. タンク解体片は、地面に降ろした後、周辺の汚染レベルを上昇させないように養生等を実施し運搬する。
- d. 最下段の側板及び底板の解体は、残水が完全に除去されていることを確認した後に着手する。
- e. 解体作業の期間中は、タンク上部の空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する。

なお、測定値に異常が確認された場合には、作業を中断し、追加散水や集塵の強化等の対策を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。

- f. 追加散水や集塵の強化等の対策を施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止し、タンク上部に仮天板を取り付ける。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

#### 5.3. 減容作業・保管時の汚染拡大防止策

- a. 切断作業は既設建屋内で実施し、切断に伴い発生するダストを局所排風機で回収することにより汚染の拡大防止とする。
- b. タンク解体片を切断した減容片は、20ft コンテナ（以下、容器）に収納し保管する。
- c. 切断作業の期間中は、既設建屋周辺の空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する。  
なお、測定値に異常が確認された場合には、速やかに作業を中止し、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

#### 5.4. 汚染土壌回収作業時の汚染拡大防止策

H4 エリアフランジタンクの解体・撤去作業の際には、過去に発生した「汚染水貯留設備 R0 濃縮水貯槽からの漏えい事象」に関する報告書に基づいて、タンク基礎下部の汚染土壌を回収し、合わせて土壌の汚染状況について調査を行う。汚染土壌の回収作業は、コンクリート基礎撤去後の土壌の表面線量率を測定し、汚染土壌の回収範囲を絞り込み、対象箇所の土壌の表面線量率が  $\beta$  線で 0.01mSv/h 未満になるまで実施する。当該作業における汚染拡大防止策は以下の通り。

なお、過去に R0 濃縮水を堰外に漏えいした H6 北エリアフランジタンクについても、タンク基礎下部に汚染土壌が確認された場合には、上記と同様の対応を実施する。

- a. 雨水が汚染土壌に混入し汚染が拡大するのを防止するため、汚染が認められる範囲をブルーシート等により養生し、シートの継ぎ目については、防水措置を施す。
- b. 養生したブルーシート等に雨水が溜まる場合は、ブルーシート等の外側に水切りを行う。
- c. H4 北エリアの汚染土壌回収作業は、深層部の汚染土壌を回収するため土止め壁を設置して回収作業を実施する。土止め壁がタンク基礎に及ぼす影響範囲を評価した結果、土止め壁に最も近傍のタンク基礎においても影響範囲外であることを確認している。但し、近傍タンク基礎に変位が生じる場合に備え、汚染土壌回収作業中は近傍タンク基礎の変位を定期的に観測する。仮に近傍タンク基礎に憂慮すべき変位が確認された場合には、変位抑制対策を実施する。

#### 5.5. 汚染土壌保管時の汚染拡大防止策

回収した汚染土壌は、一時保管エリアに運搬して、土嚢に収納した上で金属製容器に入

れて屋外保管する。汚染拡大防止策は以下の通り。

- a. 回収した汚染土壌は、滞留水起源の汚染土壌であるため、金属製容器に収納する。
- b. 汚染土壌を金属製容器に収納する際には、容器上部をシート等で養生し、雨水浸入防止対策も兼ねる。

また、回収した汚染土壌の保管完了から1年以内に、汚染土壌保管エリアに堰及び屋根の設置を完了させることにより、汚染土壌を入れた金属製容器内に雨水等が浸入し、汚染土壌と混ざることによって汚染水が発生し、金属製容器から漏れ出す事象に対する漏れい拡大防止対策とする。

#### 5.6. 作業員の被ばく低減

- a. タンク内の残水処理では、底部残水回収装置を用いて可能な限り遠隔操作を行うことにより、被ばく低減を図る。
- b. タンク底部の解体では、ゴムマット等を敷くことにより、β線の被ばく低減を図る。
- c. タンク切断では、可能な限り遠隔作業により被ばくの低減を図る。
- d. 解体作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、念のため全面マスクを着用する。

ポンプおよび配管の開放作業時においても、全面マスクを着用して作業を実施する。なお、開放作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空気中の放射性物質濃度を測定し、必要に応じて遮へい、局所排風機、ハウスを設置する。また、機器の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。

#### 5.7. 瓦礫類発生量

- a. フランジタンクの解体・撤去に伴い、H1 エリア：約 2,500m<sup>3</sup>、H2 エリア：約 5,900m<sup>3</sup>、H4 エリア(汚染土壌を含む)：約 15,100m<sup>3</sup>、B エリア：約 4,400m<sup>3</sup>、H3 エリア：約 2,700m<sup>3</sup>、H5 エリア：約 5,600m<sup>3</sup>、H6 エリア：約 2,000m<sup>3</sup>、G6 エリア：約 5,900m<sup>3</sup>、H5 北エリア：約 1,700m<sup>3</sup>、H6 北エリア(汚染土壌を含む)：約 4,400m<sup>3</sup>、G4 南エリア：約 6,080m<sup>3</sup>、E エリア：約 15,990 m<sup>3</sup>、C エリア：約 2,750m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。
- b. 瓦礫類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア(受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア(一時保管エリア C, N, O, P1, AA))へ搬入する。  
ただし、表面線量率 0.1mSv/h を超えた瓦礫類は、エリア E1, P2, W, X へ保管し、タンク減容片を保管した容器については、一時保管エリア P1 または AA へ搬入する。  
また、表面線量率 1mSv/h を超えて 30mSv/h 以下の瓦礫類は、固体廃棄物貯蔵庫第 6, 7, 8, 9 棟へ搬入する。
- c. 今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他

の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。また、固体廃棄物貯蔵庫の追設等を行うことにより容量不足を解消していく。

#### 5.8. 保管時の安定性評価

- a. 容器は、4段積みし、一時保管エリア P1 において、4行×4列×4段または1行×4列×4段を1ブロックとして、容器間を連結し固定した上で、保管する。また、一時保管エリア AA では、1行×1列×4段で保管する。保管の状態図を図-18-1, 2, 3に示す。
- b. 保管場所は、表面線量率 0.1mSv/h 以下の瓦礫類の一時保管エリア P1 または表面線量率 0.001mSv/h 以下の瓦礫類の一時保管エリア AA とする（図-19）。
- c. 容器は、内部に汚染水がない状態であるため、耐震Cクラス相当と考えて、地震による転倒評価を実施した。容器は4行×4列×4段または1行×4列×4段を1ブロックとして一体で評価した。評価の結果、地震による転倒モーメントが、1ブロックの自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。（表-16-1, 2）また、一時保管エリア AA では、容器の転倒・落下により内容物が容器から出たとしても、屋外集積している状況と変わらないため、耐震性は考慮せず、4段積みを行う。

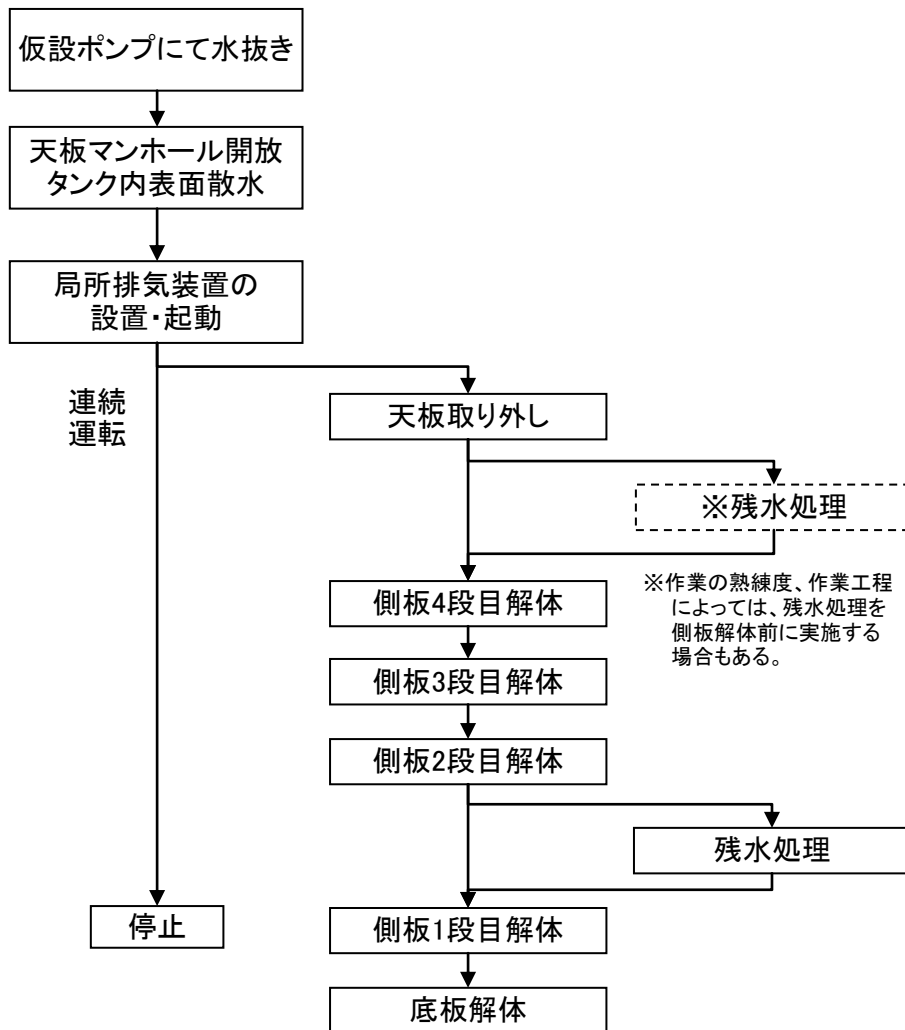


図-17 解体作業のフロー

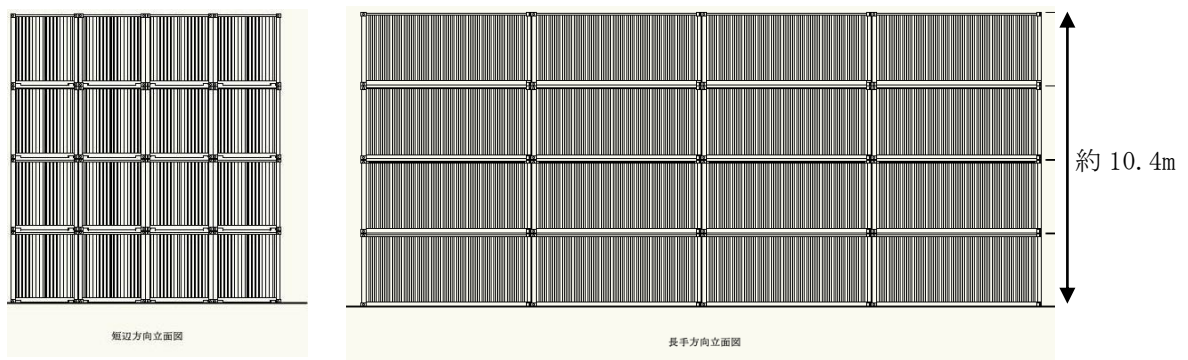


図-18-1 容器の保管状態

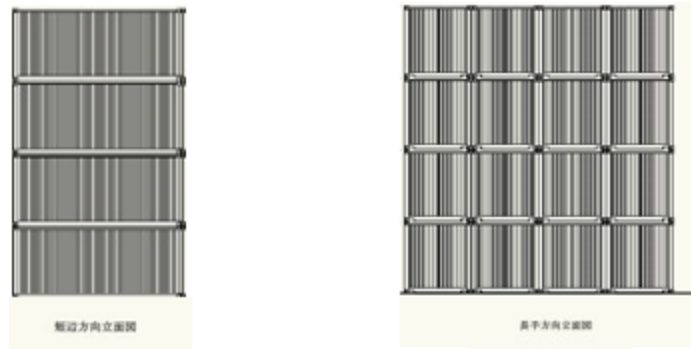


図-18-2 容器の保管状態

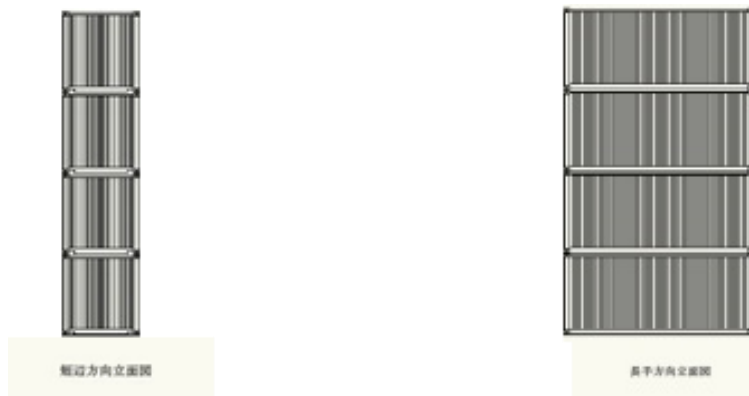
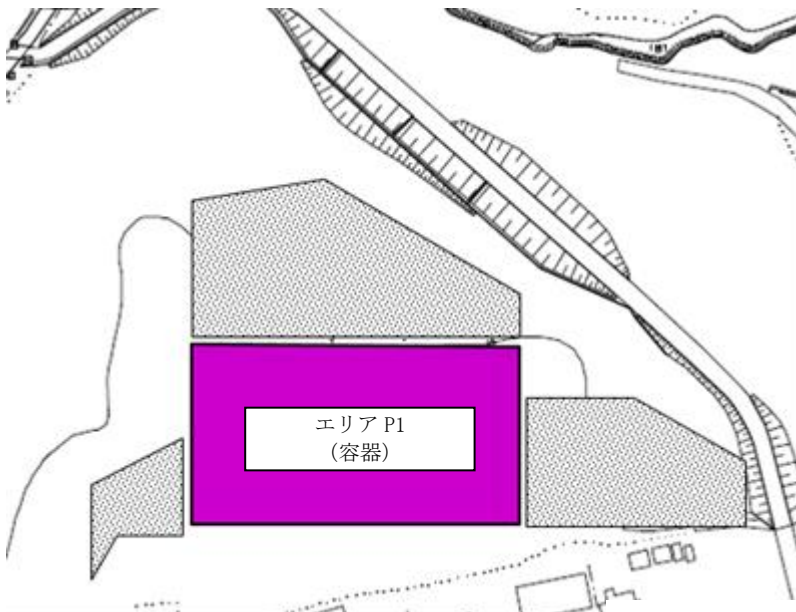


図-18-3 容器の保管状態

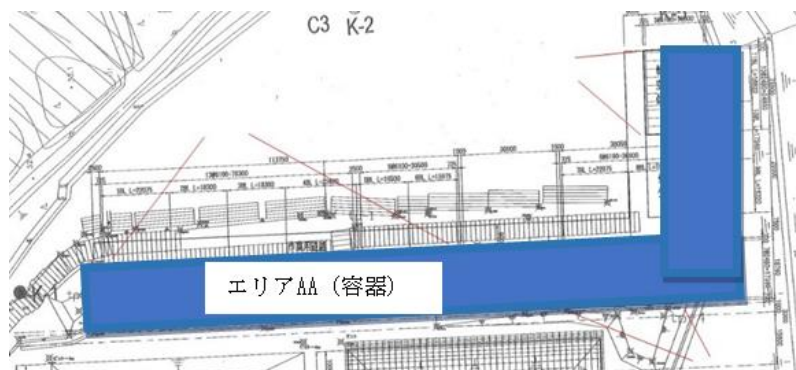


一時保管エリア（エリア P1, AA）



エリア P1 詳細

H28 年 11 月現在

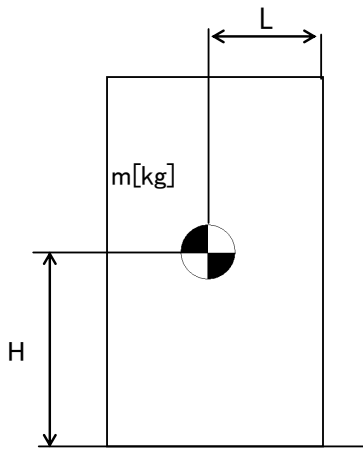


エリア AA 詳細

H29 年 12 月現在

図-19 容器を保管する一時保管エリア（エリア P1, AA）





m : 機器質量  
g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)  
H : 据付面からの重心までの距離  
L : 転倒支点から機器重心までの距離  
C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-16-1 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	4.60 × 10 <sup>3</sup>	1.80 × 10 <sup>4</sup>	kN・m

表-16-2 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	1.15 × 10 <sup>3</sup>	2.79 × 10 <sup>3</sup>	kN・m

## 6. 中低濃度タンクを雨水回収タンクに転用する場合のタンク洗浄について

雨水回収タンクに転用する中低濃度タンクは、貯留水を多核種除去設備等により処理した後、他の貯槽に移送し、汚染拡大防止を図った上で洗浄を実施する。

### 6.1. 洗浄作業時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

洗浄で発生した底部に残る洗浄水及び残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー及び底部残水回収装置等を使ってタンク底部より洗浄水及び残水を回収し、他の貯槽へ移送した後、多核種除去設備等により処理する。当該作業を行う際の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホースを使用する場合は、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、タンクの撤去にあたり実施する残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には、バキュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより、漏えい時に洗浄水及び残水を受けられるようにした上で、洗浄水及び残水移送中には作業員による常時監視を行う。

### 6.2. 洗浄作業時の汚染拡大防止策

当該作業を行う際の、汚染拡大防止策は以下の通り。

- a. タンク内表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクを低減する。
- b. 局所排気装置を設置し、タンク下部のマンホールからタンク内部の空気をフィルタでろ過することにより、タンク上部のマンホールから放射性物質が飛散するリスクを抑制する。

### 6.3. 作業員の被ばく低減

- a. 洗浄作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、念のため全面マスクを着用する。
- b. タンク内の処理では、底部残水回収装置を用いて可能な限り遠隔操作を行うことにより、被ばく低減を図る。

## 7. RO濃縮水貯槽(Dエリア)をRO処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽に転用する場合のタンク洗浄について

RO処理水貯槽及び蒸発濃縮処理水貯槽に転用するRO濃縮水貯槽(Dエリア)は、貯留水を多核種除去設備等により処理した後に他の貯槽に移送し、汚染拡大防止策を行った上で洗浄を実施する。

### 7.1. 洗浄作業の方法について

転用するタンクのうち、タンク入口／出口の移送配管が接続されているタンクの洗浄作業の流れは以下の通り。

- ① タンク上部マンホールを開放し、高圧洗浄機を使用してタンク内側面の洗浄を行う。
- ② タンク側面マンホールを開放し、ろ過水によりタンク連結管の洗浄、高圧洗浄機を使用してタンク内側面の洗浄を行う。
- ③ タンク入口／出口の移送配管については、配管開放端部より、仮設ポンプ等を使用してろ過水を圧送し、配管内部の付着物質を洗い流す。
- ④ ②、③と並行して、タンク内底面の残水（スラッジ含む）回収を行う。作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカーを使用する。
- ⑤ 残水回収の完了後、水質確認のためにタンク内側面、タンク連結管にろ過水を散水する。なお、散水量はタンク内底面が浸る量(1～3m<sup>3</sup>程度)とする。溜まった水を採水し、水質確認(分析)を行う。その後、残水回収を行う。
- ⑥ タンク入口／出口の移送配管が接続されているタンクについては、③の手順にて新たにろ過水をタンク内へ圧送し、⑤の水と混ぜたものを採水、水質確認(分析)を行う。
- ⑦ タンク内面点検を行う。かき傷等が確認された場合は補修塗装を行う。
- ⑧ タンク内面点検の完了後、各マンホールを閉止する。

転用するタンクのうち、タンク入口／出口の移送配管が接続されていないタンクの洗浄作業の流れは以下の通り。

- ① タンク上部マンホールを開放し、高圧洗浄機を使用してタンク内側面の洗浄を行う。
- ② タンク側面マンホールを開放し、ろ過水によりタンク連結管の洗浄、高圧洗浄機を使用してタンク内側面の洗浄を行う。
- ③ ②と並行して、タンク内底面の残水（スラッジ含む）回収を行う。作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカーを使用する。
- ④ 残水回収の完了後、水質確認のためにタンク内側面、タンク連結管にろ過水を散水する。なお、散水量はタンク内底面が浸る量(1～3m<sup>3</sup>程度)とする。溜まった水を採水し、水質確認(分析)を行う。その後、残水回収を行う。
- ⑤ タンク内面点検を行う。かき傷等が確認された場合は補修塗装を行う。
- ⑥ タンク内面点検の完了後、各マンホールを閉止する。

## 7.2. 洗浄作業時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

洗浄で発生した底部に残る洗浄水及び残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー等を使ってタンク底部より洗浄水及び残水を回収し、他の貯槽へ移送した後、多核種除去設備等により処理する。当該作業を行う際の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホースを使用する場合は、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には、バキュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより、漏えい時に洗浄水及び残水を受けられるようにした上で、洗浄水及び残水移送中には作業員による常時監視を行う。

## 7.3. 洗浄作業時の汚染拡大防止策

当該作業を行う際の汚染拡大防止策は以下の通り。

- a. タンク内表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクの低減、及びタンク転用後の水質悪化を抑制する。
- b. 局所排気装置を設置し、タンク下部のマンホールからタンク内部の空気をフィルタでろ過することにより、タンク上部のマンホールから放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- c. 作業の期間中は、空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、作業を中断し、追加散水や集塵の強化等の対策を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。
- d. 追加散水や集塵の強化等の対策を施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止し、タンク上部のマンホールを閉止する。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

## 7.4. 洗浄作業時の作業員の被ばく低減

- a. 洗浄作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、念のため全面マスクを着用する。なお、作業の期間中は、空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する
- b. タンク内の処理では、作業時間の管理と適切な装備を使用することにより、被ばく低減を図る。

7.5. 貯槽の転用に伴う配管撤去作業に関する補足

- a. 漏えい防止策として、配管の開放・切断作業は、配管系統の隔離処置及び水抜き後に実施する。作業終了後に発生する開放端部には閉止フランジの取付けを行い、系統弁がシートパスした際の漏えいを防止する。
- b. 漏えい拡大防止策として、配管の開放・切断作業を行う箇所下部に水受けを設けることにより、配管内の残水を受けられるようにする。水受けには仮設の水中ポンプを設置し、仮設の集水タンクへ残水を逐次回収できるようにする。仮設の集水タンクには作業員を配置し、水が溜まった際に作業を中断できるよう監視を行う。
- c. 汚染拡大防止策として、配管の開放・切断作業を行う箇所には飛散防止カバーの養生を行う。また、水受けの下部にも飛散防止カバーの養生を行う。
- d. 貯槽転用後のRO濃縮水貯槽との貯留水の混水防止策として、接続されている連結配管の取外しを行い、開放端部には閉止フランジの取付けを行う。
- e. 作業員の被ばく低減策として、配管の開放・切断作業は、発電所構内のルールに基づき、全面マスクを着用して作業を行う。なお、開放作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空気中の放射性物質濃度を測定し、必要に応じて遮へい、局所排風機、ハウスを設置する。また、配管の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。
- f. 本作業において、約 5m<sup>3</sup> の瓦礫類が発生する見込みである。表面線量率 0.1mSv/h 以下の瓦礫類は、屋外の一時保管エリア 0, P1 に保管する。表面線量率 0.1mSv/h を超える瓦礫類は、養生した上で金属製の容器に収納し、エリア E1, P2, W に保管する。なお、詳細については「Ⅲ特定原子力施設の保安 2 放射性廃棄物等の管理に係る補足説明 2.1 放射性廃棄物等の管理」に準じて行う。

## 8. 多核種処理水貯槽，RO 処理水貯槽（H 9）及び蒸発濃縮処理水貯槽（H 9 西）

多核種処理水貯槽（フランジタンク）は，貯留している多核種処理水を他の貯槽に移送し，汚染拡大防止を図った上で解体・切断し，構内で保管する。

RO 処理水貯槽（H 9）（フランジタンク）及び蒸発濃縮処理水貯槽（H 9 西）（フランジタンク）は，貯留している RO 処理水を他の貯槽に移送し，汚染拡大防止を図った上で解体・切断し，構内で保管する。

### 8.1. 残水処理作業時（残水処理前の仮設ポンプによる水抜き作業を含む）の漏えい防止策

残水等の回収処理作業では，仮設ホース，仮設ポンプ，バキュームカー及び底部残水回収装置等を使ってタンク底部より洗浄水及び残水を回収し，他の貯槽へ移送した後，多核種除去設備等により処理する。当該作業を行う際の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として，仮設ホースを使用する場合は，仮設ホースの継手部をカムロック式とし，さらに番線等で固縛して，継手の外れ防止を行う。また，タンクの撤去にあたり実施する残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には，バキュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し，確実にロックされていることを確認する。
- b. 漏えい拡大防止策として，仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより，漏えい時に洗浄水及び残水を受けられるようにした上で，洗浄水及び残水移送中には作業員による常時監視を行う。

### 8.2. 解体作業時の汚染拡大防止策

解体作業手順の概要を図一 20 に示す。

タンク内の汚染状況に応じて，汚染管理を以下の通り行う。ダスト飛散リスクが低いと判断できる場合は，下記の a. b. を省略する。

- a. タンク上部のマンホールからタンク内表面に散水し，表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより，放射性物質の飛散のリスクを低減する。
- b. 局所排気装置を設置し，タンク下部のマンホールからタンク内部の空気を吸引し，フィルタでろ過することにより，タンク上部から放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- c. タンク解体片は，表面汚染レベルに応じて養生等を実施し運搬する。
- d. 最下段の側板及び底板の解体は，残水が完全に除去されていることを確認した後に着手する。
- e. 解体作業の期間中は，汚染状況の把握または汚染拡大の兆候を監視するための作業環境モニタリングを行う。

- f. 空气中放射性物質濃度に異常が確認された場合には、作業を中断し、追加散水や集塵の強化等の対策を実施し、通常時に戻ったことを確認してから再開する。追加散水や集塵の強化等の対策を施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止し、タンク上部に仮天井を取り付ける。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。
  - g. 初回タンクの解体作業期間中は、タンク上部の空气中的放射性物質濃度を確認するが、解体作業中の放射性物質濃度が作業管理基準値未満であった場合は、以降のタンクでは放射性物質濃度の測定について省略する。
- 8.3. 減容作業・保管時の汚染拡大防止策
- a. 切断作業は既設建屋内で実施し、切断に伴い発生するダストを局所排風機で回収することにより汚染の拡大防止とする。
  - b. タンク解体片を切断した減容片は、20ft コンテナ（以下、容器）に収納し保管する。
  - c. 切断作業の期間中は、既設建屋周辺の空气中的放射性物質濃度を定期的に確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、速やかに作業を中止し、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。
- 8.4. 作業員の被ばく低減
- タンク内線量状況を確認し、下記のb. を省略する。
- a. タンク内の残水処理では、高圧洗浄器を用いることにより、作業短縮に努め、被ばく低減を図る。また、必要に応じ、底部残水回収装置等を使用する。
  - b. タンク底部の解体では、ゴムマット等を敷くことにより、β線の被ばく低減を図る。
  - c. タンク解体作業中は、作業環境に応じた装備を着用する。  
ポンプおよび配管の開放作業中は、全面マスクを着用して作業を実施する。なお、開放作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空气中的放射性物質濃度を測定し、必要に応じて遮へい、局所排風機、ハウスを設置する。また、機器の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。
  - d. タンク切断では、可能な限り遠隔作業により被ばくの低減を図る。
- 8.5. 瓦礫類発生量
- a. フランジタンクの解体・撤去に伴い、G4 北エリア：約 2,940 m<sup>3</sup>、G5 エリア：約 8,130m<sup>3</sup>、H9 エリア：約 3,948m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。
  - b. 瓦礫類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア C, N, O, P1, AA））へ搬入する。

ただし、表面線量率 0.1mSv/h を超えた瓦礫類は、エリア E1, P2, W, X へ保管し、タンク減容片を保管した容器については、一時保管エリア P1 または AA へ搬入する。また、表面線量率 1mSv/h を超えて 30mSv/h 以下の瓦礫類は、固体廃棄物貯蔵庫第 6, 7, 8, 9 棟へ搬入する。

- c. 今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。また、固体廃棄物貯蔵庫の追設等を行うことにより容量不足を解消していく。

### 8.6. 保管時の安定性評価

「5.8. 保管時の安定性評価」に同じ。

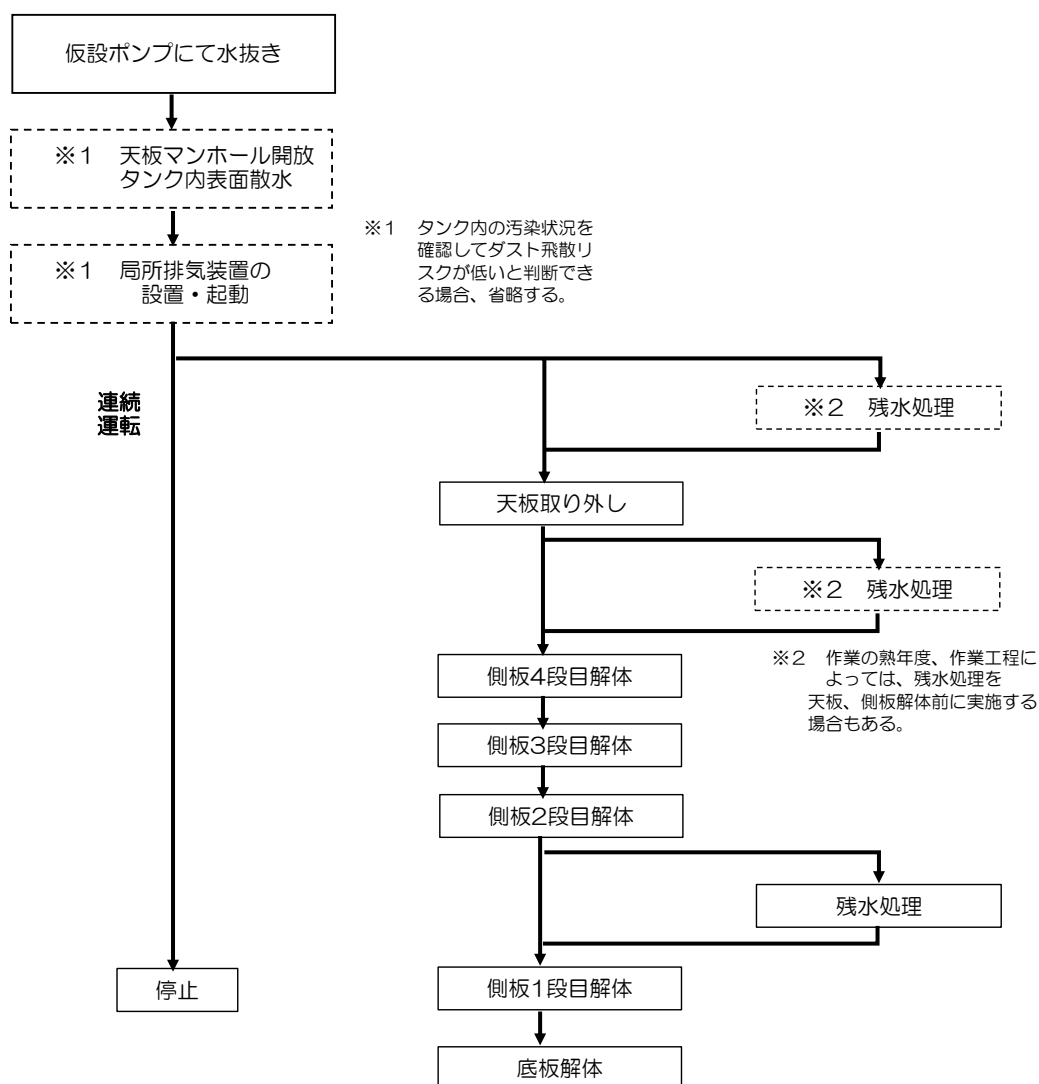


図-20 解体作業のフロー

以上



## 淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）の撤去方法について

淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）の廃止に伴い、解体・撤去作業の方法について定める。

作業にあたっては被ばく量を低減するため、作業エリアのダスト飛散抑制や雰囲気線量率の低減を図る。また、万が一のダスト濃度上昇に備え、全面マスクを着用して作業を実施する。ダスト飛散抑制としては、汚染箇所に対する適切な養生、作業エリアの定期的なダスト測定、局所排風機の設置等を作業内容に応じて適宜実施する。雰囲気線量率の低減としては、高線量物に対する遮へい設置を作業内容に応じて適宜実施する。

## 1. RO 膜及びフィルター

RO 膜及びフィルターは淡水置換し、エアブローにより水抜きした後、収容容器から抜取る。その際は養生袋に受けることでダスト及び残水の飛散を抑制する。また、容器抜き取り時に線量測定を行い、必要に応じて遮へいを行う。抜き取り後はテント内にて養生された状態で静置し水切りを行ったうえで、腐食しないよう袋養生し、金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

RO 膜及びフィルターを抜取った後の容器は、養生された状態で静置して水切りを行ったうえで、細断して腐食しないよう袋養生し、金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

細断はダスト飛散抑制のため、作業ハウスをテント内に設置しフィルター付き局所排風機による排気を行いながら実施する。水抜き時は監視人を配置のうえ仮設の受けパンとダストおよび残水飛散防止のための養生を設置し、回収した残水はプロセス主建屋へ移送する。移送に仮設ホースを使用する場合は漏えい防止策として、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して継手の外れ防止を行う。また、汚染水を取り扱う作業ではアノラックを着用する。

表面線量率は 0.1mSv/h 以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が 0.1mSv/h を超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。

## 2. 急速ろ過塔・MMF・タンク類

急速ろ過塔・マルチメディアフィルター（以下、MMF）は、接続配管の切り離し後、塔内の水抜きを行う。MMF はそのままでは保管容器に入りきらないため、塔上部よりろ過材の回収を行った後、塔内を RO 処理水等で洗浄した上で細断して腐食しないよう袋養生し、金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

タンク類は仮設ポンプ、またはパワープロベスター車を用いて残水の水抜き後、内面に汚

染が確認された場合は洗浄を行った上で細断して腐食しないよう袋養生し、金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

細断はダスト飛散抑制のため、作業ハウスをテント内に設置しフィルター付き局所排風機による排気を行いながら実施する。ろ過材回収時はダストの飛散を抑制するため、作業ハウスおよびグローブボックス、フィルター付き局所排風機を設置する。水抜き時は監視人を配置のうえ仮設の受けパンとダストおよび残水飛散防止のための養生を設置し、回収した残水はプロセス主建屋へ移送する。移送に仮設ホースを使用する場合は漏えい防止策として、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して継手の外れ防止を行う。また、汚染水を取り扱う作業ではアノラックを着用する。

表面線量率は0.1mSv/h以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が0.1mSv/hを超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。

### 3. ポンプ、配管、付属機器

ポンプ、配管類（弁、ホース含む）は、残水の水抜きを行った上で細断して腐食しないよう袋養生し、金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

細断はダストの飛散を抑制するため、養生を行った上で実施する。ポンプの解体・配管の開放は、隔離処置（弁閉）及び水抜き後に実施する。継続使用する設備との切り離しはフランジ部とし、開放部を閉止する。

細断はダスト飛散抑制のため、作業上困難な場合以外はテント内にて、フィルター付き局所排風機による排気を行いながら実施する。水抜き時は監視人を配置のうえ仮設の受けパンとダストおよび残水飛散防止のための養生を設置し、回収した残水はプロセス主建屋へ移送する。また、配管類からの残水が想定より多かった場合に備え、受けパンより水を移送するための仮設タンク、ポンプを準備する。移送に仮設ホースを使用する場合は漏えい防止策として、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して継手の外れ防止を行う。また、汚染水を取り扱う作業ではアノラックを着用する。

付属機器（ケーブル、計器等）は金属製の保管容器に収納し、一時保管エリアにて一時保管する。

表面線量率は0.1mSv/h以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が0.1mSv/hを超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。

#### 4. ダスト飛散抑制対策

解体・撤去作業前に、既設 R0-1, 2 テント内の機器表面および床面の清掃を実施し、ダストの飛散を抑制する。系統機器内の残水はダスト飛散の抑制・漏えい防止対策を施した手順にて回収し、プロセス主建屋地下へ移送する。

解体・撤去作業は極力テント内で行うこととする。テント外の解体対象機器は配管・弁であるが、ダスト飛散を抑制する手順にて切り離しを行い、養生した上でテントへ運び込み切断・保管容器への収納を行う。

解体・撤去期間中においては、作業実施日は毎日、作業前・作業中・作業後においてテント内外のダスト測定を実施する。作業中の測定についてはダスト濃度上昇が最大になると予想される作業中(配管切断等)に実施し、テント内外作業管理基準値を超過した場合は一旦作業を中止し、ダスト飛散元の養生や作業計画の見直しを行う。ダスト測定ポイントについては各テントにおいて、作業計画時に当日でダスト濃度上昇が最大になると予想される箇所で実施する。

テント側面には物品搬出入口を設けるが、搬出入口は作業計画上で必要となる最小サイズとし、開閉可能かつ、閉止時にダストが通過しない構造のカバーを取付け、人が出入りする際、物品搬出入する際以外はカバーを閉止する。

また、物品搬出入時はテント内の作業を中断し、搬出入作業前・作業中・作業後においてテント外のダスト測定を実施する。作業中の測定値について、テント外作業管理基準値を超過した場合は一旦作業を中止し、ダスト飛散元の養生や作業計画の見直しを行う。

また、構内の連続ダストモニタにて放射性物質濃度の監視を行う。

#### 5. 汚染拡大防止

金属製の保管容器は、屋外保管環境下での腐食防止のため、塗装を施した金属材料を使用する。また、保管容器は、雨水が容易に入り難い構造とする。

#### 6. 瓦礫類発生量

撤去に伴う瓦礫類は約 240m<sup>3</sup> 発生する見込みである。

7. 淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）の撤去に係る確認事項について

淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）の撤去に係る確認事項を表－1に示す。

表－1 確認事項  
(淡水化装置（RO-1A/B, RO-2）)

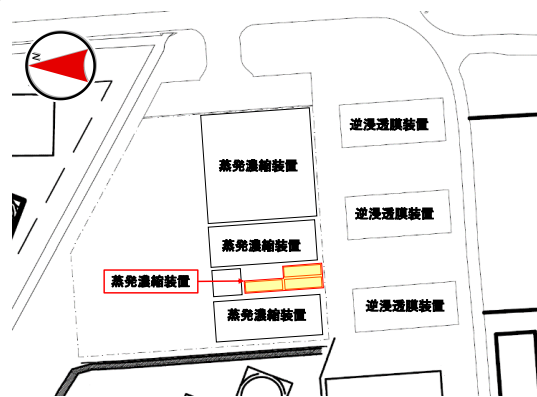
確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能	機能確認	実施計画の通り施工されていることを確認する。	実施計画の通りであること。

以上

蒸留水タンク、濃縮水受タンク、濃縮処理水タンクの撤去方法について

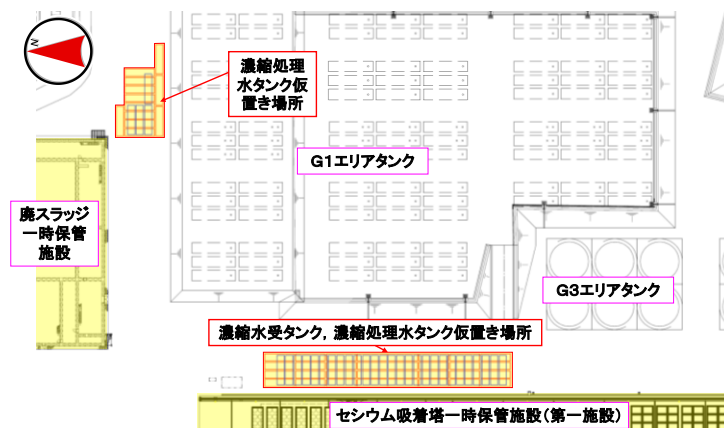
蒸留水タンク、濃縮水受タンク、濃縮処理水タンクの廃止に伴い、核燃料物質その他の放射性物質に汚染されている可能性のあるタンクの撤去作業の方法について定める。

蒸留水タンクは、Cエリアに設置されている角形タンク（計3基）であり、廃止に伴い、現状の場所で再利用予定の資機材として仮置きする。仮置きにあたり、蒸留水タンクの付属機器（出入口配管、蒸留水移送ポンプ等）の取り外しを行い、開口部を閉止する。仮置き場所を図－1に示す。



図－1 蒸留水タンクの仮置き場所

濃縮水受タンク・濃縮処理水タンクはCエリアに設置されている角形タンク（計78基）であり、廃止に伴い撤去し、セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設）および廃スラッジ一時保管施設近隣の仮設ヤードへ移動し、再利用予定の資機材として仮置きする。仮置きにあたり、濃縮水受タンク・濃縮処理水タンクの付属機器（出入口配管・濃縮水供給ポンプ・濃縮処理水供給ポンプ等）の取り外しを行い、開口部を閉止する。タンクは汚染拡大防止策を図った上で撤去し、構内にて仮置きを行う。タンクの仮置き場所を図－2に示す。



図－2 濃縮水受タンク・濃縮処理水タンクの仮置き場所

## 1. 汚染拡大防止策

- (1) 仮置きするタンクは残水確認・移送を実施する。残水移送にあたっては、仮設の移送ポンプを使用し、移送配管には二重にした耐圧ホースを使用する。ホースとホースの接続部は、抜け防止措置を実施の上、水受け内に設置する。また、ホースとホースの接続部はタンクエリア堰内に置くこととし、外部への漏えい防止を図る。移送時には、仮設ポンプ部、ホースとホースの接続部、吐出部に監視員、および電源部にポンプ操作員を配置し、移送時の異常事態に備える。
- (2) 残水の移送後は、仮置きするタンクの付属機器（出入口配管・濃縮水供給ポンプ・濃縮処理水供給ポンプ・蒸留水移送ポンプ等）を取り外し、タンク内に残水がないことを確認した後に、取り外し部をフランジで閉止する。なお、付属機器の取り外しの際には、仮設の水受けを設置する。

## 2. 仮置き時のタンクの管理

- (1) 区画  
タンクの仮置き場所に関係者以外が立ち入らないように、柵等で区画を明示するとともに、立入制限の表示を行う。
- (2) 線量率測定  
被ばく低減の観点から、仮置き場所の線量当量率を定期的に測定し、作業員への注意喚起のために測定結果を表示する。
- (3) 巡視、仮置き状態確認  
仮置きタンクの状態を確認するため、定期的に仮置き場所を巡視する。

## 3. 被ばく低減

タンクの仮置きに伴ってエリア周辺における作業員の被ばく線量が増加するのを防止するために、設置可能な範囲で最大限の距離を取って区画をするとともに、線量率表示による注意喚起を通して被ばく低減を図る。

なお、今後、敷地内の線量低減が進み、当該エリア周辺における仮置きするタンクからの線量寄与により目標線量当量率<sup>※1</sup>を達成できなくなると想定される場合には、適切な遮へいまたは仮置きタンクの移設等の追加処置により線量低減を図る。

※1 「Ⅲ 第三編 3.1.3 敷地内に飛散した放射性物質の拡散防止及び除染による線量低減」参照

## 4. タンクの付属機器

蒸留水タンクの仮置き、濃縮水受タンク・濃縮処理水タンクの撤去・仮置きに伴い、タンク付属機器（配管・ポンプ等）が瓦礫類として約 79m<sup>3</sup>発生する。瓦礫類は、1mSv/h以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリアへ搬入する。

5. 仮置きするタンクによる直接線ならびにスカイシャイン線による実効線量

濃縮水受タンク，濃縮処理水タンク仮置き場所および濃縮処理水タンク仮置き場所に仮置き予定のタンクは，一部RO濃縮水の汚染を内包していることから，仮置き時における敷地境界線量に及ぼす影響を評価する。タンク仮置き状態をモデル化して評価した結果、仮置き場所からの最寄りの敷地境界評価地点における実効線量は以下の通り。

敷地境界評価地点	実効線量 [mSv/年]
No. 7	約 $9.7 \times 10^{-4}$

6. 仮置きするタンクの安定性について

(1) 仮置きするタンクの耐震性評価

仮置きするタンクは，1段積みもしくは2段積みし，仮置きする。2段積みでの仮置き状態図を図-3に示す。仮置きするタンクは，内部に汚染水がない空の状態であるため，耐震Cクラスとし，地震による転倒・滑動評価を実施した。

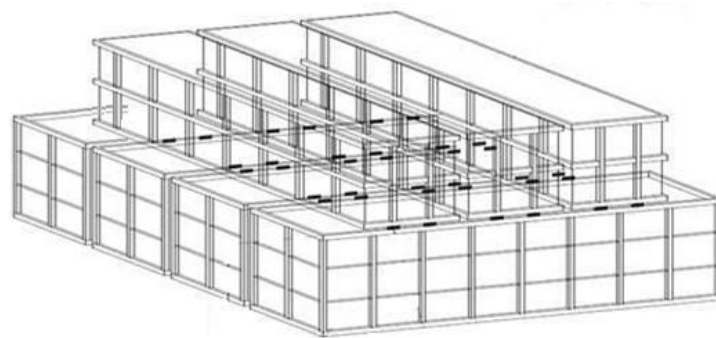
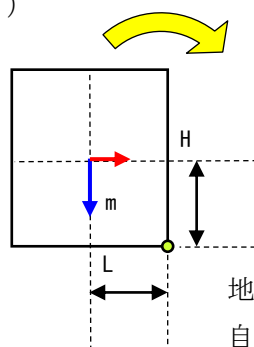


図-3 タンクの仮置き状態

① タンクの転倒評価

a. 1段積みの場合

地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し，それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果，地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから，転倒しないことを確認した。(表-1)



- m： 機器質量
- g： 重力加速度
- H： 据付面からの重心までの距離
- L： 転倒支点から機器重心までの距離
- $C_H$ ： 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント： $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

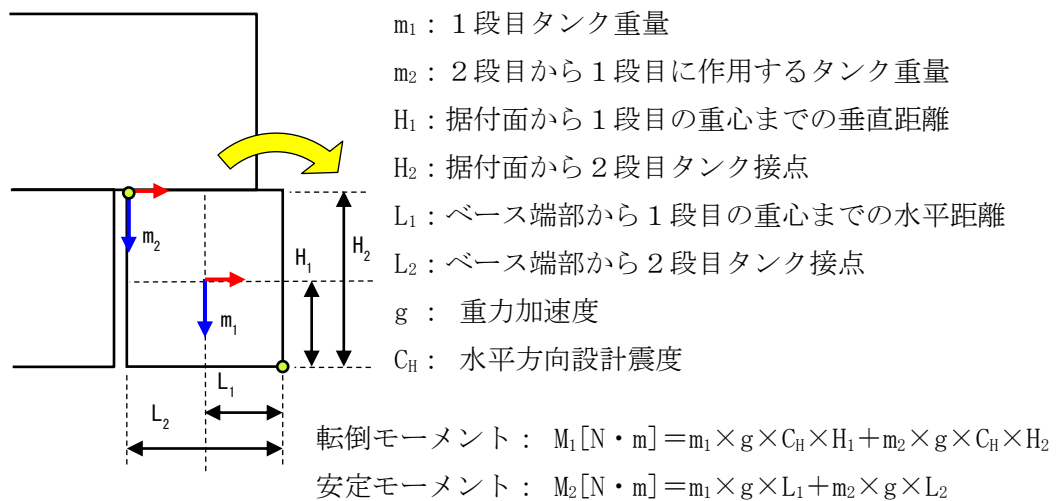
自重による安定モーメント： $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

b. 2段積みの場合

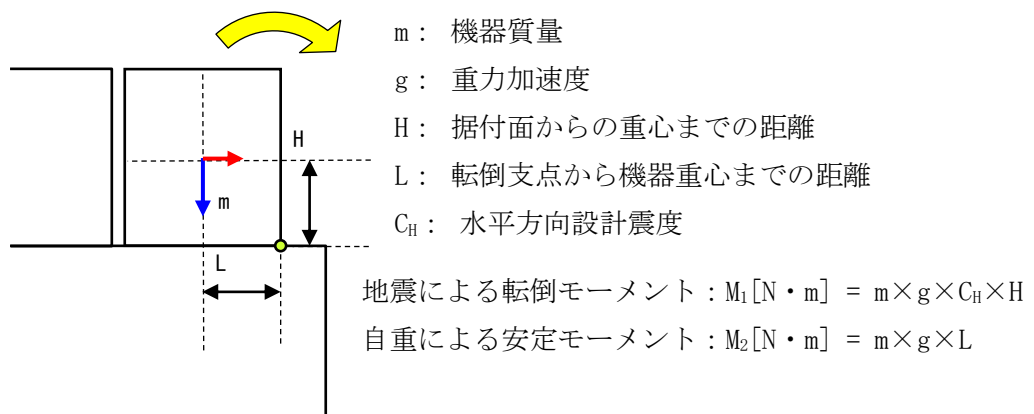
1段目は、転倒支点の対角線上の1段目と2段目との接点を2段目からの転倒作用点として、地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-1)

2段目も地震による転倒モーメントと自重による安定モーメントを算出し、それらと比較することにより転倒評価を実施した。評価の結果、地震による転倒モーメントは自重による安定モーメントより小さいことから、転倒しないことを確認した。(表-1)

○1段目



○2段目





表－1 仮置きタンクの転倒評価結果

機器名称		評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	単位	
仮置きタンク（蒸留水タンク）		本体	転倒	0.24	27	104	kN・m	
仮置きタンク （濃縮水受タンク・ 濃縮処理水タンク）	1段積み	本体	転倒	0.24	27	104	kN・m	
	2段 積み	1段目	本体	転倒	0.24	74	292	kN・m
		2段目	本体	転倒	0.24	27	104	kN・m

② タンクの滑動評価

仮置きするタンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、地面と1段目、1段目と2段目の仮置きタンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力は接触面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した。（表－2）

表－2 仮置きタンクの滑動評価結果

機器名称		評価部位	評価項目	水平震度	算出値	許容値	
仮置きタンク（蒸留水タンク）		本体	滑動	0.24	0.24	0.4	
仮置きタンク （濃縮水受タンク・ 濃縮処理水タンク）	1段積み	本体	滑動	0.24	0.24	0.52	
	2段 積み	1段目	本体	滑動	0.24	0.24	0.52
		2段目	本体	滑動	0.24	0.24	0.52

(2) 周辺機器への波及的影響について

仮置きするタンクについて耐震Cクラスの地震による転倒、滑動評価を実施して問題ないことを確認しているが、現状の設置場所から撤去し、仮置き場所に移動させるタンクについては、移動先の濃縮水受タンク、濃縮処理水タンク仮置き場所および濃縮処理水タンク仮置き場所の周辺に、その他の機器が複数設置されていることから、機器自身の耐震クラスを超える地震によって周辺機器へ及ぼす波及的影響について考慮する。

① 周辺機器の状況

濃縮水受タンク、濃縮処理水タンク仮置き場所および濃縮処理水タンク仮置き場所の周辺の機器配置図を図－4に示す。濃縮水受タンク、濃縮処理水タンク仮置き場所および濃縮処理水タンク仮置き場所の近傍には、セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設）、セシウム吸着塔一時保管施設（第二施設）クレーン電源ケーブル・電源盤等が設置されている。

仮置きするタンクと周辺機器の状況から、仮置きタンクから最も近距離にあるセシウム吸着塔一時保管施設（第一施設）に対する影響を考慮し、セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設）と同等の耐震クラスでの、仮置きタンクの転倒・滑動評価を実施する。

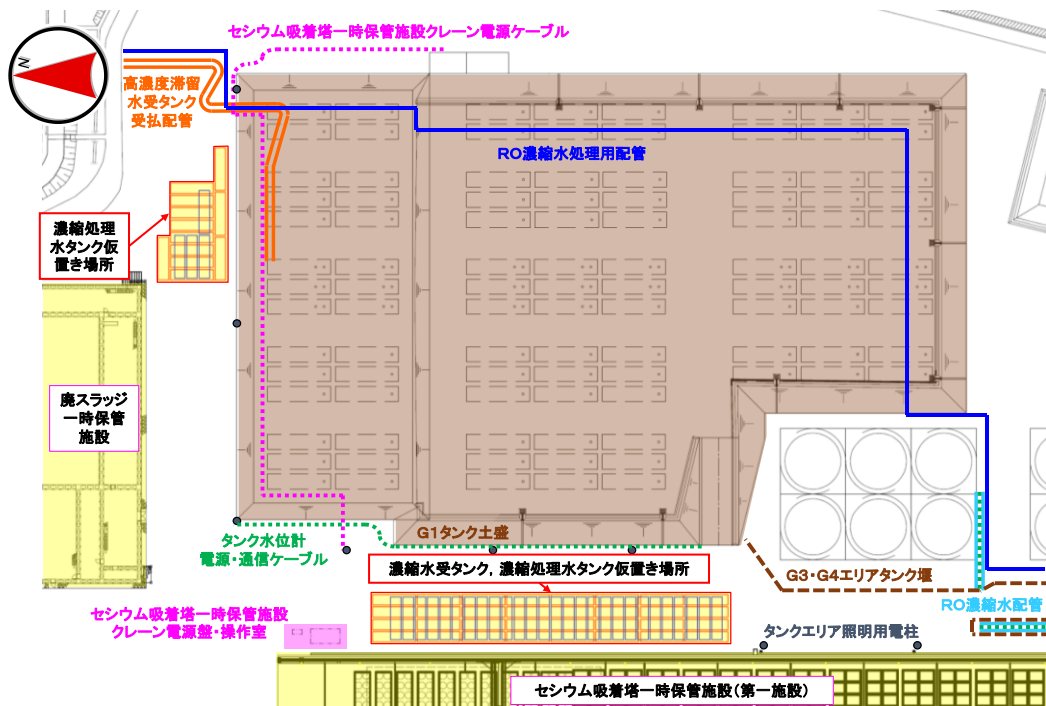


図-4 タンク仮置き場所周辺図

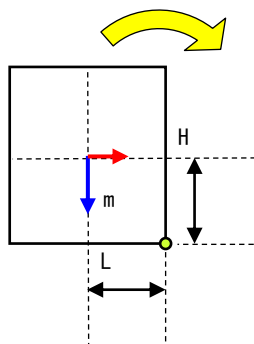
② 耐震Bクラスの地震による耐震性評価

濃縮水受タンク、濃縮処理水タンク仮置き場所および濃縮処理水タンク仮置き場所に仮置きするタンクに対して、耐震Bクラスの地震による耐震性評価を行う。

a. 転倒評価

i. 1段積みの場合

水平方向地震動による転倒評価をした結果、水平方向地震動、タンク自重による転倒および安定モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも安定モーメントが大きくなるため、タンクが転倒することはないことを確認した。(表-3)



m: 機器質量

g: 重力加速度

H: 据付面からの重心までの距離

L: 転倒支点から機器重心までの距離

$C_H$ : 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント:  $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント:  $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

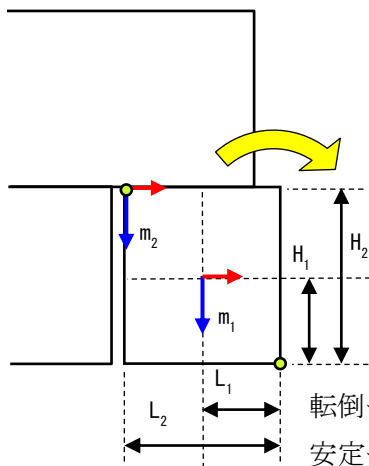
ii. 2段積みの場合

1段目は、転倒支点の対角線上の1段目と2段目との接点を2段目からの転倒作用点として、水平方向地震動、タンク自重による転倒および安定モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも安定モーメントが大きくなるため、1段目のタンクが転倒することはないことを確認した。(表-3)

2段目も水平方向地震動による転倒評価をした結果、水平方向地震動、タンク自重による転倒および安定モーメントを比較すると、転倒モーメントよりも安定モーメントが大きくなるため、タンクが転倒することはないことを確認した。

(表-3)

○1段目

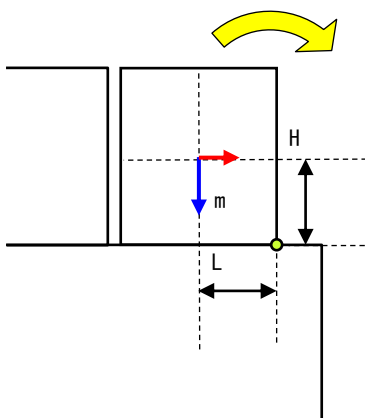


- $m_1$  : 1段目タンク重量
- $m_2$  : 2段目から1段目に作用するタンク重量
- $H_1$  : 据付面から1段目の重心までの垂直距離
- $H_2$  : 据付面から2段目タンク接点
- $L_1$  : ベース端部から1段目の重心までの水平距離
- $L_2$  : ベース端部から2段目タンク接点
- $g$  : 重力加速度
- $C_H$  : 水平方向設計震度

転倒モーメント :  $M_1 [N \cdot m] = m_1 \times g \times C_H \times H_1 + m_2 \times g \times C_H \times H_2$

安定モーメント :  $M_2 [N \cdot m] = m_1 \times g \times L_1 + m_2 \times g \times L_2$

○2段目



- $m$  : 機器質量
- $g$  : 重力加速度
- $H$  : 据付面からの重心までの距離
- $L$  : 転倒支点から機器重心までの距離
- $C_H$  : 水平方向設計震度

地震による転倒モーメント :  $M_1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$

自重による安定モーメント :  $M_2 [N \cdot m] = m \times g \times L$

表-3 仮置きタンクの転倒評価結果

機器名称		評価 部位	評価 項目	水平 震度	算出値	許容値	単位	
仮置きタンク (濃縮水受タンク・ 濃縮処理水タンク)	1段積み	本体	転倒	0.36	40	104	kN・m	
	2段 積み	1段目	本体	転倒	0.36	111	292	kN・m
		2段目	本体	転倒	0.36	40	104	kN・m

b. タンクの滑動評価

仮置きするタンクについて地震時の水平荷重によるすべり力に対して、地面と1段目、1段目と2段目の仮置きタンク同士の接触面の摩擦力を比較することにより、滑動評価を実施した。評価の結果、地震時の水平荷重によるすべり力は接触面の摩擦力より小さいことから、滑動しないことを確認した。(表-4)

表-4 仮置きタンクの滑動評価結果

機器名称		評価 部位	評価 項目	水平 震度	算出値	許容値	
仮置きタンク (濃縮水受タンク・ 濃縮処理水タンク)	1段積み	本体	滑動	0.36	0.36	0.52	
	2段 積み	1段目	本体	滑動	0.35	0.36	0.52
		2段目	本体	滑動	0.36	0.36	0.52

7. 自然災害対策等

(1) 津波

仮置きするタンクは、アウターライズ津波が到達しないと考えられる T.P. 約 33m に仮置きするため、津波の影響は受けない。

(2) 台風(強風)

建築基準法施行令及び建設省告示に基づいて評価した風荷重により、仮置き状態のタンクが台風(強風)により転倒することはないことを確認した。

(3) 豪雨

仮置きするタンクは、開口部を閉止して仮置きするため、雨水は内部に浸入しない。

8. タンク・配管の撤去に係る確認事項について

タンク・配管の構造強度及び機能に関する確認事項を表－5および表－6に示す。

表－5 機能の確認事項（タンク・ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能	機能確認	タンク・ポンプが実施計画の通り施工されていることを確認する。	実施計画の通りであること。

表－6 構造強度及び機能の確認事項（配管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
構造強度	外観・据付確認	配管閉止部の外観，据付状態について確認する。	実施計画の通りであること。
機能	機能確認	配管が実施計画の通り施工されていることを確認する。	実施計画の通りであること。

## 地下貯水槽 No. 5 の解体・撤去について

設備休止中である地下貯水槽のうち、貯留施設として未使用である地下貯水槽 No. 5 の解体・撤去作業の方法について定める。

### 1. 地下貯水槽 No. 5

地下貯水槽 No. 5（未使用）は、汚染水処理水を貯留した実績がない貯水槽であり、内部には過去に漏えい試験のために注水した試験用水（ろ過水）の残水がポンプで排水しきれずに僅かに残っているため適切に処理する。

また、解体・撤去作業にあたっては、周辺の作業環境に応じた防護装備にて実施するとともに、ダスト飛散防止の観点から強風時には作業を一時中断する。

#### 1.1. 残水処理作業時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

地下貯水槽 No. 5に残った水の回収作業は、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー等を使って行う。

当該作業を行う際の、漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホース、仮設ポンプを使用する際には、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けを設けることにより、漏えい時に残水を受けられるようにした上で、残水移送中には作業員による常時監視を行う。また、残水回収作業時にバキュームカーを使用する際には、バキュームカーとホースの接続部にはロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。

#### 1.2. 瓦礫類発生量

- a. 地下貯水槽 No. 5 の解体・撤去に伴い、プラスチック枠材※：約 1,500m<sup>3</sup>、砕石：約 2,300m<sup>3</sup>、土砂：約 900m<sup>3</sup>、コンクリートガラ：約 80m<sup>3</sup>、シート類：約 120m<sup>3</sup> の瓦礫類が発生する見込みである。
- b. 瓦礫類は、0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア C, N, O, P1））へ搬入する。

※ プラスチック枠材は、約 300m<sup>3</sup> に減容のうえ、保管する。

以上

## 除染装置処理水移送ポンプ及び弁を含む付属配管 並びに除染装置処理水タンクの撤去について

### 1. 撤去の理由

処理装置はセシウム吸着装置、第二セシウム吸着装置、除染装置で構成する。このうち除染装置は主要機器設置エリアが高線量エリアで機器の点検等が困難であることから待機状態としている。

他方、セシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置の信頼性向上工事の期間における処理容量の確保及びタービン建屋滞留水の浄化の加速を目的として新たな装置の設置を計画している。

新たな装置は除染装置関連機器である除染装置処理水移送ポンプが設置されているサイトバンカ建屋に配置する計画としていることから、干渉物となる除染装置処理水移送ポンプ及び付属配管を撤去し、除染装置は停止となる。

また、除染装置処理水タンクについては、これまで除染装置運用中に発生した廃液等を貯留していたが、廃液等の移送が完了したことから撤去を行う。

### 2. 撤去の妥当性

除染装置が待機状態となっている平成 23 年 10 月以降、原子炉注水量及び凍土壁等による地下水流入量の減少により滞留水の処理量が低下している。平成 23 年度の平均処理量が約 45m<sup>3</sup>/h（除染装置が運転していた 9 月までは約 70m<sup>3</sup>/h）であることに対し、平成 28 年度の平均処理量は約 30m<sup>3</sup>/h であり、第二セシウム吸着装置の単独運転での処理が可能となっている。また、セシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置の設備容量は合計 100m<sup>3</sup>/h であり、これは平成 28 年度の平均処理量の約 3 倍の余裕を有していることから、除染装置（設備容量 50m<sup>3</sup>/h）が停止状態であっても設備の必要処理容量は確保されている。

他方、震災当初共通であったセシウム吸着装置と第二セシウム吸着装置への供給電源を分離することで、電源系統の信頼性向上が図られている。また、セシウム吸着装置の油分離処理水移送ポンプを増設すること等により、装置の信頼性向上も図られている。

以上のことから、今後運転させる汚染水処理設備はセシウム吸着装置及び第二セシウム吸着装置とし、除染装置は停止となる。

### 3. 廃棄物発生量

撤去工事で発生する廃棄物は汚染されていることから金属製の容器に格納する。撤去工事で発生する廃棄物は、除染装置処理水移送ポンプ：約 24m<sup>3</sup>、弁を含む付属配管：約 48m<sup>3</sup>、シート類：最大で 1m<sup>3</sup>、除染装置処理水タンク：約 30m<sup>3</sup>が発生する見込みである。

撤去工事で発生する廃棄物は、1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量当量率に応じて定められた屋外一時保管エリア（一時保管エリア E1, X）へ搬入する。

#### 4. 被ばく低減

撤去工事においては以下の被ばく低減対策を図る。

- a. 機器の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。
- b. 高線量である除染装置処理水タンクの周りには鉛遮へいを設置する。
- c. 作業を行わない間は作業エリアを区画し、放射線業務従事者が容易に近付けないようにする。
- d. タンク切断では、可能な限り遠隔作業により被ばくの低減を図る。
- e. 解体作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、全面マスクを着用する。

ポンプおよび配管の切断作業時においては、全面マスクを着用して作業を実施する。なお、切断作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空気中の放射性物質濃度を測定し、必要に応じて局所排風機、ハウスを設置する。

#### 5. 漏えい拡大防止策

##### （1）漏えい防止

- ・配管を取り外す前には、配管内部の水抜きを実施する。また、残存配管には閉止措置を行う。

##### （2）漏えい拡大防止及び漏えい検知

- ・抜き取った水の移送時において仮設ホース及び仮設ポンプを使用する際には、継手部に養生を行い、監視員による漏えい確認を行う。
- ・残水がある場合に備えて配管取り外し部には受け養生を実施する。
- ・処理装置運転時に圧力がかかる閉止部には、堰及び漏えい検知器※を設ける。

※漏えい検知器インサービスまでの期間については、処理装置（セシウム吸着装置）起動停止時にパトロールを実施

#### 6. その他

除染装置処理水タンクから SPT 建屋取り合いまでの配管のうち、サイトバンカ建屋および SPT 建屋間の道路跨ぎ部は撤去することが困難であることから、撤去範囲から除く（0.03m<sup>3</sup>分）。なお、当該配管については水抜き実施後、両端を閉止処置する。



7. 付属配管撤去に係る確認事項

付属配管撤去後の残存配管端部の構造強度，機能，溶接検査に関する確認事項を表-1, 表-2 に示す。

表-1 構造強度及び機能の確認事項（主配管）

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能	外観・据付確認	実施計画の通り施工されていることを確認する。	実施計画の通りであること。
	漏えい確認※1	運転圧力で保持した後，閉止部からの漏えいが無いことを確認する。	閉止部からの漏えいが無いこと。

※1 閉止部に運転圧力がかかる箇所に対して実施。

表-2 管の溶接検査に係る確認事項

確認事項	確認内容	判定基準
材料確認	溶接に使用する材料が，溶接規格等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	溶接に使用する材料が，溶接規格等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
開先確認	開先形状等が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合するものであること。
溶接作業確認	あらかじめ確認された溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
非破壊確認	溶接部（最終層）について非破壊検査（浸透探傷検査）を行い，その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部（最終層）について非破壊検査（浸透探傷検査）を行い，その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
耐圧・漏えい確認	運転圧力及び耐圧代替非破壊試験により耐圧部からの漏えい等が無いことを確認する。	運転圧力で保持した後，運転圧力に耐えていること。耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいがないこと。また，耐圧代替非破壊試験の方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
外観確認	溶接部の外観確認を行い，異常のないことを記録等により確認する。	溶接部に有意な欠陥がないこと。

以上

## 一時保管エリア A1, A2 仮設保管設備（テント）解体

一時保管エリア A1, A2 は、30mSv/h 以下の瓦礫類を一時保管するための施設で、仮設保管設備（テント）であるが、瓦礫類の覆土式一時保管施設第 4 槽への収納、金属製容器に収納し固体廃棄物貯蔵庫等へ一時保管後にテントの解体・切断を実施する。解体廃棄物については構内で保管、エリアは低線量の瓦礫類を一時保管するエリアに転用（ケース 1 からケース 2 へ切替）する。

## 1.1 解体作業時の汚染拡大防止

解体作業手順及び汚染拡大防止策は以下のとおり。

- a. テント扉閉鎖状態にて表層土撤去を行う
- b. テント扉閉鎖状態にて L 型擁壁を移動する
- c. テント膜撤去前に飛散防止剤の散布を行い、ダストの飛散防止を図る
- d. テント膜の撤去を行う。以降の解体作業の間中は、ダストモニタを設置し空気中の放射性物質濃度の有意な変化を確認した場合は、速やかに作業を中断し散水等の対策を必要に応じて実施する。
- e. 柱・梁解体を行う。必要により解体箇所に散水を行いダストの飛散防止対策を講じる
- f. 基礎解体を行う。必要により解体箇所に散水を行いダストの飛散防止対策を講じる
- g. 一時保管エリアの舗装処理を実施する

## 1.2 解体廃棄物の汚染拡大対策

解体廃棄物については、一時保管エリアに運搬して必要により金属製容器に入れて保管する。

## 1.3 作業員の被ばく低減

本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減対策として、以下の対策を実施する。

- a. 表層土の撤去
- b. 待機場所（テント外の低線量エリア）の活用

## 1.4 瓦礫類発生量

瓦礫類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、約 7,730m<sup>3</sup> 発生する見込みである。

発生した瓦礫類は表面線量率に応じて定められた一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア C、P1、W1、固体廃棄物貯蔵庫第 9 棟 1 階））へ搬入する。

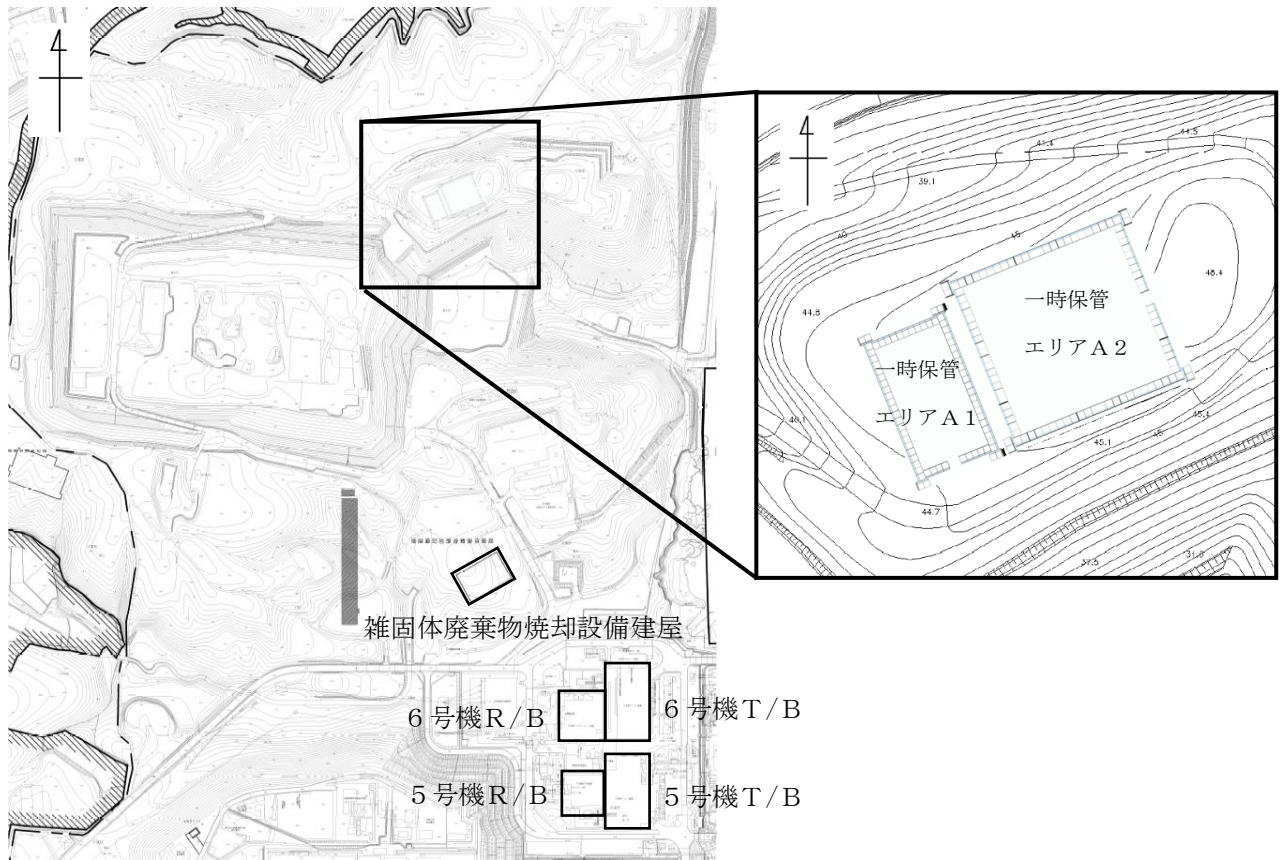
### 1.5 エリア面積について

低線量率の瓦礫類を一時保管するエリアに転用（ケース1からケース2へ切替）した後のエリア面積は以下のとおり。

	一時保管エリア A 1	一時保管エリア A 2
エリア面積 (m <sup>2</sup> )	863	1,902

表一1 一時保管エリアA1, A2に係る確認項目

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
遮蔽機能	寸法確認	実施計画Ⅲ3.2.2に記載されている遮蔽の高さ,厚さを確認する。	高さ3m以上,厚さ120mm以上であること。
	密度確認	実施計画Ⅲ3.2.2に記載されている遮蔽の密度を確認する。	密度 $2.1\text{g}/\text{cm}^3$ 以上であること。
	外観確認	遮蔽機能を損なう異常がないことを確認する。	高さ3m以上,厚さ120mm以上を確保できない陥没・欠けがないこと。
	据付状況	遮蔽壁の設置間隔を確認する。	遮蔽壁設置間隔 20mm以下であること。
保管容量	寸法確認	実施計画Ⅱ2.10に記載されているエリア面積であることを確認する。	エリア面積A1 : 863+19 $\text{m}^2$ , A2 : 1,902+40 $\text{m}^2$ であること。



図一1 一時保管エリアA1, A2全体概要図

## がれき撤去等の手順に関する説明書

## 1 概要

1～4号機において、使用済燃料プール内燃料の取り出しを計画しているが、1, 3, 4号機については使用済燃料プール内燃料の取り出しに先立ち、原子炉建屋上部がれき及び使用済燃料プール内がれきの撤去等が必要である。

がれき撤去等の作業においては、がれき等を燃料上に落下させ波及的影響を与えないよう対策を講じる必要がある。本説明書は原子炉建屋上部のがれき撤去ならびに使用済燃料プール内のがれき撤去の手順について示すものである。

## 2 がれき撤去等の監理体制

協力会社のがれき撤去等の計画を立案し、当社がその計画の確認を行う。また、放射線管理に関わる計画は、協力会社が立案し、当社がその計画の確認を行う。確認された計画に基づき協力会社が作業を行い、当社が監理を行う。なお、不測事態が発生した場合、協力会社から当社監理員に連絡を行い、当社および協力会社を交え計画の再検討等今後の対応について協議する。

## 3 原子炉建屋上部のがれき撤去等の手順

## (1) がれき撤去フロー

オペレーティングフロア上のがれきを安全に撤去するために、図1に示すがれき撤去フローに従い、作業計画を立案する。なお、オペレーティングフロア上のがれき撤去は、作業状況について常時監視した状況で実施する。監視にあたり以下の点に注意し、異常があった場合は直ちに作業を中止し、関係者へ報告する。

- ・使用済燃料プールに異常が無いか
- ・重機による作業区画内に人がいないか
- ・飛散物、落下物、建屋の異常等はないか

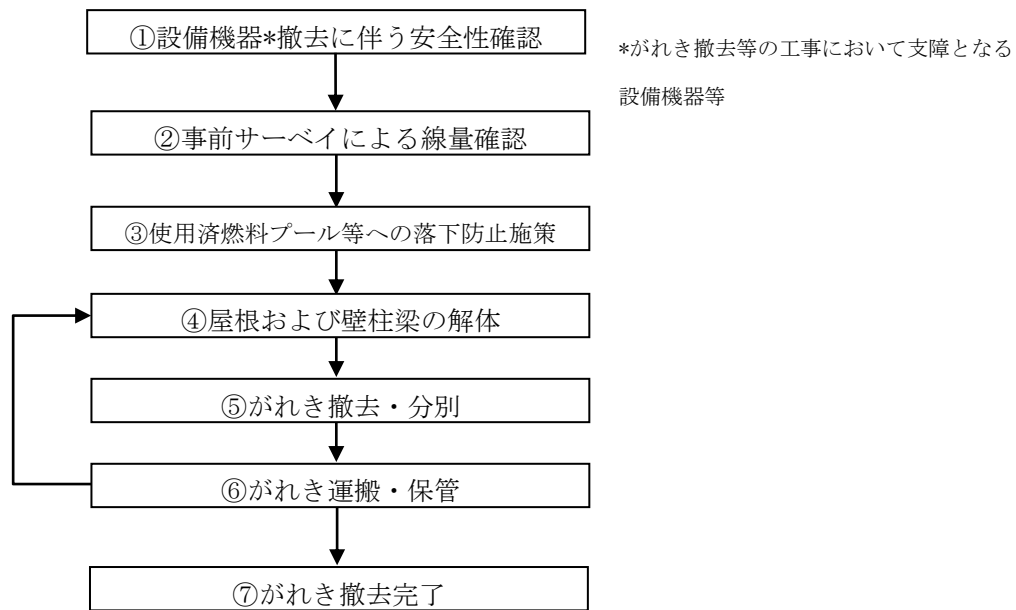


図1 原子炉建屋上部のがれき撤去フロー

また、がれき撤去フローにおける①設備機器撤去に伴う安全性確認、③使用済燃料プール等への落下防止施策については、次に具体的な内容を示す。

a. ①設備機器撤去に伴う安全性確認

がれき撤去工程においては、設備機器の撤去作業を伴うが、安全性確保のため、当社および協力会社において十分な調査・計画立案が必要である。設備機器の撤去に関するフローを図2に示す。

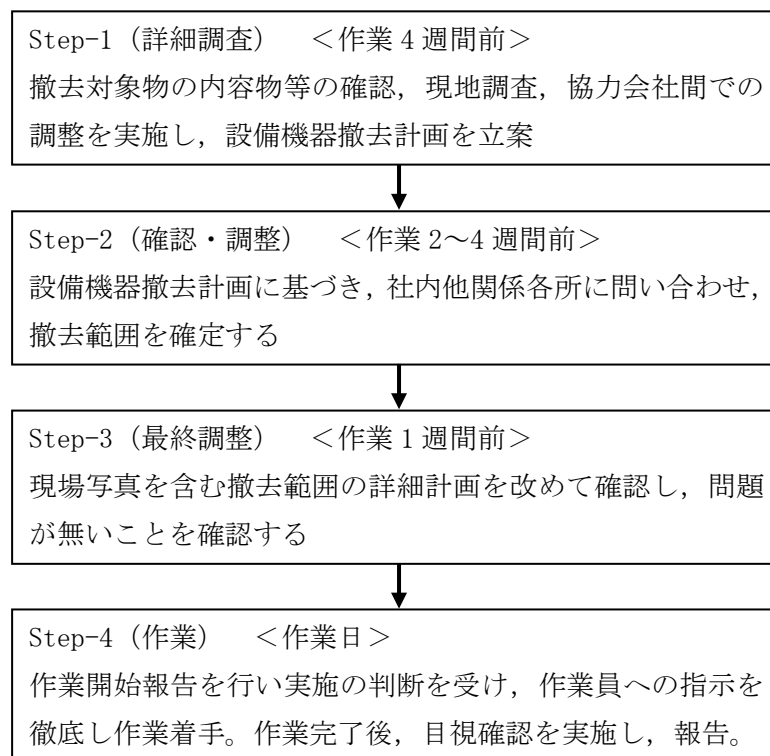


図2 設備機器撤去に伴う詳細調査・確認・調整業務フロー

#### b. ③使用済燃料プール等への落下防止施策

使用済燃料プールにがれきが落下し、使用済燃料貯蔵ラックや使用済燃料プールが損傷することを防止するため、がれき撤去に先立ち、がれきの状況を写真の分析や模型等により把握し作業手順を検討する。

がれき解体用重機には、下部へのがれき落下防止策を施した吊り治具等を使用し、使用済燃料プール外のがれき撤去を行う際には、使用済燃料プール上を通過しないように手順を策定する。

燃料取扱機、燃料取り出し用カバーの設置等のオペレーティングフロア上で行う作業にあたっては、極力使用済燃料プール上で作業を行わないように手順を策定する。

なお、必要に応じて使用済燃料プールの表面養生等の対策を施す。

#### (2) がれき撤去等における留意事項

##### a. 重機によるがれき撤去

- ① 安全対策：作業範囲周辺の安全性に配慮し、がれきの落下防止及びがれき落下に伴う設備機器・重機損傷の防止を図る。
- ② がれき撤去：使用済燃料プールへがれきを落下させないように十分に注意し、作業を行う。万一がれきが使用済燃料プールに落下した場合には、作業を一時中断し、異常のないことを確認した後、作業を再開する。
- ③ がれきの分別：がれきは、解体重機でダンプに積み込める大きさに小割し、分別する。
- ④ がれきの運搬：原子炉建屋周辺ヤードで、遮蔽措置を施したダンプ等へがれき類を積み替え、指定された集積場所へ運搬する。

##### b. がれきの仮置き及び分別

がれきは、原子炉建屋周辺ヤード内に仮置き場所を設置し、分別集積する。仮置きしたがれきは線量を計測し、高線量の場合は作業員が近寄らないように区画及び表示を行う。

がれきには粉塵などの飛散防止を目的とした飛散防止剤の散布等を行い、ダンプにて搬出する。なお、搬出するがれきについては、放射線量に応じて分別し構内に一時保管する。

##### c. 作業員の安全対策

作業開始前は、事前サーベイによる線量確認を実施し、高線量箇所の注意喚起を行うなど作業員の被ばく量低減に努める。また、事前サーベイによる線量確認状況に応じエリアモニタを設置し、線量の目視確認が可能な状況とする。なお、緊急時（津波警報発生時の避難等）にはサイレン等により警報を発報し、作業員に避難情報を提供する。

##### d. 既存建屋への影響評価

がれき撤去に伴い既存建屋に作用する荷重は低下傾向を示すが、がれきの飛散防止のための養生材や解体重機の積載などの影響により作用荷重が増加する場合も考えられる。がれき撤去により大幅な荷重増減が生じる場合には、既存建屋が局部的に荷重を負担することのないよう、配慮して計画を行う。

なお、がれき撤去が進むに伴い建屋の損傷状況が確認できた場合には、必要に応じて既存建屋



への影響を再度評価することとする。

e. 燃料取扱設備，燃料取り出し用カバー等の設置

- ① 安全対策：作業範囲周辺の安全性に配慮し，設置設備の落下防止及び設備落下に伴う設備機器・重機損傷の防止を図る。
- ② 設備設置：設備設置は極力使用済燃料プール上で行わないこととする。やむを得ず使用済燃料プール上での作業を行う場合は，使用済燃料プールへ設置設備を落下させないように十分に注意し，作業を行う。

4 使用済燃料プール内のがれき撤去等の手順

(1) がれき撤去フロー

使用済燃料プール内のがれきを安全に撤去するために，図3に示すがれき撤去フローに従い，作業計画を立案する。なお，使用済燃料プール内のがれき撤去は，作業状況について常時監視した状況で実施する。監視にあたり以下の点に注意し，異常があった場合は直ちに作業を中止し，関係者へ報告する。

- ・使用済燃料プールに異常が無いか
- ・がれき撤去作業区画内に人がいないか
- ・雰囲気線量が異常な値を示していないか

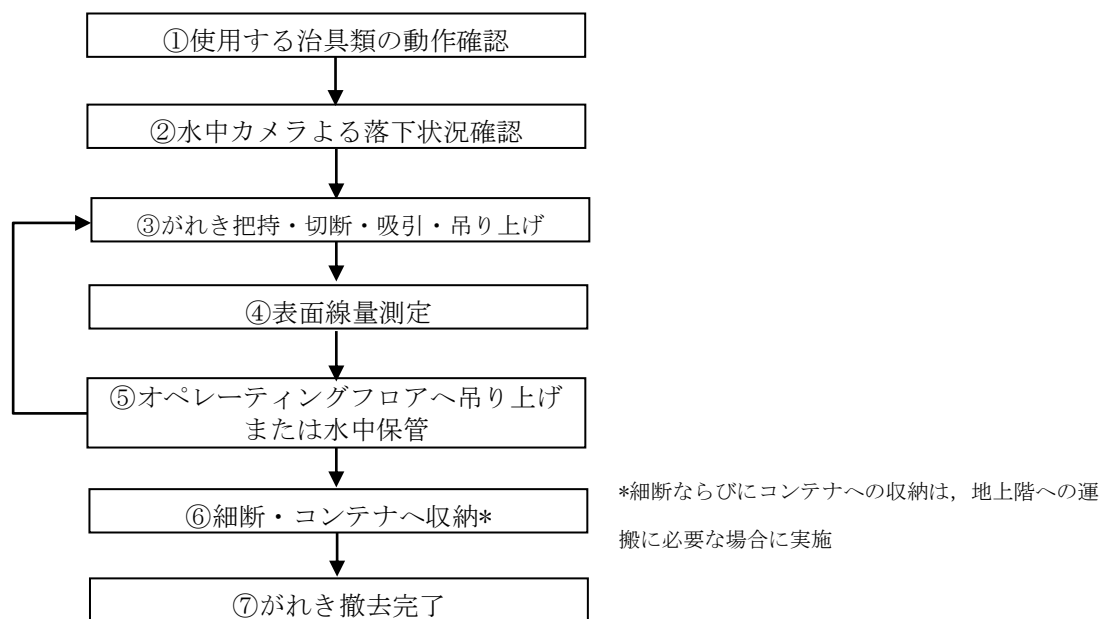


図3 使用済燃料プール内のがれき撤去フロー

また，がれき撤去における安全性確認及び使用済燃料プールへの落下防止施策については，次に具体的な内容を示す。

a. がれき撤去における安全性確認

がれき撤去工程においては、使用済燃料プール内のがれき撤去作業を行うが、安全性確保のため、当社および協力会社において十分な調査・計画立案が必要である。がれき撤去に関するフローを図4に示す。

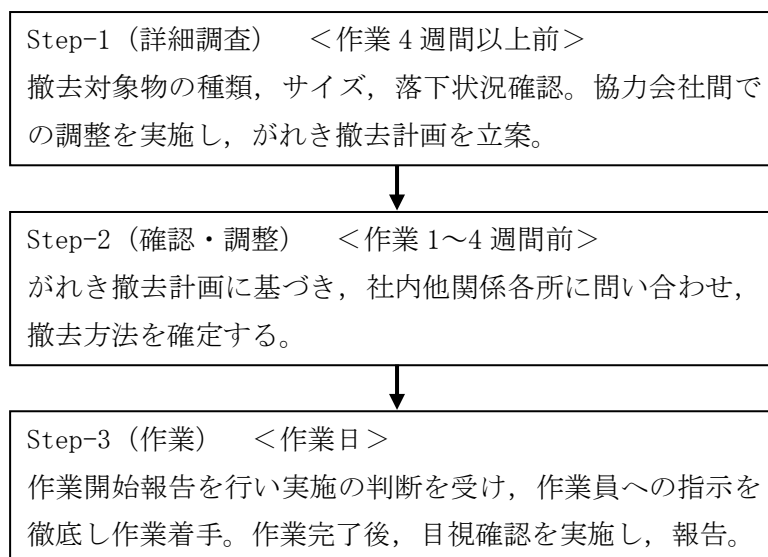


図4 がれき撤去に伴う詳細調査・確認・調整業務フロー

b. 使用済燃料プールへの落下防止施策

使用済燃料プールからのがれき吊り上げ時にがれきが落下し、使用済燃料貯蔵ラックや使用済燃料プールが損傷することを防止するため、がれき撤去に先立ち、がれきの種類・サイズ・落下状況を水中カメラの映像により把握する。

プール内のがれき撤去にあたっては、事前に燃料、ラックとがれきとの干渉について確認する。干渉が想定される場合は、燃料及びラックの健全性並びに作業員の安全を確保するためのがれき撤去の方法・手順について検討し、必要に応じモックアップ・トレーニング等により安全性の確認を実施する。

がれき把持に用いる治具は、がれきの種類・サイズ・落下状況を考慮した適切な治具を用いる。また、単一故障によるがれき落下を防ぐため、駆動源を喪失しても把持部が開放されない構造とする。

がれき撤去をする上で確実に把持していることを確認するため、水中カメラで確認しながら行うが、水中カメラの視認性を確保するため必要に応じて浄化を行う。

撤去作業中の治具およびがれきの落下を防ぐため、作業前の点検、誤操作防止対策、水中カメラによる監視等を実施する。

把持したがれきは、極力燃料貯蔵ラック上の移動距離が短くなるよう手順を策定する。

(2) がれき撤去等における留意事項

a. 把持治具によるがれき撤去

① 安全対策：作業範囲周辺の安全性に配慮し、がれきの落下防止を図る。

- ② がれき撤去:使用済燃料プール内へがれきを落下させないように十分に注意し、作業を行う。  
万一、監視対象がれき\*が使用済燃料プールに落下した場合には、作業を一時中断し、異常のないことを確認した後、作業を再開する。
- ③ がれきの分別:がれきは、運搬可能な大きさに細断し、分別する。
- ④ がれきの運搬:燃料取り出し用カバー地上階に待機したトレーラ等にてがれきを積載し、指定された集積場所へ運搬する。

\*監視対象がれき:落下した場合に燃料に影響を与える可能性があるがれき。

#### b. がれきの仮置き及び分別

がれきは、オペレーティングフロア上、燃料取り出し用カバー内または原子炉建屋周辺ヤードに仮置き場所を設置し、分別集積する。がれきは吊り上げ時に線量を計測し、搬出不可能な高線量の場合は水中の燃料取り出し作業に干渉しない場所で保管する等の処置を行う。4号機使用済燃料プールからのがれき撤去においては、表面線量 25mSv/h 以下のものを水中から吊り上げ、それより高いものは水中保管とする。

がれきは必要に応じて細断・コンテナに収納し、トレーラ等に積載させて搬出する。

なお、搬出するがれきについては、「Ⅲ章第3編2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、保管・管理する。

3号機の燃料取り出し用カバー完成後の使用済燃料プール内がれき撤去作業に伴い、表面線量が 30mSv/h を超えるがれき類が約 60m<sup>3</sup> 発生すると想定している。

#### c. 作業員の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し、作業時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

使用済燃料プール内がれき撤去作業における放射線業務従事者の被ばく低減策として、以下の対策を実施する。

- ・遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・遮へい設置による作業環境の線量低減
- ・待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・必要に応じた遮へいベスト等の保護具着用による被ばく低減

現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

#### d. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制対策

燃料取り出し用カバー完成後の使用済燃料プール内がれき撤去作業は、燃料取り出し用カバー内で実施することで放射性物質の飛散抑制を図る。燃料取り出し用カバーの放射性物質の飛散・拡散を防止するための機能については、「実施計画Ⅱ 2.1.1 添付資料-3-1 放射性物質の飛散・拡散を防止するための機能に関する説明書」の通り。燃料取り出し用カバーの外へがれきを搬出する際はコンテナに収納し、放射性物質の飛散抑制を図る。

撤去作業中に、万が一、燃料取り出し用カバー換気設備の排気フィルタユニット出口の放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断する。

#### 5 4号機がれき落下時の影響評価

万一、燃料上部に落下したのがれき撤去中に、がれきが燃料上に落下した場合の影響について評価した。

##### (1) 評価条件

- a. プール内に落下している最大のものであるデッキプレート(約 10000mm×約 600mm×約 50mm, 約 200kg) の落下による破損体数は、デッキプレートの投影面積から 240 体 (30 体ラック : 8 基) とする。

なお、上記に記載以外の条件については、「実施計画Ⅱ 2. 1 1 添付資料-3-2 移送操作中の燃料集合体の落下」と同一条件とする。

##### (2) 評価結果

上記の評価条件に基づき評価した結果、核分裂生成物の大気中への放出量は、表 1 の通りである。また、敷地境界外の実効線量は、表 2 の通りであり、本事象による周辺公衆に与える放射線被ばくのリスクは小さいものと考えられる。

なお、本評価はデッキプレート落下によりプレート下部にある燃料全てが破損すると仮定しているが、燃料 1 体当たりには掛かる荷重は燃料取り扱い作業中の燃料 (約 300kg) 落下よりも小さいことから、本評価は十分に保守的な評価と考える。

表 1 4号機核分裂生成物の大気中への放出量

核分裂生成物	放出量
希ガス (γ線実効エネルギー 0.5MeV 換算値) 大気放出量	約 $5.2 \times 10^{13}$ Bq
よう素(I-131 等価量(小児実効))大気放出量	約 $3.5 \times 10^8$ Bq
よう素(I-131 等価量(成人実効))大気放出量	約 $1.3 \times 10^9$ Bq

表 2 4号機使用済燃料プール内のがれき落下時の実効線量

実効線量 (小児)	実効線量 (成人)
約 $8.1 \times 10^{-2}$ mSv	約 $8.1 \times 10^{-2}$ mSv

## 6 3号機がれき落下時の影響評価

万一、燃料取扱機撤去中に燃料取扱機が燃料上に落下した場合の影響について評価した。

### (1) 評価条件

- a. プール内に落下している燃料取扱機の落下による破損体数は、燃料取扱機がプール全域に渡って落下していることから、保守的にプール内に保管されている全数（566体）とする。

なお、上記に記載以外の条件については、「実施計画Ⅱ 2.1.1 添付資料-3-2 移送操作中の燃料集合体の落下」と同一条件とする。

### (2) 評価結果

上記の評価条件に基づき評価した結果、核分裂生成物の大気中への放出量は、表3の通りである。また、敷地境界外の実効線量は、表4の通りであり、本事象による周辺公衆に与える放射線被ばくのリスクは小さいものと考えられる。

表3 3号機核分裂生成物の大気中への放出量

核分裂生成物	放出量
希ガス（ $\gamma$ 線実効エネルギー0.5MeV換算値） 大気放出量	約 $1.2 \times 10^{14}$ Bq
ヨウ素(I-131 等価量(小児実効))大気放出量	約 $8.2 \times 10^8$ Bq
ヨウ素(I-131 等価量(成人実効))大気放出量	約 $3.2 \times 10^9$ Bq

表4 3号機使用済燃料プール内がれき落下時の実効線量

実効線量（小児）	実効線量（成人）
約 $1.5 \times 10^{-1}$ mSv	約 $1.5 \times 10^{-1}$ mSv

## 福島第一原子力発電所第 1 号機原子炉建屋カバー解体について

### 1. 適用範囲

本書は、第 1 号機原子炉建屋カバー解体に伴う影響評価、大型カバーの換気設備運転以前の放射性物質濃度の監視方法について記載するものである。

### 2. 福島第一原子力発電所第 1 号機原子炉建屋からの燃料取り出し目標

東京電力(株)福島第一原子力発電所1～4号機の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ(東京電力福島第一原子力発電所廃炉対策推進会議)を2013年6月27日に改訂した。

今回の改訂では、号機毎の状況を踏まえたスケジュールを検討するとともに、現場の状況に応じて柔軟に対応できるよう複数のプランを号機毎に示している。このうち、1号機の使用済燃料プールからの燃料取り出しは、2017年度前半～同後半の開始を目標としている。

さらに、「特定原子力施設に係る実施計画作成に対する基本方針」において、至近の課題解決として「使用済燃料の使用済燃料プールからの早期取り出し」を最優先事項のひとつに位置づけている。

### 3. 使用済燃料プールからの燃料取り出しの作業ステップ

現在検討中の使用済燃料プールからの燃料取り出しの作業ステップは以下の通りである。

- ① 原子炉建屋カバー(以下 建屋カバー)の排気設備停止・撤去
- ② 既存の放射性物質濃度測定器の移設
- ③ 建屋カバー解体
- ④ オペレーティングフロア上のガレキ撤去・除染・遮へい
- ⑤ 燃料取扱設備等の設置、建屋カバー改造・復旧※
- ⑥ 燃料取り出し開始

また、先行号機の工事实績を踏まえ、建屋カバーの排気設備停止からプール燃料取り出し開始までには4年程度を要すると想定している。建屋カバー解体工程表については表1に示す。

※ 燃料取り出し計画は、複数のプラン(建屋カバー改造・復旧、上部コンテナ、燃料取り出し用カバー)の中から、2014年度上半期に決定する。

#### 4. 建屋カバー解体に伴う影響評価

建屋カバーは2011年10月に原子炉建屋上部からの放射性物質の飛散抑制を目的に設置した。その後、原子炉の安定冷却の継続により放射性物質の発生量は減少している。

燃料取り出しに向け建屋カバーを解体した場合、放射性物質を含む水蒸気の蒸散やガレキ・粉塵の飛散が懸念されるため、放射性物質の放出量について評価を行った結果、敷地境界における被ばく評価への影響は少ないと評価している。(詳細は、別添1参照。)

なお、建屋カバーを覆う大規模構造物を構築した後、その中で建屋カバーの解体とオペレーティングフロア上のガレキ撤去を進める方法も考えられるが、この方法の場合には、建屋カバーの解体により放射性物質の放出量が増加する可能性は低いものの、以下の課題がある。

- ① 大規模構造物の設置により燃料取り出し開始時期が、燃料取り出し開始目標よりも5年以上の後ろ倒しとなる。
- ② 使用済燃料プールへのガレキ落下リスクが長期化する。
- ③ 建屋カバーを覆う大規模構造物の高さが90m程度となるため、耐震性の確保や高線量下での作業などの技術面、施工面での課題がある。

以上より、敷地境界・敷地外に与える影響が少ないこと、燃料取り出しに早期に着手できること、速やかな燃料の取り出し完了につながることから、建屋カバーを解体し、オペレーティングフロア上のガレキ撤去を進めることとする。また、建屋カバーの解体に伴う放出量を抑制するため、開口部の閉鎖など十分な放出抑制対策を実施する。

#### 5. 建屋カバー排気設備停止に伴う滞留水素の評価

建屋カバー排気設備停止から建屋カバー解体までの間は、排気機能がなく、建屋カバー内に水素が滞留する可能性があると考えられるため水素の影響について評価した。

「第Ⅱ編 2.2 原子炉格納容器内窒素封入設備」において、第1号機原子炉格納容器内での水素発生量が評価されている。保守的に原子炉格納容器内で発生した水素の全量が建屋カバー内に放出されたものとして評価した結果、建屋カバー内の水素濃度が可燃限界濃度に達するまでの期間は約2年と評価される。建屋カバー解体着手は、建屋カバー排気設備停止の約3~5ヶ月後と想定しているため、水素濃度が可燃限界濃度に達することをないと評価される。このため、この期間中の水素濃度測定は必要ないと考える。なお、建屋カバー運用開始以降、排気設備に設置されている水素濃度計にて水素は検出されていない。

水素の影響についての評価を以下の条件で評価した。

水素発生量：0.1(m<sup>3</sup>/h)

建屋カバー内容積：約 45,000(m<sup>3</sup>)

可燃限界濃度 4%となるために必要な水素量

約 45,000×0.04=約 1,800(m<sup>3</sup>)

水素が約 1,800m<sup>3</sup> 発生する時間

約 1,800/0.1/24=約 750(日) ⇒ 約 2 年

## 6. 建屋カバーの排気設備停止以降の放射性物質濃度の監視

### 6.1 設備構成

排気設備停止以降においてもオペレーティングフロア付近の放射性物質濃度を測定・監視するため、既存の放射性物質濃度測定器を移設する。排気設備停止から建屋カバー解体までの監視設備構成を図 1 に、建屋カバー解体以降の監視設備構成を図 2 に、設備仕様を表 2 に示す。

### 6.2 運転管理および保守管理

#### (1) 運転管理

放射性物質濃度測定器は、現場制御盤及び免震重要棟に表示され、異常を検知した場合には警報を発するシステムとなっている。

#### (2) 保守管理

放射性物質濃度測定器については安全上重要な設備ではなく、運転継続性の要求が高くない。保守作業に伴う被ばくを極力低減する観点から、異常の兆候が確認された場合に対応する。

## 7. 放射性固体廃棄物等の管理

撤去したオペレーティングフロア上のガレキは、先行号機と同様に一時保管エリアにて保管する。(「第Ⅲ編 3 補足事項 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」参照)



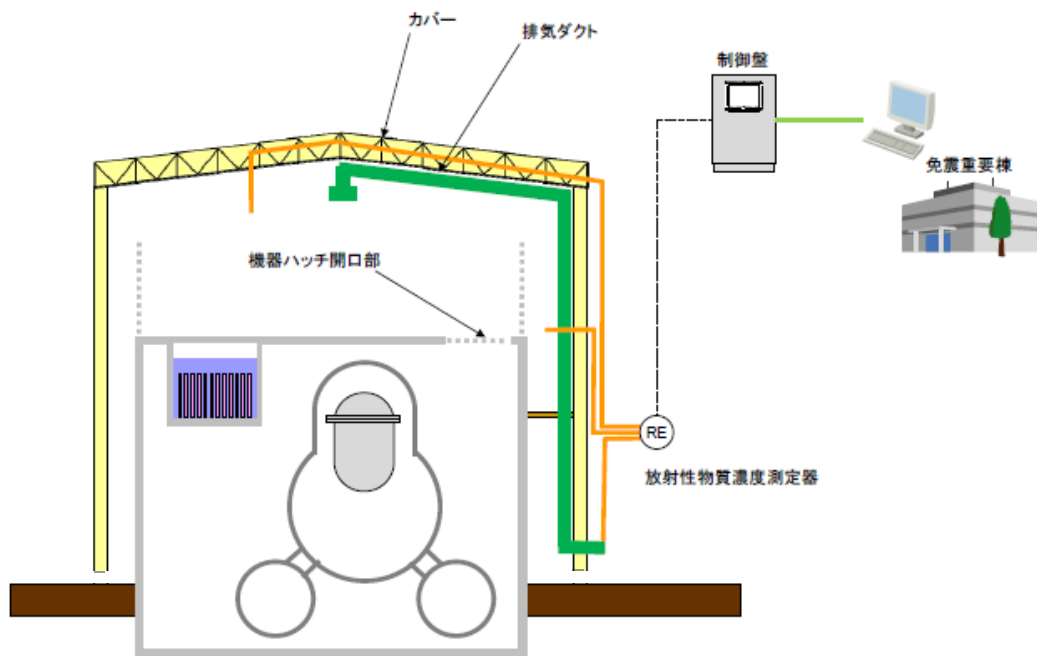


図1 排気設備停止から建屋カバー解体までの監視設備概略構成図

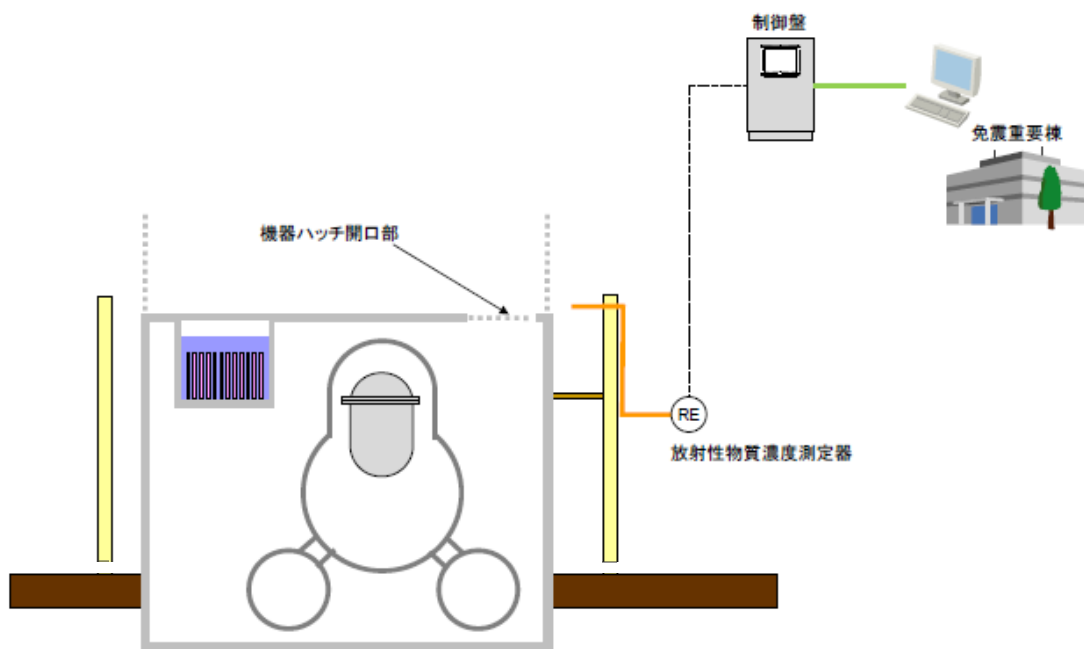


図2 建屋カバー解体以降の監視設備概略構成図

表1 建屋カバー解体工程表

	2013年度				2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
	1Q	2Q	3Q	4Q				
排気設備 停止・撤去		■						
既存の放射性物 質濃度測定器の 移設			※ ■ 					
建屋周辺 整備等			■					
建屋カバーの 解体				■ 				
燃料取り出し計画は検討中のため、以下 参考工程								
ガレキ 撤去等					■			
カバー改造・ 復旧等						■		

※ 既存の放射性濃度測定器の移設期間は、オペレーティングフロア上部の放射性物質濃度の連続監視はできないが、定期的及び必要な都度ダストサンプラで採集し、放射性物質濃度を測定・評価する。

表2 設備仕様

設備名	仕様
放射性物質濃度測定器	検出器種類：シンチレーション検出器 計測範囲：10 <sup>0</sup> ～10 <sup>4</sup> s <sup>-1</sup> 台数：4台

8. 別添

別添-1 第1号機原子炉建屋カバー解体後の放射性物質の放出量評価

## 第 1 号機原子炉建屋カバー解体後の放射性物質の放出量評価

## 1. 放出量評価方法の考え方

建屋カバー解体後は、燃料取り出し用カバー設置に向け工事中の第 3 号機と同様の放出箇所となることから、原子炉直上部・機器ハッチ開口部・原子炉格納容器ガス管理設備の各放出箇所において放出量評価を行った。

本評価は、建屋カバーが掛かっていない状態での評価となるため、建屋カバー解体工事前の事前調査として屋根パネルを一時的に取り外し、採取した平成 26 年 11 月のダスト濃度を評価に適用した。

また、平成 26 年 6 月に機器ハッチ開口部の放出抑制対策として設置したバルーンについては、ガレキ等によりずれが生じるリスク、ずれ発生後の再設置に伴う作業員の被ばくリスク等を排除する観点から撤去するとともに、非常用扉や大物搬入口横扉については、実態にあわせた開口面積を評価に適用した。

## 2. 放出量評価

原子炉直上部・機器ハッチ開口部・原子炉格納容器ガス管理設備の各放出箇所において、下記の通りの評価を行った。

## ① 原子炉直上部

原子炉直上部からの放出量

$$\begin{aligned} &= \text{原子炉直上部のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \times \text{流量} \\ &= 1.6 \times 10^{-5} \text{Bq/cm}^3 \times 2.5 \times 10^2 \text{ m}^3/\text{h} \times 10^6 \text{ cm}^3/\text{m}^3 \\ &= \text{約 } 4.1 \times 10^3 \text{ Bq/h} \quad = \text{約 } 4.1 \times 10^{-5} \text{ 億 Bq/h} \end{aligned}$$

※計算に引用した数値

## ・原子炉直上部のダスト濃度

評価には、原子炉直上部のダスト濃度が必要であるが、現状、建屋カバーが設置されており、測定が不可能である。

このため、建屋カバー解体工事前の事前調査として屋根パネルを一時的に取り外し、採取した平成 26 年 11 月のダスト濃度 ( $1.6 \times 10^{-5} \text{Bq/cm}^3$ ) を適用した。

## ・流量

建屋カバー解体工事前の事前調査として屋根パネルを一時的に取り外した平成 26 年 11 月における第 1 号機の蒸気発生量  $2.5 \times 10^2 \text{ m}^3/\text{h}$  (平成 26 年 11 月 1 日

現在) を流量として適用した。

② 機器ハッチ開口部

機器ハッチに関しては、外部の風によって流量の変動幅が大きいため、変動幅を考慮して評価を行った。

機器ハッチ開口部からの放出量 (最大)

$$\begin{aligned} &= \text{機器ハッチ開口部のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \times \text{流量} \\ &= 2.4 \times 10^{-6} \text{ Bq/cm}^3 \times 1.1 \times 10^4 \text{ m}^3/\text{h} \times 10^6 \text{ cm}^3/\text{m}^3 \\ &= \text{約 } 2.6 \times 10^4 \text{ Bq/h} \quad = \text{約 } 2.6 \times 10^{-4} \text{ 億 Bq/h} \end{aligned}$$

機器ハッチ開口部からの放出量 (最小)

$$\begin{aligned} &= \text{機器ハッチ開口部のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137)} \times \text{流量} \\ &= 2.4 \times 10^{-6} \text{ Bq/cm}^3 \times 1.5 \times 10^3 \text{ m}^3/\text{h} \times 10^6 \text{ cm}^3/\text{m}^3 \\ &= \text{約 } 3.6 \times 10^3 \text{ Bq/h} \quad = \text{約 } 3.6 \times 10^{-5} \text{ 億 Bq/h} \end{aligned}$$

※計算に引用した数値

・ 機器ハッチ開口部のダスト濃度

建屋カバー解体工事の事前調査として屋根パネルを一時的に取り外し、採取した平成 26 年 11 月のダスト濃度 ( $2.4 \times 10^{-6} \text{ Bq/cm}^3$ ) を適用した。

・ 流量

外部の風による運動エネルギーにより建物風上側と風下側に圧力差が発生し、圧力差により建屋開口部から空気の流出入が発生する。この圧力差による建屋開口部からの流出入量をベルヌーイの定理を用いて流量を評価した。各前提については、以下の通り。

機器ハッチの開口部の前提

機器ハッチの開口部面積を 0%、二重扉を 80%※、非常用扉を 100%及び大物搬入口横扉を 50%※縮小した場合を想定。

※開口部を貫通している配管、ケーブル等による閉止不可範囲 (想定) を除いた面積

## 風速

昭和 54 年 4 月から昭和 55 年 3 月までの 1 年間における福島第一原子力発電所の露場の平均風速 (3.1m/s) を適用した。(原子炉設置変更許可申請書添付書類 6)

上記の風速を入力条件として 16 方位毎に機器ハッチ開口部からの流量を評価し、最大と最小の流量をそれぞれ以下の通り評価した。

最大の場合の流量は、約 11,000m<sup>3</sup>/h。

最小の場合の流量は、約 1,500m<sup>3</sup>/h。

### ③ 原子炉格納容器ガス管理設備

原子炉格納容器ガス管理設備からの放出量

= 原子炉格納容器ガス管理設備出口のダスト濃度 (Cs-134+Cs-137) × 流量

=  $4.4 \times 10^{-6} \text{ Bq/cm}^3 \times 2.1 \times 10^1 \text{ m}^3/\text{h} \times 10^6 \text{ cm}^3/\text{m}^3$

= 約  $9.2 \times 10^1 \text{ Bq/h}$  = 約  $9.2 \times 10^{-7}$  億 Bq/h

※計算に引用した数値

原子炉格納容器ガス管理設備出口のダスト濃度・流量については、平成 26 年 11 月の値を適用した。

上記 3 箇所の放出箇所からの放出量の評価を受けて、建屋カバー解体後の 1 号機からの放出量合計値は以下の通り。

建屋カバー解体後の放出量評価 (最大)

= 約  $4.1 \times 10^{-5}$  億 Bq/h + 約  $2.6 \times 10^{-4}$  億 Bq/h + 約  $9.2 \times 10^{-7}$  億 Bq/h

= 約 0.00031 億 Bq/h = 約 0.0004 億 Bq/h

建屋カバー解体後の放出量評価 (最小)

= 約  $4.1 \times 10^{-5}$  億 Bq/h + 約  $3.6 \times 10^{-5}$  億 Bq/h + 約  $9.2 \times 10^{-7}$  億 Bq/h

= 約 0.000078 億 Bq/h = 約 0.00008 億 Bq/h

よって、建屋カバー解体後の放出量評価は、約 0.00008~0.0004 億 Bq/h

なお、建屋カバーが設置されている状態の 1 号機の平成 26 年度平均の放出量は、約

0.007 億 Bq/h である。このため、建屋カバー解体によって放出量に大きな変動を与えるものではない。

### 3. 被ばく評価

以下の計算条件で、建屋カバーが解体された場合の放出量による被ばく評価を行った。

#### ①気象条件

被ばく評価に用いる気象条件は、昭和 54 年 4 月から昭和 55 年 3 月までの 1 年間における風向、風速、日射量、放射収支量の観測データを統計処理して用い、統計処理は「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」に基づいて行った。

#### ②実効線量の計算方法

放射性セシウムによる実効線量の計算は、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に対する評価指針」及び「発電用軽水型原子炉施設の安全審査における一般公衆の線量評価」を準用する。

外部被ばく及び吸入摂取による実効線量は、原子炉施設周辺でそれぞれ最大の被ばくを与える地点に居住する人を対象とし、外部被ばくについては放射性雲からの $\gamma$ 線による実効線量と地表に沈着した放射性物質からの $\gamma$ 線による実効線量を考慮する。

具体的な計算方法等については、Ⅲ第 3 編（保安に係る補足事項）2.2 線量評価に準じる。

#### ③計算地点

計算地点は、1. 2号機共用排気筒を中心として 16 方位に分割した陸側 9 方位の敷地境界外について行う。

上記の評価方法で、評価した結果は、以下の通り。

敷地境界における被ばく量は年間約 0.00002～0.00008mSv

#### 4. 評価

第1号機建屋カバー解体後の放出量評価は、約0.00008～0.0004億Bq/hであり、建屋カバー解体によって放出量に大きな変動を与えるものではない。これによる敷地境界における被ばく量は、年間約0.00002～0.00008mSvとなる。

建屋カバー解体前の第1～4号機における気体廃棄物の推定放出量は、平成26年度平均で合計約0.1億Bq/hである。敷地境界における被ばく線量は、最大で年間約0.03mSvと評価している。

建屋カバー解体前の第1～4号機における気体廃棄物の推定放出量と第1号機建屋カバー解体後の第1～4号機における推定放出量を比較すると、同等であることを確認した。(下表参照)

なお、放射性気体廃棄物の管理については、Ⅲ第3編(保安に係る補足事項)2.1.3放射性気体廃棄物等の管理に準じる。

放出量 [単位：億Bq/h]	第1号機カバー解体前	第1号機カバー解体後 (評価値)
第1号機	約0.007 <sup>※1</sup>	約0.00008～0.0004 (0.000078～0.00031) <sup>※2</sup>
第2号機	約0.002 <sup>※1</sup>	
第3号機	約0.0004 <sup>※1</sup>	
第4号機	0.0009 <sup>※1</sup>	
合計	約0.1 (0.011) <sup>※1</sup>	約0.1 (0.0039～0.0041) <sup>※2,3</sup>
敷地境界線量 [単位：mSv/y]	約0.03	約0.03

※1 第1・2・3・4号機の放出量については、平成26年度の平均値を用いている。

※2 評価値

※3 四捨五入の都合上、合計が一致しない

## カバー解体時における放出量評価

- ① 既認可の実施計画における評価（平成25年8月認可）
  - カバー解体時の放射性物質濃度が不明であったため、カバー設置前の濃度（平成23年10月）を使用して評価
  - 機器ハッチ・原子炉上部とも $10^{-4}\text{Bq/cm}^3$ と高い濃度であった  
⇒流量を減らす必要があった ⇒機器ハッチの開口面積を縮小
- ② 機器ハッチ開口部の縮小効果を見込まない評価
  - 濃度を最新の測定値（平成26年11月）に更新
  - 機器ハッチに関しては濃度が2桁下がり、原子炉上部の濃度は1桁下がった  
⇒原子炉の安定冷却の継続、飛散防止剤の散布効果等により濃度が減少  
⇒機器ハッチ開口部を縮小せずとも放出管理の目標値 $10^7\text{Bq/h}$ を下回る
- ③ 機器ハッチ開口部の縮小の効果を見込んだ評価（参考）
  - ③は②に対して機器ハッチ開口部90%縮小の効果を見込んだが、放出量は②とほとんど変わらない。

	機器ハッチ						原子炉上部		PCVガス管理		放出量 [Bq/h]
	濃度 [Bq/cm <sup>3</sup> ]	流量 [m <sup>3</sup> /h]	流量評価時の想定縮小%				濃度 [Bq/cm <sup>3</sup> ]	流量 [m <sup>3</sup> /h]	濃度 [Bq/cm <sup>3</sup> ]	流量 [m <sup>3</sup> /h]	
			機器 ハッチ	二重 扉	非常 扉	大物 搬入口 横扉					
①既認可 実施計画	$2.6 \times 10^{-4}$	1000～ 5200	90%	80%	80%	100%	$9.9 \times 10^{-4}$	360	$6.2 \times 10^{-6}$	28	$6.2 \times 10^5$ ～ $1.7 \times 10^6$
②機器ハッチ 縮小なし	$2.4 \times 10^{-6}$	1500～ 11000	0%	80%	100%	50%	$1.6 \times 10^{-5}$	250	$4.4 \times 10^{-6}$	21	$7.8 \times 10^3$ ～ $3.1 \times 10^4$
③機器ハッチ 縮小あり	$2.4 \times 10^{-6}$	1500～ 9800	90%	80%	100%	50%	$1.6 \times 10^{-5}$	250	$4.4 \times 10^{-6}$	21	$7.8 \times 10^3$ ～ $2.8 \times 10^4$

東京電力

## 被ばく評価

- 被ばく評価  
建屋カバー解体された場合の放出量による被ばく評価は以下の通り

	1号機カバー解体後の敷地境界における 年間の被ばく量[mSv/y]
① 既認可実施計画	0.002～0.004
② 機器ハッチ縮小なし	0.00002～0.00008
③ 機器ハッチ縮小あり	0.00002～0.00007

機器ハッチ開口の縮小による放出抑制効果を見込まない条件を見直したとしても、被ばく量に大きな変動を与えるものではない

東京電力



福島第一原子力発電所第1・2号機原子炉建屋  
作業エリアの整備に伴う干渉物解体撤去について

1. 干渉物解体撤去の目的

1・2号機原子炉建屋使用済燃料プール内の燃料取り出しに要する燃料取り出し用カバー（又はコンテナ）および燃料取扱設備を設置するには、1・2号機原子炉建屋周辺に作業エリアを整備するとともに、作業エリアの線量低減を図る必要がある。しかし、現在、1・2号機原子炉建屋の周辺は既存建屋等が干渉して作業エリアを整備できない状況にあるため、当該干渉物を解体撤去する。

2. 解体撤去の対象となる干渉物

作業エリアを整備するために解体撤去を要する干渉物は以下の通り。なお、解体撤去には各干渉物に付帯する設備も含む。

(1) 2号機原子炉建屋西側作業エリア

- a. 廃液サージタンク（2号機）
- b. ドラム缶搬出入室
- c. MS/SRV<sup>\*1</sup>窒素ガスポンベ室
- d. HCU<sup>\*2</sup>窒素ガスポンベ室
- e. 補助ボイラー窒素ガスポンベ室
- f. セメントブロアー室

※1：主蒸気/逃し安全弁

※2：制御棒駆動水圧系制御ユニット

(2) 2号機原子炉建屋南側作業エリア

- g. 電気品室
- h. 1～4号機共用所内ボイラー建屋

(3) 1号機原子炉建屋西側作業エリア

- i. 液体窒素貯蔵タンク
- j. 液体窒素蒸発器
- k. 廃液サージタンク（1号機）

3. 計画工程

計画工程は以下の通り。工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性がある。

2015年8月～2016年2月（2. 解体撤去の対象となる干渉物：a～g）

2019年6月～2020年6月 (2. 解体撤去の対象となる干渉物：h)

2020年2月～2023年3月 (2. 解体撤去の対象となる干渉物：i～k)

#### 4. 干渉物の解体撤去方法

干渉物の解体撤去にあたり、干渉物に付帯する設備等を図面や現場調査により確認し、安全を確保した計画を立案する。この計画に基づき、解体重機等による干渉物の解体撤去を実施する。

廃液サージタンクに貯蔵している廃液は、平成23年3月以前に液体廃棄物処理設備にて処理済の機器ドレンである。廃液サージタンク（2号機）の廃液は、解体撤去前に2号機放射性廃棄物処理建屋地下まで仮設ホースを敷設し、仮設ポンプを用いて、2号機の滞留水へ移送する。また、廃液サージタンク（1号機）の廃液は、解体撤去前に、プロセス主建屋地下まで吸引車で移送する。

なお、廃液移送前には当該廃液の全放射能の測定を行う。

解体撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 干渉物の付帯設備を撤去しても、稼働中の周辺設備に影響を与えないことを図面および現場調査にて確認し、適切な処置を施す。
- ・ 解体撤去作業周辺の稼働中の設備が解体撤去作業に伴い損傷しないために、現場状況に応じて設備の移設や防護を施す。
- ・ 解体撤去作業においては、火災リスクを低減するため、火気を使用する機材を原則として選定しない。（ただし、現場状況に応じて火気を使用する機材を選定する場合は、十分な防護対策を施した上で使用する）
- ・ 2. 解体撤去の対象となる干渉物 h. 1～4号機共用所内ボイラ建屋については、建屋内に設置されている稼働中の2号機原子炉建屋排気設備が解体撤去作業に伴い損傷しないために、現場状況に応じて適切な防護を施す。

廃液サージタンクに貯蔵している廃液の移送作業の留意事項を下記に示す。

- ・ 廃液移送に用いる仮設ホースの連結部は、図1のように養生を行い、受けパンの中には漏えい検知器を設置する、または常時専任監視員を設ける。
- ・ 漏えい検知器が発報した場合は、速やかに廃液移送に用いている仮設ポンプを停止する。
- ・ 廃液移送に用いる仮設ホースは、現場状況に応じて損傷防止対策を行う。

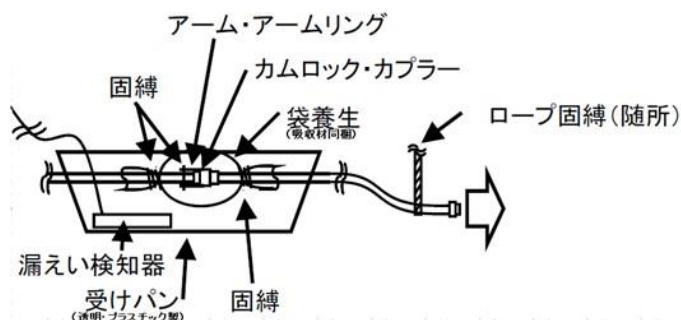


図1 仮設ホース連結部養生

#### 5. 解体撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

干渉物の解体撤去時に、放射性物質が付着した粉じんが飛散しないよう、下記の対策を実施する。

##### (1) 通常の解体撤去作業時の対策

###### a. 作業開始前

当日の解体撤去予定範囲に対して飛散防止剤を散布する。

###### b. 作業中

2. 解体撤去の対象となる干渉物 a～g, i～k については、作業対象部およびその周辺に対して散水し、湿潤状態を維持する。散水により発生する水は、吸水マット等で可能な限り回収し、廃棄物として処理する。なお、雨天時は、吸水マット等による水の回収が困難であると判断した場合、散水を伴う作業については実施しない。

2. 解体撤去の対象となる干渉物 h. 1～4号機共用所内ボイラ建屋については、鉄骨造であり、ダスト飛散の恐れが低いことから、作業中の散水は実施しない。

###### c. 作業完了後

当日の解体撤去実施範囲に対して飛散防止剤を散布する。

##### (2) 放射性物質の飛散が確認された場合の対策

解体撤去作業中に、万が一、構内の空気中放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、解体撤去対象物の周囲の空間に対し広範囲に散水または飛散

防止剤の散布を行う。

#### 6. 解体撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

解体する干渉物の表面線量率や表面積から気中へ放出される放射性物質の放出量を保守的な値を用いて概略評価を行い、本作業に伴う放射性物質の放出量が、敷地境界における管理目標値 0.03mSv/年に相当する放出量と比較して、非常に小さな値であることを確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量と解体作業期間から想定した放射性物質の放出率は、敷地境界の近傍に設置されたダストモニタの警報設定値に影響を与える範囲ではないことを確認した。

なお、放射性物質の放出量の評価は、粉じんの飛散抑制策の抑制効果は見込んでおらず、安全側に評価している。

#### 7. 廃棄物の保管

2. 解体撤去の対象となる干渉物 a～g, i～k については、干渉物の解体撤去に伴い発生する固体廃棄物の発生量は約 570 m<sup>3</sup>（コンクリート約 230 m<sup>3</sup>，金属類約 340 m<sup>3</sup>），線量率は 1～30 mSv/h と想定しており、「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、覆土式一時保管施設（エリア L）または仮設保管設備（エリア A1・A2），固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。なお、2. 解体撤去の対象となる干渉物 i. 液体窒素貯蔵タンクについては、共用プール建屋西側整備ヤードに一時的に移動・保管した後、解体撤去を実施する。

2. 解体撤去の対象となる干渉物 h. 1～4号機共用所内ボイラ建屋については、干渉物の解体撤去に伴い発生する固体廃棄物の発生量は約 270 m<sup>3</sup>（コンクリート約 70 m<sup>3</sup>，金属類約 200 m<sup>3</sup>），線量率は 1～30mSv/h と想定している。解体後、解体対象物の線量測定を行い、線量区分に応じて、下記の通り保管・管理する。

「Ⅲ特定原子力施設の保安 第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、1～30mSv/h の瓦礫類は固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。1mSv/h 以下の瓦礫類のうち、0.1～1mSv/h 以下の瓦礫類は一時保管エリア（E1, P2, W, X）及び固体廃棄物貯蔵庫第9棟に、0.1mSv/h 以下の瓦礫類は一時保管エリア（P1）に保管・管理する。

#### 8. 作業員の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所では、外部放射線に係わる線量率を把握し、放射線業務従事者等の立入頻度や滞在時間等を管理することで、作業時における放射線業務従事者が受ける線量が労働安全衛生法およびその関連法令に定められた線量限度を超えないようにする。

1・2号機原子炉建屋使用済燃料プール内の燃料取り出しに関連する今後の工事に

における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 放射性物質により汚染している干渉物の撤去による線量低減
- ・ 路盤面の整備による線量低減
- ・ 作業に応じて遮へいベストを着用することにより、作業員の被ばく量を低減
- ・ 作業エリア近傍に遮へい効果のある退避場所を設置し、不要な被ばく量を低減
- ・ 作業エリアに当該場所の空間線量率を表示することによる注意喚起

高線量エリアにおける施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

福島第一原子力発電所 1 号機原子炉建屋  
オペレーティングフロア北側のガレキの撤去について

1. ガレキ撤去の目的

1 号機原子炉建屋使用済燃料プール内の燃料取り出しに要する燃料取り出し用カバーおよび燃料取扱設備を設置するため、オペレーティングフロア（以下、オペフロ）上のガレキを撤去する。

2. 撤去の対象となるガレキ

本資料にて対象となる範囲は図 1～3 の通り、7a 通り以北の範囲のガレキとする。（オペフロ外周の鉄骨を除く）

7a 通りより南側の範囲については、継続して調査を進め、施工計画を策定次第、別途申請する。

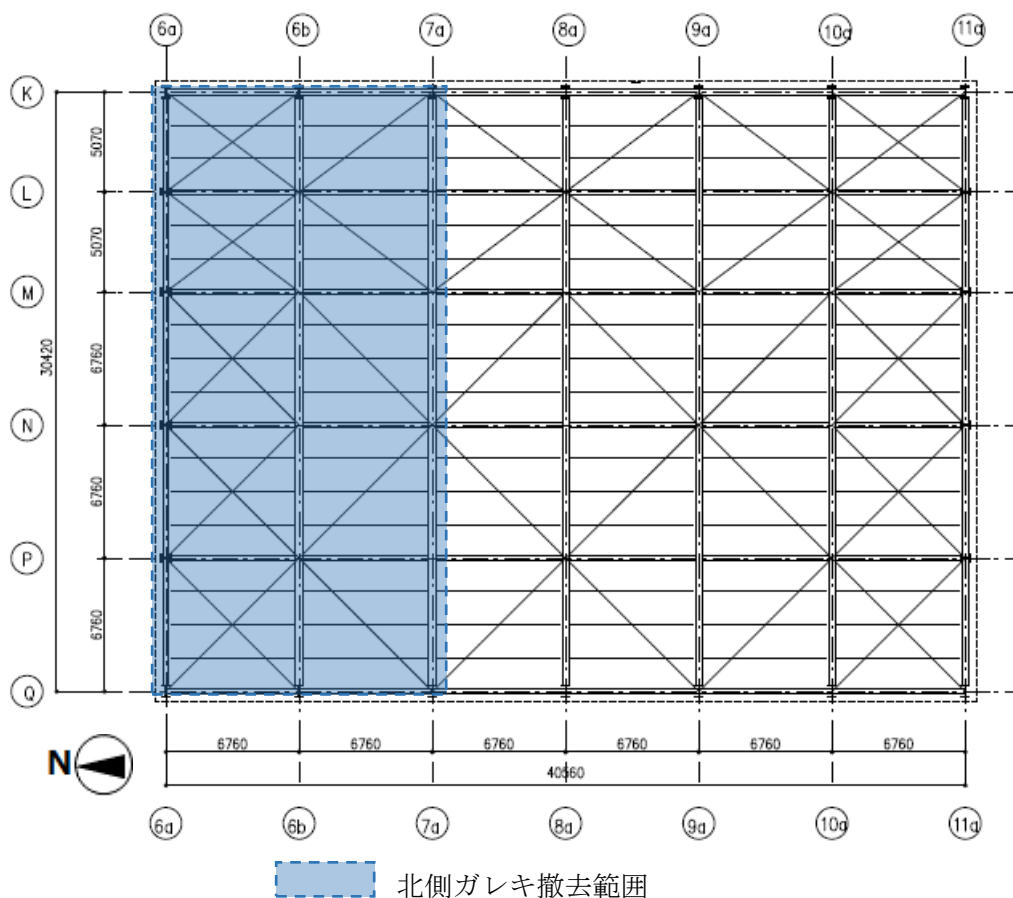


図 1 屋根伏図（上弦面）

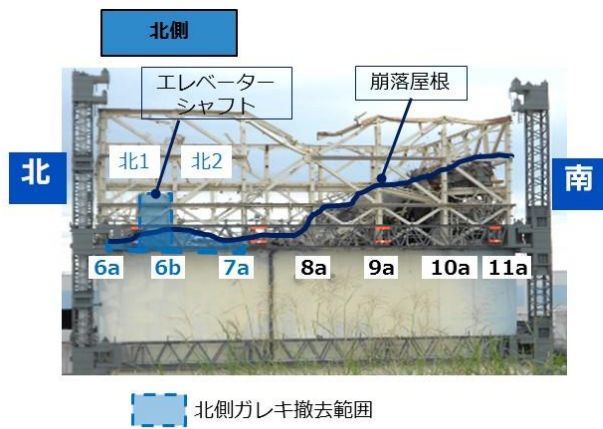


図2 立面イメージ

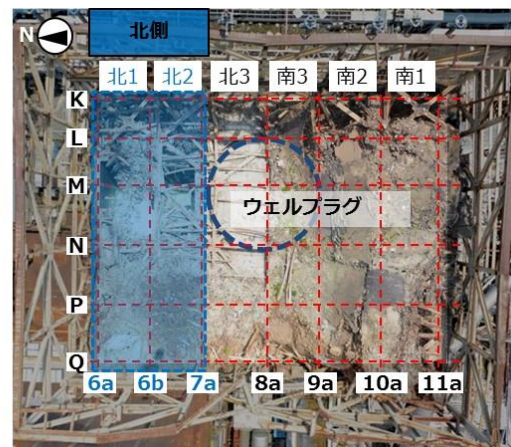


図3 平面イメージ

### 3. 計画工程

計画工程は以下の通り。工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性が有る。

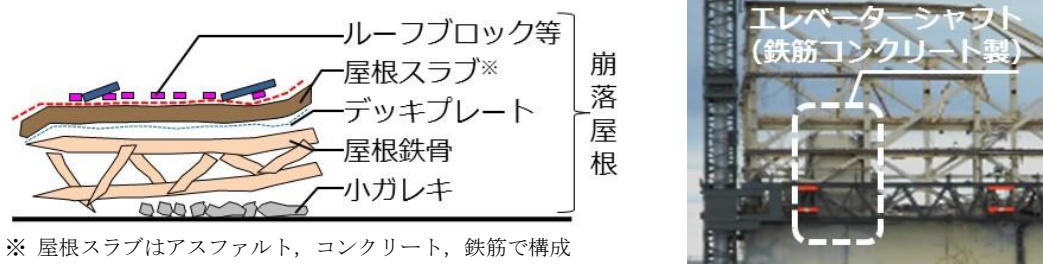
平成30年1月～平成31年3月

#### 4. ガレキの撤去方法

ガレキの撤去にあたり、安全を確保するため、大型クレーンに吊り下げた吸引装置、ペンチ、カッター、ニブラ、ワイヤーソーを用いてガレキの撤去を実施する。

ガレキは、図4のように種類の違うガレキが積み重なっており、撤去対象物によって装置・工法を表1のように使い分ける。

屋根鉄骨のうち、ワイヤーソーにより切断する箇所を図5に示す。



※ 屋根スラブはアスファルト、コンクリート、鉄筋で構成

図4 ガレキの状態

表1 撤去対象物ごとの装置・工法の使い分け

装置	工法	撤去対象物
吸引装置	吸引	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルーフブロック等</li> <li>屋根スラブ (アスファルト, コンクリート)</li> <li>エレベーターシャフト (コンクリート)</li> <li>小ガレキ 等</li> </ul>
ペンチ	把持	<ul style="list-style-type: none"> <li>デッキプレート</li> <li>屋根スラブ (アスファルト, 鉄筋)</li> <li>エレベーターシャフト (鉄筋)</li> <li>小ガレキ 等</li> </ul>
カッター	切断・把持	<ul style="list-style-type: none"> <li>屋根鉄骨 等</li> </ul>
	破砕	<ul style="list-style-type: none"> <li>エレベーターシャフト (コンクリート)</li> </ul>
ニブラ	破砕	<ul style="list-style-type: none"> <li>エレベーターシャフト (コンクリート)</li> </ul>
ワイヤーソー	切断	<ul style="list-style-type: none"> <li>屋根鉄骨</li> </ul>



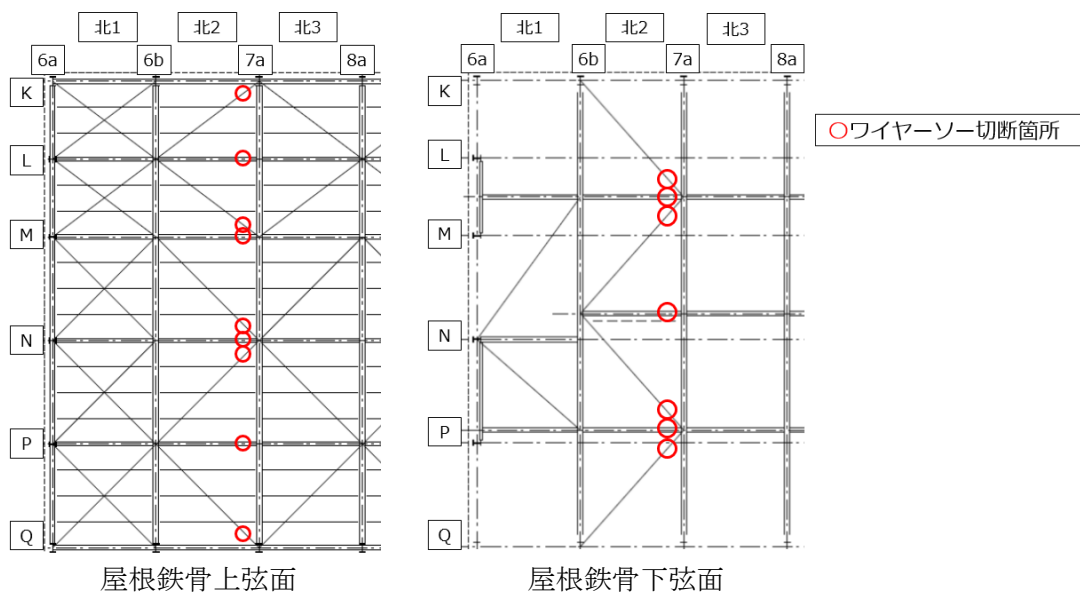


図5 ワイヤーソーによる切断箇所

撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 撤去作業周辺の稼働中の設備を撤去作業に伴い損傷させないために、図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じて設備の防護を施す。
- ・ 撤去作業においては、火災リスクを低減するため、火気を使用する機材を原則として選定しない。(ただし、現場状況に応じて火気を使用する機材を選定する場合は、十分な防護対策を施した上で使用する)

#### 5. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

ガレキの撤去時に、放射性物質が付着した粉じんの飛散抑制を図るため、下記の対策を実施する。

##### a. 作業開始前

オペフロ上のガレキ全体に、定期的に飛散防止剤を散布することで、粉じんが固着された状態にする。

##### b. 作業中

コンクリート系のガレキに対しては、可能な限り吸引による撤去を行うことで、飛散量の低減を図る。破碎が必要なコンクリート系のガレキに対しては、破碎と並行して散水を実施する。

##### c. 作業完了後

撤去したガレキの種類・用いた工法に依らず、当日のガレキ撤去作業後に、撤去実施範囲に対して飛散防止剤を散布する。

撤去作業中に、万が一、1号機オペフロに設置したダストモニタにより空气中放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、散水を行う。また、構内に設置してある上記以外のダストモニタおよびモニタリングポストにより、空气中放射性物質濃度もしくは空間放射線量率の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断する。

なお、散布した水は、ファンネルや階段室等の開口を通じ、建屋滞留水となる。散水および炉注水による建屋滞留水増加量、移送ポンプの能力、および原子炉建屋地下の面積から、建屋滞留水の管理上許容できる散水時間を算出した結果、3時間強程度であり、十分な散水時間を確保できることを確認した。

#### 6. 撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

吸引・把持による撤去は、撤去に伴う粉じんの飛散が少ない工法であり、1号機オペフロの調査において支障となるガレキの吸引・把持による撤去を行った際にも、オペフロならびに構内のダストモニタに有意な変動がないことを確認している。

切断・破砕による撤去は、ガレキの表面線量率や表面積から気中へ放出される放射性物質放出量の評価を行い、本作業に伴う放射性物質の放出量による敷地境界での線量が、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」で求められている敷地境界線量1mSv/年未満と比較して、十分小さな値であることを確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量と解体作業時間から想定した放射性物質の放出率は、敷地境界の近傍に設置されたダストモニタの警報設定値を超えない範囲であることを確認した。

#### 7. 撤去作業中の装置およびガレキの落下対策

撤去作業中の装置およびガレキの落下を防ぐため、誤作動防止システムの構築、始業前点検、カメラによる監視等の対策を実施する。

#### 8. 廃棄物の保管

ガレキの撤去に伴い、表面線量率30mSv/h以下の瓦礫類が約320m<sup>3</sup>、表面線量率30mSv/hを超える瓦礫類が約400m<sup>3</sup>発生すると想定している。

「Ⅲ章第3編2.1.1放射性固体廃棄物等の管理」に従い、30mSv/h以下の瓦礫類は覆土式一時保管施設（エリアL）または仮設保管設備（エリアA1・A2）もしくは容器収納のうえ固体廃棄物貯蔵庫に、30mSv/hを超える瓦礫類は容器収容のうえ固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。

## 9. 作業者の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し、作業時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・ 遮へいの設置による作業環境の線量低減
- ・ 待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・ 必要に応じた遮へいベスト等の保護具着用による被ばく低減

高線量エリアにおける施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋  
オペレーティングフロア中央および南側のガレキの一部撤去について

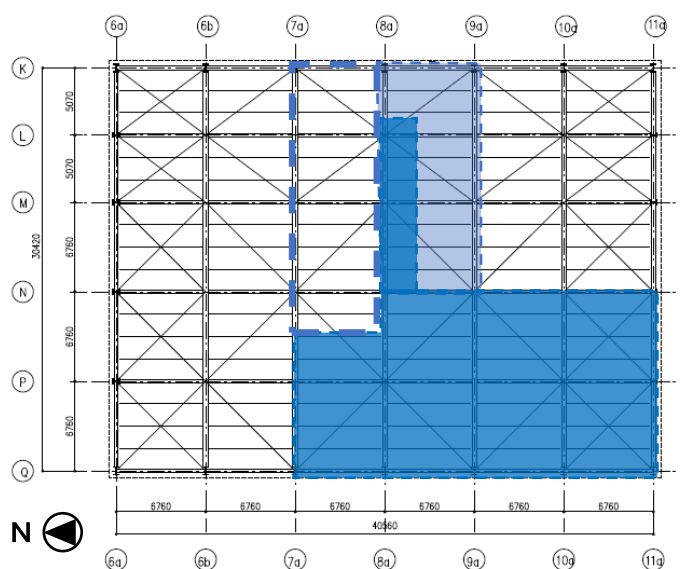
1. ガレキ撤去の目的

1号機原子炉建屋使用済燃料プール内の燃料取り出しに要する燃料取り出し用カバーおよび燃料取扱設備を設置するため、オペレーティングフロア（以下、オペフロ）上のガレキを撤去する。

2. 撤去の対象となるガレキ

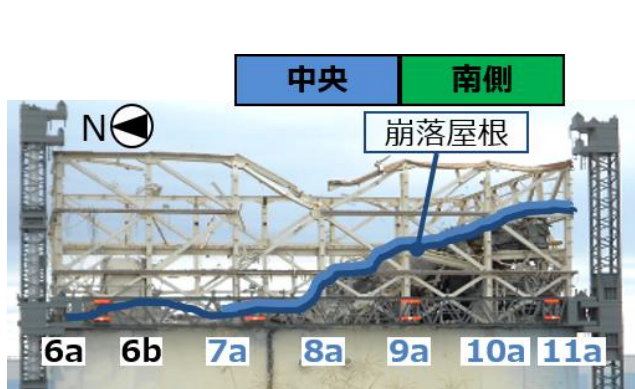
本資料にて対象となる範囲は図1～3の通り、7a通り以南の範囲のガレキとする。（オペフロ外周の鉄骨を除く）

また、撤去するガレキは、図1—①の範囲においては図4におけるルーフブロック等、屋根スラブ、デッキプレートとする。図1—②の範囲はルーフブロック等を撤去する。

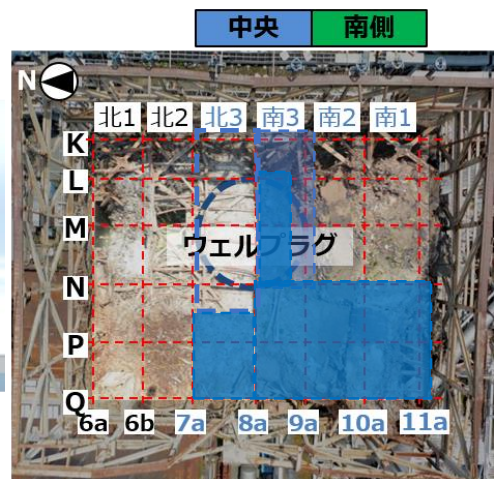


- ルーフブロック等、屋根スラブ、デッキプレート撤去範囲(①)
- ルーフブロック等撤去範囲(②)
- オペフロ調査に伴う支障物撤去により、ルーフブロック等、屋根スラブ、デッキプレート撤去済みの範囲

図1 屋根伏図（上弦面）



— 中央および南側ガレキ撤去  
図2 立面イメージ



- ルーフブロック等，屋根スラブ，デッキプレート撤去範囲
- ルーフブロック等撤去範囲
- オペフロ調査に伴う支障物撤去により，ルーフブロック等，屋根スラブ，デッキプレート撤去済みの範囲

図3 平面イメージ

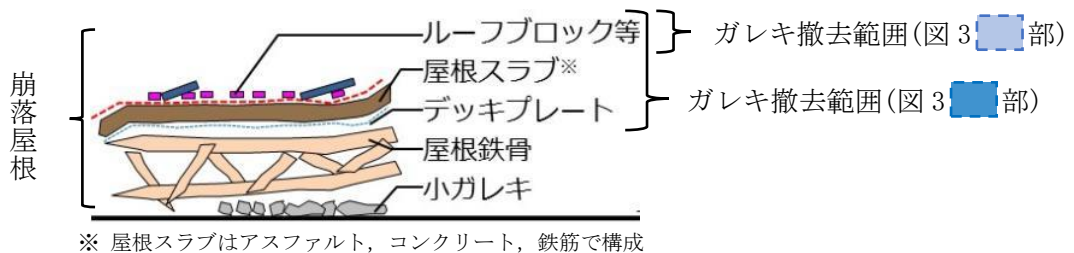


図4 ガレキの状態および中央ガレキ撤去範囲

### 3. 計画工程

計画工程は以下の通り。工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性がある。

平成30年6月～平成32年5月

#### 4. ガレキの撤去方法

ガレキの撤去にあたり、安全を確保するため、大型クレーンに吊り下げた吸引装置、ペンチを用いてガレキの撤去を実施する。

ガレキは、図4のように種類の違うガレキが積み重なっており、撤去対象物によって装置・工法を表1のように使い分ける。

表1 撤去対象物ごとの装置・工法の使い分け

装置	工法	撤去対象物
吸引装置	吸引	・ルーフブロック等 ・屋根スラブ（アスファルト、コンクリート）
ペンチ	把持	・デッキプレート ・屋根スラブ（アスファルト、鉄筋）

撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 撤去作業周辺の稼働中の設備を撤去作業に伴い損傷させないために、図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じて設備の防護を施す。
- ・ 撤去作業においては、火災リスクを低減するため、火気を使用する機材を原則として選定しない。（ただし、現場状況に応じて火気を使用する機材を選定する場合は、十分な防護対策を施した上で使用する）

#### 5. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

ガレキの撤去時に、放射性物質が付着した粉じんの飛散抑制を図るため、下記の対策を実施する。

##### a. 作業開始前

オペフロ上のガレキ全体に、定期的に飛散防止剤を散布することで、粉じんが固着された状態にする。

##### b. 作業中

コンクリート系のガレキに対しては、可能な限り吸引による撤去を行うことで、飛散量の低減を図る。

##### c. 作業完了後

撤去したガレキの種類・用いた工法に依らず、当日のガレキ撤去作業後に、撤去実施範囲に対して飛散防止剤を散布する。

撤去作業中に、万が一、1号機オペフロに設置したダストモニタにより空气中放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、散水を行う。また、構内に設置してある上記以外のダストモニタおよびモニタリングポストにより、空气中放射性物質濃度もしくは空間放射線量率の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断す

る。

なお、散布した水は、ファンネルや階段室等の開口を通じ、建屋滞留水となる。散水および炉注水による建屋滞留水増加量、移送ポンプの能力、および原子炉建屋地下の面積から、建屋滞留水の管理上許容できる散水時間を算出した結果、3時間強程度であり、十分な散水時間を確保できることを確認した。

#### 6. 撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

吸引・把持による撤去は、撤去に伴う粉じんの飛散が少ない工法であり、1号機オペフロの調査において支障となるガレキの吸引・把持による撤去を行った際にも、オペフロならびに構内のダストモニタに有意な変動がないことを確認している。

#### 7. 撤去作業中の装置およびガレキの落下対策

撤去作業中の装置およびガレキの落下を防ぐため、誤作動防止システムの構築、始業前点検、カメラによる監視等の対策を実施する。

#### 8. 廃棄物の保管

ガレキの撤去に伴い、表面線量率 30mSv/h 以下の瓦礫類が約 110 m<sup>3</sup>、表面線量率 30mSv/h を超える瓦礫類が約 620 m<sup>3</sup>発生すると想定している。

「Ⅲ章第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、30mSv/h 以下の瓦礫類は覆土式一時保管施設（エリア L）または仮設保管設備（エリア A1・A2）もしくは容器収納のうえ固体廃棄物貯蔵庫に、30mSv/h を超える瓦礫類は容器収容のうえ固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。

#### 9. 作業員の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し、作業時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・ 遮へいの設置による作業環境の線量低減
- ・ 待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・ 必要に応じた遮へいベスト等の保護具着用による被ばく低減

高線量エリアにおける施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋  
オペレーティングフロア外周鉄骨の一部撤去について

1. 外周鉄骨撤去の目的

1号機原子炉建屋使用済燃料プール内の燃料取り出しに要する燃料取り出し用カバーおよび燃料取扱設備を設置するため、オペレーティングフロア（以下、オペフロ）上の外周鉄骨を撤去する。

オペフロ南側ガレキ撤去に際し天井クレーン、燃料取扱機、ガレキ等が使用済燃料プール（以下、SFP）へ落下することを防止するため、SFP保護等を実施する計画としている。SFP保護等は作業床からアクセスを計画しており、ルート確保のため外周鉄骨の一部のブレースを撤去する。

2. 撤去の対象となる外周鉄骨

本資料にて対象となる範囲は図1～3の通り、東面2箇所、南面1箇所、西面1箇所のブレースとする。上記以外の外周鉄骨については、施工計画を策定次第、別途申請する。

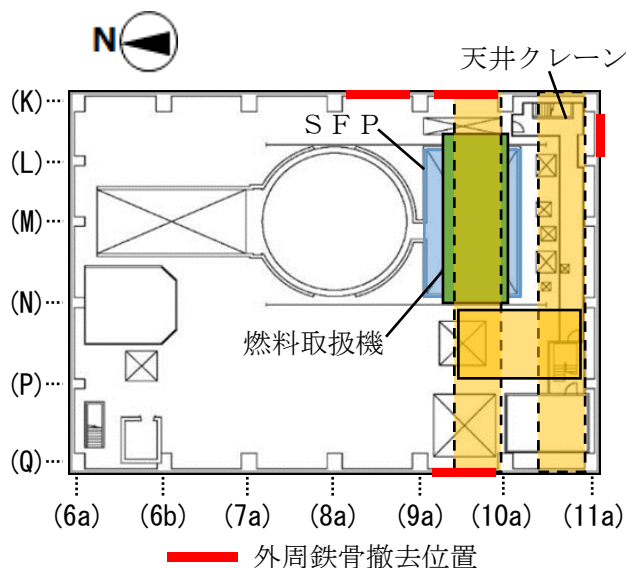


図1 オペフロ平面図

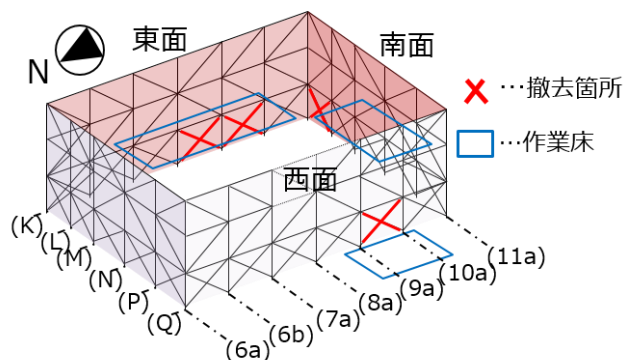


図2 ブレース撤去位置イメージ

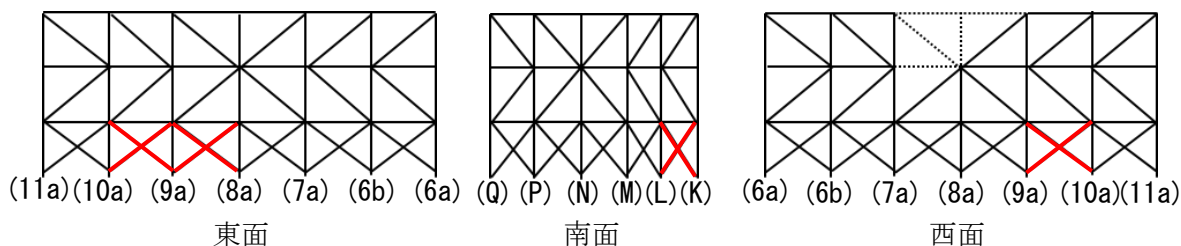


図3 ブレース撤去位置(建屋外側からの視点) X…撤去箇所



### 3. 計画工程

計画工程は以下の通り。工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性がある。

平成 30 年 7 月～平成 30 年 10 月

### 4. 外周鉄骨の撤去方法

外周鉄骨の撤去は、切断装置(セーバーソー、バンドソー)を使用し、切断・撤去する。切断箇所は、図 4 に示すように 4 箇所あり、そのうち初めの 3 箇所をセーバーソーで切断し、残った 1 箇所を、切断した鉄骨の把持・引き抜きを行う把持装置と干渉しないように、バンドソーで切断する。(西面の撤去箇所については、内空確保の観点で下部 2 箇所をバンドソーで切断する)

なお、装置はすべて地上から遠隔により操作する。

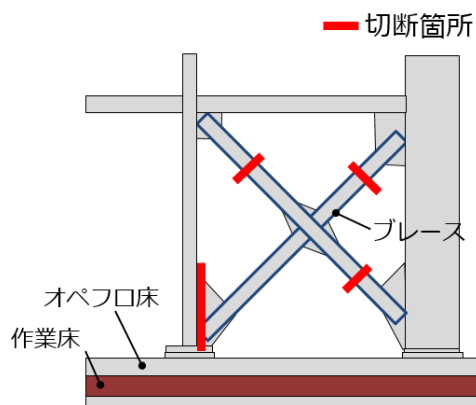


図 4 ブレース切断イメージ(南面の例)\*

\*: 東面, 西面については, 干渉回避や内空確保の観点で切断位置が異なる

表 1 ブレース撤去に使用する装置

装置	使用目的
セーバーソー	・ブレースの切断
バンドソー	・ブレースの切断
把持装置	・切断後のブレースの把持, 引出し

撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 撤去作業周辺の稼働中の設備を撤去作業に伴い損傷させないために、図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じて設備の防護を施す。
- ・ 撤去作業においては、火災リスクを低減するため、火気を使用する機材を原則として選定しない。(ただし、現場状況に応じて火気を使用する機材を選定する場合は、十分な防護対策を施した上で使用する)

## 5. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

外周鉄骨の撤去時に、放射性物質が付着した粉じんの飛散抑制を図るため、下記の対策を実施する。

### a. 作業開始前

オペフロ上のガレキ全体に、定期的に飛散防止剤を散布することで、粉じんが固着された状態にする。

### b. 作業中，作業完了後

鉄骨は内部に汚染が浸透しないこと、切断時の刃の接触面積が小さいこと、および表面のダストは飛散防止剤により固着していることから、外周鉄骨切断時のダスト発生量は極めて小さい。

撤去作業中に、万が一、1号機オペフロに設置したダストモニタにより空气中放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、散水を行う。また、構内に設置してある上記以外のダストモニタおよびモニタリングポストにより、空气中放射性物質濃度もしくは空間放射線量率の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断する。

なお、散布した水は、ファンネルや階段室等の開口を通じ、建屋滞留水となる。散水および炉注水による建屋滞留水増加量、移送ポンプの能力、および原子炉建屋地下の面積から、建屋滞留水の管理上許容できる散水時間を算出した結果、3時間強程度であり、十分な散水時間を確保できることを確認した。

## 6. 撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

外周鉄骨の表面線量率や表面積から、切断により気中へ放出される放射性物質放出量の評価を行い、本作業に伴う放射性物質の放出量による敷地境界での線量が、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」で求められている敷地境界線量1mSv/年未満と比較して、十分小さな値であることを確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量と解体作業時間から想定した放射性物質の放出率は、敷地境界の近傍に設置されたダストモニタの警報設定値を超えない範囲であることを確認した。

## 7. 撤去作業中の装置およびガレキの落下対策

撤去作業中の装置およびガレキの落下を防ぐため、誤作動防止システムの構築、始業前点検、カメラによる監視等の対策を実施する。

## 8. 廃棄物の保管

ガレキの撤去に伴い、表面線量率 30mSv/h 以下の瓦礫類が約 30 m<sup>3</sup>、発生すると想定している。

「Ⅲ章第 3 編 2. 1. 1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、30mSv/h 以下の瓦礫類は覆土式一時保管施設（エリア L）または仮設保管設備（エリア A1・A2）もしくは容器収納のうえ固体廃棄物貯蔵庫に、30mSv/h を超える瓦礫類は容器収容のうえ固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。

## 9. 作業者の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し、作業時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・ 遮へいの設置による作業環境の線量低減
- ・ 待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・ 必要に応じた遮へいベスト等の保護具着用による被ばく低減

高線量エリアにおける施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

福島第一原子力発電所1号機原子炉建屋  
オペレーティングフロア床上のガレキの一部撤去について

1. 床上ガレキ撤去の目的

1号機原子炉建屋の崩落屋根ガレキや天井クレーン、燃料取扱機等の撤去にあたり、ガレキ落下対策として実施を計画している使用済燃料プール（以下、SFP）保護カバー等を設置するため、当該作業に支障となるオペレーティングフロア（以下、オペフロ）床上ガレキの一部を撤去する。

2. 撤去の対象となる床上ガレキ

対象となる範囲は図1の通り。その他の範囲については必要に応じて計画が纏まり次第、別途申請する。

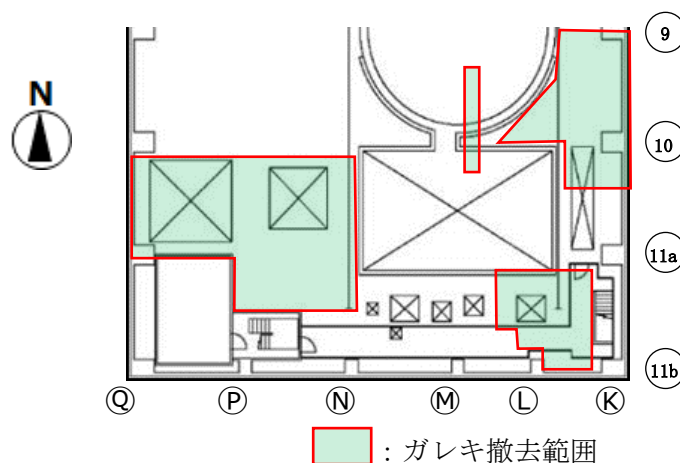


図1 オペフロ床上のガレキ撤去範囲

3. 計画工程

計画工程は以下の通り。工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性が有る。

2019年3月～2020年1月

4. オペフロ床上ガレキの撤去方法

床上支障ガレキの撤去は、遠隔重機に装着した小型バケットやバイブスクレーパー、カッター、グラップル等を使用する。中型重機のZAXIS-75は、作業床上から腕が届く範囲でガレキの撤去を行い、小型重機のZAXIS-17やASTACO-SORAは、オペフロ床上にアクセスし、ガレキの撤去を行う。

表1 オペフロ床上のガレキ撤去に使用する装置

装置	主な使用目的
単腕遠隔重機 (ZAXIS-75, ZAXIS-17)	・ガレキの把持, 手すり等の切断, ガレキのすくい, 固着ガレキの剥離 等
双腕遠隔重機 (ASTACO-SoRa)	・ガレキの把持, 梯子・ケーブル等の切断 等
吸引装置	・ガレキの吸引
クレーン (オーシャンクレーン, ミニクローラークレーン)	・H鋼の把持, H鋼の移動

撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 撤去作業周辺の稼働中の設備を撤去作業に伴い損傷させないために、図面および現場調査にて確認し、現場状況に応じて設備の防護を施す。
- ・ 撤去作業においては、火災リスクを低減するため、火気を使用する機材を原則として選定しない。(ただし、現場状況に応じて火気を使用する機材を選定する場合は、十分な防護対策を施した上で使用する)

#### 5. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

オペフロ床上のガレキ撤去時に、放射性物質が付着した粉じんの飛散抑制を図るため、下記の対策を実施する。

##### a. 作業開始前

オペフロ床上のガレキ全体に、定期的に飛散防止剤を散布することで、粉じんが固着された状態にする。

##### b. 作業中

コンクリート系のガレキに対しては、可能な限り吸引による撤去を行うことで、粉じん飛散量の低減を図る。

##### c. 作業完了後

撤去したガレキの種類・用いた工法に依らず、当日のガレキ撤去作業後に、撤去実施範囲に対して飛散防止剤を散布する。

撤去作業中に、万が一、1号機オペフロに設置したダストモニタにより空气中放射性物質濃度の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断し、散水を行う。また、構内に

設置してある上記以外のダストモニタおよびモニタリングポストにより、空气中放射性物質濃度もしくは空間放射線量率の異常を検知した場合は、速やかに作業を中断する。

なお、散布した水は、ファンネルや階段室等の開口を通じ、建屋滞留水となる。散水および炉注水による建屋滞留水増加量、移送ポンプの能力、並びに原子炉建屋地下の面積から、建屋滞留水の管理上許容できる散水時間を算出した結果、3時間強程度であり、十分な散水時間を確保できることを確認した。

#### 6. 撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

吸引・把持・押し切り切断による撤去は、撤去に伴う粉じんの飛散が少ない工法であり、1号機オペフロの調査において支障となるガレキの吸引・把持・押し切り切断による撤去を行った際にも、オペフロならびに構内のダストモニタに有意な変動がないことを確認している。

機械的切断・すくい・剥離による撤去は、ガレキの表面線量率やガレキ撤去範囲の面積から気中へ放出される放射性物質放出量の評価を行い、本作業に伴う放射性物質の放出量による敷地境界での線量が、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」で求められている敷地境界線量1mSv/年未満と比較して、十分小さな値であることを確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量と解体作業時間から想定した放射性物質の放出率は、敷地境界の近傍に設置されたダストモニタの警報設定値を超えない範囲であることを確認した。

#### 7. 撤去作業中の装置およびガレキの落下対策

撤去作業中の装置およびガレキの落下を防ぐため、誤操作防止システムの構築、始業前点検、カメラによる監視等の対策を実施する。

#### 8. 廃棄物の保管

ガレキの撤去に伴い、表面線量率30mSv/h以上のガレキ類が約30m<sup>3</sup>発生すると想定している。

「Ⅲ章第3編2.1.1放射性固体廃棄物等の管理」に従い、30mSv/hを超えるガレキ類は容器収容のうえ固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。

#### 9. 作業員の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所の外部放射線に係る線量率を把握し、作業時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・ 遮へいの設置による作業環境の線量低減
- ・ 待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・ 必要に応じた遮へいベスト等の保護具着用による被ばく低減

高線量エリアにおける施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について

1. 一部撤去の目的

1号機及び2号機非常用ガス処理系配管（以下、SGTS配管）のうち屋外に敷設されている配管については、1/2号機廃棄物処理建屋雨水対策工事及び1号R/B大型カバー設置工事等に干渉することから配管の撤去を実施する。

2. SGTS配管一部撤去の計画概要

1号機及び2号機SGTS配管は各原子炉建屋からそれぞれ屋外に敷設されており、1号機SGTS配管及び2号機SGTS配管は排気筒付近で合流し、排気筒に接続している。本計画では、図に示す各原子炉建屋出口から1/2号機合流箇所手前までの配管を撤去する。

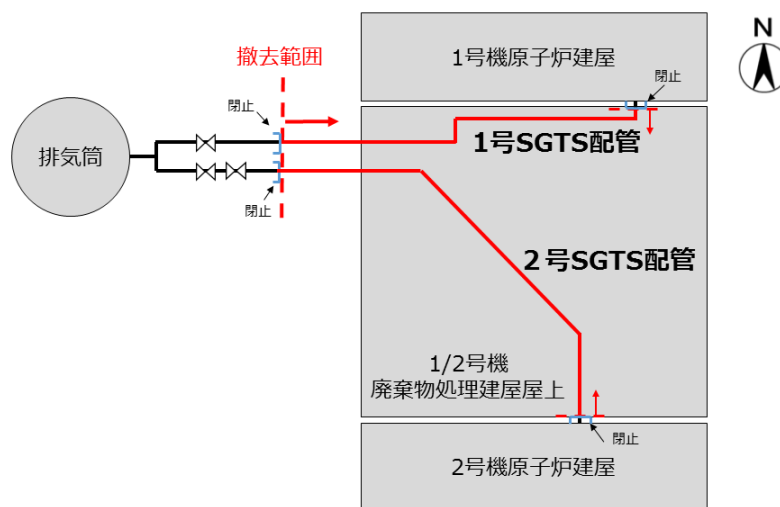


図1 SGTS配管撤去範囲

3. 計画工程

計画工程は以下の通り。

工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性が有る。

計画工程：2021年8月～ 2022年3月



#### 4. 配管の撤去方法

クレーンにより吊り下げた遠隔切断装置により配管を把持・切断し撤去する。撤去した配管はハウス内で遠隔装置にてコンテナに収納可能な長さに切断しコンテナに入れて固体廃棄物貯蔵庫で保管する。

撤去作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 撤去作業周辺の稼働中の設備を撤去作業に伴い損傷させないため、事前に図面及び現場調査にて確認し、必要に応じて設備の防護を施す。
- ・ 撤去作業においては火災リスクを低減するため、原則、火気を発生させる装置は使用しない。
- ・ 切断するSGTS配管のうち本計画で撤去しない配管については、端部に閉止キャップを取り付けてダストが気中へ飛散することを防止する。
- ・ SGTS配管内の水の存在については少量の結露水程度と考えており、結露水が溜まっていると想定する箇所の切断は行わない。
- ・ SGTS配管内に水素の滞留は無いものと考えているが、予め同材質かつ同口径の配管材を用いて火花が出ないことを確認した低速回転のドリルを使用して穿孔し、水素濃度の測定を行う。配管内の水素濃度が4%以上であった場合は、配管内に窒素をパージしてから作業を継続する。

#### 5. 撤去作業に伴う放射性物質の飛散抑制対策

配管内面には遊離性の放射性ダスト（以下、ダスト）が付着している可能性があることから、配管切断時は下記の対策を実施する。

##### a. 配管切断前

配管切断時に配管内部のダストを気中に飛散させないため、配管切断箇所及び小割箇所へ発泡ウレタンを注入する。

##### b. 配管切断時

配管切断は予めウレタンを注入した箇所を切断する。配管切断中に切断箇所へ飛散防止剤を散布することで、切断箇所にダストを固着させる。さらに、切断装置（ワイヤーソー）の両面にカバーを設置し、カバー内を吸引することでダスト飛散量の低減を図る。

##### c. 配管小割時

配管の小割は、フィルタ付の局所排風機で換気される管理されたハウス内でウレタンの注入されている箇所を切断することで、ダスト飛散量の低減を図る。

##### d. 配管細断時

配管の細断は建屋内に設置するフィルタ付の局所排風機で換気される管理されたハウス内で実施することで、ダスト飛散量の低減を図る。

上記に加え、各作業エリアにダストモニタを設置しダスト濃度を監視する。  
作業中にダスト濃度の異常を検知した場合は速やかに作業を中断し、状況に応じて飛散防止剤の散布または散水の実施を検討する。

#### 6. 撤去作業に伴う放射性物質の環境影響

S G T S 配管の表面線量率測定をもとに配管内部の放射性物質量を推定し、切断に伴い欠損する面積分の配管内部の放射性物質が気中へ放出された場合の影響評価を保守的な条件の基に行った。評価結果より、放射性物質の放出による敷地境界での線量影響が、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」で求められている敷地境界線量 1mSv/年未満と比較して、十分小さな値であることを確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量から想定した敷地境界空气中放射性物質濃度は、敷地境界に設置されたモニタリングポスト近傍ダストモニタの警報設定値を超えない範囲であることを確認した。

#### 7. 撤去作業中の部材の落下防止対策

撤去作業中の部材落下防止を図るため、遠隔切断装置を用いて把持し把持状態はカメラにより監視する。また、遠隔切断装置とクレーンの使用前点検、監視員の配置及び作業エリアの区画等の対策を実施する。

#### 8. 廃棄物の保管

S G T S 配管撤去作業に伴い、表面線量率が最大で 160mSv/h 程度の金属瓦礫類が約 15m<sup>3</sup> 発生すると想定している。なお、撤去作業後に撤去物の線量測定を行い線量区分に応じて下記の通りに保管・管理する。

「Ⅲ 特定原子力施設の保安 第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。

#### 9. 作業者の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所では外部放射線に係わる線量率を把握し、立入頻度や滞在時間等を管理することで作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないように管理する。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、遠隔操作設備の利用により被ばく線量の低減を図る。また、配管の細断作業においては既存の建屋内にハウスを設置しR $\alpha$ ゾーンに設定するとともに、配管の細断からキャスク収納までを遠隔で実施することや遮蔽を設置することによる放射線業務従事者の被ばく線量の低減を図る。

#### 10. モックアップ試験

同材質かつ同口径の配管材で構成されたモックアップ試験設備でSGTS配管の把持、穴開け、ウレタン注入、切断、閉止及び細断作業のモックアップ試験を行う。

モックアップ試験では要素試験で確認できていない項目について検証し、各安全対策を満足したうえで全ての作業が成立することを確認する。

## 旧淡水化装置の撤去方法について

旧淡水化装置の廃止に伴い、放射性物質に汚染されている可能性のある旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等の撤去作業について定める。

## 1. 旧淡水化装置等

旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等は貯留タンクエリア堰内で内部水抜き、残水回収後に汚染拡大防止を図った上で機器を取外し後、Fタンクエリア内の作業エリアへ運搬し、切断して減容を行い、切断した減容片は、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。継続使用する設備との切り離しはフランジ部とし、開放部を閉止する。

## 1.1 作業内容と汚染拡大防止策

## 1.1.1 内部水抜き、残水回収作業時の汚染拡大防止策

旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等に残る残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、仮設タンク等を使用し回収する。回収した残水は淡水化装置等を用いて処理する。

当該作業を行う際の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 汚染水を内包している配管及びポンプ等の取外し作業は、隔離処置及び水抜き後に実施する。
- b. 仮設ホースの継手部がレバーロック式カプラの場合、継手部を固縛し外れ防止を行う。
- c. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部を袋養生することにより、漏えい時に汚染水を受けられるようにすると共に、仮設ポンプ等の設置エリアには仮設の堰を設ける。また、残水移送中は作業員による常時監視を行う。

## 1.1.2 取外、運搬作業時の汚染拡大防止策

- a. 取外し作業時は、開口部からの放射性物質の飛散により、周辺に汚染を拡大させないように養生等を実施する。
- b. 取外された旧淡水化装置を減容場所まで運搬する際は、養生等に破損がないことを確認したうえで運搬する。

### 1.1.3 減容作業・保管時の汚染拡大防止策

- a. 減容作業は汚染拡大防止のためフィルター付局所排風機を設置した仮設ハウス内で作業を行う。破損の恐れの高い作業床は、足場板及び防炎シートで二重養生する。入口付近には、立入制限及び線量の表示を行う。また、切断にはバンドソー等を使用し、下方に溜まる切断屑は、適宜回収することにより汚染の拡大防止とする。
- b. 減容作業中は、作業エリアの空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、速やかに作業を中断し、集塵の強化等の対策を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。
- c. 集塵の強化等の対策を実施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止する。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施したうえで再開する。
- d. 旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等を切断した減容片は、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。

### 1.2 作業員の被ばく低減

旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等の表面線量は約 0.015mSv/h 以下であり、撤去作業で作業員が過剰被ばくすることはないが、被ばく低減の観点から、作業エリアを区画することにより、作業員が容易に近付くことを防止する。また、線量当量率を測定し、作業員への注意喚起のために測定結果を表示する。

### 1.3 瓦礫類発生量

旧淡水化装置、移送ポンプ、配管等の撤去に伴い、約 200m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。瓦礫類の表面線量率は 0.015mSv/h 以下であり、瓦礫類は、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリア（C, F2, J, O, P1, V）にて一時保管する。

## 前処理フィルタの撤去方法について

前処理フィルタ 4 の撤去に伴い、放射性物質に汚染されている可能性のある容器、配管等の解体・撤去作業の方法について定める。

## 1. 前処理フィルタ

フィルタ容器は、淡水置換し、エアブローにより水切りした後、開口部を養生する。表面線量率は 0.1mSv/h 以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリア（P 1）にて一時保管する。表面線量率が 0.1mSv/h を超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。なお、 $\beta$ 汚染が確認された場合及び $\beta$ 汚染の恐れのある場合については容器に収納した上で一時保管する。

使用済の前処理フィルタの貯蔵は、II 2.35 添付資料－ 1 1 (5)と同様である。

運搬時に落下することを防止するため、フィルタ保管容器はトレーラに固縛するなどの策を講じて輸送する。

## 1.1. 汚染拡大防止

使用済みフィルタの金属製の保管容器は、腐食防止のため、塗装を施した金属材料を使用する。保管容器の蓋が容易に外れないよう容器と固定される構造とする。

## 1.2. 瓦礫類発生量

撤去に伴い、フィルタ容器が約 6.8m<sup>3</sup>（約 3.4m<sup>3</sup>の容器が 2 個）、使用済フィルタの保管容器が約 4m<sup>3</sup>（約 2m<sup>3</sup>の容器で 2 個程度）発生する見込みである。

## 2. 接続配管，ホース

接続配管，ホースは、残水をブローする。表面線量率は 0.1mSv/h 以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリア（P 1）にて一時保管する。表面線量率が 0.1mSv/h を超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。なお、 $\beta$ 汚染が確認された場合及び $\beta$ 汚染の恐れのある場合については容器に収納した上で一時保管する。継続使用する設備との切り離しはフランジ部とし、開放部を閉止する。

撤去に伴い、約 0.1m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。

## 雨水処理設備等の解体・撤去の方法について

雨水処理設備等の解体・撤去に伴い、核燃料物質その他の放射性物質に汚染されている可能性のあるタンク、ポンプ、移送配管の解体・撤去作業※の方法について定める。

※実施計画上の撤去作業には仮置き作業を含む

## 1. 雨水処理設備等

## a. タンク

雨水回収タンク（フランジタンク）は、受入している堰内雨水を雨水処理設備により処理した後に、必要に応じて汚染拡大防止を図った上で解体・切断し、構内で保管する。

## b. ポンプ

集水ピット抜出ポンプは、内包する堰内雨水を水抜きし、雨水処理設備により処理した後に、汚染拡大防止を図った上でポンプとケーブルを解体・分別し、ポンプ全体を養生し、構内で保管する。

## c. 移送配管

移送配管を取り外す前には、配管内部の水抜きを実施し、雨水処理設備により処理を行う。また、残水がある場合に備えて、配管取り外し部には受け養生を実施し、汚染拡大防止を図った上で取り外し・切断し、端部養生を行い構内で保管する。

## 1.1. 残水処理作業時（残水処理前の仮設ポンプによる水抜き作業を含む）の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

堰内雨水の処理後にタンク底部に残る残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、バキュームカー及び底部残水回収装置等を使ってタンク底部より残水を回収し、雨水処理設備等により処理する。残水の回収処理作業は、タンク内の空間線量率を測定し、閾値（ $\gamma$ 線：0.4mSv/hまたは $\beta$ 線：2.5mSv/h）を基準にして残水回収処理方法を判断する。

なお、解体前にタンク内部のダスト濃度測定を行い、閾値（ $5 \times 10^{-5} \text{Bq/cm}^3$ ）を超過している場合は、タンク内表面に散水を行うが、散水により発生する残水（1回に $1\text{m}^3$ 程度）についても回収処理作業で回収を行い雨水処理設備等により処理を行う。また、作業中のダスト濃度上昇に伴う追加対策として実施する追加散水を考慮しても最大でタンク1基あたり $5\text{m}^3$ 程度であるため雨水処理設備等による処理に影響を及ぼすことはない。

当該作業を行う際の、漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 漏えい防止策として、仮設ホースを使用する場合は、仮設ホースの継手部をカムロック式とし、さらに番線等で固縛して、継手の外れ防止を行う。また、タンクの撤去にあたり実施する残水回収処理作業にバキュームカーを使用する場合には、バキ

ュームカーとホースの接続にロック機構を有するものを使用し、確実にロックされていることを確認する。

- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部に水受けをもうけることにより、漏えい水を受けられるようにした上で、残水移送中には作業員による常時監視を行う。

#### 1.2. 解体作業時の汚染拡大防止策

解体作業時における汚染拡大防止対策の可否については、解体前にタンク内部のダスト濃度測定を行い、閾値 ( $5 \times 10^{-5} \text{Bq/cm}^3$ ) を超過する場合は、汚染拡大防止を図った上で作業を実施する。

解体作業手順の概要を図一1に示す。

- a\*. タンク上部のマンホールからタンク内表面に散水し、表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクを低減する。
- b\*. 局所排気装置を設置し、タンク下部のマンホールからタンク内部の空気を吸引し、フィルタでろ過することにより、タンク上部から放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- c. タンク解体片は、地面に降ろした後、周辺の汚染レベルを上昇させないように養生等を実施し運搬する。
- d. 最下段の側板及び底板の解体は、残水が完全に除去されていることを確認した後に着手する。
- e. 解体作業の期間中は、タンク上部の空気中の放射性物質濃度を定期的を確認する。なお、測定値が閾値を超過している場合は、作業を中断し、追加散水や集塵の強化等の対策を実施し、測定値が閾値未満に戻ったことを確認してから再開する。
- f. 追加散水や集塵の強化等の対策を施しても測定値が閾値未満に戻らない場合には、作業を中止し、タンク上部に仮天板を取り付ける。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

※ a. b についてはタンク内部のダスト濃度が閾値を超えた場合にのみ実施する。

#### 1.3. 減容作業・保管時の汚染拡大防止策

「Ⅲ 特定原子力施設の保安 6 特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る補足説明添付資料-4 中低濃度タンク及び高濃度滞留水受タンクの解体・撤去の方法について 5.3. 減容作業・保管時の汚染拡大防止策」に同じ。

#### 1.4. 作業員の被ばく低減

- a. タンクの解体においては、必要に応じてゴムマット等の養生を行い、被ばく低減を図る。
- b. タンク切断では、可能な限り遠隔作業により、被ばくの低減を図る。



- c. 解体作業中にダスト濃度が万が一上昇した場合に備えて、念のため全面マスクを着用する。

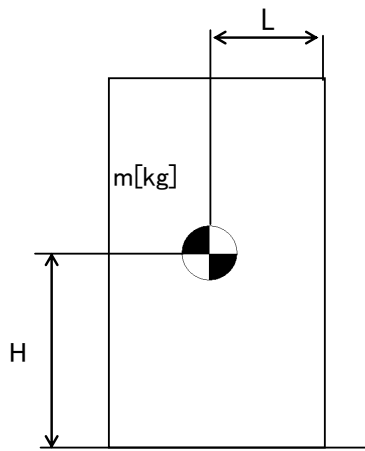
ポンプおよび配管の開放作業時においても、全面マスクを着用して作業を実施する。なお、開放作業時におけるダストの舞い上がりは少ないと考えるものの、適宜、空气中の放射性物質濃度を測定し、必要に応じて遮へい、局所排風機、ハウスを設置する。また、機器の取り外しまたは切断時においては、開放端部をゴム質のキャップ等で養生し、作業時の被ばく低減を図る。

#### 1.5. 瓦礫類発生量

- a. タンクの解体・撤去に伴い、Bエリア：約 250m<sup>3</sup>、H5 エリア：約 250m<sup>3</sup>、G6 エリア：約 500 m<sup>3</sup>、H4 エリア：約 500 m<sup>3</sup>、G4 南エリア：約 250m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。
- b. ポンプ、移送配管の解体・撤去に伴い、C エリア：約 20m<sup>3</sup>、E エリア：約 10m<sup>3</sup>、G4 北エリア：約 20m<sup>3</sup>、G5 エリア：約 20m<sup>3</sup>、H9 エリア：約 20m<sup>3</sup>、H9 西エリア：約 20m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。(先行運用分含む)
- c. 瓦礫類は 0.1mSv/h 以下の表面線量率であり、表面線量率に応じて定められた屋外の一時保管エリア（受入目安表面線量率 0.1mSv/h 以下のエリア（一時保管エリア C, N, O, P1, AA））へ搬入する。  
ただし、表面線量率 0.1mSv/h を超えた瓦礫類は、エリア E1, P2, W, X へ保管し、タンク減容片を保管した容器については、一時保管エリア P1 または AA へ搬入する。  
また、表面線量率 1mSv/h を超えて 30mSv/h 以下の瓦礫類は、固体廃棄物貯蔵庫第 6, 7, 8, 9 棟へ搬入する。
- d. 今後発生する瓦礫類の保管容量が逼迫する場合は、受入目安表面線量率を満足する他の線量区分のエリアに瓦礫類を一時保管することにより保管容量を確保する。また、固体廃棄物貯蔵庫の追設等を行うことにより容量不足を解消していく。

#### 1.6. 保管時の安定性評価

「Ⅲ 特定原子力施設の保安 6 特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る補足説明 添付資料-4 中低濃度タンク及び高濃度滞留水受タンクの解体・撤去の方法について 5.8. 保管時の安定性評価」に同じ。



m : 機器質量

g : 重力加速度 (9.80665 m/s<sup>2</sup>)

H : 据付面からの重心までの距離

L : 転倒支点から機器重心までの距離

C<sub>H</sub> : 水平方向設計震度 (0.24)

地震による転倒モーメント :

$$M1 [N \cdot m] = m \times g \times C_H \times H$$

自重による安定モーメント :

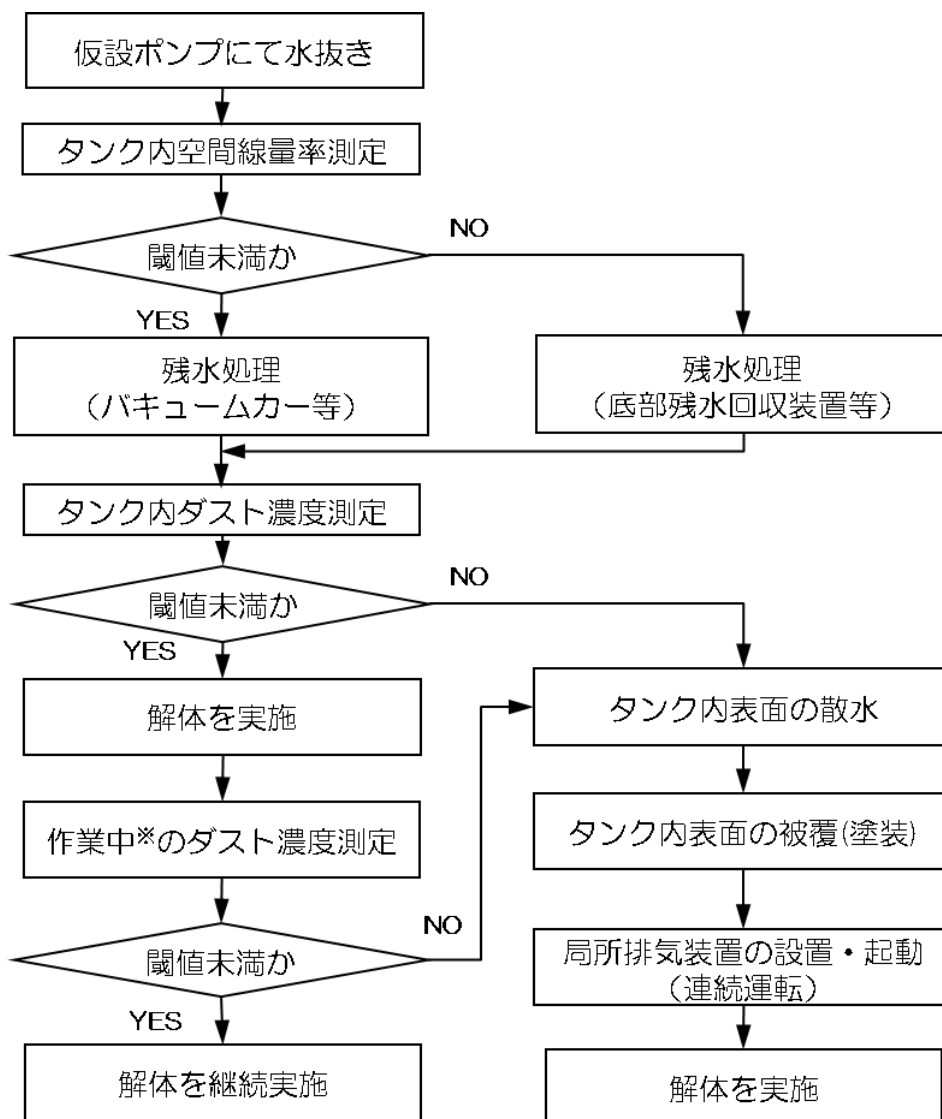
$$M2 [N \cdot m] = m \times g \times L$$

表-1 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	4.60 × 10 <sup>3</sup>	1.80 × 10 <sup>4</sup>	kN・m

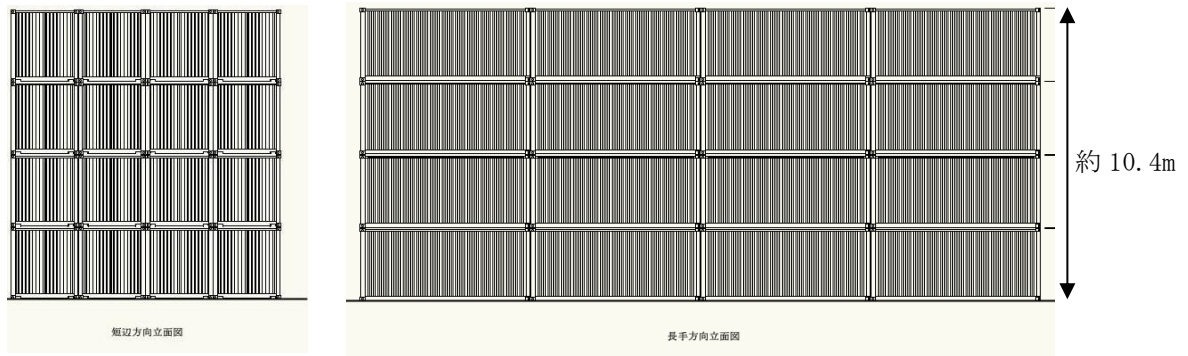
表-2 転倒評価結果

機器名称	評価部位	評価項目	水平方向設計震度 C <sub>H</sub>	算出値 M1	許容値 M2	単位
容器 (20ft コンテナ) 1ブロック	本体	転倒	0.24	1.15 × 10 <sup>3</sup>	2.79 × 10 <sup>3</sup>	kN・m

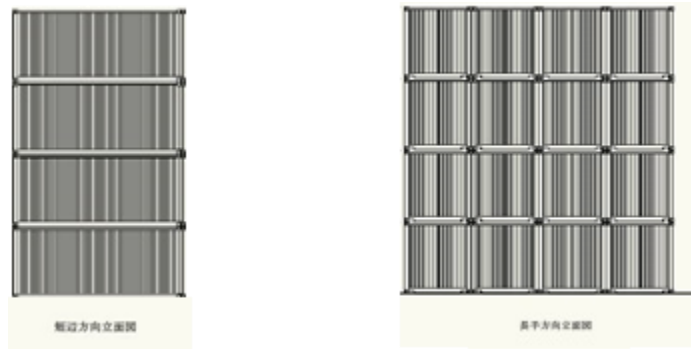


※作業中は1回/日以上測定する。

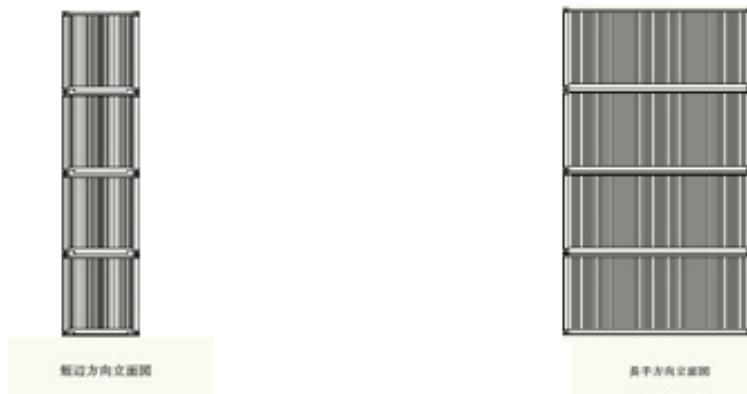
図-1 解体作業のフロー



図一 2 容器の保管状態



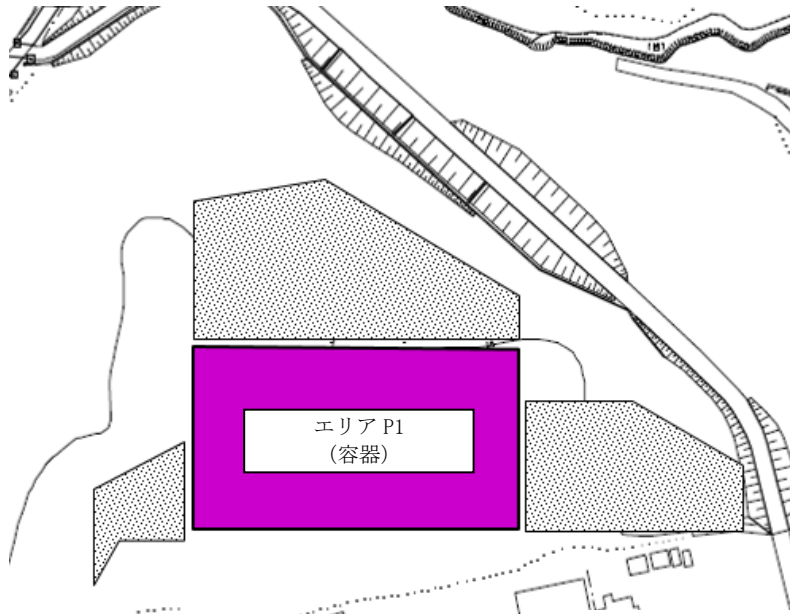
図一 3 容器の保管状態



図一 4 容器の保管状態

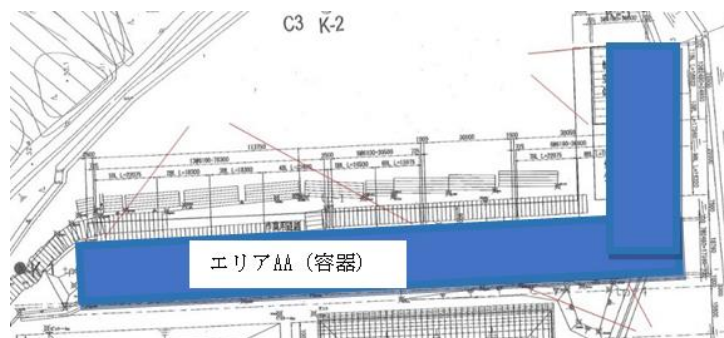


一時保管エリア（エリア P1, AA）



エリア P1 詳細  
C3 K-2

H28 年 11 月現在



エリア AA 詳細

H30 年 2 月現在

図-5 容器を保管する一時保管エリア（エリア P1, AA）

以上

## RO 濃縮水処理設備の撤去方法について

RO 濃縮水処理設備の廃止に伴い、核燃料物質その他の放射性物質に汚染されている可能性のある容器、ポンプ、配管等の解体・撤去作業の方法について定める。

## 1. 処理装置供給タンク

処理装置供給タンクは汚染水処理設備等へ用途変更することから、内部を高圧水により洗浄し、残水を回収した後に、出入口配管等を取り外し、汚染拡大防止を図った上で撤去し、構内で保管する。

## 1.1. 残水処理作業時の漏えい防止策及び漏えい拡大防止策

汚染水の処理後にタンク底部に残る残水の回収処理作業では、仮設ホース、仮設ポンプ、仮設タンク等を使ってタンク底部より残水を回収する。回収した残水は、RO 濃縮水処理水中継タンクに仮設ホース、仮設ポンプ、仮設タンク等を用いて移送し、既設設備で Sr 処理水貯槽等へ移送した後、多核種除去設備等により処理する。

当該作業を行う際の、漏えい防止策及び漏えい拡大防止策は以下の通り。

- a. 仮設ホースの継手部をレバーロック式カップラーとし、さらに継手部を固縛して外れ防止を行う。
- b. 漏えい拡大防止策として、仮設ホースの接続部を袋養生することにより、漏えい時に汚染水を受けられるようにすると共に仮設ポンプ等の設置エリアは堰を設ける。また、残水移送中には作業員による常時監視を行う。

## 1.2. 撤去作業時の汚染拡大防止策

- a. 局所排気装置でタンク内部の空気を吸引し、フィルタでろ過することにより、タンクから放射性物質が飛散するリスクを抑制する。
- b. タンク内表面に高圧水を吹き付け、表面の汚染をできるだけ洗い流すことにより、放射性物質の飛散のリスクを低減する。また、洗浄作業中には作業員による常時監視を行う。なお、洗浄作業により発生する水の量は、処理装置供給タンクの容量以下（サブドレン他浄化装置建屋外周堰の漏えい防止能力以下）である。
- c. タンクを減容場所まで輸送する際は、放射性物質の飛散により、周辺の汚染レベルを上昇させないように開口部に養生等を実施し運搬する。
- d. 撤去作業中は、タンク周辺の空気中の放射性物質濃度を定期的に確認する。なお、測定値に異常が確認された場合には、速やかに作業を中断し、集塵の強化や養生の見直し等の対策を実施し、測定値が通常時に戻ったことを確認してから再開する。

- e. 集塵の強化や養生の見直し等の対策を実施しても測定値が通常時に戻らない場合には、作業を中止する。その後、原因を調査し、必要に応じて対策を施した上で再開する。

### 1.3. 作業員の被ばく低減

- a. タンク内の洗浄作業では、タンク外から洗浄ノズルを挿入し、可能な限りタンクから離れた位置で作業することにより、被ばく低減を図る。
- b. タンク近傍で作業を行う場合は、アノラック等の防護装備を着用する。

## 2. 前処理フィルタ

フィルタ容器は、淡水置換し、エアブローにより水切りした後、開口部を養生する。表面線量率は0.1mSv/h以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が0.1mSv/hを超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。なお、 $\beta$ 汚染が確認された場合及び $\beta$ 汚染の恐れのある場合については容器に収納した上で一時保管する。

使用済フィルタは、エアブローにより水切りした後、コンクリート製または金属製の保管容器に収納して瓦礫類の一時保管エリア（E2, F1, Q）で貯蔵する。

運搬時に落下することを防止するため、フィルタ保管容器はトレーラに固縛するなどの対策を講じて輸送する。

使用済フィルタの保管時は、瓦礫類の一時保管エリアの受入目安表面線量率に応じて、保管容器の表面線量率を管理（保管容器の遮へいを考慮し、保管容器の表面線量率を測定）する。

### 2.1. 汚染拡大防止

使用済みフィルタのコンクリート製の保管容器は、鉄筋を配したコンクリートを使用する。保管容器の蓋には可燃性ガスの滞留防止のためにベント孔を設け、蓋が容易に外れないよう容器と固定される構造とする。また、保管容器は、雨水が容易に入り難い構造とする。

使用済みフィルタの金属製の保管容器は、屋外保管環境下での腐食防止のため、塗装を施した金属材料を使用する。保管容器の蓋には可燃性ガスの滞留防止のためにベント孔を設け、蓋が容易に外れないよう容器と固定される構造とする。また、保管容器は、雨水が容易に入り難い構造とする。

### 2.2. 崩壊熱除去

使用済フィルタの保管時においては、フィルタの耐熱温度である130℃を超えることはなく、材料の健全性に影響を与えるものではない（別添-1）。

### 2.3. 可燃性ガスの滞留防止

前処理フィルタは、可燃性ガスの滞留防止のため、淡水置換し、エアブローにより水切りした後、ベント孔を設けた保管容器に収容して保管する。保管時の水素濃度の評価を行った結果、到達水素濃度は可燃限界を超えることはない（別添-2）。

### 2.4. 瓦礫類発生量

撤去に伴い、フィルタ容器が約 9m<sup>3</sup>、使用済フィルタの保管容器が約 8m<sup>3</sup>（約 2m<sup>3</sup>の容器で 4 個程度）発生する見込みである。

## 3. 吸着塔

使用済吸着塔は、淡水置換し、エアブローにより水切りした後、使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設、第四施設）に貯蔵する。

使用済吸着塔は、平成 23 年 6 月から実施している実績のあるセシウム吸着装置の吸着塔と同様の要領により、使用済セシウム吸着塔一時保管施設に搬入される。撤去作業は、フォークリフトおよびトレーラ等を用いる。運搬時に落下することを防止するため、使用済吸着塔はトレーラ上に固定されたラックに収容するなどの対策を講じて輸送する。

使用済吸着塔の貯蔵による敷地境界への直接線・スカイシャイン線による寄与は、使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設、第四施設）に貯蔵される他の廃棄物と同程度であり、使用済セシウム吸着塔一時保管施設（第一施設、第四施設）の敷地境界線量の評価結果に包絡される。

### 3.1. 崩壊熱除去

使用済吸着塔の保管時においては、吸着塔内の吸着材の耐熱温度である 600℃を超えることはなく、材料の健全性に影響を与えるものではない（別添-1）。

### 3.2. 可燃性ガスの滞留防止

吸着塔は、可燃性ガスの滞留防止のため、淡水置換し、エアブローにより水切りした後、ベントを開放して保管する。保管時の水素濃度の評価を行った結果、吸着塔内の到達水素濃度は可燃限界を超えることはない（別添-2）。

### 3.3. 瓦礫類発生量

撤去に伴い、使用済吸着塔は 5 基程度発生する見込みである。

## 4. ポンプ、配管、付属機器

ポンプ、配管類（弁、ホース含む）は、残水をブローする。瓦礫類の表面線量率は全て 0.1mSv/h 以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた瓦礫類の一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が 0.1mSv/h を超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。継続使用する設備との切り離しはフランジ部



とし、開放部を閉止する。

付属機器（ケーブル、計器等）は、表面線量率は全て 0.1mSv/h 以下と想定しており、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。表面線量率が 0.1mSv/h を超える場合においても、表面線量率に応じて定められた一時保管エリアにて一時保管する。

なお、β汚染が確認された場合及びβ汚染の恐れのある場合については容器に収納した上で一時保管する。

撤去に伴い、約 150m<sup>3</sup>の瓦礫類が発生する見込みである。

#### 5. RO 濃縮水処理設備の撤去に係る確認事項について

RO 濃縮水処理設備の撤去に係る確認事項を表-1 に示す。

表-1 確認事項

(処理装置供給タンク、前処理フィルタ 1~4、吸着塔 1~5、  
処理装置供給ポンプ、処理装置加圧ポンプ、主配管)

確認事項	確認項目	確認内容	判定基準
機能	機能確認	実施計画の通り施工されていることを確認する。	実施計画の通りであること。

## RO 濃縮水処理設備温度評価

温度評価は、前処理フィルタ及び吸着塔の収容物からの発熱を入熱条件とし、解析により前処理フィルタ及び吸着塔の最高温度を評価する。

## 1. 評価概要

- 評価手法：
 

熱解析プログラムSTAR-CCM+により、発熱体からの自然対流熱伝達、熱輻射、固体熱伝導を考慮し、吸着塔の温度分布を解析した。
- 線源条件：
 

前処理フィルタ及び吸着塔の線源条件については、下表を条件とした。

機器名称	核種	線源強度 (Bq/体)
前処理フィルタ	Cs-134	$3.4 \times 10^{10}$
	Cs-137	$3.4 \times 10^{10}$
吸着塔	Cs-134	$5.9 \times 10^{11}$
	Cs-137	$5.9 \times 10^{11}$
	Sr-90*	$4.8 \times 10^{15}$

\*平衡核種としてY-90も同濃度として評価

- 入熱条件：
  - ・フィルタについては、発熱量が最大となるフィルタ1を発熱体とする。フィルタ1は高性能多核種除去設備にて評価されているフィルタ3及び4と同等の保管形状であり、かつ発熱密度がフィルタ3及び4に比べて小さいことから、保守的に高性能核種除去設備のフィルタ3及び4の入熱条件を採用する。
  - ・吸着材については、吸着量が増大するほど発熱量が増大する。そのため、吸着量が最も大きく、発熱量が最大となるセシウム・ストロンチウム同時吸着塔の吸着材を発熱体とした。

○ 評価条件：

- ・フィルタは、保管容器に収容される。本評価では、容器及び内部のフィルタをモデル化し、解析により温度評価を実施した（図1参照）。
- ・吸着塔は、中空の円柱形の容器（UNS S32205 製）内に収用されており、さらに容器の外周には鉛の遮へい体が設置されている。本評価では、容器及び遮へい体をモデル化し、解析により温度評価を実施した（図2参照）。
- ・外気温度は保守的に 40℃と設定した。

2. 解析結果

フィルタ及び吸着塔の温度評価の結果、最高温度はフィルタでは約 67℃、吸着塔では約 182℃となった（図3、図4参照）。フィルタ及び吸着塔内の吸着材の耐熱温度である 130℃及び 600℃を超えることはなく、材料の健全性に影響を与えるものではないことを確認した。

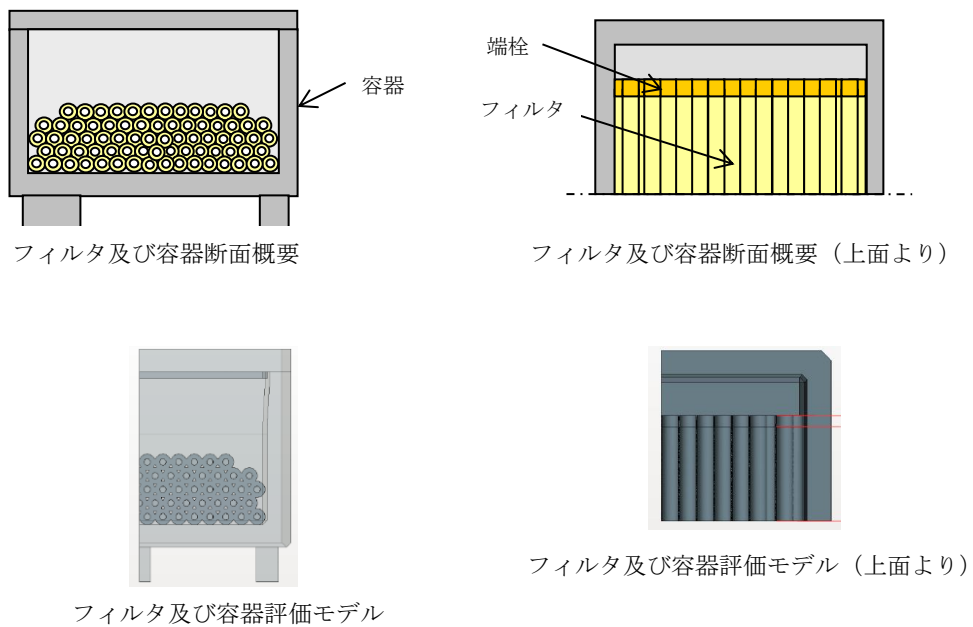


図1 フィルタの評価モデル

表1 フィルタの評価に用いた物性値等

発熱量	70[W]
フィルタ	0.25[W/m・K]
端栓	0.19[W/m・K]
容器	1.2[W/m・K]
空気	伝熱工学資料第4版 常圧下の気体の熱物性値から近似式 により算出

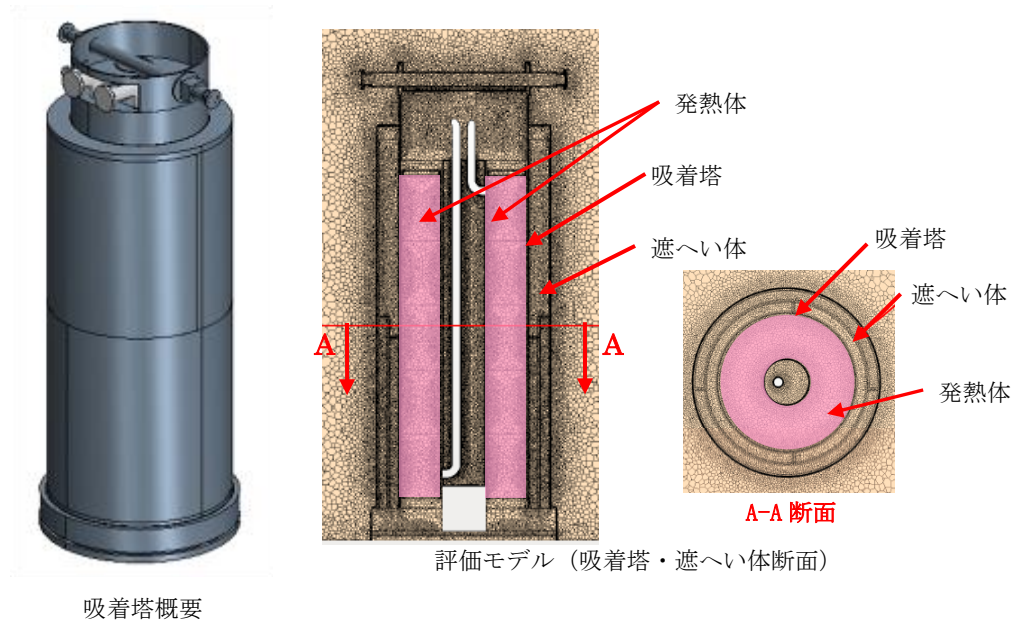


図2 吸着材の評価モデル

表2 吸着塔の評価に用いた物性値等

発熱量	1000[W]
吸着材	熱伝導率は表3に示す値から線形補間
容器 (S32205)	熱伝導率は表4に示す値から線形補間 (二相ステンレス鋼加工マニュアル 第二版 2009年)
遮へい体 (鉛)	径方向 0.75[W/m・K] 周方向, 軸方向 30.5[W/m・K]
空気	伝熱工学資料第4版 常圧下の気体の熱物性値から近似式により算出

表 3 吸着材熱伝導率

温度	熱伝導率
25.0 [°C]	0.119 [W/m・K]
125.0 [°C]	0.161 [W/m・K]
250.0 [°C]	0.186 [W/m・K]
375.0 [°C]	0.183 [W/m・K]
500.0 [°C]	0.182 [W/m・K]

表 4 容器(S32205)熱伝導率

温度	熱伝導率
297 [K]	16.0 [W/m・K]
373 [K]	17.0 [W/m・K]
473 [K]	19.0 [W/m・K]
573 [K]	20.0 [W/m・K]

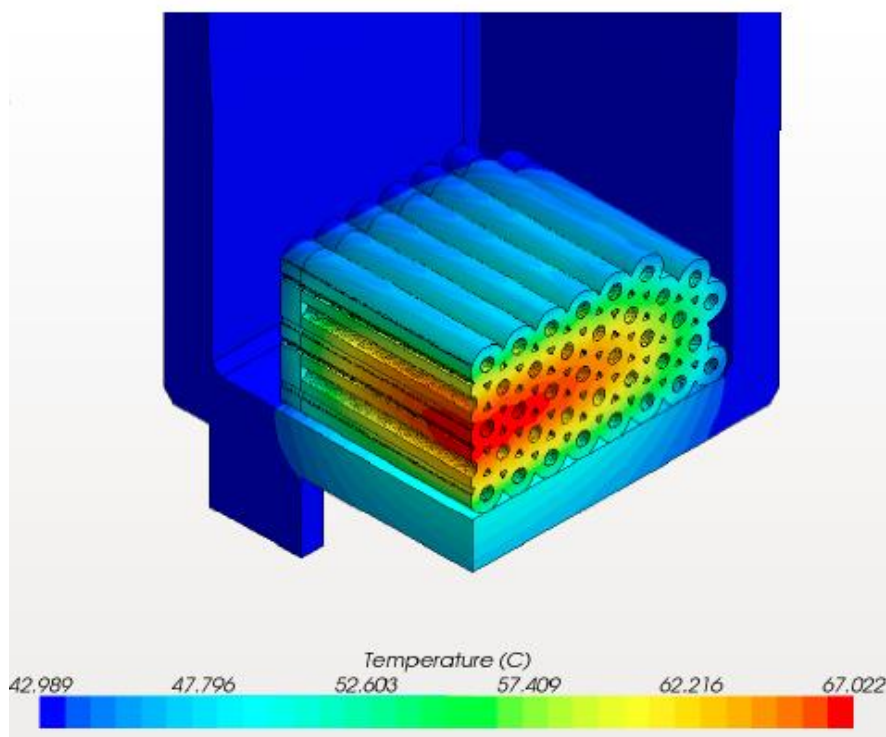


図 3 フィルタ温度評価結果

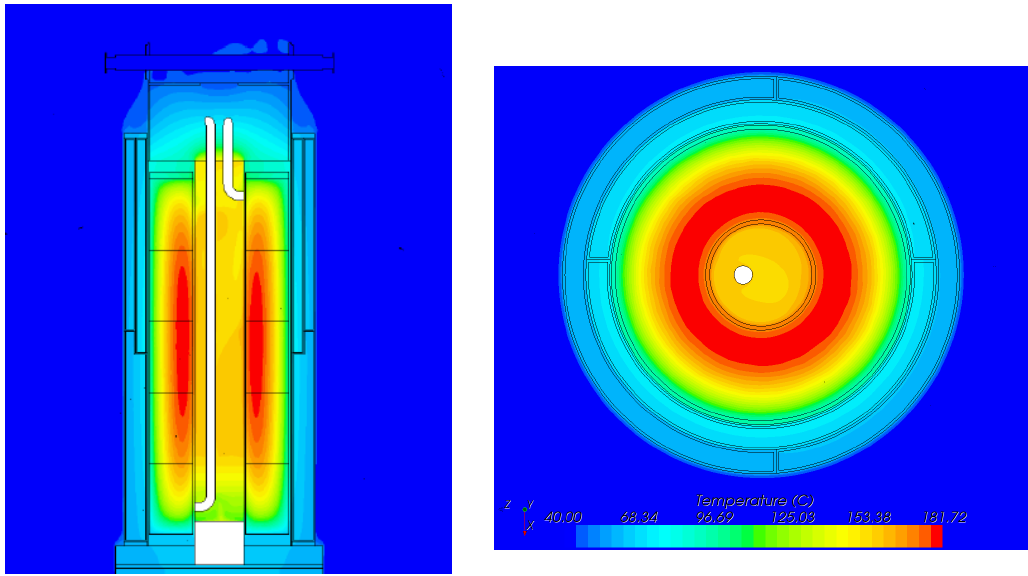


图 4 吸着塔温度評価結果

## 水素発生量評価について

RO濃縮水処理設備における水素発生量評価の結果を以下に示す。使用するフィルタ及び吸着材のうち、水素発生速度が最も高い吸着材を収容する吸着塔の評価結果を以下に示す。

## 1. 水素発生量評価

水素は、吸着した核種の崩壊エネルギーが容器内に残留する水に吸収され発生する。水素発生速度H(mol/s)は次式により求めた。

$$H = G \times \alpha \times E \div A$$

H：水素発生速度

G：水が100eVのエネルギーを吸収した際に発生する水素分子の個数，0.45

$\alpha$ ：含水率，1.0

E：水が吸収するエネルギー： $5.44 \times 10^{19}$  (100eV/s)

A：アボガドロ数 ( $6.02 \times 10^{23}$ 個/mol)

## 2. 水素到達濃度評価

吸着塔内の水素到達濃度は、水素発生量と濃度勾配から生じる拡散による水素排出量を考慮し、以下の方法で評価する。

## 3. 水素到達濃度評価

吸着塔内の吸着材充填領域から発生した水素ガスは、吸着塔上部の空間部に排出される。吸着塔は、保管時にベント管と取水側のノズルを開放し、上部空間の水素は空気との密度差により上昇しベント管から排出される。また、排出された水素ガスの体積に応じて、取水側ノズルから空気が流入する（図1参照）。このときの水素の排出と空気の流入を流体解析コード(STAR-CCM+)により解析し、吸着塔内の水素濃度を評価した。

なお、吸着塔の線源条件については、下表を条件とした。

機器名称	核種	線源強度 (Bq/体)
吸着塔	Cs-134	$5.9 \times 10^{11}$
	Cs-137	$5.9 \times 10^{11}$
	Sr-90*	$4.8 \times 10^{15}$

\*平衡核種としてY-90も同濃度として評価



#### 4. 評価結果

解析の結果，吸着塔内の到達水素濃度は約2.8%となる（図2参照）。

以上

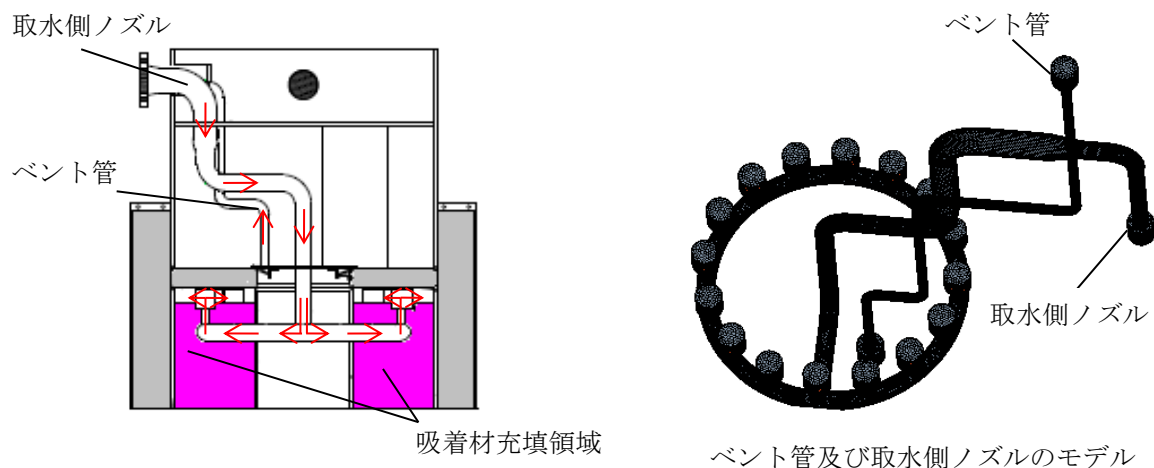


図1 吸着塔の評価体系

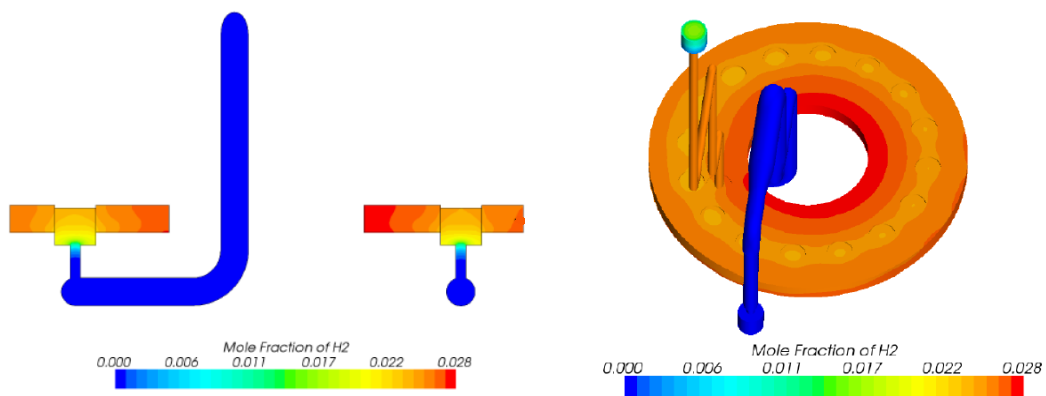


図2 評価結果

福島第一原子力発電所 1/2 号機共用排気筒の上部解体について

1. 排気筒上部解体の目的

1/2 号機共用排気筒(以下、排気筒)は、震災後の点検で一部の部材の損傷を確認していること、及び排気筒としての機能を有していないことから、耐震上の裕度を向上させるため、排気筒の上部を解体する。

2. 排気筒上部解体の計画概要

排気筒は、地上からの高さ 120m、内径 3.2m の筒身を鋼管四角形鉄塔で支えた鉄塔支持型共用排気筒である。本計画では、地上からの高さ約 60m～120m を解体範囲とする。

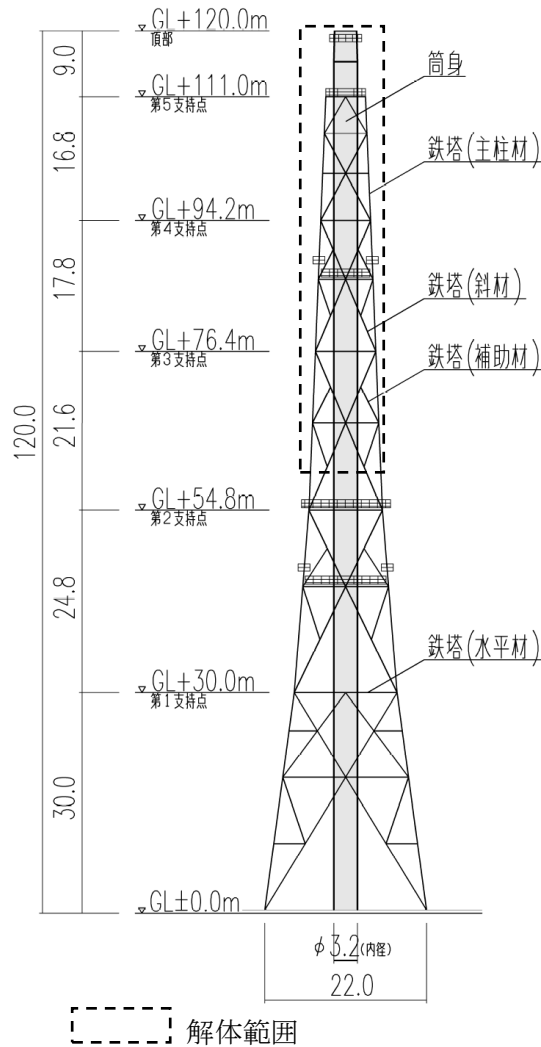


図 1 1/2 号機共用排気筒概要図 (単位 : m)

### 3. 計画工程

計画工程は以下の通り。

工程は現場状況や他工事との調整により変動する可能性が有る。

計画工程：平成30年12月～平成31年12月

### 4. 排気筒の解体方法

大型クレーンに吊り下げた遠隔解体装置により、頂部から順番に筒身や鉄塔をブロック単位で解体する。なお、排気筒周辺の線量が高いことから上部作業は無人化し、下部での準備作業・小割解体作業は有人作業とする。

解体作業における留意事項を下記に示す。

- ・ 解体作業周辺の稼働中の設備を解体作業に伴い損傷させないために、図面及び現場調査にて確認し、現場状況に応じて設備の防護を施す。
- ・ 解体作業においては、火災リスクを低減するため、原則、火気を使用する装置は使用しない。また、切断時の火花については、可能な限りで養生する。

### 5. 解体作業に伴う放射性物質の飛散抑制策

排気筒は震災の際にベント作業で使用していることから、筒身内面に遊離性のダストが付着している可能性がある。よって、筒身切断時は下記の対策を実施する。

#### a. 作業開始前

解体作業前に、筒身内面に飛散防止剤を散布することで、筒身内面の遊離性ダストを固着する。

#### b. 作業中

筒身切断時には、切断装置(チップソー)をカバーで覆い、カバー内ダストを可能な限り吸引することで飛散量の低減を図る。

遠隔解体装置には、ダストモニタを設置し、作業中の空気中放射性物質濃度を監視する。作業中に、万が一、遠隔解体装置に設置したダストモニタ及び構内に設置しているダストモニタ、モニタリングポストにより、空気中放射性物質濃度もしくは空間放射線量率の異常を検知した場合は、解体対象物が安全な状態にあることを確認した後に作業を中断する。

### 6. 解体作業に伴う放射性物質の環境影響

排気筒周辺の雰囲気線量率の調査結果から保守的に筒身の表面線量率を推定し、表面積から気中へ放出される放射性物質放出量の評価を行った。評価結果より、本作業に伴う放射性物質の放出による敷地境界での線量影響が、「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」で求められている敷地境界線量1mSv/年未満と比較して、十分小さな値であること

を確認した。

また、本作業に伴う放射性物質の放出量と解体作業時間から想定した放射性物質の放出率は、敷地境界の近傍に設置されたダストモニタの警報設定値を超えない範囲であることを確認した。

#### 7. 解体作業中の解体部材の落下防止対策

解体作業中の部材落下防止を図るため、遠隔解体装置には多重の把持機構を設け、把持状態はカメラにより監視する。

#### 8. 廃棄物の保管

排気筒解体作業に伴い、表面線量率 1～30mSv/h の金属瓦礫類が約 450 m<sup>3</sup>発生すると想定している。なお、解体後、地上にて解体対象物の線量測定を行い、線量区分に応じて、下記の通りに保管・管理する。

「Ⅲ章第 3 編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、1～30mSv/h の金属瓦礫類は固体廃棄物貯蔵庫に保管・管理する。1mSv/h 以下の金属瓦礫類のうち、0.1～1mSv/h 以下の金属瓦礫類は一時保管エリア(E1, P2, W, X)及び固体廃棄物貯蔵庫第 9 棟に、0.1mSv/h 未満の金属瓦礫類は一時保管エリア(P1)に保管・管理する。

#### 9. 作業者の被ばく線量の管理

放射線業務従事者が立ち入る場所では、外部放射線に係わる線量率を把握し、放射線業務従事者の立入頻度や滞在時間等を管理することで、作業時の被ばく線量が法令に定められた線量限度を超えないようにする。

なお、本工事における放射線業務従事者の被ばく線量低減策として、以下の対策を実施する。

- ・ 遠隔操作設備の利用による被ばく低減
- ・ 待機場所（低線量エリア）の活用による被ばく低減
- ・ 排気筒周辺作業時の遮へいスーツ着用
- ・ 作業時間管理・作業員ローテーションによる被ばく低減
- ・ 解体装置操作室を低線量エリアに設置
- ・ クレーン操作室への遮へい設置による被ばく低減

高線量エリアに近接した施工であるため、現場状況を踏まえ、今後継続的に被ばく線量低減に向けた線源の把握と除去、線源からの遮へい、作業区域管理等を行い、更なる被ばく線量低減に努める。

## 一時保管エリアの設備の解体撤去における補足説明

## 1. 設備解体の目的

作業員の被ばく等のリスクを低減するため、水処理二次廃棄物および再利用・再使用対象を除く全ての固体廃棄物（伐採木、瓦礫類、汚染土、使用済保護衣等）の屋外での保管を解消し、建屋内保管へ集約する計画である。本計画の内、伐採木一時保管槽、覆土式一時保管槽、一時保管エリア N について、各設備の解体に伴う解消作業手順及び安全対策について示す。

## 2. 一時保管エリアの解消作業

## 2.1 伐採木一時保管槽（一時保管エリア G, T）

## 2.1.1 解消作業手順

解消作業手順は以下のとおり。

- a. 上部に設置した遮水シート、覆土及び保護シートを撤去する。
- b. 槽内の伐採木を取り出す。
- c. 伐採木運搬重機に積載し増設雑固体廃棄物焼却設備へと運搬する。

## 2.1.2 飛散拡散防止対策

解消作業において、放射性物質が付着した粉じんの飛散防止を図るため、以下の対策を実施する。

- a. 作業前、作業中、作業終了時に空気中の放射性物質濃度を測定し、放射性物質濃度の有意な上昇を確認した場合には作業を中断し、散水を実施する。

## 2.1.3 汚染拡大防止対策

解消作業において、放射性物質の汚染拡大防止を図るため、以下の対策を実施する。

- a. 取り出した伐採木を運搬する際は運搬重機の荷台にシート養生を実施する。

## 2.1.4 作業員の被ばく低減対策

解消作業において、作業員の被ばく低減を図るため、以下の対策を実施する。

- a. 伐採木の取り出し及び運搬重機への荷役作業は可能な限り重機を用いて作業する。

## 2.2 覆土式一時保管施設（一時保管エリア L）

## 2.2.1 解消作業手順

解消作業手順は以下のとおり。

- a. 飛散抑制対策を実施する。

- b. 上部に設置した覆土, 遮水シート, 緩衝材及び保護シートを撤去する。
- c. 重機を用いて覆土式一時保管施設内の瓦礫類を金属製容器に収納する。

#### 2.2.2 飛散拡散防止対策

解消作業において, 放射性物質が付着した粉じんの飛散防止を図るため, 以下の対策を実施する。

- a. 覆土式一時保管施設の槽を覆うテントを設置し, 必要に応じてテント内でミストを散水する。

#### 2.2.3 汚染拡大防止対策

解消作業において, 放射性物質の汚染拡大防止を図るため, 以下の対策を実施する。

- a. 覆土式一時保管施設の槽を覆うテントを設置し, 瓦礫類の取出し, 金属製容器への収納をテント内で実施する。

#### 2.2.4 作業員の被ばく低減対策

解消作業において, 作業員の被ばく低減を図るため, 以下の対策を実施する。

- a. 必要に応じて遠隔操作重機を用いた瓦礫類の取出し, 金属製容器への収納を実施する。

### 2.3 一時保管エリア N

#### 2.3.1 解消作業手順

解消作業手順は以下のとおり。

- a. 一時保管エリアの屋根を撤去する。
- b. エリア内の堰を撤去し, 仮堰の設置を行うことで, 堰の機能を維持しながら作業を実施する。
- c. ノッチタンクに保管された瓦礫類を取り出し, 金属製容器に収納する。

#### 2.3.2 飛散拡散防止対策

解消作業において, 放射性物質が付着した粉じんの飛散防止を図るため, 以下の対策を実施する。

- a. ノッチタンクの天板取り外し時, ダスト飛散を確認するためダスト測定を実施し, ダストの飛散が生じる場合は, ダスト飛散抑制対策を実施する。

#### 2.3.3 汚染拡大防止対策

解消作業において, 放射性物質の汚染拡大防止を図るため, 以下の対策を実施する。

- a. 屋根及び堰を撤去した区画には, 必要に応じて雨水流出防止対策として仮堰を設置

する。また、ノッチタンクより取出した土のうは金属製容器に収納する。

#### 2.3.4 作業員の被ばく低減対策

解消作業において、作業員の被ばく低減を図るため、以下の対策を実施する。

- a. ノッチタンクからの瓦礫類の取り出し作業において、遠隔操作治具等を活用する。

### 3. 廃棄物の管理

一時保管エリアの設備の撤去に伴い新たに発生する廃棄物については、線量測定を行い線量区分に応じて下記の通りに保管・管理する。

「Ⅲ特定原子力施設の保安第3編 2.1.1 放射性固体廃棄物等の管理」に従い、屋内保管施設（又は一時保管エリア）で保管する。

「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」の変更認可の申請  
に関する核セキュリティ及び保障措置への影響について

<申請書>

申請件名	一時保管エリアの解消作業
申請概要	瓦礫類等の一時保管エリアの解消作業の内、一時保管エリア G, L, N, T の解消作業に伴い、実施計画の変更を行う。 併せて、特定原子力施設の設備、機器の解体撤去に係る基本方針等について、これまでの解体作業等の実績も踏まえ、実施計画Ⅲ 第3編6に新規記載を行う。また、既認可の解体撤去方針等をⅢ第3編6添付へ移管を行う。 これらに伴い、「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」の変更認可申請を行う。

上記の申請に関する核セキュリティ及び保障措置への影響の有無についての確認結果を以下に示す。

<核セキュリティ及び保障措置への影響の有無>

確認項目		影響の有無	備考
核セキュリティへの影響	① 防護対象の追加等による影響の有無	無	本案件に伴い、防護対象の追加等はないことから影響無し。
	② 侵入防止対策に係る性能への影響の有無	無	防護設備及び監視体制に変更を及ぼすものではないため、侵入防止対策への影響無し。



保障措置への影響	① 設計情報質問表 (DIQ:Design Information Questionnaire) への影響の有無	無	変更手続きが必要な事項に該当しないので、影響無し。
	② 査察機器の移設又は新規設置の有無	無	既存の査察機器との干渉がないため、影響無し。
	③ サイト内建物報告の観点から、恒久的な建物・構造物の新設の有無	有	既報告の用途の変更、または廃止を含むため、影響有り。
	④ 既存の査察実施方針への影響の有無	無	既存の IAEA 査察内容 (施策) での対応可能

「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」の変更認可の申請  
に関する核セキュリティ及び保障措置への影響について

<申請書>

申請件名	除染装置処理水タンクの撤去
申請概要	セシウム吸着装置後段フィルタ設備（ $\alpha$ 核種除去設備）設置予定エリアの確保を目的とし、サイトバンカ2階に設置されている除染装置処理水タンク（A）、（B）、（C）の撤去を行う。当該タンクは除染装置を構成する系統の一部であり、2017年の除染装置停止時に処理水移送ポンプ、付帯配管等を撤去し現在は運用を停止している。 当該タンク撤去に伴い、「福島第一原子力発電所 特定原子力施設に係る実施計画」の変更認可申請を行う。

上記の申請に関する核セキュリティ及び保障措置への影響の有無についての確認結果を以下に示す。

<核セキュリティ及び保障措置への影響の有無>

確認項目		影響の有無	備考
核セキュリティへの影響	① 防護対象の追加等による影響の有無	無	防護対象の追加等はないことから影響無し。
	② 侵入防止対策に係る性能への影響の有無	無	防護設備及び監視体制に変更を及ぼすものではないため、侵入防止対策への影響無し。

保障措置への影響	① 設計情報質問表 (DIQ:Design Information Questionnaire) への影響の有無	無	変更手続きが必要な事項に該当しないため、影響無し。
	② 査察機器の移設又は新規設置の有無	無	既存の査察機器との干渉がないため、影響無し。
	③ サイト内建物報告の観点から、恒久的な建物・構造物の新設の有無	無	既報告の内容に変更がないため、影響無し。
	④ 既存の査察実施方針への影響の有無	無	既存の査察実施方針への変更がないため、影響無し。